

DIODORI

BIBLIOTHECA HISTORICA

IN BIBLIOTHECA

LIBRARIUM HISTORICUM



Digitized by the Internet Archive  
in 2009 with funding from  
University of Toronto

LIBRARY

UNIVERSITY OF TORONTO

1877

~~12~~  
~~13~~  
~~14~~  
~~15~~  
~~16~~  
~~17~~  
~~18~~  
~~19~~  
~~20~~  
~~21~~  
~~22~~  
~~23~~  
~~24~~  
~~25~~  
~~26~~  
~~27~~  
~~28~~  
~~29~~  
~~30~~  
~~31~~  
~~32~~  
~~33~~  
~~34~~  
~~35~~  
~~36~~  
~~37~~  
~~38~~  
~~39~~  
~~40~~  
~~41~~  
~~42~~  
~~43~~  
~~44~~  
~~45~~  
~~46~~  
~~47~~  
~~48~~  
~~49~~  
~~50~~  
~~51~~  
~~52~~  
~~53~~  
~~54~~  
~~55~~  
~~56~~  
~~57~~  
~~58~~  
~~59~~  
~~60~~  
~~61~~  
~~62~~  
~~63~~  
~~64~~  
~~65~~  
~~66~~  
~~67~~  
~~68~~  
~~69~~  
~~70~~  
~~71~~  
~~72~~  
~~73~~  
~~74~~  
~~75~~  
~~76~~  
~~77~~  
~~78~~  
~~79~~  
~~80~~  
~~81~~  
~~82~~  
~~83~~  
~~84~~  
~~85~~  
~~86~~  
~~87~~  
~~88~~  
~~89~~  
~~90~~  
~~91~~  
~~92~~  
~~93~~  
~~94~~  
~~95~~  
~~96~~  
~~97~~  
~~98~~  
~~99~~  
~~100~~  
~~101~~  
~~102~~  
~~103~~  
~~104~~  
~~105~~  
~~106~~  
~~107~~  
~~108~~  
~~109~~  
~~110~~  
~~111~~  
~~112~~  
~~113~~  
~~114~~  
~~115~~  
~~116~~  
~~117~~  
~~118~~  
~~119~~  
~~120~~  
~~121~~  
~~122~~  
~~123~~  
~~124~~  
~~125~~  
~~126~~  
~~127~~  
~~128~~  
~~129~~  
~~130~~  
~~131~~  
~~132~~  
~~133~~  
~~134~~  
~~135~~  
~~136~~  
~~137~~  
~~138~~  
~~139~~  
~~140~~  
~~141~~  
~~142~~  
~~143~~  
~~144~~  
~~145~~  
~~146~~  
~~147~~  
~~148~~  
~~149~~  
~~150~~  
~~151~~  
~~152~~  
~~153~~  
~~154~~  
~~155~~  
~~156~~  
~~157~~  
~~158~~  
~~159~~  
~~160~~  
~~161~~  
~~162~~  
~~163~~  
~~164~~  
~~165~~  
~~166~~  
~~167~~  
~~168~~  
~~169~~  
~~170~~  
~~171~~  
~~172~~  
~~173~~  
~~174~~  
~~175~~  
~~176~~  
~~177~~  
~~178~~  
~~179~~  
~~180~~  
~~181~~  
~~182~~  
~~183~~  
~~184~~  
~~185~~  
~~186~~  
~~187~~  
~~188~~  
~~189~~  
~~190~~  
~~191~~  
~~192~~  
~~193~~  
~~194~~  
~~195~~  
~~196~~  
~~197~~  
~~198~~  
~~199~~  
~~200~~  
~~201~~  
~~202~~  
~~203~~  
~~204~~  
~~205~~  
~~206~~  
~~207~~  
~~208~~  
~~209~~  
~~210~~  
~~211~~  
~~212~~  
~~213~~  
~~214~~  
~~215~~  
~~216~~  
~~217~~  
~~218~~  
~~219~~  
~~220~~  
~~221~~  
~~222~~  
~~223~~  
~~224~~  
~~225~~  
~~226~~  
~~227~~  
~~228~~  
~~229~~  
~~230~~  
~~231~~  
~~232~~  
~~233~~  
~~234~~  
~~235~~  
~~236~~  
~~237~~  
~~238~~  
~~239~~  
~~240~~  
~~241~~  
~~242~~  
~~243~~  
~~244~~  
~~245~~  
~~246~~  
~~247~~  
~~248~~  
~~249~~  
~~250~~  
~~251~~  
~~252~~  
~~253~~  
~~254~~  
~~255~~  
~~256~~  
~~257~~  
~~258~~  
~~259~~  
~~260~~  
~~261~~  
~~262~~  
~~263~~  
~~264~~  
~~265~~  
~~266~~  
~~267~~  
~~268~~  
~~269~~  
~~270~~  
~~271~~  
~~272~~  
~~273~~  
~~274~~  
~~275~~  
~~276~~  
~~277~~  
~~278~~  
~~279~~  
~~280~~  
~~281~~  
~~282~~  
~~283~~  
~~284~~  
~~285~~  
~~286~~  
~~287~~  
~~288~~  
~~289~~  
~~290~~  
~~291~~  
~~292~~  
~~293~~  
~~294~~  
~~295~~  
~~296~~  
~~297~~  
~~298~~  
~~299~~  
~~300~~  
~~301~~  
~~302~~  
~~303~~  
~~304~~  
~~305~~  
~~306~~  
~~307~~  
~~308~~  
~~309~~  
~~310~~  
~~311~~  
~~312~~  
~~313~~  
~~314~~  
~~315~~  
~~316~~  
~~317~~  
~~318~~  
~~319~~  
~~320~~  
~~321~~  
~~322~~  
~~323~~  
~~324~~  
~~325~~  
~~326~~  
~~327~~  
~~328~~  
~~329~~  
~~330~~  
~~331~~  
~~332~~  
~~333~~  
~~334~~  
~~335~~  
~~336~~  
~~337~~  
~~338~~  
~~339~~  
~~340~~  
~~341~~  
~~342~~  
~~343~~  
~~344~~  
~~345~~  
~~346~~  
~~347~~  
~~348~~  
~~349~~  
~~350~~  
~~351~~  
~~352~~  
~~353~~  
~~354~~  
~~355~~  
~~356~~  
~~357~~  
~~358~~  
~~359~~  
~~360~~  
~~361~~  
~~362~~  
~~363~~  
~~364~~  
~~365~~  
~~366~~  
~~367~~  
~~368~~  
~~369~~  
~~370~~  
~~371~~  
~~372~~  
~~373~~  
~~374~~  
~~375~~  
~~376~~  
~~377~~  
~~378~~  
~~379~~  
~~380~~  
~~381~~  
~~382~~  
~~383~~  
~~384~~  
~~385~~  
~~386~~  
~~387~~  
~~388~~  
~~389~~  
~~390~~  
~~391~~  
~~392~~  
~~393~~  
~~394~~  
~~395~~  
~~396~~  
~~397~~  
~~398~~  
~~399~~  
~~400~~  
~~401~~  
~~402~~  
~~403~~  
~~404~~  
~~405~~  
~~406~~  
~~407~~  
~~408~~  
~~409~~  
~~410~~  
~~411~~  
~~412~~  
~~413~~  
~~414~~  
~~415~~  
~~416~~  
~~417~~  
~~418~~  
~~419~~  
~~420~~  
~~421~~  
~~422~~  
~~423~~  
~~424~~  
~~425~~  
~~426~~  
~~427~~  
~~428~~  
~~429~~  
~~430~~  
~~431~~  
~~432~~  
~~433~~  
~~434~~  
~~435~~  
~~436~~  
~~437~~  
~~438~~  
~~439~~  
~~440~~  
~~441~~  
~~442~~  
~~443~~  
~~444~~  
~~445~~  
~~446~~  
~~447~~  
~~448~~  
~~449~~  
~~450~~  
~~451~~  
~~452~~  
~~453~~  
~~454~~  
~~455~~  
~~456~~  
~~457~~  
~~458~~  
~~459~~  
~~460~~  
~~461~~  
~~462~~  
~~463~~  
~~464~~  
~~465~~  
~~466~~  
~~467~~  
~~468~~  
~~469~~  
~~470~~  
~~471~~  
~~472~~  
~~473~~  
~~474~~  
~~475~~  
~~476~~  
~~477~~  
~~478~~  
~~479~~  
~~480~~  
~~481~~  
~~482~~  
~~483~~  
~~484~~  
~~485~~  
~~486~~  
~~487~~  
~~488~~  
~~489~~  
~~490~~  
~~491~~  
~~492~~  
~~493~~  
~~494~~  
~~495~~  
~~496~~  
~~497~~  
~~498~~  
~~499~~  
~~500~~  
~~501~~  
~~502~~  
~~503~~  
~~504~~  
~~505~~  
~~506~~  
~~507~~  
~~508~~  
~~509~~  
~~510~~  
~~511~~  
~~512~~  
~~513~~  
~~514~~  
~~515~~  
~~516~~  
~~517~~  
~~518~~  
~~519~~  
~~520~~  
~~521~~  
~~522~~  
~~523~~  
~~524~~  
~~525~~  
~~526~~  
~~527~~  
~~528~~  
~~529~~  
~~530~~  
~~531~~  
~~532~~  
~~533~~  
~~534~~  
~~535~~  
~~536~~  
~~537~~  
~~538~~  
~~539~~  
~~540~~  
~~541~~  
~~542~~  
~~543~~  
~~544~~  
~~545~~  
~~546~~  
~~547~~  
~~548~~  
~~549~~  
~~550~~  
~~551~~  
~~552~~  
~~553~~  
~~554~~  
~~555~~  
~~556~~  
~~557~~  
~~558~~  
~~559~~  
~~560~~  
~~561~~  
~~562~~  
~~563~~  
~~564~~  
~~565~~  
~~566~~  
~~567~~  
~~568~~  
~~569~~  
~~570~~  
~~571~~  
~~572~~  
~~573~~  
~~574~~  
~~575~~  
~~576~~  
~~577~~  
~~578~~  
~~579~~  
~~580~~  
~~581~~  
~~582~~  
~~583~~  
~~584~~  
~~585~~  
~~586~~  
~~587~~  
~~588~~  
~~589~~  
~~590~~  
~~591~~  
~~592~~  
~~593~~  
~~594~~  
~~595~~  
~~596~~  
~~597~~  
~~598~~  
~~599~~  
~~600~~  
~~601~~  
~~602~~  
~~603~~  
~~604~~  
~~605~~  
~~606~~  
~~607~~  
~~608~~  
~~609~~  
~~610~~  
~~611~~  
~~612~~  
~~613~~  
~~614~~  
~~615~~  
~~616~~  
~~617~~  
~~618~~  
~~619~~  
~~620~~  
~~621~~  
~~622~~  
~~623~~  
~~624~~  
~~625~~  
~~626~~  
~~627~~  
~~628~~  
~~629~~  
~~630~~  
~~631~~  
~~632~~  
~~633~~  
~~634~~  
~~635~~  
~~636~~  
~~637~~  
~~638~~  
~~639~~  
~~640~~  
~~641~~  
~~642~~  
~~643~~  
~~644~~  
~~645~~  
~~646~~  
~~647~~  
~~648~~  
~~649~~  
~~650~~  
~~651~~  
~~652~~  
~~653~~  
~~654~~  
~~655~~  
~~656~~  
~~657~~  
~~658~~  
~~659~~  
~~660~~  
~~661~~  
~~662~~  
~~663~~  
~~664~~  
~~665~~  
~~666~~  
~~667~~  
~~668~~  
~~669~~  
~~670~~  
~~671~~  
~~672~~  
~~673~~  
~~674~~  
~~675~~  
~~676~~  
~~677~~  
~~678~~  
~~679~~  
~~680~~  
~~681~~  
~~682~~  
~~683~~  
~~684~~  
~~685~~  
~~686~~  
~~687~~  
~~688~~  
~~689~~  
~~690~~  
~~691~~  
~~692~~  
~~693~~  
~~694~~  
~~695~~  
~~696~~  
~~697~~  
~~698~~  
~~699~~  
~~700~~  
~~701~~  
~~702~~  
~~703~~  
~~704~~  
~~705~~  
~~706~~  
~~707~~  
~~708~~  
~~709~~  
~~710~~  
~~711~~  
~~712~~  
~~713~~  
~~714~~  
~~715~~  
~~716~~  
~~717~~  
~~718~~  
~~719~~  
~~720~~  
~~721~~  
~~722~~  
~~723~~  
~~724~~  
~~725~~  
~~726~~  
~~727~~  
~~728~~  
~~729~~  
~~730~~  
~~731~~  
~~732~~  
~~733~~  
~~734~~  
~~735~~  
~~736~~  
~~737~~  
~~738~~  
~~739~~  
~~740~~  
~~741~~  
~~742~~  
~~743~~  
~~744~~  
~~745~~  
~~746~~  
~~747~~  
~~748~~  
~~749~~  
~~750~~  
~~751~~  
~~752~~  
~~753~~  
~~754~~  
~~755~~  
~~756~~  
~~757~~  
~~758~~  
~~759~~  
~~760~~  
~~761~~  
~~762~~  
~~763~~  
~~764~~  
~~765~~  
~~766~~  
~~767~~  
~~768~~  
~~769~~  
~~770~~  
~~771~~  
~~772~~  
~~773~~  
~~774~~  
~~775~~  
~~776~~  
~~777~~  
~~778~~  
~~779~~  
~~780~~  
~~781~~  
~~782~~  
~~783~~  
~~784~~  
~~785~~  
~~786~~  
~~787~~  
~~788~~  
~~789~~  
~~790~~  
~~791~~  
~~792~~  
~~793~~  
~~794~~  
~~795~~  
~~796~~  
~~797~~  
~~798~~  
~~799~~  
~~800~~  
~~801~~  
~~802~~  
~~803~~  
~~804~~  
~~805~~  
~~806~~  
~~807~~  
~~808~~  
~~809~~  
~~810~~  
~~811~~  
~~812~~  
~~813~~  
~~814~~  
~~815~~  
~~816~~  
~~817~~  
~~818~~  
~~819~~  
~~820~~  
~~821~~  
~~822~~  
~~823~~  
~~824~~  
~~825~~  
~~826~~  
~~827~~  
~~828~~  
~~829~~  
~~830~~  
~~831~~  
~~832~~  
~~833~~  
~~834~~  
~~835~~  
~~836~~  
~~837~~  
~~838~~  
~~839~~  
~~840~~  
~~841~~  
~~842~~  
~~843~~  
~~844~~  
~~845~~  
~~846~~  
~~847~~  
~~848~~  
~~849~~  
~~850~~  
~~851~~  
~~852~~  
~~853~~  
~~854~~  
~~855~~  
~~856~~  
~~857~~  
~~858~~  
~~859~~  
~~860~~  
~~861~~  
~~862~~  
~~863~~  
~~864~~  
~~865~~  
~~866~~  
~~867~~  
~~868~~  
~~869~~  
~~870~~  
~~871~~  
~~872~~  
~~873~~  
~~874~~  
~~875~~  
~~876~~  
~~877~~  
~~878~~  
~~879~~  
~~880~~  
~~881~~  
~~882~~  
~~883~~  
~~884~~  
~~885~~  
~~886~~  
~~887~~  
~~888~~  
~~889~~  
~~890~~  
~~891~~  
~~892~~  
~~893~~  
~~894~~  
~~895~~  
~~896~~  
~~897~~  
~~898~~  
~~899~~  
~~900~~  
~~901~~  
~~902~~  
~~903~~  
~~904~~  
~~905~~  
~~906~~  
~~907~~  
~~908~~  
~~909~~  
~~910~~  
~~911~~  
~~912~~  
~~913~~  
~~914~~  
~~915~~  
~~916~~  
~~917~~  
~~918~~  
~~919~~  
~~920~~  
~~921~~  
~~922~~  
~~923~~  
~~924~~  
~~925~~  
~~926~~  
~~927~~  
~~928~~  
~~929~~  
~~930~~  
~~931~~  
~~932~~  
~~933~~  
~~934~~  
~~935~~  
~~936~~  
~~937~~  
~~938~~  
~~939~~  
~~940~~  
~~941~~  
~~942~~  
~~943~~  
~~944~~  
~~945~~  
~~946~~  
~~947~~  
~~948~~  
~~949~~  
~~950~~  
~~951~~  
~~952~~  
~~953~~  
~~954~~  
~~955~~  
~~956~~  
~~957~~  
~~958~~  
~~959~~  
~~960~~  
~~961~~  
~~962~~  
~~963~~  
~~964~~  
~~965~~  
~~966~~  
~~967~~  
~~968~~  
~~969~~  
~~970~~  
~~971~~  
~~972~~  
~~973~~  
~~974~~  
~~975~~  
~~976~~  
~~977~~  
~~978~~  
~~979~~  
~~980~~  
~~981~~  
~~982~~  
~~983~~  
~~984~~  
~~985~~  
~~986~~  
~~987~~  
~~988~~  
~~989~~  
~~990~~  
~~991~~  
~~992~~  
~~993~~  
~~994~~  
~~995~~  
~~996~~  
~~997~~  
~~998~~  
~~999~~  
~~1000~~  
~~1001~~  
~~1002~~  
~~1003~~  
~~1004~~  
~~1005~~  
~~1006~~  
~~1007~~  
~~1008~~  
~~1009~~  
~~1010~~  
~~1011~~  
~~1012~~  
~~1013~~  
~~1014~~  
~~1015~~  
~~1016~~  
~~1017~~  
~~1018~~  
~~1019~~  
~~1020~~  
~~1021~~  
~~1022~~  
~~1023~~  
~~1024~~  
~~1025~~  
~~1026~~  
~~1027~~  
~~1028~~  
~~1029~~  
~~1030~~  
~~1031~~  
~~1032~~  
~~1033~~  
~~1034~~  
~~1035~~  
~~1036~~  
~~1037~~  
~~1038~~  
~~1039~~  
~~1040~~  
~~1041~~  
~~1042~~  
~~1043~~  
~~1044~~  
~~1045~~  
~~1046~~  
~~1047~~  
~~1048~~  
~~1049~~  
~~1050~~  
~~1051~~  
~~1052~~  
~~1053~~  
~~1054~~  
~~1055~~  
~~1056~~  
~~1057~~  
~~1058~~  
~~1059~~  
~~1060~~  
~~1061~~  
~~1062~~  
~~1063~~  
~~1064~~  
~~1065~~  
~~1066~~  
~~1067~~  
~~1068~~  
~~1069~~  
~~1070~~  
~~1071~~  
~~1072~~  
~~1073~~  
~~1074~~  
~~1075~~  
~~1076~~  
~~1077~~  
~~1078~~  
~~1079~~  
~~1080~~  
~~1081~~  
~~1082~~  
~~1083~~  
~~1084~~  
~~1085~~  
~~1086~~  
~~1087~~  
~~1088~~  
~~1089~~  
~~1090~~  
~~1091~~  
~~1092~~  
~~1093~~  
~~1094~~  
~~1095~~  
~~1096~~  
~~1097~~  
~~1098~~  
~~1099~~  
~~1100~~  
~~1101~~  
~~1102~~  
~~1103~~  
~~1104~~  
~~1105~~  
~~1106~~  
~~1107~~  
~~1108~~  
~~1109~~  
~~1110~~  
~~1111~~  
~~1112~~  
~~1113~~  
~~1114~~  
~~1115~~  
~~1116~~  
~~1117~~  
~~1118~~  
~~1119~~  
~~1120~~  
~~1121~~  
~~1122~~  
~~1123~~  
~~1124~~  
~~1125~~  
~~1126~~  
~~1127~~  
~~1128~~  
~~1129~~  
~~1130~~  
~~1131~~  
~~1132~~  
~~1133~~  
~~1134~~  
~~1135~~  
~~1136~~  
~~1137~~  
~~1138~~  
~~1139~~  
~~1140~~  
~~1141~~  
~~1142~~  
~~1143~~  
~~1144~~  
~~1145~~  
~~1146~~  
~~1147~~  
~~1148~~  
~~1149~~  
~~1150~~  
~~1151~~  
~~1152~~  
~~1153~~  
~~1154~~  
~~1155~~  
~~1156~~  
~~1157~~  
~~1158~~  
~~1159~~  
~~1160~~  
~~1161~~  
~~1162~~  
~~1163~~  
~~1164~~  
~~1165~~  
~~1166~~  
~~1167~~  
~~1168~~  
~~1169~~  
~~1170~~  
~~1171~~  
~~1172~~  
~~1173~~  
~~1174~~  
~~1175~~  
~~1176~~  
~~1177~~  
~~1178~~  
~~1179~~  
~~1180~~  
~~1181~~  
~~1182~~  
~~1183~~  
~~1184~~  
~~1185~~  
~~1186~~  
~~1187~~  
~~1188~~  
~~1189~~  
~~1190~~  
~~1191~~  
~~1192~~  
~~1193~~  
~~1194~~  
~~1195~~  
~~1196~~  
~~1197~~  
~~1198~~  
~~1199~~  
~~1200~~  
~~1201~~  
~~1202~~  
~~1203~~  
~~1204~~  
~~1205~~  
~~1206~~  
~~1207~~  
~~1208~~  
~~1209~~  
~~1210~~  
~~1211~~  
~~1212~~  
~~1213~~  
~~1214~~  
~~1215~~  
~~1216~~  
~~1217~~  
~~1218~~  
~~1219~~  
~~1220~~  
~~1221~~  
~~1222~~  
~~1223~~  
~~1224~~  
~~1225~~  
~~1226~~  
~~1227~~  
~~1228~~  
~~1229~~  
~~1230~~  
~~1231~~  
~~1232~~

PA  
3965

D3

1828

v. 4

4909  
76/8/20 **B**

ANNOTATIONES INTERPRETVM

AD

DIODORI

BIBLIOTHECAM HISTORICAM.

---

VOL. I.

---

LIPSIÆ

SVMPTIBVS C. H. F. HARTMANNI.

---

MDCCCXXVIII.





---

## P R A E F A T I O.

---

Commentarios superiorum editorum quum in formam quam vellem redactos, id est falsis aut inutilibus rebus liberatos utiliterque compendifactos, reddere idoneis de caussis non liceret, id providi ut et principum editorum annotationes accuratius quam in Amstelodamensi editione repeterentur et novae quae accederent ne inutili mole librum augerent. Vnde fa-

ctum est ut Reiskii nonnisi selectas, aliorum autem qui operam in hoc scriptore explicando posuerunt vix unam et alteram asciscerem.

---

# A N N O T A T I O N E S

IN

LIBRUM PRIMUM.

Pag. ed. Wess. 1. v. 1. Προοίμιον τῆς ὅλης] Rerum hi indices auctores habent Grammaticos, qui cum plura pauciorave capita ad arbitrium suum fecerint, nolui vulgatis ex Cod. Coisl. litem movere. Sex priora ex L. I. 42. reliqua ex L. II. 1. ipsis Diodori verbis sunt descripta. WESS.

1. 11. Παραδοξολογομένων] In periochae cap. 6. post παραδοξολογομένων desideratur aliquid, quale fuerit ἐκτίθεται δ' ἅμα, vel διηγεῖται δὲ καί. RHOD. Deest περιέχει, e quo pleraque L. I. 42. unde haec excerpta, pendent. WESS.

3. 3. Πάντας ἀνθρώπων] Nusquam πάντας ἀνθρώπων in Diodori scriptis inveni. Πολλοὶ τῶν ἐκ τοῦ Παιραιῶς ἀνθρώπων Thucydidis VIII. 92. 14. et οἱ πολλοὶ τῶν ἀνθρώπων Polybii IX. 20. alius sunt modi. Omnes Macedonum tamen Livius XXXI. 45. et cunctos hominum Metamorph. IV. 630. Ovidius. WESS. V. ad vol. II. p. 532. 32. et Schaefer. Gloss. Liv. γ. omnis.

3. 7. Εἰσηγησάμενοι] Ex duabus lectionibus εἰσηγησάμενοι et ἡγησάμενοι, illam in contextum recipere malui quam hanc, propter νόμους εἰσηγήσασθαι, quod est circa finem huius paginae, aliosque in quibus ita utitur hoc verbo locos. qui eius usus et apud alios scriptores invenitur. Sic et aliis multis in locis certa quapiam cum ratione in contextum recepta fuit una lectio, in marginem altera. Observa autem, me non dicere omnibus, sed multis. mihi enim in plerisque satis aut otii aut iudicii ad delectum adhibendum non fuit. Alicubi etiam fortasse satis magna defuit animi attentio. STEPH. Εἰσηγησάμενοι] Hanc lectionem retinemus prae altera, quae in margine apposita est, sententiae minus idonea. Intelligit autem Hecataeum Milesium, Hellanicum Mitylensium, Herodotum Halicarnassensem, Theopompum Chium, Ephorum Cumaeum, Durim Samium, Timaeum, Polybium. RHOD. Vide infra cap. 45. Mox Polybium, ut saepe, imitatur L. I. 35. WESS.

3. 11. *Διὰ τοῦτο*] Neque hic placet quod margo annotatum habet. RHOD.

3. 13. *Πολλῶν ἀνθρώπων*] In poeta est πολλῶν δ' ἀνθρώπων. WESS.

3. 23. *Κυκλεῖ συνεχῶς*] Sic fere Plutarchus T. II. p. 433. F. καὶ κυκλεῖν ἐν αὐτῇ τὰς τοιαύτας ἐν τῷ χρόνῳ παντὶ πολλὰκις περιόδους. Et praeclare Noster XVIII. 59. τὸ ἐπιβάλλον ἐκάστῳ δικαίως ἀπορέουσιν. Archytas in Stob. Serm. XII. p. 269. καὶ διανεμεῖ τὸ κατ' ἀξίαν ἐκάστῳ καὶ τὸ ἐπιβάλλον. unde auctoritas Ms. Clar. ἐκάστῳ adstrueretur, ni Philo Iud. intercederet L. ad Cai. p. 1013. C. de Augusto ὁ εἰρηνογέλας, inquires, ὁ διανομεὺς τῶν ἐπιβαλλόντων ἐκάστοις. Additur μέρος a S. Luca Evang. XV. 12. et Nostro IV. 37. XIV. 17. WESS.

4. 27. *Ἐνα λόγον*] Malim ἀνάλογον. cuique populo et homini accommodatum pro diversa sua ratione. REISK. Huic conjecturae speciem conciliat illud p. 3. 23. *κοινὴν ἀναλογίαν*.

*Ibid.* *Χρηματιστήριον*] Hoc glossator per suum πραγματιστήριον explicare voluit, ut sit *negociatorium*. [*πραγματιστήριον*, vox barbara, non glossatoris est, sed librarii *χρῆμα* in *πρᾶγμα* pro more corrumpentis.] Ego *thesaurum* interpretor, idque κατὰ μετωνυμίαν adiuncti pro subiecto, auctoritate Herodoti ex L. I. 14. et II. 121. fretus. Is enim in Clione Euterpeque Corinthiorum in templo Delphico sacellum et Rhampsiniti quoddam aedificium, recondendis donariis et pecuniis regis attributum, eo tropo *thesaurum* appellat. Quod si cui insolentius videatur, *thesaurarium* pro illo reponat, vel quod Latinius et minus ab usu communi remotum, *aerarium*. Tametsi alias hic interpretationes ac diversas dari posse, non me fugiat. Plurima insuper alia in tam grandi multisque in locis obscuro et difficili opere, cuius interpretatio maturitatem exoptatam consequi non potuit, insunt, quae *δευτέρως φροντίδας* requirunt: quas etiam, si vitam et ocium, caeteraque huc pertinentia Deus supererogarit, iam pridem mediator. RHOD. *Aerarium* Rhodomanni non displicet. Ita Dionysius exstruxisse fertur πρὸ αὐτῆς (νήσου) *χρηματιστήρια καὶ στοὰς δυναμένας ὄχλων ἐπιδέχεσθαι πλῆθος* L. XIV. 7. nisi tamen eo loco conclavia signentur, in quibus responsa civibus et civitatum legatis daturus erat. Posses et de *oraculo* accipere, quo modo Symmachus et Aquila I. Reg. VI. 19. καὶ *χρηματιστήριον ἐν μέσῳ τοῦ οἴκου ἔνδοθεν ἠτοίμασε*, et vers. 5. ac Psalm. XXVII. 2. WESS.

4. 32. *Προσσομένων*] Pro *προσσομένων*, quod omnes habent codices, mallet *πραχθησομένων*. STEPH. Pro τῶν *προσσομένων* cum H. Stephano legendum *πραχθησομένων*. Nota epistropen admodum concinnam. RHOD. Thucyd. VIII. 64. *σωφροσύνην λαβοῦσαι αἱ πόλεις καὶ ἄδειαν τῶν προσσομένων ἐξά-*

ορσαν ἐπὶ τὴν ἄντικρυς ἑλευθερίαν. Diodorus infra Π. p. 34. 68. ἐν μὲν τῷ λέγειν ὄντα δεινόν, ἐν δὲ τοῖς πραπτομένοις νοητέῃ.

4. 37. Ἱστορίας μάθησιν] Codd. aliorum μύθησιν librarii ex superioribus effinxerunt. Τὴν ἐκ τῆς ἱστορίας μάθησιν, sicuti et τὴν περιγεγενημένην ἐμπειρίαν, debet Polyb. I. 1. et 35. Adde infra XV. 39. WESS.

4. 45. Διὰ τῆς δόξης ἀθανατισμῶ] Repetit haec XV. 1. Durant in omne aevum egregia excellentium virorum facta, τὰς ἀρετὰς αὐτῶν τῆς ἱστορίας ἀπαθανατιζούσης, quemadmodum cap. seq. ait. Agathiam huius loci quandam paene paraphrasin dedisse in prooem. monuit Cl. T. Hemsterhusius in Luciani Somn. c. 12. WESS.

4. 51. Ἐπ' ἀγαθῶ μνήμην] Longe hoc praestat ceterorum Codd. scripturam. Polyb. II. 16. καὶ τὸ τῆς ἱστορίας ἴδιον ἀγέιλε τὸν ἑπανον καὶ τὴν ἐπ' ἀγαθῶ μνήμην. et VI. 37. καὶν τι κατὰ τὸν βίον αὐτοῖς ἄλλο συνπάροχον τῆς ἐπ' ἀγαθῶ μνήμης ἄξιον. qui et habet Exe. Leg. CXL. p. 1342. et 1419. Plutarch. T. II. p. 520. E. ἀλλ' ἐμνήσθη ὁ δεῖνα τοῦ δεῖνος ἐπ' ἀγαθῶ. Etiam Noster I. 52. et ἐπὶ κακῶ μνημονεύεσθαι XIV. 1. WESS.

4. 59. Φυλακὴν] Melius conveniret γύλαζα cum μύστρον et εὐεργέτιν. STEPH. Φυλακὴν pro γύλαζα ex similitudine syllabae praecedentis irrepsit. Anaphora enim atque ἰσοζώλω de industria uti voluit. RHOD. Non adsentior viris doctissimis. γυλακὴ idem atque illi volunt exprimit. Demosth. in Aristocrat. p. 403. τὴν ὡς ἀληθῶς δὲ δικαίαν καὶ βεβαίαν φυλακὴν τῆς πόλεως ἀποστερεῖν. Et in Timocrat. p. 448. τίς οὐκ μόνη γυλακὴ καὶ δικαία καὶ βέβαιος τῶν νόμων; quibus adde Schol. in Thucyd. IV. 31. Usam vero fabulae de Inferis tangit et Polyb. VI. 54. et Plato in Phaedone p. 113. WESS.

5. 65. Τῆς φιλοσοφίας οἰονεὶ μητρόπολιν] Ob praeccepta vitae regendae, quae, tanquam ex Metropoli copiae et coloniae, in omnes philosophiae moralis partes transeunt. Parili figura Chrysippus de Epicuri philosophia εἶναι τῆς φιλοσοφίας αὐτοῦ μητρόπολιν τὴν Ἀρχεστράτου γαστρολογίαν in Athenaei L. III. p. 104. et Geometriam ἀρχὴν καὶ μητρόπολιν ceterarum disciplinarum Philo dicebat apud Plutarch. VIII. Sympos. c. 2. Neque dissimilis elegantiae est illud Sophistae Bionis, quo avaritiam μητρόπολιν ἔλεγε πάσης κακίας εἶναι in Theonis Progymnas. c. 5. p. 72. et Nostri XXI. Eclog. 1. de iniustitia, διὸ καὶ μητρόπολις οὕσα τῶν ἀδικημάτων πολλὰς καὶ μεγάλας ἀπεργάζεται συμφορὰς. Adde XXV. Eclog. 1. et Philon. Iud. de Profug. p. 464. B. Προσηῖτιν τῆς ἀληθείας ἱστορίαν dant quoque Excerpt. Valesii p. 261. WESS.

5. 76. Ἀντικαταλλάξασθαι] Parum refert hoc malis an ἀνταλλάξασθαι. eadem enim potestate sunt; Dinarchus in Demosth. p. 90. μηδὲ τὴν κοινὴν σωτηρίαν ἀντικαταλλάξασθαι τῶν τοῦ

ζωηομένου λόγου. Lysurgus in Leocrat. p. 159. καὶ τὴν ἰδίαν ψυχὴν ἀντὶ τῆς κοινῆς σωτηρίας ἀντικαταλλάττεσθαι. Euripides Helen. 1094. πέπλων τε λευκῶν μέλανας ἀνταλλάξομαι. Solent praeterea librarii haec verba permiscere, quemadmodum in Demosth. pro Coron. p. 163. WESS.

5. 82. Οἱ μὲν ἡρωϊκῶν] Vide IV. 1. WESS.

5. 90. Πρὸς λόγου δύναμιν] Idem censuit Dio Chrysost. Or. XVIII. p. 256. neque admodum dissentit Quintilian. XII. I. O. c. 4. Vide eundem tamen X. 1. WESS.

5. 95. Προστεθὲν] Pro προστεθὲν legitur et προσταθὲν. Ego vero malletm πραχθὲν. STEPH. Rectius πραχθὲν, ut H. Stephanus legit. Alias vertendum: *quicquid denique ad dicendum fuerit propositum*. Isocrates in exordio Panegyrici, οἱ λόγοι τοιαύτην ἔχουσι τὴν φύσιν, ὥσθ' οἶοντ' εἶναι περὶ τῶν αὐτῶν πολλαχῶς ἐξηγήσασθαι, καὶ τὰ τε μεγάλα ταπεινὰ ποιῆσαι, καὶ τοῖς μικροῖς μέγεθος προσθεῖναι etc. RHOD. Quod alii est in Codd. προσταχθὲν, id natum videtur ex πραχθὲν. Nihil enim frequentius horum permutatione. Πραττόμενα et προσταττόμενα in Lysiae Orat. XIII. 5. πρᾶττει et προστάττει in Dion. Chrys. Orat. XIV. p. 232. C. commutantur. plura ad L. III. 53. Itaque aut H. Stephani πραχθὲν rectum erit, aut προτεθὲν, quo fere modo I. 58. et Strabo I. p. 65. A. cuius e verbis simile vitium eluit Is. Casaubonus. WESS.

5. 96. Ἀξίους λόγου] Egregios, excellentes omniumque sermone celebrandos. Plato Ion. 541. D. οὓς ἔδη ἡ πόλις ἐνδειξαμένους ὅτι ἄξιοι λόγου εἰσὶ, καὶ εἰς στρατηγίας καὶ εἰς τὰς ἄλλας ἀρχὰς ἄγει. Lysias Orat. VIII. 4. εἰδὼς δὲ περὶ τὴν πόλιν ἄξιον λόγου γεγενημένον. Pausan. IV. 5. τὸν τε Ἀνδροκλέα καὶ τῶν περὶ αὐτὸν τοὺς λόγου μάλιστα ἄξιους ἀποκτείνουσι. Cui et alibi hoc genus placuit, ut IV. 13. VII. 24. IX. 9. WESS.

5. 97. Ὡς τούτους] Τούτῳ vel διὰ τούτου legendum arbitrator. RHOD. Ego τοῦτο τὸ πρωτεῖον ex Vatic. I. praeoptavi. Πεποιημένους Cod. Clar. tametsi et XI. 39. atque alibi occurrat, non probo. Τὸ πρωτεῖον τῆς πονηρίας περιπεποιημένους invenies XII. 12. WESS.

5. 99. Ποιητικὴν τέρεπιν] Sequitur Agatharchidem de Mar. Rubr. p. 12. atque Eratosthenem, quem censuisse ποιητὴν πάντα ψυχαγωγίας στοχάζεσθαι οὐ διδασκαλίας tradit ac indignatur Strabo I. p. 13. B. et p. 28. B. De legibus plane ad Diodori sententiam Lysurg. in Leocrat. p. 161. οἱ μὲν γὰρ, inquit, νόμοι διὰ τὴν συντομίαν οὐ διδάσκουσιν, ἀλλ' ἐπιτάττουσιν. et Hipodamus in Stob. Serm. XLI. p. 249. WESS.

6. 5. Ἄπαντα τὰλλα χρήσιμα] Lege τὰ καλὰ καὶ χρήσιμα. RHOD. Si quid mutandum, hinc eicerem, quod commode subintelligi potest, χρήσιμα, quodque a Codd. quibusdam damnatur,

sed praestat in vulgato acquiescere. Ἐν γὰρ ἔργον ἱστορίας καὶ τέλος, τὸ χρήσιμον, ut bene Lucian. Scrib. Hist. c. 9. WESS.

6. 16. Καὶ τὸ δυνατὸν] Legendum suspicor κατὰ τὸ δυνατὸν, et versu sequenti ἐν τούτῳ τοῖς ἀναγινώσκουσι. STEPH. Haud scio an utraque viri doctissimi suspicio sit iniusta. Potest enim τὸ δυνατὸν pendere ex praecedenti et facultatem partemque virilem indicare, ut εἰς τὸ δυνατὸν XI. 71. Alteram ordo insequentis orationis vehementer premit, qui mollior videri posset eraso τῷ ἐν, nisi et Polyb. VI. 13. κείσθαι ἐν συγκλήτῳ ea diceret, quae in Senatus sunt potestate atque eius ex arbitrio pendent. WESS.

6. 20. Ἀυτοτελεῖς πολέμους] Sic XVI. 1. πόλεων ἢ βασιλείων αὐτοτελεῖς πράξεις. Hoc autem genus scriptores recenset et notat Dionys. T. II. p. 138. Vide infra IV. 1. WESS.

6. 25. Οὐ παρέξεισαν] Hoc iustum est. Veterum enim plerique temporis accuratam rationem, tametsi longe praestet τὸ διηκριβωμένον τοῖς χρόνοις τοῦ μηδὲ γνωσσομένου τίσιν ἐπρόχθη καιροῖς, non habuere. Melius Timaei institutum, de quo V. 1. WESS.

6. 28. Τὴν ὑπόστασιν τῆς ἐπιβολῆς] Egregie, ut solet, Is. Casaubonus de hac voce: *Aliquando, inquit, non male interpreteris subiectum tractationis, quod Philosopho dicitur ὑποκείμενον γένος. Diodorus Siculus libro primo: οἱ δὲ τὴν ὑπόστασιν τῆς ἐπιβολῆς οὐ συνετέλεσαν μεσολαβηθέντες τὸν βίον ὑπὸ τῆς πεπρωμένης, quidam argumentum, ad quod se accinxerunt, fato vitam ipsis intercipiente, non absolverunt. Clarius paullo post idem: ἐξέσται γὰρ ἐκ ταύτης ἕκαστον πρὸς τὴν ἰδίαν ὑπόστασιν ἐτοίμως λαμβάνειν τὸ χρήσιμον, licebit unicuique ad id subiectum, quod sibi proposuerit, quae ad rem facient, ex hoc meo opere sumere. Paullo aliter idem aliquanto post c. 28. de Pete, qui domo Aegyptius, Athenis et ius civitatis et regnum est consecutus: διηροῦς δ' αὐτοῦ γεγονότος, τοὺς Ἀθηναίους μὴ δύνασθαι κατὰ τὴν ἰδίαν ὑπόστασιν ἀποδοῦναι περὶ τῆς φύσεως ταύτης τὰς ἀληθεῖς αἰτίας. heic κατὰ τὴν ἰδίαν ὑπόστασιν, est secundum principia eius historiae, quam ipsi sequuntur, et vera habent. Philosophus diceret κατὰ τὰς ἰδίας ὑποθέσεις. nam hypothesis congruant necesse est, quae illis superstruuntur. Aliter accipit idem libro XV. 70. quae ita scribit: Θηβαῖοι κατὰ τὴν ἰδίαν ὑπόστασιν ὅλην τὴν Βοιωτίαν ὑπὸ μίαν ἀγαγόντες συντέλειαν, οὐ προσεδέχθησαν, Thebani quum ex instituto suo totam Boeotiam in unum concilium contribuissent, ad foederis societatem non sunt admissi. ὑπόστασις hoc loco est, suscepta semel ratio consilii, et praepositum universum, ad quod singulas actiones referimus. Libro XVI. 32. duo haec pro eodem posuit Diodorus, τηρεῖν τὴν ὑπόστασιν, et τηρεῖν τὴν ἐξ ἀρχῆς προαίρεσιν. Polybius l. IV. id dicit συναρξίωσιν τὴν πρόθεσιν.*

ἦν εἶχε. *Eruditissimum virum, qui Diodorum Siculum Latino vertit, nusquam assecutum esse vim huius vocis palam est. Hactenus Casaubonus in Polybium p. 111. WESS.*

6. 33. Διαδόχους ἢ τοὺς ἐπιγόνους] Optime Rhodomannus *ad successores et posteros, et ante eum P. Leopardus XI. Emend. 9. Διάδοχοι Alexandri magni sunt successores. Strabo VII. p. 463. A. ὅ, τε Διομηχεΐτης κατὰ τοὺς διαδόχους ἦν τοῦ Ἀλεξάνδρου Γετῶν βασιλεὺς. Noster XVIII. 4. μεταλλάξαντος δὲ Ἀλεξάνδρον, τοῖς διαδόχοις ἔδοξε μὴ συντελεῖν τὰ βεβουλευμένα, et c. 42. Dicuntur et οἱ διαδεξάμενοι Polybio IX. 28. XVII. 3. et διαδεξάμενοι τὴν τούτου βασιλείαν Diodoro XVIII. 1. Horum vero posterī ἐπίγονοι. Strabo XV. p. 1069. B. εἴτ' εἰς πλείους τοὺς διαδεξάμενους καὶ τοὺς ἐπιγόνους τούτων μερισθεῖσα ἡ ἡγεμονία τῆς Ἀσίας διελέσθη. Res gestas τῶν διαδόχων καὶ ἐπιγόνων diligenter exsecuti sunt Hieronymus Cardianus, Nymphis Heracleotes atque alii, de quibus Ger. Io. Vossius L. I. Historic. Graec. c. 11. quo loco et usum horum vocabulorum erudite distinxit. Ἐπιγόνους τῶν ἐπὶ Θήβας describit Diodor. IV. 68. WESS.*

6. 40. Καὶ πλείοσι καὶ διαφόροις] Reice καὶ πλείοσι, ut a librario insertum. RHOD. Πραγματείας καὶ διαφόροις] Parui Rhodomanno et melioribus Mss. sustulique ineptas voces. WESS.

7. 51. Τοῖς φιλαναγνωστοῦσιν] Placuit hoc Diodoro: utitur eodem XVI. 1. μεσολαβοῦσι τὴν ἐπιθυμίαν τῶν φιλαναγνωστούντων. et XVIII. 1. ἡ βιβλίος αὐτῆ ποιήσει φανερόν τὸ ἦρθέν τοῖς φιλαναγνωστοῦσιν. Rhodomannus, qui utrobique studiosum lectorem verterat, hoc loco praeteriit. WESS.

7. 56. Ἐπυροῦσαι καὶ τῶν] Expunge copulativam. RHOD.

7. 58. Καὶ δυσέμικτος] Hoc ociosum est glossema, quo aliquis τὸ δυσκατάληπτος explanare voluit. Quod autem statim attexitur τῶν πεπραγμένων rectius legi arbitror, quam marginale πεπραγματευμένων. RHOD. Δυσκατάληπτος γίνεται τελείως ἢ τῶν] Adsentior viro doctissimo. Hesychius δυσέμικτον interpretatur δυσκατάληπτον, et alterum alterius esse glossam ostendit. Plutarchus T. II. p. 65. E. δυσπρόσοδα καὶ δυσέμικτα connectit, quae nostris paria non sunt. WESS.

7. 60. Τὸ τῶν πράξεων εἰρόμερον ἔχουσα] Prudenter Dionys. T. II. p. 140. χορὴ δὲ τὴν ἱστορικὴν πραγματείαν εἰρομένην καὶ ἀπερίσπαστον εἶναι, ἄλλως τε ἐπειδὴν περὶ πολλῶν γίνηται πραγμάτων καὶ δυσκαταμαθήτων. nam res imperfectae, quarum finis cum principiis non cohaeret, cupidam studiosi lectoris intentionem interrumpunt. αἱ μὲν γὰρ ἡμιτελεῖς πράξεις, οὐκ ἔχουσαι συνεχὲς ταῖς ἀρχαῖς τὸ πέρας, μεσολαβοῦσι τὴν ἐπιθυμίαν τῶν φιλαναγνωστούντων Diodor. XVI. 1. WESS.

7. 64. Τὸ συνεχὲς τοῦ διηρημένου] Nihil indigenus scriptura marginis Coisl. et Clar. 2. tametsi eleganter Polybius III. 57.



οὐ διεθρομμένην οὐδ' ἐν παρέργῳ ποιήσασθαι τὴν περὶ αὐτῶν μνήμην. et cap. seq. ῥητέον δέ τι πρὸς αὐτοὺς οὐκ ἐκ παρέργου καὶ διεθρομμένως. Quod divisum et in partes sectum est, id τὸ διεθρομμένον, ut c. 2. WESS. Cum duorum librorum διεθρομμέρον conferri potest illud Polybii Exc. Vat. p. 456. διεθρομμένην τὴν ἐξήγησιν.

7. 72. *Αὐτόπται γενηθῶμεν*] Eodem studio incensus Theopompus, πολλῶν μὲν αὐτόπτης γεγενημένος, πολλοῖς δὲ εἰς ἡμίλιαν ἐλθὼν ἀνδράσι τοῖς τότε πρωτεύουσι, animum ad res scribendas adpulit apud Dionys. T. II. p. 131. Neque aliud Polybii institutum, de quo ipse III. 59. Turpe enim neque in historico ferendum, si in locorum descriptione studiosos lectores fallat. Τὸ δὲ καὶ περὶ τοὺς τόπους αὐτοὺς ψεύδεσθαι, οὐ παρασάγγας μόνον, ἀλλὰ καὶ σταθμοὺς ὅλους, τίνι τῶν καλῶν ἔουκιν; bene Lucian. Conscrib. Histor. c. 24. WESS.

7. 73. *Οὐχ οἱ τεχνόντες μόνον*] Defendi posset Cod. M. et aliorum scriptura eo more, quo ante ἀλλὰ haud raro τὸ μόνον negligitur; cuiusque exempla dabunt Isaeus Orat. de Apollod. Hered. p. 64. Dio Cassius LV. p. 641. A. Longinus c. 9. 15. alii- que, quorum verba Davisius conduxit ad Ciceron. II. N. D. 64. Nihil tamen muto, quod vulgato potiores libri patrocinentur. WESS.

7. 75. *Πρὸς τὴν ἐπιβολὴν*] Nostra exemplaria non sine manifesto mendo habent hic ἐπιβουλήν. STEPH. Nihil frequentius est harum vocum permutatione. In Polybio V. 92. leges de Arato, ὁ δὲ σιρατιγὸς τῶν Ἀχαιῶν συνεῖς τὴν ἐπιβουλήν αὐτῶν, haud dubie perperam. Lycurgus et Pyrrhias in Messeniam exercitum duxerant; quod eorum consilium et incoeptum Aratus intellexerat. Scripsit itaque τὴν ἐπιβουλήν, idque firmatur ex sequentibus: disiecto enim eorum impetu et consilio, additur, Ἀρατος δὲ διαπεσούσης τοῖς πολεμίοις τῆς ἐπιβουλῆς. Peccatum simili modo est in Aeliano XVII. H. A. 37. nam de aquila, quae serpentis, quam vi aperta invaserat, spirarum voluminibus praeter spem iuplicata proposito exciderat, οὐδὲ τῆς ἐπιβουλῆς, inquit, ἐγκρατῆς ἐγένετο. Immo vero ἐπιβουλῆς. Contra evenit infra XIII. 27. 92. XV. 92. WESS.

8. 81. *Διατίνοιου τῆ δυνάμει*] Hoc Diodoro solenne. Vid. II. 42. 46. WESS.

8. 84. *Ἐξ Ἀγυρῶν*] Mallet Ἀγγυρῶν vel potius Ἀγυρῶν ex Plinio et Stephano. STEPH. Neque hoc, neque istud in margine adscriptum, recte se habet. Sed Ἀγυρῶν legendum esse ut censeamus, Stephani Geographi et Plinii auctoritas nos movet. Praeterquam quod infra Agyrinaeorum urbis mentionem auctor fecit. RHOD. Ἐξ Ἀγυρῶν] Sic scripsi optimos Codd. proxime secutus, ipsumque Diodorum, qui πόλιν Ἀγυρῶναιον IV. 24. et Ἀγυρῶν XIV. 9. XVI. 83. aliisque in locis appellat. Idem censet Ph. Cluverius II. Sic. Ant. p. 313. Ἀγυρῶναιον tamen Is. Tzetzes ex hoc loco producit in Lycophr. 1017. WESS.

8. 84. Τὴν ἐπιμιξίαν τοῖς ἐν τῇ νήσῳ] Usu et familiaritate Romanorum. Vid. inf. I. 57. Iunguntur autem haec artissime, ut saepe substantivis casus sui verbi. Plato I. Leg. p. 633. C. καὶ ἄνεν θεραπόρτων ἀπὸ τοῖς ἑαυτῶν διαζονήσεις. Aristid. T. I. p. 147. ἢ τοῖς παλαιαῖς Ἑλλήσι διαζονία. et Noster XI. 37. μάζη τοῖς Ἑλλήσι πρὸς τοῖς Πέρσας. De quo genere plura Cl. Duker in Thucyd. V. 46. VII. 50. Facilis vero iactura erit suspicionis H. Stephani, qua in castigationibus notarum suarum *deesse fortasse Romanis post νήσῳ* arbitratur; id enim si addideris, agrestem quoque et inconcinnam orationem effeceris. WESS. F. Ursinus in sui libri margine correxerat τῶν ἐν τῇ νήσῳ, quo carere posse videmur. Causam indicavi in adnotatione. IDEM in Add.

8. 92. Ἠ δύναμις] Δύναμις Vat. ita inf. XIX. 1. WESS.

8. 99. Τὰς τῶν Ἑλλήνων ἀρχαιολογίας] Delevi et hic verbum inutile et paullo ante supervacaneum μέν, motus optimorum librorum auctoritate. pendet oratio ex praecedenti περιέχουσι. WESS.

8. 3. Μέχρι τῆς ἀρχῆς τοῦ συστάντος πολέμου] Illust. Scaliger et Is. Vossius adscripserunt marginibus librorum suorum μέχρι τῆς τελευτῆς, arbitrati haud dubie annorum numeros, qui sequuntur, finem belli Galliei requirere. At Io. Georg. Herwarto Chronol. Novae c. 119. visus est Diodorus longa oratione descripsisse Caesaris expeditionem Britannicam ob L. V. 22. atque adeo hic μέχρι τῆς ἀρχῆς dedisse. Sed nihil Mss. mutant. Ratio etiam Herwarti uti specie blanditur, ita fieri potuit, ut in operis progressu Diodorus consilium, quod intenderat, repudiaret, et belli Galliei initio Historiarum libros terminaverit. Vid. D. Petavium XII. Doct. Temp. c. 40. WESS. ἀρχῆς respiciunt sequentia τούτου δ' αἱ πρῶται πράξεις ἐπιτελέσθησαν repetiitque Photius de Diodoro scribens eod. LXX., ubi pergit ἐν δὲ ταῖς ὑπολοίποις κ' βίβλοις αἰλοῖται τεχνάουσι πράξεις ἀναγεγραμμένα μέχρις ὅτου Ῥωμαῖοι πρὸς Κέλτοὺς ὁ πόλεμος συνεβόλη, καὶ ὃν ἠγνούμενος Γάιος Ἰούλιος Καῖσαρ ἐχράτησε μὲν τῶν πλείστων καὶ μαχίμων παρὰ Κέλταις ἐθνῶν τῷ πολέμῳ, προεβίβασε δὲ τὴν ἡγεμονίαν τῆς Ῥώμης μέχρι τῶν Βρετανικῶν νήσων· ἐν οἷς καὶ ἡ ἱστορία τελευτᾷ. Credibilis autem duxerim Diodorum narranda, ut III. 38. V. 21. 22. promiserat, expeditione Caesaris Britannica, tanto illius temporis miraculo, fines hic positos egressum quam promissi ter dati oblitum esse. Sic ille libris I. — VI. historiam non ultra bellum Troianum deductam pollicitus Aegyptiorum res ad Cambysen usque exponit.

8. 6. Προσαγορευθεὶς θεός] Dicam I. V. 21. WESS.

8. 9. Τάξεις καὶ] Haec manifeste supposititia sunt. Si παρατάξεις scriptum esset, tolerari forte posset. RHOD. Τούτου αἱ πρῶται πράξεις] Abire iussi voces τάξεις καὶ unde malum pedem intulerant. Pari audacia grassati dederunt I. 53. ἐπιφανεστάτας καὶ μεγίστας τῶν πρὸ αὐτοῦ τάξεις ἐπιτελέσασθαι καὶ πράξεις,

invitis plerisque Mss. Quae tamen verba, si quae necessitas urgeret, scripturae Cod. Coisl. et Mutin. auctoritatem conciliare possent, uti et III. 52. 57. XII. 54. Quod autem H. Stephanus in castigationibus notarum suarum malle se ait *χρόνων τῶν περιελημμένων*, non *χρόνων τούτων περιελημμένων*, ut vulgo libri omnes, id si ita scripserit, minus probum erit. Puto voluisse, *τῶν δὲ χρόνων τῶν περιελημμένων*, quod sane elegantius. WESS.

9. 14. *Διὰ τὸ μηδὲν παράπρηγμα παρεληγέμεν*] *Mirum quam in his verbis explicandis, ait Salmasius, hallucinentur viri docti propter unius dictionis ignorantiam, quid significet nempe παράπρηγμα. Interpretes Diodori firmamentum exponunt. Scaliger ad Eusebium quod alii ἐποχὴν, Censorinus titulum vocat, id Diodoro dici παράπρηγμα, hoc est terminum fixum et haerentem. Παράπρηγμα, quemadmodum iam ante (p. 521.) docuimus, proprie est quidquid adfigitur. Hinc παραλήγματα tabulae dicebantur adfixae columnis, aut pilis, in quibus leges, aut alia publica monumenta incidebantur. Hinc ἀστρονομίης παραλήγματα, tabulae astronomicae, in quibus ortus et obitus signorum, et tempestatum vices per aliquot annorum spatia redeuntis descriptae publice proponebantur ad populi usum. Ad hoc exemplum παράπρηγμα ἱστορικὸν aut μυθικὸν dicitur, series historiarum vel fabularum secundam ordinem temporum digesta. Et hoc sensu plane accipiendum est in illis Diodori verbis. Singula epici Cycli poemata totidem erant τῆς μυθολογίας Ἑλληνικῆς παραλήγματα. Non dicit Diodorus nullum extitisse parapigma earum rerum, quae gestae referuntur ante Troica tempora, sed nullum πιστευόμενον. Multa quippe in eo intervallo fabulosa memorari, quae vix fidem admitterent. Haec Salmasius in Solin. p. 604. cui iunge Menagium in Diogen. IX. 48. WESS. Repetit haec Diodorus Exc. Vat. p. 143.*

9. 16. *Ἀκολούθως Ἀπολλοδώρου*] Idem censuit Thucydides I. 12. Eratosthenes apud Clement. Alex. I. Stromat. p. 402. Vel- leius Patere. I. 2. et optimus quisque. WESS.

9. 18. *Ἀντὶ λείποντα τῶν τριακοσίων*] Bene pro rationibus Eratosthenis, cui primus annus Olymp. 1. est a Troia eversa ccccviii. Congruunt etiam quae leguntur XIV. 2. 3. et XIX. 1. Quare perperam Io. Tzetzes in quodam Scholio ad *Μεθομοιωτικά*, vulgata ab H. Dodwello ad Dissert. V. de Cyclis p. 804. *ἔξ ὧν ὁ Διόδωρος ἱστορεῖ*, inquit, *γαίνεται ἡ Τροία πορθηθεῖσα πρὸς τριακοσίων ὀκτωκαίδεκα χρόνων τῆς πρώτης Ὀλεμπιάδος*. WESS.

9. 21. *Ἐς τὴν ἀρχὴν τοῦ Κελτ.*] Suo exemplari adscripserat Is. Vossius *ἔς τὴν τελευτήν*, quod et nimium est et rem non expedit. Viam aliam ingressus est vir Amplissimus Io. Christoph. de Jordan in Chronologico apparatus ad Origines Sclavicas; cuius ego commentationem de Diodori Chronologia, benivole mihi transmissam, adnotationum auctario integram censui adnectendam [vol. II.

*Append. p. XLVIII. s. ed. Lips.*], ut quantum viro egregio Siculus scriptor debeat, adpareat omnibus. Wess. in Add. Vid. ad 8. 3.

9. 22. Ἑπτακόσια καὶ τριάκοντα] In his manifestum peccatum est. Anni DCCXXX dant Olympiades CLXXXII cum duobus integris annis. Primus Olymp. CLXXX ad quem historiam sese continuasse ait, est DCCXVII. ab initio Olympiadum. Quae contraria et sibi pugnancia quis ferat? Audi Scaligeri censuram. *Longe vero puerilius, inquit, hallucinatur Diodorus ipse. Scribit enim principium belli Gallici convenire anno 1. Olympiadis CLXXX. Ἡρώδου ἄρχοντος: quum consulatus Calpurnii Pisonis et Gabinii, quo bellum Gallicum motum, incidere in annum III. eiusdem Olympiadis. Pergit: ἀπὸ δὲ τῆς πρώτης Ὀλυμπιάδος εἰς τὴν ἀρχὴν τοῦ Κελτικῶν πολέμου, ἣν τελευτήν πεποιήμεθα τῆς ἱστορίας, ἑπτακόσια καὶ τριάκοντα. Ait a prima Olympiade ad principium belli Gallici esse annos DCCXXX. quae sunt Olympiades absolutae CLXXXII, anni duo solidi. Ergo bellum Gallicum inivit anno III. Olympiadis CLXXX. qui tamen erat annus, quo Scipio et Iuba in Africa bellum cum Caesare infeliciter gesserunt. Postremo adiicit, ab excidio Ilii ad finem Bibliothecae suae intercedere annos CIOCCXXXVIII. de quibus si detrahantur CCCCVIII, quot annos ipse Diodorus ait esse ab excidio Ilii ad primam Olympiadem, supererunt iidem anni DCCXXX, ne quis forte a librario peccatum putet in priore numero. Itaque insignis est hallucinatio praestantissimi scriptoris, principium belli Gallici cum annis belli civilis confundentis. Sic ille in Euseb. Chron. CIOCCCLXVII. quibus consentit, Scaligero ceteroque saepe infestior, D. Petavius IX. D. T. 55. In alia tamen omnia abiit Io. G. Herwartus Chronol. Novae c. 116. pertenditque, in annis Olympiadum quinquennio minus numerasse Diodorum ceterosque eius aevi Historicos, qui fastos Consulium Romanos fuere secuti; praeterea εἰς τὴν ἀρχὴν τοῦ Κελτικῶν πολέμου reliquisse Diodorum: hinc factum esse, ut finem sui operis coniecirit in annum DCCXXX. Olympiadicum, seu annum II. Olympiadis CLXXXII. qui revera inceperit anno ante Christum XLVII. seu U. C. Tab. Capitol. DCCI. Verum ea in re sumit sibi fidenter vir doctissimus quinquennium in Olympiadum annis minus numeratum, quod in contentione versatur, et a vero longe recedit, uti docuit D. Petavius XII. D. T. 40. Mutat etiam vetantibus Mss. ἀρχὴν in ἀρχμὴν ex causa, uti vidimus, haud sane gravi: denique manet error, quo annus 1. Olymp. CLXXX. componitur cum anno DCCXXX. Olympiatico. Itaque aut transeundum est in Scaligeri Petaviique sententiam, aut remedio adhibito succurrendum famae Diodori. Fac scripsisse eum, εἰς τὴν ἀρχὴν τοῦ Κελτικῶν πολέμου, ἣν τελευτήν πεποιήμεθα τῆς ἱστορίας, ψιζ', cuius rei in mentem Ismaëli Bullialdo venisse Fr. Dion. Camusatus huic loco adscripserat, hinc vitiosa notarum scriptura venisse ψλ', hoc est, ex annis*

DCCXVII. factos esse DCCXXX. auctos praeterea sequentes annorum numeros, qui profecto salvi ingruente hoc vitio esse non potuerunt, et evanescet puerilis iste error. *Ναμ τούτου δ' αἱ πρώται πράξεις ἀπετελέσθησαν Ὀλυμπιάδος τῆς ἐκατοστῆς καὶ ὀγδοηκοστῆς κατὰ τὸ πρῶτον ἔτος*, commode intellexeris de principio rerum gestarum Caesaris. Annus enim ille ex magna parte respondet anno U. C. DCCXC. quo Caesar consulatum iniit, exorsusque ea est, quae bello Gallico absolvit. Ea quidem vis est, inquires, sed lenior et in numeris saepe necessaria; qua si utendum pernegaveris, haereat in hoc luto Diodorus. WESS.

9. 29. *Τοὺς δὲ διασκευάζειν εἰωθότας*] Librorum correctores et descriptores designat. *Διασκευάσασθαι* frequens est de fabulis, quas poetae, cum non stetissent, impensiore cura emendabant et refingebant, uti egregie docuit Is. Casaubonus in Athenaei III. 28. Rarius de librariis, qui emendandis et corrigendis aliorum scriptis operam insumunt; quo tamen usu *χαρᾶντιρες διασκευασμένοι* et libri *διασκευασμένοι*, qui emendati, et *κατασκευάζειν πολυτελῶς ἐν χάριταις καλλίστοις*, non semel Galeno in III. Epidem. Hippoc. p. 411. 412. 413. Haud iniuria vero eos dehortatur, ne inopportuna cura alieno operi molesti sint; acquissima enim lex est Pythagorae, *ὅστις ὁ νόμος οὐκ ἔα τοῖς βιβλίοις ἐπιποιεῖν· ἀλλὰ βούλεται μένειν αὐτὰ ἐπὶ τῆς πρώτης χειρὸς, ὅπως ποτὲ ἔσχε τέχνης ἢ τέχνης*, in Synesii Dione p. 60. A. WESS.

9. 37. *Καταδειξάντες τιμῶν τὸ θεῖον*] Non probat Diodorus scripturam Cod. Coisl. et Mut. nam *καταδειξάντες τιμῶν τὸ θεῖον* I. 88. et *τιμῶν τε καταδειξάντες τὸ θεῖον* II. 38. et III. 2. invenies. Haec vero exscripta Eusebius inseruit I. Praep. Evang. 7. WESS.

10. 44. *Ἐν τοῖς γνωριζομένοις μέρεσι*] Familiare esse hoc loquendi genus scriptori, ostendent I. 9. XIX. 1. WESS.

10. 49. *Παρὰ τοῖς ὀνομαστοτάτοις καὶ νομιμωτάτοις*] Apud probatissimos, qui videlicet inter classicos sunt primarii. Quod vero antecedit *τοῖς ὀνομαστοτάτοις*, extraneum videtur. De mundi tum aeternitate tum ortu ac interitu, vide quae annotat Plutarchus II. de Placit. et Decret. Philosoph. c. 4. Sed quanto consultius audire Mosen Gen. I. 23. et Christum Dominum Lucae XXI. 33. *ὁ οὐρανὸς καὶ ἡ γῆ παρελεύσονται*. Confer tamen cum Diodoro Iosephum I. Archaeolog. c. 2. At contra mundi ortum et interitum Aristoteles disputat I. de Coelo cap. 10. usque ad finem et initio libri sequentis. RHOD. *παρὰ τοῖς νομιμωτάτοις*] Adscripserat Camusatus, lectionem vulgatae editionis et Cod. Coisl. sibi meliorem videri, quod elegantior sit, et physicis ac historicis proprium tribuat titulum: *νόμιμον γὰρ εἶναι τὸν φιλόσοφον, ὀνομαστὸν δὲ τὸν ἱστορικόν*. Forsan tamen legendum, *παρὰ τοῖς ὀνομαστοτάτοις τῶν ἱστορικῶν καὶ νομιμωτάτοις τῶν φυσιολόγων*. Eunarium enim dixisse de Iamblichō, *μετὰ τοῦτους*

ὀνομασιότατος ἐπιγίνεται φιλόσοφος Ἰάμβλιχος. Mihi, quod pace eius dixerim, perlevis haec ratio videtur et fallax, quam et νόμιμοι τῶν συγγραφέων I. 29. et νομιμώτατοι τῶν συγγραφέων V. 2. et οἱ νομιμώτατοι τῶν ἱερέων Plutarchi T. II. p. 381. C. infringunt. Eieci itaque glossema, quod nec Eusebius nec Codd. plures probarunt. WESS.

10. 53. Οἱ δὲ γεννητὸν καὶ φθαρτὸν] Euseb. γενητὸν καὶ ἄφθαρτον. hoc perperam, non alterum. Nam de mundi origine cum disputant, si principium illi dent et creatum pertendant, γενητὸν, si auferant et negent, ἀγένητον dicere adsolent. Philo Jud. de Mundo non corrup. p. 939. D. τριταὶ δὲ περὶ τοῦ ζητουμένου γεγόνασι δόξαι, τῶν μὲν αἰδιον τὸν κόσμον φαρμένων, ἀγένητόν τε καὶ ἀνώλεθρον, τῶν δὲ ἐξ ἐναντίας γενητόν τε καὶ φθαρτόν. atque ita Ocellus c. I. Aristoteles Analyt. Prior. II. 22. p. 190. Plutarch. T. II. p. 886. D. ne plures advocem. Nec ausus tamen sum γενητὸν, et paullo ante ἀγένητον, quod apud Eusebium, recipere, quod sibi in horum usu non constant. Philo enim p. 946. εἰ δ' αἰδιον ἄνθρωπος, ἀγένητος δὴπον καὶ ὁ κόσμος. Ocellus c. I. p. 514. διότι ἀγένητος ὁ κόσμος καὶ ἄφθαρτος. Diogen. VII. 141. et Atticus apud Euseb. XV. P. Ev. 6. In quibus τοῦ γεννητοῦ paullo quidem diversa a superiore notio est, rerum tamen genitarum initium indicat. Mox ὁμοίως ἐκείνω Franc. Vigerus quoque ad Eusebium. WESS.

10. 54. Ὅμοίως ἐκείνους] Intricata hic sententia est, quae facile extricabitur, si ἐκείνω legas, quemadmodum ille, id est, mundus. RHOD. ἐκείνους rectum est. consequenter illis sententiis vel hypothesisibus. nam ὁμοίως hic idem est atque ἀκολούθως, et ἐκεῖνα idem atque ἐκείνη ἢ ὑπόθεσις. Passim hic auctor, ut alii, plurali pronom. pro sing. utitur. v. p. 31. 26. τὸ γεγονὸς ἐν τούτοις τῆς Ἰσιδος ἐπίτευγμα. REISK.

10. 63. Ἀνωφεροῦς οὐσῆς] Sursum impetu quodam tendens. Plutarchus T. II. p. 950. D. ἐλαφρὸν καὶ κοῦφον καὶ ἀνωφερὲς οὐδὲν ἐστι τῶν ψυχρῶν. et p. 952. D. οὐ γὰρ ὡς βαρεῖα πρὸς κοῦφον, καὶ καταθήρης πρὸς ἀνωφερὲς ἀντίκειται μόνον. ubi perverse vulgo ἀνωφελές, quod longe aliud est. Res ipsa convenit sententiae Anaxagorae, de qua Diogen. II. 8. et Heraclides Pontic. Homer. Allegor. p. 488. WESS.

10. 66. Τῇ πάσῃ δίνῃ] Quid τὸ πάσῃ, si genuinum est, sibi velit, nondum perspicio, nisi τῇ τοῦ παντὸς δίνῃ, in circumrotatione universi, forte scripserit, aut hac phrasi nova idem intelligat. RHOD. Accessero Rhodomanno, nisi si ea vocula hic summam et concitatissimam vertiginem, ut solet ad rem augendam subinde adhiberi, et agnovisse videtur Fr. Vigerus, indicaverit. Fuit, cum πανσύνδῃ, quod de vehementi impetu, πάσῃ τῇ ὄρουῃ, est apud Euripid. Troas. 792. Aratum Phaenom. 714. et

Apollon. Rhod. II. 761. 1065. non displiceret. Sed vetat usus, desideroque simile exemplum. WESS.

10. 66. Μετὰ τῆς τῶν ἑρῶν συγκρίσεως] Eusebio adscriptum est συγκρούσεως, quo modo τὴν τῶν στοιχείων σύγκρουσιν αἰτίαν εἶναι τῆς γενέσεως Alciphr. III. Epist. 40. Et permutantur hae cognataeque voces, uti in Philon. de Somn. p. 568. A. ubi Ms. August. τὸ δὲ ἄλλαις συγκεκραμένον ἰδέαις pro vulgatis, multo obscurissimis, τὸ δὲ βλυσῶδες ἐστὶ, διακεκρωμένον ἰδέαις. Illic tamen bene habet, et concretionem commixtionemque innuit, uti mox et III. 47. et in Plutarchi T. II. p. 947. A. et σύγκρισις καὶ βρασιμὸς τῆς ὅλης in Cornut. N. D. c. 3. WESS.

10. 67. καταστῆναι] III. 51. καθίστασθαι πρὸς τὴν γῆν.

10. 73. Ἀναζυμομένης] Apud Eusebium, ubi locus hic citatur, legitur ἀναζομένης. STEPH. Si cum H. Stephano ἀναζομένης legere malis, pro inflatam et quasi fermentatam, substituas fervefactam. RHOD. Eusebii scriptura parum constans, consentit enim nostrae Cod. Montacutii, Diodoro nihil debet nocere. Mox ὅπερ ἐν τοῖς ἔλεσι καὶ νῦν ὀρεῖσθαι ob meliorum Codd. consensum praecoptavi, suspensa ex superioribus sententia. Quae vero hic narrantur magna ex parte excerpsit Tzetzes in Hesiodi Oper. v. 43. WESS.

11. 82. Ἀπὸ τοῦ περιέχοντος] Optimis scriptoribus ὁ περιέχων et τὸ περιέχον est aer, coelumque omnia ambiens et complectens. Ὁ περιέχων ἄρ Plut. T. II. p. 333. E. Vid. Polyb. I. 37. Strab. I. p. 14. B. Plut. T. II. p. 361 B. et Nostr. II. 48. III. 59. XVI. 81. WESS.

11. 85. Καὶ φανῆναι] Glossema hoc ex margine, ut alia quamplurima, in contextum irrepsit. RHOD. Ἀναφανῆναι παντοδαποῦς τύπους] Assentior Rhodom. et Ism. Bullialdo, cui idem placuisse Camusatus adscripserat, deleoque καὶ φανῆναι, Eusebio et Mss. improbatum. WESS.

11. 88. Τὰ δὲ γεώδους ἀντεχόμενα] Non admodum his dissimilia reperies in Aristid. T. I. p. 8. et Diogen. II. 17. WESS.

11. 97. Μαθητῆς ὄν Ἀναξαγόρου] Vid. inf. c. 38. et Heraclid. Pontic. Hom. Allegor. p. 440. Euripides Μελαλίπην Σοφίην docuit, in qua praeceptoris Anaxagorae opinionem de rerum ortu Menalippae, tanquam a matre acceptam, dedit exponendam, Ὄν ἐμὸς ὁ μῦθος, ἀλλ' ἐμῆς μητρὸς παρὰ, Ὡς οὐρανός τε γαῖά τ' ἦν μορφῇ μία, teste Dionysio, cuius verba Th. Canterus II. V. L. 15. Diodori auxilio constituit, Tom. II. p. 57. WESS.

11. 2. Ἄνδρη, πετεινὰ] Euseb. margini appictum est, Τὰ δένδρα, πτηνὰ, θῆρας, quod Ill. Grotius in Exc. Trag. p. 395. atque ex eo, uti solet, Barnes. adscivit. Vulgatum cur spernatum, caussa nulla est. WESS.

11. 4. Καὶ περὶ μὲν τῆς πρώτης τοῦ ζωογονεῖν] Non bene

cohaerere πρώτης cum proxime sequentibus τοῦ ζωογονεῖν, nisi quid cum πρώτης iungatur, perspicuum est. Sed et haec verba, εἰ καὶ παράδοξον εἶναι τισὶ φαίνεται τὴν τότε ἐνέργειαν, mendo vacare non videntur. Praeterea quae sunt ab hoc loco usque ad τοὺς δὲ ἐξ ἀρχῆς, eadem fere dicuntur paulo post, videlicet in fine pag. seq. et initio eius quae illi proxima est, quod suspicionem auget. Denique Eusebius eam affert quam margini adscripti lectionem, quae, ut vides, pro novem lineis unam duntaxat habet, certior tamen esse videtur. STEPH. Ut haec cum praecedentibus, quae margo usque ad παρελήγαμεν exhibet, aptius cohaereant, muta τοῦ in τὸ δὲ ζωογονεῖν. Verum, ut, quod res est, dicam, totus iste locus a τοῦ ζωογονεῖν usque ad τοὺς δὲ ἐξ ἀρχῆς, decem et sex versibus constans, a sciorum aliquo intrusus huc videtur. Id quod eorundem pene verborum repetitio infra cap. 10. arguit. Lege quae H. Steph. porro annotat. RHOD. Περὶ τῆς πρώτης τῶν ὅλων γενέσεως] Ita legendum esse censui. Cetera coloris minime sani et huic loco parum accommoda, Eusebii plurimumque Codd. auctoritate motus, sedem migrare iussi. Quae sequuntur, ea conformata diceres ad haec Critiae in Sexti Empir. IX. C. M. 54. ἦν χρόνος ὅτ' ἦν ἄτακτος ἀνθρώπων βίος καὶ θνητότης. WESS.

11. 10. Ἀλλήλοις βοηθεῖν] Sequor Euseb. et consentientes illi Mss. inportuna enim hic est particula. Πολεμουμένοις Clar. 2. probari, nisi et alia mutes, non potest. WESS.

12. 19. Ὡς ἔτιγχε] Temere atque uti sors dabat. Lucian. Scrib. Histor. c. 47. τὰ δὲ πράγματα, οὐχ ὡς ἔτιγχε, συνακτέον. et infr. I. 14. XIX. 108. Μοχ διαλέκτους καὶ χαρακτῆρας διαλέκτων, etsi haud plane damnem, recipere tamen, quod editum rei satis conveniat, non sustinui. WESS.

12. 24. Οἰκίσεως δὲ καὶ πυρός] Euseb. εἴσεως et εἰσημένων haud iniuria corrigi oportere Fr. Vigerus censuit. Non abit autem ab his Diodori Moschion. ἦν γὰρ ποτ' αἰὼν κείνος, ἦν, ὀπηρῖκα Θηροσὶν διαίτας εἶχον ἐμπερεῖς βροτοὶ, Ὀρειγενῆ σπήλαια καὶ δεσφλόνες Φάραγγας ἐνναίνοντες· οὐδέπω γὰρ ἦν οὔτε στεγίρης οἶκος, οὔτε λαίνοις Ἐνδοῖα πρόοις ἀχρωμένη πόλις. in Ecl. Phys. Io. Stobaei p. 18. ex Illust. H. Grotii emendatione. WESS.

12. 26. Συγκομιδὴν τῆς ἀγρίας τροφῆς] Usus modumque eius comportandi. Polyb. III. 100. ἔτι δὲ τῆς ὥρας ἀκμαζούσης πρὸς τὴν συγκομιδὴν. Lucian. I. H. V. 39. καὶ τὸν καρπὸν συγκομιζόμενοι τὸν ἐκ τῶν δένδρων. Plura infr. c. 15. Est enim de messe et vindemia frequens, quemadmodum et καρπῶν παράθεσιν ποιῆσθαι, unde παράθεσις ac σίτον παράθεσις de frumento commeatuque ad usum reposito Polyb. III. 68. 102. et Exc. L. p. 1222. qua de re ad H. 38. WESS.

12. 36. Τὴν χρεῖαν ἀπὲρ διδώσαλον] Eadem Archytae placuit sententia in hoc apud Stob. Serm. XCIII. versu, χρεῖαν



πάντ' ἐδίδαξε, τί δ' οὐ χρεῖόν κεν ἀνεύροι; et Moschioni in eiusdem Eclog. Phys. p. 18. εἴτ' οὖν ἀνάγκην, εἴτε τῇ μακροῦ τριβῆ, Ἀετὴν παρασχὼν τὴν γύσειν διδάσκαλον. i. e. Grotio interprete, seu vis necessitatis et longus simul Usus magistram sponte naturam dedit. Adde Dionys. I. Ant. Rom. p. 20. Quae vero sequuntur, iisdem repetita verbis invenies II. 38. WESS.

12. 41. Στοχαζόμενοι τῆς συμμετρίας] Frequens id Nostro, ut cap. 9. 41. Explicatur a Porphyrio II. Abst. 4. τοῦ συμμετρῶν καὶ οὐκείων τῇ ὑποθέσει στοχαζόμενοι κατὰ δύναμιν. Eusebius, qui superiora exscripserat I. P. E. 7. addit de suo: Τεσσαῦτα μὲν ὁ δηλωθεὶς συγγραφεὺς, οὐδὲ μέγιστος ὀνόματος τοῦ Θεοῦ μνημονεύσας ἐν τῇ κοσμογονίᾳ, συντυχικὴν δέ τινα καὶ αὐτόματος ἐσρηγισάμενος τὴν τοῦ παντὸς διακόσμησιν. Bene profecto; mundi enim originem tanquam casu et sine providentia factam persequitur; quae eadem opinio philosophorum plerisque se probaverat, ut ex Plutarchi Stromat. libris Eusebius commemoravit, et Plato X. Leg. p. 889. B. WESS.

12. 47. Ἐῤοεσιν τῶν γραμμῶν] Hoc ut amplecterer, res ipsa et quae sequuntur, facile a me inpetrarunt. Rerum inventio in eandem cum regibus aetatem incidere potuit, et haud dubie incidit. Literarum usus recens est, quidquid obloquatur Plinius VII. II. N. 57. multoque recentior historicorum opera. Recte Macrob. II. Somn. Scipion. 10. Quis non hinc aestimet, inquit, mundum quandoque coepisse, nec longam retro eius aetatem? Cum abhinc ultra duo retro annorum millia de excellenti rerum gestarum memoria ne Graeca quidem exstet historia. Nam supra Ninum, a quo Semiramis secundum quosdam creditur procreata, nihil praeclarum in libros relatum est. Si enim ab initio, imo ante initium fuit mundus, ut philosophi volunt: cur per innumerabilium seriem saeculorum non fuerat cultus, quo nunc utimur, inventus? non literarum usus, quo solo memoriae fulcitur aeternitas? Habes εῤοεσιν γραμμῶν cap. 16. 69. quam ἡλικιωτίδα dixit, sicuti Plutarchus T. II. p. 554. A. τιμωρίαν ἡλικιωτίν, et T. I. p. 160. E. τῶν πράξεων καὶ τῶν βίων ἡλικιωτίδα ἱστορίαν. Solent quoque, ne qua hoc moretur, πράγματα et γράμματα exscriptorum negligentia permutari. Vid. Iulian. Garner. ad Basilii Epist. 117. et 226. p. 3-16. et Montfaucon. in Chrysost. Epist. 114. WESS.

12. 49. Καὶ τοῦτο συγχωρήσαι] Ita solet, veluti cap. 38. εἰ δέ τις καὶ συγχωρήσαι χιόνος εἶναι πληθους. et cap. 40. 78. et supra cap. 3. Quare et suo contentum esse iussi. WESS.

12. 51. Βίον ἤγουν] Has voculas ut a sententia prorsum alienas, removeto. RHOD.

13. 53. Ἐαυτοὺς αὐτόθρονας λέγοντες] Solo innatos, ἐγγενεῖς τῆς γῆρας. qua natalium gloria Athenienses sese venditabant. Isocrates Panegy. p. 65. ἀλλ' οὕτω καλῶς καὶ γνησιῶς

γεγόναμεν, ὥστ' ἐξ ἧσπερ ἔφρυμεν, ταύτην ἔχοντες ἅπαντα τὸν χρόνον διατελοῦμεν, ἀυτόχθονες ὄντες. Nec reticuit inanem hanc eorum iactantiam Cicero pro Flacco cap. 28. etsi nihil hac quidem parte inferiores illis videri vellent Indi, Aethiopes, Sicani, aliique. Vid. infr. II. 38. III. 2. V. 6. et Rittersh. in Orpiani II. Cyneg. 563. WESS.

13. 63. Οὐκ ἀρχαιοτέρους αὐτοὺς ἡγούμενοι] Respiciunt haec fratres Tzetzae, Isaac. in Lycophr. 149. Ioan. Chiliad. XII. 260. WESS.

13. 67. Ἐτερογενῆ προᾶξιν] Peregrinam et alius generis. Infr. XI. 20. ἡμεῖς δὲ ἀρκούντως διεληλυθότες περὶ τῶν κατὰ τὴν Εὐρώπην πραγμάτων, μεταβιβάσομεν τὴν διήγησιν ἐπὶ τὰς ἑτερογενεῖς προᾶξεις. Similiter XVI. 5. WESS.

13. 69. Ἀρχαιοτάται παρατηρήσεις] Vide I. 69. et Ciceron. I. N. D. I. cum nota Cl. Davisii. WESS. In antecedentibus Reiskius θεῶν τε γενέσεις αἱ πρώται ἐπάροξαι desiderabat: cuiusmodi sententiam qui expeteret mireris non ita maluisse haec constituere: κατὰ τὴν Αἴγυπτον θεῶν τε γενέσεις ἀρχαιοτάται ἐπάροξαι μυθολογοῦνται, αἱ τε τῶν ἕστων παρατηρήσεις εὐρῆσθαι λέγονται.

13. 73. Φασὶ τοίνυν Αἰγύπτιοι] Exscripsit haec Euseb. II. P. E. 1. Stolidam autem hanc Aegyptiorum gloriationem memorant scriptores, quibus testimonium denuntiarunt veteres Critici ad Apollon. Rh. IV. 262. Aristides T. III. p. 593. et Clemens Alex. Protrept. p. 3. Nec admodum dissimilia sunt argumenta, quibus pro sua e terra origine pugnant Aethiopes III. 2. Athenienses in Platon. Menex. pag. 237. E. et Indi apud Pausan. VIII. 29. WESS.

13. 76. Πολύγονον ὄντα] Conf. inf. c. 40. WESS.

13. 77. Τὴν τοῦ καλάμου ῥίζαν] Credo designare τῶν ἐν τοῖς ἔλεσι γενομένων τοὺς κανλοὺς καὶ ῥίζας, caules et radices palustris plantarum, quibus Aegyptios vesci adsuetos ait cap. 49. 80. Ceteroqui et in ea regione arundines, quas *sacchariferas* vocant, serebantur atque edebantur crudae, de quibus Pros. Alpinus III. Rer. Aegypt. 9. De loto et faba Aegyptia infr. cap. 34. WESS.

13. 79. Τὸ καλούμενον κόρσειον] Mirum sane praeterque opinionem accidit discrimen, quod *lotum* inter et *corsium* instituitur: est enim ipsa loti radix rotundiore figura et amplitudine mali cotonei. Theophrast. IV. H. Pl. 10. ἡ δὲ ῥίζα τοῦ λώτου καλεῖται μὲν ΚΟΡΣΙΟΝ. ἔστι δὲ στρογγύλη, τὸ μέγεθος ἡλίζον μῆλον κεδώνιον. Movit hoc Bodaeum a Stapel, ut *περσεῖον* hic scriptum fuisse suspicaretur: quam arborem cum Noster cap. 34. *Περσίαν* aut *Περσαῖαν* appellet, praetereaque Strabo XVII. p. 1178. D. in corsii descriptione multum a Theophrasto dissentiat, haud iniuria corrigendi hunc inpetum deinceps conpescuit. In Hesychio refingendo opera illi felicior processit;

nam quae Grammaticus in Κοροσίπιον scribit, modo Κοροσαίων in locum τοῦ Κερόσαίων substituas, huc pertinent. Vid. Bodaei Comment. p. 417. et Prosp. Alpini Diss. de Loto p. 83. et iuxta mecum agnosces de corsio nondum omnia ad liquidum esse perducta. WESS.

13. 82. Τεζμήριον περιῶνται γέρον] Quod schedae Coislin. et quae cum illis faciunt, addiderunt, natum est ex glossa, quam tanto cupidius inculcarunt, quoniam Diodoro haud prorsum displicuisse nosset. Sic c. 28. καὶ περιῶνται τῆς οὐκείωτης ταύτης γέρον ἀποδείξεις. et c. 96. V. 6. Utrumque coniunxit Lucian. sed alio ordine, μόνον τοῦτο εἰς ἀπόδειξιν τῆς ἀληθείας μέγα τεζμήριον τιθέμενοι Scrib. Hist. c. 40. Atticus apud Euseb. XV. P. E. 5. τεζμήριον δὲ ποιοῦνται τῆς γνώμης τοῦ ἀνδρός. WESS.

13. 83. Τὴν ἐν τῇ Θηβαΐδι χώραν] Hoc sequor; alterum claudicat. Clemens Alex. Protrept. p. 6. de Aegyptiis, οἱ καὶ πρότιν ταύτην ἀναγῶνται τὴν γῆν Θεοῦς τε καὶ ἀνθρώπων ἀνειρώσσοντες. Mures in Aegypto ex terra progigni, etsi Plutarchus T. II. p. 637. B. atque Aelianus II. H. A. 56. Nostro fere consentiant, nondum credimus. Conf. Voss. in Melam I. 9. 25. WESS.

13. 86. Διατετυπῶσθαι καὶ χαρίζειν] Crediderim legendum σαχαρίζειν. STEPH. καὶ χαρίζειν] Quamquam H. Stephanus σαχαρίζειν restituit, tamen pro spuris haec duo sunt habenda. Nam hystorologiam ineptam obtrudunt. prior enim motio est natura, quam saltatio. RHOD.

14. 98. Ἀρόμβρον κατὰ τὸ πλεῖστον] Recte addit posterius. Inferior enim Aegyptus magnam saepe coelestis aquae copiam accipit, cum superior exigua et rarius. Vid. Philon. Iud. I. Vit. M. p. 620. C. et Aristidem T. III. p. 567. et quos Ian. Broekhus. excitavit testes in Tibulli I. 8. 25. Vel sic tamen καὶ σεισμοῖς καὶ λοιμοῖς καὶ τοῖς ἐξ οὐρανοῦ κατακλυσμοῖς ἀνάλωτος ἢ χώρα, sicuti idem Aristid. p. 617. docet. Rationes autem, quibus hominum e terra fortuitam originem adstruunt, Philo diligenter examinavit de Mund. haud corrupt. p. 9-14. B. WESS.

14. 7. Κατὰ τὴν ἐπίκλυστον Αἴγυπτον] Pro ἐπίκλυστον reponendum videtur ἐπίκλυστον in margine, quod ad huius loci sensum magis facit. Alias torridam significaret. RHOD. Κατὰ τὴν ἐπίκλυστον Αἴγυπτον] Hoc vulgato, quod hinc ortum est, practuli. Strabo I. p. 56. de Aegypto: καὶ γὰρ αὐτὴ στενὴ τέ ἐστι καὶ μακρὰ καὶ ἐπίκλυστος· τὰ δὲ ἔξω τῆς ἐπίκλυστον ἔρημιά τε καὶ ἀνῆρα. Nostro c. 36. ἐπικλυσμένη χώρα. Solet ἐπικλύζειν, et quae ex eo originem trahunt, de Nilo, Aegyptum aquis suis inundante, tritum atque usitatum esse. Philostratus VI. Vit. A. I. ὃς ἐκ καταδούλων ἀρχόμενος, ἦν ἐπικλύζει, πᾶσαν

Ἀγρυπτον ἀπ' Αἰθιοπίων ἄγει· ubi Olcarii, quam illuvie sua conficit, nimium est. Νεῖλον ἐπίπλυσιν dat Aelianus II. H. A. 38. WESS.

14. 12. Καὶ πρὸς αὐτῇ συμφύη τῆ γῆ] Longe mollius hoc fluit, quam βώλω αὐτῇ συμφύη τῆς γῆς. Credo eiectam vocem ex superioribus esse repetitam, ubi recte κατὰ γένει τῆς βώλων. Non item in Achille Tatio III. p. 185. παντὸς δὲ βώλων χαλεπότερος βώλος Αἰγύπτιος. Vid. Bergl. ad Alciphr. III. Ep. 31. WESS.

14. 14. Τοὺς δ' οὖν κατ' Ἀγρυπτον] Habet Euseb. I. P. Ev. I. Lucianus de Dea Syr. c. 2. πρῶτοι μὲν ὄν ἀνθρώπων, τῶν ἡμεῖς ἴδμεν, Αἰγύπτιοι λέγονται Θεῶν τε ἐννοίην λαβεῖν, καὶ ἰσθ' εἰσασθαι, καὶ τεμένεια καὶ πανηγύριος ἀποδέξαι. Quae his Diodori gemina et simillima sunt. Adde Ammianum XXII. 16. quaeque illi H. Vales. adscripsit. WESS.

14. 21. Τὸν μὲν Ὅσιριν πολλὸς θαλαμῶν] Paulo distinctius Plutarch. T. II. p. 355. A. ἐπιτοὶ δὲ καὶ τοῖνομα διεκριμένονσι πολλὸς θαλαμῶν, ὡς τοῦ μὲν ΟΣ τὸ πολὺ· τοῦ δὲ ΠΙ τὸν ὄψθαμὸν Αἰγυπτία γλώττη γράζοντος. nam sic ea legenda sunt, quod non latuit viro Clariss. P. Ern. Jablonski in eruditiss. de terra Gosen Dissert. p. 80. qui et vocis originationem ex Coptorum sermone adfirmavit. WESS.

14. 24. Καὶ τὸν ποιητὴν λέγειν] Homerum Odysseae XII. v. 323. et alibi. Confer cum hoc loco, quae Plutarchus de Iside et Osiride prolixè disserit. Porro Deorum, quorum cum hic tum alibi mentionem facit Diodorus, historias, cum fabularum explicatione luculenta et pererudita, suppeditat Natalis Comes in libris Mythologiarum. RHOD.

14. 27. Τὸν Ὅσιριν Διόνυσον] Graecis Bacchus, qui Aegyptiorum sermone Osiris. Herodot. II. 144. Ὅσιρις δὲ ἐστὶ Διόνυσος κατ' Ἑλλάδα γλώσσαν· quam eandem rem cum pluribus probasset Plutarch. T. II. p. 364. D. addit: ὅτι μὲν οὖν ὁ αὐτὸς ἐστὶ Διονέσω, τίνα μᾶλλον ἢ σε γινώσκεις ὃ Κλέα δὴ προσήκον ἐστίν, ἀρχηγὸν μὲν οὖσαν ἐν Δελφοῖς τῶν Ουσιάδων, τοῖς δὲ Ὀσιριακοῖς καθωσιωμένην ἀπὸ πατρὸς καὶ μητρὸς; sic enim ea legi oportet; quod nec Xylandro, viro doctissimo, latuisse, Latina versio indicat. Alia, quamquam non probanda, dabit Ampl. Gis. Cuperi Harpocrat. p. 95. De Sirio, quod addunt, natum arbitror ex solis hoc titulo: quem Archilochus Σείριον, teste Hesychio appellavit. Schol. Oppian. III. Hal. 48. Σείριος οὐ μόνον ὁ ἥλιος, ἀλλὰ καὶ ὁ ἀστὴρ τοῦ ζυγός. Solem autem hi Theologi eundem ac Osirim censebant. De Eumolpo eiusque Bacchicis Io. Alb. Fabricius I. B. G. 6. WESS.

15. 33. Τοῖνεκά μιν καλέουσι] Macrobi. I. Satur. 18. ex Orphico adfert:

Τίχων ἀθέρα δῖον, ἀζίνητον πρὶν εἶντα,  
Ἐξανέγγρε θεοῖσιν ὥσαν κάλλιπτον ἰδέσθαι  
Ὅν δὴ νῦν καλέουσι Φάνητά τε καὶ Διόνυσον.

Eodem ex carmine videtur et hoc decerptum, longeque se melius habere ob praecedens *ξῆανέγηνε*. De Phanete vero, Orphico quodam Deo, nihil addam. Fecerunt abunde viri egregii P. Leopardus XII. Emend. 2. Th. Canterus I. Var. Lect. 26. et Rich. Bentley Ep. ad Ioan. Millium p. 3. WESS.

15. 34. *Καὶ τὸ ἔραμμα*] Et hunc locum P. Leopard. V. Em. 12. illustravit. Vere Synesius Encom. Calvit. p. 68. C. *Βακχίων γὰρ σὶδὲν οὕτως ὡς νεβρίς*. Unde Bacchus hinnuli pelle incinctus *νεβρῶν δοραῖς καταιπτὸς* Euripidi Hypsipyle apud Macrobi. I. Sat. 18. et *νεβριδοστόλος* Orpheo Hymn. p. 148. Et Bacchae omnes: *καὶ γὰρ νεβρίδας περικαθάπτονται καὶ θύσσους φροσοῦσι*, inquit Plutarch. T. II. p. 364. E. Quare Tiresias in Euripid. Bacch. 176. *θύσσους ἀνάπτει καὶ νεβρῶν δοραῖς ἔχειν* edicit. Atque hi quidem sacrorum caussa: Strabo Brachmanum aliquos in agris agere *ἐνημένους νεβρίδας* prodidit XV. p. 1047. B. ubi Casaub. *ἐνημένους* vel *καταιμένους* legit; ego *ἐνημένους*, ut Aristoph. Nub. 72. *διαθέραν ἐνημένους*. Philostr. Her. 15. *δοραῖς δὲ κάρδαλεων ἐνήπτο τοῖς ὤμοις*. WESS.

15. 35. *περιῆθθαι*] Quod libri quattuor praebent *διῆθθαι*, in eo ne quis *ἐνήθθαι* quaerat cavet infra p. 147. 38. scriptum in quibusdam *διέστησε* pro *περιέστησε* et 210. 16. *περιθρόουσας* pro *διαθρόουσας* et 349. 38. *περιίλθομεν* pro *διήλθομεν* et 369. 98. *δι'* pro *περὶ*, denique II. 645. 64. *περιβάλλων* pro *διαβάλλων*.

15. 37. *Κέρατα δ' ἀντῆ περιτιθέουσιν*] Isim bubulis cornibus ornatam instructamque Aegyptii fingeant et pingebant: Aelian. X. II. A. 27. *καὶ ἀντὴν δὲ τῆν Ἴσιν Αἰγύπτιοι βούζων καὶ πλάτωνται καὶ γράφουσι*. quod accepisse videtur ab Herodoto II. 41. Mercurium vero Plutarch. T. II. 358. D. *galeam, ex bubulo capite formatam, Isidi inposuisse* refert, *περιθεῖναι βούζων ἀντῆ χρόνος*. qua galea insignis est in fictili iuncula apud Io. Bapt. Casalium de Aegypt. Ritib. c. 21. quamque eo longe melius illustravit Gish. Cuperus Harpocr. p. 109. De bove Isidi sacro infr. I. 85. WESS.

15. 40. *Τούτους δὲ τοὺς θεοὺς ὑψίστανται*] Etsi Codd. aliqui in alia omnia eant, non dubito quin verum hoc sit: nam et mox *καὶ παρθένον ὑποστήσασθαι*, et *virginem eam arbitrari*. et c. 6. *καὶ ἄθθαστον ὑποστησάμενοι τὸν κόσμον* dixit. Quae sequuntur Euseb. inseruit III. P. Ev. 3. WESS.

15. 42. *Τομερέσιν ὄραϊς*] Vid. I. 26. WESS.

15. 46. *Φύσιν συμβάλλεσθαι πλείστην*] Hic πλείστον lego. Sed nescio quid scrupuli iniicit hyperbaton et enallage. Si scriptura omnino retinenda videatur, interpretatio haec efficitur: *Naturaeque plurimum ad generationem rerum omnium conferre hos Deos, alterum igneae et spiritualis (πνευματώδους), alteram humidae et siccae, utrumque simul aëriæ*. Sed iudicium esto penes eruditiores. RHOD. *Συμβάλλεσθαι πλείστα*] Coniurarunt Mss. in retinenda voce *πλείστην*. Ego tamen *πλείστα* propter

Euseb. scriptum Cod. quo usus est Fr. Vigerus, et quia Diodorus atque optimus quisque ita solent, recepi: sic enim brevi post, καὶ πολλὰ συμβάλλεσθαι πᾶσιν εἰς γένεσιν. et XI. 21. συνεβάλετο δὲ αὐτῷ καὶ τὸ αὐτόματον πρὸς τὴν ἐπινοίαν μεγάλη. II. 31. πλεῖστα δὲ πρὸς τὰς γένεσιν τῶν ἀνθρώπων συμβάλλεσθαι τούτους τοὺς ἀστέρας ἀγαθὰ τε καὶ κακὰ. quae his simillima id quoque, quod addi ad sensum oportet, indicant. Arius Didymus apud Euseb. XV. P. E. 15. καὶ πλεῖστα συμβάλλεσθαι πρὸς τὴν τῶν ὄλων διοίκησιν. Adde supra c. 2. WESS.

15. 52. Τὰ δὲ τούτων μέρη] Pendent haec, neque est in sequentibus verbum, quo referantur. Quod genus ἀναζιλούθου haud infrequens. Iosephus XII. A. I. 3. 3. τοὺς γὰρ Ἰουδαίους, ἐπ' Ἀτιόχου τοῦ μεγάλου βασιλείοντος, ἔτυχεν αὐτοὺς πολλὰ ταλαιπωρῆσαι. Pausan. VIII. 33. νῆσον δὲ ἄλλην καλουμένην Ἰερὸν, τὸνδε οὐκ ἦν χρόνον. ubi doctissimus Kuhn. quem et vide in Aelian. II. V. H. 13. et Perizon. atque infr. II. 52. WESS.

15. 61. Δία προσωροεῦσαι] Plutarch. T. II. p. 365. D. Δία μὲν γὰρ Αἰγύπτιοι τὸ πνεῦμα καλοῦσι. Sic quidem illi. Aliis aliud esse visus est: neque enim de Iove inter veteres conveniebat. Vid. Eustath. in Iliad. A. p. 20. WESS.

15. 67. Πατὴρ ἀνδρῶν] Iliad. VIII. v. 49. et plurimis alibi locis. RHOD.

16. 68. Ἥραιστον ὀνομάσαι] Gentis Aegyptiae sermone Phthas erat. Αἰγύπτιοι δὲ ὁμοίως πράξαντες, καὶ τὸ πῶρ ἰδίᾳ διαλέκτῳ ΦΘΑΣ καλέσαντες, ὃ ἐξηγρεῖται Ἥραιστος Homil. Clement. IX. 6. ubi plura Coteler. WESS.

16. 73. Δήμητρα καλεῖν] Nihil interest hoc malis an Δήμητρον, quamquam Nostro ita saepius placeat. Opportune Philo Iud. Mund. Opif. p. 30. C. μήτηρ δ' ὡς ζοῖζε καὶ ἡ γῆ, παρ' ὃ καὶ τοῖς πρώτοις ἔδοξεν αὐτὴν Δήμητρον καλεῖσαι, τὸ μητρὸς καὶ γῆς ὄνομα συνθεῖσιν. Lucret. V. 818. Quare etiam atque etiam maternum nomen adepta Terra tenet merito, quoniam genus ipsa creavit Humanum, atque animal prope certo tempore fudit Omne. Vid. infr. III. 62. WESS.

16. 78. Ὀνομάσαι — ὠκεανόν] In codice uno est non ὠκεανόν, sed ὠκέλην. at p. 22. habes ὠκεάμην. STEPH. Ὀκεανόν ὃ μεθερμηνεούμενον] Consule H. Stephani annotationem, qui Ὀκεάμην legendum censet. RHOD. Ὀκεάνην, ὃ μεθερμηνεούμενον] Sic scripsi ex c. 19. et propter Clarom. utriusque et Florent. Ὀκέλην, quod sine controversia ex altero ortum, etsi leviter vitiatum. Forte Pherecydes suum Ὀγῆρον inde extudit apud Clement. Alex. VI. Stromat. p. 741. et Origen. VI. in Cels. p. 664. A. A Pherecyde accepit Lycophron, studiosissimus tenebrarum sectator, Alexand. 241. WESS.

16. 82. Ὀκεανόν τε θεῶν] Iliad. XIV. v. 302. RHOD.

16. 83. Νομίζουσιν Ὀκεανόν εἶναι] Repetuntur haec

c. 19. et 96. Cuius opinionis occasionem arripuisse videntur ex Homero et veterum illis, quibus *Ὠκεανὸς* ingens fluvius fuit visus, sicuti docent Schol. in Euripid. Orest. 1377. Fr. autem Vigerus cur ad Euseb. suum hoc loco *πρὸς αὐτὴν καὶ τὰς τῶν θεῶν γενέσεις* maluerit, urgens caussa non erat. WESS.

16. 89. *Προσαγορεῖσθαι κασὶν Ἀθηναίων*] Aegyptiis *Νιτ* vel *Νιτθ*, ut in Platon. Timaeo p. 21. appellabatur. Durant eius vocis vestigia in nomine celeberrimae reginae *Nitocris*, quam Eratosthenes Chron. Euseb. p. 21. *Ἀθηναίων νικηφόρον* interpretabatur, et in *Πατερῶν*, Solonis in Aegypto familiari amico, apud Proclum in Tim. p. 31. De utroque in Remphah suo p. 74. Cl. Fr. lablonski. Mox *ἄρθρορον*, Minervae satis conveniens, quippe *ἀρθρόρον καὶ ῥη καὶ γάμων ἀμνήτω*, ob Codd. consensum verius censui: qua etiam de caussa impertanum illud *σινέθη*, quod inter *μυθολογηθῆναι* et *ταύτην γενέσθαι* locum occupaverat, delevi. Omnis enim haec oratio infinita est. WESS.

16. 95. *Τριτογένειων*] Alias nominis eius caussas habet III. 70. V. 72. Hanc inter alias produxit Tzetzes in Lycophr. 519. *ἢ ὅτι ἡ αὐτὴ ἐστὶ τῷ ἀέρι. Τρις γὰρ ὁ ἀῆρ γεννᾶται καὶ μετατρέπεται, ἄρι, θέρει, χειμῶνι· τὸ γὰρ παλαιῶν τριμερὴς ἦν ὁ χρόνος.* quae quod hinc sumta videantur, adscripsi. WESS.

16. 97. *Καὶ γλανκῶπιν*] Sollemnis illi apud Poëtam aliosque titulus. *Ἀγάμμα τῆς Ἀθηναίας γλανκῶς ἔχον τοὺς ὀφθαλμοὺς* in Vulcani fano Pausan. I. 14. vidit. Tu vero N. Heinsiam ad Ovid. II. A. A. 659. et T. Hemsterh. in Lucian. D. D. VIII. p. 227. WESS.

16. 1. *Τὴν πρόσσωπιν ἔχειν ἄγλανκον*] Repone ex Eusebio *ἔγγλανκον* pro *ἄγλανκον*. STEPH. *Ἐγγλανκον* legendum esse ipse contextus evincit. Etymologia sane erudita est Homerici epitheti *γλανκῶπις*. RHOD. *Τὴν πρόσσωπιν ἔχειν ἔγγλανκον*] Parvi viris egregiis et suum sibi habere iussi. Cornutus Nat. D. c. 20. haud dissimilia scripsit, *ἔνοι δέ μοι τοιαῦτα αὐτῆ*, agit de caesiis Minervae oculis, *παρισιάγεσθαι, διὰ τὸ τὸν ἀέρα γλανκὸν εἶναι*. WESS. Cl. Sam. Clarke *γλανκὸν* mavult ad Homeri II. A. 206. Mibi potior Eusebii auctoritas. Hesychium adde in *ἔγγλανκῶσαι*. IDEM. in Add.

16. 4. *Ἐν ἱερῶν ζώων μορφαῖς*] Nugacissima eorum haec commenta fusius persequitur I. 86. WESS.

16. 7. *Εἰς Αἴγυπτον παραβαλόντα*] Sic I. 44. *καθ' ἣν ἡμεῖς παραβαλόμεν εἰς Αἴγυπτον.* II. 1. *ἕσοι παραβαλόντες εἰς Αἴγυπτον.* et III. 11. alibique. Fuisse Poëtam in Aegypto signis quibusdam vincere conantur I. 97. Cautius profecto, quam qui regionis eius indigenam satis fidenter tradiderunt, reprehensi a L. Allatio Homer. Patr. c. 4. De Homeri vero his versibus longe prudentius sententiam dixit Plato II. Rep. p. 381. WESS.

17. 17. *Τετυχητότας τῆς ἀθανασίας*] Et haec digna Euseb. censuit, quae in H. P. E. I. adderet. Nihil autem intercessero sive tu *τετυχητότας* seu vulgatum probaveris. Solent ea pro librariorum arbitrio permutari: nam quod in Demosth. Midian. p. 361. καὶ πατριδος τετυχητως, id aliis *τετυχωως* videbatur scribendum; quam eandem discordiam habebimus III. 9. Crebrius tamen *τετυχωως* et *τετυχέναι* in hoc scriptore. Vid. I. 48. 57. IV. 16. V. 75. WESS.

17. 22. *Ἄμμωνα προσαγορευόμενον*] Aegyptiis Iupiter erat et dicebatur *Ἄμμων*. Herodot. II. 42. *Ἄμμων γὰρ Αἰγύπτιοι καλέουσι τὸν Δία*. Idem sacras nobis literas diversis locis adfirmare, abunde patefecit S. Bochartus I. Phal. 1. WESS.

17. 26. *Προῶτον Ἡμιστον βασιλεῦσαι*] Vulgatior ea fama fuit. *Φθῶς, ὃ ἐρμηνεύεται Ἡμιστος, οὗ τῷ ὀνόματι καὶ ὁ παρ' αὐτοῖς προῶτος βασιλεῦσας προσαγορεύεται* Homil. Clement. IX. 6. Huic, Nili filio, successorem et filium dat Solem Palaephatius in Chron. Paschal. p. 45. atque ex eo Suidas in *Ἠλιος*. WESS.

17. 32. *Ἄει τῆς ὕλης ἐπιβάλλειν*] Omissum pronomen τι neminem morabitur, quippe sollemne. Infra V. 46. καὶ τοῦτων οὐκ ἔστιν ἐξενεγκεῖν ἐκ τῆς νήσου. Aristoteles V. Politic. 4. οἱ δὲ ἐνέβαλον τῶν ἱερῶν χοιμῶτων. Synes. Encom. Calvit. p. 72. D. ὥστε ἂν τις τῶν πατριῶν παρακινῆ, ταχὺ πιεῖται τὸ κόνειον. Polybium non addo: ex eo exempla congescit Iac. Gronovius I. 42. WESS.

17. 38. *Ἐκ δὲ τοῦτων γενέσθαι*] Ex Iove et Iunone, qui propterea Osiridis et Isidis parentes c. 15.; secus Aegyptiorum illi, quibus hi quinque Saturno et Rhea progeniti videbantur. Plutarchus T. II. p. 429. F. καὶ τὴν Πέαν Αἰγύπτιοι μυθολογοῦσι πέντε θεοὺς τεκεῖν. et distinctius p. 355. D. ubi quinque ἐπιγεγενησθαι fuisse ait τῶν θεῶν γενεθλίους, et eos hoc ordine editos, prima die Osirin, secunda Apollinem, tum Typhonem, quarta Isin, ultima Venerem, qui dissensus hac in Theologia frequens. WESS.

17. 47. *Παῦσαι τῆς ἀλληλοφαγίας*] Probum videri posset τῆς ἀλλήλων σφαγῆς ob haec Isidis ad filium Horum de se maritoque, οὔτοι τὸ τῆς ἀλληλοφονίας ἔπαυσαν ἄγχιον, in Eclog. Io. Stobaei Phys. p. 124. Ego tamen in vulgato acquiesco, rei ipsi percommodo. Philo Iud. de Exsecrat. p. 931. D. τρέφονται ἐπ' ἀλληλοφαγίας οὐ μόνον ἐθνῶν καὶ μηδὲν προσηζόντων, ἀλλὰ καὶ τῶν οἰκισιότατων. et Noster XXXIV. Eclog. 2. p. 529. 40. ὥστε τῆς αὐτῶν ἀλληλοφαγίας μηδ' ὄλωσ γενέσθαι. Quae postrema, ut in dira fame, facta haud nego. sed primos homines sese ipsos vorasse, etsi satis eleganter Moschion in Stob. Ecl. Phys. p. 18. Βορὰὶ δὲ σαρκόβρωτες ἀλληλοκτόνους Παρεῖχον αὐτοῖς δαΐτας, nondum mihi persuadeo. WESS. παῦσαι Reiskius in παῦσαν mutabat, quod nexum membrorum non assequutus esset Diodoro non infrequentem. Sic enim ille XII. 4. p. 480. 4. ἐπέλυ-



βανε τοὺς Πέρσας κατακλιθεῖσθαι, βοηθεῖν μὲν μὴ δυναμένους, ἐγκαταλιπόντας δὲ τοὺς συμμάχους καταφρονηθήσεσθαι. XIX. 34. p. 343. 81. ἡ δὲ ἀπὸ στεφανομένη μὲν μίτρας ὑπὸ τῶν οἰκείων γενναίων, κεκοσμημένη δὲ διαπεπῶς ὡσπερ εἰς τινα γάμον προεπέμπετο ὑπὸ τῶν συγγενῶν. Quare mihi quidem sana videntur quae sollicitant editores XVIII. 35. p. 284. 85. ὁ Περδικκας εἰς πολλὴν ἀπορίαν ἐνέπιπτε, τῶν μὲν διαβεβηκότων οὐκ ἀξιωμαίων ὄντων, τῶν δ' ἐν τῷ πέραν μὴ δυναμένων βοηθεῖν τοῖς ἰδοῖς, προσέταξεν εἰς τοῦτίσω πόλιν ἀπιέναι πάντας. Eritque fortasse qui ne in his quidem V. 43. p. 365. 38. ὑπὸ ἄρχων ἀμπελοὶ τε πολλαὶ καὶ πάντοδαπαὶ πρὸς ἕψος ἀνηγμένα καὶ διαπελεγμένα ποικίλως ἠδεῖαν τὴν πρόσροψιν ἐποιοῦν, Stephani coniecturam αἰ πρὸς necessariam ducat.

18. 51. Τοῦ δὲ Ὀσίριδος ἐπιτροφισαμένου] Osiridi repertae fruges tribuuntur in Plutarchi T. II. p. 356. A. quarum partem sibi Isis vindicat Ecl. Io. Stobaei Phys. p. 124. Mox mihi visa est Codd. Reg. et M. scriptura melior. WESS.

18. 57. Ἐξ ἀρχαίων] Sic mox c. 21. et XIV. 45. οἷς ἐξ ἀρχαίων ἐπιβουλεύουσι. et XIII. 45. οἱ δὲ Σελινούντιοι ἐκ πολλῶν ὄντες ἄπειροι πολιορκίας. pro quibus Lucas A. A. XXIV. 10. ἐκ πολλῶν ἐτῶν ὄντι σε κοιτὴν τῷ ἔθνεϊ. et Noster XIX. 22. τῆς πόλεως γεγενημένης εὐδαίμονος ἐκ πολλῶν χρόνων. Fuisse autem in veteri more positum, ut Deos Deasque oblati frugibus venerarentur, docet Porphyrius IV. Abst. A. 22. WESS.

18. 58. Θέντας τοὺς ἀνθρώπους] In versione ἀναθέντας expressi, quod ad ritus sacrorum magis quadret. RHOD. Nihil contra Codd. auctoritatem demuto: sive enim humi positos velis, seu, quod et ego malim, Isidi sacros manipulos, res bene habebit; nam et θέσθαι de hoc genere haud invisitatum. Apollodorus i. Florileg. 3. p. 7. Τίς θετο μαρμαίροντα βούρξια; sicuti neque Latinorum ponere. Vid. Munker. Hygin. Fab. 3. et A. van Staveren Nepot. Pausan. 1. De planetu in sacris Isidis nihil addo. Habet egregia Lactantius I. Div. Inst. 21. et Iac. Gronov. in Herodot. II. 61. WESS.

18. 62. Καὶ τοῖς Ἰσείοις] Hoc verius, recurritque I. 87. quamquam sollempnis paene horum permutatio, uti Ἰσίον et Ἰσείον in Heliodori L. VII. p. 314. et 320. Atque haec est πανήγυρις, quam Tithorenses Isidis in honorem more Aegyptio bis quotannis, vere atque autumnō, magno apparatu celebrabant, teste Pausan. X. 32. nec multum diversa ea videtur, cuius pompam pompaeque instrumenta describit Apuleius X. Metamorph. p. 261. Graeci, ut multa alia, Cerealem pompam, et Calathum, sollempne eius ferulum, spicis frugibusque refertum, monstrante Melampode apud Clement. Alex. Protrept. p. 12. et infr. I. 97. aut Danaïdibus, seu visum Herodoto I. 171. hinc accipere. Indidem et Hebraeos primitiarum sollempnia abstulisse, etsi omnis in hoc sit, difficile

Io. Spencerus III, Leg. Hebr. 9. p. 894. omnibus persuadebit. WESS.

18. 65. Θεῖναι δέ φασι καὶ νόμους] Hinc ipsa de se et Osiride ad filium Horum, οἷτοι πρώτοι δείξαντες δικαστήρια, εὐνομίας τὰ σύμπαντα καὶ δικαιοσύνης ἐλήρωσαν· οἷτοι δεξιᾶς καὶ πίστεως ἀρχηγέται γενόμενοι καὶ τὸν μέγιστον θεὸν ὄρον εἰσηγάγοντο εἰς τὸν βίον, in Eclog. Phys. Io. Stobaei p. 124. Quae legum latarum et iuris inter homines constituti caussa fuit, cur deinceps ἸΣΙΔΙ ΔΙΚΑΙΟΣΥΝΗ, ut in lapide Reinesiano Clas. I. CXXXV. sacra sint facta. WESS.

18. 69. Τὴν Δίμητραν θεσμοφόρον] Legitur et Ἰσιν pro Δίμητραν. Quanquam autem Cererem, non Isin, appellari θεσμοφόρον, id est legiferam Virgilio, et θεσμοφόρια non Isidis, sed Cereris dici sacra constat: referenda tamen est haec lectio Ἰσιν ad id quod paulo ante dixit, καὶ τὸν μὲν Ὅσιριν μεθερμηνεύμενον εἶναι Διώνυσιν, τὴν δὲ Ἰσιν ἔγγιστά πως Δίμητραν. STEPH. Τὴν Δίμητραν] Hoc magis placuit quam Ἰσιν, quia Graecis usitatus. Vide L. Gyraldi Syntagma XIV. de Cerere in Historia Deorum. RHOD. Bene viri docti. Etsi eadem Isis ac Ceres, non illo tamen nomine antiquissimis Graecis culta cognitaque fuit. Diodorus quid voluerit, ipse significat V. 68. λέγονσι δέ τινες ὅτι καὶ νόμους εἰσηγήσατο, καθ' οὗς ἀλλήλοις τὸ δίκαιον δίδοναι συνειδίθθησαν ἄνθρωποι, καὶ τὴν παραδοῦσαν αὐτοῖς θεὸν ἀπὸ τούτων ΘΕΣΜΟΦΟΡΟΝ προσηγόρευσαν. Gruterus Thes. p. CCCIX. 1. habet ΜΕΓΑΛΗΝ ΘΕΑΝ ΘΕΣΜΟΦΟΡΟΝ ΔΗΜΗΤΡΑ. WESS.

18. 71. Κτίσαι δέ φασι τοὺς περὶ τὸν Ὅσιριν] Synesius I. Provid. p. 94. B. et II. p. 117. C. urbem hanc Osiridi priorem facit. Nostro adsentiantur Stephan. Λύσπολις et Schol. Iliad. I. 383. WESS.

18. 79. Περὶ οὗ τὰ κατὰ μέρος] Infra I. 45. WESS.

18. 80. Ἰδρῆσασθαι καὶ ἱερὸν] Distinguunt ἱερὸν et ναοὺς, et posteriore faua, priore ipsum locum sive τέμενος, in quo aedificatum id templum, designant, uti IV. 85. Vide Cl. Duker. in Thucyd. IV. 90. Bene ergo personata Isis τεμένη, inquit, προγόνοισ θεοῖς καὶ θυσίαις καθιέρωσαν, in Ecl. Phys. Stob. p. 124. Tametsi autem magnae olim opes Aegyptiorum, putem hos ναοὺς χρυσοῦς parvas fuisse aediculas, sicuti I. 97. XX. 14. et Artemidor. IV. 33. Alia O. Borrichius, sed quae non placent, Hermet. c. 13. p. 61. WESS.

19. 90. Χαλκουργείων εἶρεθέντων] Aeris aurique metalla, ut II. 52. μέταλλα χαλκοῦ καὶ χρυσοῦ I. 33. χαλκουργὰ μέταλλα Dioscoridi V. 106. Hinc in haec metalla depressi, οἱ ἐργαζόμενοι τὰ χαλκουργεῖα V. 36. Confer III. 12. WESS.

19. 92. Φιλοτήμως ἐξημερῶσαι τὴν χώραν] Sic II. 34. de Zarina τῆς δὲ χώρας πολλὴν ἐξημερῶσαι, καὶ πόλεις οὐκ ὀλίγας

πίσαι. illa enim magnam Scythiae partem ad mitiorem cultum traduxisse fertur. et c. 40. καὶ γιλοποροῦντες ἐξημερώσαι τὴν Ἰνδιάνην, interfectis feris, quae eam infestant. Herodotus I. 126. πάντη τοῦτόν σφι τὸν χρόνον προσέειπε ἐξημερώσαι, silvescentem et spinis horrentem. Libanius T. II. p. 124. D. πρῶτον μὲν χρόνον ἐξηργιωμένον ἐπὶ Θράκις, πλεῖστον ὅσον ἡμέρωσε, τοὺς γεωργήσαντας παρυσχίων. Dicitur et Hercules, monstrorum domitor, ἐξημερώσαι γαῖαν Euripidi Herc. F. 20. et Alexander ἐξημερώσαι τὴν Ἀσίαν Plutarcho T. II. p. 328. D. WESS.

19. 95. Φιλογεωργὸν τὸν Ὀσίριν] Tibullus I. 8. 29.

*Primus aratra manu solerti fecit Osiris,*

*Et teneram ferro sollicitavit humum.*

*Primus inexpertae commisit semina terrae,*

*Pomaque non notis legit ab arboribus.*

*Hic docuit teneram palis adiungere vitem,*

*Hic viridem dura caedere falce comam.*

ubi Ian. Broekhuis., Diolori haud oblitum, vide. WESS.

19. 96. Τῆς εὐδαίμονος Ἀραβίας ἐν Νύσῃ] Haec parum respondent poetae versibus, qui sequuntur. Si Nysa prope Nilum, quomodo in Arabia felice? Prudentius Νύσαν τῆς Ἀραβίας III. 61. et τὴν κατ' Ἀραβίαν Νύσαν III. 65. appellat: at mox c. 19. κατ' Αἴγυπτον et IV. 2. μετὰξὺ Φουρίνης καὶ Νεῖλον collocat, parum quoque commode. Herodot. II. 146. in Aethiopiam transfert. Adeo sibi constant fabulae. Vid. virum doctiss. in Marmor. Oxon. p. 102. Νύσαν autem et Νύσσαν scribunt, sed si Διώνσος, ut IV. 2. etiam censet, hinc dictus est, prior scriptura potior erit. Conf. Etymologum in Διώνσος, et, si Arabicam vocis originem desideras, Ed. Pokok. Spec. Hist. Arab. p. 106. WESS.

19. I. Ἐν τοῖς ἤμυροις] Hymnorum et hic et III. 65. IV. 2. Homerum facit parentem, ut Io. Alb. Fabric. II. B. G. 2. 4. commonefecit. Habet et Schol. Apollon. Rhod. II. 1215. hos versus, sed levi cum discrimine, de quo III. 65. dicitur: quod eos autem Herodoro, cuius Ἀστρονομικὰ et libri περὶ Ἱστορίας ex his Scholiis ac Stephano noti sunt, tribuit, eius ego culpae immunem puto; verba enim hominis sunt defecta, nec posteriora prioribus cohaerent; ut excidisse videatur poetae, cui versus debentur, nomen. WESS. Mox recte monet Rhodom. „*Πρὸ ὅτε, ὅτι*“.

19. 6. Πρῶτον οἴνω χορήσασθαι] Atqui nullae erant in Aegypto vites, proptereaque incolae aut vino ex hordeo aut aliunde importato utebantur, si fides Herodoto II. 77. et III. 6. Neque reges id ante Psammeticum bibebant, natum, uti ferebant, ex eorum sanguine, qui Deos olim pessimo ausu oppugnant, docente Plutarcho T. II. p. 355. B. Sed vitem regioni non plane defuisse indicant querelae Iudaeorum Numeror. XX. 5. ut de Strabone XVII. p. 1163. B. Plinio XIV. 7. et Athen. I. p. 33. habitum provinciae, quo sua erat aetate, spectantibus, ac de voce ἕρπις, qua

*Αλυπτιστι ὁ οἶνος*, testibus Eustathio et Tzetze in Lycophr. 579. taceam. *Συγχομιδὴ οἶνον*, qua de mox, est ipsa vindemia, uti *συγχομιδὴ καρπῶν* messis sive frugum in horrea collectio Basilio M. T. H. p. 48. C. et Nostro III. 63. XIX. 65. Conf. Cl. Wasse in Thueydid. III. 15. WESS.

19. 9. *Διαφόρῳ φύσει κεχορηγημένον*] Euseb. *κεχορημένον*. sed *κεχορηγημένον* usurpat et alibi Diodorus ut hic. STEPH. *Διαφόρῳ φύσει κεχορηγημένον*] Unice hoc verum: nec dissentit Euseb. II. P. E. I. Suam locutionem tuetur ipse IV. 68. ubi Daphne, Tiresiae filia, *φύσει θαναμαστῆ κεχορηγημένη*. et c. 86. Daphnis *φύσει διαφόρῳ κεχορηγημένος*. iterum XV. 39. Epaminondas *φρυσικοῖς προτεροῦμασι κεχορηγημένος*. Accedunt Diodoro Aristot. VII. Polit. I. ὁ μετὰ ἀρετῆς *κεχορηγημένος*: quod iure praeferunt vulgato *κεχορηγημένης* viri docti; et Strabo III. p. 216. C. *τοσοῦτοις δὲ τῆς προσειρημένης χάρας ἀγαθοῖς κεχορηγημένης*, ubi prave vulgo *κεχορηγημένοις*. WESS.

19. 12. *Ὑπὸ γὰρ τοῦτου*] De Mercurio, qui Aegyptiis *Thot*, paria Plato Phileb. p. 18. B. C. et Phaedr. p. 274. C. D. Plutarch. T. H. p. 738. E. Cicero III. N. D. 21. ubi Davis. cui adde Io. Alb. Fabric. I. B. G. 12. WESS.

19. 18. *Καὶ παλαιστρας ἐδρετῆν*] Miscet Diodorus, momente Io. Marshamo Canon. Chron. p. 36. Mercurium Aegyptium et Graecum; hic palaestrae exercitationes invenit infr. V. 75. non ille: alioqui et Aegyptiae iuventuti consuetudo fuisset, palaestrae se dedere; quam illis aufert I. 81. Haud scio tamen an excusari poterit eo colore, quo uni Mercurio omnium artium origo adscribitur, quippe *τῷ πατρὶ τῶν λόγων* Aelian. X. H. A. 29. et *λόγον δεσπότη καὶ ἐργάτη τέχνης ἀπάσις* Galen. princ. Protrept. Adde O. Borrichii Hermet. c. 1. et 2. WESS.

20. 20. *Λύραν τε ἐδρεῖν*] Pro *λύραν τε ἐδρεῖν, ἣν ποιῆσαι τρίχορδον*, legitur etiam *λύραν τε νευρίην ποιῆσαι τρίχορδον*. sed mihi persuadeo hanc lectionem ex illa fuisse depravatam. STEPH. Alias *λύραν τε νευρίην ποιῆσαι*. Quod tamen repudiandum videtur. RHOD. Numerum chordarum veteris lyrae plerique ampliorem faciunt et *ἐπάχορδον*. Homer. Hym. Merc. 51. Eratosth. Catast. 24. Lucian. D. D. VII. 4. atque alii. Lyram tamen *τρίχορδον* habent Etymol. *Ἀσιάτις* et Stephan. *Ἀσία*, numique Lilybaetanorum Tab. XCIV. Parutae, de quibus Ill. Ezech. Spanhem. in Callim. H. Del. 253. p. 467. et Io. Alb. Fabric. I. B. Gr. 12. Iam verum si esset, antiquissimo aevo lini usum loco chordarum in lyra obtinuisse, uti censent Critici in Iliad. Σ, 570. prorsus inepta foret eorum Codd. scriptura, qui *νευρίην* ostendunt. Verum longe diversa Aegyptii docent in Plutarchi T. H. p. 373. C. *καὶ τὸν Ἑομῆν μυθολογοῦσιν, ἐξελόντα τοῦ Τυγῶνος τὰ νεῦρα, χορδαῖς χρῆσασθαι*. Quare haud multum absum ab ea lectione probanda. WESS.

20. 26. [Ἱερογραμματεῖα] Pro hac lectione vel hic locus Luciani facit circa *Μακροβίων* principium, καὶ γένη δὲ ὅλα μακρόβια ἱστορεῖται διὰ τὴν διαίταν· ὡσπερ Αἰγυπτίων οἱ καλούμενοι ἱερογραμματεῖς, Ἀσσυρίων δὲ καὶ Ἀράβων οἱ ἐξηγηταὶ τῶν μύθων, Ἰνδῶν δὲ οἱ καλούμενοι Βραχυμάρες. Sed et ipse Diodorus in alio huius libri loco (I. 70.) scribit ὁ μὲν ἱερογραμματεῖς παραγίνωσκε τινὰς συμβουλίας καὶ πράξεις συμφερούσας ἐκ τῶν ἱερῶν βίβλων. Item in alio (I. 87.) διόπερ καὶ τοὺς ἱερογραμματεῖς φρεῖν φρονιζοῦν ῥάμμα καὶ πτερόν ἱέρακος ἐπὶ τῆς κεφαλῆς. STEPH. Aegyptiorum ἱερογραμματεῖς sive γραμματεῖς ἱεροὶ Aelian. XI. H. A. 10. notissimi sunt, eorumque numero Iannes et Iambres a Numenio inseruntur in Euseb. IX. P. E. 8. De Mercurio dubites, quem γραμματεῖα Saturni, qui Osiridis aut pater aut avus, Sanchuniathon facit Euseb. I. P. E. 10. p. 36. Teneat tamen honoris hunc gradum τῶν ἱερογλυφικῶν conditor apud Clement. Alex. VI. Strom. p. 757. WESS.

20. 30. [Ὡσπερ εὐεργετικὸν ὄντα] Pro εὐεργετικὸν invenitur etiam scriptum εὐρετικόν· quae lectio margini adscripta non fuit, quod ipse Diodorus tanquam digito eam quam sequi debeamus ostendat. Subiungit enim statim, διὰ τὸ μέγεθος τῆς εὐεργεσίας. et pag. seq. ὡς θεὸν ἀποδεχομένου αὐτὸν διὰ τὰς εὐεργεσίας. Sed et p. 12. legimus, τέλος δὲ τὸν Ὅσιριν πῦσαν τὴν οἰκουμένην ἐπελθόντα, τὸν κοινὸν βίον τοῖς ἡμερωτάτοις καρποῖς εὐεργετῆσαι. Nec vero Diodorus in hoc de quo nunc agitur loco exponere vult ut invenerit Osiris ad victum pertinentia, sed ut iam inventa docere totum orbem, atque ita de eo bene mereri, ac beneficentiae laudem adipisci in animo habuerit. STEPH. Assentior H. Stephano. Erat inter Osiridis honoris titulos, ut εὐεργέτης audiret: Plut. T. II. p. 368. ὁ γὰρ Ὅσιρις ἀγαθοποιός. τὸ δ' ἕτερον ὄνομα τοῦ θεοῦ τὸ ΟΜΦΙΝ εὐεργέτην ὁ Ἐρμαῖός γρησι δηλοῦν ἐρημηρέμενον. Fuit ille quidem πρὸς πᾶν χρήσιμος εὐεργετικός, uti de Baccho III. 70. Sed ea de re c. 14. et 15. Librariis, quod levi discrimine εὐεργετικός et εὐρετικός distent, eas voces permutare solemne est, uti I. 25. WESS.

20. 36. Τιμῶν ἀθανάτων τεύξεται] Eadem haec IV. 1. Sunt τιμαὶ ἀθάνατοι, quae Diis immortalibus tribuuntur. De Hespero III. 60. διὰ δὲ τὴν ἀρετὴν αὐτοῦ τὸ πάθος τὰ πλήθη ἐλείψαντα τιμὰς ἀθανάτους ἀπορεῖμαι. et de Baccho Ariadnen consecrante IV. 62. διὰ τὴν φιλοστοργίαν ἀθανάτων καταξιώσαι τιμῶν. et mox de Iside c. 22. deque Atlante III. 56. Aliter Appian. Alex. II. B. C. 891. καὶ τιμὰς αὐτῷ τὰς πάλαι δεδομένας ἀθανάτους διαμενεῖν· honores enim, Caesari decretos, perpetuos esse debere Antonius censet. Quam autem διαίτην ἡμερον paulo ante Diodorus vocavit, ea ἡμερος τροφή Athen. III. 2. quia frugibus inventis tandem glandibus vesci desierunt: atque hoc in-

itium τοῦ καθαρῆίου sive ἀλληλεσμένον βίον, de qua egregie Is. Casaub. in Athen. XIV. 12. WESS.

20. 48. Καὶ θανατούμενον ἐκ ἀνδρείᾳ] Non morer Codd. Co. et Cl. 2. auctoritate, ut a vulgato recedam: Hercules enim ἐγένετο ἡρώη τε σώματος πολὺν προέχων τῶν ἄλλων ἀπάντων, καὶ ψυχῆς λαμπρότητι περιβόητος IV. 10. Quare et eius aemulus Nicostratus τῆ τοῦ σώματος ἡρώη διαφέρων ἐμιμῆτο τὸν Ἡρακλέα XIV. 44. et Coragus et Diochirrus τῆ τοῦ σώματος ἡρώη καὶ τῆ τῆς ἀλκῆς ὑπεροχῆ θανατούμενοι XVII. 100. Conf. XV. 69. WESS.

20. 50. Πρὸς Φοινίκην κεκλιμένων] Potius hoc visum ob τόπους τοὺς πρὸς ἄρκτην κεκλιμένους I. 27. et τοὺς πρὸς ἐσπέραν κεκλιμένους V. 79. Sunt ἐπιμεληταὶ praefecti regionum et euratores, ἐπιμελησόμενοι τῆς γῆρας, ut cap. seq. Plura Ezech. Spanhem. Dis. IX. P. N. p. 714. WESS.

21. 54. Καὶ τὸν ἀδελαφόν] Horus est Aegyptiorum. Aelian. X. H. A. 14. de Apolline, cui accipiter apud Aegyptios sacratus, καὶ τὸν μὲν θεὸν Ὄρον καλοῦσι τῆ γωνῆ τῆ σφετέρᾳ. Vid. infra I. 25. WESS.

21. 60. Φυτὸν Ὀσίριδος] Eadem haec Plutarch. T. II. p. 365. D. WESS.

21. 65. Τὴν δάφνην προσάψαντας] Tribuisse ceu auctori aut repertori. Sic III. 63. τὴν περὶ τὸν οἶνον πραγματείαν συμφώνως αὐτῷ προσάπτουσι. et V. 73. Ἀθηναῖοι δὲ προσάπτουσι τὴν τε τῶν ἐλαιῶν ἡμέρωσιν. Adde V. 73. De arboribus in tutela Deorum Phaedrus III. 17. WESS.

21. 68. Ἄνουβιν τε καὶ Μακεδόνα] Anubin Osiridis F. habet et Plutarch. T. II. p. 356. F. cum Nostro tamen dissentiens. Macedoni alius pater fuit, et Iupiter quidem ex Hesiodi et Steph. Μακεδονία, ex Aeliani vero X. H. A. 48. sententia Lycaon, Emathiae rex. Credo Aegyptios post Lagidarum imperium Macedonem sibi vindicasse. WESS.

21. 71. Περιθέσθαι ζυνῆν] Galeam ex pelle canina, quae olim in frequenti cum esset usu, ζυνῆ, et ζυνῆ, post deinde quamvis galeam signavit. Auctor Vit. Homer. p. 293. ἡ μὲν γὰρ περιζεφθαλαία κέκλιται ζυνῆ παρ' αὐτῷ, ἐπεὶ ἐκ δέρματος ζυνὸς γενέσθαι αὐτῆν ἔθος ἔν. quibus similia Eustath. in Homer. p. 421. Hinc Anubis latrator ζυνολόσωπος Lucian. D. M. VII. 2. et infr. I. 87. WESS.

21. 72. Ἄζον προτομήν] Pellem lupi caput et rictum exhibentem. Ἄζον στόματος τὸ χάσμα σκέπειν τὴν κεφαλήν, ὥσπερ ἀνδρὸς ὀλλίτου χόρατος, quo caput magno suo malo texerat Dorcon in Longi Pastor. I. p. 19. De Chimaera Apollodor. II. 3. 1. εἶχε δὲ προτομήν μὲν λέοντος. Ceteroqui expressae imagines umbilico tenus, ut προτομαὶ Καίσαρος Ioseph. XVIII. A. I. 3. 1. Plura I. 96. WESS.

21. 78. Ἐπὶ τῶν ἐγχωρίων Χέμμιν ἢ Χέμμω] Verba haec Χέμμιν ἢ de more inclusa sunt notis (*loquitur de sua editione.*) ut quae in quibusdam tantum sint exemplaribus. Mallem tamen Χέμμιν, ut et apud Herodotum (II. 91.) legitur, ἔστι καὶ Χέμμιν πόλις μεγάλη νομοῦ τοῦ Θηβαϊκοῦ, ἐγγὺς τῆς Νέας πόλεως. Apud eundem (II. 156.) vero est insulae nomen, quam et Χέμμιν ab Hecataeo dictam tradit Stephanus. A Valla autem *Echemmis* appellata fuit in interpretatione huius loci Herodoti, νῆσος ἢ Χέμμιν καλεομένη. Coniunxit enim ἢ cum nomine Χέμμιν tanquam eius primam syllabam, quum sit articulus. STEPH. Χέμμιν] Hoc ut retineamus persuadet Herodoti auctoritas, quem etiam Stephanus in notatione huius urbis citat. Heliodorus insuper (II. Hist. Aeth. p. 89. et 93.) idem nomen usurpat. RHOD. Ἐπὶ τῶν ἐγχωρίων Χέμμω] Hoc malui. Χέμμιν typus et forma nominis est Graeca, Χέμμω Aegyptia, quam se sequi satis liquido indicat. Sic Κοπτὸς, quae Κοπτὸς ceteris, Plut. T. II. p. 356. D. Αἰουτὸς, Κυρὸ Euseb. in Esai. XXX. p. 475. B. Ἀρζὸ T. I. Mon. Gr. Coteler. p. 404. Ἀρτιρὸ Moscho Prat. Spirit. c. 73. Conf. Itin. Anton. p. 166. WESS.

21. 81. Πάγουρα] Comitem et socium expeditionis Bacchi Maronem, ἕνα τῶν μετὰ Λιονέσον τὰς στρατείας πεποιημένων, habet Athen. I. 25. Genus hominis dubium est. Diodorus Aegyptium facit, Homerus Olys. I. 297. Evanthis F., Euripides Cyclop. 145. Bacchi. Nam quod Gottf. Olearius ad Philostr. Heroic. p. 651. rogat, *Bacchine itaque filius? Ita est; nam Evanthes, pater Maronis, Bacchi est ex Ariadne. Unde non Βάχρον, sed Βαχρόν παῖς dicitur apud Euripidem:* id equidem factum nollem. Ulysses non Bacchi nepotem, sed plane filium perhibet: καὶ μὴν Πάγουρα μοι παῖρ' ἔδωκε, παῖς θεῶν. et mox ὁ Βαχρόν παῖς. ubi ὁ Βάχριος ipse Bacchus est, sicuti vers. 9. 38. 155. Solet enim Βάχριος δεσπότης, Βάχριος θεός, et sine illis substantivis Βάχριος et Βάχριος dici, ut bene Kuster. in Comici Thesmophor. 997. De Triptolemo V. 68. WESS.

21. 88. Μέγχι τῆς εἰς οἶνον ἀραζομυδῆς] Huiusmodi morem respicit Val. Flaccus I. 378.

*Tectus et Eurytion servato colla capillo,*

*Quem pater Aonius reducem tondebit ad aras.*

quos versus Diodori verbis illustrat Had. Turneb. XXII. Adv. 28. Usus iisdem est Io. Spencer. III. Leg. Hebr. VI. p. 856. sed ut Aegyptiorum consuetudines Iudaeis impingat. Alius de coma supersticiosior ritus describitur I. 83. WESS.

22. 89. Περὶ τῆν Αἰθιοπίαν] At Eusebius ita, ὅτι δὲ τῶ Πανὶ περὶ τῆν Ταφόσιον. STEPH. Unde Ταφόσιον Euseb. acceperit, haud temere finiverim. Id scio, prorsus hoc loco esse ineptam. Iter Osiridis secundum flumen in Aethiopiam describitur, a quo longissime *Taphosiris* aberat, unius diei itinere ab Alexandria in Africam versus posita, teste Procopio VI. Aedif. Justin. I.

Praeterea nomen ab Osiridis tumulo est naeta, quem sane vivus vidensque haud invisit. Dixi plura in Anton. Itiner. p. 73. WESS.

22. 91. Φιλογέλωτά τε] Bacchum Osiridi et hac parte similem. φιλογέλωτα, et comites eius φιλογέλωτας Iulian. Caesar. et Dio Chrysost. Orat. XXXII. p. 379. C. appellant. Osiris autem non Musicae tantum studiosus sed et egregie peritus fuit, siquidem tubae, fistulae obliquae et πολυθρόγγον novum genus primus invenerit, quod ex Athenaeo, Polluce et Eustath. ostendit Ampl. Cuper. Harpocrat. p. 142. Commode vero Tibullus I. 8. 43.

*Non tibi sunt tristes curae, nec vultus, Osiri:*

*Sed chorus et cantus et levis aptus amor.* WESS.

22. 96. Ἄφ' οὐ καὶ Μουσηγγέτην] Nihil magis obvium hoc eius titulo. Vid. Strabon. X. p. 717. Plutarch. T. II. p. 743. C. Aristid. T. I. p. 4. et 51. Pausan. Attic. 7. Heliodor. II. p. 108. WESS.

22. 99. Οὐ γὰρ πολεμιζὸν εἶναι] Consentit Plutarch. T. II. p. 356. A. WESS.

22. 5. Τοὺς φόρους εἰσπραξομένους] Parum referet, simplexne an compositum eligas; utrumque de pecunia, quae exigitur, tritum. Prius habet XII. 28. κολάσας τοὺς αἰτίους, ἐπράξατο τοὺς Σαμίους τὰς γεγενημένας εἰς τὴν πολιορκίαν δαπάνας. et XIII. 40. καὶ χρήματα πράξάμενοι τοὺς Κυζικηνούς. Posterius in Excerpt. Valesii p. 266. ἐπιτραπείς εἰς ὁμότητα καὶ πλεονεξίαν, εἰσπράττετο τοὺς πολιτικούς χρήματα. WESS.

22. 6. Κατὰ τὴν τοῦ κενὸς τοῦ Σειρίου ἄστρου ἐπιτολήν] Solet κατὰ τὴν τοῦ κενὸς ἐπιτολήν XVII. 7. περὶ κενὸς ἐπιτολὰς XIX. 18. κατὰ τὴν τοῦ Σειρίου ἄστρου ἐπιτολήν IV. 84. tempus, quo canicula oritur, appellare: quod posterius cum Codd. Vat. et uterque Clar. probent, cur ego improbem? Non ignoro Oppiani III. Cyneg. 323. καὶ κίνα Σείριον οἶδε, καὶ ἀντέλλοντα φοβεῖται. sed id huic dissimile. Recte Tibullus I. 8. 21.

*Qualis et arentes cum findit Sirius agros,*

*Fertilis aestiva Nilus abundet aqua.* WESS.

22. 8. Ραγένητα κατακλύσαι πολλὴν τῆς Αἰγύπτου] Haud male vertit Rhodoman. Fluctuum est fluviorumque, quando incitatore inpetu ingruunt et in aggeres arietant. Τοῦ μὲν κλύδωνος ὀγγυμένον ταχύτερον, ἐκινδύνεον ἀντανδρα τὰ σκάφη συγκλυσθῆναι XX. 75. Alciphron I. Epist. I. τῶν νεμάτων τὰ μὲν — τὰ δὲ εἰσω ἀροισοῦντα ἐρρήγγυτο. ubi Doctiss. Bergler. Diodori haud est oblitus. Nilus hoc si qua esset ingenio, sequebatur κατακλυσμοῦ φορὰ, τοῦ ποταμοῦ ταῖς πλημμύραις παραρρήξαντος τὸ χῶμα, Philo Iud. de Somniis p. 1125. B. WESS.

22. 14. Τὸν μὲν ποταμὸν Ἀετὸν] Agroetas XIII. Σκυθιζῶν in Schol. Apollon. II. 1253. δαπανᾶσθαι φησὶ τὸ ἵπασθαι Προμηθεῖος δόξαι ἐπὶ τοῦ αἰετοῦ, διὰ τὸ τὴν κρατίστην τοῦ Προμηθεῖος χῶρον τὸν ποταμὸν τὸν καλούμενον αἰτὸν φθείρειν



ἦμαρ δὲ παρὰ πολλοῖς, ὡσπερ καὶ οὐθαρ, τὴν εὐκαρπον λέγεσθαι γῆν. Πραξιλέους δὲ ἐξοχeteύσαντος διόριξι τὸν ποιμαῖν, τὸν τε θετὸν δόξαι ἐπ' αὐτοῦ κερωρίσθαι καὶ τὸν Πραμηθεῖα λελέσθαι τῶν δεσιμῶν. Quae quod his gemina essent exscribere placuit. WESS.

22. 15. Μεγαλεπήβολον ὄντα] Suidas μεγαλεπήβολον esse ait τὸν μεγάλων πραγμάτων κατασχόμενον. Polybii verba, quibus utitur, id firmarent, nisi in Excerpt. p. 1406. esset μεγαλεπήβολος; qua voce magna molientem indicant: cuiusmodi ingenio erat Antiochus, de quo ibi Polybius, et Hanno in Nostri Excerpt. Valesianis p. 273. ὁ Ἄντων μεγαλεπήβολος ὢν καὶ ὀβείης ὀρεγόμενος. At μεγαλεπήβολος, qui μεγάλων ἐπιτυχίης est, atque in illis prospero successu utitur. Sunt enim γεωμετρίας ἐπήβολοι Synes. Encom. Calvit. p. 71. C. et ἐπιβολώτατοι τέχνης Orat. de Reg. p. 30. B. ἐπήβολος κτήματος Themist. Orat. XXII. p. 266. D. τοῦτέων ἐπήβολος γενόμενος Herodot. IX. 93. earum rerum conpotes. Unde ἀδρεπήβολος Longin. Styl. subl. VIII. p. 47. et Nostri μεγαλεπήβολος. quod, quoniam Herculi non tantum magna molienti, sed et feliciter absolventi bene convenit, hoc quidem loco, tametsi omni dubio hand exemptum, pristinam sedem tueri passus sum, non item II. 7. ubi plura. WESS.

22. 21. Ὅρομα σχεῖν Ὀρεάνην] Hoc propius a Graecorum Ὀρεανῶ recedens amplector. Vid. c. 12. Tzetzes haec ob oculos habuit in Lycophonon. Alexand. 119. Τρίτων, inquit, ὁ Νεῖλος, ὅτι τρεῖς μετωνομάσθη. Πρώτηρον γὰρ Ὀρεανὸς ἐκαλεῖτο, δεύτερον Ἀετός, ὅτι ὀξείως ἐπέφθενσε· τρίτον Αἴγυπτος. τὸ δὲ Νεῖλος ῥέον ἐστί. Forte et hinc lux accendetur Ammiani verbis XXII. 15. Nilus aestuans inundatione ditissima ad Cataractas, id est praeruptos scopulos, venit, e quibus praecipitans ruit potius quam fluit: unde Aetos olim accolus usu aurium fragore assiduo deminuto etc. Videtur enim obiter Aeti titulum tetigisse, et, uade Aetos olim et accolus etc. scripsisse. Sed hanc coniecturam, neque enim alio eam loco habuerim, doctiores considerent. WESS.

22. 23. Ὑστερον δ' Αἴγυπτον] De nominis origine haec vir egregius Iac. Perizonius Orig. Aegypt. c. I. Diserte etiam Diodorus tradit, Nilum antea dictum fuisse Aegyptum. Vide Marsham. Sec. X. p. 238. Iam vero Γῆψ, Αἴγυψ et Αἰγύβιος Graecis notat vulturem, fuscii coloris avem. Inde ergo, interposita litera T, ut solet post Π, Αἴγυπτος et Αἰγύπτιος de rege, et de fluvio, et de populo istius terrae, quia fuscii et subnigri erant coloris, aequae ac vultures. Ne dubitemus de hac vocis significatione et origine, ipsi Graeci in Glossis Αἰγύπτιον exponunt μέλαν, nigrum, et αἰγυπτιάσαι Eustath. ad Homer. Odys. p. 1484. interpretatur ἐπιμαῦσαι, adurere. Vid. et Scaligeram ad Festum in voce Aegyptinās. Quae profecto magis

vero sunt similia, quam quae infra I. 51. de rege Aegypto et a Charace apud Ethnographum in *Αἴγυπτος* prodita leguntur. WESS.

23. 26. *Στῆσα δ' ἐν Αἴγύπτῳ*] Ex Poeta Odys. Ξ, 258. restitui, praeceunte ex parte aliqua Coislin. Idem censuisse Rhodom. Latina eius indicant. Etymol. in *Αἴγυπτος* habet *Στήσας ἐν Αἴγύπτῳ ποταμῷ*, prave. WESS.

23. 28. *Καλουμένην Θῶνιν*] Ad ostium Canobicum, omnium Nili primum, ex Aristot. I. Meteorol. I. 14. sententia, fuisse dicitur. Strabo XVII. p. 1152. B. a Thone, quo de Homer. Odys. Α, 228. nomen accepisse Stephano et Eustath. p. 1493. persuasit. WESS.

23. 31. *Ἀπὸ τοῦ βασιλ. Νειλέως*] De eo I. 63. WESS.

23. 38. *Παρὰ τὴν ἐρυθρὰν θάλασσαν*] Oceanum Indicum, Arabiam Persidemque alluentem. Sic enim optimus quisque, ut singulari Dissert. elegantissimus Hadr. Relandus ostendit. Ego uno utar Aristotele, qui cum plura esse maria, quae non misceantur, dixisset II. Meteorol. I. ὧν ἡ μὲν, addit, *ἐρυθρὰ φανερὰ κατὰ μικρὸν κοινοῦσα πρὸς τὴν ἔξω σιηλῶν θάλατταν*. neque enim aliud esse potest ac Indicum, quod Oceano ultra Herculis columnas paulatim confundatur, quod et bene advertit Basilius Homil. IV. in Hexaem. p. 36. E. ubi Philosophi verba aemulatur. Infra II. 11. et XIX. 10. sinus est Persicus; III. vero c. 18. Arabicus. WESS.

23. 40. *Ἐν αἴς καὶ Νύσαν*] De Baccho omnia eadem Strabo XV. 1008. B. 1038. C. Arrian. Indic. 5. et V. Exp. Alex. I. quo loco plane ad Diodori sententiam Acuphis, *κατὸς γὰρ, οὐκ ἄλλη τῆς Ἰνδῶν γῆς φερόμενος, παρ' ἡμῶν γέεται*. Conf. infr. II. 38. et Freinshem. in Curtii VIII. 10. 14. Uteunque vero statuas de Osiridis hac in Indos expeditione, id certum mihi videtur, cultum eius multaque Aegyptiorum instituta inter Indos fuisse recepta. Docuit hoc vir egregius M. V. la Croze L. VI. Hist. Christ. Indor. p. 430. etc. neque dubitem de Nysa apud Indos urbe, cuius ne nunc quidem memoria genti excidit, uti videbis ex Theoph. S. Bayeri Histor. Regn. Bactr. p. 4. sed haec alias. WESS.

23. 47. *Ἀμφισβητῆσαι περὶ τοῦ θεοῦ*] Nihil muto, tametsi III. 65. *ἀμφισβητοῦσι τῆς τοῦ θεοῦ γενέσεως*. et XVIII. 41. *στρατιώτας δ' ἔχοντες ἱκανοὺς ἀμφισβητῆσαι πραγμάτων* dixerit: praepositionem enim, ut saepe alii, addidit I. 66. WESS.

23. 53. *Ἀνχοῦρον τὸν βασιλέα*] Vid. III. 64. WESS.

23. 57. *Ἐπωνύμιον πόλειως*] Quae nomen ab eo accepit, quomodo de Alexandro c. 22. *ὁ κτίσας τὴν ἐπώνυμον αὐτοῦ πόλιν*. et de Hercule Appian. II. B. Civil. p. 743. qui Ionium, Dyr-rachi filium, deiecit εἰς πέλαγος, *ἵνα ἐπώνυμον αὐτοῦ γένοιτο*.

Aelian. V. H. A. 1. Memnoni sacras aves ὄρνιθας, τοὺς ἐπιώνυμους τοῦ Ἡρώου, Aeschyl. VII contra Theb. 138. Κάδμιον ἐπιώνυμον πόλιν arcem Cadmeam appellat, et Plutarch. T. II. p. 357. E. de Pelusio et urbe et Heroe, καὶ τὴν πόλιν ἐπιώνυμον ἀπ' αὐτοῦ γενέσθαι. Ceteroqui et ἐπιώνυμος is est et dicitur, qui nomen dat atque inponit, ut vere Stanleius ad Aeschyl. et Hemsterh. in Lucian. D. Mar. IX. 1. Conf. infra IV. 74. et de Maronea, Thraciae urbe, Harpocrat. ac Stephan. Wess.

24. 64. Τὸ ἐκ τῆς κριθῆς πόμα] Aretaeo Cappadoci I. M. A. 9. τὸ ἀπὸ τῶν κριθέων πόμα, Herodoto II. 77. οἶνος ἐκ κριθέων πεποιτημένος, quo Aegyptii sitim exstinguiebant. Noster I. 34. et Theophrastus VI. Caus. Plant. 15. *zylthum*, de quo suo loco, appellant. Conf. IV. 2. ubi his gemina sunt. Wess.

24. 70. Ἐξ ἀνθρώπων εἰς θεοὺς μεταστάντα] *Transgressum ad Deos*, quod de Augusto Velleius II. 75. Passim divinae sortis et naturae homines, ubi vita decesserant, ἐξ ἀνθρώπων ἀφανισθῆναι, ut de Hereule Lysias Orat. XXXI. 6. γενέσθαι ἐξ ἀνθρώπων, εἶναι ἐξ ἀνθρώπων, quorum illud Lysis Epist. ad Herodotum de Pythagora, et Pausan. IV. 26. de Epaminonda, hoc de Socrate Diogen. II. 43. reddendum et Aristidi T. I. p. 60. ubi sine ἦν prave ἐπειδὴ γὰρ ἐξ ἀνθρώπων Ἡρακλῆς, μεταστῆναι ἐξ ἀνθρώπων εἰς θεοὺς, aut etiam ἐκ τῆς ἀνθρωπίνης φύσεως εἰς τὴν ἀθανάσιαν, uti III. 73. perhibentur. Unde horum e vita migratio μετástασις ἐξ ἀνθρώπων III. 56. 61. 63. ἐκ γῆς μετástασις εἰς τὸν οὐρανὸν V. 72. et μετástασιν ἐξ ἀνθρώπων ποιέσθαι II. 39. Eleganter et verius Io. Chrysostom. Orat. in Babyl. T. II. p. 531. D. de martyribus, θάνατος μαρτύρων οὐκ ἐστὶ θάνατος, ἀλλὰ ζωῆς βελτίονος ἀρχὴ καὶ μετástασις ἀπὸ τῶν λαϊτῶνων πρὸς τὰ βελτίω. Wess.

24. 72. Ἐπιφανεστάτων θεῶν τιμῶν] Lego cum Eusebio ἐπιφανεστάτων ἐν θεοῖς τιμῶν. Idem pro τούτους proxime sequente habet τούτων. item περὶ αὐτοῦ ante μυστικῶς. STEPH. II. Stephanus ἐν θεοῖς τιμῶν. Mihi θεῶν prorsus ablegandum videtur. Nec quicquam [propterea sententiae decedit. Ex τούτους vero, quod proxime sequitur, ε abiciendum. RHOD. Si quid mutandum, Rhodomanni partibus accesserim. Fortasse tamen praestiterit nihil hic de loco suo movere: haud male enim τιμὰς τῶν ἐπιφανεστάτων θεῶν eas dixeris, quae diis praesentissimis deferuntur; nam et inter eos censitus est Osiris, quorum ἐπιφάνεια mortalibus prodessent, ut c. 23. indicatur. Atque ad hunc modum superbissimus Chosroës ἐν θεοῖς μὲν ἀνθρώπος ἀγαθός καὶ αἰώνιος, ἐν δὲ ἀνθρώποις θεός ἐπιφανέστατος in literis, quarum exemplar Theophylactus IV. H. Maur. 8. servavit. Mox τούτους recepi. Wess. Καὶ τῶν ἄλλων τῶν ἐπιφανεστάτων τιμῶν] Sic optime Codex Venetus omitta θεῶν voce. Itaque planissime ad stipulor Rhodomanno vocabulum istud tollenti. IDEM in Add. Sed

vide c. 17. ὑπολαμβάνειν γὰρ τὸν Ὅσιριν ὅτι παύσας τῆς ἀγριότητος τοὺς ἀνθρώπους καὶ διαίτης ἡμέρου μεταλαβεῖν ποιήσας τιμῶν ἀθανάτων τεύξεται διὰ τὸ μέγεθος τῆς ἐνεργείας. ὅπερ δὴ καὶ γενέσθαι· οὐ μόνον γὰρ τοὺς κατ' ἐκείνους τοὺς χρόνους τυχόντας τῆς δωρεῆς ταύτης ἀλλὰ καὶ πάντας τοὺς μετὰ ταῦτα ἐπιγενομένους διὰ τὴν ἐν ταῖς εὐρεθείαις τροφαῖς χάριτα τοὺς εἰσηγησαμένους ὡς ἐπιφανεστάτους θεοὺς τιμημέναι.

24. 73. Καὶ πολλὰ] Hic ex Eusebio περὶ τούτου inserendum putat H. Steph. et paulo inferius post τῷ χρόνῳ, τότε mutat in ποτέ. RHOD.

24. 76. Τῷ χρόνῳ] Legendum puto παρεληφτότων, τῷ χρόνῳ ποτέ συνέβη, id est, procedente tempore contigit tandem. ΣΤΕΡΗ.

24. 81. Εἰς ἕξ καὶ εἴκοσι μέρη] Plutarchus in XIV. partes Osiridis corpus disseccuisse, διελεῖν εἰς τεσσαρεσκαίδεκα μέρη καὶ διαρίθμηναι, T. II. p. 358. A. et 368. A. in pluribus a nostro dissentiens, etsi haud male pro gentis superstitione, tradit. Vid. Ath. Kircher T. I. Oedip. p. 224. et Io. Fellum in Theophil. I. ad Autolyc. 14. WESS.

24. 85. Μετελθεῖν τὸν γόνον] De ancipiti hoc bello, cui Osiris in terras redux interesse voluit, in Typhonem ac Titanas, nam hi caedis consiliarii, suscepto plura I. 88. IV. 6. et Plut. T. II. p. 358. C. WESS.

24. 89. Ἀνταίου κόμης] Hoc verissimum. Duravit vico nomen in sera tempora, ut ex Itiner. Anton. p. 166. et Hieroclis Synedemo p. 371. videbis. Plutarcho T. II. p. 976. B. Ἀνταίου πόλις, sicuti et Stephano. Male vero Rhodom. in parte quadam Arabiae. Sita enim in ea fuit Thebaidis parte, quae trans Nilum in Arabiam et orientem vergit, Arabiaque dicitur III. 12. et Ptolem. IV. Geogr. 5. et Heliod. III. p. 402. WESS.

24. 94. Πλὴν τῶν αἰδοίων] Sic infra IV. 6. et Plut. T. II. p. 358. A. Aliam vero tot Osiridis sepulcrorum caussam dat Strabo XVII. p. 1176. WESS.

25. 98. Τύπον ἀνθρωποειδῆ] Τὰ δὲ τοῦ σώματος μέρη περιπλάσασαν εἰς ἀνθρώπου τύπον IV. 6. ubi τύπος est simulacrum, uti Iosepho ἀγάλματα καὶ τύποι μεμορφωμένοι XV. Ant. Iud. 9. 5. Euripidi χροσέων ξοάνων τύπος Troas. 1073. Dioni Chrysost. Ἀρίωνος τύπος Orat. XXXVII. p. 455. et S. Lucae A. VII. 43. WESS.

25. 5. Καθιερωσάι δὲ καὶ τῶν] Hoc copiosius exsequitur I. 83. WESS.

25. 10. Εἰς προσόδους δοῦναι] Ociosa haec sunt et e sequentibus intelliguntur. RHOD. Τὸ τρίτον μέρος τ. γ. α. δοῦναι] Sicuti multitudo Aegyptia in tres partes ita et regio erat descripta; quarum tertia sacerdotibus, ut eius proventu se familiamque

alerent, cesserat apud Strabon. XVIII. p. 1135. Ἐξ δὲ τούτων τῶν προσόδων τὰς τε θυσίας ἀπάσας, τὰς κατ' Αἴγυπτον, συντελοῦσι, καὶ τοὺς ὑπηρέτας τρέφουσι, καὶ ταῖς ἰδίαις χρεῖαις χορηγοῦσι, inquit infra I. 73. quae etsi tueri videantur eicetas voces, acquiesco in Rhodomanni opinione. WESS.

25. 14. Τῷ λυσιτελεῖ προκληθέντας] Perperam R. et M. προσκληθέντας. Ipse summ defendit XVII. 83. καὶ ταῖς δοθησομέναις ὑπ' Ἀλεξάνδρου δωρεαῖς προκληθέντες οἱ μέγιστοι τῶν ἡγεμόνων. similis horum verborum permutatio apud Strabon. II. p. 182. B. WESS.

25. 21. Ἄπιν καὶ τὸν Μνεῦν] Usus his est Cl. Salmasius in Solia. p. 311. ut erroris Ammianum, qui XXII. 14. *Apin Lunae sacratum* tradit, coargueret, ipse errans. Non enim uni Osiridi, sed et Isidi, ut supra c. 11. significavit Diodorus, sacer fuit. Consentit Theodoret. Orat. III. ad Graec. p. 45. ταύτη (τῇ σελήνῃ) δὲ τὸν Ἄπιν, τὸν βοῦν δὴ λέγω, Αἰγύπτιοι τρέφουσι· τὸν δὲ Μνεῦν τῷ ἡλίῳ. Cuius verba ex Codice Augustano ita, uti dedimus, sunt cum Sylburg. legenda. Conf. L. Pignorii Mens. Isiac. Expos. p. 38. et quae dixi in Hieroclis Synecd. p. 730. WESS.

25. 24. Συνεργῆσαι μάλιστα] Codex unus habet πάντων pro μάλιστα. at potest esse μάλιστα sine πάντων, non contra. STEPH. Recte quidem Stephan. sed quid si μάλιστα πάντων fuerit? quod profecto Codd. ille dissensus videtur velle. WESS.

25. 27. Ὁμόσαι μηθενὸς ἀνδρός] Repetuntur iisdem paene verbis c. 27. WESS.

25. 37. Πρὸς ταῖς καλουμέναις Φίλαις] Seneca de Ritu et sacris Aegypt. apud Servium Aeneid. VI. 154. dicit, circa Syenem, extremam Aegypti partem, esse locum, quem Philas, id est est amicas vocant; ideo, quod illic est placata Isis ab Aegyptiis: quibus irascebatur, quod membra mariti Osiridis non inveniebat, quem frater Typhon occiderat. Quae inventa postea cum sepelire vellet, elegit vicinae paludis tutissimum locum, quem transitu constat esse difficilem: limosa enim est et papyrus referta et alta. Ultra hanc brevis insula est, inaccessa hominibus, unde ἄβατος appellata est. Quibus non dissimilia Plutarchum scripsisse arbitror, etsi vulgo eius libri alia omnia praeferant: quod enim editur T. II. p. 359. B. τὴν δὲ πρὸς πύλαις Νισιτιάνην ἄλλως μὲν ἄβατον, id fuisse credo, τὴν δὲ πρὸς Φίλαις νησίδα, ἄλλως μὲν ἄβατον καὶ ἀπροσπλάστον εἶναι. Scio posse huic coniecturae quaedam obmoveri: verum in desperatis licet esse audaciori, et abesse non potest *Philaram* mentio ab eo loco, quo de Osiridis sepulcro professus opera agitur. Diodori verba excerpit Tzetzes in Lycophr. Alex. 212. WESS.

26. 43. Ἐξήζοντα καὶ τριακοσίας χοάς] Indices videntur fuisse dierum vertentis anni, eodemque spectasse cccclx sacerdo-

tes, qui Acanthiorum in urbe pertusum in dolium aquam ingerebant, de quibus I. 97. Postea accesserunt quinque *επαγόμεναι*, in memoriam natalium Osiridis, Isidis, Typhonis, Apollinis et Veneris, uti docuit supra c. 13. Conf. I. 50. Tumque adeo *Νεῖλος Nilus* literis suis solidum annum, qui solstitiali circumagitur orbe, indicare potuit: *τῶν γὰρ κατὰ τοῦνομα στοιχείων εἰς ψήφους μεταλαμβάνομένων, πέντε καὶ ἑξήκοντα καὶ τριακόσσιαι μονάδες, ὅσαι καὶ τοῦ ἔτους ἡμέραι, συνυφίσσονται*, ut Heliodor. IX. p. 444. ait. WESS.

26. 47. *Πλὴν τοῖς ἱεροῦσι*] Hoc verum arbitror; quae Mss. quidam adstruunt, res ipsa monet intelligenda esse. Seneca IV. Q. N. 2. *Primum incrementum Nili circa insulam, quam modo retuli, Philas, noscitur. Exiguo ab hac spatio petra dividitur, ABATON Graeci vocant; nec illam ulli, nisi antistites calcant.* Formulam iurisiurandi, *μὰ τὸν ἐν Φίλαις Ὅσιον Τζετzes* fuisse ait in Lycophr. Alexand. 212. WESS.

26. 53. *Εἰς ποταμὸν ῥιφῆναι*] Vide III. 6. et Plut. T. II. p. 365. C. De Phaili Aegyptiorum figura Herodot. II. 48. quae, ut in Graeciam, itidem ad Indos, quorum in sacris frequens, transiit, ut bene M. V. La Croze L. VI. Hist. Christian. Indor. p. 430. WESS.

26. 57. *Τιμᾶν καταδείξαι*] Eusebius, *τιμὰς καταδείξαι καὶ τελετὰς καὶ τὰς θυσίας τὰς τῷ θεῷ τούτῳ γινομένας ἐντίμους ποιῆσαι.* Sed *τιμᾶν καταδείξαι* suspectum esse non patitur locus iste p. 4. οἱ πρῶτοι καταδείξαντες *τιμᾶν τὸ θεῖον.* Item hic qui est in hac ipsa pagina, paulo superius, *καὶ τούτους σέβασθαι καταδειχθῆναι πᾶσιν ἀνθρώποις.* Ita enim hic legere malo quam *καταδεχθῆναι.* STERN. Eusebius I. P. Evang. I. nostri verba liberiore stylo expressit. *Τιμᾶν καταδείξαι* probum iustumque est. Vide sup. c. 6. WESS.

26. 60. *Τὰ περὶ τοὺς ὀργασμοὺς*] Eusebius non habet *καὶ τὰ ὄργια*: at in uno codicum nostrorum non habentur ista verba *τὰ περὶ τοὺς ὀργασμοὺς.* Certe tollenda sunt vel haec vel illa. nam coniuncta nihilo videntur tolerabiliora quam *μάκτρα* et *κάρδοπος*, quae irridet Aristophanes. STERN. *Τὰ περὶ τοὺς ὀργασμοὺς*] Haec auctoris verba non esse *τὸ διάλυτον* evidenter ostendit; praeterquam quod ineptissimus est pleonasmus. Cuiusmodi *ταυτολογίαί* plures sexcentis in contextu auctoris sunt ingestae. RHOD. Bene sit Eusebio, qui sincera Diodori verba ad nos transmisit; quae ut probarem, et res ipsa et levis meliorum Codd. dissensus effecit. Habent *τοὺς περὶ τὸν Διόνυσον ὀργασμοὺς* Plutarch. T. II. p. 364. E. et 611. D. *Διονυσιακὰς ἑορτὰς καὶ τελετὰς* Diodor. III. 74. IV. 6. pluresque alii. Horum autem sacrorum Phallus praecipuum ferculum, et mystica in cista, de qua Clemens Alex. Protrept. p. 13. et 30. reconditum, et palam sollempni in pompa gestatum, accinentibus *τὸ φαλλικὸν* re-

ligiosis, ut in Aristoph. Acharnens. 259. Quae vulgo etsi fierent, parum probabantur ere. tioris animi civibus, quorum e numero Demosthen. in Conon. p. 690. οὗτοι γὰρ εἰσι, inquit, οἱ τελοῦντες ἀλλήλους τῷ ἰθυφάλλῳ, καὶ τοιαῦτα ποιοῦντες, ἃ πολλὴν αἰσχύνην ἔχει καὶ λέγειν, μὴ ὅτι γε δὴ ποιεῖν, ἀνθρώπους μετρίους. WESS.

26. 67. Πλείω τῶν μυρίων] Videntur certi nihil habuisse ad temporum seriem constituendam Aegyptiorum sacerdotes. Decem annorum millia cap. seq. a prima hominum origine numerant. At c. 26. a Solis regno xxiii annorum millia ad Alexandri in Asiam e Macedonia transitum, uti et hoc loco; qui numerus multo fiet auctior, si Dii et Heroes ad annos paullo minus xviii mille, et homines per xv fere annorum millia in Olymp. usque clxxx Aegypti provincias administrarint, ut ait c. 44. Et quamquam locus ille male sit sanus, leviq̄ue opera refingi possit, ut ceteris bene consentiat, tamen dubia atque incerta manet haec Chronologia, uti verissime animadvertit Iac. Perizonius Orig. Aegypt. c. XI. WESS.

26. 70. Φασὶ σχεδιάζειν] Sic II. 15. Κτησίας δ' ὁ Κρίδιος ἀποφανόμενος τοῦτον σχεδιάζειν, i. e. nugari, temere effutire. Polyb. XII. 2. ἐπὲρ ὧν Τιμαῖος κακῶς καὶ παρέρως ἱστορήσας, ἐσχεδίασε. Paulo diversiore usu infra XIII. 31. ut dicitur. Conf. H. Vales. ad Harpoer. in Not. Maussaci p. 90. WESS.

26. 72. Μεταλαμβάνοντα, τοῖς τε Καδμείοις] Hoc placuit prae vulgato, haud sane concinno: non item Eusebii θεὸν Ἑλληνῶν ὀνομάζεισθαι, quod ipse Diodor. manifesto damnat, Bacchum θεὸν Ἑλλήνων νομιζόμενον a multitudine cupide receptum mox referens. Credo eam παραδιόρθωσιν culpae librariorum deberi: quod genus ὀνομάζειν et νομιζειν permiscere adsuevit. Vid. Cl. Kuhn. in Pausan. II. 14. et inf. c. 25. et II. 30. WESS.

27. 78. Γενέσεώς τε καὶ τελετῆς] Veriorem hanc scripturam Rhodomanni Latina exprimunt; altera absurda est, et descriptorum ex ingenio procreata, cui acceptum retulisset Eunapius in Maxim. p. 88. Μιθριακὴν τελευτήν, et samblich. Vit. Pythag. seg. 151. τελευτήν, τὴν ἐν Ἐλευσίῳ γινουμένην, nisi hoc Kuster. et multis ante annis Is. Casaubon. in Athen. I. 7. illud Th. Gataker. Miscellan. 21. p. 660. in integrum restituissent. WESS.

27. 81. Ὑπὸ τοῦ δήποτε] Pro ὑπὸ τοῦ δήποτε duo exemplaria habent ὑπὸ τοῦ Διός ποτε. quae lectio prima fronte alicui arridere possit: quum tamen propius aspecta, falsa esse comperitur. Subiungit enim Diodorus Cadmum Osiridi genitorem ascripsisse Iovem, tum ut Osirin nobilitaret, tum ut criminationes a virgine ob vitium illi oblatum depelleret. Quae nequaquam subiungeret, si illam ex Iove gravidam fuisse dixisset. Sequor igitur eam quam habemus lectionem, parva tantum cum mutatione:

videlicet ex ὑπὸ τοῦ δήποτε faciens ὑφ' ὅτουδήποτε, id est, a nescio quo, a quoriam, quicumque is fuerit. STEPH. et RHOD. Blanditur coniectura Stephani a veteri scriptura proxime recedens. Quod secutus sum, a Fr. Vigero haud improbatum, ea nihil inferius est, solo accentu a vulgato distans. ὑπὸ τον idem ac ὑπό τινος, frequentique in usu est, ubi auctor rei incertus. Appian. IV. B. C. p. 968. τὸ γιγνόμενον εἶναι σύμβολον ἕξ τον θεῶν. et p. 1322. καὶ ὁ Μοῦσος ὑπὸ τον δαιμόνων βεβλάσθαι νομιζών. et p. 1049. ὑπὸ τον θεῶν ἐκδιδόμεναι τοῖς πολέμοις. Plane autem uti hic de Bacchi origine Euripid. Bacch. 27. Διόνυσον οὐκ ἔφρασκον ἐκγεῖναι Διός. Σεμῆλην δὲ νυμφενθεῖσαν ἐκ θνητοῦ τινος, εἰς Ζῆν' ἀναφέρειν τὴν ἀμαρτίαν λέχουσι, Κάδμου σοφίσματι. WESS.

27. 84. Εἰωθέναι] Fortasse pro εἰωθέναι legi debet οἰόντ' εἶναι. STEPH. Retinui quod scriptum fuit: tametsi H. Stephani correctio magis probatur. RHOD. Non sequor H. Stephan. Etsi enim pauci, vitales tamen septimo mense editi censentur. Ἔστι δὲ ἂ τοῦτων τῶν ἑπταμήνων περιγίνονται ἐκ πολλῶν ὀλίγα ait Hippocrates de Part. septimest. p. 255. Adde notissimos poetae Iliad. T. 117. de Eurystheo versus; quorum si recordatus fuisset Ariston Spartanus, haud sane negasset Demaratum, VII. mense natum, suum esse, ut bene Pausan. III. 7. p. 221. cum nota Kuhnii. WESS.

27. 86. Κάδμου δὲ αἰσθόμενον] Rei gestae αἰσθόμενον τὸ γεγονὸς, postquam conperisset, quod acciderat, satis videtur convenire, simillimumque est Thucydid. IV. 44. αἰσθόμενοι τὸ γεγενημένον. Neque habet ἀχθόμενον τὸ γεγονὸς, aegre id, quod factum erat, ferentem, cur improbes. Est quidem ἄχθομαι τῷ πράγματι in Aristophan. Acharn. 1529. sed ad hoc exemplum Homer. Iliad. E. 361. Αἶψα ἄχθομαι ἔλκος, ὃ με βροτὸς οὐτάσεν ἀγῆρ Τυδείδης. Videturque cultius paullo nec librario inputandum. Elige ergo. WESS. Fallitur. v. ad Eurip. Iph. T. v. 351.

27. 88. Χρυσώσασθαι τε τὸ βρέφος] Quid si καθιερώσασθαι? Haec profecto lectio alteri praeferranda videtur, ut interpretatio sit, infantem consecravit. RHOD. Χρυσῶσαι τε τὸ βρέφος] Neque hic accedere Rhodom. possum. Quod dedi, exhibet Euseb. et Codd. plures, Diodoro IV. 48. probante, longeque abest a καθιερώσασθαι. Puto moris magnificentiaeque Aegyptiae fuisse, ut mortui eorumque conditoria auro induerentur. De Mucicino certe Herodot. II. 128. mortua filia fabricasse ait ligneam et cavam bovem, καὶ ἔπειτα καταχρυσώσαντά μιν ταύτην, ἔσω ἐν αὐτῇ θάψαι ταύτην. Nec multum differt Paneborum, gentis Afrae, institutum, quo regis mortui corpore contumulato, τὴν δὲ κεφαλὴν ἀποκόψαντες καὶ χρυσώσαντες, ἀνατιθέασιν ἐν ἱερῶ in Excerpt. Nicol. Damasceni p. 526. WESS.

27. 91. Ὅσιόν τε καὶ τὸ γεγονὸς] Hoc τε καὶ τὸ γεγονὸς



genuina Diodori lectio, ut mihi quidem videtur, non admittit. Pleonasmus enim est, e superioribus, ut apparet, adscitus. ΡΗΘΩ.

27. 95. Ἐπὶ μελωδίᾳ καὶ τελεταῖς] His nihil dissentit, cum μέμιστος, inquit, ἐγένετο τῶν Ἑλλήνων ἐν τε ταῖς τελεταῖς, καὶ ταῖς θεολογίαις, καὶ ποιήμασι καὶ μελωδίαις de eodem, *sacro et Deorum interprete*, Orpheo IV. 25. Qua fama cum floureret, ne miremur Bacchi arcana sacra Ὀρφικὰς τελετὰς III. 64. ipsumque τὸν τὰς ἀγιωτάτας τελετὰς καταδείξαντα Eurip. Rhes. 943. Demostheni I. in Aristogit. p. 483. appellari. vide et Philostr. Heroic. II. 19. WESS.

27. 4. Καὶ δόξαν ἐν τοῖς τοιοῦτοις προσέχοντας] Deleta voce καιροῖς, quae tenebris inopportuna orationem involverat, hoc amplexus sum. Magna erat Orphei auctoritas, certaue vulgo de eius in sacris peritia persuasio; hac factum ut de Bacchi origine pluribusque aliis cupide illi assenserint. Ὁ δὲ Ὀρφεὺς ὑπερεβάλλετο ἐπὶ τὸν κόσμῳ τοὺς πρὸ αὐτοῦ, καὶ ἐπὶ μέγα ἤλθεν ἰσχύος, οἷα πιστευόμενος εἶρηκέναι τελετὰς θεῶν καὶ ἔργων ἀνοσίῳν καθαρῶν, νόσων τε ἰάματα καὶ τροπὰς μημημάτων θεῶν. Pausan. IX. 30. p. 768. WESS.

27. 7. Ἐπειτα παραλαβόντων τῶν] Dubito an haec sint vitiosa. Movet suspicionem verbum ἐμπλῆσαι, Eusebio, schedisque vetustioribus haud spretum. Cogitaram, ἔπειτα παραλαβὸν τῶν μυθογράφων καὶ ποιητῶν τὸ γένος ἐμπλῆσαι τὰ θέατρα, una, ut vides, detracta syllaba, quae natales ex sequenti articulo nancisci potuit, sententia vero percommoda. *Deinde fabulatorum et poetarum nationem, postquam ea accepisset, theatra replese.* Id si repudies, vide an hoc malis, ἔπειτα π. τ. μυθογράφων, καὶ ποιητῶν τὸ γένος ἐμπλῆσαι τὰ θέατρα, quae cum deinceps fabulatores accepissent, poetarum etiam familiam theatra inplese. Ego, si quid mutandum, haud longe inde abeo; nec restitui tamen, quod vulgatum suos sibi patronos habere possit; certe si ποιητῶν τοῦ γένους legas, nemo erit, qui queri possit: numeri enim ea enallage frequens et elegans. Heliod. VII. p. 315. ἐκβοησάντων δὲ πρὸς ταῦτα τοῦ δήμου, καὶ συγκατατίθεσθαι διὰ τῶν ἐπαίνων παραδηλούντων. cai simillimum in Gregorii Nazianzeni Orat. III. p. 87. B. Vid. infra XIV. 78. XV. 29. WESS. Vera videtur prima Wessel. correctio, praeferenda certe Toupianae (Emend. in Suid. vol. II. p. 310.) γεγονός. Supra I. 9. τὸ τῶν ἱστοριογράφων γένος.

28. 13. Τὸ γένος Αἰγύπτιον] *Sacratissima et augustissima Aegyptii* Herculem religione venerantur, utraque memoriam, quae apud illos retro longissima est, ut carentem initio colunt: ipse creditur et gigantes interemisse, cum coelo propugnaret, quasi virtus Deorum, inquit Macrobius. I. Satur. 20. et assentitur Herodotus II. 43. et 145. WESS.

28. 21. Γενεῖ πρότερον τῶν Τρωϊκῶν] Una hominum ac-

*tate ante bellum Troianum.* Hercules enim vicit et occidit Laomedontem, patrem Priami, sub quo gestum id bellum, sociosque habuit expeditionis Thesea et Telamonem, quorum filii Demophoon et Ajax huic bello interfuerunt, sicuti monere haud neglexit Iac. Perizonius Orig. Aegypt. c. 11. Solet Diodorus γενεῶν annis xxx aequare, uti II. 55. a quo spatio haud longe abest Herodot. II. 142. Conf. Plutarch. T. II. p. 415. E. WESS.

28. 25. *Ῥόπαλον καὶ λειοτήν*] Notissima haec Herculis et eorum, qui Herois facta et mores acmulabantur, insignia: quo de genere Nicostratus et Dioxippus infra XVI. 44. XVII. 100. praeterea Alexander et Imp. Commodus apud Athen. XII. p. 537. F. aliique. Admodum debile tamen argumentum, quo Aegyptii pugnant, videtur: nam sero poetae Herculem illis armis, Stesichoro ceteris praecunte, instruxerunt, auctore Megaclide in eiusdem Athen. XII. 1. p. 512. WESS.

28. 29. *Σκεπαστήροις χοῦσθαι*] Quod addunt Mss. ὄπλοις, id ad plenior sententiam requiritur: negligitur tamen saepe. Philo Iud. de Mundi Opif. p. 19. C. *πρὸς ἐνὸς ἀνδρὸς ἀγεται, — οὔτε τι τῶν ἀμυντηρίων ἐπιγερομένον, διαφθέραν δ' αὐτὸ μόνον ἔχοντος σκεπαστήριον.* Rarius a nostro. vid. III. 33. 54. V. 18. XI. 7. WESS.

28. 32. *Ἀλκαῖον ἐκ γενετῆς καλούμενον*] Ab ipsis natalibus, sicuti V. 32. XVII. 105. Athen. IV. p. 160. D. *ὁ ἐκ γενετῆς σε ἢ μήτηρ κέκληκεν.* Alcaei autem Alcmene filio verum et primum fuisse nomen ostendit et Sex. Empiricus IX. 36. quique ibi a Io. Alb. Fabricio ad testimonium dicendum sunt excitati. WESS.

28. 34. *Ὁ Μάτρως*] Puto fuisse ἐν τῷ τοῦ Ἡρακλέους ἐγγραφῶν, quam Herculis a Matri scriptam laudationem memorat Athen. X. I. p. 412. A. Vid. infra IV. 10. WESS.

28. 39. *Καθαρὰν τὴν γῆν τῶν Θηριῶν ἐποίησε*] Hoc Euripidi est in Herc. 20. *ἐξημερώσαι τὴν γαῖαν,* et nostro IV. 21. Propius a loquendi genere abest Liban. T. II. p. 133. A. *οὐ πρότερον ἐπερόστησαν πρὶν ἢ τὴν χώραν τῶν πολεμίων ἐκάθησαν.* et Appian. II. B. C. p. 709. *ὁ μὲν δὲ Πομπήιος ἄρτι τὴν θάλασσαν καθήρως ἀπὸ τῶν λησστηρίων.* Nec dissimile, quamquam rarius, Iosephi XIV. A. I. 9. 2. *ποθοῦσι γὰρ αὐτοῖς ἀπὸ ἀλλήλων τοῦ ληστηρίου, τὴν χώραν ἐκαθάρεσαν.* WESS.

29. 47. *Εἰς τὴν ἐπεροκειμένην*] Non εἰς sed ἧς legitur in uno codice: verum utrovis legas modo, plena esse non videtur sententia. Praeterea quod hic de Aegypto, alibi de Libya dicit pag. 18. *ἢ ἔρημος καὶ θηριώδης τῆς Λιβύης.* STEPH. *Ἔς τὴν ἐπεροκειμένην*] Ego hoc verius existimo: sive enim de Trogiodytica, seu Aethiopia, seu Libya accipias, verissimum est, eas regiones, qua Aegypto adhaerent, steriles et feris infestas esse. Vid. inf. c. 30. et Strab. XVII. p. 1174. Paulo ante ἀρχαιοτάτους χρόνους, res ipsa videbatur requirere. WESS.

29. 51. *Μεθολογοῦντων τὴν Ἰὼ*] Lubenter legerim cum Eusebio *μεθολ. αὐτὴν εἶναι Ἰὼ τὴν εἰς* etc. STEPH. Sensus citra ullam mutationem planus est, si hoc modo reddas: *Dum Ionem in formam bovis conversam esse fabulantur.* Quamvis Eusebianam hic correctionem cum H. Stephano lubens sequar. Non multum vero interest sive *μεταποιηθεῖσαν* in loco suo permaneat, sive *μεταμορφωθεῖσαν* pro illo reponas. RHOD. *Τὴν Ἰὼ, τὴν εἰς βοῶς τύπον*] Hoc placuit, etsi Eusebianum paullo lenius, propter Mss. auctoritatem. Quae vero Aegyptii de Ione adfirmant, a veritate haud abhorrere, et Istri, qui de *Coloniis Aegyptiorum* commentatus est, testimonio apud Clement. Alex. I. Strom. p. 382. adfirmari posse videntur. Graecis de eius origine nihil liquido constitit, ut abunde Apollod. II. Biblioth. 1. 3. indicat: et bovis tamen figura instructam in Aegyptum deduxerunt, Isidis cultu et nomine venerandam, Herodot. II. 41. Aeschyl. Prometh. 815. 852. Lucian. D. D. III. p. 208. Alia, sed quae haud probes, Ath. Kircher. Oedip. T. I. p. 92. WESS.

29. 57. *Οἱ δὲ Ἀήμητραν*] Ipsa de se, *Me primigenii*, inquit, *Phryges Pessinuntiam nominant Deum matrem; hinc Autochthonos Attici Cecropiam Minervam; illinc fluctuantes Cyprii Paphiam Venerem; Cretes sagittiferi Dictynniam Dianam; Siculi trilingues Stygiam Proserpinam; Eleusinii vetustam Deam Cererem: Iunonem alii, Bellonam alii, Hecatē isti, Rhamnusiam illi; et qui nascentis dei Solis inchoantibus radiis illustrantur Aethiopes, Aethiopes, priscaque doctrina pollentes Aegyptii, caerimoniis se propriis percolentes, appellant vero nomine reginam Isidem* in Apuleii XI. Metamorph. p. 259. quibus etsi sibi rerum haec natura parens, uti censebatur, Dearum paene omnium nomina et potestatem vindicet, amplius tamen cognomen est ISIDIS MYRIONYMAE in Thesauri Grut. p. LXXXIII. 7. Vid. supra c. 11. et 14. et Gerh. Io. Vossium II. Idololat. c. 56. WESS.

29. 59. *Οἱ μὲν Σάραπιν*] Osiris idem qui Sol, eiusque adeo potestas variis nominibus multifariam a Theologis olim designata est, quo de idem Vossius in elaboratissimo opere II. 10. Recte ergo Martianus Capella II. p. 43. *Hinc Phoebum perhibent prodentem occulta futuri, Vel quia dissolvis nocturna admissa, et Isaeum Te Serapim Nilus, Memphis veneratur Osirim. Dissona sacra Mithram, Ditemque ferumque Typhonem; Aty pulcher item, curvi et puer almus aratri. Ammon et arentis Libyes, ac Byblius Adon. Sic vario cunctus te nomine convocat orbis.* Praesertim cum Apollo ipse, modo tamen certa fides, consultus, quis esset, responderit, *Ἥλιος, Ὕρρος, Ὅσιρις, Ἄναξ, Διόνυσος, Ἀπόλλων, Ὁρῶν καὶ καιρῶν ταμίης*, apud Euseb. III. P. E. 15. WESS.

29. 63. *Ἰλαίωνα ὀνομαζόμενον*] Sequor scriptos libro

Similis error saepe commissus, ut recte Casaub. in Athen. V. 4. Sarapin vero non alium atque eum esse, quem Graeci Plutonem appellant, Archemachus et Heraclides testantur in Plut. T. II. p. 361. E. nec dissentit Aristid. T. I. p. 97. WESS.

29. 65. Ἐμπειρίαν, καὶ τὸ σύνολον π. μ.] Haec absque ulla sententiae iactura removeri possunt, cum nonnullam prae se *νοθεύματος* suspicionem ferant. Paulo autem post expungendum quoque *νῖν* videtur. RHOD. Ἐχειν ἐμπειρίαν, διὸ καὶ τυχοῦσαν] Parui viro doctissimo et scriptis libris; nec aliter citat Morellus in III. Sylv. Statii p. 338. Isis propter peritiam artis Medicae Romanis SALUTARIS, uti in Gruteri Thes. p. LXXXIII. 15. Ὑγίεια Epidauri, teste Pausania II. 27. dicebatur. Ipsa sibi artis salutiferae initia tribuit in Eclog. Io. Stobensis p. 125. et apud Ovidium, *Dea sum auxiliaris, opemque Exorata fero*, IX. Metam. 698. Adde Tibullum I. 3. 27. cum nota Cl. Broekhusii. WESS.

29. 68. Ἐπιδειννυμένην τήν τε ἰδίαν ἐπιφάνειαν] *Suae praesentiae manifesta indicia demonstrantem.* Appellant enim *ἐπιφάνειαν* numinis apparitionem, quoquo tandem modo Deus aliquis suae praesentiae signum dedisse crederetur: exemplorum abunde conduxerunt viri egregii Is. Casaubon. in Athen. XII. 11. et Exercit. II. in Baron. p. 137. et Ezech. Spanhem. Diss. VII. de Usu et Pr. Numis. p. 426. Ego Diodori, cui frequenti in usu, loca quaedam veluti per saturam dabo, III. 62. IV. 82. XI. 14. XIV. 69. Patres Christiani, praecunte S. Paulo, ad utramque Christi in terris praesentiam commode transtulerunt, tum deinceps ad Martyres. *Παρ' ὧν δαίμονες ἐλαύνονται καὶ νόσοι θεραπεύονται· ὧν αἱ ἐπιφάνειαι καὶ ὧν αἱ προρρήσεις*, Gregor. Nazian. Orat. III. p. 77. A. WESS.

29. 74. Κατὰ τοὺς ὕπνους ἐφισταμένην] Incubantibus, ut responsa opemque eius acciperent; quo genere superstitionis nihil olim crebrius. Lycophr. Alexandr. 1050.

*Δοραῖς δὲ μῆλων τύμβον ἐγκοιμωμένοις  
Χρήσει καθ' ὕπνον πᾶσι νημεροτῇ φάτιν.*

Praecipue in Aegypto in Isidis aut Serapidis aede, ut apud Dion. Chrysost. Orat. XXXII. p. 364. C. et Strab. XVII. p. 1152. Atque haec est *ἐγκοίμησις ἐν τοῖς ἱεροῖς*, de qua uberius infra c. 53. WESS.

30. 82. Τὸ τῆς ἀθανασίας φάρμακον] Meminit ipsa ἀφθαρσίας φαρμάκον ex Hermetis libris in Eclog. Phys. Stobaei p. 117. quod fortasse diversi generis. *Horum* pariter ac Osirin a Titanibus *artuatim*, ut Firmicus loquitur, discissum perhibebant, quorsum τοῦ Ὄρου διαμελισμὸς apud Plut. T. II. p. 358. WESS.

30. 89. Ἀπόλλωνα ὑπάρχειν] De Deorum ultimo inter Aegyptiorum reges Horo, qui Graecis Apollo, paria Herodot. II. 144. *Apud eosdem Apollo, qui est sol, Horus vocatur, ex quo*

et horae XXIV. quibus dies et nox conficitur, nomen acceperunt, Macrobi. I. Sat. 21. De eius vero beneficentia et auxilii miseris ferendi studio testatur Artemidorus, illum inter σωτήρας, Deos servatores, qui αντίκα μάλα σώζουσι praesentemque opem ferunt, transscribens II. 44. et haec ieiunulae veteris inscriptio:

ΜΕΓΑΣ ΩΡΟΣ ΑΠΟΛΛΩΝ ΑΠΙΟΚΡΑΤ  
ΕΥΛΑΤΟΣ ΤΩΙ ΦΟΡΟΥΝΤΙ.

in quam plura Ampl. Cuper. Harpoerat. p. 156. WESS.

30. 95. Δισμυρίον καὶ] Vide supra c. 23. WESS.

30. 1. Κατὰ τὴν τῆς σελήνης περίοδον] Aegyptios olim Lunae senio annum determinasse, itaque aliquos et singula millia annorum apud eos vixisse prodi Plinio VII. H. N. 48. accredimus: paria enim tradunt Plutarch. T. I. p. 72. A. et ex Eudoxo Proclus in Timacum p. 31. Suidas in Ἑλλιος, atque alii. Nisi tamen erro, serius lunares hi anni adhibiti sunt, ut inmanem annorum numerum, quem regibus Diis, Semidiis atque hominibus annales contribuebant, expedirent. Inaudiverant aliqua de longaeva regum suae gentis ante Noachicum diluvium et post illud aetate; quae sine his extricari commode non posse videbantur; quamquam ne sic quidem plana omnia. Conf. Cl. Iac. Perizonii Origin. Aegypt. c. 2. WESS.

30. 7. Τέτταρασι μηνσὶ] Is. Vossius τρισὶ libro suo adscripserat, fortasse ob Censorinum, cui Hori annus trimestris: verum neuter audiendus. Vulgatum tuetur Plut. T. I. p. 72. B. Aegyptiis τετράμηνον quadrimestrem annum tribuens, et quae hic sequuntur. Singulae anni tempestates quatuor mensibus solvebantur; quae cum tres olim haberentur, ver, aestas et hiems, earum quae-libet annus censebatur. Atque hae sunt τριμερεῖς ὥραι, quarum superius meminit c. 11. 12. 16. et Aeschyl. Prometh. 454. Tacitus Mor. Germ. 26. et nunc observantur ab Abyssinis, de quibus Iob. Ludolphus I. Hist. Aethiop. 5. WESS.

30. 10. Ὁρος καλεῖσθαι] Absque dubitatione pro masculino foemininum ὥρας restituo: cum istius nullum suppetat exemplum: huius vero significatio in promptu habeatur. Cum enim ὥρα unam de iv anni partibus creberrime designet, quid mirum, si partis nomine totum synecdochico tropo appelletur? RIIOD. Non sequor virum doctissimum, cuius dicta hoc quidem loco ἀλόγητα ἀμείνω. Ecce enim tibi Censorin. Die Nat. 19. sunt qui tradant hunc annum trimestrem Horum instituisse, eoque ver, aestatem, autumnum, hyemem ὥρας, et annum ὥρον dici, et Graecos annales ὥρους, eorumque scriptores ὥρογράφους. Et ne de eius auctoritate dubites, Plutarch. T. II. p. 677. D. ubi Antipater τοὺς μὲν ἐνιαυτοὺς ἀρχαϊκῶς ὥρους λέγεσθαι. quibus eadem de re simillima in Athen. X. p. 423. F. ne dicam de Hesychio, Eustathio, ceterisque Grammaticorum, Homeri ἐννέωρον ὁμοσιτήν et ἐννέωρον ἄλειψμα explicantibus. Commode ergo

ἰστοριογραφία de annalibus, et ἰστοριογράφοι eorum conditores. Hesychius, Ἰστοριογράφοι, ἰστοριογράφοι, τὰ κατ' ἔτος πραττόμενα γράφοντες· ὅσοι γὰρ οἱ ἐνιαυτοί. quo usu οἱ Ναξίων ἰστοριογράφοι Naxiorum annalium scriptores Plutarcho T. II. p. 869. A. WESS.

31. 16. Καὶ τυπτομένους ὑπὸ τῶν περὶ τὸν Ὅσιριν] *Quique ab ipso Osiride verberantur.* Rhodomanni enim *sacrificii Osiridis* haud placent. Οἱ περὶ τὸν Ὅσιριν ipse Osiris est, ut c. 15. 16. et mox οἱ περὶ τὸν Αἴα καὶ τὸν Ὅσιριν, et locis infinitis, quamquam non ignoro hoc genus aliquando latius porrigi, quo de Is. Casaub. in Diogen. Laert. III. 22. Typhon ceterique gigantes ab Osiride victi oppressisque sunt, cuius in victoriae memoriam gigantes monstrosa specie in Aegyptiorum templis effingebantur et ab adstante Osiride verberabantur. Habet Herodot. II. 137. quaedam de Aegyptiorum Deo vapulante, sed dubia et quae ad luctum possunt referri. Conf. Ath. Kircher. Oedip. T. I. p. 220. WESS.

31. 24. Νομοθεῆσαι] Pressius legem explicat Philo Iud. de Special. Leg. p. 780. A. de Aegyptiorum legislatore inter alia παρασχὼν ἕδειαν, inquit, ἀπάσας ἀδελφὰς ἀγεσθαι, τὰς τε ἰδίας τοῦ ἐτέρου τῶν γυναικῶν, τοῦδε, ἢ τοῦδε, καὶ τὰς ἐξ ἀμφωῶν, καὶ τὰς οὐ νεωτέρας μόνον, ἀλλὰ καὶ πρεσβυτέρας καὶ ἰσηλικίας. *Permissa licentia ducendi sorores sive per alterum parentem sive per utrumque cognatas, maiores pariter ac minores aequalisve.* Quam eorum consuetudinem cum ducta sorore Arsinoe probasset Ptolemaeorum secundus, ἐγγμεν αὐτὴν, dicebat Pausan. I. 7. Μακεδόσιν οὐδαμῶς ποιεῖν νομιζόμενα, Αἰγυπτίοις μέγτοι, ὧν ἤρχε. Bene profecto. Macedonibus enim et Graecorum plerisque haec nuptiae erant nefariae, γέμοι ἀνόσιοι Aristoph. Ran. 874. Mox κοινὸν ἔθος τῶν ἀνθρώπων visum est iustum et paullo ante συμφωνεῖσθαι. pendet enim oratio ex anterioribus. WESS.

31. 32. Καταδεχθῆναι] Non dubito, quin καταδεχθῆναι scriptum fuerit, quod auctor tradendi seu docendi significatu non raro usurpat. RHOD.

31. 34. Κυριεύειν τὴν γυναικα τὰνδρός] Gravius et iustius S. Paullus I. Timoth. II. 13. οὐδὲ αἰθετεῖν ἀνδρός de femina. Sed diversi Aegyptiorum mores, quibus ex pacto uxor marito imperabat, omniaque virilia officia foris obibat, dum ille tanquam claudus sutor domi sedens fusumque tenens pensa traheret. Sophocl. Oedip. Colon. 332. ἐκὼ γὰρ οἱ μὲν ἄρσενες κατὰ στέγας θακοῦσιν ἰστοριογραφεῖν· αἱ δὲ σύντρομοι τὰ ἔξω βίον τροφῆναι πορσύνουσ' ἀεὶ. Quibus gemina Nymphodorus a Schol. productus scribit. Conf. Io. Marsham. Can. Chronol. p. 68. WESS.

31. 36. Πειθαρχήσαι τῇ γαμονμένῃ. Οὐκ ἀγροῶ] Obtemperavi libris manu exaratis, et quae intempestive inculcata erant, abesse iussi. Leguntur c. 22. unde a male officiosis, non

sine auctario, ut in Cod. Mutin. in hunc locum sunt infarta.  
WESS.

31. 39. Καὶ Νυσαῖον] Saepe Νυσηῖος, Νυσαῖος, Νύσιος  
Bacchus, ut in Schol. Comici Ran. 218. et Ovid. IV. M. 13.  
WESS.

31. 42. Πύσης γώρας] Titulus hic nimis arrogans vi-  
detur. Ideo τῆς in margine pro πάσης amplector, ut et alterum,  
quod subsequitur, ὅσα ἐγὼ ἐνομοθέτησα. RHOD. Praestat πάσης  
τῆς γώρας. Itaque articulum adde. WESS. in Add.

31. 43. Ἐγὼ ἐνομοθέτησα] Vulgatum καὶ ὅσα ἐγὼ δῆσω  
olim mihi defendi posse videbatur hoc Sophocleo Antig. 1100.

Αὐτός τ' ἔδησα, καὶ παρὼν ἐκλύσομαι.

et verbis Iosephi I. B. I. 5. 2. Plutarchi T. I. p. 161. et Aristidis T.  
I. p. 53. et 58. quae, quod usum illis Cl. Iac. Elsnerum in Matth.  
XVI. 19. cum maxime animadvertam, non exscribo. Sed vincu-  
lorum et ligationis cuiusdam in omnibus illis cum ratio habeatur,  
et haec legum praecepta innuant, a Mss. auctoritate recedere nunc  
quidem haud placet: nam Christi nostri ad Petrum, ὃ ἐὰν δῆσῃς  
ἐπὶ τῆς γῆς, etsi aliqua ex parte conveniat, plane geminum non  
est. Quod praecessit πάσης τῆς γώρας ob ea, quae mox de  
Osiride adduntur, non moveo. WESS.

31. 46. Καρπὸν ἀνθρώποις] Conf. supra c. 14. WESS.

31. 48. Ἐν τῷ ἄστρῳ τῷ κυνί] Athan. Kircher. Oedip. T.  
II. Part. II. p. 258. Habet canicula duas stellas, unam in capi-  
te, quae Isis vocatur, Porphyrio teste, alteram in lingua,  
quae Sirius proprie et Canis nuncupatur. Unde Diodorus inter  
titulus Isidis haec ponit, Ἐγὼ εἰμι ἡ ἐν τῷ ἄστρῳ τῷ κυνί ἐπι-  
τέλλουσα. Bene, modo pro Porphyrio posuisset Eratosthenem:  
ille enim de Antro Nympharum, Σῶθιν, ἣν κυνὸς ἀστέρῳ Ἑλλη-  
νες φασί, habet. hic c. 33. Cataster. ἔχει δ' ἀστέρῳ ἐπὶ μὲν  
τῆς κεφαλῆς α', δὲ Ἴσις λέγεται. Ἐπὶ τῆς γλώττης α', ὃν καὶ  
Σείριον καλοῦσι. Neque dissentiunt Plut. T. II. p. 376. A. et  
Horapollo c. 3. Conf. Had. Iunii I. Animadv. 5. WESS.

32. 49. Βούβαστος] Sic et XVI. 49. 51. Herodoto Βού-  
βαστις II. 137. Urbis vicinum lacum Aelian. XII. H. A. 29. si-  
tum Strabo XVII. p. 1158. B. describit. WESS.

32. 51. Κρόνος νεώτατος] Vide supra c. 13. Saturnus  
Deorum ante Osirim et Isidem natu minimus censebatur; eo enim  
aetate et regni auspiciis priores Agathodaemon, Sol, Vulcanus,  
ex gentis annalibus apud Euseb. Canon. p. 7. WESS.

32. 57. Σῶον σπέρματος] Hoc quid sibi velit divinare haud  
possum. Ideo tamquam peregrinum et inutile praeterivi. At nec  
marginalis lectio integra sanaque videtur. RHOD. Καὶ ἐβλαστον  
ἐκ κ. κ. εὐγενοῦς ὠοῦ, σπέρμα συγγενές] Ego vero inscriptionis  
verba, uti oportuerat, levi unius literae mutatione, refinxī.  
Dicit se proseminatum ex pulcro generosoque ovo, et fuisse

*semen diei cognatum*; plane ut in Aristoph. Avibus 695. *Τίπτει* πρώτιστον ὑπηνέμιον Νύξ ἢ μελανόπτερος ὄον· Ἐξ οὗ περιετλομέναις ὄραις ἐβλασταν Ἔρωσ ὁ ποσειδῶν, omnium primum parit ventosum furva Nox ovum, e quo temporibus exactis pro pullulavit Amor desiderabilis: sunt enim ea ex priscorum Theologia derivata. Aegyptiorum plures τὸν δημιουργὸν seu rerum principem caussam *Cneph*, eiusque ex ore prodiisse ovum, quod ruptum effuderit τὸν Φθὰ sive *Vulcanum*, teste Porphyrio in Euseb. III. P. E. 11. p. 115. alii Osirim eodem ex ovo prognatum ferebant; quos Orpheus secutus, cuius *πρωτόγονον ὄον* cum frangeretur, Phantem, qui non alius atque Osiris, uti dictum c. 11. exclusit, in Recognit. S. Clement. X. 18. et Homil. Clem. VI. 5. ac Damascio in Epist. ad Io. Mill. R. Bentlei p. 3. Iam cum Phante ex ovo prosiliente τὸ πᾶν ἐξ αὐτοῦ ἔλαμψε universaque radiis eius illustrarentur, neque alius in Theologia Orphica is sit, auctore Proclo, ac Ἔρωσ sive Cupido, satis utique apparet, cur Osiris hac in inscriptione sese *σπέσμα συγγενές ἡμέρας semen diei cognatum* profiteatur, et quorsum Aristophanicum illud referri oporteat. WESS.

32. 60. Ὡν ἐγὼ ἐδεργέτης ] Mallem ἐδρετής, nisi obstaret Isocratis Busiris *τηλιζούτων ἀγαθῶν ἐδεργέτης γεγενημένος* in Laudat. p. 333. Intelliguntur tamen leges, artes variae, vinum, fruges, earumque in horrea conportandarum modus; quorum omnium inventio Osiridi tribuitur cap. 14. 15. 16. WESS.

32. 66. Καὶ κινδύνων ἐπιχειμένων ] Legibus, puto, ut Athenis, ubi scitum τὸν ἐξειπόντα τὰ μυστήρια τεθνάναι, qua de lege Petitus Leg. Attic. p. 33. et persuasione vulgi, qua motus Herodotus cum his similia exponeret, *εὔστομα κείσθω* inquebat II. 171. Cum quibus autem quare conditione sacra et disciplinas occultiores communicare fuerint adsueta docet Clemens Alex. V. Strom. p. 670. WESS.

32. 71. Εἰς Βαβυλῶνα ] Videntur his pugnare, quae II. 1. verum illic Ctesiam sequitur, hic Aegyptiorum traditiones. Nam quod Io. Marshamus Can. Chron. p. 110. hanc Beli coloniam non Babylonem sed in Babyloniam videri deductam adfirmat, id neque tenere potest, neque hic perscribitur, ut bene Iac. Perizon. Orig. Babyl. c. 5. De *ἀτελεία* sacerdotum, qua publicorum onerum immunes erant, c. 73. et Chaldaeorum II. 29. WESS.

32. 77. Μιμουμένους τοὺς παρ' Αἰγυπτίοις ] His similia c. 33. Contra ea Aegyptios a Chaldaeis sideralem scientiam accepisse Ioseph. I. A. I. 8. 2. et Alexander Polyhist. in Euseb. IX. P. E. 17. auctores sunt. WESS.

33. 80. Συνοικῆσαι τὴν ἀρχαιοτάτην ] Repono hic *συνοικίσαι* per *ι*, et *οἰκίσαι* linea sequenti. ΣΤΕΡΗ. et ΡΗΘ. *Συνοικίσαι τὴν* ] Parui viris egregiis: postulat enim utrumque sermonis ge-



nus, et nihil crebrius eorum in scriptis libris permutatione. vid. IV. 27. XII. 32. XV. 66. WESS.

33. 81. *Τῶν Κόλχων ἕθνος*] Conf. infra c. 55. et Herodot. II. 104. De *Ἰσοῦράϊων* voce post deinceps dicitur. WESS.

33. 82. *Τὸ τῶν Ἰουδαίων*] Margo *Ἰσοῦράϊων* habet. At quae gens hoc nomine veniat, indaget, quemcunque *πολυπραγμαοεῖν* istud iuvat. Locus ei fuerit, si *Ἰνυραίων* scribatur. Sed nos merito contextus lectionem retinemus. A Iudaeis autem ad Aegyptios aliosque circumcisionem derivatam esse, admonere forsitan conduceit, sed confirmare opus non est. Legantur hac de re Biblia V. Gen. XVII. 25. Ioseph. I. Archacol. c. 11. 13. 16. RHOD.

33. 85. *Ἐξ Αἰγύπτου μετενηνεγμένον*] Circumcidendi ritum ab Aegyptiis ad Hebraeos migrasse Herodot. II. 104. innuit, et diserte Strabo XVII. p. 1180. et Celsus apud Origen. I. 22. p. 339. profitentur; quos potissimum eius opinionis auctores habuisse Io. Marsham. Can. Chron. p. 74. et Io. Spencer. I. Rit. Heb. c. 4. p. 69. quis est qui ignoret? Conf. Huetium in Origen. Homil. V. in Jerem. p. 85. WESS.

33. 87. *Ἀποίκους εἶναι Σαῖτῶν*] Eadem Theopompi fuit sententia et plurium aliorum, si fides Africano apud Euseb. X. P. E. XI. De Theopompo consentit Proclus in Timaeum p. 31. sed et contra ea censuisse Callisthenem et Phanodemum Atheniensium colonos fuisse Saïtas, *πατέρας τῶν Σαῖτῶν γενέσθαι* quin Atticum, Platonicum philosophum, adfirmasse, Theopompum obtrectandi studio et libidine veritatem corrupisse, suaque aetate Saïtarum legatos Athenas venisse, ut vetera cognationis cum Atheniensibus iura renovarent. Quae Attici perlevis ratio valuit ea aetate apud plures, habitique Saïtae Atheniensium sunt coloni, quare Apollonius Tyaneus Saïtis Epist. 70. *Ἀθηναίων*, inquit, *ἀπόγονοί ἐστε* qui cum statim adnectit, *καθάπερ ἐν Τιμαίῳ Πλάτων φησι*, id quidem difficulter persuadebit. Philosophus, uti recte ex Proclo Cl. Olearius, Atheniensium duntaxat amicos et cognatos facit; cuius tamen omnem orationis complexum si studiose scruteris, facile animadvertes, eum litem hanc secundum Saïtas dedisse. vid. eius Timaeum p. 21. F. WESS.

33. 89. *Τὴν πόλιν Ἄστν καλεῖσθαι*] Debile hoc et plane plumbeum visum est Tan. Fabro in Lucian. Timon. princ. et ea quidem de caussa, quod antiquissimi Graecorum quamcunque urbem *Ἄστν* appellitent: cui et ego adsentirer, nisi ineptissimae Grammaticorum originationes vocabulum *Ἄστν* peregre in Graeciam venisse, et a primis Atheniensibus ad universos Graeciae incolas propagatum fuisse arguerent. De urbe seu pago Aegypti *Ἄστν* Steph. in *Ἄστν*. WESS.

33. 92. *Εἰς τρία μέρη διανεμηθεῖσθαι*] De Aegyptiorum republica locuples testis Isocrat. Laud. Busirid. p. 328. et Nost. c. 73. 74. Atheniensium vero confusam ante multitudinem in tria

genera descripsit Theseus *πρῶτος ἀποκρίνας χωρὶς εὐπατρίδας καὶ γεωμόρους καὶ δημιουργούς*. Plut. in Thes. p. 11. C. a quo nihil admodum dissentit Plato in Timaeo p. 24. A. WESS.

33. 94. *Οἵτινες ἐπῆρχον*] Facit Codd. quorundam scriptura, ut fuisse hic suspicer, *οἵτινες ἱεροποιοὶ ἐπῆρχον, ἐν παιδείᾳ μάλιστα διατετριγότες*. Praeerant enim sacris Eupatridae, manseruntque in sera tempora Athenis ἱεροποιοὶ, ut ex Polluce VIII. 107. nemo ignorat. Munus, quod obibant, Ulpian. in Oratoris Midian. p. 352. ita designat, *ἱεροποιδὸν δὲ καλοῦσι τὸν ἐλοπιέοντα τοὺς μάντιες ὅτε θέουσι, μήποιν τι κακουργῶσιν ἐν ταῖς θυσίαις*, sed nimis arte: pertinebat ad eorum curam praeter varia sacrificia, ut sacra rite fierent, nihilque abesset, aut secus, atque oportebat, administraretur, sicuti monuit Des. Heraldus Animadv. in Ius Att. et Rom. II. 3. et ante eum auctor Lexici Rhetor. in Montfalconii Biblioth. Coisl. p. 492. Neque huic tamen suspicioni multum tribuo, cum ipsi in diversa abeant Mss. qui paullo ante τὸ τῶν Ἰσοῦραίων ἀρὰ μέσον Ἀραβίας. Ubi si Ἰουραίων, quod a vestigiis corruptae lectionis prope abest, refingas, ostendendum erit, Ituraeos iam olim circumcidendi morem probasse, quem tamen victos ab Aristobulo non longe a Diodori aetate recepisse demum ex Iosepho XIII. A. I. 11. 3. novimus. Verum ergo illic τῶν Ἰουδαίων, quod cum librariis eruditioribus haud lateret, pravam vocem in hunc locum inculcandam alii censuerunt. *Μοχ διατετριγότες* non movendum. Ioan. Chrysostom. τότε δὲ πολὺν χρόνον δημοσίαις πράγμασιν ἐνδιατρίψας, ἴσως ἂν καὶ ὄψον πολὺν προσετρίψατο, Lib. ad Vidu. Iunior. T. I. p. 349. A. edit. Montfalc. WESS.

33. 5. *Τὸν γὰρ Πέτην*] Exemplar unum *Διῦπέτην* habet, non *Πέτην*. Atqui Homerus in Boeotia v. 552. *νίδος Πετεῦο Μενεσθεύς*. Nam pro *Πέτης* dicitur etiam *Πετεῶς*. Fortasse autem hinc natus error, quod scripsisset Diodorus τὸν γὰρ δὴ Πέτην. STEPH.

33. 8. *Διφρυῶς δ' αὐτοῦ γεγονότος*] Hic locus mihi videtur vel mutilus vel corruptus vel luxatus. Quis enim unquam audivit, aut quis scripsit, Peteon, Menesthei patrem fuisse *διφρυῶς*, duarum naturarum hominem? Certe de Cecrope primo id omnes historici scripserunt, et nihil notius est in tota litteratura. At Peteo sive Peteus fuit Ornei filius, Erechthei nepos regis Athenarum, testibus Plutarcho in Theseo (p. 15. B.) Pausania in Atticis (Corinth. c. 25. p. 168.) Eustathio in Iliad. B. et aliis, de quo nullus scripsit eum fuisse *διφρυῶς*. Adde quod inverso ordine hoc loco memoratur: nam post illum de Erechtheo multo antiquiore tractat. Ego procul dubio locum hunc mendosum esse vel luxatum credo. Sed sine ope manuscriptorum, quae mihi desunt, eum sanare aggredi non audeo. PALMER. A Palmerii sententia nihil admodum recedit Io. Marsham. Canon. Chronol. p.

111. *Tres, inquit, memorat Diodorus, Petcon Menesthei patrem, Cecropem, et Erechtheum: desideratur Cecropis nomen. Locus enim mutilus est: sed res indicat: Τὸν γὰρ Πείην (Πειεῖν) τὸν πατέρα Μενεσθέως τοῦ στρατεύσαντος εἰς Τροίαν \* \* (desunt nonnulla) \* \* φανερώς Αἰγύπτιον ὑπάρξαντα τυχεῖν ἕσπερον Ἀθήνησι πολιτείας τε καὶ βασιλείας. Διγνοῦς δ' αὐτοῦ γεγοῆτος. Ista in editis male coniuncta sunt. Peteus enim Ornei filius, Erechthei regis nepos, ab Aegeo Athenis pulsus, in Phocide consenuit. Cecrops autem et διγνῆς fuit, et rex Athenarum. Cui et ego adstipulor. Nam in re obvia et omnibus notissima Diodorum tam turpiter se dedisse, quod Ill. Scaligero ad Euseb. CCCCLXI. in mentem venit, inPELLI haud possum, ut credam. WESS.*

33. 9. *Κατὰ τὴν ἰδίαν ἑπόστασιν] Conf. sup. c. 3. WESS.*

33. 11. *Δνεῖν πολιτειῶν] Non muto. Δνεῖν ὠρῶν inf. III.*

48. *Δνεῖν ἑταιρειῶν XV. 82. Δνεῖν γενναϊῶν XVI. 6. Nec hoc tantum genere, sed et ἀρχιτεκτόνων Δνεῖν Plut. T. II. p. 802. Α. στρατοπέδων Δνεῖν Polyb. II. 25. Vid. Iac. Gronovium ad eius libri c. 44. et Duker. in Thucyd. IV. 8. Mox si ἐρομίσθῃ praeoptaveris, non intercedam. Cecrops et dictus et censitus est διγνῆς. Eleganter Libanius T. I. p. 9. D. εἰκότως ἄρα θρησαυραὶ τε ἘΝΟΜΙΣΘΗΣΑΝ Ἀλεξάνδρῳ καὶ ὈΝΟΜΑΣΘΗΣΑΝ οἱ φίλοι. WESS.*

34. 14. *Τὸ γένος Αἰγύπτιον] Dissentiant plerique rerum Atticarum scriptores. Poëtae tamen Iliad. B. 548. et Herodoto VIII. 55. γηγενῆς terrigena; quo titulo cum passim illi ornentur, quorum incertior origo, haud omnino absurde Aegyptii. Nam quae Grammatici ad eum Homeri versum et Etymol. in Ἐρεχθεὺς garrunt, ea et turpia sunt et veri fidem excedunt. Conf. Io. Meursium II. Reg. Attic. c. 7. WESS.*

34. 18. *Διὰ τὴν ἰδιότητα τῆς χώρας] Vide c. 10. et de Cereris apud Aegyptios mysteriis c. 14. WESS.*

34. 31. *Ὁμολογεῖν δὲ καὶ τοὺς Ἀθηναίους] De Cereris in Atticam rege Erechtheo adventu et mysteriorum ea tempestate initiis paria Philochorus in Euseb. Canon. p. 28. et marmor Parium, ad quod plura Io. Prideaux p. 182. et Marsham. p. 260. WESS.*

34. 38. *Ἀπὸ τῶν κατ' Αἴγυπτον ἱερέων] A sacerdotibus Aegyptiorum primi ordinis, quo de genere Ὀδός, Ἱερογραμματεὺς, Στολιστῆς et Propheta in Clement. Alex. VI. Stromat. p. 758. His quodam modo similes Eumolpidae, e quibus Athenis Ἱεροφάντης et μυστηρίων ἐπιμεληταὶ atque alii, de quibus Io. Meurs. Eleusin. c. 13. 14. WESS.*

34. 39. *Τοὺς δὲ Κήρυκας] Praestat et Ceryces. Inter enim antiquissimas gentes populi Atheniensium erat et gens Κηρύκων Cerycum, [qui neque caduceatores neque praecones, sed sacro-*

rum ministri, popis et victimariis similes, ut egregie Is. Casaub. in Athen. VI. 6. XIV. 23. ostendit. Atque his paene pares erant Aegyptiorum *Pastophori*, templorum aeditui, quemadmodum Clemens Alex. III. Paedag. 2. Horapollo I. 40. et Porphyr. IV. Abst. 8. indicant, a ferendis *παστοῖς thalamis* sive Deorum aediculis id nominis sortiti. Nam *παστοφρούρους* eos facere et novum hoc vocabuli genus scriptoribus cum Nic. Caussino obtrudere, quis ferat? sed desino; plura de Pastophoris meditati otium fecit Ampl. G. Cuperi Harpoc. p. 130. WESS.

34. 40. *Μόνους τῶν Ἑλλήνων ὀμιλεῖν*] Isin Athenis, sed serius fuisse cultam ex lapide Reines. Clas. I. 135. atque aliunde novimus. Ergone sollemne illud *νῆ τῷ θεῷ per Cererem et Proserpinam* in Aristoph. *Lysistr.* eiusque Schol. 81. 148. respicit? Quod tamen Isidi proprium cum non sit, fortasse circa Alexandri et successorum aetatem per eius numen iureiurando adacti sunt. Huc refero et ad periuros quidem, quae Hesych. habet in *Ἰσις*. WESS.

34. 45. *Πλείστας ἀποικίας ἐπέμψαι*] Scripserat de *Aegyptiorum Coloniais* regnante Ptolemaeo Euergete *Ister* apud Ethnicographum in *Αἰγυπλὸς* et *Ἰλιεροῦ* cuius commentarios, ut aliorum, temporum iniuria nobis invidit. WESS.

34. 50. *Μηδεμῶς ἀξιολόγον*] Exemplar unum habet, *ὄν ἐκρίναμεν γράφειν, ἀλλὰ τοσαῦθ' ἡμῖν εἰρησθαι μόνον, στοχαζόμενοι τῆς συμμετρίας. Περὶ δὲ τῆς γ.* Quae si cui placet lectio, restituenda fuerit, reponendo videlicet *εἰρησθαι* et *στοχαζόμενοις*. aut certe addendo infinitivum *δεῖν* vel *προσῆκειν* ante *γράφειν*, qui ἀπὸ τοῦ κοινῶν repetatur ante *εἰρησθαι*. Potest tamen ferri *γράφειν* non praecedente infinitivo, at *εἰρησθαι* meo quidem iudicio non potest. Haec autem verba *στοχαζόμενοι τῆς συμμετρίας* antea posuit, cum alibi, tum p. 6. bis. STEPH. Verior mihi videtur scriptura Cod. M. quicum R. et Cl. 2. paene consentiunt. Vulgatum tamen reliqui, ne cui calumniandi ansam praeberem. WESS.

35. 57. *Ὀχυρότητι δὲ φυσικῇ*] *Provincia aditu difficilis, et annonae fecundae*, Tacit. I. Hist. II. Isocrati Laudat. Busir. p. 328. *ἀθανάτω τείχει τῷ Νεῖλῳ τετειχισμένη.* Quibus pleniora haec Iosephi II. B. I. XVI. 4. p. 190. *τετειχισται δὲ πάντοθεν ἢ δυσβάτοις ἐρημίαις, ἢ θαλάσσαις ἀλιμένοις, ἢ ποταμοῖς, ἢ ἔλεσιν, munitur autem undique Aegyptus aut in via solitudine, aut mari inportuoso, aut fluviiis, aut paludibus.* et IV. 10. 5. *Quamobrem Nectanebos, cum Persae bellum minarentur, ἐθάξῃε μάλιστα τῇ τῆς χώρας ὀχυρότητι, δυσπροσίτου ὄψης Αἰγύπτου* infr. XV. 42. et Augustus *inter alia dominationis arcana, vetitis, nisi permissu, ingredi senatoribus aut equitibus Romanis illustribus, eam seposuit* II. Annual. 59. Taciti. WESS.

35. 65. Ἀπὸ τῆς Τρωγλοδέτιδος] Non movero hoc, etsi alterum tritius, Nostroque haud spretum III. 33. Σμέρον τρωγλοδέτιν Galenus I. Antidot. p. 433. Ἴσιν τρωγλοδέτιν Africanus in Geopon. VII. 30. habent. WESS.

35. 66. Σταδίων πεντακισχίλιον] Haec omittenda non esse, calculus ostendit. Si enim 5500 per stadia 32 ad milliaria Germanica revoces, summa 171 milliarium et 2<sup>s</sup> stadiorum in quoto habetur. Alias 500 tantum stadia 18 milliaria et 21 stadia efficerent. Quid ergo hic tantopere mirandum esset? RHOD. Σταδίων πεντακισχίλιον] Adfirmant hos stadiorum numeros, quae infra c. 39. leguntur. WESS.

35. 72. Βάραθρα] Erant haec *Barathra* inter Pelusium et montem Casium, Polyb. V. 80.; quorum solum cum natura cavum et palustre esset, Nili effusionibus magis uliginosum et propterea adeuntibus difficile et formidolosum reddebatur, Strabo XVI. p. 1076. D. et XVII. p. 1154. D. Conf. infra XX. 74. WESS.

35. 74. Τῷ δὲ μίγξει] Non dissentit Strabo XVI. p. 1107. qui tamen cum Serbonidem lacum cum Asphaltite confundat, demiror egregium eius interpretem pravam lectionem βαθύτατον ἔχονσα ὕδωρ Nostri verbis stabilivisse, paeneque codicum manu exaratorum βαρύτατον ὕδωρ damnasse, quo tamen nihil eo loco verius, uti ex Galeno IV. simp. Medic. facult. p. 52., ubi de gravi lacus Asphaltitis aqua omnia eadem, clarissime liquet, et quod sequentia vehementer expostulant. Erat autem Serbonis inter Casium et Rhinocolura, propius tamen Ostracinen, Aristid. T. III. p. 591. WESS.

35. 81. Τὸν δὲ τῆς λίμνης τόπον] Hic τόπον restituo, quod loco suo τόπος (*locus*) iste in marginem emovit. RHOD. Τὸν δὲ τῆς λίμνης τόπον] Placet Rhodomanni iudicium. Ingestae autem arenae lacum paulatim exsiccaverunt. Plinii aevo *palus* erat *modica* V. H. N. 13.; nunc, sicuti testes oculati asseverant, multo minor. WESS.

35. 83. Μετὰ στρατευμάτων] Vide inf. XVI. 46. WESS.

35. 87. Παραχρούεται] Frustratur et fallit. Sic παραχρούεσθαι τὸν δῆμον Aristot. IV. Polit. 12. τὰς δόξας τῶν ἀχροουμένων παραχρούεσθαι Isoerat. Panegy. extrem., et Proteus παραχρουόμενος ὄψεις τὰς ἀνθρώπων Dionys. T. II. p. 167. Vid. infra III. 63. IV. 9. XVI. 53. WESS.

36. 96. Καὶ πελάζοντες] Glossema hoc esse, quis vel paulum attendens non videt? RHOD.

36. 97. Οὐδεμίαν ἀντίληψιν βοηθείας ἔχουσι] Quod apprehendere, quove expedire se queant. Porphyg. in Eclog. Phys. Stobensis p. 129. στερεμίαν δ' ὑπόστασιν οὐδεμίαν ἔχειν πρὸς ἀντίληψιν. Plut. T. I. p. 3. A. ὅπως οὖν μὴ παρέχοιεν ἐκ τῶν τριχῶν ἀντίληψιν τοῖς πολέμοις. Paulo diversiore usu ἀντίληψιν τῶν πραγμάτων Ioseph. XVIII. A. I. 6. 9. WESS.

36. 4. Ἀλιμένω θαλάττῃ προσκλυζομένη] Iosephus de Aegyptio ἐστὶ γὰρ, inquit, κατὰ τὴν γῆν δυσέμβολος, καὶ τὰ πρὸς θαλάσσης ἀλίμενος. et tum τὸ καλούμενον Αἰγύπτιον πέλαγος πᾶν ἄπορον ὄρμιων IV. B. I. 10. 5. et II. 16. 4. Mitto alia, quae illustrando Xenophonti Ephesio III. p. 53. erudite coacervavit Cel. T. Hemsterh. Miscel. Observ. Vol. V. T. III. p. 69. WESS.

36. 9. Οὐκ ἔστιν εὐρεῖν ἀσφαλῆ λιμένα] Habuisse hanc oram portus *Gazam*, *Raphiam*, *Casium* et alios, sed omnes et difficillimi accessus et navium stationibus male fidos, Iosepho I. B. I. 21. 5. et Nostro XX. 75. credimus. WESS.

36. 11. Ταυνία παρ' ὄλην] *Dorsum est arenosum*, fluctibus haud profundis mersum et propterea navigantibus insidiosum. Straboni I. p. 85. B. ταυνία ὑψαλος. Conf. Miscell. Obs. Vol. V. T. III. p. 70. et quae ad *Taeniam longam* Itiner. Anton. p. 10. scripsi. Alioqui et ταυνία litoris porrectum tractum, quo aut peninsula continenti cohaeret aut vicinac regiones disparantur, indicat, ut III. 49. WESS.

36. 15. Ἐποελλόντων τῶν σκαφῶν] Mallem navibus in brevia intractis, ut Polyb. I. 51. ἢ πρὸς τὴν γῆν φερόμενον (σκάφος) ἐπώκειλε. Noster XII. 62. ἢ μὲν τριήρης ἐπάκειλεν. et distinctius XIII. 13. οὐκ ὀλίγα τῶν τριήρων ἐν τοῖς βράχεσιν ἐπώκειλαν. Posset etiam Clar. I. ἐποκειλάντων, si quae necessitas urgeret, defendi ex XX. 88. Verum eo nunc non utimur. WESS.

36. 21. Διοχλίων μὲν σταδίων] Herodot. II. 6. maritimae huic orae stadiorum III millia cum 100 tribuit, sed et eam orditur a sinu Plinthinete, atque ad paludem Serbonidem producit. Straboni est III millium et 300, et quidem a Pelusio ad ostium Canobicum XVII. p. 1135., at p. 1140. stadiorum 31000; quo spatio cum et Noster oram eam, quam Delta facit, c. 34. finiat, ego quidem non dubito, quin prior Strabonis locus ex posteriore et Diodoro sit corrigendus. Hic et quae extra Delta erat Aegyptus in summam additur. WESS.

36. 29. Καταχωρισμένον] Elegans verbi usus de rebus, quae memoriae mandantur et quibus locus in monumentis datur, ab Is. Casaub. in Strabon. I. p. 30. exemplis, Nostro etiam V. 5. XIII. 114. ad partes vocato, affirmatur. Addo ex Ioseph. XIV. A. I. 10. 20. τὴν τε ἐπιστολὴν καταχωρίσαμεν εἰς τὰ δημόσια ἡμῶν γράμματα. et Gemin. Elem. Astron. c. 14. ἀλλ' οἱ ἐκ τοῦ ὡς ἐπὶ πᾶν γινομένον τὸ σύμφωνον λαμβάνοντες εἰς τὰ παραλήγματα καταχώρισαν. Mendum, quod in Heronis Autom. p. 263. animadvertis, hinc et Athenaci de Machin. p. 8. verbis facile elues. WESS.

36. 30. Πλείους τῶν τρισμυρίων] Ill. Marsham. Canon. sui p. 420. secutus probabilem rationem ita scripserat: Mss. faciunt ne in coniectura posthaec positum censeatur. Sub Ptolemaeis in-

gens Aegyptus incrementum cepit, urbiumque et pagorum, cum Philadelphus regnaret, numerus xxx millia excessit. Hoc Theocritus clarissime significat Idyl. XVII. 82. De Catone in Stephani *Διόσπολις*, quem haec Ptolemaeorum tempora respexisse arbitratur Marshamus, dubites. Ante enim inductam a Persis vastitatem tricenas millia vicorum et triginta, hominum vero septuagies centena millia, quae mox Diodorus regioni ante Lagidarum imperium tribuit, Thebas, i. e. Aegyptum, ut bene Is. Vossius in Melan. I. 9. 80. numerasse ac possedisse prodit. WESS. V. Heyn. Opusc. Acad. I. 225.

36. 33. *Ὁὐκ ἐλάττους εἶναι τῶν τριακοσίων*] Hoc si dederit Diodorus, oportet hominum numerus per bella regum Aegypti civilia immanem in modum decreverit. At contra venit Ioseph. II. B. I. 16. 4. p. 190. in Aegyptiorum catalogum, Vespasiano principe, *πεντήκοντα πρὸς ταῖς ἐπτακοσίαις μυριάδας ἀνθρώπων, δίχα τῶν Ἀλεξάνδρειαν κατοικοῦντων*, septuagies quinques centena hominum millia, non additis in summam Alexandrinis, qui Nostri aetate plures trecentis millibus erant, sicuti ait XVII. 52. referens. Sed haec eorum discordia evanescet, si *τριακοσίων* vocem, ab H. Stephano in omnibus exemplaribus haud repertam, quam longissime hinc elimines. WESS.

37. 41. *Ἐκ τόπων ἀοράτων*] Sic de sua aetate Diodorus. et Claudian. de Nilo, 10. *Fluctibus ignotis nostrum procurrit in orbem Secreto de fonte cadens, qui semper inani Quaerendus ratione latet; nec contigit ulli Hoc vidisse caput.* Nobis ex Lusitanorum navigationibus et libris loca ea explorata cognitaque satis sunt. Vid. Hieron. Lobi Hist. Abyss. T. I. p. 133. et Ath. Kircheri Oedip. T. I. Syntag. I. 7. WESS.

37. 48. *Στάδια μάλιστα πωρς μύρια*] Strabo I. p. 56. plus decem millia stadiorum emetiri ait; sed flexuum Nili rationem habuisse non videtur. Adde L. eius XVII. p. 1134. WESS.

37. 49. *Σὺν αἷς ποιεῖται καμπαῖς. κατὰ δὲ τοὺς*] Quae vulgo inter haec inculcata legebantur de Meroë, ea omnia Codicum subnixus auctoritate eieci. Sunt enim ab hoc loco aliena, neque omni ex parte vera, sive ea de insulae ambitu, seu de fluvii spatio cum Poggio et margine Ms. R. acceperis. Leguntur cap. seq. WESS.

37. 52. *Τὰς παρακειμένας*] Participium hoc remouetur. Intelligit enim κατ' ἔξοχὴν Africam et Asiam. Quas duas orbis habitabilis continentes Nilus, Aegyptum percurrens, disterminat. RHOD.

37. 55. *Ἐισχεόμενον*] Marginale *ἐκχεόμενον* in contextum versio mea recipit. RHOD. *Ἐισχεόμενον*] Ego de hac scriptura nihil demuto. Aristid. T. III. p. 568. *ὅπερ εἰς τὴν θάλασσαν εἰσχεόμενον ἀδήλως ἀναλοῦσθαι.* Heliodor. V. p. 229. *καὶ κατὰ-περ διὰ στομίου εἰς τὸν Κρισσαῖον κόλπον εἰσχεόμενον* etc. Scio

ἐκχεόμενον commodam dare sententiam, nec meliorem tamen vulgato. Omnis fluvius diverso adpectu ἐκχεόμενος et εἰσχεόμενος recte dicitur. WESS.

37. 58. Τῆ δ' ἔλαττον τούτων] Non deerunt, quibus ἐλάττων probabitur, a quorum opinione dissentit Diodorus, qui XVI. 86. de Philippo, ἔχων ἵππους οὐκ ἔλαττον τῶν διαχιλίων. et XXIV. Eclog. 1. fin. τῶν δὲ ἐαλωκότων οὐκ ἔλαττον τούτων. Simili prorsus modo S. Paullus 1. Timoth. V. 9. χήρα καταλελειμένη μὴ ἔλαττον ἐπιῶν ἐξήκοντα. in quibus omnibus adverbii formam et usum induit, sicuti ἐλάττω et πλείω c. 92. et XII. 98. WESS.

37. 66. Ἐρ' ἰκανὸν τόπον] Poggii ridicule vertentis, usque ad locum *Efficanum nomine*, errorem castigavit P. Leopard. V. Emendat. 13. WESS.

37. 71. Ἐν τοῖς καλουμένοις καταράκταις] Conf. Strab. XVII. p. 1172. WESS.

38. 74. Πέτρους] Loco huius non displicet in margine additum προῶνας, quod maior in hoc emphasis contineatur. Rupes enim exstantes seu prominentes ita nominantur, quae cum altius se attollunt, secpali efficiuntur. RHOD. Vulgatum non damno; tametsi enim Galeni aetate plerique τὰς πέτρας praesferrent, uti memorat IX. simp. Medic. facult. p. 121. secus alii censebant, quos inter et Alciphr. III. Epist. 59. Strabo περιώδη ὄρη δὲν *supercilium petrosum* in cataractarum descriptione XVII. p. 1172. Aristid. T. III. p. 580. πέτρας μεγάλας habet. Neque tamen inelegans Clar. Codd. προῶνας, sed poetis frequentatius. Vid. Rittershus. in Oppian. III. Cyneg. 315. WESS.

38. 78. Ὁ μεσάζων] Id pro νησιζών retinendum puto. Intelligit enim illud 10 stadiorum in longitudine spatium, quod rupes ab initio Cataractarum ad finem usque in medio complectuntur. An vero in his angustiis, quas aquarum gurgites undique obtinent, et tam celeri fluminis prolapsu, insulare aliquid esse queat, lectori iudicandum relinquo. RHOD. Haud repugno, quo minus pristinam sedem recepta lectio tueatur: debilis tamen est Rhodomanni disputatio; passim enim videmus non longe a fluviorum cataractis insulare aliquid aggeri et paullatim concervari. Quod et circa Nili cataractas, de quibus auctor, usu venisse, locuples testis est Aristid. T. III. p. 577. ubi suis se oculis νῆσον τῶν καταράκτων *insulam cataractarum* usurpasse ait. WESS.

38. 81. Κατὰ τοῦτο τὸ μέρος] Hoc etsi glossematis speciem habet, rationis tamen aliquid est, cur, ut genuinum, sessionem pristinam obtineat. RHOD. Servavit ed. Wess.: ipse tamen ut de omisso ab se loquitur in varietate scripturae.

38. 85. Πείματος] Πείθρον in marg. nothum est. RHOD.

38. 88. Καταράκται μὲν οὐκ εἰσι] Persuasit Aethiops,



domi nobilis, Aristidi, inter Pselchin, quae in ipsis Aethiopiae finibus, et Meroen ad triginta sex numerari T. III. p. 581. WESS.

38. 92. Ὡς ἔφημεν] Προθεραπείαν hanc cur excludamus, nihil, meo iudicio, causae est. Nam et commode in memoriam revocat, quod paulo ante dixit, et repetitionem eorundem excusat. RHOD. Καὶ μίαν εὐμερέθη] Ego vero Codd. priscos secutus delevi. Inserta ab eo sunt, cui scholion, superiori capiti inculcatum, debemus. WESS.

38. 95. Ἀπὸ τῆς μητρὸς αὐτοῦ Μερῶης] Ioseph. H. A. I. 10. 2. a sorore Meroë, et Strabo XVII. p. 1139. A. sed et esse ait, qui uxoris nomen urbi atque insulae regem indidisse ferant: quorum opinio eadem ac prior videri poterit, si illa et soror et coniux fuerit Cambysis apud Herodot. III. 31. De Cambysis matre olim magna fuit discordia, sed qui Meroën appellarit, neminem alium invenio. Vid. Athen. XIII. 1. Polyæn. VIII. 29. WESS.

38. 97. Θυρεῶ παραπλησίαν] Straboni θυρεοειδῆς, eiusdemque longitudinis et latitudinis XVII. p. 1177. A.; nec dissentit Heliodor. X. p. 461. WESS.

38. 3. Ἄεριον] Tu videris, an magis conveniat ἄπειρον in margine. Tametsi alterum istud ex illorum numero est, quae peculiariter hic auctor usurpat, et immensum, infinitum, ac similia ipsi significat. RHOD. Diodoro, ut bene Rhodomannus, ἄεριον omne immane, et aut latissime patens aut excelsissime in aërem exurgens; sic II. 54. Arabia διέλπηται πεδίοις ἀμμόδεσιν, ἀερίοις τὸ μέγεθος i. e. immensae vastitatis. III. 44. ἄεριοι θῖνες ἄμιον. XVII. 49. ἄμιον μέγεθος ἄεριον. Conf. Stanleium in Aeschyl. Pers. 820. et Hesych. in Ἀερίῳ. WESS.

38. 6. Χαλκοῦ] Aes enim cum auro plerumque invenitur coniunctum. An vero argentum et ferrum simul istie eruatur, ambigi potest. Ideo suspicione glossematis non caret haec parenthesis ἀργύρου καὶ σιδήρου καί. RHOD.

38. 7. Πολυτελῶν] Hoc etiam non immixtum contextui, tamen subauditur. RHOD. Utramque viri docti animadversionem subvertit et pessum dat Strabo XVII. p. 1177. A. ἔστι δέ, de Meroë loquitur, καὶ χαλκωρυχεῖα, καὶ σιδηρουργεῖα, καὶ χρυσεῖα, καὶ λίθων γένη πολυτελῶν. Meminit et ebeni, sed priscis in editionibus; nam quae Amstelodami divulgata est, καὶ ὁ ἔμπορος praefert. WESS. II. 16. de India ἔχει δὲ χρυσὸν, ἄργυρον, σίδηρον, χαλκόν· πρὸς δὲ τούτοις λίθων παντοίων καὶ πολυτελῶν ἐν αὐτῇ ἔστι πληθὺς.

39. 12. Ἐπαντλουμένας] An satis apta sit haec metaphora, nondum liquet. Ideo suspectum est hoc participium. Quid si ἀπαντλουμένας, exhaustis lacunis, vel ἐκπονομένας, exultas? Sed nihil temere mutandum. RHOD. Explicabit Strabo XVII. p. 1174. B. νήσους δ' ὁ Νεῖλος κατεσπαρμένας ἔχει παμπόλλας, τὰς μὲν καλυπτομένας ὕλας ἐν ταῖς ἀναβάσει, τὰς δ' ἐν μέ-

ρους. ἐποχετεύεται δὲ τοῖς κοχλίαις τὰ λίαν ἕξλα. *Nilus plures insulas hinc inde sparsas complectitur, quarum aliae excrescentis fluvii aquis totae obteguntur, aliae ex parte. quae vero fluctibus altius exstant cochliarum ope irrigantur.* Τὰ ἕξλα proprie quae mari eminent Aeliano XIII. H. A. 20. et XV. 2., tum quae fluvio; quae si milio conserenda sint, largiorem aquae copiam postulant, quod id limosa et humida terra gaudeat, ut docent Geoponic. II. 38. Iam γεωργεῖσθαι κέγχρω si malueris, non intercedam; quamquam et vulgatum nihil habet incommodi. Strabo XII. p. 826. de Ponti ora maritima ex Casauboni emendatione; γεωργεῖται οὐ πολλά. WESS.

39. 13. Καὶ κυνοκεφάλων] Copulam, quae ex Rhodomaniana exsulabat, et nupero interpreti Diodori Gallico errandi occasio fuit, restitui. De Cynocephalis infra III. 35. WESS.

39. 19. Τὰς ἐκβολὰς τοῦ ποταμοῦ] Bene hoc habet. Vide infra XV. 42. et praeter Strabon. XVII. p. 1136. D. Achillem Tatium IV. p. 247. WESS.

39. 21. Καλεῖται Πηλουσιακὸν] Ostiorum hunc ordinem probant Strabo XVII. p. 1153. Plinius V. H. N. 10. Ptolemaeus IV. Geogr. p. 116. alii aliter, de quibus Christ. Cellarius IV. G. A. p. 21. Quod autem Nostro Φατιμικὸν, sive, ut Codd. edunt, Φατιμιτικὸν, id Straboni Φατικὸν, Plinio *Phatmiticon*, seu, quod in scriptis invenit Cl. Salmasius in Solin. p. 339. *Phatmiticon*, Ptolemaeo *Παθμητικὸν*, veteri eius interpreti Ulmensis editionis *Patmiticon*. Unde Φατιμιτικὸν hoc loco, aut certe Φατιριτικὸν, verius censeo: ad quam formam τὸ Νεῖλου στόμα Φαγγητικὸν in L. XX. 76. quod neque viro egregio H. Valesio in Ammian. XXII. 15. latuit, corrigendum. WESS.

39. 26. Οὐδὲν κατεπέγει γράφειν] Scholion occupavit Cod. Coisl. , e quo propagatae sunt absurdae Mutin. et Reg. scripturae. Vulgata Diodori est, recurritque II. 22. III. 3. WESS.

39. 28. Φυλακαῖς ἐνκαίροις διελημμένη] Multum hoc praestat Codd. quorundam lectionem. Ioseph. I. B. I. 20. 5. τοῦτο δὲ πόργοις διελήπται μεγίστοις. Aristot. VII. Politic. 12. τὰ δὲ τείχη διελήφθαι φυλακτηρίοις καὶ πόργοις κατὰ τόπους ἐπικαίρους. quibus in verbis muniendi et distinguendi potestatem induit, ut saepe in his libris, sicuti I. 96. XII. 49. XIII. 14. XIV. 75. Strabo XII. p. 833. ἀποτόμοις φάραξι καὶ κρημοῖς διελημμένη. cui geminum germanum est in huius libri capite superiore. De urbibus autem utraque in ripa ostiorum Nili positus agitur et XV. 42. WESS.

39. 32. Νεζῶς ὁ Ψαμμητίχου] Sic et Herodot. II. 158. At Aristoteles I. Meteorol. 14. pro Neco habet Sesostrin. Strabo et Sesostris et Psammetichi filii meminit XVII. p. 1157. A. Alibi autem animum occupatum habuit Aeg. Menagius, cum hoc ex loco

Darium Persam Isthmo Corinthiaco perfodiendo manus admovisse in Diogen. Laert. I. 99. probat. WESS.

39. 39. Φιλοτέχνος] Alienum videtur. Minus tamen ineptum, quam καὶ πενταχοσίων, quod post ἑπταχοσίων paulo post interiectum venit. RHOD. Φιλότεχρον διάφραγμα] Hoc probo propter φιλότεχρον ὄργανον V. 37. et εὔρεμα φιλότεχρον XVII. 44. Videtur autem illud διάφραγμα ex eorum genere fuisse, quibus in Belgii nostri oris aquarum cataractae ex usu clauduntur et aperiuntur. Nam quod Bernh. Montefalconius fossam hanc statim, postquam perfecta erat, a Ptolemaeo iterum obstructam hinc patere arbitratur Praefat. in Cosmam Indicopleusten c. 8. I. id secus est. WESS.

39. 43. Ὀνομάζεται Πτολεμαῖος] Aeliano XII. H. A. 29. Πτολεμαίων ποταμῶς, eique Strabo quodam modo favet, reges Ptolemaeos Euripum hunc absolvisse memorans. Diodoro adsentitur Tzetzes Chiliad. VII. 457. Fossae initium erat ad Phacusam Arabiae, terminabatur ad Arsinoën sinus Arabici. Vid. Strabon. XVII. p. 1158. WESS.

40. 48. Ἑπταχοσίων καὶ πενταχοσίων] Haec verba καὶ πενταχοσίων, quae in tribus exemplaribus non sunt, ne hic quidem posita fuisse cuperem: nam pro χίλια καὶ διακόσια quis ἑπτακόσια καὶ πεντακόσια dicit? STEPH. Ἑπταχοσίων καὶ πεντήχοντα] Recte H. Stephan. Ambitum insulae, quam Delta vocant, Strabo XVII. p. 1137. trium millium stadiorum facit, neque adeo longe a Diodori numeris recedit. WESS.

40. 52. Ποταμώχωστος γὰρ οὖσα] Plerique olim inferiorem Aegyptum Nili alluvionibus et aggesto limo natam censuere. Δῶρον τοῦ ποταμοῦ propterea Herodoto II. 5. et Nilus Heliodoro IX. p. 444. Αἰγύπτου τῆς μὲν ἄνω σωτήρ, τῆς κάτω δὲ καὶ πατήρ καὶ δημιουργός. Quae uti elegantia se commendant, vereor ne ipso rerum usu et seculorum tot decursu non confirmentur. Conf. infra III. 33. et Brodaeum III. Miscell. 5. WESS.

40. 57. Ἀπὸ τοῦ σχήματος κοχλίας] Cochliam, qua agros uberiore Nili aqua irrigabant, et cuius Strabo XVII. p. 1160. et 1174. meminit, Archimedes, in Aegypto cum esset, invenisse docetur infra V. 37. Describitur elegantissime a Philone Iud. de Confus. Ling. p. 325. D. et Vitruvio X. 11. WESS.

40. 61. Καρπῶν καὶ κανλῶν] Vide c. 80. WESS.

40. 67. Ἀωτός τε γὰρ γίνεται] Niloticam lotum, elegantissime dissertatione explicitam, in Nymphaearum classem retulit libro de plantis Aegypti p. 73. Prosp. Alpinus. Ex ea panem confieri, Theophrastus IV. Hist. plant. 10. et Plinius XXII. H. N. 21. consentiunt. Conf. Tzetz. Chil. VI. 714. WESS.

40. 69. Τό, τε κισσόριον] Ciborium videtur appellare ipsam plantam, quae fabam Aegyptiam fert: contra ea Strabo XVII. p. 1151. καὶ ὁ κύριος Αἰγύπτιος, ἔξ αὐτὸ τοῦ κισσόριον.

*Et faba, inquit, Aegyptia, e qua ciborium, sive fabae eius granum. Diodoro paria facit Dioscorides III. 148. quod et monuit Cl. Salmasius in Solin. p. 679. Posset alioqui τὸ κιβώριον ipsum esse vasculum, quod oculis suis fabarum earum fructum continet. sed prius malim. De planta ipsa herbariae rei studiosis necdum bene convenit. Vid. Io. Vestingium Observat. in Prosp. Alpin. c. 33. et Io. Bodaeum a Stapel in Theophrasti IV. p. 415. WESS.*

40. 71. *Καὶ γύσαις πλείους*] Glossatoris alicuius assumentum est. RHOD. *Δένδρον γένη πλείω καὶ τούτων*] Probo viri docti animadversionem. Scripsi praeterea ἔστι ob Codd. Coisl. et Reg.; vulgatum εἰσὶ si quis tamen malit, tueri id poterit animadversione Is. Casauboni in Athen. VIII. 3. p. 367. WESS.

40. 72. *Περσίου*] Dioscorides I. 188. *περσέαν* cum Theophrasto vocat. Quae lectio prae caeteris restituenda est. RHOD. Iterum accedo Rhodomanno. Tamen Aeliano semel atque iterum *Περσαῖαι* XI. H. A. 11. et 40. Pausaniae *Περσεία* V. 14. Eam vero ex Aethiopia in Aegyptum transplantatam agnoscit Sostratus in Schol. Nicandri Theriac. 764.; alii ex Perside: Callimachus Perseum in Aegyptum transportasse et sibi cognominem fecisse in iisdem Nicandri Schol. ad Alexipharm. 100. tradit. Tu vide Cl. Salmasii Homonym. Hyles Iatric. c. 88. WESS.

40. 75. *Τῶν δὲ συζαμίρων*] Duplicem sycaminum Aegypto tribuit, quarum altera moris uber, vulgo *μορέα* et *σνζόμορος*, altera Aegyptia, cuius fructus, ficui persimiles, ipso ex caudice prorumpabant, Theophrast. I. H. Pl. 24. et IV. 2. ubi copiose, ut solet, Bod. a Stapel, et Prosp. Alpin. Plant. Aegypt. c. 6. Praeter fructus abundantem copiam et aliud commodum Sycaminus Aegypto praestabat; aggeres enim Niloticos radicibus suis colligans, ut pertinacius cohaerent, efficiebat; quamobrem et extra ordinem in eos animadvertebatur, qui arborem succiderent, in L. 10. D. de Extraord. Criminib. WESS.

Ibid. *Τὸν τῶν μόρων καρπὸν*] Haec verior lectio est, quam marginalis. Quod autem paulo inferius sequitur *μυζάρια* nihil sani habet. RHOD.

40. 79. *Καλούμενα μυζάρια*] Parum abest, quin huic vocī dicam inpingam. Graecis, qui seriore aetate scripserunt, bellarii quoddam genus notavit: id suadent exempla a Carolo du Fresne in Gloss. Append. producta; nam quod vir doctissimus ea de piscibus accepit, Imp. Antonini verbis, sed perperam intellectis, factum est: eius enim *μυζάριον*, uti egregie ostendit Gataker. in Imp. IV. 48. mucus est, nec quicquam iuvat, etsi ita censuerit P. Leopard. XVI. Emend. 22. haec Diodori Muxaria. Ne prorsus tamen hinc extruderem, Hesychio debetur, qui in *Μυζία* habet *μυζάρια*, sive, ut Iunio visum, *μυζάρια, ὡς σῦκα βιβρωσόμενα*. Videtur enim Grammaticus vocem ubi ubi invenisse. Itaque si genuina hoc loco fuerint, fructum arboris *Muxae* apud

Prosp. Alpinum de Plant. Aegypt. c. 40. notabunt; nec alium intelligit Cl. Salmasius in Solin. p. 931. WESS.

41. 83. Ὁ καλοῦσι ζέθος ] Sic praestat. Τὸ ζέθος Strabo XVII. p. 1179. C. τὸ ἐν Αἰγύπτῳ καλούμενον ζέθος Theophrastus VI. Causs. Plant. 15. et infra IV. 2. Adde Hadr. Iunii II. Animadv. 12. WESS.

41. 86. Προσαγορευόμενον δὲ Κίκι ] Straboni κίκι XVII. p. 1179. C., ceteris κίκι, unde κίκινον ἔλαιον Galeno V. simp. Medicam. facult. p. 82. Soli Gronovii Herodoto II. 94. Τήκι, quod schedae Mediceae, fidae quidem in multis, sed schedae tamen, a viro doctissimo inpetrarunt, ut omnium auctoritati praeponeretur. De Diodori autem verbis nihil utique addidisset, si H. Stephani editionem in consilium mittere sustinuisset. WESS.

41. 94. Τοῖς χηρέοις παραπλήσιαι ] Haud aliter Herodot. II. 68. Aristot. V. H. A. 32. Plinius VIII. H. N. 25. verum ille XVII cubitorum longitudinem, iste xv, hic duodeviginti bestiae tribuit. Aelian. XVII. H. A. 6. crocodilum rege Psaumeticho cubitorum xxv et Amaside palmorum quatuor supra xxvi cubita, Prosp. autem Alpin. IV. Rer. Aegypt. 5. xxx cubitorum in Aegypto conspectum refert. WESS.

41. 96. Ὡς κατ' ἀνθρώπων ] Mallem, *vitam tam longè prorogat ac homo*. Ζῶσιν οἱ πλεῖστοι καθάπερ ὁ μακρόβιος ἀνθρώπος, quo modo alibi de elephantis. Plutarchus T. II. p. 381. C. et Aelian. X. H. A. 21. crocodilos plerosque sexagenarios mori perhibent. De lingua quod additur, id caute accipiendum. *Linguae usu caret* prudenter Plinius: habet enim linguam, sed exiguam et immobilem. Herodotus, Diodorus, Plutarchus, Solinus, Ammianus, quique alii praeterea linguam crocodilo negant, ex vulgi rumore loquuti videntur, ut S. Bochartus V. Hierozoic. 16. p. 771. et O. Borrich. Herm. c. 10. egregie docuerunt. WESS.

41. 98. Δέρμα αὐτοῦ πᾶν φοιδωτόν ἐστιν ] Aelian. X. H. A. 24. λεπῖσι μὲν γὰρ τε καὶ φολῖσι πέφρακται, καὶ ὡς ἂν εἴποι τις ὀπλισται. καὶ εἰκόουσιν ὀστράκοις καρτέροις ἢ κόγχαις. quae crocodili tergum, squamis asperum et crustis quasi munitum eleganter depingunt; nec minus Arist. II. H. A. 10. Parum autem intererit, sive tu διαφέρων σκληρότητι seu διάφορον legas: utroque promiscue utitur: διαφέρουσα τῷ κάλλει II. 4. at c. 16. διάφορος τῷ κάλλει. WESS.

41. 1. Ἄτο δὲ οἱ χαυλιόδοντες ] Plinius, *unum superiore mobili maxilla imprimi morsum, alias terribilem, pectinatim stipante se dentium serie*: quod paullo diversum: neque χαυλιόδοντες sunt serrati, sive instar serrae divisi dentes, ut Plinio adscripsit Harduinus, sed exserti et prominentes, sicuti in elephantis et apris. Ioan. Diacon. in Seut. Hesiodi 303. χαυλιόδοντα μὲν λέγεται, ὅσα ἔχουσι τοὺς ὀδόντας ἐξἑστηγότας τοῦ στόμα-

τος, οἷον ἐλέφας καὶ ὁ χοῖρος. Diodoro praeter Herodotum consentit Aristot. II. H. A. 10. WESS.

41. 4. Ἀδρὰ] Hoc, ut *ξυματιζὸν* atque elegans, retinemus. Quod glossator per *μεγάλα* in margine explicare voluit. RHOD.

41. 8. Ὑεῖας σάοζας] Distinctius Herodot. II. 70. WESS.

41. 11. Πληθος δ' αὐτῶν ἀνέθιγτόν ἐστι] Philo Iud. παρ' οἷς μὲν γὰρ τιμᾶται, πληθύνει μάλιστα. παρὰ δὲ τοῖς λυμαιομένοις οὐδ' ὄναρ φαίνεται, in Euseb. VIII. P. E. 14. p. 398. C. Quare plures erant apud Ombitas, rariores in finibus Tentyritarum, quippe crocodilis infestorum, Aelian. X. H. A. 21.; unde et *immortale odium et nunquam sanabile vulnus* inter hos finitimos, de quo eleganter Iuvenal. Satir. XV. 33. WESS.

41. 19. Παραπλήσιος ὢν μικρῇ κινῇ] *Animal parvum est mustelae magnitudine atque figura, sed longe breviori corpore quam mustela visitur, et alvo ampliori, caput parvum habet, rostrum nigrum, acutum, ore parvo, dentibus murinis constat, oculis parvis, admodum vivacibus, itidem visitur brevissimo collo, ventre crasso, pedibus parvis, unguibusque uncinatis, caudam vero habet longam, serpentis modo in tenuitatem abeuntem, colore cinereo fulvescente.* Sic Prosp. Alpin. IV. R. Aegypt. 9. cuius accurata animalis descriptio longe superat Nicandream Theriac. 195. neque verum est, quod poeta et Strabo XVII. p. 1166. et Aelian. VI. H. A. 38. de aspidum ovis, ab ichneumone frangi solitis, memorant: viviparum enim id serpentis genus est. Conf. infra c. 87. WESS.

42. 26. Καὶ δίχρηλος] Aristot. II. H. A. 7. *δίχρηλόν ἐστι ὥσπερ βοῦς.* et ante eum Herodot. II. 71.; quorum opinionem Plinius VIII. H. N. 26. et Achilles Tat. IV. p. 223. adfirmant. Tamen Prosp. Alpinus omnes eos falsi arguit, et divisos quidem eius pedes, sed bifidos negat IV. R. Aegypt. c. 12. Contra eum et sententiae consortes veniunt Ezech. Spanhem. Dissert. IV. de Usu et Pr. Numis. p. 172. et Harduinus in VIII. 28. Plinii, ob Philippi Imp. nummum; sed is, nisi oculi fallunt, bifidos et bovi similes pedes haud ostendit. WESS.

42. 28. Κέρορον καὶ γωνῖν] Sic et Herodot. II. 71. Verius Plinius, secutus Aristotelem, esse *rostrum resimo, cauda et dentibus aprorum aduncis*, prodit. Herodoti et Diodori errorem notavit S. Bochartus V. Hierozoic. 14. p. 757. WESS.

42. 32. Γυμναζόμερον κατὰ βάρους] Ill. Scaligeri et Vossii *εὐραζόμερον* quiescens celices vetusti spernunt et ipsa ratio. Suffocatur sub undis Hippopotamus, nisi per intervalla respiret, uti Philosophus scribit VIII. H. A. 2.; quo ergo modo poterit diem in imo fluvii fundo dormiens consumere? Ad haec *inter arundines celsus et nimia densitate squalentes* bellua haec cubilia ponit, progrediturque ex illis ad segetes depascendas, Ammian. XXII. 15.

Degit itaque interdium in Nilo per limum reptans, subinde emergens, seque exereens, ut marina illa ταῖς συνεχέσει πληγαῖς γυμναζόμενα, quae fluctibus se quodam modo exercent in Philon. Iud. de Opif. Mund. p. 13. D. iam, quod Codd. Coislin. et Mutin. τὰς μὲν ἡμέρας ποιεῖ habent, id puto Scholion esse. Novi ποιεῖν χρόνον ex S. Lucae Actis A. XV. 33. XVIII. 23. idque perperam a Ioan. Brodaeo in Lucillii Epigram. II. Antholog. 37. p. 235. sollicitari; sed cultius est vulgatum et Aristoteli probatum II. H. A. 10. WESS.

42. 36. Τὰς γεωργίας τὰς κατ' Αἴγυπτον] Rectius verteris cum Bocharto, agris, qui sunt per Aegyptum, V. Hierozoic. 15. p. 762. quo etiam loco de voracissima bestia abunde tibi satisfaciet. WESS.

42. 40. Κοπεῦσι] Vocabuli huius auctoritatem lectori studioso inquirendam relinquo. Mihi enim nihil occurrit haecenus. Utut vero se res habeat, instrumentum aliquod, verberando vel tundendo aut incidendo aptum, qualia sunt pistilla vel conti adunci et hamati, aut id genus caetera, significatur. Et perspicua est etymologia a κόπτειν, id est, pulsando. RHOE. Habet κοπέας malleolos inter statuarii instrumenta Lucian. Somnii c. 13. qui hamis ferreis coniuncti duplici ictu nocere poterant. Posses alioqui κοπίων scribere et de venatoris aut lanii cultro accipere, ut XII. 24. et in Aelian. XIII. H. A. 6. verum eo, uti neque Vessii ἐπισιδήροις, voce novi commatis, nunc quidem non indigemus. WESS.

42. 41. Ἀρχὰς στύπνας] S. Bocharto, cui in mentem venerat ἀρτάνας vel σπάρτας corrigere V. Hieroz. 15. p. 762. haud possum assentiri. Ἀρχαὶ στύπναι sunt capita sive principia stupeorum vinculorum, ut passim quarumcunque rerum, uti funium, trabium et aliarum. Plutarchus T. I. p. 777. E. Cato καλώδιον ἐκάστῳ μικρὸν προσήστησεν, ὃ δὲ τῇ ἀρχῇ προσείχετο γελλὸς ἐμμεγέθης. Philo Iud. I. Vit. Mos. p. 638. D. καὶ δοξίδος ἐκ μέσων ἀπαιωρήσαντες, ἧς τὰς ἀρχὰς δισὶ νέοις, τῷ μὲν ἔνθεν, τῷ δὲ ἔνθεν ἐπιθέτετες etc. Atque ita Act. A. X. 16. WESS.

42. 44. Τῶν δ' ἔντοσθεν] Hoc malui. Veniunt eadem ab origine τὰ ἐντόσθια intestinā, sive τὰ ἔσωθεν τοῦ σώματος κείμενα, uti Etymolog. explicat, et ἐντοσθίδια Philosophi IV. Part. Animal. 9. WESS.

42. 49. Πλήθος εἰς ταριχεῖαν] Vide Xenocratē de Alim. ex piscib. c. 36. et infra I. 52. WESS.

42. 52. Ἀπὸ θερινῶν τροπῶν] Distinetius Plinius a Luna nova, quaecunque post solstitium est. Alii a Sirii ortu, e cuius etiam exorientis hilariore colore de futura aquae copia ominabantur, teste Hephæstione, de cuius verbis plura Cl. Salmas. in Solin. p. 303. etc. Conf. Is. Voss. de Nili Origin. c. 48. et supra c. 19. WESS.

42. 58. *Μικροῖς χόμασι*] Straboni XVII. p. 1136. B. *παραχόματα*. quos aggeres aquam Niloticam commodissime dispensantes qui proterve rumpere extra ordinem plectebatur. Ulpian. L. 10. D. Extraord. Crimin. *In Aegypto qui chomata rumpit vel dissolvit (hi sunt aggeres, qui quidem solent aquam Niloticam continere) aequè plectitur extra ordinem et pro conditione sua etc.* Adde L. unic. C. Theodos. de Agger. Nili non Corrup. et quae ad eam erudite Gothofredus: id tamen prave quod *Cataractas et Catadupos* Ciceronis et Strabonis eodem atque hos aggeres censuerit. WESS.

43. 63. *Ἐπάρχειν τὰ βοσκήματα*] Herodot. II. 14. *τότε σπείρας ἕκαστος τὴν ἐοῦτόν ἄρουραν, ἐσβάλλει ἐς αὐτὴν ἕς, tunc in suum quisque rus iacto semine sues immittit.* Quam versionem et Plutarch. IV. Sympos. 5. p. 670. A., eadem docentem, inprobat Th. Gale. Sues enim inmissas in sementem haud dubie omne frumentum in ventres potius quam limum recondituras. Aliam propterea interpretationis viam ineundam ex Hesychii ἕς, ἄλειψαρ, βοῦς. Hinc patere Herodotum vaccas et iuencas intellexisse, quae pedibus semen molli humo inculcarent atque obruerent. Sic ille; qui si recordatus esset eorum, quae Aelian. X. H. A. 16. de porcis in sementem conculcandam ab Aegyptiis compulsis ex Eudoxo refert, haud dubie una litura et Herodoto et Plutareho satisfecisset: in Hesychio nihil quoque praesidii; corrupta enim eius verba, nisi erro, scribi debent, ἕς, ἄλειψαρ ἕος, quo Seythas inungi solitos addit, et usi olim Graeci sunt ex Perside reduces in Xenophontis IV. Exp. Cyr. p. 257. WESS.

43. 66. *Κούροις ἀρότροις ἐπαγαρόντας*] Eleganter Columella II. R. R. 2. 25. *In Aegypto plerumque arboribus viduum solum frumentis seminatur: atque eiusmodi terram, pinguibus arenis putrem, veluti cinerem solutam, quamvis levissimo dente moveri satis est.* WESS.

43. 69. *Ὅλως γὰρ πᾶσα γεωργία*] Huc spectant quae apud Athen. V. 8. p. 203. C. et Herodot. II. 14. WESS.

43. 72. *Ἡ τε ἀμπελόφυτος*] Vide quae diximus c. 15. WESS.

43. 75. *Ἀνέντες μηλόβοτον*] *Pecoribus depascendam.* Strabo V. p. 326. A. *τὴν δὲ χώραν μηλόβοτον τοῖς περιουχοῦσι κατέλιπον.* et VII. p. 485. A. *μικρὰν δ' ἐποίησε Νουσιζῶς καὶ τὸ πεδίον μηλόβοτον.* quibus in locis poenae genus est, quo hostium agri vastitate inducta pastioni pecudum duntaxat relinquebantur, uti et infra XV. 63. Non item hoc loco et in Plutarchi T. II. p. 831. E. *Ἀναξαγόρας δὲ τὴν χώραν κατέλιπε μηλόβοτον.* Vid. Menag. et Mer. Casaub. in Laert. II. 6. WESS.

43. 77. *Τὰ πρόβατα*] Articulus redundat. RHOD.

43. 86. *Τὸν ἴσον χρόνον ταπεινοῦται*] Omnium optime haec illustrabit Herodotus, ex schedis Mediceis ab eruditissimo



I. Gronovio correctus, II. 19. et post eum Plinius V. N. II. 9. WESS.

43. 90. Ταῖς Κεζλάου νήσοις] Iterum ex Herodoto II. 97. Pulchre Seneca IV. Q. N. 2. *Illa facies pulcherrima est, cum iam se in agros Nilus ingessit. Latent campi, opertaeque sunt valles; oppida insularum modo exstant. Nullum in mediterraneis nisi per navigia commercium est. Maiorque est laetitia gentibus, quo minus terrarum suarum vident. Et Strabo XV. p. 1014. B. et XVII. p. 1137. B. Id quoque bene, quod collibus partim nativis, partim manu factis, villas atque oppida inponat. Sesostris enim in excelsas aggerum moles, quas captivorum manibus coacervaverat, eas civitates, quae humiliorem sedem occupaverant, transmigrare iusserat I. 57. WESS.*

44. 98. Εἰς ἄνεσιν τρέπονται] Festos eos dies, a Nilo Νειλῶν Heliodoro IX. p. 423. dictos, comissando, piscando, navigando hilares consumebant, Aelian. X. H. A. 43. WESS.

44. 2. Νειλοσκοπέϊον] Straboni XVII. p. 1171. D. et qui eum sequitur, Heliodoro IX. p. 443. Νειλομέτριον. Ad quod ego exemplum Niloscopium malim, quam Nili speculam: neque enim speculam recte dixeris eum puteum, cuius mensurae notis fluvii auctus deprehendebantur. Quid autem aliud Nilometrium sive Niloscopium? WESS.

44. 5. Πόσους πῆχεις ἢ δακτύλους] Hoc probo. A cubitis, quibus fluvii incrementa metiebantur, et Nili auctus et instrumentum, quo adscendentis aquas explorabant et mensurabant, senior aetas πῆχεις appellavit: prioris usus index existit Himerius in Biblioth. Photii Cod. CCXLII. p. 1127. posterioris Socrates I. H. E. 18. et Sozomen. I. H. E. 8., de cuius utriusque verbis plura Steph. Le Moyne T. II. Var. Sac. p. 324. Solitos autem Aegypti praefectos literis quaqua versum missis Nili incrementis copiam significare, liquido innuit Imp. Iulian. Epist. 50. WESS.

44. 9. Τὸ πλῆθος τῶν ἐσομένων καρπῶν] In duodecim enim fluvii augescens cubitis Aegyptus famem sentit, in tredecim etiamnum esurit: quatuordecim cubita hilaritatem adferunt: quindecim securitatem, sedecim delicias, teste Plinio V. N. II. 9. Quae longo usu cum essent animalversa, poterant utique ex fluvii incrementis de frugum abundantia coniecturam facere. Vid. M. Frid. Wendelini Admiranda Nili c. 7. WESS.

44. 10. Ἐξ πολλῶν χρόνων] Nihil hic mutandum censeo, ut nec in proxime sequente nota. RHOD. Vid. sup. c. 14. WESS.

44. 18. Ὅλος γὰρ ὑπὲρ τῆς ἀναβάσεως] Omnem hanc Diodori de Nili fontibus et auctibus disputationem, nulla eius mentione facta, exscripsit et pro sua, paucissimis mutatis, usurpavit Theophylactus Simocata VII. Histor. Mauric. 17. WESS.

44. 29. Ὁ πολυπρόγυμον] Etsi Herodoto subinde acerbus sit Diodorus, hic tamen titulus ob rerum plurimarum usum et

inquisitionem laudi eius cedit, uti et Ctesiae infra II. 32. Conf. D. Heinsium Lect. Theocrit. c. 5. Nili originem et incrementa habes in Herodoti II. 19. etc. WESS.

44. 34. *Τῶν τόπων τῶν κατ' Αἰγύπτου*] De Thucyde hoc scriptum nollem. Quae de Inaro is et Atheniensibus commemorat I. 104. 109. omnia alia docent. WESS.

45. 41. *Ἄλλ' οὐδὲ μέγχι τῶν ὄρων*] Ipse Diodorus his plane adversa scribit I. 67. WESS.

45. 42. *Ἄξενά πάντα ἦν τὰ περὶ τοὺς*] Iustum hoc et legitimum est. Sic XVII. 82. *ἄξενά καὶ ἀνεπίβατα πάντα τὰ μέγχι τῆς χώρας ὑπῆρχεν.* WESS.

45. 45. *Πρώτον στρατεύσατος*] Primus Ptolemaeus Philadelphus *Troglodyticen excussit*, ut Plinius ait, et in finibus Aethiopiae Ptolemaidem ad venatus elephantorum condidit, VI. H. N. 29. Elephantorum enim caussa eam expeditionem ingressum esse filius Euergetes indicat in marmore Adulitano apud Cosmam Indicopleust. II. *Cosmograph. p. 141.* WESS.

45. 50. *Μέγχι τῶνδε τῶν ἱστοριογράφων*] Apposita margini lectio mihi potior videtur, quod et alibi ita loquatur, si bene memini. Retinendo alteram ex *τῶνδε* facerem *τοῦδε*, subaudiendo *χρόνον*, ut dicitur *ἐξ οὗ* et *ἀφ' οὗ*, subaudiendo *χρόνον*, potius quam *ἐξ ὧν* et *ἀφ' ὧν*, subaudiendo *χρόνον*. STEPH. Restituo cum H. Stephano *τοῦδε*, ut intelligatur *τοῦ χρόνου*, vel *καιροῦ*. Itemque *ἀζούειν*, pro *ἀζοῖν*, ut sit enallage pro *ἀζοῦσαι*. Et aliquanto post, pro *εἰς πίστιν αὐτῶν*, lege cum eodem *εἰς πίστιν αὐτῶν*, ut referatur ad *προσδεόμενον*. RHOD. *Μέγχι τῶνδε τῶν ἱστοριῶν γραφομένων*] Sequor H. Stephani et codicum vetustorum iudicium. Contra Diodorum tamen venit Aristoteles in Biblioth. Photii Cod. CCXLIX. p. 1322. et Eratosthenes apud Proclum in Timaeum p. 37. WESS.

45. 51. *Οὐδ' ἀζοῖν ἀπερήνατο*] Fortasse *ἀζοῦσαι* scripserat Diodorus, ut *ἐωρακέναι*, alioqui *ἀζούειν* vicinior est accusativo *ἀζοῖν*. STEPH. Nihil hic, tametsi Clar. 2. coniecturam Stephani iuvet, muto. Vulgatum cultius est et idem plane significat atque illud, quod eius in locum intruditur. Aristides T. III. p. 579. *si Herodotus unquam Elephantinen, ut ait, venisset, ἔσθ' ὅπως πρῶτον μὲν ἀζοῖν διηγείτο, περὶ ὧν εἶδεν; fierine potuit, ut ex auditu ea narraret, quae viderat ipse?* Simile est in Attica lege, quam Demosthen. II. cont. Stephan. p. 634. exscripsit, *ἀζοῖν εἶναι μαρτυρεῖν τεθνεῶτος, licere de mortuo, id quod auditu acceperis, testari.* Pro quo *ἀζοῖν μαρτυρεῖν* nunc quidem legitur in Oratione Isaci de Philoctem. Hered. p. 61., sed, uti oportet, in ea de Ciron. Hered. p. 70. et 72. WESS.

45. 54. *Ἀπὸ τοῦ περιφρόοντος*] Perstringit hanc opinionem Herodot. II. 21. et 23. WESS.

45. 56. Ὑγιὲς οὐδὲν λέγοντες] Frequens hoc de nugacibus mendacibusque. Demosthen. de Coron. p. 137. οὐθ' οὕτως ὑγιὲς περὶ τούτων εἶρηκεν. et Legat. fals. p. 238. αὐτοὶ δ' οὐδοτιῶν ὑγιὲς γράψαντες. Conf. Cl. Ti. Hemsterh. in Luciani D. Mort. XXVIII. 3. WESS.

45. 57. Εἰς πίστιν αὐτῶν] In omnibus nostris codicibus legitur αὐτῶν, sed omnibus fidem hic derogo, ac repeno αὐτῶν, ut sit sensus, *rationem afferentes ad probandum, quae ipsamet probatione indiget*. Sic autem saepe pronomem hoc usurpatur. Nec tamen ignoro αὐτῶν posse ab accusativo πίστιν regi: sed quid referet hic genitivus? STEPH. et RHOD. Non refragor viro doctissimo; posses alioqui delere, ut sane fecit Theophylactus. Retinui tamen illud αὐτῶν, quod Codd. scriptis haud improbaretur. WESS.

45. 59. Προσαγορευόμενοι δὲ Ἀβύγιοι] Habet Κυναμόλογος III. 31. sed Aethiopas: Ἀβύγιοι Ptolemaeus IV. Geogr. 8. Utri horum cum *Molgiis* seu *Bolgiis* convenient, an commune nihil habeant, haud temere dixerim. WESS.

45. 63. Διὸ καὶ πολυγονώτατον] Conf. c. 40. WESS.

45. 66. Τῆς ἐρεσιολογίας πολὺν κερχωρισμένοι] Ordinem verborum si spectes, non dissimile hoc Demadis orationis, quae illi tribuitur, principio, ἂν δ' ἐδρίσκωμαι τῶν ἐγκεκλημένων κερχωρισμένους. Sed nobis hic negotium facessit ἐρεσιλογία, quae parili modo scripta invenitur XII. 16. at XVII. 116. ἐρεσιλογία, sed invito Cod. Reg. et ἐρεσιλογίαν probante. Polybius tamen Excerpt. Legat. p. 1108. τὴν πρὸς ἀλλήλους ἐρεσιλογίαν *mutuas verborum altercationes* habet, Philo vero Iud. Quod Om. Prob. Lib. p. 867. E. ἀνελόντες οὖν ἐκποδιὸν τὰς προσησπιστικὰς ἐρεσιολογίας. ita enim Cod. Augustan., non, uti vulgo, ἐλευθερίας. In verbo eadem discordia, quam H. Stephanus intactam haud praeteriit ad Diogen. Laert. II. 134. Mihi exempli caussa Porphyrii Commentarius extremus de Antro Nymph. satis erit: οὐ δεῖ δὲ τὰς τοιαύτας ἐξηγήσεις βεβιασμένας ἡγεῖσθαι, καὶ ἐρεσιλογούντων πιθανότητας. Optime enim Nostri verbis respondet, et plausibilium nugarum commenta complectitur. In tanto vero scripturae dissidio a scriptis libris non discedam, ἐρεσιλογίαν vero et analogiae similiorem arbitratus. WESS.

45. 70. Ἀστάπουν προσηγορεύουσαν] Nilus *medios Aethiopas* secat, cognominatus *Astapus*, quod illarum gentium lingua significat *aquam e tenebris profluentem*, V. H. N. 9. Plinius. Alii Astapum a Nilo distinguunt: de quibus Ch. Cellar. IV. Geogr. 8. p. 241. WESS.

45. 71. Εἰς τὴν Ἑλλήνων διάλεκτον] Tautologiam esse suspicer, at tolerandam. RHOD. Posse haec sine damno abesse nemo, qui vel N. T. libros usu triverit, distitebitur. Nostri tamen est c. II. huius libri, *μεθρομηνομένων γὰρ τούτων εἰς τὸν Ἑλληνικὸν τῆς διαλέκτου τρόπον*. WESS.

45. 74. Ὁ πλεῖστον ἀπέχων] Articulus, hic in parenthesi conclusus, necessario requiritur. RHOD.

46. 77. Ἀνατίθῃσι Αἰβύνοι] Haec negabit Herodot. II. 32. longe ea in narratione Diodoro circumspectior. WESS.

46. 87. Φησὶ τοὺς ἐτισίαις] Schol. Apollonii Rhod. IV. 269. opinionem hanc Thaletis, sed minus dextre, exponit: melius Diogen. Laert. I. 37., elegantissime vero Philo Iud., cui eadem sententia placuit, I. Vit. Mos. p. 620. A. WESS.

46. 93. Οἱ ποταμοὶ πάντες] Sequitur Herodot. II. 20. WESS.

46. 99. Εὐριπίδης μαθητὴς] Conf. supra c. 7. et Vitruvium Praefat. L. VII. Euripidis versus sunt ex Archelao tragocodia, legunturque auctiores in Anonymi Commentario de Nilo cum eiusdem argumenti aliis ex Helenae Euripid. principio et Aeschylō, nec mendis plane liberi, ut ex Is. Vossio in Melan I. 9. 27. videbis. Eisdem ex Helena exscripsit Schol. Apollonii Rhod. IV. 269. et Aristid. T. III. p. 559. sed male habitos; quod cum de Aristide multis abhinc annis admonuerit doctissimus G. Iungermannus, haud iniuria mireris Cl. Iebbiū intactos eos praetereuntem. WESS.

46. 6. Ἀδύνατον χιόνα πίπτειν] Lucan. X. 219. *Vana fides veterum, Nilo, quod crescat in arva, Aethiopum prodesse nives. Non Arctos in illis Montibus aut Boreas. Testis tibi sole perusti Ipse color populi, calidique vaporibus Austri.* Quae ad patrum Senecae IV. Q. N. 2. verba exacta esse in confesso est; nec omni tamen ex parte vera: celsiora enim Aethiopiae loca, ut pleraque montium cacumina, frigent, nec deest illis nix neque grando, etsi rarior, uti docet Iob. Ludolf. I. H. Aethiop. c. 5. et ante eum Hieron. Lobus Histor. Abyssin. p. 141. WESS.

46. 14. Ὅντε νέφους ἐποστάσεις] Atqui Thessaliae fluvius est, *Quique nec humentes nebulas nec rore madentem Aëra, nec tenues ventos suspirat Anauros,* Lucan. VI. 369. et *in Aegypto minus odorati flores, quia nubilosus et roscidus aër est a Nilo flumine,* auctore Plinio XXI. N. H. 7., sed sibi V. 9. et plerisque omnibus veterum obloquente; quorum sententiam eo colore excusari posse, si vapores crassiores fluvio negentur, ostendit post Brodaeum III. Miscell. 30. M. F. Wendelin. Admirand. Nili c. 11. WESS.

46. 16. Ἡρόδοτος δέ φησι] Lib. II. 25. WESS.

46. 19. Ὑγρασίαν ἐκ τοῦ Νείλου] Etiam haec verba ad explicandam auctoris sententiam necessario pertinent. Idcirco pro genuinis habenda. RHOD.

47. 26. Ὅν γὰρ ἐν τοῖς κάμμασι] Scite reponit H. Stephan. ἐν μὲν τοῖς κ. Sed post Νείλον, quod antecedit, comma substituendum, loco puncti. RHOD. Non assentior viris doctissimis. Id si Diodorus scripsisset, profecto Herodoti sententiam, qua fluvium aestate maiores auctus capere negat, perperam exposuisset.

Verte ergo mecum, neque enim aestate augeri, sed hieme ob dictam ante caussam minui. WESS.

47. 38. Τῶν γενομένων ὕμβρων] Scholiastes, in margine ἰδάτωρ apponens, etiam ipse σχεδιάζει, et ut solet impudenter nugatur. Quo numero etiam sequentia eius duo scholia censenda. RHOD.

47. 42. Τὸ δὲ πλεῖθος τῆς σωρευομένης χιόρος] Democriti opinionem pervertit Schol. Apollon. Rhod. IV. 269. Etesias ex ubere nivis sub septemtrionem liquefactae copia nasci, indicat Aristoteles II. Meteorol. 5. et firmat Ulpian. in Demosth. Philip. I. p. 35. in Democriti sententiam de Nili origine aperte transgressus. De Etesiiis non longe abeunt nostrae aetatis philosophi. Conf. Cl. Pet. Musschenbroekii Physicam segm. 1752. WESS.

47. 57. Οὔπω τῶν ἐτησίων πνεύτων] Herodotus saepe numero nondum spirantibus Etesiiis in arva Nilum adscendere ait II. 20., unde iusta conclusione conficias, eos nonnunquam aequales esse fluvii incrementis. Prodromi saltem fluvii auctibus erant priores, Plinius II. N. II. 47., cui Cl. Salmas. in Solin. p. 304. iunge. WESS.

47. 65. Ἀγέσται] Nihil fere dissentit Philosophus II. Meteorol. 6. neque A. Gellius II. N. A. 22. ex alia atque alia coeli parte Etesias spirare adseverans. Quare bene Hesychius, Ἀγέσται, οἱ Ἐτήσιοι. WESS.

47. 68. Ἄλλ' οὐδὲ τὴν πίστιν ἔχει] Nunc citra dubium ea res est. Aethiopia enim excelsissimis montibus est distincta, sicuti ostendit Iob. Ludolf. I. H. Aeth. 6. Restat autem multum dubii in scriptura huius loci; cui enim bono ἐνέργειαι illa? Ne dicam dolo, fuisse arbitror, διὰ τῆς ἐναργείας συγχωρομένην, ipsa evidentia comprobata, id quod res ipsa expostulat. Video quidem cap. 40. καὶ γὰρ ἐάν τις βιάζηται τὴν ἐνέργειαν. et ἢ τὴν ἐνέργειαν παρέχεσθαι μαρτυροῦσαν. praeterea c. 41. ἄλλως τε καὶ τῆς ἐνέργειας αὐτῆς μαρτυρομένης ὑπὸ τῶν etc. sed ea omnia mihi suspecta sunt, et in plerisque manu exarati codices ἐναργείας vocem malunt, quam satis constat haud raro ab altera loco et sede sua deiectam fuisse, sicuti in Strabone I. p. 45. A. et Philon. Iud. de Cherub. p. 117. D. et Dionysio Halicarnas. T. II. p. 83., ubi plura doctissimus Sylburg. WESS.

48. 69. Ἐφορος δὲ καινοτάτην] Ingressus erat Ephorus, quemadmodum hoc loco Diodorus, longam de Nilo, eius fontibus et incrementi caussis, disputationem Lib. XI. Histor., confutaveratque aliorum ea de re opiniones, auctore Theone Progymnasm. c. 2. p. 16. Cuiusmodi dissertationis cum sine dubio pars sit illud de Nilo fragmentum, quod ex Anonymo scriptore excerptum primas H. Stephanus vulgavit, et Herodoto post praebitum a Iungermanno exemplum, iungi solet, haud iniusta fortasse suspicio erit, Ephoro deberi, et a Grammaticis propter eius elegan-

tiam descriptum servatumque esse: quae tamen coniectura tum demum iure facta videbitur, si quod aliunde illi robur et pondus accesserit. WESS.

48. 73. Ἐτι δὲ κισσιρῳῶδι] Codicis Cl. 2. scriptura huius est παραδιόρθωσις. Aegyptus κισσιρῳῶδις ob soli ingenium, quod pumicem quodammodo referebat, ut insula Thera ex eadem causa κισσιρῳῶδις καὶ πολυγῶρος in Schol. Pindari Pyth. IV. 11. WESS.

48. 80. Μιδὲ παρὰ τῶν εἰδότηων] Hoc quidem satis acerbe. Et tamen, nisi falsum tradidit Porphyrius, Aegyptii veteres censebant, τὸ ἕδωρ γάτωθεν ἀναβλυσταίνειν τῇ ἀναβάσει τοῦ Νείλου, aquam e terra in Nili incrementis scaturire, proptereaque Nilum ἰδρῶτα τῆς γῆς terrae sudorem recte dici in Comment. Procli in Timaeum p. 37., ubi et ea sententia rationibus, his Nostri non multum dissimilibus, infringitur. WESS.

48. 85. Πλείω τῶν ἐξασισχίλων] Conf. supra c. 30. Mox πρὶν ἢ malui, quod et alias, scriptis addicentibus libris, non spernam. WESS.

48. 90. Τοσοῦτο πλεῖθος] Relativum istud exaggeratorium loco movendum non esse arbitrator. Respectum enim habet ad mirificam Nili exundationem, quae maiorem aquarum copiam deponit, quam quae cavernis terrae contineatur. RHOD.

48. 97. Τὸ ψεῦδος τῆς τε ποταμοχώστου γῆς] Haec, pressius si urseris, non bene illis convenient, quae c. 34. professus est. Voluit, puto, aggestae huic terrae cavitates et meatus, in quibus aqua comprehensa lateret, negare. WESS.

48. 99. Τῶν ἐν τούτοις ἐλέγχων] Articulum hic ociosum esse; facile concesseris. RHOD.

48. 2. Πολλὴν χώραν πεποίηκε] Maeandri campum, Μαιάνδρου πεδίον Herodot. II. 10. ex aggesto limo natum, Strabo XII. p. 868. Prienen, mari olim accubantem, continuis Maeandri alluvionibus in solo mediterraneo collocatam significat. WESS.

48. 4. Ὁ Ἀχελῷος ποταμὸς] Echinades eum insulas et fecisse et conditas paene continentis iunxisse docent Thucydides II. 102. Pausan. VIII. 24. p. 647. et Strabo X. p. 703. A. quem et de Cephiso vide IX. p. 624. B. Id vero quod de Maeandro, Acheloo et Cephiso hic proditur, omnibus esse fluvii commune res ipsa monet et ab eodem ostenditur L. I. p. 91. WESS.

48. 9. Ὀλιγορηχότα τῆς ἀληθείας] Nihil Seneca dissentiens Ephorus, inquit, non religiosissimae fidei, saepe decipit, saepe decipitur VII. Q. N. 16. Quod utriusque iudicium confirmat G. Io. Vossius I. H. Graec. 7. WESS.

49. 15. Ἀντιπεπορθὸς ταῖς ὥραις] Bene Rhodoman. quae contraria habet anni tempora. Theophrastus de Lapid. p. 393. καὶ ἐκεῖνος μὲν τούτῳ (τῷ λίθῳ) ὥσπερ ἀντιπεπορθὸς, et hic quidem lapis illi contrarium habet ingenium. Alio usu Pythago-

rei adhibebant, adfirmantes τὸ δίκαιον τὸ ἀντιπεπονθὸς ἄλλω εἶναι in Philosophi Ethic. Eudem. IV. 3. Iustum enim talione quadam absolvi, et aequissimum esse, ut ea patiaris, quae prior ipse fecisses. Οὐ μέντοι ὡς οἱ Πυθαγόρειοι (τὸ ἀντιπεπονθὸς) ἔλεγον. ἐκεῖνοι μὲν γὰρ ὄροντο δίκαιον εἶναι, ἃ ἐποίησέ τις, ταῦτα ἀντιπαθεῖν, in eiusdem Ethic. Maior. I. 34. p. 31. Hanc vero de Nili origine opinionem Eudoxus sacerdotum esse Aegyptiorum ait in Plutarchi IV. Plac. Phil. I., Nicagorae vero Critici in Apollon. Rhod. IV. 269. Conf. O. Borrichium Hermet. c. 8. WESS.

49. 17. Διὰ καῦμα ἀοίκητον] Valuerat olim opinio regiones, zonae torridae subiectas, propter vehementem solis aestum incolas non pati: quam falsam esse nunc quidem vix quisquam dubitat. De Aethiopiae locorumque, per quae Nilus in Aegyptum evolvitur, temperato aëre Hieron. Lobus Histor. Abyssin. p. 85. WESS.

49. 23. Τὸ πλεονάζον τῶν] Haec procul dubio germana est lectio. Quae enim alias foret syntaxis? cum γέρεσθαι non ad χειμῶνας, sed ad ἐδάτων τὸ πλεονάζον referatur. RHOD.

49. 26. Παρέλθειν] Utraque lectio stare potest. Sed voluit Glossator forte ambiguitatem, quae est in παρέλθειν, suo isto explicare. RHOD. Sic II. 14. παρήλθεν εἰς Ἀμμωνα, ζρησομένη τῷ θεῷ. pluribusque aliis in locis, ut mutare temerarium sit. WESS.

49. 33. Φανερὰν καὶ πρόχειρον ἀντιλόγησιν] Tametsi προφανές ἄπεισι illud recte dicatur, quod omnibus cognitum exploratumque est III. 2., arbitror tamen a librario venisse, quod codices M. et Coisl. praeseferunt. Quod vero Diodorus ex rotundiore terrae figura philosophos conclusione quadam urget, et Nilum ex opposita zona progredi posse negat, id perperam ab eo institui atque a vero longissime recedere admonuerunt viri doctissimi Latin. Latinius Biblioth. suae p. 76. et M. Frid. Wendelin. Admirand. Nili c. 8. WESS.

49. 37. Βιάζεται τὴν ἐνάργειαν] Sequor schedas Coislinianas. Τὴν ἐνάργειαν βιάζεσθαι est vim illi facere et contra res evidentes quaesitis sermonibus venire, sive, ut cap. seq. καταμάχεσθαι τὴν ἀλήθειαν. Ad quem modum βιάζεσθαι θεοῦ βούλησιν contra Dei voluntatem niti Ioseph. IV. A. I. 6. 5., et τὴν πάροδον βιάζεσθαι vi transitum aperire Zosim. V. 29. similiaque. WESS.

49. 46. Εἰζὸς γὰρ εἶναι] Theophylactus εἰζὸς γὰρ εἶναι καὶ ἐτέροισ ἐκεί ποταμῶν, sive coniectura ductus, seu quod id in eo esset libro, quem exscribebat, legit. Utcunque decernas, sententiam Diodori melius Rhodomanno percepit. Verte ergo: vero enim simile esse, plures illic fluxios, sicuti et apud nos, inveniri. WESS.

49. 50. Πολύγορος οὐκ ἂν ἦν] *Fetifer potu Nilus dicitur Plinio VII. H. N. 3. et eius aqua ἕδωρ πολυγονότατον καὶ γλυκίτατον* Theophrasto in Athen. II. 4. p. 41. Non addo, aquis eius fecundiores feminas fieri, et sobolem ovium caprarumque mirifice adaugeri. Vide Eustath. in Homer. p. 1499. et Stancleium in Aeschyl. Supplic. 570. Quae sequuntur examinat M. Fr. Wendelin. Admirand. Nili c. 10. WESS. πολύγορος, quod analogia πολυγόρος scribi iubet, tam constanter tenent libri, ut facile assentiar Buttmano Gr. II. p. 374. accentum illum tuenti. Video quidem πολυγόρον scribi in Geopon. XIV. 1. 3.: sed id Needhamus tacite interpolavit, quum πολίγορον invenisset in ed. Basil., propagavit autem Nicolaus, ut alia eiusmodi ab Needhamo illata, veluti ibid. 5. πίσω pro πίσω, quamvis nihil adiutus auctoritate MSS. suorum, quod mihi exemplar ab C. P. Gesnero ei commodatum lustranti satis constitit.

50. 56. Οἰνοπίδης δὲ ὁ Χῖος] Floruit Oenopides eadem paene aetate, qua Anaxagoras, cui et iungitur in Platonis Amator. p. 132., nactusque est magnum, postquam Aegyptum adierat inf. c. 98., ob peritiam rerum coelestium nomen, quod praeteritum non est a viris egregiis Aeg. Menagio in Diogen. IX. 37. et Iac. Perizonio ad Aelian. X. V. H. 7. WESS.

50. 60. Ἐκιστα τὸ ἕδωρ ψυχρόν] Recte Seneca rescribit, *Non calorem hieme sub terris esse maiorem. Aqua et specus et putei tepent, quia aëra rigentem extrinsecus non recipiunt. Ita non calorem habent, sed frigus excludunt. Ex eadem causa aestate refrigescunt: quia illo remotus seductusque aër calefactus non pervenit*, IV. Q. Natur. 2. WESS.

50. 64. Τῆς ὑγρᾶς οὐσίας] Mihi, ut simplicius, ita elegantius videtur ὑγρασίας. RHOD. Non accedo viro doctissimo. Codex Cl. 2., quo et H. Stephanum olim usum fuisse mihi liquido constat, non infringet ceterorum et Theophylacti consensum. Ὑγρὰ οὐσία aeque profecto humorem exprimere apta est ac ὑγρὰ φύσις in cap. 7. WESS.

50. 70. Τὰς ῥεῖσεις ποιοῦμενοι] Nihil admodum intererit haecine probes an Theophylacti ῥεῖσεις. Tamen Diodorus I. 34. προαίαν τοῦ Νείλου τὴν ῥεῖσιν ποιοῦμενον. et de Pado Polyb. II. 16. ποιοῦμενος τὴν ῥεῖσιν ὡς ἐπὶ μεσημβρίαν. Mitto Strabonem IV. p. 284. B. XII. p. 852. A. WESS.

50. 76. Ἐν τοῖς κατὰ τὴν Αἰθιοπίαν] Docet Strabo XVII. p. 1138. sub regibus Ptolemaeis id reapse fuisse cognitum atque exploratum Aegyptiis; Eratosthenes vero, non oportere ea de re quemquam in dubio esse, quandoquidem ad Nili fontes quidam adierint et largissimos imbres suis oculis usurparint: σαφῶς καὶ ἀφικομένων τινῶν εἰς τὰς τοῦ Νείλου πηγὰς, καὶ τοὺς ὑμβροὺς τοὺς γινομένους ἐωρακότων, in Procli Comment. in Platon. Timaeum p. 37. Quod profecto iustius nunc oggeri dubitantibus



potest, cum Petrus Paisius, Hieronymus Lobus, et plures Lusitanorum eodem Nili fontes et copiosissimos Aethiopiae et lustrarint et experti fuerint imbres. Conf. Ath. Kireheri Oedip. T. I. Syntagm. I. 7. et Iob. Ludolfi I. H. Aethiop. 8. WESS.

50. 83. *Ὁβ προσίξει*] Cum obliqua oratione *μιμητικῶς ἢ κατὰ προσομοιοσίαν* verba Agatharchidis historici, nostro quoque iudicio gravissima, recitentur, *προσίξειν* scribendum existimo. RHOD. Ego restitui, uti oportebat, secutus Rhodomanni opinionem: nec aliud sua in versione Poggius expressit, ut suo in libro ita invenisse putes. WESS.

50. 89. *Νιγετοὺς ἐξαισίους*] Notae sunt *Scythicae nives* ex Plinio VI. 17. Credo tamen ob oculos habuisse, quae circa Paropamisum, quem Caucasum aut Caucaso cohaerentem putabant, contingere narrat XVII. 82. Nives autem has *ἐξαισίους* appellat solito sibi vocabulo, quo omnia ingentia et consueto multis partibus maiora designat, ut *ψόρον ἐξαισίον* IV. 13. *ὑψος ἐξαισίον* XIII. 82. *Ἐξαισίον βοήν* XIV. 74. etc. WESS.

51. 93. *Λοχομέρον θέρος*] Perperam haec exulant ex Coisliniano. *Υεταί γάρ ἡ Ἰνδῶν γῆ τὸ θέρος, aestate pluviiis madet Indorum regio*, sicuti Arrianus ait Indic. c. 6. ex Nearcho; e quo non dissimilia Strabo XV. p. 1013. C. et 1020. B.; sed qui flavium *Ἰδάσπην Hydaspem* vocat, qua terminatione et Noster XVII. 96.; unde vitium hic esse suspicor. In Theophylacto certe egregium exstat: nam eius *περὶ τῶν ποταμῶν τῶν ὑδάτων* ex melioribus his, sicuti bene Iungerman., nata sunt. WESS.

51. 7. *Καὶ παντελῶς ἀσθενεῖς*] En novum sarcinatoris centonem! RHOD. Non ausus sum delere, etsi viri eruditi iudicium haud omnino displicet. Ex grammatici interpretatione si in hanc sedem migraverint, oportet satis cito fuerint inculcata. Eadem enim in suo reperit Theophylactus. Iungit has voces, sed commodiore loco, Ioseph. IV. Ant. I. 6. 5. WESS.

51. 13. *Τὴν πρώτην μερίδα περιγράφομεν*] Sine controversia hoc rectum est, tametsi *παραγράφειν τοὺς χρόνους* II. 31. et *παραγράφομεν τὴν βίβλον* extremo eo libro, quemodo et hic Cod. Vat.; sunt enim in mendo, quod hoc in verbo longe frequentissimum est. Ne temere dixisse videar, paucis defungar exemplis. Ioseph. de Alexandra XV. Ant. I. 3. 4. *καὶ πολλὰ μὲν ἤλαθεν*, inquit, *παραγράψασθαι ἀτοχειρία τὸν βίβλον*. Immo vero *περιγράψασθαι*, quod in eo genere vitaeque violentiore exitu usitatum. Plutarchus, seu quis auctor libri de Flumin. p. 1153. *βρόχῳ τὸν βίβλον περιέγραψεν, laqueo vitam finivit*: pro quo p. 1158. C. *perperam παρέγραψεν*. Atque hoc primum. Alterum dabit Heliodorus, qui Sisimithrem inter alia Aethiopibus persuasisse refert, ut piis operarentur sacris, victimis humanis *εἰς τὸν ἐξῆς αἰῶνα παραγράφαντες, in perpetuum sublatis*, X. Hist. Aethiop. p. 517. Atqui hoc *περιγράψαντες* indicat, quod

in abolendo delendoque usu teritur, ut bene Is. Casaubon. in Athen. IV. 27. p. 204. Recte ergo de pravis impii Iuliani consiliis Io. Chrysostom. Orat. V. in Iud. p. 646. D. Tom. I. ὁμοῦ ἐπιζῶν ὁ μεμνητὸς καὶ ἀνόητος τοῦ Χριστοῦ περιγυρᾷ τὴν ἀπόφασιν, τὴν οὐκ ἐξῶσαν ἀναστῆναι τὸν ταὸν ἐκεῖνον. Perperam vero in Agatharchide de Rubro Mari p. 21. τοὺς δὲ περὶ Ἠρησίαν καὶ τὰ περὶ ἐκεῖνων παραγυρᾷται. Sed desino. Hoc quod prae manibus est satis adfirmabit Plutarch. T. II. p. 14. Α. βραχέα δὲ προσθεῖς αὐτοῖς περιγυρᾷω τὴς ὑποθήκας, his pauca si addidero, finem praeceptis imponam. et Euseb. VI. P. Evang. 10. p. 280. ἐνὸς δ' ἔτι μνησθεῖς περιγυρᾷω τὸν λόγον. WESS.

51. 18. Τῆς πρώτης τῶν Διοδώρου] Summaria, quae ex Coislin. habes, etsi citra dubium industriae grammatici accepta sint ferenda, propter codicis eius auctoritatem, utque illis responderent, quae ante exscripta dedi, excerpanda fuerunt. Scriptor ipse huius libri capita multis partibus breviora signavit principio L. II. WESS.

52. 34. Τὰ συνεχῆ διέξιμεν] Futuri significatione et usu satis hoc frequens; nam et supra c. 9. περὶ πρώτων τῶν βαρβάρων διέξιμεν. et III. 76. διόπερ διέξιμεν ἐν κεφαλαίοις etc. Neque hoc tantum, sed et εἶμι in Euripid. Rhes. 450. et ἄπειμι in Aristophan. Pluto 70. cum Kusteri nota. WESS.

52. 42. Τοὺς κανλοὺς καὶ τὰς ῥίζας] Conf. supra c. 9. et-10. WESS.

52. 43. Καὶ μάλιστα προσενέγκασθαι] Et praecipue comedisse, ut c. 8. καὶ προσερέσθαι τῆς βοτάνης τὴν προσηγεστάτην. Plutarch. VI. Sympos. 10. p. 684. F. ὥστε καὶ τὸν ἄρτον ἄναλον προσερέσθαι. Vid. infra III. 18. V. 3. WESS.

52. 44. Ἄγρωστιν] Puto eam ἄγρωστιν intelligere, quam ἐδώδιμον edulem, et cuius radicem, dum mollis est, dulcem admodum perhibet Galenus V. Simp. Medic. Facult. p. 71. et ante eum Theophrastus VI. Caus. Plant. 16. Forsan et iniustum est discrimen inter πῶαν et ἄγρωστιν, quo illa quadrupedibus et foeniseio relinquitur: haec gramen medicum esse decernitur a Io. Bodaeo a Stapel in Theophrasti I. II. Plant. 10. Diodorus et hic, et III. 43. ἄγρωστιν sive gramen pecudum pastioni largitur. Addo, non aliud hoc videri atque Ἀχι Achi, quod esui hominibus pecudibusque in Aegypto erat, ab Alexandrinis interpretibus Genes. XLI. 2. Esai. XIX. 7. atque alibi adhibitum. WESS.

52. 50. Τῇ χειρὶ ταύτης λαμβάνοντας] Videtur mos ille percinnasse ex veteri instituto, quo Aegyptii nec myrrha, nec casia neque thure sacra faciebant, sed herba virente, veluti quandam naturae fertilis lanuginem manibus complexi, ἀλλὰ χλόης, οἷον εἶ τινα τῆς γονίμου φύσεως χροῦν ταῖς χερσὶν ἀράμενοι, Porphyrius II. Abstin. 5. Verbenas herbamque Sabi-

nam ex simili causâ in Italia prisco tempore in sacris et gestasse et adolevisse homines ostendit Nic. Loensis IX. Miscel. 7. WESS.

52. 51. Τὸν ἄνθρωπον] Haec propter sententiae perspicuitatem omittenda non videntur, ut nec ratio quae subiicitur. RHOD.

52. 54. Ὑγρᾶς μᾶλλον ἢ τῆς ξηρᾶς] Quaerit Aristoteles, cum cetera animalia frequentius siccio quam humido victu utantur, cur homo humido magis quam siccio delectetur, ὁ δὲ ἄνθρωπος τὴν ὑγρὰν τροφήν ἢ τὴν ξηρὰν προσάγειται, *Problemata*. Sect. X. 49. Quae mihi abunde probant Nostri haec verba. WESS.

52. 59. Καὶ ταῖς δοραῖς ἐσθῆσι χρῆσθαι] De Locorum Ozolarum maioribus, quos indigenas, ἀντόχθονας, ferebant, Pausanias σκέπην πρὸς τὸ ῥίγος θηρίων δέρματα ἐποιοῦντο ἀδέρητα. τὸ δασὺ τῶν δερμάτων ἐς τὸ ἐκτὸς ὑπὲρ ἐμπροπείας τρέποντες, *velabant corpus ad frigus defendendum ferarum recentibus coriis, pilo extorsum verso, quo vestitus plus decoris haberet*, X. 38. Qui mos ab ipso generis humani conditore propagatus rudi aevo, etsi necdum plane evuluerit, multis placuit, Indis II. 38. Afris III. 49. et pluribus aliis. WESS.

52. 63. Ἐκ τῶν καλάμων] Heliodor. I. Aethiop. p. 64. Aegyptiorum tenuioribus καλέβας λεπτοῖς καλάμοις καὶ τούτοις ἐλείοις διαπλόκους, *tuguria tenui arundine et palustri texta*, tribuit. Silius Italic. XVII. 80. *Castra levi calamo, cannaque intexta palustri, Qualia Maurus amat dispersa mapalia pastor.* Sic enim recte legunt viri docti. WESS.

53. 67. Ἐκ τοῦ λωτοῦ ἄστυ] Conf. supra c. 34. WESS.

53. 70. Τὸν Ἐρμῆν] De eo c. 16. et copiose Olaus Borrichius in Hermet. c. 1. 2. 3. etc. WESS.

53. 73. Τοῖς πλεῖστα εὐεργετοῦσιν] Non male hi sacerdotes: res enim ipsa et veteris aevi monumenta persuadent, primos regum et ob excellentem animi indolem et egregia in cives beneficia, artesque inventas et cultas, a volentibus esse creatos. Bene Philosophus, τοῦ πλήθους εὐεργέται κατὰ τέχνας ἢ πόλεμον, ἢ διὰ τὸ συναγαγεῖν, ἢ πορίσαι χάριαν, ἐγγίνοντο βασιλεῖς ἐκόντων καὶ τοῖς παρὰλαμβάνουσι πάτριον III. Politic. 10. WESS.

53. 74. Εἶτε προσαλουμένον] Rectius προσαλουμένον, quod *provocandi* seu *invitandi* significationem habet, cum illud *advocare* sit. RHOD. Εἶτε προσαλουμένον] Restitui, quod sermonis usus postulabat; neque enim ferendum putavi, ut inter diversas veterum librorum scripturas immixtum lateret. Conf. et c. 21. et Basilium M. T. H. p. 146. B., ubi in vetustis schedis eandem Julian. Garnerius descriptionis differentiam reperit. WESS.

53. 76. Ἐν ταῖς ἱεραῖς ἀναγραφαῖς] Sacri hi commentarii, sive αἱ ἐν ταῖς ἱεραῖς βίβλοις ἀναγραφαί, ut cap. seq., quibus in Aegyptiorum rebus saepe testimonium denuntiat, duplicis generis, partim columnis, partim libris inscripti, erant. Dio Prusaeus

Orat. XI. p. 161. D. de sacerdote Aegyptio, ἔφη δὲ πᾶσαν τὴν προίτηρον ἱστορίαν γεγραμμένην παρ' αὐτοῖς, τὴν μὲν, ἐν τοῖς ἱεροῖς, τὴν δὲ, ἐν στήλαις τισί, dicebat autem omnem prioris temporis historiam apud ipsos scriptam esse partim quidem in templis, partim in columnis quibusdam. Quibus Dionis nihil dissentit Aristides T. III. p. 609., nedum Noster XVI. 52. Wess.

53. 80. Μηνῶν καὶ πεντακισχίλιον] Vide supra cap. 26. Wess.

53. 81. Βεβασιλευσθαι φασὶν ἀπὸ μυριάδος] Exercuit hic locus industriam doctissimorum virorum Iac. Capelli et Iac. Perizonii, quorum ille in Histor. Sacr. et Exot. ad an. m. 1682. mendum subesse ratus pro πεντακισχίλιον legere πεντακοσίον et exponere annos circiter novem millia quingentos instituit: sed temere, neque satis ex Graecorum loquendi more, haud iniuria propterea correptus a Perizonio: quamquam et iste, si verum amamus, haud feliciter sese expedit. Τὰ ἀπὸ μυριάδος ἔτη sunt illi anni excurrentes a decem millibus Origin. Aegypt. c. II.; quo pacto anni indicabuntur a decem millibus excurrentes paullo minus quinque millibus. Verum ea ratione coniunguntur, quae Diodorus disparata voluit. Regnatum ait ἀπὸ μυριάδος usque in Olympiadem CLXXX., signato liquidissime et numerandi principio et fine. Verte iam, regnatum esse ab hominibus annis a decem millibus excurrentibus paullo minus quinque millibus, et frustra quaeres terminum, unde numerandi principium. Non addam plura, ne quid acerbius in sententiam viri, optime olim de me meriti, excidat, idque agam potius, ut scriptoris opinio declaretur. Iuvant quodam modo manu exarati codices, quorum aliqui βεβασιλευσθαι ἀπὸ Μοίριδος aut Μέριδος, regnatum esse a Moeride annis paullo minus quinque millibus usque in Olympiadem CLXXX. Hoc convenit Graeci sermonis consuetudini et illis, quae c. 26. scripserat: οἱ δ' ἱερεῖς τῶν Αἰγυπτίων τὸν χρόνον ΑΠΟ τῆς ἡλίου βασιλείας συλλογίζομενοι ΜΕΧΡΙ τῆς Ἀλέξανδρον διαβάσεως εἰς Ἀσίαν, φασὶν ἐπάροχεν ἑτῶν μάλιστα πῶς διαμυριάων καὶ τρισχιλίων. Adde enim in summam annorum haec circiter quinque millia, quae a regibus hominibus regnando absumpta, XVIII illis millibus, quae diis et semidiis tribuantur, et ratio paene constabit. Est tamen, quod eam Codd. scripturam gravissime urget et plane infringit. Cur enim a rege Moeride annos, quos in Aegypti regno homines transegerunt, orditur? qui Mena, primo ex hominibus rege, duobus fere annorum millibus fuit posterior, sicuti cap. 45. 50. et 52. haud obscure significat; quique ne totis quidem nongentis Herodoti aetatem praecessit, quemadmodum ille ait II. 13. Et quamquam eius et Diodori rationes haud bene concinant, fieri non poterit, ut annorum circiter quinque millia a Moeride usque in Olymp. CLXXX. abierint. Quare, ne longum faciam, sic habeto: locum mihi

videri vitiosum, vixque illi succurri posse, nisi si aut delectas voces ἀπὸ μυριάδος, quibus sublatis et oratio et annorum numeri convenient; aut, quia violentius hoc, ἀπὸ Μηνῶ a rege Menas usque, qui primus hominum regum et cuius a regno anni illi decurrunt, scribas. WESS. Larcheri (chronolog. Herod. p. 49. 50.) de his et sequentibus coniecturas tacere praestat.

53. 85. Ὁ νέος Αἰώνιοςος χορηματίων] Ptolemaeus Auletes est, quem Porphyrius in Excerpt. Scaligeri Eusebianis p. 226. eodem novi Bacchi titulo ornat, egregie explicito ab Ill. Ezech. Spanhem. Dissert. VII. de Usu et Praest. Num. p. 436. Patris stultitiam acmulata est Cleopatra, εἰς πλήθος ἐξιοῦσα, σπολὴν ἱερὸν Ἰσίδος ἐλάμβανε καὶ ΝΕΑ ΙΣΙΣ ἐχορημάτισε, in publicum sacra Isidis veste ornata prodibat, Nova Isis appellata, Plutarch. T. I. p. 941. WESS.

53. 88. Αἰθίοπας τέσσαρας] Herodotus Aethiopum in Aegypto reges multis partibus plures habet II. 100. WESS.

53. 92. Πέντε πρὸς τοῖς ἑκατὸν καὶ τριάκοντα] Nisi distincte annos cxxxv, quibus Persae Aegyptiis imperarunt, et ea temporum intervalla, quibus eorum imperium detrectarunt Aegyptii, intellexeris, in his error erit. Cambyses Aegyptum bello aggressus est tertio Olymp. LXIII. anno, ut est c. 68. et sequenti in ditionem suam redegit. Eandem Alexander altero Olymp. cxii. anno occupavit, inf. XVII. 49. suntque adeo inter Cambysis et Alexandri expeditiones Olympiades XLVIII cum duobus annis. Quare, si in summam additi sint anni defectionum Aegyptiacarum, erunt cxciv. WESS.

53. 95. Τὴν εἰς τοὺς ἑγγωρίους θεοὺς ἀσέβειαν] Persae nulla olim simulacra, nulla templa, nullas aras dedicabant, alios, quibus id sollemne, stultitiae non solum accusabant, auctore Herodoto I. 130. sed et eorum imagines sacrasque aedes incendio debebant, quod illis vitio vertit Isoocrates Panegy. p. 106. Praeter ceteras vero superstitioni Aegyptiae acerbissimos Herodot. III. 29. Aelian. VI. V. II. 8. et Noster c. 46. et XVI. 52. fuisse testantur. WESS.

53. 99. Ἄνδρας μὲν ἐβδομήκοντα] Iterum in alia omnia it Herodot. II. 100. et 142. Conf. infra c. 69. WESS.

54. 11. Μηνῶν] Consentiant plerique omnes veterum in primo hoc ex hominibus rege, quamquam parum in nomine eius concordet. Herodotus Μῆρα olim, nunc ex Jac. Gronovii cura Μῆρα et Μεῖρα II. 4. et 99. etsi Μῆρα in eo quoque legerit Eusebius Chron. p. 14., vocat, a quo non longe abest Claramont. 2., nec Plutarchi T. II. p. 354. Α. περὶ Μεῖνιος τοῦ βασιλέως. Ceteris Μήρης Menes aut Μήρης, sicuti Aelian. XI. II. A. cap. ult. De aetate hominis vera maior rixa est; sed quae huic loco parum convenit. Tu vide Jac. Perizon. Origin. Aegypt. c. 5. et Is. Newtoni Chronol. p. 258. WESS.

54. 14. Πολυτελῆ βίον] Non displiceret πολυτέλειαν εἰς βίον, si pro εἰσαγγέσασθαι εἰσαγγέσθαι scriptum foret. RHOD. Nihil muto. Sollemne hoc Nostro, ut V. 55. 66. 73. etc. Athenaeo Atheniensis rerum optimarum primi auctores πάντων τῶν καλλίστων εἰσηγηταὶ τῶ τῶν ἀνθρώπων βίῳ L. XV. 13. p. 691. Et Moses in Homilia quadam, quae Io. Chrysostomo perperam tribuitur T. II. p. 793. Α. ὁ πρῶτος εἰσηγητὴς τῶν συμφερόντων τῶ βίῳ. WESS.

54. 16. Τρέφαζθον] Non displicet Γρεφαζθῶ, licet on terminationem retinuerim. Regem vero hunc, ut et alios quosdam, Herodotus omisit; qui contra nonnullos habet, a Diodoro haud nominatos. RHOD. In regis huius nomine magna est discordia. Plutarcho T. II. p. 354. Τέγρατις, Athenaeo X. 4. p. 418. F. Νεόχαβις, hic Γρεφαζθῶ aut Τρέφαζθος. quorum quodnam verius sit, quis praestabit? De Boecchoride infra c. 94. WESS.

54. 17. Τῶν ἐπιτηδείων ἐκλειπόντων] Rectius ἐκλειπόντων legeretur. STEPH.

54. 25. Τὴν κατάραν ἀναγράψαι] Eleganter Plutarchus T. II. p. 354. Β. στηλιτεῦσαι τὴν κατάραν columnae inscripsisse inprecationem: qua nota cum malos cives inuarent, hinc Demosthen. Philip. III. p. 70. ἐκόλαζον δ' οὕτω καὶ ἐτιμωροῦντο, οὓς ἂν αἰσθοῦντο δωροδοκοῦντας, ὥστε καὶ στηλίτας ποιεῖν. Quod disertissimi oratoris, ut multa, imitatur Libanius T. I. p. 453. B. et T. II. p. 164. WESS.

54. 31. Καὶ τετραζοσίον] Si scholion in margine verum est, regibus singulis 20 tantum anni praecise tribuuntur. RHOD.

54. 33. Βοσιρίδος] De rege Busiride incerta omnia. Strabo XVII. p. 1154. B. hoc nomine regem Aegypto imperasse negat; neque dissentit Diodor. c. 88. Et talia profecto sunt, quae de eo traduntur, ut certum in ordinem ne cogi quidem possint. Vide sup. c. 17. WESS.

54. 35. Διὸς πόλιν τὴν μεγάλην] Titulum haud iniuria addit; erat enim eadem in Thebaide prope Abydum Diospolis parva Straboni XVII. p. 1169. A. memorata. De magna conf. c. 15. WESS.

54. 37. Σταδίων ἑκατὸν καὶ τεσσαράκοντα] Nobilissimae urbis amplitudinem non eodem omnes modo describunt. Strabo longitudinem eius in stadia LXXX extendit XVII. p. 1170. quam Cato in Ethnographi Διὸς πόλις stadiorum facit cccc, et Eustath. additis xx auget ad Dionysii Perieges. 248. quae profecto vero parum similia. Tu vide S. Bocharti IV. Phaleg. c. 27. WESS.

55. 43. Περὶ αὐτὴν εὐπορίας] Erunt fortasse, quibus ὑπερβολὴ τῆς ἐμπορίας ob ea, quae sequuntur, probabitur; qui me adstipulatore non utentur: neque enim mercaturae locus hic conmodus; quod peregrinis ante Homeri aetatem Aegypti aditus

esset interclusus. Fama opulentiae longe longeque didita poëtae ea scribendi occasionem praebuere. Ὑπερβολὴν ἐν ποίῳσσι habent excerpta Valesii p. 362. WESS.

55. 47. Οὐδ' ὄσα Θίβας ] Iliad. IX. 381. in responsione Achillis ad legatos Agamemnonis. Sed exemplaria, quotquot videre nobis licuit, ut Eustathii quoque Parebōlae, ἀν' ἐκάστην habent; ut nota marginis prorsum ociosa sit. RHOD.

55. 53. Καθαπερὲ πολέπλον ] Pari modo Cretam a poëta ἐκατόμωλον dictam grammatici censebant, non quod centum urbes, sed multas ambitu suo complecteretur, οὐχ ὄρισμένης ἐκατὸν πόλεις ἔχουσαν, ἀλλ' ἀντὶ τοῦ πολλὰς, Scholiastes in Odys. T. 174. Adde Pompon. Melam I. 9. WESS.

55. 55. Ἐκπορεύεσθαι ] Plus soni et emphasis habet, quam ἐξιέναι in margine. RHOD.

55. 58. Τὰ θεμέλια δείκνυσθαι ] Hoc adfirmat vetus Itinerarium, quod Antonini dicitur, quodque *Hipporon* mansionem ad eam fluvii ripam habet p. 166. et *Ala Apriana*, quam *Hippone* locat Notit. Imp. Orient. p. 204. Quod autem paullo ante Θίβας τὰς κατὰ Λιβύην *Thebas Libycas* vocat, id factum propterea, quod urbs utramque fluvii ripam et Arabicam et Libycam occuparet, Strab. XVII. p. 1170. WESS.

55. 63. Καὶ κολοσσιῶν ἀνδριάντων ] Non moveor scriptura codicis Clar. 1. ut hinc quid demutem: habet sane κολοσσιῶν ἀνδριάντα XI. 72. sed et εἰκόνα κολοσσιῶν II. 34. et signum *colossicum* XXXIV H. N. 8. Plinius. WESS.

55. 72. Περιττῶς ἐργασμένον ] Cum mollius hoc sonet, quam περιττότερον, locum suum tueatur. Et paulo post λίθων suo in loco maneat, pro λιθείας, quod Favorino Camerti πολυτέλειαν quandam significat. Quam inepta igitur et ridicula hic foret tautologia? RHOD. Περιττότερον ἐργασμένον ] Diodoro hoc mollius visum; nam et cap. seq. περιττότερον ἐργασμένον, ut hic, et III. 44. ἰερὸν περιττότερον τιμώμενον habet: quamquam nec alterum plane spernit. WESS.

55. 75. Λιθείας πολυτέλειαν ] Et hoc ut reciperetur, tametsi λίθων πολυτέλειαν defendi possit cap. 64. vetustis libris dedi: nam vulgo quod censent λιθείαν et λιθίαν de pretiosis duntaxat diei posse lapillis, cum errorem Cl. Salmasius in Solin. p. 395. dudum redarguit. Strabo quidem certe vulgares lapides marmorumque crustas λιθείας nomine describit IX. p. 668. A. XII. p. 812. XIII. p. 879. C. nec alio usu Iosephus VIII. A. Iud. 2. 9. Solitos autem Aegyptios fuisse templa λίθοις ταῖς πολυτέλειαν lapidibus sumptuosis exstruere, testis Lucianus est Imagin. princip. WESS. Λιθείας πολυτέλειαν Suidae hinc restituit Schweigh. ad Polyb. IV. 52. p. 86.

55. 80. Ἐν Περσέπολει ] Tam notum ac nobile hoc est nomen, ut nulla Glossatoris explicatione indigeat, quae ex certo

individuo incertam nobis speciem facit; nisi unam tantum Persas urbem habuisse existimet. RHOD. Diodoro urbis haec scriptura tritissima, ut XVII. 70., ubi de regiae inmanibus divitiis, XIX. 21. Straboni XV. p. 1058. et Aeliano I. H. A. 59. *Περσαίπολις*, quae differentia et in Latinis, quorum Curtius et Iustinus *Persepolin*, Plinius *Persaepolin* probant. Cave vero Persepolis et Susorum regias post Cambysis aetatem demum exstructas opineris: nam priorem Cyro suam originem debere Aelianus eo loco, quem citavi; posteriorem multo antiquiorem fuisse sequenti libro c. 22. a Nostro docetur. Quare *κατασκευάσαι* erit *instruuisse* et *magis exornasse*: sicuti *τὰς ναῦς κατασκευάζειν* XIII. 47. et *δύναμις κατασκευασμένη* XX. 61. et *κόλπος κατασκευασμένος πόλει*, *sinus accubantibus urbibus egregie ornatus* in Strabon. V. p. 379. C. WESS.

55. 81. *Τοσοῦτον δὲ πλεῖθος χορημάτων*] Vulgatumne an Clarom. 2. *τοσοῦτο* eligas perinde erit. Utuntur utroque promiscue, quemadmodum IV. 55. XII. 50. et *τοιούτον* ac *τοσοῦτον πλεῖθος* infra c. 52. Adde Ios. Barnes. in Euripid. Troad. 972. Opes autem horum Thebanorum, tametsi ingentem earum copiam Persae abstulerint, non fuisse contemnendas in aetatem usque Ptolemaei Philometoris Pausan. I. 9. ostendit. WESS.

56. 90. *Ἐπὶ πρὸς τοῖς τετρακόκοις*] Strabo *περὶ τετρακόκοις* non finito numero in suam aetatem durasse refert XVII. p. 1171. WESS.

56. 99. *Ὅν ἐστὶ καὶ Ἐκαταῖος*] Alius est, atque ille, cuius c. 37. meminerat: ille Milesius, Darii Hystaspidae aequalis, hic domo Abderita, cuius scripta, sicuti et hoc de rebus Aegyptiis, recenset G. Io. Vossius I. H. G. 10. WESS.

56. 2. *Τὰς παλλακίδας τεθάλασαι*] Iovis impuros amores etsi haec respicere videantur, credo puellas indicari, quae genere et forma praestantissimae Thebis Aegyptiis eius sacris operabantur, *Παλλάδες Pallades* quidem Graecis dictae, sed parum castae, floremque aetatis, donec naturali fluxu purgarentur, volentibus prostituere adsuetae apud Strabon. XVII. p. 1171. WESS.

56. 4. *Ὀσυμανδόν*] Legitimam hanc esse terminationem nominativus *Ὀσυμανδύας* infra ostendit. Iterum ergo Iusum Glossatoris agnosceas. RHOD. Straboni si fides, Memnonem Aegyptii *Ismanden* vocabant XVII. p. 1167. D.; id quidem Diodoro haud constitisse colligas ex II. 22.; absurdum tamen non erit, modo Memnonis res gestae probentur; quae utrum et quatenus possint, non inmerito quaerit Iac. Perizonius Origin. Aegypt. c. 17. WESS.

56. 8. *ὑπερρεῖσθαι δὲ ἀντὶ τῶν κίωνων ζώδια*] Non video quid aptius reponi possit pro *ὑπερρεῖσθαι*, quam *ὑπερηρεῖσθαι*. STEPH. *ὑπερηρεῖσθαι* substituendum censet H. Stephanus per duplicationem Atticam initialium thematis literarum: quod Grammatico-



rum calculo facile approbatur: nisi quis ambiguitatis vitandae causa auctorem communi dialecto uti maluisse arbitretur. Quod autem proximo versu sequitur, ἀρχαῖον τρόπον, cur in ἀρχαῖο-  
 ταιον mutetur, parum habet rationis. RHOE. Υψηλοῦσαι ζῴδια] Hoc si mutanda est, tueri se non poterit Polybii III. 66. τὰς δυνάμεις εἰς ἀσφαλῆς ἀψηλοῦσαι τορβίζων, neque c. 109. πᾶσαν γὰρ αὐτῆς προθυμίαν εἰς ἑμᾶς ἀψηλοῦσαι. par enim utriusque ratio. Sed neuter Atticorum in hoc verbo consuetudinem secutus est, ut nec Strabo XVII. p. 1165. C. ἐξῆς ὄραν ζειμένας, ὑπὸ μονο-  
 λίθων ζῴων ἀψηλοῦσιν. nam ὑψηλοῦσιν, quod nunc legitur, ipse suum non agnosceret. WESS.

56. 12. Ἐν νῦν καταπεποικιμένην] Non placet mihi καταπεποικιμένην cum accusativo, praesertim cum ipsemet alibi dativo iungat. ut p. 42. καὶ γραφαῖς διαφόροις πεποικιμένην. STEP. Ego vero mutare non sustineo. Tametsi enim probata ab H. Stephano structura sit vulgatior, altera ex earum genere est, in quo sibi Graeci multa indulgent. Habet Dio Chrysost. θρόνον μωρίας ἄλλως ἔχοντα γλυκῆς, καὶ διαθέσεις χρυσῶν καὶ ἐλέφαντος, καὶ ἡλέκτρον καὶ ἐβένον καὶ παντοδαπῶν χρωμάτων πεποικιμένον Orat. I. p. 16. C.; qui locus non plane huic similis est, facit tamen ut extra codicum auctoritatem nihil moveam. WESS.

56. 16. Ἐξ ἐνὸς λίθου Μέμνονος τοῦ Συρνίτου] Celeber-  
 rimam Memnonis statuam designari opinatus Io. Marsham. Canon. Chronol. p. 427. in τοῦ Συρνίτου vocabulo adhaerescit, quod se capere negat, neque scire an patris sit nomen. Ego vero Memnonis hanc esse non putavero: nam Diodorus Osymanduae clarissime tribuit, et quae de Memnonis illa statua a Strabone XVII. p. 1170. C. et Pausania I. 42. narrantur, ea longe ab hac statuae descriptione abeunt. Aliud visum Rhodomanno, in cuius sententiam, tametsi suo eam calculo firmaverit diligentissimus Fr. Iunius Catalog. Architect. p. 120., quo minus concedam, impedit orationis structura, quae, si Memnon statuarius innueretur, in Graecis requireret ἔργον Μέμνονος, et dubia Memnonis eius memoria. Memnon enim, quem Cyro regi Hyginus Fab. cccxiii. domum Echatanis condidisse refert, et multo recentior est, et fortasse ex eo Memnone natus, cuius Susis regia fuit celcherrima infr. II. 22. Quare cum nec Memnonis mirificae illi statuae, neque Memnoni statuario suus hic sit locus, accessero Cl. Salmasio in Solin. p. 337. haec vitii coarguenti corrigentique ἐξ ἐνὸς τοῦ πάντας λίθου τεμνομένου τοῦ Συρνίτου, ex uno omnes lapide Syenite caesas; quam eius emendationem iuvant illi libri, in quibus Συρνίτου et Συμρνίτου, et Plinii lapis Syenites, ob ignei coloris guttas, quibus erat distinctus, a Graecis Pyropoecilos vocatus XXXVI. N. H. 8. WESS.

57. 27. Βασιλεὺς βασιλέων] Frequens olim regum gen-

tiumque domitoribus titulus, quem Sesostris auxit βασιλεύς βασιλέων καὶ δεσπότης δεσποτῶν infr. c. 55. vocatus. Aegyptiorum fastum aemulati sunt Persae atque alii orientis plagae principes, de quibus Ezech. Spanhem. Diss. VIII. de Praest. Numis. p. 364. WESS.

57. 31. Τρεῖς βασιλείας ἐπὶ τῆς μεγάλῃς] Nollem tres reginas capiti huius statuae Rhodom. inposuisset. Recte Salmasius in Solin. p. 337. Βασιλεία, inquit, apud Diodorum est στέμμα βασιλικόν, Lib. I. Ἔχουσαν τρεῖς βασιλείας ἐπὶ τῆς μεγάλῃς etc. Inepte vir doctissimus vertit, in capite tres reginae: ad verbum esset, tria regna; nam et regnum recentiores Latini pro corona regis usurparunt. Et hoc sensu saepe occurrit apud Anastasium de Vitis Pontificum. A quo nihil dissentiens Amp. Gisb. Cuperus, ut eius ex literis ad Io. Clericum, quarum mihi copiam fecit vir Cl. Io. Iac. Wetstenius, intellexi, firmat rariorem vocis usum veteri lapide, praeter alia inscripto ITEM ORNAMENTA IN BASILIO UNIO ET MARGARITA N. VI. Quibus ego ex Plutarcho T. II. p. 358. adiungo, Horum perhiberi matri Isidi manus iniectisse, καὶ ἀποσπάσαι τῆς μεγάλῃς τὸ βασίλειον, et capiti eius coronam detraxisse, et ex Porphyrio βασίλειον, ζέρατα τρώγεια ἔχον, in Euseb. III. P. Evang. 12. WESS. Wesselingio assentitur Reiskius de coronis disputans Histor. Acad. Paris. vol. XI. p. 18.; βασιλέως scribi voluit, cui parum persuasura erat Wesselingii annotatio, Elsnerus Schediasm. crit. p. 130. — 133.

57. 32. Καὶ θυγάτηρ καὶ γυνὴ καὶ μήτηρ βασιλέως] Explicat haec Ampl. G. Cuperus iisdem in literis ex eo more, quo qui plura olim regna sibi subiecerant, plura diademata sumebant, ut Artabanus Parthorum rex in Herodian. VI. 2. et Ptolemaeus apud Ioseph. XIII. A. I. 4. 7. Neque id profecto, tametsi non prorsus simile videtur, male. Eleganter de tyrannide Dio Chrysost. Orat. I. p. 16. C. πολλὰ μὲν σκῆπτρα, πολλὰ δὲ τιάραι καὶ διαδήματα ἐπὶ τῆς μεγάλῃς. et Orat. IV. p. 63. A.; quae egregie illustrant magnificam Christi nostri in Apocalypsi XIX. 12. expictam descriptionem. WESS.

57. 36. Ἐν τοῖς Βάκτροις] In his vitii aliquid latere suspicabatur Cl. Iac. Perizon. Origin. Aegypt. c. 17. Bactra enim longius remota ab Aegypto esse, neque diu ea Aegyptiorum regibus videri subiecta: quod cum hic non adfirmetur, et Strabo inscriptiones regum Aegypti memoret XVII. p. 1171. indices Aegyptiorum imperii in Bactrianam versus prolati, non subscribo viri eruditissimi sententiae. Paulo post ἐστρατεῦσθαι recepi ob c. 18. principium. WESS.

57. 42. Τεῖχος ὑπὸ ποταμοῦ περιῶντον] Fluvium, qui murum, sive castellum potius, circumfluebat, sine dubio esse Eulaeum, de quo Plinius, Susianen ab Elymaide determinat

*annis Eulaeus, circuit arcem Susorum VI. H. N. 27.*, arbitratur Jo. Marsham. Canon. Chronol. p. 429. Mihi non ea confidentia. Malim vero de castello quam *muro* haec accipere, quod et rei series id postulat et vocis usus permittat. Vide ad Hieroclis Synecdemum p. 681. WESS.

57. 50. *Αὐτὸς τοῦ λέοντος — ἐσήμαινεν*] Leo Aegyptiis roboris et fortitudinis figura erat. *Ἀλκίης μὲν καὶ ἰσχύος σύμβολον αὐτοῖς ὁ λέων*, inquit Clemens Alex. V. Stromat. p. 671., quibus non admodum dissimilia habet Horapollon I. Hieroglyph. 18. Non addo frequentes, quibus sacrae nobis literae perfunguntur, translationes: fecit copiosissime S. Bochartus III. Hierozoic. 6. etc. WESS.

57. 54. *Ταῖς ψυχαῖς ἀνδρῶν*] Manus atque illae partes, quibus viri censemur, solertiam et robur, et si abessent, contraria omnia occultiore gentis scriptura indicabant. Confer infra c. 55. et Artemidorum I. 44. et 47. WESS.

57. 57. *Βουθυσίας τοῦ βασιλέως*] Atqui bovem Aegyptiis immolare nefas erat. Ergone *βουθυσία* hic sollemnius sacrificium, uti *buthusia* in Suetonii Neron. c. 12. et *βουθυτεῖν* Aristoph. Plut. 820? Vide tamen Herod. II. 41. WESS.

58. 59. *Βωμὸν κατεσκευάσθαι*] Maneat. Nam quod additur in margine, scholion est. RHOD.

58. 65. *᾽Ιδιεῖον τρόπον*] Theatri erat instar, Athenis a Periclis actate celeberrimum. De eo Scholiastes in Comici Vespas v. 1104. et Vitruvius V. Architect. 9. WESS.

58. 70. *Τριάκοντα τὸν ἀριθμὸν*] Tot in controversiis dari iudices solebant, deni ex civitatibus Heliopoli, Thebis et Memphi, sicuti infra c. 75. docet, ubi de summi iudicis ex pectore demissa veritatis imagine uberius. WESS.

58. 79. *Γλυφαῖς ἐντυχεῖν εἶναι*] Legitur pro *ἐντυχεῖν* etiam *ἐντυχαῖς*, quae corrupta lectio fortasse occulta retinet sinceræ vestigia, et ex ea per depravationem est facta. Videtur autem post *γλυφαῖς* expectandum adiectivum nomen, quod cum eo iungatur. STEPH. *Γλυφαῖς ἐντυχεῖν*] H. Stephanus adiectivum pro hoc restituendum putat. Sit igitur *ἐντύκτοις*, dum melius aut genuinum magis occurrat. RHOD. Malim, si *ἐντυκος* de re affabre facta in usu fuerit, uti censet Is. Casaubon. in Athen. XIV. 8. atque haud obscure significat Eustath. in Homer. p. 967. *γλυφαῖς ἐντύκταις*. Hesychii certe quidem *ἐντυχές*, *ἐνεργές*, olim fuit *ἐντυχές*. Hoc vero si tu nolis, per me licebit, ut Rhodomanni sententiae subscribas. *Ἐντυκτος κνίη* de egregie elaborata est in Iliad. Γ. 336.; apud Herodotum vero I. 119. *ἐντυκτα δὲ ποιησάμενος, εἶχεν ἔτοιμα*, *carnes probe paratas habuit in promptu*: quae Suidas spectans *ἐντυκτα*, inquit, *παρὰ Ἡροδότῳ ἀντὶ τοῦ, ῥάδια, ἔτοιμα, εἰργασμένα, καλῶς κατεσκευασμένα*. posterius bene, illud male, ut nemo non videt. lam *χορῶμιον*



58. 92. Ὀμόστοιχον] Hoc in ὁμόστοιχον, exclusa tantum literula, mutandum videtur, ut sit in eodem pariete. Nam ὁμόστοιχον pro ὁμόστιχον si retinetur, in eodem ordine significat. RHOD. Ὀμόστοιχον δὲ τῆ βιβλιοθήκῃ] Firmant Rhodomanni coniecturam scripti libri. Ὀμόστοιχον οἰκίαν praeter Isaeum Orat. de Philoctemon. Hered. p. 60. dabit ipse Diodorus in Excerpt. Vales. p. 397. WESS.

59. 97. Καθιερομένων ζώων] De illis c. 83. etc. WESS.

59. 99. Ὑπόχρην χρυσοῦν] Merito aureum hunc circulum et ceteras Aegyptiorum inmanes opes stupet Olaus Borrichius Hermet. c. 3. p. 66. Nollem tamen conclusione quadam addidisset: unde illud aurum Heroicis Aegyptiorum temporibus? dices, ex aurariis officinis, quas in Thebaide inventas tradit Diodorus viro Osiride et Hermete, profurxisse. Ceterum officinas aurarias id temporis agnoscit Diodorus ad fabricanda vasa et instrumenta, non fodinas, non χρυσορυχία: unde autem in officinas transit, nisi ex ergasteriis Chemicis? Sumit enim sibi et citra dubium statuit, quod falsum est. Auri fodinas Thebaidis liquido memorat Diodor. I. 15.; quo loco cum officinas vertisset Rhodoman., errandi occasionem viro doctissimo praebuit. Habet praeterea c. 33. μέταλλα χρυσοῦ καὶ ἀργύρου αὐρί ἀργεντικῆς fodinas in insula Meroë, Aegyptiorum imperio olim subdita; et hoc ipso capite, aurum et argentum, quod singulis annis ex omni Aegypto ex argenti et auri fodinis redibat, ἐκ τῶν ἀργυρείων καὶ χρυσαίων μετάλλων. Quare, ut lenissime dicam, nimis calide superioribus O. Borrichius adstruit, At de fodinis Aegyptiis id temporis altum apud omnes silentium. WESS.

59. 4. Καὶ τῶν ἐπισημασιῶν] Utrum imbres, an ventus, an graviores aëris mutationes essent futurae: has enim ἐπισημασιῶς significationes in fastis diligenter notabant, non ex certis artis praeceptis, sed usu quodam et quod saepe orientibus astris contingere solerent, ut docet Gemin. Isag. Astron. c. 14. qui propterea istas ἐπισημασιῶς c. 16. exsequitur, et singulari libro Ptolemaeus, quem Gemino additum D. Petavius vulgavit, antequam eos ambo Meton, ut docemur XII. 36. Alioqui ἐπισημασιῶς παρὰ τοῦ δαίμοντος sunt irati numinis praesentia argumenta XX. 102., de quo vocis usu alias. WESS.

59. 12. Ἀρχαιοτάτους ἀνθρώπων] Conf. supr. c. 10. WESS.

59. 14. Τὴν ἐπ' ἀκριβὲς ἀστρολογίαν] Strabo et philosophiae et astronomiae accuratiorē notitiam sacerdotibus Thebanis non negat XVII. p. 1171. C.; habitum autem purioris coeli locique in astrorum diligentiore observatione haud parum illis profuisse testis est Proclus in Timaeum Platon. p. 31. WESS.

59. 18. Τὰς γὰρ ἡμέρας οὐκ ἄγορα etc.] Diligentissimus Camusatus adscripsit haec Ismael. Bullialdi: Haec verba iās γὰρ ἡμέρας οὐκ ἄγορα mihi valde suspecta et remocenda, ut ita

*legatur: διατέταχται. οὐ γὰρ ἄγονσι. ad lunam enim nullus unquam dies duxit: noctis enim mater diem non genuit. Quae ego viro doctissimo excidisse nollem. Ecquid enim in anno lunari frequentius quam ἄγειν ἡμέρας κατὰ σελήνην, dies ad lunae motum exigere atque observare? quod Atheniensibus suis lata lege Solonem edixisse Diogenes I. 59. refert. Explicat autem Geminus Element. Astronom. c. 6. τὸ δὲ κατὰ σελήνην ἄγειν τὰς ἡμέρας τοιοῦτόν ἐστι· τὸ ἀκολούθως τοῖς τῆς σελήνης φωτισμοῖς τὰς προσηγορίας τῶν ἡμερῶν γίνεσθαι, secundum lunam vero dies agere est tale, ut congruant cum lunae illuminationibus dierum appellationes. Cuius moris contrarium apud Thebanos valebat, quorum annus solstitiali orbe circumagebatur et solis erat; quare Strabo XVII. p. 1171. B. τοιοῦτων δ' ἐστὶ τὸ τὰς ἡμέρας μὴ κατὰ σελήνην ἄγειν, ἀλλὰ κατὰ ἥλιον. WESS.*

59. 20. Τέταρτον] Addo μέρος, vel scribe τεταρτημόριον, scilicet τῆς ἡμέρας. Hic quadrans in anno Aegyptiaco et Iuliano scrupulis nonnullis redundans, quot annorum intervallo in diem integrum exerceat, Astronomorum calculus demonstrat: unde ista tot dierum in Calendario non reformato anticipatio: cui medelam quandam Calendarii Gregoriani artifices adhibuere. RHOD. Emendatione Rhodomanni opus non erit, si μέρος subintelligas, quomodo τέταρτον ἡμέρας προστίθεσθαι de hac intercalatione Horapollon I. 5. Addebant autem in singulos annos quinque dies et quadrantem, sed tacita quadam intercalatione, ita ut rationibus solis eum quadrantem imputarent; neque enim quarto quoque anno olim intercalare solebant; ut bene ex Gemini Isagoge c. 6. D. Petavius III. Doct. Temp. c. 2. Atque hoc si in memoriam sibi redegisset Cl. Cornel. Pauw, ab his Diodori castigandis ad Horapol. p. 278. manum puto abstinuisset. WESS.

59. 22. Ἐμβολίμους δὲ μῆνας etc.] Utrumque valebat in plerisque Graeciae civitatibus; quarum anno quoniam dies aliquot, ne cursui solis responderet, deficiebant, opus fuit mensibus intercalaribus, utque menses alternis essent pleni et cavi, diebus, ut sic dicam, *exemptilibus*, ἔξαιρησίμοις, sicuti docet de Siculis Cicero II. in Verr. c. 52., de ceteris Geminus Isag. c. 6. p. 23., et ex eo D. Petavius IV. Auctar. c. 10. et H. Dodwel. Dissert. I. Cycl. 14. WESS.

59. 27. Ἀδιαιπτώτως] *Sine errore. Ἐξίς καὶ διάθεσις φυλάττουσι τὸ ἀδιαιπτωτον, quae, ne erret, cavet, Plutarch. T. II. p. 1124. B. τρόπος ἐκμετρούσεως ἐνχερῆς καὶ ἀδιαιπτωτος, modus capiendae mensurae facilis et certus Polyb. V. 98. Contra ἁμαρτία καὶ διαιπτωσις Plutarch. T. II. p. 1125. C. Βούλεγμα διαπεπτωκὸς quod vanum atque irritum est Pausan. IV. 23. De re ipsa O. Borrichius Hermet. c. 8. WESS.*

*Ibid. Ἀπογόνων ὀγδοος] Adscripserat Is. Vossius libri sui margini Diodorum a se ipso dissentire; auctorem enim esse c.*

54. Busiridis posteriorum octavum itidem Busiridem fuisse cognominatum: quod verum quidem est, nec ulla tamen hic pugna, modo ex Busiridis II. gente octavum hunc *Uchorea* statuas. Utrum autem is eiusdem nominis patrem habuerit, in ea librorum discordia et veterum silentio, nam *Achoreus* Syncelli p. 96. alia ex familia est, haud temere dixerim. Id quidem certe constat, de Memphis origine Aegyptios in diversa abiisse: Herodotus *Meni* II. 99. Schol. Statii IV. Theb. 737. *Erapho*, sicuti et Euseb. Canon. p. 26. et Syncellus p. 152., quamquam paullo ante *Api*, Phoronei filio, p. 149. tribuerat, adscribunt. WESS.

60. 31. *Ὅπου σχιζόμενος*] Nilus scinditur infra Memphim XV passuum millibus, ut Plinius V. 9. sive tribus schoenis, quorum singuli stadiorum  $\kappa\lambda$ ., sive millium passuum V, quemadmodum Strabo XVII. p. 1160. C. Ipsi fluvii scissurae adiebat oppidum Cercasorum, de quo Herodot. II. 15. et 97. WESS.

60. 36. *Τὴν δὲ ὀχρότητα*] Videtur legendum *τὴν τε ὀχρότητα*, aut *κατεσκέιασε*, retinendo *δέ*. STEPH. *Τὴν τε ὀχρότητα*] Vera est H. Stephani coniectura, quam, quod passim voculae illae inter se commutentur in scriptis codicibus, recipiendam censui. WESS.

60. 43. *Ὄριζε λίμνην μεγάλην*] Meminit et Strabo lacuum circa Memphim XVII. p. 1161. B. Paulo post vulgatum *ὄπου τὸ ζῶμα* improbo: neque enim aggerem aqua inundabat, aggestum ut fluvium agris prohiberet. Rectius, modo parum adiuvetur, Vaticanus *πλὴν ἧ*, praeterquam ubi agger. Novi *πλὴν ἧ* Herodoti II. 111., sed huic loco id alienum. WESS.

60. 49. *Τὰ τε βασίλεια ποιῆσθαι*] Hinc et Straboni Memphim τὸ βασίλειον τῶν Αἰγυπτίων *Aegyptiorum regia* XVII. p. 1160. C. et Plinio V. 9. *quondam arx Aegypti regum*. WESS.

60. 52. *Τοῦ βασιλέως*] Etsi τοῦ Μακεδόρος in margine Alexandrum commode ab aliis ὁμωνύμοις distinguit: tamen quod in contextu habetur, genuinum esse arbitror. RHOD. *Ἀλέξανδρον τοῦ Μακεδόρος*] Hoc Diodori caussa malo: nam et c. 55. ἐπ' *Ἀλέξανδρον τοῦ Μακεδόρος* et II. 37. *Ἀλέξανδρος ὁ Μακεδὼν* et saepe alias. WESS.

60. 56. *Οἱ μὲν γὰρ βασιλείοις etc.*] Confer infra XVII. c. 52. WESS.

60. 59. *Πρώτην ἢ δευτέραν ἀριθμεῖσθαι*] Principem plerique locum reginae urbium Romae, secundum Alexandriae dabant. Dio Chrysostom. Orat. XXXII. p. 372. A. *ἢ γὰρ πόλις ἡμῶν*, inquit in corona Alexandrinorum, *τῷ μεγέθει καὶ τῷ τόπῳ πλεῖστον ὅσον διαφέρει, καὶ περιφανῶς ἀποδέδεικται δευτέρα τῶν ὑπὸ τὸν ἥλιον*, *urbs enim vestra magnitudine et loco immensum quantum differt, et secundas obtinet partes inter mnes, quae sunt sub sole*. Nec decrant tamen, qui Alexandriam Romae praeferrent, ut Noster significat XVII. 52. Quumque

ea in controversia aut patriae aut sectae studio multi abriperentur, mirum nemini accidit Carthaginem et Antiochiam in partem huius gloriae venisse. Agit de ea Ill. Ezech. Spanhemius Not. in Julian. Caesar. p. 73. WESS.

61. 71. *Αἰδίουσ ὄικουσ προσαγορεύουσιν*] Non male de sepulchro, quod DOMUM AETERNAM et DOMUM AETERNALEM inscripti lapides Thesaur. Gruter. p. DCLXVIII. 6. DCCXC. 5. et Salomon Eccles. XII. 5. *בית עולם, οἶκον αἰδῖουσ*, appellant. Alioqui *αἰδῖουσ ὄικουσιν* et *αἰδῖουσ ὄικουσιν*, quod morte obita quidquid superesset temperis illie absumendum putarent, *inferos* vocant, ut Xenophon Agesil. c. ult. et inf. c. 93. Tantam autem curam sepulturae agebant, ut anima multo tempore perduraret et corpori esset obnoxia, nec cito ad alios transiret, arbitrati animam tam diu durare, quamdiu durat et corpus: Servius in Aeneid. III. 68, de Aegyptiis. WESS.

61. 77. *Ὁμοιωθέντα ταύρω*] Pingebant olim et fingebant fluvios taurino vultu. *Ἐξωγράφουσιν τοὺσ ποταμοὺσ τετροχάρουσ* ait Schol. in Eurip. Orest. 1380. Hinc ea fabula. WESS.

61. 79. *Ἀφ' οὗ καὶ τὴν χώραν*] Vide c. 19. adscripta. WESS.

61. 86. *Ποῖουσ*] Hoc praestat, quod et Herodotus, Strabo, Mela, Plinius probant. Conf. Is. Casaub. in Strabon. I. p. 87. et Iac. Gronov. Herodot. II. 4. WESS.

61. 87. *Τὰ βόρεια προσέλαια*] Sequitur Herodot. II. 101. WESS.

61. 89. *Ἀπὸ δέκα σχολῖων*] Schoeni non eadem in Aegypto mensura: Herodotus LX stad. circumscribit II. 6.; quam eius amplitudinem ab Thebaide Syenen usque haberi ex Artemidoro Strabo XVII. p. 1156. docet, a Pelusio vero Memphin versus stadiorum xxx et hinc usque in Thebaidem stad. cxx. Plinius vero Schoenus, inquit XII. N. II. 14., *patet Eratosthenis ratione stadia xl.* Qua in discrepantia vulgo valuit, ut schoenus xxx stad. seu millia passuum quatuor, aequaret, sicuti ad Anton. Itiner. p. 152. ostensum est. WESS.

61. 92. *Σταδίων τρισχιλίων καὶ ἑξαζοσίων*] Consentit Herodotus II. 149. Plinius vero V. II. N. 9. *Inter Arsinoiten autem ac Memphiten lacus fuit circuitu ccc. M. passuum: aut, ut Mucianus tradit, ccccl. M. et altitudinis quinquaginta passuum, manu factus; a rege, qui fecerat, Moeridis appellatus.* Ubi bene Mucianus pro Herodoti et Diodori rationibus; aequant enim eius ccccl. M. passuum *εἰκοσεννῆσ* stadiorum, et l. passuum totidem *ὀργυρίας*, sicuti posterius id ostendit Iac. Perizon. ad Aeliani XII. V. II. 22.; Mela I. 9. in vetustis editionibus xx M. in circuitu patere, in Vossii et Gronovii, *quingenta millia* prodit; quae ultima bene si habeant, modo stadia septem cum semisse unis passuum millibus contributoris, non longe ab Herodoto et



Diodoro aberunt. Atque ita inter eos haud male conveniet: sed lacum adeo fuisse capacem et inferioris Aegypti latitudine non minorem, vero non esse simile bene advertit Isaac. Vossius in Melae I. 9. Vid. Paul. Lucan. Itin. Aegypt. L. V. p. 15. WESS.

61. 97. Κοινοῦ λαιῶν] Huic Scholion de haereditaria sede litem nullam movet. Hic admonitus esto lector, me, quia multitudine glossematum in margine singulatim examinandorum commentarius exerescere videtur, marginalia, quae auctoris non esse iudicavero, silentio praeteriturum. Contrarium de his, quae in contextu asterisco et semilunula, parentheseos signis, notata sunt, intellectum volo. Quae enim aliena vel mendosa deprehendero, in haec animadvertam. RHOD.

61. 9. Τριπλεθρον δὲ τὸ πλύτος] *Id est, CCC pedes latam*, bene Rhodam, cuius versionis auctorem habet Suidam, et eo locupletiores Polyb. V. 25. ac Heronem in Analect. Benedictin. p. 314. Latini saepe iure το πλύτος aequant, iurene disquirat Iac. Perizon. in Aelian. III. V. II. 1. WESS.

62. 21. Σταδία τὸ ἕπος] Utramque Herodot. II. 149. aqua eminere ait περιήκοντι ὀργυῖās, parique spatio infra eam esse depressas: qui centum passus conliciunt demum stadium 100 pedum. Bene ergo, ita si acceperis, σταδία τὸ ἕπος. WESS.

62. 24. Τὴν ἐπ' ἀγαθῶ μνήμην] Vide cap. 2. WESS.

62. 26. Πρὸς μύρα etc.] Erat in more Aegypti regibus ad corporis ornatum uxoribus urbium regionumque reditus describere: Herodot. II. 98. de urbe Anthylla, εἰς ἑποδίμια ἐξαίρετος δίδοται τοῦ αἰεὶ βασιλεύοντος Αἰγύπτου τῇ γυναικί, datur, inquit, peculiaris in calceamenta uxori eius, qui Aegypto imperat. Idem Persis deinceps placuisse ex Platon. Alebiad. I. p. 123. et Cicerone III. in Verr. 33. docuit Bar. Brisson. I. Regn. Persar. 108. Atque eo sine dubitatione referri oportuerat Philostrati II. Vit. Apollon. 31. κόμας, ἃς ἐπέδωκε τῇ ἀδελφῇ ὁ βασιλεὺς εἰς ζώνην. nam plane ita Xenophon I. Exp. Cyri p. 200. αἰ δὲ κόμαι Παρυσάιδος ἦσαν, εἰς ζώνην δεδομένα: quae quin Muretus et Iungermannus recte ita refinxerint, nemini obscurum est. WESS.

62. 27. Φερούσης ἀργυρίου τάλαντον] Distinctius Herodot. II. 149. Sale vero conditi ipisces seriore aetate magna copia ex Aegypto in Graeciam atque Italiam asportabantur, τὰ Νειλῶα τὰρίχη Luciano in Navigio. WESS.

62. 33. Σεσόωσιν] Vitiosam esse hanc scripturam ut iudicem cum H. Stephano, Herodoti auctoritas I. II. me movet. Si quis tamen ex Iustino Martyre τὸ Σεσόγχοσιν cum fr. Sylburgio, viro praecclare de literis eruditis merito, praeferat, assensum meum non difficulter habebit. RHOD. Faveret viris doctissimis Cod. Vatican., sibi si constaret. Sesonchosi, a Iustino Mart. Paraenes. ad Graec. p. 10. E. ex cap. 94. huius libri producto, auxilio

venit Dicaearchus in Schol. Apollon. Rhod. IV. 272. quod ego tamen nomen Diodoro invitis Codd. obtrudere non sustineo. Io. Tzetzes Σεσόωσιν *Sesoosin* sua aetate hoc loco invenit, ut ipse indicat Chiliad. II. 84. Estque in regibus Aegypti haud insolens, ut διώννμοι καὶ τριώννμοι, duplici triplicique nomine insignes reperiantur, teste Syncello p. 63. A., praecipueque in hoc *Sesostri*, qui et *Ramesses* et *Sethosis* vocatus fuit, Scaligero ad Euseb. num. ΙΟXXXIV. docente. WESS.

62. 35. Τάξεις ἐπιτελέσασθαι καὶ πράξεις ] Omnino τάξεις exterminandum cum καὶ suo post ἐπιτελέσασθαι. Quid enim τάξεις? Sed paronomasia seu rhythmus puerilis Glossatori tantopere arrisit. RHOD. Ἐπιτελέσασθαι πράξεις ] Recte Rhodomannus; similem maculam eluimus cap. 4. WESS.

62. 38. Οἱ διὰ τῆς ῥόδῃς ἐγκωμιάζοντες ] Haud scio an ad ῥόδον cantorem ea pertineant, cui praeter Deorum hymnos regum etiam aeta, ut recitarentur, curae erant apud Clement. Alex. VI. Stromat. p. 757. Alioqui referri oportet ad cantilenas, quibus veteri aevō rerum egregie gestarum memoriam perpetuare solebant, erudite explicitas a Iac. Perizon. Animad. II. c. 6. WESS.

62. 51. Καὶ πόνοις ] Κακοπαθείαις in contextum recipi malim. RHOD. Καὶ κακοπαθείαις ] Non intercedo. Sunt Diodoro κακοπάθειαι aerumnae gravesque labores, quibus rustici et viri militares exercentur cap. 36. II. 1. et 25. III. 64. etc. WESS.

62. 53. Ὑπῆρξαν ἀθληταὶ ] *Usu periti*. Solent Graeci omnes eos, qui multo usu confirmati in rebus gerendis excellunt, ἀθλητὰς vocare. Ἐργων πολεμικῶν ἀθληταὶ XII. 75. ἀθληταὶ τῶν κατὰ πόλειον ἔργων XVIII. 9. ἀθληταὶ πολέμων Philon. Iud. I. Vit. Mos. p. 642. D. sunt rei militaris peritissimi. Ad quem modum ἀθληταὶ τῆς ἀληθινῆς λέξεως Dionys. Halicar. T. II. 173.; ἀθλητὴς τῶν κατὰ σοφίαν πραγμάτων Philostr. Heroic. II. 11. p. 685. ἀθληταὶ τῶν καλῶν ἔργων Demostheni in Aristogit. I. p. 495. Adde Is. Casaub. in Polyb. I. 6. WESS.

63. 58. Ἀραβίαν ] V. Jablonski Opusc. II. p. 100.

63. 60. Τὸ γένος ἅπαν τὸ τῶν βαρβάρων ] Nimium hoc est. Puto scriptum fuisse τῶν Ἀράβων, quorum gentem domuit, non omne barbaricum genus. Simili vitio XV. 20. βασιλεὺς βαρβάρων, qui sine controversia *Arabum* rex dicendus erat. WESS. Qui βαρβάρων defendat, utatur illis c. 20. p. 23. 53. de Osiride Ἀποῦργον τὸν βασιλέα τῶν βαρβάρων ἀποκτεῖναι.

63. 61. Ἀδοῦλωτον τὸν προτοῦ χρόνον ] Nini, Assyriorum regis, aetate, necdum domiti fuere II. 1.; neque postea aut Assyriorum, aut Persarum, aut Macedonum, tametsi omnes illi Arabum libertati acerbi fuerint, iugum subiere II. 48. XIX. 97. De Arabia tamen a Sesostri in ditionem redacta et Strabo XVI. p. 1114. A. WESS.

63. 72. *Καὶ τῆς ἐγκομιήσεως etc.]* Tritissimum hoc de somniis, quae aut medicinae caussa, aut ut de futuris edocerentur, in templis captabantur. *Ἐγκομιᾶσθαι ἐπὲρ ἑαυτῶν καὶ ἐπὲρ τῶν ἄλλων* saepe Strabo XIV. p. 961. A. XVI. p. 1104. B. XVII. p. 1152. C. unde *μαντεῖον ἐγκομιωμένων*, quod illi iure restituit Is. Casaub. XI. p. 775. Rarius est hoc Aristidis T. I. p. 71. *πύκτη τινὲ τῶν ἐφ' ἡμῶν ἐγκαθεύδοντι προειπεῖν λέγεται τὸν θεόν.* Vid. Plutarch. T. II. p. 109. C. et supr. c. 25. WESS.

63. 74. *Διότι ὁ πατὴρ δόξα]* Inpeditior paullo haec structura videtur, similis tamen Polybianae II. 68. *διότι τὸ μὲν μειράκιον ἡγεμόνος ἔργον ἀγαθοῦ ποιῆσαι συνθεασόμενον τὸν καιρόν.* Conf. infra c. 65. WESS.

63. 78. *Τοὺς σννηλιζιώτας ἀθροῖσαι]* Non damno *σννηλιζιώτας*, quantumvis rarius obvius inque copiosissimis linguae Thesauris praeteritos; praeter enim Philoxeni Gloss. *σννηλιζιώτης aequalis*, Aleiphron I. Epist. 12. *ἔναγχος δὲ Παμφίλου μετὰ τῶν σννηλιζιωτῶν μισθουμένον τὸ σκαμνίδιον.* WESS.

63. 80. *Εἰς τὴν τῶν ὄλων ἐπίθεσιν]* Usus est voce propria in summa re et imperio, quod *τὴν τῶν ὄλων δυναστείαν* paullo ante dixit. Quare et *κίνδυνος περὶ τῶν ὄλων* est periculum de summa re Appiano Mithrid. p. 326. et illud adire *κινδυνεύειν περὶ τῶν ὄλων* inf. XIII. 7. et *διακρίθῆναι περὶ τῶν ὄλων* eiusdem libri cap. 10. pro quo deinceps c. 111. *κρίνεσθαι περὶ τῶν ὄλων.* Polybius paullo plenius *περὶ τῶν ὄλων πραγμάτων* I. 12. ubi Is. Casaubon. WESS.

63. 91. *Πάντας δὲ ταῖς ὀμιλίαις etc.]* Latius patet nec sola alloquia, sed et usum intimamque familiaritatem complectitur: qua cum Philippus, Alexandri pater, Graecorum multos a recto tramite transversos ageret, *ταῖς ποικιλταῖς ὀμιλίαις διέτριβε τὰ ἡθῆ τῶν ἀνθρώπων*, Noster ait, verbis, ad nobile Menandri dictum conformatis, XVI. 56. Plura Casaubon. in Theophrasti Charact. 3. p. 112. WESS.

64. 96. *Ἐξ καὶ τριάκοντα μέρη διελῶν]* Thebais et Delta, singulae in denas, quaeque inter utramque erant posita, in XVI praefecturas erant descripta: atque haec antiquissima Aegypti divisio, Straboni XVII. p. 1135. D. non praeterita. Senior actas, ut fit, multa mutavit, pluribus Nomis, a Plinio V. 9. et Ptolemaeo IV. Geograph. 5. recensitis, ex regum arbitrio constitutis. Nomus ipse praefecturam indicat, seu urbem primae dignitatis et vicina illi oppida cum adiacente agro ac pagis, Eusebio in Esai. XIX. 3. et Epiphan. Haeres. XXIV. 1., testibus: qui vero illi praecerat *ρομάοχης*, etiam sub Romanis, apud Strabon. ex certissima Paul. Leopardi et Is. Casaub. emendatione XVII. p. 1149., erat et dicebatur. Conf. infra c. 73. Nescio autem an accessurus sis Artapano, Mosi descriptionem hanc in XXXVI nomos tri-

buenti in Eusebii IX. P. E. 27.; mihi quidem certe commentum haud placet. WESS.

*Ibid.* Ἀ ζαλοῦσιν Αἰγύπτιοι νομοὺς] Quam hic vocem Aegyptiacam, p. 46. tradit esse Graecam. Eustathius Libycaum vocabulum esse scribit. Plinius Lib. V. 9. *summa pars contermina Aethiopiae Thebais vocatur. Dividitur in praefecturas oppidorum, quas nomos vocant, duodecim.* Ego Graecam esse vocem vix mihi persuasero. STEPH.

64. 3. Ζεύγη δὲ πολεμιστήρια etc.] Ex curribus pugnare vetustissimi moris fuit; quo pugnae genere Homericus Heroes et Afrorum plures usi sunt, Polluce I. 141. indice: Aegyptii quoque Exod. XIV. 7. 26. Currus erant nudi, ἄρματα ψιλὰ Arriano Tact. p. 10., nam τὰ δρεπανηφόρα sive falcati deinceps reperiuntur, instructi viris duobus, uno propugnatore, altero auriga. Ἐχορτος τοῦ ἄρματος ἡρίοχον καὶ παραβάτην inquit infra V. 29. Vid. Io. Scheffer. II. R. Velic. 15. et Nostri V. 21. WESS.

64. 6. τοῖς πολεμίοις] Pro πολεμίοις repono πολέμοις. STEPH. Mendum, pro πολέμοις, ut et H. St. notat. RHOD. Non subscribo virorum praestantium iudicio. Saepe enim τὰ πολέμια rem militarem exprimaunt. Thucyd. I. 18. εἰ παροικεῖν οὐκ ἔστι τὰ πολέμια, *res bellicas praeclare instruxerunt.* et IV. 126. ἀγαθοῖς γὰρ εἶναι ἡμῶν προσήκει τὰ πολέμια, *vos enim in rebus bellicis strenuius esse decet.* Ad quem priorem locum H. Steph. multo aliter atque hic instituit, diligentissimeque cavuit, ne qui temere isti vocabulo dicam impingeret. Quare non omni culpa immunis est doctissimus Hutchinson, quod Xenophonti I. Exped. Cyr. p. 203. obtruserit τὰ πολεμικὰ λεγόμενος ἐν τοῖς ἀρίστοις Περσῶν pro Codd. veterum τὰ πολέμια; quorum scripturam Aelian. IV. H. A. 1. et Philostrat. Heroic. 15. p. 724. satis superque firmant. WESS.

64. 10. Κατεζηροόχησε τὴν ἀρίστην τῆς χώρας] Herodot. II. 109. finita expeditione et Asia sub imperium et ditionem redacta Sesostriim agros divisisse suis refert. Ego Diodoro accesserim, cuius narratio ambitioni regis et prudentiae, militum favorem ita colligentis, melius respondet. WESS.

64. 13. Ἐπὶ πρότους Αἰθίοπας] Non dissimilia de hoc rege Strabo XVI. p. 1114. A. et XVII. p. 1138. C. et Plinius VI. N. H. 29. WESS.

64. 17. Τὴν ξυρθηρὴν θάλασσαν] Vide cap. 19. WESS.

64. 26. Καὶ γὰρ τὸν Γόγγην] Eum Alexander militum contumacia prohibitus, ut reliquam Indiam domaret, transire haud potuit XVII. 94. WESS.

64. 30. Αἰγυπτίων τινὰς καταλειφθέντας etc.] Et a victo quidem Sesostri, si fides Valer. Flacco V. 420. *ut prima Sesostris Intulerit rex bella Getis: ut clade suorum Territus hos Thebas patriumque reducat ad annem; Phasidis hos imponat*

*agris Colchosque vocari Imperet.* Quam in Colchis acceptam cladem Plinius XXXIII. 3. haud praeteriit. Id vero parum recte, quod Colchorum gentem Diodor. paludi Maeotidi adfinem fecit, longius ab ea remotam. Vide S. Bochart. IV. Phal. 31. WESS.

64. 32. *Ὅτι Αἰγυπτιακὸν ἐστὶ*] Herodotum II. 104. sequitur, cui tu iunge Apellion. Rhod. IV. 275. et supr. c. 28. WESS. Adde qui hunc locum respicit Agathiam I. II. p. 55. C.

65. 44. *Τοῖς ἰεροῖς λεγομένοις*] Vid. infra c. 81. WESS. *Ibid.* *Ὅπλοις κατεστρέψατο*] Herodot. II. 106. *ὥμοισι τῶσιν ἑμοῖσι humeris meis*, quam scripturam hae longe deterio- rem censet Th. Galaeus; haud scio an iniuria: columellarum enim inscriptiones huius fuisse persimiles cap. 103. docet; a quibus cum illa, quae in Ionia erat, paullo fuerit diversior, et *ὥμοι humeri* robur ac vires egregie ex Artemidori I. 42. sententia expingant, cur tandem mutemus? WESS.

65. 47. *Ἐχούσαν αἰδοῖν*] Eadem Africanus et Euseb. in Syncelli Chronogr. p. 59. et 60. ex Manethone. *Μοχ νεκρωτέρον* malui, quod τὰ νεκρώτατα τῶν μερῶν eae sint corporis partes, sine quibus homini vita constare nequit, Philon. Ind. in Flacc. p. 974. D. Plutarcho T. II. p. 159. et Iamblichō Myster. Sect. III. 16. WESS.

65. 53. *Ἡλίος αὐτὸς ἐτέγγαυεν*] Euseb. ex Manethone de Sesostri, *ὃς λέγεται γεγονέναι πήχων δ', παλαιστῶν γ', δακτύλων β', quem corporis proceritate cubitos IV, palmos III, digitos II, acquasse ferunt*, in Syncelli Chronogr. p. 60. Aliter Herodot. II. 106. WESS.

65. 56. *Ἐν ἔισιν ἐννέα*] Consentiant African. et Euseb. apud Syncell. p. 59. WESS.

65. 60. *Τῶν πρὸ αὐτοῦ κατεργασμένος*] Iustum hoc est: non reges tantum, sed omnes, qui unquam cum imperio fuerunt, Sesostri multis partibus antecelluit c. 58. WESS.

65. 62. *Καὶ στέλοις ἐδόσησε*] Antiquissimum morem spolia hostium in templis dedicandi diligenter persequitur, Diodoro haud neglecto, Stanleius in Aeschyl. VII cont. Theb. 284. Facit et huc Davidis exemplum, qui prostrati a se Goliathi gladium et scuta exercitui Hadad Eseris crepta consecravit I Samuel. XXI. 10. Ioseph. VII. Antiq. I. 5. 3.; quod imitatus Herodes M. circum templi Hierosolymitani muros *στέλα βαρβαρικά* suspendit apud eundem Ioseph. XV. A. I. 11. 3. WESS.

65. 67. *Ἐκ χειρὸς ὡφέλειος ἐπιλησθήναι*] De *manubiis* accipio, quas Polybii II. 3. 22. III. 19. exemplo hac voce exprimere adsuevit, uti III. 49. XI. 21. XII. 50. Nec aliter Plutarch. in Eumene T. I. p. 588. E. *μὴ καταπλησθέντες ὡφέλειος καὶ λαφύρον οἱ σὲν αὐτῶ* etc. ut perperam ea falce adhibita scare ac corrigere Mos. Solanus instituerit. WESS.

65. 69. *Ἀποστήσας ἐπὶ τῶν πολεμικῶν*] Praepositio, ut

ociosa, removeri potest, ac forte debet. RHOD. Potest profecto sine damno abesse, ut c. 80.; nec delevi tamen in eo Codd. dissensu ob XI. 27. ὁ δῆμος τῶν Ἀθηναίων ἀπέστησεν αὐτὸν ἀπὸ τῆς στρατηγίας. WESS.

65. 75. Περιποιῶντα] ἐμποιοῦντα Vat. et Clar. 2. prave. Vid. V. 73. et sup. c. 1. WESS.

65. 76. Εἰς ἅπαντα ἀσφάλειαν etc.] Induxi, quam intempestive ingesserant librarii, interpretationem glossamque. Ἀσφάλεια μετὰ ὑπερβολῆς et securitatem et commoda, quae in sequentibus exsequitur, complectitur. WESS.

66. 83. Ἐκ τῆς Βαβυλωνίας] Melius Βαβυλωνίας. Hoc enim totam provinciam, Babyloni subiectam, una cum urbe denotat: nisi κατὰ χρόνον synecdochicam esse dixeris. RHOD.

66. 86. Καταλαβομένους χωρίον καστερόν] In Heliopolite Nomo ad Bubasticum amnem. Strabo XVII. p. 1160. γρούριον ἐρυμνόν, castellum munitum, et a Babyloniis, qui desciverant, conditum perhibet: qua in re Diodoro adsentitur; non item Iosephus, qui II. Ant. I. 15. 1. Cambysi urbis initia tribuit. Dixi plura ad Itiner. Anton. p. 169. WESS.

66. 91. Καὶ τὴν Τροίαν] Accubabat monti Troico fluvioque Nilo supra Memphim, Strabonis aetate pagus, sed conditus tamen a captivis, quos Menelaus excisa Troia abduxerat, XVII. p. 1162. Urbem Stephan. in Τροία agnoscit; lapides Troici montis Ptolem. IV. Geogr. 5. p. 121. WESS. Addi potest in seriora tempora durasse id nomen. Certe Patrum Apophthegmata, quae Cotelerius T. I. Monum. Graec. inseruit, memorant p. 366. πέτραν τῆς Τρώης et p. 371. Τρώην, τὴν ἄνω Βαβυλωνίας κατέναντι Μέμφεως. IDEM in Add.

66. 94. Καταλαβεῖν τινὰ τόπον] Qui καταλαβέσθαι legendum censet, eius censurae lubenter accedam. RHOD.

66. 99. Παραβαλόντων εἰς Αἴγυπτον] In omnibus nostris codicibus legitur παραλαβόντων, quum perspicuum sit legi debere παραβαλεῖν εἰς Αἴγυπτον. Ita enim illic scriptum habent omnes, non παραλαβεῖν. STEPH. Παραβαλόντων] Sine controversia verum hoc, et Diodoro frequentatum, ut antea cap. 12. exemplis est confirmatum. Id demiror, omnes Stephani Codd. in alteram eam scripturam coniuvasse, nec ullam tamen in meis, quorum Clar. 2. et Reg. certe quidem Stephan. usus fuit, scripturae discrepantiam notari. De Semiramide, Aegyptum occupante. II. 14. WESS.

66. 7. Τὰς πόλεις ταύτας] Vulgo quod legebatur τὰς πόλεις εἰς ταύτας, tueri se non poterit, nisi si ταῦτα scripseris. Quod ex Vaticano restitui, multis partibus melius videtur. WESS.

66. 9. Ὅπως κατὰ τὰς πληρώσεις] Vide supra c. 36. WESS.

66. 12. *Διώρηγας*] *διώρηγας* Coisl., ut apud Herodot. II. 108. et Phrynich. Eclog. p. 38. WESS.

66. 13. *Ἦνα τὰς συγχομιδὰς* etc.] Aliam caussam, ne longius a fluvio in mediterranea recessi sitirent, adfert Herodot. II. 108., sed haec Diodori vero similior. WESS.

66. 15. *Ἡᾷσι τοῖς τρύποις*] *Τρύποις* absque dubitatione lego; nec quid *τρύποις* sibi velit assequor. RHOD. *Ἡᾷσι τοῖς τρύποις*] Habebant quidem fossae *παρτοίους τρύπους*, varia, ut sic dicam, divortia, apud Herodot. II. 108., eaque intelligenda forent, si vulgata scriptura bene haberet. Sed sequor Rhodom. WESS.

67. 18. *Τὸν γὰρ προτοῦ χρόνον*] Optimam et Diodoro saepe probatam non erat profecto cur lectionem mutarent: sic enim et c. 54. *ἀδοῦλωτον τὸν προτοῦ χρόνον.* et V. 69. *τὸν προτοῦ χρόνον οὐκ οὔσης ἐπιμελείας περὶ αὐτούς.* Utitur, ut alios nunc praeteream, et Polyb. I. 66., ex certa Iac. Gronov. emendatione. Aegyptum vero, postquam intereidi coepta est tot fossis, equorum et curruum agitationi minus fuisseabilem res ipsa et Herodot. II. 109. indicat. WESS.

67. 21. *Δυσσεγοδεσάτη γέγονεν*] Utrum *δυσσεγοδεσάτη*, quod ad scripturam propius accedit, an vero *δυσσεγοδεσάτη*, quod concinnius est, reponendum sit, eruditus lector iudicet. RHOD. *Δυσσεγοδεσάτη*] Amplector hoc, quantumvis *ἀκρατέστερον, ἀμαρτέστερον, ἀγθορέστερον*, aliaque insolentiora a Grammaticis atque Athen. X. 6. e veterum scriptis excerpta supersint. Cur enim ad *παρὰκεκρινεμένα*, ubi consueta sunt in promptu, decurramus? WESS.

67. 25. *Ἐπὶ σταδίους χιλίους καὶ πεντακοσίους*] Dubitat de hac longitudine, et fossa Aegypti orientale hoc latus, non muro, fuisse munitum pertendit Io. Marsham. Can. Chronol. p. 395. Neutrum bene. De fossa nihil Diodorus, cuius *τειχίζειν* murum aut vallum requirit: in spatio accuratissime consentit Herodot. II. 7. WESS.

67. 30. *Ἀνέθρηξε τῷ Θεῷ*] Videtur deesse verbum, quod iungatur cum *δὲ*, ut *ἀνέθρηξε* iunctum est *τῷ μὲν*. STEPH. Controversiam huic loco ab H. Steph. motam, si paullo post *δύο τε λίθινους ὀβελίσκους* scripseris, facili opera tolles. De Deo, qui Thebis praecipuo honore fuerit cultus, alia res est. Io. Marsham. Canon. Chronol. p. 374. Osirim esse arbitratur, idque pluribus aliis persuasit: ego vero Iovem, *ὃν μάλιστα τιμῶσιν, quem Thebani imprimis venerantur*, teste Strabon. XVII. p. 1171. C., a quo Diodor. c. 15. nihil discordat. WESS.

67. 31. *Ἄτο δὲ λίθινους ὀβελίσκους*] Subiungendum videtur *κατεσκεύασεν*, vel simile; ne suspensa maneat sententia. RHOD.

*Ibid.* *Ἐκ τοῦ σκληροῦ λίθου*] Inter lapides Aegyptios duritie excellebat Basaltes, ferrei et nigrescentis coloris, obeliscis et

statuis excidendis aptus, et Sycnites, e quo reges quodam certamine obelisceo, Soli sacratos, fecere apud Plinium XXXVI. H. N. 8. De utroque egregie Blas. Caryophilus de Marmor. Antiq. p. 106. et 116. WESS.

67. 33. Καὶ τὸ πλῆθος τῶν προσόδων] Firmantur haec mirifice a Tacit. H. Annal. 60.: eius enim Ramses sive Ramesses a Sesostride non est diversus, ut supra dictum. WESS.

67. 35. Μορολίθους ἀζόνιας] Eadem Herodot. H. 110. WESS.

67. 37. Πυχῶν] πυχίων Mut. Reg., quod Atticorum est apud Phrynich. Eclog. p. 40. WESS.

67. 40. Ἐστιῶν αὐτὸν ὁ ἀδελφός] Armais, quem peregre abiens totius regni procuratorem reliquerat, Graecorum Danaus, si fides Manethoni in Joseph. I. cont. Apion. 45. Facit enim is Troiano bello res Sesostris priores, sicuti cum Herodoto Diodorus: quos eiusdem opinionis auctores habuerunt viri literatissimi, tametsi de vera regis eius aetate parum concordēs, qui superioribus annis in hanc disputationem sunt ingressi, Nicol. Abramus VIII. Phari V. T. 10. Iac. Perizon. Origin. Aegypt. 16. et Camp. Vitrunga ad Esai. XIX. p. 550. Nec desunt tamen alia omnia probantes, Io. Marsham. Can. Chronol. p. 376. Guil. Jameson Spicil. Ant. Aegypt. 13., Sesostrim eundem ac Sisakum, Rhehabeami aequalem, arbitrati, et praeter ceteros Isaac. Newtonus Chronol. p. 233.: quorum quidem certe sententia si valeat, Aegyptiorum Graecorumque rationes conturbantur omnes, et ea coagmentantur, quae disiunctissima veteres prodidere. Sed ea latiorē campum requirunt, nec huius sunt loci. WESS.

67. 41. ἀναπανομένηον libri quattuor optimi nihilo deterius caeteris, qui ἀναπανομένηον. Xenophon Cyropaed. VII. 5. 47. γὲν δ' ἐπειδὴ καὶ ὁ φιλοπονώτατος πόλεμος ἀναπέλαται, δοκεῖ μοι καὶ ἡ ἐμὴ ψυχὴ ἀναπαύσειός τινος ἀξιοῦν τεγγάζειν.

67. 46. Ὡς ἂν οἰνομένηον] Etsi usus οἰνομένηον et μεθύοντα ita distinguat, ut is adpotus, hic vino mersus habeatur, quemadmodum in Laertii Diogen. VII. 118. et Plutarchi Symp. III. 1. p. 645., non desunt loca, quae vino egregie depositum requirunt, ut hic et XVII. 72. Aristot. Probl. XXVIII. 4. WESS.

67. 49. Διεξέπεσε διὰ τῆς φλογός] Duobus e sex filiis super ignem porrectis et extensis, ut illis tanquam ponte uteretur, Herodot. H. 107., quem rei ita gestae ordinem Diodorus aut neglexisse, aut ab Aegyptiis sacerdotibus haud accepisse videtur. WESS.

67. 54. Δοκεῖ μεγαλοπρεπέστατον etc.] Imo vero omnium superbissimum: unde et Plinio Sesostris *tam superbus, ut prodatur annis quibusque sorte reges singulos e subiectis iungere ad currum solitus, sicque triumphare* XXXIII. N. H. 3. A. quo tamen fastu se deinceps semovit, vertentis se rotae vicissitudine a captivorum uno de versatili rerum humanarum orbe admonitus



apud Theophylact. VI. Hist. Maurit. II. et Io. Tzetzen Chiliad. III. 84. WESS.

68. 65. Καὶ δι' ἀρετὴν ἐπιγαρεστάτους] Hoc vulgato praetuli. Nimium est δι' ἀπίσης γῆς, quam universam Sesostri sub imperium et ditionem haud redegit. WESS.

68. 69. Ὑπερβεβηκέναι ταῖς πράξεσι] Nihil intererit hoc-cine malueris an ὑπερβεβηκέναι. Utrumque in eo genere, cum de praestantia agitur, frequens. Solon σοφία καὶ παιδεία πάντας τοὺς κατ' ἐαυτὸν ὑπερβεβηκώς est in Excerpt. Vales. p. 233., et Daedalus γέσει δὲ πολὺ τοὺς ἄλλους πάντας ὑπερβαίων IV. 78. De altero XV. 88. WESS.

68. 72. Τοῖα πρὸς τοῖς τριάζοντα etc.] African. et Euseb. Sesostri ex Manethone annos XLVIII tribuunt in Syncello p. 59. 60., quibus ne plane adversus sit Diodorus, hos XXXIII regni annos a reditu ex Asiatica expeditione, etsi huic opinioni nullum hoc quidem loco sit fundamentum, Io. Marsham. Can. Chronol. p. 403. computat. WESS.

68. 82. Ὁ μὲν ἀρχιερεὺς ἀντίπε] Blandiri posset Cois. et Mutin. ἱερεὺς, quod Herodot. II. 110., sacerdoti Vulcani τῷ ἱερί τοῦ Ἡγαίου hoc adscribat, nisi huius loci alia esset ratio, mentio sacerdotum, quae deinceps fit, hunc principe loco fuisse significat. Alioqui insolens non est, ut ἱερεὺς simpliciter dicatur, qui collegio sacerdotum est praepositus, sicuti exemplis firmavit Ezech. Spanhem. Diss. XII. de Usa et Pr. Numis. p. 423. WESS.

68. 85. Οὐχ οὕτως ἡγανάκτησεν] Pro οὐχ οὕτως repono οὐχ ὅπως, ut sit οὐχ ὅπως ἡγανάκτησεν, non solum non indignatus est, sed etiam contra etc. vel, tantum abest, ut indignatus sit, ut contra etc. Sic alibi post οὐχ ὅσον, sive οὐχ οἷον (nam duplex est lectio) subiungit ἀλλὰ καὶ τοῦναντίον p. 59. initio. At p. 23. in fine post οὐχ ὅπως subiungit ἀλλ' οὐδέ. Caeterum quod in hac eadem linea habetur (in uno tantum codice inventum) καὶ ἐγγραφεῖς, per ineptam perissologiam videtur fuisse additum, nec dubito quin primum pro glessemate positum id fuerit, aut in margine aut inter lineas, deinde in contextum irrepsit. Sunt vero et alia hic eodem ex codice sumpta, de quibus idem plane suspicor. Steph. Qui medioeriter Graecae linguae intelligens est, ὅπως scribendum esse, primo intuitu animadvertit. Assumenta etiam quae sequuntur, καὶ ἐγγραφεῖς, καὶ ἐναπομείνη, quin prorsum rescindenda sint, quis dubitet? Rhod. Οὐχ ὅπως ἡγανάκτησεν] Praeter Steph. et Rhodom. Scalliger et Is. Vossius ad gram quisque libri sui hoc probarant, quibus haud assentiri nefas hac quidem in re est. Convenit egregie hoc Musonii, Socrates, inquentis, οὐχ ὅπως ἡγανάκτησεν, ἀλλὰ καὶ ἐντυχὸν ἡξίον αὐτὸν in Stobaei Sermon. XIV. p. 170. et Nostri de regibus Aegypti, οὐχ ὅπως ἡγανάκτων ἀλλὰ τοῦναν-

τίον ἡγοῦντο, infra c. 71. et de Dionysio οὐχ ὅπως ἠλέησε τοὺς ἀλλὰ πᾶν τούναντίον etc. XIV. 111. et XI. 46. XIII. 22. WESS.

68. 88. Καὶ ἐναπομείνη βιώσας τὸν ἴσον χρόνον] Sine his duobus verbis καὶ ἐναπομείνη (quae in omnibus exemplaribus non sunt) facilis esse videtur huius loci sententia. Nimirum haec: Rex autem tantum abest ut indignatus fuerit, ut contra illam loquendi libertatem amplexatus, daturum se operam dixerit, ne ulla in re inferior eo esset, si aequae longa illi vita contingeret. Sic autem interpretor ut si οὐχ ὅπως legeretur; de qua lectione vide proxime praecedentem annotationem. STEPH.

68. 89. Τὰς ἡλικιώτιδας πράξεις] Conf. supr. c. 9. WESS.

69. 92. Τὴν τοῦ πατρὸς προσηγορίαν etc.] Herodoto Φερῶν Pheron, voce appellativa et regem sua origine significante, dicitur: neque enim aliud videtur ac φαρας, Pharaos sive Pharo, ut bene Camp. Vitringa in Esai. XIX. p. 549. Plinio Nuncoreus est XXXVI. N. H. 11. WESS.

69. 97. Ἐτυγλώθη γὰρ καὶ ἐξεῖνος] Quid repetitiuncula ista opus? cum de caccitate patris paullo ante dixerit. Ad sui generis ergo, id est, putida glossemata, remittendum. RHOD.

69. 98. Τὸ γὰρ ῥέμμα etc.] Quod ex Coisl. et Mutin. excerpti plenius est ad Herodoti sententiam compositum: suspectum tamen et propterea illis, quibus allubescet, relictum. WESS.

69. 2. Οὐδεμιᾶς ἐτύγγανε πολικωρίας] Non temere πολικωρίας in contextum recepi; sic enim cum alibi, tum p. 57. in fine, πάσης μὲν τιμῆς καὶ πολικωρίας ἀξιοῦνται. STEPH. Recte Steph.; multo enim hoc elegantia ac vi praestat. Plutarch. T. II. p. 792. E. de patria, ut ait, non quidem a senectute immuni, nec sibi sufficiente, ἀλλ' αἰεὶ πολικωρίας δεομένη καὶ βοηθείας, sed semper diligenti cura et auxilio indiga. Suidam adde in πολικώρησον, et infra XI. 85. Quod sequitur τῷ δευάτω ἔτει, id Herodoto quodammodo contrarium, qui anno XI. II. 111.; sed non convenit omni ex parte inter eos, et potuit id discrimen nasci, quod fine anni X. rex oraculo sit monitus, proptereaque alii XI. alii X. anno id, quod evenit, tribuerint. WESS.

69. 4. Νίξασθαι καὶ πλένσθαι] Resecato ut synonymiam longe ineptissimam: eodemque honore affice, quod sequitur, καὶ τὴν μαντείαν. RHOD.

69. 9. Λιὰ τὸ σύμπτωμα τοῦτο] Phrynichus Eclog. p. 40. temere vocem proscribit, Thucydidis et Demosthenis calculo probatam. Σύμπτωμα Hesychio est σὺννάτημα, id quod accidit, casus, ut cap. 57. διὰ σύμπτωμα τοῖσόνδε, et c. 60. ἀπὸ τοῦ συμπτώματος τῶν οἰκητόρων. Id praetereundum non est, Herodoto auctore, vicum eum sive urbem potius, sic enim censet, Ἐριθρὴν βῶλον, Rubram glebam, esse dietam, atque illi accedere

Ethnicograph. in Ἐρυθρὰ βῶλος. WESS. Diodoro ἰερὰ βῶλος et ζώμη sive vicus, ipsiusne an librarii culpa in dubio est. IDEM ad Herod. II. 111.

69. 14. Συχρὰ τῶν διαδεξαμένων] Longe hic a Diodoro abit Herodotus, qui Sesostris filio successorem dat Proteum II. 112. Longius Manetho apud Syncell. p. 60. Unde animum suspicio subit, aut alios annales sacerdotes Aegyptios, quos noster auctores habet, secutos esse, aut patriae studio, ut eius res multo antiquissimas facerent, multa deinceps commentos. Mecum sentit vir egregius Camp. Vitranga in Esai. XIX. p. 542. WESS.

69. 16. Ἀμασις] Si Ἀμασις hic scripsisset Diodorus, certe ad eam Amasin veniens quem cum Herodoto successorem Apriae facit, secundum hoc nomine esse admonisset: sed nec alii quoque silentio id praeteriissent. Quid tamen pro Ἀμασις reponendum sit, ne suspicari quidem possum: nisi forte Ἀμμωσις reponi debet, ut et p. 41. pro Ἀμασιν aliam ex alio exemplari lectionem in margine tibi apposui Ἀμμωσιν. STEPH. Lege cum H. Steph. Ἀμωσις. Sed quid agit in quarto versu ἀλαζονιζῶς; quod quinta, ut aiunt, rota in curru, vel asinus in unguento. RHOD. Ἀμασις γενόμενος βασιλεὺς] Vera si essent, quae de regibus huius nominis commentatus est Gottf. Olearius in Philostrati V. Vit. Apollon. 42., nulla opus foret correctione: sed miscet ille Amasin, Apriae successorem, quo de Philostr., et Amosin, quo rege Israelitae creduntur ex Aegypto excessisse. Vel sic tamen contra Codd. voluntatem nihil muto: nam et Amosin sive Ammosin primum dynastiae XVIII. regem Iustin. Mart. Paraenes. p. 10. A. atque alii Amasin appellant. WESS.

69. 22. Ἐπεὶ δὲ Ἀκτιάνης] Regis huius et occupatae eius ductu et auspiciis Aegypti praeter Strabon. XVI. p. 1102., etsi et is obiter atque aliud agens, nusquam alii, quantum quidem recordor, meminerunt. WESS.

69. 26. Ἀνθρωπίνως ἐνέγκας τὴν ἐδτυχίαν] Utitur dictione, quae civilem animum et vicissitudinis rerum humanarum memorem complectitur, saepeque adeo moderationem, qua omnia humana placate et moderate ferimus, indicat; ita Gelon τὴν ἐδτυχίαν ἀνθρωπίνως ἔφερε XI. 26., contra Tantalus, rerum successu inflatior, τὴν ἐδτυχίαν οὐ γέγων ἀνθρωπίνως IV. 76. saepe etiam clementiam, qua humaniter alios habemus, quod ἀνθρωπίνως χρήσασθαι XI. 26. et ἀνθρωπίνως μεταχειρῆσθαι Dioni Cassio LVI. p. 683. C. Plura Des. Heraldus I. Animadv. in Ius Att. et Rom. c. 8. WESS.

70. 36. Πρωζοροούσαν] Strabo Lib. XVI. p. 1102. Πρωζόλοσαν vocat; quod ad etymologiam Graecam a ζολόνω magis quadrat. Stephanus tamen Πρωζοόρουσαν scribit. Sic autem a ζῆν et ζέλωσιν seu ζορὰ et ὄρος deduceretur. Quod Grammaticis disceptandum tradimus. Graecam enim compositionem esse

quis ambigat? RIIOD. [*Πρωζολούρα*] In urbis huius nomine variant scriptores, ut ad Itiner. Antonini p. 151. abunde est patefactum. Quod restituimus, tritius et sermonis analogiae convenientius est. Seneca, haud scio quo auctore, III. de Ir. 20. *rex Persarum totius populi nares recidit in Syria: inde Rhinocolura loci nomen est.* Diodoro, ut dictum ante, adsentitur Strabo. WESS.

70. 37. *Ὅν μακρὰν τοῦ παρήχοντος ἀγιάλου*] Mallem a litore porrecto, seu quod praeter urbem longissime porrigitur. Dicuntur enim regiones, insulae, litora *παρίζειν*, quae pertinent et extenduntur, ut diligenter monuit Celeb. C. A. Duker. in Thucyd. IV. 36.; Pausan. I. 44. *παρίζει δὲ παρὰ τὴν Νισαίαν νῆσος οὐ μεγάλη, ante Nisaeam insula haud magna porrigitur.* Et Noster infra II. 13. *τοῦτο δ' ἐπὶ πολλοὺς σταδίους παρίζον.* clariusque sup. c. 31. *ταινία παρ' ὄλην σχεδὸν τὴν Αἴγυπτον παρίζει.* WESS.

70. 40. *Ἐντὸς δὲ τοῦ τείχους etc.*] His pugnarent, quae de torrente Aegypti in Esai. XXVII. et Amos. VI. Hieronymus memorat, urbem hanc alluente, modo certa forent; quod quidem ego non putem. *Torrentis Aegypti* ille *Ἰβριμα* *Ἰβριμα*, alius est, et a Nilo haud diversus. Tamen quae hic de Rhinocolura, ea fere de Ostracine, huic vicina, Ioseph. IV. B. Iud. 11. 14.; ut utraque pessimo fuerit situ. WESS.

70. 47. *Ἐκρηγνέντες εἰς γῶραν*] Proprium hoc illis est, qui à civium commercio avulsi in ultimos fines seponuntur, ut Graeci, ab Alexandro *ἐν ταῖς ἐσχατιαῖς τῆς βασιλείας ἐξεθρόμμενοι* XVIII. 7., et Aegyptii, qui vitiligine infecti *ἐξεθρόμμεσαν εἰς τὴν Ἑλλάδα*, Eclog. Lib. XL. 1. WESS.

70. 54. *Φέρονται κατ' ἀγέλας*] Volare catervatim perhibentur, quare Delus Ortygia dicta, *παρ' ὃ τὰς ἀγέλας τῶν ζώων τούτων φερομένας ἐκ τοῦ πελάγους ἰζάνειν εἰς τὴν νῆσον*, quod greges coturnicum e mari in insulam devolare ibique considerare soleant, in Athen. IX. 11. His autem Diodori diligenter viri doctissimi, qui eas aviculas, quibus Israëlitae in desertis Arabiae vesebantur, coturnices fuisse censent, ut adsolent, S. Bochartus Hierozoic. P. II. I. 15. p. 100. Io. Marsham. Canon. Chronol. p. 147. atque alii; a quibus ego, ut alias dicam, dissentio. WESS.

70. 59. *Μένδην*] Huius regis fit mentio a Diodoro non procul ab huius libri primi fine: ubi *Μάρου* genitivus habetur unico *ο* scriptus, in iis [exemplaribus quae hic accusativum *Μάρου* duplici *ο* scriptum habent. In eo autem in quo hic *Μάρου* legitur, ibi non itidem *Μάρου*, sed *Βάρουτος* legimus. Locus est hic, *τὸν δὲ Σαίδαλον λέγουσιν ἀπομιμήσασθαι τὴν τοῦ λαβυρίνθου πλοκήν, τοῦ διαμένοντος μὲν μέχρι τοῦ νῦν, οἰκοδομηθέντος δὲ, ὡς μὲν τινες φασιν, ἐπὶ Μένδητος, ὡς δ'*

ἔτιοι λέγουσιν, ἐπὶ Βάρωνος τοῦ βασιλέως, πολλοῖς ἔτεσι πρό-  
 τερον τῆς Μίνω βασιλείας. Diligenter vero consideranda est  
 quae habetur hoc loco scriptura, propter vicinitatem, quam hoc  
 nomen habet cum eo quo Herodotus unum ex regibus Aegypti  
 nominat. Is enim Φέσωνα quendam appellat. Ac fieri potest ut  
 eundem alii Φέσωνα, alii Βάσωνα nominarint. Sed quis fuerit  
 et quo tempore regnaverit hic sive Φέσων, sive Βάσων, hac vero  
 de re inter Herodotum et Diodorum nullo modo convenit. Ait  
 enim Herodotus Sesostridi mortuo in regnum successisse filium  
 Pheronem, qui nullam expeditionem susceperit, cuique luminibus  
 orbari contigerit. At Diodorus Sesostrim quidem regni successo-  
 rem habuisse scribit suum filium, nullis rebus gestis nobilitatum,  
 et luminibus orbatum, sed Sesostrim et ipsum nuncupatum. pa-  
 tri enim fuisse cognominem tradit. Verum quocumque sit appel-  
 landus rex hic nomine, (si modo eundem regem non eodem no-  
 mine ab omnibus appellari putandum est) constat Diodorum Va-  
 ronem suum inter Sesostridis filium et Proteum una cum aliis in-  
 terficere: quum Herodotus Sesostridis filium Pheronem nuncupet,  
 cui Proteum successorem faciat. Iam vero hic alius mihi iniicitur  
 scrupulus ex alio Diodori loco. Quum enim hunc eundem regem ab  
 aliis Μέρδην, ab aliis Μάζον nominatum scribat, in eo ipso  
 quem modo citavi loco (est autem pag. 61. huius editionis) Μέρ-  
 δην sive Μέρδητα alium a Maro sive Varone facit. Nam quum hic  
 Μέρδην, quem alii Μάζον vocant, labyrinthum construxisse tra-  
 dat, cui similem Daedalus Minoi Cretensium regi fabricatus sit:  
 illic scribit Daedalum imitatum esse labyrinthum aedificatum, ut  
 quidam aiunt, a Mendete, ut autem alii dicunt, a Maro rege.  
 Nisi forte aliquis, ὡς μὲν τινες φασὶν, et ὡς δ' ἔτιοι λέγουσιν,  
 (id est, ut quidam aiunt aliqui, ut vero nonnulli dicunt) acci-  
 piat pro ὡς μὲν τινες αὐτὸν ὀνομάζουσιν, id est, ut eum quidam  
 nuncupant. Sed quis unquam ita loquutus est? Ego certe potius  
 Diodorum, quum non eosdem utrobique auctores sequeretur, non  
 eadem scripsisse, credibile esse existimo. STEPH. Nos Μάζον  
 retinemus, cum de Pherone Herodoti atque hinc de Barone dubia  
 sit H. Stephani coniectura: cuius notatio diligentissima consula-  
 tur. RHOD. Diodoro nihil certi constitit de labyrinthi auctore,  
 ut haec et quae c. 89. et 97. leguntur, liquido ostendunt. De  
 Mende sive Mendete non dissentit Strabo XVII. p. 1165., cuius  
 nec Imandes sive Maindes, ut in Epitoma, non alius est, uti  
 Marres Aelian. VI. Hist. An. 7. et Smarres Plinii XXXVI. 9.  
 diversus ab hoc Marro seu Marno. Quam longe vero hinc abit  
 Herodot. II. 148. et cum secutus Mela I. 9., qui XII regibus et  
 Psammeticho inprimis, Plinius XXXVI. 13., qui Potesucco, Afri-  
 can. et Euseb., qui Lachari Sesostris filio, labyrinthum tribuunt  
 in Syncel. Chronogr. p. 60.? E qua scriptorum discordia id iusta  
 conclusione confeceris, plures regum diverso tempore huic operi

euram atque inpensam insumpsisse, nec certo posse finiri, quis ceteris praeciverit. WESS.

71. 69. Ὁμοιον τοῦ κατ' Αἴγυπτον] Tametsi et Plinio hinc sumpsisse Daedalum exemplum eius labyrinthi, quem fecit in Creta, non est dubium, XXXVI. N. H. 13., incertissimis tamen suspicionibus motus Io. Marsham. p. 291. illi ac Diodoro obloquitur. WESS.

71. 70. Τὸν λεγόμενον Μινώταυρον] Conf. infr. IV. 79. WESS.

71. 71. Ἡφανίσθη τελείως] Cretici nulla vestigia suo tempore durare Plinius XXXVI. 13. indicat. Itaque alius est, qui nunc peregre in Cretam profectis ostendi solet, accurate descriptus in Itiner. Epist. 2. p. 26. a Pitt. Tournefort. WESS.

71. 74. Μέχρι τοῦ κατ' ἡμᾶς βίον] Immo in hanc usque aetatem, etsi non plane integer: rudera, quae supersunt, illustravit Paul. Lucas Itiner. Aegypt. V. p. 24., quem et viri docti Dissert. insertam T. III. Histor. Acad. Inscript. p. 368. adi. WESS.

71. 76. Τῶν ἀδόξων τις] Hoc malui; nam quae adduntur, certo sunt argumento, non plane indignum fuisse eo honore; quod vulgo recepta scriptura indicabat. WESS.

71. 77. Ἡγεθῆ καὶ προεκεθῆ] Glossema hoc esse quis non videt? Qui desumitur ad regni gubernacula, is certe prius fuit electus prae aliis. Ordinem igitur hanc Glossator invertit, ut scilicet additamentum eius eo facilius animadverti posset. RHOD.

Ibid. Κέτνα] Praefero Κέτην, propter terminationem Graecam. RHOD. Κέτην] Convenit hoc nomen cum Sethose, primo dynastiae XIX. rege, qui ab Syncello p. 160. in serie regum videtur Κῆρτος Certus dictus, haud dubie pro Κῆτος. Appellatur autem Graecis Πρωτεύς Proteus, quia primus fuerat post anarchiam aliquam rex, primus suae familiae, primus novae dynastiae. Sic fere Iac. Perizon. Origin. Aegypt. 15. WESS.

71. 81. Ὅτε μὲν εἰς ζώων τύπους etc.] Homer. Odyss. A. 418. Quam hominis versatilem naturam ridet urbanissimus scurra Lucian. Dial. Marin. IV. 1. Mox Rhodom. emendat καὶ δένδρον, haud sane gravi causa. WESS.

71. 84. Ἐμπειρίαν ἐσχηκέναι] Fabulam hanc alii aliter interpretantur, ut Heraclides in Allegor. Homer. p. 488. Synes. in Dion. p. 44. Lucian. Salt. c. 18. et Io. Tzetzes Chiliad. II. Hist. 44. WESS.

71. 89. Λεόντων προτομὰς] Conf. infr. c. 96. WESS.

71. 96. Ὁ υἱὸς Πέμψης] Herodoto II. 121. Rhampsinitus, quem Io. Marsham. componit cum Sesostris apud Manethonem filio Rhampse, illique accepta refert, quae apud Tacit. II. Annal. 60. Canon. Chron. p. 416., satis profecto incommode. Melius congruit dynastiae XIX. rex secundus Rapses sive Rapsaces apud Syncellum p. 72. WESS.

72. 99. *Ὅτε εἰς ἀναθήματα*] Habet eius tamen denaria Herodot. II. 121. de immanibus regis divitiis Diodoro consentiens. WESS.

72. 10. *Πλὴν ἐνὸς Νειλέως*] Dicaearchus in Schol. Apollon. Rhod. IV. 272. hunc inter et Sesonchosin, qui Sesostris, annos interserit bis mille quingentos, quod, si numeri bene habeant, veri fidem exsuperat, ut recte Jac. Perizon. Orig. Aegypt. 18.; id melius, quamquam non satis accurate, quod a Nileo ad Olymp. 1. annos ccccxxxiii computat: vixit enim ex utriusque sententia post bellum Troianum, a quo prima Olympias annis ccccviii abest. WESS.

72. 12. *Τὸ προτοῦ καλούμενον*] Prave Coislin. et Mutin. nec melius *τὸν προτοῦ* in Addend. Rhodom. *Τὸ προτοῦ* est antea, quomodo IV. 87. Siciliam *τὸ προτοῦ Χερσόνησον οὔσαν*, et Lesbum, *τὸ προτοῦ καλουμένην Ἰσσαν* V. 82. ait. Quod autem flumen ab hoc Nileo nomen sortitum perhibet, id parum illis respondet, quae de Nilo, Vulcani patre, Diogen. Praefat. seg. 1. et de alio Philostratus Heroic. 3. 4. memorant. Verius illi, qui Nilum *κατ' ἔξοχὴν* dictum censent ex Hebraeorum *נחל* *Nachal* sive *Neel*, ut S. Bochartus Hieroz. P. II. V. 15. p. 764. WESS.

72. 13. *Καὶ τάφρους* dele. RHOD.

72. 16. *Χέρμης ὁ Μεμμίτης*] Proximum a Proteo Rampsinum ponit Herodotus; cui Cheops, non multum a Chembae seu Chemmis nomine discrepans, successerit, et dehinc Cephren, II. 124. RHOD.

72. 18. *Τοῖς ἐπὶ τοῖς ἐπιφανεστάτοις ἔργοις*] Sic et II. 11. XVIII. 4. Strabo *ἐν τοῖς ἐπὶ θεάμασι* XVII. p. 1161. C. et Philo Byzant., ad quem *περὶ τῶν ἐπὶ θεαμάτων* plura L. Al-latius. WESS.

72. 20. *Σταδίωνς ἑκατὸν καὶ εἴκοσι*] Collem eum, in quo pyramides, Strabo stadiis xl. Memphi removet XVII. p. 1161. Plinius, *sitae sunt*, inquit, *in parte Africae, monte saxeo sterilique inter Memphin oppidum, et quod appellari diximus Delta, a Nilo minus quatuor millia passuum, a Memphi* VII. M. D., XXXVI. Nat. Hist. 12., qui numeri etsi Diodori stadia non aequent, clarissime tamen ostendunt, non alias has esse pyramides, atque eas, quae nunc in Aegyptum profectis miraculo sunt. Vid. Prosp. Alpin. I. *Res. Aegypt.* c. 6. WESS.

72. 25. *Πλεθρὸν πλέθρων ἐπὶ*] De pyramidis amplitudine scriptoribus haud bene convenit. Herodotus singula eius latera *octo plethra* sive 13000 pedes, Strabo stadio paullo amplius spatium, Plinius 13000000 pedes, P. Belon. I. *Oper. Antiq.* Praest. 4. passus cccxxv occupare prodit. Diodori *vii plethra* sive 1300 pedes Io. Gravius, qui spatium diligentissime dimensus est, ad verum propius accedere conperit Pyramidogr. p. 68. WESS.

72. 26. Συναγωγὴν δ' ἐκ τοῦ etc.] Sic III. 40. ὕρχεται συναγωγὴν λαμβάνειν ὁ κόλπος. estque frequentissimum in omnibus illis, quae in artum coeunt. Κλίμακες ἄνω συναγωγὴν λαμβάνουσαι Apollodor. Poliorect. p. 38. De Pyramo Strabo, ἐπειδὴν συνάρηι τῷ Ταύρω, παράδοξον λαμβάνει τὴν συναγωγὴν, XII. p. 810.; cuius et II. p. 177. A. VIII. p. 517. B. et Athenaeum de Machin. p. 4. vide. WESS.

72. 30. Χαλίων ἔτων] Conf. c. 44. WESS.

72. 35. Ἐκ τῆς Ἀραβίας] Habet lapicidas Arabicas II. 48.; sed haec alius loci, quippe ea in Aegypti parte, quae ad sinum Arabicum vergit, Arabiacque nomine nota fuit, apud Herodot. II. 8. 124. Strab. XVII. 1162. C. WESS.

73. 41. Λίθων ξεστοουργίας καὶ λαξέσεως] Per curiositatem alicuius καὶ λαξέσεως huc irrepsit, ut et sequentia καὶ μινθέσθαι, itemque λέγοντες. RHOD. Οὔτε τῆς τῶν λίθων ξεστοουργίας etc.] Negat Strabo XVII. p. 1162. ἐκ γὰρ τῆς λατύπης σωροὶ τινες πρὸ τῶν πυραμίδων ζεῖνται, *acervi quidam*, inquit, *lapillis dolando detritis, ante pyramides iacent*; cui, quia se vidisse profitetur, prae Diodoro Is. Casaubon. adsentitur. Ego de lapillis istis variatum fuisse sententiis opinor, et spectatorum aliquos veteris structurae reliquias, ceteros arenam esse censuisse. Facit cum Diodoro Plinius XXXVI. 12. *vestigia aedificationum nulla exstant, arena late pura circum, lentis similitudine, qualis in maiori parte Africae*; neque invenit Strabonis illos lapillos Io. Gravius Pyramidogr. p. 119. WESS.

73. 45. Τερατολογεῖν ἐπὲρ τούτων, ὡς ἐξ ἄλων etc.] Hoc sequor, deletis librariorum, qui audacissime hoc in scriptore grassati sunt, commentis. Diceres Plinium haec Diodori excerpssisse quaestionum, inquentem, *summa est, quam ratione in tantam altitudinem subiecta sint caementa: alii enim nitro ac sale adaggeratis cum crescente opere, ac peracto fluminis irrigatione dilutis; alii lateribus e luto factis, in privatas domos distributis*. Paulo post ἔτηξεν, quod Scalig. et Vossio probabatur, inducto, quod additum erat, glossemate, restitui. WESS.

73. 47. Ἐπήξεν καὶ διέλυσεν] Lege ἔτηξεν et tolle sequentem copulam una cum verbo: extrinsecus enim haec advenisse, terminatio ἐν in ἔτηξεν arguit, cui αὐτὰ fuit proximum. RHOD.

73. 51. Τριάκοντα μὲν γὰρ καὶ ἑξ etc.] Prope ab his numeris absunt haec Plinii, *trecenta LXVI hominum millia annis XX eam construxisse produntur*. Longius Herodot. II. 124. WESS.

73. 58. Χαβρέν] Videtur idem esse ac Cephrenis nomen, ac tantum diverso pronuntiantium sono discrepare. Herodot. II. 127. Cheopis frater est. Recte vero Steph. et Rhodom. τὴν τοῦ προβασιλεύσαντος προαίρεσιν maluerunt, quorum opinionem Mutin. codex firmat et scriptoris consuetudo, qua προβασιλεύσαντες,



qui ante aliquem regni curam administrarunt, ut extremo hoc capite et 94. WESS.

73. 60. Τὴν τοῦ βασιλεύσαντος] Aut τοῦ προβασιλεύσαντος, aut τοῦ πρὸ αὐτοῦ βασιλεύσαντος legendum puto. STEPH. Praefigatur πρὸ, ut H. Stephan. monet, et mox ὡς ante λάχανα in εἰς mutetur. RHOD.

73. 63. Πλευρᾶς σταδιαίας etc.] Neque in huius amplitudine consentiunt: Plinius in singula latera centum fere pedibus altera minorem, Strabo priori aequalem facit; cui Io. Gravius Pyramidogr. p. 104., re diligenter explorata, accedit. WESS.

73. 65. Ὡς εἰς λάχανα καὶ σερμαίαν] Hoc placet, etsi ὡς nonnunquam potestatem praepositionis εἰς induat. Poterat quidem sine orationis detrimento ea hinc abesse particula, verum saepe eiusmodi locum sermonis quadam elegantia occupat, ut egregie monuit T. Hemsterh. in Luciani D. Mort. XIII. 6. Recte autem σερμαίαν, Plinii exemplo, raphanos vertunt. Erotian. σερμαία λέγεται ἢ ἐλμύζης ῥαφανίς, ἣν τινες μεθ' ἄλλης ἐσθίουσιν καθαίρονται, καὶ καλεῖται σερμαϊσμός ὁ τοιοῦτος τῆς καθάρσεως τρόπος. Aegyptii raphanis vesciebantur, eorumque succo alvum ciebant, quod σερμαΐζειν Aelian. V. H. An. 46.; quamobrem σερμαΐη de eiusmodi succo Herodot. II. 88. et Aristophan. Pac. 1253. et Aegyptii μελανοσερμαϊῶς λεῶς Thesmothor. 864., uti Scholia vide et Foesii Oeconomiam Hippocr. Σερμαΐη. WESS.

73. 70. Κατασκευασάντων, τάφους] Haec verier opinio, probata Straboni XVII. p. 1161. Lucano VIII. 697. Servio in Aeneid. XI. 849. Falluntur enim, qui frumento asservando pyramides exstructas putarunt Stephanus et Etymologus; nam et ei rei aptae non sunt, et solium sive sandapila, in maiore residua, et regis corpus ab Arabibus, cum Calipha Almamon esset, inde erutum, et summa sepulturae, quam Aegyptii agebant, cura, sepulera fuisse ostendunt: nec his obest Plinianum, factas videri, ne pecuniam reges successoribus aut aemulis insidiantibus praebere, aut ne plebs esset otiosa: illae enim rationes principi ac praecipuae, ut regibus tumuli loco essent, accesserunt. Plura Io. Gravius Pyramidograph. p. 44. WESS.

74. 74. Αὐτὸς ὄργῃς εἶχε] Conf. Herodot. II. 128. WESS.

74. 79. Ὅν τινες μὲν Χερῖνον] Ex μὲν Χερῖνον faciendum puto Μυχερῖνον. μὲν certe nullo modo locum hic habet. Fucrit autem μὲν Χερῖνον pro Μυχερῖνον ita positum ut μὲν Μύμην pro Μόμην, de quo vide proxime sequentem annotationem. Ab Herodoto quidem certe Μυχερῖνος vocatur hic rex, Chephrenis secundum eum successor; secundum Diodorum autem, vel Chephrenis vel Chabriae. nam Chemmidi aut Chembeti (quem Herodotus Cheopa nuncupat) successeritne Chephren frater, an Chabryis seu Chabryas filius, in ambiguo relinquit. Herodoti

verba sunt, βασιλεύσαι δὲ τὸν Χέοπα τοῦτον Αἰγύπτιοι λέγουσι πεντήκοντα ἔτα. τελευτήσαντος δὲ τούτου, ἐκδέξασθαι τὴν βασιλείην τὸν ἀδελφεὸν αὐτοῦ Χερσῆνα. Ubi animadvertit Chemmidis sive Cheopis fratrem ab Herodoto et Diodoro nomine eodem appellari, nisi quod hic aspiratam *χ* in tenuem *κ* vertit. Ab hoc enim Χερσῆν, ab illo Χερσῆν dicitur. Falsum est igitur, quod quidam scripserunt, quem Herodotus Chephrenem nuncupet, eum a Diodoro Cephum vocari. STEPH. Restitue Μεχερῶνον. RHOD. Ὅν τινες Μεχερῶνον] Dedi scriptis Codd., ut hoc in integrum restitueretur. Videntur *Mucherinum* et *Mecherinum* levi soni discrimine appellasse: vulgatum certe quidem propius hinc quam a Stephani coniectura abest. WESS.

74. 84. Ἐπὶ πεντεκαίδεκα δόμους] Ad xv lapidum ordinem sive conpagem: Herodot. II. 127. ἐποδείμας δὲ τὸν πρῶτον δόμον λίθου Αἰθιοπικοῦ ποικίλου, cum primam conpagem ex Aethiopico versicolore lapide struxisset: sic enim recte lac. Gronov., quem vide in eiusdem I. 179. Rhodom. *contignatio* hic non quadrat. WESS.

74. 85. Ἐκ μέλανος λίθου] Minus distincte Plinius XXXVI. 12. *tertia minor quidem, sed multo spectatior, Aethiopicis lapidibus assurgit.* Neque enim tota ex eo lapide, sed εἰς τὸ ἥμισυ, ad medium usque Herodot. II. 134. et Strabo XVII. p. 1161., qui insuper addit, lapidem eum ex Aethiopiae montibus deferri, durum esse, et mortariis cavandis habilem: Plinio XXXVI. 7. *Basaltes est, ferrei coloris et duritiae.* Atque ita quidem paene his scriptoribus convenit, quos P. Belonius atque alii sequuntur: qui vero accuratiore diligentia pyramidem hanc examinavit, candido lapide exstructam animadvertit, Io. Gravius *Pyramidogr.* p. 112. WESS.

74. 89. Ἐπιέγρουπται Μυκερῶνος] Nomen id aëris temporumque iniuria plane defluxit; idem Gravius p. 113. WESS.

74. 93. Καὶ προῦν] Haec exauctorato. RHOD.

74. 96. Κατὰ δὲ τοὺς χρηματισμοὺς etc.] Scholion καὶ τὰς μαντείας Rhodom. in fraudem induit, ut in *Deorum responsa et oracula* verteret, quibus nullus hic quidem locus, sicuti et ipse dein animadvertit. Χρηματίζειν praeter alia rex iudexve dicitur, quum de iure civibus respondet: Appian. III. B. C. IV. p. 882. ἐπὶ τοῦ στρατηγικοῦ βήματος, ἔνθα ὁ Τρεβόνιος ἐχρημάτισε, ubi Trebonius ius reddere solebat. et χρηματισμὸς ipsa iurisdictio infr. c. 70. iudicisque sententia, quam qui adulterant *χρηματεῖς ψευδεῖς χρηματισμοὺς γράφοντες* c. 78. De iudiciis autem hic agi et ea quae proxime consequuntur et Herodot. II. 129. indicant. WESS.

74. 99. Ἐπὶ δὲ καὶ ἄλλαι τοεῖς] Illae in haec tempora haud durant, nisi si inter eas locum occupent, quae in Africae

desertis, sed longius a tribus superioribus disparatae, superant, de quibus Io. Gravius Pyramidogr. p. 13. et 115. WESS.

74. 6. Φιλοτεχνία τῶν ἐργουσαμένων] Diodori hoc est, cui φιλοτεχνία sollers quodvis artificium, ut cap. 61. ὡς πρὸς φιλοτεχνίαν δευσιμίητον. et 74. καὶ φιλοτεχνία τῆς φυσικῆς ἐνεργείας οὐκ ἀπολείπονται. et III. 37. φιλοτεχνία τε καὶ δόλω τὸ τῆ βία δευσαταγώνιστον ἐχειρώσαντο. Vulgatum πολυτεχνία Grammatici commentum est. WESS.

75. 13. Οὐδὲ παρὰ τοῖς ἐγχωροῖς] Bene Plinius, cum scriptores enumerasset, qui de pyramidibus egerant, *inter omnes eos non constat a quibus factae sint, iustissimo casu oblitteratis tantae vanitatis auctoribus*, XXXVI. 12. Atque hac veterum discordia prudentissime in rem suam usi sunt viri doctissimi, ut vincerent, Israëlitas ad stupenda haec opera, cum gravissimis in Aegypto oneribus premerentur, manus paene invitos admovisse, Nicol. Abramus VIII. Phari V. T. 14. Iac. Perizon. Orig. Aegypt. 21. WESS.

75. 16. Ἀμαῖον — Ἀμασιν] Hic Ἀμμωσιν et Μάρωνα non inviti recipimus. Amasi enim ultimo regum Aegyptiorum nec ab Herodoto nec a Diodoro pyramidum assignatur. Cumque hunc solum inter Aegypti reges illos Amasidis nomen habuisse, ratione bona H. Stephanus doceat, Ἀμμωσιν hic interim ex margine assumimus, dum certius quiddam offeratur. Quamquam nec in Ammosis supra adducti historia pyramidum mentio fiat. Porro an Maro hic idem sit, qui superior Marus vel Baro, aut etiam Phero, disquirendum restat. RHOD. *Armain* regem, sic enim scripti libri, non Amasin, in sphinge, quae prope pyramides, Plinius XXXVI. 12. conditum ait, estque *Armais*, *Armaeus*, Sesostris frater, ut ante dictum, ex Manethone apud Syncellum p. 155. Qui sequitur *Amasis*, eius ego nomen retineo, tum propter ea, quae ad cap. 60. disputavi, tum ob Lucanum IX. 155.

*Non mihi pyramidum tumulis avulsus Amasis,*

*Atque alii reges Nilo torrente natabunt?*

Neque enim haec ad eum Amasin, qui Apriae successit, referri possunt, alibi sepultum apud Herodot. III. 10. De *Inarone* viris doctis non obloquar, quamquam fieri potuit, ut in tanta regum Aegyptiorum multitudine, hoc quis nomine insignis fuerit. Habemus alium infra XI. 71. WESS.

75. 17. Ἰναρῶν] Recte, quod ad accentum, libri meliores, qui Ἰναρῶν. Choeroboscus in Bekkeri Anecd. p. 1197. εἰσὶ δὲ καὶ Περσικὰ ὀνόματα καὶ Αἰγύπτια εἰς ὡς λέγοντα, ἅτινα τὴν αὐτὴν κλίσην ἐπιδέχονται τοῖς εἰς ὡς Ἀπτικοῖς· εἰ (I. οὐ) μέντοι προπαροξύγονται κατὰ τὴν εὐθείαν, ὥσπερ οὐδὲ ἐν ταῖς ἄλλαις πτώσεσιν. ἔστι γὰρ Ἰναρῶς ὄνομα βασιλέως — καὶ ἰστέον ὅτι τινὲς μὲν ὀξύγουσιν αὐτὰ, τινὲς δὲ περισπῶσιν.

75. 18. *Ῥοδιώπιδος τάφορον*] Negat Herodotus II. 134. ipsoque opere et Rhodopidis aetate falsi coarguit: tamen Strabo XVII. p. 1161. et Plinius XXXVI. 12. pro vero putant: quam discordiam, duae si fuerint, sed diversae aetate, Rhodopides, quarum altera et vetustior ad reginae Aegypti fortunam escenderit, altera amatorem habuerit Charaxum, Sapphus fratrem, tolli fortasse posse, haud male in Aelian. XIII. V.H. 33. Iac. Perizon. censuit. WESS.

75. 22. *Μετὰ δὲ τοὺς προειρημένους*] Mycerino Herodot. II. 136. successorem dat Asychin, qui nisi sit Tnephachthus Bocchoridis pater, de quo c. 45., ipse Bocchoris est. WESS.

75. 24. *Ἀγχινοῖα καὶ φρονήσει* etc.] Suspicio voces καὶ φρονήσει ex Grammatici interpretatione hanc sedem occupasse; id suadent scripti Codd. et Diodori consuetudo, qua ἀγχινοῖα est sollertia et animi insignis prudentia, ut I. 8. II. 38. XV. 33. Nec sustuli tamen, quod alii binas has voces distinguant, quos inter principe loco Aristoteles Ethic. Nicomach. VI. 9. 10. Bocchoridem inf. 94. σοφὸν καὶ πανουργίᾳ διαφέροντα sapientia et versutia excelluisse ait, ubi plura. WESS.

75. 25. *Πολλοῖς δὲ ὕστερον* etc.] Male Aegyptii illi, qui Diodoro huius rei auctores fuerunt. Sabaeon Bocchoridem victum cepit et vivum dein exussit. Vide Syncelli Chronogr. p. 74. et 184. WESS.

75. 29. *Προστίμων ἄραι τὸ μέγιστον*] Quod ex Mutinensi Cod. restitui, coniectura assecuti fuerunt Ios. Scaliger et Is. Vossius. Simili peccato XI. 65. ubi πάλαι μὲν ἔσπευδον ἄραι τὴν πόλιν, in Coislin. ἀρετὴν scripserunt. Sunt autem τὰ πρόστιμα τῶν νομίμων poenae legibus statutae, ut mox et cap. 92. XIII. 91.; quas inter maxima utique est capitalis, unde τὸν θάνατον πρόστιμον τεθείκασιν, aut θάνατος ἔσται πρόστιμον V. 34. XI. 8. etc. WESS.

75. 32. *Χόματα κατεσκευάζειν*] Uberius et distinctius haec Herodot. II. 137. WESS.

75. 40. *Τὸν ἐν Θήβαις θεὸν*] Vid. supr. 57. WESS.

75. 41. *Μαζαρίως καὶ ἐντρυχῶς*] Posterior Glossatoris est; qui adeo puer est et vere νήπια εἰδῶς, ut contra auxeseos rhetoricae normam, inverso naturae ordine, a summis ad infima, ab emphaticis ad minus significantia gradum faciat. Sed pueris forte minus usitata et specialia per communia et generalia explicare in margine voluit: quae per librariorum postea incuriam vel temeritatem in medium contextum translata fuerint. Quae animadversio in caeteris id genus παρεμπλοκαῖς ubique locum habeat. RHOD.

76. 43. *Μετὰ τῆς Θεραπείας*] Bene de satellitibus Rhodom. accepit, ut infra XX. 11. 17. alioqui servitia indicat, unde Θεραπείας ὄχλος Philon. Iud. I. Vit. M. p. 625. B. Herodot. V. 21. VII. 55. etc. WESS.

76. 48. *Λιπῶν τὸν κύριον*] Rarum hoc apud alios de Deo simpliciter positum, sed V. et N. T. scriptoribus frequentissimum. Atque haud scio, an Io. Spencerus, cum in caussas inquireret, cur Deus O. M. regis dominique titulos admisit Dissert. de Theocrat. c. 5. p. 344. hoc, si in mundo illi fuisset, praeterisset. WESS. Aliena haec ab hoc loco, ubi τὸν κύριον intelligendum τὸν τοῦ ζῆν κύριον.

76. 52. *Ἀραρχίας δὲ γενομένης*] Herodotus Anysin regem, Sabacone in Acthiopiam reverso, regnum reciperasse, tum Sathonem, Vulcani sacerdotem, regem fuisse, eo vero defuncto XII reges constitutos, et multo sane rectius tradit II. 140. 141. 147. WESS.

76. 57. *Ἐπ' ἔτη πεντεκαίδεκα*] Noli ita accipere, ac si finitis XV annis sepulcrum struere adgressi fuerint: falsum id foret. Regnarunt adfinitatibus iuncti communibus auspiciis sepulcrumque sibi excitarunt: sed cum XV fere annos regnando absumpserant, ut mox dicet, Aegyptus sub unius Psammetichi imperium et ditionem redacta est. WESS.

76. 64. *Ἐνταγέντων*] Hoc praefero ob Philon. Iud. migr. Abr. p. 390. E. et supr. c. 64. WESS.

76. 67. *Τὸν εἰς τὴν Μοίριδος*] Conf. supr. c. 52. WESS.

76. 68. *Τάφον ἐκ τῶν καλλίστων*] Herodotus labyrinthum, ipsis pyramidibus excellentius opus, his auctoribus tribuit II. 148., eiusque vestigia legens Mela, ut supra c. 61. ostendimus. WESS.

76. 74. *Φάτνας τισὶ διαγεγλυμμένη*] Hoc probo. καὶ ξέσμασι Scholion est ineptum: quid enim ad hunc locum *ramenta ξέσματα*? Sunt *γάτναι* lacunarium, ad praesepis formam fabricatorum, genus, *γατνώματα* Polybio X. 24. Iosepho VIII. A. I. 3. 2. Retulit et huc Is. Casaubon. *γάτνας ἀργυρῶς* Turditanorum apud Strabon. III. p. 224., haud scio an iniuriā: sed de illis ad V. 35. Vide interea Cl. Salmas. in Fl. Vopisci Aurelian. 46. et P. Horrei Miscellan. Critic. c. 19. WESS.

77. 86. *Ψαμμίτιχος*] Etsi Herodoto, quamquam non constanter, sit *Ψαμμίτιχος*, hoc praetuli ob scriptos Codd., et quod Mela, Plinius, Aelianus, cuius tamen manu exarati libri variant, Polyaeus et alii id probent. WESS.

77. 90. *Λουσιελῶς διατιθέμενος*] Proprie *διατίθεσθαι* merces est *venum exponere* atque ex consequenti ratione  *vendere*: Herodot. I. 194. *ἐπεὶ καὶ διατίθενται τὸν φόρτον*. Demosthen. c. Phaenip. p. 599. *καὶ τοῦτον τριπλασίας τιμῆς ἢ πρότερον διατιθέμενοι*. Appian. V. B. C. p. 1079. *κομίζουσι μὲν ἐκ Περσῶν τὰ Ἰνδιὰ ἢ Ἀράβια, διατίθενται δ' ἐν τῇ Ῥωμίων*. Sed desino. Noli tamen negligere Schol. in Demosthen. Olynth. II. p. 14. et Is. Casaub. in Strabon. I. p. 17. WESS.

77. 94. Ἔνοι τῶν ἀρχαίων] Herodotum signat II. 151., qui rectius tamen ἕνδεκα φιάλας χρυσέας *undecim aureas phialas* sacerdotem attulisse ait. WESS.

77. 2. Ὑπειδομένους οὖν] De suspitione, etsi negligentius vulgo habitum, hoc non infrequens est. Polyb. II. 7. τὴν κοινὴν περὶ Γαλατῶν γῆμην ὑπειδόμενος *communem de Gallis famam suspectans*. Philo Iud. Quis Her. D. Her. p. 527. C. ὁ δὲ ὑπειδόμενος οὐδέν. Et Ioseph. XIV. A. I. 11. 6. 13. 4. 15. 7. WESS. Scribendum ubique ὑπιδόμενος. Nam Grammaticus Bekkeri Anecd. p. 167. I. quod προείδω finxit, hoc eius de σφῆλω verbo p. 171. et εἰ particula p. 144. praeceptis dignum est.

77. 4. Ἐν τοῖς ἔλεσι] *Elearchiam* ab his paludibus, de quibus ad Hieroclis Synecedem. p. 726. abunde, serior aetas appellavit. WESS.

77. 6. Ἐκ τε τῆς Ἀραβίας] Mallem cum Reg. et Coisl. ἔκ τε τῆς Ἰωνίας καὶ Καρίας. Ionum enim et Carum, quos sibi adiunxerat Herodot. II. 152. meminit: forte tamen alios habuit auctores Diodorus. WESS.

77. 8. Μώμεμφιν] Quaedam exemplaria non Μώμεμφιν habent, sed μὲν Μέμφιν. cuiusmodi error ostensus est proxime praecedente annotatione. Itidem vero apud Herodotum lib. II. Μέμφις perperam positum pro Μώμεμφις. STEPH. Polyaen. VII. Stratag. 3. Psammetichum de rege Tementhe prope *Memphin* victoriam reportasse tradit; quae diversa et hac posterior fuisse videtur. *Momemphis* non longe aberat a lacu Maria, sedibusque illis, in quas compulsus fuerat Psammetichus: saepe quoque a Memphi loco deiecta est in vetustis Codd., uti apud Herodot. II. 163. et 169., restituta tamen feliciter a Iac. Gronovio, quamquam observationis H. Stephani, paullo ante exscriptae, non recordato, ad Ethnico-gr. Μώμεμφις. WESS.

77. 13. Τῷ μὲν ἐν Μέμφει θεῷ] Hic omnes nostri codices habent προσπύλαιον, non προπύλαιον, quanvis antea in quodam p. 33. loco scriptum habeant προπύλαια, et p. 61. πρόπυλον. Herodotus quoque tractans eandem historiam προπύλαια vocat. Ex quo etiam patet hunc Memphiticum deum non alium esse quam Vulcanum: adeo ut quod pag. 61. dicit Diodorus πρόπυλον ἐν Μέμφει τοῦ Ἡγαίστου, idem esse putandum sit quod hic ait τῷ ἐν Μέμφει θεῷ προσπύλαιον. Templi autem Vulcani meminit antea Diodorus p. 13. et 16. τέμενος appellans: p. autem 33. ἱερόν. STEPH. et RHOD. Προπύλαιον] Restitui Diodoro, quod reliquerat. Herodot. paullo aliter II. 153. ἐποίησε τῷ Ἡγαίστῳ προπύλαια ἐν Μέμφει, τὰ πρὸς νότον ἄνεμον τετραμμένα. WESS.

77. 17. Καὶ τοῖς καλουμένοις στρατοπέδοις] Accusandi casum, quem margo habet, praeferendum existimavi, ut versio indicat. RHOD. Καὶ τὰ καλούμενα στρατόπεδα] Et haec suam

in sedem revocavi, Codd. veterum et Herodoti II. 154. auctoritate motus. WESS.

77. 21. Κατόμισεν εἰς Μέμφιν] Eadem Herodotus. Addit Polyænus, a Caribus his partem civitatis Memphis Καρομεμφίται appellari VII. Stratag. 3. WESS.

77. 24. Στρατεύσαντος δ' εἰς Συρίαν] Forte ea expeditione, qua Azotum obsidere ingressus est apud Herodot. II. 157.; quamquam is cap. 30. longe aliam huius discessionis causam adfert, non multum dissentiente Plutarch. T. II. p. 601. E. Nec Diodori tamen narratio a vero prorsus abludit: Herodotus enim transfugas hos patrio sermone *Ascham* et Graece τοὺς ἐξ ἀριστερῆς χειρὸς παρισταμένους βασιλεῖι sive a sinistra regi adsistentes appellari auctor est; cuius appellationis ea videtur esse causa, quam Diodorus praefert. WESS.

78. 39. Τοῖς κοντοῖς τὰς ἀσπίδας πατάξαντες] Amnian. XV. 8. cum hastis clypei feriuntur, irae documentum est et doloris. Quare de Macedonibus, quum ad eos parum grata Nearchus perorasset, nulli placebat oratio; itaque suo more hastis scuta quatientes obstrepere perseverabant in Curtii X. 6. cum Cellar. nota. Alioqui ut aut alacritatem suam aut hostibus formidinem ostentarent, hastis scuta quatere solebant, quod Aeliano VIII. H. A. 10. πρὸς τὰς ἀσπίδας τὰ δορύτια ἀράττειν, Arriano I. E. A. 6. τοῖς δόρασι δονηῆσαι πρὸς τὰς ἀσπίδας, ubi plura Iac. Gronov. WESS.

78. 46. Τῆς Αἰθιοπίας τὴν κρατίστην] Insulam supra Meroën Strabo XVII. p. 1134. B., Plinius VI. N. H. 30. et ante eum Herodot. II. 30. plura Aethiopiae loca insedissee adfirmat. WESS.

78. 52. Τοὺς ἐθελουσίως ἀποδημοῦντας] Hoc praefero. S. Lucas Evang. XV. 13. καὶ ἀπεδήμησεν εἰς χώραν μακράν. Novi τοὺς ἐπιδημήσαντας τῶν Ἑλλήνων ex Demosth. Midian. p. 378. et eius generis alios. Sed tum oportuerat ἐν τῇ Αἰγύπτῳ, nisi enallagen praepositionis admittas, ut XIII. 12. XIX. 117. Multum quoque haud absum ab ἐθελοντί, quod in Codd. quibusdam, probando ob XVI. 42. XVIII. 53. WESS.

78. 56. Τὰ κατὰ τὴν ἄλλην etc.] Si Herodotum audis, sola olim Naucratis Aegypti emporium erat, ad quod peregre advenientes applicare debebant II. 179. WESS.

78. 60. Ἡ περὶ τὸν Βούσιριν] In Graecorum fabulis nihil eius crudelitate inmanius, quam Polycrates tamen, orator ineptus, in ipsa Busiridis Apologia haud parum adauxit, solitum κατασθίειν τοὺς ἀνθρώπους, homines devorare, perhibens, merito propterea notatus ab Isocrate in Busir. p. 325. Natas autem has esse fabulas inter Graecos, quod Aegyptii olim suam in regionem delatos aut non admitterent aut durius haberent, et Strabo

agnoscit XVII. p. 1142. A., nullum unquam hoc nomine regem fuisse p. 1154. B. affirmans. Conf. infra c. 88. WESS.

78. 65. Ὑστερον τέταρσι γενεαῖς] Inter Psammetichum et Aprien reges sunt Neeus et Psammis apud Herodot. II. 158. 159. et Syncellum p. 75.; quare ut quatuor hae generationes expleantur, in censum Psammetichus et Apries venire debent; quod genus loquendi haud insolens est: Aeschyl. Prometh. Vinct. 852. de Erapho et Danaï filiabus, πέμπτη δ' ἀπ' αὐτοῦ γέννα πεντηζοντόπαις Πάλιν πρὸς Ἄργος οὐχ' ἐκοῦσ' ἐλέσεται Θηλέσπορος. quo loco praeter Libyen, Belum et Danaum ipse Eraphus et Danaides, ut quinque generationum ratio constet, in summam addendi sunt. WESS.

78. 66. Ἐτη δυοὶ πλείω τῶν εἴκοσι] xxv annos ex Herodoti sententia Aegyptum summa felicitate administravit II. 161.; Syncellum si audias Chronogr. p. 75. annos xix, at p. 210. annos xxxiv; ut adeo vix certi aliquid in hoc dissensu constitui possit. Id quidem certe mihi liquet, etsi in alia omnia abeat Io. Marsham. Chron. Can. p. 581., Aprien hunc non alium esse ac Pharaonem Hophram, ex sacris nostris notissimum. Vid. Iac. Perizon. Orig. Aegypt. c. 24. WESS.

79. 73. Ἐπὶ Κροίτην] Cyrenensium res providentia regis Batti, cui Felici nomen, erant prosperrimae, multique adeo Graeci in Africam commeabant, quo fiebat, ut finitimi Afri, magna agrorum parte spoliati, ultro se in fidem et clientelam Apriae traderent; quae belli huius origo apud Herodotum IV. 159. WESS.

79. 78. Ἀνὴρ ἐμμανής] Hellenico ἰδιώτης καὶ τῶν τυχόντων κατὰ τὸ πρῶτον in Athen. XV. p. 680.; quae his Diodori, quantumvis et Herodot. II. 172. plebeium et obscura ortum familia tradat, nihil pugnabunt; modo Partamidis, sic Aprien Hellenicus appellat, favore et rerum gestarum gloria deinceps illustrem esse factum observes. WESS.

79. 86. Περὶ τὴν Μαρίαν κόμην] Herodotus ad Mompheum pugnatum fuisse ait II. 163. 169.; quae haud longe laeu Maria, ut dictum supra est, distabat. Μαρία palus est in Aelian. VI. H. A. 32. et Aristid. T. III. p. 591., cui quod urbs accubaret, idem sortita nomen est, postea incrementis Alexandriae vicinia in vicum conversa apud Athen. I. 25. WESS.

79. 88. Καὶ στραγγαληθεῖς] Longe alia de Apriae seu Pharaonis Hophrae interitu Ieremias XLIV. 30. XLVI. 26. et Ezechiel XXIX. 4. 5.; quorum certissimis vaticiniis haec Diodori et haud dissimilia Herodoti II. 169. quo modo consentire queant, egregie docuit Iac. Perizon. Or. Aegypt. c. 24. WESS.

79. 93. Ἐτη πέντε πρὸς τοῖς etc.] Amasidi Herodotus III. 10. annos XLIV dat, nec plures Africanus in Syncelli Chronogr. p. 75.; quos et veriores arbitratur idem Iac. Perizon., res gestas



eius cum S. Prophetarum vaticiniis diligenter componens. Aegyptiorum certe quidem sacerdotes nimio patriae suae studio multa in his rebus dissimularunt, praecipue eas calamitates, quibus post Apriae necem a victore Nabuchodonosore fuerant gravissime pressi. Conf. et Camp. Vitringae comment. in Esai. XIX. p. 533. WESS.

79. 96. *Ἡ δὲ Ὀλυμπιάς*] Omnia parentesi inclusa, quin supposititia sint, vix dubitare fas est. STEPH. Tota haec parenthesis, ut aliena ineptaque, posteriore etiam sui parte falsa, ad caeteras Glossatoris nugas remittatur: nos versione indignam iudicavimus. RHOD. *Ὀλυμπιάδος, ἣν ἐνίκα*] Sic, inducta grammatici notatione, quae Illustri Scaligero nullo suo merito se probaverat in Eusebii Chron. 130000CLXVII., Diodori orationem refingere placuit. WESS.

79. 4. *Νῦν διέξιμεν*] Conf. supra c. 42. WESS.

79. 7. *Ἀποδοχῆς ἔττην*] Hoc quidem genere, cum de laude atque approbatione agitur, nihil his in libris frequentius est: nam et cap. superiore *μεγάλης ἐτύχων ἀποδοχῆς* et III. 63. IV. 3. V. 60. etc. eius usus est, Polybii fortasse studio et acmulatione, cui longe tritissimum esse egregie docuit Georg. Raphelius I. Timoth. I. 15.; habet et Iosephus, sed prave nunc VIII. A. I. 2. 8. *ἀλλὰ μηδεμιᾶς ἐποδοχῆς τυγχάνειν παρακαλοῦντες*, melius scripti Codd. *ἀποδοχῆς*. WESS.

79. 9. *Εἰς Ἀθήνας παραβαλεῖν*] Si quid scriptoris consuetudini et veterum Codd. auctoritati, ut multum profecto debet, tribuendum est, hoc maluit. Vid. supra c. 12. Nec alia de causa paullo post *δυσεπιβάτον* recepi; non quod alterum primum et orationi parum concinens videretur; tuctur enim sedem suam c. 67., sed quod libri antiquae fidei addicerent atque id praeferrent, sicuti et XVII. 82. WESS.

80. 14. *Ὅρηές*] Conf. sup. c. 23. et c. 12. de Homero. De Solone et Pythagora infra c. 98. WESS.

80. 18. *Ἰῶν γραμμάτων εὔρεσιν*] Vide cap. 16. et 50. WESS.

80. 22. *Πλείω τῶν ἑπτακοσίων* etc.] Haec illis pugnant, quae cap. 44. de regni Aegyptii continuata in plures saeculorum decursus serie commentatus est; nimisque angustus annorum est numerus regibus plusquam 0000CLXX et toti Aegyptiorum Chronologiae. Bene Iac. Perizonius, *Videtur*, inquit, *locus hic esse corruptus, et certe adiecta versio ab Graecis verbis recedit. Verba sunt, τὸ τῆς Αἰγύπτου πλείω τῶν ἑπτακοσίων καὶ τετρακοσίων βασιλεύσαι τοὺς πλείους ἑγγενεῖς. Vertitur, quod ultra quater mille et septingentos reges indigenae Aegyptum gubernarint, ubi vocem ἐτῶν, annorum, plane neglectam et omis- sam videmus. Mallet et ego eam in Graecis omittere, ac porro legere, τὸ τῆς Αἰγύπτου πλείους τῶν ἐβδομήκοντα καὶ*

τετρακοσίων, καὶ τούτους ἔγγενεῖς, gubernasse Aegyptum plusquam CCCCLXX reges, eosque indigenas. Sic certe cum altero Diodori loco cap. 44. hic ipse sic satis congrueret. Sed tamen, quum tam incerta sit et dissona Aegyptiorum Chronologia, mutare nihil absque MStorum ope ausim, Origin. Aegypti. cap. 11. p. 206. WESS. Nulla hic repugnantia. Dixerat Diodorus I. c. 44. homines usque ad Ol. 180. Aegypto imperasse ἔτη βραχὺν λέποντα τῶν πεντακισχιλίων, quorum annorum 36 annos Aethiopes, 130 Persas, 276 Macedones regnum occupasse. Hoc autem loco quum Αἰγύπτον πλείω τῶν τετρακοσίων καὶ τετρακισχιλίων ἔτων βασιλεῦσαι τοὺς πλείους ἔγγενεῖς dicit, tempus illud ex quo Macedones continuum imperium tenebant detraxit. Exinde enim indigenae reges, qui sub Persis Aethiopicisque imperium nonnunquam recuperaverant, penitus sunt aboliti. Infra c. 95. ἐν δὲ τοῖς ἕστερον χρόνοις πολλὰ τῶν καλῶς ἔχειν δοκούντων νομίμων φασὶ κινήθηναι, Μακεδόνων ἐπικρατησάντων καὶ καταλυσάντων εἰς τέλος τὴν βασιλείαν τῶν ἔγχωρίων.

80. 29. Καὶ συνεγράψατο] In quibusdam tantum exemplaribus sunt haec verba καὶ συνεγράψατο, ut apposita illis nota declarat. In nullo certe esse debent, utpote supposititia. Nam quorsum Diodorus dicit ἐσχεδιάξασι verba illa subiunxisset? perinde est enim ac si dixisset ἐψεύσατο καὶ συνεγράψατο. Nam σχεδιάζειν, ut ab aliis, sic et ab eo accipitur interdum pro ψεύδουσαι, mentiri, confingere, comminisci, verbi gratia, pag. 25. περιφανῶς ὁ συγγραφεὺς σχεδιάζων ἐπίσκειται. ubi ὁ συγγραφεὺς est itidem Herodotus. Sic et in extrema pag. 13. τοὺς δὲ λέγοντας ἐν Θήβαις τῆς Βοιωτίας γεγονέναι τὸν θεὸν ἐκ Σεμέλης καὶ Διὸς, φασὶ σχεδιάζειν. Sed his in locis absolute ponitur et ἀμεταβάτως verbum σχεδιάζειν: at in loco de quo agitur accusativum habet. Fortasse autem haec verba e scholio manarunt, sed depravato; siquidem credibile est aliquem ἐσχεδιάξασι exposuisse, ψευδῶς συνεγράψατο: quorum deinde verborum unum in contextum irrepsit, altero per incuriam omisso. STEPH. Ἐσχεδιάξασι καὶ συνεγράψατο] Scholiastes per posterius explicare voluit prius; sed quam recte, iudicent illi, qui quo significatu auctor τὸ σχεδιάζειν usurpet, recte intellexerint. Mendi igitur huius labes eluatur. RHOD. Ἐσχεδιάξασιν, ἐξουσιῶς etc.] Vid. supra c. 23. Haud praeter verum de hoc hominum genere Seneca, quidam incredibilium relatu commendationem parant, et lectorem aliud acturum, si per quotidiana duceretur, miracula excitant: quidam creduli, quidam negligentes sunt, quibusdam mendacium obrepit, quibusdam placet. Illi non evitant, hi appetunt. Et hoc commune de tota natione, quae approbari opus suum, et fieri populare non putet posse, nisi illud mendacio adpersit. Q. Natur. VII. 16. WESS.

80. 32. Ἐν ταῖς ἀναγραφαῖς] Conf. supra c. 44. WESS.

80. 36. *Καὶ πάντα πράττουσι etc.*] Sic quidem Diodori aetate plerisque in regnis, et olim apud Persas, quorum *αὐτοκρατίς βασιλεία καὶ ἀνυπεύθυνος* in Plutarchi T. II. p. 826. F. Secus olim inter Graecos, ubi reges ἐπὶ ῥητοῖς γέρονσι certis honoribus et conditionibus constituebantur, ut est in Thucydeide I. 13., nec omnia ex arbitrii voluntate poterant. Quamobrem et Demophon in Euripid. Heraclid. 424. *Ὅν γὰρ τυραννίδ' ὥστε βαρβάρων ἔχω. Ἀλλ' ἦν δίκαια δρόν, δίκαια πείσομαι.* Non enim, inquit, tyrannidem ut barbarorum obtineo; sed iusta si fecero, iusta patiar; quod et reapse expertus est, causam caedis dicere coactus in foro, quod Palladium, ἐπὶ παλλαδίῳ, vocant apud Pausan. I. 28. p. 69. Neque Athenis id tantum valebat, sed et Argivorum, quorum in Graecia antiquissimum regnum, moribus: quo spectant quae rex eius populi in Aeschylī Supplic. 383. et 404. ait, et quae Pausan. II. 19. Immo βασιλεὺς praecipuo quodam usu rex est legitimus liberaeque civitatis, seu qui secundum patriae leges et constituitur et imperat, ut erudite docuit Iac. Perizon. in Aelian. II. V. H. 20. WESS.

80. 37. *Ἀλλ' ἦν ἅπαντα τεταγμένα etc.*] Perstringit has leges et ab impostoribus Aegyptiis Diodoro obtrusas arbitratur Iac. Capellus Hist. Exot. A. M. 1931.; neque enim Chemem, Cephren et ceteros ingenii violentioris reges illis paruisse videri; esse praeterea vero parum similes. Contra quem tametsi aperte venire nolim, ea tamen, quae olim in Hispania a regibus et in Germania ab Imperatoribus sponte observata novinaus, talia videntur, ut plerisque harum legum patrocinium parent. Tu vide Ioach. Frid. Felleri Monum. inedita p. 227. Sunt praeterea in his legibus, quae gentis superstitioni originem debent; eo certe pertinere videntur, quae de regis cum uxore consuetudine brevi post memorantur, et a Schol. Ptolemaei in Tetrabibl. p. 88. explicata sunt. WESS.

80. 41. *Ἀλλὰ τῶν ἐπιγναεστάτων ἱερέων νόσιν*] Mos etiam erat principibus Macedonum adultos liberos regibus tradere, ad munia haud multum servilibus ministeriis abhorrentia, Curtio VIII. 6. teste; qui tamen mos a Philippo demum institutus est, si Aelian. XIV. V. H. 49. audimus. Id negligi haud oportet, Aegyptios sibi reges constituisse aut ex bellicosis, ἐκ τῶν μαχίμων, aut sacerdotibus; et illos quidem statim disciplinae sacerdotum se tradidisse, ut sacrorum et omnis philosophiae notitia inbuerentur, Plutarcho Isid. et Osir. T. II. p. 354. B. auctore: nefas enim principi erat sine sacrorum scientia regni gubernaculum tractare, περὶ μὲν Αἴγυπτον οὐδ' ἔξεστι βασιλεία χορηῖς ἱερατικῆς ἄρχην, Plato Politic. p. 290. D. WESS.

81. 50. *Ἐξ τῶν νόμων*] Rectius ἐν τοῖς νόμοις, quod in margine extensum fuit. RHOD. Non subscribo viri docti sententiae; paullo quidem planius alterum illud est, nec melius propterea.

Ἡ ἐκ τῶν νόμων ταλαιπωρία Aeliano XIII. V. II. 38. aerumnas sunt, quas ex legum praescriptis Spartani sustinebant. Τάξεις ἢ ἐκ τῶν νόμων ὁρισμένη legibus definita inf. c. 74. Τὸ ποιηθὲν ἐκ Ψαμμητίχου factum Psammetichi Herodot. II. 151.; quo modo saepe ille. Conf. Georg. Raphelium in Ioan. III. 25. WESS.

81. 54. Χρηματίζειν καὶ πράττειν] Haud iniuria metuo, ne non καὶ πράττειν ex Scholio hanc sedem occuparit; iuvat suspicionem Cod. Reg., et scriptoris mos, quo χρηματίζειν de responsis rerumque actu usurpat, ut c. 69. XVII. 113. Athen. XII. p. 539. ἐφ' οὗ καθήμενος ἐχρημάτιζεν ὁ Ἀλέξανδρος. et p. 542. ἐν ᾧ χρηματίζειν Ἰέρωνα τὸν βασιλέα. Passus tamen sum, ut locum tueretur, ne calumniandi foret occasio. WESS. Καὶ πράττειν Ursinus ex Scholio venisse censet, meam suspicionem adfirmans. IDEM in Add.

81. 58. Πλησίον τοῦ ἱερείου] Marginalis nota offert duo ἱερείως et ἡγεμόνος, posterius eligo. Nec parum ad rem conferre arbitror, si ante περιεστῶτος τὸ μετὰ restituatur, ut populus solennes pontificis sui preces secutus voce sua intelligatur. RHOD. Πλησίον τοῦ βασιλέως] Sine controversia in editis vitium est: quod sequor e melioribus Codd. depromptum est. Diceres omnia haec ad cantorem τὸν ᾠδὸν pertinere, qui in sollemni Aegyptiorum pompa duos gestabat libros, quorum alter ὕμνους τῶν θεῶν Deorum hymnos, alter ἐκλογισμὸν βασιλικῶν βίου ordinem et rationem regiae vitae complectebatur, apud Clement. Alex. VI. Stromat. p. 757., nisi Diodori auctoritas summum sacerdotem postularet: praerat is sacris et sacerdotum collegio, Herodot. II. 37., idemque erat ac Propheta, summae in Aegypto dignitatis. Vid. H. Vales. in Euseb. IV. H. E. 8. WESS.

81. 67. Μεταδοτικὸς τῶν ἀγαθῶν] In principe τὸ εὐποιητικὸν καὶ τὸ εἰμετάδοτον maxime commendabile est, quod propterea laudi sibi tribuit Imp. Antoninus I. 4. et 14.; nec minus in Christianis, in quibus, lautiore si conditione sint, S. Paullus eandem virtutem desiderat I. Timoth. VI. 18.; ubi Io. Pricaeus Diodori non quidem oblitus est, sed nimis anguste de *comteatu ventris* interpretatur. WESS.

81. 75. Τὴν τιμοῦσαν ἀποσκήπτου] Valde quidem blanditur scriptura Codd. coram, qui ἀξίων ἀποσκήψαι. nec muto tamen. Sacerdos poenam precibus in scelerum administros et doctores derivabat: haud multo aliter XIII. 102. τὴν ὀργὴν ἀπέσκηψεν εἰς ἄνδρας οὐ τιμοῦσας ἀλλ' ἐπαίρων ἀξίους. et Dionys. VI. A. R. p. 383. εἰς αὐτοὺς μόνους ἀποσκήψαντες τοὺς αἰτίους τὴν ὀργήν. WESS.

81. 80. Ἐρροσκοπησαμένου μόσχου] Exterminandus ad corvos abortivus et putris ille vitulus. RHOD. Adsentirer viro doctissimo, si Codd. plerique omnes delerent; nunc, etsi suspectum,

servare malo. Aegyptii *μόσχοις vitulis* in sacris utebantur, eratque pars haud postrema scientiae sacerdotalis *μοσχοσφραγιστική*, de qua Herodot. II. 38. *Μοσχοσφραγιστὰς*, sive sacerdotes signandis certo ritu vitulis destinatos, habet Porphyr. IV. Abstin. c. 7., scripta quoque *μοσχοσφραγιστικά*, sic enim recte corrigit Io. Marsham. Canon. Chronol. p. 212. Clemens Alexandr. VI. Strom. p. 758. WESS:

82. 81. *Ὁ μὲν ἱερογραμματεὺς*] Conf. supr. c. 16. WESS.

82. 91. *Κρέα μόσχεια καὶ χηνῶν*] Mirum videri possit *κρέα χηνῶν* inter *ἀπλῶς τροφὰς* hic a Diodoro censi, quum pag. 53. inter *πολυτελεστάτας* enumeret: atque adeo Xenophon Cynurum iuniorum anseres semesos amicis e mensa sua solitum missitare memoriae prodiderit. Unde et prima fronte lectio altera *ἀπαλαῖς*, (quae tamen in uno duntaxat habetur exemplari) non immerito alicui magis placuerit. Sedenim si *ἀπαλαῖς* scribamus, quorum Diodorus *λιτότητα* vult describere, iis contra *τροφὴν* tribuere comperietur. Quomodo igitur ipsum sibi Diodorum constare dicemus? Respondebo quod mihi occurrit in praesentia, idque *ἐλέχων*. Existimo Diodorum hic, ubi anserinas carnes inter *ἀπλῶς τροφὰς* enumerat, loqui de anseribus *ἀπλῶς* (ut ita dicam) nutritis. at quum numero *τροφῶν πολυτελεστάτων* adscribit, anseres altiles intelligere, id est *χῆνας σιτευτοὺς*. Athenaeus lib. 9. c. 8. *Θεόπομπος μὲν ἔφη Ἀγησιλάῳ τῷ Λύκιῳ εἰς Αἴγυπτον ἀγριζομένῳ πέμψαι τοὺς Αἰγυπτίους χῆνας καὶ μόσχους σιτευτοὺς*. Ac ne quis dubitet an adiectivum *σιτευτοὺς* tam cum *χῆνας* quam cum *μόσχους* Athenaeus iungere voluerit, ipse ibidem aliorum authorum *περὶ χηνῶν σιτευτοῦ* verba profert. Sed et Polyaeus lib. *στρατηγημάτων* quarto c. 3. 32. apparatus coenae pariter ac prandii regis Persarum describens, inter caetera ponit *χῆνες σιτευτοὶ τετρακόσιοι, τρυγόνες τριακόσιοι, δορίδια παντοδαπὰ μικρὰ ἑξακόσια*. Apud eundem vero Athenaeum et *χηνίων* fit mentio lib. 14. cap. ult. ibi enim haec Menippi Cynici verba citantur, *καὶ εὐθὺς περιεφέρετο περδίκια ὀλίγα καὶ χηνία ὄπτα, καὶ τρυγὴν πλαζούντων*. Polyaeus autem *ρεοσσοὺς χηνῶν* appellat. Nam post ea quae modo ex illo protuli verba subiungit, *ἄσρες τριακόσιοι, ρεοσσοὶ χηνῶν ἑκατὸν, δορκάδες τριακόντα*. Meminit autem Athenaeus et iecoris anserini, de quo et Plinius lib. 10. cap. 22. scribit. Ubi quod ait fertilibus in magnam amplitudinem crescere, verum esse comperi quum Venetiis agerem. Vidi enim ibi iecora saginatorum a Iudaeis anserum (hanc enim illi praecipue et callent et factitant ibi artem) tam ampla, ut quod unius anseris iecur esset, trium minimum esse videretur; id est, tria esse iecora in unum (si hoc fieri posset) conflata. Caeterum notandum est, ut in illo Athenaei qui prior citatus est loco *μόσχοι* et *χῆνες σιτευτοὶ* coniunguntur, ubi ab Aegyptiis dono missi dicuntur Agesilao, quum in Aegyptum advenisset: (missos autem fuisse ut

delicatos cibos verosimile est) ita hic a Diodoro *κρέα μόσχων* et *κρέα χηρών* copulari (sed non *σιτευτών*) et inter τροφὰς ἀπλῶς annumerari. Fit autem et in Evang. mentio vituli saginati Luc. XV. 23. καὶ ἐνέγκαντες τὸν μόσχον τὸν σιτευτόν. et paulo post, καὶ ἔθυσεν ὁ πατήρ σου τὸν μόσχον τὸν σιτευτόν. STEPH. Nimis aestuare mihi videtur H. Steph.; neque enim pugnat simplicem aliquem esse victum et tamen pretiosum: quamquam pretio ingenti anseres in Aegypto venum ivisse nondum mihi liquet; nam quae infra cap. 84. id non requirunt. In sacris et communi victu anserum usus in hac gente erat frequens, vescebanturque sacerdotes *χηρέων* καὶ *βοέων*, aequè ut reges, carne, Herodot. II. 37.; quare et multi illis alendis operam insumebant, a quibus et *Chenoboscia* sive *Chenoboscion* urbs eius regionis dicta in Anton. Itiner. p. 166., ubi plura dixi. WESS.

82. 92. Οἶνον δὲ ταχτόν τι μέτρον] Regum plerique e sacerdotibus, ut supra indicatum, cooptabantur: horum autem *δίαιτα λιτὴ καὶ ἀφελής*. οἶνον γὰρ οἱ μὲν οὐδ' ὄλωσ, οἱ δὲ ὀλίγιστα ἐγέοντο, victus erat tenuis et simplex: vinum enim alii omnino non bibebant; alii parcissime, quae Chaeremonis in IV. Abstin. 6. Porphyrii verba. WESS.

82. 1. Μηδὲ τιμωρήσασθαι] Non plectere tantum haud poterant, sed et τοὺς δικαστὰς ἐξώρκιζον, ὅτι καὶ βασιλεὺς τι προστάξει κρῖναι τῶν μὴ δικαίων, οὐ κρινοῦσι, iudices iurisurandi religione obstringebant, ne, tametsi rex ipse iniqui quiddam imperaret, decernerent, Plutarch. T. II. p. 174. C. WESS.

82. 4. Ἡ προσέκοπτον ταῖς ψυχαῖς] Si qui liber δικασταῖς aut κριταῖς ederet, ego fidenter arriperem: solet enim casum tertium huic verbo ita connectere, ut eam rem notet, qua quis offenditur. Collegit exemplorum ex Diodoro abunde P. Leopard. V. Emend. 7.; quare paucis perfungar. Cap. 89. προσκόποντας ταῖς εἰς τὰ προσηρημένα παρανομίαις, succensentes flagitiis in dicta animalia admissis. III. 4. Διόνυσον προσκόπαντα ταῖς τοιαύταις περιστάσεσι. IV. 63. καὶ διὰ τὴν ὑπερβολὴν τῆς λύπης προσκόπαντα τῶ ζῆν. quae quod dixi satis firmant. Addo ex Polybio I. 31. καὶ προσκόπαντες τῇ βαρύντητι τοῦ Μάροχον. Nihil tamen, vetantibus Codd., decerno. WESS. Wesselingii non magis quam Dorvillii (ad Char. IV. 7.) et Schaeferi (Melet. p. 117.) coniectura *τύχαις* opus esse ostendunt illa XI. 31. ἀνατραπέτες ταῖς ψυχαῖς. IV. 11. τῇ ψυχῇ δυσφορεῖν. XIII. 70. ταῖς ψυχαῖς οὐκ ἐνέδωκαν. XVII. 21. ταῖς ψυχαῖς ἐνδόντες.

82. 10. Κατισχυομένους etc.] Perperam haec e Reg. exulant. Vitia ea plerosque a recto tramite transversos auferunt, et victos gravissime premunt; quod est *κατισχύνειν*. Strabo VII. p. 468. B. τῶν δ' ἐκ θατέρου μέρους ὑπ' Ἑλληνῶν μάλιστα κατισχυομένων. et Noster cap. 24. et 86. XV. 87. Philo Iud. de similis

generis hominibus eleganter ὑπ' ὀργῆς οἷα χαλεπῆς δεσποίνης ἐκβιασθέντες de Spec. Leg. p. 771. E. WESS.

82. 14. Εἰς τοὺς ἡγεμονίους ἐνβολαίς] Aegyptii reges suos uti Deos praesentes colebant; unde nihil profecto mirum, adeo de eorum incolumitate fuisse sollicitos. Conf. c. 90. WESS.

83. 22. Ἐως ζεινεν etc.] H. I. c. 124. vide. WESS.

83. 31. Μαρτυρίαν ἀπερήραπτον περιεῖχε] Ad verbum, non circumscriptum veritatis testimonium continebat. Sed quam facile restituere ἀπαρήραπτον, non perperam scriptum, non supposititium, non adulterinum, aut fucatum. RHOD. Variantes antiquorum librorum scripturae faciunt, ut incertus haeream; habent enim singulae, quod laudes. Ἀνερίθεντον νικαε et controversiae haud obnoxium si malueris, etsi Graeci sermonis Thesauri te destituent, succurret Philo Iud. L. ad Cai. p. 1001. E. εἰρήνη, inquit, ἐξ ἡγεμονίας ὀργῆς γέεται. ἡγεμονία δ' ἀφιλόνηκος καὶ ἀνερίθεντος, ὀργῆ μόνη. Sin ἀνόθεντον, Suidas γνήσιον, ἀπαρρησῆτον, καθαρὸν explicans, auxilio erit. Neque pravam censetur ἀπερήραπτον, si de infinito, ob ea quae cap. 41. disputavimus, acceperis. Tibi itaque, quamquam pronior in ἀνερίθεντον, optionem permitto. WESS.

83. 36. Ἐφ' ἡμέρας ἑβδομήκοντα καὶ δύο] Tot fere dies in apparandis funeribus et sollemni corporum conditura absumi solebant, Herodot. II. 86. WESS.

83. 37. Καταπεπασμένοι δὲ τὰς κεφαλὰς] Potest libri Mutin. scriptura defendi hoc Herodoteo II. 85. κατ' ὧν ἐπλάσαστο τὴν κεφαλὴν πηλῶ. Nec sequor tamen; nam et infra c. 91., οἱ μὲν συγγενεῖς, Diodorus ait, καὶ φίλοι πάντες καταπεπασμένοι πηλῶ τὰς κεφαλὰς. et Iosephus II. B. I. 21. 3. καταπεπασμένος δὲ τῆς κεφαλῆς κόβιν. quo tamen loco Mss. et Suidas καταμυσάμενος, quod et eodem libro c. 15. 4. in parili re Ioseph. adhibet. Solitos autem in luctu veteres caput multo pulvere deformare, nemo est qui ignoret. WESS. Quam Wesselingius reiecit scripturam, et hic et infra c. 91. praefert Valekenarius ad locum Herodoti, ut mirer eum non Longo quoque Past. I. p. 15. Sch. χόματος καὶ πηλοῦ πέλαστο καὶ τὰς κόβας καὶ τὸ ἄλλο σῶμα, restitutum ivisse πέπλαστο.

83. 38. Ὁμοίως ἄνδρες etc.] Non reges tantum, sed quosvis infunctos hoc habitu cognati lugebant, Herodotus II. 85. WESS.

83. 40. Ἐν ὀρθῷ Cl. Co. M. R. Steph. m., satis bene, sic uti in Athen. XIV. 4. p. 622. WESS.

83. 43. Τὴν ἀπὸ τοῦ πυροῦ] Haec omni graviore in luctu Aegyptiis sollemnia erant: conf. c. 91. Qui quoque si in casto essent, vino paneque abstinebant, ut Chaeremon docet in Porphyr. IV. Abstin. 6. Quod autem in antiquis quibusdam schedis reperitur ἀπὸ τοῦ πυροῦ, coctum cibi genus indicat, neque reiectaneum esset, nisi has voces miscere libyariis perpetua foret consuetudo:

exemplo sit hoc Libanii de Tisameno T. II. p. 451. *πρώττε τὸ σὸν, ἐμοὶ δὲ, ἐφ' ᾧπερ ἐτάχθην, μελήσει τοῦ πικροῦς.* quod ignis curam, si bene haberet, homini inpositam indicaret, sicuti censuit et loco adscripsit F. Morellus: atqui id dixit Tisamenus, cum ad Euphratem pergeret, quorsum *ἐπ' ὠρῆ σίτου, ul frumentum redimeret,* p. 443. D. missus erat; pravum ergo vulgatum, et in τοῦ πικροῦ convertendum. WESS. Conf. Heyn. Opusc. Acad. vol. I. p. 144.

83. 53. *Ἀχροατήριον τῶν ἐν τῷ βίῳ*] Si quis *κροτήριον* praeferendum putaverit, *recitationem* in *examinationem* seu *diu-dicationem* mutet. RHOD. *Κροτήριον τῶν ἐν τῷ βίῳ*] Hoc praefero. Prius enim quam mortuus tumulo inferebatur, de toto vitae eius ordine iudicium instituebatur, permessa omnibus accusandi facultate. Conf. infra cap. 92. WESS.

84. 58. *Τὸνναντίον ἐθορόβουν*] Fremitu et clamore sibi displicere significabant: infra XIII. 28. *πολλοὶ οὖν τῶν καθημέριων ἐθορόβησαν.* Demosthen. Legat. Falsat. p. 223. de Atheniensibus καὶ θορυβοῦντων ἑμῶν καὶ οὐκ ἐθειλότων ἀκούειν. Paulo diversiore usu S. Lucas A. A. XVII. 5. et Dionys. IX. A. R. p. 624. WESS.

84. 59. *Ἀπεστερήθησαν ταφῆς*] Exempla dedit e. 64. WESS.

84. 68. *Ὁροιάζεται νομὸς*] Proclus in Timaeum p. 30. *ὁ μὲν οὖν νομὸς ἀπὸ τοῦ νεμεῖσθαι τὴν γῆν αὐτοῦς ἔσχε τὴν ἐπωνυμίαν. οὕτω γὰρ ἐκάλοιν Ἀγύπτιοι τὰς διαίσεις, τὰς κατὰ τὰ μεγάλα τῆς Ἀγύπτου μέρη.* quibus gemina Diodorus cap. 54.; unde prave illi loco adscripsit H. Stephan., vocem Aegyptiae originis illi visam: tantum enim Aegyptios suae regionis partes ita vocitare adseverat, quod et *περὶ τῶν μαχίμων*, qui sine controversia Graeciae nomen suum debent, paullo post profitetur. Ego cum Diodoro et Proclo facio, quibus etiam subscribunt viri egregii Is. Casaub. in Strabon. XVII. p. 1135. et P. Leopard. VII. Emend. 17. WESS.

84. 71. *Εἰς τρία μέρη*] Confer Strabon. XVII. p. 1136. B. WESS.

84. 73. *Εἰς θεοὺς ἐνσέβειαι*] Nullam ego huic lectioni controversiam moveo, sed veteres libri, qui magno consensu *ἐπιμέλειαι* praeferunt. Erant hi sacerdotes praeter ceteros omnes pietatis in Deos studiosissimi, *θεοσεβέες περισσῶς μάλιστα πάντων ἀνθρώπων*, Herodot. II. 37.; eaque ex caussa assidui ad Deorum imagines aut eas gestabant, aut ordine concinno et decore collocabant. *Ἐγαύροντο δὲ αἰεὶ θεῶν ἢ ἀγαλμάτων ἑγγὺς, ἢτοι ἑέρουτες, ἢ προηγούμενοι καὶ τάσσοντες μετὰ κόσμον τε καὶ σεμνότητος*, Chaeremon in Porphyrt. IV. Abst. 6.; atque haec credo ea *ἐπιμέλεια* est, quam Mss. malunt, quamque his de sacerdotibus agens τὴν περὶ τοὺς θεοὺς *θεραπείαν* Isocrat. Busir. p. 332. appellat. WESS.



81. 82. Συγδιαιτρούβουσι τῷ βασιλεῖ] Vid. supra cap. 70. WESS.

81. 87. Ὡσπερ παρὰ τοῖς Ἕλλησι] Moribus quidem Graecis ita fuit receptam; nec illis tamen sacerdotia deerant, quae a parentibus ad liberos transibant, nec familiae, e quibus sacrorum praefecti cooptabantur, ut Athenis *Eumolpidae*, *Eurpatridae*, supr. c. 28. 29., *Eteobutadae* in Aeschin. Fals. Legat. p. 47., Rhodi sacerdotes Neptuni infr. V. 58. Colophone Clarii Apollinis antistes apud Tacit. II. Annal. 54. Propius tamen ab Aegyptiorum consuetudine abest ingens illa multitudo *Ἱεροδούλων*, quae Comanis Cappadeciis et Ponticis Dianae sacris operabatur in Strabon. XII. p. 809. et 836., ne de Levitis Iudaeorum quid addam. WESS.

81. 91. Εἰσὶ δὲ οἵτοι πάντων ἀτελεῖς] Multo uberius de sacerdotibus his, et vitae instituto, quod sectabantur, Herodotus II. 37. et ex Chaeremone Porphyrius IV. A. A. 6. etc. WESS.

85. 98. Οὐ βαπτίζουσι ταῖς εἰσφοραῖς] Non multum dissimile hoc Iosephi II. B. I. 14. 1. οὐδὲ τὸ πᾶν ἔθνος ἐβάρα ταῖς εἰσφοραῖς. nec eiusdem tamen elegantiae, qua nulla parte minus splendet hoc IV. B. I. 3. 3. οὐ δὴ καὶ δίχα τῆς στάσεως ἕστερον ἐβάπτισαν τὴν πόλιν. nedum his inferius, quod in Libanii vita T. II. p. 64. C. ᾧ ἂν ἐθρὲς ἐβαπτίζετο τὸ ἄστυ, καθάπερ ταῦς ἐκλιπόντων τῶν ναυτῶν. Patet enim late hoc translationis genus. Τῇ συμφορᾷ βεβαπτισμένον Heliodor. II. p. 63. cum ait, qui calamitatibus paene mersus atque obrutus iacet. Statius II. Silv. 1. 209. *Quin tu iam vulnera sedas, Et tollis mersum luctu caput.* Tetigit Diodori quoque locum Cl. Salmas. in Solin. p. 709. WESS.

85. 99. Οἱ μάχιμοι] Vid. infr. XVI. 47. et Herodotum, cui nomen, quo gentis sermone noti erant, debemus II. 164. WESS.

85. 4. Ἀποπον γὰρ ἦν etc.] Prudenter Aegyptii. Miles mercenarius pecuniae studio trahitur; quae si deficiat aut non repraesentetur, murmura, seditiones et defectiones consequuntur. Carthaginienses, qui undique militem aere conducebant, suo saepe malo id experti sunt; nonnunquam quoque Romani, quos bene propterea Livius XXV. 33. admonet, *id quidem cavendum semper*, inquit, *Romanis ducibus erit, exempla quoque haec vere pro documentis habenda, ne ita externis credant auxiliis, ut non plus sui roboris suarumque proprie virium in castris habeant.* Vid. infr. V. 11. et quae in Conringium pro Aegyptiis O. Borrichius Hermet. c. 8. disputat. WESS.

85. 6. Τὸ δὲ μέγιστον etc.] Accedebat et aliud commodum; suo enim miles contentus ab alieno manus abstinebat, secus atque in Graecia. De utrisque Isocrates, οἵτοι μὲν (Graeci milites) ἀπαντες στρατιῶται καταστάντες, βίη τὰ ἄλλων λαμβάνειν ἀξιοῦσι. ἐκεῖνοι δὲ (Aegyptiorum viri militares) οὕτως οἰκοῦσιν, ὥσπερ χορὴ τοὺς μίτε τῶν ἰδίων ἀμελοῦντας, μίτε τοῖς ἄλλοτρίοις ἐπι-

βολευόντας, Laudat. Busir. p. 329. Quod autem paullo post haec H. Stephanus κατασκευάσειν corrigit, id ego reiectaneum non arbitror. WESS.

85. 9. Ὅμως δ' οὔτοι] Rectius forte ὁμῶς vel ὁμοίως. RHOD.

85. 13. Ἀνίκητοι ταῖς τόλμαις] Verum fortasse antiquissima id fuit aetate; non Diodori et Strabonis, qui οὐκ εἶναι πολέμιστος, non admodum bellicosos perhibet et exemplis firmat XVII. p. 1175. A. WESS.

85. 14. Συντάγματα τρία] Herodot. II. 163. praeter sacerdotes et bellatores genera subulcorum, bubulcorum, institutorum, interpretum et gubernatorum navalium in Aegypto habet. Plato vero sacerdotibus et pugnatoribus artifices, pastores, venatores et agricolas adiungit in Timaeo p. 24., quorum bubulcos, subulcos et venatores nomine pastorum, institutores, interpretes et navium gubernatores uno artificum titulo Diodorus videtur complexus, sicuti Isærat. Busirid. p. 328. solo τεχνιτῶν vocabulo omnes, qui nec sacerdotes nec milites in Aegypto erant, descripsit. WESS.

85. 19. Συντραφόμενοι ταῖς γεωργικαῖς ἐπιμελείαις] Sic II. 29. εὐθὺς ἐκ παίδων συντραφόμενοι τοῖς μαθήμασι. et cap. 60. ἐκβληθῆναι ὡς κακότητος καὶ πονηροῦς ἐθισμοῦς συντραφόμενοι. quod genus in illis tritissimum est, qui longo usu atque a prima iuventute aut cuidam disciplinae, aut vitae instituto, aut vitii adsueverunt. Lucian. Nigrin. 12. ὃν φιλοσοφία καὶ πενία σύντροφοί εἰσι. et Merced. cond. 23. καὶ ὅτε δὲ μὴ ἐκ παίδων τῇ δουλείᾳ συντραφείης. atque ita ille saepissime. Id opportunum huic loco, quod Glaucus uxori perscribit in Alciphron. I. 3. se, damnato navigandi et piscandi studio id saltem effecturum, ut liberis eveniat, γεωργία συντραφῆναι καὶ τὸν ἀσφαλῆ καὶ ἀδεῦ βίον ἀσπίσασθαι, in agricolatione educari et securam metuque carentem vitam amplecti. WESS.

85. 24. Καρπῶν συζομιδῆς] Conf. supr. c. 8. WESS.

85. 29. Ἐν βίῳ κτηνοτρόφῳ] Erit fortasse, qui κτηνοτροφοῦντες probaverit, uteturque Philon. Iud. I. V. M. p. 610. D. κτηνοτροφοῦσιν Ἀραβες καὶ νέμονσι τὰ θρόγματα οὐκ ἄνδρες μόνον, ἀλλὰ καὶ γυναῖκες. cui non suffragor: id enim Diodorus si voluisset, haud sane ἐν βίῳ scripsisset. WESS.

85. 38. Οὐ γὰρ ἐπωάζουσι διὰ τῶν ὀρνίθων] In sterquilinio ova obruant, si fides Aristoteli VI. H. A. 2.; atque eo pertinet Imp. Hadriani dictum in Saturnino Fl. Vopisci c. 9. Nihil illis opto, nisi ut suis pullis alantur, quos quemadmodum fecundant, pudet dicere. Sed modum excludendorum ovorum, quem in Aegypto sectantur, multo diligentius persecutus est P. Lucas. IV. Itiner. Aegypt. p. 279. WESS.

86. 42. Καὶ πρὸς τὸ καθήκον etc.] His plane similia Iso-  
crates Laud. Busir. p. 330. Mox glossam καὶ τεχνίται, obsecu-  
tus Mss., induxi. Δημοιογοῦς autem exemplo Platonis in Timaeo  
p. 24. et supr. c. 24. vocavit, quos paullo ante τεχνίτας. WESS.

86. 46. Ἐκ τῶν νόμων ὁρισμένης] Sesostris leges has  
rogavit, multitudinemque in diversa genera descripsit, quod  
praeter Aristotelem VII. Polit. 10. Dicaearchus in Schol. Apollon.  
Rhod. IV. 273. tradidit; habet et Plato II. Leg. p. 656. E., quae  
Aegyptiorum has leges spectant. WESS.

86. 48. Πήτ' ἄλλο μὴδὲν ἐμποδίζειν] Bene profecto. Ἐν  
γὰρ ἐγ' ἐπὸς ἔργον ἄριστ' ἀποτελεῖται, ut ait Philosophus II.  
Politie. 9., qui et addit, legislatorem oportere id diligenter stu-  
dere, ne uni diversi generis artes exercendae imponantur. WESS.

86. 54. Πλείστοι δ' ἐν ταῖς δημοκρατομέναις] Praecipue  
Athenis, cuius urbis cives ex Solonis legibus ea libertate gaude-  
bant, quae communi reipublicae haud raro acerba et perniciosa  
erat: vid. Aristotel. II. Polit. 10. Id tamen pro Aegyptiorum  
moribus haud male, quod lege lata vetuerint, ne plures artes ab  
uno eodemque exerceantur, sicuti Demosth. in Timocrat. p.  
465. eiusque Scholiastes Ulpianus innunt. WESS.

86. 74. Δέκα δικαστὰς ἕξ ἐκάστης προέχοντον] Deficien-  
tem vocem ex M. et Co. revocavi; quae, xxx iudices cum fuerint  
et singulae harum civitatum parem eorum numerum ad conses-  
sum ablegarint, abesse non debuit. WESS.

86. 76. Παρὰ Λακεδαιμονίοις γερόντων] Vid. inf. XVII.  
104. WESS.

86. 78. Τοῦτον μὲν ἀρχιδικαστὴν καθίσταντο] Non bene  
his consentit atque concinit Aelian. XIV. V. H. 34., cui iudices  
veteri aevo apud Aegyptios sacerdotes, eorumque princeps, qui  
natu maximus: ἦν δὲ τοῦτων ἄρχων ὁ πρεσβύτατος, καὶ ἐδίκα-  
ζεν ἅπαντας. De iudicibus sacerdotibus certe quidem Diodorus  
non obloquetur, a republica eiusque cura et opifices et milites et  
ceteros, qui inter sacerdotes non censebantur, removens: secus  
est in iudicii praefecto et praeside, nisi si lectus semper is sit,  
qui ceteris aetate praestabat. WESS.

87. 83. Ἐκ χρυσῆς ἀλύσειος ἠρτημένον ζώδιον] Distinctius  
paullo describitur haec imago c. 48. diciturque ἀλήθεια ἐπι-  
μέουσα τοῖς ὄφθαλμοῖς. Aelianus ἐκ σαργείρου λίθου fuisse  
ait: unde colligas, veritatis hanc icunculam humana fuisse specie,  
sed clausis oculis, ex sapphiro gemma et alii pretiosis lapidibus  
consertam. Qua cum iudicii praeses inter Aegyptios insignire-  
tur, conveniebat quodammodo et congruebat cum Iudaeorum pon-  
tificis, qui pectorali iuris, quod vocant, in quo Urim et Thum-  
mim, δόλοισι καὶ ἀλήθειαι, ut verterunt Alexandrini interpretes,  
sollemnibus diebus conspicuus erat: nam Thummim ad formam  
huius imaginis fuisse effictam, sumpto ex Aegypto more etsi

vehementer pertendat post Io. Marsham. Canon. Chron. p. 316. Io. Spencer. Dissert. de Urim et Thum. c. 4. p. 1337., nondum adduci possum, ut credam: discrepabant certe in haud paucis, quae diligenter explanata atque exposita dedit H. Witsius III. Aegypt. II. WESS.

87. 3. *Πολλὰ τοῖς δικαίοις ἐπισοτήσεων*] Locutio in hac sententia scriptorum consensu quasi propria est. Antiphanes in Serm. XVI. Stobaei *ἐπισοτεῖ γὰρ τῷ φρονεῖν τὸ λαμβάνειν*, quod III. Grotius vertebat, *cupiendi aviditas vim sapiendi obnubilat*. Isocrates Orat. de Pace p. 235. *τὸ γὰρ πρὸς χάριν ὀρθέν, ἐπισοτεῖ τῷ καθορᾶν ὑμᾶς τὸ βέλτιστον* quae enim dicuntur, ut vos oblectent, ea vobis tenebras offundunt, ne, quod utilissimum est, perspiciatis. Polyb. III. 31. *ὥστε καὶ λίαν ἐν πολλοῖς τῇ ἀλήθειαν ἐπισοτεῖσθαι*, qui et paullo diversiore figura IX. 32. Gregorius Nazianz. Orat. III. p. 81. A. *τοῦ δὲ ἡ πονηρία τοῖς λογισμοῖς ἐπισοτήσε*. WESS.

87. 4. *Τὴν τῆς ὑποκρίσεως γοητείαν*] In simili re *λόγων γοητεία* apud Dionysium XI. A. R. p. 707.; a quibus verborum et actionis praestigiis sophistas *γόητας* et artem *γοητείαν* appellatam L. Cresollius I. Th. Rhet. 13. ostendit. WESS.

87. 7. *Τοὺς ἀγωνιζομένους ἐν τῷ κρίνειν*] Rhodom. vertit *reos conflictantes in iudicio*, secutus Graecorum consuetudinem, qua *ἀγωνιζόμενοι* aut oratores, qui aliorum causam agunt, aut rei, qui causam dicunt, uti in Demosth. pro Coron. p. 132., in Midian. p. 319. Androt. p. 382. Macart. p. 600.; cui versioni et sententiae verborum ordo validissime pugnat, qui iudices *τοὺς δικαστὰς*, quod III. Scaliger et Is. Vossius suo quisque libro adseripserat, requirit, inprimis *τὸ συνεκχερόσθαι τῇ δυνάμει τῶν λεγόντων*. Neque enim id est *dicentis facultate elabi*, uti idem Rhodom. censuit, sed *auferrī, abripi*, quemadmodum *συνεκχερόμενοι τοῖς θυμοῖς* XVII. 70., quos ira aufert et a recto tramite transversos agit, et *συνεκχερόμενοι τοῖς ἀποπίπτονσιν ἀπὸ τοῦ πρὸς ἀρετὴν σκοποῦ*, qui eum illis abripiuntur, qui exciderant virtutis scopo, in Hierocelis Comment. in Aur. Carm. p. 50. Quare si inprobes *τοὺς ἀγωνιζομένους ἐν τῷ κρίνειν* et iudices dici posse neges, quod mihi quidem certe nondum liquet, recipi oportebit *τοὺς ἐπαινομένους, qui laudem in iudicando consecuti sunt*, c. Codd. Co. et Mut. WESS. *Ἐπαινομένους* est interpretatio vulgati. *ἀγωνιζόμενοι ἐν τῷ κρίνειν* sunt *homines in rebus iudicandis exercitati et periti*: de quo hoc minus dubitare debebat V. C. cum ipse ostenderit in his notis (I. p. 63. 53.) *ἀθλητὰς* Graecis dici, qui in quocumque genere exercitati et periti sint. CENSOR ed. Wessel. Act. Erud. a. 1747. p. 9. Qui magis e re sua comparasset *ἀγωνιστῆς*.

87. 13. *Τοὺς εὐφρεῖς τῶν βραδυτέρων πλεονεκτήσεων*] Ingenii praestantiam *εὐφρέαν* infr. c. 97., et versatili ingenio

praeditos ἐργαίς appellitant. Ζῶον ἐργαίς ob ingenium, quo animalibus ceteris praestat, homo supr. c. 8. Adde Platon. Phaedr. p. 270. Lucian. Saltat. 74. et Luc. Holsten. in Vit. Pythag. Porphyrii c. 1. WESS.

87. 22. Ὅσοι παρὰ τοῖς Αἰγυπτίοις etc.] Aegyptiorum has leges diligenti, nec semper tamen felici, opera explicuit Io. Nicolaus de Synedr. Aegypt. c. 7. etc. WESS.

87. 27. Θεοὺς τε ἀσεβοῦντων] Aut nove aut corrupte hic legitur in omnibus nostris codicibus Θεοὺς τε ἀσεβοῦντων pro εἰς Θεοὺς τε vel περὶ Θεοὺς τε ἀσεβοῦντων. Sic alicubi παρανομεῖν habetur apud hunc scriptorem cum accusativo sine praepositione. STEPH. Praeposit. περὶ vel εἰς ipse quoque praemittendam arbitror. RHOD. Non male viri doctissimi: poterit tamen Diodorus se tueri exemplo Aeschyli Eumenid. 270. Ὅψει δ' ἐκεῖ τίς ἢ Θεόν, ἢ ξέρον τιν' ἀσεβῶν, ἢ τοκέας γίλων. est enim persimile. Recte vero Aegyptii: iusiurandum enim aliud nihil est, quam Dei in re ambigua ad testimonium invitatio: Deum autem nisi veri caussa testari, flagitiorum ultimum est. Ὅρκος γὰρ οὐδὲν ἄλλο ἐστὶν ἢ μαρτυρία Θεοῦ περὶ πράγματος ἀμεισιβητομέρου· Θεὸν δὲ μὴ ἐπ' ἀληθεία καλεῖν πάντων ἀνοσιωτάτων, Philo Iud. de Leg. Special. p. 770. C. WESS.

88. 30. Μὴ ὄνσαιτο δυνατὸς ὢν] Nullum crimen patitur is, qui non prohibet, cum prohibere non potest, ait Paullus L. 109. de Reg. Iur. Contra ea, qui non defendit, nec obsistit, si potest, iniuriae, tam est in vitio, quam si parentes, aut amicos, aut patriam deserat, Cicero I. Offic. 7. Atque hinc legibus municipalibus multifariam constitutum novimus, ut illatum a praetereuntibus alteri damnum furtumve factum a vicinis sarciretur, de quibus Radulf. Forner. V. Rer. Quotid. 28. et Ever. Otto II. Tut. Viar. 10. p. 554. WESS.

88. 37. Ὁ τοῖς συζοφωτηθεῖσιν ἐτέτακτο] Calumniantes etiam ex constitutione Imp. Honorii et Theodosii L. ult. C. de Calumn. ad vindictam poscit similitudo supplicii, atque inprimis ex lege Divina Deuteron. XIX. 16. WESS.

88. 39. Ἀπογράφειν πρὸς τοὺς ἄρχοντας] Amasi lex haec debetur, si fides Herodoto II. 177., quae et apud Sardos, Lucanos et alios, de quibus ad Aelian. IV. H. V. 1. Iac. Perizon., viguit. Delevi autem voces inutiles πόρων καὶ τρόπων, obsecutus vetustis Codd. WESS.

88. 40. Πόρων καὶ τρόπων] Haec, ut superflua et subditiua, eradi facile patior; tametsi in versione praetermissa non fuere. RHOD.

88. 43. Ἐπὶ Σόλωνος] Sic et Herodotus. Rectius tamen Draconi adscribunt Lysias in Diogen. I. 55. et Plut. Solon. T. I. p. 87. Solon enim poenam, quae capitalis fuerat, lenivit substi-

tuta infamia, ut Io. Marsham. Can. Chronol. p. 640. et ante eum S. Petitus Leg. Attic. p. 424. admonuerunt. WESS.

88. 47. *Μὴ ταῖς διαφοραῖς τῆς τύχης etc.*] Bellissime haec concinit ac convenit legi Divinae Exod. XXI. 20., in quam bene quoque Philo Iud. Leg. Special. p. 798. D. *Φερόποντες*, inquit, *τύχη μὲν ἐλάττωι κέχρηται, φύσεως δὲ τῆς ἀντῆς μεταποιῶνται τοῖς δεσπόταις· τῷ δὲ θεῷ νόμῳ κανὼν τῶν δικαίων ἐστίν, οὐ τὸ τύχης, ἀλλὰ τὸ τῆς φύσεως ἐναρμόνιον.* WESS.

88. 50. *Μηδὲν ὄλως ἐξαμαρτάνειν*] Hoc placitum est propter veterum Codd. auctoritatem. Sic c. 78. *Ἦνα τὸ μέγιστον τῶν κακῶν ἐπίση πάντας κρίνειν τὴν αἰσχρόνην.* WESS.

88. 53. *Περίεληφτότας τὸν νεκρὸν*] Verum si est, uti profecto est, hoc Euripidis Supplic. 1120. *τί γὰρ ἂν μεῖζον τοῦδ' ἔτι θνατοῖς Πάθος ἐξεύροις, Ἥ τέκνα θανόντ' ἐσιδέσθαι,* cequae gravior poena parentibus potuit irrogari? Parum certe abest a Mezentii scelere, quo *Mortua quin etiam iungebat corpora vivis Conponens manibusque manus atque oribus ora, Tormenti genus! et sanie taboque fluentis Complexu in misero longa sic morte necabat.* Virg. Aeneid. VIII. 485. WESS.

88. 60. *Καλάμοις ὀξέσι etc.*] Barbaricum supplicii genus, cui non multum dissimile in Theodoretō V. H. E. 39. Spinis autem inpositos adurebant, ut illis conpunctos non tam igne quam fumo encarent, quoque diutius et miserius mori se sentirent, sicuti Aegyptii illi Iudacos in Philon. Iud. in Flacc. 975. A.; neque enim adsentior viro docto, *virgas sanguineas* huc referenti, quibus parricidas, antequam culco insuebantur, obiurgatos L. 9. de Leg. Pomp. docet. WESS.

88. 63. *Τὸ βιαιῶς τὸ ζῆν ἀφαιρεῖσθαι*] Graviter et ex vero Cicero pro Rosc. Amerin. c. 22. *Portentum atque monstrum certissimum est esse aliquem humana specie et figura, qui tantum immanitate bestias vicerit, ut, propter quos hanc suavissimam lucem adspexerit, eos indignissime luce privarit.* WESS.

88. 65. *Τὰς ἐγκόνους μὴ θανατοῦσθαι*] Laudat Aegyptiam hanc legem Plutarch. T. H. p. 552., qua pro sua usi sunt Athenienses, Romani atque alii, de quibus viri docti ad Aelian. V. H. V. 18. et Aeg. Menag. Amoenit. Iur. c. 21. WESS.

88. 68. *Τὸ μηδὲν ἀδικῆσαν etc.*] Probe hoc; neque enim apud Aegyptios delicta parentum liberi luebant, uti Isocrat. Laudat. Busir. p. 332. innuit, cui P. Fabrum III. Semestr. 8. p. 103. adiunge. WESS.

89. 78. *Φοινικῶν*] Repone *φοινικῶν*. RHOD. *Φοινικῶν νόμων*] Bene Rhodom.; Demosthen. in Aristocrat. p. 410. *καὶ ἄλλοι, ὅσους ἐκ τῶν φοινικῶν νόμων παρεγραψάμεν* et p. 406. *ἐκ τῶν φοινικῶν νόμων τῶν ἐξ Ἀρείου πάγου.* et sacre

alias. Itaque illud, etsi Mss. sileant, restitui. Vid. inf. XVIII. 33. XIX. 71. WESS.

89. 83. *Ἀλλὰ τὴν ἐσχάτην ἀτιμίαν*] Idem valebat Athenis apud Andocid. de Myster. p. 10. et Lacedaemone, sed haud paullo tamen asperius, in Plut. Agesil. T. I. p. 612. E. WESS.

89. 92. *Ἐκτέμεσθαι τὴν γλῶτταν*] Ut ea parte mutilarentur, qua peccarent; quod genus poenae simili in casu saepe frequentatum fuisse ostendit Guiliel. Forner. III. Select. 27., alioqui proditoribus aut manus praecidebantur et ultima infligebatur poena. WESS.

89. 93. *Νόμισμα παρακοπτόντων* etc.] Ne longum faciam, dubitari non debet, quin haec scriptura multis partibus vulgata sit melior. *Παρακόπτειν* in adulterandis numis et sumptis inde figuris Philoni Iud. tritissimum est; nam et vulgi nimiam potestatem esse ait *ὡς τὸ παράσημον καὶ παρακεκομμένον ἐν νόμισμασι*, de Confus. Ling. p. 335. E., et *τὸ δόκιμον αἰδοῦς νόμισμα παρακόπτειν* de Leg. Special. 804. D., *παρακόπτειν ὡς καὶ νόμισμα δόκιμον τὴν ἄσκησιν* de Vit. Contempl. p. 895. D., *παρακόπτειν τὸ τῆς ἐγγενείας νόμισμα* de Exsecrat. p. 934. E., quibus plura, quae mihi in mundo sunt, non addo. Par ratio est verbi *παραποιεῖν*, quod de ponderibus, mensuris, et illis omnibus, quae fraude aut fuce adhibito mutantur, non minus elegans videtur; Synesio certe Or. de Regn. p. 17. A. *τὰ πρόσωπα τέχνη παραποιήσαντες* illi sunt, qui vultum artificio quodam infucarunt, et Porphyrio Herodotus, scripta Hecataei Milesii compilans et leviter mutatis pro suis utens, *βραχέα παραποιήσας* in Euseb. X. P. E. 2. p. 466. B. Basilio M. praeterea *σφραγὶς παραποιήθεῖσα* sigillum sculptura adulteratum Homil. in Divit. T. II. p. 61. A. Restat *παραγλῆγειν*, cuius etsi mihi exemplum desit, nemo, qui sermonis Graeci genium perspectum exploratumque habet, usum improbabat. De poena, quae falsariis his erat statuta, nihil adiungam: habent plura viri egregii Cuiac. VII. Obs. 16. et P. Faber III. Semestr. 9. WESS.

89. 94. *Παραγυρόντων*] Minus generale est *τὸ παραγυρόντων*, in margine assignatum. RHOD. *Παραγλυρόντων* in margine rectius *sigilla falsantes, adulterantes*. IDEM Indice v. *παραγρόφειν*.

89. 4. *Βιασαμένον γυναῖκα ἐλευθέραν*] Noli cum viro docto de sola virginiae intelligere; quae de criminis atrocitate adduntur et *τέκνον συγχέσει*, quaeque optime conveniunt Imp. Leonis Novell. XXXII., ea marito iunctam quoque postulant. Iam quod lege hac erat sancitum, id et alias *Accidit, ut cuidam testes caudamque salacem Demeterent ferro* in Horatii I. Sat. 2. 45. WESS.

90. 10. *Τῆς δὲ γυναικὸς τὴν ὄνα κολοβοῦσθαι*] Idem in utriusque sexus adulteris placitum esse principibus post Iustinia-

num docet P. Faber III. Semestr. 19. p. 292. Difficiliter vero ea, quae Diodor. de feminis Aegyptiis prodit, cum illis concinent, quae de iisdem Sextus Empir. III. Hypotyp. Pyrrhon. p. 177. WESS.

90. 15. Ὁμόσσαντας ἀποκρίσθαι τοῦ δαρείου] Contraria omnia Plato sua in republica, ne quam periurio fenestram patefaceret, observari iubet XII. Leg. p. 949. A.; qui metus in Aegypto fortasse non ita gravis, praesertim si sanetior inibi iurisdictioni fuerit religio, quod Isocrates adfirmat Laud. Bus. p. 332. WESS.

90. 27. Τὸ κρηάλιον πλεῖον ἢ διπλάσιον] Usuras supra duplum nec deberi, nec exigi posse et solutas repeti, Romae quoque iuris erat ex L. 26. D. de Condict. Indeb.; quo de Cuiacius V. Obser. 38. et Sirmond. in Sidon. IV. Ep. 24. WESS.

90. 29. Τὸ σῶμα ὑπάρχειν ἀγώγιμον] Hoc quidem satis humane. De nexu debitorum Hebraei, Athenienses ante Solonem, Romani etiam post Decemviros in alia omnia abierunt, quamquam horum legem, verbis asperam, interpretando multi acerbiores fecerunt, dextre confutati ab Ampl. Corn. van Binkershoek I. Obser. c. 1. WESS.

90. 32. Ἐν δωραῖς λαβόντων] Conf. inf. IV. 48. WESS.

90. 39. Ὅν ὠνόμασε σεισάχθειαν] Atticorum consuetudine lenius erat vocabulum, re ipsa *χορῶν ἀποζοπή*, seu tabulae novae. Rem explicat Plut. in Solon. T. I. p. 86. D. atque ex eo S. Petitus L. Att. p. 412. et Io. Marsham. Can. Chron. p. 648. WESS.

90. 43. Οἵτινες ὄπλα μὲν etc.] Athenis ne quis armā pignori opponeret, vetitum fuisse, Schol. Aristophan. in Plut. 451. significat; neque Romae licebat servos aratores, aut boves aratorios, aut instrumentum aratorium pignoris causa de possessionibus abstrahere L. 7. C. Quae res pignori oblig. Adde leges Moisaicas Exod. XXII. 26. Deuteron. XXIV. 6. WESS.

90. 48. Ἐχειν ταύτην τὴν ἐργασίαν] Hoc lucri et quaestus genus. Lyeurg. in Leocrat. p. 154. ὡς ἔμπορος ἐξέπλενσε, καὶ κατὰ ταύτην τὴν ἐργασίαν ἀπεδίμησεν εἰς Πόδον. qua potestate et ille et alii saepe terunt. Vid. infr. XI. 56. WESS.

91. 53. Καθ' ἣν ἀπέβαλε] Legendum videtur ἀπέβαλον. nisi forte suo more a numero uno ad alterum transire voluit. STEPH. Citra dubitationem legendum est ἀπέβαλον. RHOD.

91. 57. Ἀποστῆσαι τῆς κλοπῆς] A. Gellius ex libro Aristonis iureconsulti furta omnia apud veteres Aegyptios fuisse licita et impunita scribit XI. N. A. c. 18.; cui opinioni in hac lege nullum est fundamentum: certa tantummodo conditione, in quam ceteri consenserant, ex singulari dominii iure, de quo Io. Seldenus VI. Iur. N. et Gent. 2. permittuntur: alioqui furta in Ae-



gypto fuisse illicita, facile ex Rampsiniti rebus et ingeniosissimo fure apud Herodot. II. 121. colligas. WESS.

91. 59. Γαμοῦσιν ἰσοεὶς μίαν] Similes aliarum gentium consuetudines Hieronym. de Monogam. ad Gerontiam et Ez. Spanh. in Callimach. p. 566. exsequitur. Hebraeorum pontificem unam eamque virginem sibi iunxisse ex Levit. XXI. 13. Philo Iud. de Monarch. p. 826. D. pertendit. Quod vero additur de ceteris Aegyptiis, id Herodotus negat, singulas uxores illis iungens II. 92. WESS.

91. 61. Τὰ γεννώμενα πάντα τρέφουσι] Mos idem, et meritissimo, genti Hebraeae. Tacit. V. Histor. 5. *Augendae tamen, de Iudaeis agit, multitudini consulitur: nam et necare quemquam ex agnatis nefas.* Philo, cui inhumanum hoc exponendorum infantium flagitium, χειροῖθ' ἐς ἀσέβημα propter frequentem in ipsa Aegypto, sua aetate, usum, de patrio ritu et more liberorum omnium alendorum egregie disputat de Leg. Special. p. 794. WESS.

91. 69. Ἐναντίως τοῖς Ἕλλησι] Graecis, sicuti Theophrastus auctor est III. Hist. Plant. 6., σχεδὸν ὅσα καλοῦσιν ἄρῳα τῶν ὀμογενῶν ἄναστα. Nec dissentit Plinius, Aegyptiorum tamen hunc morem non praetermittens, *Fit haec differentia et ex sexu; in iisque mares non ferunt. Aliqui hoc permutantes, mares esse quae ferant, tradunt* XVI. H. N. 26. WESS.

91. 72. Ἐκ τῆς βέβλον πνθμένων] Medullas Rhodom., ego imum papyri thyrsum malim: sic ἀμπέλον πνθμένα Strabo II. p. 125. et XI. p. 785. C., πνθμένα τοῦ γοόνιζος Plutarch. T. II. p. 166. A. et πνθμένα τοῦ πνροῦ Theophrast. II. H. Pl. 3. vitis, palmae culmique triticei partem infimam vocant. Mandi vero in Aegypto eam papyri particulam, quae radiei paene cohaeret, ex Herodot. II. 92. novimus, et Melchiore Guilandino, qui se id saepe vidisse asseverat in Comment. de Papyr. p. 80. WESS.

91. 74. Καὶ τῶν καλῶν τῶν ἐλείων] Arundinem, τὸν ζάλαμον τὸν ἐν τοῖς ἔλεσι, qui et suavitate et alimenti copia praestabat, Theophrasto VI. Causs. Plant. 16. indice. Vide supr. c. 10. et quae de his Aegyptiorum plantis copiose et cum cura disputavit O. Borrichius Hermet. c. 4. WESS.

91. 75. Ἀνυποδέτων etc.] Phrynichus, Moeris, Suidas et Thomas Magister vocem damnant, substituta ἀνυποδέτων, quorum decretum Lysias in Dionysii T. II. p. 90. Aelian. VII. V. II. 13. et X. II. A. 24. Longus II. Pastor. p. 67. Lucian. in Icaromenip. et Asin. et Noster etiam III. 34. repudiant. WESS.

91. 80. Πολυανθρωπία διαφέρειν] Conf. supr. c. 31. WESS.

91. 83. Τὰ τε ἱερὰ καλοῦμενα] Literarum Aegyptiarum tria potissimum erant genera, τὰ ἐπιστολογραφικὰ, ἱερατικὰ et ἱερογλυφικὰ, quorum priora δημόδια erant et dicebantur, quod omnes e vulgo ea edocerentur, reliqua, quae uno ἱερωῶν nomine

continentur, soli sacerdotes liberis tradebant: haec Clemens Alex. V. Stromat. p. 657. Porphy. Vit. Pyth. p. 15. et Diodor. III. 4., ubi plura. WESS.

91. 84. *Γεωμετρίαν δὲ καὶ τὴν ἀριθμητικὴν*] Utramque statim cum ipsis literis iuventutem studiose docebant, Platone VII. Leg. p. 819. A. auctore: Arithmetice in primis, quam cum in Aegypto accuratius esset edoctus, κατὰ τὸ Αἰγυπτιακὸν ἀρέσζον ex gentis eius placitis *σύστημα τῶν μονάδων unitatum collectionem* definiit Thales apud Iamblich. in Nicomach. Arithmet. p. 11. Quare et Moses utramque puer admodum, si verum assecutus est Philo Iud. I. Vit. Mos. p. 606. A. inibit. WESS.

91. 87. *Ταύτας δ' οὐ ῥᾶδιον* etc.] Hanc eandem Geometriae originem Hero in Geometria sua, cuius partem excerpserunt Benedictini Analect. Graec. p. 311., Servius Eclog. Virgil. III. 41., Iamblich. Vit. Pythag. c. 29. et plures alii profitentur. WESS.

91. 94. *Παρατηρήσεως τῶν ἄστρον*] Confer supr. c. 50. WESS.

92. 96. *Ἐξ ἐτῶν ἀπίστων τῷ πλήθει*] Si Platonem Epinomid. p. 987. A. audis, *χρόνω μῦριετὲ καὶ ἀπέρω* decem milium annorum, (confer II. Leg. p. 656. E.) et paene infinito tempore, in sideribus observandis assidui fuere; qua in re gentis, a qua haud pauca acceperat, ambitioni multum dedisse videtur. Habuisse tamen astrorum observationes, multis ante Diodorum aetatibus diligentissime collectas, negari non potest. Vide Proclum in Plat. Timaeum p. 31. et 45. WESS.

92. 99. *Καὶ στηρημοὺς*] *Στηρημοὺς* appellant quasdam astrorum quasi *consistiones*, ut Gelliano verbo dicam, cum ea nec progredi, nec recedere videntur. Basiliius M. Homil. I. in Hexaëmer. p. 5. A. *καὶ ἐπαναφορὰς ἄστρον, καὶ στηρημοὺς, καὶ ἀποκλίσεις δι' ἀκριβείας τηρήσαντες.* Conf. Arati Schol. Phaen. 460. WESS.

92. 1. *Τῶν ζώων γενέσεις*] Sectabantur hoc genus Astrologiae Aegyptii diligentissime, Herodoto II. 82. et Galeno III. Dier. Decret. p. 417. et Porphyrio in Eclog. Eth. Stobaei p. 203. auctoribus, opinati ex astrorum vi et lunae tactu vitae valetudinisque habitum pendere. Quare et medicinam Astrologiae et utrique *τὴν τελεστικὴν*, seu mysticam quandam sacrorum et initiandi rationem, iungebant, si fides Scholiastae Ptolem. in Tetrabibl. p. 15. et xxxvi Decanos totidem corporis humani partibus praeficiebant apud Origen. VIII. C. Cels. 58. p. 785., inque legendis herbis multa superstitione ex Hermetis quodam libro utebantur. Atque hanc medicinae eorum partem amplexus est Pamphilus Alexandrinus, qui herbarum imagines et vires κατὰ στοιχεῖον, sive ordine alphabetico, digessit, docente ex Galeno V. simpl. Medic. Fac. p. 68. Lambecio II. Bib. Vindob. p. 535. Non equidem ignoro, multa L. Kusterum ad Suidae *Πάμπιλος* Lambecio rescripsisse,

interque alia, Galenum *nec de herbarum iconibus nec de ordine alphabetico ullam mentionem fecisse*: quod equidem factum nollem: nam et *ἰδέας τῶν βοτανῶν* illi tribuit Galenus, et ita describit, ut imagines esse debeant, et praeterea se *κατὰ στοιχείου* suum opus concinnasse, uti olim Pamphilus. *Οὕτω δέ*, inquit, *καὶ Πάμφιλος ἐποίησατο τὴν περὶ τῶν βοτανῶν πραγματείαν*. quod et ipso herbarum ordine, quem probaverat, firmatur: primo enim loco *Ἀβρότονον*, tum *ἄγρον*, *ἄγρωστιν*, *ἄγχοσαν*, *ἄδιαντον* posuerat. Verum hoc obiter; nunc ad institutum. WESS.

92. 7. *Καὶ κομήτων ἀστέρων ἐπιτολὰς*] An et hinc, ut alia, Pythagoreorum illi acceperunt, qui cometen *τῶν οὐκ αἰὲ γαιόμενων*, διὰ τινος δὲ ὁρισμένου χρόνου περιοδικῶς ἀνατελλόντων ex earum stellarum numero perhibebant, quae non semper videntur, sed stato tempore certaue revolutione oriuntur apud Plutarchum III. Placit. Philosoph. T. II. p. 893. B. Utut id fuerit, oportet in siderali scientia nostrae aetatis astronomes longe praeterierint, quibus adeo felicibus necdum esse licuit, ut erinitarum stellarum ortus et reditus liquida ratione finirent. WESS.

92. 10. *Τοὺς ἐν Βαβυλῶνι Χαλδαίους*] Conf. supr. cap. 28. et II. 29. WESS.

92. 17. *Καὶ μουσικὴν μωρθάνειν*] De musica districte obloquitur Plato II. Leg. p. 656. et 657., Isisid quaedam poemata, certis modis cantari solita, Aegyptiis tribuens. Iam cum inter sacrorum administros fuerit ῥόδος, qui sollempni in pompa *σῆμβολον τῆς μουσικῆς* gestabat apud Clement. Alex. VI. Stromat. p. 757., et Herodot. II. 79. cantilenae eorum meminerit, haud profecto male inter artes, quas Moses in Aegypto edoctus est, Philo Iud. I. Vit. Mos. p. 606. A. *μουσικὴν σῆμψαν* omnem musicam, quae et instrumentis et assa voce peragitur, enumerat. WESS.

92. 20. *Ἀλλὰ ῥόμην ὀλιγοχρόνιον*] His paria disputat Galenus eo libro, quo ad Thrasybulum inquit, utrum musica an gymnasticae ad valetudinem plus conferat, p. 300. Quod autem brevi post M. et Co. *τῶν ἀνορέτων ψυχὰς* praeferrunt, etsi blandiri possit, ex Grammatici Scholio venisse suspicor. WESS.

92. 25. *Κλυσμοῖς καὶ νηστεύαις*] Hoc sequor; nam vulgo quod *κλυσμοῖς* additur *καὶ ποτίμοις τισὶ καθαρτηρίοις*, id librario deberi, vetusti Codd. resque ipsa indicant. Probabant Aegyptii medicinam *οὐ διακεκινδυνευμένους φαρμάκους χρωμέην*, quaeque periculosa medicamenta vitabat, apud Isocrat. Laud. Busir. p. 330. hinc vomitu et clysteribus praecipue purgabantur, ut hic Diodor. et ante eum Herodot. II. 77., tum etiam Diogenes Laert. III. 6. admonent: neque ad ea tamen citius, quam per leges licebat, decurrebant, secus suo periculo faciebant ex veteri constitutione in Aristot. III. Polit. II. Quae mox sequuntur *καθ' ἐκάστην ἡμέραν* etc., ea Conringio melius accepisse videtur O. Borrichius Hermet. c. 6. p. 160. WESS.

92. 31. Καὶ τὰς ἐπὶ τῆς etc.] Ἐπὶ suppositivum videtur. RHOD. Ἀπὸ τῆς γόρας malbat Ursinus. Ego Clarom. auctoritate praepositionem induxi. WESS. in Add.

93. 36. Τοῖς ἐκ τῆς ἱερῆς βίβλου νόμοις] Sex libros, qui ad medicinam Aegyptiorum pertinerent, habet Clemens Alex. VI. Strom. p. 758. περὶ τῆς τοῦ σώματος κατασκευῆς, περὶ νόσων, περὶ ὀργάνων, περὶ φαρμάκων, περὶ ὀφθαλμῶν, περὶ γυναικείων. qui unone volumine fuerint comprehensi, an alium intellexerit Diodorus, non habeo dicere. WESS.

93. 40. Θανάτου κρίσιν ὑπομένουσι] Non licuisse Aegyptiis in artium, quas profitebantur, studio quicquam *καιροτομεῖν* et Plato II. Leg. p. 56. D. indicat; acerbior tamen haec lex. Alioqui ut *medico imputari eventus mortalitatis non debet, ita quod per imperitiam commisit imputari ei debere recte sciscit* Ulpian. L. 6. §. 7. D. de Offic. Praes. nam, ut Persius V. 97.

*Ne liceat facere id, quod quis vitabit agendo,  
Publica lex hominum, naturaque continet hoc fas,  
Ut teneat vetitos inscitia debilis actus.  
Diluit helleborum certo conspescere puncto  
Nescius examen. Vetat hoc natura medendi.* WESS.

93. 48. Τοὺς ἰχθύεμονας καὶ νυμφίτας] Quid hoc sit, non in Graeciae antiquitate, sed barbarie Scythica, inquiretur. RHOD. Ἰχθύεμονας καὶ κέρνας] Barbaram et senioris Graecitatis vocem, qua Scholiastes ἰχθύεμονας explicuerat, induxi. Νυμφίτας et νυμφίτας mustelas, feles, mures marinos vocitant. Suidas in Ἀσκαλαβότις, Ἔστι δὲ, inquit, ζῴδιον φοικὸς σαύρα, ἐν τοῖς τοίχοις τῶν οἰκημάτων ἀνέροπον. ἢ καὶ ὁ ποντικὸς, καὶ ἡ κοινῶς λεγομένη νυμφίτα. ubi et doctissimus L. Kusterus haec Diodori tetigit, et Graeco-barbaram vocem delendam esse monuit. Adde Du Cange Glossar. Νυμφίτα, et de ichneumone supr. c. 35. WESS.

93. 57. Ξυρῆσαντες γὰρ τὰς τρίχας] Paullo distinctius Herodot. II. 65. Nec solis is mos Aegyptiis; nam et alibi terrarum ex morbis pristinae sanitati restituti caput tondebant. Ἐξ μεγάλης νόσου σωθέντες ξυρῶνται οἱ ἄνθρωποι, inquit Artemidor. II. 23. WESS.

93. 60. Οἱ δὲ τοῖς μὲν ἱέραξι etc.] Haec cura erat eorum, quos ἱερακοβοσκοὺς a pastu earum avium vocabant, de quorum studio in accipitribus alendis plura Aelian. VII. H. A. 9. WESS.

93. 64. Καὶ ποπνύζοντες] Non male Schol. Cod. R. καὶ διὰ ζολακείας τινὸς προσκαλούμενοι. Solet in equis ceterisque animalibus, cum alliciuntur aut placantur, esse frequens. Plutarch. VII. Sympos. T. II. p. 713. B. σιγμοῖς δὲ καὶ ποπνυσμοῖς ἀμείλειν τὰ θρέμματα ἐγείρονσι καὶ κατεννάζουσι. quo loco cur Xylander σιγμοῖς malit, non perspicio. Σιγμοῦ ex sono fictum est vocabulum, eademque in re tritum Plutarcho: nam et de Socrat.

Gen. p. 593. B. de equis ἐξ ἑνὸς ἀπὸ σιγμοῦ τοῦ τυχόντος, ἢ πομπισμῶ τὸ προσταττόμενον αἰσθάνομενοι αἰτ, et VIII. Sympos. 3. p. 722. A. σίζειν καὶ προσεῖν. et dein τὸν σωματίων σιγμὸν habet, vocemque egregie firmat. Hinc πομπύζειν transiit ad blanditias verborum, quibus homines conciliantur. Aeschin. Socrat. Dial. III. 12. τίς γὰρ ἂν ἐνδαιμονήσειε πρὸς ὄχλον ζῶν, ἐλ πομπυθείη καὶ κροτηθείη δῆμον παίγνιον, ἐκβαλλόμενον, συνριπτόμενον. sic posteriora lego ex Stobaeo: sunt enim translata de histrionibus; qui stare cum non possunt, eiiciuntur et exhibulantur. Et πομπυσμός Plutarchus T. II. p. 545. C. οὐ γὰρ ἐστὶ δημαγωγοῦντος οὐδὲ κρότον οὐδὲ πομπυσμὸν αἰτοῦντος. WESS.

*Ibid.* Τῶν ἰχθύων κατατέμνοντες] Omissum τινὰς, quod Atticis reliquisque frequens. Ioseph. I. B. I. 13. 5. Diogen. II. 133. S. Luc. A. A. XXI. 16. et infr. XI. 53. Vide supr. c. 13. Atque haud scio, an defectum hunc sarcire librarius M. suo ὁμῶς sive ὁμοῦς voluerit: quo tamen sine damno carebimus. WESS. Recte hanc vocem ab melioribus libris addi ostendit c. 84. τοῖς δ' ὁμοσάγοις πολλὰ τῶν ὀρνέων θηρεύοντες παραβάλλουσι.

93. 69. Ἐπαισχύνονται] Iubent scripti Codd. hoc et γνώμην suam in locum recipi. Γίνεσθαι εἰς et περὶ saepe idem est ac re aliqua distineri, illique intentum esse. Vide XI. 8. XIII. 107. XIV. 26. WESS.

94. 73. Ὑπὸ τῶν ἀπάντων] Requirit rei ordo ἀπαντῶντων, ab illis, qui obviam veniunt: in vulgato, quod scripturae quodam compendio hinc natum arbitror, non acquievisse librarios, Codd. discordia testificatur. Quae sequuntur, Eusebius excerpit II. Praep. Evan. p. 50. D. WESS.

94. 76. Εἰς τὰς ταριχείας] Sacris animalibus eundem paene honorem deferebant, quem hominibus fato suo functis; quare et suos sibi ταριχευτήρας habebant, quos Aelian. X. H. Animal. 20. τοὺς ταῖς ταριχείαις τῶν ζώων ἐγεστώτας καὶ δεινοὺς τίγνδε τὴν σοφίαν appellat. De κεδρία, sive oleo cedrino c. 91. WESS.

94. 79. Ἐν ἰεραῖς θήκαις] Vid. Herodot. II. 67. Superant in nostram usque aetatem aves Aegyptiorum more modoque conditae; cuiusmodi se vidisse et in Galliam asportari curasse P. Lucas IV. Itin. Aegypt. p. 347., et multis ante eum annis Io. Gravius Pyramidogr. p. 48., memorat. WESS.

94. 80. Θανάτω περιπίπτει] Videtur his deesse ἄκων δ' οὐδ' quod si excidisse neges, ad pleniorum sensum requiri non negabis, ubi Herodot. II. 65. in consilium adhibueris. Adde Ciceron. V. Disp. Tuscul. 27. WESS.

94. 87. Τὸ τετελευτηκός] Malim τοῦτο τετελευτηκός. ΣΤΕΡΗ.

94. 92. Οἶπῳ προσηγορέετο φίλος] Ptolemaeus Auletes socius atque amicus P. R. consule Iulio Caesare appellatus est. Sueton. Caes. 54. In primo consulatu societates et regna pretio

*dedit; ut qui uni Ptolemaeo prope vi. millia talentorum suo Pompeiique nomine abstulerit.* Quare, quod hic gestum narratur, contigit anno I. Olymp. CLXXX. quo Aegyptum Diodorus se invisisse ait c. 44. WESS.

94. 99. *Ἀπὸ τῆς Ῥώμης φόβος]* Metus populi Romani, quem τὸν ἀπὸ Ῥωμαίων φόβον in Excerpt. Vales. p. 337., sicuti eorundem p. 382. metum, quem Carthaginienses ostentabant, τὸν ἀπὸ Καρχηδόνας φόβον appellat. Conf. infr. IV. 47. WESS.

94. 11. *Ξυρῶνται ὄλον τὸ σῶμα]* Et caput et reliquas eius partes, secus atque in fele mortua, quando sola duntaxat supercilia radebant, Herodot. II. 66. Adde Synesii Encom. Calv. p. 70. D. WESS. *Οἱ κατ' ὄλον* sine ὄντες scribi iubet, nec male, Ursinus. IDEM in Add.

94. 13. *Ἐὰν οἶνος ἢ σῆτος etc.]* Non multum hinc discrepat lex Mosaica Levit. XI. 32. etc. WESS.

95. 17. *Ἀποούμενοι τοὺς ἀλλοθρονας]* Concinne Anaxandrides Aegyptio militum conductori in Athen. VII. 13. p. 300. A. σὺ μὲν τὸν ἀλλοθρον, inquit, κακὸν ἔχοντ' ἢν ἰδῆς Κλαίεις· ἐγὼ δ' ἴδιστ' ἀποκτείνας δέξω. quae egregie gentis superstitionem illustrent. Iam quae mox consequuntur ea Euseb. II. Pr. Ev. p. 50. excerptit. WESS.

95. 21. *Ἐν Μένδητι]* Hanc verissimam esse lectionem, Stephanus cum Strabone docet. RHOD. Bene Rhodom. De eodem hircio Plat. T. II. p. 380. E. οἶόν ἐστιν Ἴβις καὶ ἰέραξ καὶ κροκέφαλος, αὐτὸς δ' Ἄπις· οὕτω δὲ γὰρ τὸν ἐν Μένδητι τράγον καλοῦσι· quo loco id mihi per sane mirum accidit, hircum eum *Apin* dici. Atqui *Μένδης* Aegyptiorum sermone Pan et hircus, unde nomo et urbi id nomen apud Herodot. II. 42. 46., non Apis, quippe bos sacer. Itaque aut excidit huic loco καὶ *Μένδης*, aut scripsit ὁ *Θμοῦις*, quo nomine Aegyptii idem animal designabant, teste Hieronymo in Esai. XLVI. WESS.

95. 23. *Ἐν τῇ Λεόντων πόλει]* Sic malunt scripti Codd.; alterum auctoritate Strabonis et Ptolemaei se tueri potest. Vide ad Hieroclem Synedem. p. 728. Non longe autem Mendetem et Leonum hanc urbem disiunctas fuisse ex Strab. XVII. p. 1154. videbis. WESS.

95. 29. *Ἐψῶντες ἐν γάλακτι]* Mallem *ἔψοντες*, quod mox in R. et Cl. 2., aut certe *ἐψοῦντες*, ut cap. 80., quod paullo quidem rarius, nec insolens tamen, uti Eustath. in Homer. p. 1482. docebit. Habet *ἐψῶντες* Etymolog. in *Ἐλεμος*, sed improbatum a viro, in his literis plurimum callente, F. Sylburgio. WESS.

95. 33. *Μεγάλην εἰσφέρονται σπουδῆν]* Omne studium conferunt: quod genus frequens admodum. Basil. M. T. II. p. 181. D. τὸ γὰρ πᾶσαν σπουδῆν εἰσφέρεισθαι, ὅπως etc. atque ita supr. c. 83. οἱ δ' ὄχλοι πᾶσαν εἰσφέροντο σπουδῆν· et XIV. 108. XV. 34. WESS.

95. 40. Ὅμοσ' ἔλονος θηλείας] De Apilis apud Memphitas commodis, sunt illi, inquit Aelian. XI. H. . 10. p. 648., καὶ θηλειῶν βοῶν ὠραιῶν οἴκοι, οἷον εἰ θάλαμοι, ὅτε ἐθέλοι καὶ ἦν ἐρᾷ θυμὸς ἀναβαίνειν. Aliter Plinius VIII. N. H. c. 46. et ex eo Ammian. XXII. 14. WESS.

95. 43. Πιοῦσι μὲν ἴσα τοῖς στερομένοις] Erit fortasse, cui περθοῦσι Codd. M. Co. non displicebit; nec caussa tamen gravis est. ἴσα saepe cum locum capessit, qui τῷ ἴσως debebatur, ut c. 89. ἐρομοθετίθι τιμῶν ἴσα θεοῖς. Oppian. Hal'eut. II. 326. Ἰσά γ' ἀριστῆι προμάχῳ στρατοῦ etc. Pausan. II. 2. p. 116. ἢ Πρωθία γὰρ τὸ δένδρον ἐκείνο ἴσα θεῶν σέβειν. Conf. Exc. Vales. p. 246. WESS.

95. 53. Εἰς τὰς ταγὰς ἐπ' τῶν] Hoc rerum series postulat, non τρογὰς; quare et confidenter mutavi, tantoque magis, quod commutare librariis haec vocabula moris sit. Narrat Plut. Isid. et Osir. T. II. p. 359. D. omnes Aegyptios ad funeranda animalia, quae sacra censebantur, sumptus contulisse, praeter Thebanos, nullum Deum mortalem arbitratos. Graeca, ut mendum etiam, adscribo: εἰς δὲ τὰς γραγὰς τῶν τιμομένων ζώων, τοῖς μὲν ἄλλοις σιντεταγμένα τελεῖν, μόνους μὲν διδόναι τοῖς Θηβαῖδα κατοικοῦντας, ὡς θυγῆτὸν θεὸν οὐδένα νομιζοντίας. Vertit interpres, cum autem ad alenda animalia etc., ac si τρογὰς legisset, aut scribi oportere decrevisset. Tu mecum ταγὰς praecopta, quod res ipsa et quae Plutarchus prioribus adstruit, requirunt manifesto. WESS.

95. 59. Παράσημα τὰ παραπλήσια] Haec numero xxix fuisse Aeliano Aegyptii persuaserunt XI. H. A. 10., atque hinc puto factum, ut inter scriptores de Apidis ingenuis notis haud bene conveniat. Vide viros doctos in Strabon. XVII. p. 1160. et Ammian. XXII. 14. p. 360. Id tantummodo addam, Schol. Ptolemaei in Tetrabibl. p. 2. auctorem esse, causam eius bovis cum luna augeri et minui solitam. WESS.

96. 62. Εἰς Νεῖλον πόλιν] Promiscue Νειλόπολιν et Νεῖλον πόλιν appellant, sitam in insula Peracleotica: Ptolemaeus IV. 5. prius, posterius Euseb. VI. H. E. 42. probat, quod post L. Holsten. in Steph. Νεῖλος monere haud neglexit Ch. Cellar. IV. Geogr. I. p. 63. Illud autem οἷς ἐστὶν ἐπιμέλεις respicit τοῖς γραμματεῖς ἱεροῖς καὶ προσήτας, horum enim ea cura apud Aelian. XI. H. A. 10., et elegans est. Herodot. II. 150. ἐπιμέλεις γὰρ δὲ μοι ἴν. Conf. Ezech. Spanhem. Diss. IX. de Usu et Praest. Num. p. 714. WESS.

96. 63. Εἰς θάλαμιν γὼν ραῦν] Hanc Suetonius (Caesar. 52.) navee thalamegum, terminatione ad foemininum non inflexa, vocat. Seneca (VII. Benef. 20.) vero Graecum nomen quodam modo interpretatus, id genus navee cubiculatas appellat. Nos utrumque interpretatione hac complecti voluimus. Discrimen inter τέ-

μενος, σιηζός, ναός hoc est. Τέμενος agrum Deo consecratum, et quasi resectum a caeteris, significat. Ναός in genere templum est: σιηζός autem locus in templo, ubi statuac Deorum collocantur, quasi σιηζός ab ὕστημι. RHOD.

96. 68. Ἀναστροφάμενοι] Ἀναστροφήσαι eorum esse, qui vestem consulto consilio adducunt, Is. Casaub. in Sueton. Aug. 82. et Theoph. Charact. II. admonuit. Honestè philosophus Teles de Laecaena, quae filiis cum dedecore ex proelio fugientibus, ποῦ φησιν οἱ καταφεύγοντες, ἢ δεῦρο καταδυσόμενοι ὄθεν ἔξεδύετε; ἀναστροφάμενη καὶ δελξασα αὐτοῖς, in Stobaei Serm. cvi. p. 576. Adde Diogen. II. 116., nec auscultata tamen Aeg. Menagio. WESS.

96. 72. Εἰς τοῦτον ἡ ψυχὴ αὐτοῦ μετέστη] Profitebantur Aegyptii Apin esse εἰδωλον τῆς ἐκείνου ψυχῆς sive animae Osiridis simulacrum in Plut. Isid. et Os. T. II. p. 359. B. et 362. D., rati animam eius per quandam μετεμψύχωσιν in bovem, quoties novus appareret, transfundi. Vide Io. Marsham. Can. Chron. p. 60. WESS.

96. 76. Τὰ μέλη συναγαγούσασιν] Conf. supr. c. 21. Mox βύσσιννα non muto. Ioan. Apocalyp. XVIII. 16. ἡ πόλις ἡ μεγάλη ἡ περιβεβλημένη βύσσινον. WESS.

96. 78. Ὀνομασθῆναι Βούσσιον] Diceres haec excerptisse Stephanum in Βούσσιος, qui nominis caussas exponens, ἐκεῖ λέγεται θάψαι τὸν Ὀσίριον Ἰοῖς, ἐμβολούσα εἰς ξυλίνην βοῦν, ὥστε Βουσόσιον εἶναι τὴν πόλιν. Sic lego: neque enim Nostri locus patitur, ut de emendatione, quae in Stephano felicissime S. Bocharto Hieroz. P. I. Lib. II. 34. p. 345. cessit, vel tantillum addubites. Sita urbs erat medio in Delta, Herodot. II. 59. teste, nobilitata tumulo, qui Osiridis reliquias complectebatur, si verum accepit Eudoxus in Plut. Isid. et Osir. p. 359. D. Conf. inf. c. 88. WESS.

96. 85. Ὁ προειρήζαμεν] Vide cap. 21. WESS.

96. 87. Τῆς ἀρχαίχῆς ἀπλότητος etc.] Priscac stolidaeque, quo modo saepe Aristophanes atque alii. Παιδάριον εἶ καὶ φρονεῖς ἀρχαίχῃ Nubib. 817.; hinc ἄνοια καὶ τρόπον ἀρχαίχῆς Alciph. III. Epist. 64., et ἀρχαίους ἀποδείξαι Aelian. I. H. A. 25. Vid. Ezech. Spanhem. in Comici Plut. 323. Recte verò Plut. Isid. et Osir. p. 379. E. de eorum opinione, qui Deos, metu perculsos, in animalium corporibus se abdidisse nugabantur, πᾶσαν, inquit, ὑπερπέπειαι τερατεῖαν καὶ μυθολογίαν. Haec autem omnia Euseb. II. Pr. Ev. p. 49. exscripsit. WESS.

96. 91. Ὁμοιωθῆναι τισὶ τῶν ζώων] Fabulam explicat Ovid. V. M. 327., *Da, quoque gregis, dixit, sit Iuppiter: unde recurvis Nunc quoque formatus Libys est cum cornibus Ammon. Delius in corvo; proles Semeleia capro. Fele soror Phoebi, nivea Saturnia vacca, Pisce Venus lutuit, Cyllenius ibidos alis.*



A quo in paucis abit Lucian. Sacrif. c. 14., concinit autem Hygin. II. Poet. Astron. 28., modo *Dianam aeluro simulatam* cum viris doctissimis Flavio et Munkero probes. Praeivit in hoc genere Graecis Latinisque Pindarus, qui ἐν προσοδίοις Deos sinxit, eum a Typhone premerentur, οὐκ ἀνθρώποις ὁμοιωθέντας, ἀλλὰ τοῖς ἀλόγοις ζώοις, Porphyr. III. Abst. 16. WESS.

96. 96. Πολυτελῶς ζῶντα etc.] Tueri se potuerat ἐπιμελῶς, nisi contra id starent scripti Codd., quorum singularis in πολυτελῶς consensus firmatur c. 84. Conf. XIV. 13. WESS. Utroque coniuncto Eichstadius edidit τρέγειν μὲν ἐπιμελῶς ζῶντα, θάπτειν δὲ πολυτελῶς τελευτήσαντα. Quam coniecturam subvertit Gemistus I. II. c. 9. scribens περιλοτενημένης ἐπιμελῶς, ubi πολυτελῶς est in libris. Unde intelligitur hic quoque interpretis esse ἐπιμελῶς, Diodori autem unum πολυτελῶς. Neque vero tali additamento opus est illi θάπτειν, quo τρέγειν sane carere non potuit. Nutriendorum enim animalium non more, nam et aliae gentes bestias nutriunt, sed studio excellunt Aegyptii: sepultura vero non sumptuosa tantum sed omnis omnino aliis gentibus inusitata est.

97. 3. Ἐπὶ σαννίων φορεῖν] *Saunium* pili genus barbaricum erat. Hesych. Σαννίον, ἀνόρτιον βαρβαρίζον. quare et Lusitanos V. 35. Persasque XIV. 27. XVII. 20. eo instruxit, ac Galli σαννιάζονοι τοῖς ἐναντίοις V. 29. Strabo quoque Persis et Indis attribuit XV. p. 1044. cum Casaub. nota. Moris, quo de Diodor., auctorem perhibent Osirin, cum nobilem eam expeditionem, superius c. 18. descriptam, ingrederetur, Plut. Is. et Osir. p. 379. F. WESS.

97. 11. Τρίτην δ' αἰτίαν etc.] Tertiam hanc animalium apud Aegyptios cultus caussam tetigit et Cicero I. N. D. 36. ipsi, inquit, qui irridentur, Aegyptii nullam beluam, nisi ob aliquam utilitatem, quam ex ea caperent, consecraverunt, quique ibi a Cl. Davis. sunt excitati. WESS.

97. 14. Ἐργάτας τίπτειν] Bovis, arietis, hircique cultum, etsi perdidiculum, excusari quodam modo posse, ταῦτα μὲν ἴσως, αἰτ, ἔχει τινὰ λόγον· ἡμερώτατα γὰρ καὶ ὠφελιμώτατα βῆν' ἀποτῆς ὁ βοῦς, ἀβλαχας ἀνατέμνειν εἰς τὰς σποράς δεινατώτατος. ὁ κριὸς τῶν σκεπασμάτων τὸ κάλλιστον ἐσθλῆτα παρέχει, Philo Iud. Decal. p. 755. C., satis concinne ad mentem opinionemque Aegyptiorum. WESS.

97. 20. Κυνὸς ἔχοντα κεφαλήν] Virgilii VIII. Aen. 698. *latrator Anubis* in Aegypto κυνὶ τὸ εἶδος ἀπεικάζεται canino capite fingebatur, Plut. Is. et Osir. p. 368. E., idque ob custodiendū asservandique studium, quo canem equiparabat; quam formae huius caussam ita exsequitur Proclus in Platon. Polit. p. 417. καὶ εἰκόσων ἄρα διὰ ταῦτα καὶ οἱ τὰ θεῖα σοφοὶ ταύτην κατι-

δόντες τῶν κυνῶν τὴν ιδιότητα τὴν φυλακτικὴν, τοῖς φρουρητι-  
κοῖς αὐτοῖς οἰκείοις θεοῖς ὑπολαμβάνειν, καὶ ΚΥΝΟΠΡΟΣΩΜΙΟΝ  
αὐτὸν ἐν τοῖς εἶδεσι ποιεῖν ὡς τὸν ΑΝΟΥΒΙΝ Αἰγύπτιοι, τὸν  
τοῦ Ὄσιριδος ΦΡΟΥΡΟΝ. Quae sequuntur de canibus, qui Isidi,  
Osirin laceratum investiganti, duces se praeberint, ea et Aelian.  
X. H. A. 45. iisdem paene verbis explicat; id tamen male, nisi si  
vitium eius orationem occuparit, quod Osiridem Isidis filium facit.  
WESS.

97. 25. [Τοῖς Ἰσείοις προπορεύεσθαι τοὺς κύνας] Conf.  
supr. c. 14. In Isidis sollemni pompa non canes tantum, sed et  
canino capite insignes aliqui procedebant; quo habitu Volusius,  
a Triumviris proscriptus, felicissime se periculis expedit et ad  
Pompeium in Siciliam tramisit: Appian. IV. B. C. 4. p. 990. Ἰση-  
σε (Isiacum, quo amico utebatur) τὴν στολήν καὶ τὰς ὀθόνας  
ἐνέδν τὰς ποδιῶν καὶ τὴν τοῦ ΚΥΝΟΣ ΚΕΦΑΛΗΝ ἐπέθε-  
το, καὶ δῆλθεν οὕτως ὀργάζων αὐτῷ σχήματι εἰς Ἡομπήιον.  
Quam quidem personam qui gestabant, Anubidem exhibebant, ut  
in ea sollemnitate, de qua Apuleius XI. Metam. p. 262., *nec mora,  
cum Dei, dignati pedibus humanis incedere, prodeunt; hic hor-  
rendum attollens canis cervices arduas Anubis, ille superum  
commeator et inferum*: neque enim dubium mihi est, quin Ma-  
daurensis philosophus ita scripserit: et favent *Anubidi* praeter  
Beroaldi editionem Mss. Florent. et Bertin. WESS.

97. 29. [Θανάσιμα δακνούσας etc.] Morsum earum certa et  
cita mors sequebatur: Philo Iud. I. V. M. p. 619. A. ὅν τὰ δή-  
γματα πέφκεν ἀνπεροθέτως ἀναιεῖν. Notaque in vulgus sunt,  
quae reginae Cleopatrae et ancillis evenerunt, quaeque Galen. The-  
riac. ad Pison. p. 460. se Alexandriae vidisse memorat. WESS.

97. 30. [Τὸν δὲ ἰχνεύμονα] Vide cap. 35. Μοx κατα-  
ληφθέντα probavi; omnia enim ichneumon, quae nancisci potest,  
crocodili ova conterit. Conf. Aelian. X. H. A. 47. WESS.

97. 35. [Ἄβατον ἀν γερέσθαι τὸν ποταμὸν] Sic de fundo  
maris Aelian. IX. H. A. 35. ἢ καὶ τούτοις μὲν ἄβατά ἐστι. De  
insidiis, quas ichneumon aspidibus et crocodilo tendit, Strabo  
XVII. p. 1166. WESS.

98. 43. [Τῶν δ' ὀφρέων τὴν μὲν ἴβιν] Cicero I. N. D. 36.  
*Velut ibes, quae maximam vim serpentium conficiunt, cum sint  
aves excelsae, cruribus rigidis, corneo proceroque rostro;  
avertunt pestem ab Aegypto, cum volucris anguis ex vastitate  
Libyae vento Africo inaectas interficiunt atque consumant.* Du-  
m erant generum, aliae ciconiarum in morem variae, aliae ni-  
grae: διὰ τὴν χροῖαν. ἢ μὲν πελαργώδης, ἢ δὲ ὀλη μέλαινα,  
Strabo ait XVII. p. 1179. B., cui iningendus, qui Herodoteam de-  
scriptionem taxavit, Theon Progymn. c. 11. p. 122. Serpentes  
autem conficere praeter eos, quos Ciceroni adscripsit Davis., et

plura de benefica hac ave habent Aelian. X. II. A. 29. Plutarch. Isid. et Os. p. 381. C. et Euseb. IX. Pr. Ev. p. 432. WESS.

98. 46. *Καὶ τὰ μικρὰ τῶν δακτύλων*] Diceret haec Aelian. X. II. A. 14. ob oculos habuisse, ὄψεών τε, αἰτ, καὶ δακτύλων θηρίων ὁ αὐτός ἐστιν ἐχθιστος οὐκ ἂν γοῶν αὐτὸν διαλάθου οὔτε ὄψις, οὔτε σφοδρῆς. Vim fatidicam, quam avi tribuebant alii, mire illi auxerunt, qui mortuam divinatricem et futurorum scientissimam asseverabant in Porphy. IV. A. A. 9. p. 154. WESS.

98. 52. *Φοιτιζοῦν ῥάμμινα*] Nisi superiora officerent, φοιτιζοῦν ῥάμμιος blandiri posset: solebant enim eiusmodi rostro et homines, ῥάμμιεσι τῶν ἱεράκιων ait Synes. Calv. Encom. p. 73. A. et templorum vestibula ornari, Porphy. IV. A. A. 9. Hinc vero lucem accipit Clem. Alex. VI. Strom. p. 757. cum de scriba sacerorum, ὁ ἱερογραμματεὺς προέροχεται, ἔχων πτερὰ ἐπὶ τῆς κεφαλῆς. liquet enim accipitris fuisse pennam. WESS.

98. 56. *Διὰ τὸ βασιλικὸν εἶναι*] De cygno et aquila Synesius Dion. p. 54., βασιλικοὶ τε εἰσὶν ἐκεῖνοι καὶ διατιπῶνται παρὰ τὰ τοῦ Διὸς στήπτρα: neque enim assentiri possum G. Io. Vossio IX. Theol. Gent. 14. non aquilam, sed accipitrem fuisse censi, qui laxius accepta voce aquila vocetur: distinguit enim manifeste utramque avem Diodorus. Conf. Serv. IX. Aeneid. 564. WESS.

98. 59. *Τὸν Ηἰράπον*] Vid. inf. III. 6. et Lucian. Dea Syr. c. 16. WESS.

98. 64. *Οὐκ Αἰγυπτίους μόνον etc.*] Diximus supr. c. 22. WESS.

98. 66. *Παράλαβόντας πατρικὰς ἱερωσύνας*] Plato eiusmodi sacerdotia, quae a parentibus ad liberos transeunt, πατρικὰς ἱερωσύνας appellat VI. Leg. p. 759. B. Ex eo autem genere Aegyptiorum fuisse sacra docuit supr. c. 73. Adde Ez. Spanhem. in Callimachi Hymn. in Pallad. 43. WESS.

98. 71. *Ἐτετέμενας*] Veram esse hanc lectionem ostendit idem verbum infra in historia Priapi III. 6. bis eodem sensu repetitum: quamvis marginalis etiam lectio admitti queat. Rhod. Recte Rhodom. ἀγαθὰ ἐξορθιάζον τῷ αἰδοίῳ Plut. Is. et Osir. p. 371. F. Plura doctissimus Kuhn. in Pausan. VI. 26. p. 518. et Langbaen. ad Longin. 4. p. 30. Mox concinnius visum est παραπλησίως. WESS.

99. 82. *Τοιοῦτον τῷ χρώματι etc.*] Consentit Plut. Isid. et Os. p. 363. A. Αἰγύπτιοι δὲ πρὸφόρον γεγονέναι τὸν Τυφῶνα νομίζοντες, καὶ τῶν βοῶν τοὺς πρὸφῶδες καθιερέουσιν, οὕτως ἀκριβῆ ποιούμενοι τὴν παρατήρησιν, ὥστε καὶ μίαν ἔχῃ τρίχα μέλαιναν ἢ λευκὴν, ἄδντον ἰγχεῖσθαι. Aegyptii, quia Typhonem colore rufo fuisse censent, boum quoque non nisi rufos immolant; tamque accuratam exhibent observationem, ut si vel pillum habeat album aut nigrum, mactari non posse arbitrentur. Quae boum ruforum descriptio cum egregie congruat ac concinat

constitutioni Mosaicae de *iurena prorsus rufa* חממת חמימה פדת Numer. XIX. 2., recte viri docti boves hos Aegyptios et iuicem Hebraeam inter se compararunt et contenderunt: quamquam Iudaeos Aegyptiorum aemulatione vaccam hoc colore immolasse, tametsi in hanc partem Io. Spencerus H. Leg. Hebr. XV. p. 557. inclinet, impelli, ut credam, needum possum: differunt certe quidem in multis, de quibus haud male H. Aegypt. 8. Herm. Witsius, sed in Plutarcho coarguendo nimius. WESS.

99. 86. Φασὶ θύεσθαι] Negat quidem Herodot. II. 45. Aegyptios victimas humanas immolasse; sed contra eum veniunt cum Diodoro Porphyr. H. A. A. 55., qui Amosin homines mactandi morem, Heliopoli olim probatum, sustulisse refert. Plut. Isid. et Osir. p. 386. D. teste Manethone, vivos homines, qui Typhonii, forte ob colorem, dicebantur, combustos asseverat: verba adscribam, ut emendem: καὶ γὰρ ἐν Ἠλιόπολι πόλιν ζῶντας ἀνθρώπους καταπέμπουσαν, ὡς Μανέθων ἰστορεῖ, Τυφονίου καλοῦντες: sic lego: Ἰδιθύας πόλιν, uti editur, nihili est, iureque optimo Abr. Ortelio displicuit. Habuit Aegyptus *Iucinae oppidum* Ἠλιόπολι πόλιν. supr. c. 12. signatum, at distinctius a Strabone XVII. p. 1171. D. et Porphyrio in H. Pr. Evang. 12. Eusebii. WESS.

99. 88. Ὀλέγους ἐρίσσεσθαι πηρόους] Crine ruber Aegyptiis olim *δυσάρτητος θέμα* erat, nec nisi ingratis hoc hominum genere utebantur, Plut. Is. et Osir. p. 364. B. Nunc, ut mobile hominum est ingenium, aliud obtinet; operam enim plerique omnes dant, ut capillos rufo colore inficiant, Prosp. Alpino H. R. Aegypt. 10. auctore. WESS.

99. 90. Οὐ τοῦ βασιλέως etc.] Conf. Strabon. XVII. p. 1154. B. et supra c. 67. et 85. WESS.

99. 95. Ταῖς ἐπιμυξίαις ζῳογονεῖν] Idem docet Aristoteles VIII. H. A. 28., praetereaque lupos Aegyptios ceteris longe esse minores: duplo Europaeis minores Prosp. Alpin. IV. R. Aegypt. 9. ait. WESS.

99. 2. Λέκω τὴν ὕψιν ὁμοιοθέντα] Hinc explanatur oraculum, quo Aegyptiis, a Typhone oppressis, rerum conversio promittitur, ὅταν Ὠροῦ τῷ παιδὶ γνάμῃ γένηται, συμμαχίαν ἐλέσθαι πρὸ τοῦ λέοντος λέκων· ὁ δὲ λέκων ὅστις ἐστίν, ἱερός λόγος ἐστίν, ὃν οὐχ ὅσιον ἐξαγορεύειν, οὐδὲ ἐν μύθου σχήματι, cum *Horus filius lupum potius, quam leonem belli socium sibi adsciverit. Quis vero lupo ille sit, arcani sermonis est, quem ne in fabulae quidem specie fas est in vulgus efferre*, apud Synes. I. Provid. p. 115. Osiridem enim indicat, filio opem contra Typhonem laturum. Dion. Petavius, si horum Diodori recordatus esset, facile ex oraculi eius tenebris se expedivisset. WESS.

99. 7. Διὸ καὶ τὸν τε νομὸν ἐξείρον] Nisi haec interpretatione iuves, aut ἐξείρον elimines, non satis commoda videbuntur:

neque enim Elephantine, contra Syenem in ultimis Aegypti finibus posita, in Nomo Lycopolitano fuit. Vult, puto, Nominum in memoriam Aethiopum ultra Elephantinam a lupis compulsorum nomen accepisse inque Luporum urbe, *Λύκων πόλις*, quae in Thebaidis, si Memphi ad superiora pergeres, principio, lupos coli coeptos. Vid. Strab. XVII. p. 1167. B. et ad Anton. Itiner. p. 158. WESS.

99. 13. *Τὰ δεινότατα διατιθέντας*] Sic supr. c. 83. *τῶν ὄχλων τὸν πράξαντα δεινότατα διατιθέντων*. quae verbi potestas in vexationibus afflictionibusque domicilium quoddam tenet. Ioseph. XX. A. I. 1. 1. de Tholomaeo, latronum principe, *διατεθεικὸς μέγιστα κατὰ τὴν Ἰδομαίαν καὶ τοὺς Ἀραβας*. et cap. 11. 2. *τίνα τε Πέρσαι καὶ Μακεδόνες διατεθείκασιν ἡμῶς* ubi ego quidem malim cum Cod. Busb. *δεινὰ διατεθείκασιν*. Plutarchus de Exsul. T. II. p. 606. B. *οὕτως ἐγὼ διατίθηναι τοὺς κακῶς με ποιοῦντας* quibus, plura si desideres, adde ex Nostri XIII. 112. XIV. 27. XX. 52., et quae viri doctissimi Steph. Bergler. in Aleiphron. II. Ep. I. p. 20. et T. Hemsterh. in Nigrin. Luciani c. 38. summa diligentia conduxerunt. De crocodili autem cultu supr. c. 35. et Aelian. X. H. A. 21. WESS.

99. 16. *τοὺς λήστὰς τοὺς τε ἀπὸ τῆς Ἀραβίας καὶ Αἰθίβης*] Eusebium qui *τε* omittit sequutus est Wesselingius. Quod, nisi gravior accedat auctoritas, non imiter. Ita p. 175. 12. *ἢ τε Σεμιράμιδος γένεσις καὶ ἀνῆσις*. p. 233. 30. *συλλέοντα τὰ τε ρέικη τῶν ἐθνῶν καὶ πόλεων*. p. 48. 73. *ῥαγάδας τε μεγάλας καὶ διηρεκεῖς ἔχειν*. p. 65. 73. *κατεσκεύασεν ἔργα τε μεγάλα καὶ θαυμαστά ταῖς ἐπιβολαῖς καὶ ταῖς χορηγίαις*, ubi non deleam *τε*, etsi *ἔργα μεγάλα καὶ θαυμαστά* sic est p. 37. 34. Porro p. 23. 44. *ἐν ἐκείνῳ μόνῳ τῷ τόπῳ τῶν τε κατὰ τὴν Ἰνδιαν καὶ τὴν ὁμορον χώραν*. Quibus non dissimilia sunt p. 60. 98. *τοὺς ἐπιμελησομένους τῶν τε προσόδων τῶν βασιλικῶν καὶ διοικησοντάς ἅπαντα τὰ κατὰ τὰς ἰδίας μερίδας*. p. 366. 86. *διάρρηξι ταῖς τε προσήψεσι καὶ ταῖς ἀλκαῖς θαυμαστά*. p. 385. 40. *μεταδοῦναι τῆς τε δωρεῆς καὶ τὰ περὶ τὴν ἐργασίαν τοῦ σπόρου διδάξαι*. p. 24. 66. *συναποχομίσθαι δῶρά τε πανταχόθεν τὰ κρᾶτιστα καὶ διὰ τὸ μέγεθος τῶν εἰργεσιῶν συμπεφωνημένην λαβεῖν παρὰ πᾶσι τὴν ἀθανασίαν*. Haec si omnia non sunt librariis imputanda, ne in illis quidem p. 175. 55. *Σεμίραμιν δὲ τῷ τε μεγέθει τῶν ἐπιβολῶν καὶ πράξεων διωρομασμένην*, p. 372. 6. *ἐπὶ ζήτησίν τε τῆς γυναικὸς καὶ τῆς θνητῆτος*, continuo sequendus erit liber unus vel alter qui particulam aut omittit aut transponit.

100. 22. *Προσαγορευόμενον Μινῶν*] Conf. supr. 45.: qui rex cum ex hominibus Aegypto primus praefuerit, et Moeris aliquot eo aetatibus sit posterior, fortasse is hic intelligitur, quem cap. 61. *Mendem* vocat, labyrinthi conditorem. Scio quid viri egregii Holsten. et Berkel. ad Stephani *Κροκοδείλων πόλις* tenta-

rint; neque conatum inprobo: sunt enim eius verba his Diodori paene gemina; quem nisi auctorem habuerit, posses ex corruptis eius ὁ Μαρ\* ὑπὸ τῶν ἰδίων etc. facili opera ὅτι ὁ Μένδης aut Μάρος effingere. Menan enim ab hippopotamo interfectum raptumque, African. et Euseb. tradunt in Syncelli Chronogr. p. 54. WESS.

100. 27. Ὀρομάσαρτα Κροκοδείλων] Non dubium est, quin vulgato multis hoc partibus praestet. Herodotus II. 148. ὀλίγον ἐπὲρ τῆς λίμνης τῆς Μοίριος, κατὰ Κροκοδείλων καλεομένην πόλιν. Aelian. VI. H. A. 7. περὶ τὴν λίμνην τὴν καλομένην Μέριδος, ὅπου Κροκοδείλων πόλις. Nec aliter Strabo, Ptolem. Stephan. atque alii. Neque morari quemquam debet absentia vocis πόλιν, quae paene sollemnis in Aegyptiorum urbibus: sic ἡ Ἀζίων apud Suidam, ἡ Κένων, ἡ Αἰάτων, unde deinceps ἡ Ἀρζῶ, Κενῶ, Αἰτῶ formatae sunt. Vid. ad Itin. Anton. p. 153. et 160. WESS.

100. 32. Ααβύρονθρον οἰκοδομήσαι] Dixi supr. e. 61. WESS.

100. 35. Οὔτως ἑαυτοὺς εἰθίζασι] Quod vulgo legebatur οὔτως αὐτοὺς τεθίζασι, id ad hanc formam, morem Mss. gerens, inmutavi, neque iniuria, ut opinor: nam et οὔτως μῦθον de cultu, quo adfecta animalia, insolens. Non quidam ignoro Libanii illud T. I. p. 90. D. ναυτίλων δ' ὅστις μάλιστα τίθεται, *navigandi quisquis studium magni facit*; sed alius id modi et formae est; neque convenit Demosth. in Aristocrat. p. 426., οὐ τίθημι ἐν ἀδικήματος μέρει. Et hoc si Diodorus voluisset, ἀπὸ τῶν, ut τὰ τιμώμενα ζῶα statim intelligerentur, dedisset. Quae his adstruit, argumento sunt, spectare consuetudinem, quam sponte sua Aegyptii susceperant, et iustum esse, quod secutus sum. WESS.

100. 37. Τινὺς μὲν γὰρ φακῶν etc.] Aegyptiis *Parrum et caepe nefas violare et frangere morsu olim fuisse*, ex Iuven. XV. 9., nemo est, qui nesciat. Adde Herod. II. 37. Plut. Isid. et Osir. p. 353. E. Plin. XIX. N. H. 6. WESS.

100. 47. Διέλθου μὲν τὴν χώραν etc.] Adfert eandem cultus animalium caussam Plut. Isid. et Osir. p. 380. A.; nec negligendam censuit Artapan. in Euseb. IX. Pr. Ev. p. 432., quamquam Mosi satis absurde adscribens. Paulo ante βασιλέων τινὰ διαγέροντα iustius visum: τῶνδε τῶν δειρῶν τινα καὶ πανούργων βασιλέων Plut. eo, quo dixi, loca. WESS.

100. 53. Πάντας γὰρ τοὺς πλησιοχώρους etc.] *Summus utrinque Inde furor vulgo, quod numina vicinorum Odit uterque locus, cum solos credat habendos Esse Deos, quos ipse colit*, de Ombitis et Tentyritis Iuven. XV. 35. et Aelian. X. H. A. 21., quibus similia admiserunt Oxyrynchitae et Lycopolitae in Plutarchi Isid. et Osir. p. 380. B. Atque hinc, uti multa alia, venit ad Christianos, ut ob diversas de religione sententias non mutuis tantum odiis, detestabili exemplo, se lacerarent, sed et quovis modo sibi incommodarent. Cuius facinoris Ariani Aegyptii

primum cum exemplum praebuissent, mox, contagio quasi, pestis eadem ad ceteros pervasit, ut bene M. V. la Croze I. Hist. Christian. Indor. p. 5. WESS.

100. 58. *Ἀλλήλους κατεσθίειν*] Conf. supra c. 14. WESS.

101. 68. *Τιμῶν τυχῆν ἰσοθέων*] Sollemne hoc de *consecratis* et hominibus et animalibus. Castor et Pollux intra templa recepti *τιμὰς ἰσοθέους ἔσχον* inquit Plut. in Thes. p. 16. A., et de Aleta Polyb. X. 10. *δοκεῖ δ' οὗτος εὐρετῆς γενόμενος τῶν ἀργυρείων μετάλλων, ἰσοθέων τετευχέναι τιμῶν*. Habet et Artapanus in Euseb. X. Pr. Evang. p. 432. C. Mosem enim ἐπὶ τῶν ἱερῶν ἰσοθέου τιμῆς καταξιοθέντα προσυγορευθῆναι Ἐρμῆν asseverat, et Gregor. Nazianz. Orat. III. p. 106. A. et saepe Diodor. Vid. IV. 1. WESS.

101. 78. *Τοὺς ἑαυτῶν βασιλεῖς etc.*] Vide supra cap. 72. WESS.

101. 80. *Ὅν ἄνευ δαιμονίου τιτὸς προνοίας*] Pausaniae quae divinitas et ex providentiae ordine contingunt pari elegantia *ὄν ἄνευ θεοῦ* cadere dicuntur IV. 29. VII. 8. X. 14. et Appian. V. B. C. p. 1154. *πειθόμενος ὄν ἄνευ θεοῦ δις οὕτω θέρους παῖσαι τοὺς πολεμίους*. WESS.

101. 83. *Περὶ μὲν ὄν τῶν ἀμειρωμένων etc.*] Haecenus causas animalium cultus, ut vulgo dabantur, recensuit; e quibus id liquido cognoscimus, non ea Aegyptios fuisse stultitia, ut in animum inducerent, animalia ea Deos esse: putabant, imagines esse rerum divinarum, et in illis sese bonitatis et potentiae divinae argumenta venerari debere. Olim enim τῶν ἀγαμμάτων οὐχ εἷς νόμος, οὐδὲ εἷς τρόπος, οὐδὲ τέχνη μία, οὐδὲ ὕλη μία. Graecorum erat numen auro, argento, ceterisque, quae terra pretiosa fert, et forma humana colere; cum in Aegypto alia omnia probarentur, cultusque varii generis animalibus deferretur, ut Maximus Tyr. Dissert. 38. p. 222. observat. Male haud dubie utrique, neque adeo tamen absurdi posteriores, ut quidem Graeci opinabantur: nam et tantum ex animalibus utilitatis percipiebant, unde ea dona Deorum immortalium esse colligerent: et praeterea in iis esse quaedam miranda, quibus adumbrarent potentiam divinam, longaque manifestius exprimerent, quam tabulis ac statuis suis possent Graeci et Romani pictores ac statuarii, uti Ger. Io. Vossius IX. Theol. Gent. 14. commentatur; cui iange Dissertat. Abbat. Banerii in Comment. Acad. Inscript. T. IV. p. 116. et Thom. Galaeum in Iamblich. Myst. Aegypt. V. 8. p. 265. WESS.

101. 90. *Καταπασύμενοι*] Morem tangit Lucian. de Luctu c. 12., *καὶ ἐσθῆς*, inquit, *καταθήγγονται, καὶ κόπης ἐπὶ τῇ κεφαλῇ πάσσειται*. et nos c. 72. WESS.

101. 94. *Ὅντε ἐσθῆτας λαμπρὰς περιβάλλονται*] Atrati mortuos lugebant: quare ἐσθῆς λαμπρὰ candida est, ut *ιμάτιον*

102. 46. Καὶ διαβεβαιοῦνται ] Hyperbaton est, si λέγοντες ad τοῦνομα referas. Alioqui talis interpretatio existit: *et nomen mortui paludem traiecurum asseverant*. At quae haec nominis traiectio? Levi autem transpositione naturalis ordo restitueretur, si verba sic collocares: καὶ λέγοντες τοῦνομα τοῦ τετελευτηκότος, ὅτι τὴν λήμνην διαβαίνειν μέλλει, διαβεβαιοῦνται. At iudicium penes lectorem esto. RHOΘ. Cum λέγοντες τοῦνομα τοῦ τετελευτηκότος apte confert Strothius Livii l. 32. *Legatus ubi ad fines eorum venit unde res repetuntur, Audi Iuppiter, inquit, audite fines, cuiuscunque gentis sunt nominat, audiat fas*. Ibidemque, *Bellum ita indicit, Audi Iuppiter et tu Iuno — ego vos testor populum illum, quicumque est nominat, iniustum esse*.

103. 47. Τὴν λήμνην τοῦ νομοῦ τοῦ τετελευτηκότος ] Hoc si probes, uti probandum ego censeo, nulla traiectione opus erit. Aegyptii in Nomos erant descripti, quorum singulae erant paludes, a mortuis tramittendae: quare funere indicto, addebatur quo in Nomo palus esset. Nam tota Aegypto unam duntaxat fuisse paludem, ad quam fato functi deportarentur, verum esse non potest, et res pro se ipsa loquitur. WESS.

103. 48. Πλείω τῶν τετταράκοντα ] Rarior aliis hic usus vocis πλείω, Nostro tritissimus, qui passim adverbii potestate instruxit. Vide modo XIV. 20. XVII. 115. XX. 63. et II. Stephan. ad XIII. 94. De iudicium in hemicyclo consessu supr. c. 48. WESS. De πλείω et similibus sic dictis licebat multo plura exempla apponi: nam frequens librariis hic soloeccismus, ipsis scriptoribus non imputandus.

103. 52. Ἐγένετιζε δὲ ταύτη προσηρῆς] Rectum si hoc loco προσηρῆς, oportet idem sit ac πορθηρῆς, quod in Co. et M.; cap. enim 96. *Charontem Aegyptiorum πορθηρῆα Graecis, sive portitorem esse ait: qui titulus cum inferorum illi nautae, uti in Lucian. D. Mor. IV. 1., praene sit perpetuus, non refragabor, si cui potior videatur: praesertim quod navis suae gubernator esset Charon et propterea proreta, de quo Io. Scheffer. IV. Mil. Nav. c. 6., et infr. XIV. 43., excellentior*. WESS.

103. 53. Ὁρφέα τὸ παλαιὸν εἰς etc.] Defendi posset auctore Plutarcho, quod ex Coisl. et Clarom. schedis erutum dedi, τὸν παλαιὸν sic enim ille in VII. Sap. Conviv. T. II. p. 159. C. ὥσπερ Ὁρφέα τὸν παλαιὸν ἰστοροῦσι nisi Diodoro τὸ παλαιὸν idem foret, atque olim, apud seculum prius, ut cap. 95. et IV. 12. V. 47. etc. WESS.

103. 57. Μικρὸν ὕστερον ἀναγράφομεν] Infra cap. 96. WESS.

103. 60. Ὁ νόμος ἕξουσίαν δίδωσιν] Omnia eadem in regum funeribus cap. 72. WESS.



103. 65. *Μεγάλοις περιπίπτει προστίμοις*] *Cur περιπίπτει sperneretur, caussa non erat. Sic II. 55. τιμωρίαις περιπεσῆται ταῖς μεγίσταις* supr. c. 77. *θανάτῳ περιπίπτειν ἢν ἰωυκαῖον. c. 83. πάντως θανάτῳ περιπίπτει, et frequentissime συμφοραῖς περιπίπτειν, etsi id paullo diversius. Isocrat. Arcopag. p. 212. κακῶς διοικήσαντας ταῖς μεγίσταις ζημίαις περιπίπτειν. WESS.*

103. 69. *Ὡσπερ παρὰ τοῖς Ἑλλησιν*] *Isocrat. Laud. Busir. p. 328. Dionys. Halicarnas. T. II. p. 39. Theon Progymn. c. 8. hoc de Graecorum more plura. WESS.*

103. 74. *Παρακαλοῦσι τοὺς κάτω θεοὺς*] *Nec genere tantum proximi, sed et defuncti nomine pollinctorum unus Deos sollemni formula rogabat, cuius partem, quod argumentum laudationis, de qua Diodor. complectatur, exseribere operae erit ex Porphyg. IV. A. A. 10. Ὡ δέσποτα ἦλιε καὶ θεοὶ πάντες, οἱ τὴν ζωὴν τοῖς ἀνθρώποις δόντες, προσδέξασθέ με καὶ παράδοτε τοῖς αἰδίοις θεοῖς σίνουζον· ἐγὼ γὰρ τοὺς θεοὺς, οὓς οἱ γονεῖς μοι παρέδειξαν, εὐσεβῶν διετέλονν τούς τε τὸ σῆμά μου γεννήσαντας ἐτίμων ἀεὶ τῶν τε ἄλλων ἀνθρώπων οὔτε ἀπέκτεινα, οὔτε παρακαταθήκην ἀπεστέρησα, οὔτε ἄλλο οὐδὲν ἀνήκεστον διεπραξάμην. De diis inferis κάτω θεοῖς conf. c. 49. WESS.*

103. 79. *Ἐν ταῖς ἀποδεδειγμέναις θήκαις*] *Recte Rhodom. in designatis ad hoc conditoriis. Quaevs enim ad certos usus accommodata et destinata ἀποδεδειγμένα appellitant, uti βιβλία ἀποδεδειγμένα I. Maccab. XIV. 33. θαλάμους ἀποδεδειγμένους Sext. Empiric. I. in Grammat. 13. p. 280., quem elegantiozem vocis usum erudite, ut solet, T. Hemsterh. ad Xenophont. IV. Ephes. p. 59. explanavit Vol. VI. Miscell. p. 301. WESS.*

103. 80. *Τάφων κτίσεις*] *Melius κτίσεις. Si quis tamen retinendum censuerit κτίσεις, ita vertat: qui propria sepulcra non habet exstructa. RHOD.*

103. 81. *Πρὸς τὸν ἀσφαλέστατον τῶν τοίχων*] *Non aliter Herodot. II. 86. Paulo ante κτίσεις ob scriptos libros et ipsam rem, quodque voces eas librarii confundere soleant, restitui. Vide Gisb. Cuper. III. Obs. 9. et Scherpezel. in Strabon. XIII. p. 881. WESS.*

104. 90. *Εἰς τὴν αἰώνιον οἴκησιν*] *Dixi supr. c. 51., et in caussam inquisivi eius curae, quam diligentissimam mortuis inpendebant. Id vero praeterire nefas est, fortasse nec alibi proditum, censuisse Aegyptios, redituros aliquando se in vitam, et propterea tanto opere conservandis corporibus studuisse: cuius rei auctorem do Augustinum Serm. CXX. de Diversis: *Aegyptii vero soli, inquit, credunt resurrectionem, quia diligenter curant cadavera mortuorum; morem enim habent siccare corpora et quasi aenea reddere, Gabbaras ea vocantes. Quem virum etsi**

merito magni faciam, parum abest, quin suspicer, magis conclusione quadam id collegisse ex diligenti corporum conditura, quam certa tradentium fide accepisse. Veteres quidem certe scriptores hac parte ab eo dissentiunt. Immo Io. Cassianus Collat. XV. 3. *morem* condiendorum corporum *Aegyptiis Nili fluminis invexisse alveum* asseverat: *ut quoniam universa illius latitudo terrae instar immensi pelagi, non parvo anni tempore solita aquarum eruptione contegitur, ita nulla tunc cuiquam humandi copia humani corporis tribuatur, nisi post transvectionem decursam, corpora mortuorum, pigmentis condita redolentibus, in editioribus cellulis recondantur.* Quae ratio ut movere Aegyptios potuit, ita praecipua non fuisse videtur. WESS.

104. 91. *Λιδόνα εἰς ἑποθήζην δαρείου*] Huc pertinent Teletis philosophi verba in Stobaei Serm. 38. p. 234. *οἱ δὲ σκελετέουσιντες ἔνδον ἔχουσιν ὡς καλόν τι, καὶ ἐρέχουρα τοὺς νεκροὺς λαμβάνουσι* hi vero *desiccata cadavera ceu quippiam pulcrum domi asservant, et pignoris loco mortuos accipiunt*: tametsi enim Aegyptios nominatim haud designet, eorum tamen praecipua haec consuetudo: Lucian. de Luctu c. 21. *sirilia prodidit, et praeter ceteros Herodot. II. 136.; e quo Asyche rege morem hunc in usum venisse, sancitumque, ne sepulcro inferretur, qui patris aes alienum expungere et corpus redimere recusaret, novimus: qua in re humanitati melius consultum fuisse Romae, L. 38. D. de Religios. et 6. C. de Sepulcro viol.* liquido testantur. WESS.

104. 1. *Καὶ ποιηταῖς διαβεβλημένοις*] Qui male audiunt: sic XIX. 7. *πολλοὶ δ' οὖν, καὶ τῶν μηδ' ὀτιοῦν διαβεβλημένων, ἀνηροῦντο.* Plato Criton. p. 44. D. *ἐάν τις ἐν αὐτοῖς διαβεβλημένος ᾖ.* Ceteroqui *διαβάλλεσθαι* significat *ἀπεχθάνεσθαι* odisse, uti in eiusdem Phaedon. p. 67. E. Dion. Chrysost. Orat. LXXIV. p. 642. B. et Strabon. XVII. p. 1142. A. cum Casaub. nota. Male vero audisse poëtas ac propterea famosos fuisse, cum paullo asperius videretur dictum, maluerunt Codd. Co. et M. auctores, eiectis poëtis, locum *φίμωις* relinquere: neque enim aliam lectionis eius causam exputare possum. WESS.

104. 4. *Ἐπὶ τῶν φάβλων χλευάζόμενοι*] Multo concinnius et expeditius libri Mutin. *χλευάζόμενα* videri posset ob *ταῦτα*, quae praecesserant: neque valde obsesset numerus multitudinis in verbo, quod proxime consequitur: saepe enim Grammaticorum decretum scriptores asperrantur, Nosterque ipse XV. 48. *ἐγένοντο πάθη τοιαῦτα.* Strabo V. p. 330. C. *ὅσην ἐγκυκλιῶνται τὰ Ἀπέννινα ὄρη.* Heliodor. IV. p. 174. *ἃ δὲ τοῖς Ἀιγυπτίων ἱερατικοῖς καλονμένοις ὁμοίωται.* quae exempla nunc abunde erunt; plura fortasse ad V. 8. Vel sic tamen passus sum, ut sedem, quam vulgata occuparat scriptura, tueretur, respiceretque Graecos, quos taxat. WESS.

105. 19. Ἐπὶ τε τῶν Θεῶν ] Vide cap. 44. WESS.

105. 20. Ἐγγράτοις νόμοις χορήσασθαι ] Hic oppositum τὸ ἐγγράτοις restituendum esse sententia evincebat. Sed id ipsum locus hic a Iustino Martyre non procul ab initio protreptici p. 8. ed. Commelinianae citatus demonstrat, ubi ante βιοῦν copulativa habetur. Cur vero pro Μνεύην Μωϋσοῦν ponat, cuius tamen infra inter aliarum gentium legislatores mentionem facit, vir exquisitae diligentiae plurimaeque lectionis, Fr. Sylburgius, in Commentario Notarum in Iustinum M. lectori studioso planum faciet. Ego utrum βιοῦν Diodori vel καὶ βιοῦν in κατὰ βίον mutandum sit, doctis considerandum permitto. RHOD. Ἐγγράτοις νόμοις χορήσασθαι ] Sincerum hoc esse, etsi Graeci sermonis Thesauri taceant, et scripti libri et aliorum exempla confirmant. Ἐγγραπτον enim quod scripto consignatum est, saepe Polybio, veluti III. 24. πρὸς οὓς εἰρήνη μὲν ἐστὶν ἔγγραπτος Ῥωμαίοις: cum quibus foedere scripto iuncti sint Romani. et c. 29. καὶ μὴν ἐν ταῖς περὶ Σικελίας συνθήκαις ἦν ἔγγραπτον. tum IX. 29. ὁσίον ἐστὶ τὸ τὰς ἔγγράπτους πίστις βεβαιοῦν, *præ res est leges pactorum scriptas servare.* Quae optimi scriptoris vocem abunde asserunt, at omnium clarissime Strabo VI. p. 397. D. cum de Locrensibus προῶτοι δὲ, inquit, νόμοις ἔγγράτοις χορήσασθαι πεπιστευμένοι εἰσί. WESS.

105. 21. Καὶ βιοῦν τὸν Μνεύην ] Copulam, ut sententia melius constaret, addidi ex Iustini Mart. Protrept. p. 10. D., qui pro Μνευε cum Mosen legit, aut in vitiosos incidit libros, cuiusmodi hoc loco Clar. I., aut malis artibus usus est, quod et illi exprobravit Ger. Langbaenius in Longia. περὶ Ὑψους c. 9. p. 61.: potuisset certe quidem, modo sequentia in consilium adhibuisset, ab hac labe sibi cavere. Mneues, primus Aegyptiorum legislator, qui sit, non temere finivero: Aelianus, citra controversiam si esset scriptura L. XI. H. A. 10., eius patrocinium profiteretur: sed dubito. De Μena, modo Poggius ingenii coniecturam non sit amplexus, nihil obloquerer: eum enim leges scripsisse, et Heroibus regibus successisse, antea c. 45. vidimus. WESS.

105. 22. Τὸν Ἐμοῦν etc. ] Hunc Aegyptiis leges et literas tradidisse Cicer. N. D. III. 22. et quos praeter Io. Alb. Fabric. VI. Bibl. Gr. 12. p. 127. O. Borrich. Hermet. c. 1. conduxit, Nosterque c. 16. auctores sunt. Solitos autem veteri aevo legum latores ad Deos ea referre, quorum ipsi architecti erant, simili disputatione Strabo XVI. p. 1105. exsequitur. WESS.

105. 26. Τὸν μὲν παρὰ Διὸς etc. ] De utroque eadem Plato I. de LL. p. 632. D. et infra V. 79. Μοx κοιτήσαντα Codd. Clarom., si παρὰ Δία et Ἀλόλλωρα esset, non aspernarer. Lyeurgum enim κοιτῶντα ὡς τὸν Θεὸν τὸν ἐν Αἰγυπτίῳ Strabo X. p. 739. Μinoem vero κοιτῶντα πρὸς τὴν τοῦ πατρὸς σενουσίαν Plato I.

de II. princip. leges accepisse aiunt: neque fortasse reiectaneum videbitur, si *ἐλληγμένα παρὰ Λιὸς* etc. artissime iunxeris. WESS.

105. 30. *Παρὰ τοῖς Ἀρμισποῖς*] Utra verior sit scriptura, haec an *Ἀριανοῖς*, non decerno: de Zathrauste enim omnia mihi obscura sunt, nec scio qui genus et unde domo fuerit. Nam *Zoroasterem*, *Zoroadam*, *Zaradam*, qui Persis legum et religionis auctor, eundem ac Zathraustem videri non possum doctissimo P. D. Hueticio Demonst. Evang. Propos. IV. c. 5. p. 152. assentiri. *Arimaspos* et *Arianos* alias habebimus XVII. 81. WESS.

105. 32. *Γέταις, τοῖς ἀπαθανατίζουσι*] Nisi fucum fecerint vetustiores schedae, hoc profecto Diodor. voluit. Getarum aliqui *ἀθανατίζοντες* et *ἀπαθανατίζοντες* dicebantur, atque apud hos Zamolxis praecipua gloria florebat. Plato Charmid. p. 156. D. *ἔμαθον δ' αὐτὴν ἐγὼ ἐκεῖ ἐπὶ στρατιᾷς παρὰ τινος τῶν Θρακῶν, τῶν Ζαμόλξιδος ἰατρῶν, οἱ λέγονται καὶ ἀπαθανατίζειν.* cuius verba aemulatur Lucian. Scyth. 1. οἱ *Σκύθαις μόνον ἐπιχώριον ὄν ἀπαθανατίζειν καὶ πέμπειν παρὰ Ζάμολξιν* etc., nollemque adeo *ἀθανατίζειν* in eo doctissimus Gesner. probasset: utrumque enim ea in re iustum est; nam Olearius *ἀθανατίζειν* in numerum inusitatorum transcribens ad Philostr. VIII. Vit. Ap. 7. p. 337. audiendus non est. Id dubium est, cur Getae *ἀπαθανατίζοντες* sint vocati: si Cl. Iac. Gronov. sequeris, non poterit commodius exprimi neque alio sensu titulus accipi, quam pro immortalibus consecrantes, in Arrian. Exp. Al. I. 3. p. 8.; quam potestatem uti verbo adstruam infra II. 20., ita vereor, ne cum Getis datur non admodum opportuna sit. Quae Herodot. IV. 94. de iisdem prodidit, id postulare videntur, ut ex opinione, quam de animae immortalitate susceperant, ita sint appellati; qua vi citra dubium est in his Iosephi XVIII. A. I. 5. de Essenis, *ἀθανατίζουσι δὲ τὰς ψυχάς.* Mecum sentit L. Kuster. in *Ζάμολξις* Suidae. WESS.

105. 34 *Τὸν Ἰαῶ ἐπικαλούμενον θεόν*] Vetus haec nominis *יהוה* pronuntiatio. *Θεὸν ὑπάτον Ἰαῶ* Macrobi. I. Satur. 18. et *Ἰσχὲν Ἰαῶ* Hesychius habet in *Ὀξείας* quibus adde, quae viri docti ad Clement. Alex. V. Stromat. p. 666. in unum conduxerunt: neque enim consilium est, in eam nunc ingredi controversiam. Id monendum restat, Iustin. Mart. neglecta voce *Ἰαῶ* legisse *Μωσῆν τὸν καλούμενον θεόν.* quod consultone an vitio libri factum sit, non habeo dicere: Cyrillum profecto excusare nequeo, qui cum eadem haec ex Iustino, Diodorum enim haud inspexit, exscriberet L. I. c. Iulian. p. 15. D., ea, quae Iustin. probe distinxerat, ita, ut Iulianum fortius urgeret, connectenda censuit, *χρήσασθαι τὰ πλήθη καὶ βιοῦν ἄνδρα καὶ τῇ ψυχῇ μέγαν καὶ τῷ βίῳ καινότατον τῶν μνημονευομένων παρὰ τοῖς Ἰουδαίοις Μωσῆν, τὸν καλούμενον θεόν.* quae si fraus non est, amissimus vera rerum vocabula. Vide et P. D. Hueticum De-

monst. Evang. Prop. IV. 2. p. 104. Iam quod calumniam spectat, qua Mosen Dei *Iao* numini leges suas acceptas retulisse, ut multitudinem dicto audientiore redderet, Diodor. et Strabo XVI. p. 1106. sparserunt, ea toties et accuratissime a viris egregiis est infracta et confutata, ut otium mihi sit. Vide Io. Alb. Fabricii VI. Bibl. Gr. 12. p. 130. WESS.

105. 40. *Σασόχηρ*] Iustini contextus *Sauchnim* habet, additumque in parentheses *Sasochim*. RHOD. et PALM. *Σασόχηρ*] Convenit regis huius nomen cum *Asyche* Herodoti II. 136., qui et leges quasdam rogavit: sed obest aetas, quae Sesoosi sive Sesostride plurimis annis est posterior. WESS.

105. 46. *Σεσόωσιν τὸν βασιλέα* etc.] Vid. supr. c. 53.; et de legibus, ab eo latis, Dicaearchum in Schol. Apollon. Rhod. IV. 272. et Nymphodorum apud Schol. Sophoclis Oedip. Colon. 328. WESS.

106. 51. *Βόχχοριν σοφόν τινα*] Sapientiae et versatilis ingenii cultum eidem tribuit c. 45. et 65.; ceteri scriptores hanc laudem non prorsus illi auferunt, sed aut *γύσει χαλεπὸν παύρα asperum*, ut Plutarch. T. II. p. 529. E., aut habitum quidem *δίκαιόν τε ἐν ταῖς κρίσεσι καὶ πρὸς τὸ θεῖον τὴν ψυχὴν κεκοσμημένον*, in iudiciis iustum et animo in Deum pio, verum ex falsi pravique tenace rumore, *κατὰ κλέος ψευδὲς καὶ γήμην οὐδὲν λέγονσαν ἔγιες*, quemadmodum Aelian. XI. H. A. 1 f. produnt: quae fama fortasse differri coepta est, tum quod in Mnevim, sacrum bovem, visus esset iniquior, tum quod ad rem attentior. De legibus eius supra c. 79. et Io. Marsham. Can. Chron. p. 482. WESS.

106. 61. *Περὶ τοῖς νομύρχας*] Haec, refutata Poggii versione, P. Leopardus VII. Emend. 17. diligenter examinavit. Legem Amasis de civium artiumque, unde alerentur, professione supra Diodor. memoravit c. 77. et Herodot. II. 177. WESS.

106. 66. *Οὐκ ὄντι γένους βασιλικῶν*] Conf. supra cap. 68. WESS.

106. 67. *Περὶ τὸν Ὀλυμπιακὸν ἀγῶνα*] Thomas Mag. *Ὀλυμπιακὸν* Atticorum esse ait, *Ὀλυμπιακὸν* commune et in ceterorum usu. Diodor. modo *Ὀλυμπιακὸν ἀγῶνα* III. 74. IV. 14., variantibus tamen Mss., modo *Ὀλυμπιακὴν πανήγυριν*, *Ὀλυμπιακὸν λόγον* XIV. 109. XV. 78. appellat; quod sequar: neque enim Atticos, de quorum more L. Kuster. in Aristoph. Plut. 583., aemulari solet. De Eleis haud dissimilia Herodot. II. 160., sed Psammi tribuens. WESS.

106. 75. *Εἰς ἐπιστολὴν γράψαι*] Inseto accusativo *τέλος* inter *εἰς* et *ἐπιστολὴν*, puto locum hunc restitutum iri: ut sit *εἰς τέλος* pro *τὸ τελευταῖον*, id est *tandem*. pro quo tamen saepius dicitur *τέλος* sine *εἰς*. Potest etiam *εἰς τέλος* hic verti *postea tandem*, quia praecessit *τὸ μὲν πρῶτον*. Hesiodus dixit *εἰς τε-*

λευτήν itidem pro tandem: Plato πρὸς τὸ τέλος. STEPH. Commode monet H. Steph. inter praepositionem et nomen τέλος inse-  
rendum esse, id est, *ad extremum*. RHOD.

106. 77. *Αυπηθῆναι συντόμως*] Habet συντόμως hanc vim, ut id, quod subito accidit, indicet; ita συντόμως ἀποθα-  
ρεῖν Plut. Bruto T. I. p. 1009. B. et συντόμως ἀποστρέφειν καὶ  
ἀλόπως in eiusdem Demosth. p. 860. B.; haud tamen scio an  
συντόμως, quod saepe ab altero possessione deiectum ostendit L.  
Kuster. in Aristoph. Plut. 257., reliquerit, acremque et inten-  
tum dolorem indicarit: cui suspicioni favet Herodoti III. 43. Ἴνα  
μὴ — αὐτὸς ἀλγήσειε τὴν ψυχὴν, et rei eventus; neque enim  
actutum ea incommoda Polyerati acciderunt, sed interposita non  
brevis temporis mora, Amasidaeque dudum fatis functo, eodem  
Herodot. III. 125. teste: quae si cui Diodori verbis contraria  
videbuntur, non intercedam, ut in vulgata acquiescat. Iam quod  
viri doctissimi Steph. et Rhodom. supra commentantur, haud  
plane improbo; quamquam lenior mihi medicina videtur, si εἰς,  
ex praecedentis vocis clausula natum, plane eliminetur. WESS.

106. 86. *Ομιλῆσαι τοῖς ἱερεῦσι*] Darius in Aegyptios,  
Oryandri satrapae crudelitatem exosos, et ob eam caussam defi-  
cientes, exercitum duxerat: quo tempore cum in Apin pius esset  
visus, eorum et favorem collegit, et cum sacerdotibus familiariter  
egit, Polyae. VII. Stratag. 10. 7. et supr. c. 58. WESS.

107. 91. *Θεὸν προσαγορευθῆναι*] Atqui reges suos Aegy-  
ptii non aliter ac si Dii reapse essent, adorabant, supr. cap. 90.,  
et in numis Ptolemacus ΘΕΟΣ ΦΙΛΑΔΕΛΦΩΝ vivus videns-  
que appellatur: quare nisi haec de Dei titulo, a veteribus Aegy-  
ptiis, ante Macedonum imperium, uni Dario delato intellexeris,  
fallet observatio, uti visum quoque Ezech. Spanhem. Dissert. VII.  
de Usu et Praest. Numism. p. 421. WESS.

107. 93. *Νομιμώτατα βασιλεύσασσι*] Hoc movendum non  
censeo: sic enim et c. 22. et 27. etc. WESS.

107. 98. *Κινηθῆναι*] Verius μετακινήθῆναι. Simplici tā-  
men utitur libro XL. in narratione de Iudaeis. RHOD. Aeque  
adpositum κινήθῆναι atque alterum illud. Κινεῖν νόμους, ἐπι-  
τηδεύματα, πάτρια, πάτριον ἔθος, saepe ea in re obvia sunt.  
Vid. infr. XX. 111. et Synes. Encom. Calv. p. 72. D. Plut.  
Lycurg. T. I. p. 42. B. WESS.

107. 1. *Τούτων δ' ἡμῶν διεκκινήμενων*] Eusebius haec  
exscripsit et X. Pr. Evang. 8. inseruit. WESS.

107. 8. *Ἐτι δὲ Σόλωνα etc.*] Praeter hos veteris Graeciae  
eruditissimos viros in Aegyptum scientiae caussa profectos me-  
morat Theodorus Meliteniotes Prooem. in Astronom. c. 12. Phe-  
recydem Syrium, Thaletem Milesium et Anaxagoram Clazome-  
nium, cuius rei auctores quos habuerit, non addit. De Thalete  
satis id quidem exploratum est; de Pherecyde et Anaxagora

non item, ut ex Clement. Alexand. I. Stromat. p. 352. videbis. WESS.

107. 12. *Τῶν δὲ τόπων ἢ κατασκευασμάτων etc.*] Rhodom. haec obscurius vertit; clarius Fr. Vigerus, *partim loca, partim opera quaedam, ipsorum cognominibus insignia*. Cum enim in Aegypto et per diu versati fuerint et nonnulla industriae suae monumenta reliquerint, facile loca quaedam et opera, ipsorum cognominibus illustrata, ostendi potuerunt. Strabo haec firmat XVII. p. 1159. *ἐκεῖ οὖν, Heliopoli, ἐδείκνυντο οἱ τε τῶν ἱερέων οἴκοι, καὶ Πλάτωνος καὶ Εὐδόξου διατριβαί*. WESS.

107. 17. *Καὶ τὰ περὶ τὴν ἑαυτοῦ πλάνην*] In his vitium inesse suspicor, nec liquido, etsi multa mihi in mentem venerint, elui qui possit, perspicio. Fr. Viger. malle se ad Euseb. ait *τὴν αὐτοῦ πλάνην*, idque esse *τὴν ἐπ' αὐτοῦ πεποιτημένην*. quod aequo mihi obscurum. Id videor mihi ex illis, quae consequuntur animadvertisse, Orphea in Graeciam intulisse et Bacchi orgia et Cereris initia et inferorum fabulas; si itaque esset *τὰ περὶ τὴν Διμήτηρος πλάνην*, cetera haud male congruerent; ex illius enim erroribus Eleusinia mysteria originem acceperunt; quapropter et personatus Orpheus praeter alia se cecinisse ait Argonaut. vers. 26.

*Διμήτηρός τε πλάνην καὶ Φερσεφόνης μέγα πένθος*.

Quod tamen nomen cum longius a vestigiis scripturae veteris recedat, magis ut considerandi copia esset, quam ut pro vero putaretur, adposui. WESS.

107. 19. *Ἵσιριδος τελετήν*] Antea haec tetigimus cap. 14. 22. 23. etc. WESS.

107. 22. *Ἐν ἄδου τιμωρίας*] Fortasse haec aut argumentum aut eius operis pars, quod *Ἐὺς ἄδου κατάρασις* inscriptum Orptheo attribuerunt, de quo plura And. Christ. Eschenbach. Epigen. p. 187. WESS.

107. 25. *Ψυχοπομπὸν Ἐρμιῶν*] Mercurii hunc et similes ex inposito umbrarum deducendarum munere titulos explanavit T. Hemsterh. in Lucian. Contempl. c. 1.; habet eundem Plut. T. II. p. 566. B. et Eustath. in Homer. p. 1951.; alioqui ex causa non dissimili *ψυχοπομποὶ* praestigiatōres illi, qui defunctorum animas ciebant, ut in Synes. de Insomn. p. 148. C. et eius Schol. Nicephoro p. 412. sicuti et *ψυχαγογοὶ* Euripidi Alcest. 1128. Pausan. III. 18. Maximo Tyr. Dissert. XXVI. p. 151. Bene ergo Phrynichus in Biblioth. Coislin. p. 469. *οἱ δ' ἀρχαῖοι (ψυχαγογοὶ) τοὺς τὰς ψυχὰς τῶν τεθνηκότων γοητείας τισιν ἔχοντα, τῆς αὐτῆς ἐννοίας καὶ τοῦ Δισχέλου τὸ δῶμα Ψυχαγογός*. Sic enim ea distingui oportuerat. WESS.

108. 28. *Τὴν τοῦ Κερβέρου προσημῖαν*] Pravam Eusebii *προσημῖαν* recte explosit diligentissimus Paull. Leopard. V. Emend. 8. similiaque Diodori loca congressit, quae non exseribo. *Προσημῖας μύσχιον* auctor I. Reg. 10. 19. ex Alexandrinorum versione,

λευτήν itidem pro tandem: Plato πρὸς τὸ τέλος. STEPH. Commode monet H. Steph. inter praepositionem et nomen τέλος inse-  
rendum esse, id est, *ad extremum*. RHOD.

106. 77. *Αυπηθῆναι συντόμως*] Habet συντόμως hanc vim, ut id, quod subito accidit, indicet; ita συντόμως ἀποθα-  
ρεῖν Plut. Bruto T. I. p. 1009. B. et συντόμως ἀποστρέφειν καὶ  
ἀλόπως in eiusdem Demosth. p. 860. B.; haud tamen scio an  
συντόμως, quod saepe ab altero possessione deiectum ostendit L.  
Kuster. in Aristoph. Plut. 257., reliquerit, acremque et inten-  
tum dolorem indicarit: cui suspicioni favet Herodoti III. 43. ἴνα  
μὴ — αὐτὸς ἀλγήσειε τὴν ψυχὴν, et rei eventus; neque enim  
actutum ea incommoda Polyerati acciderunt, sed interposita non  
brevis temporis mora, Amasidaeque dudum fatis functo, eodem  
Herodot. III. 125. teste: quae si cui Diodori verbis contraria  
videbuntur, non intercedam, ut in vulgata acquiescat. Iam quod  
virī doctissimi Steph. et Rhodom. supra commentantur, haud  
plane improbo; quamquam lenior mihi medicina videtur, si εἰς,  
ex praecedentis vocis clausula natum, plane eliminetur. WESS.

106. 86. *Ομιλῆσαι τοῖς ἱερεῦσι*] Darius in Aegyptios,  
Oryandri satrapae crudelitatem exosos, et ob eam caussam defi-  
cientes, exercitum duxerat: quo tempore cum in Apin pius esset  
visus, eorum et favorem collegit, et cum sacerdotibus familiariter  
egit, Polyae. VII. Stratag. 10. 7. et supr. c. 58. WESS.

107. 91. *Θεὸν προσεγορευθῆναι*] Atqui reges suos Aegy-  
ptii non aliter ac si Dii reapse essent, adorabant, supr. cap. 90.,  
et in numis Ptolemaeus ΘΕΟΣ ΦΙΛΟΜΗΤΩΡ vivus videns-  
que appellatur: quare nisi haec de Dei titulo, a veteribus Aegy-  
ptiis, ante Macedonum imperium, uni Dario delato intellexeris,  
fallet observatio, uti visum quoque Ezech. Spanhem. Dissert. VII.  
de Usu et Praest. Numism. p. 421. WESS.

107. 93. *Νομιμώτατα βασιλεύσασι*] Hoc movendum non  
censeo: sic enim et c. 22. et 27. etc. WESS.

107. 98. *Κινηθῆναι*] Verius μετακινήθῆναι. Simplici tā-  
men utitur libro XL. in narratione de Iudaeis. RHOD. Aeque  
adpositum κινήθῆναι atque alterum illud. Κινεῖν νόμους, ἐπι-  
τηδεύματα, πάτρια, πάτριον ἔθος, saepe ea in re obvia sunt.  
Vid. infr. XX. 111. et Synes. Encom. Calv. p. 72. D. Plut.  
Lycurg. T. I. p. 42. B. WESS.

107. 1. *Τούτων δ' ἡμῶν διεκκρινημένων*] Eusebius haec  
exscripsit et X. Pr. Evang. 8. inseruit. WESS.

107. 8. *Ἔτι δὲ Σόλωνα etc.*] Praeter hos veteris Graeciae  
eruditissimos viros in Aegyptum scientiae caussa profectos me-  
morat Theodorus Meliteniotes Prooem. in Astronom. c. 12. Phe-  
recydem Syrium, Thaletem Milesium et Anaxagoram Clazome-  
nium, cuius rei auctores quos habuerit, non addit. De Thalete  
satis id quidem exploratum est; de Pherecyde et Anaxagora



non item, ut ex Clement. Alexand. I. Stromat. p. 352. videbis. WESS.

107. 12. *Τῶν δὲ τόπων ἢ κατασκευασμάτων etc.*] Rhodom. haec obscurius vertit; clarius Fr. Vigerus, *partim loca, partim opera quaedam, ipsorum cognominibus insignia*. Cum enim in Aegypto et per diu versati fuerint et nonnulla industriae suae monumenta reliquerint, facile loca quaedam et opera, ipsorum cognominibus illustrata, ostendi potuerunt. Strabo haec firmat XVII. p. 1159. *ἐξ αὐτῶν, Heliopoli, ἐδείκνυντο οἱ τε τῶν ἱερέων οἴκοι, καὶ Πλάτωνος καὶ Ἐυδόξου διατριβαί.* WESS.

107. 17. *Καὶ τὰ περὶ τὴν αὐτοῦ πλάνην*] In his vitium inesse suspicor, nec liquido, etsi multa mihi in mentem venerint, elui qui possit, perspicio. Fr. Viger. malle se ad Euseb. ait *τὴν αὐτοῦ πλάνην*, idque esse *τὴν ἐπ' αὐτοῦ πεποιημένην*. quod aequum mihi obscurum. Id videor mihi ex illis, quae consequuntur animadvertisse, Orphea in Graeciam intulisse et Bacchi orgia et Cereris initia et inferorum fabulas: si itaque esset *τὰ περὶ τὴν Διμήτρος πλάνην*, cetera haud male congruerent; ex illius enim erroribus Eleusinia mysteria originem acceperunt; quapropter et personatus Orpheus praeter alia se cecinisse ait Argonaut. vers. 26.

*Διμήτρος τε πλάνην καὶ Φερσεφόνης μέγα πένθος.*

Quod tamen nomen cum longius a vestigiis scripturae veteris recedat, magis ut considerandi copia esset, quam ut pro vero putaretur, adposui. WESS.

107. 19. *Ἵσίοδος τελετήν*] Antea haec tetigimus cap. 14. 22. 23. etc. WESS.

107. 22. *Ἐν ἄδον τιμωρίας*] Fortasse haec aut argumentum aut eius operis pars, quod *Ἐὶς ἄδον κατάρασιν* inscriptum Orpheo attribuerunt, de quo plura And. Christ. Eschenbach. Epigen. p. 187. WESS.

107. 25. *Ψυχοπομπὸν Ἐρμῆν*] Mercurii hunc et similes ex inposito umbrarum deducendarum munere titulos explanavit T. Hemsterh. in Lucian. Contempl. c. 1.; habet eundem Plut. T. II. p. 566. B. et Eustath. in Homer. p. 1951.; alioqui ex causa non dissimili *ψυχοπομποὶ* praestigiatōres illi, qui defunctorum animas ciebant, ut in Synes. de Insonn. p. 148. C. et eius Schol. Nicephoro p. 412. sicuti et *ψυχαγογοὶ* Euripidi Alcest. 1128. Pausan. III. 18. Maximo Tyr. Dissert. XXVI. p. 151. Bene ergo Phrynichus in Biblioth. Coislin. p. 469. *οἱ δ' ἀρχαῖοι (ψυχαγογοὶ) τοὺς τὰς ψυχὰς τῶν τεθνηκότων γοητείας τισιν ἄγοντας, τῆς ἀντίης ἐννοίας καὶ τοῦ Δισχέλου τὸ δῶμα Ψυχαγογός.* Sic enim ea distingui oportuerat. WESS.

108. 28. *Τὴν τοῦ Κερβέρου προσημῖν*] Pravam Eusebii *περισημῖν* recte exposuit diligentissimus Paull. Leopard. V. Emend. 8. similiaque Diodori loca congressit, quae non exseribo. *Προσημῖν μύσχιον* auctor I. Reg. 10. 19. ex Alexandrinorum versione,

θηρίων προτομὰς Plut. Isid. p. 380. A. *κάπρον χορῶσεων, εἰς προτομὴν ἀνθρώπου ἠσκημένον* scriptor de Flumin. inter eiusdem Plut. opera T. II. p. 1161. E. dabit. Vide et supra c. 18. WESS.

108. 30. *Θεῖναι κατὰ τὴν ποιήσων*] Initio lib. XXIV. de Ulysse. RHOD.

108. 33. *Ἀρδῶν μνηστῆρων*] Amplector hanc schedarum Coisl. scripturam, in poetae editis carminibus obviam: alteram quidem Euseb. probavit, cuius iudicium veriore non facit, praesertim poeta et alibi Odys. X. 369. Ψ. 363. consentiente. WESS.

108. 39. *᾽Ωκεανὸν καλεῖν*] Puto *᾽Ωκεάνην* propter cap. 12. et 19. scripsisse. De prato inferorum amoenissime consito Lucian. Nocyom. c. 11. et ibid. Cl. T. Hemsterh. WESS.

108. 48. *Τὰς τῶν Αἰγυπτίων ταράς* etc.] Haud longe ab urbe Memphi Aegyptiorum plures fuisse contumelatos, condita accuratissime cadavera, quae magno illic numero eruuntur, confirmant. Vid. Prosp. Alpin. I. Rer. Aegypt. 7. et Paul. Lucam IV. Itin. Aegypt. p. 346. WESS.

108. 54. *Βάρην καλεῖσθαι*] Aegyptium navis nomen esse, tametsi Grammatici in alia abeunt, abunde declarat Herodot. II. 96. et Aeschyl. Supplic. 880. *Αἰγυπτίαν γὰρ βάρην οὐχ ὑπερ-θορῆ*. Quamobrem in gentis eius rebus gestis frequens vocabuli usus, ut in Plut. Isid. T. II. p. 358. A. Synes. I. Provid. p. 96. A. Propert. III. 9. 44.; quod etsi de aliis navibus usurpetur, quoddam quasi domicilium in cymba, qua Acherusiam paludem mortui tramittebant, tenuit, sicuti cap. 92. et eo in epigrammate, quo Diogenes Charonti III. Anthol. 33. p. 420.

*Δέξαι μ', εἰ καὶ σοὶ μέγα βολίθεται ὀχρονόεσσα  
Βάρης ἀπορθημένων, τὸν κόνα Διογένην.* WESS.

108. 55. *Τὸ ἐπιβάθρον νόμισμα*] Naulum, quod portitori pro consecensa navi persolvitur, *μισθὸς ἐπὶ τοῦ ἐπιβῆναι τῆς νεώδος*, Apollon. Rhod. I. 421. *Ἦν τοι τῆσδ' ἐπιβάθρα χάριν προτεθείμεθα νηὸς Πρωτίστην.* — Paulo diversiore usu Plut. T. II. p. 727. F. de Ciconia, quae infesta hominibus animalia necando, *ἐπιβάθρον τι γῆς δίδωσι*, mercedem quandam loci, quem occupavit, praestat. Vid. P. Leopard. X. Emendat. 25. Diodori verba a perversa Poggii versione vindicantem, et de obolo, unone an pluribus, T. Hemsterh. in Lucian. D. Mort. XXII. 1., qui plura illic accuratissime, nec prave hoc loco *τὸ δ' ἐπιβάθρον νόμισμα.* WESS.

108. 56. *Καλονόμενῳ Χάρωνι*] Grammaticorum originationes, quas haud sane lepidas Charonti inpingunt, ut cum Diodoro sentiam, faciunt: accedit in nostram aetatem perennans Aegyptiis persuasio et plurimae de portitore hoc fabellae, de quibus P. Lucas V. Itin. Aegypt. p. 22. WESS.

108. 58. Σχοτίας Ἐκάτης ἱερὸν] Hoc fanum in Aegypto reperire haud memini, sed Veneris Σχοτίας in Hesych. Σχοτία. Haud dubie tamen ea est, quae Orphico Argonaut. 972., ἀλόλο-μορμος, τρισσοζέγαιος, ὀλοὸν τέρας ὄτι δαιτὸν, Ταρταρόπαις Ἐκάτη, quaeque pars haud postrema inferorum, quorsum et ea spectant, quae sequuntur, varie, ut in fabulis, exponi solita. Conf. Aeschin. Socrat. D. III. 19. WESS.

108. 64. Ἀζανθῶν πόλις] Mallet Ἀζάνθω πόλις, vel Ἀζανθίων πόλις, secundum alios: quinetiam secundum ipsum Diodorum, cum alibi, tum p. 320., τὴν Ἀζανθίων πόλιν. STEPH. Lege cum H. Steph. Ἀζανθίων. RHOD. Non accedo viris doctissimis. A spinis, quarum ibi lucus, ut κυνῶν πόλις a canibus et a lupis λέκων πόλις, primum Ἀζανθῶν πόλις, quod Ptolemaeo IV. Geogr. 5. p. 120., addicente Ms. Coislin., Cl. Salmas. ad Solin. p. 376. restituit, deinde Ἀζανθος dici coepta est. Aberat Memphi in Libyam versus stadiis CXX aut CL, si quid tribuendum discordantibus Diodori libris, aut CCCXX, si Stephano in Ἀζανθος: qua dubia in re equidem nihil constituo. WESS.

109. 66. Πίθον τετρομημένον] Notissima est Danaidum ἡ περὶ τὸν τετρομημένον πίθον διὰ ζοσκίνον λατρεία, sicuti dicitur Porphy. III. A. A. c. ult. p. 140.; nec raro tamen illi dolio accidit, ut τετρομημένον vocetar, veluti in Cod. Coislin. et Basil. M. T. H. p. 181. C., correcto tamen a Iuliano Garnerio, et Phrynicho in Biblioth. Coislin. p. 469. De sacerdotibus CCCLX vide cap. 22.; potuisset autem commode, cum εἰς ὃν praemisisset, praeterire εἰς ἀτόν. quae, nisi pleonasmo quodam, ut XVII. 35. et XVIII. 9. scripta velis, supervacanea erunt. WESS.

109. 69. Περὶ τὸν ὄνον] Ὄνον etiam legi posset, et fortasse melius. Vide proverbium *Ocnus funem contorquens*. STEPH. Lege cum H. Steph. Ὄνον. De quo Pausanias in Phocicis. RHOD. Asini in ea fabula post Oenum σχοιροστρόφον partes haud postremae, ut vel ex Propertio IV. 3. 21. notum:

*Dignior obliquo funem qui torqueat Oeno,  
Aeternusque tuam pascat, aselle, famem.*

et Pausan. X. 29. Aegyptiorum tamen alia fuisse ratio videtur; neque enim asinus, quod plexum erat, consumebat, sed tortum funiculum eorum in sollemnitate alii dissolvebant; quare et ego Ὄνον praeferrem. Adde P. Leopard. IX. Emend. 11. WESS.

109. 72. Μελάμποδα — ἐξ Ἀγέπτιον etc.] His gemina Clemens Alex. Protrept. p. 12., et Nicephor. in Synes. p. 421., qui tamen difficulter tenebit, fuisse cum Ἀγέπτιον ἱερογραμματεία καὶ ἱεροφάντην. WESS.

109. 78. Οἰκοδομηθέντος ἐπὶ Μένδητος] Vide supra c. 61. et de Daedali statuis IV. 78. WESS.

109. 84. Τὸ κάλλιστον πρόπυλον] Plut. Isid. p. 363. F.

ἐν τῷ προπύλαιῳ τοῦ ἱεροῦ τῆς Ἀθηνῶς. Diodoro tamen tritius est προπύλαιον, ut cap. 67. WESS.

109. 91. Τῆς δ' Οὐμίου παραουσίας] Conf. supra c. 12. et Ptolemaeum Hephaest. in Biblioth. Photii p. 486. WESS.

109. 93. Ἑλένης μαρμαζέταν] Odysseae IV. v. 221. RHOD.

109. 94. Καζῶν] Nihil adimit sententiae, etiamsi omittatur. RHOD.

109. 96. Πολυδάμνης τῆς Θῶνος] Reddo Thonis uxori suum nomen ex Euseb. et Justin. M., qui et haec excerpserit Prætrept. p. 26. et Clar. 2. cuius Πολέμνης ex scribendi compendio natum videtur. Nec aliter poeta Odysseae. A. 228. Aelian. IX. H. A. 21. Philostr. VII. V. A. 22. p. 302. WESS.

109. 99. Μόνας ταῖς Διοσπολίτιν] Sic oportuerat. Ex Διοσπόλις fit Διοσπολίτης, unde ΔΙΟΣΠΟΛΙΤΩΝ ΜΕΓΑΛΩΝ numi; neque enim mihi dubium quin prave Goltzcius exscripserit ΔΙΙΟΛΙΤΩΝ. Nepenthes autem fueritne opium, quod vocant, an blandi inter pocula sermones, ut Plut. T. II. p. 614. C. visum, an aliud, post anxiam virorum doctorum, et praeter ceteros Pet. La Seine et P. Petiti, disquisitionem, in ambiguo est. WESS.

109. 2. Τὰς Θύβας etc.] Vide supra cap. 45. WESS.

109. 3. Καὶ πεδίων χρυσῆς etc.] Homerus Venerem Iliad. Γ. 64. χρυσέην cum appellasset, quaesivere tituli eius causam Grammatici; quorum alii a formae pulcritudine, suffragante Diodoro IV. 26., alii a campo quodam, aureo dicto, in quo ea templum habuerit et praecipuo honore sit culta, derivarunt: in his Aegyptii nomen sunt professi, et, eos fortasse secuta, Histiaca Grammatica, ut scholiorum auctor ad Iliad. Γ. 64. et Eustath. p. 384. docuerunt. WESS.

110. 4. Ὀρομαζομένην Μώμεμιν] Bene sit Eusebio, qui iustum urbis nomen servavit; quod et confidenter Diodoro restitui: cur enim is Memphim, toties totiesque memoratam, τὴν Ὀρομαζομένην appellasset? notior ea est, ut bene Fr. Viger., quam ut illam προσθήκην desideret: quin ipse huc ducit cap. 66. ubi Psammeticum adversarios superasse tradit, περὶ πόλιν τὴν Ὀρομαζομένην Μώμεμιν, firmatque egregie Strabo XVII. p. 1155. B., Venerem a Momemphitis diligenter cultam referens. WESS.

110. 6. Περὶ τῆς συνοουσίας etc.] De hac Iliad. Ξ. 346., de itinere in Aethiopiam Iovis Iliad. A. 424. WESS.

110. 14. Πολλὰ τῶν ἐξ Αἰγύπτου etc.] Solonis tralatas ex Aegypto leges supr. c. 77. et 79. indicavit. De Lycurgo adsentiantur Isocrat. Laud. Busir. p. 329., Strabo X. p. 738. D. et Plutarch. Lycurg. T. I. p. 41. F.; de Platone vero Diogen. III. 6. et quos illi adscripsit Aeg. Menag. WESS.

110. 16. Τὰ κατὰ τὸν ἱερὸν λόγον] Eius argumentum Dii resque divinae, unde et περὶ θεῶν inscribatur; quem tamen

auctor libri non ab Aegyptiis, sed in Thraciae monte Libethris, Aglaophamo initia tradente, se accepisse profitetur apud Iamblich. Vit. Pythag. c. 28. p. 123. ubi L. Kuster. vide et Io. Alb. Fabr. I. Biblioth. Graec. 19. 2. WESS.

110. 18. *Ψυχῆς μεταβολὴν μαθεῖν*] Conf. Herodot. II. 123. Iamblich. Vit. Pyth. c. 4. p. 15. et L. Holsten. in Porphy. Vit. Pyth. p. 9. WESS.

110. 19. *Καὶ Δημόκριτον* etc.] Ipse de se, ut dubitare nefas sit, profitetur apud Clement. Alexandr. I. Strom. p. 357.; cui adde Diogen. IX. 35. cum Menagii nota. WESS.

110. 21. *Τὸν τε Οἰνοπίδην*] De eo c. 41. WESS.

110. 25. *Καὶ τὸν Εὐδόξον*] Eudoxus Platoni in Aegyptum abeunti comitem se addidit, Strabon. XVII. p. 1159. auctore, Chrysippo vero medico, si Diogen. VIII. 87. sequaris: qui scientiarum et astronomiae cupidine in hoc iter coniectum perhibent, solus Philostr. I. Vit. Apoll. 3. habendi et opum amore. WESS.

110. 30. *Τηλεκλέα καὶ Θεόδωρον*] Pausan. VIII. 14. p. 629. et X. 38. p. 896. Theodorum Teleclis filium facit; Diodoro accedit Diogen. II. 103. Bene ergo Athenagor. Legat. pro Christ. c. 14. *ὁ δὲ Πύθιος, ἔργον Θεοδώρου καὶ Τηλεκλέους.* quem optimi scriptoris locum memini cum mendii suspectum habere; sed non insolens veteribus, ut inter se dissentiant, quod de Telecle et Theodoro admonere non neglexerunt Paul. Leopard. X. Emend. 25. et Menag. in Laert. *Μοχ ἰστοροῦσθαι* iustius censui: pendet enim oratio. WESS.

110. 41. *Καθάπερ παρὰ τοῖς Ἕλλησιν*] Rudi et aevo et arte fortasse id verum fuit: non item labentibus annis; quando Graeci ea parte aut superarunt aut certe veteres Aegyptios aequipararunt. Vide quae diligenter disputavit III. Pict. Vet. 2. Francis. Iunius. WESS.

110. 43. *Τὸ τηριζαῦτα*] Articulus reiiciatur. RHOD. Noli Rhodom. praecepto obedire: vetat Diodorus XI. 56. *τὸ τηριζαῦτα ὁ βασιλεὺς φοβηθεῖς.* et c. 83. eiusdem libri *τὸ τηριζαῦτα ἀπογνοὺς τὰ κατὰ τὴν Θετταλίαν.* et supr. c. 77. etc. WESS.

111. 53. *Κατὰ τὴν ὀροσφῆν* etc.] Quid si *χορυφῆν*? et pro *ζῶον*, *θεοῖ*. Nam de Apollinis effigie mentio supra inchoata, nunc concluditur. RHOD. *Κατὰ τὴν χορυφῆν*] Mihi tam certa prior visa est Rhodomanni coniectura, ut eam receperim; praesertim cum Pogg. eam vocem legisse videatur, et *κατὰ τὴν ὀροσφῆν* sententiae non conveniat. De altera amplio: durior enim est, tametsi Graeculis sollemne fuerit, Deorum simulacra *θεοὺς* appellare, teste Plut. Isid. p. 379. C. Forte ex *ξοάνων* vocabulo, sed contractius scripto, quod nunc legitur, natales suos accepit. WESS. *Ζῶον statuam* dici nunc nemo nescit: vide, si tanti, Schweigh. ad Athen. vol. VII. p. 289. Atque ita capiendum *ζῶδια* supra p. 56. 9. De Teleclis et Theodori artificio dixit praeter alios

Schneiderus ad Vitruv. p. 161., probans, uti par erat, certissimam Rhodomanni emendationem. Cui qui leniorem, ut sibi videbatur, opposuit Winkelmannus hist. art. p. 97. κατὰ τὴν ὄσφύν, Lessingio iure ineptam visam, ubi ὄσφύν et ὀροσφύν permutata repererit nescio: inter χοροφύην et ὀροσφύην fluctuat scriptura Plutarchi Vita Perielis p. 160. τῆ δ' ἐρέσει περιζλινές καὶ κάταρτες ἐκ μιᾶς χοροφύης πεποιημένον, ubi Vulcob. ὀροσφύης: ne Hesychium commemorem v. ἐγχοροφάδες, cui ὀροσφύη pro χοροφύη restituit Schneiderus Supplem. lex. Gr. v. χοροφύης.

111. 57. Τὰ δὲ σκέλη διαβεβηκότα] Atqui τὰ ἀγάλματα τῶν θεῶν Αἰγύπτιοι τῷ πόδε ζυγνύντες καὶ ὡσπερ ἐνοῦντες ἰστᾶσιν, *Deorum simulacra Aegyptii iunctis pedibus et quasi unitis ponunt*, apud Heliodor. III. p. 148., et Memnonis signum utroque pede coniuncto συμβεβηχὸς τὸ πόδε ἄμφω, ut ferebat ratio artis statuariae circa Daedali tempora, in Aegypti finibus, Philostr. VI. Vit. Apoll. 4. indice: superant praeterea gentis statuac, quarum pedes cohaerent, et manus lateri adglutinatae conspiciuntur. Quapropter aut haec de serioris aevi Aegyptiorum statuariis accipienda sunt, aut nimia sibi, ut gens erat gloriosa, attribuerunt. Σκέλη autem διαβεβηκότα sunt divaricata diductaque, sicuti II. 9. Iovis signum ἐστῆχὸς καὶ διαβεβηχὸς: et Apollo διαβεβηχὸς τοῖς ποσὶν, ὡσπερ θεῶν Dissert. XXVI. p. 153. Maxim. Tyr.: ἀνδριάντες διαβεβηχότες μὲν εἶναι καὶ καλῶς Orat. XXXVII. p. 457. B. Dion. Chrysost. Vide et infra IV. 78. WESS.

111. 59. Κατὰ τὴν ἐν ἀρχῇ etc.] Bene scripti Codd.; vulgatum manifesto claudicabat. Similia invenies II. c. 60. III. 74. IV. 87. etc. WESS.

111. 62. Ἀσσηροῖς παραθέντα] Unde ea venerint, utrum ex correctione scriptoris, an Grammatici ingenio, quae Co. et M. his adstruunt, non facile dixero: nos quidem certe sine damno illis carebimus. WESS.

## A N N O T A T I O N E S

I N

## L I B R U M S E C U N D U M.

112. 17. Καὶ τῆς κατ' αὐτοῦς] Rectum hoc esse ex II. 23. videbis. WESS.

112. 21. Περὶ τῶν Χαλδαίων] Haec, secutus sched. Coislin., hunc locum occupare iussi; prave enim primum de regibus Medis, tum Chaldaeis summarium erat. Vide II. 29. et 32. WESS.

113. 21. Τὸ παλαιὸν τοίνυν etc.] Usus his est Georg. Syncellus Chronographiae suae p. 166. A. Euseb. Can. Chron. p. 29. et alter Georgius, cui Gemisto cognomen, qui omnia de Assyrii et Medis usque in c. 35., Epitomae suae, quam manu scriptam habeo, de Assyriorum et Medorum imperio inseruit. WESS.

113. 30. Συμμαχίαν ἐποίησατο] Paulo cultius ob praecedens *συστησάμενος* hoc visum est: ceteroqui ab utriusque usu Diodor. non abhorret. De Psammeticho supr. I. 67. πρὸς Ἀθηναίους *συμμαχίαν ἐποίησατο*. Vid. IV. 62. XII. 65. WESS.

113. 31. Πρὸς Ἀραβίων τὸν βασιλέα τῆς Ἀραβίας] Steph. Morinus Dissert. de Paradiso p. 18. eundem hunc esse ait ac Charvilam, Nimrodi fratrem; nam ἄρα Arabibus *egregium administratorem* significare, idque Graecos per Ἀραβίων *bellicosum* exposuisse: quae, ut lenissime dicam, nauci non sunt; perperam etiam Nimrodum et Ninum confundunt, et *Ariaei* nomen ex media Graecia arcessunt, quod in Arabum sermone, si id agerem, suos natales habere potuisse, levi opera ostenderem. Verum hoc genus non sector, dubium nimis et fallax. WESS.

113. 33. Ἔστι ἔθνος φιλελεύθερον] Paria his scribit XIX. 95. sed et multo accuratius de Arabum cisternis. Adde Is. Vossium in Pomp. Melam III. 8. 32. WESS.

114. 45. Βαβυλῶν οὐκ ἦν ἐκτισμένη] Ctesias, quem Diodorus auctorem habet, Babylonem opus Semiramidis fecit, multisque aliis eam opinionem probavit; sed praeter rei veritatem, quod iam olim Berosus Graecis, Ctesiam secutis, exprobravit in Ioseph. I. c. Apion. 20.; verum haec alias. WESS.

114. 49. Τὸν δὲ βασιλείᾳ ἀπέτευε] *Nabonnabus* fuit, si catalogo regum Babylonis ex *Africano* certa fides in Syncelli Chronogr. p. 9. 92. A. quem quidem a multis sperni scio, sed Ctesiae admiratoribus. WESS.

114. 59. Τῷ σφετέρῳ στρατοπέδῳ] *Σφετέρον* idem hic est atque ἴδιον. quem usum etsi Grammatici damnant, saepe et solutae et ligatae orationis scriptores probant: exempla dabunt Is. Casaub. in Athen. IX. 4. et Ezech. Spanh. in Callim. Hymn. in Del. 233. Addo ex III. 64. ubi Bacchus διαπλεύσας πρὸς τὸ σφετέρον στρατόπεδον, et XIV. 22. Cyrus εἰς τάξεις κατέστησε τὸ σφετέρον στρατόπεδον. Polyb. de Ariarathe τί πράξας, δύναται ἂν παραιτήσασθαι τὴν σφετέραν ἀγροίαν Excerpt. Legat. XXXV. p. 1165. et CIV. p. 1293. WESS.

114. 67. Ὡς ἐπίπλαν etc.] Mallet, *plerumque enim rerum successus etc.*; neque enim semper et ubique verum est: bene Dio Cass. in Suidae Ὡς ἐπίπλαν. Πέφυκε γὰρ καὶ ἄλλως ὡς πλήθει τὸ μὲν εὐτυχῶν θρασύνεσθαι, τὸ δὲ κακοπραγῶν μειοῦναι, nam et *plerumque res prosperae homines insolentes, adversae autem moderatos efficiunt.* Atque ita ὡς ἐπίπλαν infra XIX. 48. Theophrasto IX. H. P. 22. et I. Causs. Pl. 9. Epicteto Enchirid. 27. cum nota Meibom. WESS.

115. 81. Τὴν τε Καρίαν] *Cariam* a Nino subactam negat R. Reineccius in Tract. de Orig. et Imperio Carum: ubi Lelegibus primum Cariae regnum attribuit. RHOD.

115. 85. Καδουσίῳ] Hoc reposuimus, una extrita litera, quo modo XV. 8. XVI. 6. Καδουσίους tamen Polyb. V. 41. et 79. WESS.

115. 86. Ἀραγῶν] *Αράγγαι* gens Persidis Straboni et Stephano. *Αραγῶν* itaque scribendum. Idem vero auctor Daos ad Borysthenem collocat, quos tamen e Persia ut et Germanos in Europam transiisse, verisimillima hominum doctissimorum, inter quos non ultimas tenet Reineccius ille polyhistor, coniectura est. Nam Daos, qui a Dacis nihil differunt, cum Germanis inter Persicas gentes Herodotus lib. I. 125. recenset. De his aliisque Persiae populis Strabo lib. XV. legatur. RHOD. *Αραγῶν*] Invitis libris ita scripsi: solet regionem *Αραγῆν*, incolas *Αράγγας* appellare inf. XVII. 78. XVIII. 3. WESS.

115. 87. Καὶ Πόμνον] Mutilatum est e *Χωρομανίων*, ut Stephanus e Ctesia annotat. RHOD. Καὶ Χωρομανίων] Noli a scriptis libris dissentire, praesertim cum ipsi veteres in gentis scriptura discordent. Ctesias in Persie. Biblioth. Photii p. 110. Cyrus, inquit, filium Tanyoxarceon dominum constituit καὶ Χωρομανίων καὶ Παρθίων καὶ Καρμανίων. Stephan. ex Ctesia *Χωρομανίους* habet. WESS.

115. 88. Ἴτι δὲ Βορζανίων] Habitabant in Hyrcaniae finibus, ἔθρος τοῖς Ὑρκανοῖς ὄμορον, inquit Stephan., sed Βαρ-



καίτους appellans; nec aliter Ctesias in Excerpt. Photii p. 110. WESS.

115. 89. *Κασπίαι πόλαι*] Duae erant Caspiae gentes, altera occidentalior nec longe a cognomine mari, altera Parthis vicina, cuius *Κασπίαι πόλαι*, teste Dionys. Perieg. 1039. et Strabon. XI. p. 796. et Epitom. p. 1276. C. WESS.

115. 93. *Οὔσης δυσσεμβόλου*] Nihil intererit, hoccine an Gemisti *δυσσεμβόλου* elegeris: Spartanorum regionem *δυσσεμβόλου* XV. 63. et Bactrianam *δυσσεμβόλου* XVII. 74. habebis: at Aegyptum *δυσσεμβόλου* I. 57.; quo modo et Aristotel. VII. Polit. 5. Polyb. III. 49. etc. WESS.

115. 97. *Εἰς τὴν Σύριαν*] Melior videri posset *Ἀσσυρία* Gemisti et Coisl. nisi usu quodam valuisset, ut Syriae nomen longissime protenderetur. *Λοξεῖ δὲ τὸ τῶν Σύρων ὄνομα διατεῖναι ἀπὸ μὲν τῆς Βαβυλωνίας μέχρι τοῦ Ἰσσοικοῦ κόλπου*, inquit Strabo princ. lib. XVI., insuper addens, *ἱστορικούς ὅτιαν φῶσι Μήδους μὲν ὑπὸ Περσῶν καταλυθῆναι, Σύρους δὲ ὑπὸ Μήδων*, nullos alios Syros intelligere, quam eos, qui Babylone et Nini regiam constituerunt. WESS.

115. 6. *Εἰς τὴν οἰκίαν*] Restitue *οἰκίαν*, scilicet *χώραν* seu *πατρίδα*, phrasin auctori familiarem. RHOD. *Εἰς τὴν οἰκίαν*] Sic II. 46. *ἀναζάμψασαν δὲ μετὰ πολλῶν λαφύρων εἰς τὴν οἰκίαν*. et c. 47. *μόλις εἰς τὴν οἰκίαν σώζονται*. Paulo aliter Appian. Mithridat. p. 313. *οὓς πάντας Μιθριδάτης ἀπέλευσεν εἰς τὰ οἰκία ἀπύειναι*. WESS. *Εἰς τὴν οἰκίαν* scribi oportere monuit et Ursinus. IDEM in Add.

115. 7. *Παρασκευὰς πάντων τῶν ἐπιτηδείων*] Et hoc refinxī, obsecutus scriptis libris. *Ἐπιτίδεια* ea complectuntur, quae ad victum quaeque tanto operi necessaria erant, ut I. 45. WESS.

115. 8. *Ἐπὶ τὸν Εὐφράτην ποταμὸν*] Ad Euphratem, secutus Ctesiam, eandem locat c. 7. sed turpi errore; adposita enim ad Tigrim fuit: Herodot. I. 193. *ἐς τὸν Τίγριν, παρ' ὃν Νῖνος πόλις οἰκέσεται*. et II. 150. ut de Strabone, Plinio et Ptolemaeo taceam: nam quod N. Fuller. III. Miscell. 6., eos omnes erroris arguens, urbem ad Lyeum amnem transtulit, id iniuria fieri, alias ad Simson. Chron. A. M. 3187. patefecit. Non quidem ignoro quid de Hierapoli *vetere Nino* Ammian. XIV. 8. et de *Nino* prope Zeugma Philostrat. I. Vit. Apol. 19. memorarint; quae incertae cum sint fidei, ut lenissime dicam, Ctesiae et Diodoro, praesertim quod uterque de Nino, Nini regis amplissima urbe, agat, auxilii nihil ferunt; nedum quae Th. Pinedo ad Stephani *Ninos* commentatur: Adiabenen enim Tigrim inter et Euphratem locant; quam ultra Tigrim fuisse positam in Assyria nemo dubitare poterit. WESS.

115. 14. *Τηλικαύτην γὰρ πόλιν*] Atqui Babylonis ambitus stadiorum fuit CCCCLXXX, omnique adeo ex parte par Nino, si

Herodotus I. 178. verum tradidit; de quo quidem certe vehementer dubito: Straboni Ninus πολὺ μείζων ἐστὶ τῆς Βαβυλωνίως XVI. p. 1071. C., quippe quae stadiorum duntaxat cccclxxxv ambitum fuit complexa, uti ibidem docet, et Diodor. infra c. 7. WESS.

116. 22. Ἐζάλεσεν ἀφ' ἑαυτοῦ Νῖνον] In sacris nostris *Ninive*, et Ptolem. VIII. Geogr. p. 240. *Νῖνος ἢ καὶ Νινεῖτ'* quod nomen si conflatum sit, uti S. Bocharto IV. Phaleg. 20. placitum est, ex *נִין נָוֶה* *Nin-nave*, id est, *Nini habitatione*, oportet per prolepsin quandam a Mose sit usurpatum Genes. X. 11. WESS.

116. 30. Ὀὺκ ἄποθεν λίμνη] Prope Ascalonem profundum eiusmodi lacum difficulter invenies: quare Claris. H. Relandus III. Palaest. p. 592., Sirbonidem lacum, de quo nos I. 30., non alium atque hunc esse censet: cuius profecto coniectura multo est plausibilior Io. Tzetzae commento, quo Chiliad. IX. 509. hanc de Derceto et Semiramide fabulam ex Diodoro excerpens, in *Moeridem*, Aegypti lacum, Dercetum sese abiecit perhibet. Conf. Ger. Io. Vossium I. Idolol. 23. Perinde vero erit sive tu ἄποθεν an ἄνωθεν probaveris: neque enim in vocis scriptura concors consensus est, ut Steph. Bergler. in Alciph. I. Ep. 1. docet. WESS.

116. 32. Τέμενος θεῶς ἐπιφανοῦς] *Illustris*, quod in versione Rhodom., non exhaurit vim vocabuli. Tu de Dea manifesta et praesens auxilium ferente si acceperis, Diodoro satisfacies. Conf. III. 40. et ad I. 25. praetereaue de Derceto, quae *Δερκετιτὸν* Eratosth. Catasteris. c. 38. multa Salmas. in Solin. p. 405. et N. Heins. in Ovid. IV. Metamorph. 45. congruentes. WESS.

116. 33. Τὸ μὲν πρόσωπον ἔχει γυναικὸς etc.] Cum his consentanea est Luciani, qui se eam in Phoenice vidisse asseverat, descriptio Lib. de Dea Syr. c. 14. *Δερκετοῦς δὲ εἶδος ἐν Φοινίκη ἐθεισάμην, θέμιμα ξένον ἡμισέη μὲν, γυνή· τὸ δὲ ὁπόσον ἐκ μηρῶν ἐς ἄκρον πόδας, ἰχθύος οὐρῇ ἀποτείνεται.* Fecit enim credula superstitio, ut Derceto

— turpiter atrum

*Desinat in piscem mulier formosa superne.* WESS.

116. 35. Οἱ λογιώτατοι τῶν ἐγχωρίων] Non tam *dissertissimos*, quam quidem doctissimos et patriae antiquitatis egregie peritos *λογιωτάτων* vocabulo designat: sunt enim *λόγιοι* saepe numero οἱ τὰ κατὰ τὰς πατρίδας διηγοῦμενοι, ut est in Schol. Pindari Nemeon. Od. I. 52.; unde οἱ *λογιώτατοι τῶν ἀρχαίων συγγραφέων* Polyb. VI. 43. sunt eruditissimi, sicuti bene Casaub., et *λογιώτατοι τῶν Ἰουδαίων* Ioseph. XVII. A. I. 6. 2. *λογιώτατοι τῶν ἱερέων* Aegyptiorum Plut. T. I. p. 92. E. et οἱ παρ' Ἑλλησι *λόγιοι* Philon. Iud. V. M. I. p. 603. A. οἱ τῶν

Ἰνδῶν λόγιοι Aelian. XVI. II. A. c. 20. Quae exempla si abunde non videbuntur, addi in cumulum poterunt, quae Iac. Gronov. in Herodoti II. 3. coacervavit. WESS.

116. 42. Ἐν οἷς πολλοῦ πλείθους περιστερῶν etc.] Parenthesin hanc pro sua Diodorus non agnoscit: nam idem iisdem prope verbis mox infra dicitur. Facessat igitur supposititius iste foetus ad obscuros generis sui auctores. RHOD. Assentior viro doctissimo, nec sustuli tamen, ne contra omnes scriptos codices venisse videar. Unus Io. Tzetz. Chiliad. IX. 506., incertum coniectura an libro suo motus, neglectui habuit. WESS.

116. 47. Τιμῶν τοὺς ἰχθύς ὡς θεοὺς] Lucian. Dea Syr. c. 14. ἰχθύας χρῆμα ἰσὸν νομιῶνσι, καὶ οὐκ ὄτε ἰχθύων ψαύουσι quicum Menander consentit in Porphyg. IV. A. A. 15. Athen. VIII. 8. cum Casaub. animadversione, aliique plures, etsi causam superstitionis aliunde derivent, ut Hygin. II. Poët. Astron. 30. WESS.

116. 53. Καὶ τοὺς νομιεῖς λιπόντας] Non placet mihi participium λιπόντας. Puto scripsisse ἀπόντας, quod ab illo proxime abest; longius enim recedit Gemisti ἀποχεχωρηκότας. Afuisse vero pastores ea, quae sequuntur, liquido adfirmant. WESS. Ursinus ἴσως adscripserat ἀπόντας, de cuius ego consensu mihi gratulor. IDEM in Add.

117. 67. Παρωνομασμένον ἀπὸ τῶν περιστερῶν] Hesychnius Σεμίραμις, περιστερά ὕρειος Ἑλληνιστί quod eius Grammatici sicut et Diodori hoc suspectum quodammodo Ios. fuit Scaligero in Chron. Euseb. ΙΟLXXXIII., ingenue fasso, sibi non satis liquere, quid hoc nomen significet. Melius S. Bochartus, qui ex vocibus Arabicis سيرا sera, montanus et كرمه henam, columba, conflatum arbitratur, primoque Semiramim gentis eius sermone Serimamim, a Graecis vero, barbarum vocabulum suo more emollientibus, Semiramim appellari coeptam esse II. Chan. II. p. 740. Alia vir egregius Ger. Io. Vossius I. Idolat. c. 23. WESS.

117. 68. Ὡς θεὰς τιμῶντες] Conf. infra c. 20. WESS.

117. 72. Τῷ γάλλει τὰς παρθένους διαφερούσης] Notabilis haec constructio Rhodom. visa est in Indice, forte propter Zarinam τόλμη πολὺ διαφέρουσαν τῶν ἄλλων γυναικῶν infr. c. 34. similiaque eius generis alia. At illa nihil haec est deterior: nam et Gelon, Dinomenis filius, ἀρετῇ καὶ στρατηγίᾳ πολὺ τοῖς ἄλλοις διενέχας memoratur XI. 67. et Timaeus Agathoclem δειλία γησι διενηροζέναι ἅπαντας ἀνθρώπους, Exc. Vales. p. 261. Neque uni ea placuit Diodoro. Dio Chrysost. enim Orat. XXXI. p. 339. D. οὗτος ἐδόκει ῥώμῃ διενεχεῖν τοὺς καθ' ἑαυτὸν. et quod bellum Polyb. I. 88. πολὺ τι τῶν ἄλλων ὠμότητι καὶ παρρησίᾳ διενηροζότα, id manu exaratus liber, quo usus est Io. Henr. Boecler., πολὺ τι τοῖς ἄλλοις etc. appellat.

Posses etiam Dionys. Halicar. T. II. p. 148. verba, ὃ περὶ τοὺς ἄλλους διήρκεζεν facili medicina refingere ὅπερ τοὺς ἄλλους διήρκεζεν, nisi ipse p. 133., quod nec Sylburg. latuit, ὃ παρὰ τοὺς ἄλλους. id enim praestat, et quid in hoc genere explendum sit, patefacit. WESS.

117. 75. Μενόνης] Haud scio an Ὀρνῆς verum homini nomen fuerit: suadent quidem certe scripti libri et hic et cap. seq. praetereaque barbarica vocabuli forma. WESS. Ὀρνῆς confirmat Anonymus de mulieribus bello claris in Bibliothek der alten Litt. u. Kunst VI. p. 10., qui γαμηθεῖσα δὲ Ὀρνῆρ, ad quae v. Heeren.

117. 79. Δούνα εἰς γάμον ἔννομον] Ultimam vocem concors omnium Codd. consensus flagitat; Semiramidem Onnes sive Menones non concubinam, sed iustae uxoris loco sibi petit. Γάμος ἔννομος nuptiae sunt legitimae, ut ἔννομος πολιτεία Aeschin. princ. Orat. in Timarch., et ἔννομος πατήρ in Suidae Γάιος. WESS.

117. 91. Κατὰ τὴν πρότερον στρατείαν ἀποτετευχῶς ἦν] Tametsi color addi posset scripturae Coislin. et Mutin. ex XII. 33. XIII. 6., acquiesco in vulgata. Illud autem ἀποτετευχῶς ἦν Nostro atque aliis perquam familiare est, uti Πέρσαι ἦσαν ἀπεσταλκότες XII. 28. et c. 19. Charondas νενομοθετηχῶς ἦν. Arrian. IV. Expr. Alex. 30. p. 195. ὅτε οἱ Ἰνδοὶ ἀποπενηγότες εἶεν. et paullo post ἦν ἐξωκοδομηγότες ἦσαν. Dionys. Halicar. I. A. R. p. 66. ἐπεὶ δὲ ἀμφὶ τὰ ἄνωγαῖδεα ἔτη γεγονότες ἦσαν. Sophocles Philoct. 435. γ' οὗτος τεθνηχῶς ἦν. Placuit et Latinis. Plaut. Asinar. III. 3. 30. Quia oculi tibi sunt lacrimantes, eo rogavi. Cato R. R. princ. minimeque male cogitantes sunt, qui eo in studio occupati sunt. WESS.

117. 95. Πεζῶν ἑκατὸν ἑβδομήχοντα etc.] Haec fabularum quam veri similia videntur, tametsi Nini et imperii ab eo conditi initia ad seriora temporum, quam quidem vulgo fit, intervalla demittas. Dionys. Petavius IX. D. Temp. 14. Ctesiae et Diodori quaecumque patrocinium professus quid fieri potuerit, non quid reapse factum sit, docuit. WESS.

117. 98. Τοῖς ἀντόθεν ἀκούουσι] Fortasse qui primum audiunt melius erit. Dionys. Halicarn. T. II. p. 71. καὶ ἰδὺς μὲν ἀντόθεν εὐτυχόντι, σφοδρὸς δὲ, ἐξετασθεῖς. Sic quoque supra I. 37. WESS.

117. 4. Μετὰ ὀγδοήχοντα μυριάδων] Sequitur Ctesiam, qui totidem millia Dario dedit in Excerpt. Photii p. 115.; Herodot. IV. 8., quem Iustin. II. 5. et P. Orosius II. 8. auctorem habent, septingenta millia. WESS.

118. 4. Τοῖς ἀναριθμήτοις πλ.] Conf. infra XI. 3. WESS. Ibid. Τὰς χθές καὶ πρώην] Exulantem operarum culpa copulam, quae fraudi Iac. Gronov. fuit ad Herodot. II. 53., restitui suam in sedem. Χθές μὲν οὖν καὶ πρώην Demosth. Orat. de

Coron. p. 161. et ἐξθές καὶ πρόων de Legat. Fals. p. 256., atque ita infra XIV. 67. WESS.

118. 8. Πέζων μὲν δώδεκα μυριάδας] Vide infra XIV. 67. WESS.

118. 10. Ὡν ἔναι τριήρεις καὶ πεντήρεις] Puto verum esse *τετρήρεις* Cod. Clarom. I., quod et alii libri, sed levi macula obsiti, firmant. *Quadrivemes* egregie respondent magnificentiae Dionysii et studio, quo in rem nauticam ferebatur. Obstat quidem coniecturae videntur verba L. XIV. 41. πρὸς δὲ τοῖτοις, καὶς τε τριήρεις καὶ πενήρεις, οὐδέπω καὶ ἐκείνους τοὺς χρόνους σκάφους πενηρικοῦ ναυπηγημέων. et cap. seq. ἤρξατο (Dionysius) ναυπηγεῖσθαι τε τριήρεις καὶ σκάφη (lege πενηρικόα σκάφη) πρῶτος ταύτην τὴν κατασκευὴν τῶν νεῶν ἐπινοήσας. Sed et ea ad hunc modum instauranda esse, haud ambigo: moveor et particula τε voci *τριήρεις* utrobique parum commode praeposita, et imprimis addita ratione: neque enim Dionysius *triremem* primus invenit, sed diu ante eum natum Corinthiū, ut ibidem addit Diodor. sed haec alias. WESS.

118. 12. Πρὸ τῶν Ἀννιβιαζῶν καιρῶν] Alii dicere solent *Ἀννιβαϊζῶν*, non *Ἀννιβιαζῶν*. STEPH. *Ἀννιβαϊζῶν καιρῶν*] Citra controversiam iustum id verumque est. *Ἀννίβας* enim dat *Ἀννιβαϊζῶν*, non *Ἀννιβιαζῶν*. Vide H. Steph. in Appian. Annib. p. 541. WESS.

118. 15. Τῶν ἐκατὸν μυριάδων] Conf. Eclog. 3. Lib. XXV. et Polyb. II. 24. WESS.

118. 18. Ἐκ τῆς νῦν περὶ τὰς πόλεις etc.] Bella, seditio- nes atque aliae id genus calamitates magnam Diodori aetate vastitatem effecerant, numerusque hominum inmanem in modum per Romanum orbem decreverat: quam iacturam praeter ceteras Graecia passa adeo erat, ut Plutarchi aetate difficulter tria gravis armaturae millia in bellum praestaret. Digna sunt optimi scriptoris verba, quae ex Lib. de Orac. Defect. T. II. p. 415. F. addantur. Τῆς καιρῆς, αἰτ, ἀλιγανθῆσας, ἦν αἱ πρότεροι στάσεις καὶ οἱ πόλεμοι περὶ πᾶσαν ἡμεῶν τε τὴν οἰκουμένην ἀπειργάσαντο, πλεῖστον μέρος ἢ Ἑλλὰς μετέσχηξε, καὶ μόλις ἂν νῦν ὅλη παρῶσχοι τρισχιλίους ὀπλίτας, ὅσους ἢ Μεγαρέων μία ἐξέλεμψεν εἰς Πλαταιάς. Bene ergo Diodor. animadvertit, ex suae aetatis solitudine et hominum infrequentia conclusione iusta colligi non posse, falsa omnia esse, quae de ingenti veteris aevi militum numero prodita sunt: nec ea tamen vincere possunt, de Nini exercitu Ctesiam nihil esse ementitum. WESS.

118. 22. Ἀσκόλων τῶν τόπων] Nihil hinc demuto: quae Codd. aliqui et Gemist., ea scholion redolent. *Ἀσκόλος* saepe quidem morosi ingenii homo est, uti *δέστροπος καὶ δέσκολος δεσπότης* Philon. Iud. de Somn. p. 566. D. et *δέσκολος καὶ δέστροπος ἄνθρωπος* Demosth. Philip. II. p. 47., sed facilis

inde transitus ad loca difficilia et iniqua indicanda. *Ῥείθρον δυσκολίαν* habet XVIII. 35. *δυστραπέλειαν ἐν τοῖς καταγείοις* V. 15. *τοπικὴν δυστραπέλειαν* XVII. 82. WESS.

118. 26. *Ἐκαλεῖτο μὲν Βάκτρα*] Nomen illi venisse videtur a vicino fluvio: nunc *Balchum* appellant, ut bene Iac. Golius in Alferg. p. 175. et Theoph. Sigefr. Bayer. Hist. Regn. Bactrian. c. 6. WESS.

118. 28. *Ὁξυάρτης*] Oxyartes Bactrianus, Roxanes pater, in gestis Darii et Alexandri rebus celeberrimae famae apud Arrian. IV. Exp. Alex. c. 19. et infr. XVIII. 3. hoc nomen ea in gente haud insolens fuisse ostendit. Id demiror, Oxyartem omnibus aliis esse Zoroasterem; cuius rei caussam magnum et memorabile huius apud Graecos nomen fuisse arbitror. Nam Ctesiam Bactrianorum regem Zoroasterem appellasse et Graecis Latinisque probasse, adduci non possum ut censeam. Arnobius quidem I. Adv. Gent. p. 39. significare videtur, Bactriani Zoroasteris in primo historiarum res gestas exposuisse Cnidium scriptorem: nec certa tamen eius fides; cum verba misere sint adfecta et variis modis doctissimorum hominum cura et explicita et tentata. De Zoroastere, quo nomine plures fuere insignes, H. Vales. in Ammian. XXIII. 6. et Io. Alb. Fabric. I. Bibl. Gr. 36. WESS. V. Mai. ad Euseb. p. 41.

118. 33. *Ἀποβεβηκέναι εἰς τὸ πεδῖον*] Is. Vossius verbo *ἀποβεβηκέναι*, quod editos occuparat libros, offensus orae codicis sui adscripserat *εἰσβεβηκέναι*, bene quidem ad Diodori sententiam, nec eo tamen praestantius, quod, distinctione mutata, secutus sum. WESS.

119. 46. *Ἡ δὲ — καιρὸν ἔλαβε*] Prae vulgato hoc placitum est, et propterea receptum. WESS.

119. 47. *Καὶ τοῖς ἄλλοις κεχορηγημένῃ*] Vid. I. 15. WESS.

119. 55. *Καὶ νεανικῇ*] Intellego de stola, qua iuvenes amiciuntur; muliebrem enim Semirani virilem fecit, ut bene Octav. Ferrar. Anal. R. Vest. c. 24.; quamquam fortasse non deerunt, qui magnam validamque malint, ut *πνεῦμα νεανικὸν* Plut. T. II. p. 569. A. et *πληγὰς νεανικὰς* Longi I. Pastor. p. 31.; praesertim quod stola Medica, quae ab illa Semiramidis nomine tantum distat, fuerit talaris, proptereaque et si quid corpori deesset, occultarit, et eos, qui gestarent, quam pulcherrimos et maximos exhibuerit. Xenophon VIII. Cyropaed. p. 163. *Αὐτὴ (στολὴ Μηδικῇ) αὐτῷ συγκρούπτειν ἐδόκει εἴ τις τι ἐν τῷ σώματι ἐνδεὲς ἔχοι, καὶ καλλίστους καὶ μεγίστους ἐπιδεικνύναι τοὺς φοροῦντας.* WESS.

119. 58. *Μετὰ ταῦθ' ὁμοίως Πέρσας*] Persae Medorum habitum et mores sunt aemulati, Cyro exemplum praebente. Vid. Strabon. XI. p. 797. C. et B. Brisson. Regn. Pers. I. 56. WESS.

119. 67. *Κατέλαβε τὸ μέρος τῆς ἀκροπόλεως*] Ob occupatam ea arte arcem Semiramis κρείττων τοῦ Βακτρῖου Ζοροάστρου in Theon. Progyrn. c. 9. pag. 112.; huc enim ea referri oportere arbitror. WESS.

119. 76. *Συνοικεῖν τὴν ἰδίαν θυγατέρα*] Sine dubio συνοικεῖν scripsit; id enim est nuptui collocare, non alterum: infra IV. 10. ὁ βασιλεὺς Κρέων τὴν θυγατέρα Μεγάραν συνώκισεν αὐτῷ. et c. 30. τὴν μὲν ἑαυτοῦ γυναῖκα συνώκισεν Ἰολάω. plura ad eiusdem libri c. 27. Io. autem Tzetzes videtur *Sosannam* praetulisse ex eius feminae historia, quae vulgo Danielis vaticinio adnecti solet: forte tamen utrumque eiusdem originis nomen est. WESS.

119. 83. *Εἰς βασιλικὸν ἤλθε πρόσχημα*] Decus maiestatemque regiam, ut in Strabon. XI. p. 798. A. et δόξα καὶ τοῦτομα καὶ τὸ πρόσχημα τῆς Ἐπαμινώνδου στρατηγίας in Pelopida Plut. p. 293. F. Hinc ἐπὶ προσχήματος τινος αὔσα quae aliquo loco esse incipit Demosth. in Neaer. p. 732. Eleganter vero πρόσχημα de urbe, quae inter ceteras cultu et dignitate excellit. Herodot. V. 28. τῆς Ἰωνίης ἦν πρόσχημα de Mileto, etsi male interpretes. Sophocl. Elect. 683. Aristid. T. I. p. 170. et 293. Plut. T. II. p. 794. B. WESS.

120. 95. *Κατεσκευασμένης ὑπὸ Μήδων*] Vid. infra c. 28. WESS.

120. 97. *Οὔσα φύσει μεγαλεπίβολος*] Sic praestat, quantumvis φύσει μεγαλεπήβολος καὶ τολμηρὰ eadem Semiramis c. 20.; haeret enim illud eodem in luto. *Μεγαλεπήβολος* qui in magnis rebus prospero successu utitur, ut I. 19. abunde declaratum; *μεγαλεπίβολος* qui magna molitur, quo ingenio Semiramis excellit. Vid. V. 48. XIII. 68. et XVIII. 7. cum Steph. nota. WESS.

120. 99. *Πόλιν κτίξεν ἐν τῇ Βαβυλωνίᾳ*] Babylonem Semiramide, secus ac censuit Ctesias, multis annis priorem esse, atque a Belo conditam, plerique veterum agnovere. Ammian. XXIII. 6. *Babylon, cuius moenia bitumine Semiramis struxit; arcem enim antiquissimus rex condidit Belus.* Curtius V. 1. *Semiramis eam (Babylonem) condiderat, vel, ut plerique credidere, Belus, cuius regia ostenditur.* Atque hi sufficient: alios dabit Iac. Perizon. Orig. Babylon. c. 7., merito eorum patrocinium professus. WESS.

120. 5. *Σταδίων τριακοσίων ἐξήκοντα*] Herodot. I. 178. stad. CCCCLXXX, et eum secutus Philostrate. I. Vit. Apoll. 25., ubi doctissimus Olear. discordes veterum opiniones utcunque in ordinem redigere conatur. Adde Barn. Brisson. I. R. Pers. 82. et Io. Tzetz. Chiliad. IX. 570. WESS.

120. 11. *Τριακοσίων ἐξήκοντα καὶ πέντε*] Genitivum ποδῶν legit Latinus interpres ante τριακοσίων, aut certe putavit

legendum; quae tamen sequuntur, videntur *σταδίων* poscere, ac tunc fuerit revera *ἕως ἄπιστον τοῖς ἀκούουσιν*, sicuti modo dixit. Utut sit, genitivum hic desiderari nemo negaverit. STEPH. Hic post *ἀρέγραψαν* interficiendae videntur quaedam voces, ut fuerint *γενέσθαι τὸν περίβολον τριακός*. Quae stadia si in milliaria Teutonica per triginta et duo redegeris, XI mill. cum XIII stadiis prodibunt. Herodotus tamen I. 178. CCCCLXXX stadiis ambitum includit: quae Plinius VI. 26. in LX M. P. per CXXV, quot passus stadio continentur, resolvit; quo pacto XV milliaria Germanica efficiuntur. Strabo XVI. p. 1072. moenia Babylonis CCLXXXV stadia complexa fuisse tradit: quae XII mill. Teutonica stadiumque unum constituunt. RHOD. *Τριακοσίων — καὶ πέντε σταδίων*] Sic oportet; vocem quam addidi praeter scriptos Codd. agnoscit Io. Tzetzes, haec Diodori Chiliad. IX. 572. exscribens. Cave vero Stephan. sequaris, ac de murorum altitudine accipias. Ambitum urbis stadiorum CCLXXV, quot dies annum absolvunt, Clitarchus, de quo rerum Alexandri scriptore Io. Gerh. Voss. I. H. Gr. 10., fuisse tradiderat; nam quod Iac. Capellus vocem *πέντε* inducit, id equidem factum nollem: vetant scripti libri, Tzetzes, et ea, quae Diodorus addit. WESS. Admovit et huic loco manus Iul. Caes. Bulengerus in Eclog. ad Arnobium p. 239., quem si adieris, negabis, credo, Diodori librum, cum ea commentaretur, ab illo fuisse inspectum. IDEM in Add.

120. 14. *Ὅπτις δὲ πλίνθους — ἐνδυσσάμενη*] Et huic locum dedi: *murus enim laterculo coctili erat instructus*, ut Curtii verbis V. 1. dicam; non item *τῇ ἐνδυσσάμενη*, quod ex recepta voce scribentium errore natum suspicor: prorsus uti in Ioseph. I. B. I. 26. 2., *καὶ ταῖς κατὰ τοῦ πατρὸς μέμψεσιν ἐνδυσσάμενος ἀμφοτέρους*. et c. 29. 2. *καὶ τὸν ἀδελφὸν — ἐνδυσσάμενη μαρμάροις*. quibus locis meliores Mss. *ἐνδυσσάμενοι*, et rectius, si quid ego in his video; solent enim id verbi haud raro usurpare, cum quomocunque in societatem alium illigant et quasi implicent. Ioseph. XX. A. I. 4. 1. *καὶ ὄρκοις τὴν πρὸς ἀλλήλους ἐνδυσσάμενοι πίστιν*. Polyb. X. 31. *τοῖς Ἰβηρῶν εἰς τὴν αὐτῶν γαλιαν καὶ πίστιν ἐπέδησαντο*. Unde *ταῖς ἀρχαῖαις γήμιας ἀκμὴν ἐνδεδεμένους*, qui antiquitas traditis opinionibus quasi constrictus tenetur in eiusdem Polyb. XII. 1. sed hoc obiter. WESS.

120. 17. *Πηζῶν περτίχοντα*] Ingens inter hos et Ctesiam discrimen Io. Tzetz. Chiliad. IX. 590., tolli posse censuit, si per bella et terrae tremorem de muro multum detritum concedas; quod quidem commentum haud placet. Aliter instituit Cl. Salmasius in Solin. p. 871. Puto eos, quibus *πήγεις περτίχοντα* arri- sere, Ctesiae *ὄργιαῖς*, ut veri fidem excedentibus, fuisse offensos, et propterea cubitos praecoptasse: quod et Gottfr. Olear. in Philostr. I. V. Apol. 25. in mentem venit. WESS.



120. 23. Ἐλεσι περιεχομένης] Conf. Herodot. I. 183. et Arrian. VII. Exp. Alex. 20. WESS.

121. 26. Τὴν ὀχρρότητα] Articulus redundat. RHOD.

121. 27. Ὀδοῦς — δίπλεθρος] *Aedificia non sunt admota muris; sed fere spatium unius iugeris absunt* inquit V. I. Curtius, cum Diodoro hac quidem in re parum consentaneus. WESS.

121. 34. Γέφυραν — κατασκευάσεν] *Pons lapideus, flumini inpositus, iungit urbem: hic quoque inter mirabilia Orientis opera numeratus est; quippe Euphrates altum linum vehit, quo penitus ad fundamenta iacienda egesto, vix sufficiens operi firmum reperiunt solum*, idem Curtius, cui iunge Herodotum I. 186. pontis huius structuram Nitocri attribuentem. Μοx καθεύσασα τοὺς ζύονας significantissimum est, nec quicquam concedit eorum librorum auctoritati, quibus καθεύσα placuit. WESS. Iul. Caes. Bulengerus Eclog. p. 248. κατέουσα τοὺς ζύονας habet, et mox τόρμους; neutro, ne quid inclementius dicam, indigemus. IDEM in Add.

121. 37. Τόρμους σιδιροῖς δακλύβαινε] Hesychio Τόρμος, ἡ πλήμη τοῦ τροχοῦ, εἰς ἣν ὁ ἄξιον ἐμβάλλεται. quae modiolus significatio ab hoc loco aliena est. Apollodorus Poliorcet. p. 34. τόρμους καὶ περόνας clavos et fibulas, in trabem firmissime destitutas, ne scalae loco moveantur, appellat: Hero vero Belopoeic. p. 126. τόρμους eminentias parastatarum catapultae, quae Vitruvio X. Architect. 15. cardines, ut ad Heron. ostendit Bernardin. Baldus. Quae quidem exempla satis adfirmant, architectis vocabuli usum fuisse varium, fierique potuisse, ut ad retinaculā ferrea, quibus saxa colligantur, transiret. Si cui tamen ζωμοὶ Clar. 2. probentur, tum a contis, quos Euripid. Helea. 1617. ζωμοὺς ναυτιλοῦς, aut a truncis, ξύλον ζωμοῖς Appian. I. B. Civ. p. 699. et Strabon. XV. p. 1065. C., dicendum erit, repetitum hunc esse significatum; quod mihi tamen difficulter persuadeo: mallem quidem certe, si τόρμοι sint reiectanei, cum Reg. et Vatic. τόρμοις ob Suidae haec verba: Τόρμος, ξύλον στρογγύλον. ἢ τὸ τρήμα, καὶ τὸ ἐνέμενον εἰς αὐτό. WESS.

121. 45. Καὶ κυπαρισσίναις δοξοῖς] Cypressorum lactissimus in hac vicinia proventus, ut ex Strabon. XVI. p. 1076. et Arrian. VII. Exp. Alex. c. 19. ostendit S. Bochart. 1. Phaleg. 4. Μοx καὶ ζλάδοις induxi, obsecutus Codd. vetustis, et arboris naturae: palma enim, quae in Babylonia uberrima, Strab. XVI. p. 1073. D., recto caudice in altum se submittit, foliis comarum in modum superbiens. Theophrastus II. H. Plant. 8. ἴσται δὲ ὁ γοῖνιξ. ὡς μὲν ἀπλοῦς ἐπιεῖν, μοισοτελέχης καὶ μοισογενής, cui gemina praeter alios Prosp. Alp. I. Plant. Aegypt. c. 7. WESS.

121. 49. Κορηπίδα πολυτελή] Conf. infr. XIV. 7. WESS.

121. 60. Πρωῶτον περίβολον τῆς ἀύλης] Vocem postremam cum articulo abiicito. RHOD.

121. 63. *Διεύπωτο Θηρία*] Pro *διεύπωτο* scribendum *διετεύπωτο Θηρία*. RHOD. *Διετεύπωτο*] Hoc malui ob scriptos Codd. Solent alioqui, spretis Grammaticae regulis, multa veteres hoc in genere sibi indulgere, ut Eustath. in Homer. p. 759. et Is. Casaub. ad Athen. II. 15. docuerunt. Tale est *παρασκεύαστο* Heliodori II. p. 124. *συνέλεκτο* Pausaniae IX. 37. p. 785. *κατεχώννυτο* Ioseph. IV. B. I. 1. 4. *κατακεκρέμαστο* infr. XVIII. 26. *συγκεχώρητο* Libanii T. II. p. 125. E. *πεπλήρωτο* Ioseph. IV. B. I. 1. 2. et *κεκάρωτο* I. 30. 5. *μεμέριστο* Arriani Mithrid. p. 403. *πέπρακτο* III. Bell. Civ. p. 858. *γεγέννητο* V. B. C. p. 1120. et 1137. *κεκοίμητο* Arrian. V. Exp. A. 12. et *κεκόσμητο* c. 20. Sed desino; longum enim foret omnia persequi. Vid. Iungerman. in Longi Pastor. p. 214. Duker. ad Thuoydid. p. 474. WESS.

122. 71. *Σταδίων τριακοσίων*] Id est CCC stadiorum. Qui quaeso fieri potest, ut castellum, cuius extremus murus sexaginta tantum stadia in circuitu habens, CCC stadia suo ambitu complectatur? Necessario igitur mutandum est *τριακοσίων* in *τριάζοντα*. RHOD. Lege *τριάζοντα*, ut ex praecedentibus patet: non enim interior circuitus potuit esse maior exterioribus. PALM. *Σταδίων είκοσι*] Etsi viris doctissimis patrocínio veniat sua cum versione Poggius, satius duxi scriptos libros sequi: fieri enim potest, ut Poggius, coniectura ductus, XXX stadia expresserit. *Είκοσι στάδια* quin optime convenient, dubium nullum est. WESS.

122. 79. *Ἄφ' ἵππων πάρδαλιν ἀκοντίζουσα*] In hac scriptura cupide acquiesco. Hippocrat. de Aër. Aq. et Loc. p. 291. *τουτέων αἱ γυναῖκες ἰπάζονται τε καὶ τοξέβουσι, καὶ ἀκοντίζουσιν ἀπὸ τῶν ἵππων* et Diodor. ipse V. 33. *ἐπειδὴν ἀπὸ τῶν ἵππων ἀγωνισάμενοι νικήσωσι*. atque hinc *ἀφιπποτοξόται* sagittarii, qui equis vecti pugnant XIX. 30., quamquam et ibi eadem quae hoc loco scribendi varietas, et *Ἄφ' ἵππων μάχη* Herodot. I. 79. quo loco vir clarissimus Iac. Gronovius nimium mihi schedis Medic. tribuisse semper visus est. De venatrice et leones pardalesque necante Semiramide Aelian. XII. V. H. 39. WESS.

122. 88. *Ὅν καλοῦσι Βαβυλώνιοι Βῆλον*] Sic cap. seq. *ἱερὸν Διὸς, ὃν καλοῦσι Βαβυλώνιοι Βῆλον*. Deflexum est ex Hebraeorum *בבל*, quo titulo pleraeque per orientem gentes, non enim unis id proprium fuit Babylonis, Deum appellarunt, ut pluribus declaravit Celeb. Iacob. Perizon. Orig. Babylon. c. 5. et 7. WESS.

122. 93. *Δέξαμενὴν τετραγώνον*] Huc spectant, quae Philostr. I. Vit. Apollon. 25.; sed qui *γυναῖκα Μήδειαν* auctorem perhibet; haud scio an aliam ac Semiramidem intelligens: pugnat quidem pro Semiramide Gottfr. Olearius, sed eam e Medis fuisse haud probans. Forsan ea est, de qua Herodot. I. 185., aut certe de qua Berosus in Ioseph. X. A. I. 11. 1. WESS.

122. 4. Χωρίς τῆς καμψείσης ψαλίδος] *Forficem incurvatam* interpretis non bene intelligo. Ψαλὶς *fornix* seu *arcuatum opus* est. Strabo XVI. p. 1073. Α. ἐξ ὀπίτης πλίνθου — καὶ αἱ ψαλίδες καὶ τὰ καμαρώματα. et XVII. p. 1167. C. ὥστε καταβαίνειν εἰς αὐτὴν κατὰ καμψείσων ψαλίδων διὰ μορολίθων ἐπερβαλλόντων τῷ μεγέθει. sic enim *distracta voce κατακαμψείσων locus iste legendus et vertendus: ut ad fontem descendant ex arcuato opere per cochleas ex uno lapide ingentis molis sectas.* Ioseph. XV. A. I. 9. 6. ψαλίδες δὲ ἐνεπεποιήγτο συνεχεῖς, καταγωγαὶ τοῖς ναυτίλοις. Philo Belopoeic. p. 80. τινὰ δὲ καθάπερ ἐν Ρόδῳ εἰς ψαλίδας συγκαλιόμενα etc. WESS.

122. 5. Ἐν ἡμέραις δὲ ἐπτά] Non potui contra consensum plerorumque omnium Codd., exiguum hunc dierum numerum probantium; qui quidem si de cuniculo (διώρυγι) solo, ut videtur, accipiatur, nihil habebit quod fidem exsuperet; alter dierum CCLX, ubi feminae studium consideres et operarum multitudinem, nimius est. WESS.

123. 8. Ἀνάσθαι τὴν Σεμίραμιν ἐκ τῶν πέραν etc.] Idem, puto, voluit Philostrat. I. Vit. Apoll. 25., qui fluvium in paludes derivatum cum descripsisset, ξηρόν τε ἴδην τὸν ποταμὸν, inquit, ὠρυττεν, σήραγμα ἐργαζομένη κοίτην, ἴν' εἰς τὰ βασίλεια, τὰ παρὰ ταῖς ὄχθαις, ὥσπερ ἐκ γῆς ἀναγαίνοιτο, *tum iam exsiccato fluminis alveo terram egessit cavernamque fecit, qua in arces, utraque in ripa positas, tanquam ex terra emergeret et se conspiciendam praeberet.* Cl. Olearius aliter instituit, sed minus, ut arbitrator, dextre. WESS.

123. 15. Τοῦ κατασκευάσματος — καταπεπτωκότος] Herodoti aetate adhuc durabat, ut significat II. 181.; Persae vero destruxerunt, nec potuit Alexander, etsi vellet, instaurare. Vide Arrian. VII. Ex. A. 17. et Io. Freinsh. in Curtii V. 1. 24. WESS.

123. 18. Καὶ τοὺς Χαλδαίους etc.] Conf. infra c. 29. WESS.

123. 21. Ἐξ ἀσφάλτου καὶ πλίνθου] Non vana suspicio est, Babyloniam turrin, cuius structae occasione Noachidae quaquaversum per orbis terrae plagas spargi sunt coepti, bitumine et coctili latere altissime eductam, ab hoc templo non nisi nomine discrepasse: locus, situs, altitudo et cetera bene congruunt; Belo consecrata quod est, id factum deinceps, cum Babylonii urbis suae conditorem Deorum in numerum referrent; multa hanc in rem disputavit S. Bochart. I. Phal. 9. et 13.; quem consule. WESS.

123. 25. Καὶ διαβεβηχὸς] Vide I. 98. WESS.

123. 26. Ταλάντων Βαβυλωνίων] Talentum Babylonium aequabat LXX minas Euboicas sive Atticas, ut ex Herodoto III. 126. et Polluc. IX. Onomast. 86. cognovimus; qua quidem in re ab utroque dissentit Aelian. I. V. H. 22., Babylonico minas LXXXII tribuens; sed eo loco parum sanus, sicuti docuit Wilebord. Snellius de Re Numar. p. 41. WESS.

123. 29. *Λέοντες δύο, καὶ πλησίον ὄφεις*] Inter animalia Deum matri serpentes et leones prae ceteris placuere; quare  
*Et iuncti currum dominae subiere leones*  
 in ara marmorea apud Boissard. T. III. Antiq. p. 47. Caussam eius rei disquirat Imp. Iulianus Orat. V. p. 167. et Servius ad Aeneid. III. 113. WESS.

123. 35. *Τράπεζα χρυσεῆ*] Auream hanc mensam, in haud paucis alioqui a Diodoro dissentiens, non praeteriit Herodot. II. 181. WESS.

123. 43. *Οἱ τῶν Περσῶν βασιλεῖς*] Praeter ceteros Darius et Xerxes. Vid. Herodot. II. 183. Strabon. XVI. p. 1073. Arrian. VII. Exr. Al. 17. WESS.

123. 46. *Καὶ γὰρ αὐτῆς τῆς Βαβυλῶνος etc.*] Bene Strabo XVI. p. 1073. C. postquam de Alexandri in urbem et Beli templum studio exsecutus erat, *τῶν δ' ὕστερον οὐδεὶς, inquit, ἐφρόντισε. ἀλλὰ καὶ τὰ λοιπὰ ὀλιγορήθη, καὶ κατήρειπαν τῆς πόλεως τὰ μὲν οἱ Πέρσαι, τὰ δ' ὁ χρόνος, καὶ ἡ τῶν Μακεδόνων ὀλιγορήα περὶ τοιαῦτα. καὶ μάλιστα ἐπειδὴ τὴν Σιλεύκειαν — ἐτείχεσε Σίλενος ὁ Νικάτωρ.* complectitur enim egregie causas urbis, maximae olim et florentissimae, in ruinas abeuntis: adde summam Himeri, Phraatis Parthorum regis satrapae, acerbiter, qua *τῆς Βαβυλῶνος τὴν ἀγορὰν καὶ τινὰ τῶν ἱερῶν ἐνέπηρσε, καὶ τὸ κράτιστον τῆς πόλεως διέρθειρε, forum eius urbis et fana quaedam igni corrupit, et pulcherrima quaeque eius loca evertit,* ut Noster ait in Excerpt. Vales. p. 377. Quibus omnibus factum paullatim est, ut de Babylone, quod eleganter olim de Arcadiae Megalopoli comicus, adfirmare Strabo potuerit,

*Ἐρημία μεγάλη ἐστὶν ἡ Μεγάλη πόλις.*

Nugae ergo nugacissimae sunt, quae in Philostrat. I. Vit. Apollon. 27. de Babylone, Apollonii Tyanensis aetate, culta satis et florente: sed haec uberius et magna cum cura declaravit Camp. Vitranga in Esai. XIII. p. 420. WESS.

124. 51. *Σύρον βασιλείως*] Plinius lib. XIX. 4. *Κύρον* legit. Rhod. *Cyrus* ille Plinii admodum mihi suspectus est; nec video, qui regi, Babyloniorum domitori et tot rebus distracto, horti pensiles convenient. Melius Curtius V. 1. 35. *Syriae regem, Babylone regnantem, hoc opus esse molitum, memoriae proditum est, ancre coniugis victum: quae desiderio nemorum silvarumque in campestribus locis, virum compulit amoenitatem naturae genere huius operis imitari.* Qui quidem Syriae, sive Assyriae, vid. supr. c. 2., rex non alius est ac Nabuchodonosor, quemadmodum ex Berosi apud Ioseph. X. A. I. 11. 1. et I. c. Apion. 19. fragmento constat. WESS.

*Ibid. Γυναικὸς παλλακῆς*] Loccenii errorem, *Pallacam* vero nomine feminam eam fuisse censentis, ex merito castigavit

Io. Freinshem. ad Curtii V. 1. 35. *Γυνή* additur per appositionem, ut saepe. Demosth. Leg. Falsat. p. 260. οὐδὲ ἐλεῖν ἡμῶς οὔτε τὴν μητέρα δεῖν, τὴν Τιμάροχον, γραῦν γυναικα, οὔτε παιδία. Euripid. Troas. 490.

*Ιούλη γυνή γραῦς εἰς δόμους ἀφίξομαι.*

Atque ita ἄνθρωπος in his Longi IV. Pastor. p. 178. καὶ ἀνθρώπους γεωργὸς συνήλότησε πληγαῖς. et in Latinis *rete iaculum, ancile scutum, ventus turbo*, et plura de hoc genere, a Frid. Taubman. conducta in Plaut. Asin. I. 1. p. 82. Iam quod Gemistus non Persicam, sed e Medis foeminam fuisse ait, id ego ex Berosi apud Iosephum verbis depromptum arbitror. WESS.

124. 56. *Εἰς τέτταρα πλέθρα*] Nihil dissentit Strabo XVI. p. 1073. WESS.

124. 60. *Ἐπιζωοῦντο σύριγγες*] Praeter alia *σύριγγες* sunt cavernae. Ammian. XVII. 7. *Aut in cavernis minutis terrarum, quas Graece syringas appellamus.* Unde *σύριγγες Αἰγύπτιαι καὶ Κρητικοὶ λαβύρινθοι* in Aelian. VI. H. A. 43., pro quibus prave *σίριγγες* L. XVI. 15.; atque ea vocis significatione Rhodom. adductum puto, ut *fornices* verteret; quam tamen in Indice deseruit, *σύριγγες*, inquit, *fornices reddidi: forte columnas, fistularum instar rotundas, quae fornices sustinerent, intelligit;* incertum an Strabonis his motus, *συνέχεται ψαλιδώμασι καμαρωτοῖς, ἐπὶ πεττῶν ἰδριμένοις κρβοειδῶν. οἱ δὲ πεττοὶ κοῖλοι, πλήρεις γῆς.* Videntur enim eius κοῖλοι πεττοὶ non alii ac *σύριγγες*: utriusque certe sustinent pensilem hortum. Obstant tamen quae sequuntur plura, et in primis αἱ *σύριγγες τὰ γῶτα δεχόμεναι*, quae πολλὰς καὶ παντοδαπὰς εἶχον διαίτας βασιλικὰς. haec enim *fornices* requirunt, et columnis nullo modo conveniunt. WESS.

124. 64. *Τὴν ἀνωτάτην*] *Τὴν ἀνωτάτω* Gemistus, non male, ut in Strab. XVI. p. 1073. A. WESS.

124. 74. *Ἐπεδέχετο μολιβᾶς στέγας*] Ut *μόλιβος* et *μόλιβος* pro *μόλιβδος* et *μόλιβδος* usurpatur, *Hiad. XI. 236.*, ita etiam *μολίβεος μολιβοῦς* pro *μολίβειος μολιβδοῦς* invenitur; sed in carmine, ubi necessitas metri sic cogit, ut citato Homeri loco, usitatus, quam in oratione pedestri. Videtur autem deesse hic aut subintelligi praepositio *κατά*. Hic descriptionem horticum Semiramidis, ex Gallico in Latinum obiter conversam, ut quidem H. Stephanus icona illorum in postrema Herodoti sui editione illustrandam curavit, apponemus interim, dum lector typum ipsum contueatur: *In uno latere civitatis erant horti suspensi, fere coniuncti fluvio Euphrati; qui numerabantur inter septem miracula mundi. Situs eorum erat figurae quadratae, quadringentorum pedum, per quemlibet angulum, quibus corresponderent secundus et tertius. Intus erant quatuor atria vel arcae, quadringentorum pedum longitudinis, et centum latitudinis, ita ut una supra aliam emineret. Prima elevabatur a terra duodecim*

*cubitos cum dimidio. Secunda, viginti cubitos. Tertia, triginta septem cubitos cum dimidio. Quarta, proxima Euphrati, quinquaginta cubitos. Illic extrahebatur aqua ab Euphrate certis quibusdam machinis, ad irrigandos hortos. Tota haec structura sustinebatur fornicibus latericiis, sibi cohaerentibus lato interstitio secundum proportionem arearum; quorum quilibet habebat duodecim pedes diametri: distabat itaque unus ab altero fornix pedes viginti duos; et hoc quidem tam pro firmatione intermedia, quam pro commoditate mansiuncularum quarundam, ibi exstructarum. Superiora harum tabernarum, primo erant instrata magnis lapidibus, longitudinis sedecim pedum, et quatuor latitudinis. Deinde totum illud erat coopertum multis arundinibus. Tertio, omnes illae arundines erant obiectae magnis laminis plumbeis, quae defenderent fornices ab humiditate terrae. Tandem erat super omnia haec, optima terra, excolta exquisitis floribus et plantis etc. ΡΗΘΘ. Ex superioribus si repetas ad explendam sententiam τὸ ὁρόγραμμα, sine ullo defectu decurret oratio, neque opus erit, ut κατὰ addas. De voce μόλιβος et μόλυβος Rhodom. accedit Eustathius: Moeris vero, Μόλυβδος, Ἀττικῶς μόλυβος, Ἑλληνικῶς. et bene profecto; nam quod ex coniectura ediderunt, Μόλυβος, Ἀττικῶς μόλυβδος, Ἑλληνικῶς, id quidem probari non poterit. Liquido Eustath. in Homer. p. 1340. ἐπεὶ καὶ Ἴωνες ὁμοίως Ἀττικοῖς μόλυβδον λέγουσιν. Hinc venit μολυβίς de lamina plumbea Basilii M. T. H. p. 145. E., χρῶα μολίβῳ προσσεικνῖα Aelian. XV. H. A. 28., et, quae magis huic loco opportuna, βάρος μολιβῶν et λεία μολιβῆ Heronis Spirital. p. 192. et Automat. p. 245. WESS.*

124. 79. Κατὰ τε τὸ μέγεθος] Distinctius, modo ex vero, Curtius V. 1. 34. Adeoque validas arbores sustinent, ut stipites earum octo cubitorum spatium crassitudine aequent, in L. pedum altitudinem emineant, et frugiferae sint, ut si terra sua alerentur. WESS.

125. 83. Πρὸς τὰς ἐπαντήσεις ὄργανα] Hoc placuit ob scriptorum Codd. auctoritatem. Vid. supra I. 33. Intelligit autem cochleas, quibus aquam e fluvio in paradisu derivabant, ut apud Strabonem XVII. p. 1073. WESS.

125. 88. Παρὰ τὸν Τύρον] Et Τύρον et Τύροητα flumen appellari nemo nescit. Herodoto I. 189. Τύροις, at VI. 20. Τύροης. quae varietas et in aliis monente Eustath. in Dionys. Perieg. vers. 976. Sequor prius. WESS.

125. 95. Δισχιλίους καὶ πενταχοσίους] Strabo XI. p. 792. B. διέχουσι δὲ ἀλλήλων αἱ ἀγῆαι τοῦ τε Εὐφράτου καὶ τοῦ Τύροδος περὶ δισχιλίους καὶ πενταχοσίους σταδίους. quae his cum sint simillima, cupide id, quod Coislin. et Mut. schedae praeferebant, arripui. Ne quid tamen dissimulem, Eustath. stadiorum αἰῶν πατροκίνιον profitetur ad Dionys. Perieg. vers. 976. τὰς δὲ

δύο τούτων ποταμῶν, inquiring, πηγὰς δέχων ἀλλήλων φασὶ  
περὶ μὲν στάδια. quae cum ex Strabone sint sumpta, ut ordo et  
verba pro se ipsa loquuntur, indidem instauranda puto. Atque  
haec si viri docti considerassent, nullam profecto litem duobus  
millibus et quingentis stadiis, quae Curtius V. 1. 13. Euphratem  
et Tigrim disiungere memorat, movissent. WESS.

125. 96. *Ἀπὸ Μηδίας καὶ Παρατακηνῆς*] Est in his  
manifestum peccatum, cuius culpam viri doctissimi Christoph. Cella-  
rius et Io. Clericus in scriptorem Diodorum, Franc. vero Camusa-  
tus in quadam ad I. Wasse epistola in librariorum conferunt: qui  
quidem Abbas cum in Coisl. reperisset παρ' Ἐτακίνης scribi  
oportere censuit διὰ Μηδίας παρὰ Σιτακηνῆς, quod illa regio,  
ad orientem Babylonis posita, ferme ea loca attingat, e quibus  
iuncti fluere incipiunt Tigris et Euphrates; estque sane non lon-  
gum iter Babylone in Sittacenen, neque remota ea provincia a Ti-  
gride fluvio, ut infr. XVII. 65. et a Strabone XV. p. 1064. B.  
docemur. Nec prosunt tamen Diodoro viri eius conatus; imo  
vero errorem adaugent, Sittacenen Mediae paene connectentes:  
mitto sine causa mutatam scripturam, et Paraetacenen, paullo  
ante Mediae coniunctam, et Euphrati Tigridique non obscure ad-  
positam, hoc se loco facile tueri: nec iuvat suppetias qui ferre  
iubetur, Curtius V. 1. 14. *idem*, Euphrates et Tigris, *quum Me-  
diae et Gordianorum terras secare coeperunt, paulatim in ar-  
tius coeunt*: haeret enim eodem in luto, a Diodoro in fraudem  
inductus. Mediam et Paraetacenen Euphrates et Tigris nunquam  
radunt, nedum sectis utriusque terris in Mesopotamiam influunt.  
Bene ergo Christoph. Cellar. ad Curtii ea verba et Io. Cleric. Art.  
Critic. P. III. sect. 3. c. 2., Diodori hunc errorem notarunt.  
WESS.

125. 1. *Εἰς τὴν ἐρυθρὰν ἕξερέγονται θάλασσαν*] Aliter  
Strabo, vel, ut quidam volunt, Strato XI. p. 799. qui Euphratem  
cum Tigri, infra Babylonem ad aras Herculis eum ingresso, in  
mare Persicum exonerari, docet. *Περσικὴν* ergo scribendum erat.  
Idem tamen Herodotus etiam affirmat I. 189.; quod nescio an  
non per catachresin synecdochicam excusari queat, ut ἡ ἐρυθρὰ  
θάλασσα etiam τὴν Περσικὴν comprehendat. Etsi enim inter  
utrumque mare Arabia felix ducentorum circiter milliarium spacio  
interiacet; veteres tamen totum illud pelagus, quod Persiam, Ara-  
biam et Africam alluit, rubrum mare, non quidem a colore, qui  
a caeteris maribus nihil differt, sed quacunque alia de causa ap-  
pellasse, coniectamus. RHOD. Optime corrigendi inpetum con-  
pescuit Rhodom.; Persicum enim sinum saepe ἐρυθρὰν θάλασσαν  
optimus quisque appellavit. Strabo XI. p. 801. B. *εἰς δὲ τὴν  
ἐρυθρὰν ὅ, τε Ἐρυθράτης καὶ ὁ Τίγρις.* et infra XIX. 100.  
Diodorus. Plures conduxerunt in unum Gisb. Cuper., qui et Rho-  
dom. taxavit, IV. Obs. 18. [et II. Reland. Diss. II. 6. WESS.

125. 2. Ἐχοντες καὶ διαφορευόμενοι] Prioris participii cum sua copula nullus hic usus apparet. RHOD.

125. 5. Πρὸς τὴν τῆς Βαβυλωνίας] Prae vulgato hoc sese mihi probavit; spectant enim haec urbem, non regionem, illi adiacentem. Simile vitium paullo post elui. Iustini I. 2. haec *Babyloniam condidit*, non ignoro; nec moveor tamen. WESS.

125. 8. Πλήθει ζευγῶν ὀριζῶν] Etsi asinus *non minimo pondere vehicula trahat* in Columellae VII. R. R. 1., aptiores tamen curru et oneribus devehendis censebantur et crebrius iungebantur muli, ut vel exemplo eius, cui aetate et viribus defecto publice Athenienses alimenta decreverunt apud Plut. de Solert. Anim. T. II. p. 970. A., constat. Quare dubium mihi non est, quin iustum id sit, quod restitui. Ὀριζὰ ζεύγη de mulorum paribus Plato Lysid. p. 208. B. Isaeus de Philoctemon. Hered. p. 59. Aeschin. Legat. fals. p. 42., quae Xenoph. VII. Exp. Cyr. p. 320. ἡμιονζὰ ζεύγη, illis, uti hic et XVII. 69., βοειζὰ ζεύγη addens, vocat, invitis Grammaticis. Vid. Thom. Magist. Ὀρειζὸν ζεύγος. WESS.

126. 14. Τοῖς ἐπτά — ἔργοις] Conf. supra I. 63. WESS.

126. 17. Πηθός — γεννωμένης ἀσφάλτου] Fontem, ex quo Babylonii bituminis ingentem vim hauriebant, Eratosthenes et Posidonius in Strabon. XVI. p. 1078. B. C., Vitruvius, cui *Limne Asphaltitis*, VIII. Architect. 3. et Theodoret. Quaest. 58. in Genes. describunt. WESS.

126. 26. Προσβάλλει γὰρ ἀτμὸν] De odore et sapore, qui rebus inest, προσβάλλειν et προσβάλλειν multo tritissimum esse, loca, ab Is. Casaub. in Strab. XV. p. 1050. congesta, liquido firmant, et infra II. 19. Scripsi autem βαρὸν ob veteres Codd., tamen etsi vulgatum non plane improbem; habet Dioscorides I. 99. ἀσφαλτον εὐτονον τῇ ὀσμῇ καὶ βαρεῖαν. WESS.

126. 27. Ζῶων ἅπαν ἀποθνήσκει] Xiphilin. in Traiano p. 255. καὶ τὸ στόμιον ἐθεάσατο, ἐξ οὗ πνεῦμα δειρὸν ἀναδίδονται, ὥστε πᾶν μὲν ἐπίγειον ζῶον, πᾶν δὲ πετεινὸν, ἀποθνήσκειν, εἰ καὶ ἐφ' ὀλοσοιοῦν ὀσφραίνετο τι αὐτοῦ. Ostium quoque id lustravit, unde tam gravis halitus surgit, ut omnia terrestria et volatilia animantia, quae vel brevissimo tempore olfecerint, enecet. Adde Tzetz. ad Lycophron. 704., sed qui, secus ac Dio et Xiphilin., in Adiabene prope Ninum fuisse perhibet. WESS.

126. 31. Ἐθθὺς δὲ διοιδεῖ] Vera si est Phrynichi p. 24. observatio, pravum vulgatum est: ἐθθὺ μὲν γὰρ τόπου ἐστίν, ἐθθὺς δὲ ζῴων. Bene ergo IV. 36. Nessus ἐθθὺς ἀποθνήσκειον. at prave IV. 41. XI. 73. XVIII. 20. et in Luciani Hermot. c. 74. et Amorib. c. 8. Dubium quidem certe non est, quin perperam in Aelian. I. H. A. 2. legatur ἐθθὺς τοῦ κέρτου τοὺς ἐραστὰς ἄγειν, pro ἐθθὺ, ut II. 44. V. 7. VII. 7. eiusdem Aelian. et ἐθθὺ Ἐγέσσου Platon. Theag. p. 129. Conf. Kuhn. in Pausan. VIII. 12. et Hemsterh. ad Lucian. Dial. Mort. XXVII. 1. WESS.



126. 37. *Ἀντέχεται μὲν τῆς ἐξθράσεως*] Summo studio exire conmittitur. Lysias Orat. XXXII. 2. ὥστε ἄξιον τὸν μὲν πόλεμον καταθέσθαι, — τῆς σποτηρίας ἀντέχεσθαι. Plato Alcib. II. p. 146. δεῖ ταύτης τῆς ἐπιστήμης ἀντέχεσθαι. quo modo saepissime Diodorus inf. c. 24. XI. 71. XIV. 4. 97. etc. Fontem lacumque non dissimilis ingenii habet ex Ctesia Histor. Mirab. c. 161. et 165. Antigonus Caryst. WESS.

126. 46. *Τὸ καλούμενον Βαγίστανον*] Optime Codd. Stephani Byzant. scripti: *Βαγίστανα, πόλις τῆς Μηδίας καὶ ὄρος Βαγίστανον. τὸ ἐθνικὸν Βαγίστανος.* absque illis enim fuisset, Mediae hic mons et verum eius nomen in obscuro mansisset. *Βαγιστάνη*, sic enim scribendum arbitror infr. XVII. 110., regio urbi montique adiacens, firmat postrema Stephani, quae Abr. Berkelio suspecta dubiaque erant. WESS.

127. 52. *Ἀποτομάδας ἔχει πέτρας*] Sic IV. 80. *πέτρας οὔσης ἀποτομάδος εἰς ὑψος ἑξαύσιον.* et III. 20. *ἐπεχούσης πέτρας ὑψηλῆς καὶ πανταχόθεν ἀποτόμιον.* Paulo post παραστήσασα edito verius meliusque censui. Poggium vero, qui διοροφόρους legerat et cetera prave verterat, coarguit P. Leopard. I. Emend. 4. WESS.

127. 56. *Συρίοις γράμμασιν*] Assyrias intelligit, quae et *Σύρια γράμματα* XIX. 23.; *Ἀσσύρια* Philon. I. Vit. M. p. 606. B. Maxim. Tyr. Dissert. XXXIX. p. 222. Synesio Insomn. p. 132. A. et personato Themistoeli Epist. 20., formamque et figuram habuerunt, proxime ab hodiernis Hebraeis recedentem, si fides Iudaeis ipsis, qui genus hoc *סוריים* *סוריה*, *scripturam Assyriam* vocitant Gemar. Sanhedr. II. 13. WESS.

127. 60. *Πρὸς Χαίονα*] Ctesias I. Persic. apud Steph. *Χαίον.* *Ἡ δὲ Σεμίραμις ἐντεῦθεν ἐξελάινει, αὐτῇ τε καὶ ἡ στρατιὰ, καὶ ἀφικνεῖται εἰς Χαίονα τῆς Μηδίας.* Semiramis vero hinc profecta, ipsa atque exercitus in Chauona Mediae pervenit. Quae quidem Ctesiae id, quod amplexus sum, mirifice firmant, et Diodorum presse eius vestigia legisse docent. Ab urbe autem vicina regio *Χαωνίτις*, quae, si Zagrus mons idem atque Zarcaeus sit, ut mihi quidem placet, reddenda videtur Polyb. V. 54. Scio Is. Casaub. ad Strab. XVI. p. 1070. et Salmas. in Solin. 488. *Χαωνίτιν* maluisse, et eam regionem ad Zagrum usque pertinuisse, sed in Assyria: quae vero Polybius eo loco, ea interiore in Media, ubi Chauonitis, administrata fuerunt. WESS.

127. 63. *Ἐν μέσῳ τῆρ πέτραν*] Hoc verius. Paradiso enim montem inclusit; nec solet Diodorus aliter, ut c. 7. et XIV. 80. 117. WESS.

127. 74. *Πρὸς ὄρος τὸ Ζαρκαῖον*] Straboni XI. p. 793. Polyb. V. 44. et 54. Ptolemaco VI. 2. p. 170. *Zagrus* est longissime protensus et Mediam ab Assyria distermians. WESS.

127. 82. *Παραγενομένη δ' εἰς Ἐξβάτανα*] Herodotum I. 98. si audis, falsa haec sunt: Deioeces enim Medis persuasit hanc urbem ut conderent. Sed quid si urbem is instaurari ac diligentius muniri iusserit? ita quidem certe censuit auctor historiae, cuius Iuditha praecipuum argumentum, c. I. 2. Urbs erat ampla ambituque extimi muri, plures enim erant, Athenarum, ut Herodot. refert, aequalabat ferme magnitudinem; quae ce stad. cum confecerit, teste Dione Chrysost. Or. VI. p. 87. C., haud profecto male de Ecbatanis infra XVII. 110. Interior murus regiam incingebat, superbam orientis spoliis, eiusque *tecta fulgebant eboris nive*, agnoscis Apuleii c. 6. de Mund. verba, *argenti luce, flammis ex auro vel electri claritate*. Coeli habitus in hac vicinia erat frigidior, unde mos regibus Persarum, aestatem in ea urbis regia absumere. *Θεορίζουσι ἑταῦθα οἱ βασιλεῖς. ψυχρὰ γὰρ ἡ Μηδία. τὸ δὲ χειμᾶδιον ἐστὶν αὐτοῖς ἐν Σελενζείᾳ*, Strabo XI. p. 794. A. ait, sed qui sibi plane contrarius est, modo ne locus sit defectus, quod etiam atque etiam suspicor, cum p. 795. B. *καὶ ἦν τὰ Ἐξβάτανα χειμᾶδιον τοῖς Πέρσαις*. Conf. B. Brisson. R. Pers. I. 69. WESS.

127. 90. *Ὁ καλεῖται μὲν Ὀρόντης*] Mediae hunc montem haud neglexerunt Ptolem. VI. 2. p. 170. et Ammian. XXIII. 6. Opportune vero Polyb. X. 24. de Ecbatanis, *κεῖται μὲν οὖν ὑπὸ τὴν παρωρείαν τὴν παρὰ τὸν Ὀρόντην, ἀτείχιστος οὖσα, sita est in montana regione, quae radicibus Orontis subiacet*; ita enim optime vertit Is. Casaub., et, quod vulgo in Polybio legitur *Ὀρον*, ad eum modum instaurandum significavit. Minus commode Ammian. *et Ecbatana, sub Iasonio monte in terris Syro-Medorum*, nisi si inter utrumque montem, propius tamen Orontem, fuerint. WESS.

128. 3. *Καὶ τὰς ἀποθρόωνας πέτρας*] Vocem ultimam e Mss. addidi, probante Diodoro III. 15. Polyb. V. 59. Philon. Iud. I. Vit. Mos. p. 632. C. WESS.

128. 5. *Πόλεις ἐν τοῖς ἀναστήμασι etc.*] Strabon. XII. p. 811. C. vide et inscriptionem, quam cippo eius in sculptam habet Polyaen. VIII. Strat. 26. WESS.

128. 13. *Παρήλθεν εἰς Ἀμμωνα*] Tuetur hoc Diodor. XVIII. 3. et 28., nec tamen reiectaneum *εἰς Ἀμμωνος*, quod et habet XVII. 49. WESS.

128. 18. *Ἀπὸ δὲ τούτων γενομένη*] Saepe Diodor., Plutarch., Herodot., Iosephus hoc genere utuntur, sicuti exempla, a P. Leopardo VII. Emend. I. coacervata, docent. Addo ex Polybio, ut illi subveniam I. 7. *ἐπεὶ δὲ ἀπὸ τούτων ἐγένοντο, cum vero his essent perfuncti.* et c. 24., *ἀπὸ δὲ τούτων γερόμενοι.* haec bene. non item III. 100. *γερόμενος δ' ἐπὶ τούτων.* quod oportuerat *ἀπὸ τούτων*, praeferuntque schedae, quibus usus est

Boeclerus. Idem vitium occupavit Aelian. XVII. H. A. 5., qui tamen recte XII. 34. XIII. 19. WESS.

128. 20. *Αίμην τετραγώνον*] Habet ex Ctesia, sicuti et Antigonus Caryst. Hist. Mirab. c. 160. Ovid. XV. M. 319.

*Cui non audita est obscenae Salmacis undae?  
Aethiopesque lacus? quos si quis faucibus hausit,  
Aut furit, aut mirum patitur gravitate soporem.*

Adde Plinium XXXI. N. H. 1. cum nota Harduini. WESS.

128. 31. *Πολλὴν ἕλην*] *Υάλον* seu *ἕelon* reponendum esse contextus sequens arguit. RHOD. *Περιζεύσαντες πολλὴν ἕelon*] Diodor. ita scripsisse, dubitari haud potest: repetit eadem III. 9., consentitque Strabo XVII. p. 1178. B. Animadvertit et mendum, quod libros editos insederat, Thom. Gataker. in Anton. IV. p. 133. WESS.

128. 34. *Ἀποκαινόμενος τοῦτον σχεδιάζειν*] Confer I. 23. Vereor autem vehementer, ne iusto iniquior Ctesias sit historia- rum parenti Herodoto: neque enim is III. 24. nudis corporibus vitrum circumfundi scribit, sed posteaquam mortuum arefecerint gypsoque obduxerint, tum demum cippum e vitro cavum ei circumdare: *ἔπειτα δέ οἱ περιούστῳσι στήλην ἔξ ἕλου πεποιημένην κοίλην*. quae profecto multum distant. WESS.

129. 41. *Τεθέντος ἐπὶ τὸν τάφον*] *Στήλην* cum paullo ante dixerit, hoc praetuli; praesertim quod *τόπος* nimis laxum esset: quod tamen sepulchrum in ipsis aedibus fuisse censendum est ob III. 9. et Strabon. XVII. p. 1178. B. WESS.

129. 45. *Τὴν δὲ ἕelon πᾶσιν ἐξασκεῖν*] Ex his verbis colligitur, *ἕelon* et nostrate vitrum non idem esse. Vitrum apud Europaeos non nascitur, sed multo labore coquitur ex herbarum et lapidum cineribus. Herodotus, quem hoc loco citat Diodorus, illud vitrum fossile esse ait his verbis lib. III. 24. de Aethiopico vitro, *ἣ δὲ σφι πολλὴ καὶ ἐξοργὸς ὀρέσσεται*, id est, *id autem copiosum et facile laboratu effoditur*. De crystallo an intelligendum sit, dubito, quod non videtur eius natura ferre, ut in calidissimis regionibus nascatur; ad quod tamen responderi potest, in calidissimis etiam regionibus, si sint montes altissimi, nivem et gelu ibi durare. Sed crystallum non est facile laboratu, *ἐξοργόν*, nam multo cum labore in vasa formatur, nec, ut audio, fundi potest sine eius pernicie. Fuit proculdubio metallica quaedam species, quam ignorare me fateor. Stibium certe, quod et Antimonium dicitur, videtur esse quaedam vitri species. Videant de ea re, qui metallicam exercent. PALM. De *electro* sive succino, vitri instar pellucido, suspicatus est Th. Gataker. in Anton. IV. p. 133.; mihi in mentem venerat *sal fossilis*, qui ingenti copia provenit in quibusdam Aethiopiae partibus, et ex nativis montibus secatur; quique mollis primo est, candentisque coloris, in lucem autem prolatus durescit, atque ab imperitis pro vitro cen-

seri potuit. Conf. Iob. Ludolf. I. Hist. Aethiop. 7. Haud tamen scio, an operam sit perditurus, qui multum in his laborem posuerit: Ctesiae fides nota omnibus; Herodotus, quae de Aethiopicis memoriae mandavit, pleraque omnia ex auditione, saepe numero fallace fictique tenace, accepit. WESS.

129. 50. *Μικρόν ἕσπερον ἀναγράψομεν*] Lib. III. 5. etc. WESS.

129. 59. *Σταβροβάτης*] Loco propter Tzetzen hoc non moveo; eius enim *Ταυροβάτης* ex *Σταυροβάτης*, quod in Clar. 2. legitur c. 19., natum est, idque ex vulgato, ut *καλάβρωψ*, *καλαῖρωψ*, *Ἐῦρος*, *Ἐβρος* in Orat. Himerii apud Io. Alb. Fabric. V. Bibl. Graec. c. 38. p. 427., quod non animadversum fraudi fuit doctissimo Io. H. Maio Biblioth. Uffenbachian. p. 638. WESS.

129. 62. *Τοῖς εἰς τὸν — καταπληκτικοῖς*] Spernere hoc nolui; praecit ipse c. 17. *ἐκόσμησεν ἅπαντας τοῖς εἰς τὸν πόλεμον καταπληκτικοῖς λαμπροῦς*. WESS.

129. 63. *Ἡ γὰρ Ἰνδικὴ χώρα* etc.] Vide infr. cap. 35. 36. etc. WESS.

129. 73. *Προέχουσι τῶν ἐν τῇ Αἰθιόπῃ γινομένων*] Livius XXXVII. 39. *Nam praeterquam quod multitudinem regionum elephantorum sustinere non videbantur posse; ne pari quidem numero Indicis Afri resistunt; sive quia magnitudine, longe enim illi praestant, sive robore animorum vincuntur.* quibus gemina Polyb. V. 84. atque alii in Exercit. II. c. 5. de Elephant. Gisb. Cuperi. WESS.

129. 78. *Τὸν πρὸς Ἰνδοῦς ἐξενεγεῖν πόλεμον*] Indica haec Semiramidis expeditio, ut pleraque huius feminae, ipsis veteribus suspecta fuit. Strabo XV. p. 1007. haud multum illi tribuit, neque admodum Megasthenes, quem auctorem Strabo habet. Arrianus animo quidem agitasse id bellum, sed in ipso apparatu mortem eius consilia disiecit, Indicor. c. 5. adfirmat. WESS.

129. 81. *Διακελευσαμένη τοῖς ἐπύροισι*] Habet Suidas in *Σεμίραμις* mandata, quae regina Dercetaco dederit de copiis cogendis et ceteris, quae bello usui forent; quae quidem mandata cum bene respondeant his Diodori, ex Ctesia deprompta suspicor. WESS.

130. 86. *Μετὰ τρίτον ἔτος*] Tertio abhinc anno, *εἰς τρίτον ἔτος*, ut in Suida et cap. seq., quod genus frequentissimum. Iosepho I. B. I. 13. 1. *μετὰ δὲ δύο ἔτη* idem est quod *δευτέρῳ ἔτι* XIV. A. I. 13. 3., et *μετὰ τεσσαράκοντα ἡμέρας* I. B. I. 16. 2., quod *εἰς τεσσαράκοντα ἡμέρας* XIV. A. I. 15. 4. Vid. Aldrich. ad penult. locum et XIV. A. I. 15. 4. et Georg. Raphael. Observ. Xenoph. ad Matth. XXVI. 63. WESS.

130. 90. *Πλοῖα διαρκετὰ*] Navium hoc genus *πλοῖα διάλυτα* Straboni XVI. p. 1076. B. Curtius VIII. 10. 3. *Iussitque Alexander ad flumen Indum procedere et navigia facere, quis in*

*ulteriora transportari posset exercitus. Illi quia plura flumina superanda erant, sic iunxere naves, ut solutæ plaustris vehi possent, rursusque coniungi. quae Strabonis et Curtii loca Io. Scheffer. I. Milit. Nav. 4., ubi naviam solutilium formam exsequitur, non latuerunt. Mox mallem περὶ τοῖτους τοὺς etc. WESS.*

130. 2. Βοῶν μελάνων] Ut videlicet color pellium speciem elephantorum prae se ferret. RHOD. Βοῶν μελάνων τριάζοντα μυριάδας] Suidas, βέροσας δὲ βοῶν ἀποδεικνύων εἰς τριάζοντα μυριάδας. De colore eadem ac Diodorus Chiliad. XIII. 928. Tzetzes, et recte; elephantum enim, quos exprimere voluit, plerique omnes nigerrimi sunt, χροίην μέλανος καταζορέος καὶ δι' ὅλον τοῦ στήθεος, ut Aretaeus II. de Causs. Morb. Diut. c. 13. ait. WESS.

130. 12. Μήτε τῶν ἴσων τεχνιτῶν] Postremam vocem non dubito, quin Grammatici nimis officiosae diligentiae debeamus. Equidem induxissem, si vel unus Codex addixisset. WESS.

130. 16. Ἄτε ταυῶς] Districte Phrynich. p. 28. hoc ut sollocum damnat: αἱ νῆες ἐρεῖς, οὐχ αἱ ταυῶς, σόλοισιν γὰρ. Lenius paullo Moeris, νῆες, ὡς Θουκυδίδης, Ἀττικῶς. ταυῶς, Ἐλληνικῶς quae nullo suo merito suspecta visa sunt Illust. Spanhem. in Aristoph. Ran. 49. Id enim dicit, Atticis primo casu αἱ νῆες, ceteris ταυῶς dici. Videntur quoque librarii Coislin. et Mutin., ut Atticorum consuetudini haec congruerent, νῆες praeoptasse; quos et ego sequerer, ni Diodor. aliud vellet: nam αἱ ταυῶς XIII. 13. μαζοαὶ ταυῶς XVII. 97. καταρτισμέναι ταυῶς XIX. 62. neque soli haec forma, etsi et νῆες haud raro occurrant, placuit. Philo Iud. enim de Cherub. p. 114. αἱ ταυῶς καταίρουσιν. Pausan. VI. 3. p. 460. αἱ ταυῶς αἱ Ἀττικαί. Aelian. X. II. A. 17. XIII. 28. XIV. 26. XV. 5. etc. WESS.

130. 20. Ἰππέων δὲ πεντήχοντα] In Suida, ἑπτακκοῦ δὲ ἑξατὸν μυριάδας. Itaque incertus sum, quem numerum sequar, retineoque adeo vulgatum. WESS.

130. 22. Ἐπιπύρον δὲ etc.] Haec cum voce praecedenti potuerant abesse; sed ut obscurum vitaret, videtur ea addidisse. Mox ἴσοι haud dubie iustum est. Suidas, δραπανηφόρον δὲ ἀρμάτων μυριάδας δέκα. ἀνδρῶν ἐπὶ καμήλων μαζομένων τὸ ἴσον πλῆθος. De camelis autem, quos olim in aciem varii, et imprimis per orientis plagas, duxerunt, plura Stewich. in Veget. III. R. M. 23. WESS.

130. 23. Τὸν ἀριθμὸν ἴσον] Lege ἴσοι. RHOD.

131. 29. Τοῦ μὴ φοβεῖσθαι τὴν ἀγριότητα etc.] Horrent elephantos stridoremque eorum et odorem difficulter ferunt equi. Livius XXX. 18. ad quorum (elephantorum) stridorem odoremque et adspectum territi equi, vanum equestre auxilium fecerunt. et XLIV. 5. qui, ubi ad invia venerant, deiectis rectoribus, cum horrendo stridore pavorem ingentem equis maxime incutiebant.

vide Africani Cestus c. 24. p. 298. et Io. Freinshem. in Curtii VIII. 14. 23. WESS.

131. 30. Περσεὺς ὁ τῶν Μακεδόνων βασιλεὺς] Non praeteriit hoc eius stratagema Polyæn. IV. 20. WESS.

131. 40. Πλοῖα ποτάμια] Puto naves ex uno arundinis trunco cavatas innuere, quae μονόξυλα Hippocrati de Aëre, Aq. Loc. p. 290. Polyb. III. 42. Heliodoro vero I. p. 57. τὰ λιμναῖα σκάφη, ἀπὸ μόνου ξύλου καὶ πρέμνου παχέος ἐνὸς ἀγροικότερον κοιλαινόμενα. cuius et L. IX. p. 460. vide. WESS.

131. 42. Οὐ τὸ πάχος οὐκ ἂν — περιλάβοι] Conf. infra XVII. 90. et Strabon. XV. p. 1037. C. WESS.

131. 50. Καὶ πολλαπλασιάσας τοὺς προὔπαρχοντας] Quae ex Ctesia de Indorum rege, cum is bellum movet, exscripsit Aelian. XVII. H. A. 29., elephantorum hunc numerum immanem fuisse indicant. WESS.

131. 53. Τὴν ἐπὶ τῶν θωρακίων κατασκευὴν] An loricatorum et turribus instructos fuisse significat? utroque enim genere armabantur, tum ne quid damni belluae sagittis telisque inferretur, tum ut ex turribus tela in hostes vibrarentur: μάχονται γὰρ ἐπεσκευασμένοι πρόγους inquit Philostrate. II. Vit Apollon. 12. et τὸ θηρίον πέφρακται μὲν καὶ σιδήρῳ παραγινόμενον εἰς μάχην Heliodor. IX. p. 437. Fortasse tamen turres duntaxat innuit τῶν θωρακίων vocabulo; cuius suspicionis auctorem do Aelianum XIII. H. A. 9., qui de elephanto Indorum bellatore, ὁ δὲ στρατιώτης ἐλέφας ἐπὶ τοῦ καλουμένου ΘΩΡΑΚΙΟΥ, ἣ καὶ νῆ Δία τοῦ νώτου γυμνοῦ καὶ ἐλευθέρου πολεμιστὰς μὲν τρεῖς παρ' ἐκάτερα βύλλοντας καὶ τὸν τρίτον κατόπιν φέρει. neque enim commode loricam eo loco intellexeris. WESS.

131. 69. Τῶν παρεμβεβληκότων] Legitimum hoc est, et de illis, qui castra metati sunt, Diodoro probatum XIII. 87. καὶ ταύτῃ παρεμβέβαλεν. et II. 13. καὶ πᾶσαν στρατιὰν παρεμβεβληκῶν ἐν τῷ πεδίῳ. Idem et Alexandrinis interpretibus frequens Exod. XVIII. 5. Numer. I. 50., I. Samuel. IV. 1. etc. WESS.

132. 74. Ἐπαρθεῖσα τῇ νίκη τὰς ἐν τῷ ποταμῷ etc.] Copulam, quae orationem conturbabat, secutus veteres Codd. sustuli. Hoc vero tempore, modo res fidem capiat, accidisse suspicor, quod de Semiramide Suidas prodidit in Σεμίραμις, et L. Kustero pravum adeo visum est, ut aliis illustrandum et emendandum reliquerit: verba sunt: ἡ αὐτὴ ἐκρέεσσα τὸν ποταμὸν Ἰνδόν, καὶ τῆς ἐντὸς κοίτης κτίσσασα παλάτια ἐπὶ ὑψωμάτων ἐγχορήγων ἡσφαλωμένων, αὐθις ἀπέλυσεν εἰς τὴν κοίτην. quae mihi, praefiscine dixerim, obscuri nihil admodum habere videntur, modo futile vocabulum ἐγχορήγων inmutes, ac ἐγχώστων levi discrimine esse iubeas. Sententia erit: Semiramidem Indum flumen alio derivasse, conditisque intra eius alveum palatiis et in aggeres aggestos bitumine inpositis, idem in suum alveum inmisisse.

*Κοίτη* de fluminis alveo Procop. V. Aedif. Iust. 5. WESS. De lapidibus *ἐγχορήγοις* Ducang. Gloss. Lat. v. *Encores* citat Reiskius, qui infeliciter tractat locum Suidae, transposito uno τῆς post ἐντὸς sanandum.

132. 81. *Κατὰ νοῦν χωροῦντων πραγμάτων*] Haud referet hocine probaveris an *προχωροῦντων*; quod tametsi in prospero rerum successu magis obvium, uti *προχωροῦντων τῶν κατορθωμάτων* Ioseph. I. B. I. 2. 7., et *κατὰ νοῦν τοῖς Αἰτωλοῖς τῶν πραγμάτων προκεχωρηκότων* Polyb. IV. 36. et infra XI. 16. XIV. 18. XVIII. 20., non deest alteri patrocinium in Dionys. Halicar. T. II. p. 130., ubi de Thucydide *τῶν δὲ κατὰ νοῦν κειχωρηκότων καθάπαξ οὐ μέμνηται*. WESS.

132. 92. *Ἀπαντες διεπόρουν τὸ πόθεν etc.*] *Λεγο διεπόρουντο πόθεν etc.* ut sit *διαπορεῖσθαι* pro *διαπορεῖν*. STEPH. et RHOD.

132. 3. *Ὡς ἤγγισαν ἀλλήλοις τὰ στρατόπεδα*] Negligit Grammaticorum decreta, ut saepe alii. Vid. I. 93. Malui vero Codd. Coisl. et Mut. sequi, quod ita fere soleant. Iacob. IV. 8. *ἐγγίσατε τῷ θεῷ, καὶ ἐγγιεῖ ὑμῖν*. Vid. infra XIV. 23. WESS.

132. 12. *Οἱ τῶν Ἰνδῶν ἵπποι — προσήρχοντο*] Nisi ingratum quodam modo esset ἵπποι *προσίππευον*, ut plures Codd., id amplecterer: videtur enim plus inpetus habere, sicuti in Dionys. IX. A. R. p. 564., *προσιππεύοντες οἱ τολμηρότατοι*. similique Nostri XIII. 112. Et sunt Indorum equi ingenio ferociore, si vera de illis prodidit Aelian. XIII. H. A. 9. WESS.

132. 17. *Ὡς ἐτόγγαυεν*] Ut casus ferebat, quomodo ὡς *ἔτρυχε* I. 14. Haud tamen scio an ὡς *ἐτόγγαυον* scriptorum liberum potius sit, indicetque eos, sicuti erant armati, ab equis, frena recusantibus, fuisse ablatos. Solent simili in re ὡς *εἶχε* et ὡς *εἶχον* frequentissime terere. Herodot. I. 24. de Arione *ρίψαί μιν ἐς τὴν θάλασσαν ἐωῦτόν, ὡς εἶχε, σὺν τῇ σκεπῇ πίσσῃ*: quae Dio Chrysost. aemulatur Orat. XXXVII. p. 455. C. Sophocles Antigone vers. 1221. *εἶθ' ὁ δύσμορος Ἀντιῶ χολωθεῖς, ὡσπερ εἶχ', ἐπενταθεῖς Ἥραιοσε πλευραῖς μέσσον ἔγχος*. Appian. III. B. C. p. 938. *ὁ μὲν δὲ Λέπιδος, ὡς εἶχεν, ἐκ τῆς ἐννῆς ἄνωστος εἰς αὐτοὺς ἐξέθορε*. quae si tibi non suffecerint exempla, confer Ccl. Duker. in Thucyd. III. 30. WESS.

133. 21. *Ὁ βασιλεὺς οὐ καταπλαγείς*] Sic scripsit Diodorus: perculsum non fuisse suorum fuga Stabrobatem, impressio, quam strenue fecit, satis arguit. WESS.

133. 26. *Τὸ δ' αὐτὸ καὶ τῶν ἄλλων etc.*] Rhodom. haec Semiramidis elephantos spectare ratus, verterat: *id licet factitii elephantos etiam in exercitu Semiramidis facerent, verorum tamen impetum ad exiguum tempus sustinuerunt*. Sed *factitiorum* in his quidem mentio nulla. Stabrobatae reliqui elephantum, cum ipse in hostem esset invectus, itidem urgere reginae copias coeperunt;

quorum illae incursum cum non sustinerent, in fugam abierunt. Bene ergo Ms. Mutin. ἡ μετὰ τῆς Σει. δύναμις βραχὺν ὑπέστη χρόνον. WESS.

133. 32. Τῶν δὲ τοῖς ὀδοῦσιν ἀνασχιζομένων] Diodoro sollemne est, ut ebur dentes esse putet, I. 55. XVII. 88. Aliis res ambigua videtur; unde Aelian. VII. II. A. 2. διὰ τὸ κάλλος τῶν ὀδόντων ἢ κεράτων μέγεθος Afrorum regem elephantos venari et occidere constituisse ait. Pausan. pro cornibus etiam atque etiam pugnat V. 12. Tu vide Pet. Petitum in Aretacum II. de Caus. morb. Diutur. c. 13. p. 213. edit. Boerh. WESS.

133. 34. Πλήθους νεκρῶν σωρευομένων] Non de nihilo est consensus Codd. in voce σωρευομένων. Forte numeri enallagen probarunt, qua Thucydides V. 60. 80. τὸ μὲν οὖν στρατόπεδον οὕτως ἐν αἰτία ἔχοντες τὸν Ἄγιν. et S. Lucas Evang. II. 13. πλήθος στρατιῶς οὐρανίου, αἰροῦντων τὸν θεόν. et Ioseph. I. A. I. 19. 1. τὸ δὲ πλήθος αὐτῶν ἀριθμοῦ κρεῖττον ἔσται, μέζουσιν τίοις καταλιμπάνοντες. quae Iosephi a Cel. Cocceio tentata nollem: sequitur enim, ut optimus quisque, hoc genus et I. B. I. 4. 7. et c. 7. I. passimque aliis in locis. Ego vero vulgatam Diodori scripturam hic retineo, opinatus prioris vocis inflexionem huius mutandae occasionem dedisse. WESS.

133. 42. Ταχέως ἀγίπνευσε] Celeriter equo vecta aufugit; qua potestate et infra XIII. 112. XIV. 8. XVII. 59. XVIII. 12. Parthen. Erotic. c. 21. ἀγίπνευσεν εἰς τὰς Συρακοῦσας. Conf. Is. Casaub. in Strabon. VII. p. 450. WESS.

133. 48. Διωγμὸς ἐγένετο βίαιος] Non videtur prorsus reiectaneum ὄσμους, quod Hesychio haud aliud est atque ὠδισμὸς, ὠδῆσις. His enim utuntur in conferta multitudine, sese urgente et trudente, uti Polyb. IV. 58. Nec sequor tamen ob haec Xenophontis III. Cyropaed. p. 69. ἔρθα δὲ καὶ Ἰππων διωγμὸς ἦν καὶ ἀνδρῶν, καὶ φόβος ἔξ ἀμφοτέρων. WESS.

133. 60. Διὸς σημασιῶν αὐτῷ γεροντιῶν] Suspicio scripsisse Diodorum Διὸς σημείων, quorsum et ducunt Clar. et Mut. et ceteri Codd., qui γεροντιῶν praeferunt, aut Διοσημειῶν, ut ora Vatic.: quibus vocabulis terrae metum, tonitru, gravem et subitam tempestatem, procellosum inbrem et id genus prodigia describere adsueverunt. Appian. Annibal. p. 593. καὶ γεροντιῶν ἐν Ρώμῃ σημείων ἐκ Διὸς φοβερῶν. Plutarch. T. II. p. 300. B. περὶ τὰς Ἑλενθέας ἔδαρι καὶ βροῦταις καὶ Διοσημείαις ἄλλαις κατασχεύηται. Conf. Kuhn. in Pausan. III. 5. p. 216. Langbaen. in Longin. 15. p. 214. et infra V. 40. WESS.

134. 64. Λό μόνῃ τῆς δυνάμεως] Longe graviolem Semiramis cladem passa est, si μετὰ εἴκοσι ἀνθρώπων viginti duntaxat viris stipata aufugerit, ut Strabo XV. p. 1007. A. et 1051. C. memoriae prodidit. WESS.



134. 66. *Καὶ τὸ παρ' Ἀμμωνος λόγιον*] De eo c. 14. *Recepi autem παρ' Ἀμμωνος, sermonis genio consentiente.* WESS.

134. 70. *Εἰς θεοὺς — μεταστησομένη]* Ficta haec sunt, ut feminae decus adaugeretur. Filius Ninyas, seu ambitionem sive petatum concubitum indignatus, eam sustulit apud Iustin. I. 2. et Agathiam Scholastic. II. p. 62. A. Loquendi autem hoc genus explicuimus abunde I. 20. WESS.

134. 71. *Φασὶν αὐτὴν γενέσθαι περιστεράν]* Pari sententia Lucianus de Dea Syr. c. 14. *τὸ Σεμίραμιος τέλος ἐς περιστερίην ἀπίκετο,* et Athenagoras Leg. pro Christian. c. 26. *εἰς περιστεράν μετέβαλεν ἡ γυνή. ὁ μῦθος παρὰ Κτησίᾳ.* indidem columbarum Syros inter et Assyrios cultum derivantes, de quo quidem plura post diligentem operam I. Nic. Loensis VI. Miscell. 22. et Ger. Io. Vossii I. Idolol. c. 23. commentari supervacaneum arbitror. Id potius agam, ut, quod promittere memini, vim potestatemque verbi *ἀπαθανατίζειν* paullo uberius declarem. Dicit Diodorus Assyrios *ἀπαθανατίζειν τὴν Σεμίραμιν* immortalem eam fecisse seu immortalium in numerum transcripsisse; ad quem modum Philo Iud. Leg. Cai. p. 1005. A. *εἰ γὰρ ἀθανατίζουσι,* inquit, *αἱ ἀρεταὶ, πάντως φείδουσι κακίᾳ.* cui propterea *ἀπαθανατίζεσθαι* illi omnes perhibentur, qui quovis modo immortalitatem consequuntur, veluti de Mund. Opific. p. 17. A. ubi de philosophiae cultu, *ἔφ' ὃδ' αἰτίοι θνητὸς ὢν ἀνθρώπος ἀπαθανατίζεται.* et III. Vit. Mos. p. 696. B. *ἐπειδὴ τὴν ἐνθύνδε ἀποιτίαν ἐμίλλεν εἰς οὐρανὸν στέλλεσθαι, καὶ τὸν θνητὸν ἀπολιπὼν βίον, ἀπαθανατίζεσθαι.* Non addo ex libro, quo Deter. potiori insidiari docet p. 175. E. neque ex eo de Cherub. p. 341.; longum enim foret singula excerpere. Simile tamen, nec negligendum, *ἀπαθανατίζειν τὰς παρρημίας* earum usum perpetuum et quodam modo aeternum reddere Synesii Encom. Calv. p. 86. A. et *ἀπαθανατίζειν τὰς τιμὰς* Porphyrii H. A. A. 5. WESS.

134. 78. *Ἄνο πρὸς τοῖς τεσσαράκοντα]* Haud aliter Syn-cellus Chronograph. p. 96., et editus Iustin. I. 2., nam scripti eius Codd., quos inter Francquerani duo, aut XXX aut XXXII annos praefereunt. WESS. Anonymus citatus supra p. 117: 75. sic: *ἔτελεύτησεν ἔτη βιώσασα ξ̄, βασιλέυσασα ἔτη μβ̄:* unde defendas scripturam *βιώσασα μὲν ἔτη ἐξήκοντα,* quam non habuit Georgius Syncellus.

134. 79. *Ἀθήναιος δὲ καὶ τινες τῶν etc.]* Seleuciensem Athenaeum, Peripateticum philosophum Strabonisque aequalem, Io. Alb. Fabricius IV. B. Gr. 20. p. 631. eundem esse suspicatur. Mihi dubium est: neque enim Geographus XIV. p. 987. hoc eum de genere quidquam in literas retulisse significat; et suae aetatis hominem Diodorus si memorasset, aliquo saltem titulo eum distinxisset; laudem tamen vir egregius meretur, sed coercionem N

Abramus, qui VI. Phar. V. T. 15. turpi errore Athenaeum Naucraticum, cuius Deipnosophistarum libros lectitamus, hunc esse et Diodoro propterea multis annis priorem asseverat. Inter ceteros autem, qui de Semiramide ea prodiderunt, haud postremus est Dinon, Persicorum locuples auctor, in Aelian. VII. V. H. 1. WESS.

134. 85. Πένθ' ἡμέρας παραχωρῆσαι] Sic et Aelianus ex Dinone. Plutarchus T. II. p. 753. D. unius diei imperium inpetrasse, nescio quo auctore, tradidit; quae discordia in rebus Semiramidis, multo omnium incertissimis, haud insolens. WESS.

134. 93. Μεγαλεπίβολον οὔσαν] Hoc praestare ante ostendimus c. 7. WESS.

134. 1. Οὐδαμοῦ ζηλώσας] Recipiendum e margine οὐδαμῶς. Quem enim locum hic locale habeat apud eum, qui gynaeceum vix unquam egressus memoratur, Athen. L. XII. 7. RHOH.

135. 3. Τῶν περὶ αὐτὸν εὐνούχων] Postremam vocem perperam et sine caussa neglexit Clarom. 1. Ctesias, quem Diodorus apertissime aemulatur, in Athen. XII. 7. et Cephalion apud Syncell. p. 167. servandam ostendunt. Iam quod paullo post sequitur χρῆσθαι ταῖς ἡδοναῖς ἀνεπιχαλίπτως, haud scio an pravam sit. Illumne haud tecte voluptatibus perfrui dixeris, qui in regia abditus nullius in conspectum prodit? uti de Ninya Diodorus. Equidem, sedulo ut dicam, e vestigiis Coislin. libri ἀνεπιχωλύτως, sine ullo impedimento, scriptum olim fuisse conicio. WESS.

135. 14. Ἀπέλυνεν εἰς τὰς πατρίδας] Violentius est Mutin. ἀπῆλυνεν, et hoc multis partibus posterius: sic supr. c. 3. τὸν Ἀράβων βασιλέα — ἀπέλυσεν εἰς τὴν οἰκίαν. et XIII. 96. καὶ Δέξιππον ἀπέλυσεν εἰς τὴν Ἑλλάδα. XVI. 52. τοὺς δὲ συστρατευσαμένους — ἀπέλυσεν εἰς τὰς πατρίδας. Cuius generis plura si desideres, Th. Gataker. in Anton. XI. 3. ut adeas auctor sum. WESS.

135. 22. Εἰς τὴν ἰδίαν ἕκαστος χωρὶζέται πατρίδα] Prudentissimum hoc et quale a principibus, gulae ac ventri deditis, vix exspectasses. Longis enim spatiis discreti exercitus, quod saluberrimum ad continendam militarem fidem, nec vitii nec viribus miscentur, ut fere Tacitus I. Hist. 9. Contra ea plures unis aestivis si contineantur, ipse numerus fiduciam ad res novandas addit, ut eiusdem libri c. 51. et Annal. I. 31.; cui rei si praefecti, imperium rapere cupientis, ambitio accesserit, civili bello decernenda res est: quod post Augusti excessum Romanos principes suo saepe malo expertos esse, quis tandem est qui nesciat? WESS.

135. 34. Παῖς παρὰ πατρὸς διαδεχόμενος] Sic et Cephalion in Syncelli Chronograph. p. 167.; a quo et Ctesia dissentiunt Bion et Alexander Polyhist., Semiramidis posteros usque ad

Belleum, Dercetadae filium, Assyrii regni gubernacula tenuisse, tum Belitaram, obscurissime natum, mira quadam ratione imperium occupasse atque ad seros nepotes tramisisse memorantes in Agathiae Scholastici II. p. 63. et Syncello p. 359. Adeo in Nini successorumque gestis rebus veteres scriptores discordant! WESS.

135. 35. Ἐπὶ γενεᾷς τριάκοντα] Euseb. et secutus illum Syncellus, corruptos enim eius numeros ad hanc formam esse instaurandos recte animadvertit Iac. Goar. et diu ante eum Iac. Bongars. ad Trogi Prolog. L. I., γενεᾷς τριάκοντα πέντε in Diodoro invenerunt; contra utrumque veniunt scripti Codd. miro consensu, quinque additas generationes sive aetates et hic et e. 28. prae fracte refutantes. Vel sic tamen locum illis haud negassem, si mihi liquido apparuisset, Ctesiam, quem Diodorus auctorem habet, totidem ad Sardanapalum usque numerasse. Cephalion quidem certe de Ctesia id inficiari videtur in Syncelli Chronograph. p. 167. Constat praeterea sibi Diodorus, trigessimam a primo imperii conditore Nino Sardanapalum, quo de cap. seq., perhibens. WESS.

135. 38. Ἐτι δ' ἐξήκοντα] Recte haec desunt Euseb. et Syncello, neque leguntur infra e. 28.; ut prorsus probabile sit, ab aliquo esse addita: neque enim, D. Petavii IX. D. T. 13. verba sunt, *satis apta est series orationis πλείω τῶν χιλίων καὶ τριακοσίων, ἔτι δ' ἐξήκοντα. Quis enim non videt, ab imperita manu esse hanc appendicem, eius, qui excurrentem numerum importune concepit, aut ad oram adnotavit: unde postea in contextum a librariis inculcatus est?* Adde Ctesiam annis mille et trecentis Assyriorum imperium terminasse in Iustin. I. 2. Atque haec tametsi voces illas eliminandas maximopere suadeant, inducere tamen atque eiicere nolui, tum quod mordicus eas teneant scripti libri, tum praeterea ob Agathiam, qui ex Diodoro Ctesiam, uti ait, secuto, L. II. p. 63. D. ἐξ τε καὶ τριακοσίων ἴδη πρὸς τοῖς χιλίοις καὶ ὀλίγω πλειόνων ἔτῶν παρωχηκότων, ex quo Ninus summam rerum obtinuerat, imperium Assyriis ablatum perhibet: neque enim dubium est, quin eius ἐξ e Nostri ἐξήκοντα, sed scribae peccato, sit progenitum. Adde Syncellum Chronogr. p. 359., ubi Agathiam, quod doctissim. Goarem haud animadvertisse miror, exseribit. WESS.

136. 42. Οὐ κατεπέγει γράφειν] Lego οὐδὲν κατεπέγει, ut alibi ipse loquitur et ut mos est aliis loqui. STEPH. et RHOD. Accedo viris doctissimis. Sic I. 33. περὶ ὧν οὐδὲν κατεπέγει γράφειν. et III. 3., suffragante sermonis genio: plenum enim foret πᾶν οὐδὲν κατεπέγει, quod Lucian. de scrib. Histor. c. 52. addidit. WESS.

136. 47. Ὅς ἴν' εἰσοστός ἀπὸ Νινύου] Εἰσοστός καὶ ἔκτος Euseb. non audeo recipere: si enim superiora bene se habeant,

trecenti anni, qui ad Sardanapali imperiique interitum supersunt, nimii sunt quatuor regibus. Africano, cuius auctior catalogus, Teutamus regum Assyriorum xxvii. est apud Syncell. p. 151., Cephalioni vero xxii. a Belo in eiusdem Chronograph. p. 168.; qui numeri menda si careant, melioresque sint Eusebianis Chron. p. 30., ubi *Ταύταρος ἑβδομος καὶ ἐκκοστὸς*, uti quidem suspicor: nam xxiii duntaxat regum Assyriorum nomina ex Ctesia cognita esse Cephalion adfirmaverat; Diodori scripturam haud parum iuvare poterunt. WESS.

136. 53. *Τὸν δὲ Τεύταμον μυρίους* etc.] Troianos Assyriorum opibus nixos fidentius in bellum cum Graecis esse ingressos et Plato III. de LL. p. 685. C. significat. Iam quod Claris. Schurzfleischius in Notit. Biblioth. Vinar. p. 184. Teutamum cum Tithono confudisse Diodorum videri censet, id properanti excidisse arbitror. WESS.

136. 62. *Κληθέντα ἀπ' ἐκείνου Μειμόνεια*] Regiae Sursorum id fuisse cognomen Herodot. V. 53. Strabo XV. p. 1058. C. Aelian. V. H. A. I. et XIII. 18. Pausan. IV. 31. p. 356. consentiunt. WESS.

136. 64. *Λεωφόρον ὁδὸν*] Viam hanc, per mansiones descriptam, Pausaniae aetate Phryges peregre advenientibus ostentabant, L. X. 31. p. 875. Poggium vero *viam leophoram* verentem leni brachio castigavit L. Cael. Rhodiginus XIII. Lect. Antiq. 19. WESS.

136. 66. *Λέγοντες ἐν ἐκείνοις τοῖς τόποις γεγονέναι*] Aethiopum, Aegypti adfinium, caussae patrocinator Philostrate. VI. Vit. Apol. 4. et Heroic. III. 4.; Susis atque ex Media venisse Pausan. X. 31. et eius vestigia premens Suidas prodidit in *Μέμνων* alia Diodor. infra IV. 77.; qua scriptorum discordia in eam adducor opinionem, ut Memnonis ad Troiam expeditionem non admodum certam opiner, a Graecis post Homerum, ut multa pigmentis fucoque exornata: nec temere tamen negavero, fuisse veteri aevo principem hoc nomine, qui ex Aegypto profectus victricia per Asiam arma circumtulit, et plurima nominis sui reliquerit monumenta. Vid. supr. I. 47. WESS.

136. 72. *ὑπὸ Θετταλῶν ἐρεθρευθέντα*] Pindarus, primus eorum, quorum nobis nunc copia, fabulam luculentis versibus celebravit Od. VI. Nemeonic. et VI. Pyth., post dein Quintus Calaber II. 540. Homerus enim Odys. A. 521. Memnonis quidem commemorat, de insidiis et nece nihil. Conf. Io. Marsham. Canon. Chronol. p. 431. WESS.

136. 78. *Τριακοστὸς μὲν ὢν ἀπὸ Νίνου*] *Καὶ πέμπτος* ex Eusebio addendum arbitratur III. Scaliger ad illius Chron. p. 254., cui contra concordem veterum Codd. consensum et Diodori ipsius, xxx γενεαῖς seu regum actatibus, uti supra osten-

sum, imperium Assyriorum circumscribentis, sententiam adstipulari non possum. WESS.

136. 83. *Καὶ τὰ μαλακιώτατα τῶν ἐριῶν* etc.] Aemulatur Ctesiam, sicuti et Plutarch. T. II. p. 326. F., et Nic. Damascen. Excerpt. Vales. p. 426. quod ex eius apud Athen. XII. 7. verbis clarissime adparet. Recte vero hominis et animi effeminati argumentum ex Ianae tractatione sumit: *ὡς γὰρ ἐπὶ τὸ πλῆθος ἐπιεικῆς ἀνθρώποις καὶ τὸ τῶν καταγότων καὶ γυννίδων γῦλον, ὡς τὴν ἐριῶν ἐργασίαν καταγέρεται ἕγλω θηλύτητος*, eleganter Hierocles in Stobaei Serm. LXXXIII. p. 491. Mox digitum non verterim, sive tu *ἐταιρῶν* an *ἐταιριδίων* praeoptaveris: illud tamen, ne contra scriptos libros venirem, suam in sedem restitui. WESS.

137. 85. *Ψιμνθίους* Vatic. solum verum est. Vide quae egregie disputavit Ti. Hemsterhusius ad Aristophan. Plut. p. 394. WESS.

137. 99. *ὑπὸ τινος Ἑλλήνος*] Choerilus vertit et numeris adstrinxit, Athen. XII. 7. auctore; quod eius epigramma variis modis expresserunt, ut usus et instituti ratio ferebat. Equidem Diodoro tres versus, qui vulgo aberant, quosque meliores Codd. et Io. Tzetzes haud praeterierunt, negare nolui. Habent eodem Strabo XIV. p. 989. Athen. VIII. 3. p. 336. Schol. in Aristoph. Aves vers. 1022., illustraruntque Is. Casaub. in Athen. p. 367. et Desid. Herald. ad Martial. VIII. 69. WESS.

137. 4. *Ταῦτ' ἔχω*] Epitaphium hoc Sardnapali ab Athenaeo lib. Deipnosophist. VIII. 3. plenius recitatur, ubi pro *λέλειπται* *λέλονται* habetur RHOH.

137. 9. *Τὴν ἡγεμονίαν ἄρδην ἀνέτρεψε*] Male Euseb. et Syncellus. Nihil vulgato tritius cum de urbe, imperio, ceterisque, quae pessumdantur atque evertuntur, sermo instituitur. Plato I. LL. p. 640. E. *μεθ' ἧν κυβερνήτης καὶ πᾶς παρὸς ἄρδων, ἀνατρέπει πάντα*. Herodot. VIII. 62. *εἰ δὲ μή, ἀνατρέφει τὴν Ἑλλάδα*. Aeschin. in Ctesiphont. p. 76. *τὸν δὲ τὴν Ἑλλάδα καὶ τὴν πόλιν ἄρδην ἀνατετραγότα, τοῦτον ἐάσατε* etc. Vide infra XIII. 75. WESS.

137. 17. *Ἵερομα μὲν Βέλεσς*] Videtur haec vocis productio nescio quid barbaricum prae se ferre. Ego scriptis libris, Agathiae II. p. 63., Syncello Chronogr. p. 205. et Io. Tzetzae Chiliad. III. 426. obsecutus sum. WESS.

137. 20. *Προέλεγε — ἀδιαπτώτως*] Vide I. 50. et II. 31. WESS.

137. 29. *Ἐπιτενῶς ἅπαντας παρελάμβανε*] Summo studio atque ambitione. Polybius VIII. 16., *Ἀχαιῶς δὲ προσδεξιμένως ἐπιτενῶς καὶ φιλοφρόνως τὸν Βῶλιν*. Herodot. Vit. Homer. c. 7. *ὁ δὲ Μέντιος ἐροσήλευσεν αὐτὸν ἐπιτενῶς*. cui simile c. 26., et Nostri *ἐπιτενίστατα* in Ursini Eclog. 5. WESS.

138. 32. *Λοὺς τινὲ τῶν εὐνούχων*] Nomen hominis ex Ctesia adscriptis Athen. XII. 7. Adde Aristotelem, qui rem fabulae similem censet, et Ctesiam, quamquam nomine non addito, perstringit V. Polit. 10. WESS.

138. 41. *Τὸν τῶν βαρβάρων*] Quis vero ille *Barbarorum* rex? Nonne Sardanapalus ipse *Barbarorum*, ut quidem Graeci omnes alios vocitarunt populos, monarcha fuit? Sed facilis expeditio. Expunge prius β et posterius ρ, inque huius locum β transfer, et certae gentis nomen prodibit. RHOD. *Τὸν τῶν Ἀράβων*] Rhodom. coniecturam vetustae schedae adfirmant. Similem mendam indicavimus I. 53. WESS.

138. 46. *Ἐπ' ἔλευθερίᾳ*] Ea conditione, ut liberi sique iuris essent. Ἐπὶ enim pactis significandis est apta, ut bene Is. Casaubon. in Strabon. X. p. 708. Aristotel. III. Polit. I I. de regni forma, quae olim certis praemiis et honoribus erat definita, *αὐτῇ δ' ἦν ἐκόντων μὲν, ἐπί τισι δ' ὠρισμένοις*. Hinc frequens illud ἐπὶ μέρει τῆς χώρας, ut partem regionis accipias, et ἐπὶ μέρει τῆς πόλεως apud Strabon. XII. p. 818. A. et XIV. p. 983. Appian. II. B. Civil. p. 742., pro quo prave ἐπὶ μέρει τῆς βασιλείας Apollodor. I. Biblioth. 9. 12. ἐπὶ ἀναδασμῶ τῆς γῆς Pausan. II. 13., ἐπὶ τούτοις Lucian. I. H. V. 19. WESS.

138. 60. *Σαρδανάπαλος — εὐθὺς ἐξίγαγεν*] Mira profecto metamorphosis; qui omnem inter concubinas et effeminatos catamitorum greges vitam exegerat, repente omnium fortissimus et vigilantissimus imperator est. Saepe quidem *victis redit in praecordia virtus*; raro feminae, nedum quavis meretricula corruptiori. Verius Hellanicus in Schol. ad Comici Aves v. 1022. et Callisthenes apud Suidam *Σαρδανάπαλος* duo fuisse perhibent Sardanapalos, quorum alter *δραστήριος καὶ γενναῖος, fortis et strenuus*, alter *effeminatus ac mollis μαλακῶς* fuerit; qui quidem a Ctesia et sequacibus confusi has turbas dederunt. WESS.

138. 63. *Ἐλείθησαν*] Perperam pro *ἐλείθησαν*. Quod librarii mendum etiam alibi recurrit. RHOD. *Ἐλείθησαν οἱ τὴν ἀπόστασιν ποιησάμενοι*] Scholiastae Vat. huic, quod restitui, glossa congruit, non alteri. Librariis autem perpetuum est et sollemne haec verba permiscere, ut infra XI. 68. 76. XIV. 65. XV. 80. et Dion. Chrysost. Orat. XXVIII. p. 291. C., quod diligentiam Is. Casaub. haud fugit, et Polyb. V. 12. *οἷς κατὰ προαίρεσιν ἔζονσιν οἱ ληφθέντες*, ac Excerpt. Leg. 23. p. 1134. *εἰ ληφθεῖν μαχόμενος*; ubi priore loco *ληφθέντες*, uti Lib. I. 27., posteriore *ληφθεῖν* oportuerat. Discrimen, etsi haud obscurum, indicant haec Iosephi I. B. I. 6. 2. *Ἀριστόβουλος ἐν τῇ πρώτῃ συμβολῇ Αἰθιοπίαις εἰς Ἱεροσόλυμα συναλείνεται, καὶ ἐφθῆ κατὰ κράτος Αἰθιοπίαις, εἰ μὴ* etc., et Nostri II. 1, quae, tanti si est, vide. WESS.

138. 76. *Τῶν ἀποστάρτων*] *Ἀποστατῶν* si malueris, non intercedam: sic brevi post et cap. seq.; quamquam ad sententiam nihil intererit, et permutantur haec exscriptorum arbitrio. WESS.

139. 86. *Παρακαλέσας ἐνδεχομένως*] Quantum fieri potuit; ut XIX. 18. *καίπερ ἐνδεχομένως ἕπαντα πρῶξας*. et c. 83., unde *ἐνδεχομένη παρασκευή* paullo ante, et *ἐνδεχομένη ἐπιμέλει* III. 45. XVII. 2. atque hoc Archytae in Stob. Serm. I. p. 14. *καλῶς ἀγωνιζόμενος ἐκ τῶν ἐνδεχομένων* cui non dissimile supra I. 54. *καὶ πάντα ἐκ τῶν ἐνδεχομένων εὐριζέται*. WESS.

139. 88. *Παραμβολῆς καὶ τῶν ἀποστατῶν*] Si una cum castris etiam defectores in potestatem accepit, cur ad montana illos usque insectatur? καὶ itaque removendum. RHOD. *Παραμβολῆς τῶν ἀποστατῶν*] Sustuli hinc ineptam copulam, quam nec Gemistus habet, nec ferre oratio potest. Atque hoc bene Rhodom., illud prave, quod *μέχρι τῶν ὄρων τῆς Βαβυλωνίας* ad *Babyloniae usque montes* verterit: debuerat *usque ad Babyloniae fines*, ut quisque videt et res ipsa ostendit. Castra erant in montanis, quibus occupatis, fugientes in ultimos usque fines insecutus est. Verum eo sumus ingenio homines, ut haud raro ad ea, quae omnium facillima, offendamus. WESS.

139. 98. *Τοῖς ἀπὸ πηλικόσι τὰ πρόγματα*] Dixerat *ἀπελπίσαντες περὶ τῆς νίκης*. Sed hoc frequentius, ut apud Polyb. II. 54. IV. 69. et infra XIX. 36. 49., neglectum autem Latinis addidi. WESS.

139. 5. *Μετακλιθέντων οὖν πάλιν ἀπάντων*] Frustrantur operam, qui mutant: suum enim agnoscit Diodorus XVI. 10. XX. 44. WESS.

139. 13. *Πρὸς τὴν ἐλευθερίαν ἀσμένως ὑπακουσάντων*] Et haec male divisa temporibus nec similia vero. *Vulgus sequitur fortunam, ut semper, et odit damnatos*, quanto magis tertio praelio attritos, et proculcatos? Nam praemia, quae ostentabantur, ea profecto ampliora a victore rege sperari poterant; ne dicam de periculo, cui se manifesto obiciebant, aliter si res caderet. Sed haec extrinsecus, non tamen intempestive videor hoc loco monuisse. WESS.

139. 19. *Τοῖς στρατιώταις διαδοῦναι*] Visum hoc est significantius et liberalius. Sic Osiris de se I. 27. *διαδοὺς πᾶσιν, ὧν ἐγὼ εὐεργέτης ἐγενόμην*. Athen. IV. 1. *τοῖς κατοπίαν διεδίδου παισίν*. Sic enim recte restituit vir magnus. WESS.

140. 34. *Ἀποκλεισθέντας τῆς — ἐπαρόδου*] Sic fere XIII. 50. XX. 62. estque historicis ceterisque frequentissimum. Pausan. IX. 1. p. 713. *ἐς τοὺς ἀγρούς ἀποκεκλεισμένοι τῶν πηλῶν ἴσαν*. Liban. Basilic. T. II. p. 147. C. *τῆς κοινῆς σωτηρίας ἀποκεκλείσεται*. Polyb. XV. 1. *πύσης εἰκὸς ὑμᾶς ἐλπίδος ἀποκλεισθήσεσθαι*. Conf. Celeb. T. Hemsterh. ad Lucian. Iud. Vocal. c. 9. WESS.

140. 45. Πρὸς Κότταν τὸν ἑπαρχὸν] *Cotta*, nobilis Bastarna, apud Livium XI. 57., *Cotys*, rex Thraciae, eiusdem originis, cuius hic *Cotta*, nomina videntur sortiti. Rem ipsam exsequitur Ctesias in Athen. XII. 7., sed misere corruptus: τοὺς γὰρ τρεῖς εἰσὶν, inquit de Sardanapalo, καὶ δύο θυγατέρας, ὁρῶν τὰ πρόγματα κακοῦμενα, προπεπόμενα εἰς Νίνον, πρὸς τὸν ἐκεῖ βασιλέα, δούς αὐτοῖς τρισχίλια χρυσίου τάλαντα. neque enim ambigi potest, quin voces εἰς Νίνον alium locum occupent. Sardanapalus ipse Nini agebat, ab hostibus undique obsessus; emiserat ex urbe liberos utriusque sexus, et quidem, ut ex Diodoro apparet, in *Paphlagoniam*: qui cum Ctesiam in his rebus auctorem habeat, non vereor, ne Athenæus aut eius exscriptores in illis excerptis non peccarint. *Paphlagonia* quidem certe, non *Ninus*, memorari oportuerat. WESS.

140. 47. Βιβλιαγράφους ἀποστεῖλλας] Grammaticis hoc rectius videtur, sicuti et βιβλιαγράφος. Conf. Phrynich. Eclog. p. 14.: a quorum Diodorus decreto non dissidet XI. 21. 28. 35. XIII. 54. XIV. 101. etc. neque Polyb. IV. 22. WESS.

140. 53. Ταῖς ἐπιείκῃς ἀντέχε] Videntur usu distare ἀντέχεσθαι τῶν ἐπιείκῃς, quod usurpavit c. 24., et ἀντέχειν ταῖς ἐπιείκῃς. et illud quidem non aliud esse ac *spei*, quam conceperas, *inhaerere*, hoc spe nixum obsidionem atque alia incommoda forti animo tolerare. Firmant exempla; uti XX. 70. ὅσοι δὲ τὰς πόλεις διακυβερνοῦντες ἀντέχον ταῖς παρ' Ἀγαθοκλέους ἐπιείκῃς. et Eclog. Ursini 8. ἡ σύγκλητος ὑπολαβοῦσα τοὺς Αἰτωλοὺς ἀντέχειν ταῖς κατὰ τὸν Ἀντίοχον ἐπιείκῃς. quae quoque fecerunt, ut id, quod secutus sum, legitimum arbitrarer. WESS.

140. 59. Χελῶναι ζωστρίδες] *Testudines ad congestionem fossarum* Vitruvio X. 22.; quarum frequens mentio inter Graecos. Vide XX. 93. et Eclog. L. XXIV. ubi prave χελῶναι καὶ ζωστρίδες, sicuti et in Suidae χελῶναι. Polyb. IX. 34., Philon. Belopoeie. p. 97. et 99. et Iust. Lips. Poliore. I. 8. Illas autem, sicuti ballistas, eo tempore, quo Ninus perhibetur obsidione pressa, necdum fuisse in militarem usum introductas, satis exploratum est: sero in Graecia et circa Dionysii, Syracusanorum tyranni, aetatem hoc machinarum genus usurpari coepit. Conf. infr. XIV. 41. WESS.

140. 62. Προνοημένον τοῦ βασιλέως] Diodorum id reliquisse, res pro se ipsa loquitur: neque enim, nisi ante necessarium copiam provida cura conportaverat, undique inclusus ea curare potuit. WESS.

140. 67. Ὁμιζῶν ὀαυδαίων καταδράγέρτων] Diceret *μεγάλων* plerorumque Codd. interpretamentum esse Grammatici, nisi et XII. 72. XIX. 45. ὀμιζῶν μεγάλων καταδράγέρτων. Quare id si malueris, amplectere. Solent alioqui variandae orationis causa non idem semper sectari: λάβρον ἴδωρ ἐκ νεφῶν



καταδρόγγυμενον dabit Basil. M. Homil. in Gordium T. II. p. 147. C. ῥαγδαῖον ἔδωκε Philostrat. VI. Vit. Apoll. 26. WESS.

141. 77. Εἰς τὸν ἐν μέσῃ τῆς πυρῆς — οἶνον] Uberius pyram hanc describit Ctesias in Athen. XII. 7. p. 529. B. WESS.

141. 82. Ἐνδύσαντες τὴν βασιλικὴν στολὴν] Eadem est ac Semiramidis illa, de qua c. 6.; quamquam regia haud paullo pretiosior, auro lapillisque distincta, uti monuit B. Brissonius I. Reg. Pers. 56. etc. WESS.

141. 91. Καὶ τῶν ἄλλων βασιλείων] Cui bono adiectivum ἄλλων hic inseratur, non perspicio: si abesset, aut pronomem eius locum occuparet, lenius oratio decurreret; ego quidem certe non revocarem. Io. Tzetzes haec Chiliad. III. 430. excerpens satius negligenter, nisi si vitiosa illic sint plura, rem administravit: facit enim ex Euphrate Nilum, ex Arbace Arsacem, nec cetera recte digerit. WESS.

141. 3. Παραστυσόμενος, μετὰ τῆς σποδοῦ etc.] Ita si distinguas, nulla caussa erit, cur σποδοῦς vocabulum, cuius et praesentiam quae consequuntur, non ferent, ex Coisl. et Mutin. adsciendum autemes. Vide supr. I. 95. WESS.

141. 6. Ἐπ' ἀποσώρω] Legatur ἀποσώρω. RHOD. Μηνυθείσης — πράξεως ἀποσώρω] Festinanti Rhodom. sollemnium formula ἐπ' ἀποσώρω fraudi fuit. Id bene, quod in vulgato πράξεως ἀποσώρω vitium animadverterit, etiam invitis Codd., sicuti factum, corrigendum. Ἀπόσωρος fur manifestus est et consequenti ratione, qui aliquo in scelere deprehenditur; unde δίκη κατὰ ἀποσώρων in oratione Octaviani Caesaris ad Antonium, etsi prave vulgo ἀποσώρων, sicuti hoc loco, apud Appian. III. B. Civil. p. 869. de actione in percussores Caesaris, et κολάζειν τοὺς ἀποσώρους Thucydid. VI. 38.; praetereaque πράξις ἀπόσωρος, quae manifesto tenetur, et μοιχεῖαι ἀπόσωροι in Philon. Iud. De Leg. special. p. 785. A. Conf. infr. XX. 44. WESS.

141. 16. Ἀλλὰ καὶ δόξαν] Omissum in priore membro μόνον, ut in his Hipparchi οὐδὲ γὰρ θέμις ἄνθρωπον ὄντα τῶν ἀλλοτριῶν συμπτόματα ἔγχορα νομίζειν, ἀλλὰ καὶ τὰ ἴδια κἀδεα, in Io. Stobaei Serm. CVI. p. 574.; plura ad I. 4. WESS.

142. 20. Κατὰ κόμας διώκισε] In urbium eversionibus, cum cives dissociantur et in vicos compelluntur, nihil hoc crebrius. Isocrat. Orat. ad Philipp. p. 132. de Lacedaemoniis, καὶ βουλομένον λημύρασθαι τὴν Βοιωτίαν καὶ διοικίσει τὰς πόλεις. Quare, Phocensibus a Philippo fractis, in Graeciae concilio constitutum cum esset τὰς πόλεις τῶν Φωκίων κατασκάψαι καὶ εἰς κόμας μετοικίσει infra XVI. 61., saepe illi διωκισμένοι Libanio Apolog. Demosth. T. I. p. 462. A. et διωκισμένοι κατὰ κόμας Demostheni Legat. Fals. p. 216. Transiit hinc verbum pronō decursu ad quodvis discidium indicandum. Philo Iud. De Rer. Div

Hered. p. 517. C. *ἤνίκα τις ἐπεχείρησε τὴν ἐκ γύσεως ἀρετὴν Σάρα* quaedam figurā, *a se seiungere conetur.* et p. 519. A. *φόβος δ' ἐμπαλιν, ἀλλοτριότητα ἐμποιῶν, διοιζίξει.* quae pluraque huius Iudaei, amat enim id verbi, si in numero habuisset Th. Gataker. I. Miscell. 3. p. 186. nullam, puto, litem morisset his Synesii *διώκισεν ὁ θεὸς τοὺς βίους* Epist. LVII. p. 198. C. Sed hoc ὁδοῦ πάρεργον. WESS.

142. 21. *Εἰς ἔδαφος κατέσκαψεν*] Strabo in eunte L. XVI. *ἣ μὲν οὖν Νίρος πόλις ἡγαρίσθη παραχρῆμα μετὰ τῆν τῶν Σέδρων κατέλυσιν.* Unde iusta conclusione conficitur, eius et Diodori actate urbem eo nomine non fuisse, aut, si exstiterit, parvam et neglectam. Tamen Tacitus XII. Ann. 13. Ptolem. VI. Geogr. I. et Ammianus XXIII. 6. Ninum, suo tempore superstitem memorant, forsan ex ruinis in oppidum paulatim adultam atque excitatam. Utcunque autem fuerit, videtur enim coniecturae quodammodo obesse Lucianus, et quae ad eum disputavit I. Palmer. Exercitat. p. 552., id quidem certe apparet, Ctesianam Nini eversae atque excisae narrationem concinere sacratis nobis libris, qui longo post tempore opibus et dignitate florentem describunt, haud posse, quod et diligenter Nic. Abram. VI. Phar. V. T. 15. admonuit. WESS.

142. 26. *Ἐντὶ δὲ πλείω τῶν χιλιῶν καὶ τριακοσίων*] Ctesiae vestigia cum premat Diodorus, isque c. CCC annis Assyriorum imperium circumscripserit, hoc spernere nolui: tantoque minus, ne sibi ipse contrarius sit atque illis pugnet, quae c. 21. tradiderat. WESS.

142. 28. *Τῶν — καλουμένων Χαλδαίων*] *Chaldaei, non ex artis, sed ex gentis vocabulo nominati* vere Cicero I. N. D. I.: incolere enim olim ea Mesopotamiae loca, quae Armeniam spectant, deinceps in Babyloniam transducti, sicuti erudita disputatione confecerunt viri doctissimi Iac. Perizon. Orig. Babyl. c. 6. et Camp. Vitringa in Esai. XIII. p. 413.: cum vero sacrorum essent administri, nam Belesys τῶν ἱερέων *ἐπιστημότατος, οὗς Βαβυλώνιοι καλοῦσι Χαλδαίους* supra c. 24., et astrorum scientiam, quaeque ex illorum positura singulis eventura praedicit, studiosissime pariter ac superstitionissime sectarentur, nomen, quod gentis erat, sectae atque artis esse coepit: quo usu utraque in lingua, quin et in Daniel. II. 1. nihil cognitius. Vid. A. Gellium I. 9. XIV. 1. et Ger. Io. Vossium II. Idololat. c. 47. WESS.

142. 32. *Τῆ μὲν διαρκέσει — ἔχουσι τάξιν*] In tanta veterum Codd. discordia hoc multis partibus melius censui. Chaldaei enim in reipublicae Babyloniae descriptione eum locum tenebant, quem in Aegyptia sacerdotes, sacris et coelestium considerationi,

prorsus ut illi, unice mancipati; quod ipsum de illis praedicaverat I. 28. WESS.

142. 37. *Τῶν μὲν καθαρμοῖς, τῶν δὲ θυσίαις etc.*] In more omnibus erat praestigiatoribus indoctam multitudinem eiusmodi offuciis circumscribere: quare *γοητείας ἅμα τισὶν ἐπωδαῖς* et *περίαιπτα καὶ μαγγανείας* illis Galen. *Simpl. Medic. Facult. VI.* p. 68. et *μαγγανείας, τὰς ἐπωδάς, τὰ περιήμματα, τὰς μαγικαίας* Io. Chrysost. *Orat. VIII. in Iud. T. II.* p. 681. C. contribunt: praeter ceteros vero Chaldaeis sive Genethliacis, iactantibus, posse fateri ordinem et malorum imminuentem pericula sacrificiis atque incantationibus sese mutare et avertere; quod Nemesio *Nat. Homin. p. 262. τρέπεσθαι τὴν εἰμαρμένην ἐρχαῖς καὶ θυσίαις*, Hierocli *Provid. et Fato p. 240. ἐπωδαῖς καὶ θυσίαις τὴν γένησιν παρατρέπεσθαι*. Iam quae Chaldaeis hoc loco adscribuntur incantationes, auguria, somniorum explicationes, extispicia, ea disciplinae eorum partem haud postremam fecisse S. Daniel c. 1. et 2. significat, uberiusque exsequitur Th. Stanley *Part. XII. Hist. Philosoph. Sect. I. 12. et II. 23.* WESS.

142. 42. *Τὰ περὶ τὴν ἰεροσκοπίαν*] Hiulus verborum hic est concursus; sequi debuerat, *καὶ ἀκριβῶς*. Alioqui praestaret *οὐκ ἀσάφως δὲ ποιούμενοι*. Vidit et hoc Rhodom. in notarum suarum correctionibus. WESS.

142. 47. *Καὶ πᾶς παρὰ πατρὸς διαδέχεται*] Pares erant hac parte Aegyptiis, gloriantibus Chaldaeos suae gentis esse colonos atque ex Aegypto scientiae principia asportasse, supra I. 81. WESS.

142. 51. *Συντρεφόμενοι τοῖς μαθήμασι*] Dixi ad I. I. 74. Paene autem suspicor, recte e Codd. quibusdam exulare voces *εἰς τὴν ἀστρολογίαν*, atque huc translata esse ex c. 32.; tametsi enim Chaldaeorum doctrinae is fundus esset, non omnes tamen in eam incumbabant, alia atque alia vanissimae artis praecepta sectati, sicuti ante ostendit. WESS.

143. 54. *Παρὰ τοῖς Ἑλλησιν ὁ πολὺς*] Noli contra concordem scriptorum librorum consensum niti, aut Diodoro, suam quod esset, negare. *Ὁ πολὺς, οἱ πολλοί*, saepe de vulgo, ut I. 21. WESS.

143. 58. *Ἐπὶ φιλοσοφίαν ἀποδόντες*] De Platone Aelian. *II. Var. H. 30. καὶ ἀπεδόσατο ἐπὶ τὴν φιλοσοφίαν*, sic enim Codd. vetusti *Sluisk. et Medic.*, ubi elegans dicendi genus, a palaestra translatum, diligenter, nec Diodori oblitus, exprimit Iac. Perizonius. WESS.

143. 61. *Τοιγαροῦν οἱ μὲν βάρβαροι διαμένοντες etc.*] Nisi id velit, Chaldaeos suae quaeque sectae principia constantissime inhaesisse neque quidquam innovasse, Strabonem adversarium habebit, liquidissime affirmantem *L. XVI. p. 1074. II.*

Chaldaeorum Astronomicorum genera plura esse pluresque sectas, iidem de rebus aliter atque aliter statuentes. WESS.

143. 67. Ἐνωρέας γενομένης] Pro ἐνωρέας in uno exemplari scriptum est ἐν γήρει, de qua scriptura viderint alii. Ego pro ἐνωρέας locum habere posse existimo ἐν αἰώρῳ. STEPH. Quid si μετεώρους, *suspensos*, h. e. in dubio relictos, legatur? RHOD. H. Stephani ἐν αἰώρῳ, nam Rhodom. μετεώρους, longius a vestigiis corruptae vocis deflectentes, non probo, haud omnino displicet: recte enim philosophos, nunc has, nunc illas in partes pronos, illis equiparaveris, qui oscillis iactantur: qua translatione αἰωροῦμενον πληθος eam multitudinem Appian. H. Bel. Civil. p. 714. appellat, quae in dubio vexatur, et κενῆς αἰωροῦμενους δόξαις, quos vanae opiniones agitant et efferunt, Philo Iud. De Temul. p. 245. C. et ἐπ' αἰώρας πορομένην κενὴν δόξαν, De Somn. p. 1116. C. Ne tamen penitus ea in coniectura acquiescam, Codd. faciunt Coislin. et Mutin., quorum ἐν ἀπορροία propius abest ab ἀποδόρῳ quam αἰώρα. Quare si ἀποδόρῳ de reciprocatione sicuti πάλῳδορῳ habuerint Graeci, id non damnaverim; cuius cum mihi exemplum desit, nihil temere finio, rem integram doctioribus relinquens. WESS.

143. 71. Ἐναντία δοξαζούσας] Probant hoc scripti libri, nec respuit Diodorus, cui familiare, sicut et aliis, adiectiva neutra adverbiorum loco usurpare. Vid. Ezech. Spanhem. in Aristoph. Plut. 46. WESS.

143. 72. Κόσμον γένειν αἰδιον] Sic et Psellus in Oracul. Chaldaic. p. 118.; quae tamen oracula non arbitror veras veterum Chaldaeorum opiniones complecti: ea certe habent, quae astrologiam, auguria, incantationes et victimas apertissime damnant. Vid. p. 62. edit. Opsopoei. WESS.

143. 78. Τῶν δ' ἀστέρων πολυχρονίους παρατηρήσεις] Conf. c. 31. et Sext. Empiric. V. Adv. Astrolog. p. 338. et A. Gellium XIV. 1. WESS.

143. 85. Κρόνον νομιζόμενον] Haud dubie ὀνομαζόμενον auctor scripserat. Mox dele καὶ μέγιστα. RHOD.

Ibid. Ἐπιφανέστατον δὲ καὶ πλεῖστα] Quo iure Sol, quem errantium numero excludit, hunc locum occupet, equidem non perspicio. Saltem Lunam addidisset, quae ex Chaldaeorum opinione cum sole inter errantes principatum tenebat: τῶν γὰρ ἐπὶ τὰ ἡγεῖσθαι τὸν Ἥλιον καὶ τὴν Σελήνην οἴονται Sext. Empir. V. Adv. Aströl. p. 343. de illis ait: atque hinc Porphyrio Isag. in Ptolem. Apotelesm. p. 181. Sol κράτιστος βασιλεὺς ἐν τοῖς μετεώροις, Luna vero ἰσχυροτάτη βασίλισσα ἐν τῷ κόσμῳ τῶν σφαιρίων. Immo vero ea si adesset, necdum bene se res haberet. Verborum series praecipuum aliquid de Saturni sidere et a Graecorum rationibus discedens praeferre videtur; quod fortasse, oratione parum mutata, coniiciendo assequemur: Ἰδίῃ δὲ τὸν νῦν —

Κρόνον ὀνομαζόμενον, ἐπιφανέστατον τε καὶ πλεῖστα καὶ μέγιστα προσημαίνοντα καλοῦσιν Βῆλον. *Praeter ceteros autem eum, qui Graecis Cronus, omnium clarissimum et plurima praecipuaque portendentem, appellant Belum.* Ita privum aliquid Chaldaeis et a Graecorum opinionibus dissentiens habemus, et optime consequuntur, τοὺς δὲ ἄλλους τέσσαρας ὁμοίως τοῖς παρ' ἡμῶν etc. Iam vero Saturnum Saturnique stellam vocasse eos Belum, testem do Theophilum III. ad Autolye. c. 30. et Servium in Aeneid. I. 646. 734. Scio Diodorum supra c. 8. et 9. tradidisse, Iovem Babylonios nuncupasse *Belum*; cuius vocabuli potestas late cum pateret, potuit idem nomen in re Astrologica utique et Saturno indi; quod et recte animadvertit Th. Stanleius, vitii hunc locum, negata tamen medela, accusans P. XIII. Hist. Philos. S. II. 37. Quod si tamen nimia videatur ultimae vocis mutatio, vide an Ἴηλον lenius sit: sic enim et Saturnum appellabant. Damascius in Bibl. Photii p. 1050. *Φοίνικες καὶ Σόροι τὸν Κρόνον Ἴηλ καὶ Βῆλ καὶ Βολάθην ἐπονομάζουσι.* WESS.

144. 92. *Τὰ μέλλοντα γίνεσθαι δεκνύουσι*] Multo haec plenius Sext. Empiric. V. Adv. Astrolog. p. 338. etc. WESS.

144. 4. *Ὅς προσαγορεύουσι βουλαίους θεοὺς*] Erat et hoc nomen in Aegyptiorum disciplina, sed ratione diversa. Illi XII Zodiaci signa eo titulo ornabant. *Τὰ μὲν δώδεκα ζώδια θεοὺς βουλαίους προσηγόρευσαν. τοὺς δὲ πλανήτας, ῥαβδοσφόρους* Schol. Apollon. Rhod. IV. 262. WESS.

144. 5. *Ἐπὲρ γῆν τόπους*] Reponatur ὑπὸ, ut sensus, e sequentibus elucens, postulat. RHOD. Iul. Caes. Bulengerus et haec attigit in Eclog. ad Arnob. p. 383., ὑπὸ γῆν resingens. Maluissem Rhodomanno transcripsisset, cui debetur. WESS. in Add.

144. 6. *Τοὺς δὲ ἡμίσεις ὑπὸ τὴν γῆν*] Hoc malui ob scriptos libros; quae sequuntur, utrosque spectant, et qui supra terram, et quique infra eam loca lustrant: sunt enim *Decani*, ut vocantur, *ῥύλακες καὶ ἐπίσκοποι ἀκριβεῖς τοῦ παντός.* Vide Th. Galaeum in Iamblich. p. 304. WESS.

144. 11. *Τῶν θεῶν δὲ κρόους εἶναι φασὶ*] Iamblichus de Myster. p. 160. τοὺς λεγομένους χροναιοὺς καὶ ἡγεμόνας appellat, ubi opportune Th. Galaeus, *Diodorus Siculus*, inquit, *apud Chaldaeos post Αεζαροὺς θεοὺς esse ait τῶν θεῶν κρόους δώδεκα τὸν ἀριθμόν. Ibi interpret inerte, Deos principes, pro Deorum principes vertit. Addit Diodorus, horum principum ἐκάστῳ μῆνα ἓνα καὶ τῶν δώδεκα ζωδίων ἓν ἀπορέμονσι. Haec omnia descripta habes in Kalendario Farnesiano apud Gruterum p. cxxxvii.; ibi enim duodecim signa cum suis tutelis comparent.* Haecenus ille; ego vero versionem, ut alias, correxi. WESS.

144. 23. *Ἄγαθὰ τε καὶ κακὰ*] Censebantur planetarum alii *benefici ἀγαθοποιοὶ*, alii *κακοποιοὶ malefici*, quidam *κοινὸν communes*, de quibus Sext. Empiric. V. Adv. Astrolog. p. 343. et Scholiast. in Ptolem. Tetrabibl. p. 17. multa de eorum viribus memorans. WESS.

144. 25. *Ἄλλοις τε καὶ βασιλεῦσι*] Tollatur *καί*. Nam copula in altero membro sequens distributionem *διχότομον* absolvit. STEPH. et RHOD. *Ἄλλοις τε βασιλεῦσιν*] Adstipulor viris doctissimis: inopportuna enim hic copulae praesentia est. Quae vero Chaldaei Alexandro, Seleuco et Antigono praedixerunt, eorum partem infra XVII. 112. et XIX. 55. describit. WESS.

144. 28. *Σελήνῳ τῷ Νικάτορι*] Placet Coislin. scriptura, quam numi et vetusti lapides in Spanhem. Dissert. VII. de Usu et Praest. Num. p. 413. affirmant. WESS.

144. 32. *Ὅστε τοὺς πειραθέντας θανατῶσαι*] Admiranda profecto haec Chaldaeorum divinatio, si ex astris non varias tantum tempestates, sed et mortis tempus, ceteraque, quae hominibus, quaeque rebus publicis accidunt, praedixerint; meritoque adeo Theophrastus *θανατοσιωτάτην εἶναι γίγσι τὴν τῶν Χαλδαίων περὶ ταῦτα θεωρίαν, τὰ τε ἄλλα προλέγουσαν, καὶ τοὺς βίους, καὶ τοὺς θανάτους, καὶ οὐ τὰ κοινὰ μόνον, οἷον χειμῶνας καὶ ἐπιδείας — πάντα δ' οὖν αὐτοῖς καὶ τὰ ἴδια καὶ τὰ κοινὰ προγινώσκειν ἀπὸ τῶν οὐρανίων*, apud Proclum IV. in Platon. Timaeum p. 285. Vide tamen A. Gellium XIV. N. A. 1. et Cicero. II. Divinat. 42. WESS.

145. 40. *Διὰ τὴν βραχύτετητα*] Si Chaldaei Lunam terra multis partibus maiorem et graviorem aut Soli aequalem censissent, quod Stoicis quibusdam et Parmenidi in mentem venisse Plutarch. II. Placit. Philosph. 26. scribit, fortasse haud rejiciendum foret *διὰ τὴν βραχύτετητα*. Sed id mihi non liquet. WESS.

145. 43. *Ὅτι τὸ γῆς ἀλλότριον ἔχει*] Abiit itaque a Chaldaeis suis Berosus, nativa Lunam luce candere opinatus, sive *pilam esse ex dimidia parte candentem, reliqua habere caeruleo colore*, quae Vitruvii verba IX. 4.; quam eius sententiam multis infregit Ger. Io. Vossius II. Idololat. 20. WESS.

145. 48. *Παραγράφει τοὺς χρόνους*] *Περιογράφει* oportuerat, ut dixi supr. I. 41. Si vero Chaldaei Solis defectiones nec praedicere nec certum earum tempus finire sustinuerint, multum certe afuerunt ab ea artis perfectione, quae inter Graecos floruit: neque adeo iniuria Illust. Scaliger Praefat. in Manilium asseveravit, *Chaldaeos ὁλοσχερῆ tantum, non etiam ἀκριβῆ Astronomiae notitiam habuisse*. Vide tamen Th. Stanleium Part. XIII. Hist. Philosoph. Sect. II. 17. et Henr. Dodwelli Append. ad Dissert. Cyprian. c. 24. etc. WESS. Inperitiam Chaldaeorum in re Astronomica iam olim perstrinxit vir eruditione et natalium splendore insignis Ioan. Picus, Mirandulae Comes, L. XI. 2. in Astrolog. IDEM in Add.

145. 50. *Καὶ πιθανὰς ἀποδείξεις εὐποροῦσι*] Sic XIV. 98. *χορημάτων πλῆθος πολλῶν εὐπορήσας.* Haud scio tamen an εὐπορεῖν ἀποδείξεις sit eas urgere: quomodo Plutarch. VII. Sympos. I. p. 698. Β. *τοῦτ' ἄρα Ἐρασίστρατος ὀρθῶς πρὸς αὐτὸν ἠπόρησε.* Quod autem illi de terrae figura, idem de Sole et Luna Heraclitus, σαφροειδῆς τοῖς σχήμασι εἶναι affirmans in eiusdem Plut. II. Plac. Phil. 29. WESS.

145. 60. *Ἐτῶν γὰρ ἑπτὰ καὶ τετρακόκοντα* etc.] Iamblichus *ἑπτὰ καὶ εἴκοσι μυριάδας* in Procli Comment. in Timaeum p. 31.; sed bene Noster, a quo proxime abest Cicero I. Divinat. 19., CCCCLXX millia annorum Babyloniorum observationibus, ex ipsorum narratione, tribuens, ubi plura Davis., et imprimis Iac. Perizon., varium Myriadum Chaldaicarum numerum egregie explicans et confutans, Orig. Babyl. c. 2. WESS.

145. 73. *Ἐτὴ πεντακόσια — τῆς Ἀσίας ἄρχαντας*] Vid. Herodot. I. 95., qui distinctius *τῆς Ἰνδοῦ Ἀσίας ἐπ' ἔτα εἴκοσι καὶ πεντακόσια.* WESS.

145. 75. *Τὸν ἀμφισβητήσοντα*] Muta o in a, Aoristi primi flexione. RHOD.

146. 78. *Ἰπὸ πολλῶν ἔτων*] Praepositio supervacanea est. RHOD.

146. 79. *Ὀνομα Κουζάρην*] Vel lapsus est memoria Diodorus, vel suo tempore Herodoti textus aliter legebatur; nam hodie Deisees apud Herodotum legitur. PALM. *Ὀνομα Κουζάρην*] Puto memoriae vitio in hunc errorem sese induisse Diodorum; qui Herodotum si consulisset, et *πολλὰς γενεάς*, quibus rex non fuerit, qui Assyriis gloriam imperii dubiam faceret, et *τοὺς πλησιωζόρους*, quos prius Medorum rex in suam ditionem redegerit, missos fecisset, aliaque melius digessisset. Confer Herodot. I. 95. 100. et quae in Diodorum disputavit Doctissimus Freretus in Comment. Acad. Inscription. T. VII. p. 564. WESS.

146. 88. *Κατὰ τὸ δεύτερον ἔτος τῆς* etc.] Neque hoc in Herodoto ita perscriptum reperies: Diodorus conclusione quadam ex regum Medorum annis et Cyri principio, quod ipse in Olympiad. LV. annum primum coniecit, teste Africano in Euseb. X. Praep. Evang. c. 10., id confecisse videtur. WESS.

146. 90. *Κτησίας δὲ ὁ Κρίδιος τοῖς μὲν χρόνοις ἀπῆρξε* etc.] In vulgatis *τοῖς κατ' Ἡρόδοτον μὲν χρόνοις — κατὰ τὴν Κέρον στρατείας* et ingratum et vitiosum quid tinnit: compelluntur enim idem in tempus Herodoti aetas et Cyri minoris expeditio, quae spatio disiunctissima sunt. Herodotus belli Peloponnesiaci principium vivendo attigit, ut Dionysius T. II. p. 139. et Pamphila in A. Gellii XV. 23. docent; ab eo ad iactantiam Cyri expeditionem sunt anni plus xxx. Praeterea repetuntur *κατ' Ἡρόδοτον*, quae paullo ante posuerat, addunturque *κατὰ τὴν Κέρον στρατείας*, qua praepositionis iterata geminatione nihil

insuavius: neque hoc tamen vehementer urgerem, cetera si convenirent et congruerent. Doctissim. Rhodom., vitium credo suspicatus, verterat, *Herodoto recentior*. quod et ego, si μεθ' Ἡρόδοτον legeretur, non prorsus improbarem. Novi Cl. Salmas. in Solin. p. 871. propterea insultasse Rhodomanno; nec demonstravit tamen Ctesiam Herodoto aequalem fuisse, quem Photius Cod. LXXII. p. 107. νεότερον εἶναι Ἡροδότου diserte ait. Equidem non inficias ivero, fieri potuisse, ut sene Herodoto Ctesias nasceretur; nego tamen, quod vulgata Diodori verba innuunt, Herodotum eo tempore cum Ctesia vixisse, quo Cyrus expeditionem in fratrem Artaxerxem ingressus est; id enim nemo alius memoriae prodidit. Deleo itaque, obsecutus scriptis libris, verba καθ' Ἡρόδοτον, intempestive e praecedentibus in hunc locum inculcata. WESS. Vindicias vulgatae scripturae nuperrime paravit vir egregius Io. Georg. Walther in erudita Prolosione Historica, quam eius humanitati debeo. Addamus verba ex Sect. 12. *Diodorus Siculus καθ' Ἡρόδοτον, inquit, μὲν χρόνοις ὑπῆρξε. quod tam falsum non est, ac Iosephus Scaliger putavit, neque vertendum, ut Rhodomannus fecit, Ctesias Herodoto recentior. Constat enim underigesimo belli Peloponnesii anno res gestas in literas retulisse, ut Marshamus ostendit. Duodecim post annis contigit proelium Cyri iunioris cum fratre Artaxerxe Mnemone, in quo captus est Ctesias, atque ob artis medicae scientiam Artaxerxi amicus factus. Quibus datis, quis Ctesiam non putet Herodoti, etsi senis, temporibus vixisse? Quae quidem ego pulcre disputata agnosco, nec muto tamen sententiam. IDEM in Add.*

146. 93. *Ἰὰ τὴν λατινικὴν ἐπιστήμην*] Vide Strabon. XIV. p. 969. et Plutarch. in Artaxerxe p. 1017. WESS.

146. 95. *Ἐξ τῶν βασιλικῶν διαφθερῶν*] Hieronym. in Zachar. V. 1. *volumen — Hebraice Megella* חֲמַלָּה *dicitur, et ab Aquila et Theodotione versum est διαφθέρα.* Meminit autem harum membranarum et Agathias II. p. 66. A. *ὡς καὶ ἐν ταῖς βασιλείοις διαφθέραις ἀναγεγραμμένα.* et multis ante eum natum secalis Esdras VI. 2. atque auctor Historiae reginae Estherae II. 22. VI. 1. X. 2. confirmantque, quod hic traditur, publica auctoritate Chronica Persica scribi solere. Conf. Ger. Io. Vossium Art. Histor. c. 32. WESS.

146. 98. *Καὶ συνταξάμενον*] *Καὶ συνταξάμενος* correxerat III. Scaliger, sed sine gravi caussa. WESS.

146. 3. *Μαρδάκιον*] Hoc praetuli ob scriptos libros, Euseb. Canon. p. 37., Syncellam Chronograph. p. 197., qui tamen ambo viginti dentaxat annos illi inputant. WESS. Meliorum librorum scripturam *Μαρδάκιον*, a qua proxime abest Gemisti *Μαρδάκιον*; confirmat Eusebius p. 46. Mai.

146. 5. *Ἀγοτάριον*] Sic Euseb., Syncell., qui annos illi dant xxx, scriptique Codd. plerique omnes. Mox et *Ἀγοταίων*



malui, quo modo in sequentibus Diodorus ipse appellat, et Nicol. Damascenus Excerpt. Vales. p. 426.; Euseb. vero et Syncell. in regum Medorum indice Arbianen et Artaeum praetereunt. WESS.

146. 9. *Παρσώδηρ τὸν Πέροσηρ*] Genuinum hominis nomen *Παρσώνδης*, uti in Gemisto, erat; atque ita Suidae in *Σηοδρῶδ*, et Nic. Damasceno, etsi non admodum constanter, dicitur. WESS.

146. 13. *Ἐν τινι κρίσει λυπηθέντα*] Lis erat Parsondae cum Nanaro, Babyloniorum regulo, ob insignitam iniuriam, qua Babylone adfectus erat: rex captus arbiter, et a Metrapherne eunucho, quem Nanarus ingenti pretio sibi conciliarat, expugnatus, litem dederat secundum Nanarum. Parsondas, vindicta de eunucho et Nanaro sumpta, ab Artaeo descivit, et bellum, quod hic describitur, movit. Discimus haec ex Nicol. Damascen., qui de Parsondae iniuria et lite diligenter, Excerpt. Vales. p. 426.—437. WESS.

146. 15. *Παρ' οἷς ἦν ἐκδεχόμενος*] Reducito ex margine *ἐκδεδομένος*, haud dubie *γνήσιον*. RHOD.

147. 21. *Πρὸς ταῖς εἰς τὴν κρίσαν εἰσβολαῖς*] Sermonis genius id requirit: atque ita c. 2. *εἰς ἣν εἰσὶν εἰσβολαὶ στεναὶ παντελῶς*. Herodot. II. 75. *εἰσβολὴ ἔξ οὐρέων στερινῶν ἐς πεδίον μέγα*. et sine fine alii. Mox *στρατεύσατος* simili ex caussa praetuli. WESS.

147. 31. *Παραιτησόμενον τὸν διαδεχόμενον*] Etsi hoc non prorsus improbem: simile enim Aristophan. Equit. v. 37. *Ἐν δ' αὐτοῖς παραιτησόμεθα*: videtur tamen *παραστησόμενον* Codd. aliorum haud inconcinnum, ut Parsondes successorem, in medium productum et lateri adpositum, diris illigasse, si pacem cum Medis coleret, significetur. WESS.

147. 40. *Ἀσπιβάραρ*] Rectum hoc esse, sequentia indicant et Nic. Damascen. Excerpt. Vales. p. 438.; Syncellus et Eusebius hunc et decessorem eius inter Medos reges non agnoscunt; habet autem Alexander Polyhistor, a Nabuchodonosoro belli socium contra Hierosolymitanos adscitum memorans in Eusebii IX. Praep. Evang. c. 39. WESS.

147. 44. *Ἐπ' ἔτη πλείω*] De belli, quod rescire potui, diuturnitate nihil alii narraverunt; neque adeo decernere possum, quid tribui oporteat illis libris, qui *ἔπ' ἔτη δύο* praeferunt. Brevi post *παρ' ἀμφοτέροις* perplacet. WESS.

147. 46. *Ἐπὶ τοῖσδε συνθήσασθαι*] *His legibus*. Thucydid. VIII. 18. *ἐπὶ τοῖσδε ξυμμαχίαν ἐποιήσαντο*. ubi plura Clariss. Duker.; vide et supra c. 24. Pax autem Sacas inter et Medos coit, postquam Stryangaeus, Astibarac gener, Zarinam victam et equo deiectam, captus ipse amore, dimiserat, ut ex Dionysio Halicarn. et Io. Tzetze ostendit H. Vales. ad Nic. Damascen. p. 438. WESS.

147. 52. Ὀνομα Ζαρίαν] Nic. Damascen. *Zarinaeam* appellat, feminaeque magnum animum, castos mores, ceterasque virtutes meritis laudibus praedicat. Ctesias longa oratione eius res gestas, Stryangaei amorem, violentunaeque ob repulsam interitum descripsit; quae pleraque omnia a Diodoro neglecta, memorabili diligentia in ordinem redigere singulari dissertatione adnexus est L. Boivinius in Comment. Acad. Inscript. T. III. p. 83. WESS. V. Anonymus de mulieribus bello claris in Biblioth. d. alt. Litt. u. Kunst VI. p. 11. s. et ad illum Heerenius, qui Diodoro Ζαρίαν restituebat, quo ducere videtur Veneti Ζαρίαναν.

147. 53. Γυναικας ἀλχημους ἔχει] Tali ingenio fuit Spathra Sacarum regina, Cyri aetate, de qua Ctesias in Photii Biblioth. Cod. LXXII. p. 107. et Theon Progymn. c. 9. p. 112., sed ex Ctesia adiuvandus; tali Tomyris, Sauromatides apud Platon. VII. de LL. p. 804. E., Albanorum et Hiberorum feminae in Appian. Mithridat. p. 401., tali Amazones, de quibus c. 45.; non omnes quidem e Sacis, sed aut vicinae aut eiusdem originis. WESS.

148. 59. Τῆς δὲ χάριτος πολλὴν ἐξιμερῶσαι] Vide I. 15. WESS.

148. 69. Τιμὰς ἡρωϊκὰς ἀπορέμει] Multum intererat inter honores Heroicos et illos, qui diis deferebantur: his victimae maectabantur, qua in re perpetuus usus verbi θύειν, illis scrobes effodiebantur, et ἐραγίσματα sive inferiae dabantur. Plutarchus T. II. p. 857. D. τούτοις δὲ ὡς ἡ θαστοῖς καὶ Ἑλλώσιν ἐραγίξαι δαῖν οἴεται, ἀλλὰ μὴ θύειν ὡς θεοῖς. Atque hoc honore urbium conditores, et qui de publica re bene meriti erant, plerumque ornabantur, ut IV. I. 24. 30. V. 65. Confer Desid. Herald. in Martial. X. 61. et infra IV. 40. WESS.

148. 73. Ἀσπάδαν τὸν υἱὸν διαδέξασθαι] Astyagem, *Aspadam* sive *Apandam* nominari, neminem ante Diodorum dixisse, adfirmat Io. Marsham. Can. Chron. p. 523.; quod unde acceperit, equidem iuxta eum illis scio, qui ignorant. Secutus est Diodorus Ctesiam, atque ex eo nobis annumeravit Medorum reges, vix alibi obvios. Cur itaque negabimus indidem et hoc nomen prompsisse? Nam Photii silentium si valeat, eradendi plerique Medorum erunt reges, ab eodem, cum Ctesiam exciperet, neglecti. Astyagem autem, ne id praeteream, Ἀστειζάν Ctesias nuncupavit, Photio Cod. LXXII. p. 107. teste. WESS.

148. 80. Ἐν μέσῳ διέξιμεν Infra XIX. 63. ἐν μέσῳ πάλιν τὰ κατὰ τὴν Ἑθρώων διέξιμεν. et c. 43. huius libri, περὶ δὲ τῶν Σαρδῶν ἐν μέσῳ διέξιμεν, i. e. suo ordine, deinceps, ut bene monuit G. Budaeus Comment. L. Gr. p. 772. pluribusque illustravit Iac. Gronovius ad Arrian. III. Exp. Alex. c. 26. p. 142. WESS.

148. 81. *Ἡ τοίνυν Ἰνδικὴ τετράπλευρος οὔσα*] Putet aliquis mendam esse in hac sententia; nec est tamen. Nominativus, usitata Graecis structura, absolute ponitur. *Quod ad Indiam attingit, eius quatuor laterum, quod ad orientem vergit etc. mare ambit.* Sic XI. 60. *πλεῖστας οὖν — πρὸς τὴν Καρίαν, τῶν παραθαλαττίων πόλεων ὅσαι ἦσαν — ἀπωρισμέναι, ταύτας συνέβη ἀποστῆναι.* Heliodor. IV. p. 162. *οἱ μὲν δὲ Θεαταῖ, μετῴρους ἄπας ἐπὶ τὸ μέλλον.* Cuius generis ex Aeliano multa collegerunt docti commentatores ad II. Var. Hist. 11. et in Herodotum II. 66. clariss. Iac. Gronovius. WESS.

148. 83. *Τῆς δὲ πρὸς τὰς ἄρκτους*] *Syntaxis τὴν προ τῆς exigit.* RHOD.

148. 87. *Μέγιστος ὢν σχεδὸν τῶν ἁπλῶν*] Sequitur Ctesiam, qui fluvium multo amplissimum facit in Photii Cod. LXXIII. p. 144.; Strabo vero XV. p. 1027. et Arrian. Indic. c. 4. Gangem Indo longe maiorem perhibent. WESS.

148. 88. *Μέγιστος τῆς ὅλης Ἰνδικῆς ἐπέκεινται*] Videntur et haec eodem e fonte manasse. Ctesias enim Indiam reliquae Asiae magnitudine aequalem affirmaverat, auctore Arriano Indic. c. 3.; quo loco et in Strabon. XV. p. 1010. regionis longitudo et latitudo ex Eratosthene et Megasthene haud paullo contractior describitur. WESS.

148. 94. *Ἀσπίους ὄντας τοὺς γνώμονας*] Haec quae sequuntur explicabit Arrian. Indic. c. 25. et Lucanus III. 250.

*Tunc furor extremos movit Romanus Oritas  
Carmanosque duces, quorum iam flexus in Austrum  
Aether, non totam mergi tamen adspicit Arcton.*

*Lucet et exigua velox ibi nocte Bootes.*

et quae pro Lucano in Ioseph. Scaligerum disputavit Iac. Palmerius Apolog. p. 925. WESS.

149. 7. *Πολὸν πρόχει τῶν κατὰ τὴν Ἀιβέρην*] Diximus supra c. 16. Potuisset autem his adstruere ea omnia, quae de elephantis commentatur c. 42. Habent enim illic locum parum commodum, neque adeo iniusta Abbatis Terrassonis suspicio esset, hinc ea migrasse istam in sedem, nisi similem paene locum Strabo et Arrianus elephantis Indicis dedissent. WESS.

149. 12. *Πολυκαρπία γέρονσα — κατασκευάζει*] Saepae quidem participium *γέρον* et *γέρονσα* talis locum sermonis quadam elegantia occupat, unde illibato sensu abesse posse videatur: veluti in his Plutarchi de Liber. Educand. p. 5. D. *ἐπειδὴ τῶν μὲν ἐχόντων πολλάκις ἀγείλετο, fortuna, τοῖς δ' οὐκ ἐλπίσουσι γέρονσα προσήγγεκε.* et Iosephi XVIII. A. 1. 6. 9. *ὦ παῖ, — σοὶ γέρον ἐγγειρίζω τὴν Ῥωμαίων ἡγεμονίαν.* Sive enim inter vertendum negligas, seu *ultro, sua sponte* esse velis, ut saepe oportere Cl. T. Hemsterh. ad D. Mort. VI. 3. Luciani egregie

docuit, parum profecto referet. Hic tamen quod amplexus sum, multo videtur opportunius. WESS.

149. 26. Τὸ προσαγορευόμενον βόσπορον] Strabo semel iterumque βόσμορον, frumenti quoddam genus, tritico minus atque inter amnes nascens, ex Onesicrito appellat XV. p. 1012. A. 1015. A., et forte melius, uti visum quoque Is. Casaubono. WESS.

149. 28. Ἐδωδίμους καρποὺς] Aut ἔχουσι deest, aut ei simile verbum. STEPH. Ἐδωδίμους καρποὺς φέρει] Rhodom. coniecerat ἔχει deesse; haud male ad sensum. Quod dedi, melius est, scriptorumque librorum iudicio nititur. WESS.

149. 32. Διτιτῶν γὰρ ὄμβρων ἐν αὐτῇ γινομένων] Demior neminem advertisse vitium, quod hunc locum occupat; cum tamen sequentia haud obscure id ostenderent. Firmant Codd. vetustorum scripturam haec Strabonis XV. p. 1012. A. ἐν οὖν τούτοις τοῖς ὄμβροις (θερινοῖς) λίνον σπείρεται καὶ κέγχρος. πρὸς τούτοις σήσαμον, ὄρυζα, βόσμορον· τοῖς χειμερινοῖς δὲ καιροῖς πυροὶ, κριθαὶ, ὄσπρια καὶ ἄλλοι καρποὶ ἐδωδιμοί. sunt enim his gemella. Adde p. 1016. A., ubi ex Eratosthene et Megasthene non dissimilia memorat. Scripsi autem brevi post τὸ βόσπορον, quoniam ita uterque et Diodorus et Strabo solent. WESS.

149. 38. Πάντων δὲ τελεσφορομένων] Μὴ ante participium inseratur. RHOD.

149. 45. Κατ' ἐναντιὸν — γίνεσθαι] Haec Scholion redolent, a librario, ut superiora illustraret, nimis officiose additum: constat quidem certe et congruit oratio, si hinc elimines. Quae sequuntur, omni ex parte non videntur integra: ipsa verborum series pro se id loquitur, et haec Strabonis eadem de re XV. p. 1016. A. τοὺς τε ξυλίλους καρποὺς γεννᾶσθαι πολλοὺς, καὶ τὰς ῥίζας τῶν φυτῶν καὶ μάλιστα τῶν μεγάλων καλάμων, γλυκείας καὶ γύσει καὶ ἐψήσει, χλιανομένου τοῦ ὕδατος τοῖς ἡλίοις, τοῦ τ' ἐκπίπτοντος ἐκ Διὸς καὶ τοῦ ποταμίου. Conveniunt enim ita, ut eodem ex fonte hausta putes. Accedunt veteres libri, pauca ad sententiam adstruentes. Fuit certe cum opinarer, posse, inducto Grammatici interpretamento, omnia ad hunc modum refingi: καὶ τὴν ἀπὸ τῶν ὄμβρων — γινομένων γεννᾶ τε τούτων δαψίλειαν, χλιαρῶν πιπτόντων ὑδάτων ἐκ τοῦ περιέχοντος ἀέρος, καὶ τὰς ἐν τοῖς ἔλει ῥίζας ἔψοντος etc., ut dicat, *regionis eius campos dulci amnium et imbrium copia madidos, eorum fructuum et radicum*, de quibus egerat, *uberem abundantiam proferre, depulentibus tepefactis aquis et aestu palustres radices percoquente*. Nunc nihil admodum decerno, relictisque, quae mihi in mentem venerant, rem integram ad consilium eruditiorum refero. WESS.

150. 52. Γεωργῶν ἱερῶν — ἐομέτων] Repetuntur haec c. 40. WESS.

150. 58. Οὔτε δειδροτομοῦσιν] Similis humanitas Timothei, qui οὐκ ἐπέτρεπε οὔτε οἰκίαν, οὔτε ἔπαιλιν καθαιρεῖν, οὐ μὴν οὐδὲ ἡμερῶν δένδρον ἐκκόπτειν, in Polyaei III. Stratag. 10. 5.; cui consentanea lex divina Deuter. XX. 19. Vide H. Grotium III. Iur. Belli ac Pac. 12. 1. WESS.

150. 65. Τὸ πλάτος γενόμενος σταδίων τριάκοντα] Addit L. XVII. 93. duo stadia, quam xxxii stadiorum latitudinem eidem fluvio tribuit Plutarch. Alexand. p. 699. E. Alii haud paullo ampliorem perhibent in Strabon. XV. p. 1027. C. Arrian. Indic. c. 4. et Aelian. XII. H. A. 41. WESS.

150. 68. Τὸ ἔθνος τὸ τῶν Γαυδαριδῶν] Sic saepe XVII. 93., quamquam editio Basileensis Γαγγαριδῶν, ad morem modumque Latinorum, qui *Gangaridas*, tanquam a Gange, appellare plerumque solent. *Γαγγαρίδας*, uti Co. et Mutin., habet Dionysius Perieges. v. 11-14. Vide Cl. Salmas. in Solin. 698. WESS.

150. 73. Τοὺς Γαυδαρίδας οὐκ ἐπολέμησε] Videbitur fortasse hoc insolentius: sed et ita Iosephus II. B. I. 10. Α. πολεμῆσαι δὲ ἡμῶς ὁ πέμπτος ἔμει, οὐκ ἐγώ. Arrianus IV. B. C. p. 1065. καὶ ὅσοις ἐπολέμησαν, ἐς συμμαχίαν αὐτοῦς ἔπεισαν. Plura ad IV. 63. WESS.

150. 76. Τετρακισχίλους ἐλέφαντας] Eadem haec habet L. XVII. 93. atque inde Curtius IX. 2. WESS.

150. 83. Ὑπανιν καὶ Ὑδάσπην καὶ Ἀχεσίνον] Priorem Ὑμασιν XVII. 93. vocat, *Hyrcasin* Plinius VI. 17. et Curtius XI. 1., quod nomen latere videtur in vitiosa Coisl. et Mutin. scriptura, Ὑπανιν Strabo XV. p. 1025.; ut variatum eo in nomine fuisse videatur. Alterum Ὑδάσπιν, quomodo Mutin. et Reg., I. 41., sed melius XVII. 96. *Hydaspet*. Tertium *Acesinem* Ἀχεσίνην eiusdem libri c. 95., sicuti plerique omnes veterum: quare et hic corrigendum arbitror. WESS.

150. 85. Ποιῖ κατάθρονον κηπέμασι καὶ καρποῖς] Novi γῆν ἔνδοξόν τε καὶ κατάθρονον Aeliani X. H. A. 37. et κήπους κατάθρονον Euripidis Elect. v. 777.; sed hoc singulare est, et affluentem copiam, quod G. Budaeo visum, indicat; qua translatione Plautus Epidic. I. 2. 18. *Quem quidem ego hominem irrigatum plagis pistori dabo*. WESS.

150. 90. Τῆν τε Σαυθῶν καὶ Βαυτριανῶν etc.] Conf. Strabon. XV. p. 1021. Cl. Ptolemaeum VII. Geograph. 1. et Agathe-mer. II. 6. WESS.

151. 95. Ὀνομαζόμενον Σίλαν] Sic et Arrian. Indic. c. 6. Strabo *Silium* XV. p. 1029. vocans, quae de eo traduntur, Democrito et Aristoteli, viris prudentissimis, fabulis similia fuisse visa recte addit. Corruptum fontis et fluminis nomen est in Antigono Carystio Hist. Mirab. c. 161.; nam Io. Meursii medicina, ut magnam partem praestabilis est, ita locum haud persanat. Tu lege, τῆν δὲ ἐν τοῖς Ἰνδιχοῖς κρήνην Σίλαν etc. una duntaxat adiuncta

litera: atque haud scio, an *stagnum Siden in Indis, in quo nihil innatet, omnia mergantur*, apud Plinium XXXI. H. N. 2. ex Ctesia, permutatis literis *A* et *I*, hinc natum sit. WESS.

151. 2. Ἐθνη πολλὰ καὶ παντοδαπὰ] Vide Megasthenem in Arriani Indic. c. 7. WESS.

151. 7. Ἐσθῆσι δὲ ταῖς δοραῖς τῶν ζώων] Dixi ad I. 43., quibus adde Straben. XV. p. 10-17. B. WESS.

151. 10. Τῆς χοείας αὐτῆς ἐκρηγομένης etc.] Eadem haec verbis prorsus similibus I. 8. exsecutus est. WESS.

151. 17. Διόνυσον ἐκ τῶν πρὸς ἐσπέραν τόπων] Indorum alii in Philostrati H. Vit. Apollon. 9. Bacchum advenam ex Assyria fuisse, alii suae regionis indigenam, Graeci Thebis ortum Indos domuisse perhibent: praecipue poëtae, fabulas vetustiores novis coloribus instruentes, de quibus Strabo XV. p. 1008. Videtur tamen pristini acri Heros, et multarum Asiae regionum victor, obscurioribus his fabularum involueris tectus. WESS.

151. 26. Ὀνομάζεσθαι δὲ τὸν τόπον τοῦτον Μηρόν] Respicit haec Diodori Etymologus in Διόνυσος. Merum autem montis in India nomen fuisse, agnoscunt Indi Tamuli, veteri e fama memorantes, Herosem taurinis cornibus in urbe *Nisadibara*, haud longe a *Meru* monte natum, carnibusque pastum ac vino repleri solitum, diis bellum fecisse: quae *Nysam* urbem *Merumque* montem et Bacchi apud Indos fabulas haud parum illustrare bene monuit Theoph. Sig. Bayerus Hist. Regn. Baetr. p. 3. WESS.

151. 30. Τῆς παραθέσεως τῶν καρπῶν ἐπιμεληθέντα] Docuisse Bacchum arandi serenaeque modum Indos, Arrian. Indic. c. 7. et plures alii auctores sunt. Putem tamen non adeo de *serendis ac plantandis fructibus*, quo modo κατὰθεσιν τῶν καρπῶν explicuit Rhodoman., hoc loco agi, quam conservandis et in herrea congerendis; id enim quae proxime consequuntur, videntur postulare. Sequor propterea scriptos Codd., ipsumque Diodorum, qui τὰς τῶν ἡμέρων καρπῶν παραθέσεις *fructuum recendendorum modum* III. 56. et *fructus in futurum congestos habere*, ἔχειν παραθέσεις σίτου XIX. 41. eosque in *necessarios usus conportare* παραθέσιν τῶν καρπῶν ποιῆσθαι εἰς τὰς ἐνδείας exprimere consuevit. Vid. supra I. 8. WESS.

152. 41. Τυμπάνοις καὶ κυμβάλοις κερῶσθαι] Ridet haec Lucian. D. Deor. XVIII. 1., tamen tympanorum iste et cymbalorum strepitus Indici moris est, sicuti Strabo XV. p. 1008. et 1017. C. et Theoph. Sig. Bayerus Hist. R. Baetr. p. 3. ostendunt: quamquam hic difficulter persuadebit *τυμπάνον* vocem ex India in Graecum sermonem migrasse. WESS.

152. 43. Ἰήρα τελευτῆσαι] Longe diversa de Baccho Indi in Arriani Indic. c. 8. WESS.

152. 51. Τὸ, τε ῥόπαλον καὶ τὴν λεοντῆν] Eadem Megasthenes de Mercuris armatura ex Indorum traditionibus in Ar-

riani Indic. c. 8. Vid. supr. I. 24. Appellabant autem Herculem suo sermone *Sandem*, ut Nonnus XXXIV. Dionysiac. v. 196. significat, et uberius declaratum est ad Hierocl. Synecdem. p. 710. WESS.

152. 58. *Εἰς ἅπαντας τοὺς τόπους ἀποδείξει βασιλέας*] Defendi hoc posse scio: vitii tamen aliquid huic loco adhaesisse, vetustarum dissensus schedarum admonet. Puto Diodorum scripsisse, *ἅπαντας ἀποδείξει βασιλέας*, generisque enallagen illam scripturae variantem discordiam peperisse; qua nihil tamen frequentius. Ioannes Epist. I. 5. 21. *τεχνία, γυλάζατε ἕαντοὺς ἀπὸ τῶν εἰδώλων*. et Epist. II. 1. 4. Liban. T. II. p. 31. C. *Ὁρῶ συμφοιτητῶν τε ἔθνη, τοὺς μὲν ἐν ἀρχαῖς φανέντας, τοὺς δὲ δικαζομένοις συμμάχους*. Non addo Homericum *γῆε τέκνον*, ne in re obvia, et saepe explicita, nimius videar. WESS.

152. 59. *Μίαν δὲ θνητάτα θρόνα*] Nomen illi erat *Pandacae*, de qua et patris amoribus absurda multa apud Arrian. Indic. c. 9. Indi nugantur. WESS.

152. 62. *Ἡαλίβοθρα*] Sita erat ad confluentes Erannoboae et Gangis aquas in Praesiorum regione, teste Arriano, cui *Ἡαλίβοθρα*, Indicor. c. 10.; longitudine stad. LXXX, latitudine xv, figura quadrangula, apud Strabon. XV. p. 1028. A. Vocis originationem ex Indorum sermone exposuit Th. Sig. Bayer. Histor. Regn. Bactr. p. 36. WESS.

152. 65. *Ὑδασι πληρομένοις*] *Τάφροις* femininum est: ideo *πληρομέναις* scribendum. RHOD. *Ποταμίαις ὕδασι πληρομένην*] Vulgo quod legebatur, id bene Rhodom. corrigendum censuit. Ego Coislin. sequor, et ad urbem refero, quam fluvialis aqua interluebat; nec intercedo tamen, si qui Rhodom. partes sectari velint. Fossam, urbi additam *γυλακῆς τε χάριν καὶ ὑποδοχῆς τῶν ἐκ τῆς πύλειος ἀπορροῶν* habet etiam Strabo XV. p. 1028. et Arrian. Indic. c. 10. WESS.

152. 66. *Τὴν ἔξ ἀνθρώπων μετάστασιν ποιησάμενον*] Vide supr. I. 19. WESS.

152. 77. *Ἐλευθέρους δ' ἐπάρχοντας τὴν ἰσότητα τιμῶν*] Hoc praefero ob scriptos Codd. Arrian. Indic. c. 10. *πάντας Ἰνδοὺς εἶναι ἔλευθέρους, οὐδὲ τινα δοῦλον εἶναι Ἰνδόν*. Simile Essenorum in Palaestina institutum erat, de quibus Philo Iud. Quod Om. Prob. Lib. p. 877. B. *δοῦλός τε παρ' αὐτοῖς*, inquit, *οὐδὲ εἷς ἐστίν, ἀλλ' ἔλευθεροὶ πάντες ἀνθεμποροῦντες ἀλλήλοις, καταγινώσκουσί τε τῶν δεσποτῶν, οὐ μόνον ὡς ἀδικῶν, ὁσιότητα λεγυνομένων, ἀλλὰ καὶ ὡς ἀσεβῶν, θεσμὸν γέσεως ἀναιροῦντων*. ubi opinor praestaturum, si *ἰσότητα λεγυνομένων* legeris. Vide eundem de Vit. Contempl. p. 900. B. WESS.

152. 81. *Εὐθήθεις γὰρ εἶναι*] Repone *εὐθες*. RHOD.

153. 83. *Εἰς ἐπὶ μέρη διήρηται*] Gemina his Strabo XV. p. 1029. ex Megasthene et Arrian. Indicor. c. 11., prodiderant

de Indorum institutis. Prorsus autem probabile est, hanc reipublicae eorum descriptionem ex Aegypto, ubi eadem consuetudo valebat, testibus Herodoto II. 163. et Diodoro I. 73., cum multis aliis, de quibus M. V. La Croze Histor. Indor. L. VI. p. 433., venisse. WESS.

153. 95. Ἐπὶ τὴν μεγάλην σύνοδον] Sic et Strabo. Videntur sollemni eo conventu de communi reipublicae deliberasse, philosophosque adhibuisse in consilium, ut quidquid observassent de fructibus, republica, animalibus, id illi in medium conferrent. Vide Porphy. IV. A. A. 17. de his philosophis. WESS.

153. 3. Λέγεται τιμωρίαν] Λέγεται significantius est. at plus soni habet ἀναδέχεται. RHOD. Ἄλλην οὐδέμιαν ἀναδέχεται τιμωρίαν] Ego compositum ob vetustos Codd. et sermonis usum malui. Philo Iud. De Cherub. p. 121. C. νομίσεις δὲ ἀλλότριον εἶναι, . . . . Σισύφειον τιμωρίαν ἀναδέχεται. Herodian. V. p. 565. δεδιότες, εἰ ἠττηθεῖεν, τὴν ἐφ' οἷς ἔδρουσαν τιμωρίαν ἀναδέξασθαι. Illa autem silentii poena non statim philosophis irrogabatur, sed tertia ubi vice inter divinandum aberrassent, Strabone et Arriano auctoribus; qua poena, iusta profecto, si omnes praestigiatores et plani plecterentur, bene utique humano cum genere ageretur. WESS.

153. 16. Χωρὶς δὲ τῆς μισθώσεως τετύρτην etc.] Quartam fructuum partem mercedis loco regi dedisse Strabo XV. p. 1030. A. scribit; quod vero mihi similis videtur. Mox εἰς τὸ βασιλικὸν τελοῦσι praeoptavi; non quod ineptum esset vulgatum: sic enim et Plato Theag. p. 121. D. χορήματα τελῆσαι τινὲ τῶν σοφιστῶν. et Noster XIII. 59. φόρον τελῆν τοῖς Καρχηδονίοις. sed ne tot librorum iudicio refragarer. WESS.

153. 20. Σκηρήτη δὲ βίω χοῶνται] Iustum hoc legitimamque diceres. Strabo de iisdem, πλήρηται καὶ σκηρήτην νεμόμενοι βίον. Tamen Αἰβύες οἱ Σκηρήται Polluc. Onomast. I. 74. et σκηρήτης βίος infr. c. 54. Porro, quod additur in Reg. καθὼς οἱ Κώμαιοι, id equidem unde venerit, nescio: respicit quidem certe Comanos Plinii VI. N. H. 16. eosque egregie iuvat. WESS.

Ibid. Κεννηγετοῦντες καθαρὰν ποιοῦσι τὴν χώραν] Quod quibusdam in libris additur ζωγοῦντες. id a librariis propter aves, quarum mentio sequitur, adiunctum arbitror. Vid. I. 24. WESS.

154. 28. Ἀλλὰ καὶ σιτομετρίαν ἐκ τοῦ βασιλικοῦ λαμβάνουσι] Nisi de illis acceperis, qui arma regi fabricabantur, falsa dixerit. Distinctius Strabo XV. p. 1033. τοῖς δ' ὀπλοποιοῖς καὶ ναπηγοῖς μισθοὶ καὶ τροφαὶ παρὰ τοῦ βασιλέως ἐκκεντῶν μόνω γὰρ λογάζονται. Nec dissentit Arrian. Indic. c. 12. WESS.

154. 31. Ἀνέσει καὶ παιδιᾷ πλείστη χοῶμενον] Non multo dissimilia de militaribus his viris Strabo, levi tamen mendo obitus, quod obiter eluemus. Οἷς, ait XV. p. 1033. C. τὸν ἄλλον



χρόνον ἐν σχολῇ καὶ τόποις ὁ βίος ἐστίν, ἐκ τοῦ βασιλικῶν διατι-  
τοιμένοις. Quae Latina hunc in modum fecerunt: *qui reliquum*  
*tempus otiosi agunt, in locis ab rege constitutis, ubi et victus*  
*eis praebetur.* Nimis profecto liberaliter: nihil enim Graeca de  
locis a rege constitutis. Tu lege πότοις, et convivia intellige, ad  
quae sumptus illis ex aerario regio suppeditabantur. Per autem fa-  
miliarem librariorum nationi harum vocum permutationem esse,  
Cl. Salmasius ad Achill. Tat. V. p. 339., Gilb. Gaulmin. in Eu-  
stathium de Ismen. Amorib. X. p. 402. et August. Bryan. ad Plutar-  
chi Themist. T. I. p. 249. edit. Londin. exemplis declararunt, neque  
ullam adeo dubitandi hac quidem de correctione materiam relique-  
runt. WESS.

154. 34. Τὸ τῶν ἐφόρων] Arriano ἐπίσκοποι Indic. c. 12.,  
at Straboni, sicuti et Diodoro, ἔφοροι. quod utrumque eandem in  
sententiam recidit. WESS.

154. 43. Καὶ τοὺς ἄρχοντας ἐκ τούτων ἔχουσι] Hie sequi  
debuerant, quae post παρέκθασιν de elephantis leguntur, εἰσὶ δὲ  
παρ' Ἰνδοῖς καὶ ἐπὶ τοὺς ξένους etc. usque τοῖς ἀμαρτάνουσι  
προσφέρονται. quae quidem ego non dubitem exscribentium so-  
cordia ex hoc loco eam in sedem immigrasse, parum profecto ac-  
commodam. Huc si revocentur, bene omnia procedent, nec quae  
de elephantis addit, minus opportuna videbuntur, simili loco col-  
locata ab Arriano Indic. c. 13. WESS.

154. 45. Οὐκ ἐστὶ δὲ γαμεῖν ἐξ ἄλλου μέρους] Si γένους  
ex libris Coisl. et Mutin. malueris, suffragabitur Strabo XV. p.  
1033. D. οὐκ ἐστὶ δ' οὔτε γαμεῖν ἐξ ἄλλου γένους, οὔτ' ἐπιτή-  
δευμα οὔτ' ἐργασίαν μεταλαμβάνειν ἄλλην ἐξ ἄλλης, οὔδὲ πλεί-  
ους μεταχειρίζεσθαι τὸν αὐτόν. Sed id perleve est et paene arbi-  
trarium. Illud quidem certe ex Strabone adparet, in his quae con-  
sequuntur, ἢ πλείους προαιρέσεις scribi oportere, aut, cuius in  
mentem doctissimo Rhodom. venit, δύο προαιρέσεις, uti fere Ar-  
rian. c. 12. WESS.

Ibid. Ἡ προαιρέσεις ἢ τέχνας] Post disiunctivam inseren-  
dum videtur δύο, ac sequens ἢ in καὶ forte mutandum. RHOD.

154. 52. Κύουσι δὲ τοὺς μὲν ἐλαχίστους etc.] Strabo iis-  
dem verbis exsequitur XV. p. 1031. B.; ut dubium esse non pos-  
sit, eodem ex Megasthenis fonte utrumque hausisse. Aristoteles  
biennio utrum ferre V. Hist. Anim. 14. adfirmat, quo respexisse  
arbitror Aelian. IV. H. A. 31. Paulo ante τετράποσι ζώοις oport-  
tuerat, quod neque Rhodomanno latuit. WESS.

154. 57. Ἐτη διακόσια] Ad trecentos annos elephantī vi-  
tam prorogat Philosophus VIII. Hist. Animal. 9. quem Plinius VIII.  
H. N. 10. sequitur. Longe vero seniore dabit Philostrat. II. Vit.  
Apoll. 12. et Aelian. IX. H. A. 58.; unde suo merito ἀμετροβίους  
Manetho I. 53. elephantos nuncupat. WESS.

154. 61. *Καὶ τελευτήσαντας θάπτονσιν*] Multo hoc rotundius. Strabo XV. p. 1034. τὰ χρίματα τῶν ἀποθανόντων, νοσοῦντων τε ἐπιμελοῦνται, καὶ ἀποθανόντας θάπτονσι. Induxi praeterea supervacaneas voces τοῦ ξένου, quae ante χρίματα vulgo sedem occupant, Mss. secutus. WESS.

155. 72. *Παρὰ τὸν Ἀράξην ποταμὸν*] Hanc sedem et Scythia tribuit Herodot. I. 201.; sed dubium est, quis ille Araxes? Mediae quidem illi fluvius est, e Matienis progressus, et proxime Issedones decurrens, Istroque de magnitudine decertans: quae tamen in Mediae Araxem haud bene conveniunt, nec Issedonibus adfinem, neque ea amplitudine. Quare Th. Sig. Bayerus probabili coniectura Volgam, *Rus, Ros, Ras, Aras* olim nuncupatum, esse contendit in Dissert. de Orig. Scythar. T. I. Commentar. Academ. Petropolit. p. 395.; cum enim Scythae accoluerunt, Issedonibus vicini, atque illis sedibus egressi Cimmerios, de quibus Herodotus, invaserunt, eorumque regiones occuparunt. WESS.

155. 81. *Τὰ κατώτερα, ἐχίδνης*] *Μίξοπαρθενὸν τινα Ἐχίδναν διαφέα* Herodot. IV. 8. appellat, in ceteris a Diodoro plurimum dissentiens; Herculem enim illi dat amatorem, cui filios Agathyrsum, Gelonum et Scytham pepererit: quam eius opinionem Stephanus in *Ἀγάθυρσοι*, atque alibi sequitur. WESS.

155. 84. *Σκύθας προσαγορεύσαι*] De gentis nomine Grammaticorum nugae sunt plures. *Καλεῖσθαι δὲ λέγονται Σκύθαι, ἢ παρὰ τὰ σκύτη, ἃ περιβέβληται· ἢ παρὰ τὸ σκύζεσθαι, ἢ τοι ὀργίζεσθαι*, inquit Eustath. in Perieges. v. 728. Dionysii. Promptior nominis caussa erat, si a rege et gentis conditore, ut hic, repeteretur: et tamen Herodotus IV. 6. Graecis nominis eius originem tribuit; qui cum admirabilem eorum in sagittando artem et industriam cernerent, sagittariosque ab iis *Scythas* dici audirent, id cognominis toti genti contulerunt; cuius vocabuli usus in Scythicae originis dialectis in nostram usque aetatem frequentatur. Conf. T. S. Bayerum de Scythar. Orig. p. 379. WESS.

155. 89. *Τοὺς μὲν Πάλους*] *Palos*, Scythicam gentem, nusquam legere memini, neque etiam *Napas*: fortasse tamen *Pali* latent in Plinii VI. N. H. 7. *Spaleis*, et *Napae* in eiusdem *Napaeis*, atque ab his *Νάπις, κόμη Σκυθίας*, de qua Ethnographus, nomen sortita est. WESS.

155. 94. *Μέχρι τοῦ κατ' Αἴγυπτον Νεῖλου*] Scytharum in Aegyptum usque excursum Iustin. II. 3. aliam Herodot. I. 105. memorant; uter intelligendus sit, non decerno. WESS.

155. 5. *Τὴν μὲν ἐκ τῶν Ἀσσυρίων*] Ipsa pro se oratio loquitur, verum hoc esse. Scythae coloniam deluxerunt, non Assyrii; bene ergo *ἐκ τῶν Ἀσσυρίων*. Quam vero coloniam in animo habuerit, coniectando fortasse assequemur. Pontam inter et Paphlagoniam *Assyrii*, quos alii *Syros* aut *Leucosyros* nuncupant, incolere, testibus Apollon. Rhod. II. 966. Dionys. Perieges. v.

772. et Strabone XII. p. 819. Syrorum aut Assyriorum esse propaginem, nomen argumento est; deducti itaque patriis e sedibus in eos sunt agros; et a Scythis quidem, si verum Noster dicit: neque enim eam Scytharum coloniam, quae in Cappadociae ora ad Thermodonta coeedit, de qua Justin. II. 4., intellexit, quippe ex ipsis Scytharum finibus emissam. WESS.

155. 8. Σαυρομάτας ὀνομασθῆναι] Ad Tanain et Maeotin Sauromatas locat et Herodot. IV. 57. et Mela I. 19.; qui si e Media fuerint deducti, sedem eo tempore mutasse videntur, quo Scythae, Cyaxare victo, Medis imperarunt, eodem I. 106. auctore. Verum haec dubia admodum sunt atque incerta: quae vero de Sauromatarum in Scythiae agros excursionibus adduntur, ea Strabo non infringit L. VII. p. 468. WESS.

156. 14. Ἐν τούτοις γὰρ τοῖς ἔθνεσι γυνιάζονται] Αἱ γυναικες, quas Codd. vetusti addunt, ex superioribus commodissime intelliguntur. De Sacarum Scytharumque mulierum virili animo vile c. 34. et Hippocrat. Aër. Aq. et Loc. p. 291. WESS.

156. 23. Καὶ τὸν Κῦρον — — ἀνεσταύρωσε] Qui praeter Nostrum in crucem fuisse sublatus a victrice regina Cyrum memorarit, neminem reperio; quae res mira esse non debet in ea scriptorum strage et incredibili discordia de Cyri regis exitu. Vide Io. And. Bosium ad Corn. Nepot. Reg. I. T. Hemsterh. in Lucian. Contempl. c. 13. et quae disputavi in Simsonii Chronic. A. M. 3475. p. 673. WESS.

156. 26. Πολλὴν χώραν ὁμορον καταδομαίειν] Non ignoro de incursionibus ἐπιδομαίειν Herodiano frequenti in usu esse; sequor tamen Cod. Mutin., cui optimus quisque adstipulatur. Sic c. 48. καὶ πολλὴν τῆς ὁμορον χώρας κατατρέχοντες ληστεύουσιν. et XI. 64. κατέτρεχον τὴν Αζωνικήν. Strabo XII. p. 854. C. καὶ κατέτρεχον τὴν ἄλλοτρίαν. Ioseph. I. B. I. 17. 5. Ἡρώδης δὲ τὴν πολεμίαν καταδομαίων, πέντε μὲν πόλεις καταστρέφεται etc. Conf. D. Hoeschel. ad Photii Biblioth. p. 72. WESS. Vid. Dorvill. ad Charit. VI. 8.

156. 31. Ἐθνους κρατοῦντος γυναικοκρατομένου] Legendum κατοικοῦντος, quod ex sequenti composito librarii oscitantia ita depravavit. Rhod. Non deerit fortasse, ut diversa hominum sunt studia, cui vulgatum se probabit; et possunt ad eius defensionem plura dici: ego tamen viro doctissimo adsentior. Quoniam autem inter Scythas deinceps haud defuerunt, qui muliebri imperio parebant, inde, ut proprium genti, de Sauromatis Plinius VI. N. II. 7. *Primo Sauromatae Gynaecocratumeni, unde Amazonum regna*, et ante eum Mela I. 19. WESS.

156. 39. Καὶ τῆς τίχης ἐφοοῖσης] Quidquid prospere cedit, in eo ἐφοοῖσαι frequens esse solet: unde ἐφοοῖσαν ἐπιβουλήν XI. 69. et ἐφοοῖσαν καζίαν in Plutarchi T. II. p. 548. D. non tantum invenies, sed et πράγματα ἐφοοῦντα in Polyb. IV.

48. VIII. 23., atque εἰροσῦντας κατὰ τὸν βίον apud Plut. de Audiend. Poët. p. 35. C. Bene ergo Phrynichus in Biblioth. Coisl. p. 466. Βίον εἴροια, ἢ εἰδοαιμορία καὶ εἰτηγία. παρὰ τὸ καλῶς ἕειν τὸν βίον. Contra ea δυσσοεῖν adversam experiri fortunam, de quo M. Meibom. in Epictet. p. 13. WESS.

156. 40. Θυγατέρα μὲν Ἄρεος — προσαγορευῆσαι] Instin. II. 4. paullo aliter, *duae his*, inquit, *reginae fuere, Marpesia et Lampedo.* — *et ne successibus deesset auctoritas, genitus se Marte praedicabant.* Alii omnes Marte satas prodidere, ut Lysias Orat. XXXI. 2. Ἀμαζόνες γὰρ Ἄρεος μὲν τὸ παλαιὸν ἦσαν θυγατέρες, οἰκοῦσαι δὲ παρὰ Θεσμῶδοτον ποταμῶν. qui dissensus, ut in fabulis, longe familiarissimus est. Porro quae sequuntur de imperio, quod in mares inhibuerunt, ea sine viris, uti plures voluerunt, haud egisse commonstrant. Vide P. Petium de Amazonib. c. 4. WESS.

156. 45. Τοὺς μὲν ἄρσενας ἐπήρουν] Ut prius membrum cum posteriori apte cohaereat, lubenter ita scripserim, *πληροῦν τά τε σέλιη καὶ τοὺς βραχίονας, ἀχρήστους κατασκευάζοντας* etc. Scio tamen posse servari ἐπήρουν et κατασκευάζοντες, modo pro ἐπιχαλεῖν legatur ἐπέκλαιον. Sed omnia malo in infinitivo modo, quod eo et in proxime praecedenti oratione usus fuerit. Est praeterea *θιλιτεῶν* legendum, non *θιλιτέων*. STEPH. Τοὺς μὲν ἄρσενας ἐπήρουν] Hic nihil ambigens *πληροῦν* lego, et proximum *κατασκευάζοντες* in *κατασκευάζειν* mutō, sed ante *ἀχρήστους ὥστε* inserto. Hoc ut fiat et praecedentes infinitivi et sequentes persuadent. RHOD. H. Stephani suspicioni satisfacit ἐπέκλαιον Codd. M. et Co.: nec expedit tamen cetera: quorsum enim referes *κατασκευάζοντες* eo genere et numero? Verum, credo, pervidit Rhodom., cui propterea adsentior. Summam autem et fidem excedentem Amazonum in mares liberos crudelitatem tetigit et Hippocrates, sed de rei veritate haud iniuria dubitans, Lib. de Articul. p. 820. his verbis: *μυθολογοῦσι δὲ τινες, ὅτι αἱ Ἀμαζονίδες τὸ ἄρσεν γένος τὸ ἐωυτῶν, ἀντίκα νήπιον ἔδν, ἐξαρθρόουσιν. αἱ μὲν, κατὰ γούνατα, αἱ δὲ, κατὰ τὰ ἰσχία, ὡς διΐθεν χωλὰ γίνονται, καὶ μὴ ἐπιβολέοι τὸ ἄρσεν γένος τῷ θήλει. χειρῶνάξιν ἄρα τούτοισι γρόονται ὀκόσα ἢ σκεπίης ἔργα, ἢ χαλκείης, ἢ ἄλλο τι ἔδραϊον ἔργον. εἰ μὲν οὖν ἀληθέα ταῦτα ἔστι, ἐγὼ μὲν οὐκ οἶδα.* quae prudentissimi senis, etsi complusecula, hunc in locum addenda censui, quod Diodoro paria facerent lucemque inspergerent. WESS.

156. 50. Τὸ ἔθνος τῶν Ἀμαζόνων ταύτης τυχεῖν τῆς προσιγορίας] Nominis Amazonum haec origo et caussa multis est placita; quamquam Graecorum in huius vocabuli natalibus fluctuationem mirifice produnt haec Schol. Aeschyli Prometh. v. 722. λέγονται δὲ Ἀμαζόνες ἢ ὅτι μαζίοις ἢ ἄρτοις οὐκ ἐχοῦντο, ἢ ὅτι ἔκλαιον τοὺς μαζοῦς, ἢ ὅτι οὐδ' ὄλωσ ἐῖχον μαζοῦς, ἢ ὅτι μαζόν

ὄνζ ἐθ' ἰλαζόν etc.; talia enim qui commentantur, rem sibi non liquere vel inviti fatentur: sed eo erant ingenio; in vocibus peregrinis omnia sibi, necubi caecutire viderentur, permittebant. Ego ex Scythia, unde feminae, repetendam arbitror, convenitque egregie, sicuti diligentissime Franc. Foris Otrokoksi Origin. Hungar. P. II. c. 14. ostendit, *Am' Azzon*, qui in Hungariae finibus *viraginem robustamque mulierem* eum maxime designant. WESS.

157. 54. *Τοῦτομα Θεμισκυραν*] Quae urbem subiectosque Themiscyrios campos illustrant, pleraque conduxit P. Petitus in Dissert. de Amazon. c. 28. Adde Aeschylum Prometh. v. 722.

— *Ἐνθ' Ἀμαζόνων στρατὸν  
Ἡξεις στυγῆροσ', αἱ Θεμισκυράν ποτε  
Κατοικιοῦσιν ἀμφὶ Θερωμόδοντα.*

et quae infr. IV. 16. WESS.

157. 60. *Ἡρωϊκῶς τελευτῆσαι*] Hoc et Ἡρωϊκῶς καταστρέψαι τὸν βίον Diodoro familiare admodum est in eorum morte, qui strenue pugnantes occubuerunt, ut inferius hoc cap. et IV. 28. XII. 3. 29. 74. XV. 79. WESS. Τὸν βίον addunt libri tres optimi: id non solet addere Diodorus: sed habent Polybius II. 28. 10. Strabo I. p. 156. B. Libanius vol. I. p. 61. R., alii, neglectumque est similiter ab deterioribus libris infra post καταστρέψαι.

157. 67. *Ἀρτέμιδι — Ταυροπόλῳ*] Colebatur in Tauris, gente Scythica; unde furto ablatam imaginem Iphigenia cum Graecis communicavit, rixae materia, pluribus eam in illis et Asia sibi vindicantibus, praebita, de qua Pausan. III. 16. p. 249. Vid. Euripid. Iphig. Taur. v. 88. et 1457. ac de victimis humanis, quas illi mactabant, infr. IV. 45. WESS.

157. 82. *Ἄθλον λαβεῖν παρ' Ἐἰρουσθέως*] Uberius hac de re L. IV. 16. WESS.

157. 90. *Ὡστε μηδ' ὄρομα τοῦ γένους — ἀπολιπεῖν*] Noli ita accipere, ac si mox ab expeditione Herculis ea clades Amazonibus esset inflata: fractae quidem ab eo Heroë sunt; nec deletae tamen, ut earum in Atticam excursio, et Penthesilea, Troiam profecta, indicant. Post deinceps vero, viribus magis atque magis attritis, paullatim a vicinis sunt debellatae atque exstinctae. Quae si P. Petitus considerasset, Diodoro nullam inpegisset dicam Dissert. de Amazon. c. 43.; nam quod urget ex L. IV. 55., id Africae Amazones praecipue spectat. WESS.

*Ibid. Ἀμαζονίδων*] *Ἀμαζόνων* Clar. 2., sine gravi caussa. Vid. Apollon. Rhod. II. 374. et Hippocrat. περὶ ἄρθρων p. 820. WESS.

158. 94. *Φόνον δ' ἐμαρτόν ἐπιτελεσάμενιν*] Inter venandum sororem Hippolyten invita interfecerat, si fidem meretur Quintus Calab. I. 24. WESS.

158. 99. *Ἦν' Ἀχιλλέως ἀναιρεθεῖσαν*] Eundem vide Quintum I. 593.; quicum haud bene congruunt, quae Eu-

stath. in Homer. p. 1696. et Servius Aeneid. I. 495. prodiderunt. WESS.

158. 4. *Μύθους ἡγοῦνται πεπλασμένους* etc.] Habet Amazonum Scythicarum historia, me quidem arbitro, veri admixtas partes, sed commentitiis fabellis mire obfuscatas. Cui enim persuaseris, dextram sibi omnes mammam praececidisse, ut expeditius arcum tenderent? rempublicam, in qua nulli mares, formasse? inmani matres in liberos melioris sexus crudelitate fuisse grassatas, expeditionesque in terras, longissime distitas, suscepisse? Aufer haec et pauca alia, haud utique insolitum erit, feminae arma si tractent. Habet ad hunc modum plura Strabo XI. p. 770., quae, tametsi omnia non probo, prudenter sunt disputata. WESS.

158. 10. *Ἐκαταῖος*] Hecataeus, domo Abderites, *περὶ τῶν Ὑπερβορείων* commentarios reliquerat in Schol. Apollon. Rhod. II. 677.; quos et Aelian. designat XI. H. A. I. *ἀνθρώπων Ὑπερβορείων γένος*, inquit, *καὶ τιμὰς Ἀπόλλωνος ἐκείθι ἄδουσι μὲν καὶ ποιηταί, ὑμνοῦσι δὲ καὶ συγγραφεῖς. ἐν δὲ τοῖς καὶ Ἐκαταῖος οὐκ ἠπίστωσεν, ἀλλ' ὁ Ἀβδηρίτης.* et Plinius VI. N. H. 17. WESS.

*Ibid.* *Ἐν τοῖς ἀντιπέραν τῆς Κελτικῆς τόποις.*] Doctissimus interpres *contra Galliam* vertit, ac si Hibernia aut Britannia esset: quam eius versionem Diodorus adfirmat L. V. 32.; Galliam tamen *τῆς Κελτικῆς* voce non posse hoc loco indicari, quae de Arctis, quibus insula fuerit subiecta, deque Borea adduntur, liquido commonstrant. Veteres, necdum exploratis Germaniae, quaeque ad septentrionem vergunt, locis, uno *Celtarum* nomine omnes eos describebant, qui agros arabant a Gallia Scythiam usque extensos, Ephoro in Strabon. I. p. 59. et ceteris, quos antestatus est Philip. Cluver. I. Ger. A. c. 2., auctoribus. *Κελτικῆ* ergo, ab Hecataeo memorata, maritimam et in septentrionem porrectam Germaniae regionem indicat: cui cum quodammodo obiecta sit *Sueonia* seu *Uplandia*, venit in mentem eruditissimo O. Rudbeckio Atlant. suae p. 371. insulam hanc, Hyperboreorum sedem, non aliam atque eam arbitrari: quam rem etsi studiosissime agat, et Diodorus illi suffragari videatur, haud iniuria vereor, ne non patriae suae studio nimium dederit: ea certe, quae de Arimaspiis, Hyperboreorum vicinis, deque Issedonibus ab Herodoto IV. 13. 33. Pausan. I. 31. Mela III. 4. Plinio IV. N. H. 12. prodita novimus, vix permittent, ut in ultimo Europae septentrione Hyperboreos quaesitum eamus. WESS.

158. 14. *Ἀπὸ τοῦ πορρότερόω κείσθαι τῆς βορείου προῆς*] Haec vulgatissima nominis causa, a poetis inventa, atque, ut fit, ab eorum interpretibus fabulosius explicata. Doctissimus Rudbeckius Atlant. p. 366. a Suenonum gente nomen arcessit: regnasse enim inter eos veteri aevo regem *Boreum* seu *Boream*, a quo *Oferborne*, i. e. celsissima stirpe geniti, sint dicti: Graecos, moris sui tenaces, *Hyperboreos* *Ὑπερβορείους* inde exstruxisse; quod

eius viri commentum, excogitatum solertissime, praeter blandientem veri speciem nihil admodum habet, cur adoptes. Equidem illis accessero, qui apud Strabon. I. p. 107. Ὑπερβορέους τοὺς βοραιοτάτους φασὶ λέγεσθαι, *Hyperboreos* dictos arbitrantur, quod maxime in septemtrionem vergant; opinorque id nominis primitus adhaesisse Graecorum colonis, qui litus Ponti septemtrionale arcolebant: atque ea in re consentientem habeo Th. Sig. Bayer. Chronol. Seyth. p. 315. T. III. Comment. Academ. Petropolit. Alia si desideres, Iac. Perizon. ad Aelian. II. H. V. 26. consule. WESS.

158. 16. Ἐκείθεν] *γέρειν* Coisl. nulla urgente caussa. Vid. I. 34. XVI. 84. WESS.

158. 17. Τὸν Ἀπόλλω μάλιστα — παρ' αὐτοῖς τιμᾶσθαι] Tertium hunc Apollinem Iove tertio et Latona natum ex Hyperboreis Delphos venisse ferebant in Ciceron. III. N. D. 23.; colebant eum Hyperborei festis, dapibus, laetis omnibus et asinorum hecatombis, de quibus Pindar. Od. X. Pythionic., et uberius Ezech. Spanhem. in Callimachi Hym. Del. v. 281. WESS.

158. 23. Καὶ τὰν ἀξιόλογον] Est et eius templi mentio in his Aeliani XI. H. A. I. εἶτα κατιᾶσιν εἰς τὸν τοῦ νεῶ περίβολον, μέγιστόν τε καὶ τὸ κάλλος ὀρμηϊότατον ὄντα, nimirum olores, qui eo devolabant, ut una cum citharistis suo cantu Apollinem celebrarent; quae serio si scripserit Hecataeus, hunc enim Aelianus auctorem habet, Graecorum credulitati egregie illusit. WESS.

158. 25. Περ' ἐνάσχειν non habet Venetus, neque absurde. Videbuntur enim, si seriem orationis consideres, supervacanea. WESS.

158. 30. Πρὸς τοὺς Ἀθηναίους καὶ Ἀηλίους] Frugum primitias Hyperborei Arimaspi, illi Issedonibus, hi Seythis, tibiis, fistulis citharisque accinentibus, tradebant, donec ab aliis atque aliis acceptae in Graeciam atque Athenas pervenirent, inde vero in Delum, Pausan. I. 31.; quae amicitiae Hyperboreos inter et Athenienses praecipua caussa: Delis et alia fuit, de qua Herodot. IV. 33. Conf. Spanhem. in Callim. Hym. Del. v. 283. WESS.

159. 35. Ἀβαριν εἰς τὴν Ἑλλάδα καταγίτησαντ' αὐτὸ παλαιὸν] Venisse hominem in Graeciam magno veterum consensu affirmatur: tempus ipsum, scriptoribus in diversa tendentibus, necdum certo finitum. Equidem haud eos male instituisse credo, qui, Pindarum in Harpocrat. Ἀβαρις secuti, Croeso aequalem fecerant: abest enim ab illo rege, victo Olymp. LIX. Persarum armis, non multis annis Pindarus, natus Olymp. LXV., potuitque adeo de Abari, suae paene aetatis homine, certiora cognoscere. Euseb. Chron. p. 148. et Syncell. Chronogr. p. 239. eadem sunt sententia, nec longe inde abest H. Vales. in Harpocrat. p. 83. et Rich. Bentleius Dissert. de Phalar. Epist. p. 48. Vide tamen et Pet. Bayle Lexic. Critic. *Abaris*. WESS.

159. 39. Καὶ τινες ἔξοχὰς γειώδεις ἔχουσαν] In Luna eminentias, rupibus similes, animadvertenterunt superioris et nostrae

actatis Astronomi, suspicatioque sunt veteres in Plutarcho de Fac. in orbe Lun. p. 935. C.; at haec de Luna, Hyperboreis adeo vicina, ut eminentiae illae terrestres liquido conspiciantur, eiusdem sunt generis, cuius Epicureorum fabula de sole, cum stridere in Oceanum se immergente, qui ab Hispanis exaudiri possit, apud Cleomedem II. p. 199. et Strabon. III. p. 202. WESS.

159. 43. *Μέγαν ἐνιαυτὸν ὀνομάζουσθαι*] Nihil hinc demutto: quod Codd. quidam praeferunt, sumptum arbitror ex L. XII. 36. *ἐν δὲ τοῖς εἰρημέροις ἔτεσι τὰ ἄστρα τὴν ἀποκατάστασιν ποιεῖται καὶ καθάπερ ἐνιαυτοῦ τινος μεγάλου τὸν ἀνακινητισμὸν λαμβάνει. διὸ καὶ τινες Μέτονος ἐνιαυτὸν ὀνομάζουσι.* hinc enim pronum erat Metonis adsciscere atque hanc in orationem inculcare nomen. WESS.

159. 49. *Ἀπογόρους ὄντας Βορέου*] Boreae, ut compar connubium foret, Hecataeus uxorem dedit Chionem: hoc semine orti Boreadae tres, singuli VI cubitos alti, Apollini erant sacri. *Ἰεροὶ εἰσι τῷδε τῷ δαίμονι Βορέου καὶ Χιόνος τίεες τρεῖς τὸν ἀριθμὸν, ἀδελφοὶ τὴν γένειν, ἐξαπύχεις τὸ μῆκος,* Aelian. inquit XI. H. A. I. WESS.

159. 53. *Ἀραβίαν*] Ἀράβες et Ἀράβια Coisl., de qua scriptura Eustath. in Dionys. v. 925. WESS.

159. 56. *Ὅς ὀνομάζουσι Ναβαταίους*] Conf. infra III. 42. et quae H. Relandus I. Palaest. 17. WESS.

159. 61. *Ἐζκαρα φρέατα*] Cisternas has diligentius exsequitur L. XIX. 94. WESS.

159. 69. *Μόλις εἰς τὴν οἰκίαν σώζονται*] Si μόλις ex Cois. et Mut. malueris, erit μετὰ πόνον, ut Grammatici explicant, sicuti alterum βραδείως. Sed levi haec discrimine distant, et a librariis frequentissime permutantur. Lege Cl. T. Hemsterhus. ad Luciani Iudic. Vocal. c. 4. WESS.

160. 73. *Τὴν ἐλευθερίαν διαφιλῆτοντες ἀσάλευτον*] Usus his est, ut βασιλείαν ἀσάλευτον Epist. ad Hebr. XII. 28. explicaret, Iac. Elsnerus. Solet Noster ea, quae firma stabilitaque permanent, hoc vocabulo describere, veluti III. 46. de Sabaeis, *ἵτοι τὴν εὐδαιμονίαν ἀσάλευτον ἔσχον.* et de Sardis, ex or: *ἵο perpetua libertate usis, V. 15. συνέβη τὸν χρησμὸν — ἀτιμομίαν τοῖς ἐγχωρίοις ἀσάλευτον φιλῆσαι.* quare et induciae, quae sartae et tectae, uti convenerat, manent, *σπονδαὶ ἀσάλευτοι* L. XII. 29. WESS.

160. 79. *Πέτρα καθ' ἑπερβολὴν ὄχηρὰ*] Haud aliter Strabo XVI. p. 1125. et inferius Diodor. XIX. 97. Huic autem petrae cum urbs esset imposita, eodem et illa nomine appellata Arabumque metropolis est habita apud Hieroclem Synecdemī p. 721. WESS.

160. 81. *Λίμνη τε μεγάλη* etc.] Descriptionem hanc lacus



Asphaltitae iisdem verbis repetit L. XIX. 98.; tu de eo H. Relandum I. Palaestin. c. 38. adi. WESS.

160. 83. Τὸ μὲν μῆκος σταδίων ὡς πεντακοσίων] Iosephus IV. B. I. 8. 4. dat illi longitudinem stad. DLXXX et latitudinem CL, quem ego sequendum arbitror. Porro ad sententiam nihil intererit, sive tu mox ἐμβαλλόντων seu ἐξβαλλόντων receperis; utrumque de fluviis, in mare aut lacum sese evolventibus, rectum est, ut superius c. 13., ubi eadem in Cold. varietas. Fluvios autem magnos, qui in lacum influunt, atque a Galeno IV. Simp. Med. Facult. p. 53. designantur, Iordanem atque Arnonem esse, supervacaneum est, ut moneatur. WESS.

160. 91. Ἐφ' ὧν δὲ συνήθως etc.] Haud scio utrum praepositio hic redundet, an vero alia, ut ἀφ' vel ἐξ substitui debeat. RHOD. Ἐφ' ᾧ δὲ συνήθως etc.] Posset sine ulla iactura praepositio hinc eliminari; nec eicio tamen, quia ipse mordicus eam tenet L. XIX. 98., sed ἐφ' ᾧ scribens, quod, causam rei immuens, uti Photius Epist. 152. ostendit, probo. Iosephus IV. B. I. 8. 4. bituminis glebas τὸ, τε σχῆμα καὶ τὸ μέγεθος ταύροις ἀκεφάλοις παραλήσιως perhibens, haec egregie illustrat, vicissimque haud leve patrocinium reperit contra eius conatus, qui ταυρείοις ἀκεφάλοις, pellibus taurinis, capite truncatis, suae orationi satis intempestive ingerebat. WESS.

160. 2. Ἐπειδὴν ἀναφυσῆσαι συμβῆναι] Ἀναφυσῆθῆναι, ut XIX. 98. videtur commodius: alioqui ex superioribus arcessendum erit λίμνης vocabulum, ne ἀναφυσῆσαι fulcro destitutum corruat. WESS.

160. 4. Ἀγαθὴ δ' ἐστὶ φοινικώγεντος] Hoc amplecter, ipsi Diodoro XIX. 98. probatum, positumque ad exemplum Homerici ἀγαθὴ ζουροτρόφος Odys. I. 27. Palmas autem lactissime provenire prope Hierichuntem testem habemus Ioseph. IV. B. I. 8. 3., neque aliis deesse Arabiae locis, in lacum versus porrectis, Theophrast. II. H. Plant. 8. et Auctor gestorum S. Stephani Sabaitae c. 11. et ult., quae T. III. Act. Sanct. Mens. Jul. ab Antwerpensibus inserta sunt Iesuitis, condocefaciunt. WESS.

160. 7. Ἐν ἀλώωνι τινὲ τὸ καλούμενον βάλσαμον] Intellegit ἀλώωνα τῆς Ἰεριχοῦντος, quam vallem haud male expinxit Iustin. XXXVI. 3. Erat ad eam oppidum Engadi, unde balsamum Engadenum. Galen. I. de Antidot. p. 427. διὰ δὲ τὸν τόπον, ἐν ᾧ γεννᾶται πλεῖστον καὶ κάλλιστον (opobalsamum) ἔτερον ὄνομα δεύτερον ἔχον, τὸ Ἐγγαδινὸν γὰρ ὀνομάζεται, ζρεῖλλον ὄν τῶν ἐν ἄλλοις χωρίοις τῆς Παλαιστίνης γινομένων. Sic ea lege: nam τὸ Σιγαδινὸν, quod libri ostendunt, nauci est et pravum vocabulum. Id bene, quod et aliis Palaestinae in locis gigni addit: circa enim Scythopolin aetate Aristidis T. III. p. 595. nascebatur. Iam Diodorus quod subiungit, nusquam id alibi terrarum reperiri, id vero ut omnibus persuadeatur, difficulter tenebit. Videtur enim

Arabiae stirps esse indigena, cuius et regionis Sabaeis Strabo XVII. p. 1124. et Pausan. IX. 29. Nosterque ipse inferius III. 45. tribuunt, ac diu ante eos Agatharchides de Rubr. Mar. p. 61.: immo Iosephus Sabaeorum reginae, quae ad Salomonem inuisit, plantam acceptam refert L. VIII. A. I. 6. 6. Verum hac de controversia Prosp. Alpin. I. Plant. Aegypt. c. 14. et Io. Veslingius in Opopalsami Vindic. p. 242. plura. WESS.

161. 16. Καὶ σχοῖνον] Reddo scriptori vocem suam, e qua aut dictantis aut excipientis error σχῖνον fecit, quem ad modum et L. V. 41. Σχοῖνος ἀρωματῖτις Strabon. XVI. p. 1095. B. in Arabia lactissime germinabat; quare iuncum aromaticum σχοῖνον τὴν ἐξ Ἀραβίας Galen. I. de Antidot. p. 434. et Dioscorid. I. 16. praecipue praedicant. De Calamo odorato idem I. 17. WESS.

161. 18. Ὄσμαῖς ποικίλαις διεύληπται] Et hoc suam in sedem revocavi. Significat Arabiam refertam et quasi interstinctam esse illis odoribus, ut cap. 52. V. 11. et in Platonis Phaedon. p. 110. B. WESS. Διεύληπται etiam Rhodom. in Add.

161. 19. Τὸν προσφιλέστατον — λιβανωτὸν] Vide V. 41. WESS.

161. 25. Καὶ χοιβάνων ἐπάσχεν ἔκκαύματα] Phrynichus et Thomas M. χοιβάνων tuentur, ad vocis veriverbium et originem provocantes, quam tamen diversam Schol. Aristoph. Acharn. v. 86. edit. Ἐκκαύματα sunt cremia, arida sarmenta, quae igni admota flammam cito concipiunt. Theophrastus libro de Igne p. 436. ἡλίον ἥως — τῇ λεπτότητι διαδρόμεον εἰς τὸ ἔκκαυμα. pro quo saepius ipse atque alii ἐπέκκαυμα. quomodo Plutarch. T. II. p. 787. οὕτως ἔστι καὶ δόξης καὶ φλογὸς οὐ χαλεπὴ σπιτηρία καὶ τήρησις, ἀλλὰ μικρῶν ἐπέκκαυμάτων δεομένη. et Ioseph. XVII. A. I. 10. 6. sed significatione tralata, ut in Aelian. Epist. 15. Plutarcho T. II. p. 117. A. 610. C. WESS.

161. 27. Μικρῶν δέγματι ὑπόσχοντα] Δείγμα est exemplar, specimen, quod rerum venalium solet proponi et circumferri; unde forum Athenis, εἰς ὃ τὰ δέγματα ἐποιεῖτο, dicebatur δείγμα, sicuti et Rhodi infra XIX. 45., et δέγματος χάρις, quorum exiguum specimen praebetur, de quo Is. Casaub. in Athen. I. 22. et VI. 4. et Cl. Salmas. Observat. ad Ius Att. et Rom. c. 17. p. 383. WESS.

161. 30. Τερέβινθος ἄπλετος] Ἄπλετος, ut infra non semel, poeticum est, infinitum, immensum, copiosissimum significans. Ἀγρόσιον vero, quod sequitur, quid sit, Physicis et Botanologis explicandum remitto. Qui nos etiam docebunt, utrum Agyratum, vel etiam Ageratum, non adeo ignotum, sit retinendam, an vero Gyratum vel Boratum pro authentico habendum. Rhod. Parum abest, quin suspicer in hac Rhodom. nota quaedam deficere: voluit, puto, ἄπλετον esse poetarum, non alterum, quo Polybium, Apollodorum, Plutarchum, pluresque alios usos fuisse no-

vimus. Prius poëticum videri, docebit Pindar. O. I. Pythionic. v. 40. et quae ibi Critici: confundi vero atque alterius locum occupare inferius L. IV. 21. WESS.

161. 33. Καὶ τὸ καλούμενον Βόρατον] Ita correxi, obsecundans Cl. Salmasio in Solin. p. 670. sic legendum decernenti ex libris: herbam enim Sabinam, hoc est βραδὴν, vocatam etiam Βόρατον tradere Dioscoridem. Id quidem ego in Dioscoride non reperio, qui L. I. 104. βραδὴς, ἔνιοι βράδαθρον καλοῦσι, prave fortasse, et, uti vir eruditissimus censuit, emendandum; nec muto tamen sententiam, quia Lexicon Botanicum in Append. Glossar. Graec. Med. p. 41. Βραδίη seu βόρατον, κέδρος μεγγύλη καὶ ἀγρία κλάρισσος cui consentiunt Glossae Nicomedis Iatrosophistae apud Salmasium. Recte ergo Symmachus, cuius rei commodum me admonet I. I. Wetstenius, exponit Psalm. CIII. 17. Hebraicum בִּרְתִּי, βόρατον, et Aquila Cantic. I. 17. בִּרְתִּי, βραδαίται, vocis originem liquido ostendentes. WESS.

161. 37. Διό] Lege διό. RHOD.

161. 42. Τὸ δμιαζόμενον — σὺρῶει etc.] Quae impedita ante erant, nunc credo bene habent. Articulum duntaxat loco movi, in ceteris Coisliniani Cod. vestigiis inhaerens; cuius tamen et Mut. ἀγαθός, etsi illis auxilio Hesychius esse possit, non recipio. WESS.

Ibid. Συρῶειν] Forte συρῶειν. RHOD.

161. 46. Ἄπυρος χρυσός] Aurum hoc accuratius describit, τὸν αὐτογενῆ, inquit, καὶ καλούμενον ἀπὸ τοῦ συμβεβηκότος ἄπυρον κατὰ δὲ τὸ μέγεθος ἐλάχιστος μὲν ἐκτίθεται παρακλήσιος πυρῆτι, μέγιστος δὲ οὐ πολὺ λειπόμενος βασιλικῷ καρούου. Exponit sua natum, quod ab eventu argyrum nominatur: cuius minimum frustum nucleo par est, maximum nuce regia haud multo inferius L. III. 44. Quod, quoniam rarius olim per Graeciam, versipellis Iupiter induit, in puellae sinus influxurus. Euripid. Danae v. 30.

Σαρῶς δὲ πείθειν οὐκ ἔχων, εἰς μηχανῆν  
 Τοιάνδ' ἐχώρησ', ὡς ἄπυρος χρυσός γεγώς,  
 Ἰσοθευὸν εἰδὼς τοῦτο κτήμα τοῖς βροτοῖς,  
 Διὰ στέγους ἠέουσεν ἐν χερσὶν κόρης.

ubi I. Barnes. causam nominis exponens, et rude atque ignis experts esse negans, audiendus non est. Re vera enim non in Arabia tantum, sed ipsa in Hungaria reperitur eiusmodi aurum, nec levis ponderis, atque ita politum, ac si fustum et artificis manu exasciatum foret, ut exemplis bene multis in Auraria Romano-Dacica c. 2. declaravit Samuel Koeloeserus. Reliqui autem auri ex ramentis excoquendi modum et morem Georg. Agricola L. IX. Rei Metall. p. 311. et 318. ostendit. WESS.

162. 56. Ἡ προσορῶουσα τῇ Σοφίᾳ] Illustrat haec S. Bochartus P. I. Hieroz. III. 1. p. 722. Conf. inferius III. 43. WESS.

162. 60. Βαβυλώνιοι τίγρεις] De his nihil praecipuum legere memini: multo certe cognitiores sunt Hyrcanae et Indicae; quamquam de illis haud pauca quoque veteres, quae rerum usus falsi arguit, docente Is. Vossio in Melae L. III. 5. WESS.

162. 62. Μήματα χιγῶν καὶ καμήλων] Mendum nimis enorme. Quid enim Struthocamelo cum ansere! cum a Strutho, *passere*, nominis et naturae dimidium referat. Στρουθοῶν ergo restituendum, vel χιγῶν in πιγῶν convertendum est, ad quod proxime alludit vox adulterina. RHOD. Posteriorem doctissimi viri coniecturam probavit Iob. Ludolfus Comment. in Hist. Aethiop. p. 161.: priorem ego praeferrem, si Poggium a scripto libro nihil abiisse liqueret, vertentem, *qui ex struthione cameloque constant, unde et nomen trahunt*; est enim, ut Oppian. III. Cyngetic. v. 483. ait

Ἀμυγιδνιμος, μέγα θαῦμα, μετὰ στρουθοῦο κάμηλος. WESS.

162. 64. Νεογονεῖ] Pro νεογονεῖ scribo νεογενεῖ. RHOD. Νεογενεῖ Clar. 2. recte. Vid. Polluc. II. 8. V. 16. WESS.

162. 66. Ἀπαράλλάκτιος κατὰ τὸν τέλιον etc.] Hesychius, ἀπαραλλάκτιος, ὁμοίως, κατὰ μηδὲν παραλλάσσουσι. Vide I. 91. WESS.

162. 73. Κατὰ τῆς γῆς ὠκέως ἀροβατεῖ] Ad verbum, *alte*, vel *sublimi gressu incedit*. Sed longe *εμφατιζώτερον* et meo iudicio verius *ἀροβατεῖ*, *aerios quasi gressus facit*. RHOD. Posset Rhodom. coniecturae robur conciliare Oppianus III. Cyneg. v. 490. de Struthocamelis,

Ἄερος ὑψηλόροισιν ἐπιπλόουσι κελεύθοις,  
sive aëris sublimibus viis eas quasi innatare canens, nisi Diodorus intercederet, suum ἀροβατεῖν explicans III. 27. μυχρὸν ἀροῦσι ποσὶ τῆς γῆς ἐπιπαύειν, *summis pedibus terram obiter stringere*. Quod et haec Aeliani II. H. A. 27. adfirmant, ἢ στρουθοῦς ἢ μεγάλη λασίσις μὲν τοῖς πτεροῖς ἐπτέρωται, ἀροθῆναι δὲ καὶ εἰς βαθὴν ἀέρα μετεωρισθῆναι θύσιν οὐκ ἔχει θεῖ δὲ ὄπισθα. WESS.

162. 74. Τοὺς ὑποπίπτοντας — ἀποσφενδονᾶ] Iubent scripti Codd. haec in integrum restitui, ipso suffragante scriptore L. III. 27. et Aeliano, qui L. IV. H. A. 37. εἰ δὲ ἀλίσκεται, *Struthocamelus*, τοὺς παραπίπτοντας λίθους εἰς τοῦπίσω σφενδονᾶ τοῖς ποσὶ quem Phile sequitur c. IV. 10. WESS.

162. 77. Περιπίπτειν marg. Steph. aliique optime. Conf. XI. 7. XII. 62. et supra I. 92. WESS.

162. 80. Μηδ' αὐτὸ βλέεσθαι διαλαμβάνον] Vulgatissima ea fama fuit: quare Oppianus cum de sciaena, quae occultato capite sese prorsus videri non posse opinatur, Halicut. IV. 621. dixisset,

— Κάρη δ' ἄρα δίζεται οἶον  
Φοῦζασθαι κεφαλὴν δὲ κατακρύψασα καὶ ὅσσε  
Ἐλλεται οὐχ ὀρώσασα λαθεῖν ὀρώοντος ἐφοροῦν.

mox de struthocamelo, simili stultitia caput obnubente, vers. 630. subnectit:

*Τοῖα δὲ καὶ Αἰβύης πτερόεν βοτὸν ἀγυλόμενον  
Νίπια τεχνάζει. —*

Vide Congr. Rittersh., haec Diodori et Claudiani II. in Eutrop. 311. eadem de ave non negligentem:

*— Oblita fugae, stat lumine clauso  
Ridendum revoluta caput, creditque latere  
Quem non ipsa videt. — WESS.*

163. 90. *Τῶ μὲν γὰρ μεγέθει μικρότεροι etc.]* Camelopardalin longe melius describunt Oppian. III. Cyneg. 468. Philostorg. II. H. E. 11. et Prosp. Alpin. IV. Rer. Aegypt. c. 10.; e quorum consensu magnum in his errorem, animadversum quoque ab Antonio Constantio Epistola ad Galeottam Manfredum, inesse adparet: est enim Camelo par et collo longissimo. Habet tamen aliquid excusationis, si cum Iob. Ludolfo dixeris, veteres hoc animal oratione sua expinxisse, non ex iusta sua magnitudine, sed parvum forte et pullum, quod adulta animalia difficulter transferantur: itaque eos adspectu externo contentos, de aetate nihil inquisivisse, in Comment. ad Hist. Aethiop. p. 149. Adde Ang. Politiani Observ. c. 3. WESS.

163. 95. *Τῆν οὐρὰν μακρὰν ἔχουσαι]* Nisi μακρὰν scripseris, et hic peccatum est. Recte Oppian. III. Cyneg. 480.

*Οὐρῇ δ' αὐτ' ἐλάχεια, θοαῖς ἔτε δορκαλίδεσσι.*

nam *ἐλάχεια* ibi qui legunt, a vero longissime absunt, docente S. Bocharto P. I. Hieroz. III. 21. p. 906. WESS.

163. 96. *Τραγέλαφοι καὶ βοόβαλοι]* Iungunt haec Alexandrini quoque interpretes Deateron. XIV. 5. Dubitarunt tamen veterum plures fuerint in rerum natura *τραγέλαφος* seu *hircocercus*? Sed iniuria: vidit enim Lutetiae Parisiorum *tragelaphum*, *cornua plane cervina gerentem, mentumque promissa hirtum barba et villosos armos, velocissimi in primo cursu impetus, sed cito deficientis*, Cl. Salmasius in Solin. p. 162.; vidit alium Edm. Chishull. Antiq. Asiat. p. 72. ut merito eius animalis patrocinium professi sint S. Bochart. P. II. Hieroz. VI. 1. et Ezech. Spanhem. Diss. IV. de Usu Numism. p. 200. WESS.

163. 3. *Καλῶν ζώων θύσεις γεννῶν]* Habet in hanc rem notabilia Aelian. X. H. A. 13. WESS.

163. 7. *Ἐξηλλαγμένων τοῖς τε μεγέθεσι]* De illis copiose L. III. 35. WESS.

163. 15. *Τοὺς γὰρ χρυστάλλους λίθους ἔχειν etc.]* Non male haec dici Io. Iac. Scheuchzerus, de Crystalli origine et natura egregie disputans, profitetur Itin. Alpin. IV. p. 253. et ante eum Io. de Laet I. de Gem. et Lapid. c. 15. Verum aliud est, quod haud levem hic molestiam creat. Plinius XXXVII. N. H. 2. non alibi Crystallos reperiri ait, quam ubi maxime hibernae ni-

ves rigent, glaciemque esse certum est: qua quidem in re adversarios habet haud paucos; liquet tamen optimas in illis locis nasci, quae frigore horrent; praeterea de Crystallis ea Diodorus praedicat, quae earum ingenio non bene congruunt, cuiusmodi sunt, ἀσίπτους διαμέρειν, et pluribus a natura coloribus imbuī. Quae omnia cum animadvertisset Cl. Salmasius, *quid si*, inquit, *χρυστάλλους λίθους de omnibus gemmis in modum vitri translucidis usurpavit, quas generatim ex humore perspicuo et vi caloris divini coacto formari dicit, variis autem coloribus imbuī, hoc est, πολυχρόμως βαφῆναι ἀναθυμιάσει πνεύματος. Id per species deinde explicat, ut in Smaragdis, Beryllis, Chrysolithis, et Carbunculis. Τὸς γὰρ σμαράγδους, inquit, καὶ τὰ βηρύλλια διὰ τὴν ἀπὸ τῶν θείων βαφῆν καὶ συγχρόως εἶσθαι. Ergo et Smaragdi et Berylli, ceterique, qui ibi nominantur, χρυστάλλοι λίθοι, id est; translucidi, sed varie colorati ac tincti, prout variis inficiuntur solis exhalationibus. Τὴν ἀπὸ τῶν θείων βαφῆν vocat a divinis tincturam, non a sulphure, ut vulgo vertunt, in Solin. p. 145. Quae ego solerter disputata maximam partem probo: namque et Strabo XV. p. 1045. Α. χρυστάλλων παρτιόων nomine gemmas lapidesque Indiae pretiosos, ut idem Salmas. p. 769. ostendit, complectitur, et Aelian. XV. H. A. 8. Indiae gemmam χρυστάλλον ὀρνυτιὸν appellat. Id male, quod Rhodom. redarguit, qui ἀπὸ τῶν θείων a sulphure verterat: quae enim adduntur, διὰ τὴν βαφῆν καὶ σύνδεσιν, quorumque partem vir doctissimus neglexit, iure optimo fecisse monstrant. WESS.*

163. 22. Ὑπὸ χαρνόδους ἀναθυμιάσεως ἡλίου θερμοτύτη] Plinius XXXVII. H. N. 9. de Chrysolithis: *Sunt in hoc genere carniæ, sunt vitreis similes, veluti croco' refulgentes. Confer Anselm. Boëtium H. Lap. et Gemm. c. 65. WESS.*

164. 23. Ἡλίου θερμοτύτης] Substituendum e margine θερμοτύτη. RHOD.

164. 24. Τοὺς ὀνομαζομένους ψευδοχρῶσους etc.] Ψευδοχρῶσος est aurum arte ementium, cui nullus hic quidem locus. Omnino ψευδοχρῶσο λίθους, quod et Salmasio in mentem venit ad Solin. p. 769., reliquerat, aut certe λίθους subintelligi voluerat, vitreos designans, qui a veris visu discerni non possunt, quosque tactus deprehendit tepidior in vitris, ut Plinius ait XXXVII. 9. Vitro enim tincto olim, ut nunc, gemmae adulerantur, atque id βαπτόμενος χρυστάλλος. Adde Io. de Lact I. de Gemm. et Lapid. 13. Mox φασὶν ἀποτελεῖν recte coniecit Rhodomannus, idque invitis Codd. probavi. WESS.

164. 27. Τῇ πῆξει φῶσιν ἀποτελεῖν] Φασὶν auctorem scripsisse nihil ambigo. Quae enim alias constructio? quae sententia? Cum disputatione hac confer, quae Aristoteles I. V. 6. περὶ Ζῴων γενέσε. de coloribus animalium scribit. RHOD.

164. 35. *Καὶ δυσσεμνέτους — χοῶς*] Quas vix oratione explices, *δυσσεμνέτους λέγειν*, ut loquitur auctor Epist. ad Hebrae. V. 11. Artemidor. III. Onirocrit. 67. *τοῦτον οὖν τὸν τρόπον καὶ οἱ ὄνειροι μεμιγμένοι εἰκότως εἰσι ποικίλοι καὶ τοῖς πολλοῖς δυσσεμνέτοι.* WESS.

164. 39. *Ποικιλίαν ἔβαλεν*] Coniecturà hoc fuerat assecutus, ut ex versione et notarum addendis adparet, Rhodom. Nunc citra dubium res est. WESS.

164. 46. *Τὰ μὲν γὰρ χοῶματα τὸ φῶς ἀπεργάζεσθαι*] Multo haec distinctius et accuratius explicuerunt nostrae aetatis philosophi, praeterque alios Cl. Pet. Musschenbroek Physic. §. 11. 24. etc. WESS.

164. 52. *Ἡ Παρία Ἀγῶδος*] Quid hoc? An non *λίθος* etiam vulgo Graecorum est notissimum? *Ἀγῶδος* tamen apud Favorinum Camertem quid sit indagare poteris, ὡς ἐν *ἔτοιμοτάτῳ*. Cui tamen nihil omnino hic loci conceditur. Rhod. Vidi quendam virum doctum, qui contendebat legendum *Παρία λίθος*. Ego tamen credo se bene habere vulgatam lectionem. Est enim in Paro insula mons *Ἀγῶδος* nomine, unde excindebatur candidissimum illud marmor, quod *Ἀγῶδιον* et *Ἠάγιον* dicebatur, et ipsum marmor *Ἀγῶδον* etiam dictum fuisse a montis nomine suadet Anacreon, qui *Ἀγῶδιον τράχηλον* pro candido posuit. Philostratus etiam in Iconum prooemio *Ἀγῶδιον* et *Παρίαν λίθον* pro eodem posuit. Ergo si quid mutandum, pro *Ἀγῶδος* legendum *Ἀγῶδος*. Talia dubia parit Iotacismus. PALM. *Ἡ Παρία Ἀγῶδος*] Occupavit haec Salmas. in Solin. p. 394. ubi et Plinio XXXVI. 8. *Lygdinos in Paro repertos amplitudine, qua lances craterasque excedant, antea ex Arabia tantum advehi solitos*, egregie restituit, probante, sed Salmasium auctorem dissimulante, Harduino, et lapides Arabicos candidissimos nitidissimosque, quibus Pariam Lygdum cedere Noster ait, Lygdinos a Plinio et Arriano nuncupatos esse docet. Quare et ego, cum *candidam Lygden* et *nitentem Lygdon* Martial. VI. 13. et 22. et *γάρα νεμῶν Ἀγῶδινα* pro candidissimis poeta Antholog. VI. 4. Servius etiam Aen. I. 597., etsi Panerat. Masvicii editio aliud sectetur, *Parium* et *Lygdinum* lapidem eundem dixerit, non veritus sum Diodoro, quod olim ipse probaverat, reddere. Tu plura de Lygdino lapide si desideres, consule eruditum Blasii Caryophili de Marmor. Antiq. Commentarium p. 48. et Cl. Olear. ad Philostrat. Icon. p. 763. WESS.

165. 60. *Πλείστης Θερμασίας νεκρινωρηχός*] Vid. I. 7. WESS.

165. 65. *Αἰ δὲ τῆς Συρίας ἐσχατιᾷ ψιτταζοὺς*] *Psittacos* in Syria nasci, rem esse paradoxam, sed et plane falsam, S. Bochartus P. II. Hieroz. II. 30. p. 312. asseverat: locumque adeo hunc de mendo sibi esse suspectum, nec succurrere tamen quid sit reponendum: cui adsentiri non possum. *Syria* hoc loco Assy-

ria est, quae saepe id sibi nomen usurpavit apud veteres, uti ad huius libri c. 3. admonitum est: in Assyriae finibus erat urbs *Sittace* sive *Psittace*, unde adiacenti regioni Sittacenes et Psittacenes cognomen; quod unde tandem abstulit, nisi ab avibus, quas *Sittacos* et *Psittacos* appellitare consueverunt? Stat a meis partibus contra virum doctissimum P. D. Huetius Comment. De Navigat. Salom. c. VII. 6. WESS.

165. 67. *Καὶ ποικίλας συγχρόσεις*] Non deerunt fortasse, qui *συγχρόσεις* praeferent; quorum ego suspicionem improbo. Vid. I. 7. WESS.

165. 71. *Πρὸς ἀνατολὰς κεκλιμένης*] Dedi scriptis libris, etsi alterum pro inepto non putem, ut hoc pristinam in sedem inmigraret. *Τόπους πρὸς ἄρκτον κεκλιμένους* I. 27. *πρὸς δυσμὰς μέρη κεκλιμένα* inferius c. 54. huius libri, et *τοὺς πρὸς ἐσπέραν κεκλιμένους* V. 79. ipse Diodorus habet; ut supervacaneum sit, alios ad opem ferendam arcessere. WESS.

165. 75. *Ἀρχιμηροὺς καὶ μικροὺς*] *Πικροὺς* in contextum recipiendum esse, relatio infra mihi fere persuadet, ubi *γλυκότητα* ad *πικροὺς*, *μέγεθος* ad *ἀρχιμηροὺς* respectum habere videatur; nisi tamen *τὸ χυμοὺς τῷ ἀρχιμηροὺς* oppositum. RHOD. Sermo si esset de Aegyptiis palmis, quarum circa Delta fructum Strabo XVII. p. 1173. C. *οὐκ ἐβρωτον* sive edulem esse negat, fortasse a vulgata scriptura abirem: nunc nihil muto. Vult credo idem, quod Plinius XIII. H. N. c. 4. his verbis: *In totum arenates Thebaïdis atque Arabiae, macroque corpore exiles, et assiduo vapore torrentes, crustam verius, quam cutem obducunt.* WESS.

165. 76. *Καρυωτοὶ προσαγορευόμενοι*] *Caryotae maxime celebrabantur, et cibo quidem, sed et succo uberrimae*, proveniebantque in Syria Palaestina proxime Hierichuntem: *nobilitas earum, Plinius ait, in Iudaea, nec in tota, sed Hierichunte maxime.* Atque hunc terrae eius tractum Diodorus respicit, sicuti et Theophrastus II. H. Plant. 4. *τῆς Συρίας δὲ τῆς Κοίλης, ἢ Ἰουδαῖοι πλείστην τυγχάνουσι ἔχοντες, ἐν τρισὶ μόνοις τόποις ἀμιώδεσιν εἶναι τοὺς δυναμένους θησαυρίζεσθαι.* Plura de Caryotis III. Ezech. Spanhem. VI. Dissert. de usu Numism. p. 350. WESS.

165. 78. *Τούτων δὲ πολλῶ μείζους etc.*] De Arabicis omnibus id verum non est, neque etiam de Babyloniis. *Regiae* quae dicebantur atque *ἐν μόνῳ τῷ Βαγῶον κήπῳ*, sic enim optime Theophrasti verba Salmas. in Solin. p. 928. constituit, sive uno in horto Bagoae Babylone nascebantur, clarissimae omnium erant et amplissimae. WESS.

165. 82. *Ἄμα καὶ τὴν ὕψιν τέρεσθαι*] Plutarchus VIII. Sympos. c. 4. Syriae Aegyptique palmam ὅψαι τε *θεαμάτων καὶ γλυκότητι τραγημάτων πάντων ἴδιον* esse simili senten-



tia ait, neque longe hinc distant, quae Moses de arbore, cuius esus primis hominibus prohibitus fuit, Genes. III. 6. *וַיֹּאמֶר יְהוָה לְמַדְּוַי הָאֵץ לֶחֶם חַיִּים הֲיֵאָכֵל וְלֵךְ עִלְיָהּ וְיָמָוֶת עִלְיָהּ וְיָמָוֶת עִלְיָהּ וְיָמָוֶת עִלְיָהּ* καλὸν τὸ ξύλον εἰς βρώσιν, καὶ ἀρεστὸν τοῖς ἀφθαλμοῖς ἰδεῖν, ut Alexandrini interpretes vertunt: quae cum adeo congruant ac conveniant, non absurda fortasse suspicio erit, fatalem eam arborem, e cuius comeso fructu mali omnis contagio humanum genus infecit, palmam fuisse: paradisi situs, et plura, quae mihi in mundo sunt, coniecturae robur conciliarent, si in re adeo a nostra aetate remota, et nunquam certo definienda, verba perdere vellem. Id obiter admonendum, *ψυχάζοιςαι* Diodorum ad visum et gustum, qui recreat atque exhiberat, saepe transferre, ut superius c. 10. et III. 50. WESS.

165. 85. *Ῥιόδον πανταχόθεν*] Rhodom., vertentem *glabrum*, non laudo; neque enim eiusmodi palmae stipes. Plinius XIII. H. N. 4. *Reliquae teretes atque procerae, densis gradatistisque corticum pollicibus, ut orbibus faciles se ad scandendum orientis populis praebeant, vitilem sibi arborique indutis circum.* Sic recte Harduinus; qui ampliorem meruisset laudem, si praecipuam loci emendati partem Iac. Palmerio Exercitat. p. 573. acceptam retulisset. *Pollices* autem Plinius vocat, protuberantes ex cortice eminentias, quae, virgis vel amputatis vel decidentibus natae, arboris truncum undique incingunt: quare *ψιλή πανταχόθεν*, quod recto stipite surgat et foliis virgisque nudo. WESS.

165. 86. *Ἀκρόζομα δ' ὄντα*] Explicat Plinius, palmarum *coma* omnis in cacumine, et Eustath. *ἐν ἄκρῳ ἄνω κομῶντες*. In Dionys. Perieges. 1010.

— — — *Ἐνθα τε πολλοὶ*

*Ἀκρόζομοι φοινίκες ἐπηρεφέες περῶσι.*

et fragmentum Orphicorum in Plutarchi VIII. Sympos. 4. *Ζῶον δ' ἴσον ἀκροζόμοισι φοινίκων ἔρονσι.* WESS.

165. 87. *Τὸς ῥάδιζας ἔχει περιεξηγμένους*] Haud scio, an coniectura ductus Cl. Salmasius in Solin. p. 934. haec citans legerit *τὸς σπᾶδιζας*. Mihi quidem certe liquet, nihil hic esse innovandum. *Ῥάδιζες* sunt virgae ex palmae summo vertice prominentes, *ῥάβδοι* Theophrasto II. Hist. Plant. 4.; quo rarioris vocabuli usu Nicander Alexiph. v. 57. *λέον ῥάδιζα πολυκνήμοιο* virgam, ramulum, *ῥάβδον*, ut Scholiastes, polycnemi, et vers. 331. *ῥάδιζα ζακογλοῖοιο ζονύξης*, ramusculum conyzae male olentis dixit. WESS.

165. 91. *Σχηματισμὸν ἀποτελεῖ λαμπάδος ἀπαιθυσσομένης*] Vertit doctus interpres, *ardentis formam lampadis ostendant. Atqui si sponte sua lampas ardere sinatur, in rectum surgentem mittet flammam, nec instar efficiet palmae comas suas in alterum latus nutabundus inclinantis.* *Λαμπὰς ἀπαιθυσσομένην fax est, sive lampas, quam ventus percellit, aut flatus hominis eventilat, ita ut flammam eius in alteram partem compulset.*

*Hesychius: αἰθυσσομένη, ῥιπιζομένη. Αἰθύσσειν, ἀνασείειν. Σοφοκλῆς Σίνωνι. Haecenus Salmas. in Solin. p. 939., neque iniuria. Habet ἀπαιθύσσειν Etymolog. etsi diversiore sententia; ἀναιθύσσειν Euripid. Troas. v. 344. de Vulcano funestam faciem ventilante,*

*Ἄτὰρ πικρὰν γε τήνδ' ἀναιθύσσεις φλόγα.*

Simplex vero αἰθύσσειν latet in his Orphei Argon. v. 899.

*Ἄτὰρ ἐπὶ σταθμοῖο πύλων τηλώπις ἀνασσα*

*Ἴστασεν αἰθύουσα πρὸς σέλας. —*

Paullo ante Codd. meliores secutus ἐφ' ἓν malui. WESS.

166. 97. Σχηρίτην βίον ἡρημένων] Vide supra c. 40. Porro θρημματοτροφοῦντες ἀγέλας μεγάλας, suffragante sermonis genio, amplexus sum. WESS.

166. 3. Ἀερίοις τὸ μέγεθος] Dixi de Diodori hoc idiotismo L. I. 33. WESS.

166. 5. Πρὸς τὰς ἀπὸ τῶν ἄρκτων σημασίας etc.] Sic solebant in locis desertis et arenosis. Curtius VII. 4. 28. *Itaque qui transeunt campos, navigantium modo noctu sidera observant, ad quorum cursum iter dirigunt, cum Freinshem. nota. Eustath. in Homer. p. 1535. ὅτι δὲ οὐχ οἱ ποτοποροῦντες μόνον, ἀλλὰ καὶ οἱ περὶ βადίζοντες, πρὸς ἄστρα τοῦτο ἐποιοῦν, διηλοῖ καὶ Σοφοκλῆς. οὐ μὲν ἀλλὰ καὶ ἡ παρουσία τὸ ἄστροις σημεῖοσθαι ὁδὸν ἔχον μακρὰν ὁδὸν βადίζειν καὶ ἐρήμην. in quibus quod de Sophocle ait, reperies in poëtae eius Oedip. Tyran. v. 805. Proverbium dabit Liban. T. I. p. 347. ubi Timon, postquam urbi valedixerat, in agro et solitaria vita acquiescens, τὴν ἐκκλησίαν, καὶ τὸ βῆμα, καὶ τοὺς ἐνταυθοῖ θορούβους, ἄστροις, τοῦτο δὲ τὸ τοῦ λόγον, τὸ λοιπὸν τετραμῶμενος. et Aelian. VII. H. A. 48. de Androcle, qui in Libyae interiora fugiens, τὰς μὲν πόλεις ἀπελίμπανε καὶ τοῦτο δὲ τὸ λεγόμενον, ἄστροις αὐτὰς σημαίετο. Quae exempla id quidem certe ostendunt, de illis usurpari, qui longissime recedunt, et ea in loca se abdunt, unde, nisi ex astris coniectura sumpta, de urbium aliarumque rerum statu vix quidquam assequantur. Prave ergo mutant haec Aeliani II. H. A. 7. τοὺς δὲ ἡμίονους καὶ τὸ δαῖνον τὸ ἐξ αὐτῶν σημαίεσθαι τὸ ἐντεῦθεν, τὸ τοῦ λόγον τοῦτο, ἄστροις. id enim significat, basiliscum a mulis eorumque epulo, quantum plurimum potest, sese sciungere, et secretissimas specus captare. Adde Schol. Aeschyl. Suppl. v. 398. et D. Erasmi Adag. p. 126. WESS.*

166. 8. Καὶ παντοδαπῶν ἐμπόρων] Ammian. XIV. 8. *Huic (Syriae Palaestinae) Arabia est conserta, ex alio latere Nabataeis contigua: opima varietate commerciorum, castrisque oppleta validis et castellis. Quibus adstrue ex Nostri III. 43. WESS.*

166. 20. *Τὰς μεγάλας — οὐρὰς ἐχόντων*] Describuntur ab Herodoto III. 113. pluribusque aliis in S. Bocharti P. I. Hierozoic. II. 45. WESS.

166. 24. *Λιὰ τοῦτο διπέλων ἀρομαζομένων*] *Τέλοι* sunt tubera. Hesychius, *Τύλοι, τὰ τῶν ἀγροφόρων ἐπὶ τῶν ὤμων τιλώματα*; quae quia bina in camelorum horum dorso, *δίτυλοι* dicuntur, et parili ex caussa *δίπτυχοι*, auctori Geoponicor. XVI. 22.; quam vocem qui Diodoro inculcare sustinuerunt, operam profecto frustrati sunt, recteque adeo reprehensi ab eruditissimo S. Bocharto P. I. Hieroz. II. 4. p. 87. Quae vero hic de camelis Arabicis, ea Plinius et Aristoteles de Bactrianis, sicuti idem animadvertit; Diodoro tamen accedunt et recentiores scriptores, qui Arabiam adierunt, et veteres numi, de quibus Ezech. Spanhem. Dissert. IV. de Numis. usu p. 185. WESS.

167. 29. *Αἱ δὲ ἀράζωλοι καὶ λαγαραὶ* etc.] De horum vera sententia non convenit Salmasio et Bocharto: ille ad Solin. p. 693. *ἀραζώλους καὶ λαγαρὰς* explicat, quibus longa crura ac substricta corpora: *ἀραζώλους* tunicas esse breves, quae crura non tegunt, sed erurum tenus demissae ea relinquunt aperta, ita ut iis induti videantur *ἀράζωλοι* hic P. II. Hieroz. II. 4. p. 88. *breves et constitutione graciles* vertit; cui et ego adstipulor; tum quod *ἀράζωλοι χιτωνίσσοι* in Plut. T. II. p. 261. F. sint tunicae perbreves, et *χιτῶν ἀράζωλος γυναικείος*, quae vix ultra genua descendit in Etymologi *Ἐπιγονατῆς*: tum ob Schol. Vat. et Reg. has partes amplexum; tum etiam quod dromades cameli ceteris revera sint breviores, nec eruribus nitantur ita longis. Vide Leonem Africanum et Prosp. Alpin. IV. Rer. Aegypt. c. 7. WESS.

167. 30. *Καὶ διατένονσι πλεῖστον ὁδοῦ μῆκος*] Distinctius de camelis dromadibus inferius L. XIX. 37. Quae sequuntur, Diodorum ita reliquisse autumo, *καὶ μάλιστα διὰ τῆς ἀνδροῦ — συντελουμένης ὁδοπορίας*. qua in coniectura duces habeo Codd. vetustos. WESS.

167. 33. *Τοξότας ἄγονται δύο*] Livius XXXVII. 40. *Ante hunc — — et cameli, quos appellant dromadas: his insidebant Arabes sagittarii gladiis habentes tennes, longos quaternis cubita, ut ex tanta altitudine contingere hostem possent.* Quibus consentit Appian. Bell. Syr. p. 173., Plinius VII. H. N. 18., ut imprudentiam excusare non possit Prosp. Alpinus IV. R. Aegypt. c. 7. contra Plinium stans et dromadam in bello usum negans. WESS.

167. 37. *Ἀλλὰ πολλὰ*] *Ἀλλ' οὖν* rectius. RHOD.

167. 43. *Ἰαμβουῶλος ἦν ἐκ παίδων παιδείαν ἐξηλωκῶς*] Fabulator fuit egregius, animumque ad ea scribenda appulit, quae mira et prodigiosa in Oceani insulis reperiiebantur, quaeque commentitia esse nulli non adparebat, ut lectores his fabellis exhilararet: *γνώριμον μὲν ἄνασι τὸ ψεῦδος πλασάμενος, οὐκ ἀτεροπῆ*

δ' ὁμοως συνθεῖς τὴν ἐπόθειν, de eo Lucianus ait I. Ver. Hist. c. 3. Quare Diodoro paene succenseo, huiusmodi nugis historias suas distinguenti et ornanti. Iambuli et Io. Tzetzes commemorant Chiliad. VII. 727., sed quae ex eius scriptis profert, ea omnia Diodoro debet. WESS.

167. 45. Ἐδωκεν ἑαυτὸν ἐπὶ τὴν ἐμπορίαν] Perplacuit hoc genus Diodoro. Sic XVI. 5. μετὰ δὲ ταῦτα δοῦς ἑαυτὸν εἰς βίον εἰρημίζον. et XVII. 108. de Harpalo, δοῦς δ' ἑαυτὸν εἰς τραγίην. XVIII. 47. δόντες δ' ἑαυτοὺς εἰς λισιείας καὶ καταδρομάς, etc. quae omnia sectam atque institutum, quod erant ingressi, solerter exprimunt. WESS.

167. 52. Εἰς καθαρμὸν τῆς γῆρας] Hanc in rem quae faciunt, copiose disputavit Cl. Lamb. Bos in I. ad Corinth. IV. 13. WESS.

167. 55. Τῆς γενεᾶς ἀριθμουμένης τριακονταετοῦς] Plutarch. de Orac. Defectu p. 415. E. T. II. ἐν τριάκοντα ποιῶσι τὴν γενεὰν καθ' Ἡράκλειτον. ἐν ᾧ χρόνῳ γεννηῶντα παρέχει τὸν ἕξ αὐτοῦ γεγενημένον ὁ γεννήσας. Quae Heracliti, dissentiens tamen, eleganter exponit Censorin. Dic Natal. c. 17. Quare qui annos triginta seculum putarunt, multum videntur errasse. Hoc enim tempus γενεὰν vocari Heraclitus auctor est, quia orbis aetatis in eo fit spatium; orbem autem vocant aetatis, dum natura humana a sementi ad sementim revertitur. Vide cetera, atque imprimis ea, quae Henr. Lindembrog. de diverso usu τῆς γενεᾶς ad ea commentatus est. WESS.

167. 70. Καὶ λυμεῶνας ὄλον τοῦ ἔθρους] Parili modo προσότιν καὶ λυμεῶνα τῆς ὅλης Ἑλλάδος, cui salutis olim auctor fuerat, Themistoclem, calumniis circumventum, appellant L. XI. 56. iure vero meliore adultores et parasitos τῆς νεότητος ἀνατροπέας καὶ λυμεῶνας in Plutarchi lib. de Educ. Liber. p. 5. B.; quae tamen exempla voci auctoritatem, ut bonae notae sit, non addent, si Thomae M. decretum valeat, asseverantis, λοιμοὶ καὶ φθόροι τῆς πόλεως οὐ λυμεῶν, οὐδὲ φθορεῦς. Malus ergo sermonis Graeci Atticique auctor Sophocles Aiac. v. 575., nec melior Euripides Hippol. v. 1068. et eius ordinis alii; quod ne Thomas quidem velit, huiusmodi in animadversionibus parum saepe providus. WESS.

168. 74. Καταστέψαι τοὺς σκεφομένους] Sic corrigendum esse, non latuit doctissimo Rhodom. Notum est victimas infulis coronari solitas, quod Graecis καταστέψαι. Diodorus Excerpt. Vales. p. 317. τοὺς τε γὰρ τοῖς εἶδει καλλίστους — καταστέψας ἔθυσσε τοῖς θεοῖς. ubi simili errore καταστρέψας scripserant, sed quem dexterrime animadversum H. Vales. sustulit. WESS.

168. 77. Νήσω, στρογγύλη μὲν ὑπαρχούση etc.] In insulam Taprobanem, quae nunc Zeilan, non male haec quadrant,

cui et Onesicritus eandem quinque millium stadior. amplitudinem tribuit in Strabon. XV. p. 1012. C., dissentientibus tamen aliis, sed caussa parum iusta, sicuti egregia disputatione Is. Vossius in Melam III. 7. confecit atque ostendit. S. Bochartus, ut Taprobannem et insulam Zeilan eandem esse obtineret, multa hinc sumpsit, et cum illis comparavit, quae de insula Zeilan a recentioribus fuerunt prodita, L. I. Canan. c. 46., in quae tamen addita nollem, quae fabulatosi Iambulo citra dubium debentur. WESS.

168. 86. *Ἀγωγαῖς*] *Διαγωγαῖς* C. M. non omnino prave. Vid. infr. IV. 30. WESS.

168. 88. *Καὶ κατὰ τὸ μέγεθος ὑπεράγειν τοὺς τέσσαρας πῖχτας*] Mart. Capella de Taprobannae indigenis L. VI. p. 224. *Homines ibi corpore grandiores ultra hominum mensuram, rutilis comis, caeruleis oculis, trucioris soni.* Quibus gemina Solini Polyh. c. 53. et Plinii VI 22. WESS.

168. 94. *Τὸ τοῖς δακτύλοις περιληφθὲν ἐκτρέψαι*] Vide utrum *ἐκτρέψαι* praestet: quod de igne, qui extunditur, et illis, quae vi adhibita extenuantur atque eiciuntur, haud insolitum. Synes. I. de Provid. p. 108. *ὄλως γὰρ ἐκτριβήσονται τὸ Σκυθῶν ἐκ τῆς γῶρας*, prorsus enim regione extrudendos *Scythas*. Posses etiam *ἐκτρέψαι*, cuius in mentem venit Cl. I. I. Wetstenio, legere. WESS.

168. 2. *Καὶ τὰ μὲν ἀροῆς τρήματα* etc.] Nullam his controversiam moveo, tametsi Codd. scripti velint: nequeo enim discernere, auriumne latiora foramina, an narium, his hominibus nugator Iambulus dederit: optio itaque tua est. WESS.

168. 6. *Δίπτυχον — αὐτοὺς ἔχειν τὴν γλῶτταν*] Respicit haec Io. Tzetzes Chiliad. VII. 729. Ego vero vehementer vereor, ne ad Indorum *θαυμασιωτάτους*, de quibus Aelian. VIII. H. V. 7., haec referri non possint, uti factum ab eruditissimo S. Bocharto: sunt enim fictae fabulae, quae duplici de lingua duplicisque sermone huius insulae civium ex Iambulo Diodorus exseripsit. WESS.

168. 14. *Περσιτάσειν οἰκείως*] Nihil profecto caussae erat, ut copulam his inserent scripti quidam libri: est enim genus hoc Diodoro tritissimum: nam et XV. 93. *οἰκείως τοῖς τόποις*. et XVI. 18. *οἰκείως τοῖς παροῦσι καιροῖς*. et XVII. 33. *οἰκείως τοῖς ἐποκειμένοις τόποις*. quibus abusive in locis quod accommodum appositumque est indicat. Vide et L. XI. 30. WESS.

169. 21. *Ὁ ποιητῆς φησὶν*] Odyss. H. 120. WESS.

169. 27. *Κατὰ συγγενείας καὶ συστήματα*] In pagis, qui per insulam ad Cl. erant sparsi, Aelian. XVI. H. A. 17. WESS.

169. 34. *Τοῖς λευκοῖς ὀφθαλμοῖς*] Transfero in contextum *ὀφθαλμοῖς*. Ervi autem descriptionem repete e Dioscoride L. II. c. 319. Rhod. *Τοῖς λευκοῖς ὀφθαλμοῖς*] Hoc bene. Iambulus insulam si lustrasset, de eius ingenio, fertilitate, arborumque variiis generibus plura nobis annumerasset; quae meliore fide a Pto-

maeo VII. Geogr. 4. et Hier. Osorio IV. de Reb. Emmanuel. p. 129. atque aliis perscripta novimus. WESS.

169. 39. *Τὰς μὲν θεμιτῶν etc.*] Vide inferius c. 59. Quod autem ἐθέτουσ Codd. quidam in ἐχόντων commutant, id praeter scriptoris voluntatem fieri et orationis series et loci similes I. 18. III. 31. etc. commonstrabunt. WESS.

169. 46. *Ὅν ἕκαστον τετραχῶς μετασχηματίζεσθαι*] Adstrui his et arctissime iungi oportuerat, γράφουσι δὲ τοὺς στίχους — — καταγράφοντες εἰς ὄρθον, quae paullo post consequantur, et turpi flagitio hinc avulsa sunt: neque enim quisquam dubitaverit, quin Diodorus uno tenore ea exsecutus sit, quae gentis huius literas et scribendi morem declarant. WESS.

169. 48. *Ἄχρη τῶν πενήκοντα καὶ ἑκατὸν etc.*] Non multo contractius eorum aevum ex Solini est sententia Polyh. c. 53. *Quibus immatura mors est, in annos centum aevum trahunt: aliis omnibus annosa aetas, et extenta paene ultra humanam fragilitatem.* Sed qui nihil de mutilatis aut illa miri ingenii herba inaudivisse videtur, alioqui, hominem bene si novi, non praeteriturus. WESS.

169. 51. *Κατά τινα νόμον ἀπότομον*] Cuius decreta aspera et districta. Sic I. 76. τὸ τῶν νόμων ἀπότομον. et V. 62. τὸ ἀπότομον τοῦ πατρὸς. XII. 16. ἀποτομία τῶν νόμων. Heliodor. X. p. 438. ὁξὺν καὶ ἀπότομον θάνατον dixit, sed sententia paullo diversa. WESS.

169. 53. *Ἀλλ' ἄνωθεν κάτω καταγράφοντες*] Κιονηδὸν aut etiam περγηδὸν κατὰ βιάδος hoc scripturae genus, quo Indorum Sineses atque alii in nostra tempora utuntur, vocant Grammatici apud Io. Alb. Fabric. I. Bibl. Gr. c. 27. WESS.

169. 54. *Εἰς ὄρθιον*] Ut lectionem marginis lubens admitterem, ita hanc exclusam nolim. Vide autem, quae in dictione ὄρθια diligenter annotat Favorinus. RHOD.

169. 58. *Καὶ ἀπόνως*] Tam marginale προσηρῶς adblanditur ut istius in locum succedat: quod tamen fervore in competitoris ambitu non destituitur. RHOD. *Καὶ προσηρῶς πρὸς ἔπρον κατερχομένης*] Parui scriptis Codd. et viro doctissimo. Hesych. *προσηρῶς, ἡδέως.* quo modo infr. V. 44. *μυθολογοῦσι Ὀύραρον* — — *προσηρῶς ἐνδιατρίβειν τοῦτω τῷ τόπῳ*, h. e. *cum animi quadam iocunditate.* unde *τροφαὶ προσηρῆς* I. 87. III. 24. *μελωδία et εἰρωδία προσηρῆσταιη* III. 69., quae voluptatem conciliant. *Ἀπόνως βιοτεῦν, ἀπόνως διατρέφεσθαι citra laborem vivere et nutrirī habebis* III. 24. WESS.

170. 60. *Γενναϊκὰς δὲ μὴ γαμεῖν etc.*] Adeo haec concidunt ac conveniunt Platonis reipublicae et legibus, ut inde sumpta arbitreris. Vide modo L. V. de Republ. p. 457. C. 464. D. WESS.

170. 69. *Τῷ σχήματι στοργγέλα*] Hoc malui. Io. Tzetzes Chiliad. VII. 728. hinc hausit *ἐνσφαιρα ζῶα*. WESS.

170. 81. Ἴδι ὁμοιον ἐλεῖν] Pro verbo hoc reficere ἔτιον non dubitamus. RHOD. Mihi non eadem confidentia. Vulgata sententiam dat satis commodam, si manus aut simile membrum etc. Quod si tamen mutandum aliquid autumes, poteris ex Cl. 2., extrita voce ὁμοιον, refingere χεῖρ ἢ ποῦς ἢ χεῖρ. Verum id nimium erit. WESS.

170. 83. Ὅσα μὴ νεκροῖς τόποις etc.] Novi qui καιροῖς mallet, ut καιρία τῶν μορίων in Theophylacti Epist. 74. et τῶν καιρίων ἀναρωτηθῆσιν Gregor. Nazianz. Orat. IV. p. 112. A.; quod tametsi pravam non iudicem, hunc tamen in locum non restituerim. Κεῖροι τόποι sunt vitales et sine quibus vita homini non durat. Sic infra XVII. 102. σιπεδῶν ἐλείπετε τοῖς νεκροῖς τόποις τοῦ σώματος, καὶ δεινὸς θανάτος ἀπαργύζεται. atque hinc τὰ νεκρώτατα μέρη τοῦ σώματος τῷ τοῦ νεκρῆος σιδήρω παραβάλλειν de capite et iugulo, quae Dionysius tonsoris novaculae exponere periculosum censebat L. XX. 61., et Iudaei Alexandriini, plagis horribilem in modum contusi, τὰ νεκρώτατα μέρη τοῦ σώματος καὶ μάλιστα τὴν κεφαλὴν ἄχρι θανάτου κατανεγμένοι in Philon. Iud. Leg. ad Cai. p. 1010. B.; quae si abunde tibi necdum videantur, confer in cumulum adscripta L. 54. WESS.

170. 91. Οὔτε τοῖς ἄλλοις τῆς ψυχῆς λήμασιν ἀξιόλογον] Sic oportuerat. Λήμα lucrum et captura est, λῆμα animi robor et praesentia. Euripid. Rhes. 498.

— — Ἔστι δ' αἰμνλώτατον  
Κρότημ' Ὀδυσσεὺς, λῆμά τ' ἀροούντως θρασύς.  
et Heraclid. v. 703.

Λήμα μὲν ὄντω στόρνυσι χρόνος  
Τὸ σὸν, ἀλλ' ἠβῆ.

Accidit autem saepe, ut a priore sede sua exturbaretur. Dionys. T. II. p. 175. ἐν τούτοις οὐ μέμφομαι τὸν ἄνδρα τοῦ λήμματος, quo loco λήματος praestare, non fugit diligentissimum Sylburg. Appian. II. B. C. p. 721. de Cicerone, in Catilinam ceterosque coniuratos magno animo insurgente, ὁ δ' ἐς τὸ ἔργον ἐκείνο γενναυστάτω λήμματι νεκρωμένος etc. immo vero λήματι. Quod cum Philostrato asseruerit Lamb. Bos Animadv. c. 10. et sermonis indoles adfirmet, demiror contra Cl. Graeviam stetisse Iac. Gronov., et Herodoto suo hoc auxilium negasse L. VII. 99. WESS.

170. 93. Ὁ πρεσβύτερος ἀπὸ τῆς ἡγεμονίας ἔχει] Haud paullo haec ab illis diversa sunt, quae Plinius VI. H. N. 22. de gentis rege literis tradidit. WESS.

170. 95. Ὁ πρῶτος τελέσας — καὶ ἀπαλλάξῃ] Series verborum postulat aut τελέσῃ — καὶ ἀπαλλάξῃ, ut in Clar. 2., aut τελέσας — ἀπαλλάξῃ, quod Coislin. praefert, et ego sequor. WESS.

170. 1. Καὶ πολλὰ καθόλου μὴ γαίνεσθαι] Sustuli incommodas voces τῶν καθ' ἑμῶς, quas oratio ipsa et veteres libri

damnant. Cl. Salmasius aliam ingressus est viam; cum Plinius, Solinus et Mart. Capella nec septemtriones in Taprobane conspici, nec Vergilias adparere tradant, coniecit Diodor. *καὶ πόλον τὸν καθ' ἡμᾶς* scripsisse: quod quidem ego haud arbitrer. Id si voluisset, et ursas coelestes praeteriisset, nec repetisset *καθ' ἡμᾶς*. Quae sequuntur de VII insulis, non admodum opportuna sunt, nec omnino vera: sunt circa Taprobanam insulae plures, sed parvae, ut Cosmas Indicopleustes L. XI. Topograph. p. 336. et diu ante eum Ptolem. VII. Geogr. 4. docuerunt. Habet India quidem alias, magnas et copiosas, sed Taprobana longe remotas, quas Iambulus fortasse, fama cognitas, in opus suum addidit, et Taprobanae propius admovit. WESS.

171. 5. *Ὅζ' ἀραιδην χοῶνται*] Lege *ἀρέδην, effuse*. RHOD. Confundi haec solent. Demosthen. de Coron. p. 134. *τῆς δὲ πομπείας ταύτης τῆς ἀραιδην οὐτωσὶ γεγενημένης*. ubi Ulpian. *Ἀραιδην, ἂν μὲν διὰ τῆς διηθόγγου γράγηται, τῆς ἀραισχέντου λέγει. ἂν δὲ διὰ τοῦ ε, ὅπερ καὶ βέλτιον, τῆς πολλῆς, ἐξ τῆς ἀρέσεως, ἀθρόως τε καὶ σηοδράς*. Recte ergo vir doctus. Simile vitium est in Exe. Vales. p. 393. *Ἰχθῆων τε καὶ τῶν ἄλλων χορησιῶν τὰ πρωτεύοντα* — — *ἀραιδην ἀνγλίσχοτο*. Cum enim Romanos luxuriose atque effusissime obsoniis studuisse dicat, *ἀρέδην* reliquisse liquido adparet. Vide et Iac. Perizon. ad Aelian. I. V. H. 4. WESS.

171. 11. *Τὸ περιέχον πάντα καὶ ἥλιον*] Explicavit haec S. Bochartus I. Canan. c. ult.; Plinius VII. N. H. 22. Herculem in insula coli praecipue adfirmat. WESS.

171. 12. *Ἰχθῆων παρτοδασιῶν πλῆθος ἀλείνοντες*] Aelian. XVI. H. A. 18. *περὶ γε μὴν τὰς τῶν ἰχθῆων καὶ τὰς τῶν κητῶν ἄγρας τίθηται τὴν σποδῆν. τὴν γὰρ τοι θάλατταν, τὴν περιχομένην τὸν τῆς νήσου κόκλον, ἁμαχόν τι πλῆθος καὶ ἰχθῆων καὶ κητῶν ἐπιτρέχειν φασί*. Sic lego; non ut in editis *περιχομένην*, quod alterius locum saepe occupasse, alias ostendam. Paullo post *γίνεται* Cod. Mutin., etsi hoc genus vocabula multitudinis numerum adsciscere posse non negem, mollius visum est. Iam quod de vitibus addit, per Solinum si steterit, falsum erit. *Vites, inquit, nesciunt, pomis abundant*; Polyhist. c. 53. WESS.

171. 17. *Τοῖς μεγέθεσι διαφέροντες etc.*] Puto legendum *ἔχουσι*, vel (*ἔχειν* retinendo) *διαφέροντας* et *ἀδιζοῦντας*. STEPH. Nominativi manere possunt, si *λέγονται* subaudiatur, aut *ἔχειν* in *ἔχουσι* convertatur. RHOD.

171. 20. *Ἐχόντων ἐν τῷ μέσῳ χοῶν*] Gossipium haec, quamquam minus vere, describunt: neque enim id ex calamo, sed frutice; nedum ex eius medulla, verum fructu provenit, monente S. Bocharto L. I. Canan. c. 46. WESS.

171. 23. *Πορρηρῶ*] Post hanc vocem deesse aliquid certum est. Defectum vero hunc explebis, si post *πορρηρῶ* inter-



pungas, et τὲ post ζώων in δὲ mutato inseras φέρει. Nisi πορφυρᾷ in πορφέροι, cum annexa δὲ, me tamen haud astipulante, mutandum iudices. RHOD.

*Ibid.* Ζώων τε παρηλλαγμένας φύσεις etc.] Haec et superiora pessime inter se apta atque connexa esse, quis tandem non animadvertit? Equidem doctissimi Rhodom. conatum laudo, neque eo tamen rem confectam locumve persanatum arbitror. Videor enim mihi observasse, in huius insulae, rerum eius naturalium, incolarum et eorum institutorum, religionis ac morum descriptione pleraque ita commixta ac ἕσπερον πρότερον collocata esse, ut scopae dissolutae videri possint. Quare vehementer vereor, ne et haec multis partibus sint defecta, aut certe loco suo mota. WESS.

171. 34. Ἐν τε ταῖς ἑορταῖς καὶ ταῖς εὐχαῖς etc.] Legendum suspicor καὶ ταῖς εὐχαῖς in conviviiis; quae et festis diebus aptissime iunguntur, et morem spectant veterum, quo sollemnibus diebus Deorum aliorumque laudes recitabant. Conf. Iac. Perizon. Animadv. Histor. c. 4. In precibus, ἐν ταῖς εὐχαῖς, id observari, num quid singulare est? WESS.

172. 43. Ἀνάλογον] Disiunge, ut sit ἀνὰ λόγον. RHOD.

172. 52. Ἐξπεσεῖν δὲ κατὰ τὴν Ἰνδιζήν εἰς ἄμμους] Incidisse navi fracta, eictosque esse. S. Lucas A. A. XXVII. 26. εἰς νῆσον δὲ τινα δεῖ ἡμᾶς ἐξπεσεῖν. et supr. Noster I. 31. λιμνάζουσιν ἑαυτοὺς ἐκπίπτοντες οἱ μὲν εἰς ἐλώδεις καὶ λιμνάζοντας τόπους. et V. 34. XIII. 13. Ἄμμους ex Mutin. rectum iustumque videtur. WESS.

172. 56. Εἰς πάλιν Πολίβοθρα] Eadem est, ac Palibothra c. 39. sed melius illic scripta. WESS.

172. 66. Παραγράφομεν] Vide num legendum sit περιγράφομεν. RHOD. Indice v. παραγράφομεν. Ἀπὸ τοῦ περιγράφομεν τῆρδε τὴν βιβλίον] Hoc cur sperni non debeat, abunde ad L. I. 41. me patefecisse arbitror. WESS.

## A N N O T A T I O N E S

I N

## L I B R U M T E R T I U M.

174. 18. *Καὶ τὸ τελευταῖον περὶ τῶν Ὑπερβορέων*] Nisi dixeris in brevi hac rerum libri superioris complexione ordinis habitam esse rationem nullam, equidem non video qui excusari haec possint: tantum enim abest, ut postremo loco de Hyperboreis sermonem instituerit, ut moribus Indorum explicitis, primum Seythis, tum Amazonibus, tertium Hyperboreis, quartum Arabibus, postremum vero locum insulae, a Iambulo descriptae, quam doctissimus Rhodoman. Latinis de suo adiunxit, dederit. Poterit quidem certe verborum aliqua traiectione ordo instaurari; sed id consilium multis fortasse nimis calidum videbitur. WESS.

174. 26. *Σχεδὸν παρὰ πᾶσι συμφωνεῖται*] Tenor orationis *συμφωνεῖσθαι* requirit, et tum *προσῆρὲς ὑπάρχειν*, quod suo suffragio Coislin. liber firmat. WESS.

174. 31. *Πρῶτον ἐνεργεῖν γένεσις ἐμψύχους*] Simillimam de hominum animaliumque prima in Aegypto origine disputationem exsecutus est I. 8. Convenit autem huic Stephanus in *Αἰθίοπι*, de Aethiopia esse qui referant tradens, eam primam omnium coagmentatam esse, eiusque incolas ante omnes alios Deos coluisse et legibus usos fuisse. *Τὴν Αἰθιοπίαν γὰρ πρώτην καὶ παλαιά. πρῶτοι καὶ θεοὺς ἐτίμησαν καὶ νόμοις ἐχρήσαντο.* WESS.

175. 40. *Κατὰ τὴν Ἰλιάδα*] Lib. I. v. 424. Historicam huius loci explicationem et allegoricam apud Eustathium invenies. RHOD.

175. 43. *Ἐὐωχίαν*] *Ἐὐωδίαν* Co. Cl. M. Pogg. male: vulgata explicat Homericum, *δαῖτα*, prorsus ut brevium Scholiorum auctor. WESS.

175. 44. *Παθ' ἀντοῖς τοῖς Αἰθίοπι*] Legendum *παρὰ τοῖς Αἰθ.* RHOD.

175. 52. *Ἐπιβουλῆς*] *Ἐπιβουλής* Co. Cl. I. frequenti peccato. Vid. ad I. 4. WESS.

175. 54. *Καὶ αὐτὸν τοῖς ὅλοις κινδυνεῦσαι*] *Κίνδυνος περὶ τῶν ὅλων* Appiano Mithrid. p. 326. et *κινδυνεύειν περὶ τῶν ὅλων* infr. XIII. 7. est periculum summae rerum adire. Quare qui plane infringuntur, *ἵπτιῦσθαι τοῖς ὅλοις* Demosth. Philip. III. p. 72. et *τοῖς ὅλοις συντριβῆναι* Nostro XI. 91., quique in periculum et exercitus et vitae imperiique amittendi veniunt, *κινδυνεῦσαι τοῖς ὅλοις*, *παραβάλλεσθαι τοῖς ὅλοις* Polybio III. 94. perhibentur. Quo etiam loco res Cambysis fuisse, cum in Aethiopas moveret, Herodotus III. 25. ostendit. WESS.

175. 56. *Ἐπὶ βραχὺ τῆς Αἰθιοπίας προελθοῦσαν*] Vide II. 16. et Suidam *Σεμίραμις*, qui nescio quem auctorem secutus in ultima Aethiopiae penetrasse significat. WESS.

175. 60. *Τοὺς ἑτέρου Αἰγύπτου*] Postulant hoc libri omnes, et Herodot. VII. 69., neque improbarem Clar. I. et Ven. *κατατολιῦσαι*, si *τῶν Αἰθιοπίων*, *τῶν* etc. legeretur. Solet enim in illis haud esse infrequens, qui alios adgrediuntur et pugnam audent. Polyb. III. 103. *παρασημήθη πρὸς τὸ παραβάλλεσθαι καὶ κατατολιῦν τῶν πολεμίων*. Greg. Nazianz. Orat. III. p. 68. D. de Iuliano *τῆς ἀπονοίας ἔδωκεν ἂν δίξην ἐν ὄροις Ῥωμαίων, ὧν κακῶς καιτετόλιμισε*. Ad quem modum *κατατολιῦν τῶν νεμάτων* qui fidenti animo mari sese committunt, Io. Chrysost. Homil. de Gloria T. III. p. 140. B., *κινδύνων κατατολιῦν ὑπὲρ τῆς ἀρετῆς* pericula fidenter adire pro virtute T. V. p. 51. C. et *παρθένος καιτετολιῦσασα ὕψεως ἀγγέλων*, quae in marium conspectum venire sustinet, Basilio M. Orat. in Gordium T. II. p. 147. A. WESS.

175. 64. *Ὁὐ χόραν ἀλλὰ θάλατταν γεγονέναι*] Respicit haec Tzetzes ad Lycophron. v. 119. Inferiorem autem Aegyptum olim mare fuisse, agnoscit Aristoteles I. Meteorol. c. 14. *καὶ πᾶσα τοῦ ποταμοῦ πρόσχωσις οὕσα τοῦ Νείλου*. Conf. superius I. 34. dicta. WESS.

175. 74. *Τὰ πλεῖστα τῶν νομίμων* etc.] Ex institutorum, legum morumque similitudine haud prave profecto conficitur diversarum gentium origo: iureque adeo Aethiopes, quique eorum caussam nuper egit Cl. Fourmontius in Comment. Acad. Inscript. T. VII. p. 504. ea omnia urgent. Quod si tamen Aegyptiis respondendi locus esset, dubium non est, quin iisdem rationibus pugnarent, et Aethiopas suos esse colonos pertenderent: manebit ergo lis sub iudice, donec aliunde, utri antiquitate praestent, probabitur; quod Aegyptiis fortasse in facili erit. WESS.

175. 76. *Βασιλεῖς θεοῦ νομίζεν*] Vide I. 90. 92. WESS.

176. 81. *Τὰ μὲν δημόδια προσαγορευόμενα*] Dixi ad I. 81. WESS.

176. 89. *Ὅμοίως ἐξυρημένους*] Toto itaque corpore rasi ut ne cilia quidem supersint. Synesius Encom. Calvit. p. 70. D. *ἴδη δὲ ἐγὼ κατενόησα καὶ τοὺς ἐν Αἰγύπτῳ θεραπειντοῦς του*

Θείων, μηδὲ τῶν ἐπιβλεφαριδίων ἀνεχομένους τριχῶν. Stolas autem linteas induciantur, unde Isiacorum gregem linigerum gregemque calvum coniungit Iuvenal. Satir. VI. 332. Adde Herodotum II. 36. WESS.

176. 91. Χρῆσθαι πύλοις μακροῖς etc.] Huius fere formae Persarum, Parthorum Armeniorumque pilei et tiarae in numis conspiciuntur apud Ezech. Spanhem. Dissert. VIII. de Usu et Praest. Numism. p. 471. Sicuti vero in Aethiopia regium capitis insigne aspides spirarum voluminibus innectebant, ita et in Aegypto moris erat. Aelian. VI. H. A. 38. καὶ τοὺς βασιλεῖς ἀνοίω τῶν Αἰγυπτίων ἐπὶ τῶν διαδημίτων φορεῖν πεποιθιμένους ἀσπίδας, τῆς ἀρχῆς ἀνιπτομένους τὸ ἀνίκητον ἐκ τοῦ ζῶον μορφοῦ τῶν προειρημένων. quae ritus eius explicatio ab ea ratione, quam Diodorus adfert, nihil admodum discrepat. WESS.

176. 99. Παρ' Αἰγυπτίοις καλουμένων ἱερογλυφικῶν] Habet Heliodor. IV. Aethiop. p. 174. ταινίαν γραμμασίων Αἰθιοπιζοῖς, οὗ δημοτικοῖς, ἀλλὰ βασιλικοῖς ἐστνημένην, ἃ δὲ τοῖς Αἰγυπτίων ἱεροατικοῖς καλουμένοις ὀμοιωτῶνται. unde colligas ex eius quidem opinione duplex etiam Aethiopicibus, quod Diodor. videtur negare, literarum fuisse genus. Quod utcumque fuerit, id certissimum est, hieroglyphicas Aegyptiorum literas animalium, membrorum humani corporis, instrumentorum fabrilium similitudine rerum fuisse figuras; inscripti obelisci pluraque Aegyptiorum, quae hanc in aetatem durant, monumenta liquido testantur. Quare culte satis Philo Iud. I. Vit. Mos. p. 606. A. hoc genus eruditionis τὴν διὰ συμβόλων φιλοσοφίαν, ἣν ἐν τοῖς λεγομένοις ἱεροῖς γραμμασίον ἐπιδείκνυνται, appellat. Hanc quoque originem multiplices Sinensium characteres habuere: primitus enim figurae erant, rem significandam ipso ad aspectu exhibentes, testibus Nic. Trigautio I. Exped. Sinic. c. 5. et Mart. Martinio I. Hist. Sinic. p. 22. WESS.

176. 10. Ὁ μὲν οὖν ἱεραξ ἀντοῖς σημαίνει etc.] Vide Clem. Alex. V. Stromat. p. 670. et Horapollin. I. Hieroglyph. 6. WESS.

176. 14. Ὁ δὲ κροκόδειλος σημαντικὸς — καζίας] Ἀναιδείας Clemens ait; quod eodem redit, ut ex Horapoll. I. 67. videbis. Contra tamen haec venire videtur Damascius in vita Isidori apud Photium Biblioth. p. 1047., asseverans hippopotamum ἀδιζίας ἐν τοῖς ἱερογλυφικοῖς γραμμασίον esse argumentum, iustitiae vero crocodilum. ὁ Σοῦχος δίκαιος. ὄνομα δὲ κροκοδείλου ὁ Σοῦχος, οὗ γὰρ ἀδιζεῖ ζῶον οὐδέ. Sed videtur tantum; certum enim genus eius animalis, cicur et lenis ingenii, de quo Aelian. VIII. H. A. 4., innuere creditur. WESS.

176. 15. Ὁ δὲ ὄφθαλμὸς, δίχης τριχῆς] Oculi atque aures Dei symbolum erant, ὅτι πάντα θεὸς ὄψα καὶ ἀνοίει, Clemens Alexand.; erant et Solis atque Osiridis; Macrobi. I. Satur. 21. Osirin Aegyptii, ut Solem esse asserunt, quoties

*hieroglyphicis literis suis exprimere volunt, insculpunt sceptrum, inque eo speciem oculi exprimunt et hoc signo Osirin monstrant.* Atque haec exempli caussa. Rem enim omnem post Horapollinis diligentem operam summa cum cura exsecutus est Io. Pier. Valerianus in Hieroglyphicis suis. WESS.

177. 30. Ὁ θεὸς ζωμιᾶζων κατὰ τινα συνήθειαν] Aegyptii et haec moris sunt; apud quos ἐν ταῖς καλονύμεναις ζωμισαῖς Deorum aureae imagines circumgestabantur, Clemente Alex. Strom. V. p. 671. auctore. Maxime vero rex cum esset constituendus; aderat enim praesens numen, ὡς περιφρονεῖτον περὶ τὴν ἀίρεσιν τοῦ βασιλείως, aderant ζωμισταί, dei administri, ceterique sacerdotum et prophetarum, ut docet Synesius I. Provident. p. 94. D. e quibus id videor posse conficere, ζωμισαῖς illas fuisse sollemnitates, quibus Aegyptiorum dii magna cum pompa circumferebantur comessabundi quasi; ζωμιστὰς fuisse eos, qui fereculis inpositos gestarent, eumque illis comessarentur: quod ipsum et in mentem venit Dionys. Petavio ad Synes. Encom. Calvit. p. 73. A.; quamquam rectius is instituisset, si Synesii verba καὶ ἔστιν αὐτοῖς ζωμιστήρια τὰ ζιβώτια ζυύπτοια non adeo explicare ex Aegyptiorum ζωμισαῖς, quam emendare ingressus esset. Mihi quidem dubium non est, quin πομισστήρια τὰ ζιβώτια ζυύπτοια scripserit: id postulant, quae de occultis Aegyptiorum sacris commentatur: id ipsae sacrae cistae, quae operculis, et haec πομισστήρια, studioe ocludebantur. Vide Alex. Xaver. Panielium de Cistophor. c. 3. WESS.

177. 32. Ἐθθὸς δέ] Hoc praestat. Vide II. 12. WESS.

177. 34. Λαίτη τε χοῖται τῇ τεταγμένῃ etc.] Et haec Aegyptia, ut L. I. 70. docuit. WESS.

177. 45. Καθάπερ παρὰ τοῖς Ἕλλησιν] Apud hos olim patratae caedis crimen anni exilio luebatur. Euripid. Hippol. v. 35.

Ἐπεὶ δὲ Θεσεὺς Κεχροπίαν λίπε χθόνα,  
Μίσημα γέγων ἀματος Παλλατιδῶν,  
Καὶ τήνδε σὸν δάμαρσι ναστολεῖ χθόνα  
Ἐνιασίαν ἐξδημον ἀνέσας φυχῆν.

ad quae Scholiastes: νόμος ἦν, τοὺς ἐμφύλιον καὶ συγγενικὸν φόρον ποιήσαντας ἐξορία φυχῆ ζυμοῦσθαι τὸ μίσημα. Mansit hinc Athenis, ut, qui alium casu fortuito necasset, annum exilium ultro subiret, et tum rediret, ubi occisi cognatos quomodo-cumque placasset, Demosth. in Aristocrat. p. 414. et Criticis ad Euripid. Orest. v. 511. testibus. WESS.

177. 57. Μεγίστην καὶ τροσιώτην τάξιν ἔχορτες] Strabo XVII. p. 1178. B. ἐν δὲ τῇ Μεγίστῃ τροσιώτην τάξιν ἐπέχον οἱ ἰερεῖς τὸ παλαιόν. quibus addit, misso nuntio solitos fuisse regi mortem imperare, eumque morem durasse, donec rex quidam, armata manu in lucum irruens, ubi aureum sacellum erat, sacerdotes interficeret et consuetudinem aboleret: quae clarissime osten-

dunt eodem, e quo Diodorus, fonte Strabonem hausisse atque hortulos suos rigasse. WESS.

177. 63. *Συνηθείμ συντεθραμμένη]* Sic *πονηροῖς ἐθισμοῖς συντεθραμμένοι*, qui malos mores longo usu inbiberunt, supra II. 60. Conf. I. 74. WESS.

178. 71. *Καταφρονῆσαι τοῦ πράγματος]* Legendum cen-  
seo τοῦ προστάγματος, ut paullo ante καὶ δεῖν τὸ πρόσταγμα  
τῶν ἀθανάτων ἐπὶ θνητῆς γένσεως μηδαμῶς παροραθῆναι. Si-  
milem mendam e Strabone IV. p. 285. B. sustulit Is. Casaubon., nec  
magis aliud in vetustis schedis obvium, quam *πράγματις* et *προσ-  
τάγματος, πραπτομένων* et *προσταπτομένων* confusio. Vid. II.  
7. et inf. c. 33. WESS.

178. 80. *Ἐπὶν ὁ βασιλεὺς μέρος τι τοῦ etc.]* Eadem ite-  
rum Strabo XVII. p. 1178. B. WESS.

178. 87. *Τῆν βεβαίαν φιλίαν]* Videntur librarii Codd. Co.  
et M. *βέβαιον* praeferentes, noluisse ab eorum opinione dissen-  
tire, qui *βέβαιον ἐπὶ θηλυκοῦ χρεῖτιον* esse decernunt, uti Tho-  
mas M.; quorum praeceptum spernimus, obsecuti scriptori-  
bus auctoritatis locupletioris, ut Demosth., qui Olynth. II. p. 13.  
*δύναμιν βεβαίαν.* et in Aristocrat. p. 403. *φυλακὴν βεβαίαν,*  
Isocratis Archidam. p. 196., ubi *εὐθύνην βεβαίαν*, Aristophan.,  
qui Lysist. v. 1016. *γίλην βεβαίαν* dicere non dubitarunt. Quae  
exempla si pluribus cumulare velis, consule Cl. Duker. in Thucy-  
did. III. 43. WESS.

178. 92. *Κατὰ τῶν φίλων]* Mallem scripsisset *κατὰ τοῦ*  
*βασιλέως.* eum enim omnia haec potissimum spectant. Bene Stra-  
bo, *ἐκ δὲ τούτου φυλακὴ τοῦ βασιλέως ἐστὶ πλείστη παρ' αὐτῶν.*  
WESS.

178. 95. *Τοῖς τῆν μητροπόλιν αὐτῶν οἰκοῦσι]* Urbem  
Meroën, πόλιν ὁμώνυμον τῇ νῆσῳ, ut Strabo XVII. p. 1177. A.;  
Heliodorus X. p. 460. *ἡ γὰρ δὲ Μερὸν μητροπόλις αἴσα τῶν*  
*Αἰθιοπῶν, τὰ μὲν ἄλλα ἐστὶ νῆσος etc.* Vide superius I. 33.  
WESS.

178. 1. *Τῆν ὄμορον τῆς Ἀραβίας]* Eam credo intelligit,  
quae ultra Nilum flumen in sinum Arabicum vergit, de qua I. 21.  
WESS.

178. 4. *Τοῖς τριχώμασιν οὐλοῖ]* Ineptiunt qui mutare  
sustinent. Sunt Aethiopes eius tractus *μέλαρες καὶ οὐλότριχες*  
Strab. XV. p. 1012. B. 1019. A. WESS.

179. 16. *Τόξοις τετραπήχεσιν]* Postremam vocem negle-  
xerat interpres. Agatharchides de Rubr. Mari p. 13. *ζωῶνται —*  
*— τοῖς μὲν τόξοις μεγάλοις.* Distinctius Strabo XVII. p. 1177. C.  
*ζωῶνται δὲ καὶ τόξοις Αἰθιοπες τετραπήχεσι ξυλίνοις.* WESS.

179. 17. *Τῷ ποδὶ προσβαίροντες]* Pede in arcum, ut ma-  
iore eum robore tendant, inposito. Agatharchid. de Rubr. Mar.  
p. 40. *ὁ μὲν εἷς κατέχει τόξον τῷ ποδὶ προσβεβηκῶς.* Atque ita

et Strabo XVI. p. 1117. etsi nunc prave ibi *προβελήζοντων τοῖς ποσὶ*. Nec aliter puto accipi debent Xenophontis verba IV. Exped. Cyr. p. 253. *εἶλοντο δὲ τὰς κερὰς, ὅσπερ τοξέυοντες, πρὸς τὸ ζήτην τοῦ τόξου τῷ ἀριστερῷ ποδὶ προβαίνοντες*, seu potius, ut hic, *προσβαίνοντες*. *quoties sagittas missuri erant, adducebant, sinistro pede in imam arcus partem inposito*. Utebantur enim barbari illi arcibus ternum fere eubitorum; quos ut intenderent, humi collocabant, pedequae admoto sinistro, nervum summis viribus adducebant. Quo modo et expedita res erit, et Xenophontis locus ab intempestivis criticorum conatibus immunis. WESS.

179. 18. *Καθοπλιζουσι δὲ καὶ τὰς γυναῖδας*] Eadem haec, sicuti et quae sequuntur, Strabo XVII. p. 1177. C. WESS.

179. 30. *Μὴ γερρόντιον ζῆου*] Dinon Aethiopiae oves lana esse inopes, sed camelorum pilis hirtas, *πρόβατα ἐρίων μὲν ψιλὰ, τρίχας δὲ καμήλων ἔχοντια*, prodidit in Aelian. XVII. H. A. 10., quod si cui ad credendum difficile acciderit, Strabon. sequatur, qui Aethiopiae *προβάτων ἀγοισιχοῦντων*, ovium, caprarum in morem hirsutarum, meminit: cuiusmodi in Corsica genus musmonum, caprino villo, quam pecoris velleri propius, apud Plinium VIII. H. N. 49. WESS.

179. 32. *Ἀνατέλλει περὶ τὰς λίμνας*] Eustath. in Iliad. E. p. 607. *ἀνατέλλειν ἐκ γῆς* gravius et elegantius esse quam *ἔρυσθαι* adfirmans, dictioni maiestatem quandam conciliat; quam Diodorus hoc loco sectatus non videtur, neque Theophrastus IV. Causs. Plant. 6. p. 303. *φανερὸν ἐνθὺς εἶναι τὸ γῆλλον ἀνατέλλον τῆς αἴρας* inquires. WESS.

179. 38. *Τοξείαις ἐνηθληζότες*] Sic I. 54. *ἐνηθληζότες τοῖς πολεμίοις*, qui longo usu rei militaris peritiam sibi pepere-runt. et XVII. 9. *ἐνηθληζότες τοῖς πολεμιζοῖς κινδύνοις*. Prae-  
positionem addit XVI. 44. *πλήθος ἐν γυμνασίαις καὶ πόνοις ἐνηθληζός*. WESS.

179. 48. *Τὴν τε γὰρ Ἴσιον etc.*] Vera haec sunt de incolis Meroes. *Οἱ δὲ ἐν Μερόῃ καὶ Πουζιλίᾳ καὶ Πύρᾳ καὶ Ἴσιον σέβονται πρὸς ἄλλω τινὶ βαρβαρικῷ*, Strab. XVII. p. 1178.; quem autem ille barbaricum Deum vocat, eum Noster Iovem interpre-tatur. WESS.

179. 50. *Ἐνηργεῖσθαι*] Hoc retinendum: fit enim relatio ad tempus, quo aetatem inter homines egerunt. RHOD.

179. 51. *Καθόλου θεὸς οὐ νομιζουσιν εἶναι*] Aegre mihi persuadeo, gentes olim aut nunc esse, quarum obbrutescens ingenium eo devenerit, ut divinum numen de rerum natura prorsus sustulerit. Placet egregie hoc Artemidori I. Onirocrit. 9. commune esse omnibus hominibus *θεοὺς σέβασθαι καὶ τιμᾶν. οὐδὲν γὰρ ἔθνος ἀνθρώπων ἄθεον*. Hic quae narrantur, Atlantios spectant, de quibus vide apud Herodotum IV. 184. WESS.

179. 57. Οἱ δὲ περιχέαντες ἕλον] Dixi ad L. II. 15. WESS.

180. 61. Ὅρζον μέγιστον ἡγοῦνται] Hunc Meroës incolarum morem, eorum enim esse Strabo XVII. p. 1178. significat, probabant et Nasamones apud Herodot. IV. 172. barbarorumque alii. WESS.

180. 63. Οἱ μὲν τοῖς ἐπηρεπεστάτοις] Notavit Herodot. III. 20. civium maximum et robore praestantissimum regem ab Aethiopibus constitui; hunc sequitur Aristotel. IV. Polit. 4.; Bion vero in Aethiopicis apud Athen. XIII. 2. p. 566. pulcherrimum legi, τὸν κάλλιστον ἐκ πάντων καὶ μαχημώτατον ait Nicol. Damascen. Excerpt. Vales. p. 518. WESS.

180. 65. Ὡς μόνους ἄριστα — — φροντιοῦντας] Nisi accusativos hos absolute positos agnoscas, scribendum erit ὡς μόνοις — — φροντιοῦσι ex schedis Clar. 2.; quod etsi haud paullo planiorem facit orationis ordinem, non damno tamen alterum: est enim id genus optimo cuivis receptum. Aratus Phaenom. v. 332.

— — Ὄν ἔτι κείνον ἄμ' ἡλίω ἀνιόντα,

Φυταλιαὶ ψεύδονται, ἀναλδέα φιλλιόωσαι.

ubi Critici veteres, τὸ δὲ, ὄν ἔτι κείνον τὸν Σείριον, Ἑλληνισμός ἐστιν, ἀντὶ τοῦ, ὄν ἔτι ἐκεῖνον ἀνιόντος ἅμα ἡλίω. Alia exempla ex Pausania dedit Sylburg. in Praefat. p. 930., ex Arriano L. V. Exp. Alex. p. 222. Iac. Gronov. et Kuhn. ad Aelian. II. V. II. 13. Porro non absurdum Aethiopum illud institutum, quo optimis omnium pastoribus regni habenas tradebant; siquidem ποιμενική, quae Philonis Iud. I. Vit. Mos. p. 611. E. verba, μελέτη καὶ προγέμισμα βασιλείας μέλλουσι τῆς ἡμερωτάτης τῶν ἀνθρώπων ἐπιστατεῖν ἀγγέλις. WESS.

180. 77. Διὸ καὶ περιμάχητος ὁ τόπος] Qui tanto studio petitur, ut eius possessionem certaminibus Afri Aethiopibus et vicissim praeripere conentur. Iosephus de diademate XVII. A. I. 8. 4. δέξασθαι τὸ περιμάχητον τῆς ἐνθέρδε τιμῆς. Demades Athenae τὸ περιμάχητον καὶ θαυμαζόμενον ἐπὶ πάντων ἄσιν Orat. p. 180.; Strabo XIII. p. 910. C. de Thebes campo, ὃ διὰ τὴν ἀρετὴν περιμάχητον γινέσθαι φασί. Vide et infra XII. 68. WESS.

180. 84. Γεδύονται τοῦ θρόνου] Hoc retineo; est enim Nili ripa mire iucosa; unde et Nicander Theriac. v. 200. Ἀγίπιοιο παρὰ θροῦντας ἰάμνοισ. Post pauca vero, inducta σκηπτῶν voce, quam Reg. inprobat, scriptum fuisse autumo, ὄντες τομάδες καὶ τὸ σύνολον τῶν συμμέθουσι etc., quo modo lenius multo decurret oratio. WESS.

180. 97. Ἐπιτίθενται τοῖς ἐλέφασιν] Describunt hoc draconum et elephantorum certamen, nec eodem tamen modo, Philo Iud. De Mundo non corrumpendo p. 961. A. et Aelian. VI. II. A. 21., consentiuntque aevi recentioris scriptores in Comment. Iob. Ludolfi Histor. Aethiop. p. 148. Confer et infra c. 37. WESS.



181. 3. *Ἀπολειπόμενοι δ' ἀπορήματος*] Initio ἐπισημα-  
τος substitueram, ut esset, *facultate destituti*. Sed aptius et rectius nunc videtur legi ἐπιχειρήματος. Sequens etiam δὲ in γὰρ transmuto. Ita enim causa illa, cuius hic implicite fit mentio, explicatur. RHOD. Longe commodius est ἐπιχειρήματος, quod et a Diodoro venisse suspicor: vulgatum quidem certe ut bonum sit, nullis machinis inpetrari poterit. WESS.

181. 8. *Ταῖς τὸ μῆζος ἀνηκούσαις*] Oportuerat ταῖς εἰς τὸ μῆζος, quod nec Rhodom. fugit. Tamen c. 15. de ultimo sinus Arabici recessu, ὅς εἰς τὴν μεσόγειον ἀνήκων ἄπιστον διάστημα. Ut putes consulto eum praepositionem subaudiendam neglexisse. WESS.

181. 18. *Ἀγαθαρχίδης μὲν γὰρ ὁ Κνίδιος*] Fuit Heraclidis Lembii *anagnostes* sive lector, teste Photio; quem cum sub Ptolemaeo sexto vixisse referat Suidas, haud sane male Agatharchidem Io. Ger. Vossius I. Histor. Graec. 20. illi Ptolemaeo aequalem fecit; neque tamen eo rege libros de Asiae Rubrique maris rebus memorabilibus vulgasse videtur: scripsit eos regis Aegyptii tutor cum esset et aetatis provectae, *πρεσβύτερος ὢν καὶ πολλῶν ἔμπειρος γεγονὼς πραγμάτων*, sicuti ait p. 14. edit. Hudson.; quae quia in lectorem non conveniunt, neque traditum nobis liquido est, cuius Ptolemaei tutorem egerit, tempus scripti et publicati operis in obscuris merito censetur. H. Dædwellus ut has tenebras discuteret, regem, qui in Agatharchidis fuit tutela, Ptolemaeum esse censuit Alexandrum Dissert. de Aetate Agatharch. p. 70., editumque librum anno U. C. Varroniano DCCCLXIX. vel DCL.; quo eodem tempore Artemidorus Ephesius, quippe Olymp. CLXIX., uti Marcianus Heracleota docuit, florens, Geographiam suam in vulgus emisit: quod tamen ego in animum inducere non possum. Videor enim animadvertisse ex Strabone, et ostendam opportuniore loco, Artemidorum Agatharchidis scrinia compilasse, et de Troglodytis Arabicique sinus accolis omnia iisdem paene verbis esse executum; unde conclusione quadam conficior, non unius, quae viri doctissimi sententia, anni, sed plurium intervallum inter utriusque publicata scripta intercessisse: tantoque magis quod eadem in Aegypto et Ptolemaeorum gratia uterque egerit, nec fieri potuisse videatur, ut intra unius anni spatium Artemidorus tantum opus absolverit. Forte itaque Ptolemaeus, cuius tutelam Agatharchides administravit, is est, quem *Soterem* Porphyrius, *Physonem* II. alii adpellant; quo modo et iustam temporis intercapedinem Agatharchidem inter et Artemidorum habebimus, et illis satisfiet, quae de Agatharchide prodita novimus. Sed haec alias uberius. WESS.

*Ibid.* *Μὲν γὰρ*] Si ita, non μέντοι, scripsit Diodorus, γὰρ illud referendum est ad *περὶ δὲ τῶν συγγραμμάτων ἡμῶν διωρισμένων*.

181. 24. *Παρεβάλομεν εἰς Αἴγυπτον*] Tametsi de illis, qui in forum se conferunt, ἐμβάλλειν εἰς τὴν ἀγορὰν usu trifissimum sit, probatumque Lycurgo in *Leocrat.* p. 148., Libanio *T. I.* p. 79. *A. B.*, Io. Chrysostomo *T. III.* p. 52. *B.*, Themistio *Orat. XXIII.* p. 293. *D.* atque aliis, non recipio ἐπεβάλομεν Coisl. ; vulgatum enim Diodorus pro suo agnoscit. Vide *I. 12.* WESS.

181. 35. *Περὶ γὰρ τὰς ἐσχατίας etc.*] Omnia haec debet Agatharchidi de *Rub. Mari* p. 23. WESS.

181. 37. *Συναγομένου πολλοῦ*] Πολλοῦ post συναγομένου eradatur. RHOD.

181. 39. *Διαφνὰς*] *Διαφνάδας* Coisl. male. Vide *V. 22.* et Theophrast. de *Lapid.* p. 400. WESS. *V. Lobeck.* ad *Phryn.* p. 497.

181. 40. *Περὶ λαμπομένας ἡέσεις*] Mirifice delectatur atque in huius vocis usu acquiescit Diodorus. Sic enim animalia vix alibi visa ζώων ἀθεωρήτους ἡέσεις *L. III.* 36., quo etiam modo παρτοδαπὰς ζώων ἡέσεις Dio Chrysostom. *Orat. V.* p. 83. *A.*, et ἡέσιν πετεινῶν, ἐρπετῶν τε καὶ ἐναλίων *S. Iacobus Epist. III.* 7. et varia herbarum genera παρτοίας βοτανῶν ἡέσεις *IV.* 46., lapillosque splendentes ἡέσεις περιλαμπομένας *III.* 69., sicuti et hoc loco, adpellat. WESS.

181. 43. *Οἱ γὰρ βασιλεῖς τῆς Αἰγύπτου etc.*] Primi fortasse gravissimae huius poenae auctores sunt: transiit dein inhumana consuetudo ad alios, praecipueque Romanos, quibus damnatione in metalla et opus metalli nihil frequentius. Vide *P. Fabrum II. Semestr. c. 5.* et *Blas. Caryophil. de Marm. Antiq.* p. 158. WESS.

182. 52. *Πάντες δὲ πέδαις δεδεμένοι*] Galeno propterea πεδῆται *L. IX. Simpl. Medic. Facult.* p. 129. ; sed haec minima pars aerumnarum, quas aurileguli incredibiles perpetiebantur. Enumerant eas Democritus in *Epist. Hippocrat. ad Damagetum* p. 1282., Lucretius *VI.* 803. Io. Chrysostom. in *Matth. T. VII.* p. 559. Nimirum luxus, habendique studium, crudelitate quadam admixtum,

*Quaerere sub terris aurum, furtoque latentem  
Naturam eruere omnem, orbemque invertere praedae  
Imperat, et glebas inter deprendere gazam,  
Invitantque novo tandem producere coelo:*

ut bene *Manilius V.* 524. WESS.

182. 56. *Φυλακαὶ γὰρ ἐκ στρατιωτῶν etc.*] Accedebat coeli solique siccitas, quae tanta illis erat in oris, ut ea conclusi fugam ingredi non auderent. Prodidit hoc de damnatis, qui iisdem in Arabiae atque Aethiopiae finibus lapicidinam Porphyritin exercebant, *Aristides T. III.* p. 587. *Ἐργάζονται δ' αὐτῶν ὡσπερ καὶ τὰς ἄλλας δῆπον κατὰδικοι. ἀλλὰ τούτους γε, ὡς φασιν, οὐδεὶς φρουρεῖ· οὕτω σφόδρα ὑδατός ἐστιν ἄρορος, ἐφ' οὗπερ καὶ ἔρη-*

μωται ἀλλὰ φόβῳ τοῦ κενθῆσεσθαι ζῶντας, ὃ δαί παθεῖν ἄν τις φείγων ἄλῳ, μένουσιν οἱ μένοντες τῶν μεταλλῶν. WESS.

182. 60. Περὶ πολλῶν κούσαντες] Agatharchides: τὰ μὲν ἀπότομα καὶ τελείως σκληρὰν ἔχοντα φέσιν, ἐμπρήσαντες ἔλη, καὶ χαῖνα τῷ πυρὶ ποιήσαντες, οὕτως αὐτοῖς προσάγουσι τὴν πῆραν etc. quae eadem aurilegulis et metallariis serioris aevi studiosissime observari, dum venas sectantur et emoliantur, docet Georg. Agricola L. V. de Re Metall. p. 79. WESS.

182. 63. Μυριάδες ἀκληροῦντων ἀνθρώπων] Dicuntur ἀκληρεῖν, qui gravi atque adversa fortuna premuntur. Eleganter Teles in Serm. CVI. Io. Stobaei p. 577. ἀπογέγονεν ὁ γίλιος, καὶ γὰρ γέγονε· σὶ δὲ ὅτι μὲν ἀπογέγονεν, ΑΚΛΗΡΕΙΝ οἶε, ὅτι δὲ ἐγένετο, οὐκ ΕΥΚΛΗΡΕΙΝ. Unde ἠκκληροζότες, quos mala urget fortuna, Polybio I. 7. et inferius Nostro XIII. 47. 58., ἀκληροῦματα calamitates et ἀκληροῖα XIII. 31. XVII. 71. Bene iterum Teles in Sermone Stobaei XXXVIII. p. 232. patriam invenire scelestam et ingratham, in quam multa contuleris, πῶς οὐκ ΑΚΛΗΡΗΜΑ; inquit, καὶ πῶς ἂν εἴη τοῦτο ΑΚΛΗΡΗΜΑ, ἀλλ' οὐκ ἤδη εἰπεῖν ΕΥΚΛΗΡΗΜΑ, τὸ γινῶναι ποῖα τις, πρότερον μὴ εἰδῶτα. WESS.

182. 68. Τυπῖσι σιδηραῖς — — κόπτουσι] Haec et superiora iisdem fere verbis explicat atque exsequitur Agatharchides de Rubro Mar. p. 23. Malleos autem, quorum in re metallica usus, summa cum cura descripsit Georg. Agricola VI. de R. M. p. 108. WESS.

182. 73. Καὶ σοζολιότητας] Scholion hoc est. RHOΘ.

Ibid. Ἀγχνος — πεπραγματεμένους περιφέρουσι] Erunt fortasse, quibus potior videbitur Reg. et Vatic. scriptura; quorum gravate ego opinioni accessero: satis enim commodum id est, quod amplector, idemque exprimit atque haec Agatharchidis, οἵτοι μὲν οὖν ἀγχνος προσδεμένους τοῖς μετώποις ἔχοντες λατομοῦσιν. WESS.

182. 77. Θραύματα] Θραύματα Co. M. Vat. Cl. 2. quae scripturae varietas et in Agatharch. p. 21.; vide infra XVII. 20. WESS.

182. 83. Οἱ δὲ ὑπὲρ ἔτη τριάκοντα] Agatharchid. οἱ γὰρ ἐντὸς τῶν τριάκοντα. quae si Photius recte excerpserit, aut sua aetate aliter ea Diodorus legit, aut lapsus est. WESS.

183. 89. Πρὸς τὴν κόπην ἀλλήθουσιν] Doctissimo Rhodom. dubia huius loci sententia fuit: hic κόπην vertit *paviculam molitoriam*, in Agatharchide κόπην sive κόπην, neque enim eius scriptura constat, *contusionis ictum*: neutrum, ut arbitror, bene: molunt enim senes feminaeque lapillos, aurī ramenta complexos; neque adeo *ictui* aut *paviculae* hic locus est commodus. Fac vero molas fuisse trusatiles, earumque manubriis binos aut ternos adstitisse, ut manuum impulsu eas versarent et lapillos commole-

rent, tum *κόπη* erit ipsum illud manubrium, ut *κόπη ἢ τοῦ ξίφους λαβὴ καὶ ἐγχειρίδιον* apud Hesychium, rectissimeque a Nostro *παρασιάρτες* — *πρὸς τὴν κόπην*, et ab Agatharchide καὶ *παρασιῦσαι τρεῖς ἐκατέρωθεν πρὸς τὴν μίαν κόπην*, οὕτως *ἐξωσμέναι* etc. ἀλήθουσιν dicentur viri mulieresque, qui molarum manubriis adpositi eas rotant et continua versatione lapillos subigunt. Atque hoc mihi verius videbitur, donec aliunde meliora edocear. Porro in Agatharchide quae sequuntur, recte ex Diodoro corrigunt viri docti: ἀλήθουσι δὲ ἕως ἐπὶ τὸν σεμιδάλεως τρόπον ἀχθῆ τὸ παραδοθὲν μέτρον. quod enim auri effossus est, tunditur, lavatur, uritur, molitur ut farina, docente Plinio XXXIII. 4. WESS.

183. 99. Τελετήσωσιν ἐν ταῖς ἀνάγκαις] Sunt ἀνάγκαι aerumnarum, miseriae, tormenta, quibus aurileguli subterraneis in carceribus misere divexabantur. Iosephus XVI. A. I. 8. 1. βασανιζόμενοι δὲ μᾶλλον καὶ ἐν ταῖς ἀνάγκαις ὄντες, et post pauca sect. 4. εἰς τις τῶν νεωτέρων, ὡς ἐν ταῖς ἀνάγκαις ἐγένετο. quibus locis tormenta, quorum molestiis verum ex illis exprimebatur, de quibus quaestio habebatur, indicat: et clarius L. XVII. 4. 2. ἀνάγκαις τε καὶ βασάνων σφοδρότητι ταῦτα ἔλεγον. Inde ἀναγκαῖον carceris locus, in quo de servis aliisque quaestio instituebatur, et carcer ipse Xenophonti L. V. Rer. Graec. p. 443. Vide Cl. Salmas. haec ad Solin. p. 764. illustrantem, et *καζοῦμεροι*, incertum memoriae vitio an coniectura, legentem, quamquam sine urgente causa, et infr. IV. 44. WESS.

183. 7. Καταδόξῃ κατὰ τὴν τῆς σαρίδος ἔγγλισιν] Agatharchides τὸ μὲν γεωδὲς ἐπιτιμώμενον συναποδόξῃ κατὰ τὴν ἐπίνοιαν τοῦ σαυιδώματος. quae postrema in mendo cum sint, Cl. Salmasius κατὰ τὴν ἐπίνοιαν τοῦ σαυιδώματος *per laevorem tabulae ad unguem rasae et conplanatae* rescribi ad Solin. p. 777. oportere censuit: a cuius ego opinione non dissiderem, si τὸ ἐπίνεδες et ἐπίνεια *laevorem* magis quam *nitorem* atque *elegantiam* exprimeret, quod secus esse, exempla, ab ipso ad eundem Solin. p. 589. producta, evincunt. Diodorus legisse videtur κατὰ τὴν ἐπίνεσιν τοῦ σαυιδώματος. quod iustum arbitror, etsi simile exemplum mihi desit. Πέτραι ἐπιπνευενεῖαι sunt declives: hinc ἐπίνεσις, uti ἔκνεσις, progenita *declivitatem* indicat, sive ἔγγλισιν, ut Diodorus ait. Ceterum auri diversas lavandi rationes accurata oratione perscriptas si desideres, cumulate tibi satisfaciet Georg. Agricola L. VIII. de Re Metall. p. 256. etc. WESS. Non opus est ut Agath. e Diodoro corrigatur. ἢ τοῦ σ. ἐπίνοια est *ingenium* vel *ratio tabulati*, ἢ περὶ τὸ σ. ἐπίνοια hominum solers inventum in struenda illa machina. REISK.

183. 17. Μολίβδον βῶλιον] Melius βῶλον. RHOD. Μολίβδον βῶλον] Hoc malo. Agatharchid. καὶ μῦξαντες κατὰ λόγον τοῦ πλήθους μολίβδου βῶλον καὶ χόνδρους ἀλῶν, καὶ κασιπέ-

ρον βραχὺ καὶ κριθινον πίτυρον e quibus et id adparet, non sine iusta ratione καὶ κριθινον Co. et Cl. 1. me praeferre. WESS.

183. 23. Ὀλίγη ἀποσίς γεγενημένης] Debet rariorem huius vocabuli usum Agatharchidi, ἀποσίαν ἀπὸ τοῦ ψήγματος ramenti intertrimentum, seu quod in decoctione deperit, appellanti, sicuti et elegantissimum epiphonema, quod mox consequitur. WESS.

184. 37. Καὶ Κεδρωσίας] Hoc praefero. Placuit enim Diodoro XVII. 104. XVIII. 3. Agatharchidi p. 27. et Alexandro Polyhistori apud Stephanum Κεδρωσία, frustra codici minus diligenter scripto id inputantem. Is. Tzetzes hunc Diodori locum signat in Lycophon. v. 817. WESS.

184. 49. Καὶ στεροὶ παρτελῶς ἀλῶνες] Agatharchid. p. 28. αἱ καὶ κοιλιάδας βαθείας ἔχουσι καὶ γάραγγας ἀνωμάλους καὶ στεγροὺς ἀλῶνας καὶ σκολιὰς ἐκτροπὰς. ubi στεροὺς ἀλῶνας oportuerat, uti hoc loco. WESS.

184. 52. Τὰς ἐκτροπὰς καὶ διεξόδους συγκεχώρουσι] Sine controversia verum est, quod Codd. auctoritatem secutus restitui. Ἐκτροπαὶ sunt anfractus aquarumque divergia, ut paullo ante et in Agatharchide; simili ratione ἐκτροπαί, ἐκνεύσεις τῶν ὁδῶν, ὅπου τίς ἐκτραπήναι δύναιται, in Schol. ad Aristophan. Ran. v. 113. et infra c. 26. WESS.

184. 58. Συναποχομιζα — πλῆθος ἰχθύων] Paria de Ichthyophagis Arrian. Indicor. c. 29., morem tamen piscium capiendorum paullo diversiorem describens. WESS.

184. 67. Καθάπερ ἀφ' ἐνὸς κελεύσματος] Uno velut iussu. Thucydides II. 92. καὶ ἀπὸ ἐνὸς κελεύσματος ἐμβοίησαντες, ἐπ' αὐτοῖς ὄρισαν. Sophron apud Athen. III. c. 10. p. 87. κόγχαι ὡσπερ αἱ κ' ἐξ ἐνὸς κελεύσματος κελύναντι, conchae signo veluti dato, aut uno ex iussu, hiant. quae Diodorique loca non fugerunt diligentiam accuratissimi Steph. Bergler. in L. I. Epist. 22. Alciphronis. ἀφ' ἐνὸς παραγγέλματος infra XIII. 45. WESS.

185. 76. Μύριαι] Σύριαι M., quo modo Agatharch. p. 28. et Aristot. V. H. A. 10., sed nihil interest. WESS.

185. 80. Ταῖς ἀποδόξῃ πέτραις ἐπιτίμοντες] Mallem hoc quidem loco lapidum fragmentis, quae ad incidendum aptissima erant, praecipue saxi Aethiopici, de quo Herodot. II. 86. Conf. supr. II. 14. Praetuli praeterea ἄρμολομένην, ut naturam respiciat. WESS.

185. 93. Ἐπί τινος λεωπετρίας] Sic praestat. Agatharchid. p. 92. τῆν δὲ σάρκα τῶν ἰχθύων εἰς λεωπετρίαν συναμαθόντες πατοῦσιν ἐκτενῶς. Habent praeter Suidam Alexandrini interpretes λεωπετρίαν Ezech. XXIV. 7. 8. XXVI. 4. 14.; ut audiendi non sint, qui in Agatharchide λεωπέτραν ex Hesychio maluerunt. WESS.

185. 1. *Ἄς — ξηρανθείσας καθίσαντες κατενοχοῦνται*] Blandiri posset Reg. Cod. *καθενοθέντες*, quo de viri docti ad Luciani I. Ver. Hist. 23., nisi Agatharchides vetaret, ὧν, iniquitas, ξηρασίαν λαβονσῶν, καθίσαντες ἐνοχοῦνται, ipseque Diodor. I. 92. καὶ καθίσάντων ἐπὶ τινος ἡμικυκλίου, plurimique alii. Τὸ γὰρ καθίξω οὐ μόνον ἀντὶ τοῦ ἕτερον ποιῶ καθίξεν, ἀλλὰ καὶ ζυαντὸν, ut Thomas M. ait, et nemo ignorat. De Ichthyophagis autem his persimilia scribit Strabo XVI. p. 1118. C. WESS.

185. 3. *Ἀνεκλείπτως γὰρ καὶ etc.*] Placet marginalis correctio *ὀνεκλείπτως γὰρ ἐτοίμοις, penu citra defectum parata*. RHOD. Mihi quoque placet: nec opus tamen, ut cetera hinc auferas; nedum ut τῶν ἔργων scribas: est quidem ea frequentior structura, sed elliptica, uti docuit in Myst. Ellipsis. p. 88. I. Bos.; Τὸ πέμπτον μέρος μεταλαβεῖν τῶν ψήφων sacpe apud Oratores Atticos, uti Demosthen. in Midian. p. 330., καιρὸν δὲ μεταλαβῶν in S. Lucae A. A. XXIV. 25., quamquam ibi plures Codd. λαβῶν, et forte verius: sic Noster I. 60. καιρὸν λαβόντες, et καιρὸν εὔθετον λαβόντες IV. 65. WESS.

185. 5. *Τὸ τῆς Ἀθήμητρος ἔργον μετεληφῆτος*] Nota syntaxis insolentiam: nisi τῶν τῆς Ἀ. ἔργων scriptum fuerit. RHOD.

185. 11. *Ἔν ἐνρίσχοιται*] Doctissimus Rhodom. ὡς ἐνρίσχοιται in Notarum suarum Addendis corrigit. Mihi potior videtur Clar. 2. scriptura, modo paulum adiuvetur, ὥστε ἐνρίσχεσθαί τινος τετραμναίους. Sic enim saepissime solet. *Τηλικούτους τὸ μέγεθος, ὥστε — ἀναλίσκεν inf. c. 37.* WESS.

185. 12. *Τὰ μὲν γὰρ κῆτη συντριβουσι*] Forte *κελύφη*. Aut testae seu crustae significatione *κῆτη* dixit. RHOD. *Τὰ μὲν γὰρ κῆτη συντριβουσι*] Verum hoc esse, scripti Codd. affirmant. *Κῆτη* vocat testudinum *crustas*, ut Agatharchid. p. 35. de Chelonophagis, τοῖς δὲ κῆτεσι χρῶνται εἰς τὰς σκηνώσεις; quae Diodorus aemulatur c. 20. τοῖς δὲ κῆτεσιν οὔσι σκαροειδέσι χρῶνται — καὶ πρὸς τὰς σκηνώσεις. Sic enim ea legi oportere alias ostendam. Solent autem librarii, quod levi discrimine voces distent, eas permiscere. Ita fecerunt *κῆτος μέγα* in Luciani I. V. II. 31., ubi *κῆτος* debuissent, Solano optime animadvertente, relinquente tamen c. 38. ἀντήχει δὲ τὸ κῆτος, ὥσπερ τὰ σπήλαια, prava sententia; quam iustam habebis, si *κῆτος* receperis. Contra ea peccarunt in Heliodor. IX. p. 445. τὸν γοῦν ποταμὸν τοῦτον, εἴτε καθ' ἡμᾶς θεὸν, καὶ κῆτος ἅπαν τὸ ποτάμιον, ἢ Ἀθιδίπιον δεῦρο παραπέμπονσα etc., reliquerat enim *κῆτος ἅπαν*, i. e. crocodilos, hippopotamos, eiusdemque generis alia animalia, quibus Aegyptii divinum honoris cultum deferebant. WESS.

185. 18. *Ἐὶ δὲ ἡ — τροφή σπανίζει*] Recipi posset ex Vatic. *σπανίζῃ*, si quae urgens esset necessitas. Vulgatum satis est legitimum obviumque XIII. 17. προσπλέοντας ἡρώτων, εἰ διὰ τῆς γῆς εἰς Ἀθήνας πλεῦσαι νομίζουσιν. Philostrat. IV. Vit.

Ap. 8. εἰ γὰρ ὁ μὲν ἀπὸ διμιαγωγίας θανατωθήσεται. Lucianus in Asino c. 4. εἰ μὴ τις ἐπιαικούσῃ αὐτῆ. Mox ἐπὶ τὸν σισχὸν ex schedis Mss. et sermonis genio restitui. WESS.

186. 22. Τοῖς ὀδοῦσι κατεργάζονται] Sic c. 21. πάντα δὲ κλάδον ἔγγυλον τοῖς ὀδοῦσι κατεργάζομενοι. et sine dentium addito vocabulo c. 21. ἀναγκάζονται κατεργάσασθαι — — τῶν ἀρχαίων ὀστέων χόνδρους: quod expressit ex his Agatharchid. p. 35. ἐκ τῶν ὀστέων τοὺς τε χόνδρους — — κατεργάζομενοι. Hinc hominis os et venter τὸ τῆς τροφῆς ἐργαστικὸν καὶ δεκτικὸν, quod cibum conficiant et recipiant, Aristoteli IV. Politic. c. 4. WESS.

186. 31. Ἐπιμίθονται ταῖς γυναιξίν etc.] Photius ex Agatharchide ita excerpit: πρὸς ταῖς θήραις γίνονται καὶ πρὸς ἄνθρωποις ἀνέροισι, καὶ πρὸς ταῖς σκυνοσίαις, ταῖς παιδιᾶς γάρον γινόμεναις: quae sententiam longe aliam prae se ferunt. WESS. Nisi et ibi scribendum est πειδοποιίας.

186. 38. Ταῖς ἀγέλαις τῶν βοῶν] Non hac tantum parte bubus similes erant, sed et inter bibendum: quadrupedes enim, manibus pedibusque nixi, bovm instar aquam bibebant. ἀπερυσάμενοι τὰς χεῖρας εἰς τὴν γῆν καὶ θέντες τὰ γόνατα βοηδὸν πίνοσαν, Agatharchid. ait p. 30.: quae horum barbarorum ignavia non absimilis est eorum militum, de quibus auctor Histor. Iudic. VII. 6. WESS.

186. 47. Ταῖς ποτίστραις ἐγγίσσῃσι] Habet ποτίστρας τῶν τοιμάδων eadem in re Agatharchides. Strabo explicabit L. VIII. p. 543. D. τὴν δὲ κοίτην, πῶσαν ἐροῖσθαι, οἷον πίστραν, ὅλην ἐστὶ ποτίστραν. unde aquae scaturiginem, ad quam greges potum pergunt, notare adparet. WESS.

186. 62. Εἰς τὴν ἐρημον — ἐκτετοπισμένοι] Sepositi et quasi relegati. Polybias I. 74. ποιῶνται τὴν γῆν ἐπὶ δύο ἡμέρας καὶ τρεῖς ἐκτοπιζόντες αὐτοὺς, in loca remota contendentes. Diodor. XX. 40. καὶ νεκρὸς ἐπιγερομένης μακρὰν ἐαυτοὺς ἐξέτοπισαν. unde μακρὰν ἐκτοπιζόμενοι qui a patria longissime sese sciunxerunt III. 70. WESS.

186. 66. Οὐχ οἶον — ἀλλ' οὐδ' ἔννοϊαν ἔχουσι] Male Mutinenses schedae: saltem οὐχ ὅπως, quo de I. 58., dedissent. Οὐχ οἶον — — ἀλλὰ Diodor. libenter usurpat, ut inf. c. 34. XVII. 36. XX. 60. Haec autem ex Agatharchide sumpsit, οὐχ οἶον, aiente, ποτὸν ἐπιζητοῦσιν, ἀλλ' οὐδὲ ἔννοϊαν ἔχουσι τοῦ γένους. WESS.

187. 77. Ὁ φιλοτιμηθεὶς περὶ τὴν θήραν τῶν ἐλεφάντων] Primus Ptolemaeus Philadelphus haec venatui fuit intentus, sicut Agatharchid. prinē. Excerpt. de Mari Rubr. tradidit. Secutus id exemplum est filius Energetes: unde et ipse in Marmore Adulitano se cum elephantis Troglodyticis et Aethiopicis expeditionem in Asiam suscepisse ait, οὗς ὁ τε πατὴρ αὐτοῦ καὶ αὐτὸς πρώτος ἐκ τῶν

χωρῶν τούτων ἐθῆρεσαν, in Topograph. Cosmae Indicopl. L. II. p. 141. WESS.

187. 82. Ἐξήταξε τὰ κατὰ etc.] Ultimam in σε muta, ab ἐξετάζω, examino, exploro. RHOD. Ἐξήτασε τὰ κατὰ τὴν παραλίαν] Citra dubium ita scripserat. Io. Chrysostom. T. V. p. 51. E. καὶ τῆ γιλαρχία μεθῶν, οὐκ ἐξήτασεν ἀκριβῶς. et post pauca, οὐδὲν ἐξετάσας ἀκριβῆς. In aliam partem peccatum est apud Appian. Hannibal. p. 554. καὶ ἐκάστης ἡμέρας ἐξήτασε. dederat enim ipse ἐξέτασσε, ut p. 560. ἐξέτασσε συνεχῶς ἐς μάχην. WESS.

187. 91. Οὐδ' ἴδριν, οὔτε πληγὰς ἐπομένοντες ἠρεθίζοντο] Io. Tzetzes Chiliad. VI. 742. haec in oculis habuit. WESS.

187. 95. ἔλεον] Hoc verum est, quamvis ab ἐλέους stet etiam optimus liber Coisl. At ea forma nonnisi infimae aetati concedenda videtur. Nam Isoerati quidem Callimach. p. 379. B. ἐλέους recte arbitror exemisse Bekkerum censura ed. Coraes p. 287. nec minori iure Polybio I. 88. 2. Librarii vel grammatici hoc vitium saepe inferunt, ut Antiphonti p. 114. Aeliano H. A. 3. 1. Aristot. Rhet. II. 8. inser., coll. §. 12. 16.

187. 97. Βλέποντες μὲν ἀτενῶς etc.] Agatharchides, quem exscripsit, in his vitiosus est: βλέπουσι μὲν οὔτε ἀτενῶς εἰς τὸ γινόμενον, καὶ τὰς μεγάλαις πικρῶ διανέουσι. quae bene habebunt, si cum H. Steph. οὔτοι ἀτενῶς, et πικρῶς scripseris. WESS.

187. 6. Ἡ συναστροφη γίνεται μετ' εἰρήνης] Conversatio, familiaritas. Auctor Sapient. Salom. VIII. 16. οὐ γὰρ ἔχει πικρίαν ἢ συναστροφη αὐτῆς. Atque ita ἀναστροφη non solis N. T. scriptoribus, sed pluribus aliis, uti Diatriba mea de Iudaeor. Archontib. c. 2. ostendit. WESS.

187. 18. Τοῖς ἴπποις παρακλησίαν ἔχοντα τὴν θερμοσίαν] Ἴππος alias est μαγειρεῖον, κάμινος, alias φανός, λαμπτήρ. Hic furnum notat, sicuti in his Simonidis apud Aelian. XVI. II. A. 23.

Οὔτε πρὸς ἴππον ἀσβόλην ἀλευμένη  
ἴτσι'. —

Hinc panis ἰπνίτης in furno coctus apud Hippocratem et Galenum; qui quo discrimine a κλιβαρίτη distiterit, solertissime explicat Hier. Mercurial. I. Var. Lect. 12. WESS.

188. 29. Ἐλάται γίνονται πάνν πολλαί] Pravum est ἐλάται. adiectum enim folia angustiora sunt, quam quae continuam umbram possint facere: verum autem ἐλαῖται. Agatharchid. p. 32. οἱ δὲ τὰς τῶν ἐλαιῶν χορηγὰς ἀλλήλοις συνάπτοντες, εἶτα χορῶνται σκηνώμασι. neque dissentit Strabo XVI. p. 1119. A.; ut merito viri egregii Is. Casaub. ad eum Strabonis locum et S. Bochartus P. II. Hierozoic. L. II. 5. p. 30. Diodorī verba ex utroque corrigere instituerint. Mox rectius videtur κασιτανάκῳ καρέῳ, quomodo Agatharchides et supr. II. 50. WESS.

188. 33. Τῷ κασιανῶ] Lege κασιτανῶ. RHOD.



188. 42. Σεσώθεται τοῦ μινόν φόρτος] Tradunt mutuas operas Agatharchides et Diodorus: quod enim ille scribit p. 33. ἄμμον φόρτος ἄπλετος ἐκ τοῦ παντός αἰῶνος, ἕξει παρῆλληστος, σεσώθεται, id refingi hinc debet μινόν φόρτος. In his, quae sequuntur, οὔτως ἐπὶ τῆς συνεχοῦς τοῦ κίματος πηλῆϊς περιπλημένος, vicissim succurret Agatharchides: mihi enim dubium non est, quin levi vitio, sed sententiam turbante, sint obsita. Haud equidem damno πηλῆϊν κίματος, cum plagam odorum dixerit Lucretius, et sacer vates Psalm. CXXI. 6. ככך אל ψεση עשי ἰμέρους ὃ ἦλιος οὐ πηλῆξει, sive, ut Alexandr. Interpretes, οὐ συνεκίσει σε. nec recte tamen affirmari autumo, aestus fervorisque, ut ita dicam, percussu algarum acervos condensari et conspissari. Fieri id solet continua fluctuum impulsione, ἐπὶ τῆς συνεχοῦς τοῦ κίματος πηλῆϊς, quo modo scripsisse Diodorum censeo. Agatharchides, οὔτως ἐπὶ τοῦ προσβάλλοντος ἀεὶ κίματος σκληρῶς περιπλημένος etc. WESS.

188. 45. Συμπεπλημένην ἄμμον] Συμπεπλημένην ex margine in locum suum revertatur. RHOD.

188. 46. Τὸν μὲν κατὰ χορηγίην τόπον ἔῶσι στέγην] Posses, si quae necessitas urgeret, ex Agatharchide ἔῶσι στέγειν. Ego vero non muto. Prave mox Coisl. πρὸς ἀλλήλους συντετριμμένους, quemadmodum et infr. c. 44., ubi fortasse plura. WESS.

188. 55. Ὅταν δ' ἡ πλημμυρὸς ἐπέθῃ etc.] De hoc sepulturae genere eadem ex Artemidoro refert Strabo XVI. p. 1119. A. WESS.

189. 71. Ὑπολείπεται λέγειν αὐτόχθονας ὑπάρχειν] Non improbo ὑπολείπεται, neque pro reiectanea habeo Codd. Mut. et Coisl. scripturam ob Philon. Iud. De Victim. p. 854. F. Valde vero laudo atque amplector ἀρχίην — ἐσχιστότας: quod orationis tenor requirit. Consecutio ipsa perquam infirma et debilis est. Sint saxa praerupta et confragosa, quibus incinctae valles, mare altum ac tempestuosum, careantque incolae omni navium usu; proptereaue aborigines earum vallium indigenae? Quid si fractis navibus eam in oram sint eiecti, aut celsissimas rupes emensi in coualles se demiserint? Ipse Diodorus non multum videtur fidsse conclusioni, proptereaue censuram illi adstruxisse, sane notabilem. Habet clausulam, narrationique inposuit eandem Agatharchides p. 34. τούτων δὲ ἐγεστώτων, λοιπὸν εἰπεῖν ὡς αὐθιγεναῖς εἶσι, λέγειν τοῦ πρώτου κίματος οὐ λαβόντες, ἀεὶ δὲ ὑπάρχοντες. Paulo tamen diversa sententia, sed hinc, quoniam in Photio scriptura haud constat, fortasse adiuvanda. WESS.

189. 84. Οὐτ' ἄγχιον ἔχουσαι] Scripti libri hoc probant. Agatharch. καθὼν οὐδένα γεννώσαι πρὸς τὸν βίον οὔτε ἡμερον οὔτε ἄγχιον. WESS.

189. 92. *Μετέωροι τοῖς σκύτεσι*] Hic divinandum est, num *κύτεσι* potius scripserit, eodem significato, quo supra p. 107. RHOD. *Μετέωροι τοῖς κύτεσι*] Cl. Salmasii in Solin. p. 837. ita corrigentis suspicionem egregie firmant schedae Mutinenses. Vitium natum est ex utriusque vocis vicinia, quae et in Lycophron. v. 73. pro *ῥαπτῶ κύτει* reperit *σκύτει*, et in Aristophan. Pace v. 1223. ex *Θάρακος κότει* fecit *σκύτει* maximo versus damno, quod L. Kusterus in poëtae eius Plut. v. 514. optime sarsit. *Κύτη* vero testas esse concharum et testudinum diximus supra c. 16. WESS.

189. 94. *Τῶν ἐλαχίστων ἀλιάδων οὐκ ἐλάττους*] Ioseph. II. B. I. 21. 8. *κενὰς τὰς ἀλιάδας μετέωρους σαλεύειν ἐκέλευσε.* et sect. 9. *καὶ τοὺς μὲν ἀναλαβὼν μῦ τῶν ἀλιάδων.* Sic quoque L. III. B. I. 10. 9. Quamvis autem a piscatoribus nomen acceperint, et pleraeque parvae essent, non deerant satis capaces, cuiusmodi apud Athen. V. p. 208. F. memoratur, observataque est a doctissimo Steph. Berglero ad Alciphron. I. Epist. 12. Porro post pauca quod sequitur *ἡρέμα προσνήχονται*, id Codd. concordia postulabat. WESS.

189. 3. *Ἔχον μῆρινθον μακρὸν καὶ δήσας τῆς οὐρᾶς*] Ultima, quae ab editis aberant, auctoribus Manuscriptorum schedis suam in sedem restitui: sunt enim ad sensum quodammodo necessaria. Suspicor etiam scriptum olim fuisse *ἔχον μέριμθα μακρὰν*, qua voce pro funiculo utitur poëta Odyss. K. 23.

*Νῆξ δ' ἐνὶ γλαφυρῇ κατέδει μέριμθι φαεινῇ.*

Id suadent veteres Codd. et Agatharchides, *ταύτας*, inquit, *κατ' ἐξείρο κειροῦ οἱ ἐπιχώριοι τέγγη καὶ σπονδῆ καὶ μεριμίθαις εἰς τὴν χέρον ἐμβαλόντες* etc.; quae tamen ab exscriptore mutata si non sint, formam vocis impingunt multo rarissimam, Hesychio, modo sana eius omnia sint, ex parte probatam, *Μέριμθα*, *μέριμθον*, *σπαρτίον*, *λεπτὸν σχοινίον*. WESS.

189. 7. *Τοῖς δὲ κύτεσιν — χρῶνται*] Et hoc correxi. Strabo XVI. p. 1119. A. *οἱ δὲ χελωνογάγοι τοῖς ὀστράκοις αὐτῶν οὐκ ἐλάττωνται μεγάλους οὖσιν, ὥστε καὶ πλεῖσθαι ἐν αὐτοῖς.* et opportunius Agatharchid. *τοῖς δὲ κύτεσι χρῶνται πρὸς τὰς σκιρῆσεις, ὁμοίαι καλέβας ἐφ' ἠψηλοῖς τόποις προγεῖς καθιστώμεντες καὶ πρὸς τοὺς διάπλους καὶ ἕδρας ἐνεκα κέρονται αὐτοῖς.* Sic enim eius verba constituenda et legenda esse, magnam partem vidit Cl. Salmas. in Solin. p. 837. De testudinibus, et tectorum usu, quem earum testae praebent, plura Aelian. XVI. H. A. 17. et XVII. 4. WESS.

190. 10. *Τὴν γέσιν δεδιωγῆσθαι μῦ χάριτι* etc.] Legebatur ante *τὴν γέσιν δεδιωγῆσθαι. μῦ γὰρ χάριτι* etc., oratione perperam dissecta. Hoc nitet, optimique libri auctoritate stabilitur. WESS.

190. 17. *Κακῶς ἀπαλλάττουσιν ὑπὸ τῆς ἐνδείας*] Diodorus pro suo hoc agnoscet. Sic XVII. 90. οἱ Μακεδόνες δεινῶς ὑπὸ τῶν διγυμάτων ἀπαλλάττοντες. et XX. 23. κακῶς δ' ἀπαλλάττων ὑπὸ τοῦ τραύματος. quibus locis incommoda, quae partim ex morsu serpentum, partim ex vulnere nata premebant, indicat. Inest enim verbo sacre ea vis, quae agendi degendique notionem complectitur: quo usu XIII. 64. οἱ δ' ἐκ τῆς σιτοδείας κακῶς ἀπῆλλαττον, qui in annonae penuria agebant, et in Excerpt. Vales. p. 297. οἱ στρατιῶται κακῶς ἀπῆλλαττον ἐν ταῖς ἀπορῆαις, quibus simile Luciani de Merced. Cond. c. 23. καὶ δι' αὐτὸ ἐν τῇ δουλείᾳ πονήρως ἀπαλλάττειν. neque enim accedendum puto H. Stephano, in alia Thesauri T. I. p. 349. abeunti. WESS.

190. 18. *Καθ' ὃν δὴ χρόνον ἀναγκ. κατεργάσασθαι*] Sic oportuit: de verbo *κατεργάσασθαι* et comedendi, seu dentibus commolendi, usu supr. c. 16. WESS.

190. 21. *Τὰ γένη τοσαῦτ' εἰσι καὶ — χρῶνται*] Iterum Grammaticorum decreta spernit, ut optimus quisque solet. Vid. supra I. 93. et II. 36. ubi *συμβάλλονται* δὲ — καὶ τὰ νόμιμα etc. WESS.

190. 30. *Τῇ μὲν πλοκῇ ταρσίδεις*] Nihil hinc demuto. Theophrastus VI. H. P. 7. plantas *πολυσχιδεῖς καὶ ταρσίδεις* vocat, quarum radices fissae et cratium in morem implicatae sunt. Haud vero scio, an mox praestiterit ex Reg. et Vat. *στροφεῖς* δ' ἔχουσαι, ut cardinibus instructas has fores dicat, atque in illis versari solitas, quo modo οἱ *στροφεῖς τῶν θυρῶν* in Heron. Spiritual. p. 191.; ego quidem certe *κινήσεις ἐλλύτους* non abiecero: quae commode facilem motum in utramque partem designant, ut *ἐλλύτως δοῦναι libere donare* in fragmento Teletis apud Stobaeum Serm. XCV. p. 523. WESS.

190. 39. *Σωροὺς ἰχθύων ἐπαιρόντων ὄρῃν ἐστι*] Reforma in *ἀσπαιρόντων*. quod piscibus in sartagine palpitantibus tribuit Athenaeus Lib. III. οἱ τάριχοι ἐπὶ τῷ πυρὶ κείμενοι ἐπάλλοντο καὶ ἔσπαιρον. RHOD. *Σωροὺς ἰχθύων ἀσπαιρόντων*] Laudo Rhodom., cuius coniecturam adfirmat Cod. Mutin.; idem enim erit sive eius *σπαιρόντων* seu *ἀσπαιρόντων* receperis: utrumque de piscibus ceterisque omnibus, quae sub mortis articulum palpitant et vehementius subsiliunt, recte dici, testis Eustath. est in Homer. p. 974. Aelianus de piscibus paludis Paeonum XVII. H. A. 30. *ὄσπεροῦν ἐπὶ παραβάλοι τις ἀσπαιρόντας τοῖς βοσίν, οἶδε ξιμφοροῦνται αὐτῶν μάλα ἀσμένως*. WESS.

190. 41. *Πρὸς τοῦτοις*] *Πρὸς ταῦτα* M. Co. sine iusta caussa. Vid. supr. II. 29. WESS.

191. 46. *Ραβδωτὰς δὲ θύρας — ἐπιστήσαντες*] Recte explicuit Schol. Vaticanus. Alioqui *ράβδωτὰ* ea sunt, quae virgis

quibusdam distinguuntur, ut ῥαβδωτὰ ὄστρεα apud Aristotel. IV. H. A. 4. et ῥαβδωτοὶ σάγοι inf. V. 30. WESS.

191. 56. Παρὰ τὸν Ἄσταν] Immo vero παρὰ τὸν Ἄσταβάραν, qui fluvius Meroen alluit, ut Agatharchides, aut παρὰ τὸν Ἀστάπονν, qui eandem radit in Strabon. XVI. p. 1116.; quod fluvii nomen Poggius suo in codice reperisse videtur, vertens, *iuxta fluvium, quem Astaram vocant.* Apud Aelian. XVII. H. A. 40. περὶ τὸν Ἐστάμενον ποταμὸν, adaeque perperam. Mox post πλησιοχώρων deficere ἔλδων ex Strabone et Agatharchide bene Rhodom. animadvertit. WESS.

191. 61. Ἀναπλάσαντες χειροπληθιαίους ὄγκους] Expro-  
stulabant hoc scripti Codd., qui quoque λίθους χειροπληθιαίους inf. c. 28. probant, sicuti thuris massas ὄγκω χειροπληθιαίους Theophrast. IX. H. P. 4. Vulgatum habet Agatharchides, a Nostro aliqua ex parte dissidens, ἀνέπλασεν ἐκ μαγίδος, εἰ καὶ οὐ χειροπληθεῖς, ὄγκους. ubi μαγίδα ipsam massam, quam subigendo levem et viscosam reddiderant, appellat. Galenus Gloss. Hippocrat. Μαγίδα. τό, τε οἶον μύγμα καὶ γέρομα, καὶ τὴν χειροπληθῆ μαγδαλίαν. WESS.

191. 74. Μηδεμιᾶς γενομένης νηγεμίας] Nihil de hac ventorum tranquillitate Agatharchides, Strabo, Aelianus. neque video, cui bono ab his locis abesse feratur; movet praeterea vitii suspicionem Codd. dissensus, quorum μηδεμιᾶς μνίας si amplexeris, muscas, quae leones infestent, ut solent, et praecipue *νερομῦια*, apud Philon. Iud. I. Vit. Mos. p. 622., his in locis nullas esse negabit, sed eorum vicem fungi culices. WESS.

191. 79. Ὑπὸ τοῦ δήμματος κακοζχομένου] Sic oportuit aut δήμοῦ. Agatharchid. p. 37. οὐχ οὕτως ἐπὶ τοῦ δήμοῦ δι-  
λοῦμενοι, καίπερ οὕτως ἐπαχθοῦς, ὡς τὸν ἀπὸ τῆς φωνῆς ἵχον ἀλλόφθλον ἀδυνατοῦντες γέρον. Vidit correxitque hanc mendam S. Bochartus P. II. Hierozoic. L. V. 18. p. 792., qui tamen cum addit, videri Diodorum pro διλοῦμενοι legisse δειλοῦμενοι in Agatharchide ob καταπεπληγμένους, non audiendus est: Nostri enim κακοζχομένου Agatharchidis τῷ διλοῦμενοι convenit, non alterum. WESS.

191. 83. Ὑπὸ τὴν θερσίαν] Infra L. XIX. 58. ἐν ταύτῃ τῇ θερσίᾳ ἀποπλευσεῖσθαι etc. et c. 79. Strabo vero IV. p. 316. Β. πάντας δ' ἔπαυσε τῶν ἀνέδην καταδρομῶν — — θερσίᾳ μιᾷ. WESS.

191. 86. Σχιζομένης καὶ φρομένης] Mallem φρομένης καὶ σχιζομένης, quod et Rhodom. in mentem venisse ex Notar. Addend. animadverto: crescendo enim in plures ramos spargitur, quod in fruticibus et arboribus σχίζεσθαι Theophrasto IV. II. Plant. c. 2. unde πολυσχιδαίς, quarum rami radicesve late sparsi L. VI. II. P. 7. WESS.

191. 88. *Παραπλήσιον ταῖς γινομέναις βοτάναις*] *Bunia-*  
*des*, naporum genus, id nominis sunt sortitae, quod in tumulum  
ac veluti globum collectae sint. Vid. Dioscorid. II. 136. et Cl.  
Salmas. Hyl. Iatric. c. 31. WESS.

192. 99. *Ἐπειδὴν τοῖς ποσὶν ἐγύλλωνται*] Vera lectio est  
*ποσὶ σγύλλωνται*. RHOD. *Ἐπειδὴν τοῖς ποσὶ σγύλλωνται*] Sine  
controversia ita scripsit, proptereaque, tametsi Codd. nihil iuvent,  
id in integrum restitui. Agatharchides, *καὶ τὸ σγαλὲν ἄνωθεν*  
*σῶμα, διὰ τὴν ἰσχνότητά, οὐ βαρείας τυχάνει τῆς πληγῆς*.  
Nata ea videtur menda ex vicinia literarum E et Σ, quae et paullo  
ante c. 22. ex *σπαιρόντων* fecerat *ἐπαιρόντων*. WESS.

192. 2. *Πέτρουσιν ἐνόπως ταῖς κοιλίαις*] Potuerat vulgatum  
se tueri, nisi contra id venissent schedae omnes. Adfert ex Ari-  
stophane *ἐνόπως* Pollux IX. 162., usurpaturque infra V. 32.  
WESS.

192. 4. *Κοιναῖς* Co. M. Cl. 2. optime; sic Agatharch. p.  
38. et supra II. 58. WESS.

192. 12. *Ἰνύγοι καλούμεροι*] Cum, quid hoc sit, non in-  
telligam, ex natura ipsius rei *ἐλλύγοι* vel *ἐλόγοι* substituo,  
dum aliud reperiatur emendatius. *Θηρογόνοι* tamen iidem non  
insecite nominentur. RHOD. *Τῶν Αἰθιοπίων ἐπέχουσιν οἱ καλού-*  
*μεροι κνηροῖ*] Non leni medicina, sed sectione hic fuit opus.  
*Ἰνύγοι* nulli usquam fuerunt, natiq̄ue sunt ex prava scriptura,  
cuius in Vatic. reliquiae. Quod amplexus sum, firmatur auctoritate  
Codd. vetustorum et Agatharchidis, qui diserte *μετὰ τοὺς προειρη-*  
*μένους*, Hylophagos, *εἰσὶν οἱ παρὰ τοῖς ἐχθροῖς λεγόμενοι κνηροί*.  
Strabo XVI. p. 1116. B. *κνηροῖν* aut *κνηροῖων* nomen prae-  
terit, neque enim latere videntur in *γυμνητῶν ἀνθρώπων κατο-*  
*κία*, quam hic, pariter ac Plinius VI. N. H. 30., locat et idem vi-  
tae institutum sectatam esse, quod *κνηροῖ* hi, adfirmat. Poggius  
tamen simili peccato obsitum habuit librum, e quo vertit, *reliquam*  
*circa regionem Aethiopes tenent, qui Gymnetae dicuntur*. Atque  
haec ut vero mihi proxima videntur, ita nullus intercedam, si qui  
aliam ingressus viam ex vitiosis Vatic. Strabone et Pogg. scribere  
instituat *τῶν Αἰθιοπίων ἐπέχουσιν γυμνητῶν οἱ καλούμεροι* etc.  
WESS.

192. 26. *Χρόμεροι ξέλοις πεπρωκτωμέναις*] Strabo πε-  
πρωκτωμέναις δίστοις, levi discrimine: potuerunt enim et sudi-  
bus praecustis et sagittis pugnare. Vid. Eclog. II. Lib. XXXIV. p.  
528. 4. WESS.

192. 33. *Ἐπιθέουσιν ἐπὶ πῦρ ἀπαλόν*] Haud aliter scri-  
psit. Coria multo igni si imponas, duritiam induunt, neque esui  
sunt: ignis leutus et languidus, ut remolliantur, aptissimus. Aga-  
tharchid. *βρέξαντες τὰς βόρσας καὶ ἐπ' ἀνθρακίων κρέην ἐπι-*  
*βάλοντες* de iisdem ait. Iungit autem *πῦρ ἀπαλόν καὶ πῦρον* eo-  
quus Philemonis in Athenaci VII. p. 288. E. eademque translatio-

ne πῶρ μαλακὸν Galenus de Ptisana p. 490. et τέφραν μαλακὴν PhiloBeloroeic. p. 89. de languido igne cinereque dixerunt. WESS.

192. 36. Γυμνάζουσιν ἐπὶ σκοπὸν βάλλειν ] De simili Balarium instituto L. V. 18. WESS.

192. 41. Ἐλεφαντομάχοι κρηγοῖ ] Ἐλεφαντομάχοι dicuntur Agatharchidi et Straboni XVI. p. 1117. A., et verius, ut arbitror. Philostratus VI. Vit. Apoll. 25. de iisdem ὄφεν ἐπώνυμοί εἰσι τῆς ἐλεφάντων βρώσεως. WESS.

193. 50. Ἄμα τῷ παραλλάττειν τὸν τόπον ] Dum locum praeterit, ut XVII. 112. αὐτὸς παρήλλαξε τὴν Βαβυλῶνα. et XIX. 84. παραλλάσσοτος δὲ αὐτοῦ Γάζαν. Nec tantum de terrestri itinere, sed et navibus L. V. 43. WESS.

193. 56. Ἄνὰ τῆς ἀριστερᾶς χειρὸς οὐακίζων τὸ ἴδιον σῶμα ] Hac caudam elephantis complexus, ne pronus ipse rueret, curabat. Agatharchid. p. 40. οὕτω δὲ ἐκτενῶς τῇ μὲν (πληγᾶς) καταφέροντες, τῇ δὲ τῆς οὐρᾶς κρατοῦντες, ὡς ἄθλον προκειμένου τῆς ψυχῆς etc. Quomodo et haec Diodori intelligenda. WESS.

193. 71. Ἡοιήσῃ παραλύτων τὸ ζῶον ] Hocceine an πάρετον malueris, ad sententiam perinde erit. Est enim πάρετος, Hesychio auctore, παραλελυμένος. Unde πάρετοι τὰ μέλα, qui ceteris παραλυτικοί, Aretaeo Cappad. II. Causs. Morb. Diurn. 4., et Nostro τὰ σώματα παρεμένοι XIV. 105., quorum vires plane sunt defectae, et παρεμένος τό, τε σῶμα καὶ τὴν ψυχὴν Plut. Consol. Apoll. T. II. p. 102. A. contra παραλελυμένα γόνατα auctori Epist. ad Hebr. c. XII. 12., παραλελυμένη βάσις Heliodoro VII. p. 314., δεξιὰ παραλυόμεναι Ioseph. III. B. I. 8. 6., quae aut senio, aut morbo, aut labore fessae concidunt. Conf. infra XX. 73. WESS.

193. 73. Τέμοντες τὰς σάρκας ἐκ τῶν ὕπισθεν μερῶν ] Male haec distinctione interposita sciungebantur. Agatharch. καὶ τοῦ θηρίου ζῶντος ἐπι παρατέμοντες ἐκ τῶν ὕπισθίων τὰς σάρκας, ἐντοχοῦνται. WESS.

193. 80. Καθιέναι ] Melius συγκαθιέναι. RHOD. Οὐ δύναται τοῖς γόνασι — συγκαθιέναι ] Hoc et ego amplector. Id vero male, quod elephantem negat genu posse inniti, atque ubi in terram corruerit, iterum surgere: qui error illi cum veterum multis communis est, docente S. Bocharto P. II. Hieroz. II. 26. p. 261. WESS.

193. 87. Ὅταν οὖν ἐπιτύχωσι τοιοῦτω δένδρῳ ] Praestiterit περιτύχωσι τοιοῦτω δένδρῳ, uti L. IV. 47., aut, nimum si id fuerit, ἐπιτύχωσι τοιοῦτον δένδρον, quomodo I. 37. Alterutrum quidem certe sermonis indoles postulat. WESS.

194. 99. Σηροποιοῦνται περὶ τὸν τόπον ] Posses Latina facere, conponunt attegias. Ioseph. VI. B. I. 5. 3. ἐλθὼν εἰς τὴν ἑορτήν, ἐν ἣ σηροποιοῦσθαι πάντας ἔθος τῷ θεῷ. quae Rufinus ad hunc modum: cum ad festum diem venisset, quo at-

*tegijs in honorem Dei componere ab omnibus mos est.* Atque hoc se malle adscripserat F. Camusatus: haud quidem male, uti, si non recorderis poetæ Satirici, *Dirue Maurorum attegijs*, ex Angel. Politiani Miscel. c. 9. cognosces: nec necessario tamen: quod si enim Appiani Bell. Hispan. p. 520. καὶ τοῖς μὲν ταφρέειν ἐτέτακτο, τοῖς δὲ τεχιζέειν, τοῖς δὲ σκηροποιεῖν, vertere institueres, *his vero mandatum erat, ut attegijs struerent*, vereor ne peritis risum deberes. WESS.

194. 1. Τὸ πεπρωκὸς ἀναλώσωσι] Videtur Agatharch. patrociniū τοῦ ἀναδάσωνται profiteri his verbis, πρὸς τὴν ἐαντοῦ χρεῖαν ἕκαστος τὰ μέλη διαιροῦσιν, *ad suum quisque usum membra distributa auferunt.* Vel sic tamen id repudio, natum paullatim ex eo, quod sequor: quæ enim de tentoriis fixis longioreque mora præmittit, non divisionem tantum interfecti animalis, sed comesi consumptionem manifeste requirunt. WESS.

194. 3. Προσαγορευόμενοι σιμοί] Straboni XVI. p. 1117. C. Σῖμοι, quod magnus Is. Casaubon. ex Agatharch. et Diodoro merito corrigendum censuit. *Simi* quidem et *sili* haud magno discrimine distant, ut egregie docuit Tib. Hemsterhus. in Polluc. IX. 148., sed Geographum in gentis nomine acutius quiddam sectari voluisse non arbitror. WESS.

194. 6. Τῆς συνθέτου τέτυχε προσηγορίας] Struthocamelum signari non dubium est, de qua II. 50.; Strabo tamen distinguit et ab ea diversam facit, incertum qua re motus. WESS.

194. 8. Καὶ μικρὸν] Μικρὸν legendum coniicio, respectu nimirum reliqui corporis. RHOD. In coniiciendo verus vates fuit Rhodoman.; habet avis parvum caput, peperitque hoc vitium vocum vicinia, ut supra II. 51. et sæpe alias. Oppianus III. 494.

— — Ὑψι δ' αἰετοί

Βαίην μὲν κεφαλῆν, πολλὴν δὲ τανύτοριχα δειρήν. WESS.

194. 16. Καθαπερεὶ τις ναῦς ἰστιοδρομοῦσα] Aelian. XIV. H. A. c. 7. τὰς πτέρυγας ἀπλώσασα, ὡς ἰστία, δρόμῳ συντόνω γερομένη. Sic enim recte legi oportere viri docti arbitrantur; iuvat ipse Aelian. VIII. 10. cum de elephantis τὰ ὦτα ἐκπεταννύντες, inquit, ὡς ἰστία, δίκην τῶν στρουθῶν τῶν μεγάλων. Claudianus II. in Eutrop. v. 312.

*Inque modum veli sinuatis flamine pennis*

*Pulverulenta volat.* —

Mox orationis tenor ἀποσφενδοῶν, de quo II. 50., postulat. WESS. Idem reponit Rhodom. in Add.

194. 19. Ταχὲ συνδρανονσῶν] Forte συνζουσσῶν, *considerentibus, demissis.* Accommodatius erit συνδρανονσῶν, vel simplex ἀδρανονσῶν, *una seu pariter debilitatis.* RHOD.

194. 28. Χρόμενοι τοῖς τῶν ὀρέγων ζέουσι] Sic recte schedæ Vindobonenses, quarum pauca excerpta et δείγματος χάριν singulari benevolentia Illustrissimi Comitæ Uhlfeldii, Im-

peratoris ad Belgii nostri Ordines cum plena potestate Legati, inpetravi, descripta Equitis Garellii, Bibliothecae praefecti, manu; in cuius humanissimi et de literis optime meriti morte, quae cum maxime mihi Vindobona renuntiatur, meliores artes et literae haud levem iacturam fecerunt. Eadem enim Agatharchides et Strabo; quamquam hic, dubiam enim illius verba sententiam habent, orygam cornibus *Simos* armat. Quid si vero utrique hoc armorum genere pugnarint? nulla tum profecto caussa erit Diodorum erroris coarguendi, uti factum a S. Bocharto P. I. Hieroz. III. 27. p. 969. Lenius certe Diod. excepit P. Leopard. L. VIII. Emendat. c. 18. eius et Strabonis et Agatharchidis verba inter sese componens. De Orygam cornibus plura Is. Casaub. in Lampridii Commod. c. 13. et [qui de vitio apud Diodorum monuerat] D. Hoeschel. ad Horapollin. I. 49. WESS.

195. 37. Ζέφυροι καὶ λίβες] Agatharchid. ἐπὶ τὴν ἑαρινὴν ἰσημερίαν, ὅτε λίβες παρ' αὐτοῖς καὶ ζέφυροι πνέουσι, παμμεγεθῶν ἀκρίδων πλῆθος ἀμύθητον ἐκ τῆς ἀμιστορήτου μετὰ τῶν ἀνέμων παραγίνεται γῆς. quae quo modo sint refingenda, non est ut dicam: quisque compositis Diodori genuina animadvertet. Strabo XVI. p. 1118. A. Ζῶσι δ' ἀπὸ ἀκρίδων, ἃς οἱ ἑαρινοὶ λίβες καὶ ζέφυροι πνέοντες μεγάλοι, συνελάνουσι εἰς τοὺς τόπους τούτους. cuius ego verba, ut, quod ante monere memini, adpareret, adscripsi: Videri nimirum Artemidorum, quem in his sequitur, ex Agatharchide pleraque verbo tenus descripsisse. Locustis autem hos homines et plures olim victitasse, omnes, qui aliquem veterum scriptorum usum habent, non nesciunt: in Aethiopia quidem certe et Arabia incredibili sunt multitudine. Ut prorsus vero simile evadat, aves, quas מִיָּשׁ מֹשֶׁס adpellat, quibusque Israelitae in Arabiae desertis vescabantur, ex illarum fuisse genere: melius utique in eas congruunt, quae divinus scriptor Exod. XVI. 14. Numer. XI. 31., quam quidem in coturnices. Vid. Iob. Ludolfum Comment. in Histor. Aethiop. p. 176. WESS.

195. 46. Τὰ νέφη τῶν ἀκρίδων] Utroque in sermone de conferta locustarum multitudine hoc satis elegans et frequens. Livius XLII. 2. *Pomptium omne, velut nubibus locustarum, coopertum esse.* Aelian. III. II. A. 12. *μειοῦται δὲ κατὰ πολὺ τὰ τῶν ἀκρίδων νέφη.* Porphyrius I. A. A. 25. *ἄλλω δὲ στρατῷ πεινῶντι κατὰ τὴν Αἰθίωην ἐρέπεσε νέφος ἀκρίδων.* Ad quem modum παρῶν νέφος ἢ ἐκ κολοιῶν Dio Chrysost. Orat. XXXII. p. 387. et, quem aemulatur, poeta Iliad. P. vers. 755., βαρβάρων νέφος Liban. T. II. p. 238. B. atque alii alia, de quibus Lamb. Bos Exercit. in Hebr. XII. 1. et Th. Gataker. Miscell. Postum. c. 2. p. 416. Mox, tametsi Codd. aliqui in diversa abeant, τῶνονσι non sprevero. Synes. II. Provid. p. 121. A., sententia tamen discrepante, τοὺς ἐρμυρόν τι καταλαβόντας ἔτυπον ὡσπερ σφήκας. WESS.



195. 56. *Ἀσηπτον καὶ πολυχρόνιον*] Binas priores voces Grammatici interpretatione deberi autumo: in quam sententiam et rei natura et auctoritate optimorum librorum adducor. Nolui tamen obelo eas configere, ne in mutando nimius videar. WESS.

195. 63. *Οὐχ ὑπερβαλλόντων ἔτη τεσσαράκοντα*] Eadem Agatharchides et Strabo. Plinius VI. H. N. 30. *Pars quaedam Aethiopum locustis tantum vivit, fumo et sale duratis in annua alimenta: ii quadragesimum annum vitae non excedunt*, eodem, puto, ex fonte. WESS.

195. 71. *Μετρίως ὀδαῖσθαι φιλοτιμεῖται*] Hippocrati atque ad eius exemplum Aretaeo, Dioscoridi, Galeno, *ὀδαῖσθαι* et *ὀδάξισθαι* de pruriente morsiuncula tritum satis est: haec forma rarior, et vulgò neglectior. Aelianus VII. H. A. 35. de scolopendra, quam si quis contigerit, pruritu mordetur: *εἰ δὲ αὐτῆς προσώμεται ἀνθρώπειά σαῶξ, ὀδαῖται τε καὶ κνησιῶν*. Hinc in veteri Lexico Biblioth. Coislin. p. 237. *ὀδαξισμὸς, κνησιμὸς*, et in Aelian. I. H. A. 38. VII. 48. IX. 48. pro quo *ὀδαξιμὸς* V. 14. et Plut. VI. Sympos. 10. p. 685. E. atque alias. WESS.

196. 74. *Εἰς τὴν ἐπιφάνειαν ἐκπιπτόντων*] Simile Philon. Iud. I. Vit. Mos. p. 618. de culicibus, Aegyptios infestantibus: *οὐ γὰρ μόνον τὴν ἐπιφάνειαν λυμαίνεται κνησιμὸς ἐμποιοῦν ἀηδεῖς καὶ βλαβερωτάτους, ἀλλὰ καὶ εἰς τὰ ἐντὸς βιάζεται*. et Iosephi I. B. I. 33. 5. *πρωτὸς μὲν γὰρ ἦν οὐ λάβρος, κνησιμὸς δὲ ἀγόρητος τῆς ἐπιφανείας ὄλης*. utrobique enim extimam cutem designat. WESS.

196. 83. *Εἶτε διὰ τὴν ἰδιότητα τῆς τροσῆς etc.*] Narrationi de Acridophagis parilem Agatharchides Colophonem inposuit, neque adeo uni gentis victui miserabilem exitum contribuere sustinuit. Locustis tamen, quibus alebantur, has calamitates deberi, perpendit Hieron. Mercurialis, cui paene adstipulatur Iob. Ludolfus Comment. Hist. Aethiop. p. 183. WESS.

196. 90. *Ἐκ τινος ἐπομβρίας — πληθος γαλαγγίων etc.*] Meminit huius regionis et caussae, ob quam deserta relicta est, Aelian. XVII. H. A. 40. *σκορπίους δὲ ἐπιπολάσαι πληθος ἄμαζον, καὶ γαλαγγίων τινὰ ἐπιποιτῆσαι φορὴν. γαλαγγίων δὲ, ἃ ζαλοῦσι τετράγωνα. τεκεῖν δ' ἄρα τὰ ζαζὰ φασιν ὄμβρων πορρηρίας*. quae Agatharchidis verbis tam accurate respondent, ut dubium nullum sit, quin ex eodem cum Diodoro fonte hauserit; sumsit et inde Artemidorus, e quo Strabo XVI. p. 1118. B. et Plinius VIII. H. N. 29. *citra Cynamolgos Aethiopus late deserta regio est, a scorpionibus et solipugis gente sublata*. Eius enim solipugae sunt τὰ γαλάγγια, docente Cl. Salmas. in Solin. p. 71. WESS.

196. 1. *Περὶ γὰρ τὴν Ἰταλίαν μιν ὡν πληθος*] Cosanis id maximo suo malo usu venit. Rutilius I. Itin. vers. 285.

*Cernimus antiquas nullo custode ruinas,  
Et desolatae moenia foeda Cosae.  
Ridiculam cladis pudet inter seria caussam  
Promere, sed risum dissimulare piget,  
Dicuntur cives, quondam migrare coacti  
Muribus infestos deseruisse lares.*

Vidit et hoc S. Bochart. P. I. Hieroz. III. 34. et ante eum Is. Casaub. in Strabon. III. p. 251. WESS.

196. 3. *Κατὰ δὲ τὴν Μηδίαν ἐπιπολάσαντες στρουθοὶ]* Hinc atque ex Agatharchide corrigenda haec sunt Aeliani XVII. H. A. 41. *τῇ Μηδικῇ δὲ ἐπιφοιτήσαντες τῇ φορᾷ ἐξήλασαν καὶ ἐκείνοι τοὺς κατοικοῦντας, διαφθείροντες τὰ σπέρματα καὶ ἀφαιρίζοντες αὐτά.* Defit illis nomen animalis, quod Mediae incolis eius cladis auctor. Scribe ergo *τῇ Μηδικῇ δὲ στρουθοὶ ἐπιφοιτήσαντες* etc. WESS.

196. 5. *Τοὺς δὲ καλουμένους Ἀυταριάτας βάρβαροι etc.]* Iterum Aelianus, *βάρβαροι δὲ ἡμιτελεῖς πολλοὶ πεσόντες ἐξ ἀέρος Ἀυταριάτας Ἰνδῶν μετώπισαν εἰς γῶρον ἕτερον.* quibus Indiae Autariatas, gentem sine controversia Illyricam, transcribit, modo sana sint, quod persuaderi magno Casaubono in Strabon. VII. p. 489. haud potuit, *vox Ἰνδῶν*, inquieti, *vel in aliam mutanda, vel omnino reiicienda est.* Et merito; videtur aut inepti Grammatici esse glossa, cuiusmodi hic in Reg. Codice, aut *ἐκ τῶν ἰδίων* nata. Potuisset quidem certe honori suo melius consulere Th. Pinedo, si ad Stephani *Ἀυταριάτας* a redarguendo Casaubono abstinuisset. Constat enim Autariatas ex Illyrico ranarum incredibili multitudine divexatos exisse et alias quaesivisse sedes. Iustinus XV. 2. et Heraclides Lembus in Athen. VIII. p. 383. A., quos antestatus est eruditissimus Barbeyracius in eleganti veterum Pactorum et Foederum Histor. P. I. p. 254. Casaubonum defendens, id memoriae prodiderunt. Docet etiam Appian. Illyr. p. 1196. *ἐπιγενέσθαι δὲ τοῖς ὑποστρέψασιν, Ἀυταριάταις, ἄπειρον βαρβάρων πλῆθος, οἱ διασαπέντες τὰ νάρματα διέφθειραν.* hinc, pestilentia ingruente, patriam deseruisse: dissidens tamen a Iustino in temporis intervallo, quo ea calamitate pressi fuerunt. Vide infra L. XX. 19. WESS.

196. 12. *Ἐκ τῆς Στυμφαλίδος]* De his IV. 13. WESS.

197. 20. *Καλούμενοι Κυνάμννοι]* Agatharchidi, ex quo haec desumpsit Diodorus, *Κυνάμολγοι* nuncupantur Eclog. c. 29. RHOD. *Cynamolgos* cum Poggius verterit, parum ab illis recipiendis absum: ego quidem non dubito, quin gentis verum id nomen sit; quod et Strabo XVI. p. 1116. C. Plinius VIII. H. N. 29. Aelian. XVI. H. A. 31. retinuerunt, et vitae genus, quo insignes erant, requirit: carne enim boum deficiente *τὰς τῶν κυνῶν θηλείας ἀμέλγοντες τῷ γάλακτι τρέφονται, femellas canum mul-*

*gentes earum lacte nutriebantur, docente Agatharchide et Aeliano. WESS.*

197. 24. *Ἀπὸ γὰρ τῶν πρώτων τροπιῶν θεριῶν]* In Agatharchidis Excerptis legitur ἀπὸ τροπιῶν χειμερινῶν ἕως μέσου χειμῶνος, admodum absurde. Rectius Aelianus, ἀπὸ τῶν θεριῶν τροπιῶν εἰς μεσοῦντα χειμῶνα ἐπιχειροῦσιν αὐτοῖς ἀγέλαι βουῶν. quae cum ex Ctesia sumpta esse profiteatur, clarum est Agatharchidem popularis sui scripta diligentissime versasse et multa inde pro suis usurpasse. WESS.

197. 32. *Συριέναι]* Συριδεῖν Steph. m. R. V. C. M. satis bene. Vide II. 10. WESS.

197. 36. *Ἄ δὲ εἰς ἄλλας συντιθέντες ἀποθησαυρίζουσι]* Negat id Ctesias apud Aelianum; reliquam enim boum carnem canibus dividi; τὰ δὲ λοιπὰ τοῖς κυσίν, inquit, ἀποχορῶνται. neque dissentire videtur Agatharchides: cur enim ad extremum canum lacte victitarent, si carnis, sale conditae, copia haud deesset? Mox ex scriptis Codd. πολλὰ δὲ καὶ τῶν ἄλλων ζώων probandum censui. WESS.

197. 38. *Κρηοφαγίας]* Praestaret κρηοφαγίας. WESS. Idem reponi iusserat Rhodomannus in Add.

197. 42. *Περὶ μὲν Αἰθιοπῶν ἀναγεγράφμεν]* Supr. c. 2. etc. WESS.

197. 45. *Βίον ἔχοντες — — νομαδικὸν]* Eadem Strabo XVI. p. 1121. B. Nostro tempore Troglodytarum sedem tenent *Beklenses*, idem vitae institutum sectantes, docente Iobo Ludolfo Comment. Hist. Aethiop. p. 145. WESS.

197. 49. *Τεταγμένον ἀριθμὸν προβάτων]* Unius ovnis multam adultero irrogari Agatharch. et Strabo aiunt: τῷ φθείραντι πρόβατον ἡ ζημία ἐστί. WESS.

197. 55. *Περὶ τῆς τῆς χώρας νομῆς]* Inepta est et inusitata bonis auctoribus eiusdem articuli in eodem casu repetitio continua. Ideo scripturam marginis περὶ τῆς χώρας οἱ νομεῖς germanam esse duco. RHOD. *Περὶ τῆς χώρας οἱ νομεῖς]* Hoc etsi commodius visum est, mallet καὶ περὶ τῆς νομῆς πρὸς ἄλλ. διαμάχονται. Pugnae enim illis pascuus ager materia erat. Strabo, πολεμοῦσι, δὲ περὶ τῆς νομῆς, cui Agatharch. consentit, eadem memoraus de patris matrisque nomine, bovi vaccaeque, aut arietati atque ovi inposito. WESS.

198. 68. *Τοῖς αὐτοῖς τόποις ἐνδιατρίβειν]* Legebatur τοιούτοις, quod, cum sententiam conturbaret, secutus Codd. meliores sedem migrare iussi. WESS. Idem coniecerat Rhod. in Add.

198. 71. *Οἱ Τρωγλοδύται — — περιέμνονται]* Durat Aethiopicibus, quantumvis Christianis, vetus consuetudo, quam more magis regionis sanitatisque caussa observant, quam religionis quodam cultu, ut gentis rex Claudius in professione sua apud Iob. Ludolf. L. III. H. Aeth. c. 1. docet. WESS.

198. 73. Ὀνομαζομένων κολοβῶν] *Distinctius Straboni κολοβοὶ τὰς βάλανους, l. XVI: p. 1116. C.; Ptolemaeo IV. Geogr. 8. κολβοὶ, sed prave: melius Cod. Coislin. κολοβοί. WESS.*

198. 77. Μεγαβαρεῖς] Οἱ δὲ Μεγάβαροι Αἰθίοπες τοῖς ῥοπάλοις καὶ τύλους προστιθέασι σιδηροῖς, sic Strabo p. 1122. A. In Ptolemaeo Μεγάβαροι, sive, ut scriptus liber et Latina versio, Ulmae anno CIƆCCCLXXXVI. publicata, Μεγάβαροι, perpetram, uti arbitror. Vide Plinium VI. N. H. 30. WESS.

198. 79. Ταραῖς δὲ — — ἐξηλλαγμέναις ἐπιχωριάζουσι] *Diodorum ita reliquisse vehementer dubito: mallet quidem certe ταραῖ — — ἐξηλλαγμένοι ἐπιχωριάζουσι. sic nihil ab usu sermonis dissidebit, quo ea dicuntur ἐπιχωριάζειν, quae in more sunt posita. Τὸ πρῶγμα ἤδη ἐπιχωριάζει Dionys. Halic., ἐπιχωριάζον χοροὶ καὶ θαλία τὸν ἅπαντα χρόνον Plutarch. de rebus, choreis, conviviiis, quae frequentantur atque in usu sunt. Morem autem hunc sepeliendi, ut cetera, ex Agatharchide p. 46. exscripsit. WESS.*

198. 90. Τοῖς λίθοις βάλλουσι] *Habet in continua rerum successione τὸ αἰὲν gratiam quandam et Venerem, ut paullo ante τῆς ἐπιγνομένης αἰὲν νομῆς, et οἱ αἰὲν βασιλεύοντες infra XX. 24. οἱ αἰὲν ὕπατοι, qui alius post alium regno consulatuque funguntur: hic vero locum haud sane opportunum; quare et eo, addicentibus libris, deieci. WESS.*

198. 92. Ἐν ἀκαρεῖ χρόνῳ] *Hoc Atticum et Aristophaneum in Plut. 214. cum nota Ezech. Spanhem., et Diodoro III. 40. tritum; ἐν ἀκαρεῖ χρόνον Alciphron. III. Epist. 56., Plutarch. de Profect. Virt. T. II. p. 75. C. ex Xylandri correctione: ἐν ἀκαρεῖ Philo Iud. I. Vit. Mos. p. 630. C. Lucian. Seyth. c. 8. Basiliius M. Homil. in Famem T. II. p. 67. D., ἐπ' ἀκαρεῖς Philo Iud. de Ioseph. p. 546. WESS.*

198. 96. Προβαλλόμεναι μὲν εἰς τὸ μέσον] *Mallet in medium se inferentes, ut olim Sabinæ, ausae se inter tela volantia inferre ex transverso impetu facto, dirimere infestas acies; dirimere iras apud Livium I. 13. WESS.*

198. 1. Βοὸς οὐρᾷ τὸν ἀνχένα περισφίξαντες] *Iustum hoc est et ex Agatharchide sumptum, qui quidem p. 47. περιθέντες βοὸς οὐρὰν περὶ τὸν ἀνχένα τὸν αὐτῶν, καὶ τὸν ὀπίσω τοῦ τραχήλου δεσμὸν εἰς μάλα περισφίξαντες, ἀπολύουσι τοῦ βίου. WESS.*

199. 6. Ἐξήγειν ἐκ τοῦ ζῆν] *Ioseph. XIV. A. I. 13. 10. de Phasaëlo, Herodis M. fratre, πέτρα προσρήξας τὴν κεφαλὴν ἐξήγαγεν ἐαυτὸν τοῦ ζῆν. Alioqui negligi voces τοῦ ζῆν adsolent. Strabo XII. p. 861. A. νόσος δ' ἐξήγαγεν αὐτὸν ὀξεία. Appian. IV. B. Civil. p. 1068. οἱ δ' αὐτοὺς ἐξήγαγον ὁμοίως τοῖς στρατηγῶσι. Singulare est hoc Plutarchi de Stoicis, sui caedem aliis omni conatu adprobantibus, καὶ πολλοὺς μὲν ἐξάγουσι τῶν σοφῶν, ὡς ἄμεινον εὐδαιμονοῦντας Adv. Stoic. T. II. p. 1063. C. WESS.*

199. 20. ὅπου] Huic ὅπου compares ὅπου — ὅπου sic positum ut posuit Strabo I. III. p. 429. C. ὅπου μὲν γὰρ περιτραχίλια σιδηρᾷ φορεῖν αὐτὰς — ὅπου δὲ τυμπάνιον περιχεῖσθαι.

198. 21. Στέγοντος τοῦ χρυσάλλου διαβάσεις στρατοπέδων] Eleganter Ovidius III. Trist. X. 525.

*Nadaque consistunt formam servantia testae*

*Vina, nec hausta meri, sed data frustra bibunt:*

*Quid loquor, ut vincti concresecant frigore rivi,*

*Deque lacu fragiles effodiantur aquae?*

*Ipsae, papyrifero qui non angustior anne,*

*Miscetur vasto multa per ora freto,*

*Coeruleos ventis latices durantibus Ister*

*Congelat, et tectis in mare serpit aquis:*

*Quaque rates ierant, pedibus nunc itur; et undas*

*Frigore concretas ungula pulsat equi.*

Cui non dissimilia Strabo VII. p. 474. WESS.

198. 35. Οὐδὲ στρογγῶν ἀλλήλων δύναται] Haec difficulter fidem capiunt. Vide Strabon. XVII. p. 1185. B. Haud vero scio an mox κατὰ δὲ τὸν πότον praestet? WESS.

198. 44. Ταχέως ἔψεται χωρὶς πυρός] Sulpicius Severus Dialog. I. 7. de Aegypti desertis, *ibi vidi, inquit, quod vos Galli forte non creditis, ollam cum oleribus, quae nobis in coenam praeparabantur, sine igne fervere. Tanta vis solis est, ut quibuslibet coquis etiam ad Gallorum pulmenta sufficiat; satis ad haec Diodori firmanda opportune.* WESS.

198. 49. Ἀντοφὲς ἔχει τι φίλτρον] Sic praestat. Agatharchides οὕτως ἔχει τι φίλτρον μέγα πᾶσα συνήθεια. Ovidius I. Ex Ponto III. 35.

*Nescio qua natale solum dulcedine captos*

*Ducit, et inmemores non sinit esse sui.*

*Quid melius Roma? Scythico quid frigore peius?*

*Huc tamen ex illa barbarus urbe fugit.* WESS.

199. 51. Ἐξ τῶν ἀστέρων κακοπαθείας] Exterendum est σ cum τ, ut ἀέρων restituatur. De aëris enim qualitate hic sermo est, non de stellarum temperatura et effectis. Ne addam, quod auctorum nemo de stellis hac phrasi unquam locutus sit. RHOD.

200. 58. Τεταρταῖοι καταρτιῶσιν] Rhodum atque Alexandriam intervallum stadiorum IV M. aut, ut Eratosthenes, ΠΙΣΙΩΔΕΙ, disiungit in Strabon. I. p. 45. B. et II. p. 187. D.; unius autem diei et noctis cursu cum vulgo absolvent mille stadia, Ptolemaeo I. Geogr. c. 9. teste, potuerunt utique Rhodo profecti quadridui spatio Alexandriam tenere. WESS.

200. 59. Κατὰ τὸν Νεῖλον πλείοντες] Ἐναντίω τῷ ῥεύματι πλείοντες ἀνὰ τὸν ποταμὸν bene Agatharchides. Ἀναπελείξει κατὰ τὸν Νεῖλον eodem sensu Lucian. Toxar. c. 27.; ceteroqui

κατὰ ποταμὸν πλεῖν est quomodocunque in eo navigare II. 28., aut etiam prono amni, quem in modum κατὰ ἀνεμόν καὶ ῥοὴν νήχεσθαι Plut. T. II. p. 979. C. et ἀσχέτω τάχει κατὰ ῥοὴν ἢ ταῦς ἐφέρετο Long. II. Pastor. p. 58. et ὁδὸς πᾶσα ἐπιποτάμιος κατὰ ῥοὴν συγκαιοῦσα τῷ ὕδατι Gregor. Nyssen. Epist. III. p. 363. in Collect. Monum. L. A. Zacagnii. Unde et de rebus prosperrime fluentibus καὶν ἅπαντα τὰ ἄλλα κατὰ ῥοὴν φέρονται πρόγματα Io. Chrysostom. de Uxor. quales ducendae T. III. p. 227. WESS. Ἀνὰ tamen malebat Valckenarius ad Herod. III. 13. citans p. 272. 55. 300. 90. Frustra.

200. 61. Μὴ πλεῖον εἴκοσι καὶ τεσσαράων ] Miror tolerari huc usque potuisse ineptissimum τὸ πεντήκοντα, satis utique a Diodoro proscriptum et damnatum. Agatharchides eundem dierum numerum posuerat, etsi prave nunc eius in Excerptis p. 48. εἴκοσι καὶ πέντε. WESS.

200. 70. Ἀπὸ τοῦ συμβεβηκότος ῥινόκερωος ] Plane ad hunc modum Pausan. IX. 21. εἶδον δὲ καὶ ταύρους τοὺς τε Αἰθιοπικοὺς, οὓς ἐπὶ τῷ συμβεβηκότι ὀνομάζουσι ῥινόκερωος, ὅτι σφίσι ἐπ' ἄκρα τῆ ῥινὶ ἐν ἐκάστῳ κέρασ. et Aelian. XVII. H. A. 14. Sumpsit autem hanc animalis descriptionem ex Agatharchide, qui fortasse Graecorum primus eam depinxit, p. 49. WESS.

200. 73. Τὴν δὲ χρόαν πυξοειδῆ ] Artemidorum, qui ex Agatharchide idem prodiderat, confutavit Strabo L. XVI. p. 1120.; colore enim non buxum, sed elephantum referre; quod et Dio Cassius L. LI. p. 526. significat. WESS.

200. 81. Ὅταν δὲ ὁ ἐλέφας etc. ] Confer Oppian. II. Cyneget. vers. 554. etc. quaeque illi adscripsit C. Rittershus., et Cosmam Indicopleust. L. XI. Topograph. p. 334. WESS.

200. 88. Ἐπὶ πλεῖον καὶ διδασκαλίαν μεθ. ἐπιδέχονται ] Hoc nimium videtur. Ἐπὶ πλεῖον egregie eas edoceri posse artes innuit: quomodo Tantalus φίλος ἐγένετο τῶν θεῶν ἐπὶ πλεῖον, qui diis percarus fuisse perhibetur, infr. IV. 76. et Daedalum Minos φίλον ἐπὶ πλεῖον adscivit c. 79. eiusdem libri. Atqui in simiis falsum id esse novimus. Prudentius Agatharchides διδασκαλίαις τε μεθοδευτικῆς, inquit, ἐπὶ ποσὸν ἄπτονται. WESS.

200. 92. Ἀγριώτατα δὲ ταῦτα τὰ ζῶα ] Inficiatur hoc Aelian. IV. H. A. 46. et VI. 10., qui forte diversum genus Cynocephalorum in animo habuit: sunt enim plura, inter quae multo etiam ferocissimi reperiuntur, docente Prosp. Alpino Rer. L. IV. Aegypt. c. 11. WESS.

201. 96. Ὁ δὲ λεγόμενος κῆπος ] Praeter Agatharchidem eandem nominis caussam Pythagoras dedit in Aeliani XVII. H. A. 8., sed absurdam, monente Cl. Salmasio in Solin. p. 276., et ridiculam. Peregrinum animal est, atque ea in gente nomen inpetrauit, ubi natales habet. Hebraeis כִּפְרִי vel חִפְרִי simiae sunt: quod vocabulum τῷ κῆπω simile et eiusdem videtur originis, meritoque

adeo ab eruditissimo S. Bocharto cum eo comparatum et conpositum est P. I. Hierozoic. III. 31., ubi plura de Cepo. WESS.

201. 3. *Μεῖζόν ἐστι τῶν ἡμέρων ταύρων*] Dubites utra prior sit scriptura. Strabo XVI. p. 1121. *μεγέθει τοὺς παρ' ἡμῖν ὑπερβεβλημένοι*. Aelian. XVII. H. A. 45. *καὶ εἶσι μὲν τὸ μέγεθος τοῖς παρὰ τοῖς Ἕλλησι διπλασίους*. uterque τῶν ἡμετέρων, Strabo in Artemidoro, Aelianus in Agatharchide, eum enim hoc capite aemulatur, reperisse videtur: tamen ἡμέρων nunc Excerpta Agatharchidis tenent et meliores Diodori Codices, neque eius mutandi caussa iusta est. Plinius VIII. 21. *sed atrocissimos habet tauros silvestres, maiores agrestibus, velocitate ante omnes, colore fulvos, oculis coeruleis, pilo in contrarium verso, rictu ad aures dehiscente, iuxta cornua mobilia*: ubi agrestes sunt, qui rure atque in agris versantur, neque alii ac ἡμεροὶ Agatharchidis, docente Salmasio ad Solin. p. 711. WESS.

201. 9. *Κατὰ δὲ τὰς μάχας ἴστησιν ἀραρότως*] Retinuit Agatharchidis verba. Aelianus XVII. H. A. 54. *τὰ κέρατα δὲ τὸν μὲν ἄλλον χρόνον ζινοῦσιν, ὡς καὶ τὰ ἴδια, ἐν δὲ ταῖς μάχαις ἐγείρουσιν αὐτὰ, καὶ ἀναστήσαντες ἰσχυρῶς, εἴτα οὖν μάχονται*. Sic lego: nam *σπείρουσιν αὐτὰ*, quod editos occupavit, nihili est. Mox *τὴν δὲ τῆς τριχῆς ἐπαγωγὴν ἔχει* etc. *pilum contra ac cetera animalia in caput versum habet*, sive, ut Plinius, *pilo in contrarium verso, rectius verteris*. WESS.

201. 18. *Τὸ δ' εἰς ὄργημα πεσοῦν*] *Feras omnes venantur; isti non aliter, quam foveis capti, feritate semper intereunt*, inquit Plinius. Aelianus, οἱ δὲ ὅταν ἐμπέσωσιν, ὑπὸ τοῦ θυμοῦ ἀποπνέγονται. qui et iisdem verbis Troglodytarum de hoc animali opinionem exsequitur, quibus Agatharchides et Diodorus: et bene. Error est in Bavarico Photii Codice, quo Crocottae tanquam ex Ctesia haec tribuuntur. Vide D. Hoeschel. ad Photii Biblioth. p. 25. WESS.

201. 26. *Κροκόττας μεμιγμένην ἔχει θύσιν*] Plinius VIII. H. N. 31. *Crocottas Aethiopia generat, velut ex cane lupoque conceptos, omnia dentibus frangentes, protinusque devorata conficientes ventre*. Species hyaenae Crocotta est, quam alii ex cane et lupo, alii ex hyaena et leaena gigni prodiderunt. Conf. Salmas. in Solin. p. 239. WESS.

201. 28. *Τοῖς δὲ ὀδοῦσι πάντων ὑπεράγει*] Non deerunt, qui πάντας praeoptabunt. Ioseph. XV. A. I. 7. 6. *κάλλει δὲ σώματος — αὐτὴν ὑπερῆγεν*. ubi sane caussa non erat, cur ὑπερῆγεν praeferretur. Noster infr. c. 44. *τῇ εὐχορηστία πολὺ τοῖς ἄλλοις ὑπεράγων*. neque ego dissentirem, nisi L. IV. 87. *Orionem ὀμίη πολὺ τῶν μνημονευομένων ἡρώων ὑπεράγοντα* dixisset. WESS.

201. 29. *Πάντων γὰρ ὀστῶν μέγεθος συντρίβει*] Facile adducor, ut πᾶν initio scriptum fuisse opiner. Sed nihil muto. In

tertio hinc versu pro παραδοξολογουμένων, παραδοξολογούντων legendum arbitrator. RHOD.

201. 32. Μιμῆσθαι τὴν τῶν ἀνθρώπων διάλεκτον] Recte hoc Agatharchidis exemplo explosit. Aelian. VII. H. A. 22. εἶτα μέντοι μιμῆται τὰς φωνὰς καὶ φθέργεται (εἰ καὶ μνθῶδες τὸ εἰρημέρον) ἀνθρωπίνῃ γοῦν φωνῇ, καὶ καλεῖ τὸ ὄνομα, ὃ ἤκουσε. Mitto alios, quos undique similia nugantes conduxit S. Bochartus P. I. Hieroz. III. 11. p. 835. WESS.

201. 36. Ἐκατὸν γὰρ πηχῶν τὸ μῆκος] Et haec iustissima censura. De draconibus veterum recentiorumque plerique prodigiosa plurima narraverunt, feceruntque adeo, ut quae pro veris haberi poterant, plerumque fictis fabulis similia videantur. Conf. S. Bochartum P. II. Hieroz. III. 14. p. 431. et Io. Iac. Scheuchzer. Itin. Alpin. V. p. 377. etc. WESS.

202. 45. Περί τῶν μεγίστων θηρίων ὕφρων] Si scripti Codices addixissent, postremam vocem longe hinc sustulissem: Θηρία serpentes esse superiora abunde indicant; ne dicam de cultiore vocis usu, quo ea animalia frequentissime exprimit, quae morsu aut virulento ictu pestem hominibus inferunt: nota res est, et scriptorum exemplis a P. Petito ad Aretaeum I. de Curat. Morb. Diurn. c. 4. p. 122. comprobata. WESS.

202. 49. Ὁ γὰρ δεύτερος Πτολεμαῖος etc.] Insigne eius in vestigandis rarioribus naturae miraculis studium fuit: inbecillo enim corpore cum esset, semper novae alicuius oblectationis materiam quaerebat. Διαφερόντως δ' ὁ φιλάделφος ἐπικληθεὶς φιλοστοῶν, καὶ διὰ τὴν ἀσθένειαν τοῦ σώματος, διαγωγὰς αἰετίνων καὶ τέρψεις ζιγῶν καινότερας Strabo XVII. p. 1138. B. Hinc non elephantum tantum venatui primus Lagidarum incubuit, ἀλλὰ καὶ τῶν ὁμοιοτρόπων, sicuti ex Agatharchide supra ostendimus, pluresque aluit, qui rariora quaeris, undique collecta, in Aegyptum inferrent. Vid. Aelian. III. H. A. 34., Strabon. XVI. p. 1115. WESS.

202. 54. Ἐλέφαντος — περιεποιήσατο] Confer supra c. 18. WESS.

202. 58. Ἐκρίναν παραβαλέσθαι ταῖς ψυχαῖς] Vitam periculis obicere. Polybius Excerpt. Legat. p. 1250. καὶ παραβάλλονται μὲν τῇ ψυχῇ. pro quo Musonius in Serm. Io. Stob. XXIX. p. 202. καὶ τὴν ζωὴν παραβάλλονται τὴν ἑαυτῶν, et Ioseph. III. B. I. 8. 7. πιστείων τῷ κηδεμόνι θεῶ τὴν σωτηρίαν παραβάλλεται. Libanius vero T. II. p. 134. B. ἀτόμολοι τὰ σώματα παραβαλλόμενοι. Adde infr. XX. 65. WESS.

202. 64. Τριακοντα πηχῶν] Hoc an τριακοντάπηχυν malueris, ciccum, quod Plautus ait, non interdum. Haud vero scio, unde Io. Tzetzes Chiliad. III. 902. τριακονταπεντάπηχυν acceperit: nostri quidem codices cum Agatharchide p. 53. et Strabone XVI. p. 1121. B. ab eo dissentiunt omnes. WESS.



202. 74. Ἐχοντες ἐξηρτημένα πάντα ] Locū sententiam interpretēs assecutus est, non item scripturam, quam revocavi, veriorē. Ναὺς καλῶς ἐξηρτημένας habebis L. XII. 31. de egregie instructis et paratis, et XIII. 45. etc. WESS.

202. 79. Φόρον ἐξαίσιον κατασκευάζοντα ] Oportuerat κατασκευάζον, ob ζῶον, quod praemiseraat: verum ea generis enallage, qua πρὸς τὸ σημαίνόμενον adiectivum refertur, nihil quiequam utroque in sermone frequentius. Vid. D. Hoeschel. in Photii Biblioth. p. 4. WESS.

202. 83. Ἐπέβαλλον τοὺς βρόχους ἐπὶ τῆς οὐρᾶς ] Nihil veritus sum hoc restituere: postulat sermonis genius; satisque receptum librariis voces eas confundere. Defungar uno exemplo. Dionysius, inquit L. XIV. 103. ἐπὶ τὴν Ἰταλίαν στρατευσόμενος μετὰ πλείστης δυνάμεως ὤρμησεν ἐπὶ Στραζονσοῶν. Iam vero ἀπὸ Συρ., ut quisque videt. Plura alias. WESS.

203. 92. Οὐ μὲν ἀπέγνωσαν τὴν Θῆραν ] Io. Tzetzes Chiliad. III. 896. etc. haec excerpit. WESS.

203. 97. Περιφερῆ πλόκαμον ] Si Theophrasti, scriptoris Ἀττικωτάτου, standum est auctoritati, πλόκαμον pro vitili opere neutrum est. Is enim libro IV. c. 11., de Butomo foemella tractans, eam χρήσιμον πρὸς τὰ πλόκαμα dicit. Recte igitur in margine annotatur περιφερῆς et pro ἐμφερῆ ἐμφορῆς: nam masculinum longe aliud significat, cīrrum videlicet seu cīncīnum ac nodum crinium implexorum. Rhod. Κατεσκεύασαν — περιφερῆς πλόκαμον ] Sequor Rhodomanni et meliorum librorum iudicium. Τὸ πλόκαμον aliud nihil est ac πλέγμα, quod usui variis in rebus esse cum possit, multimodis adhibetur. Venatoribus, sicuti hoc loco, a Xenophonte de Venat. p. 781. tribuitur, et a Iul. Polluce V. 33. Id vero praetereundum non est, πλόκαμον Codd. praeserre Coisl. et Clar. I. ubique, nec aliter in Platon. Timaeo p. 52. E. Stephano tamen mutante, et Polluc. VII. 172. X. 129. legi. Vid. Iungerman. ad Pollucis V. 33. et T. Fabrum in Anacreont. Od. VI. 6. WESS.

203. 9. Πρὸς δὲ τοῦτοις σαλπικτὰς ] Tametsi in Glossis legatur σαλπικτῆς et σαλπικτῆς, et in Appian. Bel. Hispau. p. 527. σαλπικτῶν τε ἐξοτρυνόντων, hoc tamen malui: tum quod Appianus alias σαλπικτὰς probet, tum quod ceteri passim, et Noster imprimis in ea scriptura acquiescat, ut XIII. 45. XVI. 85. XVII. 33. WESS.

203. 17. Ἦχω κατέπληττον τὸ ζῶον ] Non fugit me Nostri καταπληξόμενος τοὺς Ἀθηναίους XII. 67., neque moveor tamen, ut nihil mutem. Vicinia eiusdem verbi et contraria potestate instructi aliud a me inpetravit. Rene Synesius Orat. de Regn. p. 10. C. γίλους μὲν, ταυτὸν δὲ εἰπεῖν ἀγαθοῦς, ἐκπλήττων, τοὺς δὲ ἐχθροὺς τε καὶ πονηροὺς καταπλήττων. WESS.

203. 30. Ἐξελκύσαντες δὲ τὸν πλόκαμον] Scribe τὸ, et statim post μετέωρον. RHOD.

204. 38. Τὸν ἀπὸ τῶν ὀδόντων] Fortasse scripsit Diodorus τὸ ἀπὸ τῶν ὀδόντων. STERN. Τοῦ Φηρίου τὸν ἀπὸ τῶν ὀδόντων τιθασὸν] Aliena sunt τὸν ἀπὸ τῶν ὀδόντων, ideoque exterminanda. RHOD.

204. 53. Βοῦς τε καὶ ταύρους] Hoc fortasse nimium, sicuti et quod in vita S. Hilarionis Hieronym. *Draco*, inquit, *mirae magnitudinis*, quos gentili sermone *Boas* vocant, ab eo quod tam grandes sint, ut boves glutire soleant, omnem late vastabat provinciam. Tu vide Strabon. XV. p. 1022. B. XVI. p. 1122. et Iob. Ludolf. Hist. Aeth. I. 13. WESS.

204. 58. Ἐναντίαν ποιεῖν τοῖς λεφάντων ὄμμασι] Aelianus in elephantum oculos, ut eos eruant, dracones inmittit L. VI. H. A. 22. ὁ δὲ δράκων ἐμπεδῆ τοῖς ὄφθαλμοῖς καὶ ἐξορύττει. Quod discrimen in pugna draconum et elephantorum haud insolens. Ipse Diodorus eam haud paullo aliter descripsit c. 10. WESS.

204. 66. Παρὰ Co. M. quod praestat: ceteri περὶ, sollemni peccato, quo de Casaub. in Athen. I. 7. WESS.

204. 69. Ἐκ τῶν ἐν Ἀλεξ. βασιλικῶν ἐπομνημάτων] Id in paucis verum esse poterit: maior pars ex Agatharchide descripta est. WESS.

205. 77. Τὴν Ῥωμαίων ἡγεμονίαν — — προβιβάσας] Eadem de Caesare Iulio I. 4. WESS.

205. 81. Ἀράβιος κόλπος ἀνεστόμωται εἰς τὸν Ὠκεανόν] Laxato ore se infundit. Philo de Vit. Contempl. p. 892. E. de Maria prope Alexandriam stagno, ἐκ τῆς λίμνης ἀνεστομομένης εἰς τὴν θάλατταν. Nimirum ἀναστομοῦσθαι stagna fontesque dicuntur, cum patente ostio profluunt largiter. Strabo VIII. p. 596. B. τούτων δὲ ἐμφορθέντων, ἐστὶ ὅτε ὑπερχειῖσθαι τὸ ὕδωρ εἰς τὰ πεδία πάλιν δ' ἀναστομονιμένων, ἄθροον ἐκ τῶν πεδίων ἐκπεσὸν ἐμβάλλειν. et de petra, quae Mose percutiente uberem aquam Israëlitis praebuit, Philo Iud. I. Vit. Mos. p. 635. C. ἀναστομοθεῖσα τῇ βίμῃ τῆς φορᾶς, κρουνηδὸν ἐκχεῖται. Quare haud prave Macrobius VII. Saturn. 13. Latina fecit haec Plutarchi I. Sympos. 9. p. 627. C. καὶ γὰρ αὐτὴ τοὺς πόρους ἀναστομοῦσα καὶ ἀνοίγουσα κατασύρει τὸν ῥέπον. *Salsitas enim findere et aperire solet meatus: ideo magis elicere debuit abluenda.* WESS.

205. 85. Περὶ ἑκατάδεκα σταδίους] Vereor vehementer ut sani hi numeri sint: magno enim consensu veteres angustias sinus Arabici, quae circa Diren promontorium eognominemque urbem sunt, stadiorum IX faciunt, Strabo XVI. p. 1114. Arrian. Peripl. Mar. Erythr. p. 155. Agathemer. I. 3., quae fere aequant Plinii VII mill. D passus, ut fidem Codd. vetustiorum secutus recte correxit Harduinus, L. VI. N. H. 29. WESS.

205. 87. *Νεαὸς διωγμὸν ἡμερήσιον*] Deest verbum ἔχει aut aliquid huiusmodi. STEPH. et RHOD. Id si adesset verbum, oratio paullo quidem plenior videretur, nec melior tamen: pendet accusativus *διωγμὸν* ex proxima *περὶ*, sicuti bene advertit vir doctissimus in T. III. Vol. V. p. 94. Miscell. Observ. Quis autem portus ille *Panormus* et mons *Tyrcaeus* in hac sinus Arabici ora, tacentibus veteribus, finire non ausim; hoc quidem certe constat, *Μαζαρίαν* scripsisse Diodorum, quo nomine insulam hoc in sinu habet Ptolemaeus IV. Geogr. 8. WESS.

205. 91. *Συναγωγὴν ἔχει*] Vid. supr. I. 63. WESS.

205. 99. *Τὸ δεξιὸν μέρος, ὃ τὴν παραλίαν etc.*] Legebatur *τὸ δεξιὸν μέρος τῶν Τρωγλοδυτῶν. τὴν παράλιον τῶν Τρωγλοδυτῶν ἔθνη νέμεται*, quae quidem scopae dissolutae. Ego compositis inter se vetustis schedis suum Diodoro restitui. Dextrum sinus Arabici atque in Aegyptum versus inclinans latus Troglodytas tenuisse, docet et Strabo XVI. p. 1114. C. WESS.

205. 2. *Ἀπὸ πόλεως τοίνυν Ἀρσινόης*] Sita erat haud longe ab Heroum urbe, *condita sororis nomine in sinu Charandra a Ptolemaeo Philadelpho*, auctore Plinio VI. N. H. 29. Ab ea vero Agatharchides p. 53. orae sinus Arabici dextrae descriptionem orditur; nec admodum dissidet Strabo XVI. p. 1114. C. WESS.

205. 4. *Πικρῶς ἄλμυρίδος ἔχοντα γεῦσιν*] Hae sinus *amaros πικρῶς λίμνας* suo olim confluvio efficiebant, sed quos Ptolemaeum amnis, ex Nilo, uti supr. I. 33. dictum, derivatus, deinceps mutavit, suis influens aquis: id olim docuerat uberius Agatharchides, nunc vero tenuiter in Photii Excerptis; constat tamen abunde ex Strabone XVII. p. 1156. C.; ubi Casaubon. de *lacu amaro* ex Nostri L. XVII. 49. quaedam notantem, sequi non possum: nihil enim illi cum his lacubus, modo saporem demas, commune est. WESS.

205. 8. *Ἐπιώνμος Ἀφροδίτης*] Hoc recentius nomen, prius *Μυδὸς ὄρμος*, sive *Muris statio*. Agatharchides p. 54. ὃς πρότερον μὲν *Μυδὸς ἐκαλεῖτο ὄρμος*, ἔπειτα δὲ *Ἀφροδίτης ὠρομύσθη*. Nec valuit tamen Veneris hic titulus antiquius cognomen obliterare, quod praeter Plinium, Arrianus, Ptolemaeus atque alii probarunt. WESS.

205. 10. *Πλήρεις εἰσὶν ἐλαιῶν καὶ σύκων*] Ficorum in his insulis proventus nusquam mentio est. Agatharchid. ὃν αἱ μὲν *ἐλαίαις πεπύκνωται*, de illis ait: Strabo vero L. XVI. p. 1114. insularum *δύο μὲν ἐλαίαις κατασκίους, μίαν δ' ἕττον κατάσκιον, Μελεαγρίδων μεστήν* asseverat; unde haud iniuria suspicari mihi videor, reliquisse Diodorum *πλήρεις εἰσὶν ἐλαιῶν καὶ σύσκοι*, ut Codd. praestantiorum quidam praeferunt. WESS.

205. 15. *Ἦς κατὰ τὸν αἰχένα — διαζομίζουσι*] Posset pro vulgata, si cui libitum esset contra Codd. auctoritatem pu-

gnare, quadam cum specie disputari: mihi longe ea mens est; quod enim dedi, nihil habet incommodi, et eum respicit antiquorum morem, quo per Isthmi iugum naves ex uno in aliud, aut compendii caussa, in idem mare, trahebant, quod *διῶσθαι* et *ἐπερισθαι* τὰς ναῦς Graecis esse, memini pluribus L. I. Observ. c. 28. ostendere. WESS.

205. 17. *Νῆσος πελαγία*] Vid. infr. IV. 79. WESS.

205. 19. *Καλουμένην δὲ ὀφιώδης*] Sic Agatharchides et Strabo; quos deceptos esse cum Diodoro ab Hellenistis mercatoribus pertendit Salmas. in Solin. p. 763.; *Ophas* enim dictam esse insulam: quod cum audirent nomen, putasse ἀπὸ τῶν ὀφείων id cognominis esse nactam, atque *Ophas* explicuisse ὀφιώδη, fabulaeque adeo de serpentibus, insulam infestantibus, auctores esse. Itaque *Ketem paz* פז כהס Hebraeorum lapidem esse *Topazium* sive *Pazium*, ex insula *Paz* aut *Ophas* erutum: quae acute inventa et sollerter disputata vereor, ut tueri se satis possint. Agatharchides, quem Artemidorus, e quo Strabo, et Diodorus auctorem habent, de re suae aetatis loquitur, insulamque sub regibus Alexandrinis, quorum ipse tempore scribebat, serpentum peste liberatam prodit. Lapis praeterea fuisse non videtur, quod sacrae literae פז כהס appellitant, sed aurum purius; unde מרפז הזה I. Reg. X. 18. et מרפז כהס Daniel. X. 5., quod de auro sine controversia usurpatur: aurum vero ex hac insula effossum fuisse, scriptores tacent. Id tamen bene vir summus, quod insulae lapidique nomen ἀπὸ τοῦ τοπάξειν, quod Plinius L. XXXVII. 8. significare videtur, venisse negat. Graecorum est *τοπάξειν*, multoque remotissimum a Troglodytarum sermone. WESS.

206. 26. *Ὅπερ ἐστὶ λίθος διαφαινόμενος*] *Topazium* ita Io. Tzetz. Chil. VIII. 969. describit:

*Τὸ δὲ Πάζιον ἐστὶ λίθος τῶν πρᾶσοχρόων,*

*Ὀνχὶ λαμπρὸς, οὐ διανγῆς, ὡς οἱ λοιποὶ τῶν λίθων.*

Quae vera si fuerint, erroris absolvi Agatharchides, Noster, Strabo, Plinius atque alii haud poterunt; verum ipse in errorem se Tzetzes induit. Vide Io. de Laet, veriora docentem, L. I. Gem. et Lapid. c. 11. et, quem is exscripsit manifesto, Cl. Salmas. in Solin. p. 169. WESS.

206. 35. *Ἀπὸ τοῦ βασιλέως φόβον*] Vide supr. I. 83. WESS.

206. 42. *Διὰ τὸ πνίγος*] Agatharch. *διὰ τὸ πνίγος οὐ γίνεται σννδιλος*. Est *πνίγος* intensior aestus, cuius vehementia quasi praefocamur. Arrian. Cynaget. c. 14. de canibus, quae aestate ad venandum educuntur, *καὶ τὸ πολὺ διαπνίγονται, εἰ πνίγος εἴη*. Iulian. Imp. Orat. V. p. 169. B. arborem opacam *καὶ σπιάν πρᾶσοχεῖν ἐν πνίγει* aptam ait. Hinc ἀῆρ πνιγώδης Straboni XVII. p. 1143. A. Plut. T. II. p. 649. E. gravis et paene praefocans. WESS.

206. 47. Περιτιθέασι σημεῖον χάριν ἄγγος] Facit Codd. concordia, ut hoc malim. Agatharch. ὁ δὲ συνιδῶν φύλαξ τηλιχοῦτον περιέθηκεν ἄγγος, σημεῖον χάριν, ἡλίχον etc. WESS.

206. 55. Προσαγορευθέντος Σωτήριος] Prius citra controversiam rectum est; de posteriore dubites ob Strabon. XVI. p. 1115. B. εἰδ' ὁ τῆς Σωτείρας λιμῆν. tantoque magis, quod libri veteres sibi non constant, σωτηρίας praeferentes. Enimvero Strabonem secutus essem, si vel unus Codd. auxilio accurrisset; nunc, quoniam Ptolemaeo L. IV. 7. Θεῶν σωτήριων λιμῆν, sic enim ex Palat. et Coislin. schedis scribendum, audit, in vulgata acquiescam. Videtur portus et Castori et Polluci, οὗς πάντες σωτήριος ὀνομάζουσι Strab V. p. 355. A. consecratus, et illarum uni Dearum, quae ΣΩΤΕΙΡΑΙ habitae et dictae sunt, quarumque plures recensuit Ezech. Spanhem. Diss. VII. de usu et praest. Num. p. 419. WESS.

206. 64. Οὐδὲν πλεῖον τριῶν ὀργυῶν] Agatharchid. μίτε πλεῖον δυεῖν ὀργυῶν. ut alteruter in vitio sit, et forte quidem Diodorus: alteri enim consentit Strabo XVI. p. 1115. B. WESS.

207. 67. Διὰ τὸ πλῆθος — μίλον καὶ φύκους] Ab hac algae copia, quam iisdem ferme verbis Agatharch. et Strabo exsequuntur, sinui Arabico apud Hebraeorum gentem nomen venit ηῖς σι, quasi dicas *algosum mare*: falluntur enim qui a *parpyro*, quae quidem prope Nilum provenit, non vero sinum hunc, repetunt. Vid. Theophrast. L. IV. H. Plant. c. 8. in omnibus tamen Agatharchidi ac Diodoro haud consentaneum. WESS.

207. 72. Βαθύπρωροι καθεστῶσαι] Fortasse rectius βαθύπλευροι. Rhod. Si quid hic mutandum, βαθύπλοοι praeoptarem. Naves βαθύπλοοι, quae altius depressae fluctus secant, ut ἀκρόπλοοι, quae in summo innatant. WESS.

207. 81. Οὐδ' οὕτω δὲ τῆς τροφῆς τυχάνοντες] In his vitii aliquid inest: quod nec Rhodom. latuit, corrigenti οἱ δ' οὔτε τῆς τροφῆς, sed infeliciter. Poggius, incertum an coniecturam secutus, vertebat: *nec tamen propterea periculum devitant*; bene quidem ad loci sententiam; quae constabit, si ὑποστροφῆς, quomodo Ismaël. Bullialdum coniectasse Abbas Camusatus margini adscripserat, aut ἀποστροφῆς legeris: posterius equidem malim, quod illi in salute et perfugio locus sit percommodus. Ioseph. II. B. I. 11. 6. αὐθις δὲ ὡς ἀποστροφῆ σωτήριος οὐ κατεγράνετο. et XIX. A. I. 1. 16. ἀποστροφῆς τῷ ἔβριζοντι αὐτοῦς οὐσίας etc. hinc πάσης ἀποστροφῆς εἰσγόμενος, cui perfugium salusque intercluduntur, Philostrat. VIII. Vit. Apoll. c. 13. et ἀποστροφῆ καὶ καταφυγῆ iunguntur a Plut. T. II. p. 491. E. Atque haec vero proxima arbitror, donec meliores libri aliud decernant. WESS.

207. 92. Οὐ παντελῶς — — εἰς τέλος] Alterutrum videtur supervacaneum. Diodoro quidem certe εἰς τέλος saepe idem est ac παντελῶς, ut XI. 38. XII. 28. XVII. 76. Quod vero

praecedat ὁδύρονται πρὸς κωφὴν ἐρημίαν, id surdo narrasse fabulas indicat, sive solitudini nihil respondentī, et πρὸς κωφὴν σιωπὴν, ut in Heraclide Allegor. Homer. p. 481.; κωφὴν γαῖαν Homer. Iliad. Ω. 54. κωφὸν πέτρον Moschion in Stobaei Serm. CXXIV. p. 620. de muta et ἀναισθητῶ mediae per muta silentia noctis Metamorph. VII. 184. Ovidius simili translatione dixerunt. WESS.

207. 1. Τὰς ἐλπίδας ἐξαλείψαντες ] Inducta atque adeo extincta omni spe. Τοὺς ὑπεκχωροῦντας τοῦ βίου ἐξαλείφειν apud Platon. VI. de LL. p. 785. Propius abest hoc Euripidis, quo infelix Hippolytus in cognomine Tragoedia vers. 1240. equos compellabat, ne se perderent:

Στῆτ', ὦ φάτναισι ταῖς ἐμαῖς τεθραμμέναι,  
Μὴ μ' ἐξαλείψῃτε. WESS.

207. 5. Τῆς τοῦ βίου καταστροφῆς τυγχάνουσι ] Aut fame, aut si diurnam famis tabem non perferunt, ense confecti, aut spontaneo impulsu in aequor praecipitati: ἢ λιμοῦ, ἢ, τοῦ λιμοῦ τὸ μακροχρόνιον οὐ φέροντες, ξίφει, ἢ αὐτῇ θαλάσῃ σφῶς αὐτοὺς ἐπιθόπττοντες, Agatharchid. p. 56. WESS.

208. 16. Ἐγενήθη τοῦ κόλπου ξηρὸς πῦς ὁ τόπος ] Apertum est describi hic ingens prodigium, quo

*Pervia divisi patuerunt caerula ponti,  
In geminum revoluta latus, nudataque tellus  
Cognatis spoliatur aquis,*

cum Israëlitae ex Aegypto egressi sinus Arabici vada siccis paene pedibus transmitterent apud Mosem Exod. XIV. 21.; cuius miraculi accolae barbari memoriam, quod res stupenda esset, studiose servarunt et posteris reliquerunt. Vidit Ill. H. Grotius et rem animadvertit ad Exod. XIV. 22. et S. Bochart. IV. Phaleg. 29. WESS.

208. 19. Ἐπελθοῦσαν ἐξαισίον πλήμην ] Iustum hoc est; nam πλημμύραν in glossis esse putandum Schol. Vat. abunde significat, et inf. XVII. 106., ubi πλήμιας itidem explicuerunt πλημμύρας. Ceterum πλήμην ποταμοῦ Dionys. Halicarnas. I. Ant. Rom. p. 65. Hesyech. vero in πλημμυρὶς eandem et πλήμην dixit, vitiose, ut quidem ego censeo. Suidas πλήμην, ἢ πλημμύρα τῆς θαλάσσης· ubi cur πλήσμη L. Kustero potior sit visa, nondum exploratum habeo. WESS.

208. 23. Προειρήκαμεν ] Dixit aliqua, sed tenuiter, c. 17.; neque enim illic Ptolemaidis aut promontorii Taurorum ulla mentio. Iterum autem presse inhaeret vestigiis Agatharchidis, qui uberius haec fuerat persecutus. Adde Strabon. XVI. p. 1115. C., ubi causam exponit, cur montibus his Taurorum inditum sit cognomen. WESS.

208. 28. Ἄχραι πρὸς ὥραν δευτέραν ] Agatharchid. καὶ τὰς σκιὰς βάλλει τέως δεῦν ὥρῶν εἰς τὸν ἀντικείμενον τόπον τῆς ἄρκτου. quibus umbras in meridiem intra duas diei horas iaci

videtur indicare; nec alia mens Diodoro, cum in his rebus secuto: quod tamen falsum cum sit, maluit Rhodomannus utrique versione sua succurrere, et *usque ad alterum vertentis anni tempus* Latine reddere: quomodo necdum ab errore immunes erunt. Illis enim, qui haec loca incolunt, sub solstitium mero meridie umbrae consumuntur, reliquis ad austrum cadunt, cum ceteris anni temporibus in septemtrionem porrigantur. Bene Plinius VI. 29. de Ptolemaide a Philadelpho condita ad venatus elephantorum, qua de et auctor noster, *in qua, inquit, quadraginta quinque diebus ante solstitium, totidemque postea, hora sexta consumuntur umbrae, et in meridiem reliquis horis cadunt, ceteris diebus in septemtrionem.* Adde Is. Voss. in Melae III. 8. WESS.

208. 29. *Ψερίων*] Agatharchides c. 43. *Psebaeos* nominat. RHOD.

208. 37. *Ὀρνέων ἴδια γένη*] Fortasse ex avium ea copia uni harum insularum nomen venit, quam *ὀρνέων νῆσον* Ptolem. IV. Geogr. 8. vocat et in hac vicinia locat. WESS.

208. 41. *Ἀκουσίως αὐτῶν ταῖς λογαίαις περιπέσῃ*] Eadem Agatharchidis, sed quem male interpretantur: *οὐ μέντοιγε διαπεφώνηκεν οὐδείς, πλὴν τῶν περιπεπωκότων ἀκουσίως ταῖς λογαίαις, nautas tamen haud vexant, nisi si qui etc.; debuerant, nemo tamen perit, nisi etc.* quae verbi vis rarior multis saepe fraudi fuit. Philo Iud. de Nom. Mutat. p. 1091. E. *ἐν ᾧ (πολέμῳ) τῶν διαγωνισαμένων διεφώνησε οὐδείς, ἀλλ' ἄτρωτος καὶ σῶος ἐπαυῆλθε.* Vertunt: *in quo dimicantium nemo discors fuit, sed salvus est incolumis rediit:* absurde; disparatum, quod in oratione est, expostulat, *in quo dimicantium nemo desideratus est.* Atque hunc in modum Alexandrini interpretes I. Samuël. XXX. 19. Numer. XXXI. 49. Ezech. XXXVII. 11. Iudith. X. 13., ut optime advertit H. Grotius in Exod. XXIV. 11. WESS.

208. 42. *Τὴν τῆς θαλάττης ἄρσιν*] Credo deesse praepositionem dedisseque auctorem *τὴν ἐκ τῆς θαλάττης:* ἄρσις enim *τῆς θαλάττης,* et ἄρσις *τῶν κυμάτων,* fluctus marini sunt, altius eVecti. Recte Agatharchid. *ὅταν ἐκ τῆς θαλάττης τὰ πρόσωπα ἀναφῆνωσιν.* WESS.

209. 46. *Ἄς ὀνομάζουσι Ψεβαίας*] Hoc mire placitum est. E montibus *Psebaeis,* de quibus ante, haec promontoria in sinum procurrebant. Forsan et hinc nomen accepit insula *Ψεβῶ,* quam in sinu Arabico Aristoteles, seu quis alius auctor libri de Mundo, collocat, et Apuleio restituit Cl. Salm. in Solin. p. 782. WESS.

209. 49. *Ὀρομάζεται Ποσειδεῖον*] Perinde erit hoc an *Ποσειδῖον* malis: prius Strabo VIII. p. 534., posterius XVI. p. 1122. C. et Pausan. VII. 27. probant. Vid. Sylburg. in Pausan. II. 26. p. 171. Orditur autem orae Arabicae descriptionem ab intimo maris recessu, paulloque supra sinum Aelaniticum, prorsus ut Strabo XVI. p. 1122. WESS.

209. 55. Ὀνομάζεται μὲν φοινικῶν] Nobilis huius palmeti frequens est mentio, quamquam non omnes eodem modo describunt. Theophrastus II. II. P. 8. p. 34. partem facit conval-  
lis palmiferae, quae a Syriae finibus in sinum usque Arabicum  
pertineat; quod verum esse haud puto. Procopius I. Bel. Pers. 19.  
Saracenos in eo incoluisse cum Nonnoso apud Phot. Cod. III. pro-  
dit: Cosmas vero Indicopleustes Topograph. L. V. p. 195. Israëli-  
tas, sinum Arabicum emensos, ad Phoeniconem in Arabiae con-  
tinentem escendisse, auctor est; haud profecto absurde: neque  
enim longe hinc afuerunt *Elim*, ubi et fontes plures pluresque  
palmae, plane ut hoc in loco, Exod. XV. 27.: ut prorsus mihi  
persuadeam, Phoeniconem hunc ab eo diversum haud fuisse. Wess.  
De nobili Phoenicone insignis est locus in Actis Sinaitarum Mona-  
chorum, ab Ammonio descriptis, et in Lectis Martyrum Triumphis  
a Franc. Combefisio vulgatis, p. 96. et 97. Ea vide: nam verba  
excerpere non vacat. IDEM in Add. Rectius *Φοινικῶνα* quam *φοι-  
νικῶνα* scribi et *Phoeniconem* quam *palmetum* dici monuit Reines.  
Var. Lect. p. 148.

209. 57. Ἀπόλασιν καὶ τροφήν] V. Wesseling. ad XI. 25.

209. 67. Ἐπιγραφὴν ἔχον ἀρχαίοις γράμμασιν] Arabes  
videntur arae et inscriptionis auctores; nisi si de Hebraeis suspi-  
cari quis velit, quod quidem ego vix ausim. Saracenos loci eius  
religione fuisse tactos aliunde novimus. Conf. Strabon. XVI.  
p. 1122. D. WESS.

209. 69. Μακρότοι δ' εἰσὶν] Mihi ad sensum magis qua-  
drat *μακροί*, longae seu procerae staturae homines. RHOD. Mihi  
vero non satis cognitum atque exploratum est, quid horum scri-  
pserit Diodorus: haec si spectent, ut Strabo velle videtur, marem  
feminamque sacerdotes, pronior in *μακρόβιοι* forem, quod Lu-  
cian. de Macrob. c. 4. Arabum sacrorum et fabularum interpretes,  
*τοὺς ἐξήγητὸς τῶν μύθων*, inter eos referat, qui vitam longis-  
sime extenderunt. Verum in re dubia nihil finio. Id quidem certe  
mihi constat, Cl. Salmas. in Solin. p. 346. his Diodori geminis-  
que Strabeni parum dextre fuisse usum, ut vinceret, Palmeti  
incolas fuisse *Σχηρίτας*: neque enim idem est, ut ille censuit,  
*καλυβοποιεῖσθαι ἐπὶ τῶν δένδρων*, sive *κοίτας ἐπὶ τῶν δένδρων*  
*ἔχειν*, et *σχηροποιεῖσθαι*. hoc est *tentoria figere*, illud *cubilia*  
*sibi in arboribus construere*: quae quantum distent, quis non  
animadvertit? WESS.

209. 73. Φωκῶν ῥῆσος ὀνομαζομένη] Eadem Strabo. At  
Agatharchides p. 57. τόπος, ὃν προσηγόρευσαν Νῆσσαν, ἀπὸ  
τῆς τοῦ ζώου πολυπληθείας, quasi ab *anatum* copia nomen esset.  
Equidem Agatharchidis haec esse, induci, ut credam, necdum  
possum: prohibent Diodorus atque Artemidorus, e quo sua Strabo.  
Photio potius, vitiosum codicem secuto, ea tribuero. Nam, ne  
alium locum signari putes, eadem omnia, quae Phœcarum insulae



Diodorus et Strabo contribuunt, *Nessae* illi in Excerptis Agatharchidis dantur. WESS.

209. 77. *Παλαιστίνην τῆς Ἀραβίας*] Palaestina, proprie definiendo, Syriae regio est ultima Aegyptum versus. Hic igitur eam partem intelligere videtur, quae Arabiam Petracam proxime attingit, vel septentrionem versus, ut est Peraea, seu Trans-Iordana: vel ad occidentem, ubi Idumaea, una de Palaestinae partibus, quas Galilaeam, Samariam, Iudaeam, Idumaeam et Peracam Vadianus et alii quidam faciunt. Inspice terrae S. tabulam accuratissime a Tilemano Stella descriptam. RHOD. *Πέτραν καὶ τὴν Παλαιστίνην τῆς Ἀραβίας*] Secta sub Principibus Christianis Palaestina in tres provincias: earum tertia varias Arabiae urbes, ipsamque Petram, complexa est, ut ex Procopio V. de Fabric. Iustiniani c. 8. ad Hieroclis Synecd. p. 721. ostendi. Tum *Παλαιστίνην τῆς Ἀραβίας* dici haud iniuria potuit. Diodori vero aetate omnia alia valebant, disiunctissimaeque regiones erant Arabia et Palaestina. Quare scriptum olim hic fuisse *Πέτραν τῆς Ἀραβίας καὶ τὴν Παλαιστίνην* nullus dubito: cuius coniecturae fautores et consortes habeo Agatharchidem, Strabonem et Cl. Salmas. in Solin. p. 346. WESS.

209. 80. *Γεθόραιοι καὶ Μινναῖοι*] A *Gerra*, *Γέθθρα* τῆς *Ἀραβίας*. Nicander Alexiphar. vers. 107. thus *Γεθόραιοι λίβανον*, et vers. 241. incolas *Γεθόραιοις νομάδας* adpellat. Nomen, quod ab exilio habent, quippe *Χαλδαίων γηγάδες* Babylone profecti, ut Strabo XVI. p. 1119. C. docet, proxime abest ab Hebraeorum *גרימ* *Gerim*, et Chaldaeorum *גריא* *Geraia*, monente S. Bocharto IV. Phal. c. 8. *Minnaei*, illorum vicini, passim *Μινναῖοι* dicuntur; Dionysio tamen Perieges. vers. 959.

*Μινναῖοί τε, Σάβαιο τε, καὶ ἀγγίλοι Κλεταβήνοι.*  
neque enim vero respondet, omnes, quotquot gentis meminere, *Μινναῖους* scripsisse, praeter Dionysium, ut satis confidenter Abr. Berkel. ad Stephani *Μινναῖους*. multo minus, a Minoë, Cretae rege, nomen et originem traxisse, ut Plin. VI. 26. Natum id genti cognomen est ex Hebraeorum *מענימ* *Meunim*, quo titulo signantur 2. Chron. XXVI. 7. vertunturque *Μινναῖοι* ab Alexandrinis. Advertit hoc Thom. Pinedo ad Steph. locum, paullo ante indicatum, sed qui opinionis eius auctorem laudare debuerat S. Bochart. II. Phal. c. 22. WESS.

210. 82. *Μαρανεῖς, μετὰ δὲ ταῦτα Γαρνδανεῖς*] Straboni *Maranitae*, quomodo et infra scribendum, et *Garindaei*, L. XVI. p. 1122. D. Priores a *Marane* urbe Plinii VI. 28. nomen inpetrauerunt, neque adeo audiendus est Cl. Salmas., qui *Φαρανεῖων* in Strabone malebat ad Solin. p. 346. WESS.

210. 84. *Συντελουμένης παρηγγέλειος*] Commeminit Nonnosus in Photii Cod. III. sollemnitatis, quam Saraceni Phoenicem incolentes bis quotannis obibant: sed ea fortasse alia est,

atque explicanda ex Arabum ritibus, ante Muhamedem observari solitis, de quibus Ed. Pocockius Specim. Hist. Arab. p. 311. WESS.

210. 89. Τὸ ποτὸν rectissime omnes; quomodo Cebes p. 10. Lucian. I. V. H. 23. passimque alii. Vid. Eustath. in Homer. p. 137. WESS.

210. 1. Κόλπος Αἰαιανίτης] Sic ex vestigiis variantis scripturae in vetustis Codd. refinxi, et Agatharchide, cui κόλπος Αἰαιανίτης, sicuti accolae ΑΙΙΑΝΙΤΑΙ Ptolemaeo L. VI. p. 177., suffragante Cl. Salmasio in Solin. p. 346. Sinui accubabat urbs *Aela* ἠλεα sive *Aelath* ἠλα, unde verius nomen eius foret *Αἰλιανίτης* aut *Ἐλιανίτης*, ut Strabo. Discreparunt autem mire in eius et sono et scriptura. Plinius VI. 28. *Sinus intimus, in quo Leanitae, qui nomen ei dedere. Regia eorum Agra, et in sinu Laeana, vel, ut alii, Aelana. Nam et ipsum sinum nostri Aelaniticum scripsere, alii Aeleniticum, Artemidorus Aleniticum, Iuba Laeaniticum.* Sed immerito: duravit urbi nomen in seram aetatem. Hieronym. De Loc. Sacr. *Sedet ibi legio Romana cognomento decima: olim quidem Ailatha veteribus dicebatur, nunc vero adpellatur Aila.* A quo nihil dissidet Notit. Imp. Orient. p. 217. cum G. Panciroli nota. WESS.

210. 4. Τὸν τε λαὸν ἀμύθητον ἔχοντες] Vid. L. XIX. 94. WESS.

210. 11. Τῶν ἐν τῷ Πόντῳ Ταύρων] Tauros, Scythicam gentem, peregre advenientes ad Dianae aram inmolare olim aduetos fuisse Euripid. Iphig. Taur. vers. 39. atque alii prodiderunt. Hic tangitur inhumana eorum crudelitas, qua piraticam exercentes in captos grassabantur: quod eorum institutum memorat Strabo VII. p. 474., sectabanturque Nabataei, uti docuit Noster II. 48. WESS.

210. 12. Ὑπὸ τετραηρικῶν σκαφῶν] Amputandum τε. RHOD. Ὑπὸ τριηρικῶν σκαφῶν] Rem refert Strabo XVI. p. 1123. A., sed nihil de navium amplitudine et genere. Equidem Rhodom. τριηρικῶν, addicentibus Codd., cupide recipio. Quadriremes si voluisset, τετραηρικῶν oportuerat. Vid. supra II. 5. WESS.

210. 16. Ἀγρωστίην καὶ μηδικήν] Eadem Agatharchides, qui p. 58. *Βυθημανέων* in agris haec provenire memorat; quos quidem *Bythemanenses*, detracta priore syllaba, S. Bochart. P. II. Hieroz. III. 10. p. 825. *Themanitas*, *Θημανέων*, cum facit, haud scio, an sequendus sit: ΘΕΜΟΙ sive ΘΑΙΜΟΙ Ptolemaei VI. p. 177. non alii videntur. WESS.

211. 25. Διὰ τὸ τὴν φύσιν ὡς ἐπίπαν etc.] Haud dissimilem observationem adstruit summae Sabaeorum felicitati infr. c. 46. WESS.

211. 32. Ἀνοδιέξιτητον ἔχει τὸ στόμα] Strabo *δυσείσβολον στόμα* illi tribuit L. XVI. p. 1123. B., quod idem plane.

*Δυσέξιτον*, quod in Co. et M., habebis L. XVI. 32., *δυσέξι-  
τητον* vero infr. c. 50., sed usu diverso. WESS.

211. 33. *Ἀλιτενοῦς γὰρ πέτρας τὸν εἰσπλοὺν διαλαμβα-  
ρούσης*] Praestaret, *humilis enim scopulus* etc. *Ἀλιτενῆς* enim  
*πέτρα* quae eiusdem paene cum mari altitudinis, ut *ἄλιτενῆς*  
*ἄκρα* promontorium humile Strabon. VIII. p. 517. B., *ἡϊὸν ἄλι-  
τενῆς* eiusdem L. XIII. 9. 890. A. litus depressum. Longus II.  
Pastor. p. 55. *πετραίους ἰχθῦς ἀλιεύοντες ἐκ πέτρας ἄλιτενοῦς*,  
i. e. *ex petra, paullum e mari prominente*. Immo *θάλασσα ἄλι-  
τενῆς* mare non admodum profundum, et propterea magnarum  
navium haud capax, Appiano II. B. Civil. p. 787. *σκάφος εὐτε-  
λὲς ἐπ' αὐτὸν ἐπέμπετο, ὡς τῆς θαλάσσης οὐσης ἄλιτενοῦς καὶ  
μεγάλαις ναυσὶν οὐκ ἐχέροῦς*. Conf. infr. IV. 18. et P. Victor.  
in Cicero XIV. ad Attic. 13. atque Is. Casaubon. ad Strabon. VII.  
p. 473., vim potestatemque vocabuli egregie declarantes. WESS.

211. 39. *Κριζομενεῖς ὀνομαζόμενοι*] Agatharchides *Βυθο-  
μανεῖς*, a quo *Βριζομενεῖς* in margine non multum abludit. Rhod.  
*Βαριζομενεῖς*] Male Rhodomannus. Agatharchidi dicuntur *Βατι-  
ζομανεῖς* p. 58., a quo gentis titulo cum haud multum absint *Βα-  
ριζομενεῖς* veterum Codd., eos recipiendos censui. Fortasse tamen  
utrumque vitiosum est; atque haud sciō, an Ptolemaei VI. Geogr.  
p. 178. *Θρασυμανεῖς*, Thamudenorū vicini, sint. WESS.

211. 42. *Τῆ προειρημένη παραλία*] Sic lego. *Νῆσοι πα-  
ρόλιοι* non bene quadrant, et consentit Agatharchides. WESS.

211. 45. *Ἐχει λιθίνας ὑποστάθμης*] Mallem *ἔχειν*. Id  
vero quod subsidit, quodque in imo consistit, *ὑποστάθμην* vo-  
cant. Plato Phaedon. p. 109. C. de terra, quae infra aetherem  
locum habet, *οὗ δὲ ὑποστάθμην ταῦτα εἶναι*. et Stoici in Diogen.  
VII. 157. affirmant *ὑποστάθμην δὲ πάντων τῆν γῆν, μέσιν  
ἀπάντων οὖσαν*. Inde pro sedimento, faece. Glossae, *ὑποστάθμη,  
Fax*. Imo vero *faex*. De aedium autem fundamentis, ut hic,  
legere non memini, nec improbo tamen. Vid. Th. Gataker. ad  
Antonini Imp. E. IX. 36. WESS.

211. 48. *Καταπεπνησῶθαι*] *Καταπεριτεῦσθαι* Co. M.  
ex glossa, ut arbitror. Vid. cap. seq. et Agatharchid. p. 54. WESS.

211. 52. *Ὁὐ χιλῆ*] Ausus sum, refragantibus libris, ita  
scribere; *ὕλη* sive *silva* nihili hoc quidem loco est: *χιλῆ* om-  
nium aptissima. Sic autem appellant pilas, seu moles in mare pro-  
currentes, et portum a ventis defendentes, ut optime explicat Is.  
Casaub. ad Strabon. III. p. 230.; atque ita hoc cap. *χιλῆν ἐξαι-  
σιον* portui tribuit Diodorus, et Plutarch. in Solon. p. 83. A. Athenienses ait prope Salamina in anchoris stetisse *κατὰ χιλῆν  
τινα πρὸς τῆν Εὐβοίαν ἀποβλέπονσαν*. Ne vero nimio videar in  
voce mutanda audacior, en tibi Agatharchidis, quae auctor aemu-  
latus est, verba: *οὐ γὰρ ἐστὶν οὐ λιμῆν εὐορισμός, οὐ σάλος ἐπ'*

ἀγρίρας, οὐ κόλπος ἐπισκεπής, οὐ χηλῆς ἐντύπωμα. ubi Doctiss. Io. Hudson. mecum sentit. WESS.

211. 58. Συντετριμένον δ' αὐτῶν εἰς ἀλλήλας] Iustum hoc est, non vulgatum συντετριμένον, quod mire verterat Rhodom., *inter se attritu hient*, quasi ποέταrum Symplegades essent. Plato Phaedon. p. 111. D. τούτους πάντας ὑπὸ γῆν εἰς ἀλλήλους συντετριῆσθαι πολλαχῆ. Basilius M. Homil. IV. in Hexaëmer. p. 36. E. συντέτριγνται πρὸς ἀλλήλους. et Noster supr. c. 19. ἀλῶνας πρὸς ἀλλήλους συντετριμένους, quo loco Coislin., qui verum hic servavit, simili peccato συντετριμένους. quae eadem varietas in τετριμένους et τετριμένους, ut monitum ad L. I. 97., librariis frequentatur. WESS.

212. 62. Ἀραττόμενον] Προσαραττόμενον M. non male. Simillimum dabit Alciphron. L. I. Ep. 1. p. 5. WESS.

212. 64. Κοίλωμα σπυσμὸν ποιῆ] Καὶ inserto planior erit sententia. RHOD. Adstipulor viro doctissimo, insuperque opinor, opportunius esse κόλωμα Regii libri: fluctus enim cum absorberunt, in orbem rotatim flexuosi esse solent. WESS.

212. 68. Οἱ καλούμενοι Θαμονδινοὶ Ἀραβες] Θαμονδινοὶ Ἀραβες Agatharchidi, prorsus ut in Coislin., sed prave. Urbs Arabiae, in Nabataeorum finibus, erat *Thamuda*, hinc Θαμονδινός eius civis Stephano in Θαμονδᾶ et Ptolemaeo L. VI. p. 178. Plinioque VI. N. H. 28. Itaque fidere noli coniecturae V. C. Iac. Gronovii ad Stephani Θαμονδᾶ. WESS.

212. 70. Ταῖς καλουμέναις Ἐχινάσι] Contra Oeniadas et Acheloum flumen eundem ad modum Echinades insulae sunt positae apud Thucydid. extremo L. II. Forte autem verius paullo ante fuerit νήσων σποράδων ex Codd. melioribus: sic enim et Strabo XVI. p. 1123. ἔξῃς δ' ἐστὶ κόλπος νήσους ἔχων σποράδας, de eodem hoc sinu. WESS.

212. 73. Μετὰ δὲ ταύτας ὄρᾶται χερσόνησος] Sic praestat. Ὑπορᾶται aliud est, et suspicionem complectitur L. XIII. 96. Porro λιμὴν εἰς αὐτὴν positum est loco ἐν αὐτῇ, ut οἱ εἰς τὴν Ἀσίαν Ἕλληνας Strabon. XV. p. 1069. εἰς τὸ πρωταεῖον ἐσιτεῖτο Heliodori I. p. 18. καθήμερος ἐς τὸ ἱερὸν Philostrati V. Vit. Apoll. 42. ἔθος τόδ' εἰς Ἑλλήνας ἐξελεξάμεν Euripid. Supplic. v. 340. Vid. infra XIV. 117. et Doctiss. I. Fr. Reitz. in Luciani Asin. c. 1. Portus autem Straboni XVI. p. 1123. Χαρμόθας, levi discrimine soni. WESS.

212. 81. Ναυσὶ δυσχλίαις ἄκλυστον λιμένα παραχόμενος] Inter portus commoda haud postremum est, si tutam a fluctibus et tempestatibus stationem navibus praebet. Dio Chrysostom. Orat. LXXIV. p. 643. B. καίτοι λιμένας μὲν εὔροισι ἂν ἀκλύστους, οἷς ἔνεστι πιστεύσοντας ἀσφαλῶς ὀρμεῖν, ἡλίκων ἂν ποτε ἄρσῃ τὸ πνεῦμα. quae quidem Dionis et haec egregie illustrant, et praestabile vicissim auxilium inde mutuuntur. Visa enim sunt,

etsi nullo suo merito, mendo obsita II. Valesio L. II. Emend. 26.; quod portuum duo fuerint genera, quorum alii *κλειστοί*, qui catena ferrea claudi poterant, alii *ἀκλειστοί*, *αῖρητοι*. Hoc liberali manu damus viro egregio: nec admittimus tamen, ut *λιμένας ἀκλειστούς* propterea scripserit Dio; quos portus eius oratio ferre nullo potest modo. *Ἀκλειστοί* sive *αῖρητοι* fluctibus et ventorum furoribus expositi et esse poterant et saepenumero erant: his prudens gubernator, venti vehementiores si consurgerent, navim non crederet. contra *ἀκλειστοί* immunem tempestatibus et tutam stationem, quod orator vult, praestabant, marique iactatis per erant commodi. WESS.

212. 86. *Προσαγορευομένη δὲ Κώθωνι*] *Cothon* origine sua portum manu et arte factum notat; atque eiusmodi Carthagini erat, egregie descriptus ab Appiano Punic. p. 129. et S. Bocharto I. Canaan. 21. Videtur autem Diodorus Carthaginis *Cothonem* uberius declarasse L. XXXII., sicuti reliquiae eius innuunt libri. WESS.

212. 93. *Ἐὶς πετρώδη μαστόν*] Simili translatione *πέτρα μαστοειδής* L. XVII. 75. *Μαστός* saepe collis est elementer assurgens et mammam quodam modo referens. Polyb. I. 56. de loco quodam praerupto Panormum inter et Erycem, *ἔχει δ' ἐν αὐτῷ καὶ μαστόν*. Hinc Battus Cyrenem, quae in monte acclivi erat posita, *ἐπὶ λόφου μαστοειδοῦς*, ut ait Hierocles, dicitur condidisse *ἐν ἀργινόντι μαστῶ* Pindaro Pyth. Od. IV. 14., et Eresus, colli ad mare vergenti inposita apud Strabon. XIII. p. 918. C., Archestrato *Ἐρέσου περικίμων μαστός* in Athen. L. III. 28. p. 111. Opportune vero Synesius de colle, qui e porrecto monte instar alius montis ad mammae formam excellebat, *περὶ τὸν ὄρθρον*, inquit, *ὅς ἐπὶ τοῦ διατείνοντος ὄρους, ὄρος ἐστὶν ἄλλο, καθάπερ μαστός ἀνιστάμενος*, L. I. Provid. p. 94. D. WESS.

212. 1. *Κατελιγμένους* omnes haud scio an male. *διελλιγμένους* Diodoro atque aliis hac in re tritius est. WESS.

212. 4. *Οἱ καλοῦμενοι Δέβαι*] Agatharchidi *Δεδεβαί*; Nostro adstipulatur Strabo XVI. p. 1123. D., et bene. Nomen *Debae* ab auro habent, quod Arabibus *ذهب* *Deheb*, monuitque S. Bochart. II. Phal. 27. Montem *Chabinum*, *Debis* his adfinem, alibi invenire non memini. WESS.

213. 11. *Δρομάδων καιλῶν*] Vide L. XIX. 36. WESS.

213. 13. *Ἀπογράφου*] *Ἀπογράφου* scriptum videtur. RHOD. Ego vulgatum *ἀπογράφου* non temere damnavero. Vult, credo, tantam auri ramentorum copiam circa ostia conspici, ut limus rutilans auferri possit. Favet tamen Rhodomanni coniecturae quodam modo Agatharchides, *ὥστε τὴν ἕλν. τὴν πρὸς ταῖς ἐξβολαῖς συνηγμένην, πρόφωθεν ἀποστύβειν* p. 59. inquit. WESS.

213. 21. Ἀλιλαίων καὶ Γασανδῶν] Ἀλιλαῖοι καὶ Κασανδρεῖς Agatharchidi, a ceteris vero Geographis neglecti, nisi si Κασσανῖται iidem sint ac Casandres sive Gasandes, ut censuit S. Bochart. II. Phal. 19. de *Alilaeis* insuper ea disputans, quae fidem difficulter capient. WESS.

213. 23. Νιφετοὶ γίνονται καὶ χειμῶνες εὐκαιροί] Nives aestate in Arabia? mihi commentum non placet. Agatharchides, ἀφ' ἧς ἕτερος καὶ χειμῶνες γίνονται καὶ θεροὺς εὐκαιροὺς quod fuisse puto, ἀφ' ἧς ἕτεροι καὶ χειμῶνος γίνονται etc. unde pluviae irrorant et hieme et aestate temperatae; ad quam quoque formam, addita ἕτεροῦ voce, Diodori verba facile instaurari possent, modo liceret. WESS.

213. 27. Διὰ τὴν τῶν λαῶν ἀπειρίαν] Multis partibus hoc vulgato praestat, et secutus est Poggius; nusquam enim *Alilaeos* et *Gasandas* piscatui unice invigilare aut Diodor. aut Agatharchides prodiderunt; quin hic οὐ πᾶσα, inquit, τυχχάται θεραπείας, τῶν ἄλλων ἀπειροτέρων ὄντων. ubi parili modo τῶν λαῶν refingendum est, non ἀλείων, ut S. Bocharto in mentem venerat II. Phal. 27.: haec enim voces a librariis saepe confunduntur, uti inf. c. 73. WESS.

213. 31. Ἄνωρον] Dixi supr. II. 50., quibus Strabon. XVI. p. 1127. D. et Agatharch. p. 60. adde. WESS.

213. 37. Ἐπίσης ἀλλάττονται] Deserit hic ducem suum Agatharchidem, qui τὸν μὲν γὰρ χαλκὸν πρὸς τὸν χρυσὸν τριπλαθμον ἀλλάττονται. τὸν δὲ σίδηρον πρὸς διπλοῦν χρυσίον. aeri enim triplum, ferro duplum auri rependunt. Forte res illi fide maior, uti est, visa fuit. Conf. S. Bochartum eo, quem dixi, loco. WESS.

213. 39. Ὀνομαζόμενοι Κάρβαι] Haud aliter Agatharch., ut verum gentis hoc esse cognomen, dubitari non possit. Ceteri, nisi si *Cervani* sint Plinii VI. 28., praetereunt. WESS.

213. 47. Τὸ καλούμενον βάλσιμον] Vide L. II. 48. et Strabon. XVI. p. 1124. Agatharchidis verba, ut hic Diodorus, sollertissime aemulantem. WESS.

214. 59. Καὶ γὰρ τοὺς παραπλέοντας etc.] Memoravit etiam Herodot. III. 113. Lucianus II. Ver. Hist. 5. καὶ θανμαστή τις αἶρα περιέπνευσεν ἡμῶς, ἡδεῖα καὶ εὐώδης, οἷαν φησὶν ὁ συγγραφεὺς Ἡρόδοτος ἀπόζειν τῆς εὐδαίμονος Ἀραβίας. WESS.

214. 62. Ἄνεμος ἀπόγειος] Straboni XV. p. 1015. C. hi venti ἀπόγαιοι et I. p. 92. B. ἀπόγαια πνεύματα. Dionysio I. II. p. 132. αἶρα ἀπόγειος, Aristoteli, si tamen is libri auctor, de Mundo c. 4. οἱ μὲν ἐξ νεοτισμένης γῆς πνέοντες, ἀπόγειοι λέγονται, qui facti e telluris halitu constant, terrigenae nuncupantur, ut vertit Apuleius, satis obscure. WESS.

214. 70. Προσπίπτει τοῖς πλέουσι] *Vulgatum mendosum quid tinnire, multis si probem, diffidere videbor lectoris acumini. Tenor orationis hoc desiderat et prono nunc alveo decurrit.* WESS.

214. 74. Ἐν ἑτερογενέσιν ἄγγείοις] *Caussa nulla est, ut hinc quidquam demutetur. Aromata, ut alio possent asportari, vasis indebantur, quae, si eorum ingenio non responderent, haud parum de naturali fragrantia auferebant. Conf. Galen. I. de Antidot. p. 433.* WESS.

214. 86. Δίγμματα ποιοῦνται παντελῶς ἀνίατα] *Praeter Agatharchidem et Strabonem meminit eorum Pausan. IX. 28., in eo tamen cum iis parum consentaneus, quod veneni expertes esse perhibet.* WESS.

214. 91. Καὶ τῆς συγκρίσεως τῶν ὄγκων] *Illustrat haec et cum Strabonis atque Agatharchidis verbis diligentissime componit Cl. Salmas. in Solin. p. 383., id quoque recte monens, τράγον πρόγονα non esse herbam, de qua Dioscorides II. 173., sed veram hirci barbam: ea enim graveolentissima, δυσσοδμοστάτη Herodoto III. 113.* WESS.

215. 99. Ἦν καλοῦσι Σάβα] *Praefero marginis Σάβας et infra pro Σαγναῖς. Σάβαις, ubi glossa Σάμαις habet, amplector. Rhen. Ἦν καλοῦσι Σάβας] Scripti Codd. hanc scripturam expostulant. Stephanus Σάβαι, πόλις μεγάλη, πλησίον τῆς ἐουθραῖς θαλάσσης. Tamen ἡ Σάβα Philostorgio, et τὰ Σάβα Theophrasto. Vid. S. Bochartum II. Phal. 26.* WESS.

215. 1. Βασιλέας δ' ἐκ γένους ἔχει τοὺς διαδεχομένους] *Diodorus Sabaeorum viridaria circumlustrans et graphice pingens, subnectit, βασιλέας δ' ἐκ γένους ἔχει etc. Vertitur, reges successione gentili imperant. Non male, nec tamen per omnia bene: maior enim vis et emphasis residet penes τοὺς διαδεχομένους, qui repraesentant et exprimunt titulum Tobbaorum, circumdari solitum regibus Sabaeorum e gente lectanidaea oriundis. Tobbae enim תבא דיאדוֹן, διαδεχόμενοι, successorem, designat Arabice, a themate תבא, secutus est, successit. Iam vero disertim testantur Philologi Arabum, Tobbaorum appellatione insignitos tantum fuisse antiquos illos et praepotentes reges, qui Hadramaut, Saba et Himiar perpetua serie possederunt. Hactenus eleganter atque acute Celeb. Alb. Schultens Orat. I. de Ling. Arab. Origin. p. 25.* WESS.

215. 4. Οὐκ ἔξεσιν — — ἐξελθεῖν ἐκ τῶν βασιλείων] *Consentiunt Agatharchides, Strabo, egregie ab Is. Casaub. restitutus, et Persicorum scriptor Heraclides Cumaeus in Athen. I. XII. 3. p. 517., qui quidem turpi vitio cum sit obsitus, verba hominis addenda censeo, ut menda liberentur: διατρέχει τε γὰρ αἰὲ, rex regionis thuriferac, ἐν τοῖς βαλανείοις, ἐν τρωγῇ καὶ δανάρῃ τὸν βίον διάγων, καὶ πρᾶττει οὐδὲ ἐν πρᾶγμα, οὐδὲ*

πολλοῖς πλησιάζει. his deinceps subnectit, regem iudices constituere, quos si quis non recte iudicasse putet, eum fenestram in suprema palatii parte, ἐν τῷ ὑψηλοτάτῳ τῶν βασιλείων, catena revinctam, prehensa catena attrahere, ut regem, inibi agentem, conveniat: quae omnia abunde arguunt, balnearum mentionem in superioribus plane esse absurdam et incongruentem. Scribe ergo ἐν τοῖς βασιλείοις, ut et hac parte cum Agatharchide, Strabone et Diodoro bene illi conveniat. WESS.

215. 7. Τῶν πλησιοχώρων Ἀράβων] Hic, sicuti saepe alias, βαρβάρων vocabulum de possessione sua Ἀράβων gentem deiecerat. Vid. H. 24. WESS.

215. 15. Καὶ μάλιστα ἐν Σάβαις] Nodum nectit illud ἐν Σαγναῖς, ubi regia ipsis sedes, malletque Cl. Rhodomannus ἐν Σάβαις sed Σαγναὶ vel Σαγγναὶ exhibere videntur סגנא נבנא Sangao Iemanensium celebratissimam metropolim, Damasco magnitudine et magnificentia parem, Uzal veteri nomine dictam, a primo conditore lectani filio, cuius filius traditur Sangao, qui alteri isti appellationi ansam dederit. Sic pro vulgata disputat eadem in Orat. Celeb. A. Schultens: cui quidem hac in parte adsentiri non possum: auctor enim Sabas, gentis metropolim, in cuius regia perpetuo commorari Sabacorum principes dixerat, disertim signat: nec aliud libri veteres mira concordia sectantur; ut plane mihi dubium sit, unde H. Steph. Σαγναῖς acceperit. WESS.

215. 19. Κίονων τε καὶ ἀνδρῶν] Diu me huc illuc distraherant haec duae λέξεις, speciosae quidem intuitu, sed re ipsa ὑπολοί, donec in mentem venit, num forte sincera lectio esset οἴκων τε καὶ γαῶν. quae cum expeditissimam habeant sententiam, cur non refineantur, in praesentia nihil causae videmus. RHOD. Κίονων τε ἀνδρῶν περίετλα] Nimius est Rhodomanni conatus. Quod dedi ex optimis Vindobonensibus schedis, longe longeque praestat. Agatharchid. Κίονάς τε πολλοὺς αὐτοῖς (γῆσι) κατεσπειράσθαι ἐπιχρόσους τε καὶ ἀργυροῦς. WESS.

215. 22. Χρυσαῖς φιάλαις λιθοζολιήτοις] Phialae, quibus lacunaria et fores erant ornata, ornamentum quoddam genus, phialas referens, haec quidem loco indicant: qua ego vocem potestate instructam reperire haud memini, nisi in Agatharchide p. 65., unde haec sumpta. WESS.

215. 30. Ἐρμαίων ἡγονιμένων] Vid. inf. V. 26. WESS.

215. 31. Πύλλης ἀειχίστους] Codd. consensui negari haud potuit ita ut scriberetur: beata quoque insularum conditio munitas urbes non admodum requirit. WESS.

216. 38. Εἰς Ποιάνας] Quis non animadvertit ἐξ Ποιάνης legendum esse? eum terminus ad quem, ut Aristotelici loquuntur, praecesserit. Terminum igitur a quo sequi, si non contextus ipse, tamen naturae ordo flagitat. RHOD. Εἰς Ποιάνας] Coniurarunt ad mendam hanc propagandam amanuenses, quibus



invitis coniecturae Rhodom. locum dedissem, est enim hac quidem parte certissima, nisi vulnus aliud subesset. *Potanam*, ad Indum flumen urbem, qui memoret, nemo est. *Pattala* Alexander munit, et *ραυστάδην καὶ νεοσοίλους* instruxit: quae nisi eadem sint ac Nostri *Potanae*, dicendum est, id cognominis fuisse portui sive navium stationi, cuius fundamenta idem rex non longe *Pattalis* posuit in Arriani VI. 20.; quod enim Freinshem. opinatur ad Curtii IX. 10. *Xylenopolim*, qua de Plinius VI. 23. eandem videri atque Agatharchidis et Diodori urbem, id teneri nullo potest modo. Illorum urbs ad Indum, Plinii vero, *iuxta quod flumen, aut ubi fuerit* explanatum haud erat; taceo ingens utriusque nominis discrimen. WESS.

216. 47. *Μαμαστρησιῶνα*] De mensibus Atticis cum Romanis dextre comparandis, consule Iosephum Scaligerum, virum illustrem doctorumque nostri seculi phoenicem, in admirando opere de Emendatione Temporum. RHOD. Usus hoc loco illust. est Scaliger I. Emend. Temp. p. 22. ut vinceret, Atticos menses, quod negare sustinuerat Theod. Gaza de Mensib. c. 6., *Maemacterionem* et *Posideonem* continua serie sese excepsisse; neque male, ut deinceps adparebit. Contra Scaligerum venit, summus illius adversarius, D. Petavius in Animadvers. ad Haeres. LI. Epiphanii p. 137. et I. D. T. 13., *Gazae* patrocinium professus. Scaligeri vero partes tueri ingressus est Cl. Salmas. in Solin. p. 222., acriterque ex Diodoro et Agatharchide urgere Petavium coepit; neque inpune tamen; hic enim Dissert. ad Auctarium operis de D. T. L. VI. 6. haud pauca, nec sine quadam verborum atrocitate, reposuit, mire aestuans, ut telum, hinc sumptum, eius e manibus extorqueat. Enimvero si haec in contentione, sicuti in civili Solonis legibus, medium et neutris in partibus agere haud liceat, a Scaligero et Salmasio stetero. Auctoris enim et Agatharchidis verba continuos menses *Maemacterionem* et *Posideonem* manifesto requirunt: Harpocration praeterea hunc *ἕκτον sextum* Atheniensium mensem, illum *πέμπτον quintum* perhibet; cuius auctoritatem etsi infringere conetur D. Petavius, operam perdit: occurrunt enim antiquo vetusti lapides, Athenis eruti a Sponio Itin. T. II. p. 376. et Georg. Whelero L. II. p. 482. *Maemacterionem* et *Posideonem* eo ordine locantes, quem Scaliger probaverat. WESS.

216. 50. *Ἐξ τοῦ κατ' ὀλίγον πλωιζομένοις*] Agatharchides *ἐν δὲ τοῖς ἑξῆς τῶν μηνῶν κατὰ λόγον*. quae Diodorus eum imitetur, venit in mentem Cl. Salmasio ad Solin. p. 222., scripsisse eum, *τοὺς ἑξῆς τῶν μηνῶν κατὰ λόγον πλωιζομένοις*, me, vocem postremam si demas, non usquequaque consentiente. Mutatio enim nimia est, et Diodoro suum aufert. *Ἐξ τοῦ κατ' ὀλίγον* indicat sensim (vid. XIV. 96. XV. 41) similique progressionem secutis mensibus stellas eas nautis haud conspici. Quae sequebantur in vulgatis scabiosa, ea, compositis inter sese vetustis mem-

branis, utcunq̄ue refinxī; auctor ei rei fuit idem Agatharchides, qui p. 66. τῶν δ' ἄλλων ἀστέριον, οἱ μὲν πλάνητες, ἀόρατοι τινὲς δὲ τοῖς ὄγκοις μελζονες. οἱ δὲ οὐδὲ κατὰ τοὺς ἰφροσιῶτας καιροὺς τὰς δύσεις ποιοῦμενοι καὶ τὰς ἐπιτολάς. Gemina enim nostris esse, quis tandem dubitaverit? WESS.

216. 55. Προαποστέλλειν τὸ φῶς] Distinctius Agatharchides φῶς ἀνήλιον, lucem absque sole, sive auroram. WESS.

216. 61. Καὶ τῷ τύπῳ μὴ κωροειδῆ φαίνεσθαι] Erratum τὸ ἥλιον vix notatu dignum. Sed quod tertio versu sequitur κωροειδῆ plus animadversionis requirit. Cur enim sol hic κωροειδῆς vocatur, cum umbrae opaci corporis, quod lucido corpore minus sit, hoc epitheton tribuatur? De quo Physici et Astronomi. Mendum igitur hic manifestum est, quod auctoris nostri magister Agatharchides emendat, cum in Paraplo maris rubri c. 51. σχῆμα δισκοειδὲς ponat. Iure itaque optimo δισκοειδῆ restituimus, nisi quis κωροειδῆ scriptum fuisse contendat. RHOD. Mendosus locus: quis enim unquam putavit, solem oculis nostris apparere cono similem? Rescribe ex Agatharchide δισκοειδῆ, et sic lege, καὶ τῷ τύπῳ μὲν δισκοειδῆ. PALMER. Vitiosum esse locum dubio vacat. Ex coniecturis Rhodom., nam Iac. Palmerii opera post eius curas hoc quidem loco supervacanea est, posterior praecipue placet; videtur enim Poggius κωροειδῆ legisse, et parum id distat a vulgato. Neutri tamen praerogativam dedi, quoniam in ambiguo manet, quid auctor ipse receperit. WESS.

216. 69. Ἐναντία γίνεσθαι συμπτόματα περὶ αὐτὸν] Ita oportuit. Agatharchid. εἰς δὲ τὴν ἐσπέραν ἐναντίον τὸ ΠΕΡΙ τὸν ἥλιον πάθος ὁρᾶσθαι. WESS.

216. 70. Τοῖς ὁρῶσι κενῶς ἀκτίσι φωτίζειν] Repone τοῖς ὁρῶσιν ἔτι ταῖς ἀκτίσι. et paullo post οὐκ ἔλαττον ὥρῶν, non ἔλαττόνων. RHOD. Τοῖς ὁρῶσι κενῶς ἀκτίσι φωτίζειν] Visum hoc est praestabilius et rei convenientius. Mendam peperit soni similitudo, quae quoque κερολογία et καιρολογία in Plut. T. II. p. 1068. D. et 1069. C. κεροδοξία et καιροδοξία Lucian. I. Ver. Hist. 4. κεροφωρία et καιροφωρία I. Timoth. VI. 20. confudit. De ἔλαττον, quod suam in sedem recepi, Rhodomanno non obloquor. WESS.

217. 74. Ζέφυροι καὶ Αἴβες etc.] Huc pertinent quae Philosophus disputat II. Meteorol. c. 5. WESS.

217. 89. Οἱ δ' Ἀνδοχῆσαι τὰ πρὸς τὴν δύσιν] Ita malle. Uberius de his gentibus Herodot. IV. 171. etc. Stephano autem Ἀνδοχῆσαι, Ptolemaeo IV. 5. Ἀνδοχῆσαι, sive, ut scribi debet ex Coislin., Ἀνδοχῆσαι. Nonno XIII. Dionys. v. 375.

— Οἱ παρὰ Κίνυρος ὕδωρ  
ᾧ ζεσον ἀζαλέης φραμαθώδεα πέζαν ἀροῦρης  
Ἀνχῆται Βάκαλές τε συνήλυδες.

sed prave. Scripserat ipse Ἀνδοχῆσαι Κίβαλές τε, sic enim Hero-

dotus adpellat, utrosque eo, quem adscripsi loco, coniungens.

WESS.

217. 90. Τὴν μεταξὺ ταινίαν] Littoris porrectum tractum. Strabo de Achillis *dromo* sive cursu VII. p. 473. ἔστι γὰρ ταινία τις, ὅσον χιλίων σταδίων μῆκος ἐπὶ τὴν ξω. Plura ad L. I. 31. WESS.

217. 92. Νέμονται τοὺς τόπους τοὺς περὶ τὴν Σόρτιν] Ptolemaeo propterea Μάκαι οἱ Σιρτίται L. IV. Geogr. c. 3.; sic enim distractis vocibus scripserat, non Μάκαιοι, ut bene advertit Cl. Salmas., qui et plura de illis, in Solin. p. 271. WESS.

217. 97. Τὰ γένη ταῦτα βασιλέως ἔχει] Res ipsa, et quae consequuntur, regum, non regni mentionem postulabant: hoc itaque placitum est, sicuti brevi post βασιλέως ὑπακοῶν, eliminata ἐνὸς voce. WESS.

217. 99. Βασιλέως ἐνὸς] Posterius abiiciendum et tertio inde versu vide an pro τὸν αὐτὸν τόπον legendum sit αὐτῶν. RHOD.

217. 4. Ἀνακάμπτει πρὸς τὸν αὐτὸν τόπον] Ego retineo: indicat redisse eum in locum, unde venerant. Plut. in Demetr. p. 913. E. ἀπογρόντες ἐκεῖνην τὴν ὁδόν, αὐθις ἀνεχώρησαν εἰς τὸν αὐτὸν τόπον. WESS.

217. 7. Ἀοραῖς αἰγῶν σκεπάζουσι τὰ σώματα] Haec omnium optime explicabit Hippocrates de Morb. Sacro p. 302. ἐγὰρ δὲ δοκέω, Αἰθίων τῶν τὴν μεσόγειον οἰκούντων, οὐδένα ὑγιαίνειν, ὅτι ἐν αἰγείοις δέσμασι κατακίονται, καὶ κρέασι αἰγείοισι χροῶνται. ἐπεὶ οὐκ ἔχουσι οὔτε στρώμα, οὔτε ἱμάτιον, οὔτε ὑπόδημα, ὅ, τι μὴ αἰγείον ἐστίν. Vescabantur itaque capris et earum pellibus corpus pedesque contra aëris incommoda muniebant: neque viri tantum sed et feminae. Hesychius, Αἰγίς, ἣν αἱ Αἰθιοῦσαι γέρονται δορῶν, quae Grammatici cur Maussacus ad Harpocratonis Αἰγίς mutaret, ipsique Herodoto IV. 189. vim faceret, caussa profecto nulla erat. Dio Chrysost. Orat. V. p. 86. B. visam esse ait sedere mulierem διαθερῶν ἐπιβεβλημένην ἄνωθεν, ὥσπερ αἱ Αἰθιοῦσαι. De Heroinis Africae Apollon. Rhod. IV. 1348.

Στέργουσι αἰγείοις ἐξωσμέναι ἐξ ὑπάλτοι

Αἰχένος, ἀμφὶ τε νῶτι καὶ ἰξός. — WESS.

217. 9. Πέρογοι δὲ πλησίον τῶν ἐδάτων] Frequens inde *turrium* per Africae provincias apud Geographos memoria. Vide quae adscripta sunt Itin. Anton. p. 35. WESS.

218. 20. Προτερεῖν ἐν ταῖς ἐκκησίαις] Praepositio hinc si longissime abesset, eam non revocarem: neque enim ita solet. Conf. infr. c. 52. et L. XVI. 34. etc. WESS.

218. 27. Πολλοὺς γέροντα καρπὸς] Hanc soli eius ubertatem saepe praedicat Pindarus, cui περσοφόρος Isthm. IV. καρποφόρος Pyth. IV. πολίμηλος καὶ πολνκαρποιάτη Pyth. IX., et

ad eius exemplum Callimach. Hym. Apoll. v. 94. cum Ezech. Spanhem. nota, et Arrian. Indic. c. 43. WESS.

218. 28. Πολλὴν ἄμπελον] Vide Cel. Hemsterh. ad Aristoph. Plut. p. 322. WESS. in Add.

218. 30. Ἡ δ' ὑπὲρ τὸ νότιον μέρος ὑπερτείνουσα] Dignus est qui cum hac descriptione contendatur Luciani locus Dipsad. c. 1.; ubi gemina germana reperiuntur. WESS.

218. 31. Καθ' ἣν τὸ νότιον φέεσθαι] Pro τὸ νότιον in posteriore loco posito aliquid reponendum est, quicquid sit. ΣΤΕΡΗ. Καθ' ἣν τὸ νότιον] Pro hoc quid restituendum sit, nulla assequi coniectura possum. ΚΗΘ. Καθ' ἣν τὸ νότιον φέεσθαι συμβέβηκεν] Legit Isaac. Vossius καθ' ἣν τὸν ὄπὸν etc. addens, *vulgo in hoc loco legitur καθ' ἣν τὸ νότιον φέεσθαι συμβέβηκεν, quod viros doctos valde exercuit. Sed, ut opinor, nemo nisi fungus de veritate emendationis nostrae dubitabit.* Ὅπως προῖπο silphio passim accipitur, ad Melae l. l. 8. 20. Equidem, tametsi fungus haberi nolim, non possum viro doctissimo penitus adsentiri. Coniectura sine dubio elegans est et speciosa. Fugit silphium terram cultam, τὴν ἐργαζομένην, ut apud Theophrastum VI. Hist. Pl. 3. legitur; sed provenire in locis, quae coeli solique vastitas urget, ea, quae de eo produntur a Theophrasto, Plinio XIX. 3. Arrian. Indic. c. ult., disertim indicantur: porro si australis haec Africae pars sit ἀκριβοῦς ἀκαρπος, πεδινὴ ἄπασα, οὐ χλόην, οὐ πῶαν, οὐ γυτὸν, οὐχ ἔδωρ ἔχουσα, ut Lucian. Dipsad. c. 1. sive, ut Noster οὐ μὲν οὔτε γυτὸν, οὔτ' ἄλλο τῶν δειραμένων φηγαγογήσαι τὴν ὄρουσιν, post pauca ait, quis tandem ea in regione silphio locus? Itaque τὸν ὄπὸν nondum recipio, nec νότιον, quod ut aliqua verborum esset sententia edi iussi, admodum probo. Habent sane Arabum medici *nitrum Africanum*, forte ἀγρονίτρον nomine in fraudem inducti, quae Cl. Salmas. sententia De Hyl. Iatr. c. 121.; apud alios quidem certe obscura eius laus et memoria. Mox ἀγορος ὄσα malle ex vestigiis Clarom. Codd.; Lucianus l. c. καὶ ξιρὰ καὶ ἀγορος ὄσα. Vid. infr. XVI. 84. et quae ibi H. Stephan. WESS.

218. 43. Ὅς προσαγορεύουσι κεράστας] Plinius Cerastas inter eas recenset serpentes, quae colorem eius terrae habent, in qua occultantur, L. VIII. 23. et Noster XX. 43.; a cornibus, quibus armatae atque unde illis nomen, Sexto Empir. l. Adv. Grammat. p. 263. κεράστας κερασφόρος, ubi Io. Alb. Fabric. imaginem eius, binis cornibus instructam, ex Biblioth. Vindobon. L. VI. p. 294. Lambecii repraesentat: nec deerant tamen, quibus quatuor cornua: Nicander Theriac. 260.

Ἄλλοτε μὲν πισύρεσσι, τότ' ἐν δοιοῖσι κεράστας. WESS.

218. 52. Τὴν ἐπέκεινα τῆς Σύρτης] Quae ultra Syrtes est. S. Lucas A. A. VII. 44. καὶ μετωικιῶ ἡμῶς ἐπέκεινα Βαβυλώως. Aelian. III. H. A. 35. ἐπέκεινα τῶν Κορυθαλιῶν δῆμον.

Hinc spe atque exspectatione maiora προσδοκίας πάσης ἐπέκεινα Liban. T. II. p. 923. B. et ἐλπίδος ἐπέκεινα Heliodor. IX. p. 417. WESS.

219. 60. Καὶ παλμώδεις] Ipse explicat post pauca, καὶ παλμῶς ποιοῦντες. Hippocrati I. Prorhet. p. 69. οἱ παλμώδεις δι' ὅλον, qui toto corpore palpitant. WESS.

219. 68. Ἀβληχρῶς καὶ ζωφῶς] Nihil interest priusne retineas an βληχρῶς, quomodo I. 27., malis. Posterius Codd. maior concordia requirit. Ἄνεμοι ζωφῶς sunt surdi, et debiles, cum, ut Theocritus eleganter Idyll. II. 36. σιγῆ μὲν πόντος, σιγῶντι δ' αἴται. Ita mutum mare in Milit. III. I. 70. Plauti, et χῆμα μέλαν, ζωφῶν τε καὶ ἄβρομον Apollon. Rhod. IV. 153. ex Homeri imitatione, cui et ζωφῶν χῆμα, ζωφῶν βέλως, de quibus Eustathius in Homer. p. 852. et Theon in Diosem. v. 190. Arati. Philo Iud. de Exsecrat. p. 932. E. ὡς μηδὲν ἀγεθῆναι τῶν βλημάτων ζωφῶν, ita ut nullum hostile telum inutile intercidat. WESS.

219. 70. Διὰ τὸ μήτε νάπας etc.] Sitne hoc usquequaque verum dubitari potest. Vid. Strabon. XVII. p. 1192. WESS.

219. 75. Καὶ συστάσεις εἰσπνοῶν] Reducendum e margine πνευμάτων. RHOD.

219. 78. Τυπομένων ἰδεῶν] Sequor scriptos Codd. Ἰδέαν quamvis figuram notare posse, notum est. Quod enim Thomas Magister animadvertit, ὡς οὐδεὶς τῶν δοκιμοτάτων ἰδέαν ἐπὶ ἀνθρώπων λέγει, ἀλλὰ εἶδος καὶ ὄψιν, id falsissimum esse Aristophan. Plut. v. 559. Demosthen. Legat. Falsat. p. 249. Isocrat. Laud. Helen. p. 318. Philostrat. Heroic. 10. p. 715. ostendunt: Diodorum enim ἰδέας ἀνθρώπων supr. I. 12. dicentem inter δοκιμοτάτους fortasse non transcribet. WESS.

219. 84. Βαρὸν ὄντα] Βαρόνοντα Co. vid. supr. II. 12. WESS.

219. 89. Τὰ μέντοι ζῶα — αἴτια τῆς μεταρσίας etc.] Simile quiddam in ignibus, quos fatuos sive errantes adpellare solent, usu venire novimus: ultro fugiunt, cum progredieris; sequuntur, ubi in contraria perrexeris; cuius motus non alia atque ea caussa est, quam auctor adfert, docente viro Clarissimo et collegii vinculo mihi iunctissimo P. Musschenbrock Physic. sect. 1687. WESS.

219. 90. Προσιόντων αὐτῶν pro προσιόντα αὐτὰ schema est Diodoro nostro frequentatum. Sic p. 490. 21. τῆς γενναϊκῆς κολυθείσης — ἔγγιμε, pro ἡ γυνὴ κολυθείσα, et ibi not. Wesselingi. Sic p. 261. 57. Προμηθεὺς παραδόντος pro Προμηθεὺς παραδόντα. T. II. p. 491. 82. 500. 44. 501. 30. 547. 92. 552. 1. 603. 95. REISK.

220. 1. Περιθρήβεισθαι] Lege περιθρίβεισθαι. RHOD. Credo verum pervidisse Rhodom. Posses alioqui περιθρήβεισθαι, sese frangere, aut περιθρύπτεισθαι. Sed neutrum quod quidem

recorder, usquam sese mihi obtulit. WESS. Similia ἐγκυβέσθαι I. 80. et ἀποκρύβουσι quorundam librorum III. 25., de quibus Lobeckius ad Phryn. p. 317., modo nihil horum librariis debeatur.

220. 7. Περὶ τὸν Θερωμόδοντα ] Vid. supr. II. 45. WESS.

220. 15. Περὶ τὸν Θερωμόδοντα ποταμὸν ἠζυακτιῶν ] Delevi γυρακτιῶν vocabulum, quod ex glossa post ποταμὸν ingestum erat. Quae sequuntur πρὸ τούτων τῶν χρόνων ante haec tempora ambigue verterat vir doctissimus: Troiana intelliguntur. WESS.

220. 24. Ἀκολούθως Διονυσίῳ τῷ συντεταγμένῳ etc.] Fuit domo Milesius, scripsitque ζήλον ἱστορικὸν Lib. VII. teste Suida et Schol. Apollon. Rhod. III. 20. In eo autem opere veterum fabulas diligentissime fuerat exsecutus, omniaque exposuerat, quae Bacchum, Amazonas, Argonautas, Troianum bellum et eius generis alia spectant, additis fabulorum et poetarum carminibus, docente Nostro infr. c. 65. porro Amazonum Afrarum regestas et victorias L. II. inseruerat. Schol. Apollon. II. 967. Διονύσιος δὲ ἐν δευτέρῳ κατὰ Λιβύην αὐτὰς ὀκνηζέειν φησὶ etc. WESS.

220. 29. Ἐφ' ᾧ λέγεται τὸν Περσέα στρατεῦσαι ] Notissima eius in Gorgonas expeditio, sed Homero et ignota et recentior. Hesych. Γοργώ. Τὰ περὶ τὴν Λανάην καὶ τὸν Περσέα καὶ τὰς Γοργόνας Ὅμηρος οὐκ οἶδε. Hesiodo originem debet fabula, quam insecuti poetae magis excultam dederant. Vid. Dissert. de periplo Hann. Dodwelli c. 3. WESS.

220. 40. Διαπονεῖν τὰ κατὰ τὸν πόλεμον ] Rhodom. διαπονεῖν non aliud hoc esse loco ac διακοπεῖν administrant ait in Indice; quod quidem ego non puto. Idem enim est atque exercere sese, et bellicis rebus studiose operam dare. Sic Philo Iud. de Joseph. p. 559. C. τοὺς ἀρετῆς ἀθλοὺς κατὰ πᾶσαν ἡλικίαν διαπονήσαντα, cum dicit, qui omni vita virtutis certaminibus sese exercuit: atque inde διαπονεῖν τοὺς παῖδας ἐν γυμνασίοις supr. I. 53., et διαλεπονημένοι exercitati XVI. 17. et saepe alias. WESS.

220. 47. Ὑπὸ τῶν συνοικουσῶν πραττομένοις ] Lege προσπραττομένοις seu ἐπιπραττομένοις. Rhod. Ὑπὸ τῶν συνοικουσῶν προσπραττομένοις ] Quod coniectura adsecutus erat Rhodom., id firmant scripti libri: natus error videtur ex scribendi compendio, quod e προσπραττομένοις infr. XIX. 92. extudit πραττομένοις. Contra vero τῶν προσπραττομένων ἐπιπραττὰς convertit ex πραγμάτων L. XVI. 41.: quod genus et in superioribus illustrare exemplis memini. WESS.

221. 49. Φρονιματισθέντες ἐπιδέσθαι ] Φρονιματισθῆναι dicuntur, qui maiores spiritus sumunt. Aristotel. II. Polit. 10. τῆς ναυαρχίας γὰρ ἐν τοῖς Αἰθιοπικοῖς ὁ δῆμος αἰτιος γενόμενος,

ἐφρονηματίσθη, i. e. *magnos spiritus habere coepit.* et VIII. 6. καὶ μετὰ τὰ Μηδικὰ φρονηματίσθέντες ἐκ τῶν ἔργων de iisdem Atheniensibus. Hinc πεφρονηματισμένοι L. VI. 7. eidem Philospho qui magnifice de se viribusque sentiunt, et Polybio II. 3. Nostroque IV. 24. XII. 67. XVI. 90., sive ἐπὶ φρονήματος γεγονότες ut Appian. in Excerpt. Ursin. p. 356. et L. I. Bel. Civil. p. 665. Porro ἐπιθήσασθαι Coisl. si malueris, satis quidem facies Thomae M. decreto in Μέλλω, sed fallaci, et Diodoro aliisque parum, ut Cl. L. Bos monuit, probato. WESS.

221. 54. Ἐπικαίεσθαι αὐτοῦ τοὺς μαστοὺς] Diximus hac de re L. II. 45. WESS.

221. 61. Ἐσπέραν προσαγορευθεῖσαν] Hesperidum insulas, Hesperios Aethiopas, promontorium, cui Ἐσπέρον κέρας nomen est, hac in vicinia Mela III. 9. 10. Plinius VI. 31. Ptolem. IV. 9. et Hesperios Libyas prope Atlantem Maxim. Tyr. Dissert. XXXVIII. p. 225. memorant: atque haec commenti occasio, quod quo commodius deprehendi posset, Tritonem flumen, et paludem, quam facit, ex finibus provinciae Tripolitanae levi opera in ultimam Mauritaniam propter Atlantem montem traduxere. De Tritone meliora Pausan. IX. 33. et Ptolem. IV. 3. WESS.

221. 66. Ὁ μέγιστον μὲν ὑπάρχειν τῶν etc.] Altissimum hunc montem multimodis describunt Herodot. IV. 184. Mela III. 10. Maxim. Tyr. Dissert. XXXVIII. p. 225. Proclus in Timaeum p. 56. Recte vero καὶ προπεπτοχὸς εἰς ὠκεανόν. Sollemne enim est in montibus et promonteriiis, quae in altum longissime procurunt, ut in Strab. II. p. 168. A. 186. C. 192. D. etc. WESS.

221. 78. Ὀνομαζομένης Μήνης] Meminit eius Nonnus Dionys. XIII. 369.

Τικτομένης ναύοντες ἐδέδλω γείτονα Μήνης,  
Καὶ Διὸς Ἀσβίστιο μεσημβριζόντας ἐναύλους  
Μαρτιπόλου κερόεντος. —

Vid. Bocharti Chan. I. 24. et Trilleri Observat. c. 5. WESS. in Add.

221. 82. Καὶ σαρδίον] *Sardeis* doctissimi Rhodom. non probo: verius *Sardios* aut *Sardas* dedisset. Vid. Cl. Salmas. in Solin. p. 128. WESS.

221. 90. Τοὺς Ἀτλαντίους] Videntur haec conformata ex Platonis Critia p. 115., similibusque Platoniorum de Atlantide insula incolisque fabellis apud Proclum in Tim. p. 55. WESS.

221. 94. Τοῖς παρ' Ἑλλησι μυθολόγοις] Hoc requirunt Codd. meliores, nec dissimile est II. 30. Aget de fabulis illis c. 56. WESS.

222. 97. Ζηλονμένης παρ' αὐταῖς περιττότερον] Atqui longe maior peditem est quam equitum numerus, quem in expeditionem duxit. Ergone scripserat πεζῶν μὲν διαχιλίων, ἰππέων δὲ τρισμυρίων; addita profecto ratio eiusmodi quid postulat. WESS.

222. 6. Τὴν Κέρην καλουμένην κατοικοῦντας] Verum hoc insulae nomen. Polybius in extrema Mauritania contra montem Atlantem a terra stadia VIII abesse prodidit Cernen, auctore Plinio VI. 31. Habet eandem Dionys. Perieges. v. 218. ubi Eustath. ταύτην δὲ τὴν Κέρην, inquit, οἱ μὲν νῆσον φασιν ἐν τῷ ὠκεανῷ, οἱ δὲ τοῦτο οὐ δέχονται, insuper addens, de situ eius parum inter sese veteres consentire: quod profecto haud mirandum, cum fabulosa pleraque omnia sint, quae de ea in literas fuere relata, ut Strabo I. p. 82. iam olim animadvertit, et pluribus exsequuntur Is. Voss. in Melae II. 7. et H. Dodwell. Diss. de Peripl. Hannon. c. 6. 7., quamquam in plerisque discordes. WESS. Κέρην ad sui libri marginem correxit etiam Is. Vossius. IDEM in Add. 222. 8. Τῷ γόβῳ] Co. Cl. 2. optime. Vid. inf. c. 59. XII. 76. XIII. 14. WESS.

222. 10. Καὶ τοὺς μὲν ἄνδρας ἰβηδὸν ἀποσφάζει] Omnes puberes. Appian. Bell. Hisp. p. 479. Lucullus ἐπεσήμεινε χτείνειν Καρθαίους ἄπαντας ἰβηδὸν. et Hannibal. p. 454. τὴν Ζαζανθαίων πόλιν ἰβηδὸν διέφθειρε. quo modo saepissime Noster. Vid. XII. 72. 76. 80. XIII. 30.; aut τοὺς ἰβηδῶντας ἀποσφάζει ut XIII. 104. Conf. Lamb. Bos Animadv. c. 6. Quae vero de Cercenaeis post pauca Rhodom., ea ἀόρητα ἀμείνω. WESS.

222. 12. Τῆς δὲ περὶ τοὺς Κερναίους etc.] Pro Κερναίους legendum Κερκηναίους. RHOD.

222. 17. Πόλιν — ὁμώνυμον ἑαυτῆς χτίσαι] Hanc Myrinam unus, quod quidem reseire potui, Agathias Scholasticus Praefat. I. I. p. 5. obiter memorat; de patria enim sua, Μύρινα δὲ, inquit, οὐ τὸ Θούριον πόλισμα, οὐδὲ εἴ τις ἕτερα κατὰ τὴν Εὐρώπην τιχὸν ἢ Αἰθίην τῶδε κέκληται τῷ ὀνόματι. et fortasse ex hoc Diodori loco; legit enim hos libros diligenter. WESS.

222. 25. Γοργόνων, οὐσῶν πλησιοχώρων] Gorgades insulae, Gorgonum quondam domus dicuntur Plinio VI. 31. Alii Cernen ipsis incolendam dedere, quos iuter fuisse videtur Palaephatus Incredib. Histor. c. 32. Φόρξην ἢ ἀνὴρ Κερνηαῖος· οἱ δὲ Κερνηαῖοι κατὰ γένος μὲν εἰσιν Αἰθίοπες. οἰχοῦσι δὲ νῆσον τὴν Κυρήνην ἕξω οὐσαν τῶν Ἡρακλείων στηλῶν. Sic quidem nunc legitur; quod tametsi tueri conatur H. Dodwell. Diss. de Peripl. Hann. c. 6. nunquam tamen tenebit, Cyrenen a Palaephato insulam, eamque ultra Herculis columnas, fuisse habitam: Cyrene enim Graecorum colonis frequentata, nemini non per Graeciam erat cognita, nec potuit adeo in sedem, longissimè dissociatam, transferri, nedum eius incolae ex Aethiopico genere arcessi: taceo κατὰ Καρχηδόνα insulam hanc Gorgonum a Palaephato collocari, quod ipsum de Cerne in Plinii VI. 31. Corn. Nepos adfirmat, ex adverso maxime, inquit, Carthaginiis. Itaque Phoreyn Κερνηαῖος, οἱ δὲ Κερνηαῖοι et νῆσον τὴν Κέρην in Palaephato fuisse suspicor. Mox ἐγ ἀμίλλον ἔθις gens est in contentione par atque



aemula, uti L. XV. 71. XVI. 86. Gorgonum autem populus non modo Atlantidas equiparabat, sed insidiis adpetebat; quod egregie exprimit Co. et M. ἐγεδρον· adhiberi enim saepe solet, sicuti et ἐγεδροῦν de insidiis Plut. T. II. p. 87. B. ἐγεδροῦν σου τοῖς πράγμασιν ἐρηγησῶς ὁ ἐχθρὸς ἀεί. unde ἐγεδρος τῆς βασιλείας, qui illi insidiatur inf. IV. 51. et quae And. Doumaeus Praelect. in Demosthen. p. 132. Quare suum illi locum reddidi. WESS.

223. 41. Ἀνταῖς περιχεθέντος] Ἀντὰς Co. M. male. Vid. XX. 53. 87. WESS.

223. 42. Θάψασαν — ἐν τρισὶ προαῖς] *Sepulturae ignium*, uti Minutius Felix aiebat, tradidit. Θάπτειν combustionem corporis commodissime indicat. Appian. Hannib. p. 577. Hannibal, inquit Graecum ἔθαψεν, καὶ τὰ ὅστι Ῥωμαίοις ἐπέμψεν ρογο ἰνpositum combussit et reliquias Romanis misit. Philostrat. Heroic. XI. p. 721. ὡς οὐχ ὅσοι προὶ θάπτεσθαι, οἱ ἑαυτοὺς ἀποζεύσαντες, nefas esse eos igni, qui sibi manus intulissent, sepelire. Quod posterius fuisse putarem in Epigram. CLXXII. Greg. Nazianz. in Anecd. Muratorii p. 158.

Αἰσσομαι, ἦν γε θάνω, ποταμῷ δέμας, ἢ ἐκόνεσσιν

Ῥίψατε, ἢ ἐπὶ θάψατε παντοφύργω.

non, uti editum, δάψατε, nisi poëtam videretur imitatus Iliad. ψ, 182.

— — — Ἐκτορα δ' οὔτι

Δώσω Πριουμίδην προὶ δάπτεμεν, ἀλλὰ κόνεσσιν.

Plura hoc de genere collegit Gisb. Cuper. I. Obser. 7. WESS.

223. 46. Ὑπὸ Περσέως τοῦ Διὸς] Fabulam fuse exponunt Critici in Apollon. Rhod. IV. 1515., et Lucianus D. Marin. XIV. Ovid. Metamorph. IV. 771. WESS.

223. 51. Ἔθετο τὴν ἐπὶ τῆς Αἰβόης στήλην] Vid. L. IV. 18. WESS.

223. 64. Ἐλευθεροζήλιζος καλεῖσθαι] Homines erant feri atque acres, qui ne regibus quidem unquam paruerunt, ut Cicero XV. Ep. 4. et V. Attic. Ep. 20. docet: atque haec caussa nominis. Sedes prope Amanum montem, urbemque praecipuam habebant Pindenissum. WESS.

223. 67. Διὰ Φρυγίας τῆς μεγάλης ἐπὶ θάλατταν] Descendit e Tauro ad mare Aegaeum Myrina, quorsum commodissimum per Phrygiam maiorem iter est. Mare magnum θάλατταν μεγάλην, Oceanum vocant. Cicero Somn. Scip. c. 6. terra parva quaedam insula est, circumfusa illo mari, quod Atlanticum, quod magnum, quod Oceanum appellatis. Sæphen. in Ὠκεανός. προσαναγορεύονται ἐκεῖνον — οἱ τὴν Ἀσίαν οἰζονῶντες μεγάλην θάλατταν. Videor itaque haud iniuria restituisse, quod scripti libri dabant. Porro παραθαλάττιον χώρον si brevi post malueris, non admodum refragabor: nec gravis tamen mutandi caussa est. Vide Cl. Duker. in Thucyd. III. 91. WESS.

223. 68. Τῆρ ἐπιθαλάττιον] Melius παραθαλάττιον. Rihōd.

223. 73. Κέρμυρ] Hanc et Aeolidis Myrinam Amazonibus nomen atque originem debuisse, vulgi fama erat, ut Strabo XI. p. 771. A. XII. p. 827. B. et Stephanus atque alii in Dissert. P. Petiti de Amazon. c. 33. ostendunt. De Pitane et Priene non eadem omnibus opinio: nam quod *Ninam* urbibus, quae Amazones auctores habuerunt, idem Petitus c. 35. annumerat, ea in re deceptus est a Poggii versione. WESS.

223. 78. Ομιώνυμον τῆ — ἀδεληγῆ] His vehementer pugnare Abr. Berkelius ea censet ad Steph. Μυτιλήνη, quae inf. L. V. 82. de Mitylene Macarei filia, unde urbi nomen venerit, perscripta leguntur: et sunt profecto contraria: nec opus tamen ut ea inter se conciliemus aut interpretatione leniamus. Diodorus enim non quid ipse arbitretur, sed ab aliis in literas relatum animadverterit, his libris inseruit: quae caussa, cur de urbium originibus, Deorumque natalibus saepe contraria et pugnantia complectantur. Perinde autem erit, sive Μιτυλήνην an Μυτιλήνην probaveris: utrumque veteribus in usu fuit, quamquam hoc numi malunt. Vid. Is. Voss. in Melae L. II. 7. WESS.

224. 87. Τὸ προτοῦ] Τὸ τοῦ προτοῦ Vat. prave. Vid. I. 63. WESS.

*Ibid.* Ὑπὸ τῶν κατοικούντων ἐν αὐτῇ ποτὲ Θρακῶν] Haec verior nominis caussa, quam et L. V. 47. praeter alias adfert. Strabo VIII. p. 532. C. et X. p. 702. A. vetustissimos Graecorum σάμους appellasse τὰ ὕψη, loca celsiora, atque hinc insulae venisse nomen *Sami* prodit: haud quidem id male: si scisset tamen *Samin* et *Same* in Persica et aliis veteris Scythici sermonis dialectis non aliud esse ac terram, haud dubie assensus fuisset Th. Sigef. Bayero, adfirmanti insulam, quod Thracum esset sedes et terra, ita dictam videri in Memor. Scythic. T. III. Comment. Petro-Polit. p. 369. WESS.

224. 92. Τοὺς ὀνομαζομένους Κορύβαντας] Non alii videntur fuisse ac Magni Dii, μεγάλοι θεοί, Cabiri, Dioscuri. Orpheus Hymn. XXXVII. in Curetas

Κοροῆτες, Κορύβαντες, ἀνάκτορες, εὐδύνατοί τε  
Ἐν Σαμοθράκη ἄνακτες, ὁμοῦ Ζητὸς κόροι αὐτοί.  
Πνοιαὶ ἀέναοι, ψυχοτρόφοι, ἀεροειδείς,  
Ὅτιτε καὶ οὐράνιοι Δίδυμοι κλήζεσθ' ἐν Ὀλύμπῳ.

quam tamen natalium et dignitatis gloriam labentibus annis interverterunt, sibi que vulgi superstitione sumpserunt Tyndaridae fratres, sicuti egregie docuit T. Hemsterh. in Lucian. D. D. XXVI. Iam quod additur, inter ipsa mysteria initiatis ἐν ἀποθόγῳ tradi, quo Corybantes patre sint procreati, id secus atque oportuerat, accepit Thom. Galaeus ad Apollodori I. 3. 4. Vid. et infr. L. V. 49. WESS.

224. 98. Μετὰ στρατιῶς τῆς συνεισπεσοῦσας] Praestat συνεισπεσοῦσας, qui pariter cum Mopso e Thracia armis Lycurgi fuerant eieci, eiusque regionis possessione exciderant. De Mopso autem hoc ac *Sipylo* res obscura est: alios dabit Strabo extremo Lib. IX. WESS.

224. 20. Ἐν οἷς παρεισάγει τὴν Ἥραν λέγουσαν] Iliad. Ξ, 200. : quae quidem versus Aegyptii L. I. 12. usurpabant, ut sua in regione ad Nilum flumen Deorum natales constituerent: philosophi vero, ne poeta ignorasse videretur, aequam esse rerum omnium primordium, τῶν ὄλων κοσμογόνον στοιχείον, ut ait Heraclides Allegor. Homer. p. 439. Adeo quisque pro instituto suo poetam in partes vocabat. WESS.

224. 27. Καὶ παραθέσας] Citra flagitium negligi haudquam id potest. Caltissime Antipater in Stobaei Serm. LXV. p. 417. αἱ μὲν ἄλλαι φίλαι — εὐτάσσι ταῖς τῶν ὀσπρίων — κατὰ τὰς παραθέσας μῖξαι. αἱ δὲ ἀνδρῶς καὶ γυναικῶς. ταῖς δὲ ὄλων κράσσαι. ubi genus hoc non intellexit interpres. Vide II. 38. WESS.

225. 41. Μεταγαγεῖν δ' αὐτοῦ τὴν προσηγορίαν] Sic scripserat: non enim ipse *Uranus* coelo suum nomen, sed post eius mortem homines, de quibus bene fuerat meritis, indiderant. *Κόσμος* pro Coelo inf. c. 61. Philo Iud. De mundo non Currump. p. 939. B. λέγεται τοίνυν ὁ κόσμος — μόνος ὄρατός. εἰς ὃν ἀλειδὼν Ἀναξαγόρας πρὸς τὸν περὶ ταύτην, — ἀισχροῦτα, τοῦ τὸν κόσμον θεῶσασθαι. Ita *mundus* pro coelo Virgil. I. Georg. 5.

— — Vos, o clarissima mundi

*Lumina, labentem coelo quae ducitis annuunt!*

ubi vide Taubman. Αἰτοῦ, quod Mss. auctoritate scriptori asseruimus, Rhodomanno verius quoque visum fuisse, ea, quae Naevis suis deinceps adstruxit, adfirmant. WESS.

225. 46. Ὀρέουτ' δὲ μεθολογοῦσι γένοιθαι] De Atlantidarum religione et republica longe alia Plato in Critia p. 113. Haec autem Eusebius maximam partem excerpit L. I. Praep. Evang. 2. p. 57. WESS.

225. 48. Ἐξ Τιτάλας] Vid. infra V. 66. WESS.

225. 55. Τὴν τε καλομένην Βασιλίαν] Aristophanes σωματικῶς τὴν Βασιλίαν ὡς γυναῖκα in Avib. v. 1535. sed ridiculi caussa: notant tamen Critici ex Euphronio Iovis filiam fuisse *Βασιλίαν*, ut adeo in fabulis, nam et Cratinus eius commemorat, olim haud obscura fuerit. WESS.

225. 56. Ἐπὶ ἐπίων Ἡερδῶραν μετονομασθεῖσαν] Explicat Philo Iud. De Mund. non Currump. p. 944. D. πᾶς ἔμοι δοκεῖται οὐκ ἀπὸ σχολῆς ποιηταὶ Ἡερδῶραν ἀπὲν ἰουμένην, πᾶντα δασημένην. quibus gemina commentatur Lib. De Mund. Orif. p. 30. D. Hesych. Ἡερδῶρα, ἢ γῆ, ὅτι, τὰ πρὸς τὸ ζῆν

πάντα δορεῖται, ἀγ' οὐ καὶ ζείδωρος καὶ Ἰνγσιδώρα. ubi nolle ultimae voci vim fecisset eruditissimus Gronov.: optimi enim coloris est, ut praeter Schol. in Comici Aves v. 972., unde haec Hesychius depromsit, Pausan. l. 30. p. 77. et Alciphron l. I. Epist. 3., cum eleganti Steph. Bergleri nota, docent. WESS.

225. 63. *Λαδὲξασθαι τὴν βασιλείαν*] Visum hoc est commodius et cultius. *Basileam* successisse non erat, cur adderetur: tenor orationis id pro se loquitur. Genus loquendi probat Diodor. II. 33. 34. et infr. c. 61. saepeque alias. WESS.

226. 74. *Ἐἰς τὸν Ἠριδανὸν ποταμὸν*] Ergo et Eridanus in Atlantidarum finibus? An voluit imperium eorum usque in Europam atque Etruriam fuisse propagatum, ut Plato in Timaeo p. 25. A.? De fluvio uberius inf. V. 23. WESS.

226. 78. *Σύγκοπον γενέσθαι*] Viribus defectam corruisse: est enim *συνκοπή κατάπτωσις ὀξεία τῆς δυνάμεως* *praeceps virium omnium collapsus*, explicante Galeno XII. Method. Medic. p. 167., adeoque amplius et gravius est *τῷ λεπιδυμῆσαι*. WESS.

226. 85. *Σελήνην δὲ τὴν μήνην*] Vetus *Lunae* nomen in Graecia erat *μήνη*, quod ex Phoenicium *𐤍𐤍* formatum, Deam *Lunam*, uti *Μῆν Λυμμ* significabat, docente, et Diodori haud oblito, Camp. Virringa in Esai. LXV. 11. p. 903. WESS.

226. 86. *Λιγεροθ. δὲ, τοῖς ὄχλοις τὸν τε ὄνειρον*] Addidi binas voces, quas et oratio et insignis Codd. concordia negligi vetabant. Solebant autem ea, quae per quietem viderant, expergefacti, si dira essent soli narrare, si laeta aliis. Vid. Sophocl. Elect. 425. Aristoph. Ran. 1379. et utrobique Criticos veteres. WESS.

226. 92. *Τῷ δὲ διὰ τῶν τυμπ. — ψόφῳ ἐνθεάζουσαν*] Proprium hoc magnae matri eiusque cultoribus. Lucian. Alexand. c. 13. *σεῶν ἅμα τὴν κόμην ἴσμετον, ὥσπερ οἱ τῆ μητρὶ ἀγέροιτες καὶ ἐνθεάζοντες*. Lymphati enim discurrebant, ut Medea *ἐνθεάζουσα* inf. IV. 52. eamque ad rem haud parum conferre tympanorum et cymbalorum circumstrepentes soni putabantur. Philostrat. Epist. XIV. *οἱ τελοόμενοι τῆ Ῥέα μαίονται, πληθέντες τὰ ἄστα κτύποις ὀργάνων*. quibus non multum dissimilia Dionysius T. II. p. 177. Alioqui vatibus, Deo plenis, et futura canentibus tribuitur, sicuti IV. 69. ubi fortasse plura. Paullo autem ante *λελυμένην τὰς τράχας* si volueris ex Eusebio, auxilio esse poterunt Codd. vetusti, id c. 59. probantes. WESS.

226. 3. *Καὶ ταῖς διὰ τῶν τυμπ. — ἀποιμιμονμένους*] Explicabunt haec, ex optimis Vindobon. schedis, ne claudicare pergerent, correcta, praestantes Diogenis Tragici versus in Athen. IV. p. 636. A. et Apollon. Rhod. I. 1139. WESS.

226. 8. *Βασίλεια Φρυγίας καὶ Ἀρδίας Μήνοια*] Eustath. in Homer. p. 368. *Μήνοιας λέγαντι ἀπὸ τινος Μήνοιας ἢ Μαινώως, τραπέζους μὲν τοῦ ἄ εἰς η, τοῦ δὲ ἰ μέσσιος ἀνεκρησθήτον*.

quí quidem Macon regioni rex imperavit. Claudian. II. in Eutrop. 244.

— — — *Sed quid non longa valebit  
Permutare dies? dicti post Maeona regem  
Maeones.*

*Dindyme*, quam tori consortem adscivit, a monte Dindymo prope Cyzicum, in quo matris Dindymenes fanum, nomen accepit, nisi si contra evenisse velint, quod paene suspicor. Vid. Schol. Apollon. Rhod. I. 985. WESS.

226. 10. Τὸ προσσηγορευόμενον Κύβελον] Plerisque mons τὰ Κύβηλα. Strabo XII. p. 852. A. ἀπὸ τῶν Κυβέλων ἢ Κυβέλης. Hesychius: Κύβηλα, ὄρη Φρυγίας. quibus gemina Schol. Comici in Aves τ. 877. *Cybelum* Virg. Aen. III. 110.

*Hinc mater cultrix Cybeli, Corybantiaque aera  
Idueumque nemus.*

ubi Servius, *cultrix*, inquit, *Cybeli, id est, montis Phrygiae, in quo colitur, a quo Cybele dicta.* WESS.

227. 19. Πολυκάλαμον σύριγγα πρότην ἐπινοῆσαι] Alii Panos inventum esse aiunt. Virgil. Ecl. II. 32.

*Pan primus calamus cera coniungere plures  
Instituit.*

Describitur autem multo elegantissime ab Achille Tatio IV. p. 475. et Tibullo II. 5. 31.

*Fistula, cui semper decrescit arundinis ordo;  
Nam calamus cera iungitur usque minor.*

ubi vide Ian. Broekhus. Porro quae sequuntur de remediis morborum, quae Cybele invenerit, ea haud iniuria *medicam λατρὸν* adpellari Diogeni Tragico in Athen. XIV. 9. p. 636. A. ostendunt. WESS.

227. 26. Ὁρειῶν μητέρα] Hunc eius titulum declarat Cornut. De nat. Deor. c. 6. et Ger. Io. Voss. II. Idolol. c. 54. WESS.

227. 31. Ἡεττερυγαῖν ἐπὶ τοὺς αἰλοὺς τὴν ἄλλην ἀγορίαν] Non deerant, qui Marsyae auctori *σύριγγα καὶ αἰλοὺς*, quin et *σύριγγα πολυκάλαμον* tribuerent, ut Metrodorus et Euphorion in Athen. V. p. 184. A. cum animadversione Salmas. ad Solin. p. 584. crebrior tamen fama vigeat, Hyagnidem, Marsyae, ut ferebant, patrem, primum tibias invenisse, artemque illis canendi alios docuisse, apud Plut. de Music. p. 1133. E. et in Marmore Pario Epoch. 10. Marsyae vero dabant τὸ μητροῦρον ἀνέλιμα, sive eos tibiarum modos, quorum usus erat in sacris magnae Matris, teste Pausan. X. p. 873. Sed haec, ut in rebus antiquissimis, non omnia expedita, sed et scribentium diversis opinionibus paene pugnantia reperias. Vid. Ezech. Spanh. ad Callim. Hym. Dian. 245. et T. Hemsterh. in Lucian. D. D. XII. 1. WESS.

227. 34. Ἠλιζίας Vind. Co. quod malo. Vide sup. II. 5. WESS.

227. 36. Ὑστερον δὲ κληθέντα Πάπαν] Erat cum non spernendum arbitraret Coisl. Πάπα. cuius in Rheae sacris non exigua olim dignitas. Πάρεδρος γὰρ ὁ Πάν τῆ Ῥέα, ut Critici notant ad Pindari Od. III. Pythiomic, quia ipsi Pindaro, sicut iidem monent, *Ματρὸς μεγάλης ἀμυθῶς, magnae matris sectator*: quae forte caussa, cur eundem *μεγάλης θεοῦ κέρας πικροδαιὸν* alio in carmine dixerit apud Aristotel. Rhetor. II. 24. p. 111. Nunc nihil muto. Πάπας Bithynorum sermone Iovem atque Attin indicabat. Eustath. in Hom. p. 565. ἐγκαθῆθα δὲ χοίριον καὶ τὸ τοῦ Ἀζόρινοῦ εὐλάριος ἐν Βιθυνιακῆς, ὅτι ἀμυθῶς ὡς τὸ ἄζρα τῶν ὀσῶν Βιθυνοὶ ἐκάλεον II III IN τὸν Ἰού, καὶ Ἄτιν τὸν ὀσῶν ἑμοίως καὶ Ἡροδότου τὸ, καλεῖται Ζεὺς ἐπὶ Σκεθῶν ἀρδάματα Παιαῖος. Ἐξ ὅν συνάγεται θεῖον εἶναι τινὰ λέγειν τὸ ΠΑΠΑΣ καὶ πάππος καὶ τὰ τοιαῦτα. Bene. Herodoti locus, quem signat, legitur L. IV. 59. WESS.

227. 41. Καὶ τὸν Ἄτιν ἀκρόντος] Multo aliter de fati Attidis Imp. Julian. Orat. V. p. 165., aliter Nicandri Schol. Alexiph. v. 8., qui Adonidis fabulam cum huius exitu permiscet: quod non est mirandum, quando Deum matrem et Venus, Attidis et Adonidis sacra per Phrygiam et Lydiam saepe pro iisdem habebantur, docente Proclo Diadocho in Ptolem. Tetrab. p. 79. WESS.

227. 45. Ταύτην ὀλολόζουσαν] Ob Attin interemptum: ὀλολόζουσα ἐπὶ τῷ Ἄτιν, quo modo Lucian. Dial. D. XII. 1., cui iunge Clement. Alex. Protrept. p. 20. et Strabon. X. p. 720. WESS.

227. 52. Ἦν Ἐρμῆν ἐδραῖν] Vid. L. I. 16. WESS.

227. 55. Καὶ τῶν Νυσαίων] Est ex Stephani Νυσαεὺς, quod in antiquorum numis et Diodoro frequens; nec reiectaneum tamen prorsus Νυσαίων, de quo ad L. I. 27. Musae autem iudices sedent in hac lite apud Lucian. D. D. XVI. 2. et Liban., quos antestatus est Cl. P. Burman. in Ovidii VI. Met. v. 400. WESS.

227. 56. Πρῶτον κίθαρισαι ψιλήν] Est ψιλή κίθαρισις, cum solo nudoque citharae cantu psallitur; quod genus musicae qui exercent, illi ψιλοὶ κίθαρισταὶ Athenaeo XIV. 9. p. 637. F. *Psilocitharistae* in Domit. c. 4. Sueton., ubi Casaub. hunc Diodori locum haud praeteriit. Apollo sola itaque cithara primum insonuit, post dein vocem congruentem illi adiunxit, ut solent citharoedi. Vid. Plat. Ion. p. 533. B. WESS.

228. 68. Δύο τέχναι ἅμα πρὸς μίαν συγχωρέσθαι] Nempe tibiaram certamen cum arte gemina vocis et fidium: nec adeo tamen iudicium iniquitas Marsyae, quam Apollinis, cum capistro os et buccas substringentem praese contemnentis, ira nocuit. Ὀμῖαι, Plutarch. ait VII. Sympos. p. 713. D., καὶ τὸν Μαρσάαν ἐκεῖνον ὑπὸ τοῦ θεοῦ κολασθῆναι, ὅτι φροβεία καὶ αἰλοῖς ἐπιστομίσις ἑαυτὸν ἐπέλιψε ψιλῶ μῆκει διαγωνίζεσθαι πρὸς ᾧδῆν καὶ κίθαραν. quo de loco plura Cl. Salmas. ad Solin. p. 585. WESS.

228. 72. Ἐξουσίαν ταύτην — δίδουσαι τῆς χρήσεως] Nisi erro, scripsit τῆς χρήσεως. mentio χρήσεως, cum agatur de usu oris in fidium tibiaeque cantu, non est opportuna admodum. Porro τὴν ἰδίαν τέχνην paullo post praecoptari, sententia orationis adstipulante. WESS.

228. 78. Ἐξδεῖραι ζῶντα τὸν ἡπτηθέντα] Vide Cel. I. Perizon. in Aelian. XIII. V. II. 21. et L. Beger. Thes. Brandenb. T. III. p. 196. WESS.

228. 79. Βαρέως ἐπὶ τοῖς — ἐνέγκοντα] Huic simile est XIV. 61. τῶν δὲ Σικελιωτῶν οἱ πλείστοι χαλεπῶς γέροντες ἐπὶ τοῖς μὴ βοῦλεσθαι. et c. 99. Ἀσπενδῖι χαλεπῶς ἐνεγκόντες ἐπὶ τοῖς ἀδελφίμασι. Isaacus princ. Orat. de Ciron. Heredit. ἐπὶ τοῖς τοιοῦτοις ἀνάγκη ἐστὶ χαλεπῶς γέρον. Contra Demosthen. in Theoria. p. 723. Ἴνα μὴ δοκῆτε αὐτὸν πρόως ἐπὶ τοῖς γηρομένοις γέρον. et in Timocrat. p. 474. Posses et neglecta praepositione, ut Xenophon. III. Hellen. p. 388. Lysander βαρέως γέρον τῆ ἀμυγῆ et L. V. p. 429. ; quod genus cum Ioseph. amplectatur XVII. A. I. 10. 3. et XVIII. 7. 10., mihi quidem dubium non est, quin scripserit, uti Codd. scripti edunt, ἢ δεινῶς γέρονσα τοῦ ρεανίσου τῶ ψηφίσματι τοῦ θανεῖν L. XVIII. A. I. 3. 4. WESS.

228. 80. Ἐζοῆσαι τὰς χορδὰς] Confer inf. L. V. 75. WESS.

228. 82. Μούσας ἀνεροεῖν τὴν μέσην] De his Musicae intervallis copiose Aristoxenus II. Harmon. p. 19. Cl. Ptolemaeus II. Harmon. c. 10. et Philosophus Probl. XIX. 3. etc. WESS.

228. 83. Θάμνην] Θάμνην C. M. Pogg. Vid. infr. c. 67. WESS.

228. 93. Πρὸς ᾧ θῆρησονται] Veris initio, cum sol aequinoctialem circulum ingreditur, teste Scalp. Nicandri Al. 11. v. 8. et praeter ceteros Iuliano Orat. V. p. 188. C. WESS.

228. 96. Τὸ παλαιὸν βοιωτὸς ἰδουσαμένης] Haec mihi sana non videntur: sermo est de Phrygiis, qui olim aras Cybelae staterint, dein templum illi pessumate erexerint: quare rectius Euseb. βοιωτὸς ἰδουσαμένης. Ἐν Ἡεραῶντι Iamblic et Eclog. 2. Lib. XXXVI., sed Ἡεραῶντι aut Ἡεραῶντι, ut Pogg. legisse videtur, praestat. Vid. ad Hierocl. Synecd. p. 697. et Tzetz. in Lycophron. v. 355. WESS.

228. 1. Μίδου τοῦ βασιλέως] Rectius Μίδου. Inter antiquos enim Phrygiae reges nobilissimus est Midas, tot praestantiss. auctorum monumentis celebratus: γλαυκώτατος eius exapportat Ovid. L. XI. Metamorph. Memorabile est ad eum Sileri responsum apud Plutarch. in Consol. ad Apoll. p. 115. D. Vide proverbium, Μιδάσιν ασίνι Μίδα habet, item, Μίδα locupletior. Rhod. Μίδου τοῦ βασιλέως] Ita Poggius legit, ratam certamque faciens Rhodom. coniecturam. Midas Deum Matris mysteria multitudini, ut religionis huius fraude sibi obstrictam et obedientem haberet, studiosissime tradidit, docente Clemente Alex. Protrept. p. 12. Iustinus

XI. 7. *Post hunc, Gordium, filius Mida regnavit, qui ab Orpheo sacrorum sollemnibus initiatus Phrygiam religionibus implevit, quibus tutior omni vita, quam armis fuit.* Plura de callidissimi hominis artibus Simson. Chron. A. M. 3308. et Iac. Perizon. in Aelian. III. V. H. 18. WESS.

229. 12. *Καὶ τὸν σφαιρικὸν λόγον — ἔξευεργεῖν*] Hercules, ab Atlante edoctus, cum Graecis τὸν σφαιρικὸν λόγον primus communicavit, infr. L. IV. 27., fueruntque adeo uterque rei astrologicae diligentissime intenti, ut praeter Is. Tzetz. in Lycophron. v. 879. Herodorus docet in Clement. Alex. I. Strom. p. 360. Et quamquam haud multum a fabulis absunt, quae de sphaera Atlantii memorabant, agnoscende H. Dodwello Dissert. III. Cycl. c. 1., quaeri haud sine caussa potest, haecine sphaerae fabricam, an sphaericam coeli rationem et formam, cuius Atlas inventor fuerit, potissimum spectant? Posterius ut pro vero censeatur, vehementer Cl. Salmas. in Solin. p. 578. urget. Mihi prius placet: namque et Plinius II. N. H. 8. Atlantii auctori sphaeram tribuit, et Diodorus, non hoc tantum loco, sed et infr. IV. 27. τὴν τῶν ἄστρον σφαιρᾶν eum accuratissime confectam possessisse perhibet. WESS.

229. 19. *Ἐσπερον*] De eo Is. Tzetzes in Lycophron. v. 879. Noster autem infra IV. 27. Hesperum, non filium Atlantis, sed fratrem, ut fabulae saepe sibi sunt contrariae, facit. WESS.

229. 29. *Ἀστεροπήν*] Arato *Στεροπή* dicitur Phaenom. v. 263. Nonno Dionys. III. 330., qui *Meropen* prave *Μερόην* vocat, Apollodoro III. Bibl. c. 10. 1. Facit cum Diodoro poeta in Schol. Pindar. Nemeon. Od. II. et Hygin. Fab. LXXXIV. cum Munckeri nota, estque idem nomen: nam *Στεροπή καὶ Ἀστραπή καὶ Ἀστεροπή ταὐτό ἐστι*, ut bene Diaecenus in Aspidem Hesiodi. WESS.

229. 30. *Ἐγγεστάτοις ἦρσαν καὶ θεοῖς*] Illustrat haec Ovidius IV. Fast. 171., Schol. Germanici Arat. v. 243., quemque is exseripsit, Eratosthen. Cataster. 23. WESS.

229. 43. *Ἐλίθησαν δὲ Ἀτλαντίδες καὶ Νύμφαι*] Articulum, qui fraudi fuit Rhodom., vertenti, *Atlantidum nomen etiam Nymphis attributum fuit*, hinc sustuli. Contra enim evenit: Nympharum nomen, quod commune id feminarum ea in gente nomen esset, Atlantides inpetrarunt. WESS.

230. 53. *Ἄξυ παίδας γενῆσαι*] De Curetum origine, numero, gestisque rebus dubia et incerta omnia: quos decem hoc loco et Iovis filios, eos novem atque aut Idaeorum Dactylorum posteros aut terrigenas perhiberi ait L. V. 65. Ennius quodam modo suffragatur Diodoro, cum apud Lactantium I. Instit. II. *Iupiter, inquit, aetate pessum acta, in Creta vitam commutavit, et ad Deos abiit, cumque Curetes filii sui curaverant, decoraveruntque eum, et sepulcrum eius est in oppido Gnoso — inque sepulcro eius est inscriptum antiquis literis Graecis ΖΑΝ ΚΡΟΝΟΥ, i. e. Latine, Iupiter Saturni F.* Adde Ciceron. III. N. D. 21. WESS.



230. 54. Προσαγορεύσαι καὶ τὴν νῆσον — Ἰθάκην] Hoc Cretae nomen non praeteriit Stephan. in Κρήτη, neque Io. Meurs. I. Cret. 3. Vid. mox c. 71. Cretensium vero fabulas de Iove exsequitur infr. L. V. 70. WESS.

230. 63. Κατέχειν τὰς ἀκροπόλεις] Διακατέχειν etiam infra usurpat. RHOD. Διακατέχειν St. m. C. M. Cl. V. bene. Vid. infr. XV. 82. WESS.

230. 66. Κρόνια προσαγορεύεσθαι] Huiusmodi in Elide Κρόνιον inf. XV. 77. et in Sicilia Cronium eiusdem libri c. 16. et Ἀρόνιος ὄχθος Dionys. Halicarnas. L. I. A. R. p. 27. in Italia. WESS.

230. 74. Τοῦ Κρόνον μετὰ τῶν Τιτάνων] Paulo diversiore modo infra c. 72. WESS.

230. 81. Ἐβρεγείσθαι δὲ τῶν ὄχλων] Eusebii τῶν ἀγαθῶν blandiri posset, si vestigia Diodori diligentius legisset. Credo eius esse interpretamentum, multa, dum haec excerptit, mutantis et negligentis. Vide infra c. 72. WESS.

230. 82. Ζῆνα, διὰ τὸ — τοῦ καλῶς ζῆν] Eustath. vide in Homer. 436. et Cornutum de Nat. Deor. c. 2. et Recognit. S. Clement. L. X. 33. WESS.

230. 86. Εἰς τὸν αἰῶνα] Cur hoc mutarent, caussae nihil erat: sic cap. 56. et 73. πρὸς τὸν αἰῶνα. Lyeurgus in Leocrat. p. 155. de Troia, a Graecis eversa, τὸν αἰῶνα ἀοίμητος ἐστὶ et Ioseph. I. B. I. 21. 10., quem vide cum Spanhem. nota. WESS.

230. 89. Ἐν τοῖς Αἰγυπτιακοῖς] L. I. 23. WESS.

231. 98. Οἱ δὲ τρεῖς γεγονένω παραδεδόξασιν] Imo et quinque, uti Cicero III. N. D. 23. WESS.

231. 10. Διμήτορα δὲ Διώνυσον — ὀνομάσθαι] Hos inter Orpheus Hym. XLIX. 1.

Κλυθὶ μάκαρ Διὸς υἱὸν ἐπιλήνιε Βάκχε διμιάτωρ.  
et Alexis in Athen. II. 2. p. 37. B.

Ὁ γὰρ διμιάτωρ Βρόμιος οὐ χαίρει συνῶν

Ἀνδράσι ποτηροῖς.

quos auctores habere potuit Ovidius IV. Met. 12.

— — Bacchumque vocant, Bromiumque Lyaeumque

Ignigenamque, satumque iterum, solumque BIMATREM.

Ut vero Diodorus ad vini ingenium Bacchi fabulam, secutus sacerorum interpretes, transfert, haud aliter Cornutus, in quibusdam tamen diversus, Nat. Deor. c. 30. WESS.

231. 15. Νομίζεσθαι] Ὀνομάζεσθαι Co. M. frequenti peccato. Vid. I. 23. WESS.

231. 17. Ἐξ Διὸς καὶ Διμήτρος — διασπασθῆναι] Iovis et Proserpinae filium a Titanibus dilaceratum plures tradunt. Clemens X. Recognit. c. 20. Dehinc Persephoneae, quae ei ex Cere fuerat suscepta, Iupiter miscetur: ex qua Dionysum genuit, qui a Titanis discerptus est. Hygin. Fab. CLV. Liber ex Proserpina, quem Titanes carpservunt: ubi plura Doctissim. Muncker. neque

ab his dissidet auctor infra L. V. 75. Tamen non longe hinc abit Cornutus c. 30. p. 220. *μυθολογεῖται δ' ὅτι διασπασθεὶς ἐπὶ τῶν Τιτάνων, συντετέθη πάλιν ἐπὶ τῆς Πέρας.* Vide mox c. 64. WESS.

231. 29. [*Ἐπεῖν τὸν οἶνον*] Eius moris causam et rationem declarat Palladius in Octobr. Tit. XIV., et Geoponic. auctor L. VII. 4. WESS.

231. 36. [*Ἀμνηστραν γῆν μητέρα προσαγορεύεσθαι*] Ueberius explicuit L. I. 12. WESS.

231. 39. [*Περὶ ὧν οὐ θέμις τοῖς ἀμνήτοις ἴστορεῖν*] Supra omnia diligentissime cavebant, ne sacrorum arcana τοῖς ἀμνήτοις, hoc est profanis et religionis imprudentibus innotescerent: nam et infr. V. 48. *ὧν οὐ θέμις ἀκοῦσαι πλὴν τῶν μεμνημένων.* et Lucian. Saltat. c. 15. *τὰ μὲν ὄργια σιωπῶν ἄξιον τῶν ἀμνήτων ἔνεκα.* quomodo et alii scriptores, cum in eorum mentionem incidissent, negant sibi fas esse, ea loqui quae sciant, ut exemplis bene multis, haud etiam neglecto Diodoro, Is. Casaub. Exercit. in Baron. XVI. 43. p. 394. condocfecit. Bacchus ipse, cum Pentheus orgiorum rationem mysticam scire desideraret,

*Ἄλλητ' ἀπαχχέβιον ἐδέναι βροτῶν*

respondet in Euripid. Bacch. v. 472. WESS.

231. 42. [*Θυώνην ὑπὸ τῶν ἀρχαίων etc.*] *Thyonae* nomen Semele inpetravit, postquam Dearum in numerum consecrata transiit, docente auctore L. IV. 25. Pindarus Pythionic. Od. III. 176.

— *Ἀτὰρ λεννώλένω γε Ζεὺς πατὴρ*

*Ἰηυθεν ἐς λέχος ἡμεῖον Θυώνη.*

quo loco Critici veteres, aut ἀπὸ τοῦ θέναι, quod est *inpetu ferri*, aut ἀπὸ τῆς θυηλῆς, ut mox Diodor., dictam censent, sicuti *Σεμέλην*, quod vinum membra facit vacillantia, ἀπὸ τοῦ σείειν τὰ μέλη. a quorum instituta originatione non multum absunt Schol. in Apoll. Rhod. I. 636. WESS.

232. 49. [*Πάλιν ἀναφρέτων*] Nisi spectatissima fides esset Codd. Coisl. et Mutin., *ἀναφρέτας* retinuissem: neque enim insolitum optimis scriptoribus est, ut accusativos absolute ponant; quo de genere Cel. Tib. Hemsterh. in Lucian. Halcyon. c. 8. et nos supr. c. 9. WESS.

232. 60. [*Τὰ κατὰ τὰς οἰνοποιίας*]. Vulgato hoc melius: sic L. V. 75. Bacchus *ἐφρετῆς τῆς ἀμπέλου* — *ἔτι δ' οἰνοποιίας* discitque a patre Oenopion *τὴν οἰνοποιίαν* c. 79. Porro *ξύλινοι καρποί*, quorum colligendorum modum ac rationem docuisse dicitur, omnes illi sunt, qui ex arboribus decerpuntur, quique Hebraeis *גַּן יַיִן καρפֹּי τοῦ ξύλου*, sive, quemadmodum Lucian. I. Ver. H. 39. *καρפֹּי ἐκ δένδρων*, ut bene Is. Casaub., horum Diodori non oblitus, in Strabon. XV. p. 1016. Plato in Critia p. 115. B. *ἔτι δὲ τὸν ἡμερον καρפֹּν, (ἐφρε) τὸν τε ξηρὸν — καὶ τὸν, ὅσος ξύλινος.* WESS.

232. 73. *Ἀγναῖον ὄνομασθῆναι*] De eo L. IV. 5. WESS.

232. 74. *Καὶ καταπύγωνα λέγουσι*] Eodem titulo ornatur L. IV. 5.; estque in Pausan. V. 19. p. 426. Bacchus *γέμεια ἔχων*, et in Naxiorum numo, et achate, quem L. Begerus T. I. Thes. Brand. p. 15. et 432. exhibuit. WESS.

232. 84. *Καὶ προσηγορίας πόλεων*] De his Th. Sig. Bayerus in Hist. Regn. Bactriani p. 4. WESS.

232. 88. *Ἐξ Ἰδὸς καὶ Περσεφόνης*] Primus hic Dionysorum Ciceroni III. N. D. 23. *e Iove et Proserpina natus*, ubi Davis., virum doctissimum, consule, et Nostrum L. IV. 4. WESS.

233. 97. *Παράσιμον δ' αὐτῷ ποιῆσαι ζέματα*] De Graecorum statuariis Plut. Isid. et Osir. p. 364. E. *διὸ καὶ ταυρομόρφον Διονέσον ποιοῦσιν ἀγάλματα πολλοὶ τῶν Ἑλλήνων*. Quare et Bacchus *ταυρόκερος* Euphorioni in Schol. Arat. Phaen. v. 173., *ταυρόκερος θεὸς* Euripidi Bacch. v. 100., Sophocli apud Strabon. XV. p. 1008. *βούκερος*, Orphico Hymn. XLIV. *ταυρομέτοπος*, Ovidio Epist. XV. 24. *Accedant capiti cornua, Bacchus eris*. Immo non decrant, qui *ταῦρον* adpellarent; cuius rei praeter alias hanc caussam dat Plut. in Quaest. Graec. p. 299. B. *ὅτι καὶ ἀσῆτρον καὶ σφόδρον πολλοὶ τὸν θεὸν ἀσχηρὸν γεγονέναι νομίζουσι*. quae ab his nostri scriptoris non abludant. WESS.

233. 3. *Ταῖς Βοιωτίας*] *Τῆς Βοιωτίας* Co. uti supra I. 23. WESS.

233. 7. *Ὡμοιοθῆναι μὲν τινι τῶν etc.*] *Beroae*, Semeles nutrici, apud Ovid. III. M. v. 278., fabulam elegantissimis versibus explicantem. WESS.

233. 11. *Κατὰ τὴν πρὸς τὴν Ἦραν συμπεριφορὰν*] Consuetudinem complectitur *συμπεριφορὰ* quaecumque, sive ea in conviviis, seu congressu familiari, seu amoribus instituantur. De conviviis elegantissime explicuit Is. Casaub. in Athen. IV. 26., occurritque inferius L. XVIII. 42. Usum familiarem indicat in Exc. Polyb. p. 1455. *καὶ τῆς συμπεριφορᾶς ἐπὶ πολλὰ προκοπτοῦσις*, *cum familiaritas indies cresceret*; et p. 1457. *πάντα δ' ἦν αὐτῷ δεύτερα τῆς ἐκείνου συμπεριφορᾶς*. quamobrem *κοινοῦς καὶ συμπεριφορᾶς* coniungit Plut. T. II. p. 981. B. Ad amorem hic transfertur, sicuti *ἀσχηρὸν καὶ συμπεριφορὰν* Ecl. I. l. XXXII. p. 897. et de Alexandro, petenti Thalestri sese dante, XVII. 77. *καὶ προσδέξάμενος τὴν ἔπιπεν αὐτῆς, καὶ συμπερινεχθεὶς ἡμέρας τρισσαίδεκα*. Fortasse etiam apud Plutarch. Coniug. Praecept. p. 141., ubi uxor *ἀπτεται μάλιστα τοῦ ἀνδρὸς ὀμιλῆ τε καὶ ἡδαι καὶ συμπεριφορᾶς*, nisi si eam ingenii facilitatem significet, qua sese mariti moribus accommodat, ut in Arrian. Dissert. Epict. L. III. 14.; quae tamen potestas vix locum capiet in eiusdem Plut. Sympos. VII. 8. p. 712. C. *ἢ χρόνος τις ἐπιμετροῦται τῷ ἔρωτι, συμπεριφορὰν αἰδοῦς ἔχων φίλων θρωπον*.

Atque haec de voce, nullo suo merito neglectiore, paullo uberius dicta sufficiant. WESS.

233. 16. *Εἰς τὸν ἑαυτοῦ μηρὸν ἐγκρέψαι*] Non deerunt, quibus ἐκρέψαι potius videbitur, quod auctor ipse ita maluerit V. 52. et Apollodor. III. 4. 3. Aristid. T. I. p. 52. Orpheus Hymn. XLVII. atque alii; quibus ego calculum non addo, uti nec Euripid. Bacch. v. 96. κατὰ μηρῶ δὲ καλέψας Χρυσέαισιν συνερείδει *Περσόναις κρέπτον ἀφ' Ἡρας*. Ipsam in femur insuti fabulam ex Phoenicum sermone diligenter atque erudite explicat Io. Cleric. in Theogon. Hesiodi v. 940. WESS.

233. 19. *Εἰς Νύσαν τῆς Ἀραβίας*] Vide supr. I. 15. WESS.

234. 40. *Καὶ τὰ μυστήρια φθορᾶς ἔνεκα τῶν etc.*] Sic Pentheus in Euripidis Bacch. v. 223. Addidi autem ἐπ' αὐτοῦ e scriptis Codd., ne a suo more dissentire auctor videretur. WESS.

234. 44. *Γυναικῶν χειρὶ ζῶντας διαμελίζοντα*] *Pentheum*, de cuius miserabili exitu idem Eurip. Bacch. v. 1130. et Ovid. III. M. 724. WESS.

234. 48. *Λόγζας τῶ κίττῳ κεκαλυμμένας*] De Bacchi in re bellica artibus Polyæn. I. Strateg. I. 1. *δόρατα ἦν κισσῶ πεπυκασμένα. ὁ Θύρσος εἶχεν ἀλγυίην* quae hastilia an thyrsos auctor *λόγζας τεθρυσωμένας* adpellat IV. 4. Paullo diversiore modo Lucian. Bacch. c. 1. WESS.

234. 53. *Μύρσανον — παρ' Ἰνδοῖς*] Non alius esse videtur ac Morrheus, de cuius et Deriadae in Bacchum expeditio-nibus plurima Nonnus Dionys. L. XXIX. et seq. WESS.

234. 62. *Ὅς ἐκαλεῖτο Θάροψ*] Hoc non audeo movere, etsi frequentioris usus sit *Χάροψ*: necdum enim inveni, qui alter-utro cognomine Oeagri patrem vocaverit. Mox *τούτων* praestabit. WESS.

234. 65. *Ἀθήρα τούτου*] Lege *τούτων*. RHOD.

234. 67. *Ἐν τῷ καλουμένῳ Νυσίῳ*] Videtur prope Nysam Thraciae, cuius Stephanus in *Θεσιδέειον* et *Νύσα* commemorat, fuisse. Vide Iac. Gronov. ad posteriorem Stephani urbem. De poena Lyeurgi in diversa abit Apollodor. III. 5. et Sophocl. Antig. v. 945. WESS.

234. 78. *Πολλὰ μεταθεῖναι τῶν ἐν τοῖς ὀργίοις*] Dixi supr. I. 23. WESS.

234. 81. *Ὡν ἐστι καὶ Ἀντίμαχος*] Fortasse eo in poëmate, cui *Thebaidos* nomen fecerat, praeter quam *Thebaidem* plura alia Colophonius hic Antimachus scripsit, diligenter recensita a L. Kustero in Suidae *Ἀντίμαχος*. WESS.

235. 87. *Διαγεγενημένου τοῦ σύμπαντος χρόνου*] Sic Longus Pastor. II. p. 41. *διαγεγομένων ὀλίγων ἡμερῶν*. et III. p. 92. *δέο διαγεγομένων ἡμερῶν*. Hero Automat. p. 265. *χρόνου δὲ ἰκανοῦ διαγεγομένου*. De sacris Bacchi Trietericis Corr. Rittershus. in Oppiani Cyn. I. 24. WESS.

235. 89. *Περὶ θολογοῦσι δ' αὐτὸν καὶ λαφύρων etc.*] Re-  
petuntur haec L. IV. 3. WESS.

235. 95. *Ἠλεῖοι καὶ Νάξιοι*] De Naxiis certa res est ex  
L. V. 50.; neque dubito de Eleis, etsi nunc quidem non succur-  
rat, qui praeter Diodorum hoc tradiderit: cultui enim Bacchi erant  
deditissimi, iactitantes, quotannis eum, cum festum τῶν Θυῶων  
diem obirent, sacris illis interesse et manifesta praesentiae argu-  
menta praebere, in Pausan. VI. 26.; quo et hymni spectant, qui-  
bus, ut βοῆῳ ποδὶ adveniat, feminae rogant apud Plut. Quaest.  
Graec. p. 299. B. WESS.

235. 96. *Οἱ τὰς Ἐλευθεράς οἰκοῦντες*] Boeotiae hanc ad  
ipsum Cithaeronis pedem urbem Bacchus in monumentum redditae  
libertatis condidit inf. IV. 2.; qua in re consentientem non habet  
Stephan., qui *Ἐλευθῆραι* Apollinis filium, unde et *Ἐλευθῆραι*  
urbs ipsa in Schol. Comici ad Acharn. v. 242. oppidi auctorem  
perhibet. Incolae Bacchum praecipuo cultu venerabantur, *Ἐλευ-  
θερέα*, de quo P. Leopard. XI. Emend. 19., propterea etiam Athe-  
nis, nam et haec sacra eius receperant, dictum apud Pausan. I. 38.  
p. 93. et T. Hemsterh. in Lucian. D. Mort. XXVII. 2. WESS.

235. 98. *Καὶ Τήγιοι μὲν — παρ' ἑαυτοῖς etc.*] De Andriis  
simile quiddam reperio in Pausan. VI. 26. Teios autem Bacchum  
sibi vindicasse gentis numi, eius dei simulacro plerumque insig-  
nes, (vid. Thesaur. Friderician. p. 454.) testantur, et inprimis  
legatio ad Aetolos variasque Cretae civitates missa, qua obtesta-  
bantur, ut ipsorum urbem Aetoli et regionem sacram esse con-  
cederent et propter Bacchum inspoliata, *ΤΑΝ ΤΕ ΠΟΛΙΝ  
ΑΥΤΩΝ ΚΑΙ ΤΑΝ ΧΩΡΑΝ ΕΠΙΧΩΡΗΣΩΝΤΙ ΙΕΡΑΝ  
ΕΙΜΙΕΝ ΚΑΙ ΑΣΥΛΟΝ ΤΟΥ ΔΙΟΝΥΣΟΥ*, in Antiq. Asiat.  
Edm. Chishul. p. 104. etc. WESS.

235. 1. *Ἀντομάτην*] *Ἀντομάτως* V. C. M. non male: nec ne-  
cessario tamen. Vid. Lucam A. A. 12. 10. et Pausan. VI. 26. WESS.

235. 12. *Οἱ μὲν γὰρ Δρακάνῳ σέ etc.*] Emenda *Δρακάνῳ  
σ', οἱ δ'*, et quod sequitur, *φασὶν, οἱ δ' ἐν, φασ' οἱ δ' ἐν*. RHOD.  
Idem Rhodom. consueverunt, ne diphthongus consona sequente cor-  
riperetur, Cl. Geor. Arnaldus Animadv. Critic. c. 6., et *Vanni Cri-  
ticae* eruditus auctor p. 385.; immo Ios. Barnes. fragmentis Ho-  
meri haud aliter inseruit, a quorum ego iudicio etsi non dissen-  
tiam, nihil tamen contra libros mutare tutius visum est. *Draca-  
num* urbs et promontorium erat Icariae insulae apud Strabon. XIV.  
p. 947. A., celebre natalibus Bacchi. Theocrit. Idyl. XXVI. 33.

*Χαίροι μὲν Διόνυσος, ὃν ἐν Δρακάνῳ νυφέντι*

*Ζεὺς ὑπατος μεγάλην ἐπιγονίδα θήγατο λύσσα.*

Stephano *Δράκονον*, iurene an iniuria erudite disputavit T. Hem-  
sterh. ad Lucian. D. D. IX. 2. Porro quem tertio addunt versum  
optimi Codd.

*Κοσαμένην Σεμέλην τεκέειν Διὶ τερπιζεραύνῳ,*

cum ego genuinum censeo: nihil quidem certe habet, cur spernatur. Wess.

235. 18. Ἔστι δέ τις Νέσῃ ἕπατον] Hoc praeter scriptos libros auctor ipse probavit I. 15. IV. 2.; Schol. vero Apoll. Rhod. II. 1215. Ἔστι δέ τις Νέσῃ ἕπατον ζέρας etc., quod sicuti et ἕπατον verissimum Io. Alb. Fabric., viro doctissimo, II. Bibl. Gr. 2. 4. visum est: mihi alia omnia placent: contra enim viri praestantissimi opinionem conspirarunt Diodori libri summo consensu: nec quidquam inest scripturae Schol. Apollon., cur praeponi debeat; ζέρας enim non est; quod tametsi de celsioribus tumulis dici posse, ἑνὶ ζέρας πέτρα Aristoph. Nab. v. 597. et colles in finibus Megarensium, quibus ζεράτων nomen infr. L. XIII. 65. patefaciant, rarius tamen in montibus describendis teritur, forteque in hunc versum immigravit ex Apollon. Rh. IV. 280. ubi ἕπατον ζέρας ὠκεανῶ, sententia prorsus diversa. Stat et a meis partibus Io. Iensius II. Lect. Lucian. p. 184. Wess.

236. 32. Καὶ Διονυσίῳ τῷ συντάξαμένῳ] De eo supr. c. 52. Μοχ μεθολογίας M. C. V. uti sup. I. 3. Wess.

236. 39. Ἔτι δέ Κάδμον χομίσατος] Rhodom. vertentem, et quod Cadmus literas, e Phoenicia allatas, primus ad Graecorum enuntiationem transtulerit, merito redarguit I. Perizon. in Aelian. III. V. H. 32.; transcripsit enim ea versione in solidum Cadmo, quod Lino debebatur. Eam autem de Lino disputantem vide et T. Hemsterh. in Lucian. Iudic. Vocal. c. 5. Wess.

236. 43. Τὰ γράμματα Φοινίκια κληθῆναι] Firmat hanc scripturam Hesych. Φοινίκια, Ἄρδοι καὶ Ἰστροὶ τὰ γράμματα, auctorque ipse L. V. 74., sicuti Φοινίκια Plut. IX. Sympos. 3. p. 738. E. et scholia in Dionysium Mss., quae διὰ καὶ Φοινίκια λέγεται τὰ γράμματα· οἱ δὲ ὅτι Φοινίκιον ἐστὶν εὐχρασίς etc. neque auxilium negabant. id si rogent τὰ Φοινίκια, Herod. V. 58. et Euseb. X. Praep. Evang. c. 5.; ea vero cognomina, a regione, unde venerant, repetita, literis diutissime perseverasse in Graecia atque Asia, argumento sunt Teiorum Dirae in Antiq. Asiae, cum animadversione Edm. Chishul. p. 101. Wess.

236. 45. Ἰδίᾳ δὲ τῶν Ἡελασγῶν πρότιον etc.] Hoc praestat ob praecedens κατῆ. Habent autem haud parum haec difficultatis, distraxeruntque in partes viros eruditione praestantes Iac. Palmer. I. Graec. Ant. c. 9. et Amplis. Bouhier. Dissert. de Prisc. Graec. et Lat. Lit. c. 17. Pelasgi enim Cadmo multis annis sunt priores, literasque usurparunt diu ante eius adventum: parvo Deucalionis aevo, cum aquae magnam Graeciae partem inundarent, varia quidem scripta pariter ac homines absorpta sunt, infr. V. 77., literas servarunt Pelasgi, teste Eustath. in Iliad. B. p. 358.; ad hoc insolens admodum est, ut res inventa non ab auctore nomen nanciscatur, sed ab illis, qui primi ea usi fuerunt: denique fieri vix potuit, ut post Cadmi in Eoetiam adventum literae a Pe-

lasgis, ea regione et vicinia magnam partem a Deucalione et eius posteris iam tum deicectis, appellarentur. Itaque aut falsus est Diodorus, et, quem sequitur, Dionysius, quae viri Amplissimi opinio, aut ex superioribus imprudenter hic inculcatum est τὸ μετατεθείω quod quidem si hinc emigraret, et gloriam antiquissimarum literarum Pelasgis relinqueret, et his nos difficultatibus expediret. WESS.

236. 49. Θάμνον] Θάμνον Co. semper. neque male. Vid. Plat. X. Republ. p. 620. A. et Suidam. WESS.

236. 52. Ἐπειθ' ὑπὸ τοῦ Λίνου πληγαῖς] Neque haec satis sunt plana atque expedita. Linus, quem Hercules citharae ictu obtruncavit, Orphei eius, qui cum Argonautis in Colchidem profectus abiit, frater fuit, Apollodoro II. 4. 9. auctore. Hic vero Linus, qui Pelasgicis literis quaedam scripsisse perhibetur, Hercule Thebano multis annis prior est, et Cadmo aequalis, ut hinc atque ex Pausan. IX. 29. colligas; nam quod Orphei dicitur magister, id enimvero incommodi nihil habet: cum plures eo nomine fuerint et aetate diversa: quod et Amplis. Bouhier. Dissert. de Prisc. Gr. et Latin. Lit. c. 20. advertit. Itaque eiusdem nominis homines, sed aetatis diversissimae, incertum a Diodoro an Dionysio confusi commixtique sunt. Graviore peccato, sed quod comica iocandi licentia excusat, Alexis in Lino fabula Herculi praecipientem facit Linum, ut ex librorum acervo sibi, quos vellet, legeret,

Ὅρφεός ἐστιν, inquit, Ἡσίοδος, τραγωδία,  
Χοίριλλος, Ὀμηρος, Ἐπίχαρμος, συγγράμματα  
Παρτοδαπία.

qui plerique omnes Lino multis seculis sunt posteriores, apud Athen. IV. 18. p. 164. C. WESS.

236. 54. Κεχορηγημένον] Κεχορηγημένον St. m. R. male. Vid. supr. I. 15. WESS.

236. 59. Καὶ τὸν Ὀμηρον ταύτοις προσμαρτυρεῖν] Iliad. B. 595. et 660. e quo sumpsere ceteri, Apollodor. I. 3. 3. Plut. de Music. p. 1132. A., atque alii in Io. Alb. Fabric. I. Bibl. Gr. 35. 4. WESS.

236. 66. Ὅταν τὰς πράξεις αὐτοῦ διεξίωμεν] Lib. IV. 25. WESS.

236. 67. Λῖνον — Πελασγικοῖς γράμμασι etc.] Hae solae in Graecia literae erant Lini aetate, antequam Cadmus novas ex Phoenice asportaverat: quas cum statim non probaret, contentione orta Cadmi fraudibus interemptus occubuit, Zenobio Centur. IV. 45. indice. Iam quod additur de Bacchi gestis rebus, a Lino in literas relatis, ea res satis est dubia. Pausan. IX. 29. Linum hunc aut nihil scripsisse, aut, si quae scripserit, ad posteritatis memoriam non pervenisse, Diogenes vero Praefat. c. 4. de mundi origine, Solis Lunaeque cursu versus reliquisse adfirmat; qui dissensus in rebus adeo antiquis saepe frequentatur. WESS.

237. 71. *Προναπίδην τὸν Ὀμιζρον διδάσκαλον*] Tatianus Orat. ad Graec. c. 62. *Προσναπίδην Ἀθηναῖον* memorat, quem meritissimo Wilh. Worth. eundem atque hunc esse censuit. Firmat suspicionem Theodosius in Schol. ad Dionysium Thracem, *Προναπίδην τὸν Ἀθηναῖον Προναπίδην Ἀθηنيensem* modum scribendi, quo nunc utimur, in communem usum, cum antea *βουστοροσσιδὸν* literas pingerent, introduxisse referens in Io. Alb. Fabric. I. Bibl. Gr. 27. WESS.

237. 73. *Θυμοίτην τὸν Θυμοίτου*] Habet Virg. Aen. II. 32. *Thymoetem* Troianum ex Homeri Iliad. Γ. 146.; de quo quidem nihil huiusmodi perscriptum reperi. WESS.

237. 76. *Χόραν τῆς οἰκουμένης*] Peregrina et superflua esse *τῆς οἰκουμένης*, praecedens genitivus (*τῆς Ἀιβῆης*) arguit. Irrepsit autem per incuriam librarii ex fine commatis antecedentis. RHOD.

237. 79. *Νυσαίων* M. V. R. C. bene. Vid. sup. c. 59. WESS.

237. 86. *Τῶν Κεραυνίων καλουμένων ὄρων*] Cum his Africae *Cerauniis* contendit Is. Vossius haud iniuria, *saltus Ceraunios*, quos Mela III. 8. eadem in regione memorat. Mox *Ἀμυλθείαν*, sicuti et in sequentibus, praestaret. Sic enim ipse IV. 35. atque alii passim. WESS.

237. 92. *Ἐσπέρον κέρας προσαγορευθῆναι*] Mela III. 9. *Ipsae terrae promontorio, cui Ἐσπέρον κέρας nomen est, finiuntur.* Quae eius verba iure me veterum Codd. scripturam probasse, abunde ostendunt, praetereaque Plin. VI. 31. Ptolem. IV. 9. WESS.

237. 3. *Μακρὰν ἀπὸ ἐξείνων τῶν τόπων ἀπηρητημένην*] De temporum locorumque intervallo disiunctis satis hoc cultum. Sic L. XVII. 36. *αἷς τὰ προσήχοντα μακρὰν ἀλίρητο* et XX. 35. *μακρὰν ἀπηρητημένης τῆς Ῥωμαίων δυνάμεως.* Aristoteles VI. Polit. 4. de agro, ab urbe longius disparato, *ὥστε τὴν χόραν πολὺ τῆς πόλεως ἀπηρητῆσθαι.* Dionysius T. II. p. 177. *οἱ τοσοῦτον ἀπηρητημένοι τοῖς χρόνοις, qui tanto temporis intervallo ab illis absumus.* Quod et reddi oportuit Polybio L. XII. 8., ubi prave nunc legitur *τοῖς καιροῖς οὐ μακρὰν ἀπηρητῆσθαι.* id enim longe diversum. WESS.

237. 8. *Καὶ χήποις ἔδασιν ἀρδεομένην δαψυλέσι*] Noli a scriptis Codd. hoc enixe probantibus, dissentire. Si qui tamen *ἀρδεομένοις* iustius opinabuntur, fruantur suo iudicio. WESS.

238. 12. *Ἐν αὐτῷ βιοῦντας*] Facile adducor, ut *ζατοιοῦντας* scriptum fuisse concedam. RHOD.

238. 16. *Διὰ τὴν συνάγκειαν*] Propter convallem, arboribus opacam: *σύνδενδρος* enim *τόπος* Suidae *συνάγκεια*, Nostroque *δένδρον συνάγκεια* infr. IV. 86., *συνάγκεια δένδρον ὑψηλῶν* V. 43. et *σνιαζομένη συνάγκεια* superius c. 24. WESS.

238. 25. *Τὰς μὲν θαλαττίαις πορφύραις etc.*] Vestes *θαλισσίαις πορφύραις πεποικιμέναις* habet L. XVII. 70.; et



πορφυρίδα θαλαττιαν Polyb. in Excerpt. p. 1473.; ποικίλην ἢ ἀπὸ θαλασσοῖς βάψιος τοῦ κόχλου Perictione in Florileg. Stobaei Tit. LXXXIII. p. 487. Puto purpuram Tyriam, et murice, non herbis, infectam indicari: neque enim ea videtur, quae Athen. XII. 3. p. 525. D. θαλασσοειδῆς, nedum quae pelagia Plinio, qua de Cl. Salmas. in Tertull. Pall. p. 187. Porro quin post pauca scripserit ἄλλαις ἡύσει περιλαμπομέναις, mihi quidem dubium non est: pendent enim ex verbis τὴν χροῖαν ἐχούσαις παρὰ πλῆσιον, et solet ἡύσει περιλαμπομέναις adpellare res egregie resplendentes, uti in c. 11. huius libri animadversum est. WESS.

238. 32. Ἐν δὲ τοῦτοις ἐννοσεύειν] Hoc sermonis genius et scriptoris consuetudo postulant: ita enim II. 4. πλῆθος περιστρῶν ἐννοσεύοντος, ubi simili peccato Codd. aliqui ἐννοσεύοντος et V. 43. ὀρνέων πλῆθος ἐννοσεύεται, quod plane idem. Scio Herodoti I. 159. νεροσευμένα ὀρνίθων γένηα ἐν τῷ νηῶ, sed et id vitiosum esse visum et addita litera augendum Aemil. Porto non me praeterit. WESS.

238. 50. Παραδοῦναι τρέφειν Νέσῃ] Nysam Bacchi nutricem Plinius V. 18. Servius in Virgil. Eclog. VI. 15. Hygin. Fab. CLXXXII. cum Munckeri nota non neglexerunt: Aristaei filiam Baccho nutricem dat Apollon. Rhod. IV. 1132. sed *Macrin* nomine, quae in Euboea insula cum sinu exceptum foverit atque educarit. WESS.

238. 56. Ἀὶ ὄν καὶ Τριτωνίδα προσηγορεῦσθαι] Fabulam hanc Afri Graecis approbarunt, Pausania I. 14. et Criticis ad Apollon. Rhod. I. 109. docentibus. Indidem venit in Graeciam *Aegis*, si fides Herodoto IV. 189.; de qua tamen sicuti et originatione Tritonidis et Tritogeniae non admodum inter sese conspirant, ut Is. Tzetz. Lycophron. v. 519. et Eustath. in Homer. p. 602. abunde testantur. Conf. inf. V. 72. WESS.

239. 64. Γηγενὲς γὰρ ὑπάρχον] Describit Euripid. Ion. v. 989. De Phrygia Catacecaumena, et nominis caussa, longe meliora Strabo XIII. p. 931. C. Ego vero ἐπὶ θαλατταν, quam Rhodom. proscribit, non damno. Habebis simili loco positam c. 73. WESS.

239. 70. Ἐπὶ θαλατταν] His contextus absque incommodo carere potest. RHOD.

239. 74. Εἰς τοὺς περὶ τὰ Κεραῖνια δρυμοὺς κατασκήψαι] Rhodom. bene. Frequens est de tonitru et fulmine, uti monet Schol. in Eurip. Med. v. 94. Sic XVI. 81. ἀστραπαὶ τε καὶ βρονταὶ μετὰ μεγάλων πνευμάτων κατέσκηπτον. et XVII. 94.; nec minus de vehementi vento: Philo Iud. I. Vit. Mos. p. 629. D. ῥότος ἐὸς ἤρξατο κατασκήπτει βιαιότατος. Atque hinc mala, quae fulminis tempestatisque in modum incessunt atque invadunt, κατὰ κατασκήψαντα eidem Leg. ad Cai. p. 1018. D. et. p. 1030. B. WESS.

239. 80. Φορεῖν τῷ στήθει] Servius in Aeneid. VIII. 435. *Aegis proprie est munimentum pectoris aereum, habens in medio Gorgonis caput: quod munimentum si in pectore numinis fuerit, Aegis vocatur; si in pectore hominis, sicuti in antiquis imperatorum statuis videmus, lorica dicitur.* Recte proin Euripid. Ion. 995.

Ταύτης Ἰθάκην δέσος ἐπὶ στέροισι ἔχει  
Ἦν Αἰγὶδ' ὀνομάζουσι, Παλλάδος στολήν.

ubi sine caussa aestuat Ios. Barnes. WESS.

239. 93. Τῶν δ' ὠραίων τὰ δυνάμενα ξηραίνεσθαι] Minus commode doctissimus interpres *uas maturas* verterat: melius Hesych. ὠραίων, τῶν κελυφῶν, καὶ ὠραίων τῶν καρπῶν. Sunt enim maturi fructus. H. Galen. Alim. Facul. p. 319. ὠραν ἔως ὀνομάζουσιν οἱ Ἕλληρες ἐκείνον τὸν καρπὸν, ἐν ᾧ μεσοῦντι τῆν τοῦ κελύφου ἐπιτολήν γίνεσθαι συμβαίνει χρόνος δ' ἐστὶν οὗτος ἡμερῶν τεσσαράκοντα. κατὰ τοῦτον δὲ τὸν χρόνον ἀπαρτες εἶσιν οἱ ὠραῖοι καλούμενοι καρποὶ, τινὲς μὲν ἰδίᾳ παρακμάζοντες, ἔτιοι δὲ ἀρχόμενοι, τινὲς δὲ ἀκμάζοντες, ἢ μετὰ τὴν ἀκμὴν, ἢ πρὸ αὐτῆς quae viri sollertissimi exseribere placuit, ut adpareret quam longe a vero abierit M. Meibom., τὰ ὠραῖα *immaturos* esse *fructus* pertendendo in Diogen. II. 32. Eleganter Plutarch. De Ser. Num. Vind. p. 519. multos secleribus se immergere ait, ὡς τῆς ἀδικίας τὸν μὲν καρπὸν εὐθύς ὠραῖον καὶ προῦπτον ἀποδοῦσθαι etc. Porro τὰς κατὰ τρόπον φτείας, quae, sicuti convenit atque oportet, instituuntur, suffragantibus scriptis Codd. probavi: ad quem modum *καταμαχία κατὰ τρόπον γενομένη* in Isocrat. Panathen. p. 356. et supr. I. 61. 70. WESS.

240. 11. Ὀρομάσαι Κρήτην] Vide L. V. 64. WESS.

240. 19. Περὶ ὧν προειρήκαμεν] Superius c. 53. etc. Mox aut eliminandum tollendumque est adiectivum πολλήν, quod et Co. praeteriit, aut certe *στρατιῶν* scribendum: ego prius malo. Vid. II. 39. WESS.

240. 33. Ὑπὸ τῶν περὶ τὸν Ἄμμωνα τόπος] Paullo ante τόπος Ἄμμωνίους adpellavit, qui sedem praebuisse videntur τοῖς Ἄμμωνίοις, Iovis Hammonis vicinis, de quibus L. XVII. 50. WESS.

240. 43. Ἐξορκίσαι στρατιῶν] Scripsisse credo *στρατιῶν*. Sic I. 22. Ἐξορκίσαι πάντα μηδερὶ δηλώσαι. Apollodor. III. 9. 9. Ἐξορκίσαι τοὺς ἀνιστήτους βοηθήσαι. Polyb. VI. 19. Ἐξορκίζουσιν, ἢ μὴν περὶ αὐτῶν καὶ ποιεῖν etc. WESS.

240. 45. Ὑποσπόνδων ὀνομασθέντων] Qui pactis induciis dimittuntur, ἑποσπόνδοι. quo modo Lysander τοὺς Ἰθακίους ἑποσπόνδους ἀπέλκεν L. XIII. 106. Hinc frequentissime νεκρὸς ἑποσπόνδους ἀποδοῦναι victores, et νεκρὸς ἑποσπόνδους ἀπολαμβάνειν victi perhibentur, cum caesos fide publica induciis que factis dant ac recipiunt terrae mandandos, ut copiose ostendit Desid. Herald. I. Advers. 9., eumque in haud paucis secutus Kirch-

man. Append. de Funerib. c. 4. Quid autem intersit *σπορδὴν* inter et *ἀσπίδην* videbis ex Andocide Orat. de Pace ad Laced. p. 24. WESS.

210. 53. *Τῶν Νυσαίων*] Stephanus gentilia a Nysa haec format, *Νυσαῖος*, *Νυσαίος*, *Νυσαίως* et *Νυσαῖος*. utraque ergo lectio bona est et utramvis pro authentica habeto. RHOH.

241. 55. *Ὅδ' τὸ γένος ὕθεν ἦν ὑπὸ πάντων ἀγροεῖσθαι*] Nec latuit tamen Graeculis, quorum Theopompus *Νέμεως παῖδα* in Aelian. III. V. II. 18., Nonnus Dionys. XXIX. 261. Terrae filium facit. Paternum Satyrorum genus quidam ad Deucalionem, alii ad Centauros retulere, de quibus Is. Casaub. de Satyr. Poës. L. I. 2. WESS.

241. 57. *Ἐχόντος κατὰ τὴν ὀσφὴν οὐράν*] Silenum multi ex Satyrorum genere perhibebant, illis praeter grandaevitatem cetera similem. *Ἴδεν Σίλενι κερύβετες* passim dicti poetis: et *diserte Nonnus extremo L. XIX.*

— *Ὅδ' νέμεσις δέ*

*Σειληρόν κομόωντα βοοκραίροισι μετώποις*

*Ταυρείην κερύεσσαν ἔχειν ποταμηΐδα μόρφην.*

*attributa et infra umbilicum figura caprina: quam ob caussam δασύνημοι poetis nominantur, et λάωσι et λαγρήετες et δασύνημοι, idem Casaub., quem et vide de Sileni cauda p. 68. Lucianus Baccho c. 2. cauda Bacchi hunc nutritorem haud instruxit, rariusque conspicitur in veterum numis et gemmis. WESS.*

241. 63. *Ζάβηραν*] Urbem hanc feliciores invenient: mihi densae hic tenebrae, nec possum adeo verum eius nomen constituere. WESS.

241. 64. *Τὴν ὀρομαζομένην κάμπην*] Monstrum hoc, cuius collo centum connexa ferocissimorum animalium erant capita,

— *ἀμὰ δέ δειρὴν*

*ἼΗρθεε περτήζοντα κερύβητα ποικίλα θηρῶν,*

fulmine prostratum necat Iupiter, Afrosque hac peste liberat,

— *ὕψι μέδων Ζεὺς*

*Κίμωνι καὶ καίοντιν ἀπὸ λαίης κεραιῶν.*

in Nonni XVIII. Dionys. v. 237., ubi graphice multisque figuris exornatur. WESS.

241. 70. *Προσάγειν πρὸς τοὺς Τιτῆνας*] Tametsi *προάγειν* tristissimum sit de exercitu in hostera versus se movente, ut XI. 30. XV. 41. XVI. 42., hoc non damnavero. WESS.

241. 81. *Τὰ πατροῦ βασιλεία*] Bene ex Grammaticorum decreto. Thomas Magister *πατροῦα*, τὰ ἐκ πατέρων εἰς υἱὸς χωροῦντα, καὶ πατροῦοι φίλοι. Non item *πατροῖοι φίλοι* inf. XI. 66. nec *ξένος πατροῖος* XIV. 13., quo tamen modo Plato Isch. p. 174. K. et Demosthen. Legat. Vala. p. 248., pluresque alii, Grammaticis multo locupletiores. Vide Io. Georg. Graev. in Solocist. Lucian. p. 737. WESS.

241. 1. *Θεὸν νομισθῆσεσθαι*] Blandiri posset *δομισθῆσεσθαι* veterum Codd., nisi *τῶν νομισθέντων θεῶν* paullo post meminisset, et de Baccho *θεὸν νομισθῆναι* II. 38. dixisset. Librariis haec verba permiscere moris esse perpetui, dictum alias est. Vid. I. 28. WESS.

241. 2. *Τό, τε χορηστῆριον ἰδρύσατο*] Danaei Aegyptii curae templum Ammonis et eius structura tribuitur I. XVII. 50. WESS.

242. 4. *Παράσημον ἐσχηκότος αὐτοῦ τὸ κρᾶνος*] Parili modo Isis propter *βούκρανον κρᾶνος* bubulis cornibus instructa perhibebatur apud Plut. Isid. et Osir. p. 258. D. Corniger autem Ammon nemini ignotus est, et numis inscriptus et scriptorum diversis locis celebratus. Numos dabit Ezech. Spanhem. de Usu et Praest. numism. Diss. VI. p. 296., cetera Raderus in I. IV. 7. 23. Curtii. WESS.

242. 10. *Γεγονότα ζερατίαν*] Dixi superius c. 61. WESS.

242. 20. *Ὀλύμπιον προσαγορευθῆναι*] Longe aliam tituli eius causam adferunt Etymolog. *Ὀλυμπία* et Eustath. in Homer. p. 27. WESS.

242. 23. *Καὶ τὴν παράθεσιν τοῦ τε οἴνου*] Vide I. 15. WESS.

242. 25. *Καθάπερ πρὸς πολέμιον*] Hoc, vitio scribentis in *πόλεμον* conversum, sicuti et in Hesychii *Ἐξεπολέμωσε*, longe praestat, quamvis Pericles *ἀντιτάτειο τῷ λοιμῷ καὶ τῷ πολέμῳ* in Maximi Tyr. Dissert. XII. p. 211.; id enim alius est generis. Baccho, exercitu varias orbis partes obeunti, ob beneficium et liberale ingenium nemo ut hosti armata manu occurrebat neque adversabatur, quod *ἀντιτάτεσθαι*. unde ὁ θεὸς *ἀντιτάσεται τοῖς ὑπερηγᾶσις*, quorum superbos spiritus comprimit, in I. S. Petri V. 5., et *ἀντιτάτεσθαι ἡδονῇ καὶ πόρῳ* Epistol. XII. Diogenis, quae inter Graecanic. p. 341., *ἀντιτάτεσθαι ἐπιθυμίας* Polyb. Excerpt. Vales. p. 153. voluptatibus et cupiditatibus tanquam acie directa sese opponere. Adde I. 24. 48. et II. 38. WESS.

242. 30. *Μεγάλας τιμαῖς*] Hoc e sequente versu huc translatum est. Rectissime autem legetur *δοραεῖς*. RHOD. Accedo Rhodom. coniecturae: mox ipse auctor neminem neque Graecum nec barbarum fuisse *ἄμοισρον τῆς τούτου δοραεῖς καὶ χάριτος* addit, suspicionem confirmans. Alioqui *τιμαὶ καὶ χάριτες* opportune illis tribuuntur, qui bene de se meritis et honores et gratiam rependunt, infr. IV. 85. WESS.

242. 38. *Τὸ ἐκ τῶν χοιθῶν πόμα*] Conf. supra I. 20. WESS.

242. 43. *Προσβεβοηθηκότος δὲ καὶ τοῦ Λιδῶς etc.*] Sic scripserat, uti Dionysius I. A. R. p. 37. *καὶ προσβεβοηθησάντων αὐτοῖς Ἀχαιῶν ἀπάντων*. Vulgatum ex scripturae compendio ortum arbitror, quod et I. XIV. 116. ex *ἐμβοηθήσας ἐπὶ τὸν τόπον* intemptive fecit *ἐπιβόησας*. WESS.

243. 49. *Καὶ πάντας ἀνελεῖν τοὺς Τιτᾶνας*] Vide I. V. 66. WESS.

243. 57. Ἐξ Ἰούης τῆς Ἰνάχου Διὸς γενόμενον] Cicero III. N. D. 23. inter quinque Dionysos nec Amaltheae Ammonisque filium, neque hunc memorat. Est autem idem atque Eraphus, de quo Aeschyl. Prometh. v. 850. et Apollodor. II. 1. 4. WESS.

243. 65. Στρατιώτιδας δ' ἐπιλέξασθαι γυναῖκας] Veterum Codd. haec scriptura est, quam res ipsa comprobat. Bacchus enim sibi militiae socias adscivit feminas, quod verbo significatur. Dionys. II. A. R. p. 86. τριαζοσίους ἄνδρας ἐκ τῶν ἐπιγανεστάτων οἰκῶν τοὺς ἐξήγαγεστάτους τοῖς σώμασιν ἐπιλέξόμενος. et Noster infr. XIV. 5. 12.; posses alioqui vulgatum περιδέξασθαι levi opera mutare in παραδέξασθαι, ut visum fuit Rhodom. in Indice: qua mutatione res eodem recideret. Vitium natum est ex vocum simili paene figura, quae et in Dionysio XI. A. R. p. 734. ex ἀπεδέξατο exstruxit ἐπελέξατο, ut monuit diligentissimus Sylburg. WESS.

243. 67. Καὶ τελετὴς ἄς μὲν μεταθεῖναι] Expectasses fortasse, καὶ τελετῶν ἄς μὲν etc. Sed alterum aequè commodum et praestans. Thucydid. I. 89. τοῦ τε γὰρ περιβόλου βραχέα εἰστίκει, καὶ οἰκίαι, αἱ μὲν πολλὰ ἐπεπτώκεσαν, ὀλίγαι δὲ περιῶσαν. ubi recte Scholiastes, ἀντὶ τοῦ οἰκίῶν. Ὅμηρος, οἱ δὲ δύο σκόπελοι. Qui quidem Homeri versus Odyss. B1. 73. eundem vocum ordinem complectitur, egregieque illustrat Nostri verba L. II. 48. οἱ δὲ τούτους ἐπιδιώκοντες, — οἱ μὲν ἀπόλλυνται, — οἱ δὲ etc. Conf. L. Kuster. in Plut. v. 55. Aristophanis. WESS.

243. 69. Ἐύρετῶν] Ἐύεργετῶν R. familiari librariis errore. Vid. I. 17. WESS.

243. 73. Ἐφ' Ἡρακλέους] Idem et Dioscuris evenit, quorum antiquissimorum gloriam Ladae filii, Castor et Pollux, favente multitudinis superstitione, paullatim sibi totam vindicarunt. Conf. infra IV. 44. et quae admirabili eruditione ad Lucian. D. D. XXVI. 1. commentatus est T. Hemsterhusius. WESS.

Ibid. Ἄνοῖν γὰρ ὄντιον τῶν προγεγεστέρων] Uti haud absurdum est ὄντιον, ita nec hoc reiectaneum: quod enim de Homero proñtetur Eustath. p. 47. ἰστέον, ὅτι ἔθος Ὅμηρῳ ἀδιαφορεῖν ἐν τοῖς δεικτοῖς καὶ τοῖς πληθυντικοῖς: καὶ ποτὲ μὲν πληθύνειν τὰ δεικτὰ, ποτὲ δὲ δυνάξαι τὸ πληθῆος, idem de aliis dici potest. Vid. L. IV. 44. XV. 82. et viri doctissimi Sam. Clarke animadversiones in Homeri Iliad. A. 566. WESS.

243. 75. Γεγονέαι παρ' Αἰγυπτίους] De eo L. I. 19. WESS.

243. 77. Τὸν δὲ δεύτερον ἐκ Κρήτης] Ciceroni Hercules tertius est ex Idaeis digitis, cui inferias adferunt, L. III. N. D. 16. quem quidem Noster iisdem accenset L. V. 64., γόργια fuisse prodens, ut proin falsa sit Codd. eorum scriptura, qui γεργίων praefereunt. HERCULEM CRETENSEM exhibet Postumi numus in Ansel. Banduri T. I. Numism. Imperat. p. 287.

De certamine autem Olympico, ab Hercule Cretensi statuto, dicam alias. WESS.

243. 79. Ὀλυμπιακὸν Co. M. Conf. Kuster. in Aristoph. Plut. v. 585. WESS.

243. 86. Κληρονομήσαι τὰς τῶν ἀρχαιοτέρων πράξεις] Similem animadversionem instituit L. V. 76. WESS.

243. 92. Οὐδαμῶς πρόπειν φασὶ etc.] Haud profecto absurdi Libyes illi. Vera si ea sint, quae de Titanibus, a Iove et Baccho profligatis, prodita in vulgus sunt, fieri nullo poterit modo, ut Bacchus, Cadmi nepos, idem atque ille sit, qui Iovi eo bello suppetias tulit. Apollodorum consule L. III. 1. et fabulatores haec flocci facere advertes. WESS.

244. 96. Τὴν πρόθεσιν τετελειωότες] Forte praestiterit τετελειώτες, ut extremo Lib. II.: quod quidem certe verum est in περιγράφομεν, quo modo L. XVI. 96. ταύτην μὲν τὴν βίβλον αὐτοῦ περιγράφομεν. quo de abunde disputatum est in L. I. 41. WESS.

## A N N O T A T I O N E S

I N

## L I B R U M Q U A R T U M.

245. 1. *Ἡρὸ τῶν παρὰ τοῖς Ἕλλησιν etc.*] Haec retineo, tametsi plurimum Codd. auctoritas aliud posulet: sunt enim auctoris nostri ex L. IV. 1. WESS.

245. 11. *Ἡρὸ τῶν ἀλογόρων τοῦ Ἱφραζέλου*] Sic oportuit: vulgo quod legebatur, nimis ineptum erat. WESS.

245. 13. *Τῶν ἐπὶ ἐπὶ Θήβας*] Aeschyli *ἐπὶ ἐπὶ Θήβας* et auctor L. IV. 66. satis hoc tueitur. WESS.

246. 7. *Ἡ δὲ τῶν χρόνων ἀπαγγελία*] Prave id mutant. *Ἀπαγγελία* phrasin, narrationemque complectitur ambitu suo. Dio Chrysostom. propterea Orat. XVIII. p. 256. C. Herodoto τὸ γλυκὸν τῆς ἀπαγγελίας, etsi vitiose *ἐπαγγελίας* libri praeferant, Theopompo ἰστορικὸν τι περὶ τῆν ἀπαγγελίαν τῶν λόγων, Ephoro τὸ ἀρεμῆρον τῆς ἀπαγγελίας, Xenophonti vero εἶδος τῆς ἀπαγγελίας προσήρως contribuit: male ergo in Plut. T. II. p. 45. A. Plato laudasse dicitur Lysiae τῆν ἐπαγγελίαν, atque in Iosepho τὸ τῆς ἐπαγγελίας κάλλος L. XIV. A. I. 1. 1. et Prooem. Bel. Iud. segm. 5. τῆν ἐπαγγελίαν ἐναργῆ contra Codd. auctoritatem retinuerunt. Vid. infr. IV. 85. WESS.

246. 19. *Ἐφορος μὲν οἷν ὁ Κυμαῖος etc.*] De Ephoro eadem, sed distinctius, L. XVI. 77. WESS.

246. 23. *Ὁμοίως δὲ τοῦτο Καλλιθένης καὶ Θεόπομπος*] Callisthenes *Ἑλληνικὰ* sua exorsus ab Antalcidae pace perduxit ad eum annum, quo Delphicum templum a Philomeio Phoeniciensi captum et expilatum est, docente Nostro L. XIV. 117. Theopompus vero τὰ λοιπὰ τοῦ Πελοποννησιακοῦ πολέμου et τὰ Φιλίππῳ πεπραγμένα pluribus libris descripsit, de quibus Dionys. T. II. p. 131. et Diodor. XVI. 4. Uterque fabulosas antiquissimorum Graecorum res nusquam dedita opera exsecutus est; quamquam Callisthenes, Cicrone auctore L. V. Epist. 12. ad Laecium, bellum Troianum contexere haud neglexerit. Perperam ergo Io. Meurs. auctoris verba intellexit, ac si Theopompum et Callisthenem ab Heraclidarum reditu Historias scribere ingressos fuisse indicarent, de Regn. Lacedaem. c. 6. WESS.

247. 32. *Τοῖς δ' ἡρωϊαῖς θυσίαις εὐχεσθαι*] Puto u-

μαῖς ἐτίμησαν Diodorum scripsisse, quamvis in Polyb. L. VIII. 9. καὶ γὰρ θυσίας ἀντὶ καὶ τιμὰς ἡρωϊκὰς ἐσηγίωσαν reperitur. Neque enim aliter solet. Vid. IV. 24. V. 65. XI. 38. XIII. 35. Ἰσοθροὶ τιμαὶ occurrunt I. 97. III. 57. IV. 49. et Lyeurg. Orat. in Leocrat. p. 159., Plut. T. I. p. 16. A., Appian. H. B. Civil. p. 848. Distant autem, quod Heroibus inferias mittere solebant atque ἐντέμνειν καὶ ἐναγίζεον, ut apud Thucydid. V. 11. et Philost. Heroic. c. XIX. 14. 15.: unde ἐντομα victimae, illis mactari solitae, et ἐναγίσματα apud Apollon. Rhod. I. 587. cum Criticorum veterum nota, et Maxim. Tyr. Dissert. XXVI. p. 151. Diis vero coelestibus θύειν, quod in altari, victimae capite coelum versus erecto, fiebat, festibus schol. in Homeri Iliad. A. 459., ne nunc addam de templis, signis, ceterisque, de quibus Porphyr. Antr. Nymph. p. 115. edit. Barnes. Discrimen egregie signavit Plutarch. T. II. p. 255. et p. 857. D., Nosterque ipse L. IV. 40., quibus adstrue Is. Casaub. notata in Sueton. Caesar. c. 88. WESS.

247. 47. Μεγίστας εὐεργεσίας κατατεθεῖσθαι] De collocatis beneficiis usurpant: sic χάριν βουλόμενος καταδέσθαι L. XV. 91. cui simillimum Antiphontis O. de Caed. Herod. p. 136. καὶ τῇ πόλει τῇ ἡμετέρῃ χάριν καταδέσθαι, et S. Lucae A. A. XXIV. 27. θέλων χάριτας καταδέσθαι τοῖς Ἰουδαίοις. Opportune ad hunc locum Gregor. Nazianz. Orat. III. p. 86. B. ἐξορία δὲ παραδόντα οὕτως ἀμείνυσθαι καὶ μεγίστην εὐεργεσίαν καταδέσθαι. WESS.

247. 52. Τὸν παρ' Ἑλλησι Διόνυσον] Dixit uberius L. I. 17. WESS.

247. 56. Τοὺς Ἰνδοὺς τὸν θεὸν τοῦτον etc.] Vide L. II. 38. Μοχ τὰ sine gravi causa Rhodom. delet. Diodoro alia mens. Vid. III. 31. 32. 34. etc. WESS.

247. 60. Τὰ περὶ τούτων εἰρηχότεες] Deleatur τὰ. Et in proximo versu reponatur παρὰ τοῖς Ἑλλησι. RHOD.

247. 70. Ἰσμορίαν τὴν Ἀγοροδίτις] Eandem illi matrem et Martem patrem dat Apollodor. III. 4. 2. At aliter illi, de quibus L. V. 48. Diodorus. Haec autem exseripsit Euseb. H. P. E. 2. WESS.

247. 72. Πολύδωρον] Πολυδώρον Cl. prave. V. Apoll. III. 4. 2. WESS.

247. 76. Ταῖς πρὸς τὴν Ἥραν συμπεριφοραῖς] Vocis usum abunde declaravi L. III. 63. WESS.

248. 82. Παραδοῦναι τῷ Ἐριῶ] Fabulae ordinem diversiore modo disponunt Apollodor. III. 4. 3. et Ovid. III. M. 310. De Nysae antro supr. I. 15. et Dionysi nomine Rittersh. in Orpian. I. Cyn. v. 27. WESS.

248. 99. Οὐ πολὺν δὲ λειπόμενον τῆς — εὐωδίας] Eandem odoris iucunditatem illi tribuit L. I. 34. III. 73. Non item Iulianus epigrammate εἰς τὸν οἶνον ἀπὸ κριθῆς Anthol. L. I. c. 59.

Κεῖνος νέκταρ ὕδαδε, σὺ δὲ, τράγον ἢ ῥά σε Κέλτοι

Τῇ πενή βοτρυῶν τεύξαν ἀπ' ἀσταχῶν;



sed is aut narium taedio laborasse, aut in graveolentissimam incidisse videtur cerevisiam. Ζέθος Co. aliique. Vid. I. 34. WESS.

248. 7. *Ἦρ' Ἐλευθερῶς προσαγορεύσαι*] Dixi ad L. III. 65. WESS.

248. 17. *Βαρχεῖά τε γυναικῶν*] Non alia sunt ac *Λιονίσσια*, perperamque a Io. Meurs. et Io. Ionstono distinguuntur, docente Ezech. Spanhem. in Aristoph. Ran. v. 360. WESS.

248. 19. *Ἐὐαῖοί σαις*] *Ἔροε*, εὐοῖ clamitantibus. *Βαρχιζὼν γὰρ ἐπίφθεγμά ἐστι τὸ εὐοῖ*, ut Harpocration ait. Unde Alexandri milites, cum evantes et bacchantes discurrerent, dicuntur *ἀνεύσαι τὸν θεὸν καὶ βαρχεῖσαι* Arrian. V. 2. p. 198., ubi Iac. Gronov., vir doctissimus, usum vocabuli explanat, his quoque Diodori in partes vocatis, et *εὐασμὸς* apud Strabon. X. p. 721. A.; quod nihil aliud ac *βοῶν εὐοῖ, σαῖσι*, ut de Aeschine Demosth. Orat. pro Corona. p. 183., eodem Strabon. X. p. 723. A. indicante. WESS.

249. 29. *Φαίει ἐνὶ τῶν δέλτων* etc.] Si haec sana sunt et eo ordine, quo ea scripserat Diodorus, multum me fallit opinio. Interpretationem appenam, ut facilius iudices, lector: *aiunt in ipsa coena, quando merum omnibus datur, dici solere boni genii; quando vero post coenam datur vinum aqua temperatum, inclinari solere Iovis sospitatoris*. Haec luxata et ὑστερον πρότερον posita, ut evincam, primum ratione certabo. Quis credat in coense initio, dum sitis ardet, dari solitum merum, quod sitini non extinguit, imo accendit: post coenam vero exempta siti dari vinum aqua temperatum, quando sola voluptas ad bibendum incitat? imo e contrario, initio coenae et ea durante dabatur procul dubio vinum aqua mixtum, ut sitis extingueretur: post coenam vero, aut in eius fine, siti profligata, tunc dari debet merum suo gustu excellentem incitans ad bibendum. Aristophanis Scholiastes in duobus locis de hoc more loquitur, scilicet in Equitibus v. 85. ubi ait, *αἰθουέρης τῆς τραπέζης, sublata mensa, dari solitum boni genii calicem*. Ad Vespas vero v. 999. ait *ἔθος δὲ ἦν, ἐπότε μέλλοι ἢ τραπέζα αἰθεσθαι, ἀγαθοῦ δαίμονος ἐπιθήσειν, ὡς Θεόπομπος, mos erat, cum mensa mox tollenda foret, boni genii calicem sorbere, ut ait Theopompus*. Haec eum Diodori textu, ut nunc legitur, Theopompi auctoritas multum praevaleat deberet, ubi de Graecorum more agitur. Sed iure suspicor codices Diodori hoc loco mendosos esse, et pro *μετὰ* legendum esse *κατὰ*, facili mutatione. Id me omnino suadet Hesyechii locus, qui sic habet: *Ἄγαθοδαμορισταί, οἱ ὀλιγοποστῶντες*. Ratio huius significatus Theopompo egregie concordat; nempe qui parum valebant in potando, saepe inclamabant *ἀγαθοῦ δαίμονος κῶλιζα, cedo boni genii calicem*, et ideo vocabantur *ἀγαθοδαμορισταί*, quoniam post hunc calicem datum finiebatur compositio. His rationibus et auctoritatibus ductus, si mei arbitrii res foret, ita le-

gerem hunc Diodori locum: *quosin ἐπὶ τῷ δείπῳ, ὅταν ἀκραιος οἶνος δίδεται πᾶσιν, ἐπιλέγειν, ἀγαθοῦ δαίμονος, ὅταν δὲ κατὰ τὸ δείπνον δίδεται κεκραμένον ὕδρι, Διὸς Σωτήρος ἐπιμαρτυρῶν*, id est, *aiunt post coenam quando merum omnibus datur, dici solitum bonigenii. quando vero durante coena datur vinum, aqua temperatum, dici solitum Iovis hospitiarii.* PALM. Doctissimi Palmerii coniecturam respuit satis evidenter ipse Diodori narrationis, quem adtexit, *ἐπιλόγος. Ait, veteres inter coenandum (ita puto intelligenda τὰ ἐπὶ τῶν δείπνων, non ut Palmerius videtur intellexisse, initio coenae,) sibi invicem propinasse vinum meracum, idque poculum appellasse ἀγαθοῦ δαίμονος. finita vero coena, discessuris iamiam convivis, propinatum fuisse dilutum, vocatum Διὸς Σωτήρος. Iam sequitur quasi αἰτιολογία istius rei: cur scilicet post meracum denique biberint dilutum: τὸ μαριῶδες καὶ ἢ τῶν φρενῶν παρόλκσις, quae accidisset per meracum, temperetur deinde et διορθῶται diluto: quare illud poculum dixerint Διὸς Σωτήρος, quod quasi eos defenderet a periculo, quod ceteroquin ipsis discedentibus, et multo meraco calentibus, posset evenire. Haec ultima Diodori verba in suis Exercitationibus describere omisit Palmerius: nec forte ea consideravit: quod si fecisset, haud dubie Diodorum ὑστέρου προτέρου non postulasset. Haecenus doctissimus Io. Iensis in Epistola ad I. G. Grævium p. 401., plura superioribus adstruens defendendo Diodoro, quae quia copiosiora, non exscribo. Id addo, contra Palmerium Græcos plerisque omnes venire, inter postrema pocula, quae mensa sublata circumibant, Διὸς Σωτήρος κρατῆρα referentes. Sic Aeschylus et Sophocles, a scholiasta Pinclari in princip. OI. VI. Isthmionie. testimonium dicere iussi. Sic Nicetratus et Xenarchus apud Athen. XV. 14. p. 693.: e quorum quidem fragmentis ciperet, sumpto ἀγαθοῦ δαίμονος poculo mensam auferri fuisse solitam, nec desuisse tamen computationem, nisi addito prius τοῦ Διὸς Σωτήρος. Dabatur, cum πρόποσις ἀγαθοῦ δαίμονος instituebatur, ὀλίγον τι, parum vini meraci, ut solo gustu vim eius, μόνον τῇ γέσσει τὴν ἰσχὲν αὐτοῦ, conbibones experirentur, uti Theophrastus apud Athen. I. c. ait. Hinc ἀγαθαδαμονιστὰὶ Hesychio οἱ ὀλιγοποιοῦντες, non autem ex caussa, quam vir eruditus commentus est. Sed longum ne faciam, accipe haec eiusdem Athenaci, quae suspicionem Palmerii plane iugulant, ex eodem I. XV. 5. p. 675. D. *Διὰ τοῦθ' οἱ Ἕλληνες τῷ μὲν παρὰ δείπνον ἀκράτω προσδιδόμενῳ τὸν ἀγαθὸν ἐπιμαρτυροῦσι δαίμονα, τιμῶντες τὸν ἐρόντα δαίμονα. Ἴν δὲ οὗτος ὁ Διόνυσος. τῷ δὲ μετὰ δείπνον κεκραμένῳ πρώτῳ προσδιδόμενῳ ποτηρίῳ Δία Σωτήρα ἐπιλέγουσι.* quae, quia auctoris nostri verbis accuratissime respondent, vertere nihil necesse fuerit. WESS. II a ipsa Athenaci verba etsi parum commendare videantur librorum melioram scripturam *πρὸ ἐπιλέγειν* pro *πᾶσιν, ἐπιλέγειν*, ea tamen est verissima. XVII. 24.*

μάλιστα δ' ἐξοργίζου τὰς Ἑλληνίδας πόλεις ποιῶν αὐτὰς ἀπτονόμους καὶ ἀνομιολογίτας, προσμιλλέγων ὅτι τῆς τῶν Ἑλλήνων ἐλευθεροσύνης ἕκκα τὸν πρὸς Ἥρωσιν πόλεμον ἐπληροίησι.

249. 51. *Μετὰ τὸν δαίτην*] Exspunge *r* in articulo. Quid enim δαίτην masculino genere usurpavit? RHOH.

249. 45. *Τὸν ὑπὸ τινῶν Σαβάζιον ὀνομαζόμενον*] Fuit et inter Bacchi titulus *Sabazii* cognomen. Vide Io. Davis. in Cicéron. III. N. D. 23. et quae scripta a me sunt ad Hieroclis Synecdem. p. 633. Hanc tamen Iovis et Proserpinae filium *Zagreum* vero nomine fuisse perhibent Schol. Pindari ad initium Od. VII. Isthmion. et Is. Tzetzes in Lycophren. v. 355. Nonnus VI. Dionys. v. 164. de Proserpina:

— — *Αἰθερίων δὲ δρακοντείων ἡμεραίων*

*Ζαγρέα γενναμένη κερθέν βροέος.*

nimirum Iupiter, ut erat versipellis, draconis sumpta specie Proserpinae illuserat; unde de illo et Baccho poeta:

— — — — — *ταῦρος*

*Πατήρ δράκοντος καὶ πατήρ ταύρου δράκων*

apud Clementem Alex. Protrept. p. 14. WESS.

249. 50. *Ἄφ' οὗ δὴ καὶ κερατίαν* etc.] Vide L. III. 64. WESS.

249. 52. *Τῷ σώματι γενέσθαι τραχερόν*] Haec Diodorum descripsisse ex Philochoro dubitandum non censet Scaliger in Chron. Eusebii I. 26. xx., modo alterius verba cum illius dictis contenduntur. Philochori haec sunt apud Euseb. p. 29. Chron. *γρόφεται θηλέρωστος διὰ τε ἄλλης αἰτίας καὶ διὰ τὸν μισόθλητον στρατόν. ὠπλίε γὰρ σὺν τοῖς ἀρσέσι καὶ τὰς θηλείας.* Vertit Hieronym. *mythetia pavis. pingit̄ur Liber muliebri et delicato corpore propter mulieres in suo exercitu militantes: nam pariter ad arma viris feminas alligabat.* Equidem rerum quandam convenientiam in his agnosco, nec talem tamen, ut Philochorum exscriptum arbitrer. WESS.

250. 62. *Ἐισηγητὴν καὶ διδάσκαλον γινόμενον τῶν καλλίστων* etc.] Silemum, Bacchi hunc praeceptorem, veteres divinae humanaeque sapientiae rerumque gravissimarum scientia praeditum plerique perhibent, disserentemque introducunt de rebus ex interiori philosophia naturalibus et moralibus: ostendunt hoc post Is. Casaub. I. Poës. Sat. c. 2. viri doctissimi Ioach. Kuhn. et Iac. Perizon. in Aelian. III. V. H. 18. WESS.

250. 68. *Ἐσθῆσιν*] *Ἐσθῆσιν* Co. M. haud male. Vid. S. Luc. Evang. XXIV. 4., nec necessarium tamen. WESS.

*Ibid.* *Ἐσθῆσιν ἀρθρναῖς χοῦσθαι*] Mollitiae et effeminati animi vestes pietae et floribus quasi sparsae olim argumentum erant: Sybaritis propterea et Cumacis, luxu perditis, *ἀρθρνοὶ χιτῶνες* tribuuntur in Athen. XII. 5. et 6.: tribuuntur et aliis, de quibus Hadr. Iunius I. Animadv. c. 13.; quo ingenio Bacchus cum esset,

haud absurde, etsi maximo suo malo, Pentheus in Ovid. III. M. 555. de eo,

*Quem neque bella iuvant, nec tela, nec usus equorum:  
Sed madidus myrrha crinis, mollesque coronae,  
Purpuraque et pictis intextum vestibus aurum.*

Ducis Bacchi exemplum probabant, ut sit, comites, quorum vestes floridae, αἱ τοῖς ἄνδρῶν εἰκνύται ἐσθῆτες, apud Clement. Alex. II. Paedag. c. 10. p. 253. pluribus illustrantur ab Ezech. Spanhem. in Probat. Notar. ad Iuliani Caesar. p. 127. WESS.

250. 72. Καὶ μιτριγόρον ὀνομάζεσθαι] Sic praestat. Luciano D. D. XVIII. 1. propterea μίτρα τὴν κόμην ἀναδεξιέρος, Libanio T. I. p. 351. D. διάδετος ταιρίας καὶ τοῖς στεγάνοις τὰς κόμας, et Sophocli Oed. Tyran. v. 218. atque auctori Epigrammatis L. I. Florileg. C. 38. χρυσεομίτρης. WESS.

250. 74. Δημήτρον — — προσαγορευθῆναι] Dixi L. III. 62. WESS.

250. 83. Κατὰ δὲ τὰς τῶν φίλων συναστροσῶς] Vaticani ἀσαστροσῶς si malueris, Polybius, Teles, Arrianus, atque alii, quos Diatrib. de Iudaeor. Archont. c. 2. excitavi, auxilio esse poterunt. Diodorus tamen compositum praeceptat L. III. 20. WESS.

250. 95. Βαρχεῖον] Eusebius Βάρχορ, nulla urgente causa: inter enim Bacchi titulos et hic sollempnis, ut in Pausan. II. 2. et 7., variante tamen vocis tono. Vide ad L. I. 81. WESS.

250. 98. Καὶ προγενῆ — ὀνομάσαι] Orpheo Hymn. XLIV. προϊσπορος, quippe ὑπὸ κροανροῦ καὶ βροοντῆς γενόμενος, ut Dio Chrysostom. ait Orat. XXVII. p. 286. C. Iulianus Epigrammate in Zythum L. I. Florileg. 59.

Τῶ σὲ χρὴ καλέειν Δημήτριον, οὐ Διόνυσον,  
Προγενῆ μᾶλλον καὶ Βρόμιον, οὐ Βρόμιον.

quos quidem Iuliani versus non praeteriit accuratissimus Is. Casaubon. in Strabonis XIII. p. 932. B. προγενῆ τὸν Διόνυσον memorantis. WESS.

250. 99. Θριάμβον δ' αὐτὸν ὀνομασθῆναι] Sic triumphare appellatum, quod cum imperatore milites redeuntē clamitant per urbem in Capitolium eunti, in triumpho, id. Idque a Θριάμβω, Graeco Liberi patris cognomen, potest dictum esse. Haec Togatorum doctissimus Varro L. V. L. L. p. 58. ubi in Coniect. Diodori haud oblitus est III. Scaliger. WESS. Dionysius p. 222. Schaeff. Ταρχε Θριάμβε.

251. 7. Καταπύγωνα] In omnibus nostris exemplaribus scriptum est κατὰ πύγωνα duobus verbis: ego unum faciens ex duobus scripsi καταπύγωνα, ut illa ipsa exemplaria habent in Ioco, qui est supra in fine paginae 137. et principio 138. STEPH. Ego vero in Codd. excerptis, quibus utor, nihil huiusmodi reperio. De Baccho barbato III. 64. et Is. Casaub. I. Sat. Poës. c. 2. p. 59. WESS.

251. 9. Ὁραῖον καὶ τροφεῶν] Bacchus Ὠραῖος θεὸς Aristoph. Ran. v. 397. cum nota Ezech. Spanhem. WESS.

251. 12. Καὶ Σατύρους — περιάγεσθαι] Paria de Aegyptiorum Osiride superius L. I. 18. De Musis autem, Bacchi comitibus, Strabo X. p. 717. C. WESS.

251. 24. Συνόδους συστήσασθαι τῶν — τεχνιτῶν] Ultima neglexerat doctissimus interpres. Οἱ περὶ τὸν Διόνυσον τεχνῖται, sive Διονυσιαzoὶ τεχνῖται, in Aetolorum Decreto inter monumenta Asiatica Edm. Chishul p. 106. sunt artifices scenici in Ciceron. Orat. pro Archia c. 5. et Sueton. Caesar. c. 84. Plutarch. T. II. p. 87. F. καὶ μὴν τοὺς περὶ τὸν Διόνυσον τεχνῖτας ὁσῶμεν ἐκλελυμένους καὶ ἀποθνήσκουσιν, καὶ οὐκ ἀκριβῶς πολλάκις ἀγωνιζομένους ἐν τοῖς θεατροῖς ἐφ' ἑαυτῶν. et scenicos artifices videmus saepe remissos ac languidos, nec accurate, soli cum in theatris sunt, certantes. Eundem in modum Polybius Excerpt. p. 1416. Artemidor. l. 19. Horum variis in locis Synodi seu conventus erant, veluti Lebedi apud Strabon. XIV. p. 952. ἐνταῦθα τῶν περὶ τὸν Διόνυσον τεχνιτῶν ἡ σύνοδος καὶ κατοικία τῶν ἐν Ἰωνίᾳ μέχρι Ἑλλησπόντιον, ἐν ἧ παρήγορος τε καὶ ἀγῶνες καὶ εἰς οὐκ ἐπιτελοῦνται τῷ Διόνυσῳ. Antea, ut ibidem addit, Tei, tum Ephesi, unde in Myonesum ab Attalo, Pergamenorum rege, fuerant traducti, frequentes egerant: atqui hi sunt Attalisticæ, quorum psephisma publicavit idem Chishul atque explicavit Antiq. Asiatic. p. 140. Similem etiam Synodum Romae labentibus annis instituisse videntur, cuius SYNHODI ARCHIEREI, PRIMI SACERDOTIS SYNHODI meminerunt vetusti lapides, de quibus Cl. Salmas. in Spartiani Hadrian c. 14. et Octav. Falconer. ad Inscript. Athlet. p. 2303. edit. Gronov. WESS.

251. 32. Υἱὸν εἶναι Διονύσου καὶ Ἀγροδίτης] Placuerunt hi eius natales Lampsacenis, praecipuis flagitiosi numinis cultoribus, teste Pausan. IX. p. 771., et Criticis veteribus in Apollon. Rhod. l. 932. Aliis Bacchi Nymphaeque Chiones filius habebatur, ut Schol. Theocrit. ad Idyl. l. 21. indicat: aliis e Titanibus aut Idaeis Dactylis unus, de quibus Lucian. de Saltat. c. 21. WESS.

251. 35. Τοὺς παλαιοὺς μνθροδοῦς etc.] Hoc non temere sprevero, tametsi Euseb. cum illis faciat, qui μνθροδοῦς praeferunt. Verum autem esse, quod hic affirmatur, vel illud Iuvenalis, vitreo bibit ille Priapo, probaverit. Plura si desideres, satis fortasse tibi faciet L. Begerus Thesaur. Brandenb. T. I. p. 261. etc. WESS.

251. 44. Μόνον δὲ τὸ αἰδοῖον εἰς τὸν ποταμὸν ὄψαι] Uberius haec explicuit L. I. 22. WESS.

252. 51. Τινὲς δὲ Τέχωνα] Sic oportuit. Etymologus, Τέχων, Τέχωνος, δαίμων ἐστὶ περὶ τὴν Ἀγροδίτην. Hesychius, Τέχων, ζῆσι τὸν Ἐφῶν, ἄλλοι δὲ τὸν περὶ τὴν Ἀγροδίτην. ita enim scripserat, quod nec Io. Meursii diligentiam L. II. Athen.

Attic. c. 14. fugit. *Typhon* e novitiis Atticorum diis erat, quem Mercurium alii, alii Priapum aut Veneris assecclam perhibebant. *Typhon* diversi fuit ingenii, sed qui et locum eius invasit in Clement. Alexandr. Protrept. p. 80., eodem Meursio egregie animadvertente. WESS.

252. 56. Ὀπωροφύλακα τῶν ἀμπέλων ] Unde Stephan. ἀμπέλων deprompserit, iuxta cum ignarissimis scio: possumus quidem certe eo carere. Φιλάμισσαν ἐν ἀμπέλῳσιν Cantic. Salom. I. 6. et ὀπωροφύλακιον ἐν σικνηράτῳ Esai. I. 8. non dissimili sententia Alexandrini interpretes. Ipse Priapus in Antistii Epigrammate ἀρωροφύλαξ πολυτελέαις ἐν ἀρούραις, et in alio Luciani ξηρῶν κλιματίδων φύλαξ L. IV. Florileg. p. 177. WESS.

252. 58. Ἐὶ δὲ πρὸς τοὺς βασιλεύοντας etc. ] Huiusmodi, puto, erat, quod προβασκάκιον ἐν σικνηράτῳ, οὐδὲν φυλάσσον Epistol. Ieremie V. 70. appellat, quodque egregie interpretatur scholiastes, προβασκάκιον, inquit, καὶ ζεράμβηλα Ἑλλήνων οἱ λόγοι καλοῦσιν, ἅτινα ἰστυῶσιν οἱ ἀρωροφύλακες πρὸς φόβον ὀρνέων, ἢ καὶ ἀνθρώπων ταῦτα δὲ καὶ μορμολύχεια καλοῦνται. Quo quidem scholio nihil aptum magis est ad illustrandum Hesy-chii ζεράμβηλον. WESS.

252. 65. Τυχρὸν τῆς ἕξ ἀμφοτέρων — προσηγορίας ] Ipse Hermaphroditus ea prepter in Ovidii IV. M. 384. ad Mercurium et Venerem:

— — Nato date munera vestro,

Et pater et genitrix, amborum nomen habenti.

Vide et v. 288. et Lucian. D. D. XV. 2. et Manethon. I. 127. WESS.

252. 72. Ἀποφαίνονται τέρατα ἐπάσχειν ] Plinius VII. N. H. 3. Gignuntur et utriusque sexus, quos Hermaphroditos vocamus, olim Androgynos vocatos, et in prodigiis habitos, nunc vero in deliciis. Qui mala portendere cum vulgi superstitione censerentur, ea ut averruncarentur, aut in proximum mare demergebantur, aut vivi exurebantur: posterioris generis exempla dabit auctor Eclog. I. L. XXXII., prioris Scheffer. ad Iul. Obsequent. de Prodig. c. 81. WESS.

252. 80. Ὅμοιοι δὲ τῶν ποιητῶν ] In his et Minnermus, de quo Pausan. IX. 29. p. 766. Ἥμενος δὲ — γινῶν ἐν τῷ προσομιῶν θεγατέρας Ὀδύσεον τὰς ἀρωροτέρας Μοῦσας, τοῦτων δὲ ἄλλας νεοτέρας εἶναι Λιδίαι παῖδας. De numero Musarum similis discordia: Plutarch. VIII. Sympos. I. I. in confesso esse ait, veteres tres tantum novisse Musas: Hesiodumque earum numerum auxisse. Ciceronem III. N. D. 21., et quae illi adscripsit Io. Davis. vide. WESS.

252. 86. Ταῦτα λέγει ] Ταῦτα redundat. Versus autem Homericus Hymn. in Apollinem sic legitur numero 189., Μοῦσαι μὲν θ' ἅμα πᾶσαι ἀμειβόμεναι etc. RHOD.

252. 88. Ἡσίοδος δέ] In Theogonia versu 77. RHOD.

253. 99. Παρθένους τε αὐτὰς οἱ πλείστοι — μυθολογοῦσι] Vix tamen ulla in novenario earum numero reperitur, e qua non aliquis furtivis amoribus conceptus legatur: quorum haud paucos nobis annumerat Eustath. in Homer. p. 830., plures Tzet. ad Hesiod. Op. et D. princip., sed in plerisque vitiosus. WESS. Conf. Schol. Vat. Eur. Rhesi v. 346.

253. 3. Ἀπὸ τοῦ μνεῖν τοὺς ἀνθρώπους] Placuit ea originatio Etymologo, estque multo probabilior eorum commento, qui apud Plut. T. II. p. 480. E. et Synes. in Dion. p. 42. C. ex ὁμοῦ ὀύσας conflatum earum nomen opinabantur. Ego cum Platone in Cratyl. p. 406. A. fecero, ἀπὸ τοῦ μῶσθαι καὶ τῆς ζῆτισεως ab investigando derivante: a qua sententia non ablutunt Cornut. Nat. Deor. c. 14. et Helladius in Photii Cod. CCLXXIX. p. 1582. Vide Frid. Sylburg. Animadv. in Clenardi Grammatic. p. 529. WESS.

253. 10. Ἀπὸ τοῦ θάλλειν ἐπὶ πολλοὺς χρόνους] Ita vulgo legebatur, abrupta et defecta sententia. Ego Codd. vetustos secutus explevi. Nomina autem haec Musarum multimodis explicari posse ex Plutarcho VIII. Sympos. 14. et Cornuto N. D. c. 14. videbis. WESS.

253. 18. Ἀπαθανατιζομένοις τῇ δόξῃ] Carminibus aeternae famae traditos; quo modo Eupolis dicitur ἀπαθανατίσαι τοὺς ἄνδρας Longino de Styl. Sublim. c. 16. p. 122. et Hippon cultissime ἀπαθανατίσαι τὸν θάνατον τὸν ἑαυτοῦ Clement. Alex. Protrept. p. 48. Nec minus venuste, etsi usu diversiore, Philosophus Ethic. X. 7. χορὴ δέ οὐ, inquit, κατὰ τοὺς παραιοῦντας ἀνθρώπων φρονεῖν, ἀνθρώπων ἔντα, οὐδὲ θνητὰ τὸν θνητὸν, ἀλλ' ἐφ' ὅσον ἐνδέχεται ἀπαθανατίζειν, i. e. immortalitatem meditari atque aeterna moliri. Sed vide ad Lib. I. 1. et II. 20. WESS.

253. 24. Μεταβιβάσομεν] Recipe μεταβιβάσομεν, quo modo alias in transiitione loquitur. RHOD. Simile vitium supra II. 48. WESS.

253. 33. Καὶ τὸν λόγον ἐξισῶσαι τοῖς τιμωμένοις] Una, sed maxima difficultas, quod haec aequare dicendo, arduum. Sic Plin. l. VIII. Ep. 4. Sallastius vero Catiliu. 3. imprimis arduum videtur res gestas scribere: primum quod factis dicta sunt exaequanda. Atque haec perpetuae historicorum querelae; estque profecto non omnium ἰσοδόξος τῶν ἔργων ὁ λόγος, ut Pericles apud Thucyd. II. 42. ait. Libanius ea propter T. II. p. 102. prorsus ad Diodori mentem, πᾶσιν δέ μοι δοκεῖ χαλεπὸν εἶναι τὴν ἐφημέριαν ταῖς τῶν βασιλέων ἀρεταῖς ἐξισῶσαι. WESS.

254. 45. Ἐξ τῆς ἀσθενείας τῶν τῶν ἀνθρώπων] Nostri temporis hominum; qui οἱ τῶν Straboni I. p. 67. A., οἱ τῶν ἀν-

ῥωοποι Plutarcho T. II. p. 478. C. et Homero sacpissime Οἶοι  
τῶν βροτοί εἶσι. WESS.

254. 52. Καὶ ταῖς ἐπισημασίαις συναύξομεν etc.] Signi-  
ficationibus, acclamatione, plausu, ut bene interpretes. Polyb.  
VI. 4. εἰζὸς μὲν τὸν τοιοῦτον ὑπὸ τοῦ πλήθους ἐπισημασίας  
τρυχάνειν ἐννοεῖται, non est dubitandum, quin hunc acclamatio-  
nibus prosequatur faustis multitudo. Eratosthen. Catasterism.  
c. 28. de sagittario ex Sositheo, συμμίσγοιτα ταῖς Μούσαις,  
καὶ ἀζοῦντα αὐτῶν, ἐπισημασίαις ἐπαρέσει ζῴτον ποιοῦντα.  
Sic lego: non ut vulgo ἐπὶ σημασίας, probante Schol. Germa-  
nici et vertente: qui inter Musas saepius commemoratus plausu  
cantus earum distinguebat. Pro quibus Noster XVII. 106. ζῴτον  
μεγάλῳ τὸ γεγονός ἐπισημαίνεσθαι. Polyb. I. 32. μετὰ ζωνυγῆς  
ἐπισημαίνεσθαι. Cicero I. Attic. 16. Itaque et ludis et gladi-  
atoribus mirandas ἐπισημασίας sine ulla pastoricia fistula aufe-  
rebamus. Vide ibi Victorium et infra XI. 26. WESS.

254. 55. Ἐξημερῶσαι] Ἡμερῶσαι Co. M. compositum au-  
ctor mavult. Vid. I. 15. WESS.

254. 60. Τὴν πατροπαράδοτον ἐπέβειαν διαγλύπτειν]   
Simili usu πατροπαράδοτον εἴνοιαν XV. 74. XVII. 2. et πατρο-  
παράδοτον ἡγεμορίαν XVII. 4. dixit: quorum pleraque locorum  
non fugerunt diligentiam eruditissimorum virorum L. Bos et Io.  
Alberti, ἀναστροφῆν πατροπαράδοτον S. Petri Epist. I. cap. I.  
18. explicantium. WESS.

254. 65. Ἡλεκτρούονα] Ἡλεκτρόονα omnes. Vid. infr.  
c. 61. WESS.

254. 66. Τὴν Πέλοπος Ἐγρυμέδαν] Matrem Alcemenes  
non Eurydicen, ut Scholion perperam indicat, sed Lysidicen,  
Pelopis ac Hippodamiae filiam, nominat Plutarchus, auctor gra-  
vissimus et fide dignus, quem merito sequimur. Tametsi quidam  
Ἀναχο, filiam Alcaci, matrem Alcemenae assignent: quod nego-  
cium hic nobis minime facesset, quibus haud dubium est, quin  
Ἐγρυμέδαν pro Ἀνσιδίην a librario, aliud tum cogitante, sed  
tamen ultimas duas syllabas ex nomine Ἀνδρομέδαν quod paulo  
antecedit in memoria adhuc retinente, suppositum sit. Atque  
haec finis ratio fuerit. Quod ad principium, ex Ἀνσι in Ἐγρυ  
facillimam esse mutationem, nemo non videt. RHOD. Τὴν Πέλο-  
πος Ἐγρυδίην] Sic reflexi, obsecutus vetustis Codd.; quod pra-  
vum quidem est, nec longe tamen remotum a Ἀνσιδίην, quam  
matrem Alcemenae dat Plutarch. in Thes. p. 4. A. Apollodoro II.  
Biblioth. 4. 5. breviumque scholiorum auctori Iliad. Ξ. 323.  
Ἀναχο, Alcaci filia, Alcemenes mater dicitur. Vid. et Pausan.  
VIII. 14. WESS.

254. 71. Περὶ αὐτὸν ἀρετὴν] Τὴν ἀρετὴν αὐτοῦ. ut L.  
II. 46. διαβεβοημένης — τῆς περὶ αὐτὰς ἀρετῆς. WESS.



254. 74. *Τριπλασίαν τὴν γύατα ποιῆσαι*] Hinc Herculem Lycophron v. 33. *τρίσπλερον λέοντα* vocat, monentibus Schol. Homeri Iliad. ε. 323. Tzetze et Io. Meursio: nimirum oportebat ex hoc Iovis et Almenae congressu proseminari magnum aliquem et multis certaminibus insignem Deum, *μέγαν καὶ πολέεσθλον θεόν*, qui quidem una nocte ut absolveretur, fieri non poterat: *τοῦτον ἐν μιᾷ νυκτὶ ἀποτελεσθῆναι ἀδύνατον*, ut urbanissimus scurra Lucian. D. D. X. 1. iocatur, Aristide T. I. p. 56., sed serio, quae hominis superstitio, adstipulante. WESS.

255. 87. *Κατ' τὴν ἐκείνην*] Ordinem apostrophus ostendit *κατ' ἐκείνην τὴν ἡμέραν*. RHOD.

255. 89. *Συνεργὸν ἔχουσαν Ἐλλείθριαν*] Poetam vide Iliad. T. 118. Apollodor. II. 4. 5. et Pausan. IX. 11. WESS.

255. 1. *Ἠεδίον Ἠρόκλειον*] Thebani locum peregre advenientibus ostendebant, in quo Iuno Herculi infanti mammam praebuerat apud Pausan. IX. 25.; alii rem in coelo gestam fabulantur, circuli que lactei originem inde derivant, ut Eratosthen. Catasterism. cap. ult. WESS.

255. 13. *Ὁ δὲ παῖς οὐ καταπλαγείς*] Sequor Euseb. et illi concordēs Codd.; augent additae voces, ut statim cap. 10., seriem rei gestae, de qua Apollodor. II. 4. 8. WESS.

255. 15. *Διόπερ Ἀργεῖοι, πνθόμενοι τὸ γινόμενον etc.*] Apollinis responso Herculis hoc nomen, cum prius Alcaeus esset, Eustath. in Homer. p. 989. et Is. Tzetz. ad Lycophron. v. 662., etsi in sententia et scriptura oraculi discordes, contribuant. Vide superius I. 24. WESS.

255. 27. *Ἐργίνω τῷ βασιλεῖ τῶν Μινυῶν*] Orchomeniorum rex erat Erginus, qui captis Thebis gravique tributo pressis, odii, non nisi Orchomeniorum exitio, de quo L. XV. 79. terminandi, civitatibus his materiam dedit. Belli initium et causas exponit Pausan. IX. 37. et Apollodor. II. 3. 11. WESS.

255. 29. *Τῶν δεδολωμένων ὑπεροχὴν*] Forte *δουλευσάμενων* scriptum fuit, vel quod verosimilius *δεδολωζότων*. Tum sic vertendum erit, *eminentia illorum, qui iugo servili Thebanos oppresserant, nequaquam etc.* Ego ne quid temere mutarem, τῶν δωλωμάτων, quamvis minime placeat, interim legi. RHOD. Non sequor Rhodem. Vulgata mendii suspicione caret. Thomas Magist. *Ἰουλοῦμαι τὸν δεῖνα Ἀττιζοὶ, οὐ δουλώ.* cuius decretum ex omni parte verum etsi non sit, saepe tamen ea forma adhibetur. Euripid. Supplicib. v. 492. — *καὶ τὸν ἡσσονα δουλοῦμαι ἄνδρες ἄνδρα καὶ πόλιν πόλιν.* Aristides T. II. p. 21. *πάντα δουλοῦται καὶ κατέχει ἡσθίως.* Imo ne quid dubii supersit, auctor ipse inferius c. 28. *διὰ τὸ, Θιγέα δεδολωσθαι τὴν ἡμέραν τῶν Ἀμαζόνων*, suum egregie vindicans. WESS.

256. 32. *Ἐπρηματομένους*] *Εἰσρηματομ.* Co. M. ut L. I. 18. sed vide Pausan. VII. 12. WESS.

*Ibid.* Ἀχρωτηριάσας ἐξέβαλεν] Naribus auribusque praecisis. Ἀποτεμιῶν αὐτῶν τὰ ὄτια καὶ τὰς ὄϊτας καὶ διὰ σχοινίων τὰς χεῖρας δέσας ἐκ τῶν τραχήλων Apollodorus ait: qua e crudelitate Herculi nomen venit Πυροζολούστῆς apud Pausan. IX. 25. p. 758. WESS.

256. 39. Οὐ γὰρ ἦν εὐρεῖν κατὰ τὴν πόλιν etc.] Par olim conditio Israëlitarum principio regni Saulis, I. Samuel. XIII. 22. Erat enim hoc e veterum inventis ad domitos in officio continendos, ne quo ferro, nisi ad agrum colendum, uterentur: quare et Postumius Ligures ita exarmavit, ut viv reliquerit ferrum, quo terra coleretur, in Flori L. II. 3. cum nota Freinshem. WESS.

256. 46. Αὐτόν τε τὸν Ἐργῖνον ἀνέλε] Sic in Marmore Inscript. Don. I. 98. et Apollodor.; Scholiastes Theocriti Idyl. XVI. 105. Herculem de Orehomeniis et eorum rege Ἐργῖνω commissam pugnam victoriam reportasse refert; satis quidem recte, modo Ἐργῖνω refluisset: Pausanias enim L. IX. 37. Erginum post acceptam cladem in plures annos superasse adfirmat. WESS.

256. 64. Τοῦτων δὲ παραθρότων] Opinor scriptum olim fuisse προσταθρότων, atque ex scribendi compendio, ut saepe, alterum progenitum. Iovis atque Apollinis mandata, quorum meminerat, id persuadent. Vid. ad L. I. 2. WESS.

256. 66. Οὐδαμῶς ἄξιον ἔχοιτε δεῖν τῆς ἰδίας ἀρετῆς] Laudem illi Codd. meruissent, qui ἄξιον neglexerunt, si ineptum, et nihili, hoc quidem loco, verbum, δεῖν praeteriissent: quod cum pertinacissime defendant omnes, rectius erit ἄξιον ἔχοιτε εἶναι τῆς etc., ut bene advertit Cl. Io. Iensius in Epist. ad Io. Georg. Graevium, p. 407. WESS. Wesselingio favet MS. Vind., Iensio Diodorus supra p. 90. 24. ἄδικον ἔχοιεν εἶναι. 142. 17. κρινόντων ἄξιον εἶναι.

256. 74. Τούτους ὡς πολεμίους κατετόξευσε]. De horum numero et mortis genere magna veteris inter lis est, diligenter exposita a criticis ad Pindari Isthmaionie. Od. IV.; Is. Tzetz. in Lycophron. 38. καὶ τοὺς τέσσαρας παῖδας αὐτοῦ τοξείσας ἀνέλεν, Ὀρίτην, Θιομίμαχον, Δημοζούρτα καὶ Ἀριστιάδην. ὁ δὲ Πίνδαρος ὁκτὼ λέγει παῖδας — — Στεροὶ δὲ καὶ δύο εἰσὶν Ἰγυλλέους τοῦ ἀδελφοῦ. Ex quorum posteriorum numero Nicol. est Damascenus in Excerpt. Vales. p. 441.; cum Tzetze vero consentit Schol. Luciani D. D. XIII. 2., in Δημοζούρτας nomine adaeque vitiosus, ut Cel. T. Hemsterh. ostendit. WESS.

*Ibid.* Πόλις] Πόλις C. M. frequenti librariarum more. Conf. II. 48. WESS.

257. 82. Ἐθρον τὸν ἐν Νεμ. V. aliique, nec absurde. Vide II. 46. WESS.

257. 83. Ἀτρωτός δὲ ὢν σιδήρῳ] Leonem Nemaëum, quem Luna nutrierat, in antro Amphitreto Atrotum necavit. Sic lego in Hygin. Fab. XXX.; nam Amphitrese, ut in ceteris, ineptum est.

Leo in monte *Treto*, quod perforatus esset ex re ipsa dicto, cubile posuerat: hinc antrum eius *amphitretum*. Habet montem *Τρητόν* prope Nemeam Pausan. II. 15., et Leonis originem lunarem Aelian. XII. H. A. 7. insuperque ex Achille in Commentariis Arateis Politian. Miscell. c. 17. WESS.

257. 94. *Ἄπαν τὸ ἴδιον σῶμα περιλαβὼν*] Alii fortasse se probabit *περιβαλὼν*, quos non sequor, tametsi nihil vulgatius horum commutatione in vetustioribus schedis, ut L. XI. 30. videbitur. Obstat et vocis forma et quod praecessit *περιδέμενος*. WESS.

257. 96. *Ἦς ἐξ ἐνὸς σώματος ἐκατὸν ἀχλίνες*] Totidem capita illi affinxit Ovid. IX. Met. 70.

*Vulneribus foecunda suis erat illa: nec ullum  
De centum numero caput est inpune recizum,  
Quin gemino cervix herede valentiôr esset.*

Novem duntaxat Gregor. Nazianz. Orat. III. p. 92. C. Septem alii, de quibus ad Ovidium Nobilissim. Heinsius et in Hygin. Fab. XXX. Muncker. WESS.

257. 4. *Ἀμπάδι καιομένη ἐπικαλεῖν*] Nicandrum Ther. v. 688. et Apollodor. II. Bibl. 4. 2. adi. WESS.

257. 8. *Ἐρμάνθιον* Co. quod praestat ex Ethnographi praeepto. WESS.

257. 9. *Ἐν πεδίῳ τῆς Ἀρκαδίας*] Quod Mutin. schedae offerunt singulare est, et ea dignitate, ut paene verum, modo *Ἀμπεία* scribatur, esse iudicem. Aper Erymanthius in monte, unde illi nomen, incubabat: pars Erymanthi erat Lampea: *εἰη δ' ἄν τοῦ ὄρους τοῦ Ἐρμάνθιον μοῖσα ἢ Ἀμπεία* Pausan. ait L. VIII. 21. Immo eo in montis clivo, cui Lampea titulus, aper cubilia habebat. De eo enim Apollon. Rhod. I. 126.

— — — *Ὅς ῥ' ἐνὶ βήσσης*

*Φέρβετο Ἀμπείης, Ἐρμάνθιον ἀμμένα τύφος.*

Bene ergo *ἐν τῇ Ἀμπείᾳ τῆς Ἀρκαδίας*. Vulgatum, quod scholion huius esse arbitror, sua in sede reliqui, ne nimium unis schedis tribuisse viderer. WESS.

257. 16. *Ὡς τὸ ἄθλον*] *Τὸν* haud dubie legendum. Rhod. Rhodom. sequitur Ammonium, qui *ἄθλον καὶ ἄθλον διαφέρει. ἄρσενιζὼς μὲν γὰρ τὸν ἀγῶνα διλοῖ, ἀνδριζὼς δὲ τὸ ἄθλον.* quod discrimen etsi recentiores Graeci fere observent, vetustissimis negligebatur: Homerus certe quidem *ἄθλον* sive *ἄθλον* pro certamine posuit Odyss. T, 584. Ω. 85.; fecit et Pindar. Olympion. Od. I. 5. atque alii: unde *Herentis athla* in princip. Fab. XXX. Hygini. Noster *τὸν ἄθλον* mavult: quare et hic et cap. 25. ac c. 41. corrigendum censeo. Vid. Eustath. in Hom. p. 1879. WESS.

257. 17. *Ταμινεσάμενος ἀκριβῶς τὴν συμμετρίαν*] Dicuntur milites *ταμινεσάμει*, cum non omnes suas vires primo impetu effundunt, sed eas, ut Seneca ait, *dispensant*. Dio Chryso-

stom. Orat. XI. p. 177. de Hectore cum Achille congresso, ἄτε οὐδὲν οὐ ταμεινόμενος ἐν τῷ ἀγῶνι. ubi Is. Casaub. vocis usum eleganter, sicuti et ad Sueton. Caes. c. 32., explicuit. Hoc qui negligunt, illis Ioseph. IV. B. I. 1. 6. τῆς ὀρμῆς τὸ ἀταμίετον tribuit. WESS.

258. 20. Εἰς χαλκοῦν πίθον] Aut bis se meticulosus homo illud in dolium abdidit, aut discedit Noster ab Apollodoro, qui Nemeo allato leone illum in id vas demergit, L. H. Biblioth. 4. 1. WESS.

258. 37. Πρὸς τοὺς ἀπὸ μὲν μητρὸς θεοὺς] De Centaurorum origine copiosius infra cap. 72. WESS.

258. 42. Ἐτεροὶ δὲ βορφόροις πελέκεις] Hesiodus Hercul. Scut. v. 190. armat eos ἔγχεσιν ἢ δ' ἐλάταις hastis atque abietibus. Nostri βορφόροι πελέκεις secures sunt earum ex genere, quibus victimas caedebant: quare in poetae Odys. I. 442.

— Πέλεκυν δὲ μενεπτόλεμος Θρασυμήδης

Ἵξυν ἔχων ἐν χειρὶ παρίστατο; βοῶν ἐπικόψων.

et βορφόρος victimarius Pausan. I. 24. p. 57. et βοιτέπος Apoll. Rh. II. 91. ὁ τοὺς θρομένους βοῶς τῷ πελέκει τέπτων, sicuti explicant Critici veteres. WESS.

258. 46. Ἐρηρσιμένῳ] Ἰρηρσιμένῳ Co. M. Vide I. 47. WESS.

258. 52. Ἀργεῖος καὶ Ἀμφίων] Apollodorus Ἀργιον καὶ Ἀργιον Centauros cum Hercule committit; haud scio an hinc adiuvandus, an contra Diodorus. Variant in horum nominibus vetusti scriptores, alios atque alios commemorantes. Ὀρεῖον eiusque cum Hercule certamen non praeteriit Pausan. III. 18. p. 256. Tu Hesiod. Scut. Herc. v. 185. vide. WESS.

259. 66. Φολόη γὰρ ὀνομαζόμενον] Satis itaque inproprie Centauros Oppian. II. Cyneg. v. 5. adpellat

Ἀμφίποδος Φολόης ἀνεμώδεος ἄγρια φῦλα

Θηρομυγῆ.

et Statius III. Theb. v. 604. Pholoës habitatores opacae. Id excusari difficulter poterit, quod montem eum ex media Arcadia in Thessaliam transferat Lutatius eum in poetae versum Achilleid. I. 238. WESS.

259. 72. Τὴν χρυσόκερον — ἔλαφον] Cornutam hanc cervam plerique perhibuerunt, et tametsi eos redarguat Aristoteles de Poës. c. 25., tuetur Aelian. VII. H. A. 39. scholiastesque Pindari in Od. III. Olympion. et praeter ceteros Ezech. Spanhem. in Callimachi H. in Dian. v. 102. WESS.

259. 75. Τῆς κατὰ τὸ σῶμα ῥώμης] Τοῦ σώματος Co. M. vulgatum Diodori est, ut I. 65. saepeque alias, et statim iterum. WESS.

259. 76. Διὰ τῆς στειβίας χειρόσασθαι] Praestat στειβίας. Στειβεῖν enim, vel potius στιβεῖν, venatorum canumque est, cum per saltus camposque feras vestigando quaerunt. Nicol. Damascen. Exc. Vales. p. 449. τὸν δὲ ἐν κεννηγεσίους θη-

ῥῶν ἀναγκάζων καὶ στιβεύειν ἐν ὕρεσιν. Sic lego: neque enim στιβεύων ibi opportunum. Noster L. V. 3. τοὺς περιγῆιν αἰωρό-  
 τας κέρως μὴ δένουσαι στιβεύειν. unde in fragmento Sostrati  
 στιβεύεται κέρως apud Stobensem Ioan. Serm. LXII. p. 403. sunt  
*canes vestigatores*, sive *odorisequi*, sicuti dicuntur ποῖται, quem  
 ego Livium Andronicum nunquam putavero, in Grammat. Mar.  
 Victorini L. I. p. 2512. WESS. Στιβίαις reponit Rhod. in Add.

259. 85. Χειρώσασθαι τὰ ζῶα] Nihil necesse mihi vide-  
 tur, ut hinc quidquam demutetur. De avium multitudine consen-  
 tit Apollodor. II. 4. 6. sed ab editoribus male habitus, εἰς ταύτην,  
 paludem Stymphalidem, ὕρειαι σννέφυγον πλοῦδες etc. Scripti  
 libri ἄλλετοι, quod arripī oportuerat, immensam multitudinem  
 distincte explicans, sicuti in Polybio III. 100. ἄλλετον πληθῶος,  
 et Plutarche T. II. p. 420. B. ἄλλετοι εἰῶν περίοδοι. Quod enim  
 nunc legitur πλοῦδες nimis est poeticum, atque ex Apollon. Rho-  
 diō translatum. WESS.

259. 87. Κατασκευάσας χαλκῆν πλατάγην] Etymolog.  
 πλαταγή, κοῦτάλιον ἐστι χαλκῶν, tono voci ex Herodiani sen-  
 tentia adscripto. Apollon. Rhod. II. 1057.

Ἄλλ' ὄγε χαλκείην πλαταγήν ἐνὶ χειρὶ τινάσσειν  
 Δούπει ἐπὶ σοπίης περιμήκεος.

ubi Critici veteres plura. WESS.

259. 92. Τὴν ἀλλήν τοῦ Ἀγγέου] Hoc malo: sic et c. 33.;  
 Ἀγγέου poetarum est, quamquam nec solutae orationis scriptori-  
 bus plane insolens, uti admonere haud neglexit Sylburg. in Pau-  
 san. V. I. p. 377. WESS.

259. 97. Τὸν Πηρεῖον καλ. ποταμὸν] Peneum Thessaliae  
 fluvium esse pueris fere notum est. Sed qua naturae conversione  
 certe miranda in Peloponnesum migravit! Hoc populus librario-  
 rum curat scilicet. Restituamus ergo quasi postliminio τὸν Ἀυγείον,  
 nativum Elidis in Arcadia Peloponnesi amnem. Haec Rhodom.  
 quae deinceps deleri iussit: Nam, inquit, et Peloponnesus fluvium  
 habet Peneum, qui primariam Elidis urbem perfluit, ut Strabo anno-  
 tat I. VIII. et Gerbelius in eruditiss. Graeciae descriptione: ὁμῶν-  
 μίας causae sunt variae populorum Graeciae obmigrationes. RHO-  
 Δ. Τὸν Πηρεῖον καλούμενον ποταμὸν] Hunc fluvium ad Augiae  
 stabulum repurgandum ab Hercule derivatum Pausanias L. V. I.  
 p. 377. non Πηρεῖον, sed Μινυῖον vocat. Est tamen etiam Pe-  
 neus in Eleorum regione, teste Strabone lib. VIII. p. 519. B., ubi  
 eum ter nominat. Ideo nihil mutandum: credo eundem esse Pe-  
 neum Diodori et Strabonis et Minyciam Pausaniae. Scilicet Πη-  
 ρεῖος Μινυῖος dictus est forte ad differentiam Thessalici Penci.  
 Nam Minyae in iis partibus etiam habitavere, ut nos docet Strabo  
 eodem libro VIII. p. 533. B. Non potest autem intelligi de Anigro,  
 qui etiam Minycius dictus est, qui per arenas fluens et gravis odo-  
 ris aquas volvit, non est commodus educationi boum, et qui non

poterat deduci ad Elidem, ubi regnabat Augias, multo terrarum spatio et ipso Alpheo intercedente. Vel igitur apud Pausaniam legere oportet Πηρειῶν pro Πηριῶν, quod non puto, eo quod Anigrus etiam Πηριῶς dicebatur, vel Peneius et Minycius idem et unus fluvius fuit, quod credo. Sed hanc quaestionem fusa tractamus in nostra Graecia Antiqua. PALM. Rhodomanni coniecturam probant schedae Coisl. et Mutin., estque ad hanc rem *Alpheus* satis opportunus: nec minus tamen commodus *Peneus*. Apollodorus II. 4. 5. de stabuli Auegae purgatione ab Hercule inchoata, καὶ τὸν Ἀλφειὸν ποταμὸν, καὶ τὸν Πηρειὸν σύνεργως ῥέοντα παροχετεύσας, ἐπίργαγεν. Eum itaque aliorsum ne derivemus. In Pausania vero, mei si res arbitrii foret, libens legerem, καὶ τοῦτο ἐξεργάσατο ἐκτρέψας τοῦ Πηρειῶ τὸ ῥέυμα ἐς τὴν κόπρον. tum quod Apollodorus, Diodorus, Ptolemaeus et Strabo hoc nomine flumen adpellent, tum praeterea quod simili paene peccato ex Peneo Πηρειὸν librarii fecerint in Strabon. VIII. p. 519. B., reprehensi a Xylandro suo merito. WESS.

260. 6. Ἐπ' αὐτῷ ναυτοληθεις] Hoc malui, ut ambiguum vitaretur. Hercules tauro vectus mare, quod Cretam et Peloponnesum distinguit, tramisit. Servium in Aeneid. VIII. 294. et inf. c. 61. vide. WESS.

260. 9. Κάλλιστον τῶν τόπων πρὸς τηλικαύτην etc.] Philostratus idem docet, loci amoenitatem et comoda describens I. VIII. Vitae Apollon. c. 18. WESS.

260. 12. Στεφανίτην δ' αὐτὸν κατεσκεύασεν] Certamina, ὧν τὰ ἀθλα ἐν στεφάνῳ μόνῳ, στεφανίτας ἐκάλεσαν, Pollux III. 153. ait: quo modo saepe alii, Lycurg. in Leocrat. p. 154., Demosthen. in Leptin. p. 308., Aristid. T. III. p. 421., Diogen. Laert. III. 88., qui τοὺς ἀπὸ τῶν στεφανιτῶν ἀγώνων in Graecia ἐγένε-  
ναι sive nobiles esse habitos addit. Hinc diversi erant ἀγῶνες θεματικοί, cuiusmodi ἀμφοδίης in Pindari Schol. ad Olymp. Od. VIII. et δωρίτης atque ἀγροδίτης Plutarch. T. II. p. 820. E. et χοιματίτης in Schol. ad Pindari O. IX. Olymp. Porro quod adnectitur, Herculem sine ulla mercede de humano genere bene fuisse meritum, id ex Artemidoro II. 42. optime illustravit Olear. in Philostrat. VIII. Vit. Apoll. c. 7. p. 341. WESS.

260. 15. Μηδενὸς τολμήσαντος — συγκριθῆναι] Cum nemo auderet, ne Hercules sine adversario victor abiret, Iupiter pugilis personam induit, et cum eo in arenam descendit. Huc respicit Lycophron. Alexand. v. 41. et Is. Tzetz. WESS.

260. 19. Καταγωνίσασθαι — καταπονήσαι] Ex duobus his infinitivis καταγωνίσασθαι et καταπονήσαι alteruter abundat. STEPH. Καταγωνίσασθαι in margine Scholii vicem antea obtinuit, ut τὸ καταπονήσαι explicaret: sed postea a librario in contextum qua cura quaque incuria translatum fait. RHOD. Cum Rhodom. facit P. Faber I. Agonist. c. 31., neque ego dissentio. WESS.

260. 28. Ἀθηναῖ μὲν πέπλω] Apollodor. II. 3. 11. ἔλαβε Hercules παρ' Ἐρμού μὲν ξίφος, παρ' Ἀπόλλωνος δὲ τόξα, παρὰ Ἥραιστον θώρακα χρυσοῖν, παρὰ δὲ Ἀθηναῖς πέπλον. ῥόπαλον μὲν γὰρ αὐτὸς ἔτεμεν ἐκ Νεμείας: prorsus, si clavam excipias, ut Diodorus. Nollem itaque Apollodoro adscripsisset Th. Galeus, *lege πέπλον vel παλιόν. Inepte Herculi peplum dat interpretres: id enim nimis calidum. Minerva Herculi peplum dono dedit πρὸς εἰρηφυλὴν ἀπόλασιν καὶ τέσσην*, ut pacis tempore sese eo relieceret atque oblectaret; thoracem vero Vulcanus, ut eo munus in proelia descenderet, ut auctor explicat. WESS.

260. 36. Τὰ μικρὰ μυστήρια συνεστήσατο] Parva haec mysteria Herculis causa fuisse instituta agnoscit Schol. Aristophan. Plut. v. 816. et Is. Tzetz. in Lycophron. v. 1327. In illis purgatus lustratusque fuit, et multa edoctus, quae deinceps in maioribus suis ipse oculis usurparet. Elegantissime propterea de somno Plut. T. II. p. 107. B. τὸν ἕναρ εἶναι τὰ μικρὰ τοῦ θανάτου μυστήρια. προμήσις γὰρ ὄντως ἐστὶ τοῦ θανάτου ὁ ἕναρ. Post dein Hercules ad inferos Cerberi causa descensusur maioribus mysteriis Eleusine initiatus est, ut praeter Apollodor. II. 5. 12. et Plut. Thes. p. 16. A. Diodor. docet c. 25.; nam τὰ ἐν Ἐλευσίνι μυστήρια sunt maiora; minora quippe ἐν Ἀργείαις, loco prope Athenas, ut ex Ethnographo atque aliunde notum, tradebantur. Atque haec Io. Meursii causa, percepta ab Hercule mysteria Eleusin. c. 5. confundentis, monenda fuerunt. WESS.

260. 38. Ἠρώτη μὲν ἐμήνη γενναῖη θνητῇ Νιόβῃ] De Niobe eadem Apollodor. II. 1. 1., cuius posteriorum Inachi longam seriem considerare si volueris et stemma digerere, verum esse reperies, decimam et sextam a Niobe, Phoronci filia, censendam esse Almenam, Herculis matrem. WESS.

261. 52. Ἦνα τῆ ταύτης τιμῆ ὁ ἀγαθὸς καταρθεύεις] Si non scripserit Diodorus Ἦνα τῆ ταύτης προσσηροῦς (sive ἐκοννημ. s) τιμῆ, non video, quo illud ταύτης referri queat. At vero si προσσηροῦς, vel simile non excidit, forte legendum ταύτη. Haec Doctissim. Io. Iensius in Epist. ad Graev. p. 408.; cuius ego quidem constata etsi non improbo, considerandum tamen propeno, possitne praevocabulum ταύτης pendere ex voce ὀνομασία, quae verbo, quod praecessit, inest. Homericum quidem certe Iliad. ψ, 9.

Πάροχλον κλαίωμεν. ὁ γὰρ γέρας ἐστὶ θανάτων, si ὁ γὰρ ad κλαυθμοῦ vocabulum, ut volunt, pertineat, simillimum erit. Mox ἀετὸν R. Cl. I. semper, quomodo I. 19. WESS.

261. 58. Ἠραδόρτος τὸ αὔρ τοῖς ἀνθρώποις] Haec de re distinctius L. V. 67. WESS.

261. 61. Τὸν μὲν ἀετὸν κατατόξευσεν] Ipse Prometheus in cognomine Luciani Dial. c. 20. ἔδη τις ἐκ ἐπιπέδων ἀγίξεται, inquit Mercurio, σὸς φίλος — κατατοξείσων — τὸν ἀετὸν. Vide superius L. I. 19. WESS.

261. 70. Τὸν ἴδιον κέρειον Διομήδη] Sine detrimento ἴδιον omitti potest. Sequens autem παρέλαβε in παρέβαλε ut mutetur, sensus efflagitat. RHOD.

261. 74. Ἰερὰς ἐποίησεν Ἡρας] Ut vagae et sine custode essent, Iunoni consecratae, ἄγεται τῇ Ἡρᾷ, quemadmodum in Arrian. VII. Exp. Alex. c. 20., de quo veterum more plura Is. Casaub. in Sueton. Caesar. c. 81. et auctor c. 18. Porro quod de harum prosapia, in Alexandri usque aetatem perennante, adnectitur, id verum esse Apollodor. II. 4. 8. infitiat. Iam τὰς ἵππους quod dixerit, id neminem morabitur, moris, de quo Schol. in Euripid. Phoenis. v. 3., modo meminerit. WESS.

261. 77. Τὸ χρυσόμαλλον δέρας] Haecine an δέρας maueris, perinde erit. Apollonio Rhod. nunc δέρας, modo δέρας dicitur, ut II. 1228. III. 88. IV. 1318. etc., Apollodoro τὸ χρυσόμαλλον δέρας I. 9. 16. et Liban. T. I. p. 273. C.; atque hoc monuisse sufficiat: recurret eadem rursus varietas in sequentibus. De Iasonis expeditione c. 41. WESS.

261. 84. Πλησίον Θερμυζέρας πόλεως] Conf. supr. II. 46. WESS.

261. 86. Ἀμαζόνων] Ἀμαζονίδων Vat. Reg. Vid. supr. II. 46. WESS.

262. 91. Πρώτη — ἀντὶ συνάψασα μάχην Ἰελλᾷ] Enumerat nobilissimas Amazonum, τὰς μάλιστα διαμερούσας, quae cum Hercule in certamen descenderint, Stephanus in Θιβᾶς, sed longe aliis nominibus insignes. WESS.

262. 95. Καίρια πληγῆ περιπεσοῦσα] Haud omnino reiectaneum est optimarum scularum καίριον πληγῆ, quo usus auctor est L. XVIII. 31. Vulgatum tamen habet XI. 69. XIII. 13. WESS.

262. 99. Ἐν τοῖς πολεμιζοῖς ἀγῶσιν] Dedi concordi Codd. consensui, ut hic et brevi post ita scriberetur, neque invito, ut arbitror, Diodoro, quippe c. 20. ἐν τοῖς πολεμιζοῖς ἀγῶσι ταῖς ἀλκαῖς διαρόρους memorante. Alioqui πολεμιζὸν ἔργον de rebus bellicis L. XIII. 87., et ἔργον de proelio haud sane inconditum esse solet. Vid. Appian. Hannibal. p. 568. et II. B. C. p. 716. WESS.

262. 5. Ἄλλ' ἐανταῖς συνασπίζουσαι] Parmae obiectu invicem se defendentes, ut feminae illae, quae sumptis clypeis συνασπίζον τοῖς ἰδίοις ἀνδράσι L. XVII. 84. pro quo παρασπίζεν Appian. III. B. C. p. 927. WESS.

262. 8. Ὁμόσασα παρθένος εἶναι] Longe rectius παρθένος οὔσα διαμένειν. RHOD.

262. 11. Μελανίππη] Iustino II. 4. Menalippe. Nostri Melanippe praestat, probante plurium exemplis Munckero in Hygin. Fab. XXX. et CLXXXVI. WESS.

262. 16. Ἀντιόπην μὲν ἐδωρήσατο Θησεῖ] In diversa



discedunt veteres. Philochorus adsentitur Nostro in Plut. Thes. p. 12. A.: alii Hippolyten Theseo datam perhibent, ut Plutarchus monuit et auctor c. 28., qua de lite plura Bernart. in Statii XII. Theb. v. 543. De Melanippe similis discordia; interfectam tradit vetus poeta in Schol. Pindar. Od. III. Nemeon., liberatam autem, accepta Hippolytes zona, ab Hercule, Apollon. Rhod. II. 968.

— — — Ἀρητιάδα Μελάνιππην  
Ἡρώς Ἡρακλῆς ἐλοχῆσατο. καί οἱ ἄποινα  
Ἰππολύτη ζωστήρα παναίολον ἐγγυάλιξεν  
Ἀμφὶ κασιγνήτης.

Iam Apollodorum si audis, Hippolyten Hercules obtruncatam spoliavit, ablato baltheo, L. II. 4. 9. Adeo Amazonum in rebus sibi non constant. WESS.

262. 26. [Οτι Χρυσάωρος, ὁ λαβὼν ἀπὸ τοῦ πλούτου etc.] Pater erat Geryonis, id nomen ab aureo gladio, χρυσὸν ἄορ ἔχων Hesych. explicat, sortitus. Vid. infr. V. 17. Simili ex caussa Apollo χρυσάωρος Pindaro extrema Od. VIII. Pythion. et Apoll. Rhod. III. 1282. WESS.

262. 29. [Ταῖς ἐν τοῖς πολεμικοῖς ἀγῶσιν etc.] Repone τοῖς pro ταῖς, cum nusquam alio quam ad ἀνδραγαθίμια prior articulus referatur. Nisi ἀνδραγαθίμια forte auctor scripserit. RHOD.

263. 37. Σφόδρα γὰρ εὐγεῖως ἡ νῆσος αὕτη κεῖται] Verum hoc esse situs indicat. Opportune Aristoteles II. Polit. c. 8. δοκεῖ δ' ἡ νῆσος, Creta, καὶ πρὸς τὴν ἀρχὴν τὴν Ἑλληνικὴν περικεῖναι καὶ κεῖσθαι καλῶς. πάσῃ γὰρ ἐπέκειται τῇ θάλασσῃ, σχεδὸν τῶν Ἑλλήνων ἰδομένων περὶ τὴν θάλασσαν πάντων. insula autem videtur ad imperium Graecorum obtinendum nata pulcherrimeque posita: ad omne enim mare vergit, cunctis fere Graecis mare accolentibus etc. WESS.

263. 43. Οὐδὲν ἔτι τῶν ἀγρίων ζώων ὑπῆρχεν ἐν τῇ νήσῳ] Propterea ἄθρητος Plutarcho T. II. p. 86. B. et Greg. Nazianz. Carm. XIII. 49., cuius utriusque et plurium aliorum, eandem rem affirmantium, verba non fugerunt accuratam Io. Meursii diligentiam L. II. Cret. c. 8. Nec desunt tamen insulae serpentes, si ipsi Cretensibus fides, e quorum ore id se accepisse memorat Io. Brodaeus III. Miscellan. c. 11. WESS.

263. 49. Τοὺς — καταλαλασθέντας ξένους ἀποκτείναντα] De Antaeo alia Aegyptii L. I. 21. Thebani Herculis virtutem et Antaei immanem crudelitatem Pindarus cultissime descripsit Od. VII. extrema Isthmion. καί τοι κατ' Ἀνταίου δόμους Θηβῶν ἀπὸ Καδμειῶν μορσῶν βραχέες, ψυχὰν δ' ἄκαμπος προσπαλαίσων ἤλθ' ἀνὴρ, τὰν προσηγόρον Αἰθῶν Κρανίαις ἄγρα ξένων Ναὸν Ἰσοειδάωνος ἐρέγοντα σχέδοι. Uberius Philostratus II. Icon. 21., atque ex eo P. Fab. I. Agon. 13. WESS.

263. 56. Πολλὴν δὲ ἔλαιονόρον] Vulgatum, auctoritate opus si esset, Aeschylō Pers. v. 885. et Strabone patronis L. XII. p. 855. A. tueri se potuerat. Ego quod scripti Codd. probabant, restituendum censui. WESS.

263. 59. Τοὺς παραιομοῦντας ἀνθρώπους — ἀποκτείνας] Ob hanc causam Hercules καθαρῆς ἀνομιᾶς καὶ ἀδικίας, εἰσαγωγεὺς δὲ δικαιοσύνης καὶ ὁσιότητος in Arrian. Epictet. III. 26. p. 354. quibus gemina commentatur Aristides T. I. p. 57. WESS.

263. 68. Ἀεὶλε Βούσιρον] Busiris, modo unquam fuerit, Hercule Thebano multis aetatibus prior est, ut dudum docuit Isocrat. Laud. Busir. p. 334. et Theō Prōgymn. c. 6. Vide supra L. I. 88. WESS.

263. 71. Ἐξατόμπυλον] Polybio I. 73. Ἐξατομπύλος τῆς Αἰθίης. Noster suum probat in Excerpt. Vales. p. 273., insuperque docet Carthaginenses ductu atque auspiciis Hannonis urbem suo imperio subdidisse. WESS.

263. 78. Τὸν πρὸς Γαδείροις ὠκεανὸν] Sic oportuit. Τὰ Γάδειρα ipse adpellat L. V. 20. et L. XXV. 11. WESS.

264. 84. Τὰς διωρισμένας τῶν βοῶν ἀγέλας] Adeo frequens τοῦ διωρισμένη de rebus in utramque partem celebribus in his libris usus est, ut mirer H. Steph. Thes. T. II. p. 1326. uno, eoque ipsi parum certo, exemplo potuisse defungi. Vid. mox c. 21. et 22. 29. XII. 84. XIV. 67. Neque auctoris idiotismus est: usurparunt et Strabo XIII. p. 916. A., ubi sine causa adhaerescit Xylander: recurrit enim eodem libro p. 928. C.; et Dionysius T. II. p. 138. Par causa est τοῦ διωρίμων, cum pro illustri ponitur, quod Stephan. ut probaret, difficulter a se impetravit ad Appiani Iberic. p. 470., licet illi sit ea potestate tritissimam in Hannib. p. 533. et L. IV. B. C. p. 996. et p. 1049. WESS.

264. 88. Ἐν δωρεᾷ] Ἐν δωρεᾷς Co. M. ut supra I. 79. WESS.

264. 97. Ἐν' αὐτῶ] Ad ὠκεανὸν refer et vide Apollodor. II. 4. 10. et Strabon. III. p. 260. WESS.

264. 2. Ὅπως ἄλιτενοῦς — γενομένου] Neglexerat interpres, forsan eradendum opinatus; cui, tametsi eam opinionem suffragio suo Reg. et Vat. firmant, non adstipulor. Plura III. 44. WESS.

264. 7. Τῆ καθ' ἡμᾶς θάλαττη] Paulo superius ἡ ἐντὸς θάλαττα, sive, uti Auctor de Mundo c. 3., ἡ ἔσω θάλαττα. quo utroque modo mediterraneum mare designare solent. Strabo II. p. 182. C. de eo mari ἡ ἐντὸς καὶ καθ' ἡμᾶς λεγομένη θάλαττα. Romanis nostram mare, veluti Sallustio Jugurth. c. 17. 18. et Apuleio de Mund. c. 3. Alioqui ἡ καθ' ἡμᾶς θάλαττα mare nobis est vicinum, unde et mediterraneo apud Graecos is titulus venit: τὴν θάλατταν τὴν καθ' ἡμᾶς mare Aegyptium in Orat. ad Alexandr.

p. 372. A., et τὴν θάλατταν τὴν καθ' αὐτὴν, quod Tarsum paene alluit, in Tarsie. II. p. 415. D. Dio Chrysost. adpellat. Verum de hoc genere opportuniore loco. WESS.

264. 16. Περὶ τὸν Μινυειὸν ἑίδωρον] Haud scio, an non scribendum sit τὸ περὶ τὴν Μινύειαν ἑίδωρον. Minyam enim Thessaliae urbem facit Stephanus. Μινύειον autem (quem Homerus Iliad. XI. v. 721. Μινύειον vocat) Strabo lib. VIII. p. 533. in descriptione Elidis, Messeniae fluvium vocat, a Minyis e Thessalia eo profectis. Unde fieri potest, ut huius quoque nominis fluvius in Thessalia exstiterit. Ego cum haec verterem, ῥῶρον vel ἄρῶρον subintelligi existimabam. Licet inter possessiva Μινυειὸν mihi nondum sit deprehensum. RHOD. Hic locus firmat meam in superiore nota coniecturam. Nam fluvius, de quo hoc loco sermo fit, non potest alius esse, quam Cephissus, qui per Orchomeniorum Minyicorum fines fluens, in Copridem lacum se exonerat, et a hiatu quodam terrae ibi absorbebatur. Pausanias in Bocothis c. 38. p. 787. ait Thebanos asserere Herculem obstructo illo subterraneo meatu Cephissum in Orchomeniorum fines immisisse, ut eos ulcisceretur. Cephissus est igitur procul dubio quem vocat Diodorus hoc loco Minyicium, Μινύειον ἑίδωρον, eo quod per fines Orchomeniorum fluebat, qui ab omnibus Minyae cognomine perpetuo appellabuntur: eodem modo Peneus per Minyicorum in Elide et Triphylia habitantium fines fluebat. Minyicus dictus est, ut et Anigrus, et Minyicus est cognomen magis quam nomen, et plurius fluvii conveniebat. PALM. Miror viros doctissimos ad haec offendisse: praesertim cum margini a Stephano adscripta a vero proxime abessent. Orchomenus, Minyicus antea dictus Bocothiae, non Thessaliae, ut prave Plin. IV. N. H. 8., urbs erat, Μινύειος Theocrito Idyl. XIV. 104. Strab. VIII. p. 534. A. Pausan. VIII. p. 784. atque aliis adpellata. Sub eius moenibus fontes habet fluvius Melas, qui ab ipsis paene fontibus navium capax, mox in stagna et lacus diffunditur, auctore Plut. in Pelop. p. 286. et Syll. p. 465. C. Atque hoc videtur esse flumen τὸ περὶ τὸν Μινύειον Ὀρχομενὸν ἑίδωρον. Id vero si nolis, Cephissus erit, cuius meatus Hercules cum obstruxisset, ut late per Orchomeniorum agros stagnaret, effecit apud Pausan. VIII. 38. Vide et Hieroclis Synced. p. 644. et inprimis Is. Vossium ad Melae II. 3. 50., loci huius primum instauratorem. WESS.

265. 28. Ἀπὸ τῆς κατὰ τὴν στρατείαν ἕλης Ἀλγίστης] Optima conclusione hinc conficiant viri egregii Franc. Fabricius ad Oros. L. VI. II. et Is. Casaubon. in L. IV. p. 291. Strabonis, prave Alexiam eam urbem passim scribi. WESS.

265. 37. Θεοῦ προσαγορευθέντος] Solent Graeci τὸν ἀποθεωθέντα, hoc est Divum, semper Θεὸν nuncupare. Strabo IV. p. 267. οὕτω δὲ καὶ ὁ θεὸς Καῖσαρ ἐν τοῖς ὑπομνήμασιν εἰρηξεν. et Noster L. V. 21. De Alesia a Caesare subacta ipse diligenter

L. VII. B. G. 68. Situm describit Hadr. Vales. Notit. Gall. p. 11. WESS.

265. 41. Ὀδοποίησε τὴν τραχύτητα τῆς ὁδοῦ] Ammian. L. XV. 10. *Et licet haec, quam diximus, via media sit et conpendiaria, magisque celebris, tamen etiam aliae multo antea temporibus sunt constructae diversis. Primam Thebaeus Hercules ad Geryonem extinguendum, ut relatum est, et Tauriscum lenius gradiens, prope Maritimas composuit Alpes, hisque Graiarum indidit nomen. Sic enim postrema recte constituisse Henr. Vales. opinor. Graiarum Alpium nomen ab Herculis expeditione repetunt Corn. Nepos Hannib. c. 3. Plin. III. N. H. 17., etsi Livius L. V. 34. neque id sine caussa, fabulis iter hoc transcribat. WESS.*

265. 55. Φέρει καρπὸς πρὸς βίαν ὀλίγους] Blandiri posset πρὸς βίαν ex Clarom. 2., nisi auctor ipse L. V. 39. ingenium soli Ligustici descripsisset asperum, innise, quodque, nisi vi quadam coactum, frugibus ferendis parum se accommodet. Eadem Strabonis sententia L. V. p. 334. Genus loquendi firmabit Sophocles Oedip. Colon. v. 838. 1180. WESS.

265. 65. Παράδοξον καὶ καθ' ἡμᾶς etc.] Pro καὶ lego τοῖς, et sequens γερᾶθαι amando. RHOD. Ego vero retineo utrumque. Significat sua quoque aetate id contigisse, quod Aristoteles et Posidonius et forte plures de sui temporis Ligurum feminis memoriae prodiderant. De Posidonio testis Strabo est L. III. p. 290. B., ubi Is. Casaub. haud obscure Diodorum taxat, nulla Posidonii mentione facta, ea exscribentem. Sed dissimile exemplum est, ut Strabonem conferenti patebit, et vir magnus deinceps animadvertit; nec excusari tamen prorsus bona fides auctoris potest, uti alias videbimus. De Aegyptiis mulieribus non dissimilia tradit Aelian. VII. H. A. 12. Μὲν ἐν οἷς, sive ἐν αἷς potius, hoc enim genus voci indere solet L. II. 49., commodius visum fuit. WESS.

266. 82. Ὑπὸ Ῥωμύλου τοῦ Ἀρχεος] Initia urbis originemque Romuli pluribus exsecutus erat L. VII., quod ex egregio fragmento apud Syncellum Chronograph. p. 194. superstite cognitum exploratumque habemus. WESS.

266. 86. Κάριος καὶ Πιράριος] Ex lib. I. Dionysii Halicarnassensis p. 26. edit. Rob. Stephan. *Ποτίτιος* restituo. Pro quo *Ποτίτιος* forte, ut alibi  $\kappa$  pro  $\tau$  in propriis habetur, Diodorus scripsit. Horum familiae ut extinctae fuerint, lege apud Livium IX. 29. et Alexandrum Genialium dierum lib. II. c. 14. RHOD. Factum ego vero Diodoro vehementer velim, ut tamen opera, a Rhodom. sedulo impensa, recte procedat, vereor. Poggius quidem *Potitium* et *Finarium* et statim *Potitiorum* in *Palatio cockleas* vertit, quod, si e scripto suo libro hausisset, Rhodomanni partes haud parum adiuuaret. Verum contra eum veniunt libri omnes, etiam Clarom., ceteroqui Florentino,

quo usum suspicor Poggium, consentientes: obest praeterea *Caci cochlea*, seu *scalae Caci*, quas Romae fuisse ostendam. Quare suspicor furacissimum *Cacum*, ut olim *Herculem*, ita et *Diodorum* in fraudem induisse. Legerat *Cacum* abductis in antrum *bus Herculem* circumscribere fuisse adnissum: cuius memoria cum altius haereret, non sine errore pro *Potitio Cacum* sive *Cacium* posuit. WESS.

266. 90. Τὸ τῶν Πιναρῶν — γένος διαμέρει] *Livius* sua aetate fuisse significat L. I. 7.; *Cicero* durasse in sua tempora Orat. Pro Dom. c. 52., *Claudius* autem *Mamertinus Panegyri*. Maxim. Aug. c. 1. hodieque, inquit, testatur *Herculis ara maxima*, et *Herculei sacri custos familia Pinaria*: haud scio an satis ex vero. WESS.

266. 92. Τοῦ δὲ Καζίου ἐν τῷ παλατίῳ κατέβασίς ἐστίν] Haec liquidissimo arguunt, venisse ab auctore *Κάσιον*, non ut voluere, *Ποτίτιον*. *Scalae* enim *Caci* eo fuere loco. *Solinus* Polyhist. c. 1. *Romam* condidit *Romulus*. — dictaque est primum *Roma quadrata*, quod ad aequilibrium foret posita. Ea incipit a *Silva*, quae est in area *Apollinis*, et ad supercilium *SCALARUM CACI* habet terminum, ubi tugurium fuit *Faustuli*. Falluntur, qui in *Aventino* eas *scalas* quaesivere, iure reprehensi a *Fam. Nardino* VI. Rom. Vet. c. 12., oblito tamen huius loci, quo illarum situs monti *Palatino* manifestissime vindicatur. WESS.

266. 97. Ἐξδεκατέειν Ἡρακλεῖ τὴν οὐσίαν] Lege quae haec de re annotat *Alexander* lib. III. *Genial. Dier.* *Causas* huius decimationis recenset *Plutarchus* in *Problem.* *Quaest. Rom.* XVIII. Vide *Proverbium Hercule dextro*. RHOD.

266. 7. Κατέθυσσε τῷ θεῷ πᾶσαν τὴν δεκάτην] Non *L. Lucullus* solum, sed et *Sulla*, de quo *Plutarch.* T. I. p. 474. A. ἀποθύων δὲ τῆς οὐσίας ἁλώσεως τῷ Ἡρακλεῖ δεκάτην, ἐστιάσεις ἐποιεῖτο τῷ δήμῳ πόλιν τελευτῆς. et *Crassus*, omnium ditissimus, quo de idem T. I. p. 543. C. ἀποθύσας μὲν τῷ Ἡρακλεῖ δεκάτην καὶ τὸν δήμῳ ἐστιάσεις, τρεῖς μὲν ἐκάστῳ Ῥωμαίων σιτηρέσιον ἐκ τῶν αὐτοῦ παρασχών. quae ultima, tametsi immensae *Licinii Crassi* fuerint opes, nimia sunt et in τρεῖς μῆρας cum interprete convertenda. Plura de *Herculanea parte*, sive decimis, *Ph. Beroaldus* App. Adnotat. c. 11. Idem autem esse videtur καταθύειν, ἀποθύειν δεκάτην atque ἐξδεκατέειν τὰς οὐσίας, ut paullo superius *Noster* dixit, δεκατέειν τοῖς θεοῖς XI. 3. δεκάτην καθιεροῦν ibid. c. 65. δεκάτην ἐξελέσθαι, δεκάτην ἀποστῆλαι, quae omnia in his libris saepe obvia sunt. WESS.

266. 9. Ἡρὰ τὸν Τίβερον ἕθον ἀξιόλογον] Fuisse creditur *Herculis Victoris* in foro *Boario*, quo nomine et aliud erat ad portam trigeminam in *Macrobbii Satur.* III. 6. A priore non multum distabat *Ara Maxima*, ad quam δεκατέεισας χορημάτων σιτηρὰς καὶ εἶχας suo tempore in *Herculis* honorem fieri *Diony-*

sus I. A. R. p. 33. docet. Templum et ara describuntur a Bart. Marliano III. Topogr. Rom. 15. WESS.

267. 11. *Θυσίας*] *Ὀυσίας* M. quod frequens peccatum. Vide L. Kuster. in Aristoph. Equit. v. 103. WESS.

267. 19. *Ὁ τόπος Οὐεσοῦσιος*] Rectius *Ὀυεσοῦσιος Vesurius* foret, ut apud Strabon. V. p. 378., qui quoque docet, et aliunde id satis constat, loca ea quondam arsisse, eiusque incendii multa argumenta durare Porro *Phlegraeos campos* in hac vicinia fuisse, Polyb. III. 91. et Strabo consentiunt, quamquam aliam tituli causam adferentes, quemadmodum in huius L. V. p. 373. Is. Casaub. docuit. WESS.

267. 21. *Τοὺς δ' ὄνν Ἰγάρτας*] Vide inferius L. V. 71. et Apollodorum L. I. 6. 2. WESS.

267. 28. *Αὐὰ τὴν ἄπερβολὴν τοῦ κατὰ τὸ σῆμα μεγέθους*] Imo vero quod obscuris parentibus essent nati, cuius loci hominem *fraterculum Gigantis* adpellat Iuvenal. IV. 98., ut bene explicuit Angel. Politian. Miscell. c. 18. Conf. Stanleium in Aesch. Prometh. v. 351. WESS.

267. 33. *Περὶ τὴν Ἀορνόν — λίμνην*] Eadem fere de lacu Averno Strabo V. p. 374. ubi Casaub. et Dio Cassius L. XLVIII. p. 443. Lycophron. v. 701. eum nota Potteri. WESS.

267. 34. *Ὀρομαζομένην*] Pro hoc participio *ὀρομαζομένην* lego *ρομιζομένην*. STEPH. et RHOD.

267. 35. *Μεταξὺ Πισιροῦ καὶ Αἰκαιορχείων*] Dio Cassius *μεταξὺ Πισιροῦ καὶ Πητεόλων*, quod idem. Urbem autem *Αἰκαιορχίαν* Strabo V. p. 375. Pausan. IV. 35. p. 371. Iosephus. Vit. suae c. 3., at *Αἰκαιορχίαν* L. XVIII. A. I. 6. 3. *Αἰκαιορχίαν* Stephanus adpellat. Iam quod H. Stephan. paullo ante *ρομιζομένην* legit, id haud iniuria fieri suspicor. Vid. I. 32. WESS.

267. 38. *Φαίνεται τῇ γῆνι κρῆνον*] Legendum *κρῆνον*, nisi forte credibile sit eum dixisse *ἐξορσῖ ἕδος καθαρότατον, φαίνεται κρῆνον*, pro *ἕδος ὅ ἐστι, καθαρότατον ὄν, φαίνεται κρῆνον*. STEPH. et RHOD. *κρῆνον* bene habet. *ἐξορσῖ* est enallage nominat. pro genit. dictum. *nam quum habeat ille lacus aquam purissimam, apparet ea aqua caerulea*. v. Wesseling. ad p. 148. 80. REISK.

267. 40. *Γεγενησθαι νεκρομαρτίων πρὸς ἀνίη*] Hue referebant τὰ περὶ τὴν νεκρῶν τὴν Ὀμιζιήν, Ulyssesque aiebant ad inferos descendisse: quam fabulam secutus poeta Aeu. VI. 137. *Facilis descensus Averno* etc., admonente Servio, deque Aenea, ad inferos se penetrante, plura commentus est. *Νεκρομαρτέϊον*, pro quo *νεκρομαρτίον* Pausan. L. IX. p. 769., olim et hic fuisse Strabo V. p. 374. A. prodidit. WESS.

267. 43. *Ἐγχῶσαι*] Potius *ἐγχῶσαι*. RHOD. *Τὸν μὲν ἐχρον ἐγχῶσαι*] Nunc controversia hoc verum est. Strabo V. p. 375. C. Herculem aie aggerem *διαχῶσαι, τὰς βοῆς ἐλατρόντι τὰς*

Τηρόρον. quare Lycophron v. 697. viam eam λέοντος ἀτραπόδος βούρ ζωστῆς Λεονίς, i. e. Herculis, vias boum aggestas adpellat. Vide Ph. Cluverii L. IV. l. A. p. 1122. WESS.

268. 51. Τὰς κεφαλὰς καὶ τοὺς πόδας ἀνατιθέναι τῇ Ἀρτέμιδι] Veterem venatorum morem, cuius vestigia nunc passim perennant, exponit Schol. Aristoph. Plut. 941. ἔθος ἔν τούτοις θηροῶντας τινα ἄγχαν, μέρος τι τοῦ θηρομένου, κεφαλὴν, ἢ πόδα προσηλοῦν πυσσάτω ἐπὶ τινος δένδρον πρὸς τιμὴν τῆς Ἀρτέμιδος. Nosterque Lib. IV. 83. V. 29. Symmachus V. Epist. 68. honori, inquit, numinum datur, cornua sacrare cervorum, et aprugnos dentes liminibus adfigere. Plura si velis, Ezech. Spanhem. in Callim. Hym. Dian. p. 205. adi. WESS.

268. 55. Τὴν κεφαλὴν — ἐαυτῷ ἀνατίθῃσι] Multo hoc significantius et superam contemptoris ingenio congruentius: neque enim Dianam ob neglectos feræ pedes tantum irac, etsi non nunquam ἀφόχολοι, concipere decebat. Videtur venator ea fuisse sententia, qua ille apud poetam,

*Dextra mihi Deus et telum quod missile libro,  
Nunc adsint: voveo praedonis corpore raptis  
Indutum spoliis ipsum te, Lause, tropæum  
Aeneae. —*

Aeneid. X. 773. Id vero opportune, quod hinc explicent diras, quibus Ibin v. 507. confixit Ovidius,

*Isque vel exanimis faciat tibi vulnus: ut illi,  
Ora super fixi quem cecidere suis.*

Sed quod *Theantem* hunc venatorem vetus adpellet interpret, id, unde acceperit, divinare non possum: quamquam illud quidem certe mihi adparet, cum Latina Poggii versione fuisse usum, dum haec commentaretur: *In Andragathia regione venator quidam nomine Thoas, insolenter locutus in Dianam, capite inmanis apri, quod in pinu suspenderat, cadente est interemptus.* Regionem enim *Andragathiam* facili opera Poggii nobis exstruxit, deceptusque ἀνδραγαθίας vocabulo Abr. Ortelium in fraudem induit, ut summ in Thesaur. adderet, *Andragathiam in Bruttis, Posidoniatarum regionem* ex Diodoro. Mox ineptam Grammatici glossam eo relegavi, unde malum pedem intulerat. WESS. Eandem fabulam sive ex Diodoro sive aliunde narrat Libanius vol. I. p. 235. R.

268. 67. Ἐξασθαι τοῖς θεοῖς ἀγαρεῖς γενέσθαι τοῖς ἐροχλοῦντας αὐτῶν] Si αὐτῷ malueris ex Reg. et Coisl., auxilio occurrent Lysias Orat. V. 14. ἐν γούν ἐπίσταται, μὴ ἐροχλεῖν τοῖς ἡδισταμένοις. et Iuncus in Stobaei Florieg. Tit. CXX. p. 610. ἐνταῦθα μὲν γὰρ ἐροχλεῖ τοῖς ἀνθρώποις, οὐ βραχὺς πόρος. Sed hoc leve et paene arbitrarium est. Id Diodoro privum, quod cicadas occisione occisis refert, et ex agri Loerensis vicinia ita exterminatas, ut generis eius nullae reliquiae durarent. Ceteri

auctores sunt, cicadas in Rhegino silere omnes, ultra flumen Alecem, quod utramque regionem disiungit, in Locrensi vocales esse et canere. Sic Pausan. VI. 6. p. 466., Aelian. V. H. A. 8., quodam tamen cum discrimine, et Strabo VI. p. 399., ubi Is. Casaub. intactum non praeteriit Diodorum. WESS.

268. 75. Ὀντος τοῦ διαστήματος σταδίων τριῶν καὶ δέξα] Haud longe hinc abest Plinianum III. H. N. 8. Sicilia quondam agro Bruttio cohaerens, mox interfuso mari avulsa, XII M. in longitudinem freta, in latitudinem autem *πιδ* passus iuxta columnam Rheginam. Alii contractius faciunt freti spatium, ut dictum est uberius ad Itin. Anton. p. 491. Porro ut Hercules adprehenso tauri cornu fretum transiit, ita Daphnis δύο βοῶν δύο κέραιων ταῖς δύο χερσὶ λαβόμενος mare emensus ad continentem adnatat in Lengi Pastoral. I. p. 33.; quod exemplum etsi Herculeum natandi modum illustret, non is tamen omnibus se probare potuit. Aliud Pausanias III. 16. p. 248. his, sed corruptissimis, verbis sectatur: ταύτας γὰρ (τὰς βοῶς) τότε ἤλανεν Ἡρακλῆς, διανηξαμένης δὲ ἐπὶ Σικελίαν, κατὰ τὸν Ἐλεον τὸν κῆρον ἀνερχόμενον ἐπιδήξει. Spectat scyphum, quo maria Herculeum transvectum fabulantur apud Macrob. V. Saturn. c. 5. Id pulere vidit vir doctissimus Ioach. Kühnius; quod vero prava corrigat, κατὰ τὸν Ἡλίου σκῆρον, solis scypho, nimium est. Equidem κατὰ τὴν Ἑλλάδα τῷ σκῆρω, mei si res arbitrii foret, praeferebam: ut indicet Pausanias, ad urbem Eleam sive Veliam scyphum ingressum esse Heroem atque inde in Siciliam traiecisse. Velia non longe ab insula distat: et si longius abesset, qui scypho maria potuit transgredi, fretum hoc sine discrimine superaret. WESS.

268. 77. Βουλόμενος ἐγκυκλωθεῖναι πᾶσαν Σικελίαν] Sic mox τότε δ' ὁ Ἡρακλῆς ἐγκυκλοόμενος τὴν Σικελίαν. et cap. 24. αὐτὸς δὲ κυκλωθεὶς τὸν Ἄδριαν. quo usu Synesius Catast. p. 303. B. κυκλώσομαι τὸ θυσιαστήριον, altare circumibo, ex Psalmo XXV. 6. Alioquin ἐγκυκλωθεῖναι non aliud saepe esse solet ac incingere. Strabo V. p. 330. C. ὄσση ἐγκυκλοῦνται τὰ Ἀπέριννα ὄρη. et p. 333. B. ὁ ἐγκυκλοόμενος τὰ ἔλη. Huc tamen pertinebunt, si mendo careant, Plutarchi T. II. p. 50. D. οἱ ἀμφὶ πλουσίαν τροπέζαν ἐγκυκλοόμενοι. WESS.

268. 80. Νύμφας ἀνεῖναι θεορὰ λουτρὰ] Ibycus Vulcani beneficio, Minervae vero *Pisander* calidas has aquas acceptas refert, quamquam aliud tempus respiciens, in Schol. ad Aristoph. Nub. v. 1047. Zenobius Centur. VI. 29. ἡ Ἰβυκῶ τῷ Ἡρακλεῖ ἀνῆκε πολλαχοῦ θεορὰ λουτρὰ πρὸς ἀνάπαυλιν τῶν πόνων. Diodoro accedit Pindarus extrema Od. XII. Olympion. θεορὰ Νυμφῶν λουτρὰ adpellans et Hesych. in Ἡρακλεία λουτρὰ. Factum vero inde est, ut lavacra omnium optima ab Hercule nomen impetrarint. Λουτρῶν τὰ ἡδίστα, Ἡρακλεία ἐπωνυμίαν ἔχοντά ἐστι Aristides T. I. p. 64. WESS.



268. 82. Τὰ μὲν Ἑμεραῖα ] Lege Ἱμεραῖων et pro Ἑγεσταῖα, Ἀγεσταῖα. Vid. Strabon. lib. VI. in descriptione Siciliae. RHOD. Τὰ μὲν Ἱμεραῖα ] Priorem viri doctissimi coniecturam suae suffragio firmat liber Coisl., estque circa omne dubium certissima: ut mirum non sit, in ea probanda conspirasse Is. Casaub. in Strab. VI. p. 421. Ph. Cluver. II. Sicil. Antiq. p. 285. et Cl. Salmas. in Solin. p. 79. Altera non necessaria videri posset, quod Ἑγεσταῖων et Ἑγεσταίων Stephan. exemplo Thueydidis (vid. Sylburg. in Dionys. I. A. R. p. 42.) produxerit, nisi si Noster Ἀγεσταίων maluisset L. XII. 83. XIII. 6. et Ἀγεσταῖων XIV. 48. Quibus tamen in locis scripti libri Ἑγεσταίων et Ἑγεσταῖων cum praecoptent, ut contra Codd. consensum obnitar, induci non possum. WESS.

268. 87. Ἀφροδίτης καὶ Βουτῆ τοῦ τότε βασιλεύοντος ] Venerem et Neptunum illi parentes dant Apollodōr. II. 5. 10. et Tzetzes in Lycophron. v. 866.; Diodoro adstipulatur Servius V. Aeneid. v. 412. Rectius autem fore arbitror τοῦ ποτὲ βασιλεύοντος. Eryx ea tempestate regno praeerat, non Butas. WESS.

269. 99. Ἀσπριένος ὁ Λακεδαιμόνιος ] Anaxandridae regis Spartanorum filius, Cleomenis frater, quem sibi in regni successione praelatum cum aegrius ferret, ductis in Siciliam circa Olympiad. LXVIII. colonis, Minoam instauravit, et novo Heracleae nomine donatam posteris tradidit. Herodotus V. 46. et Pausan. III. 16. huic rei auctores sunt. WESS.

269. 7. Ἐν τοῖς οὐκ εὖ χρόνοις ἀναγράφομεν ] Huius promissi oblitus est, nisi si illis in libris memorarit, qui magno rei literariae damno interciderunt. Ph. Cluverius vigesimo postquam instaurata esset anno, sub tempus expeditionis Xerxis in Graeciam, ab Hamilcare, Siciliam ingenti cly cly navium et trecentorum millium exercitu invadente, deletam opinatur L. I. Sicil. Ant. p. 218. Mihi non liquet. Diodorus quidem certe ea in expeditione tam diligenter versatur, ut Heracleae stragem, si Hamilcari deberetur, neglecturus non videatur. WESS.

269. 12. Τὸν καλλιστερόντα τῶν ταύρων καθαρῖστος ] Videtur taurus ab eo mactatus et in Cyanen demersus; quem morem post deinceps sollempnem habuerunt Syracusani, ut est L. V. 4. Ceteroqui καθαρῖζειν de victimis, quae arae inpositae igne consumuntur apud Herodot. IV. 35. unde καθαρῖζειν ἐπὶ πρὸς Aelian. XIII. H. A. 21. et καθαρῖζειν τὰ ἱερεῖα πάντα igne penitus absumere in Pausan. IX. p. 717. Vide inferius V. 32. et Iac. Perizon. ad III. V. H. I. Aeliani. WESS. Ceterum ΑΙΥΚ. ΙΣΙΙΙΣ de quo mox 20., conspicitur in Syracusanorum numis apud Parutam Tab. CXLIV. ad quam vide Cl. Havercampi commentaria p. 859. IDEM in Add.

269. 21. Καὶ Γαργατῶν etc. ] Ph. Cluver. I. Sicil. A. p. 30. Γαργατῶν citat ex coniectura, uti suspicor. Si Codd. stat et valet auctoritas, Γαργάτων praecoptandum. Ego vero in his nihil finio: neque enim constitutum habeo, sintne omnia haec nomina

*Graecae originis.* Rhodom. in Notarum Addend. *Ἡεδιοζράτην* corrigi. WESS.

269. 27. *Περὶ τὴν πόλιν τῶν Ἀγριναιῶν*] Patria Diodori est, cui hanc gratiam rependit, ut eius sacra repetitasque ex ultima antiquitate fabulas copiosius declaret. Vide L. I. 4. WESS.

270. 43. *Ἡρώϊ Γηρονόγῃ*] Geryonis oraculum iuxta Patavium, quod Tiberius, Illyricum petens, adierit, memorat Sueton. Tib. c. 14. De hoc nihil legere memini. WESS.

270. 49. *Κόμας ἱερὰς Ἰολάω τρέφουσι*] De veterum superstitione, pro bona corporis valetudine crinem deo sacrum pascentium, nihil addo. Dixerunt abunde alii, Hadr. Iunius de Com. c. 4. Is. Casaub. in Theophrasti Charact. c. 21. Hendr. Lindembrog. ad Censorin. D. N. c. 1. Stanleius Aeschyl. Choeph. v. 7. WESS.

270. 51. *Τὸν Θεὸν ἤλεον κατὰσχευάσωσι*] Vulgatae usque huc controversiam scripturae non esse motam, demiror, nihil quippe et prorsus inconcinnae. Haec pro se ipsa loquitur, et facile adsensum impetrat. Aelian. XII. H. A. 1. *καὶ λέγουσιν ἤλεον εἶναι τὸν Θεόν.* Ipse Deus O. M. in Epist. ad Hebr. VIII. 12. *ἤλεος ἔσομαι ταῖς ἀδικίαις αὐτῶν.* WESS.

270. 54. *Ἄλλ' οὔτοι μὲν etc.*] Videndum est quid pro *οὔτοι* debeat hic reponi. STEPH. H. Stephan. aliquid deesse opinatur. Sed integra erit sententia, si *ἀλλὰ μὲν* substituas. Propius tamen ad mendose exarata accedit *ἀλλ' ἦτοι μὲν.* RHOD. *Ἄλλ' οὔτοι μὲν — ἀποκαθίστασθαί φασι*] Si anacoluthon, aut nominandi casum pro quarto, de quo genere Critici veteres ad Pindari Od. VII. Pythion. v. 6., positum agnosceres, salva fortasse res foret. Verum aliud scripti libri dant, quod amplecti oportere iudico. Non suam Diodorus, sed popularium hanc esse opinionem, significat. WESS.

270. 59. *Τὰς ἀπαντήσεις καὶ θυσίας τῷ Θεῷ παρέστησαν*] Patet, verbum *παρέστησαν* unice sibi postulare vocem *θυσίας*, neque commode illi connecti posse *ἀπαντήσεις*: quod loquendi genus, quo duobus pluribusve nominibus additur verbum, quod ad eorum unum tantum potest referri, optimo cuius excedit utroque in sermone. Thucyd. I. 17. de tyrannis, *προσθόμενοι, ἔς τε τὸ σῶμα, καὶ ἔς τὸ τὸν ἴδιον οἶκον αὖξεν.* Hic enim *αὖξεν* duntaxat respicit οἶκον. cetera aliunde pendunt, ut bene Scholiastes. Demosthen. II. in Aphob. p. 518. *τοῦτον δ' ὀρθοίχοντα μῦθς (γεγραφθαι ἐν τῇ διαθήκῃ) καὶ τὴν μητέρα τὴν ἐμὴν, καὶ τὴν οἰκίαν οἰκίστην.* Ubi par ratio obtinet. *Οἰκίστην οἰκίαν* bene cogumentantur; non item reliqua. Columella VI. R. R. 32. *quae cum expleta sunt, ut cicatridem et pilum ducant, maxime proderit fuligo.* Florus IV. 12. 37. *aliis os, aliis manus amputabant.* Virgil. Aeneid. IV. 375.

*Amissam classem, socios a morte reduxi.*

Aeneid. X. 71.

*Tyrrhenamve fidem, aut gentis agitare quietas?*

Vid. Servium Aeneid. VIII. 260. WESS.

270. 67. *Λαζίνιον μὲν κλέπτοντα τῶν βοῶν*] De Laciniog ab Hercule obtruncato Servius Aen. III. 552. Crotonem, unde urbi nomen, habent scholia in Theocriti Idyl. IV. 32. WESS.

271. 79. *Μετέσχε τῶν ἐν Ἐλευσῖνι μυστηρίων*] Vide superius c. 14. WESS.

271. 80. *Μουσάων τοῦ Ὀρφέως υἱοῦ*] Pater Musaei controversus est, atque aliis Eumolpus perhibetur; quos quidem egregie tueretur epigramma in Schol. ad Comici Ran. v. 1065. et Diogene I. 3., si eiusdem esset aetatis. Aliis Antiphemus, ut Androtioni in Schol. Soph. Oedip. Col. v. 1046. Discipulum Orphei qui ferant, non desunt: quo sensu accipiendum putat Io. Alb. Fabricius I. Biblioth. Graec. 16. 3., cum a Platone, Diodoro, Iustino Martyre et aliis Orphei filius appellatur. Ego vero viro praestantissimo cupidissime largior, praeceptores discipulis *υἱῶν καὶ τέκνων* blandiora vocabula indidisse; quem tamen morem in historiarum conditoribus haud temere recipio. WESS.

271. 85. *Ποίημα συνέταξε θαυμαζόμενον*] Quodnam designet, non adfirmavero: Hymnosne, an Theologica, an de quo Euripides Alcestit. v. 967.

— οὐδέ τι γάρμακον

Θρηήσσαις ἐν σανίσι, τὰς

Ὀρφεία κατέγραψε

Γήρως. —

Plura enim illi tribuebantur, incertae pleraque fidei, de quibus Celeb. Io. A. Fabric. I. Bibl. Gr. 18. WESS.

271. 91. *Μέγιστος ἐγένετο — ἐν τε ταῖς τελεταῖς*] Diximus supra L. I. 23. WESS.

271. 99. *Παραλληλίστως τῷ Διονέσῳ*] Commeminit Bacchici descensus ad inferos, ut matrem superiorum in numerum transcriberet, Plutarch. T. II. p. 566. A.; et ne locum, unde in auras emerserat, ignorarem, Troezenii in Dianae Sospitae templo, quod in urbis foro excitaverant, peregre advenientibus ostentabant in Pausan. II. 31. Quod matrem autem, diis insertam, *Θεώρην* (vid. superius III. 62.) adpellavit, id in consecratione, ut nomen mutarent, sollemne erat, docente Ezech. Spanhem. in Caesar. Iuliani p. 12. WESS.

271. 8. *Μετὰ Πιερίδου*] Pirithoum, aeternis constrictum vinculis, diro mulcandum supplicio inferis, Theseo Herculem liberatorem ad superos comitante, relinquit c. 65., Criticis in Apollon. Rh. I. 102. haud invitis. WESS.

271. 17. *Τινὲς δὲ λέγουσι ποίμνας προβάτων etc.*] In his nomen suum profitetur Agroetas in Schol. Apollon. Rhod. IV.

1397., Pherecydi, ut ibidem explicatur, prior placuit opinio. De aurea Homeri Venere eleganter Aelian. IV. II. A. 2., et cultissime omnium urbanissimus Lucian. D. Mort. IX. 3. WESS.

272. 21. *Λέγουσιν, ὅτι — τετευχέναι*] Novum videri possit λέγουσιν ὅτι τετευχέναι, et tollenda potius particula ὅτι. Sed ita loquitur cum alibi, tum p. 167. *μυθολογοῦσιν ὅτι εἰπεῖν.* et p. 192. *μυθολογήσαι διότι ἐπάροχεν.* et p. 306. *ἔγασαν ὅτι δέξεν.* Ibidem vero ὅτι est *παρέλκον* et in alia sermonis forma. STEPH. Loquuntur et alii ita. Strabo XV. p. 1064. A. de Indis ὅτι προσόμοιος οὐκ ἔχειν. Philostratus VIII. Vit. Apoll. 7. p. 333. *καὶ οὕτω ἀθάνατος ὢν, ὡς μήδ' ὅτι Ἐγχορσον εἶναι λελησθαι.* S. Lucas A. A. XXXVII. 10. *θεωρῶ, ὅτι — — μέλλειν ἔσεσθαι τὸν πλοῦν,* ubi ex Polybio et Arriano plura doctissimus Raphaelius. Sine caussa ergo Berkelius haec Stephani in *Ἀιγιγένεια* mendii manifesta censuit, *καὶ γὰρ, ὅτι ἐκεῖ παραγερομένη Αἰγιὸ τεκεῖν τὸν Ἀπόλλωνα.* WESS.

272. 33. *Ἐσπερον καὶ Ἰλιαντα*] Conf. supra L. III. 60. WESS.

272. 38. *Τὰ πρόβατὰ μῆλα ζαλοῦντας*] Vide Schol. Sophocl. Aiac. v. 608. et in Theocrit. Idyl. IV. 10. Eustath. in Homer. p. 1383. et Ezech. Spanhem. in Callimachi H. Apoll. v. 51. WESS.

272. 40. *Ἐσπερίδα*] *Ἐσπερίδα* Reg. vid. infr. c. 57. WESS.

*Ibid.* *Συνοικῆσαι τῷ ἀδελφῷ*] *Non dubium potest esse, quin scripserit Diodorus συνοικίσαι.* Quis namque ignorat, συνοικεῖν esse in matrimonio cum aliquo vivere, συνοικίσαι in matrimonium dare, quod voluit haec Diodorus. Sic supra c. 10. *Ἰασίλειος Κρότων, θανατώσας τὴν ἀρετὴν τοῦ νεανίσκου τὴν τε θυγατέρα Μεγάραν συνοίκασεν αὐτῷ,* nuptui collocavit. Eandem Megaram ipse Hercules, ut refert Noster infra c. 30., dedit in matrimonium Iolao, *τέλεισας τοὺς ἀθλοὺς τὴν μὲν ἑαυτοῦ γυναικα Μεγάραν συνοίκασεν Ἰολάω.* Sic c. 33. *in fine ὁ Τεύθρας ἰσχυρῶς ὢν ἀφένων, τὴν θυγατέρα Αἰγιόπην συνοίκασεν τῷ Τηλέφῳ* et in eiusdem c. principio Hippolyte dicta erat συνοικιζομένη *Ἰξари.* Res haec nimis nota est, quam ut aliunde ulterius eam confirmare pergam ac ineptus fam. Bene haec Cl. Io. Iensius in Epist. ad Graevium p. 408., cuius coniecturae, si vel contra eam venissent scripti libri, fidenter locum dedissem: nihil enim horum permutatione frequentius. Vid. L. XII. 32. et Pausan. VIII. 4. p. 606., et *καὶ συνοίκησεν ἔρασθέντι τῷ Τεύθραντι* lege, non, uti editur, *συνοίκασεν.* WESS.

272. 51. *Ἀνταῖον μὲν ἀνελεῖν*] Vide supra c. 17. WESS.

272. 56. *Βασιλέα τῶν Αἰθιοπῶν*] In Arabia Emathionem ab Hercule occisum Apollodorus II. 5. 11. adfirmat. Sed vide eiusdem L. III. 11. 4. WESS.

273. 68. Τὴν τῶν ἄστρον σφαῖραν γιλ.] Dictum ante ea de re est L. III. 60. WESS.

273. 73. Αἰνιτομένων τῶν ἀνθρ. τὸ γένος] Ex γερονός corruptum hoc esse divino. RHOD.

273. 80. Δεδουλωσθαι] Καταδεδουλωσθαι Co. M., ut Demosthen. de Chersones. p. 64. et Noster L. V. 15. Vide supra c. 10. WESS.

273. 81. Ὡς ἔμοι γράφουσι] Conf. c. 16. WESS.

273. 84. Τὸν Κιμμέριον Βόσπορον] Sic debuerant, si recordati fuissent Aeschyli Prometh. v. 731.

Ἔσται δὲ θνητοῖς εἰσαεὶ λόγος μέγας  
Τῆς σῆς πορείας, Βόσπορος δ' ἐπάνιμος  
Κεκλήσεται. —

Atque infra XII. 31. XIV. 93. XX. 22. WESS.

273. 87. Ὅπου νῦν ἐστὶ τὸ Ἀμαζόνειον] Stephanus Ἀμαζόνειον, sic enim ipse et Plutarch. et Suidas, τόπος ἐν τῇ Ἀττικῇ, ἐνθα θηραεὺς τῶν Ἀμαζόνων ἐκοίτησε. Immo ipsa in urbe fuit, teste Plut. Thes. p. 12. F. Aeschylus Amazonum castra in Areopago locat Eumen. v. 688. Conf. Maussac. in Ἀμαζόνειον Harpocrat. et lo. Meurs. Thes. c. 20. WESS.

273. 94. Ἀς μὲν κατέζουσαν] Plutarchus conditionibus bellum fuisse positum in Thes. p. 13. significat, prudenter addens, καὶ θαιμαστόν οὐκ ἐστὶ ἐπὶ πράγμασιν ὅτιω παλαιοῖς πλαυῶσθαι τὴν ἰστορίαν. Nostro praeter alios adstipulatur Lysias Orat. Funeb. c. 2. WESS.

273. 2. Ἐπαλίωμεν] Supra ἐπάνιμεν. RHOD.

273. 11. Θεσπίς γὰρ ἀνὴρ ἦν] Infra, videlicet p. 171. et 205. et alibi, genitivus est Θεσπίων, non ab hoc nominativo Θεσπίς, sed a Θεσπίς. STEPH. et RHOD. Θεσπίος γὰρ ἀνὴρ ἦν etc.] Hoc nomine usus est Pausan. IX. 26. οἱ δὲ Θεσπίων φασιν εἶς Ἀθηῶν ἐλθόντα τὸ ὄνομα τῇ πόλει δοῦναι γεγονέναι δὲ ἀπὸ Ἐσθθδέως ἀνιόν. Loquitur de Thespis, earumque conditore, prorsus ut Noster. Tamen puellarum patrem non Thespium sed Thestium c. 28. p. 763. fuisse perhibet; qua in re consentaneos habet Athen. XIII. 1. Greg. Nazianz. Orat. III. p. 81., et his priorem Apollod. II. 3. 9., ut monere haud neglexit diligentissimus Sylburgius. Thespium vocant Tzetzes Chiliad. II. 121., Hygin. Fab. CLXII. ubi plura Muncker. WESS.

274. 20. Παιῖοι εἰὼν πενήζοντα] Omnes partu mares ediderunt, geminos tamen maior minorque natu, Pausan. IX. 28. et Apollod. II. 7. 8. Bene Greg. Nazianz. Orat. III. p. 108. B. καὶ ταῖς πενήζοντα Θεσπίων θυγατέρας ἐναθλέων Ἡρακλῆς, ἐν μιᾷ κελτὶ ὁ Τριόσπερος, καὶ τρισκαίδεκατον ἀθλον ταύτων ἐπιτελέσας, οὐκ οἶδ' ὅπως τοῖς ἄλλοις γε οὐ συναριθμούμενον etc. WESS.

274. 22. Εἰς Σαρδόνια] Sic mox semel iterumque et L. XIV. 63., at rectius εἰς Σαρδόνια II. 35. et XV. 24., uti Polyb.

I. 24. Appian. Hannib. p. 550. Strabo V. p. 342. B. et optimus quisque. Ego Mss. sequar. WESS.

274. 24. Καὶ συστρατευομένου] Praeteritum sensus postulat, συστρατευσαμένου. RHOD.

274. 26. Ἄνο μὲν κατέμειναν ἐν ταῖς Θήβαις] Paulo aliter Apollodor. II. 7. 6. Hercules πέμπας πρὸς Θέστιον, ἐπὶ μὲν κατέχειν ἔλεγε παῖδας, τρεῖς δὲ εἰς Θήβας ἀποστέλλειν, τοὺς δὲ λοιποὺς τασσαράκοντα πέμπειν εἰς Σαρδῶ τὴν νῆσον. Sic enim recte MSS., quod et sagaci coniectura adsecutus erat Kuhn. in Pausan. VII. 2. Ergone hic τῶν — παίδων τρεῖς μὲν etc. scribendum, ut Apollodoro consentiat? quod profecto pronum foret, si hunc ducem unice sectaretur. Porro, cum δημοῦχος eorum posteros, qui Thespiis considerant, adpellatos ait, id magistratum fuisse nomen innuit. Habet eundem titulum, etsi alia in re, Sophocles Oedip. Col. v. 448.

Ἐὰν γὰρ ὑμεῖς, ὦ ξένοι, θέλῃτέ μου

Σὺν ταῖσι ταῖς Σεμναῖσι ΔΗΜΟΥΧΟΙΣ θεαῖς

Ἀκλῆν ποιεῖσθαι. —

Eumenides enim Oedipus intelligit, Coloni civiumque praesides. Propius absunt γὰς τᾶσδε Δαμοῦχοι, i. e. Theseus et qui cum eo Atticae regionis gubernatores erant, eiusdem Fab. v. 1080. WESS.

274. 35. Ἰόλαιον] Ἐτυμολογώτερον est Ἰολαεῖον, quod Favorini Lexicon approbare videtur, ubi pro Ἰολαεῖον Ἰόλλειον mendose scriptum est. RHOD. Ἦν — καλεῖσθαι Ἰολαεῖον] Visum est hoc praestare, modo arcessatur ad sententiam ex anterioribus φασίν. Ἰολαεῖον satis tuebuntur Ἰοαλεῖοι infra L. V. 15.; alteri, si qui pertinacius defendere velint, suffragabitur Pausan. X. 17. p. 837. ἔστι δ' οὖν, inquit, καὶ κατ' ἐμὲ ἔτι χωρία τε Ἰολαῖα ἐν τῇ Σαρδοῖ etc. Mihi tamen meliorum Codd. potior videntur auctoritas. WESS.

274. 43. Μεταστήσας] Redde contextui suum καταστήσας. RHOD.

274. 44. Αἰίδαλον ἐκ τῆς Σικελίας] Prudentius Diodorus, quam quidem illi, qui ab Aristaeo in Sardiniam deductum tradebant, merito reprehensi a Pausan. X. 17. Opera vero Iolai auspiciis per insulam condita, et ad Graecorum quidem morem ac modum, tetigit etiam Aristotel. Mirabil. p. 727. ed. Duvall. WESS.

274. 50. Ὠνόμασε δὲ καὶ τοὺς λαοὺς Ἰολαίους] Puto scripsisse Ἰολαεῖους, ut L. V. 15.; in cuius nominis origine Diodoro accedunt Strabo V. p. 344. A. et Pausanias: mirum vero, Latinos Livium, Melam, Plinium eos *Ilienses* nuncupare; quos etsi corruptos, atque ex Diodoro et Strabone corrigendos confidentissime decreverit Salmas. in Solin. p. 70., vereor, ut omnium adsensum inpetret. Pausanias, qui Iolaenses in Sardinia campos non praeteriit, *Iliensium* commemorat, Ἰλιαῖς μὲν ὄνομα καὶ ἐς ἐμὲ ἔτι ἔχουσι inquit L. X. p. 838., ac Troia arcessens, quem-

admodum et Silius XII. 362., ubi Salmasio iure optimo obloquitur Clariss. Drakenburgius. Equidem in hac Graecorum Latinorumque discordia non temere dissensero cum Ph. Cluverio Sard. Antiq. p. 484., fabulis omnia, quae de Iliensibus, Troia profugis, et Iolaensibus profita sunt, transcribente, natis ex *Iolaensium* sive *Iliensium* in Sardinia indigenarum nomine; quod cum Poenorum sermone *altos* sive *montanos* indicet, sagacissime S. Bochartus nomen, ait, *vel Iliensium vel Iolaensium factum ex Poeno* אילי, *Ilaë*, quasi *altos dixeris, i. e. montanos, quia, Poenis insulam invadentibus, in celsa loca se contulerant, quod et Pausanias et Strabo et Diodorus disertis verbis asserunt*, L. I. de Phoenic. Colon. c. 31. p. 575. WESS.

275. 57. Καθάπερ οἱ Πέρσαι τὸν Κῦρον] Conf. Herodot. III. 89. Pausan. VIII. 43. p. 690. WESS.

275. 71. Τὸ δ' ἀποτέλεσμα τούτων ἀκολ.] Id vero negant Strabo ceterique scriptorum, qui Sardorum res tetigerunt. Poeni Romanique insulam imperio suo subicecerunt, victisque imperarunt; quod cum Is. Casaubon. exploratissimum haberet, temperare non potuit, quin Diodor. perstringeret in Strabon. V. p. 344. Fortasse tamen id tantum voluit Noster hoc loco et L. V. 15., Iolaenses illos, in insulae montana refugientes, in antris secure miseram degisse vitam, reliquis victorum imperio parentibus. WESS.

275. 79. Τὴν τοῦ βίου διεξαγωγὴν — ποιούμενοι] Etiam si vulgatum per erat admodum, hoc postulat Codd. concors auctoritas. Callieratides ex Pythagorae sectatoribus in Io. Stobaei Serm. LXXXIII. p. 485. ἃ δ' ἐπιβήλοισα κόσμον ἐλευθέρων καὶ διεξαγωγῶν, καταρχὰ βροτῶν καὶ ἀλλόθεν ὀρίζονται τοῖς ἀνθρώποις; ubi caussa non erat, cur *διαγωγῶν* mallent. WESS.

275. 86. Εἰρημένους] Προειρημένους Co. R. solita permutatione, ut supra I. 53. et in Epist. ad Hebraeos X. 15. WESS.

275. 87. Μεγάρων συνόριον Ἰολάω] Plutarchus mira sedulitate Hercules, ait, τὴν ἐαυτοῦ γενναῖα Μεγάρων Ἰολάω συνόριον ἐκκαίδεζαέτι τότε ὄντι τριῦ καὶ τριάζοντα ἦν τότε γεγεννημένην, Amator. T. II. p. 754. E. Euripides, Seneca, Lucianus et Hyginus Herculi furenti Megaram occidendam tradiderunt. Vid. T. Hemsterh. in Lucian. D. D. XIII. 2. WESS.

275. 1. Μὴ που νεμόμεναι τυγχάνοι] Consentit Sophocles Trachin. v. 274.

Ὡς ἴκει ἀνδρῶν Ἰφίτος Τιρυνθίαν

Πρὸς κλειτὴν, ἵππους νομάδας ἐξιγροσκοπῶν.

Τὸν ἄλλοσ' αὐτὸν ὄμμα, θατέρα δὲ νοῶν

Ἔχοντ' ἀπ' ἄκρας ἤκε προγῶδους πλακός.

Apollodorus ab utroque in multis recedit L. II. 6. 2., quod in hoc genere, ut dictum alias est, nihil mirum. WESS.

276. 5. *Παρεκάλεσεν αὐτὸν καθᾶραι τὸν γόνον*] Homi-  
cidas velut consecratos atque inquinatos olim aversabantur om-  
nes: quare ex amicis aliquem supplices adibant, ut lustratione  
instituta purgarentur. Hercules non Neleum tantum sed et Hip-  
pocoontis familiam Spartaë, quorsum *καθαροῖων εἴνευα* venerat,  
ut sese Iphiti caede contaminatum abluerent ac lustrarent, roga-  
rat, Pausan. III. 15. p. 214. auctore. Tangunt autem atque illu-  
strant hunc morem Ism. Bulliard. in Theon. Mathem. p. 216. et  
H. Vales. in Damasceni Excerpt. p. 441. et Stanleius in Aeschyl  
Eumen. v. 579. *Τοῦ γόνου* Reg. non male. Vide tamen Apollo-  
dor. I. 6. 2. WESS.

276. 18. *Τῶν ποτε Μαιόνων, νῦν δὲ Ἀυδῶν*] Ita Ste-  
phanus gentem nominat: qui *Μήονες* poetis Ionum dialecto vocan-  
tur. RHOD. *Τῶν τότε Μαιόνων*] Sic scripsisse auctorem, quae  
sequuntur certo confirmant. Strabo XIII. p. 877. C. *Ἀυδοὶ οἱ  
τότε Μήονες.* et eo multis annis prior Herodotus I. 7., *ἀπὸ τευ ὁ  
δῆμος Ἀέδιος ἐκλήθη ὁ πᾶς οὗτος, πρότερον Μήων καλεόμενος.*  
quae quoque illorum Codd. scripturae, quibus *Μήόνων* vox pro-  
batur, auxilio esse poterunt. WESS.

276. 22. *Τοὺς ὀνομαζομένους Κέρκωπας*] Notae horum  
fraudes et strophae vel ex *Κερκωπίζειν* et *Κερκωπίων ἀγορά*, de  
quibus Zenob. I. 5. IV. 50. Harpocration in *Κέρκωψ*, Eustath.  
in Homer. p. 1864. atque alii. WESS.

276. 25. *Συλέα δὲ τοὺς παριόντας ξένους etc.*] Eadem  
Apollodorus, cuius verba in controversiam cum venerint, adscri-  
benda sunt: *Συλέα δὲ, αἰτ, ἐν Ἀυλίδι τοὺς παριόντας ξένους  
σκάπτειν ἀναγκάζοντα — ἀπέκτεινε.* Mentio enim Aulidis doctis-  
simum Th. Galacum offendit, opinatum venisse ab Apollodoro  
*Συλέα δὲ τὸν Ἀυδιον*, uti in Tzetzae Chil. II. 332. Sed quid si  
in Lydia regio fuerit, cui nomen *Aulidis*? *Ἀυλαὶ* quidem certe  
fuerunt in hac vicinia prope Aphrodisiadem, memoratae a Da-  
mascio in Vit. Isidori apud Phot. Cod. CCXIII. p. 1050.; pote-  
ritque adeo *ἐν Ἀυλαῖς* tantisper refingi, dum *Aulis* aliunde crua-  
tur, medicina leniore. WESS.

276. 28. *Λεηλατούντων*] Tertium λ pro τ typographi-  
cum est erratum. Verbum a *λεία* et *εἰλάω* compositum *praedas  
agere* significat. RHOD. *Ἰτιόνων δὲ λεηλατούντων etc.*] *Ἰτιόνην*  
Lydiae urbem Stephanus et cives eius *Ἰτιονίους* memorat in  
*Ἰτιον*. Videtur eiusdem memoria fuisse in Doniana inscriptione  
Classe I. 98., sed quae nunc ea parte lacera est et defecta. WESS.

276. 34. *Λαμὸν ἐγέννησε*] Ovidius ratum hoc habet: sic  
enim Deianira Epist. IX. 53.

*Una, recens crimen, praefertur adultera nobis,*

*Unde ego sum Lydo facta noverca Lamo.*

Palaephato tamen incredibil. c. 45. *Laomedes, Agelaus* Apollo-  
doro II. 7. 8. *Herculis et Omphales filius* adpellatur. WESS.



276. 36. Ὑψὸς Κλεόλαος] Facit vicinia nominum Κλεολάου et Κλεοδαίου, ut in dubio haeream, utro horum nuncupatus sit Herculis hic filius. *Cleodaeum* Herculis nepotem praeter Pausan. III. 15. p. 246. alii plures memorant in Sylburgii nota: et eum tamen Κλεόλαον Apollodor. II. 8. 2. vocat. Tua itaque, utrum malis, optio est. Ego interea tamen in vulgato acquiescam: tum Apollodori caussa, Κλεολάου cognomen huic inponentis L. II. 7. 8., tum quod nihil in eo nomine insolens sit, Cleolausque Clitoriensis in Pausan. VIII. 27. reperiatur. Illud paene addere neglexeram, Herodotum I. 7. et Hellenicum in Stephani *Ἰκτελη* in omnia alia discedere. WESS.

277. 42. Μικρὸν ὕστερον διέξιμεν] Inferius c. 43. WESS.

277. 46. Ὅζτι' Mut. ὅζτι' ὡς quoque Vind. et Co. prave. Vid. Apollodor. II. 6. 4. WESS.

277. 49. Ἄλλ' οἶόν τ' ὅτε] *Hiad.* V. 638. ubi tamen exemplaria, etiam Romanam cum parentholus seu paraphrasi Eustathii, οἶόν τινα habent. *RHOD.* Ἄλλ' οἶόν τινα] Sequor schedas Coislin., hoc probantes non hic tantum, sed et c. 50.; quo loco cum Ἐξ οἷης plerique omnes praeferant, idque in editis Homeri legatur, nolui scriptis libris refragari. WESS.

277. 56. Τὸν Ἀμφιαράου υἱὸν Ὀϊκλέα] Lege τὸν Ἀντιφάτου. nam Oicles fuit Amphiarai quidem pater, Antiphati vero filius, et aliter non quadraret ad rationem temporis historia. Nam prius illud Ilii excidium Hercule duce factum multis annis praecessit expeditionem septem ducum ad Thebas, ubi Amphiaraius vigebat: ideo male convenit eius filio, ut cum Hercule Troiam potuisset excindere. Tum Amphiaraius duos tantum filios habuit, Alemacnem et Amphilochem, ut ait Homerus *Odys.* O. 248. et omnes antiqui. Ideo lege meo periculo Ἀντιφάτου. *PALM.* Nisi si alius hic sit Oicles, quod difficulter mihi persuadeo, vera est viri doctissimi divinatio. Stemma hominis ita recensent Critici in Pindari *Nem. Od.* IV. *Μελάμπροδος Ἀντιφάτης, ὃν Ὀϊκλῆς, ὃν Ἀμφιαράου.* neque aliter Poeta *Odys.* O, 244. et auctor ipse c. 70. WESS.

277. 68. Καὶ πολλοὺς ἐν χειρῶν νόμῳ κατέσφάζας] De conflictu, si qui in eo cadant, tritum hoc. Polybius XI. 2. ἐν χειρῶν νόμῳ κατέσφραξε τὸν βίον. et c. 17. ἐν χειρῶν νόμῳ διέθραξε τὸν τέταρτον. Noster saepissime L. XIX. 43. XX. 56. et 67. WESS.

277. 71. Τοὺς ἔππους] Τὰς Co. M. ut cap. 50. WESS.

277. 81. Εἰς Ὀλενον προσδεξάμερον] Hoc personale seu proprium viri esse vix crediderim. Nam et insolentior est syntaxis, ac fere poetica, et dubium an Olenus quispiam nominatus fuerit. Ex Homeri autem *Hiad.* II. 639. et Strabone L. VIII. p. 594. Olenum Aethiopiae et Aetoliae urbem fuisse, notius est quam ut hic inculcetur. Quid igitur faciendam? Commodissima equidem ratio foret, si divisim legeretur πρὸς *Λεξάμερον*, ut *hospitis Her-*

culei nomen hic expressum acciperetur, nisi idem, quod Poggio in suo *Ephicano* accidit, nobis quoque eventurum vereremur. Tunc autem versio talis esset: *Re infecta Olenum ad Dexamenum regressitur*. Quod si εἰς motum ad personam hic significare contendas, hoc molo interpretandum est: *Ad Olenum, qui antea illum susceperat, (τὸν προσδεξάμενον) reversus est*. Nostra interim versio, *ad Olenum regressus, a N. quodam hospitio excipitur*, medium quasi tenet. RHOD. Lege confidenter πρὸς Δεξάμενον. Dexamenus fuit Oleni rex, qui Herculem excepit hospitio. Pausanias in Eliacis I. 3. et Achaicis c. 19. Hyginus c. 31. Apollodorus II. 5. 6. PALM. [Εἰς Ὀλενον πρὸς Δεξάμενον] Vera est viri doctissimi et salutaris medicina, sed sera. iam olim eam Diodoro fecerat excellenti eruditione vir P. Leopardus III. Emend. c. 5., cuius si recordatus fuisset aut Muncker., haud pauca eorum, quae Hygino Fab. XXXI. adscripsit, in solidum illi haud dubie transcripsisset: aut Kuhnius, non hercle tulisset aequo animo in Pausan. VIII. 18. τίς ὁ δεξάμενος ἐν Ὀλένῳ βασιλεύς. Fabulam hanc Timocles ἐν Κενταύρῳ ἢ Δεξάμενῳ declarasse videtur, citatus ab Athenaeo I. VI. 9., ubi vertentem Dalecampium, in *Centauro aut Labro*, castigavit Is. Casaubonus. WESS.

278. 82. [Ἰππολύτης συνοικιζομένης Ἀζάν] Forte Ἀζάνι ex Coisl. et Mut. praestiterit, quo nomine inter Arcadis liberos fuisse perhibetur, unde *Azaniae*, Arcadiae parti, cognomen venerit, dissentiente tamen Schol. Apollon. Rhod. II. 53., a Pausania VIII. 4. et criticis in Euripid. Orest. v. 1616. De puellae nomine res quoque dubia: Apollodorum si audis L. II. 5. 5. Mnesimache fuit; Hyginum si sequaris Fab. XXXI., Deianira. Praeterea *Eurytion* alius est, atque ille apud Poetam Odys. γ, 295., ubi in scholiis Bacchylides huius commemorat. WESS.

278. 90. [Τῆς Ἀρκαδίας ἐν Θενεῶν] Vide Pausan. VIII. 11. diligenter opera, quae Hercules Pheneatarum in commodum eo tempore absolverit, describentem. WESS.

278. 93. [Ἐύρτον τὸν Ἀυγέου] Vel est hic locus mendosus, vel est Diodori μνημονιζὸν σφάλμα. Nam Eurytus non fuit Augeae filius, sed ex fratre Actore nepos ex Molionibus unus, quos Hercules insidiis exceptos in Cleonis occidit, ut docet Apollodorus II. 7. 2. Pausanias in Argolicis c. 15. Repone igitur τὸν Ἀζτορος, vel, si mavis, τὸν Ἀυγέου ἀνεψιόν. PALM. [Ἐύρτον τὸν Ἀυγέου] In his sine dubio error est, in quo tollendo cum scripti libri operam frustrentur, facile patior Diodoro inputari. De caede Molionidarum Pindarus Olymp. Od. X. 35. et Pausan. II. 25. Ἀυγαίον Co. semper. Vid. supr. c. 13. WESS.

278. 96. [Ἐγόρευεν Ἀυγέαν] Negat Pausan. V. 3., non item Apollodor. II. 7. 2. WESS.

278. 3. [Ὀϊωρὸν δὲ τὸν Αἰζυρινόν] Id puero nomen fuisse firmabunt haec Pausaniae III. 15. Ὀϊωρὸς ἰλιχίαν μὲν μειράκιον,

ἀνεπιμὸς δὲ Ἡρακλεῖ. *Λιανυμνίου γὰρ παῖς ἦν, τοῦ ἀδελφοῦ τοῦ Ἀλκιμήνης* etc. restituendum ergo fuit. WESS.

278. 8. *Τυνδάρεω*] *Τυνδάρεων* Co. M. satis recte. Vide Pausan. I. 33. et II. 18. ubi vulgatum, cum nota Sylburg. WESS.

278. 9. *Καὶ τὴν βασιλείαν Τυνδαρέω*] Postremam vocem auctori, ad sensum necessariam, reddidi. Defuit eadem in veteri marmore, sed lacero et exolescentibus literis mire corrupto, Class. I. 98. Donii. ΣΗΛΑΡΤΑΝ ΤΕ ΛΑΒΩΝ ΔΟΥΡΑΛΑΩΤΩΝ ΤΟΝ ΠΗΛΟΚΟΩΝΤΑ ΚΑΙ ΤΟΥΣ ΠΑΙΔΑΣ ΦΟΝΕΥΣΑΣ Τυνδάρεων ΣΥΝ ΚΑΣΤΟΡΗ ΚΑΙ ΠΟΛΥΔΕΥΚΕΙ ΦΕΥΓΟΝΤΑ ΚΑΤΑΓΑΓΕ ΚΑΙ ΕΙΩΚΕ ΛΑΚΕΛΑΙΜΟΝΑ ΤΟΥΤΩ. Sic fuisse puto. Adde Pausan. II. 18. p. 151. WESS.

278. 13. *Ἰγκιλιος*] *Ἰγκιλιῆς* Pausaniae VIII. 14., qui et eum in pugna cum Eleis et Molionidis letali vulnere percussum discessisse tradit. Plutarchus in nominis scriptura Pausaniae, in praelii loco et tempore Diodoro adstipulatur extremo Libro de Fraterno Amor. p. 492. T. II. Puto utroque modo dixisse, ut *Πάτροζλον*, *Ἐτέοζλον*, qui aliis *Παιτροζλιῆς*, *Ἐτεοζλιῆς*, apud Eustath. in Iliad. p. 112. WESS. Mox verissime libri duo optimi *Κηφῆς καὶ Κηφέως γιοί*, quod Poggius quoque expresserat et firmat Apollodorus II, 7, 3.

278. 18. *Παρά Ἀλέω*] *Παραλέω* Cl. *παρὰ Λεῶ* Euseb. II. Praep. Evang. p. 56. Conf. P. Leopard. II. Emend. c. 16. WESS.

278. 25. *Καὶ προσέειπε καταπορτίσαι*] Hecataeus Augem una cum filio arcae parentis iussu inclusam et in mare abiectam tradiderat, teste Pausan. VIII. 4.; id secutus est in *Auge* sua Euripides apud Strabon. XIII. p. 915. Nostri ordinem rei gestae praeter alios confirmant Tegeatae in Pausan. VIII. 48. et Alcidas Orat. in Palamed. p. 185. WESS.

279. 27. *Κατὰ τὸ Παρθένιον ὄρος*] Conf. Callim. II. Del. v. 70. quaeque ad eum commentatus est Ill. Ezech. Spanhem. Mox *ἐπὶ τινὰ χρεῖαν ἀναγκαίαν* idem est ac Epicteti in Florileg. Io. Stobaei Tit. CXX. p. 610. *τὶ τῶν ἀναγκαίων ποιεῖν*. WESS.

279. 39. *Κορύθου τοῦ βασιλέως*] Eadem Apollodor. III. 9. 1. Forsan ab eo Tegeatarum quidam *Κορυθεῖς* apud Pausan. VIII. 45. sunt appellati. WESS.

279. 48. *Ἄπαις ὧν ἀρρένων*] Addere alii solent *παίδων* vocem. Demosthen. Orat. advers. Spud. p. 590. *ἄπαιδος δ' ἐξελτὸν τελευτήσαντος ἀρρένων παίδων*. Andocid. de Myster. p. 15. Damascen. Excerpt. 486. Paulo aliter Herodotus I. 109. *καὶ ἄπαις ἔρσερος γόνιον*. Mallem hic priores imitatus esset Diodorus, sicuti bene c. 41. WESS.

279. 62. *Μόνης δὲ τῆς Ἀρτέμιδος ὀλιγόρησεν*] Homerum Iliad. I. 530. etc. cultissime haec describentem vide. WESS.

279. 68. *Πολλοὺς τῶν ἀρίστων* etc.] Hoc malo, uti c. 32. *αὐτὸς μὲν μετὰ τῶν ἀρίστων προῆγεν ἐπὶ τὴν πόλιν*. Apollodo-

rus hac ipsa de re I. 8. 2. τοὺς ἀρίστους ἐκ τῆς Ἑλλάδος πάντας ἐκάλει. Infra c. 42. et 44. aliud valet. WESS.

279. 72. Ἀταλάντης τῆς Σχοινέως] De Atalanta, fueritne Iasii an Schoenci filia, veteribus non convenire, notissima res est. Ezech. Spanhem. ad Callim. H. Dian. v. 216. tanta diligentia eam scriptorum discordiam exsecutus est, ut aliis otium fecerit. WESS.

280. 75. Συγκυνηγετοῦντες ἡγανάκτησαν] Scholion recte et crudite συγκυνηγοῦντες, quamvis Favorinus inter synonyma τοῦ κυνηγεῖν etiam κυνηγετεῖν recenseat. RHOD. Συγκυνηγοῦντες ἡγανάκτησαν] Iniquum censui contra tot Codd. venire velle: alioqui κυνηγετεῖν eius est dignitatis, ut fideiussore Favorino non egeat. Usurpant Noster III. 41. IV. 85. Strabo XV. p. 1037. A., Aelian. I. II. A. 8., Diogen. Laert. II. 72., Pausan. V. 7. p. 390., συγκυνηγετεῖν in Ms. Oxoniens. Incredib. c. 14. Palaephatus, ἐκκυνηγετεῖν Lycophron. Alex. v. 1025., κυνηγετῆρ Manetho L. IV. 337. etc. De data autem Atalantae apri pelle Nostro consentit Accius Meleagro, *Remanet gloria apud me, exuvias dignavi Atalantae dare*, in Non. Marcello p. 470. et p. 499. cuius exuvias et coronam huic muneravit virgini. quorum haec a Thestii filiis, illa ab ipso Meleagro videntur prolata. WESS.

280. 78. Ἀταλάντην] Ἀταλάντη Co. M. Vid. supr. III. 43. WESS.

280. 85. Ἐπὶ τῇ τῶν ὀμμάτων ἀραιρέσει] Denuo scriptorum librorum potior est auctoritas. Notum omnibus Sophocleum Antig. v. 523. Ὀρμαῖος ἐκ μιᾶς τε καὶ ταύτου πατρός: neque in obscuro Aeschyli VII. C. Theb. v. 357. Ἀρπαγαὶ δὲ διαδρομῶν ὀμμάμορες. et nobile illud ex eadem Fabula v. 687. Ἀρδροῶν δ' ὀμμάμορον θάνατος ᾧδ' ἀτοξτόνος, Οὐκ ἔστι γῆρας τοῦδε τοῦ μιάσματος. WESS.

280. 90. Ὅτι τότε τελευτήσῃ Μελέαγρος] Sic oportuerat, aut τότε τελευτήσῃν Μελέαγρον, τὸν υἱὸν etc., ut nemo nescit. Apollodorus, cuius verba aemulatur auctor, L. I. 8. 2. τότε τελευτήσῃ Μελέαγρος, ὅταν ὁ καιόμενος ἐπὶ τῆς ἐσχάρας δαλὸς κατακαῆ. Accius Meleagro, *Eum vitae finem ac fati internecionem fore Meleagro, ubi torris esset interfectus flammeus*, apud Nonium c. 1. p. 15. Conf. Schol. in Iliad. I. 544. iam, quod Ἀλθαίαν Meleagri matrem adpellat, id bene habet; mallempque adeo a doctissimo Io. Christ. Wolfio id nominis ita restitutum fuisse Theophilo II. ad Autolye. c. 7. 8., quam Ἀλθέας propugnatum. WESS.

280. 2. Καὶ παρακλείεσθαι ταύτην ἀφανίσαι] Nihil erat profecto, ear hinc abiret Reg. Cod. Isocrates Evagor. prope finem, καὶ γὰρ ἐκείνοι παρακλείονται τῶν δρομέων οὐ τοῖς ἀπολειμμένοις, ἀλλὰ τοῖς περὶ τῆς νίκης ἀγωνιζομένοις. et Noster c. seq., qua auctoritas ad incertitudinem potestate vix quidquam tritius. De ipsa re Apollodor., etsi in omnibus Nostro non consentaneus,

I. 8. 4. *Υπὸνόντων τὸν πατέρα πέμψαι πρὸς Οἰνεία, πόδῳ τῆς Ἑλλάδος ὄντα, ἐπιταλιόμενον ἀποστῆλαι, sive potius, ἀποστῆλαι.* Sic enim scripsisse eum suspicor: namque ἀποστῆλαι absolute ita positum incongruens est et sermioni et rei, de qua agitur. WESS.

280. 14. *Ῥωσιωμένον τοῦ ποταμοῦ ταύρω]* Conf. Sophocl. Trachin. v. 10. 514. et Strabon. L. X. p. 703. WESS.

281. 24. *Οἰνὲν τινὸς ἀμαλακιστίης]* Forte haec respexit Etymolog. in *Ἀμάλθεια* scribens: *Εἰδὲ δ' οἱ φασὶ παραπεπλάσθαι τὸ ὄνομα. εἶναι γὰρ αὐτὴν ἀμαλακιστίαν παρὰ τὸ μὴ μάλ' αἰσσεσθαι καὶ ταπεινοῦσθαι.* Aliud sectatus est vetus scriptor in Stob. Serm. LIV. p. 369. ex Socratis opinione tradens, Amaltheae cornu εἶναι σύμβολον, ἃν μὴ τις ἢ μάλλον, ἀλλὰ ἐργάτης, πάντα ἐξῆεν τὰγαθὰ. κατὰ μὲν τὴν Ἀμάλθειαν, τοῦ μὴ μάλλονος ταπτομένου. κατὰ δὲ τὸ κέρας τοῦ βοῦς ἐργατικωτάτου ὄντος, τὸν ἐργάτην ἐνσημαίνεσθαι. *symbolum esse eius, qui cum minime mollis, sed operi assiduo intentus sit, bona omnia consequitur. Amaltheam hominem haudquaquam segnem, cornu bovis, animalis laboriosissimi, rusticum operis studiosum indicare.* Adit deinceps, *διὸ καὶ ἐχοντες αὐτὸ εὐδαίμοντα εἶναι, τε ἀγαθὸς δαίμων καὶ ἡ ἀγαθὴ τέχνη.* quod verissimum esse ostendunt veteres numi et Dio Chrysostom. Orat. LXIV. p. 591. D. WESS.

281. 28. *Φυλάντα τὸν βασιλέα τῶν Θεσπρωτῶν]* *Phylanta* adpellat Apollodor. II. 7. 8. et, qui eum exscripsit, auctor Argum. in Sophocl. Trachinias, nisi si utrobique peccatum sit, quod suspicor. Noster sponsorem dabit Homer. *Iliad.* O, 539. De Ephyra Thesprotorum abunde I. Palmer. II. Gr. Antiq. c. 5. WESS.

281. 31. *Ἰασὸς Οἰνεί]* *Ἰασοινεῖ* Euseb. II. P. Ev. p. 56., sed quem bene hinc correxit Viger. et ante eum P. Leopard. II. Emend. 9. WESS.

281. 32. *Ἐξουρῆμον τοῦ Ἀρχαίου]* Nomen infelicis pueri controversum est: qui tamen *Exurionum* vocarit, nomenque praeter Diodorum reperio. *Exonius* dicitur Herodoro in Athen. IX. cap. ult. et Apollodor. II. 7. 6., et forte verius. Adde Criticos veteres in Apollon. Rhod. I. 1212. WESS.

281. 39. *Νέσσορ]* *Νέσσορ* Co., ut in vetustis Strabon. Edd. L. XII. p. 692. WESS.

*Ibid.* *Μισθοῦ διαβιβάζοντα τὸν ποταμὸν]* Conf. Hygin. Fab. XXXIV. cum Muncker. animadversionibus. WESS.

281. 56. *Ἐχίων — συστρατεύοντα τῶν Ἀρχαίων]* Vid. supr. c. 34. et Apollodor. II. 7. 7., ubi et *Melienses* Arcadibus iunguntur; et Herodot. VIII. 73. WESS.

281. 60. *Τὸν τε βασιλέα τῶν Δροόπων ἀρεῖλε]* Idem docebatur in marmore Doniano Clas. I. 98., nunc temporum iniuria mirifice lacero. Aliunde tamen novimus, Herulem ex Phylantis filia Midea tulisse Antiochum. Docet id Pausan. X. 10. et I. 5., ubi ex *Μήδας* recte mutant viri docti. *Μήδαρ τὴν Φίλαντος*

Schol. Sophocl. Trachin. v. 464. adpellat, adaeque perperam. De Phylante diligenter Th. Reinesius, ut solet, Epist. XXIV. ad Rupert. p. 88. WESS.

282. 65. *Γληρέα καὶ Ὀδίτην*] Prius verissimum est: *Γληρὸς* enim sive *Γληρεὺς* dicebatur. Schol. Sophocl. Trachin. v. 53. *ἦσαν γὰρ αὐτῆς, Deianirae, παῖδες ἔξ Ἡρακλέους Ὑλλος, Κτήσιππος, Γληρὸς, Ὀδίτης.* Sic relingo corruptum *Ὀλίτης*, secutus T. Hemsterhusii iudicium; qui tamen *Hodites* aliis *Onytes* aut *Oneites* audit. Vide viri doctissimi notas in Luciani D. D. XIII. 2. et Cl. Th. Galaeum ad Apollodor. II. 7. 8. WESS.

282. 67. *Ἐξίσαν πόλιν Κάροστον*] *Styra*, vicinum Carysto oppidum, Dryopibus dedit Pausan. IV. 34. p. 366. Nimirum *Dryopes* ab Hercule Apollini fuerunt consecrati, ut perhibent, et quaquaversum dispersi. Ipsa in Delo Poëta hoc genus habet Aeneid. IV. 146. WESS.

282. 72. *Ῥιζισαν*] Verius est *Ῥίζισαν*, quae quidem verba passim commutari, nota res est. WESS. in Add.

282. 73. *Ἀσίτην, Ἐρμιόνην, ἔτι δ' Ἡίονα*] Harum *Hermionem*, de qua ad Synecdem. Hierocl. p. 647., et *Asinen* Dryopibus contribuit Herodot. VIII. 73., posteriorem quoque Pausan. IV. 34. et Strabo VIII. p. 573., *Eionas*, sic Homerum imitatus Iliad. B, 68. vocat, Asinaeis vicinas, haud praeteriens. Conf. Iac. Gronov. ad Stephani *Ἡίων.* WESS.

282. 75. *Ὡν ἐβασίλευεν Ἀργεῖος*] Retineo *Ἀργεῖος*. nam p. 182. idem recurrit. Rhod. *Ὡν ἐβασίλευεν Ἀργεῖος*] Vere Rhodoman. Regi nomen fuisse *Ἀργεῖον* Pindarus, Apollodorus, Pausanias atque alii, quos diligenti opera conductos explicuit Henr. Valesius L. I. Emend. c. 32. et, cuius curae eos Valesii libros debemus, P. Burmannus, Franc. F., auctores sunt. Incoluisse autem Dorienses *Hestiaeotim*, regionem ad Ossam atque Olympum, docebunt Herodot. I. 56. et Harpocrat. in *Τετραρχία.* WESS.

282. 77. *Κορωνὸς ὁ Καιρέως*] Vulgo quod legebatur *ὁ Φορωνέως*, id gradu possessioneque deiecti. Coronus patre Caeneo natus est, proptereaque *Κορωνὸς ὁ Καιρέως* Apollodor. I. 8. 17. et *Κορωνὸς Καιρέως* Apollon. Rh. I. 57. et Homero Iliad. B, 746. dictus; quo de plura ne adlam, facit diligentia Clariss. P. Burmanni in Catalogo Argonaut. WESS.

282. 80. *Ἐπὶ τρίτῳ μέρει*] Conf. L. II. 24. WESS.

282. 89. *Φυλάττειν τοῖς ἀφ' ἑαυτοῦ*] Repetiverunt eam partem Doridis Heraclidae, et Aegimio concedente incoluerunt, ut docetur c. 60. Huc referre soleo *τεθμὸς Ἀργεῖον*, de quibus Pindar. Pythion. Od. I. 122.

— *Θέλοντι δὲ Παμφύλου  
Καὶ μὲν Ἡρακλειδῶν ἔργονοι  
Ῥοχθαις ὑπὸ Ταυγέτου ναίοντες, αἰ-*

Εἰ μένειν τεθμοῖσιν ἐν Αἰγυμῖον

Διοριῆς. —

statuta intelligens, quibus edixerat, ut Doriensibus permixti Heraclidæ tertiam semper regionis partem sibi præcipuam haberent. Τὸ ἐπιβάλλον μέρος attigimus L. I. 1. WESS.

282. 90. Ἐπὶ Κέντρον τοῦ Ἰφιαίου] Duplici et ancipiti certamine cum Cycno depugnavit, prioreque victus, posteriore victor Hercules discessit, Pindaro Olympion. Od. X. 19. et Stesichoro, a Criticis in Scholiis exscripto, auctoribus. WESS.

282. 91. Ἐξ δὲ τῆς Ἰωνίας πορευόμενος] Apollodor. II. 7. 7. Ἰωνία vocat. Nostri, sive Ἰώνων seu Ἰωνίης, ut schedæ Mutin., legeris, nihil habere, cur illo posterius censeatur, Stephanus in Ἰτων cum Berkel. nota conmonstrabit. WESS.

282. 93. Ὀρμενίῳ τῷ βασιλεῖ συνέμιξεν] Aut Ὀρμενίον, cuius in mentem venit Ed. Simsonio ad A. M. 2787., aut Ὀρμενίον legi oportet. Amyntor enim est, quem Ormenio imperasse, Strabo IX. p. 670. disertim docet. Male ergo in Apollodoro I. 7. 7. legitur: ὡς δὲ εἰς Ὀρχομενὸν ἵκεν, Ἀμύντωρ αὐτὸν ὁ βασιλεὺς οὐκ εἶα διέρχεσθαι. quod pravum esse, ipsa itineris, quod Heros ingressus erat, ratio ostendit. Itone Trachinem pergebat, quorsum Orchomeno transiens pervenire non potuit: ne dicam Ormenii regem fuisse Amyntorem, non Orchomeni. Scribe itaque ὡς εἰς Ὀρμενίον ἵκεν. Error natus est correctoris Grammatici nimia sedulitate, quæ et hoc loco in Mut. et Cœisl. Mss. Ὀρχομενίῳ extruxit. WESS.

282. 97. Τὴν δὲ Ἀστυδάμειαν ἀγμύλων λαβὼν] Ctesippi matrem Astydamiæ, Amyntoris filiam, Apollodor. II. 7. 8. non neglexit, Pindaro Olymp. Od. VII. 43. non suffragante, sed Tlepolemi genitrice perhibente, notato tamen ea propter a Schol. Homer. Iiad. B, 658. WESS.

282. 3. Μολίονα καὶ Ἠέτιον] In utroque nomine vitii aliquid inhaerere suspicor. Hesiodum in scholiis ad Sophocl. Trachin. v. 269. de Euryti stirpe canentem audi:

Τοῦ δ' υἱεὶς ἐγένοντο Δηῖον τε Κλέτιός τε,

Τοξέης τ' ἀντίθεος, ἡδ' Ἰφίτος ὕζος Ἄρηος.

ei et Aristocrates, a Schol. sententiam dicere iussus, adsentitur, Euryti filios Τοξέα, Κλέτιον, Δηῖον commemorans; neque de Clytio in diversa abit Apollon. Rhod. I. 87. Quare Ἠέτιον in Κλέτιον converte, quod prope faciendum esse, Cl. P. Burman. in Argonaut. Catalogo recte decrevit. De Molione idem arbitrabor, tametsi manus Δηῖον inter et Μολίονα discrimen intercedat, donec Eurytus eum pro suo agnoscat. WESS.

283. 5. Ἀκρωτήριον — — Κρηαῖον] Nullo præter Sophoclem fideiussore hoc indiget Trachin. v. 243. 763. 1002. WESS.

283. 8. *Χιτῶνα καὶ ἱμάτιον*] Rhodom. vertit *indusium et tunicam*, nec non probante. *Χιτῶν* tunica est, et *ἱμάτιον* vestis, quae illi iniicitur, sive pallium; pro tunica hac ipsa in fabula *ἔνδουτῖρα πέλιον* Sophocl. Trachin. v. 684. Vid. infr. XI. 26. et praeter *ἑλμας*. in Tertull. Pall. p. 397. Oct. Ferrar. III. R. Vest. c. 1. WESS.

283. 20. *Τὸν μὲν διαζονήσαντα Αἴχαν*] Hoc cur despicerem, nihil erat. Conf. Sophocl. Trachin. v. 790. et Apollodor. II. 7. 7. et loco *τὸν Κήρυκα* refinge *τὸν Αἴχαν*. WESS.

283. 27. *Ἀγχόνη τὸν βίον κατέστρεψεν*] Si fides Nutrici, testi oculatae; ipsa se gladio traiecit in Sophocl. Trach. v. 940. Hyllus idem maternae mortis genus patri exponit in Senecae Herc. Oct. v. 1457. A nostri tamen partibus contra utrumque stat Apollodor. II. 7. 7., et, qui eum exscripsisse videtur, Zenobius I. 33. WESS.

283. 30. *Ἦρὸν ἐμυγέθη*] Sollemne hoc rogo nomen, quo Hercules deflagravit, quod et ipsi in Oeta monte loco pertinacissime adhaesit. Livius XXXVI. 30. *Herculique sacrificium fecit in eo loco, quem Pyram, quod ibi mortale corpus eius dei sit crematum, appellant.* Praecivit Graecis ea in re Hercules, cum ad Philocteten in cognomine Sophocl. fabula v. 1427. *Τόξων ἐμῶν μνημεῖα πρὸς πύρρον ἐμὴν κόμιζε.* — Plura solita sibi sedulitate Tib. Hemsterh. in Luciani Tim. c. 12. WESS.

283. 36. *Ἦόνος Φιλοκτήτης ἐπέσθη*] Conf. Muncker. Hygin. Fab. XXXVI. et de ossilegio, *ὀστολογία*, Desid. Herald. I. Advers. c. 7. WESS.

283. 43. *Μεθίστασθαι*] *Μεθεστᾶσθαι*. Parenthetica autem *εἰς θεοῦς* glossema sapiunt. Pro *ἀγισμοῦς* in proximo versu repono *ἀγισμοῦς*. RHOD. *Εἰς θεοῦς μεθεστᾶσθαι*] Possunt profecto sine damno abesse, quae viro doctissimo displicuerunt. Ad eum modum Pausan. I. 32. p. 79. *εἰσὶ δὲ ἀεικλόριος ἐξ ἀνθρώπων Ἡρακλῆος, ἐξήτα* etc. Philostrat. VIII. Vit. Apoll. c. 27. *ὡς μετ' οὐ πολὺ μεταστησομένου ἀνθρώπων.* cuius ego verbis praepositionem deesse arbitror, haud negligendam. Diodoro tamen et Apollodoro II. 8. 1. III. 10. 2. editum se probavit, uti ad I. I. 20. ostendi. Quod vero *ἀγισμοῦς* recipit, id factum laudo, tametsi, mei si res arbitrii foret, *ἐναγισμοῦς* praeoptarem. Habet enim id vocabuli, et *ἐνάγισμα* atque *ἐναγίζειν* sedem quandam in Heroum sacris, cum inferiae illis mittuntur, ut hic Herculi: nam de *consecratione*, qua de interpres, nihil omnino. Sic in Strabon. XIII. p. 891. A. B. Pausan. VII. 16. 17. Philostrat. Heroic. VIII. 3. Nostro XVII. 17. Opportune Herodotus II. 44. de utroque Hercule, altero Olympio, altero Heroe, *καὶ τῷ μὲν ὡς ἀθανάτω, Ὀλυμπίῳ δὲ ἐπωνυμίην, θένουσι. τῷ δ' ἐτέρῳ, ὡς ἡρώϊ, ἐναγίζουσι.* quae nec D. Heraldum fugerunt Animadv. in Martial. X. 61. Ptolem. Hephaestion L. III. p. 313. ed. Gal. de Ropalo, Her-



culis filio, καὶ ὡς ἦρωϊ τῷ πατρὶ ἐνέγμισε, καὶ ὡς θεῷ θύσειεν. Sed haec uberius princ. huius libri declaravimus. Wess.

284. 47. Ταῦρον καὶ κέπρον καὶ χοῖον θύσας] Haud dissimilis erat victima, quae Athenis Τριπτήρς, cum ἕν καὶ τράγον καὶ χοῖον, ut in Aristoph. Plut. v. 820., aut cum θυσίαν κέπρον, χοῖον, ταῦρον, sicuti apud Hesych. in Τριπτήρα et Eustath. in Homer. p. 1676., mactarent. Conveniunt quoque Romanorum suovitaurilia, de quibus Varro II. R. R. I. et Festus, et, qui hoc sacri genus sollerti cura consideravit, Ph. Ruben. I. Elect. c. 11. Porro quod subnectit, Athenienses Herculi Deo primos omnium sacra fecisse, id religiosissima civitas non adgressa est, nisi monitore Apolline, qui, ut Hereules inter homines agere desiit, ἐξ' ὅθ' ἐξηγεῖτο νεὺς μὲν Ἡρακλέους ἰδρῦσθαι καὶ θύειν ὡς θεῷ, auctore Aristide T. I. p. 60.; quamquam Marathonii, modo locuples eorum propria in causa sit testimonium, popularibus primum talis cultus exemplam praebuerunt, γάμοροι πρώτοις Ἑλλήνων σέβειν Ἡρακλέα θεὸν νομισθῆναι in Pausan. I. 32.; quod utrum tamen concessuri sint, si captis arbitris res ageretur, Sicyonii, vehementer dubito. Sed vide eundem Pausan. II. 10. Wess.

284. 60. Τὴν Ἥραν ἀναβῶσαν ἐπὶ τὴν κλήνην etc.] Adoptionis hunc ritum, etsi nollem hac advocatam Pharaonis filiam ex Philon. I. Vit. Mos. p. 605. C., dispar enim exemplum, diligenter explicat Cl. Ever. Otto Jurisprud. Symbol. Exercit. III. 4. Adde, propter eam Lycophroni Iamnem dici Herculis δευτέραν τεκοῦσαν, secundam genitricem, Alex. v. 89., eiusque tituli causam hanc dare Is. Tzetzen, ὅτι αὐτὸν διὰ τοῦ κόλπου ἤνεγκεν, ὡς τίκτουσα καὶ τεκνοποιουμένη. quae his Diodori egregie congruunt. Idem valebat in δευτεροπότμῳ, sive eo, qui bello captus postulamento redibat et quadam παλιγγενεσίᾳ patriae reddebatur, ὁ δεύτερον διὰ γυναικίου κόλπου διαδύς. ὡς ἔθος ἦν παρὰ Ἀθηναίους ἐκ δευτέρου γεννᾶσθαι, quae Hesychii verba in Δευτεροποίησις. quibus iunge Plut. Quaest. Rom. p. 265. A. Iam auctor quod affirmat, perennasse inter barbaros eum adoptandi morem, id, temetsi non satis adpareat, quos intellexerit, abunde testantur senioris aetatis exempla. De Balduino, ab Edesseno principe adoptato, haec Guibertus Abbas III. Histor. Hierosol. c. 13. Adoptionis autem talis pro gentis consuetudine dicitur fuisse modus. Intra lineam interulam, quam nos vocamus camisiam, nudum intrare eum fecit, et sibi adstrinxit: et haec omnia osculo libato firmavit; idem et mulier postmodum fecit. Plura ex medii aevi Graecia si desideres, cumulate tibi satisfacient Du Cangius in Joinvill. Dissert. XXI. XXII. et Ever. Otto, viri doctissimi. Wess.

284. 67. Κατὰ τὴν νεκρίαν] Scribe Νεκρίαν. Locus est Odys. L. XI. v. 601. Ρηοβ. Κατὰ τὴν νεκρίαν] De titulo hoc partis Odys. A. multa Langbaen. in Longin. c. IX. p. 52., de

*simulacro* autem Herculis, εἰδῶλω, Lucian. D. Mort. XVI. cum eruditis observationibus Tib. Hemsterh. WESS.

284. 70. Καταλεγόμενον ὑπὸ τοῦ Διὸς εἰς τοὺς etc.] Dificilere lectoris prudentiae viderer, si operose probarem, veram esse hanc scripturam: quod enim continuo consequitur, ἀδύνατον γὰρ ἦν τοῦτον καταλεχθῆναι, ad eam stabiliendam abunde est. WESS.

284. 79. Διελθεῖν περὶ αὐτῶν] Duas postremas voces neglexissent alii: Diodoro hoc pleonasmī genus perplacet. Vide XII. 56. et L. I. 97. et S. Lucam A. A. VII. 21. WESS.

285. 85. Καὶ τὸ παράβολον τῶν ἄθλων] *Miranda certamina* non aequiparant amplitudinem et potestatem τοῦ παραβόλου, sed παραδόξον, quod in Cod. Coislin. *Periculosa* sunt et *audacia*, ut mox παράβολοι στρατεῖαι, et παράβολοι πράξεις XV. 31. XIX. 4., et παράβολα ἔργα Polyb. XVII. 34. Ioseph. VI. A. Iud. 10. 2. WESS.

285. 97. Λέρος] Λέρος Co., ut saepe Apollon. Rhod. II. 1228. IV. 1318. WESS.

285. 1. Ξενον προσυγορεύεσθαι] Conf. Schol. Apollon. Rh. II. 550. et Cl. Salmas. in Solin. p. 203. WESS.

285. 3. Καὶ τὸ ἄθλον δυσέμικτον] Scriptum fuit τὸν, ut supra p. 153. et aliquanto post p. 171. πρὸς τε τὸν ἄθλον. quod sphalma typographicum ex compendio scriptionis ortum videtur. Rhod. Vid. supr. c. 12. WESS.

285. 12. Πρὸς τε τὸ ἄθλον καὶ τῆς etc.] *Primo aspectu ad illa, πρὸς τε τὸ ἄθλον καὶ ἕξ., adhaesi, fateor, et putavi vel in fine excidisse καιρότητα, aut simile, vel legendum καὶ τὴν κ. τ. ν. ἐπιβολήν. at deprehendi postea locum satis sanum et sincerum esse, atque ita intelligendum:* Ubi spectatores inusitatae huius fabricae admiratione percellerentur, et fama per Graeciam esset vulgata praeterquam gloriosi certaminis (*quod hac expeditione susciperetur*) etiam novae huius navis structurae, multos ex principibus inventutis studuisse expeditionis huius fieri participes. *Ut voluerit scilicet Diodorus, praeter famam illius ἄθλου, vel maxime novae huius machinae navalis famam fuisse diditam. Videri quoque posset pro τὸ ἄθλον legendum τὸν ἄθλον, si certamen sit intelligendum, ut vertit quoque Rhodomannus, quod nempe aurei velleris gratia esset subeundum. Nisi potius recte sit excusum τὸ ἄθλον, intelligaturque ipsum vellus aureum, quod quasi splendidum esset futuram istius expeditionis laborumque exhaustivendam praemium.* Hactenus doctissimus Io. Iensis in Epist. ad I. G. Graevium p. 409., incertus animi, quid potissimum amplectatur. Mibi Rhodom. Latina non displicent, modo, uti ille censuit, τὸν ἄθλον legatur, et propositum certamen notet. Movit has turbas mutata constructio, cuius in utriusque linguae scriptoribus exempla haud rara videri, patefecit vir Celeb. Iac. Gronov. ad Arriani L. VII. Exp. Alex. c. 6. Quare de Latinis illis,

*praeterquam gloriosi certaminis, nihil admodum addam: bona si forent, scripsisset auctor πρὸς τε τῷ ἄθλῳ, ut Pausan. IV. 8. p. 298. Nam ἐπιβολὴ κατὰ τὴν ναυπηγίαν Diodori studiosum non offendet, haud ignarum idem illi esse atque ἐπιβολὴν τῆς ναυπηγίας, quemadmodum I. 65. IV. 13. etc. WESS.*

285. 21. Καὶ τὴν Σχοινέως Ἀταλάντην] Mallem Noster cum Apollodoro I. 8. 16. domi Atalantam reliquissent, nec tot iuvenibus comitem et unam parum provide addidissent. Longe melius decori rationem habuit Apollon. Rhod. I. 771. WESS.

285. 23. Ἀργῶ προσαγορευθῆναι] Tu vide S. Bochart. II. Phal. 11. p. 739. WESS.

286. 29. Ἐλέσθαι σφῶν αὐτῶν στρατηγὸν Ἡρακλέα] Dissentit praeter alios Apollon. Rh. I. 345. Puto Diodorum vestigiis Dionysii Milesii, quo de L. III. 66., inhaesisse, Herculi Argonautarum principatum contribuentis in Apollodori I. 8. 19. WESS.

286. 30. Ἀρδρίαν] Ἀρδρίαν Cois. Vid. Schol. Demosth. Orat. de Cherson. p. 63. WESS.

286. 33. Τῆς Τρωάδος πρὸς Σήγειον] Val. Flaccum II. 445. cultissimis versibus haec describentem consule: nam Argonauticorum scriptores Orpheus et Apollonius diversa sectantur. WESS.

286. 38. Κῆτος ἀνεῖναι ἐκ τοῦ πελάγους] Fabulam respicit Poëta Iliad. Y, 145., ubi Critici veteres plura. WESS.

286. 48. Ἐκπεσόντος οὖν χορημοῦ] Sortium olim in divinationibus frequens erat usus: εἰώθασι δὲ διὰ κλήρων μαντεύεσθαι τὸ πρῖν, Schol. ait in Pindari Od. IV. Pythion.; quae cum iactae aut in urnis concussae exirent, dicebantur ἐκπίπτειν, Latinis *excidere*. Mansit hinc in oraculis, tametsi voce ederentur. Sic infra c. 48. μετὰ δὲ ταῦτα — Αἰήτη χορημὸν ἐκπεσεῖν. et L. XIX. 2. ἔξεπεσε χορημὸς ὅτι μεγάλων ἀνεχημάτων αἴτιος ἔσται. Diogen. Laert. I. 32. ἐκπίπτει χορημὸς, δοῦναι τῷ σωφράτῳ. Aelian. III. II. V. 45. Φιλιππῶ φασὶ χορηστήριον ἐκπεσεῖν. Ubi dictionis hoc genus Latinorum exemplis ita confirmavit Cel. Iac. Perizon. ut plura addere supervacuum sit. WESS.

286. 51. Ἐπαυέλθειν εἰς Ἡσιόνην] Hoc scriptorum est Codd.; verteris haud male ex Hygino F. LXXXIX. *Hesioneae sors exiit*. Alii simili in re aliud probant. S. Lucas A. A. I. 26. καὶ ἐπεσεν ὁ κλήρος ἐπὶ Μαθητίαν. Plato X. R. P. p. 617. E. ὄψαι ἐπὶ πάντας τοὺς κλήρους. τὸν δὲ παρ' αὐτὸν πεσόντα ἐξαστον ἀναυρεῖσθαι. Euripid. Troas. v. 291. Ἄ δευτεχεσιάτῳ προσέπεσα κλήρω. Sed desino. Tu vide non absimile huic exemplum in Hygini II. Astron. Poët. c. 40. WESS.

286. 59. Λιαγθερεῖν Mut., quod sequor. Vide L. III. 54. WESS.

286. 60. Λώσιν ἐπαγγ. τ. ἀνιζίτους ἔπλους] Erant ex ea stirpe, ἧς Τρωὶ περ ἐρέουσα Ζεὺς Λῶξ, εἶος ποινήν Γανυμή-

δεος, ut Homerus canit Iliad. E, 265., cui, si equorum studio tenearis, iunge Criticorum scholia in Orest. Euripidis v. 1392. WESS.

287. 76. Ποίησασθαι τοῖς Σαμοθραξὶ τὰς ὑπὲρ τῆς ] *Maris et terrae tempestatumque potentes Samothraces dii sive Cabiri vulgi quadam persuasione censebantur. Orpheus Hymn. XXXVII. 4. Οἷτε Σαμοθραξὶν ἱερὴν χθόνα ναιετάοντες Κινδύρους θνητῶν ἀπερούκετε πόντοπλανήτων.* Quare mari iactati eorum opem inplorabant, uti Orpheus, cum altera vice Argonautae tempestatibus conflictarentur, infr. c. 49.; cumque sacris Samothraciis initiati e periculis praesenti deorum ope eripi perhiberentur, idem sociis auctor est, ut illis se sacris inbuendos tradant Argonautic. v. 465. Vide infr. L. V. 49. et Tob. Guthberlethum *Myster. Cabir. c. 10.* WESS.

287. 83. Ἐνζῆς μὲν τίθεσθαι τοῖς Σαμοθραξὶ etc.] *Cabiri diu provinciae huius possessionem tenere, nec nisi aegre eius se honoris fructu privari passi sunt a Tyndaridis fratribus, quorum simul alba nautis Stella refulsit, Desluit saxis agitated humor; Concidunt venti, fugiuntque nubes, Et minax, sic Di volvere, ponto Unda recumbit,* apud Horat. I. Od. 12. 27. Quam rem, obscuram ante et intricatam admodum, Tib. Hemsterh. in Luciani D. D. XXVI. ita declaravit, ut palmam omnibus praeripuisse videatur. WESS.

287. 88. Ἐπὶ τιμωρίᾳ διορτυτομένοις] *Auctoritas Hesychii nos movet, ut διορτυτομένοις legamus. Is enim διορτυσαι pro ἐξορτυσαι usurpari annotat. Et sequentia ita corrigo, καὶ μάστιγι πληγῆς συνεχεῖς λαβοῦσι.* RHOD. Ἐπὶ τιμωρίᾳ διορτυτομένοις] *Nimius est Rhodom. conatus; quod dedi sua auctoritate stabiliunt Codd. scripti, et haec Schol. Sophocl. in Antigon. v. 1095. Idaea τυγλώσασα τοὺς τῆς Κλειοπάτρας παιῖδας ἐν τάφῳ καθέρουξεν.* Defossi ergo a noverca et sepulero inclusi Phniidae fuerunt; de quorum numero et diversis apud veteres nominibus plura si desideres, P. Leopardus VII. Emend. c. 24. cumulate tibi satisfaciet. WESS.

287. 95. Ἰδαίαν τὴν Δαρδάνου] *Sic praestat. Vid. Apollodor. III. 14. 3. Schol. Apollon. II. 179. Δίαν appellat, sed vitio exscriptorum: melius II. 140. Mox οἱ πρόγονοι sunt privigni, in quos novercarum solet esse odium. Isaecus Orat. pro Euphileto apud Dionys. T. II. p. 110. εἰώθασι δὲ πῶς, ὡς ἐπὶ τὸ πολὺ, διαφέρουσιν ἀλλήλαις αἱ τε μητρικαὶ καὶ οἱ πρόγονοι.* quod forte expressit ex Euripid. Ion. v. 1329. *προγόνους δάμαρτες δνσμενεῖς αἰέ ποτε.* Adde Philon. Iud. de Nobil. p. 909. D. et Manethon. v. 205. WESS.

287. 1. Ἐν ταῖς ἀνάγκαις ὄντας] *In tormentis. Plutarch. de Garrul. T. II. p. 505. D. ἐκβιαζόμενον τὸ σῶμα ταῖς ἀνάγκαις* de Zenone philosopho dirum in modum torto; et Noster de

eodem Excerpt. Vales. p. 250. μετὰ δὲ ταῦτα σπεύδων ἀπολυθῆναι ποτε τῆς ἀνάγκης. Plura ad L. III. 13. WESS.

287. 6. Μηδένα γὰρ πατέρα λαβεῖν παρ' εἰδῶν etc.] Pater, Seneca ait L. I. Clement. c. 14., nisi magnae et multae iniuriae patientiam ericerint, nisi plus est quod timet, quam quod dumat, non accedit ad decretorium stylum. et post pauca: tarde sibi pater membra sua abscindat; etiam cum absciderit, reponeere cupiat, et in abscindendo gemat, cunctatus multum diuque, quae philosophi cum his Phineci componere haud oblitus est H. Grotius II. I. Bel. et Pac. 24. 2. WESS.

287. 10. Ἰδέλῃου δὲ ὄντας Κλειοπάτρας] Conf. Apollon. Rh. II. 238. WESS.

288. 17. Ἀυτόν τε τὸν Φινέα — ἀνελεῖν] Sequitur Diodorus Dionysium Milesium, quem vide in Schol. Apollon. II. 207. WESS.

288. 28. Τηρωθῆναι γαστὶ τοὺς Φινείδας] Hos inter Apollodor. III. 14. 3. et Sophocles Antigon. 1090. De Phineo Hesiodus in Schol. Apoll. Rhod. II. 181. Orpheus Argon. v. 674. atque alii. Μοχρὸς ἐδραῖον Poggius ridicule verterat ad hydram, merito propterea notatus a P. Leopardo VII. Emend. 24. WESS.

288. 38. Συστραεῦσαι τοῖς ἀριστεῦσιν] Tacent Orpheus v. 678. Apoll. Rhod. II. 530. V. Flaccus IV. 630. WESS.

288. 43. Θένει Ἀρτέμιδι Ταυροπόλῳ τοὺς κατακλέοντας] Ipsa Iphigenia apud Euripid. in cognomine fabula v. 39. barbarum sacrificii morem exponit, et Noster I. II. 46. Praeterque Orpheum Argon. v. 1073. Ovidius II. ex Pont. Ep. 2. 57.

*Sacrifici genus est, sic instituere priores,*

*Advena virgineo caesus ut ense cadat.* WESS.

288. 51. Τούτων δὲ τὸν μὲν Αἰήτην βασιλεῦσαι etc.] Haec accuratissime respondent excerptis ex L. I. Argonautic. Dionysii Milesii in Schol. Apollon. Rhod. III. 200. 242.: ut non iniuria suspicer, Diodorum, sicuti superiore libro in Arabiae Aethiopiaeque rebus Agatharchidem, ita in Argonautarum expeditione describenda hunc ducem sibi elegisse. WESS.

288. 58. Τὸ καλούμενον ἀζόνιον] Ortum fabulae Aconiti narravere, e spumis Cerberi canis, extrahente ab inferis Hercule, ideoque apud Heracleam Ponticam, ubi monstratur is ad inferos aditus, gigni, sic Plinius XXVII. N. H. 2. et ante eum Ovidius VII. M. 407. Hecaten vero aconitum et ceteras venenatas herbas reperisse, ac Medeam docuisse, canit Apollon. III. 529.

Τὴν Ἐκώτη περιλάλα θεὰ δάε τεχνήσασθαι

Φάρμακ', ὅσ' ἠπειρός τε φύει καὶ νήχρτον ὕδωρ.

et Statius IX. Th. 734. Ἀζόντιον Clar. Simili vitio in Hesychio ἀζόντιον. WESS.

289. 66. Ἐτι δ' εἶδ' Ἀργαλέα] Apsyrum alii vocant, aut

Metapontium, ut Dicaeogenes in Schol. ad Medeam v. 167. Euripidis. Noster Dionysium auctorem habuisse videtur. WESS.

289. 68. Ἐξενερεῖν ῥιζῶν παντοίας φύσεις καὶ δυνάμεις] Nisi Mss. obviam venissent, vulgatum se tueri potuerat. *Proprie autem δυνάμεις est facultas alicui rei indita: in his similibusque locis, res ipsae vocantur δυνάμεις.* quae Is. Casaub. verba ex Animadv. in Athen. I. 15. excerpere placuit: sunt enim accommodata et verissima. Vide mox c. 51. WESS.

289. 74. Οὐς ἔνιοι Σκόθας προσσαγορεύουσι] Vide L. II. 43. WESS.

289. 79. Καὶ νῆσον ἔρημον καταλαβομένην] Αἰαίην Aeseam Odys. A, 70. M, 3., quam, qui in erroribus Ulyssis ἕξω-ζεαρισμῶν, ut Strabonis verbo dicam, probabant, in externo mari sive oceano locabant: qui vero in mari interno, quod Europam Asiamaque inter et Africam diffunditur, Heroem erroribus actum tradebant, eandem in Tyrrheno aut Siculo mari quaerebant. Pendet enim ex Ulyssis itineribus Circes insulaeque fabula. Strabonem vide l. p. 38. et Ph. Cluver. III. Ital. Antiq. p. 995., deque *Circaeο promontorio* Apollon. Rhod. III. 200. 311. WESS.

289. 96. Εἰς ἔλευθέραν ἀντὶν ἀποθέσθαι φυλακὴν] Non male explicuit Schol. Vaticanus. Noster Excerpt. Vales. p. 317. λαβόντες αἰχμάλωτον (Perseum) εἰς ἔλευθέραν ἀπέθετο φυλακὴν. ubi ἔλευθέριον Vales. cur praeferret, nihil profecto caussae fuerat. WESS.

289. 98. Εἰς τι τέμενος ἡλίον] In Hecates luco Medeam, sacris operantem, describit Apollon. Rh. III. 250. et Val. Flacc. VI. 73. Verum uterque in fabulae ordine a Dionysio Milesio, quem Diodorus sequi solet, dissentit. WESS.

289. 2. Περὶ] Παρὰ Co. M. et forte melius. Fatalis autem hic error est libroriorum παρὰ pro περὶ aut contra scribentium. Vid. l. Fr. Reitzium ad Lucian. Catapl. c. 23. WESS.

289. 6. Τὸν ὑπάρχορτα ἀντὶν κίνδυνον ὑπὸ τοῦ πατρὸς] Mallem ἀπὸ τοῦ πατρὸς, ut mox c. 48. αἱ ἀπὸ τῆς μετρονῆς ἐπιβουλαί. ad quem modum ὁ ἀπὸ πολεμίων φόβος L. XIV. 68. et ὁ ἀπ' αὐτῶν φόβος L. XX. 9. quamquam ibi Codd. aliqui ὁ ὑπ' αὐτῶν, sollemni exscribentium peccato; qui error sexcentos Diodori et aliorum locos foedavit. Adscribam, quando in eum sermonem incidi, unum atque alterum exemplum. Lysias Orat. pro Polystr. c. 10. de servis ad Decelean profugis οὐ μόνον inquit, ἐνθάδε, ὅτε οἰοί τ' ἴσαν, κακὸν εἰσγάζοντο, ἀλλὰ καὶ ἀπὸ τοῦ τείχους ἔφερον καὶ ἦγον ἑμᾶς. imo ὑπὸ τοῦ τείχους. ad moenia enim urbis praedatum excurrabant, resque Atheniensium agebant et ferebant. Vid. Thucyd. VII. 27. Pausanias VII. 27. βίος δὲ αὐτῶν ταῖς πολλαῖς ἐστὶν ἀπὸ τῆς βύσσου, τῆς ἐν τῇ Ἰλλιδι φρομένης. prave editi ὑπὸ τῆς. Gregor. Nyssen. Epist. 2. Monument. L. A. Zacagnii p. 358. καὶ ὑπὸ τῶν ἀρχῶν ῥημάτων ἀπαι-

τεῖσθαι τὸν λόγον ἐν τῇ προσδοχομένῃ τῆς ζωῆς ἡμῶν ἐξετάσει, perperam. Matth. XII. 36. ἀλλὰ τῶν αὐτ' ἐπέεσσι τῶν scriptum fuisse ostendit. Atque haec exempli causa ex aliis scriptoribus: Diodoro commodior dabitur locus. De eo autem loquendi, quod praec manibus est, genere dixi supra L. I. 83. WESS.

289. 19. *Λιὰ τῶν ὄρχων δοῦναι πίστεις*] Conf. Apollon. IV. 95. WESS.

290. 17. *Φοῖβον τὸν Ἀθάμαντος μύθοιο λογοῦσι*] Fabulam exponunt Pindarus Od. IV. Pyth., Apollodor. I. 9. I. Apollon. Rh. II. 1145. Hygin. Fab. III. atque alii plures. WESS.

290. 23. *Κατενεχθῆναι*] *Καταχθῆναι* Co. M. satis comede. Conf. Xenoph. Ephes. I. p. 15. et L. Bos in A. A. XXVII. 12. WESS.

290. 25. *Θύσαντα τὸν χοῖον ἀναθεῖναι etc.*] Iovi *φρξίνῃ*, fugientium praesidi, cum immolavit, mactatique pellem Aetes dono acceptam in Martis luco suspendit: sic Apollon. II. 1151. IV. 119. et Apollodor. I. 9. 1. Vide tamen Scholiastem Pindari Pythion. Od. IV. 417. non dissimilia his nostri scriptoris commentantem. WESS.

290. 27. *Ὅτι τότε καταστρέψει τὸν βίον*] *Aeetae Solis filio erat responsum, tam diu eum regnum habiturum, quam diu ea pellis, quam Phryxus consecraverat, in fano Martis esset, inquit Hyginus F. XXII., ubi Muncker.* WESS.

290. 35. *Ἀφ' ὧν καὶ τερατώδεις — πλασθῆναι μύθους*] Fabulae involucro aurum obtegi, quod Iason quaesitum ierit, non dubium est: veterum id agnoverunt Strabo XI. p. 763., et Appian. Mithrid. p. 401. Ornamenta vero fabulae alii aliter, ut sit, interpretantur. Vide, si tanti est, Palaephat. Incredib. c. 31. et Simson. Chron. A. M. 2743. praetereaque S. Bochartum L. IV. Can. c. 31. WESS.

290. 46. *Προτομὴν ἐπὶ τῆς πρόρας ἐχοῦσης χοῖοῦ*] Schol. Apollon. Rh. I. 256. *ἔτιοι δέ γασιν αὐτὸν ἐπὶ χοισαρώρον οζάριος πλεῖσαι.* e quorum opinione insigne sive *παιρώσιμον* navis fuit arietis caput, quod ipsi navi nomen, ut moris erat, fecerit. De Pegaso Bellerophontis Palaephat. Incred. Hist. c. 20. *ὄνομα δὲ ἦν τῷ πλοῖοι Πήγασος, ὡς καὶ τῶν ἑλαστον τῶν πλοίων ὄνομα ἔχει.* Aliarum exempla collegerunt Th. Reinesius Inscript. Clas. VIII. 46., Io. Scheffer. L. III. Milit. Naval. c. 1. et Stanleus in Aeschyl. VII. c. Theb. v. 214., quibus, in re nota, plura adstruere operae pretium non videtur. WESS.

290. 55. *Τὸν δὲ παιδαγωγὸν ὀνομαζόμενον Κοῖον*] Dionysii Milesii haec fuit sententia in Schol. Apollon. Rh. I. 256. II. 1147. IV. 119. WESS.

290. 57. *Τὸ δέγμα*] Nihil hic mutant scripti libri, qui c. 19. *τὸ δέγμα* aegre probarunt; quasi flagitium foret, nisi *δέγμα*

aut δέρος hac in re usurpares: non ea mens Pindaro, cui Od. IV. Pythion. δέσμα χρυσῶ βαθύμαλλον et δέσμα λαμπρόν. WESS.

291. 67. Ἀπέχον ἐβδομήκοντα σταδίου] Orpheus Argon. v. 892. abesse ait Ἐννέ' ἐπ' ὀργυῶν, quod qui de novem ulnis accipiunt, longissime errant. Ὀργυῶν spatium, quod expansa brachia absolvunt, seu sex circiter pedes indicat: quo tamen modo ubi propius admoveatur locus: melius instituit Apollonius Rhod. III. 1270. De Sybari Colchorum urbe haec L. IV. Can. c. 31. Bochartus: *Et veteris regiae Colchorum Σύβαρις Sybaris nomen compositum videtur ex ignoto Συ et Βάρις. Ita Graeci efferunt Hebraeum בַּרְיָ Byra, quod pro regia occurrit aliquoties in Esdrae, Danielis et Estherae libris. Sic Daniel. VIII. 2. ἐν Σούσοις τῇ Βάρι.* Quae, ut lenissime dicam, ex eorum sunt genere, quibus adsensum si recuses, nihil praeter novitatis gratiam relinquitur. WESS.

291. 79. Περισπειραμένον τὸ δέσμα] De serpentibus, quae spiris suis aliquid innectunt, supr. III. 3. 36. Lucian. Conscript. Hist. c. 29. καὶ ἄλλους, περισπειραθέντων (δρακόντων) ἀποπνιγῆναι quod sine dubio longe praestabilius, quam περιπειραθέντων, ut olim edebatur. Pausan. X. 33. δράκοντα δὲ ἰσχυρόν ἀνέχει τὴν φουρῶν, ἐσπειρωμένον τὸ ἄγγειον. WESS.

291. 86. Ἰγνίον τὸν Ἐβρουσθέως ἀδελφόν] Scripserat Ἰγνίον τὸν Ἐβρ. ἀδελφόν, quae non animadversa menda viris doctissimis fraudi fuit, ut et in genere Herois dubii haerent, et Iphin a solo Val. Flacco I. 441. VII. 423. Argonautis insertum opinarentur. Meae correctionis fidem praestabit Dionys. Milesius in Schol. Apollon. Rh. IV. 223. Διονύσιος δὲ ὁ Μιλήσιος φησὶν, ὅτι καταλαβὼν τὴν γαῖν ὁ Αἰήτις, παραταξαμένον τῶν ἀριστέων, Ἰγνίον ἀνείλεν Ἐβρουσθέως ἀδελφόν. Et post pauca, οἱ δὲ ἀριστέες ἠγωνίζοντο ἀγορεύοντες. οἱ δὲ περὶ Αἰήτην ἔπενον. ἔνθα δὲ καὶ Ἰγνίον τελευτῆσαι, τὸν Σθενέλιον μὲν υἱόν, Ἐβρουσθέως δὲ ἀδελφόν. Cetera mitto: haec coniecturam adfirmant, et suspicionem, in quam ingressus sum, de Dionysio in Argonauticis Diodori duce, ratam habent. WESS.

291. 87. Ἐπειτα τοῖς ἄλλοις — περιχθέντας] Facit auctoris consuetudo, ut hoc verum legitimumque decernam. Vide eius L. III. 55. XX. 53. 87. WESS.

291. 94. Λαέρτην] Laerten Arcesii Apollodor. I. 8. 16. Argonautis comitem adiunxit, nec praeteriit hominem Cl. P. Burman., etsi Diodori oblitus, et quis omnium recordatur? in Argonaut. Catalogo. WESS.

291. 1. Καθάπερ καὶ πρότερον] Conf. supr. c. 44. WESS.

291. 4. Προσιπεῖν μὲν Ἡρακλεῖ etc.] Glaucum, e mari emergentem, Herculi que atque aliis futura canentem, Argonautis ostendit Apollon. Rh. I. 1310., sed in Colchos, certamine necdum absoluto, ituris. WESS.



292. 16. Βασιλεύοντος τότε τῆς χώρας Βύζαντος] Numis Byzantium inscriptus *BYZAS* urbis conditorem, quae propterea Βύζαντος ἄστυ Oppiano V. Halicut. v. 521., indicat. Genus Herois et res gestas post Rittershusium operose exponit Ansel. Bandurius L. I. Antiq. Constantinop. p. 451. Id ad hunc locum adpositum atque opportunum est, Dionysium Miles. auctorem esse, Byzantii Iasonis et Meduae nuptias fuisse sociatas, in Schol. Apollon. Rh. IV. 1154. WESS.

292. 20. Τὸν ἐπὶ καὶ νῦν τιμώμενον] Hieron, τὸ καλούμενον Ἱερὸν L. XIX. 73. intelligit. Polyb. IV. 39. ἀπὸ δὲ τοῦ Πόντου, τὸ καλούμενον Ἱερὸν. ἐφ' οὗ τόπων φασὶ κατὰ τὴν ἐκ Κόλχων ἀνακομιδὴν, Ἰάσονα θῦσαι πρῶτον τοῖς δάδεκα θεοῖς, ὃ καίτοι μὲν ἐπὶ τῆς Ἀσίας, ἀπέχει δὲ τῆς Εὐρώπης ἐπὶ δάδεκα στάδια. Ubi fama est, Iasonem e Colchis revertentem primum omnium XII Diis sacrificasse: est autem ille locus in Asia situs; abest ab Europa duodecim fere stadia. Scriptorum alii a Phryxo in Colchos pergente dedicatum Argonautis exemplo fuisse, ut ibi sacris operarentur, asseverant in Schol. Apollon. Rh. II. 534. et Demosth. in Leptin. p. 284., nec alia mens Dionysio Byzantio in Bospori Anaplo. Vid. diligentissimum P. Gyllium III. de Bosp. Thr. c. 5. WESS.

292. 24. Τοῖς τε ἵππους καὶ τὴν Ἡσιόνην etc.] Eandem rem copiose descripsit c. 32. WESS.

292. 42. Ἡρακλέα πάντων ἄριστα διαγωνίσασθαι] Dissentit Apollodor. II. 6. 4. quem, si lubet, vide. WESS.

292. 52. Ὀμηρον ἐν τοῖσδε τοῖς ἔπεσιν] Hoc Diodori est. Vid. L. XII. 40. Pausan. III. 2. p. 207. ἤρξαστο δὲ καὶ Ὀμηρος — ἐν τοῖσδε τοῖς ἔπεσι. Scripsi propterea in primo Homeri versu Ἄλλ' οἷόν τινα ex causa c. 32. exposita. WESS.

293. 59. Καὶ τ. μεγ. θ. τὰς εὐχ. ἀποδόντας πάλιν, ἀναθεῖναι] Sic erant distinguenda: non enim bis phialas, uti vulgata indicabant, diis Samothracibus consecrarunt Argonautae; sed altera vice periculis exsoluti vota reddiderunt. De titulo μεγάλων θεῶν nota omnia sunt ex Tob. Guthberl. de Myster. Deor. Cabir. c. 1. 3. etc. WESS.

293. 67. Τοὺς ἐφ' ἑδρους τῆς βασιλείας — ἀνελεῖν] Ex palæstra sumptum esse vocabulum quis est qui ignoret? Ἐφ' ἑδρους tertiaris dicitur, qui duobus in certamen commissis et victo altero, cum victore congredditur, explicante Schol. in Liac. Sophocl. v. 613. Philo Iud. Leg. Cai. p. 996. C. de Caio Tiberium fratrem pessum dante, τοῦτον μὲν δὴ κατὰ πρῶτον ἐν τοῖς ἀγῶσιν ἐφ' ἑδρον ὑπολαβὼν εἶναι, καταπαλαίει. Hinc qui ex insidiis consurgunt aut malis artibus alios regno evertere conantur ἔφ' ἑδροι τῆς βασιλείας hic et L. XI. 49. Eleganter Philo Iud. De Ioseph. p. 545. A. ἡγεία δ' ἀβέβαιον, διὰ τὰς ἐφ' ἑδρους ἀσθενείας. cuius loci vim non percepit interpres, uti nec πόλεμον ἐφ' ἑδρον L. I.

Vit. Mos. p. 652. E. et χειμῶνα ἔφειδρον Leg. Cai. p. 1019. C. Conf. Ezech. Spanhem. in Ioseph. XVI. A. I. 3. 3. WESS.

293. 69. Ἀδελφὸν Πρόμαχον etc.] Meminit pueri Apollodor. I. 8. 27., sed pessime a criticis habitus. Verba haec sunt: ἡ δὲ Ἰάσονος μήτηρ ἐπαρυσασμένη Πελία, νήπιον ἀπολιποῦσα παῖδα, ὡς πρὸς πύλεμον πρόμαχον, ἐαυτὴν ἀνίρτησε. ubi ὡς πρὸς πόλεμον, ut pulere perspexit Th. Galaeus, nihili sunt, et ab eo intempestive addita, qui πρόμαχον defensorem et propugnatorem esse posse, sicuti in Aeschyl. VII. C. Theb. v. 425. 487., non nescius, parum animadvertibat nomen pueri proprium esse, scribique Πρόμαχον oportere. Adde Tzetz. in Lycophron. 175. et de tauri sanguine infr. XI. 58. WESS.

293. 70. Ἀμφινόμην δὲ τὴν μητέρα μέλλονσαν ἀναιρεῖσθαι] Apollonius Argonautic. I. 258. Iasonis matrem Ἀλκιμέδην vocat: alii aliter. PALM. Vide Schol. Apollon. I. 45. et Cl. P. Burman. Catal. Argonaut. in Iasone. WESS.

293. 85. Οὓς μὲν γὰρ — — τινὰς δὲ etc.] Posses ex Mutin. τοὺς μὲν γὰρ, si quae necessitas urgeret. Infr. XVIII. 70. τοὺς μὲν εἰς τάξεις κατελόγιζον, οὓς δέ. XIX. 64. τοὺς μὲν πεσεῖν, οὓς δὲ ζωζρηθῆναι. Sed hoc in genere multa mutare solent. Vid. III. 73. IV. 28. XI. 61. et Raphel. Annot. ex Polyb. in S. Paulli et Roman. XIV. 2. WESS.

293. 90. Περτίχορτα καὶ τρισὶν ἀνδράσι] Constat numerus. LIV nomina dederant c. 42., e quibus Iphis strenue pugnans occubuerat in Colchis c. 45. WESS.

294. 4. Πρὸς τὴν ὑπερκειμένην τῆς θαλάττης σκοπὴν] Non recte Rhodom. de specula, ac si ea in regia fuisset. Mari imminebat; neque enim verum est Is. Vossii ad Melae II. 3. 35. decretum, ὑπερκεῖσθαι semper accipi de locis remotis mari: imminebat inquam mari, atque ex ea observaturi erant Argonautae signa, quae e regia datura Medea erat. Vid. c. 53. Videtur autem saxum aut excelsior tumulus fuisse, ut plerumque solebant. Xenophon. VI. Cyr. Instit. p. 131. ἴσως βουλόμενοι λαβεῖν τὴν σκοπὴν. ἡμεῖς ἐσμὲν μία δεκάς οἱ ἐπὶ ταύτῃ τῇ σκοπῇ. καὶ ὁ Κῆρος ἐκέλευσε — ἐλάσαντας ὑπὸ τὴν σκοπὴν etc. De fumi autem interdiu et noctu ignis signo copiose Stanleius in Aeschyl. Agam. v. 1, et Freinshem. in Curt. V. 2. 7. WESS.

294. 8. Τρίχας δυνάμεσι τισι χοίρσασαν] Medicamentis quibusdam, ut mox διὰ τινῶν δυνάμεων, et XVII. 103. XIX. 33. Hippocrates de Medic. p. 24. γάρμαζα καὶ δυνάμεις ἄλλαί. WESS.

294. 16. Ἐπ' ἀγαθῷ δαίμονι] Non multum videtur diversum esse a formula ἐπ' ἀγαθῷ τῆς πατρίδος L. XIII. 38. Δαίμων fortuna est, uti in Aeschyl. Pers. v. 947. et eorum locis, quae L. Kuster. conduxit in Aristophan. Plut. v. 6. WESS.

294. 19. *Συνθεαζούσης*] *Συνθεαζούσης* RHOD. Doctissimi Rhodom. coniecturam scripti Codd. si conprobarent, nihil dissentirem: iam cum *θεάζειν* atque *ἐνθεάζειν* dixerint, in vocabulo, nusquam mihi nisi in Diodoro reperto, nil temere movero. Videntur cives *ἐνθουσιάζουσαι ἐπὶ τοῖς ἱεροῖς τῆς Ἀχιέμεδος*, ut L. V. 49., atque adeo *Dianatici* fuisse, quorum furorem et habitum, in omnem terrorem compositum, egregie depinxit Maxim. Taurin. Serm. XXXII. Anecd. Murator. T. IV. p. 100. WESS.

294. 25. *Ἐπὶ δροκόντων ὀχομένην τὴν Ἀρτεμιν*] Cere-rem eiusmodi currui poetæ et numi Erythraeorum ac Nicaensium inponunt in Ezech. Spanhem. Diss. IV. de Usu et Praest. Num. p. 211., veram illi cum Diana communia multa erant, observante Servio in Georgic. l. 5. Virgilii. Mox *ἀφελούσαν*, Steph. et Rhodom. secutus iudicium orationisque seriem, recipiendum censui. WESS.

294. 29. *Τὸ γῆρας ἀφελόντα*] Haud dubie *ἀφελούσαν*. STEPH. et RHOD.

294. 39. *Ἀποκλείσασθαι*] *Legē ἀποκλείσασθαι*. RHOD. *Ἀποκλείσασθαι* etc.] Et hoc restitui, Codd. addicentibus. In Hesychii *Ἀποκρισάμενοι*, *ἀποκυσάμενοι*, *ἐπιπληνάμενοι*. *Ἀποκλείσασθαι*, *ἀποκαθαίρεσθαι* aliud mendae genus. Si sani coloris sit *ἀποκρισάμενοι*, neque ex *ἀποκλυσάμενοι*, aut *ἀποκρυσάμενοι* natales acceperit, ut suspicor, legi quidem certe oportet *ἀποκλυσάμενοι*, *ἀποπληνάμενοι*. Aliud est in Luciani Philopseud. c. 37. ubi *ἀλλὰ δεήσει ἡμῖν ἐπικλεισθῆναι τὴν οἰκίαν ἐπαντλονμένην*, pro *ἐπικλυσθῆναι*. WESS.

295. 47. *Τῶν δὲ ἐνεργημάτων ὑπὲρ τ. ἀνθ. φ. φανέντων*] Vulgatum, quod hoc quidem loco tueri se non poterat, sede sua everti. *Ἐνέργημα* rem factam optime exprimit, quamquam Christiani alia id potestate instruxerunt: vocant enim maligni spiritus adficientem atque adiligentem hominum corpora vim *ἐνέργημα*. Prudentius Apoth. v. 400.

*Audiat insanum bacchantis energima monstri.*

atque huc refert solent S. Barnabae Epist. c. 19. verba: *τὰ συμβαίνοντά σοι ἐνεργήματα, ὡς ἀγαθὰ πρόσδεξαι*. nescio an male: possunt de rebus, quae unicuique Christianorum eveniunt, et aequo animo ferendae sunt, intelligi. In sequentibus *μεγάλης ἀποδοχῆς ἀξιοῦντος* cur maluerim, et ea declarabunt, quae L. I. 69. adscripsi, et *μεγάλης ἀποδοχῆς ἀξιόμενος* l. 52. *μεγάλης ἀποδοχῆς καταξιώσαι* II. 60, IV. 55. etc. WESS.

295. 50. *Κατὰ μόνας ἐντραχεῖν τὸν πατέρα ταῖς θνητ.]* Haec duo *τὸν πατέρα* repudiantor, ut paulo inferius *καὶ ἐνδόλιως*. RHOD. *Κατὰ μόνας ἐντραχεῖν* etc.] Tametsi voces illas, sicuti vir doctissimus edixit, eliminari, nondum oratio constabit: Peliae enim eadem res bis inponitur, monentisque Medae ratio nulla est. Quare fretus Coislin. et Mutin. libris Diodori verba in hanc formam refinxit. WESS.

295. 61. Ἐν λέβητι καθειρῆσαι τὸ σῶμα τοῦ Πελίου] Conf. Ovid. VII. M. v. 328. Apollodor. I. 8. 27. Pausan. VIII. 11. WESS.

295. 68. Καὶ διὰ τιῶν φαρμάκων παρακρουσαμένην] Τὰς ὕψεις αὐτῶν, ut Proteus, varias induens formas, παρακρουόμενος τὰς ἀνθρώπινας ὕψεις in Dionys. T. II. p. 167. Vid. supr. I. 30. et Hygin. F. XXIV. WESS.

295. 74. Μόνην δ' Ἀλκυστιν — ἀποσχέσθαι] Non absolvit Alcestin Palaephatus, sed paternae caedis ream profugisse Pheras ad Admetum, supplicemque sedisse ad focum, cum frater Acastus insequeretur. Ἀλκυστις, inquit Hist. Incred. c. 41. καταφεύγει εἰς Φέρας πρὸς Ἀδμητον, τὸν ἀνεψιὸν αὐτῆς. καὶ καθιζομένην ἐπὶ τῆς ἐστίας οὐκ ἐβούλετο Ἀδμητος Ἀκάστῳ ἐκδοτὸν ἐξαιτουμένῳ δοῦναι. Sic lego: καθιζόμενος enim primum est et peius vertitur, domo se sua tenens. Puto Alcestin sceleris sive erroris societate fuisse exemptam, quod mirus eius in maritum amor passim cantaretur. Vid. Nostrum Excerpt. Vales. p. 222. WESS.

295. 77. Ἐνθάδε ποιήσασθαι τῇ Σελήνῃ] Solebat praeter ceteros ad magorum caerimonias advocari et Luna noctium conscia, sicuti in Apolog. p. 295. Apuleius profitetur: aderant quoque faces: quare

— — — *Ardentiaque ossa*

*E mediis rapit illa rogis, ipsamque, parentes*

*Quam tenere, facem.*

in Lucani VI. 534. WESS.

295. 87. Εἰς τὰ βασιλεια καταντῆσαι καὶ τοὺς etc.] Explevi orationem, hiulecam ante, ex Coisl. et Mut. schedis. Καταντῆσθαι veniendi potestate Diodoro maxime frequentatur. Infr. c. 62. Ἀνδρόγεως εἰς τὰς Ἀθήνας κατήντησε. et c. 85. οἱ μὲν γὰρ καταντῶντες εἰς τὴν νῆσον ἕπατοι. Palaephatus. Incred. Hist. c. 15. εἰς ὄρος καταντήσασα. Adde S. Lucani A. A. XVI. I. XVIII. 19. XXI. 7. WESS.

296. 95. Ἐλέησαντα τὰ πάθη] Lege κατελείψαντα, et infra pro ἑαυτὸν φροῦτ. ἑαυτοῦ φροῦτιδα. RHOD. Κατελείψαντα] Adstipulor viro doctissimo et scriptis libris. Argivi κατελειοῦντες τὰς τίχας τῶν ἀκλήροῦντων sunt L. XIV. 6. obvii, cuius etiam c. 112. vide. WESS.

296. 99. Ἐπαγγελόμενον ἐπιεικῶς — προσερχθῆσθαι] Sermonis tenor satis hoc comprobatur. Ἐπιεικῶς προσερχέσθαι de blanda lenique tractatione habes I. 55. III. 64. XII. 76., quibus contraria πικρῶς προσερχέσθαι XIII. 21., ὁμῶς καὶ βιαίως XVI. 5., ὀλιγώρως καὶ παρανόμως Lysias Orat. VIII. 4. ἐπερηφάνως καὶ χαλεπῶς Plut. Thes. p. 6. E. WESS.

296. 6. Ἀξίως ἑαυτὸν] Videtur ἑαυτὸν in αὐτῶν aut αὐτὸν esse mutandum. Sed malim ἀξίως αὐτῶν, id est, pro earum digni-

tate. STEPH. Ἀξιῶσαι ἀπὸν φροντίδα ποιήσασθαι] Posses Ievi opera cum Rhodemanno ἀξίως ἑαυτοῦ, aut ἀπὸν cum Stephano. Ego tamen scriptos Codd. duces praefero. Indicant Iasonem voluisse et aequum censuisse, ut regis virginibus cura inpendere-tur. Vid. Lycurg. in Leoerat. p. 149. et infra L. XVII. 69. WESS.

296. 10. Ἀδμήτω τῷ Φέροτος Θετταλῶ] Hoc quidem certe constat ex Euripid. Alcest. v. 83. et 435. et Nostri Excerpt. Vales. p. 222. De reliquis dubia admodum res est. Pausanias VIII. 11. nomina Peliadum nusquam sibi in poetarum scriptis lecta fuisse profitetur: Miconem autem pictorem earum imaginibus Asteropeiam et Antinoen inscripsisse. Unde iusta conclusione Th. Galaeus mihi confecisse videtur, ea puellarum nomina ex Pausan. in Apollodori I. 8. 27. ingesta fuisse, quod et verborum ordo confirmat abunde. Is. Tzetz. in Lycophron. v. 175. et eo prior Hygin. Fab. XXIV. annumerant nobis praeter Alcestin tres quatuorve Peliae filias, quas inter tamen nec Amphinome neque Evadne. Praeterea floruit haec quidem tempestate Andraemon, Oxyli pater, cuius si Leonteus fuerit frater, patre editus est Corono, modo tamen idem sit Leonteus; at is Andraemon uxorem duxit Gorgen Oenei filiam, notissimam ex Apollod. I. 8. 1. et Pausan. X. 38. Porro Evadnae celebres olim fuere duae: altera Iami mater, Capanei uxor altera, memoratae a Schol. Pindari Olymp. Od. VI. 46. Posteriores librarii Vat. et Reg. quin designent, mihi dubium non est: latet enim in corruptiore scriptura Καπανεῖ τῷ Κεφάλων. Nec sic tamen res expeditur. Capanei Evadne filia fuit Iphidis, teste Euripid. Suppl. v. 985., Iphias propterea semel iterumque Ovidio appellata. Capaneus ipse patre natus est Hippo-noo in Apollodori III. 6. 3. Iam Cephalus filium genuisse, cui aut Canae, aut Ceneo, aut Oeneo nomen fuerit, nusquam traditur. Novi virum eruditissimum ad Marmora Oxon. p. 138. adscripsisse: Oeneum alterum Cephalī filium avo Deioneo in Phocidis regno successisse, et Evadnen Peliae filiam duxisse, idque tradere Diodorum. Sed cum infida Poggii versione in fraudem inductum, res est exploratissima. Equidem suspicatus eram, cum primum haec sub stili acumen venerant, scripsisse Diodorum, Ἐδάδνην Κηλεῖ τῷ Κεφάλων. Vidit enim ex se natum Cephalus Celeum, auctore Eustath. in Homer. p. 307.: quod penitus consideratum nunc displicet: namque is Cephalus non Phocensibus, nedum Phylacae, ut Coisl. et Mut., quippe a fratre eius conditae, sed Cephaleniae imperavit. Hoc amplius, Celeus pater fuit Arcesii, cuius filius Laertes inter Argonautas haud incelebre nomen. Ergone Cephalus hic Phocensium rex longe alius est, ac Deionei filius, infelicis Proeridis caede famosus? Ego ab ea opinione haud procul absum, censeoque Diodorum, ut multa alia, ex Dionysio Milesio haec nobis esse admensum. Viderint tamen peritiores. WESS.

296. 15. *Καὶ καθιερωῖσαι τὴν Ἀργὸν τῷ Θεῷ*] Saepe navigatione finita id veteres fuisse solitos, docebit Procopius L. IV. B. Goth. c. 22. *Argo* tamen illustrius accepit decus, astris a Minerva inserta apud Eratosth. c. 35. WESS.

296. 20. *Φασὶ τὸν Ἡρακλέα συμβουλευῖσαι τοῖς etc.*] Citius contigit, si ea vera, quae c. 14. perscripta leguntur. Sed is dissensus de ludorum origine neminem morabitur, cum ipsis vetustioribus res ea multo fuerit incertissima, ut notum ex Pausania V. 7. Vero autem non absimile est, institutos esse, ut Graeciae iuventus sese exerceret, et ad mutuam auxilium, si eo opus foret, parata esset: quae quoque caussa instituti concilii Amphictyonici apud Dionysium IV. A. R. p. 229. WESS.

296. 30. *Τὸν παρὰ τὸν Ἀλφειὸν*] Series orationis et Mss. hoc requirunt. Posses alioqui doctissimum Iensium sequi, qui Epist. ad Graev. p. 410. *lego τῆς τῶν Ἡλείων χώρας, τῆς παρὰ τὸν Ἀλφειὸν.* Eleorum regionis, quae erat iuxta Alpheum. *Nempe locus in Elea regione Alpheo amni vicinus ad id electus est; propterea sequitur, διὸ καὶ τὴν παραποταμίαν καθιερωσάντα τῷ μεγίστῳ τῶν Θεῶν etc.* Eleorum autem ad Alpheum regio totius Graeciae consensu, sive Hercules ei rei auctor fuerit, sive eius posteris, immunis et sacrosancta censebatur, nefarii vero et scelesti, qui aut arma in eam inferrent, aut bello vexatae non succurrerent, Strabone VIII. p. 548. C. auctore. Vid. infr. L. XIV. 17. WESS.

297. 34. *Καὶ θεωροὺς ἀποστεῖλαι τοὺς ταῖς πόλεσι etc.*] Legatis, qui ad sacra certamina mittebantur, quique eorum sollemnitatem aliis nuntiabant, proprium *θεωρῶν* nomen. Etymologus, *Ἀρχιδέωρος, ὁ ἡγούμενος τῶν θεωρῶν. θεωροὶ δὲ εἰσὶν οἱ τὴν θεωρίαν φέροντες τοῖς θεοῖς εἰς τοὺς Ἑλληνικοὺς ἀγῶνας καὶ ὑπὲρ τῶν πατρίων θέοντες*: quo usu, quod H. Vales. ad Harpocrat. haud latuit, *ἀρχιδέωρος εἰς Ἰσθμὸν καὶ Ὀλυμπιάζε* Andocides Orat. de Myst. p. 17. et Orat. in Alcibiad. p. 32.: Dinarchus in Demosth. p. 100.; Lysias Or. XX. c. 2. Prorsus autem, ut hoc loco, Polybius de Antiocho Epiphane apud Athen. V. 5. *ἐξέπεμψε πρεσβεῖς καὶ ΘΕΩΡΟΥΣ εἰς τὰς πόλεις, καταγγελοῦντας τοὺς ἐσομένους ἀγῶνας ὑπ' αὐτοῦ ἐπὶ Λάμπης,* ubi vide Casaubon. et Duker. in Thucydid. V. 16. WESS.

297. 38. *Ὀλυμπιακῆς* Reg. Vide I. 95. WESS.

297. 44. *Στρατόπεδόν τε κράτιστον συστήσασθαι καὶ πᾶσαν etc.*] Etsi dubitari non possit, res non unius Herculis, sed plurium, a Graecis in unum quoddam historiae corpus fuisse congestas, vero perquam adline est, Herculem Thebanum egregii ducis et bellatoris officia obisse, exercituque instructo magnum sibi nomen atque auctoritatem parasse: quod et prudentissimus scriptor Dionysius I. A. R. p. 33. agnoscit, et fabulae veterum, modo

addita a poetis ornamenta auferas, confirmant. Vide supr. I. 23. et G. Io. Vossium I. Idolol. c. 12. WESS.

297. 51. Ὑπὲρ Ἰάσονος ] Περί Ἰάσονος Reg. Vid. supr. I. 89. WESS.

297. 53. Καὶ συμβιώσαντι δεκαετῇ χρόνον ] Consentanea Diodoro commentatur Apollodorus, καὶ δέξα μὲν ἔτη διετέλουν εὐτιχοῦντες, inquit I. 8. 28., liberos tamen utriusque *Mermerum* et *Pheretum* nuncupans, quemadmodum et Pausan. II. 3. atque Hygin. F. XXV. cum Munckeri nota. Conf. Schol. in Eurip. Med. 273. WESS.

297. 62. Τὸν Ἰάσονα Γλαύκης ἐρασθέντα τῆς Κρέοντος ] Creontis hanc filiam Creusam Clitodemus in Schol. Eurip. Med. v. 19. et Schol. ad Ovidii Ibin v. 605. vero nomine fuisse perhibet: cuius dissensus causam quaerit Iac. Palmer. Exercit. p. 370. WESS.

297. 68. Ἀλλὰ καὶ τοῖς τέκνοις σπεύδοντα συγγενῇ τὸν etc. ] Hunc colorem Iason nuptiis dat, ut Medeam placet, in Euripidis Med. v. 593. WESS.

298. 77. Ριζιόν τι προσθεῖσαν ] Describitur a Nicandro Alexiphar. v. 249., ubi Critici veteres *Naphtham* fuisse malunt, non dissentiente, uti et Muncker. monuit, Plut. in Alexand. p. 686. A. WESS.

298. 83. Δῶρα κομίσαι τῇ νέμῃ φαρμ. χειρισμένα ] Euripid. Med. v. 947. et 1186. elegantissimis versibus insidiosa dona et infelicem novae nuptae succurrentisque patris exitum depingit. WESS.

298. 89. Ἐπὶ τοσοῦτον γὰρ προελθεῖν αὐτὴν ὀργῆς ] Non erat, ut hoc pro reiectaneo censeretur. Euripid. Troas. 972. Οὐκ εἰς τοσοῦτον ἀμαθίως ἐλθεῖν δοξῶ. Lysias Orat. II. 1. οὐκ ἔν ποτ' αὐτὸν εἰς τοσοῦτον τόλμης ἡγησάμην ἀγικέσθαι. et Orat. XI. 22. εἰς τοσοῦτον ἐπεροπίας ἐλθόντες. Themist. Orat. III. p. 348. εἰς τοσοῦτον ἐνκλείας προῆλθεν. Demosth. I. in Aphob. p. 506. εἰς τοσοῦτον ἀσχροκερδείας ἦλθεν. quae cum dicendi genus satis constabulant, desino. WESS.

298. 91. Τὸν μετὰ τῆς νέμῃς etc. ] Considera num rectius τὸν ἀπὸ τῆς. RHOD. Offendo ad ἐπεὶ ἐξέφυγε τὸν μετὰ τῆς νέμῃς κίνδυνον. *Nympha haec est Glaucé, quam novissime duxerat Iason: ab ea metuere poterat Medea κίνδυνον. Immo inceptis novis nuptiis iam imperata Medae fuerat abstinentia συμβιώσεως καὶ ὀμιλίας cum Iasone: quod illa periculum, et alia, quae forte sibi impenderent, interemis Glauce et Creonte, nunc effugerat. Putem autem vel post vocabulum νέμῃς locatum fuisse ὄρον, ut sit, ubi effugit periculum post sponsae caedem; vel Diodorum scripsisse παρὰ, vel potius ἀπὸ τῆς νέμῃς κίνδυνον, periculum, quod Medae a Glauce partim evenerat, partim esset eventurum. Non latet tibi, eruditissime Graevi, non*

raro Graecos demonstrare substantivum cum praepositione, vel suppresso verbo aliquo, vel pro simplici genitivo. Sic eadem pagina Diodorus de Thessalo Medae filio, *μασι τὸν Θεσσαλὸν μὲν τὸν διαφυγόντα τὸν ἀπὸ τῆς μητρὸς φόνον.* Sic supra ex Diodoro nostro habuimus τὸν ἀπὸ Λιῶς ὄμβρον. Haec Cl. Ienius in Epist. ad Graev. p. 411., qui si animadvertisset, Iasonem commune sibi cum sponsa periculum effugisse, sincera haec non in crustasset. Medea apud animum constituerat Iasonem pariter cum Glauce interimere: ὃν ποτ' ἐγὼ νέμωσαν τ' ἐσίδοιμ' αὐτοῖς μελάθροις διακραιόμενους ipsa ait in Eurip. Med. v. 163.; Glauce illaetabili incendio deflagrante Iason periculum vitavit; quare irata et furiis incensa mulier filiis trucidatis in maximam eum calamitatem detrudere molitur. WESS.

298. 95. Ἐν τῷ τῆς Ἡρας τέμνειν θάψαι] Sumsit ex Euripid. v. 1378.

— Ἐπεὶ σφας τῆδ' ἐγὼ θάψω χειρὶ,

Φέρονσ' ἐς Ἡρας τέμενος Ἀζοαίας θεῶν.

qui Iunonem Ἀζοαίαν nuncupat, ut Critici veteres notant, παρὰ τὸ ἐν ἀκροπόλει ἰδοῦσθαι. Prave ergo Apostolius I. 82. Κορινθίων Ἡρᾷ Ἀσκραίᾳ θεόντων. Melius Suidas in Αἰξ. ubi L. Kuster. simili menda Hesychium liberat. WESS.

298. 97. Τοῦτον μεσίτην γεγονότα τῶν ὁμολογιῶν] Hercules nuptiarum fuerat conciliator, receperatque Medae, Iasonem eius in amore fore assiduum: hinc μεσίτης τῶν ὁμολογιῶν, sponsaliorum medius atque interpret. Longe augustiore sententia de Christo nostro auctor Epist. ad Hebr. III. 1. καταροήσατε τὸν ἀπόστολον καὶ ἀρχιερεῖα τῆς ὁμολογίας ἡμῶν. quippe Deum inter et homines sequestre, atque assensus, quem mandatis eius praebemus, internuntio ac sacerdote: quo referre soleo summi Iudaeorum pontificis apud Philon. De Somn. p. 598. A. titulum, ὁ μὲν δὲ μέγας ἀρχιερεὺς τῆς ὁμολογίας, qui vulgo perperam distractus circumfertur. WESS.

298. 2. Ἐκ τοῦ ζῆν ἐαυτὸν μεταστῆσαι] Non ita Euripides, fragmento putrescentis navis Argus, Ἀργοῦς χάρα σὺν λειψάνῳ πεπληγμένους, in caput in pacto periisse significans Med. v. 1387. Cum Diodoro sentit Neophron. in Schol. ad eum poetae versum. Vid. Nic. Loensem L. IV. Epiph. Miscell. c. 18. WESS.

298. 5. Ἀποστειλάντων αὐτῶν Ἡρθῶδε] Malim Delphos, ut I. XV. 8. 49. Apollon. Rh. I. 209. et Herodot. I. 54. cum L. Bos animadversione Obs. Critic. c. 2. Miserunt autem seiscitatum Phoebi oracula, quod pestilentia ipsorum liberi occiderent ob caedem, qua Medae filios lapidibus coopertos obtruncarant ipsi, si fides Pausaniae II. 3. p. 118. et Philostrato Her. XIX. 14. p. 740. hisque antiquiori Apollodor. I. 8. 28. Noster enim atque Euripides in alia omnia abeunt; quamquam non defuerunt, qui poetam acceptis quinque talentis scelus id in Medeam derivasse



traderent, ut Parmeniscus in Schol. ad Med. v. 9. et Aelian. V. V. II. 21. Utcumque id fuit, neque enim conperta res, Corinthii Medecae liberos publice deinceps inferiis ceterisque piamentis placarunt, *μισοβαρβάρους*, quippe hybridas, appellantes, quod Schol. Pindar. Od. XIII. 76. Olympion. et in Med. Euripidis v. 273. uberius docent. WESS.

299. 15. Ἀφ' ἑαυτοῦ προσαγορευῆσαι Θετταλοῦς] Diceret Strabonem his consentire, Θετταλοῦς τοὺς ἀπὸ Ἰάσονος καὶ Μηδείας memorantem L. XI. p. 804. A. Ceteri gentis et regionis nomen aut a Thessalo Haemonis filio, aut Thessalo Phidippi patre Heraclida repetere adsolent. Οἱ δὲ ἀπὸ Θεσσαλοῦ τοῦ Φειδίππου πατρὸς, τοῦ Ἡρακλείδου, μετὰ τὰ Τρωϊκὰ κληθῆναι φασίν, veteres Grammatici aiunt in Apollon. Rh. III. 1089. Quare in corrupto et mutilo Strabonis loco extremi L. IX. τοὺς δὲ ἀπὸ Ἐγύρας τῆς Θεσπρωτίδος, ἀπογόνους Ἀντίγονο καὶ Φειδίππου υἱῶν Θετταλοῦ τοῦ Ἡρακλέους, ἐκλεθόντας ἀπὸ Θετταλοῦ τοῦ ἑαυτῶν προγόνου τὴν χώραν ὀνομάσαι ex egregia Iusti Lipsii ad Vell. Patere. I. 1. correctione citra dubium legendum est. WESS.

299. 19. Περὶ ὧν ἐν οἰκαιοτέροις μνησθῆσόμεθα καιροῖς] Stetit haud dubie promissis. Sed periit, ut multa, hic eius labor, neque adeo finire licet, quo libro ea fuerit exsecutus. WESS.

299. 21. Ἀπεκτονοῦτα] Ἀπεκταγῶτα Co. Vid. Steph. Thes. T. II. p. 472. WESS.

299. 23. Ἀγροοῦσαν — βοήθειαν] Restituatur ἀπογροῦσαν. RHOD. Ἀπογροῦσαν τὴν — — βοήθειαν] Parui scriptis libris et Rhodom., quicum consentit Io. Iensius haec notans: *Rhodomannus vertit*, desperata in praesens eius ope. *Recte: ita enim mens Diodori postulat: quare sine ulla haesitatione legam ἀπογροῦσαν*, desperantem, Epist. ad Io. Georg. Graev. p. 413. Genus loquendi auctori frequens adeo est, ut exempla conducere necesse non sit. WESS.

299. 27. Ὑφ' Ἰππότου τοῦ Κρέοντος ἔξαιτοιμένην] Haec puto in animo erant Euripid., cum Medecae Aegeum compellanti ea, quae succedunt, tribueret in cognomine Fabula v. 748.

Φίλος γένοι' ἄν, κἀπιζηρονεύμασιν

Ὅν ἄν πίθοιο, τὰμὲν μὲν γὰρ ἀσθενῆ.

Prospiciebat enim, non defore, qui post admissum Corinthi scelus noxae se dedi peterent. De Hippote Creontis filio scholiastes ad eandem Tragoed. v. 20. WESS.

299. 31. Ἐγκληθεῖσαν ἐπὶ φαρμακείᾳ] Uberius haec Plutarchus Thes. p. 5. D. WESS.

299. 38. Καὶ τοὺς ἄλλους ἀφ' ἑαυτοῦ etc.] Scripserat τοὺς λαοὺς, *populos*, ut bene Rhodom., mendam inter vertendum, sicuti conicio, animadvertens. Vitium peperit vocum in contractiore scriptura similitudo, idque semel atque iterum in superio-

ribus eluimus. Vid. III. 43. 45. 72. Ceterum quae mox adduntur de *Medo* Aegei filio et Aeeta in regnum restituto, ea non improbat Apollodor. I. 8. 28. cumque secutus Tzetzes in Lycophron. v. 175. WESS.

300. 58. Ἀναπλεύσαντας γὰρ αὐτοὺς διὰ τοῦ Ταυρίδος] Absurdam hanc opinionem personatus Orpheus sequitur, Argonautas Maeotidem intrasse ac longis erroribus actos in Oceanum devenisse canens Argonaut. v. 1054.; neque alia inbutus fuit Scymnus, si eius sententiam bona fide expresserunt Critici ad Apollon. Rhod. IV. 284. WESS.

300. 60. Καὶ τόπον] Lego' τρόπον pro τόπον. STEPH. H. Steph. τρόπον legit. Tum vertendum, *ναυίῳ ποδο quodam protracta*. RHOD. Καὶ κατὰ τόπον τινὰ τὴν ναῦν διεκλύσαντας] Sic praestat. Τόπος et τρόπος saepe quidem a librariorum natione confunduntur, cuius culpa hic adfines non sunt. Posses alioqui neglecta praepositione locum tueri his Zosimi L. V. c. 29. Argonautae *μηχαναῖς ἐπιθέντες τὴν Ἀργῶν, καὶ τετραζοσίων σταδίων ὁδὸν ἄγχι Φαλάσσης ἐκλύσαντες*. Sed quod dedi, potius videtur. *Διέλκειν* de navi, cum per Isthmi iugum trahitur, elegans esse, nemo ignorat: mitto ergo acerbissimum impurissimumque Aristophan. in Thesmophor. v. 655. iocum. Tu vide tamen Suidam in Ἰσοθμὸς et Is. Casaub. in Strab. VIII. p. 583. WESS.

300. 67. Σεβομένους — τοὺς Διοσκούρους] Tacitus Mor. Germ. c. 41. apud Naharvalos, nationem Lygiorum, antiquae religionis lucum esse, in quo Castor et Pollux, ut Romani numinis barbarici cultum interpretabantur, praecipuo honore colantur, auctor est: sed ea et fabulosa sunt, et commode huc referri haud possunt, sicuti diligenti cura commonstravit Ph. Cluverius L. I. Germ. Antiq. c. 30. Adde Apollon. IV. 651. WESS.

300. 76. Ἀργῶν ἀπὸ τῆς νεὸς προσαγορευῆσαι] Meminit portus Apollonius IV. 658.

Ἐν δὲ λιμὴν Ἀργῶος ἐπωνυμίην πεφάτισται] pluresque alii, laudati a P. Leopardo XIII. Emend. c. 3. WESS.

300. 80. Λιμένα Τελαμώνια] A Telamone, Argonautarum uno. Cluver. II. Ital. Antiq. p. 477. et Itiner. Anton. p. 500. vide. WESS.

300. 81. Αἰήτην, τὸν νῦν Καίτην προσαγορευόμενον] Studiosissimo veterum fabularum tenebrarumque Lycophroni Ἀργοῦς τε κλειρὸν ὄρηον, Αἰήτην μέγαν propterea appellare Alexand. v. 1274. libuit. Tzetzae, Αἰήτης λιμὴν ἐν Ἰταλίᾳ, ἐνθα φασὶν ὀρημισθῆναι τὴν Ἀργῶν] cuius in mentem si venisset hic locus, plura, loquacem hominem bene si novi, nobis admensus fuisset. Origo ipsa a vero abhorret, recteque adeo Strabo fecit, quod nullam eius rationem habuerit; quamquam nec ea, quam dat L. V. p. 356., magno Casaubono se probare potuit. WESS.

300. 86. *Δωρήσασθαι χαλκοῦν τρίποδα*] Plinius de tripode Herodotus IV. 179. et Lycophron. v. 887., qui a Medea Tritoni datum canit, Apollon. Rhod. IV. 1549. Pindar. Pythion. Od. IV. WESS.

300. 88. *Παρά τοῖς Ἐύεσπερίταις*] Vulgatum *Ἐσπερίταις* tametsi firmetur eo loco, quem L. XVIII. 20. videbimus, hoc praecoptavi. Pausan. IV. 26. p. 342. *τὸ πλεῖστον δὲ αὐτῶν ἔς τε Λιβύην ἀγίκετο, καὶ Λιβύης ἔς Ἐύεσπερίταις. οἱ γὰρ Ἐύεσπερίται πολέμῳ κακωθέντες ὑπὸ βαρβάρων* etc. Ubi doctissimus Kuhnus rectissime Sylburgii suspicionem deseruit. Urbs *Ἐσπερίδες* et *Ἐύεσπερίδες*, ut ex Ptolemaeo et Stephano notum, postea *Beronice*, de qua in Diatrib. de Iud. Archont. c. 3. plura, dici coepta est. WESS.

300. 90. *Ἀπὸ τὸν Ἴστρον πλέσαντας*] Sic Apollonius et ante eum Timagetus, ut Critici docent ad Poëtae L. IV. Argon. v. 259. et 284.; qui tamen cum adfirmant praeter Timagetum ante Apollonii aetatem neminem ea fuisse opinione, vereor ut fidem mereantur: fuit enim communis veterum is error, Strabone teste I. p. 98. WESS.

300. 91. *Διὰ τῆς ἀντιπροσώπου ῥύσεως*] Hic *ῥύσεως* ab auctore positum esse, quis neget? Quid enim *ῥύσεως* hic esset? Intelligit ergo alium fluminis alveum, seu profluxum, in fontibus ipsis occurrentem, cuius ductu in Adriaticum mare sint devecti. Rhod. *Διὰ τῆς ἀντιπροσώπου ῥύσεως*] Scripti libri et res ipsa ita cum malint, vulgatum possessione cur non deiciam? Puto hanc Diodori mentem fuisse: Argonautas adverso flumine ad Istri fontes pervenisse, inde vero alveo, in diversa tendente, in Adriaticum mare delatos esse: flumina enim *ἀντιπρόσωπα* ea sunt, quae in contrariam partem decurrunt, ut L. XVIII. 5. *ποταμοὶ τὰς ῥύσεις ἔχοντες ἀντιπροσώπους*, quorum alii in Euxinum, alii in Caspium aut Oceanum mare devolvuntur. WESS.

301. 97. *Ἐνρέθη τὰς πηγὰς ἔχων ὁ ποταμὸς* etc.] Ister videlicet, unde Istris sive Histris cognomen venit: quod non animadversum fraudi summo viro fuit ad Strabon. VII. p. 443. Meminit *Istri*, Istriae amnis, Mela II. 4.; quod flumen idemne sit ac *Quieto*, ut nostrae aetatis Geographi vocant, an Timavus non convenit inter eruditos. Stabat pro *Quieto* Cluver. cum res Germanorum illustraret L. I. G. A. c. 30., in rebus vero Italicis Timavum maluit L. I. I. A. c. 21. p. 208. Ego vero difficulter mihi persuadeo, Melam tam turpi errore Istrum et Timavum, quos distincte nominat, voluisse confundere. WESS.

301. 6. *Καὶ τινῶν ἐτέρων ἀνδρωθέντων*] Sic I. 53. *καὶ πάντες ἀνδρωθέντες ὑπῆρξαν ἀθληταὶ μὲν τοῖς σάμμασι. Εἰ quum omnes adolevisset* etc. qua potestate satis id verbum teritur. Anton. Liberal. c. 13. *ὁ δὲ παῖς ἐπεὶ τάχιστα ἠνδρώθη, ἀνὴρ ἐγένετο γενναῖος.* Apollodor. II. 4. 2. *καὶ ἠνδρωμένον Περσέως.*

et 7. 7. τὴν Ἰόλην ἀνδρωθέντα γῆραι. Euripid. Herc. Fur. v. 42. μήλωδ' οἶδ' ἠνδρωμένοι. Rarius hoc Iosephi est, neque in Lexicis obvium, ἀνὴρ ἀνδρωτο δ' αὐτῶν ταῖς ἡλικίας ἢ διάθεσις de Herodis filiis, quibus cum ipsa aetate odium in matris inimicos creverat, l. 1. 23. 1. Belli Iud. Aliud indicat in Vales. Excerpt. Dionis p. 626. cum de Vestalibus virginibus, stuprum passis, ὅτι παρὶς αὐα ἠνδρωθήσαν. quo usu medicorum principi frequentari Oeconomi. Foesii docebit. WESS.

301. 10. Διὸ Κήρυ μὲν τῷ βασιλεῦ προηγόρευσε etc.] Verba, quibus metu percussus Ceyx Heraclidas, ut Trachine discederent, apud Hecataeum compellabat, servavit Longinus de Stil. Subl. c. 27. p. 156., a Tollio et Zach. Pearce inprimis egregie illustrata. Exactos dein plerisque Graeciae urbibus fuisse Euripid. Heraclid. v. 19. 50. 145. etc. significat. WESS.

301. 20. Τὴν ἔμφυτον αὐτοῖς] Παρ' αὐτοῖς C. M. V. Cl. 1. sine gravi caussa. Vid. XIX. 1. XX. 31. 58. WESS.

301. 22. Εἰς Τρικόρουθον] Non aliter scribit Stephan. in Τρικόρουθον, Diodorum citans, quem nostrum esse, cave credas, prave tamen. Vero nomine Τρικόρουθος dicebatur, uti ipse in Τειροπόλις, et, quem sequitur, Strabo IX. p. 588. A. et p. 611. B. praefert. Vidit et hoc Io. Meursius Lib. de Pop. Attic. et cum Holstenio ad Steph. Pinedo. Atticae vero Tetrapolin profugos Heraclidas incoluisse Euripid. in cognomine Tragoedia v. 82. testatur: in cuius beneficii memoriam cum labentibus annis Lacedaemonii Atticam armis incursarent, sola Tetrapoli abstinuerunt, sicuti L. XII. 54. videbimus. WESS.

302. 34. Ὑπὸ Ἑλλου τοῦ Ἡρακλέους ἀηρόθη] Ab Iolao captum et interfectum Euripides Heraclid. v. 859. Strabo VIII. p. 579., et quos ibi laudavit Is. Casaubon., adfirmant. Isocrates capti, et cum supplex victoribus fuisset, interfecti Eurysthei meminit Panathen. p. 407. τοσούτου γὰρ ἐδέχεσε γράμας κύριος γενέσθαι τῶν ἰκετῶν, ὥστε ἠττηθεῖς μάχη καὶ ζωορηθεῖς ὑπὸ τῶν ἡμετέρων, αὐτὸς ἰκέτης γενόμενος τούτων, οὗς ἐξαιτήσων ἦλθε, τὸν βίον ἐτελεύτησε. quibus in verbis me vehementer offendit participium γράμας: neque enim literis res acta, sed armis; mallet, si liceret, πράξας κύριος γενέσθαι, cum impense studisset, ut eos suam in potestatem redigeret. Nam προσδοξίσας, quod hoc ipso in negotio usurpat Panegy. p. 76., et lenius est et longius a ductibus vocabuli recedit. Utcunque ceciderit; coniecturae enim nihil admodum tribuo: cum Diodoro paria facit Apollodor. II. 8. 1., filios Eurysthei nominatim annumerans. WESS.

302. 45. Ἕλλος — εἰς μονομαχίαν προεκαλέσατο] Frequentis olim usus inter dissidentes reges singularia erant certamina, longe profecto honestiora et magis e re civium, quam quae vulgo levi saepe ex caussa inter privatos sumuntur. Exempla principum, ut popularium sanguini parceretur, inter se congregien-

tiam non addo: sunt enim in his libris haud rara, et ab incomparabili Is. Casaub. ad Athen. IV. 13. diligenter collecta. WESS.

302. 49. *Μὴ κατέναι — ἐντὸς ἐτῶν πεντήζοντα*] Verius dixisset *ἐντὸς ἐτῶν ἑκατὸν*, ut Herodot. IX. 26. et Schol. Thucyd. I. 12. Centum enim circiter anni post hanc cladem exierunt, antequam in Peloponnesum Heraclidæ redirent. Vid. supr. I. 5. et viros egregios Dion. Petav. IX. D. T. 32. et Barbeyrac. Hist. Foed. et Pacto. I. T. p. 11., deque Echemo Tegeatarum rege Pausan. I. 41. VIII. 5. WESS.

302. 65. *Παῦ' Αἰγίμιον τὸν Λόρου* etc.] Conf. supr. c. 37. et Strabon. IX. p. 654. B. WESS.

302. 69. *Τὸν Ἡλεκτρώου*] Retine scripturam marginalem *Ἡλεκτρώου*. Hoc enim Hesiodus in principio *Aspidos* suae utitur. Licymnium vero *Electrionis* et *Mideæ* filium esse, ex *Apollodoro* *Reineccius*, diligentissimus nostrae ætatis *Genealogus*, in familiis regum *Mycenæorum* ostendit. Ad quem in caeteris etiam *Genealogiis* recte cognoscendis lector dimissus esto. RHOD. *Τὸν Ἡλεκτρώου*] Sic malim, quamquam supr. c. 9. constanter Mss. *Ἡλεκτρώου*, nec aliter in *Apollodoro* II. 4. 6. Melius *Pausan.* II. 22. et 25. De *Licymnii* caede *Pindar.* Od. VII. *Olympion.* v. 49. et Schol. *Homer.* *Iliad.* B, 663. WESS.

302. 71. *Οἱ ἐπὶ Τριόπῃ τοῦ Φόρβαντος*] *Pausan.* eodem modo L. IV. 1. et infr. *Noster* V. 77. Alioqui saepe vitiosum *Τριόπæ* nomen in libris circumfertur, sicuti et *Phorbantis* *Exemplis* si indigeas, succurrent *P. Leopard.* IV. *Emend.* IX. *Muncker.* in *Hygin.* Fab. CXLV. et *Astronom.* II. 14. WESS.

302. 74. *Τρεῖς καταστῆσαι πόλεις* etc.] De illis L. V. 77. XIII. 75. WESS.

303. 75. *Ἥλυσον*] *Ἥλυσον* Co. *Ἥλυσον* *Vind.* perperam. Vid. *Wasse* in *Thucyd.* VIII. 44. WESS.

303. 84. *Καὶ τὰ μυθολογούμενα σύμβολα ἀρρηγμένως*] Haec et quae succedunt pessime a quibusdam libris absunt: intelliguntur ensis et crepidæ, quas *Aegeus* ἐπὶ πέτρῃ θάψαι *γνωρίσματα εἶναι τῷ παιδὶ* perhibetur in *Pausan.* I. 27. p. 66. et *Plutarch.* *Thes.* p. 2. C. WESS.

303. 89. *Ὀνομαζόμενον Κορνήτιν*] *Peripheten*, *Vulcani* filium, ὃς ἀπὸ τῆς *Κορνῆς*, ἣν ἐγόρει, *Κορνήτις* ἐπεκαλεῖτο *Apollod.* III. 15. 1. et *Pausan.* II. 1. Nihil autem intererit, sive tu mox ὅπερ an ἦτις ἦν legeris. WESS.

303. 92. *Τὸν ἐν Ἰσθμῷ κατοικοῦντα Σίνν*] *Origo* vocis ἀπὸ τοῦ σίνεσθαι et *Euripid.* *Hippol.* v. 977. atque *Ovidii* *Ib.* vs. 409. *Ut Sinis et Sciron et de Polypemone natus*, hoc requirunt: neque dissidet *Apollod.* III. 15. 2. nec *Pausan.* I. 37. *Σίννις* tamen *Plutarcho* *Thes.* p. 4. *Aristoteli* III. *Rhetor.* p. 123. cum *Sylburg.* nota, atque aliis. WESS.

303. 97. Τὴν ἐν Κορμινῶνι — ἔν] Si huic agri Corinthiaci loco nomen a Cromo, Neptuni filio apud Pausan. venerit, potius scriptura Cod. Clar. I. foret: sed nec sibi in vocis origine nec scriptura veteres constant, quemadmodum Sylburg. ad Pausan. II. 1. et Io. Meurs. Thes. c. 6. monuerunt. Κορμινῶν L. XII. 65. recurrit. Scripsi autem τρίτον δέ, secutus Mss. et Rhodom., qui *verisimilius*, inquit, τρίτον δέ, *ut absolute, quomodo superiora πρώτον μὲν, δεύτερον δέ.* WESS.

303. 100. Σζήγωνα ] Σζειγόνα Co. ut Xenoph. II. Memor. p. 581. Isoer. Laud. Heien. p. 309. WESS.

303. 1. Σζιγορίδας πέτρας ] Scopuli longissime per agrum Megaricam porrecti Oneas montes et rupem Moluridem contingebant, lacrociniis, quod praeter eos in Atticam iter esset, opportuni atque infames seriore etiam tempore, uti Aleiphron. L. III. Ep. 70. testatur. Describuntur a Strab. VIII. p. 582. C. IX. p. 602. C. De Scirone quae Megarensium fuerit opinio, ex Plut. Thes. p. 4. E. cognosces. WESS.

303. 2. Ἀποτίπτειν ἑαυτὸν ] Aut reponendum ἑαυτοῦς, aut dicendum cum post παριόντας subiecisse ἑαυτὸν, tanquam post ἕκαστον τῶν παριόντων. STEPH. Ἐαυτὸν ] Προ αὐτὸν, non autem ἑαυτοῦς, quod respectus hic fiat ad Scironem ipsum, qui pedibus ad abluendum peregrinis, qui iter illac facerent, in praecipiti quodam loco porrectis, in mare illos deturbabat, ut Plutarchus in vita Thesei refert. RHOD. Foret profecto commodius ἑαυτοῦς, nec nullo tamen libris vetantibus: praesertim cum scriptori huic per sit familiare a multitudinis numero ad singularem transilire: ut mox διαπαλαιόντα τοῖς παριοῦσι, καὶ τὸν ἡττηθέντα etc. et haec ad Scironem ipsum, ut optime Rhodom., pertineant. Plut. Thes. p. 4. E. ὡς δ' ἔπειτα λέγουσιν, ἔβραε καὶ τρογῆν προτείοντα τὸ πόδε τοῖς ξένοις, καὶ κελύοντα νίπτειν, εἶτα λακίζοντα καὶ ἀπωθοῦντα νίπτοντας εἰς τὴν θάλασσαν. Iam de *Chelone* quod subnectitur, testudinem indicat, quae ad scopulos adnatans deiectos in mare devorabat. Pausan. I. 44. p. 108. χελώνη δὲ ἐπενίχθεο ταῖς πέτραις, τοὺς ἐοβλήθοντας ἀσπάζειν. Schol. Eurip. Hippol. v. 979 ὡς τὴν χελώνην ἔτρεφεν, οὗ μέμνηται Καλλίμαχος. οἷτος ἡνάγκασε τοὺς παριόντας νίπτειν τοὺς πόδας, καὶ λακτιζομένους ἐπ' αὐτοῦ βρωῖμα ἐποίει γίνεσθαι τῆς χελώνης. WESS.

303. 6. Περὶ τὴν Ἐλευσίνα Κερκύονα ] Io. Meurs. Thes. c. 7. consule. WESS.

303. 9. Ἐν τῷ λεγομένῳ Κορυδάλλῳ ] Liquidam literam in pagis huius nomine geminat quoque Stephan.: Κορίδαλος aliis placet, e quo numero Strabo IX. p. 605. Athen. IX. p. 390. A. Aelian. III. H. A. 35. Ammonius in Κόρυδος. *Corydalum* vero Procrustes incoluerit, an propius Eleusinem propter Cephissum amnem, non convenit Diodoro cum Pausan. I. 38. p. 92. et Plutarcho Thes. p. 5. B., quamquam nec illi plane inter se consentanei

Ceterum Procrustae ex re ipsa natum titulum simili fere modo explicat Hygin. Fab. XXXVIII. WESS.

304. 16. *Τὸν ἐν Μαγαθῶνι ταῦρον*] Vide supr. c. 13. et Io. Meursii Thes. c. 10. WESS.

304. 22. *Προσαναδραμόντας τοῖς χρόνοις*] Ita quidem constanter exaratum habetur. Sed haud scio an non melius sit *προαναδραμ.* ut prius ad superiora tempora recurramus. Rhetor. Non debuerat vir doctissimus huic loquendi generi controversiam movere, quippe elegantī et Nostro in frequenti usu. Infr. c. 69. *περὶ δὲ τῶν Αἰολέων τοῖσιων ἀναγκαῖον, προσαναδραμόντας τοῖς χρόνοις — ἐκθέσθαι.* et c. 75. *ἀναγκαῖον δὲ τοῖς χρόνοις προσαναδραμόντας — διελεῖν.* et XVI. 1. XVIII. 19. Habet ex Polybiana imitatione: Polyb. enim I. 12. *ἐάν ποῦ προσανατρέχουμεν τοῖς χρόνοις περὶ τῶν ἐπιφανεσιτάων πολιτευμάτων.* et c. 5. *καὶν δὲ τῶν χρόνοις βραχὺν προσαναδραμόντας — ποιήσασθαι τὴν ἀνάμνησιν.* nam utrobique ita legendum et scripti Codd. et Is. Casaub. ac Boecler. docuerunt. Alioqui *ἀναδραμεῖν τοῖς χρόνοις* simili in re usurpat, sicuti L. II. 14. et 57., a quo nec Diodorus abstinuit L. XI. 67. WESS.

304. 24. *Τέταμιος ὁ Δώρον*] Haud scio, an scriptura Codd. Clarom. potior sit: *Τέταμιος* quidem certe L. V. 81. adpellatur, fuitque eo nomine *Τέταμιος* Argyraspidum dux, in rebus Eumenis haud obscurus, L. XVIII. 59. et Plut. Eumen. p. 590. F., et *Τέταμιος* Biantis Prienaei pater apud Laert. Diog. I. 82.; nec longe abit *Τεταμίτας* Larissaeorum rex. Apollodor. II. 4. 3. De Aeolensibus et Pelasgis Cretae incolis dicetur alias. Vide interea Io. Meursii Cretam L. I. 4. WESS.

304. 27. *Ἐγένησεν Ἄστεριον*] Asterium, quem et *Ἀστερίωνα* adpellat, sicuti *Κορήτης Ἰστίερον στρατηλάτην* Lycophron. v. 1301., Europam uxorem habuisse consentit Apollod. III. 1. 2. WESS.

304. 35. *Τοῖς Κρησὶν ἐνομοθέτησε*] Vulgatissima opinio est, Minoem Cretensibus leges dictasse; venit tamen in partes Rhadamanthus apud Platon. principio L. I. de Leg.: qui, si Ephoro fides in Strabon. X. p. 730. B., Minoe multis annis fuit prior, illique legum ferendarum exemplum, quod imitaretur, praeiuit. WESS.

304. 39. *Ὅτιος πρῶτος Ἑλλήνων — θηλασσοκρατήσε*] Repetuntur eadem L. V. 54. et 79. Oenomaus apud Euseb. V. Praep. Evang. c. 19. *θηλασσοκρατεῖ τότε ὁ Μίνως καὶ μέγα ἐδύνατο, καὶ πῦσα ἢ Ἑλλὰς ἀπὸν ἐθεράπευε.* Apollodor. III. 1. 3. *θηλασσοκρατήσας δὲ πρῶτος πασῶν τῶν νήσων σχεδὸν ἐπῆρξεν.* Sic lego; nec addo, ut Th. Galaeum coarguam, Diodorum parum considerate perstringentem, plura, quoniam excellentissima eruditione Is. Casaub. maris imperium, quo Minos plurimum valuit, et plures post eum Graecorum, exposuit ad Polybii L. I. p. 27. WESS.

304. 42. Καὶ Κατρεία] Pausaniae VIII. 53. p. 707. Κατρεία δὲ φασιν εἶναι Μίνω hoc egregie firmat, nec minus scripti Codd., in Apollod. III. 1. 2., 2. 1. Κατρεία offerentes. Ipse Diodorus L. V. 59. non aliud postulat. WESS.

304. 45. Παναθηναίων συντελουμένων] Dicebantur Ἀθήναι, quibus postea Παναθηναίων nomen factum, cum Theseus omnes agri Attici incolae in unum civitatis ius redegisset, ut testatur Pausan. VIII. 2. Adsentitur tamen Nostro Apollodor. III. 14. 7. Conf. Scaliger. in Euseb. Chron. DCCLXXXIX. et Io. Meursii Panathen. c. 3. WESS.

304. 49. Μήπως] Μήποθ Co. M. Forte rectius. Vid. Eurip. Herc. Fur. v. 42. WESS.

304. 53. Περὶ Οἰνότης τῆς Ἀττικῆς] Duplex erat Oenoe in Attica regione, altera ad Eleutheras, ad Marathonem altera. Harpocration Οἰνότης, ἣ μὲν δῆμος τῆς Ἰπποδοσωντίδος, πρὸς Ἐλευθέρας, ἣ δὲ τῆς Ἀλιαντίδος, πρὸς Μαραθῶνι. Prior hic designari videtur, quae in ipsis Boeotiae finibus Thebas ex agro Attico profecturis transitum dabat. De ea Thucydides II. 18. cum nota doctissimi Wasse. WESS.

304. 59. Ἀττικὴν καὶ τήν] Tres has voces non legit Cl. I., signatus etiam asterisco a Steph., sine caussa tamen. Vid. ad Anton. Itiner. p. 526. WESS.

305. 65. Ὁ μὲν Αἰακὸς ἐπετέλεσε τὰς ἐσχάς] Iovi Ἑλληνίῳ sive Πανελληνίῳ victimas obtulit, impetravitque, ut largior imber in Graecos deplueret, apud Pausan. II. 29. p. 179. et Schol. Pindari Od. V. 19. Nemeon. Apollodor. III. 11. 6., sed qui in caussa et origine eius sterilitatis longissime a Diodoro recedit. Porro quod praecessit, καὶ κελεύειν ὑπὲρ αὐτῶν ἐσχάς ποιήσασθαι, cultum est. Aeschin. Legat. male gest. p. 45. πρέσβεις πρὸς ὑμᾶς ἦλθον ἐκ Φωκείων, βοηθεῖν αὐτοῖς κελεύοντες. Lysias Orat. I. c. 8. ἐκέλευον συνδειπνεῖν. Habet his similibusque locis rogandi quandam potestatem. WESS.

305. 69. Εἴθ' ὁ μὲν θεὸς ἔχρησεν] Oraculum Oenomaus, qui eius caussa Apollinem, ut meruit, perstrinxit, in Eusebii L. V. Evang. Praep. c. 19. servavit. WESS.

305. 73. Δὶ ἐτῶν ἐννέα] Visum hoc fuit legitimum ob haec Plut. Thes. p. 6. D. Legati Atheniensium ἐποίησαντο συνθήκας, ὥστε πέμπειν δι' ἐννέα ἐτῶν δασμὸν ἡΐθέους ἐπὶ καὶ παρθένους τοσαύτας. quem annorum numerum mox iterum recepi, damnata Simsonii Chron. A. M. 2775. δι' ἐτῶν β' corrigentis coniectura, quippe fulcro, ut dictum alias, defecta. WESS.

305. 76. Ὁ Μίνως πολέμιῶν ἐπαύσατο τὰς Ἀθήνας] Athenas oppugnare desiit: ea enim vis verbo cum quartum adsciscit casum. Pausan. VIII. 46. Ἀγροστός Ἀντόνιον πολέμιῶν, bello adgressus Antonium, quod a peritissimo Sylburg. sollicitatum nollem. Apollodor. III. 14. 8. ἐπολέμησε στόλῳ, Minos, τὰς



'Αθήνας. Palaeophat. Hist. Incred. c. 16. ἀνὴρ Κρόσσος, ὀνόματι Ταῦρος, ἐπολέμηε τὴν Τροίαν πόλιν. Ita lego ex Ms. Oxoniensi: in vulgata enim manifestum peccatum. Aiciphron III. Ep. 22. de vulpibus, uvas infestantibus, ἐπεὶ γὰρ ἐπαύλασαν τὰς σταφυλάς. Ex Diodoro similia si desideres, vide V. 46. XIII. 43. 84. XIV. 37. XV. 19. XVI. 41. etc. WESS.

305. 83. Καθάπερ καὶ πρότερον ποιεῖν εἰώθεισαν] Mittebantur pueri puellaeque in certissimam perniciem, proptereaque navis omnia luctus argumenta praeferebat: διὸ καὶ μέλαν ἰστίον ἔχουσαν, ὡς ἐπὶ συμφορᾷ προδήλιον, τὴν ναῦν ἐπέμπου, Plutarch. Thes. p. 7. D. ait: fuisse autem in more, ut navis, quae mortuum veheret, velis, nigro colore infectis, armaretur, testis Philostratus est Heroic. VIII. 3. WESS.

305. 94. Ἀφελόμενον τοῦ Θησέως τὴν παρθένον] Haec fabula consultum egregie Herois honori est; ceteroqui non deerant, qui perfide Ariadnam, cui salutem debebat, deseruisse praedicarent in Plut. Thes. p. 8. E. Vid. infra V. 72. et Schol. Apollon. Rh. III. 996. WESS.

306. 4. Ἀναβάντα γὰρ εἰς τὴν ἀκρόπολιν] Locum arsis, unde praecipuus abiit Aegeus, distinctius signavit Pausan. I. 22. p. 52. WESS.

306. 10. Τοὺς δῆμους ὄντας μικροὺς — μεταγαγεῖν εἰς τὰς Ἀθήνας] Prudentissimum Thesei hoc consilium Thucydid. II. 15. Isoerat. Helen. Laud. p. 312. et Plut. Thes. p. 10. E. eosque secuti Io. Meurs. Thes. c. 17. et Io. Marsham. Can. Chron. p. 297. uberius exponunt. WESS.

306. 12. Διὰ τὸ βάρος τῆς πόλεως] Propter opes, potentiam atque amplitudinem: quae omnia τὸ βάρος suo ambitu complectitur. βάρος καὶ ἀξίωμα τῆς πόλεως Athenis Atticis tribuitur L. XVI. 8., et Byzantium πόλις βάρους ἔχουσα XIII. 66. Ad quem modum βάρος τοῦ οἴκου de familia locuplete et potente Plut. T. II. p. 749. E., Olynthus πόλις βαρεῖα inf. XVI. 8., Agrigentum βαρυντάτη πόλις Polyb. I. 17., Panormum βαρυντάτη πόλις τῆς τῶν Καρχηδονίων ἐπασχίας c. 38. eiusdem Lib. I. et saepe alias. Conf. L. III. 13. et 60. Polybii. WESS.

306. 18. Καὶ ποιησάμενος — συμμαχίαν] De Deucalione Minois longe diversa Plut. Thes. p. 8. D. WESS.

306. 22. Παρὰ ταῖς Αἰθρας ἀδελφοῖς] Vulgatae litem non fuisse motam, vehementer demiror: quae enim haec Aethra soror, Hippolytine an Thesei? Imo vero Aethra Thesei mater est, in cuius paternis aedibus apud maiores avunculos Hippolytus educatus fuit. Pausan. I. 22. Theseus Ἰππόλυτον πέμψαι παρὰ Πιπθέα τραγησόμενον. Auctor Argum. in Eurip. Hippol. οὐ, Τροεζενε, συνέβη τὸν Ἰππόλυτον παρὰ Πιπθεῖ τρέφεσθαι quare iuvenis infelix elegantissime Euripidis cognomine in Fab. versu 10.

— Ἰππολύτος τὸς

Ἰππολύτος, ἀγνοῦ Πιθέως παιδύματα.

Iustum itaque et optimae monetae merito censetur, quod amplexus sum. WESS.

306. 26. Ἰδούσατο ἱερὸν Ἀφροδίτης πᾶρὰ τὴν ἀκρόπολιν] Dicebatur Ἀφροδίτης ἐφ' Ἰππολύτων, teste Euripide Hippol. v. 32. et eius commentatore, quem Cl. P. Burman. illustrat Diss. Ion. Fulg. c. 8, p. 178. WESS.

306. 31. Φαίδρα μὲν φοβηθεῖσα τὸν ἔξετασμόν] Tragico cothurno magis aptam et congruentem scenam instruxit Eurip. Hippol. v. 856. 885., necem iuvenis v. 1235. illis coloribus depingens, ut curru excussum, habenis implicatum raptatumque misere videre putes. WESS.

306. 42. Παρὰ τοῖς Τροίην. ἔττυγεν ἰσοθέων etc.] Vid. Euripid. Hippol. v. 1424. et Pausan. II. 32. WESS.

306. 43. Καταστασιασθεῖς καὶ γυγῶν] A Menestheo, ut notum ex Plut. Thes. p. 15. B. et Philostr. Heroic. XIX. 3. Quod autem ibi miratur doctissimus Olearius a Io. Meursio Thes. c. 30. praeteritam fuisse Deidamiam, Thesei filiam, id ab eo scribi potuisse profecto demirabere, si Philostratum inspexeris ipse. WESS.

306. 45. Τὰ τε ὁστῶ μετήνεγκαν καὶ τιμαῖς etc.] Circa annum Olymp. LXXII. quartum, cum Seyron Cimon Miltiadis occupasset, Pausan. I. 17, et Plut. Thes. p. 17. auctoribus: quibus Io. Meurs. Thes. c. 31, et S. Petitem L. Attic. p. 12. adde, et Θεσείων satis illustratum opinaberis. WESS.

307. 58. Λεκαετῆ μὲν τὴν ἡλικίαν] Duris Samius ἑπταετῆ, cum a Theseo raperetur, fuisse tradidit, Tzetze in Lycophron. v. 143. indice; quod vero non admodum simile. Theseus quinquagesimum aetatis annum eo tempore attigerat, et spe prolis puellam id aetatis raperet? Ceteri, a Meursio Thes. c. 26. laudati, ἄωρον et necdum nobilem fuisse perhibent. WESS.

307. 70. Εἰς Ἀφίδναν] Conf. Isocrat. Laud. Helen. p. 305. Strabon. IX. p. 607. B. 609. cui Ἀφύδνα, sicuti et Homeri interpreti Iliad. Γ, 144., minus recte, si ab *Aphidno* id nomen sit. WESS.

307. 72. Φύλακας τῆς παρθένου] Honestior hic titulus optime convenit Aethrae, Aphidno ceterisque amicorum, quorum curae puellam asservendam commisit apud Plut. Thes. p. 15, B. WESS.

307. 80. Διὰ τὴν Ἡρακλέους χάριν ἀπολυθῆναι] Vide supr. c. 26., et de omni hac fabula Pausan. I. 17., eius originem, atque, ita ut dicam, cubilia recte vestigantem. WESS.

307. 88. Τὴν μητέρα Θεσέως Αἰθραν] Id fieri potuit: minus convenit, quae de *Aethra* Troiam cum Helena profecta, nec, nisi urbe eversa, Athenas reduce apud veteres fabula est. Vid. Schol. Iliad. Γ, 144. Demosth., si tamen is Orationis auctor, Laud. Funeb. p. 746. et Plut. Thes. p. 16. B. WESS.

307. 95. Τὸν γὰρ ἐξ αὐτοῦ τεκνωθέντα] Aemulatur haec Euripidis Phoenis. v. 18.

Μὴ σπεῖθε τέκνων ἄλοχα δαυμόνων βία.

Εἰ γὰρ τεκνώσεις παῖδ', ἀποκτενεῖ σ' ὁ φῶς,

Καὶ πῶς σὸς οἶκος βήσεται δι' αἵματος.

Indidem v. 25. sumta quoque putem, quae de Oedipi nomine sequuntur. WESS.

308. 5. Τὴν καθ' ἐαντὸν ὑποβολὴν] Diodori hoc esse, ut multis probem, nihil necesse videtur. Res ipsa, et quae statim succedunt, pro me pugnant. Ὑποβάλλεσθαι feminarum est, quae liberos maritis supponunt, et ex se peperisse adfirmant, quos aliunde acceptos alunt, ut in Pausan. IV. 9. p. 302.; ὑποβολὴ actus ipse: unde Athenis ὑποβολῆς γραφὴ actionis erat genus, εἴ τις ἐγκαλοῖη τινὲ ὡς ὑποβολιμαῖος εἶη, docente Grammatico in Bibl. Coislin. p. 493. Oedipum vero Corinthi in contentione quadam supposititium per contumeliam fuisse dictum, testis ipse in Sophocl. Oed. Tyr. v. 790.

Ἄνῆρ γὰρ ἐν δέλτοις μ' ὑπερπλησθεῖς μέθης,

Καλεῖ παρ' οἴνω πλαστός ὡς εἶην πατρί,

et apertius Apollodorus III. 5. 7. τελειωθεῖς δὲ ὁ παῖς, Oedipus, καὶ διαφέρων τῶν ἡλικίων ῥώμῃ, διὰ τὸ θόρον ὀνειδίζεται ὑποβλητός. Quod in editis erat, originem librariis debet, solito sibi more ἐπιβουλὴν, ἐπιβολὴν et ὑποβολὴν confundentibus. Vid. supr. I. 4. WESS.

308. 7. Κατὰ δὲ τὴν Φωκίδα] Iterum ex Eurip. Phoenis. v. 37. WESS.

308. 11. Στήγῃα, δήμερον θηρίων] Nec protrita neque tralatitia sunt, quae de Sphinge eruditissimus S. Bochart. I. Phal. c. 16. p. 433. disputavit. WESS.

308. 26. Γενῆσαι δύο μὲν υἱούς, Ἐτεοκλέα etc.] Ex Eurip. Phoenis. v. 55., ubi vetus interpres ex Pherecyde longe diversa: alia quoque Pausan. IX. 4. p. 741. Quae mox de Oedipode, ne domo prodiret, a filiis prohibito, adduntur, congruunt eiusdem Fabulae v. 64. WESS.

308. 33. Προσβυτέρου δ' ἦντος Ἐτεοκλέους] Sophocli Oed. Colon. v. 1290. Eteocles γύσει νεώτερος natus minimus est. Diodorus duces suos Euripid. sequitur Phoenis. v. 71. WESS.

308. 39. Τοὺς ἀνεψιούς ἀνελόντα] In hac parte veteris historiae turbae sunt ingentes. Apollodor. I. 8. 5. esse ait, qui Alcathoum patrum interfecisse memorent: alios tradere, Melanis patrum iugulasse filios, quos inter neque Alcathous nec Lycopoeus tamen: Pherecydem docere, contrucidasse Tydem fratrem Oleonium. Atque hunc forte auctorem habuit Statius I. Theb. v. 402. et II. 113. *fraterno sanguine pollutum* canens, quamquam de Menalippo, fratre eius, accipit Lutatius, sibi parum constans et de Toxeo, eiusdem, ut ait, fratre, similia notans Theb. I. 282.

Magis haec Scholiastae Homeri Iliad.  $\Xi$ , 119. miscerent et turbarent, *Τυδεὺς γὰρ ἀνελὼν Λυκοπέα καὶ Ἀλκίδαθον, ἕαντοῦ παῖδας, ἔφηνεν*, nisi ipse se corrigeret, et fratres patruelles, Agrii filios, ab eo interemptos adderet: vel sic tamen opinor, Criticum eum priorum commentaria parum considerate excerpisse, Alcathoumaque et Lycopoeum Tydei filios fecisse, qui patruelles erant; id a me inpetrant haec Eustath. p. 971. *οὗτος Λυκοπέα καὶ Ἀλκίδαθον ἀνεψιοὺς ἐπιβολεόντας τῷ πατρὶ Οἰνεῖ ἀπέκτεινεν ἐν ἀγρῷ, καὶ σὺν αὐτοῖς ἄκτων τὸν πατρῷον Μέλαντα* quae doctissimi praesulis id quoque ostendunt, cum Diodoro interpretes Homeri fecisse. WESS.

309. 42. *Κατὰ τι λόγιον συνοικίσαι*] Verba oraculi si requiras, dabunt veteres Critici ad Euripid. Phoenis. v. 416. WESS.

309. 50. *Ἐνταῦθα φασὶ τὸν μὲν Τυδέα ἐρεδρευθέντα etc.*] *In his verbis facile est deprehensu, nomen Τυδέα perperam pro Πολυκείην positum. Utique Polynices fuit, non Tydeus, (qui proditor exstiterat) insidiis Eteoclis tentatus; at mirifice servatus, caesis quinquaginta illis, qui in insidiis ab Eteocle fuerant locati. Polynices, inquam, fuit, quem insidiis circumvenire gestiebat Eteocles, ne regno forte pelleretur ab illo reduce. Satis id clarum puto, si totius narrationis περίοδος recte consideretur.* Haec Cl. Io. Iensius Epist. ad Graev. p. 413., sed quae ἀρήρητα ἀμείνω. Ego illis nihil reponam, nisi haec Apollodori III. 6. 5. *πέμπουσι Τυδέα προεροῦντα Ἐτεοκλεῖ τὴν βασιλείαν παραχωρεῖν Πολυκείη, καθὰ συνέθετο* et post pauca: *οἱ δὲ πενήκοντα ἄνδρας ὀπλίσαντες ἀπιόντα ἐνήδρευσαν αὐτόν.* WESS.

309. 56. *Παρθενοπαῖον τὸν Ἀταλάντης τῆς Σχοινέως*] Diodoro adstipulatur Apollodor. III. 9. 2.; Iasi filiam Parthenopaei matrem Schol. Eurip. Phoenis. v. 152. facit, cumque eo alii. Vide Bernart. ad Statii Theb. IV. 248. WESS.

309. 62. *Ὅν Ἀφροδίτην μυθολογοῦσιν Ἀρμονίᾳ δωρήσασθαι*] Diu in dubio fuit animus, retineretne Ἀθηναῖαν an reciperet Ἀφροδίτην nam Barthii coniectura ὃν τὴν Ἀτην, quam ad Statii Theb. II. 269. proiecit, et ratione caret et tanto viro indigna est. Tandem Venus vicit, tum quod auctor ipse c. 68. illi acceptum referat dirum id monile, et Grammatici veteres consentiant: quorum Pindari interpretes ad extremam Od. III. Pythion. *τῷ δὲ Κάδμῳ γαμοῦντι τὴν Ἀρμονίαν ἢ Ἀφροδίτην χρυσοῦν ὄρμον ἐδώρησατο.* Statii vero Theb. II. 266. *a Vulcano Veneri fabricatum deinde Harmonies fuisse.* Habet tamen et Minerva in Diodoro patronum, ut L. V. c. 49. videbitur: quae discordia fortasse nata est, quod Venus monile, Minerva pepulum Harmoniae dederit, utraque vero deinceps ab aliis coniuncta commixtaque sint: id colligo ex Schol. Eurip. Phoenis. v. 71., ubi de utroque munere, Harmoniae dato, *ὃν τὸν μὲν ὄρμον Ἀφροδίτη,*

τὸν δὲ χιτῶνα Ἀθηνᾶ ἔχαρισατο. Sic enim ea legi oportere, nemo, qui attentius locum inspexerit, inficiabitur. WESS.

309. 65. Στασιάζοντος περὶ τῆς βασιλείας] Caussam et originem contentionis eius declarant Pindarus Od. IX. 30. Nemeonic. et Apollodor. III. 6. 2. WESS.

309. 73. Ἀλκμαίωρι] Vaticani libri Ἀλκμείωρι in Ἀλκμείωρι mutatum recipiendum duxi. Duae enim huius nominis formae sunt, Ἀλκμαίωρος et Ἀλκμείωρος, ut Ἀκταίωρος et Ἀκτέωρος, quod infra c. 81. s. ab me restitutum. Ac falluntur qui recte scripta Ἀλκμαίωρίς Ἀλκμειωρίδαι tanquam vitiosa corrigunt Bentleius Epist. ad Mill. p. 19., Fiorillo ad Herod. p. 90., editores quidam Pausaniae II. 18. 9., Strabonis I. X. p. 695. A., Schol. Aristoph. Nub. v. 64. Neque Apollodori II. 4. 4. τοῦ δ' Ἀκταίωρος πρώτοι γάγον, aut τοῦ aut Ἀκταίωρος idonea quis auctoritate poetae tribuerit, quem credo potius forma Ἀκταῖος usum esse, οἵτοι δ' Ἀκταίων πρώτοι γάγον, quae etiam paullo ante ab emendatore expulsa est. Ita dicitur Ἀστερίος et Ἀστερίων, Ἰάσιος et Ἰασίων, Ἀύζος et Ἀύζων. Choeroboseo autem (Bekkeri Anecd. p. 1313.) unum Ἀκταίωρος probanti periit nuper locus Euripidis Bacch. v. 377., ubi duo vel tres libri recte Ἀκτέωρος.

309. 82. Διὰ τῆς κλίμακος ἐπὶ τὸ τῆχος ἀναβυίνων] Fulmine percussus in praeceps ruit, ut elegantissime audacissimi hominis casum describit Euripid. Phoenis. v. 1180. Fabulae originem Fl. Vegetius IV. R. M. 21. ostendit, sed qui, inquit, scalis nituntur, frequenter periculum sustinent, exemplo Caranei, a quo primum scalarum oppugnatio perhibetur inventa: qui tanta vi occisus est a Thebanis, ut extinctus fulmine diceretur. WESS.

310. 85. Ἄφαντος ἐγένετο] Non moveor auctoritate Clar. 1., ut hoc sede sua evertam. De Hespero L. III. 60. ὑπὸ πνευμάτων συναρπαγέντα μεγάλων ἄφαντον γενέσθαι. Similiter de Aristaeo IV. 84. περὶ δὲ τὸ ὄρος τὸ καλούμενον Αἴμον — ἄφαντον γενέσθαι. Pindarus Od. I. 72. Olymp. raptum Ganymedem compellans ὡς δ' ἄφαντος ἐπέλες etc. quae exempla eos cum describant, qui hominum conspectui eripiuntur, satis utique adparet, quid velint S. Lucae Ev. XXIV. 31. καὶ αὐτὸς ἄφαντος ἐγένετο ἀπ' αὐτῶν. WESS.

310. 88. Τὴν ἀναφρασει τῶν νεκρῶν οὐ συνεχώρησαν] Id quidem satis nefarium et communibus hominum moribus contrarium erat, uti egregie III. H. Grotius II. I. B. et P. 19. condofecit. WESS.

310. 93. Πάντας τοὺς — ἔθαψαν] Pactone an bello ius sepeliendi a Thebanis sit obtentum, scriptoribus non convenit. Bellum gloriae civitatis magis congruens Attici scriptores Eurip. Suppl. v. 591. Isocrates Paneg. p. 75. Apollodor. III. 7. 1. eos-

que secutus Pausan. I. 39. elegerunt; pacto rem transactam adfirmat Plut. Thes. p. 14. A. WESS.

310. 96. Ἐπίγονοι ὀνομασθέντες] Sollemne hoc VII. ducum filiis cognomen fuit: Apollodor. III. 7. 2. μετὰ δὲ ἔτη δέκα οἱ τῶν ἀπολομένων παῖδες, κληθέντες ΕΠΙΓΟΝΟΙ etc. Conf. Pindar. Od. VIII. 61. Pythion. Strabon. VII. p. 501. C. IX. p. 632. B. Pausan. IX. 9. X. 10. p. 822. et infr. L. XIX. 53. WESS.

310. 99. Πολεμεῖν τὴν προειρημένην πόλιν] Vid. supr. c. 62. WESS.

310. 11. Τὸν δὲ πέπλον παρὰ τοῦ νιόυ τοῦ Πολυνείκου] Hoc verius, quam Apollod. III. 7. 2. λαβοῦσα παρὰ Θερασάνδρου τοῦ Πολυνείκου τὸν ὄρμον καὶ τὸν πέπλον. fatale enim monile Eriphyle a Polynice acceperat δῶρον ἐπὶ τῷ ἀνδρὶ, ut Pausan. IX. 41. scribit, et c. 67. Noster. WESS.

310. 19. Συνετριβήσαν ταῖς ἐλπίσιν] Infr. XVI. 60. οἱ δὲ Φωκεῖς συνετριβέντες ταῖς ἐλπίσιν. Spes fractior apud Ciceron., et alia de hoc genere, eo loci considerabuntur. WESS.

311. 25. Τιλφωσσαῖον] Sequor schedas Mutin. Harpocrat. Τιλφωσσαῖον, Δημοσθένει κατ' Ἀισχίνου (p. 230. 232.) ὕψος ἐστὶ μικρὸν ἀπέχον τῆς λίμνης τῆς Κωπαΐδος. Demosthenem sectatur Aristides T. II. p. 255. At Strabo montem Τιλφώσσιον, fontemque ex eius pede ebullientem Τιλφῶσσαν vocat IX. p. 630. B., Τιλφούσιαν Apollod. III. 7. 3. fontem; Τιλφώσιον montem infr. XIX. 54. Diodorus; Τιλφούσαν et Τιλφούσιον Paus. IX. 33. cum Sylburg. nota. WESS.

311. 28. Ἀκροθίνιον τῷ Θεῷ] Schol. Apollon. I. 308. ὑπὸ τῶν Ἐπιγόνων ἀκροθίνιον ἀνετέθη Μαρτῶ ἢ Τειρεσίον θυγάτηρ εἰς Δελφούς πεμφθεῖσα. Sic enim plerique omnes adpellant, Apollod. III. 7. 4., Pausan. VII. 3. IX. 33. Vid. ad priorem locum doctissimum Kuhnium et Barthium in Statii Theb. IV. 464. WESS.

311. 33. Τὸν ποιητὴν Ὀμηρον] Homeri nomen manifestum hic esse glossema, quod putidum faciat sermonem, contendit ad Stat. Theb. IV. 464. repetitque idem decretum ad Theb. VII. 701. doctissimus Barthius, ut id nomen auferat Nostri L. XVIII. 1. Mihi omnia alia placent. Tametsi enim saepe ὁ ποιητῆς nuncupetur, non uni is haesit titulus, videturque temerarium contra scriptos Codd. Ὀμήρου vocabulum ubique auferre. Habuimus τὸν ποιητὴν Ὀμηρον I. 69. et Ὀμηρον τὸν ποιητὴν c. 96. et infr. c. 77. ποιητῆς Ὀμηρος Palaephat. p. 66. Lucian. Astrol. c. 22. Diogenian. apud Euseb. VI. Praep. Evang. c. 8. p. 262. atque alii. Conf. tamen Hoerschel. ad Photium p. 981. WESS.

311. 37. Τὰ γὰρ ἐνθεάζειν κατὰ γλῶσσαν ὑπόρχειν σιβυλλαίνειν] Posteriorius haud multum discrepat a σιβυλλαῖν, quod

explicant veteres Critici ad Aristoph. Equit. v. 61., estque furentis Sibyllae, cui,

— — *Non vultus, non color unus,*

*Non comae mansere comae; sed pectus anhelum,*

*Et rabie fera corda tument:*

ut de furibunda vate Virgil. Aen. VI. 47. Eadem vis inest τῷ ἐνθεάζειν; eorum quippe, qui deo, ut videri volebant, pleni, futura canunt. Herodot. I. 63. de Aearnane ariolo, ὁ μὲν δὴ οἱ ἐνθεάζων χρᾶ τάδε. Apollodorus II. 8. 3. ἐράνη γὰρ αὐτοῖς μάντις χρησμοῦς λέγων καὶ ἐνθεάζων. Lucian. Alexand. c. 13. ὡσπερ οἱ τῆ μητρὶ ἀγείροντες καὶ ἐνθεάζοντες. hoc genus enim, prorsus ut ibi Alexander, *quatere flexibile caput*, quemadmodum Maeccenas ait apud Atilium Fortunatian. p. 2677., sive ἀσθμαίνειν καὶ περιδινεῖν τὴν κεφαλὴν in Dion. Chrysost. Orat. I. p. 12. A., solebat. Iam κατὰ γλωσσοῦσαν quod inquit, idem erit, sive tu cum Rhodom. malucris *quadam Graecorum dialecto*, sive Io. Alb. Fabric. I. Bibl. Gr. IV. 5. secutus, *veteri aut insolentiore vocabulo*. Saepe enim γλωσσοῦσα de vocibus, uni genti propriis. Aristotel. Poëtic. c. 21. λέγω δὲ κύριον μὲν, ὃ χρῶνται ἕκαστοι. γλωτταν δὲ, ὃ ἕτεροι. et τὸ γὰρ σίγνον Κυπρίοις μὲν κύριον, ἡμῶν δὲ γλωττα. qua de vocabuli potestate plura ne addam, facit egregia Iac. Ph. Maussaci in Dissert. Critic. ad Harpocrat. p. 389. et Th. Gatak. in Imp. Antonini L. IV. 33. diligentia. WESS.

311. 42. *Τειρεσίας μὲν ἐτελεύτησεν*] Conf. Pausan. VII. 3. IX. 19. WESS.

311. 48. *Θήβας*] Ἀθήνας Mut. qui lapsus proclivis. Vid. Scalig. in Euseb. Chron. n. DCCCX. WESS.

311. 51. *Καὶ Κυτινίῳ καὶ Ἐββοίῳ*] Dores nunquam Euboeam habitavere, et est mendum. Lege καὶ ἐν Βοίῳ. Doriensium tetrapolis quatuor urbibus celebris erat, Erineo, Pindo, Boeo et Cytinio. Vide Thucydidem L. I. 107. Scymnum Chium versu 593. Strabonem L. IX. p. 654. A. Plinium L. IV. 7. Aristidem Leuetrica II. p. 147. Stephanum et alios. Fuit autem facilis lapsus ex ἐν Βοίῳ in Ἐββοίῳ. PALM. *Καὶ Κυτινίῳ καὶ Βοίῳ*] Verterat Rhod. vulgatum *Erineumque et Cytinium Boeotiae Euboeaeque partem inhabitaverunt*: unde Barthius ad Theb. IV. 753. Statii, καὶ Κυτινίῳ τῆς Βοιωτίας. — *Ita enim verba recte legit et interpretatur Laurentius Rhodomannus. Erineum enim Dorica civitas in Boeotia sita fuit, sub ipsum montem Musicum collocata. Stephanus, Ἐρινεὸς πόλις Δωριέων ἐπὶ τὸν Παινασσόν. Cytinium autem cum Erineo vicina eidem monti oppida agnoscit Strabo L. X. Nimis profecto calide. Quod coniectura adsecutus erat sagacissimus Palmerius et scripti libri probant, id verissimum est. Contigit enim fato quodam, ut in urbium harum nominibus inpune grassaretur librariorum natio. Exemplo sit Connon Narrat. XXVII. Δῶρος δ' ὁ δεύτερος inquit — ἐπὶ τὸν*

Παρθενὸν τὸ ὄρος κτίζει πόλεις Βοιῶν, Κτίριον, Ἐρινεὸν, ἔξ ὧν Ἐωριεῖς. Longe vero flagitiosius rem suam administrarunt infr. L. XI. 79. Κεντίριον καὶ Ἐρίβριον καὶ Ἐριναῖον nobis exstruentes; id vero alias eradicabimus. Tu vide Is. Casaub. in Strabon. IX. p. 654. A. X. p. 729. A. et Ti. Hemsterh. ad Plut. Aristophan. p. 117. WESS.

311. 55. Προσαναδραμιόντας τοῖς χρόνοις] Haud scio an non legendum sit προσαναδραμιόντας, regressos ad superiora tempora. RHOD. Indice v. προσαναδρ. Conf. supr. c. 62. WESS.

311. 61. Τούτου δὲ Ἄρη θυγάτηρ γενομένη Βοιωτῶν etc.] Habet Arnen Aeoli filiam Pausan. IX. 40. p. 793., e qua et Neptuno Bocotum furtivis amoribus satum prodant Schol. in Iliad. B, 494. Eustath. in Dionys. Perieg. v. 426. et praeter ceteros Euphorion apud Stephan. Βοιωτία. Ceteri, Euripide in cognomine Fabula praecunte, Melanippae, quam Neptunus compresserat, Bocotum dant filium, unde nomen Boeotiae, Strabo VI. p. 406. C. et Diodorus ipse XIX. 53. WESS.

311. 64. Μεταποντίω ξένῳ] Straboni Μετάποντος, urbis eodem in Italia nomine conditor, et Hygino F. CLXXXVI., sed dissentienti in multis. WESS.

312. 69. Υἱοποιήσατο] Υἱοὺς ἐποίησατο Co. M. V. satis eleganter. Vulgatum habes c. 40. WESS.

312. 78. Ὀνομαζομένην ἀπ' αὐτοῦ] Credo ὑπ' αὐτοῦ olim fuisse: neque enim ex suo nomine Liparam appellavit. Vid. infr. L. V. 7. WESS.

312. 80. Καὶ τεκνωθεὶς ὑπ' αὐτοῦ] Et ab eo in filii locum adscitus. quae verbi eius potestas rarior confirmatur τεκνώσσειος vocabulo, de adoptione posito c. 40.; altera, qua τεκνώσσειο parentes, liberi τεκνωθῆναι, cum gignuntur, perhibentur, multo omnium in hoc scriptore tritissima est. Habent et Lycophron. v. 963. et Plutarchi. Thes. p. 3. B. aliique. WESS.

312. 83. Βοιωτοῦ δὲ Ἴτωνος γενόμενος] Alia omnia Pausan. IX. 1. cui Itonus Amphictyonis, Itoni filius Boeotus; quod stemma non improbat Schol. in Iliad. B, 495. Necdum vero constitutum habeo, sitne Ἡππαλκίμω ex optimis schedis Hippodamus nuncupandus? Non enim hominem bene novi, nisi forte Hippalcimus sit, quem inter Argonautas recensent, sed cuius parentes alii apud Hygin. Fab. XIV. Habet inter eosdem Argonautas Apollod. I. 9. 16. Πηγέλεων Ἰππαλκίμων, Ἀγίτων Ἀλέκτορος. qui nostri erunt, modo Ἰππαλκίμων et Ἀλεκτορόρος refinxeris. Posteriorius Homerus Iliad. P, 602. expostulat, negandumque Diodoro haud foret, si Codd. addicerent. Itoni nepotes, ad Troiam profectos, Poeta eo, quem primum signavi, loco memorat: quorum Clonius ex Grammaticorum apud Eustath. p. 264. decreto Κλονίος scribendus erit. Vid. et Muncker. in Hygin. F. XCVII. WESS.



312. 93. Υἱὸς ἦν τοῦ Ἑλληνος Αἰόλου] Salmonca non Hellenis, sed Aeoli filium esse ex Apollodori L. I. 7. 3. Strab. VIII. p. 5-17. Eustath. Parecholis in Odys. XI. p. 1681. constat. Scribe igitur υἱὸς Αἰόλου τοῦ Ἑλληνος. RHOD. Υἱὸς Αἰόλου τοῦ Ἑλληνος] Restitui, quod auctor ipse dederat: atque id si plurimum auctoritate constabilitum videre aues, confer T. Hemsterh. in Luciani Haleyon. c. 1. WESS.

312. 96. Σαλμωνίαν] Strabonem VIII. p. 545. B. secuti Stephanus et Eustath. in Homer. p. 1682. *Salmonem* vocant. WESS.

312. 99. Τὴν ὀνομαζομένην Σιδηρῶ] Hoc iustum et Scalligeri coniectura munitum est. Sophocles in Rhetor. II. p. 110. Aristotelis,

Σαφῶς Σιδηρῶ καὶ φοροῦσα τοῦνομα.

Latet id nomen, ut alias monui, in his Apollodori I. 9. 8. καὶ τὴν μητροῖαν ἀπέκτεινον, Pelias et Neleus, σιδίρω. et Tzetz. in Lycophron. v. 174. καὶ τὴν ἐκείνης μητροῖαν κτείρουσι σιδίρω, καίπερ φηγοῦσαν ἐν τῷ τῆς Ἥρας τεμένει. Scripserat enim uterque Σιδηρῶ. WESS.

313. 4. Μυγῆς, ἐγέννησε] Interpone ὁ Ποσειδῶν. Id enim ex Homeri Odys. XI. 240. satis certum est. RHOD. Mancus est hic locus, et post *μυγῆς* deest nomen patris Peliae. Supple ex omnibus auctoribus antiquis *μυγῆς Ποσειδῶν*. Fuit enim Neptunus Peliae et Nelei pater ex Tyro Salmonei filia secundum fabulam: at secundum veritatem Cretheus, eius Tyrus avunculus, apud quem educabatur. PALM.

313. 10. Παραλαβὼν δὲ Μελάμποδα] Et rursus hic locus hiat. Lege *παραλαβὼν δὲ Νηλεὺς Μελάμποδα* ex historia seu fabula. Nam et Bias filiam Nelei duxit uxorem, Pero vocitatum. PALM. *Παραλαβὼν δὲ Νηλεὺς Μελάμποδα*] Optime coniecisse Palmerium schedae Coislin. conmonstrant, et res ipsa. Neleum enim haec spectare, non Peliam, ea, quae succedunt, clare docent. De matre autem Melampodis non convenit Diodoro et Apollodoro, cui *Idomene*, Abantis F., L. II. 2. 2. WESS.

313. 19. Γίμυς δὲ Ἰφιάνειραν τὴν Μεγαπένθους] Diligentissimus Simson. ad A. M. 2694. deesse hic vocabulum scribendumque τὴν Μεγαπένθους ἀδελφὴν arbitratur: Proeti enim filiam, Megapenthis sororem, matrimonio sibi Melampodem iunxisse. Quod posterius certissimum si foret, ellipsi fortasse succurri posset Diodoro, rariore quidem, nec inusitata tamen. *Τιμοζοῦτης ὁ Μητροδόωρον* dicitur Aleiphroni L. II. Ep. 2. qui eius frater fuit, teste Diogene X. 23.; *Ἰάκωβος Ἀλφραίου* S. Lucae A. A. 1. 13. eiusdem frater. Verum ea non utor. Apollodorus Proeti filiam *Iphianassam* Melampodi uxorem dat, furore ab eodem liberatam, L. II. 2. 2. Dissentit ergo et in feminae nomine et in tempore, quo res gesta. Noster Anaxagorae aetate, qui Proeti nepos, aut, ut Pausanias II. 18., pronepos fuit, mulieres Argivas a

Baccho in furorem actas adfirmat: estque adeo verosimilius goraе sororem, quam aviam, Melampodem duxisse. Nihil immuto. Conf. Cel. Iac. Perizon. in Aeliani III. V. II. 42. WESS.

313. 20. Ἐτι δὲ Βίαντα] Hæc mendosa sunt, ut sæpe in nominibus propriis. Lege ἔτι δὲ Ἀβαντα ex Apollonio Apollodoro etiam L. I. 9. 13. et Pausania in Atticis c. 43.

313. 23. Ὑπερμνήστρας τῆς Θεσπίου] Lege Θεσπία Apollodoro I. 7. 10., Hygino cap. 70. et 250. PALM. Ultra sollertissimi coniectura cum vero ita concordat, ut, nisi scribri contra venirent, singulas recepissem: naeta etiam jam est laudatores Muncker. in Hygin. Fab. LXX. et Iac. Perizon. eiusdem Fab. XIV. Habet tamen in Thespio patronos Iac. Criticos veteres in Apollon. I. 149., Ledam et Althæeam et filias nuncupantes, quas Thestio patre progenitas et Hypermetas sorores fuisse ex Apollod. I. 7. 10. et Hygino Fab. XLII. constat. Sed et illi vitii immunes non videntur. WESS.

313. 27. Εἰς Μεσσήνην, πόλιν ἔκτισε Πύλον] Apollodorus tur Diodorus eorum sententiae, qui Pylum Messeniæ cum Pylæ rhyphasium patriam Nestori adsignant, aliis in diversa districtibus. Conf. Strab. VIII. p. 523. A. et 529. A. Pausan. I. 1. et Schol. in Pindari Od. VI. 35. Pyth. WESS.

313. 29. Χλωρίν τὴν Ἀμφιόρος τοῦ Θηβαίου] Mutaretur Χλωρίν τοῦ Ἀμφιόρος τοῦ Θηβαίου. Sed hoc de Homero, qui Odysseæ 282. eam Chlorim Amphionem filiam facit, sed non Thebani, verum Orchomenii Iasidæ sequuntur Strabo et Pausanias. Ergo pro Θηβαίου scribitur PALM. Hic virum doctissimum non sequor. Strabo quidam vet. Orchomeniam Chloridis originem his designans I. 534. sed corruptioribus verbis: ἔχει δ' ἡ ἐπιμύθησις ἀφοροῦσας. εἶτ' ἀπὸ τῶν μετὰ Χλωρίδος τῆς Νέστορος ἐλθόντων ἐξ Ὀρχομενοῦ τοῦ Μινυαίου ἐλθόντων Μινυαίων Ἀργοναυτῶν ἀπόγονοι ὄντες, ἐκ Αἰγύπτου μὲν εἰς Ἀνατολίαν ἐξέπεσον. Apertum est alterum ἐλθόντων esse superfluum quod et ab Eustath. in Homer. p. 800. lectum non est. Basil. exulat: ut non immerito id delendum censuerit. Exercitat. p. 306., locum refingens in hunc modum, τῆς Χλωρίδος μετρώσας, ἢ ἐξ Ὀρχομενοῦ. Idem et ego probarem, si sententia auxilio huius emendationis constaret, quod seculis conspicuum videtur: nam et Orchomenia Chloridis origo in Strabo aufertur, et Minyæ, Argonautarum posteri, et Orchomenia insula Lemno Lacedæmonem deducuntur, vetante Gergonem ex sola Lemno eos arcessente. Vide ergo, opportunius sententiam, postremum ἐλθόντων si pravum et in εἶτ' ἀπὸ τῶν ἀποφαινομένων tendendum decernatur. Mihi quidem certe id unice placet: prolixius ne nunc confirmem, res per se satis liquida et lucida videntur. De ea sic Pausan. IX. 36. Νηλεὺς — — γυνὴ

χορομενοῦ Ἄσπιον. Ἀμφίονος τοῦ Πλασίον. Sed vitiose. Recte Sylburg. secutus Hartungum Χλωρίον, et Palmer. Exercit. p. 431. Πλασίον emendant. Quare si Straboni et Pausaniae Poetaeque Homero auscultandum, iustissima foret Palmerii, Diodorum adiuvantis, correctio. Obstant tamen veterum aliqui, Homerum deserentis. Ipse Pausanias, qui Chloridi avum Iasium dedit, Niobe et Amphione Thebano natam significat L. V. 16. ὅτι Χλωρίς νικήσεν Ἀμφίονος θυγάτηρ μόνη ληψθεῖσα (lege λειψθεῖσα) τοῦ πατρὸς. Et clarius Apollodorus III. 5. 6. Qui si errarunt, non unus quique Diodorus erroris arguendus erat a Th. Galaeo ad Apollod. 9. 9. Iam si Chloridis liberorum nomina et numerum scire deberes, confer Schol. in Apollon. Rhod. I. 156. WESS.

313. 22. Οὐκίλλης] Ἰουκίλλης St. m. aliique frequenti peccato rariorum, de quo Sylburg. ad Pausan. VI. 17. p. 494. WESS.

313. 25. Βασιλείας μετέσχορον St. m. aliique, quod rectum. l. Herodot. IX. 33. WESS.

313. 36. Ποταμῶν ἐπώνυμοι] Qui fluvii nomina fecerunt. παῖδες ποταμῶν ἐπώνυμοι c. 74. et ἱερὸν παρὰ τοῖς Ἰουκίλλης ἐπώνυμον Ἀφροδίτης Κτησέλλης in Antonino Liber. c. 1. ad genus uberius alias explicui. Adde T. Hemsterhus. in Lucian. D. Mar. IX. 1. WESS.

314. 39. Στίλβην] Στίλβην Pogg. St. m. et Cl. prave, ut sol. Apollon. I. 42. docent. WESS.

314. 45. Ἀπὸ Λαπίθου Λαπίθαι] Vide Stephan. Byzantium in Λαπίθῃ, qui Periphantem Lapithae patrem fuisse perit. WESS.

314. 49. Τῆς ἐν Ἠλιδι βασιλείας μετέδωκεν] Phorbas laticulis inde in Rhodum concessit infr. V. 58. Filius Actor quae posterius regni in Elide consortes sunt apud Pausan. V. 1. 77. WESS.

314. 54. Ἀρτίων — ἐγέννησεν Τξίωνα] Pater Ixionis muldis describitur. Schol. Pindari Pythion. O. H. 40. τὸν δὲ πατέρα, οἱ μὲν Ἀρτίωνος γενεαλογοῦσιν, ὡς Αἰσχύλος. Φερεσίδης δὲ, Πείσανδος ἔνιοι δὲ, Ἄφροδος οἱ δὲ Φλεγέα quae bona fuerint, vitium est in his Schol. Apollon. III. 62. Φλεγέου δὲ Τξίων, ὡς καὶ Εὐριπίδης. Φλεγέου νιὲ δέσποτος Τξίων. (Interiit id poetae fragmentum Barnes.) Φερεσιδῆος δὲ, Αἰτω- Scribi enim debuerat Πείσανδος. nisi forte olim fuerit, Φερεσίδης δὲ, Πείσανδος. Αἰσχύλος Ἀρτίωνος. quod suspicor. WESS.

314. 55. Ὑποσχόμενος ἔδρα πολλά δάσσειν Ἡσιονεῖ] Non discordia in nomine patris Diae reperitur: neque ullus taceat, qui Hesioneum aut Isioneum nominarit. Scripserat Dioscorus Ἡσιονεῖ et Ἡσιονεῶς, quomodo Schol. Apollonii III. 62. et Hesychius Chil. IX. 273. Vidit hoc Thom. Muncker., quem consule ad Lucian. in F. CLV. p. 227. et viros doctos in Lucian. D. D. VI. 1. Quae proci olim sponsis earumque parentibus

congerebant, Gisb. Cuper. I. Observ. c. 20. et Iac. Perizon. Dissert. Triad. p. 112. WESS.

314. 59. Τὰς Ἰππους ἀντὶ τούτων ἠνεχέρωσε ] ἠνεχέρωσεν legendum videtur. Utrum vero τὰς an τοὺς Ἰππους legas, quid refert? RHOD. ἠνεχέρωσεν ] Conf. Ezech. Spanh. in Aristoph. Plut. v. 451. WESS.

314. 63. Μηδένα δύνασθαι καθᾶραι τὸν γόνον ] Haud male βούλεσθαι Mut. et Clar.; Schol. Apollon. III. 62. καὶ οὐδείς αὐτὸν ἤθελεν ἀγνίσει οὔτε θεῶν οὔτε ἀνθρώπων. πρῶτος γὰρ ἐμφύλιον ἀνδρα ἀπέκτεινε. Hinc explicandus Aeschyl. Eumen. v. 721.

Ἡ καὶ πατήρ τι σφάλλεται βουλευμάτων,  
Πρωτοκτόνοισι προστροπαῖς Ἰξίονος;

Adde vers. 444. et Schol. Pind. O. II. 40. Python. WESS.

314. 72. Τοὺς δὲ Κενταύρους etc.] Fabulam elegantissimis versibus exponit Pindarus Pyth. O. II. 82. et eius interpretes Graeci cum Palaephato H. I. c. 1. WESS.

315. 83. Ἰπποδάμειαν τοῦ Βύστου] Lege τὴν Βούτου. Auctor brevium Scholiorum ad Homerum Iliad. A, 263. Genus ab eo Buto fuit inclutum Athenis Βοντιάδαι. PALM. Laudo Palmer., Butae filiam scholiastes Hippodamiam, quae Plut. Thes. p. 14. C. Deidamia non sine quodam errore, manifesto perhibet: quamquam alio loco Odys. Φ, 295. patre *Adrasto*, seu potius *Atrece*, ut Barnes. corrigat, natam adfirmat: eum vide et Thom. Muncker. Hygin. F. XXXIII. WESS.

315. 90. Στρατευσάντων ἐπὶ τοὺς Λαπ., καὶ πολλοὺς ἀνελόντων] Locus mancus est, et deest aliquid post ἀνελόντων. Nam Centaurei, non Lapithae, Pholoën aufugerunt. Videtur tale quid deesse: τέλος δὲ μεγάλης μάχης νικηθέντων ἐπὶ Λαπιθῶν τοὺς ὑπολειφθέντας etc. PALM. Recte animadvertit vir doctissimus mancam hiare orationem. Audi Schol. Pindari Pyth. O. II. 82. πολλῶν δὲ ἀναιρεθέντων ἐκ τῶν Κενταύρων, οἱ περιλειφθέντες εἰς τὴν Φλόην (Φολόην) ἀπέφυγον. Caesi ergo Centaurei sunt, et fugere in Pholoën versus adacti. Medicina tamen, quam loco facit, nimia merito censetur. Vide leniusne multo futurum sit, ὧν πολλοὺς αὐτῶν ἀνελόντων, qui, Lapithae, cum plures eorum obtuncassent, quos fortuna etc. Sed hoc divinare et longe incertissimum est. Loci sententia constat, non scriptura. WESS.

315. 92. Τινὰς δὲ εἰς Μαλέαν ἐκπεσόντας etc.] Hoc praestat ob ea, quae praecedunt et proxime consequuntur. Schol. Homeri Iliad. A, 263. ὄφεν οἱ Λαπίθαι συστάδην μαχεσάμενοι, διώκουσιν αὐτοὺς εἰς Μάλεον (lege Μαλέαν) ὄρος τῆς Πελοποννήσου. WESS.

315. 99. Καὶ Κορωνίδος] Eusebii Φορωνίδος pravum est, atque a P. Leopard. II. Emend. c. 9. proscriptum. Diodorus infr. L. V. 75., etsi alii aliam Aesculapio matrem tribuant apud Pau-

san. II. 26. et Schol. Pindari O. III. 14. Pythion. Meibomium vide in Hippocrat. Iusiurand. c. 5. WESS.

315. 8. Ὡς τῆς ἐπαρχίας αὐτοῦ ταπεινουμένης] Haec vulgus: Pindarus ob turpe lucri studium fulmine percussus canit O. III. Pyth. v. 97. WESS.

315. 15. Θητεῦσαι παρ' ἀνθρώπων] Eusebianum παρ' Ἀδμήτῳ eruditissimus P. Leopardus II. Emend. c. 9. melius censet; cui fabula favet, ipseque Diodor. in Excerpt. Vales. p. 222. ὥστε τὸν Ἀπόλλωνα προσκόμματα Αἰῖ, δοθῆναι θητεῦειν παρὰ τὸν Ἀδμήτῳ, seu, quod verius arbitror, παρὰ τῷ Ἀδμήτῳ. Nec sequor tamen. Vetat concurs Codd. consensus, et Apollo apud Euripid. Alceest. v. 5.

Ὁ δὲ χολωθεῖς τέκτονας δίου πυρὸς  
Κτείνω Κύνλωπας. καί με θητεῦειν πατῆρ  
Θρητῶ παρ' ἀνδρὶ τῶνδ' ἄποιν' ἠνάγκασεν.

Eius enim παρ' ἀνδρὶ θρητῶ nostri παρ' ἀνθρώπων simillimum est. Eusebius suum illud ex notissima fabula sumpsisse videtur. WESS.

315. 18. Ἐπὶ Τροίαν συστρατεῦσαι] Conf. Homer. Iliad. B, 732. et A, 832. Corn. Celsus princip. L. I. *Huius deinde duo filii Podalirius et Machaon, bello Troiano Agamemnonem secuti, non mediocrem opem commilitonibus suis attulerunt. Quos tamen Homerus non in pestilentia, neque in variis generibus morborum aliquid attulisse auxilii, sed vulneribus tantummodo ferro et medicamentis mederi solitos esse proposuit.* Optime. Vid. Io. Rhodium in Scribonii Largi Prooem. p. 19. etc. WESS.

315. 23. Ἀτελεῖς δ' αὐτοὺς ἀφείναι] Id quidem ex Homero nisi consecutione quadam haud confeceris. Miror autem doctissimum Christ. Cellarium Dissert. de Antiq. Medic. c. 3. ad medicorum dignitatem stabiliendam hoc Diodori loco usum non fuisse. WESS.

316 34. Ἐγγίμει Μεθώνην τὴν Ἀάδωρος] Pindarus Olymp. VI. et eius Scholiastae Ladonis filiam Μετόπην vocant, et aiunt quidem nupsisse Asopo, sed ei, qui prope Thebas fluit. PALM. Ἐγγίμει Μετόπην τὴν Ἀάδωρος] Non tantum ad O. VI. Olymp. sed et ad princ. Od. I. Isthmion. Pindari interpretes Graeci Ladonis filiam Μετόπην vocitant, quibus cum egregie consentiat Apollodor. III. 11. 6. p. 212. nihil motus Th. Galaei, prave auctorem suum corrigentis, dissensu, *Metopae* suum nomen et locum restitui, Codd. addicentibus. WESS.

316. 36. Θυγατέρες δὲ δώδεκα] Filiorum alterum *Πελάγοντα* Apollodorus nuncupans filias Asopo dat xx; cui de filiabus non obloquar: habuit enim plures xii, ut Harpina in cap. seq. et Ocroë apud Herodot. IX. 50. testabuntur. Filii nomen *Πελάγον* an *Πελασγός* fuerit, non dixerō. Stephan. quidem Byzantinus in *Πηλαγονία* eo nomine Heroem memorat, sed is *Πηλεγίων*

est Poetae Iliad.  $\Phi$ , 152. longe alio patre satus. De eo Eustath. p. 1228. WESS.

316. 43. Ἀπηνέχθη πρὸς τοῦτον τὸν τόπον, οὗ νῦν etc.] Eadem de Sinope et Syro eius filio Schol. Apollon. Rh. II. 949. et Plut. Lucullo p. 507. WESS.

316. 47. Τὴν ἀπ' ἐκείνης Κέρκυραν ὀνομασθεῖσαν ] Apollonius IV. 567.

Ἐνθα Ποσειδάων Ἀσωπίδα νάσσατο κόρη  
Ἡύχομον Κέρκυραν, ἐκὰς Φλιοντίδος αἴης,  
Ἀρπάξας ὑπ' ἔρωτι μελαινομένην δέ μιν ἄνδρες  
Ναυτίλοι etc.

prorsus a Diodoro, quicum stant Eustath. in Homer. p. 1521. et Critici in Apollon. IV. 982., dissentiens, ac Corecyram Nigram designans. Κόρκυραν, ut Vat. et Coisl. insulam quoque vocant Pausan. II. 5. V. 22. Aelian. V. H. A. 56. Conon Narr. III. Eustath. in Dionys. Perieg. v. 494. atque alii. WESS.

316. 54. Κεγχρέα ἐγέννησεν ] Κυχρέα adpellant Apollodor. III. 11. 7. Pausan. I. 26. Strabo IX. p. 603. Plutarch. Thes. p. 5. A. et Solon. 83., ubi Κιχρεῖ tamen, Stephan. in Κυχρεῖος. fortasse rectius, nisi si in Herois nomine scribendo variarint. Tzetzes certe in Lycophron. v. 175. p. 24. Κεγχρέα vocitat. Vide P. Burman. in Catalogo Argon. uti de Ancaeo, et de serpente, quem obtruncavit, S. Bochartum I. Phal. c. 21. WESS.

316. 63. Ἐξ ἄλλης δὲ μητρὸς γεγεννημένον ] Psamathe in Pindari O. V. 23. Nemeon. Caedem autem Phoci Peleus perpetravit consulto, ut pellicis potentiam gravatae matri gratificaretur, si vera produntur a Pausania II. 29. p. 179.; negat enim, sicuti auctor noster, Apollonius I. 92.

— ὅτε Φῶκον ἀδελφεὸν ἐξενάριζαν  
Ἀφραδίη. Τελαμῶν μὲν ἐν Ἀτθίδι νάσσατο νήσω.  
Πηλεὺς δὲ Φθίῃ ἐν δώματα ναῖε λιασθεῖς.

Quo poetae loco, ut obiter id addam, malim cum Pindari Scholiaste l. c. Πηλεὺς δ' ἐν Φθίῃ ἐριβιόλακι ναῖε λιασθεῖς. multo enim id concinnius. WESS.

316. 67. Ἄπαιδος ὄντος τοῦ Ἀκτορος ] Sed quomodo sine liberis dicit fuisse eum Actora, qui Menoetii pater fuit, ex quo Patroclus? Solvit dubium Pindari Scholiastes ad Olymp. IX. Ait enim Aeginam post natum Aeacum nupsisse Actori, ex quo habuit Menoetium, qui Opuntem condidit, relicta Thessalia. Sine liberis igitur erat Actor, eo quod a Menoetio derelictus fuerat, et ideo uxoris nepotem adoptasse Peleum. PALM. Ea si proposuissent Critici veteres ad Pindarum, quae conclusione quadam ex eorum verbis confecit Palmerius, salva res foret: sed nihil illi de Peleo ab Actore adscito. Praeterea ad Eurytionem, quem ex Pherecyde Eurytium Tzetzes nuncupat in Lycophron. v. 175., Actoris filium, Peleus Phthiam venit, eiusque filia ducta regni consors est factus,

apud Apollodor. III. 12. 1. Quare, cum in alia omnia abeant ceteri scriptores, aut error hic Diodori est, aut alios ille duces habuit, ut saepe. WESS.

317. 73. Ἐριβοίαν τὴν Ἀλάθου] Pindarus Aiantem παῖδα θρασὺν ἐξ Ἐριβοίας adpellans Isthmion. O. VI. 67. feminae nomen satis tuetur. Aliis Περίβοια, de quibus P. Leopardus III. Emend. c. 10. WESS.

317. 80. Ἄρης Ἀρπίνη — μυγίς] Ἄρπιννα Pausaniae V. 22. VI. 21. p. 507., Stephano Ἄρπινα et Schol. Pindari ad extremam Od. XIII. Olymp.; quod puellae nomen multimodis depravatum in veterum commentariis diligenti opera instauravit idem Leopard. VIII. Emend. 16. WESS.

317. 91. Ὑπεστήσατο δὲ ἱπποδάμειαν] Menda enormis ac severe castiganda. Perpetuum igitur relegator, eiusque sedem postliminio sibi vendicet ἱπποδρομίαν, quod per illud corrigere voluit librarius. RHOD. Ὑπεστήσατο δὲ ἱπποδρομίαν] Iure optimo succenset librariis, mendae turpissimae auctoribus, Rhodomannus; illi quod in mentem venerat, Codd. scripti adfirmant. Iam de curriculi, quod Oenomaus filiae procis constituit, principio ita Schol. Apollon. Rhod. I. 752. προέκειτο δὲ αὐτοῖς Κλάδειος ποταμὸς ἀγετηρία, Ἰσθμὸς δὲ τὸ τέρμα. quod eodem redit. *Claudeus* Elidis est fluvius apud Pausan. V. 7. Pisae proximus. WESS.

317. 2. Πολλοὺς ἀνήρα] XIII, ut Pindarus Od. I. 127. canit, ubi Critici veteres singulorum nomina recensent, corrupta, ut sit in propriis, ex magna parte, sed facile refingenda ex Pausania VI. 21. p. 508. WESS.

317. 8. Ἀὐτὸν ἐκ τοῦ ἔην μετέστησε] Excussus curru *Ipse suo melius sanguine tinxit humum*. Sic Ovidius Ibid. v. 370. et eruditissimi interpretes Apollon. Rhod. I. 752. WESS.

318. 18. Περί τὴν νῦν ὀνομαζομένην Παφλαγονίαν] Haec caussa est, cur Pelopem Paphlagonibus regem imponat Apollonius II. 358., ubi Schol. admonent, ab aliis Lydum perhiberi, quos inter vel praecipuus Pindar. Olymp. Od. I. 39. WESS.

318. 21. Τὴν εὐτυχίαν οὐ φέρων ἀνθρωπίνως] Vide ad L. I. 60. adscripta. WESS.

318. 29. Μέγα φρονατομένη] Intempestive gloriantium solet esse, quorum μεγαλανχίας καὶ φρονήματα Plutarch. de Educand. Liber. principio et ἀχρήματα καὶ φρονήματα Philo Iud. II. Allegor. p. 97. A. A. memorant. Hinc qui maiores spiritus sumunt, Plutarcho feruntur οἰδεῖν καὶ φρονάττεσθαι T. II. p. 814. B. Philoni de Profug. p. 454. E. μακρὰ βαίνειν καὶ φρονάττεσθαι, et p. 466. A. τὸν ἀχρῆνα ἐπαίρειν καὶ φρονάττεσθαι, ut equi adsolent. Mittam alia eiusdem, frequens enim in hoc genere est, ubi ex L. I. Vit. Mos. p. 648. E. addidero, φρονατόμενον ὡς ἐπὶ σεμνῷ πρόγματι impurum eum adpellari, qui scortum suum in tabernaculum abduxerat, omni multitudine conspiciente. WESS.

318. 30. *Ἐντεκνωτέραν* Vat. quod probo. Vid. Barnes. Eurip. Hecub. v. 581. WESS.

318. 38. Ἐπὶ Ἰλλίου τοῦ Τρωῶδς] Repone Ἰλιον. Cuius nomen et genus ex Homero Iliad. XX. v. 215., item 232. satis notum ac nobile est. RHOD., Ἐπὶ τοῦ Ἰλιου τοῦ Τρωῶδς] Certissimae Rhodom. coniecturae auctoritatem conciliant scripti libri. Eiusdem in mentem venerat Cl. Io. Iensio, scribenti Epist. ad Io. Georg. Graev. p. 413. *Utroque loco certissime legendum Ἰλιον. nam Ἰλλος Hercules, non Trois, filius fuit; de quo iam egerat fuse Diodorus capitibus 59. et 60. Plus autem est, cuius genus et maiores narrat auctor in sequentibus, (et recte ibi Ἰλος, non Ἰλλος, excusum est) a cuius nomine Ilium sit dictum. Τρωῶδς ἐγένοντο τρεῖς υἱοί, Ἰλος, Ἀσσύρακος, Γανυμήδης etc. Qui quidem cum haec commentaretur, Rhodomanni notas inspiciere non videtur dignatus. WESS.*

318. 43. Καὶ τοὺς λαοὺς ἀφ' ἑαυτοῦ Τεύχερος etc.] Nisi proxime praecedentia υἱὸς ὧν Σκαμάνδρου etc. parenthesi includas, καὶ hoc loco vim pronominis relativi habebit, ut saepe. Xenophon I. Hellen. p. 349. *ἐπιστολὴν ἐπεδείκνυ μαρτύριον, καὶ ἐπεμψαν οἱ στρατηγοὶ εἰς τὴν βουλὴν καὶ εἰς τὸν δῆμον.* de quo genere plura Cl. Duker. in Thucyd. VIII. 73. Quae vero mox *Batea*, Teuceri filia, ea Lycophroni v. 1308. *Arisbe*; ubi Io. Meurs. inspicere. WESS.

318. 50. Ποιητῆς Ὀμηροῦ φησὶ] Iliad. Y, 220. De Dardano pluribus infr. V. 48. WESS.

319. 60. Καὶ διατείνας ἕως Αἰθιοπίας] Sic fere L. XII. 70. *τινὲς δὲ πρὸς τὴν θάλατταν διέτειναν, quidam fuga ad mare properarunt.* Paulo aliter L. XIX. 80. *διέτεινε γὰρ ἕξ ἡμέρας ἀπὸ Μυλλοῦ σταδίου εἴκοσι καὶ τέσσαρας.* Memnonem quae spectant, exposuit supr. II. 22. WESS.

319. 66. Κάπυ ἐγέννησεν] Stemma si distinctius declaratum desideres, succurret Dionys. Halicarnas. I. A. R. p. 50. WESS.

319. 68. Ἐπὶ τῶν θεῶν ἀνηρπάγη] Sequitur poëtam Iliad. Y, 234., recentiores aliter, a Iove raptum fingentes turpis amoris caussa, ut Schol. in Apoll. Rh. III. 115. admonuit. Conf. T. Hemsterh. in Luciani D. D. IV. 2. WESS.

319. 73. Εἰς τῶν Ἐρεχθιδῶν ὀνομαζόμενος] Praestare videtur ὀνομαζομένων scribi. Differt certe ab hoc loco illud l. I. c. 38. *Θαλῆς εἰς τῶν ἑπτὰ σοφῶν ὀνομαζόμενος*, ubi itidem ὀνομαζομένων reponebat Reiskius, non memor eorum quae de Solone sunt Exc. de Virt. et Vit. p. 551. 45. *διὸ καὶ τοῦτοις ὀμιλῶν καὶ συνδιατρίβων ὀνομάσθη μὲν εἰς (τῶν) ἑπτὰ σοφῶν.*

319. 74. Ἦν γὰρ υἱὸς Μητίωνος] Obsecutus sum scriptis Codd. et Platoni in Ionc p. 533. A., cui *Δαίδαλος ὁ Μητίωνος.* Nec aliter, puto, censuit Pherecydes, etsi nunc prave in Schol.



Sophocl. Oed. Colon. v. 468. *Μητίνω δὲ τῶν Ἐρεχθέως καὶ Ἰφινόη γίνεται Δαίδαλος* scriptum legitur. Alii patrem illi Eurypalamum, avum Metionem contribuunt, ut Apollodor. III. 14. 8. atque illi, quos diligenter in unum conduxit Franc. Junius in Catalog. Architect. p. 63., ubi hunc Diodori de Daedalo locum erudite explicat. WESS.

319. 75. *Τῶν Ἀθηναίων*] Hoc glossatoris est. RHOD.

319. 76. *Τοὺς ἄλλους ἅπαντας ὑπεραίρων*] Intactam reliquissem vulgatam ob haec Excerpt. Vales. p. 233. de Solone, *σιγήα* — — *πάντας τοὺς καθ' ἑαυτὸν ὑπερβεβηκώς*, nisi alterum Mss. praeoptarent. Demosth. Orat. I. in Aristogit. p. 494. *τισοῦτον ὑπερῆκε πάντας ἀνθρώπους πονηρία*. Pausanias, cui frequens admodum, VIII. 26. *ἀθλιότης* — *ὑπερῆκε τῆ δόξῃ Σημάρατος*. Atque ad hunc modum infr. XI. 71. XVI. 84. etc. WESS.

319. 85. *Καὶ περιπατεῖν*] Absurdam hanc vulgi persuasionem saepe respicit Plato, uti in Euthyphrone p. 11. C. 15. B. Bene Themistius Orat. XXVI. p. 316. *Δαίδαλος δὲ ἐπειδὴ πρῶτος διήγαγε τὸ πόδε τῶν ἀγαλμάτων, ἔμπροα δημιουργεῖν ἐνομίσθη*. quae fabulae originem ut comode explicent, verissima tamen arbitror haec Pausaniae II. 4. p. 121. *Δαίδαλος δὲ ὁπόσα εἰσέλαστο, ἀποπότερα μὲν ἐστὶν ἐς ὕψην, ἐπιπρέπει δὲ ὁμῶς τὴ καὶ ἐνθεον τούτοις*. *Daedali quidem opera adspectu absurdiora videntur, attamen divinum aliquid in illis emicat*. neque enim fieri potuisse videtur, ut brevissimo incremento ars ea summum attingeret. WESS.

319. 88. *Διαβεβηκότα τὰ σκέλη*] Dixi superius L. I. 98., quibus addere operae pretium fuerit, quae Illust. Scaliger Chron. Euseb. DCCXXXVII. eruditissima adscripsit. WESS.

319. 96. *Υἱὸς Τάλως*] Pausaniae I. 21. et 26. *Κάλως* est, unde Simsonio Chron. A. M. 2773. ita et hic scribendum esse in mentem venit. Mihi aliud placet. Accedunt Diodoro praeter Apollodor. III. 14. 9. Schol. Euripid. Orest. v. 1648. Lucianus Revivisc. c. 42. eiusque interpres Graecus. Sepultus est *Talus* Athenis in via, qua e theatro in arcem ibatur; sic enim de *Calo* Pausan. I. 21.; quem si eundem ac *Talum* esse recordatus fuisset vir eruditissimus, ad eum Luciani locum fieri non poterat, ut adhaeresceret. WESS.

319. 98. *Τὸν τε κρομμειτικὸν τροχὸν*] Figuli rotam Ephorus ab Anacharside inventam tradiderat, reprehensus propterea a Strabone L. VII. p. 464. B. Ephorum tamen Diogenes Laert. sequitur I. 105. ubi Menag. videndus. De serra reperta Ovidius V. Metam. v. 244.

*Ille etiam medio spinas in pisce notatas  
Traxit in exemplum: ferroque incidit acuto  
Perpetuos dentes, et serrae reperit usum.* WESS.

320. 12. Ἐνεθυμήθη τὴν κατασκευὴν] Mallem addidisset ὁ Τάλωσ. quod ad sententiam plane necessarium videtur. WESS.

320. 16. Ἀπ' ἐκείνου Δαιδαλίδας προσαγορευθῆναι] Tribus erat Cecropidis pagus, teste Stephano. Schol. Sophoc. Oed. Colon. v. 468. ex Pherecyde, Μητίνω (Μητίωνι) τῷ Ἐρεχθίῳσ καὶ Ἰφινόῃ γίνεται Δαιδαλός, ἀφ' οὗ ὁ δῆμος καλεῖται Δαιδαλίδαι Ἀθηγησιν. Adde Io. Meursium de Pop. Attic. quem scholiastae haec verba non fugerunt. WESS.

320. 26. Γενομένου δὲ τότε ταύρου κάλλει διαφ.] Ordinem fabulae aliter digerunt Apollodor. III. 1. 3. et Hygin. F. XL. WESS.

320. 32. Καὶ τὰ μὲν ἀνώτερα μέρη τοῦ σώματος etc.] *Minotaurum capite bubulo, parte inferiore humana*, describit Hyginus. Numi vero Gelensium et Tauromenitanorum in Sicilia, Neapolitanorum, et plurium aliorum per magnam Graeciam, eundem corpore taurino, capite humano insignem exhibent: quem inter numos atque hos auctores dissensum tetigit ad Catullum p. 205. Is. Vossius, uberiusque exsecutus est Ezech. Spanhem. Dissert. V. de Us. et Praest. Num. p. 284. WESS. V. Ignarra palae-stra Neap. p. 234.

320. 38. Ἐπὶ κόρυς καὶ κόρας ἑπτὰ] Καὶ κόρας Co. R. V. Mut., quod ferri poterat, si ἴσας addidissent, ut supr. c. 62. WESS.

*Ibid.* Περὶ ὧν προειρήκαμεν] Superius c. 62. WESS.

320. 44. Πρὸς τινα νῆσον πελαγίαν] *Ad insulam procul a continente* inque alto mari. Supr. II. 39. παρακομισθέντι δὲ τοῦς τόπους τοῦτους κεῖται νῆσος πελαγία μὲν ἰῶ διαστήματι. Cleobulus Epist. ad Solonem in Diogen. Laert. I. 93. de Rhodo, καὶ ἡ νῆσος πελαγία, i. e. *alto pelago circumfusa*. Strabo insularum, quae Italiae adiacent, alias dicit esse προσγεύους, sive exiguo freto a continente disiunctas, alias πελαγίας, L. II. p. 184. Ad quem modum insula Osteodes et Melite πελόγλαι infr. V. 11. et 12. et νῆσοι πελόγλαι, quarum praecipua Panchaea, in Nostri fragmento apud Euseb. L. II. Praep. Evang. p. 60., etsi prave nunc editur πλόγλαι. Habet de vocabuli hac potestate plura Is. Casaubonus in Strabon. I. p. 53. B. WESS.

320. 46. Ἀφ' οὗ καὶ τὸ πέλαγος Ἰκάριον etc.] Confer Pausan. IX. 11. et Servium Aeneid. VI. 14. WESS.

321. 60. Καὶ διὰ κηροῦ θυμασιῶς ἰσχυμένας] Fabulam cultissimis versibus proponit Ovidius II. Art. v. 43. et VIII. Metam. v. 198. WESS.

321. 66. Παρὰ τὴν θάλασσαν πετόμενον] Longe usitatus est πετόμενος, quam πετόμενος, ut bene Cl. T. Hemsterhus. in D. Mar. XV. 3. Luciani, ubi ἐρωτες παραπετόμενοι. Nec refugit tamen Theophrastus Lib. de Sign. Vent. p. 420. ἐρώδιον ἀπὸ θαλάσσης πετόμενον, neque πετομένους ipsa in hac fabula Palae-phatus Hist. Incred. c. 13. adhibere. Περιπετόμενον ὄρνιν dabit

Clemens Alex. Protrept. p. 53., ἄγγελον πετώμενον S. Ioannes Apocal. VIII. 13. XIV. 6., et ὄρνεα πετώμενα c. XIX. 17., sed discrepantibus libris manu exaratis. WESS.

321. 73. Κατεσκεύασε δ' ἐν τῇ νήσῳ ταύτῃ τινὰ τῶν ἔργων ] Haec Ephorus L. VII. et Philistus L. I. uberius fuerant exsecuti, Theone Progym. c. 2. p. 16. auctore. Forte Diodorus, solito sibi more, alterutrum in his describendis ducem habuit. WESS.

321. 75. Ἐποίησε τὴν ὀνομαζομένην ζολυμβήθραν ] Meminit huius piscinae Vibius Sequester, sed obscurius. *Alachis Megarensium*, inquit, cuius fontem *Daedalus dilatavit, agrumque reddidit et regionem, quam idem fluvius devastat.* Alabonem enim intellexisse res ipsa ostendit, et scripti libri, quorum alii *Alebin*, alii, ut is, quem a Cl. D'Orvillio utendum accepi, *Alaebim* praeferunt. Durant piscinae quaedam in haec tempora vestigia, teste Ph. Cluverio L. I. Sicil. Antiq. c. II. p. 133. WESS.

321. 78. Κατὰ τὴν νῦν Ἀγριγεντίνην ἐν τῷ Καμικῷ καλ.] *Camicum Agrigentinum castellum* habet Diodor. L. XXIII. 9.; quare *Agrigentina nunc in Camico vocatur*, ut Rhodom. vertit, tolerari non potest. Camicus enim et Agrigentum diversa sunt oppida. Rectius Cluver., in *Agrigentino*, qui nunc vocatur, ad *Camicum* agro. Ἐν Καμικῷ ad *Camicum* flumen, ut ἐν Σαλαμῖνι ad *insulam Salaminem* Lucian. Amor. c. 52. et Polyaen. I. 30. 3., ἐν Μυκάλην iuxta *Mycalen* Aristides T. III. p. 354. et Aelian. H. V. H. 25., ubi Cel. Iac. Perizon. et nos infra L. XVII. 36. Porro quam urbem hic vocat, petrae inpositam atque omnium munitissimam, ea Agrigentinum arx est, natura olim atque operibus egregie munita, Polybio VIII. 21. indice. Vidit et hoc Ph. Cluver. L. I. S. A. p. 207., arcem eam *Omphacem* nuncupatam, sed incertissima coniectura, praeterea contendens. WESS.

321. 92. Κατὰ δὲ τὸν Ἐρῶνα πέτρας οὔσης ἀποτ.] Vide infra c. 85. et Ph. Cluver. I. Sic. Antiq. p. 244. WESS.

322. 97. Χρυσοῦν τε κηρίον τῇ Ἀφροδίτῃ etc.] Ph. Cluverius κηρίον et mox κρηῖν coniectura ductus corrigit, in eam impulsus his Pomponii Sabini ad Virg. Aen. V. 759. verbis: *Daedalus — arietem aureum, qui vivere credebatur, Veneri et Eryci consecravit.* Sed is locuples et testis et emendationis auctor non erit, secutus Poggii Latina, ut vel *Eryx et Venus*, loco *Veneris Erycinae* positi, testantur. Plus ponderis est in scriptis libris, Coisl. et Mutin., quibus et ego suffragarer, si mihi de *ariete aureo* res paullo esset liquidior. Id dum eveniat, acquiescam in vulgata, non minus egregium artis Daedaleae specimen exhibente. WESS.

322. 3. Θαλαττοκρατῶν κατ' ἐκείνους τοὺς χρόνους ] Supr. c. 62. WESS.

322. 10. Ἐξήτει τὸν Δαίδαλον εἰς τιμωρίαν] Si qui manu exaratus liber obtulisset ἐξήτει τὸν Δαίδαλον, dedi sibi ποικαὶ Daedalum expostulavit, non ego repudiasset. Pausan. VII. 4. ipso hoc in negotio, ὅτι ἐξαιτοῦντος (τὸν Δαίδαλον) Μίνω, μὴ πρόοιτο αὐτὸν ὁ Κώκαλος. Nunc nihil demuto, praesertim cum simillimum sit hoc Pausan. I. 32. ἐπεὶ δὲ ἀλελθόντος ἐξ ἀνθρώπων Ἡρακλέους, ἐξήτει τοὺς παῖδας Εἰροσθεὺς etc. Herculis enim is liberos sibi dedi postulavit, ut Minos Daedalum. WESS. Rectum omnino est ἐξήτει, quod saepe ab isto possessione eversum est: sic in Vatic. codice L. XI. 56. ἐξήτων αὐτὸν πρὸς τιμωρίαν. ubi alii omnes ἐξήτων. Adde ἐξαιτεῖν in hoc genere vulgatissimum esse, veluti L. XI. 57. p. 447. et XVII. 15. Iure itaque vir Clariss. Iac. Gronovius istam emendandi viam ingressus ad Arrian. Ἐραβ. I. p. 22., quam et tenendam arbitror in Pausan. I. 32. ἐξήτει τοὺς παῖδας, non ἐξήτει. Polyaei par caussa L. VIII. 55. p. 810. quod enim nunc occurrit, οἱ μὲν κατέκτανον ὁ δὲ Σάτυρος ἐξήτει, manifesto scribentium errore ex ἐξήτει progenitum est. IDEM in Add.

322. 13. Παρουχασχὸν πλείω χρόνον ἐν τῷ θεριῷ] Ovidius Ibin diris defigens v. 291.

*Vel tua maturet, sicut Minoia fata,*

*Per caput infusae fervidus humor aquae.*

a quo non dissident veteres Critici in Pindari O. IV. 95. Nemeon. WESS.

322. 21. Κατὰ τὸν ἀνεωγμένον ἐποίησαν Ἀφροδίτης νεών] Satis olim frequentatum fuisse, ut templis mortuorum reliquiae abderentur, erudita disputatione constabilivit Clemens Alexand. Protrept. p. 39. ipsa proin templa τάφους, sicuti et Athenagoras Apolog. c. 25., adpellans: quem quidem titulum pagani postea iure quodam in Christianos retorserunt, eorundem basilicas τάφους sepulcra, ob Martyrum ossa in eas illata, vocitantes, sicuti Iulianus, Libanius atque Eunapius, de quibus H. Vales. in Ammian. XXII. 11. WESS.

322. 27. Θήρωνος δυναστεύοντος τῶν Ἀχαιαντίνων] Scripsit illi Pindarus Oden V. Olympion., agiturque copiosius de eodem infr. L. XI. 53. WESS.

322. 33. Ἦν ἀπὸ τοῦ βασιλ. αὐτῶν Μίνωαν ὀνόμασαν] Tacentibus Codd. Poggio facem praeferente, ita refinxit: nec aliter auctor paullo ante, καὶ κατῆρε τῆς Ἀχαιαντίνης εἰς τὴν ἀπ' ἐκείνου Μίνωαν καλουμένην et L. XVI. 9. κατέπλευσε τῆς Ἀχαιαντίνης εἰς τὴν ὀνομαζομένην Μίνωαν. Adde c. 23. huius libri. WESS.

323. 36. Ἦν ἀπὸ τῆς — ὀνόμασαν Ἐγγυον] Urbem ita appellare solet, ut L. XVI. 73., Ἐγγύιον Plutarchus, Stephanus atque alii. Illustratur a Ph. Cluverio II. S. A. p. 366., qui Fazellum dum miratur, haec ex Diodori L. V. citantem et Ochyram

*urbem* per Siciliam-quaerentem, Poggii versionem, qua usus ille est, cognitam habuisse non videtur. WESS.

323. 37. *Μηριόνον τοῦ Κρητῶς*] Conveniunt haec Plutarchi verbis in Marcel. p. 309. B. Ipse Meriones in Cretam deinde rediit, si ea vera sunt, quae infr. L. V. 80. perscripta sunt. WESS.

323. 43. *Καὶ κατασχευάσαντες ἱερὸν τῶν Μητέρων etc.*] Plutarchus servata Enguinorum dialecto *Ματέρας* vero nomine vocat l. c. *πόλις ἐστὶ τῆς Σικελίας*, inquit, *Ἐγγύιον, οὐ μεγγάλῃ, ἀρχαία δὲ πάνν, καὶ διὰ θεῶν ἐπιγάνειαν ἔρδοξος, ἃς καλοῦσι Ματέρας*. Cicero IV. in Verr. c. 44. *Matris magnae fanum apud Enguinos est: forsitan deceptus matris vocabulo; quod de Diodoro, domo Siculo, et in insulae sacris describendis sollertissimo, ut suspicer, induci non possum, nedum de Plutarcho, ipsi haec in re consentaneo. Potest ad eas referri inscriptio Syracusana ΝΙΚΗ ΜΑΤΕΡΩΝ*, quam perperam ad Deum matrem transtulit Geor. Gualterius in Tab. Antiq. Sicil. p. 383. edit. Havercampi, et alia Sponii Miscell. Erud. Antiq. LXXVIII.

*ΑΡΗΙ ΜΗΤΡΑΣΙ ΚΑΙ ΔΙΟΣΚΟΠΟΙΣ.*

Non item DEAE MATRES, quarum in lapidibus per Germaniam, Galliam, Hispaniam et Britanniam erutis frequens est mentio. Illae Germanorum vicinarumque gentium in fatidicas feminas superstitione Dearum in numerum transierunt, docente Io. Georg. Keysler. Antiq. Septemtrion. p. 377. WESS.

323. 56. *Οὐρανὸν εἰσαρέψασαν etc.*] Inter hunc versum et proxime sequentem apud Aratum interiecti habentur duo isti: *Δίπτω ἐν εὐώδει, ὄρεος σχεδὸν Ἰδαίου Ἄρτω ἐγκατέθετο καὶ ἔτρεφον εἰς ἐνιαυτόν*. STEPH. In Phaenom. v. 30. sed omissi sunt versus duo *Δίπτω ἐν εὐώδει etc.* Quos versio nostra simul complectitur, ut sensus integer citati loci habeatur. RHOD. Duo Aratei versus librarii inobservantia excidisse videntur, qui *Δίπτω ἐν εὐώδει* scribere cum deberet, oculos in *Δίπταῖοι Κορύρητες* festinus coniecit, transiliitque adeo interpositos, quo errore nihil proclivius. Recte vero Diodorus *Κορήτηθεν κείναι γε Διὸς etc.* legit: turbat enim orationem *κείναι δὲ*, quod in Arato nunc est, meritoque mutandum censuit praestantissimus Georg. Arnaldus Lect. Graec. L. II. c. 1. p. 136. WESS.

323. 64. *Πυθόχορηστοὶ χορημοὶ προσέταξαν*] Optime haec sese habent: *χορημιὸν πυθόχορηστον* probat ipse L. XVI. 93., *πυθόχορηστα μαντείματα* Aeschyl. Choephor. v. 900., *πυθόχορηστον μαντείαν* Demaratus in Stobaei Titul. XXXIX. p. 228.; *λόγιον πυθόχορηστον* Plutarch. Thes. p. 12. D., atque ad eum modum *θεόχορηστα λόγια* de lege Mosaica Philo Iud. Leg. Cai. p. 1022. D. Alioqui omnia *πυθόχορηστα* sunt, quae ex tripode a Pythia iubentur et pronuntiantur. Quem in modum *πυθόχορηστον θυσίαν*, quam vates Apollo iniunxerat offerendam Plutarch. T. II. p. 628. F. et

p. 163. B. *πυθόχορηστον τῆς ἀποικίας ἡγεμόνα*, cui oraculum coloniae deducendae auctor fuerat, dixit. Rarius est hoc Aeschyli Choeph. v. 940. de Oreste exule, Apollinis praecepto ad matris caedem impulso, ὁ πυθοχρήστας γυγίας. WESS.

323. 66. *Καὶ τὰς πόλεις εὐθηνήσειν*] Discordia est de verbi huius vera scriptura. Thomam Magistrum si audis, εὐθηνεῖν κάλλιον ἢ εὐθηνεῖν. Si III. Spanhem. Dissert. XIII. Us. et Praest. Num. p. 536., unice verum est εὐθηνεῖν. Habent sane numi veteres *EYΘHNIAN*, uti εὐθηνίαν τῶν πόλεων Ioseph. IV. B. I. 2. 1., et εὐθηνίαν καὶ εὐετηρίαν Philo Iud. de Ioseph. p. 542. A. B., passimque alibi, amat enim haec vocabula. *Βουκόλιον εὐθηνούν* in Florileg. Stob. T. LXV. p. 417. Antipater, ζῶα εὐθηνούντα Dio Chrysost. Orat. I. p. 15. A. ut alios praeteream. *Εὐθηνεῖν* tamen in Aeschyli Eumen. v. 911. 947.; in Demosthene modo εὐθηνεῖν, modo εὐθηνεῖσθαι, ut Orat. pro Coron. p. 187. et de Legat. male gesta p. 249. reperies: ubi cum scripti libri dissentiant, non est, ut Thomae decreto moveamur, aut ab hac scriptura discedamus. Reg. εὐθηνήσειν, Vat. εὐθηνήσειν, quo modo in Synesii Epist. 94. sub finem olim εὐθηνεῖται, nunc in Petavii ed. εὐθηνεῖ τε καὶ πιαίνεται legitur. WESS.

323. 70. *Ἱστοριῶν γραφομένων*] *Ἱστοριογραφουμένων* Steph. ora et R. *Ἱστοριογραφουμένων* Co. M. Cl. 2. vulgatum supra L. I. 37. habuimus. WESS.

323. 74. *Ἀγυρναίων*] *Ἀγυρναίων* Co. M. Vid. supr. I. 5. WESS.

324. 77. *Κατασθενάσαντες ἀμάξας τετρακέκλους*] Confer infr. L. XX. 25. et Io. Scheffer. L. II. Rei Vehicul. c. 9. WESS.

324. 82. *Ἐχον αἱ θεαὶ βοῦς μὲν ἱερὰς etc.*] Post μὲν sequi debere δέ, non τε, notissimum est. Si tamen reponitur hic δέ, fuerit et in aliis multis huius voluminis locis eadem ratione reponendum. STEPH. Μὲν, quod antecedit, hic δέ relativum suum necessario postulat. RHOD.

324. 86. *Τῆς Ὑψέως θυγατρὸς, τοῦ Πηνειοῦ*] Haec iusta verborum distinctio: Edd. *θυγατρὸς τοῦ Πηνειοῦ* artissime connectentes, Penei filiam faciebant; qua etsi olim plures opinione fuerint, testibus Criticis in Apollon. Rh. II. 502., non tamen Diodorus, quem vide supr. c. 71. WESS.

324. 88. *Ἐπὶ τὸ Πήλιον τρεφομένης*] Pindarum O. IX. 6. Pythion. et Hesiodum, cuius versus Pindari interpretes exscripserunt, sequitur. Apollon. I. c. ad amnem Peneum oves pascentem proponit. Sed exiguo locorum intervallo distant. WESS.

324. 91. *Κατὰ τοὺς ὕστ. χρόνους τινὰ κτίσαντα πόλιν etc.*] Battus est, de quo Callimach. H. Apoll. v. 65. cum nota Ezech. Spanhemii. WESS.

324. 94. *Ἀρισταίων*] *Ἀριστέα* Co. Conf. Hemsterhus. in Luciani D. Mort. XI. I. WESS.

324. 96. Καλεῖν αὐτὸν Νόμιον, Ἀρισταῖον, Ἀγρῆα ] Ex Pindaro O. IX. 115. Pythion. Apollon. Rh. II. 509.

Ἐρθα δ' Ἀρισταῖον Φοῖβῳ τέκεν ὃν καλέουσιν

Ἀγρῆα καὶ Νόμιον πολυλήϊοι Αἰμονιῆες.

Nonnus V. Dionys. v. 215.

Πρῶτος Ἀρισταῖος, Νόμιος καὶ ἐπιώνυμος Ἀγρῆς.

Sollerter autem ab Aristaeo inventa describuntur ab Oppiano IV. Cyneget. τ. 267.

— — — Πρῶτος ἐκεῖνος

Καρπὸς ἀγριάδος λιπαρῆς ἔτριψεν ἐλαίης.

Καὶ ταμίῳ πρῶτος γάλα πήξατο, καὶ ποτὶ σίμβλων

Ἐκ δρυὸς αἰείρας ἀγανὺς ἐνέκλεισε μελίσσας.

Quae quidem auctorem Siculum cum illustrarent, illi adstruere visum fuit. WESS.

324. 5. Ἀκταίωνα Reg. ut apud Euripid. Bacch. v. 337. vulgatum Ἀκταίονι tuetur Callimach. Lav. Pall. v. 109. WESS.

324. 9. Ἀκρωτηρίων] Ἀκροθινίων M. ut infra L. V. 29. WESS.

Ibid. Προηρέϊτο τὸν γάμον κατεργάσασθαι ] Quacum tandem? Fallor, aut iustum est, quod schedae optimaе offerunt. Ipsi Dianae vim inferre cogitabat; id indicant, quae mox succedunt, τοῖς ἄλισκομένοις πρὸς τὴν ἀκοινώνητον τοῖς γάμοις κατεκέχητο, πρὸς τὸ συντελεῖσαι τὴν ἰδίαν ἐπιθυμίαν, captis ferarum carnibus in Deam a nuptiis abhorrentem, ut satis suae libidini faceret, abuti voluit. quo de hominis scelere tacent alii, diversas irarum Dianae causas proponentes in Ez. Spanhem. nota ad Callimach. Lav. Pallad. v. 113. Itaque per me tibi integrum est, eane Diodoro reddenda iterum, an subintelligenda arbitreris. Ego vero ἀπερήγατο, tametsi manu exarati Codd. nihil iuvent, postliminio suam in sedem reduco. WESS.

324. 11. Πρωτεύειν — — ἀπερήγατο ] Ἀπερήγατο, Actaeon scilicet. Significationem vero τοῦ πρωτεύειν hic πρωτεύειν habet. RHOD.

324. 14. Κατεκέχητο ] Quae viri doctissimi Is. Casaub. in Athen. II. 15. Ios. Barnes. ad Helen. Euripid. v. 639. adscripterunt, vulgatum tueri possunt. Ego tamen scriptum librum sequor. WESS.

325. 23. Τὴν εἰς Κέω νῆσον μετάβασιν ] Cl. Salmasius Graecos ἐν Κῶ etiam de insula Cea dixisse hinc probat in Solin. p. 101.; Aristaeum enim post mortem Actaeonis Ceam insulam tenuisse consentire auctores, non Co: quod verissimum. De nomine insulae aliud ut opiner, Codd. et constans Graecorum consuetudo faciunt. Apollon. Rh. II. 521.

— — Αἶπεν δ' ὄγε πατὸς ἐρετριῆ

Φθίην ἐν δὲ Κέῳ κατενάσσατο λαὸν ἀγείρας

Παρθάσιον. —

Id itaque amplector. Incolae *Κῆοι* in Schol. Apollon. II. 500. et 528., sed hinc adiuvandi. Prave ergo praestantissimus Rhodom. WESS.

325. 24. Παρὰ τοῖς Κείοις] *Κῆοις*. RHOD.

325. 27. Γενομένης δὲ τῆς θυσίας κατὰ τὴν etc.] Mansit incolis mos, ut sub ortum caniculae sacris operarentur, coniecturamque caperent, pestilensne futurus sit annus. Apollon. II. 528.

— — Κῆω δ' ἔτι νῦν ἱερῆες

Ἀντολέων προπύροιθε κινὸς ῥέζουσι θυηλάς.

Cicero I. Divin. c. 57. *Etenim Ceos accerimus ortum caniculae diligenter quotannis solere servare, coniecturamque capere, ut scribit Ponticus Heraclides, salubrisne, an pestilens annus futurus sit.* Ibi Davisius, praetereaue Nonnus V. Dionys. v. 270. WESS.

325. 37. Ὑπὸ τῆς μητ. νύμφης τὴν ἀναγωγὴν ποιησάμενον] Vertitur, *classe a matre Nympha instructus, vereor ut bene.*

Ἀναγωγὴ nautarum est, cum oram solvunt, sive ἢ ἐπὶ θάλασσαν τῶν ναυτιλλομένων ὁρμῆς, uti explicat Schol. in Ptolemaei Tetra-bibl. p. 15. Ἀναγωγὴν ποιῆσθαι iidem perhibentur, quum portu egressi alto se committunt. Diodor. Excerpt. Ursini p. 329. καὶ κεῖθεν ἐπὶ Συρίας τὴν ἀναγωγὴν ἐποιήσαντο, inde, ex Cypro, in Syriam versus navem solverunt. Itaque non ὑπὸ τῆς μητρὸς, sed ἀπὸ τῆς μ. legitimum est, reddique Latine debet, *a matre Nympha solvens in Sardiniam transmisit.* Quod Aristaei in eam insulam iter praeter Servium in Virgilio Georg. I. 14. tetigit quoque Pausan. X. 17. et ante eos natos personatus Aristoteles Admirand. p. 727. ed. Du Val. WESS.

325. 42. Χάριμον καὶ Καλλιχαρπον] Sermonis analogia hanc posterioris nominis scripturam adfirmat. Aristaeus ex proventu pulchrorum fructuum nomen formavit. Τόπος καλλιθενδρότατος καὶ καλλιχαρπότητος est in Polybii L. V. 19. WESS.

325. 57. Καὶ ταῦτα μὲν περὶ Ἀρισταίου etc.] Aptius καὶ ταῦτα quam καὶ ταῦτα legeretur. STEPH. Nihil admodum refragabor, si qui Stephanum sequi malint. Simile tamen hoc Eunarii in Vit. Aedesii p. 45. καὶ ταῦτα ἔτισε Σωπάτρον δίειν ὃ πάντα ἐνδαίμων Ἀβλάβιος, atque ita Sopatro poenas felix alioqui Ablabius dedit. Posses minore etiam molimine, καὶ ταῦτη, si quid hic mutandum videatur. WESS.

326. 60. Καὶ Βουτᾶ, βασιλέως τινὸς ἑγχωρίον] De Buta, quem Argonauticorum scriptores domo Atheniensem perhibent, omnia occupant viri doctissimi Ph. Cluverius Sicil. Antiq. L. II. 1. p. 239. et P. Burman. Catal. Argonaut. WESS.

326. 62. Ἀπὸ non est in Co. Cl. I. quos sequi poteris. Diodorus suum agnoscit supr. c. 76. WESS.

326. 65. Καίμειν ἐπὶ τινος ὑψηλοῦ τόπον] Contende cum his Polybianam montis descriptionem L. I. 55. WESS.



326. 70. *Διόπερ — Ἐρηνικὴν ὀνομασθήσεται*] Id verius. Satis enim inconmodum hoc quidem loco ὀνομάσαι. Apollonio IV. 917. sollempni poetis προλήψει Venus θεὰ Ἐρηνος μεδέουσα. WESS.

326. 76. *Οὐδέποτε διέλιπε τιμώμενον, ἀλλὰ etc.*] Strabonis aetate secus erat. *Νυνὶ δ' ὥσπερ αὐτῇ ἢ κατοικία*, inquit L. VI. p. 418. B., *λειπανθεῖ καὶ τὸ ἱερόν, καὶ τῶν ἱερῶν σομμάτων ἐκλέλοιπε τὸ πλῆθος*. Nunc ut oppidum id, Eryx, virorum, ita templum quoque sacerdotum laborat penuria, multitudine servorum sacrorum sublata. Templi immensas opes enarrant Aelian. de Animal. X. 50. et Pausan. VIII. 21. p. 646. Paulo ante τῶν ἑξ αἰῶνος bene Cl. Wetsten., ut Dionysius I. A. R. p. 3. *μόνη τῶν ἐκ τοῦ παντὸς αἰῶνος*. WESS.

326. 83. *Μετὰ δὲ ταῦτα Καρχηδόνοιοι*] Non omnes tamen; siquidem Hamilcar Veneris templum expilavit, pecunia inter milites suos divisa, etsi non inpune, si fides Aeliano I. c. WESS.

326. 89. *Ἐν ταῖς πράξεσιν ἐπιτυχεῖς ὄντες*] Adscriperat H. Stephanus, ut Camusatus notat, margini Clar. 2. *ἐπιτυχεῖς ὄντες* eo dici modo, quo *περιυλαγεῖς ὄντες* sunt οἱ *περιυληγῆσαντες*, quod verum est. Rex *εἰρηνικὸς καὶ ἐπιτυχῆς* Artaxerxes ob pacis studium et prosperum, quo usus fuerat, rerum successum infr. L. XV. 93. Augustus, cui omnia bene cesserant, *ἐπιτυχῆς ἐς πάντα ὄν* Appiano L. I. B. C. p. 604. et Claudius Marcellus, militia felix imperator, *ἐπιτυχῆς τὰ πολεμικὰ ὄν* eidem de Bell. Hispan. p. 475. Hoc rarum, cum de militibus hostium telis expositis, et qui sine errore petuntur, *τοῖς δὲ πολεμίοις εἴβλητοι καὶ ἐπιτυχεῖς πανταχόθεν ὄντες* idem Appian. Syriac. p. 175. WESS.

326. 95. *Τὸ σκεθρωπὸν τῆς ἐξουσίας ἀποθέμενοι*] Remotis potestatis insignibus, fascibus, securibus, lictoribus. Sic solebant, quoties magistratus quasi ad amicos agere volebant. Morem illustrat I. Lipsius in Taciti Ann. II. 53. Haud vero satis scio, an mox *γενναϊκῶν ὁμιλίαι* amplius et familiarius aliquid, quam sunt colloquia, innuat. Multitudo *ἱεροδούλων γενναϊκῶν*, quae corpore illic quaestum faciebant, id paene suadet, patiturque vocis usus. Apud Philon. Iud. I. Vit. Mos. p. 648. C. rex Moabitaram *ἐπιτρέπει ταῖς γενναῖξὶ τὰς ὁμιλίας πρὸς οἷς ἂν ἐθέλωσι ποιεῖσθαι*. Satis ille quidem impudenter, sed ad hunc locum oportune. WESS.

326. 2. *Χρυσοφορεῖν — — τῆ Ἀφροδίτῃ*] Diodoro, quantum recorder, *χρυσοφορεῖν* nunquam notat *aurum* alteri conferre, sed aureo ornatu conspiciendum se praebere. Infr. L. V. 46. *χρυσοφοροῦσι δ' ὁμοίως ταῖς γενναῖξὶ, πλὴν τῶν ἐρωτικῶν*. et XIII. 82. *τὴν ἐσθῆτα μαλακῶν φοροῦντες καὶ ἑπεροβόλῃν, καὶ χρυσοφοροῦντες*. Quare nisi id velit, eas civitates festis Erycinæ Veneris diebus aureo cultu in Deae honorem conspicuas atque in-

signes fuisse, χρυσοφορεῖν similem τοῦ δωροφορεῖν potestatem induct. WESS.

327. 4. Τὴν περὶ τῆς θεᾶς ἑπαγγελίαν] Ἀπαγγελίαν lege, et in proximo versu Ἡραῖα pro Ἥρα. RHOD. Ἀπαγγελίαν Vat. optime. Vide supr. c. I. WESS.

327. 7. Ἡραῖα γὰρ ἕρη κατὰ τὴν Σικελίαν ἐστὶν] Vibius Sequester *Hereum*, seu *Heraeum* potius, adpellat, *Chrysas*, inquietus, *Syraculis ex Heraeo monte*, errans tamen in fluvii cursu, ut alias dicemus. Montes Heraeos longo tractu per Siciliae mediterranea fuisse porrectos, ostendit Ph. Cluverius L. II. Sicil. Antiq. c. 7. p. 326. WESS.

327. 10. Πλυκτέτητι τῶν ὑδάτων διαφόρους] Nisi scripti libri alium verborum ordinem hoc loco et brevi post praescripsissent, in vulgatis acquievissem. WESS.

327. 22. Ἐροῦ μὲν καὶ Νύμφης υἱὸν] His non dissimilia ad poetae Eclog. V. 20. Servius commentatur. Nil mirum ergo, si Mercurius Daphnin amoris ignibus misere contabescentem primus consolatum adeat in Theocriti Idyl. I. 77., quippe pater. Scholiastes aliud divinat, quod non probo. WESS.

327. 28. Ἐξερεῖν τὸ βουκολικὸν ποίημα] Aelian. X. Hist. Var. c. 18. cum Daphnis visu esset ab irata Nympha orbatus, tum demum τὰ βουκολικὰ μέλη cani fuisse coepta adfirmat, fuisseque eorum argumentum sive ὑπόθεσιν, τὸ πάθος τὸ κατὰ τοὺς ὀφθαλμούς. Vide Iul. Scaliger. L. I. Poetic. c. 4. et Daniel. Heinsium Lect. Theocrit. c. 4. WESS.

327. 34. Μίαν τῶν Νυμφῶν ἐρασθεῖσαν] *Echenais* vocabatur, ut ex Timaeo, quem fortasse in his ducem Diodorus sequitur, Parthenius Erotic. c. 29. docet: nam quae de *Xenea* Scholiastes in Theocriti Idyl. I. 65., ea nata sunt, sicuti pulcre animadvertit Heinsius, ex prave accepto Idyl. VII. versu 73. *Nomiam* tamen nominat Servius in Virgilii Eclog. VIII. 69. WESS.

327. 45. Ζάγκλω τῷ τότε βασιλεύοντι τῆς τότε etc.] Sunt apud Stephan. Byzantinum, qui urbis nomen ἀπὸ Ζάγκλου τοῦ γηγενοῦς derivent, fabulosa sectati: prudentiores a loci situ Siculaque voce Ζάγκλη sive Ζάγκλον, *falcem* notante, repetunt; atque hos princeps inter Thucydides VI. 4. ὄνομα δὲ τὸ μὲν πρῶτον Ζάγκλη ἦν ὑπὸ τῶν Σικελῶν κληθεῖσα, ὅτι δρεπανοειδὲς τὸ χωρίον τὴν ἰδέαν ἐστί. τὸ δὲ δρέπανον οἱ Σικελοὶ ζάγκλον καλοῦσι. haec autem urbs primo quidem a Siculis Zancle vocata fuit, quod locus ille speciem falcis praeferat: Zancleon autem Siculi falcem appellant. ibi Hudson. et Duker. viri clariss. plura. WESS.

327. 47. Τὴν ὀνομαζομένην Ἀκτὴν] Describitur a Ph. Cluverio L. I. Sicil. Ant. c. 6. p. 84. WESS.

328. 54. Καὶ τὸν τόπον ἀπὸ τούτου Ῥήμιον ὀνομασθῆναι] Plinius III. N. H. 8. Sicilia quondam *Brutio* agro cohaerens, mox

*interfuso mari avulsa xv M. in longitudinem freto, in latitudinem autem M. D. passuum iuxta columnam Rheginam. Ab hoc dehiscendi argumento Rhegium Graeci nomen dedere oppido.* De terrae motu, quo insula faucibus Italiae sit direpta, Aeschylus in Strabon. VI. p. 396. A.; quae veterum opiniones cum sola coniectura nitantur, multo similis vero est, Siciliam a primis rerum initiis fuisse insulam. Egregie hac de re post Marianum Valguarneram disputat Philip. Cluver. L. I. Sic. A. c. I. WESS.

328. 62. *Πελοριάδα*] *Πελοριάδα* Mut. Co. Conf. Ph. Cluver. I. Sicil. Antiq. p. 80. WESS.

*Ibid. Τὸ τέμενος τοῦ Ποσειδῶνος κατασκευάσαι*] Invenio in Apollodori I. 4. 3. *Πρωιστότερον ὑπὸ γῆν οἶζον*, sive *Fulcani opera sub terra structam domum*, quam Orion Neptuno consecraverit: quae hucine pertineat, non habeo dicere. WESS.

328. 68. *Ἐν τῇ Νεκρίᾳ*] Versu 569. Ulysseae XI. Sequentes autem versus eodem libro v. 308. reperies. RHOD.

328. 73. *Ἐμαρτίζων καὶ προσεθήμενος*] Series orationis hoc expostulabat. Aloi filii nonnunquam *Ἀλωεῖδαι*, frequentissime *Ἀλωάδαι* dicuntur. Vid. Longin. de Sublimi dictione p. 48. Philostratum Heroic. c. 1. p. 671. Atticum apud Euseb. XV. Praep. Evang. c. 4. p. 795. Synesium de Insomn. p. 154., et quae Luciani Contempl. c. 3. adscripsit Clarissim. T. Hemsterhus. *Υἱὰς Ἀλωεῖδης*, uti Noster, Apollon. Rhod. I. 482., quod tamen ligatae quam solutae orationi convenientius. Nihil itaque indigemus correctione Rhodom., qua *Ἀλωεῖδης* hoc loco refingi in Addend. iussit. WESS.

328. 78. *Μετά γε κλυτὸν Ὀρίωνα*] Poetae *ἀγακλυτὰ* quae celebria sunt, *ἔνδοξα*, *ἀγὰν διαβεβοημένα*, ut Hesych. interpretatur. Idomeneus inde *ἀγακλυτός* Iliad. Z, 436.; poteritque adeo *ἀγακλυτὸν Ὀρίωνα* ipsius poetae, qui volet, auctoritate tueri. Ego vestigia meliorum Codd., quibus Homeri editiones consentaneae sunt, premere pergo. WESS.

328. 80. *Αὐτοῦ παραγράφου ἐν τῇδε τῇ βίβλῳ*] Iustius esse *περιγράφου ἐν τῇδε τῇ βίβλῳ* ostensum supr. I. 42. fuit. WESS.

## A N N O T A T I O N E S

I N

## L I B R U M Q U I N T U M .

329. 7. Καὶ Γαύλων] Γαύδου, quod Clarom. 2. praefert, est in Strabone variis locis. Nec recte tamen, ut infr. L. V. 12. ostendetur. WESS.

329. 8. Σαρδόρος R. V. recte. Vid. supr. IV. 29. WESS.

329. 27. Καὶ τῶν εἰς Χίον καὶ Σάμιον etc.] Sic melius, ut L. V. 82. 83. indicabunt. In vulgato ἡ τῶν Ῥοδίων ἀποικία colonia est in insulam Rhodum deducta, ut ἡ τῶν Αἰγυπτίων ἀποικία, quae ex Aethiopia in Aegyptum fuerat missa, supr. L. III. 3., quod genus alias illustrabimus. WESS.

330. inscr. Ἡ καὶ Νησιωτικῇ] Tametsi manu scriptorum Codd. nullus haec edat, ego addenda censi. Moveor Diodori exemplo, qui diserte c. 2. καὶ ταύτην τὴν βίβλον ἐπιγράφοιτες ΝΗΣΙΩΤΙΚΗΝ, ἀκολούθως τῆ ἡ γραφῆ περὶ πρώτης τῆς Σικελίας ἐροῦμεν, hunc librum cum insularem inscripserim, ut titulo satisfiat, de Sicilia primo dicemus. WESS.

330. 14. Τίμαιος μὲν οὖν μεγίστην πρόνοιαν πεποιημένος] Hac in parte laudem Timaeus abstulit, ostentare solitus τὴν ἐν τοῖς χρόνοις καὶ ταῖς ἀναγραφαῖς ἐπίμασιν τῆς ἀκριβείας καὶ τὴν περὶ τοῦτο τὸ μέρος ἐπιμέλειαν, studium ac diligentiam in accurata temporum notatione, ut Polybius Excerpt. Vales. p. 1394. ait, uberiusque in sequentibus declarat; quam tamen hominis laudem mire foedavit incredibilis quaedam maledicendi et alios coarguendi libido, ob quam ἀλλοτρίων ἐλεγκτικώτατος ἀμαρτυριώτων Longino de Sublimi Dict. c. 4. p. 28., Istro vero apud Athenaeum L. VI. p. 272. Ἐπιτίμαιος dici coeptus est. Hinc habet Diodorus et Strabo XIV. p. 949., ubi vulgatum Ἐπιτίμαιος magnus Casaubon. haud iniuria corrigit. Confer infr. L. XIII. 90. WESS.

330. 19. Οὐ μόνον κατὰ τὴν λέξιν etc.] Cultae dictionis Venerem, ἰδούνην ἐν τῷ ἡρώσει, Duris Samius aufert Ephoro, eo hoc in genere, teste Photio Biblioth. Cod. CLXXXVI. p. 394., multo inferior. Nec videtur tamen eleganti orationis vi praecipuos Graecorum Ephorus equiparasse, siquidem excellenti vir iudicio

Dio Chrysostom. Orat. XVIII. p. 258. C. τὸ ἔπιον καὶ ἀραιμέ-  
ρον τῆς ἀπαγγελίας supinum eius ac remissum dictionis genus  
fuisse adfirmat. Monuit et hoc Gerh. Io. Vossius L. I. Hist. Graec.  
c. 7., cui adde Nostrum infr. L. XVI. 77. et I. 39. WESS.

331. 26. Pro γροαγῆ repono ἐπιγροαγῆ. STEPH. in Add.

331. 29. Ἀπὸ τοῦ σχήματος Τριναζία ] Illustrantur om-  
nia haec a Ph. Cluverio L. I. Sicil. Antiq. c. 2. WESS.

331. 35. Πελωριάδος ] Πελωρίδος Cl. Vid. supr. IV. 87.  
WESS.

331. 38. Σταδίων χιλίων ἑκατὸν ἐξήχοντα ] Nunc nume-  
rus stadiorum IV M. cccclx, cui vulgati libri xx detraxerant,  
egregie constat. Ipse insulae ambitus in veteram scriptis mire dif-  
fert, his amplior, aliis contractior, quo de Cl. Salmas. in Solin.  
p. 95., et omnium accuratissime Ph. Cluverius I. Sicil. A. c. 3.  
p. 53. WESS.

331. 40. Φήμις — παραδεδομένης τοῖς ἐγγότοις ] Hoc,  
aut ἐγγότοις praestat. Infr. c. 46. τῆς φήμις ταύτης τοῖς ἐγγό-  
τοις παραδιδουμένης αἰ. Cicero IV. Verr. c. 48. *Vetus haec  
opinio est, quae constat ex antiquissimis Graecorum literis at-  
que monumentis, insulam Siciliam totam esse Cereri et Liberae  
consecratam. Hoc cum ceterae gentes sic arbitrantur, tum ipsis  
Siculis tam persuasum est, ut animis eorum insitum atque innat-  
um esse videatur.* WESS.

331. 44. Ὑπὸ Διὸς ἀνακαλυπτήρια τῆ νύμφῃ δεδύσθαι ]  
Mallet ἀνακαλυπτήρια. Plutarch. Timoleon. p. 239. D. εἶναι  
γὰρ ἰεὸν τῆς Κόρης τὴν Σικελίαν. ἐπεὶ καὶ τὰ περὶ τὴν ἀνα-  
γλὴν αὐτῶν μιν ποιοῦσιν γενέσθαι. καὶ τὴν νύμφον ἐν τοῖς γάμοις  
ἀνακαλυπτήριον αὐτῆ δοθῆναι. Appellant ἀνακαλυπτήρια ter-  
tium a nuptiis diem, quo nova nupta amoto flammeo propinquis in  
conspicuum veniebat, atque illa etiam dona, quae tum recens  
nuptae dabantur; quod cum uberius Ger. Langbaenius ad Longi-  
num de Sublimi Dict. c. 4. p. 35. et Ezech. Spanhem. in Callimachi  
H. Dian. v. 74. declaraverint, verbum non amplius addam. Opor-  
tet tamen, mire Iupiter complexus Proserpinam sit, qui univer-  
sam illi Siciliam (deparcum enim nimis facit Schol. Pind. Od. XIV.  
14. Olymp., asseverans τὴν Ἀζράγαντα τῆ Περσεφόνη εἰς τὰ  
ἀνακαλυπτήρια ἐπὶ Διὸς δοθῆναι, poëtaeque suo obloquitur Od  
I. 17. Nemcon.) Thebasque insuper ἀνακαλυπτήρια, quod Eu-  
phorion in schol. Euripid. Phoeniss. v. 687. prodidit, praeterea-  
que Cyzicum dotis nomine, ἐμπροΐκιον apud Appian. Mithrid. p  
371., contulerit. WESS. Tueor ἀνακαλυπτήρια. nam sic quoque δι-  
δακτρον, μήνυτρον et similia dicuntur. REISK.

331. 46. Οἱ ῥοιμιώτατοι τῶν συγγραφέων ] Vid. supr. I.  
6. WESS.

331. 52. Ἀλλὰ τὰ γ' ὕσπαστα καὶ ἀνήροτα ] Odyss. I.  
109., quem versum, obiter ut id addam, frequentissime adhibent

de ea rerum abundantia, quae nullo labore parta sponte sua nascitur, Lucianus de Merc. Cond. c. 3. Phalarid. II. 8. Philostratus Imagin. c. 9. p. 775., ubi prave ἀνήρωτα, Basilius M. T. II. p. 68. D. WESS.

331. 55. Ἐν τε γὰρ τῷ Λεοντίῳ] Omnium hic ager uberimus erat, et caput rei frumentariae, ut Cicero ait III. Verr. 18., sedesque olim Cyclopum et Laestrygonum, de quibus Homerus l. c. Confer Ph. Cluver. L. I. S. A. c. 10. p. 129. et Ezech. Spanhem. ad Callimachi H. Dian. v. 56. WESS.

331. 73. Τοὺς — χύνας μὴ δύνασθαι στειβεύειν] Aristoteles Admirand. p. 723. cum de liliis ceterisque floribus, quibus campus hic vestitus, dixisset, ἂ τὴν σύνεγγυς χύουαν, addit, ἐδώδιός πλιθοῦ, ὥστε τοὺς κεννηγετοῦντας, τῶν κυνῶν κρατουμένων ὑπὸ τῆς ὀδμῆς, ἐξασυραταῖν τοὺς λαγῶς ἰχνεύειν. hunc sequitur Diodorus, ut saepe alias. WESS.

Ibid. Στειβεύειν] Στειβεύειν Cl. 2. Conf. supr. IV. 12. WESS.

332. 75. Ἔστι δὲ ὁ προσηρημένος λειμὼν ἄνωθεν μὲν etc.] Diceret haec e Cicrone L. IV. Verr. c. 48. deprompta et versa, Et raptam esse Liberam, quam eandem Proserpinam vocant, ex Eunnensium nemore: qui locus, quod in media est insula situs, UMBILICUS Siciliae nominatur, et post pauca: Euna autem — est loco praecelso atque edito, quo in summo est aequata agrī planities et aquae perennes, tota vero ab omni aditu circumcisa atque diremta est. quam circa lucus lucique sunt plurimi, et laetissimi flores omni tempore anni, locus ut ipse raptum illum virginis, quem iam a pueris accepimus, declarare videatur. Etenim propter est spelunca quaedam, conversa ad Aquilonem, infinita altitudine, qua Ditem patrem ferunt repente cum curru exstitisse, abreptamque ex eo loco virginem secum asportasse etc. quae summi Oratoris verba, conpluscula licet, negligenda non sunt visa. Alia post diligentem Ph. Cluverii operam collegit Ezech. Spanhem. in Callim. H. Cerer. 15. WESS.

332. 76. Ἐὐνδρος] Ἐρνδρος R. Cl. 2. non male. Cicero huic agro aquas perennes tribuit. WESS.

332. 82. Δι' οὗ μινθολογοῦσι τὸν Πλούτωνα etc.] Solinus c. 3. Quem propter (Eunnensem campum) est demersum foramen, qua Ditem patrem ad raptus Liberae exeuntem fama est lucem hausturum: quae ex Diodoro ad verbum expressa Cl. Salmas. Exercit. p. 77. adfirmat: mihi Ciceronianis videntur propiora. Mex δι' ὄλον τοῦ ἐνιαυτοῦ παραμένει θάλλοντα Ph. Cluverius L. II. Sic. Antiq. p. 316. concinnius arbitratur; Diodorum quippe, ut Agyrinensem, non fama, sed experientia haec explorata habuisse; cui non refragor. WESS.

332. 83. Ἐπελθόντα Co. M., vulgo εἰσελθόντα parum op-

portunc. Ph. Cluver. correxerat *ἔξειθόρτα* L. II. p. 316., quo non indigemus. WESS.

332. 90. *Καὶ κατασκευάζειν κοινῇ τῷ Αἰὶ πατρὶ τὸν πέπλον*] Non de *floribus*, ut vir doctissimus; vix enim inde toga contextetur: sed bysso, similive materia, e qua collato opere pepulum Iovi Proserpina, Minerva et Diana veteri more texuerunt. Addi autem Iovis hic *πέπλος* et Herculis ex L. IV. 14. poterit illis scriptorum locis, quae plena manu eoacervavit Ezech. Spanhem., ut *peplum* virile vestis quoque genus fuisse contra Pollucem vinceret, ad Iulian. Caesar. in Notar. conprobationibus p. 125. WESS.

332. 96. *Τοὺς δ' ἐγγωρίους πόλιν ἀντῆ καθιερωῶσαι etc.*] Nusquam reperitur Siciliae urbs, quae *Athenaei* nomine fuerit insignis: quare *falli heic putat nostri seculi geographos, qui τὴν πόλιν intelligunt dictam fuisse una cum agro Ἀθήραιον, cuius sane nulla alias apud rerum scriptores vel geographos exstet mentio. Ipsam autem Ἰμέραν Minervae ab incolis videri consecratam, et agrum circumiacentem dictum fuisse Ἀθήραιον ab incolis*, Phil. Cluver. II. Sic. Antiq. p. 285. Cuius sententia si valeat, ut similis profecto veritati est, praestaret, *τοὺς δ' ἐγγωρίους τὴν πόλιν ἀντῆ καθιερωῶσαι*. Coluerunt certe Himerenses Minervam, numisque inscriptam aliis ostentarunt, quemadmodum in Parutae T. XCIII. De fontibus calidarum aquarum, qui Herculis tempore a Nymphis fuerint eo in tractu aperti, supr. IV. 29. WESS.

332. 99. *Τὴν ἀπ' ἐκείνης Ὀρτυγίαν ὑπὸ τε τῶν χρησιμῶν etc.*] Dianae studiosissima Syrinx.

— *Ortygiam studiis, ipsaque colebat  
Virginitate Deam.*

in Ovidii I. M. v. 694. Oraculum, quo insulae hoc nomen firmatur, dabit Pausan. V. 7. WESS.

332. 6. *Ἰερὸς ὄντας καὶ ἀθίκτους ἀνθρώποις*] Lex eos capi vetabat. *Ἐν ταύτῃ τῇ νόσῳ οὐτ' ἀρίσασθαι, οὐτ' ἰχθῦς λαμβάνειν νόμος* Critici aiunt ad Pindari Od. I. Nemeon. princip. Hinc fiebat, cum et superstitione quadam cibos illis largissime dividerent, ut vocati adnatarent, et cibos e largientium manibus intrepide caperent, quod de anguillis in hac Arethusa praeter Plutarchum T. II. p. 976. A. memoriae prodidit Aelianus VIII. H. A. c. 4., de aliis vero in Arethusa Euboeae prope Chalcidem sese non sine admiratione observasse significat Athenaeus L. VIII. p. 331. WESS.

332. 8. *Παραδόξως ἐπεσήμηνε τὸ θεῖον*] Adscripserat excerptis Cod. Reg. vir doctus, *an ἐπιμήρησε?* suspicatus vitii aliquid in hoc verbo inolevisse: sed id bene habet. *Ἐπισημαίνειν* ostentorum est, cum malum portendant. Lucian. II. Hist. Ver. c. 41. *τίματα ἡμῖν μεγάλα καὶ θανάσια ἐπεσήμαιεν*. Deorum etiam

atque Heroum, qui irati futuram calamitatem signis ostendunt: Philostratus Heroic. c. 2. 9. εἰ μὲν γὰρ κεκοιμημένοι γαίνοιτο, ἀνχομὸς ἐπισημαίνουσι τῇ γῶργι. Pausan. III. 12. p. 236. Ταλθυβίον δὲ τούτου μῆνιμα — Λακεδαιμονίοις μὲν ἐπεσήμαινεν. Plura fortasse ad L. XI. 35. WESS.

332. 10. Ἀναγράφομεν ἐν τοῖς οἰκείοις χορόοις] Vide L. XIV. 63. 71. WESS.

332. 16. Ἀποκομίσαι τὴν Κόρην — πλησίον τῶν Συρακ.] Cicero L. IV. Verr. c. 48. Abreptamque ex eo loco virginem secum asportasse Ditem patrem, et subito non longe a Syracusis penetrasse sub terras, lacumque in eo loco repente exstitisse: ubi usque ad hoc tempus Syracusani festos dies anniversarios agunt, celeberrimo virorum mulierumque conventu. Mox πανήγυρον συγκροτοῦσι ex Reg. locum capessere posset vel ob hoc Iosephi II. Bel. I. 21. 1. τετρακοσίων ἀνδρῶν στήθος συνεκρότησεν, nisi scriptoris perpetua consuetudo obstat. Vid. L. IV. 62. XI. 29. XVI. 92. XVII. 16. et de Cyane XIV. 72. WESS.

333. 22. Ταύρους συνθυάζουσιν ἐν τῇ λίμνῃ] Manifestum hoc σφάλμα est. Quod etsi corrigi potest per συνθυσιάζουσιν, tamen animus huc magis inclinatur, ut βυθίζουσιν recipiendum arbitretur. Ad quod momenti etiam nonnihil affert praepositio ἐν, cum παρὰ sacrificandi verbum postulet. RHOD. Δημοσίᾳ δὲ ταύρους βυθίζουσιν] Bene Rhodom., cui scripti libri adstipulantur. Genus sacrificii frequens olim erat. Harpocration Κάθειτος, ὁ καθιέμενος εἰς τὸ πέλαγος ἀμυγός. ubi H. Valesius plura dabit. De Hercule, sacri huius auctore, L. IV. 23. WESS.

333. 27. Λαμπάδος ἐκ τῶν κατὰ τὴν Αἴτνην κρατήρων ἀναψυμι.] Cicero IV. in Verr. c. 49. Quam Proserpinam cum investigare et conquirere Ceres vellet, dicitur inflammasse tuedas iis ignibus, qui ex Aetnae vertice erumpunt. Quae Oratoris τοὺς κατὰ τὴν Αἴτνην κρατήρους optime declarant. Lucretius de Aetna loquens L. VI. 701. paullo aliter:

*In summo sunt ventigeni crateres, ut ipsi*

*Nominant, nos quas fauces perhibemus et ora.*

Hos, cum prima vice Siciliam adiret, spectatum profectus Plato est, κατὰ θείαν τῶν κρατήρων Diogenes ait III. 18., pro quibus Athenaeus L. XI. p. 507. B. τῶν ὀρέων χάριν, quod idem. Neque enim audiendus Aldrobandinus, qui Athenaeum eo verbo Scyllae Charybdisque in freto Siciliensi miracula potius, quam Aetnaeos ignes ostendere voluisse arbitratur. Pumices ἐκ τοῦ ὀρέου τοῦ ἐν Σικελίᾳ apud Theophrastum de Lapid. p. 394., et ὁ ἐν Αἴτνῃ ὀρέος in Aristot. Admirand. p. 719. omnia alia docent. Conf. infr. L. XIV. 59. WESS.

333. 33. Ὁ δῆμος — εἰμήσαν τὴν θεὸν] Noli optimis schedis obniti. Infr. XV. 28. ὁ δὲ δῆμος μετεωρισθεὶς — συγκαισειήσαντο. et c. 63. ὁ γὰρ Ἀθηναίων δῆμος — — τὴν τῶν



Θηβαίων ἰσχὺν οὐ κατεπλάγησαν. et huius libri c. 7. et 10. Qua numeri enallage nihil familiaris. S. Paullus I. Corinth. XVI. 15. οἴδατε τὴν οἰκίαν Στεφανᾶ, ὅτι — — εἰς διαζορίαν τοῖς ἁγίοις ἔταξαν ἑαυτοῖς. Eunapius Vit. Proaeres. p. 153. τὸ δὲ ἔθνος ἐπὶ ποιητικῇ σφόδρα μαίρονται. Alia supra II. 19. WESS.

333. 35. Α — ἐγένοντο ] Ἐγένετο Co. M. haud male quidem. Vide tamen supr. I. 93. II. 36. III. 21. WESS.

333. 45. Τῆς μὲν γὰρ Κόρης τὴν καταγωγὴν ἐποίησαντο ] Videtur καταγωγῆς vocabulum sollemne hae in re fuisse. Veneris quidem certe καταγωγὴν Erycini, cum suam in urbem eam redire sibi persuadebant, observabant, καταγώγια propterea eum diem adpellantes, quemadmodum eum, quo in Africam abire putabatur, ἀναγώγια apud Athenaeum IX. 11. Atque haud scio, an huc pertineat Hesychii Κοραγεῖν, τὸ τὴν Κόρην ἀπάγειν. ut sacrum sit verbum, quo raptam abductamque Proserpinam designent. Ipsa sollemnitas a Proserpina Κόρη, Syracusis Κόρεια, seu, quod verius, Κόρεια dicebatur, Plutarcho Dion. p. 982. E. auctore; quo nomine et ludi per Arcadiam erant, obiter memorati a Criticis veteribus ad extremam Od. VII. Olymp. Pindari. WESS.

334. 49. Ὅσιν ἐκός ἐστι ] Aut subaudiendum reliquit Diodorus κατὰ, ut sit καθ' ὅσιν, aut scripsit μεθ' ὅσιν. STEPH. Si cui non placet καθ' ὅσιν, ut H. Stephanus explet, is legere poterit ὅσον, vel quod potius, ὅσας, quod nimirum τὰς χάριτας respiciat. RHOD. Mallem ὅσιν, ut referatur ad ἀγρείαν et σπονδήν. Conf. Cicer. IV. Verr. c. 49. WESS.

334. 55. Ἔθος δ' ἐστὶν αὐτοῖς — — ἀσχρολογεῖν ] Morem repetunt a Iambe, quae moestae Cereri suis dieteris risum moverit; διὰ τοῦτο ἐν τοῖς Θεσμοφορίαις τὰς γυναικας σκόπτειν λέγουσιν, Apollodor. ait L. I. 5. 1. Quo festo Cereris die invicem se convitiis feminae laeessabant; unde, quod monere haud neglexit Io. Meursius Graec. Feriat., Cleomedes II. Meteor. p. 203. Epicureorum sordidas, et paene e lupanari petitas voces, similes adfirmat τοῖς λεγομένοις ἐν τοῖς Δημιουργίαις ἐπὶ τῶν Θεσμοφοριαζόντων γυναικῶν, quippe quae obsceneissimae omnium. Nec se duntaxat feminae maledictis lacerabant, sed et mares, vicem illis egregie reponentes, quod in Mysaeo prope Pellenen Thesmophorium die fieri testis est Pausan. extremo L. VII. Atque hae sunt ἀσχρολογίαι πρὸς ἱεροῖς, de quibus Plutarch. de Orac. Defectu p. 417. C. et Aristides T. II. p. 276. etc. WESS.

334. 62. Καρχῆρος μὲν γὰρ ὁ τῶν τραγωδιῶν ποιητῆς ] Fuit eo nomine poeta Tragicus, domo Agrigentinus, fuit et Atheniensis: uter intelligatur, certo finiri non potest: sum tamen in Agrigentinum pronior ob ea quae de Syracusana eius mora adnectuntur. Agit de utroque H. Vales. ad Harpocrat. Καρχῆρος, et Io. Meurs. in Biblioth. Attic. WESS.

334. 66. Κατεχόρισεν ἐν τοῖς ποιήμασι] Vide L. I. 31.

WESS.

334. 72. Μαστήρ' ἐπελθεῖν πᾶσαν] Illustrat hoc μαστήρος vocabulum St. Berglerus in Aleiphron. I. Epist. 11., et T. Hemsterh. ad Lucian. D. D. XXVI. p. 285., quos vide. WESS.

334. 73. Σικελίας πάγοις] Lege Σικελίαν. RHOD. Citra dubium vera est Rhodomanni coniectura: nec aliud visum Hugoni fuit Grotio, ita citanti et elegantissime vertenti in Not. ad Excerpt. Tragoed. p. 1003. WESS.

334. 82. Θεσμοφόρον ἐπονομασθήναι] Dixit L. I. 14. et infr. c. 68. WESS.

334. 92. Ἀπό τινος Σικανοῦ ποταμοῦ] Ph. Cluver. I. Sic. Antiq. c. 2. p. 26. et S. Bochart. I. Phal. c. 30. haec explicant uberius. WESS.

335. 98. Ἐπὶ τῶν ὄχρωιότατων λόφων τὰς πόλεις etc.] Perpetua ea consuetudo fuit rudi aevō. De Oenotro Dionysius I. Ant. Rom. p. 10. ὄξισε πόλεις μικρὰς καὶ συνεχεῖς ἐπὶ τοῖς ὄρεσιν, ὅσπερ ἦν τοῖς παλαιοῖς τρόπος οἰκίσεως. condidit oppida parva et contigua in montibus, qui urbes condendi veteribus mos erat. Quare Graeciae urbes antiquissimae, Thebae Athenaeque, in excelsioribus collibus primam sedem habuere; censueruntque urbem ἄστν dictam Grammatici παρὰ τὸ ἴσασθαι, quod in montibus aut eminentioribus tumulis olim essent: ἐπὶ μετεώρου γὰρ κεῖνται αἱ πόλεις Schol. ait in Apollon. I. 696. WESS.

335. 5. Καὶ πολλοῦ — ῥύακος ἐκχυθέντος] Scriptis Codd. repugnare nolui, praesertim cum ῥύαξ non crateres tantum Aetnae, sed et ignis e montis vertice profluvium notet. Lycurgus in Leocrat. p. 159. λέγεται οὖν ἐν Σικελίᾳ ἐκ τῆς Αἴτνης ῥύακα πνρὸς γενέσθαι. Hermogenes II. Invent. p. 107. ἐνταῦθα ἐλαθεν πλησίον οὗσα ἡ Αἴτινη. καὶ ἰὸς πνρὸς ἔχει ῥύακας. A quo vicina omnia exurente fluente, proximum monti tractum, squalidum et siccum admodum, ῥύακα πνρὸς adpellabant apud Appian. L. V. Bell. Civil. p. 1165. Dedi praeterea manu exaratis libris, ut suam in sedem rediret συνέβη σφραγήναι τῆς γῆς ἐπὶ πολλὸν τόπον. cui per ellipsin expresso non admodum dissimile est infr. c. 9. πλεύσαντες τῆς Σικελίας εἰς τοὺς τόπους. quo modo Diodorus saepe alias. WESS.

335. 11. Ἐκ τῆς Ἰταλίας τὸ τῶν Σικελῶν ἔθνος] Eadem habet Dionysius L. I. Ant. Rom. p. 17. WESS.

335. 18. Ὑσταται δ' ἀποικία τῶν Ἑλλήνων] De his Thucydides copiose princip. Lib. VI., et qui cum exponit Ph. Cluverius I. Sicil. Ant. p. 37. WESS.

335. 24. Σικελιωῦται προσαγορευθέντες] Mallem in Latinis Sicilienses, aut, voce Graeca servata, Siciliotae. Alioqui discrimen inter Σικελούς et Σικελιώτας tolletur plane, quod tamen auctor diserte signat. Σικελοὶ proprie sunt οἱ ἐκ τῆς Ἰταλίας· οἱ δὲ

ἐπίλυδες Ἑλληνές εἰσι Σιζελιῶται, ut Imper. Constantinus ait de Themat. Imp. Lib. II. Them. 10., etsi deinceps id cognomen cum omnibus insulae incolis communicatum videtur. WESS.

335. 26. Μεταβιβάζομεν τὸν λόγον] Alibi passim μεταβιβάζομεν scriptum est in huiusmodi genere loquendi. STEPH. Recipe futurum indicativi. Non enim adhortatio est, sed simplex propositio seu indicatio rei deinceps tractandae. Idem etiam alibi in mendosa coniunctivi descriptione huius verbi observandum. RHOD.

335. 30. Καὶ Ἐρικώδης] Videtur Rhodom. censuisse delenda haec esse: praeteriit quidem certe inter vertendum; ut numerum tamen expleret, *Vulcaniam* ceteris addidit, distinctam ab *Hiera*: quod eius institutum laudari non potest. Recensent inter VII Aeolias *Ericodem* sive *Ericusam* Schol. Apollonii III. 40. Strabo VI. p. 424. atque alii, sic dictam ab ericarum multitudine, qua nunc quoque referta manet. De Aeoliarum numero discrepantes veterum sententias examinavit Ph. Cluverius II. Sic. Ant. c. 14. WESS.

335. 31. Ἴερά Ἡραίστου] Male ita scribi Ioach. Kuhnius insulae nomen contendit; oportere enim Ἴεραν idque monuisse Hesygium, sed integrum; nam corruptum habere Ἴερας, σημεῖον pro σημεῖωσον, i. e. nota Ἴερα, nomen insulae, ne confundatur cum ἱερά, sancta. Sic ille ad Pausan. X. 11., cui etsi non consentiant Graecorum libri, quibus Ἴερά semper fere haec insula, neque faveat admodum Hesygius, satis, ut ego quidem opinor, hac parte integer: σημεῖον enim adpellare signum videtur, quod in extispicio haruspices notabant, ut in Διψάς, Δοχεῖον, Ἐγγύη, pluribusque aliis in locis; tamen non repugnabo, ut proprium insulae nomen a communi vocabulo tanto melius discernatur. WESS.

336. 41. Καὶ βρόμος ἐξαισῖος] Contende cum his, quae ex Calliae L. X. Rer. Agathoelis exscripsit Schol. Apollonii Rhod. III. 40. IV. 764. quaeque Strabo disputat L. VI. p. 423. post Aristotelem L. II. Meteor. c. 8. WESS.

336. 50. Αἰπαρὸν Ἄυσονος — νῖον] Non dissimilia Stephanus in Αἰπάρου et Eustath. ad Dionys. Perieg. v. 461.; Diodorus superiore libro c. 69. alios et diversa quidem opinatos exscripsit auctores. WESS.

336. 58. Καὶ τοὺς λαοὺς κοινῇ μετὰ τῶν etc.] Hoc egregium. Vulgatum ἄλλους exscriptorum errore hinc natum, ut saepe. Vid. supr. III. 43. IV. 55. WESS.

336. 65. Πρὸς ὃν μυθολογοῦσι τὸν Ὀδυσσεῖα etc.] Homerus Odyss. K, 2. quem vide: versus enim poetae illustrat. WESS.

336. 68. Καὶ ἀπὸ τῆς τοῦ πυρός etc.] Pro πυρός videtur legendum ἀέρος, ex aeris etc. RHOD. Noli viro doctissimo adstipulari. Martianus Capella L. VI. p. 208. In qua Aeolus regnasse fertur, et a flamma in proximum prorumpente, vel eius fumo,

*qui ventus flaturus esset, intellexisse, quod hodie quoque eius loci incolae certum est praesentire.* Nec dissentit Strabo L. VI. p. 423., meritoque adeo Rhodomanni correctionem sprevit Cl. Salmas. in Solin. p. 96. Scripsi praeterea τοῖς ἐγγυωρίοις: neque enim Aeolus ventos indigenas, sed civibus, qui flaturi erant venti, declarabat. WESS. E fumo insulae Strongylae, quinam futuri sint venti, in triduum praedicere incolae traduntur Plin. l. 3. c. 9. REINES.

336. 70. Ἐξ οὗ ταμίαν αὐτὸν εἶναι τῶν ἀνέμων] In Poetae Odyss. K, 21., qui quoque sex illi filios tribuit v. 6. WESS.

336. 72. Φίλον τῶν θεῶν ὀνομασθῆναι] Hom. Od. 10. φίλος ἀθανάτοισι θεῶσι. REINES.

336. 76. Ἰοκάστην καὶ Ἀγάθουρον] Lege Ἰόκαστον ex Callimacho, cuius versum citat Tzetzes ad Lycophron. v. 45. Ῥήγιον ἔστυ λιπὼν Ἰοκάστου Αἰολίδαο.

Et ex his locis Callimachi et Diodori corrigendus Eustathius ad Dionysium Periegeten v. 476., ubi pro Ἰόκαστον Ἀκαστον Αἰόλου nominat. PALM. Ἰόκαστον] Faciunt cum viro erudito Clarom. Codd., quos sequor. Paraphrastes Dionysii v. 462. εἷς δὲ τῶν νύϊων (Αἰόλου) ὧν Ἰόκαστος Ῥήγιον ἐκτίσε, τὴν πρόωγην Ἐουθραν καλουμένην, ὡς Καλλιμάχος, Ῥήγιον, καὶ τὰ ἐξῆς. Eustathii Ἀκαστον correxit quoque Ph. Cluverius L. IV. Ital. Ant. p. 1297. WESS.

336. 79. Τῆς Ἰταλίας ἀντεχόμενος] Vertuntur haec obscurius peiusque negliguntur a Veneto. ἀντέχεσθαι τῆς Ἰταλίας est pertinacissime illi inhaerere, eiusque imperium capessere. Infr. L. XIV. 97. Lacedaemonii ἐγνωσαν ἀντέχεσθαι τῆς θαλάττης, decreverunt maris imperium, quod reciperarant, studiosissime retinere. Sic Κριώσσιοι τῶν πρωτείων ἀντείχοντο in Excerpt. Vales. p. 353. et Philippus ἀντέχεσθαι τῶν κατὰ τὴν Ἰλλυρίδα πραγμάτων ἡξίον in Polybii V. 101. WESS.

337. 85. Πρὸς ἄλληλα διεγέροντο — ἐπίζουον] Iure quis hic putet Diodorum scripsisse διεγέροντο, non διεγέροντο, non adeo ob vulgatissimam Graecorum consuetudinem neutra pluralia cum verbis singularibus construendi; sed quia insequitur ἐπίζουε. Si τὸ ἐπίζουε abesset, satis tolerari posset τὸ διεγέροντο, quamvis praecedat τὰ ἔθνη plurale neutrum. Ita Aelianus IV. Ποικιλ. cap. 14. τὰ συναχθέντα χορήματα εἰς πρόνης γυναικὸς ἔντερον καταίρουσι. Mallem enim retinendo τῶν καταίρουσι subscribere hic Cl. Kuhnio, quam cum Cl. Scheffero id sollicitare. Ita idem L. IX. 16. οὐ πιστὰ δοκοῦσιν. Ita alii alibi. At vero, uti dixi, quia sequitur ἐπίζουε, videtur insolens. Haec Cl. Iensius Epist. ad I. G. Graevium p. 413. Ego quod in oratione insolens et minus concinnum videbatur, tametsi defendi fortasse posset his Eunapii in Oribasio p. 174. ταῦτα μὲν οὖν εἰσι καὶ οὕτως ἔχει, auctoribus libris mutavi. Solent Graeci in hoc genere saepe variare, praecipue Noster. Vide supr. I. 93. II. 36. III. 21. V. 4.

et Herodot. II. 96. Arrian. IV. Exp. Alex. p. 181. et Indicor. c. 34. p. 349. cum notis Iac. Gronovii, praetereaque Hutchinson. in Xenophont. Agesilaum p. 76. et Is. Casaub. Animadv. Athen. VIII. 3. WESS.

337. 90. *Ξοῦθία προσαγορεύεται*] Habet hoc nomine urbem Siciliae ex Philisto Ethnographus; quae huc viciniae fuerit, an longius remota, non constat. Conf. Ph. Cluver. I. Sicil. A. c. 10. et Cl. Havercampum, qui Xuthum in Leontinorum numo reperisse sibi visus est, ad Parutae Numism. p. 566. WESS.

337. 93. *Ἀγάθουρον*] *Ἀγάθουραν* Mut. quo vulgatum non posterius. Vid. P. Cluver. II. Sic. c. 5. WESS.

337. 3. *Καὶ μᾶλλον* desunt Co. mallet copulam neglexisset solam, ut supr. IV. 54. WESS.

337. 5. *Τῶν κατὰ τὴν Ἀσίαν βασιλέων*] *Lydos*, puto, intelligit, quorum Alyattes Graecis per minorem Asiam civitatibus hoc tempore molestissimus erat, teste Herodoto I. 16. WESS.

337. 7. *Ἦέντεθλον τὸν Κριδίον*] Meminit eius ex Antiochi Syracusani Reb. Siculis Pausan. X. 11.; qui coloniae cum dux esset, propterea Lipara *Κριδίον ἔποικος* Thucydidi III. 88. et Straboni VI. p. 422. B., tametsi inter colonias et Rhodii essent. *Epiteldas*, qui Olymp. L. stadio vicit, *Ἐπιτελίδης* in Dionysii IV. Ant. Rom. c. 1., sed, quod Noster, Laconicum magis est. WESS.

337. 11. *Ἔς τοὺς κατὰ τὸ Αἰλίβαιον τόπος*] Pausanias l. c. ad Pachynum adpulsos ex Antiocho refert, victosque ab Elymis et Phoenicibus Liparam ceterasque Aeolias occupasse, eiectis incolis. Uter veriora tradiderit, Antiochusne an Diodorus, in tanta harum rerum caligine, quis decernet? Pertinent huc quae a Ph. Cluverio II. Sicil. Antiq. p. 403. disputantur. WESS.

337. 12. *Ἐγχεταίους*] Conf. supr. IV. 23. WESS.

337. 24. *Τῶν Τυρρηνῶν λιστενόντων*] Vide infr. c. 40. WESS.

338. 34. *Ἐνίκησαν τοὺς Τυρρηνούς*] Celebrat Liparensum has victorias Pausanias l. X. 16., donaque memorat Apollini Delphico in earum memoriam consecrata, quemadmodum et Strabo VI. p. 422. C. WESS.

338. 38. *Ἐλαβον*] *Ἐλαβεν* R. Mut. V. Vid. supr. c. 4. WESS.

338. 42. *Πρὸς ἕγλειαν τῶν ροσοῦντων*] Insulae *Θερμὰ ἕδατα* Strabo haud neglexit, de vi medica nihil addens. Plinius l. XXXI. H. N. c. 16. *Nec vero omnes, quae sint calidae, medicatas esse credendum, sicuti in Segesta Siciliae, Larissa, Troade, Magnesia, Melo, Lipara.* WESS.

338. 50. *Οὐδαμοῦ γὰρ τῆς οἰκουμένης τῆς στυπηρίας* etc.] Errat Diodorus. Alumen non in Melo tantum et Lipara, sed in Sardinia, Phrygia, Armenia atque Aegypto proveniebat, ut Dioscorides l. V. 123. docet: quorum quidem Melinum et

Aegyptium frequentis olim usus in re erat medica, saepe propterea memoratum ab Hippocrate de Ulcerib. p. 876. et seq. Quin in Aegypto tanta eius copia erat, ut Amasis *χίλια στυπτηρίης τάλαντα* Delphis, dona undiqae ad templi instaurationem colligentibus, dederit apud Herodotum II. 180., quo Historici loco quid Clarissim. Iac. Gronovius ex Cod. Medicaeo mutarit, haud quidem ignoro: nec sequor tamen; nam et *στυρίης*, quae *στυπτηρίης* locum eius imperio occupavit, Graeciae ignota vox est, et ex alumine divendito Delphi aequae pecuniam in usus templi quam ex *aromate odorato*, quod *στυρίη* dicitur notare, insumere potuere. Verum hoc obiter. Diodori errorem tetigit et Is. Casaubon. in Strabon. VI. p. 423. WESS.

338. 56. *Μικρὰ μὲν τὸ μέγεθος, καρποφόρος δὲ*] *Insulam incultam et tenuem*, cuius ager *miser atque ieiunus*, adpellat Cicero III. in Verr. c. 37., ut tanto acrius insulae depeculatore urgeret, credo: alioqui Liparae *γῆν ἔγκαρπον* praedicat Strabo. WESS.

338. 66. *᾽Οστέωδης ὀνομαζομένη*] Mela inter VII; Aeo-lias illi locum dedit L. II. 7. 123., notatus propterea a Ph. Cluverio II. S. A. c. 14., quem vide. WESS.

338. 71. *Οἷτοι δὲ παραχώδεις ὄντες etc.*] Bene Plato L. I. de Rep. p. 630. B. *τῶν μισθοφόρων οἱ πλεῖστοι γίνονται θρασεῖς καὶ ἄδικοι καὶ ἔβρισται καὶ ἀρρονέστατοι σχεδὸν ἀπάντων.* et Appian. IV. Bell. Civil. p. 1085., quem nunc non exscribo. Carthaginenses mercenario milite plurimum fuere usi, expertique saepe magno suo malo sunt, nihil eo magis infidum et ad turbas ciendas paratius esse. Huc spectant prudentissimi scriptoris Polybii monita, quibus res, bello inter Carthaginenses et mercenarios milites gestas, orditur L. I. 65. WESS.

339. 81. *Τῆς διαφορᾶς — ἔγκατοιμένης*] De rixa, ira, odio, bello, cum gliscunt, nihil tritius. Vid. XIII. 112. XIV. 77. XV. 92. XX. 33. et Polyb. II. 1. WESS.

339. 8. *Κρατίστους δὲ τοὺς ὀθόνια ποιοῦντας*] Hesychius, *Μελιταῖα, ὀθονία τινα διάφορα ἐκ Μελίτης τῆς νήσου.* Hinc *vestis Melitensis*, et Verri *Melita textrinum per triennium ad muliebrem vestem conficiendam fuit*, in Ciceronis II. Verr. c. 72. et IV. 46. Conficiebatur autem tenuissima haec vestis ex arborum lana, quae Graecis *ξριώζυλον*, nobis vulgo *Gossipium*, sicuti ex Quintino docetur in Cluverii II. Sicil. Ant. p. 436. WESS.

339. 11. *Κατεσκευασμένας — γείσσοις*] Male Schol. Vaticanus; melius Grammaticus in Biblioth. Coislin. p. 470. *Γείσιον καὶ γείσον, τὸ ἄκρον τεύχους ἢ στεγάνωμα οἶνον, καὶ γείσσα τευχῶν ἄκρα.* quo modo Euripid. Phoeniss. v. 1165. 1187. et Alexandrini Interpretes Ezech. XL. 43. ubi Hieronymus mire aestuat, neque, ut se expediat, invenit. De Martiano in Hieronymi T. II. p. 370. idem non iniuria dixeris. Iam, quod Cois-

lin. Cod. praefert, *γυψώμασι*, manifesta est vocis *κονιαμάτων* interpretatio. WESS.

339. 17. *Τοῖς τε βίοις ἀνέδραμον*] Sic L. XI. 72. de Syracusanis, qui brevi magnas sibi opes paraverant, *ταχὺ ταῖς οὐσίαις ἀνέτρεχον*, pro quibus *ταχὺ προσανέδραμον ταῖς οὐσίαις* L. XVI. 14. Quod prae manibus est, recurrit Ecloga II. L. XXXIV., ubi Carthaginienses ἐπὶ πολὺ τοῖς βίοις ἀναδραμόντες. Sumptum ab arboribus ceterisque videtur, quae in altum sese erigunt. Eunapius Excerpt. Hoesch. p. 12. *παῖδες δὲ αὐτῶν καὶ τὸ οἰκετικὸν πρὸς τε τὴν ἐγκρασίαν τῶν ἀέρων ἀνέδραμον*, i. e. *subolescebant egregie*. Adde eiusdem vitam Acacii p. 166. WESS.

339. 19. *Γαῦλος*] *PLEBS GAULITANA* in Thes. Gruter. p. ccccxv. 3. iustum verumque hoc esse confirmat. Vid. Inscript. Gauli cum Gualtheri Animadv. p. 864. et Ph. Cluver. II. Sicil. A. p. 444. *Γάβδος* et *Γαῦδος*, ut alibi insula adpellatur, scribentium peccato hinc originem traxerunt. WESS.

339. 23. *Ὁ μόνον τοῖς ἐμποροῖς ἀλλὰ καὶ etc.*] Absurdum non est *ταῖς ἐμποροῖς*, ut naves onerariae intelligantur: habet enim ex Nonno *ἐμπορον ἔδρην*, quae aliis *ἐμπορικῇ*, H. Stephanus Thesaur. T. III. p. 184., et sunt eius generis vocabula pleraque originis et formae adiectivae; nec recipio tamen, cum ex edito commodus sit sensus. Portus, qui mercatoriis navibus opportunus est, ipsis utique mercatoribus est accommodus. De Cercina, contra Africam posita, dixi ad Itiner. Anton. p. 518. WESS.

340. 29. *Αὕτη δὲ τῆς Λιπάρας παραλίας ἀπέχουσα σταδ. etc.*] Turpe vitium his ingeneratum esse dubitari non potest. Doctissimus interpres id quodam modo avertit; pravam tamen secutus rationem, eiecit, quae mordicus retinenda erant, servavitque, quod hinc longissime eliminandum est. *Quae a Lipara*, vertit, *C ferme stadia distat*. Atqui a Lipara longissime abest Ilva, toto Tyrrheno mari inde disparata. Distat ea insula a continenti stadiis circiter C, sicuti ad Anton. Itiner. p. 513. ostendi. Scripsit ergo Diodorus, *αὕτη δὲ τῆς παραλίας ἀπέχουσα σταδίους ὡς ἑκατὸν*, ipsa a continente stadiis C disiuncta est. quo fere modo Poggius Graeca expressit, ut merito suspiceris, eum suo in libro inportunum *Λιπάρας* vocabulum haud invenisse. Id mihi quidem certe exploratissimum est, vocem eam aut esse *παραδιόρθωσιν* sequentis *παραλίας*, aut ex superioribus intempestive in hanc sedem demigrasse; quam tamen tueri eam passus sum, quod Codd. scripti pertinacissime defenderent. Insulae nomen eodem modo Stephanus Byzantinus, a Berkelio et Gronovio recte correctus, explicat. WESS.

340. 34. *Πολλὴν ἔχοντος τοῦ μετ. δαυλίμων*] Melius erit *ἔχοντες*, cuius etiam in mentem doctissimo Rhodomanno venit. Quae vero hic disputantur de lapidibus in ferri massam eliquatis

haud bene respondent verbis Varronis apud Servium ad Aeneid. X. 174. *Nasci quidem in Ilva ferrum; sed in stricturam non posse cogi, nisi transvectum in Populonium, Tusciae civitatem: quibus similia Strabo V. p. 342., ubi Casaubonus egregie.* WESS.

340. 41. *Εἰς τε Σικαιαοζίαν]* Confer supr. IV. 22. WESS.

340. 45. *Τὰ μὲν εἰς ὄρ. τυπ. χαλκεύουσι, τὰ δὲ]* Sic correxerat in Addend. Rhodomannus, quod a scriptis libris cum firmetur, pro reiectaneo non habui. Solent alioqui in usu harum vocum multa saepe variare, ut alias ostendi. Vid. infr. XVIII. 70. WESS.

340. 50. *Ὡς τριακοσίουσ σταδίουσ]* Eadem Strabo V. p. 341. C. et de Corsicae nomine Pausan. X. 17. p. 838. WESS.

340. 54. *Ἔχει λιμένα τ. ὀνομ. Συρακούσϊον]* Habet hunc portum Ptolemaeus L. III. Geograph. c. 2., sed Romanorum more *Syracusanum* vocans. WESS.

340. 57. *Κάλαριν Φωκαῖσ ἔκτισαν]* Lege *Φωκαῖσ*. Millies erratum est in ea voce, et antiquorum plerique in eum lapidem impegerunt. Sed et aliud ulcus sanandum. Nam si ita Diodorus scripsit, non potest excusari, quin sit eius grave *μημοιζὸν σφάλμα*. Calaris enim numquam fuit Cynri insulae, quae postea Corsica dicta est, sed Sardiniae, ubi et adhuc durat nomen, et est nunc Sardiniae velut metropolis, sita ad mare meridiem et Africam versus longe a Corsica. Id non potuit ignorare suo tempore Diodorus. Nam T. Livius coevus Diodoro de ea civitate Lib. XXIII. 40. quater mentionem fecit, et ibi a T. Manlio Romanorum imperatore subductas naves ait, et ex tota narratione patet, eam a Romanis electam fuisse, unde bellum moverent contra Poenos, tamquam sedem belli et idoneam ad copias recipiendas, et ubi praetor Romanus habitaret. Ideo non credo Diodorum ita supine de ea civitate scripsisse, et eam a meridionali Sardiniae littore in Corsicam immenso errore transportasse. Ideo Herodoto auctore lego hoc loco audacter pro *Κάλαριν, Ἀλαλίην*. Sic enim ille antiquitatis Graecanae promus condus L. I. 165. de Phocaeis scribit: *πρὸς ταῦτα οἱ Φωκαῖεσ ἐστέλλοντο ἐς Κύρνον· ἐν γὰρ τῇ Κύρνω εἴζουσιν ἔτεσι πρότερον τούτων ἐκ θεοπροπίου ἀνεστήσαντο πόλιν, τῇ ὄνομα ἦν Ἀλαλίη· postea Phocaei Cynnum secesserunt; in Cynno enim 20. annis prius ex oraculo urbem condiderant, cui nomen erat Alalia.* Legendo *Ἀλαλίην* omnia quadrabunt. At de Calari (quam etiam Plinius inter urbes Sardiniae recenset Lib. II. cap. 108) omnia pugnant. Calaris enim a Poenis condita fuit. Claudianus de bello Gildonico v. 520.

*Urbs Libyam contra Tyrio fundata potenti*

*Tenditur in longum Calaris.*

Et haec credo sufficiunt ad firmandam nostram emendationem. PALM. *Κάλαριν Φωκαῖσ ἔκτισαν]* Quisquis haec Diodori conferet cum iis, quae de Alalia habet Herodotus I. 165., fatebi-



*tur Alaliam et Caralim idem esse oppidum. Nec est, quod quis putet hanc vocem in Diodoro esse corruptam: nam Florus etiam et Iornandes vocant Caralem, voce ex Carali deflecta. Itaque urbs fuit binomia. Prius nomen a Phocensibus impositum est Alalia, quod Romani scriptores mutarunt in Aleriam, et Zonaras in Ὀυαλερίαν Valeriam. Posterius Caralis, quod illi Poeni indidere. Haec S. Bochartus L. I. Phal. c. 32., quorum describendorum taedium devoravi, ut, quid pro vulgata dici posset, pateret. Ego eam corruptam esse non dubito: neque enim vir longe doctissimus probavit, in Corsica hoc nomine urbem fuisse. Florus, quo teste utitur, in mendo est L. II. 2., quod dudum viri egregii eluerunt. Flori pravam scripturam secutus Iornandes est, ut solet. Quis ergo alius opinioni auctor superest? Nec rescripsero tamen cum Palmerio Ἀλαλίην, quod id vocabulum longius distet a Calari, verum Ἀλαρίαν, ut Ph. Cluverius H. Sicil. Antiq. p. 507., aut Ἀλερίαν. Nicæa, quae huic iungitur, haud neglecta est ab Ethnicographo in Νίζαία, sicuti a plerisque aliis; Cluverius eandem putat ac Marianam coloniam, coniectura eleganti, sed dubia. Id bonum factum, quo Palmer. Φωκεῖς hinc ablegandos censuit. Consentunt res ipsa et scripti Codd., quibus repugnare temerarium est. WESS.*

341. 63. Φρομέντωρ τοῦτων δαυιλῶν] *Suspicio Diodorum scripsisse δαυιλῶς. Non nego tamen, τὸ δαυιλῶν valere posse. at ego ita suspicio. Sequitur paullo post, δαυιλῶς πάντα ταῦτα παρεχομένης τῆς χώρας, ubi aequè potuisset δαυιλῆ. Sic Io. Iensius Epist. ad Io. G. Graevium p. 415., cui praeiverat Rhodomannus, itidem δαυιλῶς in Addend. corrigens. Neutri accedo: adaeque enim comode adiectivum simili verborum in ordine adhibueris, quam adverbium. Noster supr. I. 34. πολλὰ δὲ ἄλλα — δαυιλῆ γέεται κατὰ τὴν Αἴγυπτον. et infr. c. 18. καὶ λίθους δαυιλῆς ἐπιτιθέουσιν. Iosephus I. Belli I. c. 21. 10. ἀλλὰ καὶ τοῖς ἔξωθεν τοῖχοις — — περιεχεῖσθαι πλοῦτον δαυιλῆ. Appianus Mithridat. p. 318. Κώων αὐτῶν ἀσμένων δεχομένων. quibus locis, plura enim nunc non stipabo, Appianus ἀσμένως, et ceteri δαυιλῶς, si animo ita libuisset, amplecti potuerant. WESS.*

341. 64. Τὰ Κέρνια ἀνδρ. διαφέρειν δοκεῖ τ. ἀλ. δούλων] *Strabo omnium nequissima et prorsus nulli rei esse tradit e Corsica mancipia L. V. p. 343.; prae se enim miram feritatem ferre ac indole esse belluina, proptereaque aut vitam gravari, aut, in ea si perseverent, impatientia ac stupiditate dominos obtundere. ἢ γὰρ οὐχ ὑπομένουσι ζῆν, ἢ ζῶντες ἀπαθεία καὶ ἀναισθησίᾳ τοὺς ἀνησαμένους ἐπιτιθέουσι. WESS. Strabonem I. V. vide, qui in Corsis mancipiis Romanos mirari τὸ θηριῶδες καὶ βοσκοματώδες scribit, idque de Sardis verum esse refertur ab Eust. in Dion. ita ut quod de his et de illis possit intelligi. REINES.*

341. 69. *Μικροῖς* St. m. Cl. C. M. quod verius, probatumque a Cluver. Sic. A. L. II. p. 503. WESS.

341. 82. Ὁ δ' ἀνὴρ ἀντὶς ἀναπεσὼν ὡς ροσῶν] De Tiberis Apollon. Rhod. II. 1013. similia plane.

Ἔρθ' ἐπεὶ ἄρ' κε τέκονται ἐπ' ἀνδράσι τέκνα γυναιῶνες,  
 Αὐτοὶ μὲν στενάρουσιν ἐνὶ λεχέεσσι πεσόντες  
 Κράατα δησάμενοι.

Quae Latina ex parte fecit Valer. Flaccus V. 150.

— — *Ubi deside mitra*

*Foeta ligat, partuque virum fovet ipsa soluto.*

Habet etiam Strabo de gentibus ad septemtrionem positis, quae ridiculum hunc morem firmant L. III. p. 250. A. WESS.

341. 86. Μέλι — παντελῶς γίνεται πικρὸν] Virgilius Eclog. IX. 30. *Sic tua Cyrraeas fugiant examina taxos.* Ubi Servius, *Taxus venenata arbor est, quae abundat in Corsica. Haec autem insula Graece Cyrne dicitur a Cyrno Herculis filio, unde fecit hanc derivationem Cyrraeas taxos. i. e. Corsicanas, quibus pastae apes mel amarissimum faciunt.* WESS.

341. 91. Τῷ μὲν μεγέθει παραπλήσιος τῇ Σικελίᾳ] Rhodom. vertentem, *Siciliam magnitudine adaequans*, reprehendit Ph. Cluver. L. I. Sicil. A. p. 57.; id enim noluisse Diodorum, sed *Sardiniam fere aequare magnitudine Siciliam.* Cui adstipulor. *Παραπλήσιος* id quod simile est, etsi non semper omni ex parte, exprimit. WESS.

341. 94. Ὀντων αὐτῶν πολλῶν ἐκ τῶν] Adstruunt his scripti Codd. *Θεσπίον* aut *Θεσπίων* vocabulum, mihi que persuadent, quinque haec vocabula ab hoc loco esse aliena, et in eum inprudenter inculcata ex sequenti versu. Aufer ea, et oratio, nunc aspera et impedita, uno lenique tenore decurret. WESS.

342. 3. Τοὺς μὲν λαοὺς ἀφ' ἑαυτοῦ προσηγ. Ἰολαίους] Confer L. IV. 30., ubi plura de hac colonia. WESS.

342. 5. Πρὸς βίον ἀνθ. εὐδαίμονα, ὧν ὑπομνήματα] Sic scripsit: superabant tenues reliquiae veteris ubertatis et felicitatis, quaedam praeterea indicia eorum, quae Iolaus ferebatur per insulam excitasse, quorumque meminit Aristoteles Admirand. p. 726. et Pausanias X. 17. WESS.

342. 18. Ἐτρεφον πολλὰς ἀγέλας βοσκημάτων] Abundant in insula arietes, qui lanae loco caprinum villum ferebant, victumque et vestitum Sardis uberem ministrabant, *Musmones* adpellati in Strabon. L. V. p. 344. Vestis, quae genti *mastruca*, quamque Hieronymus perstringit, principio libri in Luciferianos scribens, *nec ob Sardorum tantum mastrucam Dei filium descendisse*, vestis, inquam, ex musmonum pellibus consuta, id sibi proprium habebat, ut hieme calefaceret, aestate refrigeraret, si Aeliano de Animal. L. XVI. 34. fides est. Adde Hadr. Turnebum L. XX. Advers. c. 9. WESS.

342. 25. Ἀξιολόγοις δυνάμεσι St. m. aliique, quod probo. Vide tamen supr. IV. 66. WESS.

342. 29. Ἀχείρωτοι πολέμῳ δυνάμει δέκμενον] Nisi haec acceperis de Sardis, qui miseram in montanis insulae locis vitam agebant, uti superius L. IV. 30. indicatum fuit, falsa et Romanorum monumentis contraria erunt. Sardinia iugum victoris populi subiit, nec desierunt tamen *mastrucali latrunculi*, ut eos Cicero de Prov. Cons. c. 7. vocat, qui ex montibus egressi obviam quaevis agebant et ferebant apud Strabon. V. p. 344. Tiberius horum *latrocinii coercendis* quatuor millia Iudaeorum in insulam deportavit, ut notum ex Taciti Ann. II. 85. WESS.

342. 41. Ὀνομαζομένη Πιτύουσα] Duae erant communi hoc nomine, quarum altera Ebusus, altera Ophiusa, Strabo III. p. 254. At Plinius L. III. 5. *Colubrariam*, quae *Ophiusa*, a Pityusis distinguit, non satis ex vero. Mela extremo L. II. unam ponit *Ebusum*, a Diodoro non admodum dissentiens. WESS.

343. 52. Πόλιν ἔχει — Ἐρεσον] *Ebusus* aut *Ebesus* omnibus aliis audit. Quare Is. Casaubonus in Strabon. III. p. 254. et Cl. Salmasius in Solin. p. 198. mendi hunc locum arguunt, intercedente S. Bocharto L. I. Phaleg. c. 35. *Pro Ἐρεσον*, inquit, *plerique Ἐβροσον rescribi volunt. Sed rectum est Ἐρεσον, id est 𐤒𐤏 Erez. Atque id puto fuisse tam insulae quam urbis aliud nomen Phoenicium, quod Graeco Pityusae nomine responderit. Nam e duabus Pityusis quae maior est, id est Ebusus, Pityusa κατ' ἕξοχὴν vocatur a Livio, Diodoro, Plutarcho et Dioscoride. Neque factum est nomen a frutice pineo, id est, Chamaepety, ut in Plinio, sed a sylva pinea, ut in Marciano, vel ἀπὸ τοῦ πλείθους τῶν ἐν αὐτῇ φρουμένων πιτύων, a copia pinorum, quae in ea nascuntur, ut in Diodoro habetur. Res clara ex Dioscoride, qui de resinis pineis ita habet L. I. 92. κομίζονται δὲ διάφοροι ἐκ Πιτυούσης τῆς νήσου, ἧτις κέϊται κατὰ τὴν Ἰσπανίαν.* praestantissimae autem afferuntur ex insula Pityusa, quae Hispaniae obiacet. Porro id ipsam sonat 𐤒𐤏 Erez apud Phoenices. Hactenus Bochartus: cuius opinio a vero proxime abesset, si *Ebusi* nomen ab auctore adiunctum foret. Iam vero caussa exputari non potest, cur *Eresum*, insulae urbem, Punico nomine designare voluerit, neglecto notiore *Ebusi* cognomine. Itaque in alteram partem pronior sum. *Ebusum* alii Ἐβεσον, ut Dio Cassius L. XLIII. p. 258. B., nuncupabant: inde facilis descensus est ad Ἐρεσον. WESS.

343. 57. Ὅστερον ἔτεσιν ἑκατὸν ἐξήκοντα etc.] Non satis constat, quodnam primum Carthaginis initium Diodorus statuerit, neque adeo finiri coloniae huius tempus distincte potest. Si eos secutus sit, qui urbis eius excidium in annum, postquam condita erat, 1000XXXVII referebant, deducta haec colonia est, Numae regis aetate. Sed haec diligentius alias vestigabimus. WESS.

343. 60. *Αὐτὸ τοὺς ἐνοικοῦντας γυμνοὺς — βιοῦν*] Livio eadem mens Epit. L. LX. *Praeterea res a Q. Metello Consule adversus Baleares gestas continet, quas Graeci Gymnesias appellant, quia aetatem nudi exigant. Baleares a teli missu appellantur.* Quod addit Diodorus ἀπὸ τοῦ βάλλειν dictos videri *Bal-liares*, id Strabo XIV. p. 967. infitiat, e Phoenicium sermone natum id nomen indicans; e quo haud inepta coniectura eruit S. Bochartus L. I. Phal. c. 35. WESS.

343. 65. *Μετὰ τὰς ἑπτὰ νήσους, Σικελίαν etc.*] Timaei apud Strabon. XIV. p. 967. verba his Diodori simillima sunt: *ὄν τὴν μεῖζω φησὶ Τίμαιος μεγίστην εἶναι μετὰ τὰς ἑπτὰ, Σαρδὼν, Σικελίαν etc.* quibus Strabo subnectit, *οὐκ ἀληθῆ λέγων, πολλαὶ γὰρ ἄλλαι μεῖζους.* Recte quidem; sed ea invaluerat opinio, septem has insulas omnium esse maximas. Alexis id nos docet illis versibus, quos Imperator Constantinus nobis servavit L. II. Them. 10. WESS.

343. 70. *Ὑπεράγοντας ταῖς ῥώμαις*] Ruditu ne lectores obtundere muli pergerent, orationem mutavi. A viribus eos laudari atque ob *ζωατερόν μέρος*, quod illis poeta Iliad. P, 742. tribuit, pulere memini. Quare egregiae vocis laudem animali alius asserat. WESS.

343. 77. *Ἐκ τῆς σχίνου*] *Ἐκ τῆς τερμίνθου ex terebintho* scribit Aristoteles, seu alius, philosopho paullo recentior, scriptor, Admirand. p. 725. his statim adstruens, *λέγουσι δὲ οὕτω τοὺς οἰκοῦντας αὐτὰς Ἰβηρὺς καταγύνορας εἶναι, ὥστε ἀντὶ ἐνὸς σώματος θηλυκοῦ διδοῖναι τοῖς ἐμπόροις τέτταρα ἢ πέντε σώματα ἄδύνα.* quae Diodori narrationi paene gemina sunt. WESS.

344. 90. *Ἐστράτευσεν ἐπὶ Γηροπόλην*] Vide L. IV. 17. WESS.

344. 97. *Ἄλλὰ*] *Ἄλλ'* Coisl. Vide Clar. Io. Fr. Reitz. in Lucian. de Conseriben. Histor. c. 5. WESS.

*Ibid.* *Ἄλλὰ ὠνούμενοι γυναῖκας καὶ οἶνον*] Aristoteles: *στρατευόμενοι δὲ παρὰ Καρχηδονίοις τοὺς μισθοὺς ὅταν λάβωσιν, ἄλλο μὲν οὐδὲν ἀγοράζουσι, γυναῖκας δέ. οὐ γὰρ χρυσίον οὐδὲ ἀργύριον ἔξιστι παρ' αὐτοῖς οὐδένα ἔχειν.* *Carthaginien-sibus militantes stipendia ubi acceperint, nil nisi feminas emunt. Aurum enim atque argentum apud eos possidere nefas est.* WESS.

344. 3. *Καὶ οἱ λοιποὶ — μίσγονται ταῖς νύμφαις*] Ferme conveniunt, quae de Nasamonibus Herodotus IV. 172. WESS.

344. 7. *Ὀπλισμὸς δ' ἐστὶν αὐτοῖς τρεῖς σφενδόνας*] *Tribus quisque fundis praeliatur*, ait Florus III. 8. Lycophron. v. 636.

*Τριπλαῖς δικιώλοις σφενδόνας ὀπλισμένοι.*

Strabo *σφενδόνας περὶ τῆ μεγάλης τρεῖς* singulis dat, paullo negligentius, L. III. p. 255. ubi Is. Casaubonus. WESS.

344. 14. *Τοὺς πρὸ τῶν ἐπάλλξεων ἐφειστώτας*] Hoc retineo. Infr. XIV. 108. *οὗτοι μὲν οὐν πολλάκις ὑπὲρ τῆς πατρίδος λαμπρῶς ἀγωνιζόμενοι πρὸ τῶν τευχῶν etc.* Latinis nihil frequen-

tius. Frontinus I. 5. 5. *ad speciem retinendae urbis raros pro moenibus sagittarios reliquit.* Cremutius Cordus in Senecae Suasor. VII. p. 44. Ciceronis caput *Antonius iussit pro rostris exponi, quorum loco Livius ibidem, iussuque eius inter duas manus in rostris positum.* Plura Celeb. C. A. Duker. ad Florum §V. 2. WESS.

344. 19. *Αἱ συνεχεῖς ἐκ παίδων μελέται*] *Certos quis miretur ictus, quum haec sola genti arma sint, id unum ab infantia studium? Cibus puer a matre non accipit, nisi quem, ipsa monstrante, percussit.* Sic Florus. Distinctius Lycophron v. 637. et Vegetius L. I. R. M. c. 16. WESS.

344. 28. *Κατὰ γὰρ τὴν Λιβύην κεῖται μὲν πελαγία νῆσος* etc.] Quae maris Oceani contra Libyam haec insula sit, non dixerō. Fortunatarum certe quidem una haberi non potest: obstant pleraque omnia, quae de ea praedicantur. Melius conveniret Platonis Atlantis, nisi ea fluctibus hausta prorsus disparuisset: ait ipse Timaei p. 25. D. *κατὰ τῆς θαλάσσης δῶσα ἠγανίσθη.* Vel sic tamen uber insulae et felicissimus habitus multum trahit ea ex Atlantide, ut ex philosophi Critia p. 112. videbis. Ergone una earum est, quae Americae adiacent, ipsave America? Ita visum olim fuit doctissimo Schmidio Dissert. de America, quam Pindaro suo adiunxit. At in eam Carthaginienses, postquam adversa tempestate acti semel cognoverant, instituta navigatione tramisise, qui tandem credemus? neque enim vastum Oceani spatium sine pyxidis nauticae auxilio, quo defectos fuisse omnia arguunt, superare potuerunt. Fabulis itaque adfinia sunt, quae de hac insula produntur, id tamen indicantia, obscuram eius regionis, quam Americam vocamus, famam ex Carthaginensium navigationibus ad veterum aures dimanasse: quam rem et hoc Diodori loco et plurium aliorum stabilitum ivit Iac. Perizonius in Aeliani III. V. H. 18. WESS.

345. 38. *Κατεσκευασμένα ζωθωνιστήρια*] Rarum hoc et in copiosissimis sermonis Graeci Thesauris neglectum, sed bonae tamen notae vocabulum est. *Ταῖς μεγάλας ζωθωνιζόμενοι* Aristoteli Problem. III. 14., qui capacioribus poculis se invitant, et *ζωθωνισμὸς* Problem. V. 38., largior conpotatio. Itaque *ζωθωνιστήριον* locum indicat, ubi genio indulgent et potant. Habet Athenaeus XI. 10. plura, quae vocem illustrare apta sunt. WESS.

345. 57. *Καὶ τῶν ἄλλων τῶν ὄραϊων*] Haud recte interpres *alia venusta et iucunda.* Intelliguntur οἱ ὄραῖοι καλοῦμενοι *καρποὶ*, de quibus Plato Crit. p. 115. A. et nos superius L. III. 69. WESS.

345. 62. *Φοίνικες ἐκ παλαιῶν χρόνων συνεχεῶς πλείοντες*] Strabo de Phoenicium navigationibus L. I. p. 83. οἱ καὶ τὰ ἔξω τῶν Ἡρακλείων στηγλῶν ἐπῆλθον, καὶ πόλεις ἐκτίσαν καὶ κεῖ, καὶ περὶ τὰ μέσα τῆς Λιβύης παραλίᾳ μικρὸν τῶν Τρωϊκῶν ὕστερον quae vera esse, ipsae nos Sacrae Literae docent. WESS.

345. 71. Τά τε ἄλλα κατεσκεύασαν οἰκείως τοῖς τόποις] Nasci suspicio posset, οἰκείως τοῖς τόποις scriptum fuisse primitus, praesertim cum ex patriae suae moribus omnia ordinarent Phoenices. At vetat Diodorus XV. 93. ἐκτάξας τὴν δύναμιν οἰκείως τοῖς τόποις. et XVII. 33. τῶν ἰππέων τὰς ἴλας οἰκείως τοῖς ὑποκειμένοις τόποις διατάξας, i. e. ut loci natura ferebat. De templi Hereulis Gaditani conditoribus, religione, vetustate nihil addam. Dixi ad Anton. Itiner. p. 408. WESS.

345. 85. Ἀπασι γνώριμον ἐποίησαν] Id si fecerunt, cur mox insulam ἀγροουμένην ὑπὸ τῶν ὑπερεχόντων vocas? Non sat comode divisa sunt temporibus tibi haec Diodore. WESS.

346. 88. Μὴ — πολλοὶ τῶν ἐκ τῆς Καρχ. εἰς ἐκείνην μεταστῶσιν] Personatus Aristoteles Mirabil. p. 724. Θανάτῳ ζημιούν τοὺς εἰς αὐτὴν πλεουσιμένους, καὶ τοὺς ἐνοικοῦντας πάντας ἀγανίσαι, ἵνα μὴ διαγγέλλωσι, in insulam navigare poena capitis interdixisse, incolasque eius omnes e medio sustulisse, ne quis insulae opes aliis notas faceret, Carthaginiensium magistratus adfirmat. Adeo sibi non constant in fabulis digerendis. WESS.

346. 93. Ἀπῶραι πανοικίους εἰς ἀγροουμένην — νῆσον] Strabo XIV. p. 988. B. Zenicetus ἐπέφησεν ἐαυτὸν πανοικίον. quo loco cur Salmasius in Solin. p. 563. legendum πανοικεῖ edixerit, non intelligo. Philo Iud. Leg. Cai. p. 1000. E. ἐπειδὴ δὲ καὶ ὁ Μάκρων πανοικίος ἱερέετο. Macrone cum omni familia iugulato. et p. 1014. de Augusto familiaeque eius, Hierosolymitanum templum donariis instruente, ὥστε μονοκὸν πανοικίος ἀναθημάτων πολυτελείαις τὸ ἱερὸν ἡμῶν ἐκόσμησε. Strabo se ipse defendit L. IV. p. 294. A. et p. 299. B., cui patronum se Noster adiungit hoc loco et saepe alias. WESS.

346. 98. Τῶν Ἐρχυρίων ὀνομαζομένων δρυμῶν, οὓς etc.] Vitio versum Diodoro fuit, quod montes Hercynios omnium totius Europae fecerit maximos: quasi et Alpes et Pyrenaeum magnitudine superarint; cuius erroris, haud iniuria a Ph. Cluverio L. III. Ger. A. p. 213. animadversi, post haec immunis erit. Saltus Hercynii vastam amplitudinem exponit Iul. Caesar L. VI. Bel. Gall. c. 25. WESS.

346. 1. Ὡν ἐστὶν ἡ μεγίστη] Malim ὧν ἐστὶ μία καὶ μεγίστη. Quarum una est, et quidem maxima, quae Britannia vocatur. RHOD.

346. 5. Ὅ δια τὰς πράξεις ἐπονομασθεὶς θεὸς] Semper ita Diodorus, uti L. I. 4. IV. 19. infr. c. 25. et Excerpt. Vales. p. 345. Strabo III. p. 244. οἱ τοῦ Πομπηίου στρατηγοὶ κατεπολιμήθησαν ὑπὸ Καίσαρος τοῦ Θεοῦ. ubi Casaubon. WESS.

346. 18. Τὸ καλούμενον Βελέριον] Ptolemaeo hoc Βολέριον, alterum Ὀρχὰς L. I. Geogr. c. 3. De laterum insulae producta longitudine alia atque alia veteres, invicem sibi parum con-

sentanci. Vide Strab. IV. p. 304. Caesar. V. Bell. Gall. 13. et Britann. Roman. L. III. c. 1. Io. Horsleii. WESS.

346. 27. Κατοικεῖν δέ φασι τὴν Βοητην. ἀπόχθονα γένει] Prudentius Tacitus Iul. Agric. c. 11. *Britanniam qui mortales initio coluerint, indigenae an advecti, ut inter barbaros, parum conpertum. Nobis cognitum satis atque exploratum est, indigenas haud fuisse, sed magnam partem ex Gallia advectos, quae eadem Guil. Camdeni sententia principio Britanniae suae.* WESS.

346. 30. Καθάπερ οἱ παλαιοὶ τῶν Ἑλλήνων] Vide huius lib. c. 45., et de Britannorum essedis, sive *cozinis* potius, Caesar V. B. G. 15. et Tacit. Agricol. c. 12. WESS.

347. 35. Καὶ Θησαυροῦζοντες εἰς τὰς καταγείους οὐρήσεις] In Britannia si valuit, quod in Cappadocia et Thracia usus introduxerat, ut frumentum in specubus abderent, proba vulgata est. Varro L. R. R. c. 57. *Quidam granaria habent sub terris, speluncas, quas vocant σείθους, ut in Cappadocia ac Thracia. Alii, ut in Hispania citeriore, puteos, ut in agro Carthaginiensi et Oscensi.* Alioqui damnanda non est praestantissimorum Codd. scriptura, cui primas paene dederam, quod sequentia non adeo speluncas quam horrea desiderare videbantur. WESS.

347. 42. Καὶ τὴν τοῦ ἀέρος ἕχ. διάθ. παντ. κατεψυγμένην] Errat. Caesar V. B. G. 12. *Loca sunt temperatiora, quam in Gallia, remissioribus frigoribus.* Nec abludit Taciti Vit. Agric. c. 12. *asperitas frigorum abest.* WESS.

347. 56. Διαγνάς] Διαγνάδας Co., διαφνγάς Clar. male uterque. Vid. L. III. 12. WESS.

347. 57. Ἐν αἷς τὸν πόρον κατεργαζόμενοι] Regii libri scriptura erranti debetur amanuensi: quis enim hic locus *poro* lapidi? Πόρος *emolumentum est*, ut μέγας πόρος Aeschyl. Prometh. v. 111., unde πόρος *ζηρημάτων* saepe apud Demosthen. atque alios. WESS.

347. 58. Καὶ τήξαντες] Κατατήξαντες non male, si καὶ, quod praepositio verbi absorpsit, restituatur, Mutin. WESS.

347. 60. Ὀρομαζομένην δέ Ἰκτιν] Vecta sive Vectis plerisque aliis. Refert huc Cl. Salmas. in Solin. p. 175. Timaei apud Plinium L. IV. 16. *insulam Mictim, in qua candidum plumbum proveniat, refingens Ictim.* Sed ea aberat a Britannia *sex dierum navigatione*, ut ibi additur. Fieri tamen potest, ut Timaeus, incertum vulgi rumorem secutus, in eo spatio aberraverit. WESS.

347. 72. Πρὸς τὴν ἐκβολὴν τοῦ Ῥοδαροῦ] Ῥοδαροῦ in margine annotatum isti praeferendum iudico. Eridanus enim Italiae fluvius in mare Adriaticum longissimo istine intervallo sese exonerat: cum Rhodanus per Celticam et Narbonensem Galliam decurrens inter Arelatum et Massiliam mari Gallico et Ligustico exicipiatur, et proximius ex Anglia iter praebeat. RHOD. Πρὸς τὴν ἐκβολὴν τοῦ Ῥοδαροῦ] Primitus Rhodanum flumen eiusque

ostia hic fuisse memorata, clarissime docetur cap. 38. huius libri. Librariis sollemne est hos fluvios commiscere, ut mox c. 25. WESS.

347. 77. *Ἡ προσαναγορευομένη Βασίλεια*] Insulae huius meminerunt Pytheas in Plinii L. IV. c. 13. et Timaeus in eiusdem L. XXXVII. 2., succinique in eam fluctibus advecti; quae an *Scandinavia* sive *Scandia* sit, ut pertendit Ph. Cluver. L. III. G. Ant. c. 38., an alia Baltici aut etiam septemtrionalis maris insula, difficulter nunc finitur. Fama haec veteres cognita habuere, quae plerumque fallax. Id tamen recte, quod succinum hinc repeterint, cuius uberrima et felicissima mater in haec usque tempora Borussia, docente Ph. Jac. Hartmanno *Histor. Succini Prussici* c. 2. WESS.

348. 79. *Οὐδαμοῦ δὲ τῆς οἰκουμένης φαινόμενον*] Vero id absimile esse declarant Pliniana L. XXXVII. 2. et quae idem Hartmannus *Hist. Succ. Pruss.* c. 1. collegit. WESS.

348. 83. *Φαέθοντα τὸν Ἥλιον μὲν τῶν*] Fabulam, sive, uti censet, historiam Phaethontis *φρυσκῶς* et *φιλολόφως* explanavit Proclus ad Timaeum Platon. p. 33. 34., risit autem, uti adsolet, Lucian. D. D. XXV. WESS.

348. 86. *Τὸ τέθριππον*] Sic vulgatum τὸν τέθριππον Rhodomannus correxit, faventibus scriptis libris. Recurrit idem vitium L. XVII. 34., quod fortasse patronum inveniet ob haec Euripid. *Troad.* v. 885.

— — Ὀν  
 Ἐστέρων ΤΕΘΡΙΠΠΙΟΣ ἔλαβε  
 Κρόκειος ΟΧΟΣ ἀναρπάσας.

At illi, uti poetae, id licuit: in soluta oratione alterum usu tritius: WESS.

348. 90. *Καὶ ποιῆσαι τὸν νῦν γαλαξίαν καλ. κύκλον*] Aliam circuli eius originem signavit Eratosth. *Catasteris.* c. 44. et Manilius, hanc tamen non praeteriens, L. I. 731. etc. WESS.

348. 1. *Γενομένας αἰγείρους*] Ἐπιαιγείρουμένας eleganter Strabo V. p. 329. B., quas quidem popules ad Eridanum irrito se labore quaesivisse Lucianus *Elect.* c. 2. scribit. Haec vero Diodori respexit Etymologus v. *Ἡλιάδες*. WESS.

348. 4. *Καὶ τὸ τούτων πένθος*] Lege κατὰ τὸ τούτων. STEPH. et RHOD.

348. 6. *Καὶ διὰ τῶν ἀποτελεσμάτων — ἐλεγχομένων*] In edd. διὰ τῶν ἀποτελεσμάτων — ἀποτελουμένων hiabat sententia. Hoc opportunum, et paullo ante usurpatum. Probo quoque Steph. et Rhodomanni κατὰ τὸ τούτων, aut, si mavis, καὶ κατὰ τὸ τούτων πένθος, quae voces frequentissime sese invicem loco detruserunt, altera alterius sedem occupante. WESS.

349. 21. *Καὶ πόλιν Ἀλησίαν — κτίσαντος*] Superius L. IV. 19. WESS.



349. 27. Προσεδέξατο τὴν ἐπιλοχὴν etc.] Similem fabellam exsequitur in Erotic. c. 30. Parthenius de Celtina, quae Herculi filium Celtum, unde *Celtae* dicti, pepererit. Ammianus XV. 9. aliter: *Aborigines primos in his regionibus quidam visos esse firmarunt, Celtas nomine regis amabilis, et matris eius vocabulo Galatas dictos.* Aliter Etymologus v. *Γαλατία* ex Timaeo: ὠνομάσθη, ὡς γησι Τίμαιος, ἀπὸ Γαλάτων, Κέζλωπος καὶ Γαλατίας, (lege *Γαλατίας* ex Theocriti Idyl. XI.) νίοῦ. Quo genere originationis in Graecia atque apud seculum prius nihil erat vulgatus. Si quid enim obscuri atque eruditionis reconditae gentium nominibus adhaeresceret, ecce tibi tanquam e machina Heros aliquis, qui regioni gentique nomen pepererit. *Hellas, Attica, Scythia, Carthago, Hispania,* et sine numero plures urbium populorumque id, si opus esset, firmarent. WESS.

349. 43. Ὡν ἐστὶν ἐν πρὸς Ῥωμαίους ἔχον συγγένειαν] *Aeduos* intelligit, quos Caesar L. I. B. G. c. 33. *fratres consanguineosque saepenumero a senatu adpellatos* scribit. Tacitus Ann. XI. 25. *Primi Aedui senatorum in urbe ius adepti sunt. Datum id foederi antiquo, et quia soli Gallorum fraternitatis nomen cum populo Romano usurpant.* ubi Diodori verba non neglexit Lipsius. WESS.

349. 50. *Διὰ τῆς ἰδίας φύσεως γερτροῦνται*] Quum amnuensium incuria ὀύσεως et φύσεως vocabula haud raro commutentur, quemadmodum L. IV. 58. et huius libri c. 36. factum animadvertimus, idem et hic usu venisse, suspicio fuit: pontis enim in modum flumina concresecunt, dum sparsa per aquam glacies ipso fluxu condensatur. Ego vero nihil innovo. Id significat, fluvios suapte natura, nulloque adeo ligni adhibiti auxilio, cum congelantur, pontibus quasi insterni. WESS.

349. 56. Οἱ μὲν ἐκ λιμνῶν ἀβύσσων ῥέουσιν] Aristophanes Ran. v. 137.

Εὐθὺς γὰρ ἐπὶ λίμνην μεγάλην ἤξει πᾶν  
ἄβυσσον.

et *λίμνη ἀβύσσος ἢ ἐν Ἄργει* apud Hesychium. Transit ad omnia, in quae humani ingenii acies penetrare nequit.

Τί δὲ μέλλω φρένα δῖαν  
Καθορῆν, ὄψιν ἄβυσσον.

Cui simile divinum illud in Psalm. XXXV. 7. τὰ κρήματά σου ἄβυσσος πολλή. Quo de genere plura alia ad manum sunt, quibus nunc non utor. WESS.

349. 61. Ἄλπειος Reg. quod praestat. Vid. Aelian. XIV. H. A. 23. et Appian. I. B. Civil. p. 696. WESS.

349. 62. Πέντε στόμασιν ἐξερευγόμενος εἰς τὴν θάλασσαν] Sequitur imprudenter Timaeum, adfirmantem Rhodanum esse πεντάστομον, iure propterea castigatum a Polybio. Strabo L. IV. p. 279. A. περὶ δὲ τῶν τοῦ Ῥοδανοῦ στομάτων Πολύβιος μὲν

ἐπιτιμῆ Τιμαίω, φήσας εἶναι μὴ πεντάστομον, ἀλλὰ δίστομον.  
Vel sic tamen Festus Avienus de Rhodano in Or. Maritima v. 680.

*Et occidentem contuens evolvitur,*

*Patulasque arenas quinque sulcat ostiis.*

adaeque errans, ut praeter Casaub. in Strabon. nuper ostendit Clariss. Astruc. Histor. Natur. Langued. I. 2. WESS.

349. 64. Ὅ, τε Δανούβιος] Hocceine ab eo exspectasses, qui Istri fluminis cursum tam distincte signavit L. IV. 58.? Cogitaveram de *Dubi*, quem inportuna librariorum natio in *Δανουβιν* convertit Epist. 38. Iuliani; sed is Arari miscetur, neque in Oceanum evolvitur. Melius conveniret *Duranius*, quem etsi in mare deferat Garumna, illi tamen iungitur iam *πελαγίζοντι*. Sidonius Apollinaris Carm. XXII. 101.

*Et locus, irrigua qua rupe Garumna rotata,*

*Et tu qui simili festinus in aequora lapsu*

*Exis curvata, Durani muscose, saburra,*

*Iam pigrescentes sensim confunditis amnes.*

At eius fluvii nomen a *Danubio* longius distat. Forsan ergo auctoris peccatum est, qui cum inaudivisset Danubii fontes in Galliae finibus scaturire, et Galatas omnes eos haberet, qui trans Rhenum versus Istrum incolunt, arbitratus est Istrum alium esse ac Danubium, et in Oceanum mare aquas demergere. WESS.

350. 66. Ἐχειρώσατο τοὺς πέραν κατοικοῦντας etc.] Et hoc nimium. Tu Caesarem inspicere L. IV. B. G. 19. et VI. 10. WESS.

350. 81. Καθύλον δὲ καταγίζοντες λάβρωσι] Eadem Strabo L. IV. p. 277. A. κατακλῦσθαι δὲ τοὺς ἀνθρώπους ἀπὸ τῶν ὀχημάτων καὶ γυμνοῦσθαι καὶ ὄπλων καὶ ἐσθῆτος ἀπὸ τῆς ἐμπενοῆς. Ventus hic *Melamboreas*, πνεῦμα μελαμβόρειον, sic enim recte refingit Is. Casaub., firmatque Iosephus III. B. I. 9. 3. de similis ingenii vento agens, Graecis adpellabatur, nunc parilis potestatis vocabulo *Bise* indigenis notus, sicuti naturam eius declarans patefecit eruditissimus Astruc L. II. c. 8. Hist. Nat. Langued. WESS.

350. 85. Οὔτε οἶνον, οὔτε ἔλαιον σέρι] Id si de omni Gallia intellexerit, falsum videri omnes scimus. Prudentius Strabo IV. p. 268. WESS.

350. 87. Τὸ προσαγορευόμενον ζύθος] Ex hoc Diodori loco Io. Is. Pontan. in Glossar. Prisco-Gall. et ante eum Pet. Ramus de Mor. Veter. Gallor. p. 9. vincere conatus est, zythum proprium esse Gallorum potum, non Aegyptium, ut censuit Plinius auctorque noster superius L. I. 34., vocemque ipsam Galliae esse originis; quam eorum opinionem refellit Io. Henr. Meibomius de Cerevis. c. 4. Mox καὶ τὰ κίρινα πλύνοντες citat Is. Casaubon. ad L. III. Strabon. p. 233., vasa intelligens: quod non probo. Auctor *oenomeli* designat, aut certe ζύθος πύρινον μετὰ

μέλιτος ἐσκευασμένον, uti Posidonius in Athen. L. IV. p. 152. C. WESS.

350. 93. Ἐρμαιον ἠγοῦνται τὴν τῶν Γαλατῶν γιλονίαν ] De illis, quae in luero putamus, hoc dici exemplis probat Desid. Heraldus II. Advers. c. I., ipsa haec Diodori advocans. Plato Theag. p. 126. B. οὐκ ἔσθ' ὅ, τι τοῦτον μεῖζον ἂν ἔρμαιον ἠγρησαίμην. Demosthen. in Nausimach. p. 573. καὶ τὴν ἐξ ἀνάγκης ἀγροίαν τῶν πεπραγμένων, ἔρμαιον νομίσαντες αὐτῶν. Plura omitto. Vide supr. III. 47. WESS.

350. 4. Καὶ μεγ. ἀποθήρηγνῦσα κολωνοὺς πληροῖ χουσοῦ ψήγμ.] Habebant κολωνοὶ χουσοῦ ψήγματος nescio quid asperum atque ingratum, quod veterum librorum auxilio sublatum nihil admodum cedet elegantissimis his Io. Chrysostomi T. III. p. 211. B. δι' ἐξείνων τῶν ὀρέων, μεταλλικὰ adpellaverat ante, ὁ ποταμὸς ἔειν καὶ τὴν χουσίτην πυρροσύων γῆν, θησαυρὸς τοῖς παροικοῦσι γίνεται, ἐσχεδιασμένον παρέχων τὸν πλοῦτον. Nimirum Gallica flumina curvis anfractibus in montium radices in-pacta, ablatos inde tumulos ramentis auri opplebant: haec mens Diodori, cui Strabo de auro in Galliae finibus reperto adsentitur L. IV. p. 290. et P. Marca L. I. Marc. Hisp. c. 13. WESS.

350. 7. Ἡ συγκόπτουσι ] Lege καὶ. Tertio inde versu ἐν redundat ante ταῖς καμίνοις. RHOD.

351. 13. Περὶ δὲ τοὺς ἀχένας κρῖκουσ — ὀλοχρόσους ] Maniacos vocabant. Τοῦτο δ' ἐστὶ χουσοῦν ψέλλιον, ὃ φοροῦσι περὶ τὰς χεῖρας καὶ τὸν τράχηλον οἱ Γαλάται, Polybius inquit L. II. 31. Atque hinc Gallus quidam nudus, praeter scutum et gladius duos torques atque armillis decoratus apud Gellium IX. N. A. 13. ex Cl. Quadrigario. WESS.

351. 18. Ἀειμένους ἐθόπται πολὺς χουσοῦς ] Habet ex Posidonio, quem in his ducem sibi sumpsit, apud Strabon. IV. p. 287., unde ad Tolosatas haec pertinere novimus. WESS.

351. 24. Ἐκ φύσεως ξανθοὶ ] Nihil cognitius flava, rufa seu rutila veterum Gallorum et Germanorum coma, quam tamen Galen. in Hippocrat. de Ration. Vict. p. 31. ξανθὴν recte dici negat: οὕτως γοῦν τινες ὀνομάζουσι, inquit, τοὺς Γερμανοὺς ξανθοὺς, καὶ τοι γε οὐκ ὄντας ξανθοὺς, ἐὰν ἀκριβῶς τις ἐθέλοι καλεῖν, ἀλλὰ πυρρόους. Sed hi colores levi discrimine distant, et voces permiscetur. Lipsium adi ad Tacit. Mor. Ger. c. 4. WESS.

351. 26. Σμῶντες τὰς τρίχας συνεχεῶς ] Locum hunc tetigerunt viri egregii Is. Casaub. in Athen. L. IV. 10. Ezech. Spanhem. ad Callimachi Lav. Pall. v. 32. et Iac. Gronov. in Herod. IX. 109., docueruntque σμῶν et σμῶσθαι τὴν κεφαλὴν et τὰς τρίχας non aliud esse, ac capitis crines detergere ac defricare: cui rei praeter calceis lixiviam Galli saponem etiam adhibebant. Prodest et sapo: Galliarum hoc inventum rutilandis capillis. Fit ex sebo et cinere. sic Plinius L. XXVIII. 12. WESS.

351. 27. *Καὶ τοὺς τέροντας ἀνασπῶσιν*] Quae his apta connexaque erant, *ἵνα διαφανεῖς ὦσιν*, ut ambigua et ex glossa nata, induxi Codd. faventibus. Porro Poggium, *Satyris adspectu puerisque similes*, ex fide sui libri vertentem quae mox sequuntur, coarguit P. Leopardus L. V. Emend. c. 13. WESS.

351. 36. *Καθάπερ διὰ τινος ἡθμοῦ γέρεται τὸ πόμα*] Ex Scholiastae Apollon. Rh. I. 1294. decreto τὸ ἡθμὸς δασύνεται, quod etsi Sigea Inscriptio observet, ab aliis passim negligitur. Vid. Antiq. Asiat. doctissimi Chishul p. 43. et de Gallorum Germanorumque in barbīs alendis studio et corporis cultu Ph. Cluverium L. I. Ger. A. c. 16. WESS.

351. 40. *Ἐχόντων ἡλικίαν*] Nescio an *ἔφηρον* aut simile quippiam intelligendum sit: et tunc reddendum: *quī pubertatis annos attigerunt*. Versio nostra *παίδων* absque distinctione legit, ac si scriptum foret, *ὑπὸ τῶν νεωτέρων, παίδων ἔχ.* etc. RHOD. *Παίδων ἐχόντων ἡλικίαν*] Et ego haec arctissime iungo. Nam *ἡλικίαν ἔχειν* adulti, quique aetate militari sunt, dicuntur, qui propterea saepissime *οἱ ἐν ἡλικία* Demosthen. Philipp. I. p. 31. Polybio III. 86. IV. 9. Nostro XIII. 85., sive *ἐν ἡλικία στρατιᾶς* L. XV. 52. Posses alioqui levi opera *τῶν ἐντὸς ἡλικίας*, quo modo Lysias Orat. Funebr. c. 15. *τοὺς γεωαιτέρους καὶ τοὺς τῆς ἡλικίας ἐντὸς γεγονότας* connectit. Prius praefero. WESS.

351. 42. *Καὶ ὀβελίσκους πλήρεις κρεῶν*] Contende cum his Posidonii verba, ab Athenaeo L. IV. p. 151. F. exscripta. WESS.

351. 45. *Τὸν Αἴαντα παρυσάγει*] Iliad. VII. 321. RHOD.

351. 48. *Καὶ μετὰ τὸ δεῖπνον*] Idem mos heroum est apud Homerum, Achillis Iliad. XI. et XXIV., Nestoris et Pisistrati Odys. III., Menelai Odys. IV., Alcinoi Odys. VIII., Eumaei Odys. XV. RHOD.

351. 50. *Πρὸς τὴν — ἄμιλλαν καταστάντες*] Haud scio an necessarium sit cum Rhodomanno refingere in Addend. *ἀναστώτες* aut *διαρυστάντες* propter Poetam Iliad. A, 385. Solent vulgato uti, quum de certamine inchoato meminerunt. Pausanias V. 25. p. 443. *τούτοις τοῖς ἐν Μοτύῃ βαρβάρους Ἀχραγαρτῖνοι καταστάντες ἐπολέμουν*. Appian. III. B. C. p. 892. *μὴ πρὸς ἐνόπλους τοσοῦσδε ἄροπλοι καθιστώμεθα*. Quintilianus Declam. III. 12. *De Italiae possessione certatur; pro aris et focis consistimus*. Utatur tamen Rhodom. coniectura, qui volet. WESS.

352. 54. *Τὰς ψυχὰς τῶν ἀνθρώπων ἀθανάτους εἶναι*] *Inprimis hoc volunt persuadere, non interire animas, sed ab aliis post mortem transire ad alios; atque hoc maxime ad virtutem excitari putant, metu mortis neglecto*. sic Caesar L. IV. B. G. c. 14. ubi Davis.: *qua persuasione freti Germani apud Appianum Celtic. p. 1192. θανάτου καταφρονηταὶ δι' ἐλπὶδα ἀναβιώσεως*. WESS.

352. 61. *Καὶ ταῖς μάχαις χρῶνται συνωρίσιν*] Etsi cum Caesare Iulio hoc pugnae genere nusquam congressi legantur, fuit tamen Gallici olim moris ex curribus pugnare. Philargyrius in Georg. Virgillii III. vers. 204. *Esseda sunt vehiculi, vel currus genus, quo soliti sunt pugnare Galli. Caesar testis est libro ad Ciceronem III.* Multa millia equitum atque essedariorum habet Livius X. 28. *Essedis carrisque superstans armatus hostis*, Gallos describit, *ingenti sonitu equorum rotarumque advenit, et insolitos eius tumultus Romanorum conterruit equos.* Addit c. 30. fuisse, qui scriberent, eo in exercitu equitum *sex millia, mille carpentorum* fuisse. Quae si in memoriam redegitset Ph. Cluver. L. I. G. A. c. 45., profecto sibi haec excidere non passus esset: *Nec illos quidem Gallos, qui, magna Italiae parte occupata, priscis etiam temporibus crebra cum Romanis bella gesserunt, eo pugnae genere usos invenio.* WESS.

352. 66. *Ὅστε γυμνοὺς — καταβαίνειν εἰς τὸν κίνδυνον*] Vide Polyb. II. 23. Cl. Quadrigarium in Gellii IX. N. A. 13. Livium XXII. 46. et vera haec esse animadvertes. WESS.

352. 69. *Οἷς ἠμύχοις καὶ παρουσισταῖς χρῶνται*] *Ambactos* adpellabant apud Caesar. VI. B. Gall. c. 15., qui iidem videntur ac *οἰζέται τῶν ἱππεύοντων*, descripti a Pausan. X. 19. p. 844. Adi Ph. Cluver. I. G. A. c. 8. et 41. WESS.

352. 76. *Ἐξορειδίξουσι καὶ ταπεινοῦσι*] Duo postrema si reieceris, nihil peccabis. Pro sequente autem *θρόσος* malle *θάροςος* reponi; quod medium est, cum istud extremum sit: extra periculum scilicet in excessu, qui tamen mox in periculo turpissimum in defectum transit. RHOD. *Ἐξορειδίξουσι καὶ τὸ σύνολον* etc.] Accedo Rhodomanno. Novi Diodoro frequentari *ταπεινοῦν τὸ γόνημα, ταπεινοῦν τοὺς ἐπερηγάρους, τὴν ψυχὴν, δόξαν*, et similia, sed ea alius sunt generis. Hoc loco manifestum glossema est. Porro quid distent *θρόσος* et *θάροςος*, haec Gregorii Nazianz. Orat. IV. p. 113. D. ostendent: *ὅτι θάροςος καὶ θρόσος, καὶ εἰ τοῖς ὀνόμασι πλησιάζουσι, πλεῖστον ἀλλήλων τῆ δυνάμει κεχώρισται. — τὸ μὲν γὰρ ἐν τοῖς τολμητέοις θαρσεῖν ἀνδρείως ἐστίν. — οὗ δὲ πλείων ὁ κίνδυνος ὁμοίως χωρεῖν καὶ ὠθεῖσθαι — θρόσους.* WESS.

352. 79. *Περιάπτουσι τοὺς ἀχένας τῶν ἵππων*] Insolens constructio pro *τοῖς ἀχέσι*. Nisi forte haec parenthesi exclusa malis *τοῖς ἵπποις*. Verumtamen ego nihil muto, dum manuscriptum aliquod diversam lectionem afferat. RHOD. *Περιάπτουσι τοῖς ἀχέσι*] Salva res est. Scripti Codd. maculam eluunt. Morem hunc Gallorum signat obscurius L. XIV. 115., clarius Strabo IV. p. 302. B. WESS.

352. 82. *Ἀκροθίνια*] *Ἀκροθίγια* ora Steph. Mut. ut L. IV. 83. WESS.

352. 83. *Ὅσπερ ἐν κρηγίαις τισὶ χειρωμένοι θηρία*]

Sic placet. Infr. c. 39. ἐν αἷς (κνηγίαις) πολλὰ τῶν θηρίων χειροῦμενοι. et L. IV. 83. ὑπὸ τῶν καὶ τάλλα χειρουμένων κνητῶν διεφθόρη. Saepere alias. Venatorum, quem respexit, morem illustravimus L. IV. 22. WESS.

352. 84. Κεδρώσαντες τὰς κεφαλὰς etc.] Haec Posidonio debet, e quo Strabo IV. p. 303. τὰς δὲ τῶν ἐνδόξων κεφαλὰς κεδροῦντες, ἐπεδείκνον τοῖς ξένοις, καὶ οὐδὲ πρὸς ἰσοστάσιον χρυσὸν ἀπολυτροῦν ἠξίουσαν qui quidem honesti viri functus est officium, eum laudans, cuius auxilio profecerat. Diodorus ea in haeresi fuit, qua iam olim plures, etiam principes in his literis, licere aliorum bene dictis impune pro suis uti, quod equidem non laudo. Usam cedrini olei in condiendis corporibus indicavimus L. I. 91. WESS.

353. 90. Βάροβαρόν τινα μεγαλοψ. ἐπιδεικνύμενοι] Secundum receptam passim formam loquendi dicendum hic fuit ἐπιδεικνύμενος, non ἐπιδεικνύμενοι. STEPH.

353. 91. Οὐ γὰρ τὸ μὴ πωλεῖν τὰ σύσσημα etc.] Illust. H. Grotius hoc laudat et illustrat L. II. I. B. et P. c. 19. 3. WESS.

353. 94. Χιτῶσι μὲν βαπτοῦς] Ad χρῶνται referri non potest χιτῶνας, sed χιτῶσι, sicut et dixit ἐσθῆσι et dicet ἀναξυρίσι. Cum χιτῶσι autem legendum foret βαπτοῖς et διηρητισμένοις. Sed nec δὲ habetur hic τῶ μὲν redditum. quod tamen novum non fuerit ei qui hoc volumen evolverit. STEPH. Χιτῶνας μὲν βαπτοῦς] Mutilatus et corruptus hic locus duarum additione vocularum et unius mutatione redintegrari potest, si post βαπτοῦς ἔχοντες et post χράμασι δὲ, quod μὲν praecedens omnino flagitat, inseras, et ἀναξυρίσιν in ἀναξυρίδας mutes. RHOD.

353. 96. Ἄς ἐκείνοι βράζας προσαγορεύουσιν] Nec Diodoro, nedum Hesychio, idem vocabulum Gallis transcribenti, adsentitur Is. Casaubonus ad Suetonii August. c. 82.; Graecae enim originis videri, et Aeolica dialecto ex ῥάκη formatum, quo Phocaeenses Persarum ἀναξυρίδας, et Massilienses Gallorum femoralia nominarint; cuius opinio, etsi reconditae eruditionis plena, vereor, ut placere possit: nam neque τὰ ῥάκη satis explicant Persarum ἀναξυρίδας, neque vocis in veteri Gallorum et Germanorum sermone vestigia apud Cl. Astruc L. III. Hist. Nat. Langued. c. 3. et Ph. Cluver. L. I. Ger. Antiq. p. 140. patiuntur, ut Graecorum e fontibus emanasse censi queat. WESS.

Ibid. Ἐπιπορποῦνται δὲ σάγους ῥαβδωτοῦς etc.] Quae Plinius L. VIII. 48. in sagis Gallorum vocat scutulas, eas πλινθία Diodorus, de iisdem sagis loquens. Ait enim Gallos sagula ῥαβδωτὰ gestare πλινθίοις πολυανθέσι καὶ πικνοῖς διελημμένα, hoc est, quadris et maculis quibusdam reticulate distincta. Nihil enim aliud intelligit, quam quas hodie Galli vocant lausangas, quasi laurangias, a lauria folio, quod habet rhombi figuram. Explicat et Plinius, qui maculas et plagulas in retibus vocat scutulas. Item Livius, qui in funda scutulam vocat,

quod est reticulatum in medio fundae. Scutulatum igitur sagum, reticulate distinctum ac virgatum propterea Virgilio et Propertio. Haec Ios. Scaliger Coniect. in Varron. p. 67., quibus, etsi in opinionem venerit Bern. Martino L. IV. Var. Lect. c. 9. quaedam rescribere, album calculum addere non reformido. Ράβδοι saepe virgae sunt, quibus scularum in morem lacertorum serpentiumque terga sunt sparsa, veluti apud Aelian. de Animal. L. XII. 25. et infr. L. XVII. 90.; cuiusmodi virgatis maculis cum hinnuli et camelopardales distinguantur, Straboni XVI. p. 1120. ῥαβδοτοῖς σπῆλοις κατεστιγμέναι, ut optime corrigit Cl. Salmasius, quem vide Scaligeri partes amplexum ad Flav. Vopisci Carin. c. 20. p. 859. WESS.

353. 99. Θυρεοῖς μὲν ἀνδρομήγεσι] Vide mox c. 39. et Pausaniam VIII. 50. X. 20. Utrouque distinctius Livius L. XXXVIII. 21. Scuta longa, ceterum ad amplitudinem corporum parum lata, et ea ipsa plana, male tegebant Gallos. WESS.

353. 4. Καὶ παμμ. φαντασίαν ἐπιφέροντα τοῖς χρωμένοις] Vulgatam praeceuntibus libris correxi. Galeae illos, quorum capita tegebant, ut longe proceriores viderentur, efficiebant, quod et de Cimbris prodidit Plutarchus in Mario p. 420. B. χρόνη μὲν εἰ-  
 ζασμένα Θηρίων φοβερῶν χάσμασι καὶ προτομαῖς ἰδιομόρφοις ἔχοντες, ἃ ἐπαιρόμενοι λόγοις πτερωτοῖς εἰς ἕψος ἐφαίνοντο μείζονς. et de Romanis Polybius L. VI. 21. WESS.

353. 7. Σάλπιγγας δ' ἔχουσιν ἰδιοσφραῖς] Carnum suo sermone tubam Galli adpellabant. Hesychius Κάρον, τὴν σάλπιγγα Γαλάται. Eustathius, qui eam descripsit, paullo aliter in Homer. p. 1139. τρίτη ἢ Γαλατικὴ, χωνετή, οὐ πᾶν μεγάλη, τὸν κώδωνα ἔχουσα Θηριόμορφόν τινα καὶ αὐτὸν μολεῖρδινον, εἰς ὃν ἐμφυσᾶσιν οἱ σαλπισταί. ἔστι δὲ ὄξυφωνος καὶ καλεῖται ὑπὸ τῶν Κελτῶν ΚΑΡΝΥΞ. tubarum tertia Gallica est, fusoria arte facta, non admodum magna, quae codonem, sive os, habet ferae alicuius figura, et aulum, sive canalem, plumbeum, quem tubicines inflant. Est autem acuto sono, et vocatur a Celtis CARNYX. Quae, quia Ph. Cluverius L. I. G. A. c. 49., tubas Gallicas ex Diodori loco illustrans, neglexerat, excerpere visum fuit. WESS.

353. 13. Παρὰ τὴν δεξιὰν λαβὴνα παρατεταμένως] Eadem ex Posidonio habet Strabo IV. p. 301. A. WESS.

353. 16. Ἄς ἐκεῖνοι λαγκίας καλοῦσι] Videtur prima specie ἀγκείας vocabulum, quod in quibusdam Codd., Gallicum quid praefere. Erant enim ἀγγωνες δοράτια οὐ λίαν μικρὰ, ἀλλ' οὐδὲ μεγάλα, ἀλλ' ὅσον ἀροντίξασθαι, εἶπον δεῖσοι, apud Etymologium. Sed Francicum id et teli genus et vocabulum, teste Agathia L. II. p. 40. ed. Paris., longius distat ab ἀγκείας voce; quam ego scribentium peccato progenitam arbitror. Lancea quidem Hispanis tribuitur a Varrone, cuius sententia Celtico vocabulo haud nocet:

fuit enim utrisque commune. Porro ἐπιθήματα lancearum Ph. Cluverio non alia visa sunt ac geminae illae cuspides lunatae, quae in inferiori ac latiori ferri parte hodieque conspiciuntur in hastis, vulgari vocabulo partisanen dictis, L. I. G. A. p. 352. Mihi non liquet: potuerunt ea ἐπιθήματα alius esse generis. WESS.

354. 21. Τούτων δὲ τὰ μὲν ἐπ' αἰθέρας etc.] Explicat haec Ph. Cluverius L. I. G. Antiq. p. 357. diligenter, haud merito tamen addubitans, sitne missile hoc telum. Tu vide Casaubon. in Strabon. L. XV. p. 1044. WESS.

354. 34. Ὅς Βάρδους ὀνομάζουσι] De Bardis post diligentem operam Clarissimorum virorum H. Valesii ad Ammian. L. XV. 9. et popularis mei H. Cannegiteri Dissert. de Brittenburgo p. 132. nihil addo. WESS.

354. 37. Ὅς Σαρονίδας ὀνομάζουσι] Σαρονίδας legendum conicio. P. Ramus tamen, vir de Logicis et Mathematicis disciplinis, adeoque de tota Philologia, eximie meritis, in aureo libello de moribus veterum Gallorum, quibus etiam Germanos accenset, p. 71. lectionem marginis Σαρονίδας approbat. Quod tamen in medio relictum velim. RHOD. Ego vero non dubito, quin Σαρονίδας primitus scriptum fuerit. Nam quae Ramus disputat, Annii Viterbiensis e fontibus hausta sunt, Saronem nobis ex personato Beroso vetustum Gallorum regem obtrudentis. Optime Abr. Ortelius in Thesaur. Σαρονίδες, Σαρονίδες, Σαρονίδες sunt apud Diodorum variata scriptura, quarum ultimam veriore, quamvis neque sinceram putaverim, atque ipsam Diodorum Σαρονίδας scripsisse. Librarios vero primum elementum a vocis praecedentis ultimo huic male adtexuisse, et A pro Δ facile ob formae quodammodo similitudinem immutasse. Scriptura talis est ΟΥΣ ΣΑΡΟΥΙΔΑΣ, pro ΟΥΣ ΔΡΟΥΙΔΑΣ. Quae utique illis multo sunt commodiora, quibus opinati alii cum Edm. Dickinsono in Delph. Phoenis. p. 190. ed. Roterod. sunt, Σαρονίδας Diodorum hos Gallorum Theologos et Philosophos nuncupasse, ut Druidarum, a querebus repetitum vocabulum, explicaret. Sunt sane σαρονίδες, αἱ κοῖλαι δρύες. At Druidas a querebus id nomen inpetrasse, id vero negamus. Origo Celtica est, quam Theod. Hasaeus singulari Dissertatione sollertissime patefecit. Mox χρῶνται δὲ καὶ μάρτεσιν recte Ph. Cluverius legit L. I. G. A. p. 198. WESS.

354. 43. Ἄνθρωπον γὰρ κατασπείσαντες etc.] Strabo aliter L. IV. p. 302. ἄνθρωπον γὰρ κατασπείσμενον παίσαντες εἰς τῶτον μαχαίρα, ἐμαρτέοντο ἐκ τοῦ σφαδασμοῦ. Uterque habet ex Posidonio: uter vero rectius, equidem ignoro. WESS.

354. 59. Ὡσπερ τινα θηρία καταπέσαντες] Serpentes potissimum intelligit, quarum iras cantu mulceri putabant. Plutarchus de Psyllis in Caton. Minor. p. 787. A. οὐ τὰ τε δῖγματα



τῶν Θηριῶν ἴωνται τοῖς στόμασιν ἔλκοντες ἰὸν, ἀντά τε τὰ Θηρία κατεπαύοντες ἀμβλύνοσι καὶ κηλοῦσι. WESS.

355. 67. Τοὺς δ' ὑπὲρ ταύτης τῆς Κελτικῆς etc.] Hoc postulabat series orationis, sicuti et καθιδορμένους. Verum aliud hic sese prodit, maximopere animalvertendum. Gallos sive Galatas omnes eos adpellari adfirmat, qui a Celtica in Scythiam versus agros arant: Romanos contra ea uno Galatarum sive Gallorum nomine omnes cis et ultra Rhenum positas usque in Scythiam gentes nominare; quorum neutrum verum est. Γαλάτας cis Rhenum in Gallia, Κελτοὺς trans eum in Scythiam usque Graeci plerumque vocabant. Romanis Galli, qui cis et transalpinam Galliam incolebant, qui vero ultra Rhenum agebant, Germani. Quem quidem Diodori errorem intactum haud transiit Ph. Cluverius, eum etiam hac verborum emendatione eximere conatus: ἔτι δὲ τοὺς ἐπὶ ταύτῃ τῶν Περγηναίων ὁρῶν, παρὰ τε τὸν ὠκεανὸν — — καὶ πάντας τοὺς ἐξῆς μέχρι τῆς Σκυθίας Κελτοὺς ὀνομαζέουσι. τοὺς δ' ὑπὸ ταύτης τῆς Κελτικῆς, εἰς τὰ πρὸς νότον κείμενα μέρη, Γαλάτας προσαγορεύουσι Lib. I. G. A. c. I. p. 89.; quo modo prioris culpam erroris effugiet, alteri tamen, tanquam luto, penitissime immersus. Equidem orationem mutare non sustineo, praesertim ubi scripti Codd. intercedunt, et Diodorus cum ceteris id commune habet, ut in rebus ad septemtrionem Europae gestis subinde labatur. WESS.

355. 75. Ἐκ γενετῆς ὑπάρχει πολὺ ] Inferius L. XVII. 105. τοὺς ὄνυχας — ἐκ γενετῆς ἀΐξουσι. Ioannes Evang. c. IX. I. εἶδεν ἄνθρωπον τρηλὸν ἐκ γενετῆς. Sext. Empiric. L. XI. C. Mathem. p. 733. ὁ ἐκ γενετῆς τρηλὸς καὶ ζωγρός. Itaque male negligitur. Hoc vult: puerorum crines ab ipsis natalibus canos videri, flavescere deinceps. Vide superius c. 28. WESS.

355. 81. Τὴν ὀνομαζομένην Ἴριον ] Hibernia est, cuius incolae ἀνθρωποπόμοι olim fuisse habitos ex Strabone L. IV. p. 307. novimus. Id in obscuro manet, cur Ἴριον adpellet, quae ceteris Ἴερονη, Ἰουερνία, Ἰερνίς dici solet? Si Erion in gentis sermone sit terrigena, atque insula inde nomen acceperit, ut Guil. Baxter in Gloss. Antiq. Britann. pertendit, haud malum videri Ἴριος posset. Verum id mihi necdum exploratum est, et si certissimum foret, unde eius rei notitia ad Diodorum permanavit? Verius itaque arbitrabor, vocabulum hoc ex Ἰερνίς esse progenitum, atque inde instaurandum. WESS.

355. 83. Τὴν Ἀσίαν ὑπασαν καταδραμόντας ] De Cimmericorum in Asiam irruptione legatur Herodotus L. I. 15. etc. De Gallorum vero expeditionibus in Graeciam, Italiam et Asiam Iustin. XXIV. 5. Memnon de Reb. Heraeleoticis cap. 20. Pausan. L. X. 19. Livius L. V. 33. VII. 9. RHOD.

355. 85. Ἐν τῇ τῶν καλουμένων Κίμβρων προσηγορία ] Sic Posidonius in Strabon. L. VII. p. 450. C. et alii apud Plu-

tarch. in Mario p. 411. F., sed divinantes. Tu Ph. Cluver. L. III. G. A. c. 22. et Gabr. Trivorii Observ. Apologet. c. 14., quamquam in haud paucis errantis, vide. Mox *ξηλοῦσι τὸ λησιτέειν* praestaret, quod et in Addend. se Rhodomanno probavit. WESS.

355. 88. *Οἱ τὴν μὲν Ρώμην ἐλόγντες*] De Gallis certa res est: nam *Cimbrorum primum audita sunt arma Caecilio Metello et Papirio Carbone Coss.*, sicuti Tacitus de Ger. Mor. c. 37. ait. WESS.

355. 93. *Ἑλληνογαλάται κληθέντες*] Notiora sunt *Γαλλογοραικῶν* et *Γαλλογοραικίας* ex Romanorum usu vocabula apud Strabon. L. XII. p. 850. Suidas v. *Ἀγκυρα* habet *Ἑλληνογαλάτας*, et Themistius Orat. XXIII. p. 299. A. *Γαλατίαν τὴν Ἑλληνίδα*. WESS.

355. 97. *Ἀνασκοποῦνσι τοῖς θεοῖς*] Contende haec cum Caesaris L. VI. B. Gall. c. 16. et Strabonis L. IV. p. 303. verbis, illisque adde, quae de captivis, a Gallis immolatis, observavit ad Diodori Excerpt. p. 317. H. Vales. WESS.

356. 5. *Πρὸς τὰς τῶν ἀβόρον ἐπιλοχὰς — λυσοῶσιν*] Absolvi huius sceleris Galli non possunt, quidquid alii dicant; Aristotelis II. de Rep. c. 9., Strabonis L. IV. p. 304., Athenaei L. XIII. p. 603., cuius verba nostri scriptoris esse diceres, et Diodori testimonia non patiuntur. Germanos eidem flagitio adfines prohibet Sext. Empiricus Hypotypos. L. III. c. 24. p. 176., invito Fabricio, quem vide et Casaub. ad Strabon. l. c. cum Ph. Cluverio L. I. G. A. p. 174., neque enim his inmorari libet. WESS.

356. 9. *Εὐκόπως*] *Εὐκόλως* Co. Vide superius III. 24. WESS.

356. 18. *Διὰ τὴν ἐπιμιξίαν λέγ. ταύτης τυχεῖν τῆς ποσηγορ.*] Ad sententiam nihil admodum intererit hocceine retineas, an aliud ex Coislin. et Reg. adsciscas. Res ipsa dubio caret. Lucanus IV. 9.

— — *Profugique a gente vetusta*

*Gallorum, Celtæ miscentes nomen Hiberis.*

Silius III. 340.

*Venere et Celtæ sociatum nomen Hiberis.* WESS.

356. 25. *Φοροῦσι δ' οὔτοι σάγους μέλανας τραχεῖς*] Appianus paullo aliter Iber. p. 469. *χρῶνται δὲ διπλοῖς ἱματίοις παχέσιν, ἀντὶ χλαμῶδων ἀντὰ περιπορηόμενοι, καὶ τοῦτο σάγον ἡγοῦνται.* *utuntur duplicibus vestimentis crassis, chlamydem vice, quae fibulis connectentes saga vocant.* De scutis gladiisque Hispanorum Livius XXII. 46. *Gallis Hispanisque scuta eiusdem formae fere erant: dispares ac dissimiles gladii: Gallis praelongi, ac sine mucronibus: Hispano punctim magis quam caesim assueto petere hostem, brevitate habiles et cum mucronibus,* ex Polybio III. 114. WESS.

356. 28. *Κυρτίαις κυκλοτερέσιν*] Hesychius ita Celtas, id est, Gallos, appellare suos clypeos annotat. RHOD. Grammatici eius haec sunt: *Κυρτίαις, Κελτοὶ τὰς ἀσπίδας.* qui cum alio loco

*Καίτοι, ὅπλα Ἰβηρικὰ, οἱ δὲ Κερτίας, satis utique contra emendantium conatus suam scripturam tuetur, et unius Galliae id scutum haud fuisse declarat. WESS.*

356. 33. *Ἐχοντα σπιθαμαίας παραξίγιδας] Lege ἔχοντες, seorsum videlicet a gladiis. RHOD. Ἐχοντες σπιθαμαίας παραξίγιδας] Bene vir doctus, quicum non dissentio. Appian. Hannibal. p. 562. Κελτίβηρας ἐπὶ τοῖς μακροῖς ξίγεσιν ἑλὸς τοῖς χιτῶσιν ἄλλα ξίγη βραχύτερα περιέζωσεν. Lusitanos Strabo L. III. p. 231. B. eiusmodi παραξίγισι instruxit. WESS.*

356. 35. *Περὶ τὴν τῶν ὀπλῶν καὶ ἀμυντηρίων κατασκευῆς.] Arbitror copulam in his esse supervacaneam: ὅπλα ἀμυντήρια sunt λόγχοι, ξίγος, τόξον, ut explicat Strabo L. VII. p. 471. B., et auctor ipse in illis, quae continuo consequuntur. Scio subinde haec disparari, velut ab Aeliano de Animal. IX. II. καὶ ἐπιβουλεῦον μὲν χρῆται ὡς ὄπλῳ, κινδυνεῦον δὲ ὡς ἀμυντηρίῳ. et Gregor. Nazianz. Orat. IV. p. 123. οἷς μόνον καὶ ὄπλον καὶ τεῖχος καὶ ἄλλο πᾶν ἀμυντήριον ἢ πρὸς τὸν θεὸν ἐλπίς ὑπελείπετο. Sed alia Diodori consuetudo, cui ὅπλα σκεπαστήρια, quibus corpus tegimus, ἀμυντήρια, quibus aut vim illatam repellimus aut hostem invadimus, adpellare sollemne est, sicuti L. III. 44. et I. 24. Rem ipsam, de qua sermo instituitur, illustrant haec Plutarchi T. II. p. 510. F. οἱ Κελτίβηρες ἐκ τοῦ σιδήρου τὸ στόμαωμα ποιοῦσιν, ὅταν κατορθύξαντες εἰς τὴν γῆν τὸ πολὺ καὶ γεῶδες ἀποκαθαίρωσιν. et quae Suidas ex Polybio excerpit in Μάχηρα. WESS.*

356. 43. *Διμάχαι δ' ὄντες etc.] Haec vera scriptura, quam ex illis, quae succedunt, coniectura adsecutus fuit H. Vales. ad Polybii Excerpt. p. 1558. ed. Gronov. Hesych. Διμάχαι, οἵτινες ὅτε μὲν πεζῶν, ὅτε δὲ ἐφ' ἵππων μάχονται. Hunc autem pugnae morem, si res ferret, Celtiberos probasse Polybius in Suida v. Ἰδιον et Κελτίβηρες docet. WESS.*

*Ibid. Τὸ σῶμα λοῦουσιν οὔρω καὶ τοὺς ὀδόντας] Catullus Epigr. 36.*

*Nunc Celtiber in Celtiberia terra*

*Quod quisque minxit, hoc solet sibi mane*

*Dentem atque russam defricare gingivam.*

*Paria Strabo L. III. p. 249. A. § ubi Casaub. non neglexit Catullum neque Diodorum. WESS.*

357. 53. *Πρὸς δὲ τοὺς ξένους ἐπεικειεῖς] Confer tamen Strab. III. p. 226. A. WESS.*

357. 56. *Περὶ ξενίας] Περὶ τῆς φιλοξενίας Co. M. satis conmode. sed vid. Aelian. IX. H. V. 41. WESS.*

357. 62. *Τῶν Οὐαζαίων ὀνομαζόμενον σύστημα] Malim ὀνομαζόμενον quam ὀνομαζόμενον. STERN. et RHOD.*

357. 66. *Τῶν δὲ Κίμβρων ἀγκυμάτατοι] Hoc reformato in Κελτιβήρων vel simpliciter Ἰβήρων. De his enim, non de*

Cinbris, qui Germanorum seu Teutonum gentibus annumerantur, nunc agit. RHOD. Manifestum est debere legi Ἰβήρων, non Λίβρων. PALM. Τῶν δὲ Ἰβήρων ἀλκιμώτατοι] Absurdam Λίβρων vocem faventibus scriptis Codd. gradu deieci. Appian. Iber. p. 483. μέρος ἄλλο Ἰβήρων ἀπτονόμων, οἱ Λουσιτανοὶ καλοῦνται. WESS.

357. 70. Ταύτην δ' ἐν ταῖς μάχαις μεταφ. ἐβλήτως] Pro ταύτην dicerem legendum ταύτας, nisi a plurali ad singularem, et vicissim a singulari ad pluralem transire eum alibi animadvertissem, etiam in eadem periodo. STEPH. Lege ταύτας et ἐβλήτως. RHOD. Facile paterer ταύτην mutari, ni Diodori, quam Steph. iudicat, obstaret consuetudo. De ἐβλήτως intercedendum arbitror. Ἐβλήτως, expeditus, in Glossis Philoxeni, ἐβλήτοι κινήσεις, quae expedito utramque in partem motu fiunt: ἐβλήτως δοῦναι, libere atque expedito donare, de quibus ad L. III. 22., vulgato patrocinantur. WESS.

357. 79. Ἐπιτηδέουσι — ὄρχησίν τινα κούφην] De Callacis, gente Lusitana, Silius III. 345.

— Misit dives Callaecia pubem,

Barbara nunc patriis ululantem carmina linguis,

Nunc, pedis alterno percussa verbera terra,

Ad numerum resonans gaudentem plaudere caetras.

Haec requies ludusque viris, ea sacra voluptas.

Quem demi militiaeque morem et aliae gentes probarunt, de quibus Lipsius in Tacit. Mor. Germ. c. 2. WESS.

357. 85. Ἐγοδιάσαντες αὐτοὺς] Scribo αὐτοὺς, ut sit pro ξαντοὺς. STEPH. et RHOD. Ἐγοδιάσαντες αὐτοὺς ἀλκῆ] Vocem, etsi Mss. nihil adiutarent, mutavi, fretus praestantium virorum opinione et sermonis indole. Lusitani se fortitudine et armis, tanquam viatico, instruxerant, ut olim Alexandrum animi bonis philosophia, cum in Persicum bellum pergeret: οἷς αὐτὸν ἐγοδιάζε φιλοσοφία πρὸς τὴν στρατείαν Plut. T. II. p. 327. E. WESS.

358. 87. Καὶ ληστεῖοντες πλοῦτους ἀθροῖζονσι] Saepè de opibus πλοῦτοι in hoc scriptore: exempla si desideres, vide L. I. 71. V. 35. XII. 11. XVI. 7. 41. XX. 8. 14. Excerpt. Vales. p. 225. 362. 365. etc. Adde Lucian. Hermot. c. 9. Toxar. c. 45., quaeque utrobique Doctiss. I. Fr. Reitzius. WESS.

358. 90. Ἐβλήντοι καὶ ὄξεῖς] Optime se haec habere, Strabon. III. p. 231. B. ubi composueris, cognosces. WESS.

358. 1. Σχεδὸν τι] Σχεδὸν Cl. I. male. Vide L. XI. 75. et paullo ante. WESS.

358. 4. Ἐν ταῖς περὶ Ἡρακλέους πράξεσι] Inspice L. IV. 19. 20. et miraberis. WESS.

358. 7. Ἀπὸ τῆς κατὰ τὴν μεσημβρίαν θαλάττης] Mediterraneum, Hispaniam in austrum versam alluens, intellige. Ὅμοιος γὰρ διηγεῖται ἀπὸ νότου πρὸς Βορρῶν τεταμένον, ὁρῶσι τὴν Κελ-

τιζήν ἀπὸ τῆς Ἰβηρίας Strabo L. III. p. 200. B. de Pyrenaco scribit. WESS.

358. 12. Ὑπὸ τινῶν νομέων ἀγέντων πῦρ] Eadem Aristoteles, seu eius nomen mentitus auctor Admirand. p. 721. E., quae fabulis merito adscribit Strabo L. III. p. 217. Tamen Lucretius L. V. 1250.

— — — *Flammeus ardor*

*Horribili sonitu silvas exederat altas*

*Ab radicibus, et terram percoxerat igni.*

*Manabat venis ferventibus in loca terrae*

*Concava conveniens argenti rivus et auri,*

*Aeris item et plumbi.* WESS.

358. 15. Ὅρη — κληθῆναι Πυρηναῖα] Fabulae originem dedit montium adpellatio. Crediderunt Graeci ἀπὸ τοῦ πυρὸς montes Πυρηναίους esse dictos, quo nihil absurdius. Vocabulum natales accepit in ea gente, cuius illi montes. Celtis *Byrin* sive *Byren* mons est; hinc saltibus Pyrenaeis nomen, ut bene Clariss. Astruc in *Histor. Nat. Langued.* L. III. c. 2. p. 446. WESS.

358. 22. Ἀγοράζειν τὸν ἄγνηρον μικρῶς τινος ἀντιδόσεως ἄλ. φορτίων] Scriptor Admirand., qui Aristotelis nomen sibi inposuit, p. 735. C. *Phoenices λέγεται τοσοῦτον ἀργύριον ἀντιφορτίσασθαι*, ἔλαιον καὶ ἄλλον ναυτικὸν ῥῶπον εἰσαγαγόντας, ὥστε μηκέτι ἔχειν δένασθαι μήτε ἐκδέξασθαι τὸν ἄγνηρον. Sic recte legunt. Est enim ῥῶπος omne genus mercis vilioris, quod qui exponunt οἱ τὸν ῥῶπον διατιθέμενοι Galeno L. I. Meth. Therap. 35. Addit Aristotelis simia de anchoris, quae mox Diodorus. WESS.

358. 26. Διατεῖναι τῇ γιλοκερδία] Praefero τῆς γιλοκερδίας. RHOD. Ἐπὶ τοσοῦτο — διατεῖναι τῆς γιλοκερδίας] Idem et ego praecopto, et potiores libri manu exarati. Novī Nostro frequentari διατεῖναι τῇ δυνάμει πρὸς τὰ πέρατα τῆς οἰκουμένης L. I. 4., διατεῖναι τῇ δυνάμει μέχρι τῆς Συρίας L. II. 46., οἱ διατείνοντες ταῖς ἐμπορίαις μέχρι τοῦ κατὰ δέσιν ὠκεανοῦ L. V. 12., quae cum alio ordine collocata reperiantur, nihil officiant. WESS.

358. 29. Μόλυβδον] Μόλυβδον Vat. semper. Vid. supr. II. 10. WESS.

358. 31. Ἐπὶ πολὺν λαβόντες χρόνον ἀΐξισιν] Haec strigiligo mera. Praecessit διόπερ ἐπὶ πολλοὺς χρόνους οἱ Φοίνικες etc. Scripserat, διὰ τῆς τριακτῆς ἐμπορίας πολλὴν λαβόντες ἀΐξισιν. quo fere modo L. I. 7. τὴν τελείαν ἀΐξισιν λαβόντες. et XVI. 81. ἐποίησε τὰς πόλεις ταχὺ λαβεῖν πολλὴν ἀΐξισιν. WESS.

359. 39. Μεγάλας ἐλάβανον προσόδους] Strabo a scriptoribus proditum refert, tantam auri et argenti in Hispania fuisse copiam, ut Carthaginenses, quando duce Hamilcare Barca eam in-

vaserant, repererint *γάτραις ἀργυραῖς καὶ λίθοις χρωμένους τοὺς ἐν τῇ Τουρδιανίᾳ*, L. III. p. 224., qui etsi fortasse veri fidem superisserint, non video, cur *γάτραι* lacunaria potius cum viro optimo, quam praesepia haberi eo loco debeant: nam qui ex argento dolia vino condendo fabricarunt, potuerunt utique vilem sibi materiam in praesepia insumere. Hoc obiter, atque ut datam fidem liberarem. WESS.

359. 45. *Τῶν ἀργυρεόντων τινὲς ἰδιωτῶν etc.*] Optime liber Coisl., cuius scripturam Is. Casaubon. coniciendo praeceperat. Strabo L. III. p. 219. ex Posidonio, quem nomine turpiter dissimulato Diodorus in his recensendis exscripsit, *τῶν δὲ ἀργυρεόντων τῶν ἰδιωτῶν ἐν τρισὶν ἡμέραις Ἐβροϊκὸν τάλαντον ἐξαρόντων*. WESS.

359. 54. *Ἐπεπόλασε τοῖς μετέλλοις*] Inferius L. XVI. 84. *τὸ πλῆθος τῶν ἐπιπολασάντων οὐκ ἐκείνων*. Dio Cassius L. LVI. p. 684. A. *ῶν (βουλευτῶν) τὸ φᾶλλον τὸ ἐκ τῶν στάσεων ἐπιπολάσαν ἀλίπως ἀγέλων*. Sumptum est a redundante et ripas egressa aquae copia: *ἀπὸ μεταμορφῶς τοῦ πλεονάζοντος ὕδατος, ὅταν ὑπεραίρηται καὶ ὑπερεκχῆται πλέον τοῦ μέτρον*, Scholiastes ait in Philipp. III. p. 68. summi Oratoris. De ingenti autem aurifugulorum ex Italia per Hispaniam numero Strabo III. p. 220. B. WESS.

359. 59. *Κατὰ βιάθους*] *Κατὰ βιάθος* Co. M. Cl. 1., haud male. Vid. L. XII. 15. WESS.

359. 70. *Ἄ δὲ εἶχον ἀπέβαλον etc.*] Ex Posidonio sumpsit, cuius verba hunc in modum exhibet Athenaeus L. VI. 4. p. 233. D. *ἃ μὲν ἐμελλον οὐκ ἔλαβον, ἃ δὲ εἶχον ἀπέβαλον, ὥσπερ ἀνρήματος τρόπον ἀντιχοῦντες*. quae quia non aliam dant sententiam atque haec Diodori, non ausim assentiri viro praestantissimo, Diodorum male narrando hoc aenigma suum fecisse. Strabo quidem L. III. p. 219. A. Posidonii dictum paullo aliter expressit; quae eius verba cum sint luxata, haud scio an iniuria Athenaeo et Diodoro obmoveantur. Vide tamen Is. Casaubon. ea explicantem, et de metallorum Atticorum Posidonii aetate pauperie L. IX. p. 613. Strabonis. WESS.

359. 71. *Ἀνρήματος τρόπον*] In vita Homeri apud Herodotum c. 35. *Ὅσ' ἔλομεν λιπόμεσθ', ὅσ' οὐχ ἔλομεν φερόμεσθα*. RHOD.

*Ibid. Ἰσπανίαν*] *Σπανίαν* Co. M. Vide ad Anton. Itiner. p. 268. WESS.

359. 77. *Ἐλιγμοῖς τῶν ῥάβδων*] Venae sunt, virgarum in morem metalla distinguentes: *αἱ ἐν τοῖς μετέλλοις ῥάβδοι*, Theophrasto L. IV. Causs. Plant. c. 13., quarum anfractus diligentissime persequitur Georg. Agricola L. III. R. Metall. p. 30. WESS.

360. 79. *Αιακόπτοντες τὰς ῥύσεις αὐτῶν*] Eadem ex Posidonio habet Strabo L. III. p. 218., sed egregia Is. Casauboni medicina instauratus. WESS.

360. 83. *Ἀπορύττονσι γὰρ τὰς ῥύσεις*] Scribendum *ἀπαρύττονται*. De cochleis haustoriis consule Vitruvium L. X. c. 11. RHOD.

360. 85. *Ὅς Ἀρχιμήδης — εἶρεν*] De cochleis his Lib. I. 34. egimus. WESS.

360. 88. *Καὶ κατασκευάζουσιν ἐθέτων τὴν πρὸς τὰς etc.*] Sic mihi scripsisse videtur, tum quod *ἔντεχρον* parum hic sit opportunum, tum ob meliorem Codd. auctoritatem. Nolet quoque alias hoc genus amplecti: nam et *Σαίτηρος πρὸς ὄρχηρον* etc. *ἄντας εἰθέτους* L. I. 18., et *κίνας πρὸς τὴν τῶν βίωσιν χρεῖαν ἐθέτους* L. III. 31. reperies, atque in hunc modum plurifariam alia. WESS.

360. 3. *Καταξαινόμενοι τὰ σώματα*] Sive de verberibus seu gravi et continuo labore, quo atterebantur aurilegularum vires, acciperis, verum erit. Utrumque in metalla depressi nimis saepe experiebantur. Euripid. Troad. v. 755. *Πάτην δ' ἐμάχθων, καὶ κατέξανθην λόποις*. Noster de Romanis, qui servos in Sicilia τῇ βαρύντητι τῶν ἔργων κατέξαινον in Excerpt. Vales. p. 366. Oenomaus in Euseb. L. VI. Praep. Evang. c. 7. p. 261. C. *οκείτος δέ τι τῶν ἐτόντων λαβόντες — τὰς πλευρὰς ἐκ μάλα καταξαινοῦμεν αὐτοῖς*. Sophocles Aiac. v. 740. *ὡς οὐκ ἀργέσει Τὸ μὴ αὐτὸ πέτροισι πῆς καταξανθεῖς θανεῖν*. Quae quidem scriptorum loca ad verbi potestatem declarandam abunde erunt. WESS.

360. 4. *Ἄνεσις γὰρ ἢ παῦλα τῶν ἔργων οὐκ ἔστιν αὐτοῖς*] Misera horum et acrumnosam conditionem uberius antea descripserat L. III. 12. etc., quae adire operae pretium erit. Vide vero confidentiam Thomae M. in *Ἰνάλια* decernentis, *τὸ δὲ παῦλα ἀδόκιμον*. Atqui *παῦλαν κακῶν* Sophoc. Trachin. v. 1262. et *παῦλαν βαρείας νόσου* Philoct. v. 1322., *παῦλαν κακῶν* Plato L. V. Rep. 473. D. dixerunt. Thomam Cl. Dukerus quoque notavit in Thucyd. L. VI. 60. WESS.

360. 19. *Καθόλου γὰρ αἰὲν Καρχηδόνιοι διεπολέμουν etc.*] Confer c. 11. Polybium L. I. c. 67. *Καρχηδόνιοι γὰρ αἰὲν χεῖρῶν ποικίλαις καὶ μισθοφορικαῖς δυνάμεσι*. Porro *πολιτικοὶ στρατιῶται* qui ex ipsis civibus delectu habito scribuntur, ut *πολιτικοὶ δυνάμεις* Lib. III. 28. XI. 1. 67. XVIII. 11. 12. Aristoteles Politic. V. 10. *καὶ φυλακῇ, βασιλικῇ μὲν, πολιτικῇ, τυραννικῇ, διὰ ξένων*. Hinc *πολιτικοὶ ἰλιπεῖς καὶ πέσοι* ex urbanis conscripti Polybio I. 73. 75. WESS.

361. 24. *Λεινοὶ γὰρ — ὑπῆρξαν οἱ Φοίνικες — εἰς τὸ κέρδος ἐθέειν*] Habuerunt a maioribus, qui mercaturae unice cum studerent, paullatim omnes, lucrum ex mercium permutatione se-

etantes, Hebraeorum genti כנעני Cananaei sunt dicti, ut Iobi XI. 25. atque alias, Luciano Toxar. c. 4. κάππιοι. De Romanis, quorum ex Sallustio Iugurth. c. 81. *profunda avaritia* cognitissima, quae consequuntur notabilia sunt. WESS.

361. 28. Οὐκ ἔξ ἐπιπολῆς εὐρίσκόμενος, ὡς ἐν ταῖς ἱστορίαις etc.] Ut videas, quam in Posidonio describendo operam posuerit Diodorus, ecce tibi Strabonis verba, τὸν δὲ καττίτερον οὐκ ἐπὶ ἐπιπολῆς εὐρίσκεισθαι φησιν (Posidonius) ὡς τοὺς ἱστορικοὺς Θουλλεῖν, ἀλλ' ὀρύττεσθαι. γεννᾶσθαι δ' ἐν τοῖς ὑπὲρ τοῦς Ἀσσιτιανοὺς βαρβάρους καὶ ἐν ταῖς Καπιτερίσι νήσοις, L. III. p. 219. Οὐμνε potest ovo esse similis? Manifestum id merito furtum censet Is. Casaub., quia in tota haec narratione nusquam Posidonium Diodorus laudavit. De insulis Cassiteridibus, quarum numerum denario includit Strabo III. p. 265., incertissima omnia esse ex Christoph. Cellario L. II. G. A. c. 1. p. 157. cognosces. WESS.

361. 37. Ἐφ' ἑλλων ὑπὸ τῶν ἐμπόρων ἄγεται παρά τε τοὺς Μασσ.] Dixit huius libri c. 22. WESS.

361. 42. Καὶ τοὺς Κελτιβ. ἔτι δ' Ἰβηρας] Ultima haec scriptori restitui, Codd. imperantibus. Gallorum, Celtiberorum et Hiberorum res c. 32. 33. attigerat, ut merito haec adliungat. WESS.

361. 44. Νέμονται χώραν τραχεῖαν καὶ παντελῶς λυπρὰν] Vide quae de Ligurum solo L. IV. 20. perscripsit. WESS.

361. 50. Πέτρας λατομοῦσι] Emenda ut fiat λατομοῦσι, petras scindunt. Idiotismus hic auctori familiaris. RHOD. Πέτρας λατομοῦσι] Vulgatum unde Stephanus acceperit, non dixerō. Hoc unice verum et iure a Rhodomanno probatum fuisse, novimus ex Strabone, qui et fontem, unde Diodorus hauserit, indicat L. V. p. 334. C. Ligures τραχεῖαν γῆν ἀροῦντες καὶ σκάπτοντες, μᾶλλον δὲ ΛΑΤΟΜΟΥΝΤΕΣ, ὡς φησι Ποσειδώνιος. Iterum ergo Posidonii verbis pro suis utitur. WESS.

361. 53. Τῇ συνεχείᾳ περιγίνονται] Obsecutus sum libris manu exaratis, a quibus si discedere consilium fuisset, nihil innovassem, cum *Adsuetumque malo Ligurem* et poeta vocarit H. Georg. v. 168. Συνέχεια Ligurum pertinax in opere studium declarat, ut eorundem *συνεχῆς γυμνασία*, et τὸ *συνεχῶς ποιεῖν* Lib. IV. 20. et mox ἡ *συνέχεια τῶν γυμνασιῶν*. WESS.

361. 60. Πολλὰ τῶν θηρίων θηρεύομενοι] Rectius χειροῦμενοι, plurimarum subactione ferarum. RHOD. Πολλὰ τῶν θηρίων χειροῦμενοι] Sic oportuit, ut pulcre Rhodomannus advertit. Firmant praeter

Ἐκθόλοις τόξοισιν Ἀταλάντην κάπρον

Χειρομένην Αἰτωλόν

in Euripidis Phoenis. v. 1115. et ea, quae adscripta cap. 29. videbis. WESS.



361. 64. Σπαροζαοπίαν] Στεροζαοπίαν Co. M. Non sequor. Σπαροσιτιάς simili usu L. I. 53. habuimus. WESS.

*Ibid.* Σαρκοφαγοῦσι δὲ τὰς — σίρκας] Conduplicatio- nis hoc genus sectari solet, quippe σιτοδείαν καρπῶν II. 16., θηριω- μαχεῖν ἐπέθ' θρημμάτων πρὸς παροδύλεις III. 43., καὶ τὴν καταλήθη- σασθαι XVIII. 4., τοὺς νεὸς οἰκοδομεῖν XIII. 82., ut οἶκον οἰ- κοδομεῖν S. Lucas A. A. VII. 48., πείρας λατομεῖν hoc cap., si- militiaque cupide usurpans. WESS.

362. 72. Διαφυλάττοντες — ἀκατάσχετον βίον] Liguri- bus *implicitis dumis silvestribus* apud Florum II. 3., atque *inopi- bus et agrestibus* in Taciti Histor. II. 13., haud male βίος ἀκα- τήσχετος, seu omni apparatu defectum vitae genus tribuitur, cu- iusmodi πλῆθος τῶν ἐπιτηδείων ἀπαράσχετον Iosephus III. B. I. c. 7. 32. memorat: nec minus βίος ἀκατάσχετος, vita squalida et incondita, quam quia scripti Codd. edicunt, iisdem relinquo. WESS.

362. 80. Εἰς τὸν Γαλατικὸν ἠνθρῶν δεδρμιορρημέος] Vide huius libri c. 30. WESS.

362. 91. Ὑπομένονσι τὰς — περιστάσεις καταπληκτικῶς] Posses hic illud καταπληκτικῶς referre ad alios, qui ubi tam intrepide gravissimos subire casus adspiciunt, vel legunt, *Ligures, ipso aspectu καταπλήττονται. Sed ego potius referendum putem ad ipsos Ligures, qui saevas hiemis tempestates, quas alii horreant, imparido animo perferant. Quare videtur scripsisse Noster ἀκαταπληκτικῶς*. Sic doctissimus Io. Iensius Epist. ad Graev. p. 415., cui suum arbitrium concedo. Diodoro, qui ἀκαταπληκτι- κῶς, si bene memini, non amat, καταπληκτικῶς non aliud saepe est ac stupendum in modum, quod hic sat commodum. Vid. I. 48. III. 36. WESS.

362. 98. Τὸ μὲν παρὰ τὴν Ἰταλίαν πέλαγος — Τυρρῆνι- ζὸν] Livius L. V. 33. *Tuscorum ante Romanam imperium late terra marique opes patuere. Mari supero inferoque, quibus Italia insulae modo cingitur, quantum potuerint, nomina sunt ar- gumento, quod alterum Tuscum communi vocabulo gentis, alte- rum Adriaticum mare, ab Adria Tuscorum colonia, vocavere Italicae gentes. Graeci eadem Tyrrhenum atque Adriaticum vocant.* Cuius egregio loco adiunge, quae Is. Casaub. de Tyrrhe- norum maris imperio disputavit in Polybii L. I. 20. WESS.

362. 2. Ἀπ' ἐξείνων δ' ὀνομασθεῖσαν Τυρρῆνιν] Tuscis cornua et tubas deberi testis Athen. L. IV. p. 181. *Τυρρῆνιν δ' ἐστὶν ἔθνος ζέσται τε καὶ σάλπιγγες.* Eustath. vero in Homer. p. 1139. tubarum genera enumerans, ἔκτη, αἶτ, Τυρρῆνική, ἧς ἐξείναι Τυρρῆνοί, ὁμοία Φοργίῳ ἀλλ' ὅ τὸν κώδιοντι κεκλαομέ- ρον ἔχουσι, κίαν ὀξύσποντος, ἧς καὶ Σοφοκλῆς ἐν τῷ Πηλοπο- νησίῳ μένεται. Sophoclis versus, quem designat, fabulae est de-

cimus octavus, ubi vide Criticos veteres, et, qui eos descripsit, Suidam in v. *Κώδων*. WESS.

362. 4. *Περιθέντες τοῖς ἡγοιμένοις ῥαβδούχοις*] Livius adsentitur, cum de duodecim lictoribus, *me haud poenitet eorum sententiae esse, quibus et apparitores et hoc genus ab Etruscis finitimis, unde sella curulis, unde toga praetexta sumpta est, numerum quoque ipsum ductum placet* Libr. I. 8., et Dionys. L. III. A. R. p. 195. WESS.

362. 8. *Ἐξέειρον ἐζορησίαν*] Aut *ἐζορηστα* aut *ἐζορησίαν παρόντα* suspicor Diodorum scripsisse: non ignorans interim *περίστοια ἐζορησίαν* videri posse per appositionem dictum, sed eam nimis duram iudicans. STEPH. Facio cum H. Stephano: durissima profecto haec appositio. Posses etiam *τῶν περιστότων — ἐζορησίαν*, si qua id melius censeretur. Mox πρὸς τὸ κάλλιον si qui malaerint, illis haud repugnabo, etsi non magnum discrimen. Vide L. XXIII. Eclog. 3. WESS.

362. 11. *Φυσιολογίαν καὶ Θεολογίαν*] Postrema e scriptis libris suam in sedem restitui. Qui *μαντικὴν* et *ἱεροποιείας*, uti de Etruscis Strabo V. p. 336., praecipue observarunt, illis rerum divinarum notitia non neganda videtur. Vulgo autem Etrusci coelestium prodigiorum censebantur periti, quare et Tanaquil in partem eius scientiae apud Livium I. 56. venit. Adposite Cicero L. I. Divinat. c. 41. *Etruria de coelo tacta scientissime animadvertit, eademque interpretatur, quid quibusque ostendatur monstris atque prodigiis*. Quae quo modo procuraverint, cognosci poterit ex Schol. Persii Sat. II. 26. et Salmasio in Solin. p. 804. WESS.

363. 15. *Τούτοις ἐξηγηταῖς χρῶνται*] Prodigiorum portentorumque interpretibus, ut in Cicero. II. Leg. c. 9. et Valer. Max. I. 6.: hi quippe *ἐξηγηταί*. Hesychius, *Ἐξηγητής, ὁ περὶ ἱερῶν καὶ ΔΙΟΣΗΜΕΙΩΝ ἐξηγούμενος*. Cumque in his saepe ad Apollinem recurrerent, de eo Plato L. IV. Rep. p. 427. C. *οὗτος γὰρ δή που περὶ τὰ τοιαῦτα πᾶσιν ἀνθρώποις πάτριος ΕΞΗΓΗΤΗΣ, ἐν μέσῳ τῆς γῆς ἐπὶ τοῦ ὀμφαλοῦ καθήμενος ΕΞΗΓΗΤΑΙ*. Plura si velis, ἴδω τῷ *Θυλάῳ*, quod dici solet, admetientur viri doctissimi Gisb. Cuperus ad Marm. Antiq. p. 277. et T. Hemsterh. in Polluc. VIII. 124. WESS.

363. 19. *Παρατίθενται δις τῆς ἡμέρας τροπέας* etc.] Posidonius in Athen. L. IV. p. 153. *παρὰ δὲ Τεθόροις δις τῆς ἡμέρας τροπέαι πολυτελεῖς παρασκευάζονται, ἀνθινὰ τε στρώματα, καὶ ἐκλύματα ἀγροῦ παντοδαπὰ καὶ δοῦλων πλήθος εὐπρεπῶν παρέστηζεν, ἐσθίσει πολυτελεῖσι κεκοσμημένοι*. Quare, unde hortulos suos Diodorus rigarit, manifesto declarant. WESS.

363. 30. *Ἐν πότοις καὶ ῥαθυμίαις ἀνάνδροις βιοῦντες*] *Ἐν τόποις* Vat. Vid. L. II. 41. — Officinam nequitiae et flagitiorum inter Etruscos seriore fuisse aetate, nemo melius Athenaeo docuit Lib. XII. p. 517. WESS.

363. 32. Πολέμοις] Πολεμίους (*excidit nota libri in ed. Wessel.*) sat commode. Vide L. I. 24. WESS.

363. 34. Πάμορον — νεμόμενοι χώρα] Dionysium, patria tradentem, vide L. I. A. R. p. 29. WESS.

363. 46. Τῆ καλονμένη Κεδρωσίᾳ] Vide L. III. 15. WESS.

363. 48. Ἐπὶ γεωλόγων ἢ πεδίων] Novi Strabonis XVI. p. 1095. B. ὄρη γεωλόγα, et Dioscoridis L. III. 15. χωρία γεωλόγα. At hic vocabulum, orationem disiungens, negligi haud poterit. Superius cap. 16. διεκλιμμένη δὲ πεδίοις ἀξιολόγοις καὶ γεωλόγοις. WESS.

364. 58. Ἐνδαύων ὄνομασθεῖσα] Strabo videndus est L. XVI. p. 1129. WESS.

364. 60. Ὡν τρεῖς εἰσὶν ἄξια τῆς ἱστορικῆς ἀναγραφῆς] Ex Euemeri Sacra Historia haec se descripsisse docuerat L. VI. huius Bibliothecae, uti eius fragmentum, quod Eusebio debemus L. II. Praep. Evang. c. 2. p. 60. significat. WESS.

364. 71. Τῆ δὲ προσώψει τῆ ἀκάνθη τ. Α. τ. λ. παρεμπερές] De myrrhae arbore affirmat Dioscorides I. 77. ὅμοιον εἶναι τῆ Ἀγριακῆ ἀκάνθη. Et rectius, ni scriptores fallant. Thuris arbor spinis caret, laevique ex omni parte est cortice, teste Theophrasto L. VIII. H. Plant. c. 4., quem Plinius sequitur L. XII. H. N. c. 14. De spina Aegyptia, quam in *fabam* converterat Rhodom., copiose Cl. Salm. in Solin. p. 370. WESS.

364. 76. Ὅμοιον ἐστὶ τῆ σχίνῳ] In Theophrasti L. VIII. H. P. c. 4. sunt, qui τὸ τοῦ λιβανωτοῦ δένδρον ὅμοιον εἶναι φασὶ τῆ σχίνῳ. pro quibus Plinius, *alii lentisco similem subruilo*: nec probat tamen horum opinionem Theophrastus, qui myrrhae arborem terebintho simillimam tradit, sed scabriorem et spinosiorē. Diceres Dioscorum arborum haec genera miscuisse, si de illis inter veteres ipsos conveniret. WESS.

364. 81. Θερινός ἐστι] Dubitari non potest, quin iustum hoc sit. Dixerat, bis quotannis aestate et vere myrrham exsudare: recte ergo succus hic *εαρινός*, ille *θερινός*. Plinius aliter L. XII. 16. WESS.

364. 84. Καὶ πρὸς τὰς κοιλίας τὰς ῥεούσας φαρμάκῳ] Paliuri ἀπέψημα τὴν κοιλίαν ἴσθησι Dioscorid. I. 121., sive, ut Galenus L. VIII. de Simp. Medic. Virib. p. 103., τὴν ῥέονσαν γαστέρα ἐπέχει. WESS.

364. 89. Οἱ καλούμενοι Παγγαῖοι] Hinc poeta Georg. II. 139.

*Totaque turiferis Panchaia pinguis arenis.*

ubi Servius et Philargyrius Arabiam aut regionem Arabiae interpretantur, sed prave. Arabia non est Euemeri Panchaia, sed insula exadversum continenti Arabiae. Virgilius ex Ennio habet, qui Sacram Euemeri Historiam Latina veste induerat, ipsique et

Romanis persuaserat, hoc nomine insulam ab Oceano Indico allui. WESS.

364. 99. Θεωρεῖσθαι τὴν Ἰνδικὴν ἀέριον] *Indiam veluti nubeculam in aere conspici* verterat Rhodomannus, non satis pro usu scriptoris, cui ἀέριον omne immane et in aerem vastissime exurgens, sicuti ad Lib. I. 33. significatum est. WESS.

365. 2. Οἱ Παγχαῖοι λεγόμενοι] Uni Euhemero sive Euhemero Panchaei originem suam acceptam referunt, qui Sacra Historia condita veteris Graeciae numina hominum catalogo inseruit, commentus inscriptiones, in Panchaia repertas, a nemine alio nec visas nec lectas. Docet Plut. Osir. p. 360. A. ὃς αὐτὸς, Euhemerus, ἀντίγραφον συνθεῖς ἀπίστου καὶ ἀνυπάρκτου μυθολογίας, πᾶσαν ἀθεότητα κατασκευάωνσι τῆς οἰκουμένης, τοὺς νομιζομένους θεοὺς πάντας ὁμαλῶς διαγράφων εἰς ὀνόματα στρατηγῶν καὶ ναυάρχων καὶ βασιλέων, ὡς δὴ πάλαι γεγονότων, ἐν δὲ Παγχαῖα γράμμασι χροσοῖς ἀναγεγραμμένοι, οἷς οὔτε βάρβαρος, οὔτε Ἕλληνας, ἀλλὰ μόνος Εὐήμερος, ὡς εἶπε, πλεύσας εἰς τοὺς μηδαμῶδι γῆς γεγονότας μηδὲ ὄντας Παγχαίους καὶ Τριφυλίους ἐντετυχῆκει. Sic lego, secutus ex parte Xylandrum et R. Bentleium ad Callim. Frag. p. 340., a quibus P. Petitus L. I. Miscell. Obs. c. 2. nihil admodum dissidet. Cum Plutarcho, ut ad eum redeam, contra Euhemerum stat Polybius, gravis auctor, Παγχαίαν γῆν ad fictas fabulas amandans in Strabon. II. p. 163., nec aliud placet Eratostheni apud eundem Geographum L. VII. p. 459. A. Quibus tamen non movetur Is. Vossius in Pompon. Melam II. 8., ut omnia mentitum Euhemerum arbitretur: Panchaiae saltem nomen mentitum haud esse; legi enim Παγχαίτας in Adulitano monumento. Quod si verum esset, haud levem Euhemero auctoritatem adderet. At nulli ea in inscriptione *Panchaitae* leguntur, tantum Ταγγαῖται, qui in Aegypti Aethiopiaeque finibus incolebant, longoque adeo a Panchaeis terrarum spatio dissepti. Vide Cosman Indicopleusten L. II. Topograph. Christ. p. 142. et Abbatem Sevinum, paria docentem, Dissert. de Euhemero Tom. XI. p. 18. Comment. Acad. Inscript. WESS.

365. 5. Προσαγορευομένη μὲν Παράρα] Urbem, ab Euhemero exstructam, nusquam reperire potui. Stephanus Byzantinus, omnia undique colligens, dignam non censuit, cui locum daret. Eadem Ptolemaei sententia. WESS.

365. 6. Καλοῦνται μὲν ἰκέται τοῦ Λιὸς τοῦ Τριφυλίου] Permisceantur librariorum arbitratu ἰκέται et οἰκέται, ut in Pollucis I. 10., dubiumque adeo manet, utrum praestet. Equidem prior sum in οἰκέτας, ut Iovis Triphylii administri designentur, nec editum tamen gradu depuli, quod et id reperire patronos possit. Rectam vero Τριφυλίου nomen est, quoniam incolae ἐκ τριῶν ἔθνων sive φυλῶν, ut postea docebit, unam in gentem, unde Iovi id cognomen, coaluerant. Quare perperam apud Servium in Ge-

org. II. 139. *templum Triphyllii Iovis et ἑρὸν Διὸς Τριφυλιῶν* in Euseb. II. Praep. Evang. c. 2. p. 60. Falluntur quoque, qui ad Lactantium L. I. Div. Instit. c. 11. a Triphylia regione inter Elidem et Messenen Iovis hunc titulum derivant. WESS.

365. 20. *Καὶ δάφνης καὶ μυρσίνης καταγέμει*] Sequor eos Codd., qui vocem ἔρρεσι damnant; neque enim commode eam coniunxeris *κνπαρίττων ἕξαισίων τοῖς μεγέθεσι καὶ πλατύων* vocabulis. Alioqui salva esse constructio poterit ex his Iosephi L. IV. B. I. 3. 10. p. 276. *πρὶν ἐπιθεῖν τὸν οἶκον τοῦ θεοῦ τοσοῦτοις ἄγεσι καταγέμοντα*. WESS.

365. 27. *Συνάγκεια δένδρων — συνεχεῖς*] Locum, quem insederat, tueri potuerat *δαψιλῆις*, nisi scripti libri intercederent: eo nihil posterius esse, quod recepi, *συνεχῆ ἔθνη, συνεχῆς χώρα, συνεχεῖς πέτραι, συνεχεῖς δομοὶ*, passim in Diodoro obvia, ostendunt. Confer supr. III. 68. WESS.

365. 29. *Ὅρνέων τε πλήθος παντοδ. νεοσσεύεται*] Lege pro *νεοσσεύεται, ἐννεοσσεύεται*. Et statim *διάφορα et παρεχόμενα* synthesis est Grammatica: nam ad intellectum refertur constructio; vel enallage casuum Diodorea, pro *διαφόρων, παρεχομένων*. RHOD.

365. 30. *Ἐννεοσσεύεται*] Vide supr. L. III. 68. WESS.

*Ibid. Ταῖς χόραις διάφορα — παρεχόμενα*] Cum ὀρνέων cohaereret *διαφόρων et παρεχομένων*. Sed videtur *διάφορα et παρεχόμενα* dixisse, perinde ac si praecessisset, non ὀρνέων πλήθος, sed ὄρνεα πλείστα, quod idem valet. Quare nihil mutandum hic censeo. STEPH.

365. 36. *Καὶ καρφαὶ πολλαὶ ἀκροδρόων*] Comma post *ἀκροδρόων* remitte ad *πολλαί*. RHOD. *Καὶ καρφαὶ πολλαί, ἀκροδ. δαψιλ.* etc. Distinctionem, ut vir doctissimus edixerat, mutavi. *Ἀκρόδρα πάντες οἱ τῶν δένδρων καρποὶ*, auctore Suida, quo usu L. II. 59. III. 72. Vide D. Petav. in Synesii Encom. Calvit. p. 70. Mox post *παντοδαπαί* deficit, ab ea voce absorptum, αἰ, quod H. Stephanus optime animadvertit. WESS.

365. 39. *Καὶ παντοδαπαί, πρὸς ἕψος etc.*] Inter *παντοδαπαί* et *πρὸς* inserto αἰ. STEPH.

366. 46. *Ἐπήρριστο*] Vide L. I. 47. WESS.

366. 48. *Καὶ τοῖς βάρεσι θαυμαζόμενα*] Tales plerique erant *τῶν βαρβαρικῶν θεῶν, ὀλόχρησοι καὶ βαρεῖς*, quos urbanissimus scurra Lucian. in Iov. Tragoed. c. 8. lepidissime perstringit. WESS.

366. 53. *Χαλκεῖα μεγάλα κεῖται*] *Statuas ex aere* interpretor. Ego vasa aenea fuisse arbitror ex usu vocis, de quo non dubitabis, modo *Ἰωδωναῖον χαλκεῖον* et quid Stephanus v. *Ἰωδώνη* de eo perscripserit, in memoriam redegeris. WESS.

366. 68. *Ὀὐρανῶν διάφορος*] Habet Lactantius L. I. Div. Instit. c. 11. ex Ennii Sacra *Historia montem, qui vocatur coeli*

*stela*, in quo Iupiter late terras contemplatus Coelo aram creavit: qui, tametsi ex Euemero sumptus, ab hoc diversus fuisse videtur. WESS.

366. 75. Τοὺς δὲ Δωτόους] Elige, utrum Δωτόους, an Δώους, an Αώους malis? Ego horum quid praestet iuxta cum illis scio, qui ignorant. De *Doia* idem iudicium esto. *Asterusiam* Cretae montem Stephanus habet; cumque in Panchaia multa durarent Κρητικῶς ὀνομαζόμενα, sicuti cap. 46. traditur, fortasse inde urbi nomen fecit Euemerus. WESS.

366. 87. Θραζίαν] Magis placet Ὑραζίαν, quamvis hic nihil certi sit. RHOD. Ὑραζίαν] Scriptorum Codd. amplior numerus, ut hoc verius censerem, inpetravit. WESS.

367. 90. Καὶ ἄρμασι χρῆσθαι κ. τ. μ. ἀρχαϊκῶς] Vide adscripta L. I. 54. WESS.

367. 94. Προστιθεμένων τῶν ρομέων] Diceres haec sedem migrasse, olim collocata post τῶν γεωργῶν, tum quod pastores agricolarum ordini ob vitae studium aptius coniunguntur, tum quoniam Diodorus in illis, quae statim consequuntur, rusticis pastores subnectit. Nihil tamen innovare satius est, quoniam *pastorum* nomine venatores, qui a militum vitae genere haud longe distant, complecti Euemerus potuit, ut Aegyptii L. I. 74., et manu exarati Codd. obnituntur. WESS.

367. 3. Καὶ οἱ ρομέις τὰ τε ἱερῆα etc.] Haud absurda est Regii libri scriptura τὰ τε ἔρια. Abundabant in Panchaia oves mollissima vestitae lana, quae, cum civibus omnia essent communia, haud dubie a pastoribus in publicum fuit deposita. Nec peior tamen vulgata, praesertim quoniam καὶ ἄλλα lanam, quae σταθμῶ ἀpendebatur, complecti possunt. WESS.

367. 11. Διαφέροντα τῶν ἄλλων τὴν μαλακότητα] Solet auctor tertium casum addere, ut II. 5. 34. XI. 67. saepeque alias. Huic similis est ἀνὴρ μεγαλόπρηνος καὶ τὰ πολεμικὰ διαφέρων in Orat. Aeschinis C. Ctesiphont. p. 84., et Telchines τέχνας διαφέροντες Strabon. L. XIV. p. 966. B. neque adeo necessarium prorsus τὸ διὰ, quod Codd. nonnulli inculcant. WESS.

367. 15. Παραπλησίως τοῖς Πέρσαις] Persarum in aures his nostri scriptoris illustrat Barnab. Brisson. L. II. Reg. Pers. p. 560. 199. Cetera, quae memoravit, ornamenta eorundem erant. Dio Chrysost. Orat. II. p. 29. B. οὐκ ὄντων γαίρεται χροσόχορίας ἐπαιῶν ὁ Ὀμηρος, καὶ ταῦτα εἰς πόλεμον, ψελλίων τε καὶ στριπτῶν, ἔτι δὲ χροσῶν γαλάρων καὶ χαλινῶν, ὅποια τοῖς Πέρσαις γαστὴν ἐπιτηδεύειν. Mox ἐποδέεσι κινναῖς, ut rarum atque inusitatum calceorum genus innuat, melius videri potest. WESS. Κινναῖς non probō, ut nec κινναῖς, quod olim in mentem venerat. Verius videtur κοίλαις, ad quem modum κοῖλα ἐποδήμιαι apud Hesychium, Pollucem atque alios. Vide Cl. Salmasium ad Pall. Tertulliani p. 387. IDEM in Add.

367. 21. Ἔστι γὰρ τὸ μέρος] Restitue τί. RHOD.

367. 22. *Θρασίων καὶ παρανόμων ἀνθρώπων*] Supplevi Diodori orationem; Mss. addicentibus, quos tamen an sequar post pauca τῆ λεπτότητι — διαφόρους praefereutes, dubito. Probabatur in lineis vestibus τὸ λεπτὸν ἔγασμα apud Polluc. VII. 35., nec minus λεκότης, sive candor, qui hic negligi non posse videtur, cum τῆ μαλακότητι satis superque indicetur, vestes illas tenui filo fuisse textas. Favent tamen scriptis Codd. ὀθόρια τῆ τε λεπτότητι καὶ τῆ μαλακότητι διαπεπῆ, quae in insula Melita texebantur, cap. 12. huius libri. WESS.

367. 30. *Σανδάλια ποικίλα γέλοισ. ἐργασμένα*] Et hic una voce auctiorem orationis textum esse iussi; quod haud iniuria a me factum declarant, et quae adduntur, et soleae rubrae in Persii Sat. V. 169. et sandalia,

Ἐφ' οἷς τὰ χρυσᾶ ταῦτ' ἔπεστιν ἄνθεμα,  
ex Cephisodori Trophonio apud Polluc. VII. 87. WESS.

368. 37. Ἐπὶ Λιδῶς ἡγμένους εἰς τὴν Παναχαιάν] Nihil hinc demuto. Deducti eo tempore videntur, quo Historia sacra Iovem in Panchaiam venisse cum magna Cretensium multitudine, Titanumque ac filios eius pugnando vicisse, parentes vinculis exemisse, patri regnum reddidisse, atque ita in Cretam remeasse, tradebat in Lactantii L. I. D. Inst. c. 14. Porro διαπορευόμενοι, quod in superioribus legitur, parilem vim ac διελεύοντες habet, usu sane quam raro. WESS.

368. 42. Ἐγγόροις] Ἐγγόροις M. R. V. Vide supr. c. I. WESS.

368. 43. Ἄς ἔμασαν τὸν Λία πεποιθῆσθαι] Euemerus historiam contexit ex titulis et inscriptionibus sacris, quae in antiquissimis templis habebantur, maximeque in fano Iovis Triphyliae, ubi auream columnam positam esse ab ipso Iove, titulus indicabat, in qua columna gesta sua perscripsit, ut monumentum esset posteris rerum suarum, sic Lactantius L. I. D. Inst. c. 11., quem nollem a Doctiss. Sevino castigatum, quasi contraria Diodoro proponentem. Ἀναρχαὶ illae ipsae sunt, quas aurea columna complectebatur: quod enim post deinde narratur de Mercurio, id res Apollinis et Dianae spectat, quas Deorum administrator columnae addiderat, προσανέγραψε, ut auctor inquit. WESS.

368. 45. Ἐχει — μέταλλα δαψιλῆ — καὶ κασιτέρον] Caussam non video, cur scriptos libros deseram. Euemerus, qui Panchaiam condidit, eadem opera ubere auri, argenti, aeris, stanni ac ferri copia ac fodinis instruxit insulam. WESS.

368. 55. Ἐτι δὲ θύου δαδημουρημένως] Corrige ἔτι δὲ θύου, ac verte, et citro. Doctissimus interpres ridicule reddidit, ac thure, quasi θύου ibi esset thus, aut quasi thuris ligno fores compingerentur. Inepte. Varro, En quibus Libyssa citrus fasciis cingit fores. Sic lege. Haec Salmas. in Solin. p. 667. cui adstipulor. Pausanias L. VIII. 17. θύου δὲ πεποιημένον τὸ ἄγαλμά ἐστιν. Mercurii Cyllenii ex citro dolatum signum est. WESS.

368. 62. *Τὰ παρ' Αἰγυπτίους ἱερὰ καλούμενα*] Apud Eusebium τοῖς Παγχαίοις γράμμασι L. II. Praep. Evang. p. 60. Quare Panchaeorum literae sacris Aegyptiorum, de quibus supr. L. III. 4., fuere persimiles. WESS.

368. 63. *Πρόξεις — — ἀναγεγραμμένα*] Monitore vix opus esse, sic scripsisse Diodorum, Doctiss. Iensius Epist. ad I. G. Graev. p. 417. recte profitetur. Aliud vero hic est, nobis haud sane negligendum. Eusebius ex Nostri Lib. VI. *Ὀὐρανοῦ καὶ Κρόνου καὶ Διὸς πρόξεις* columnae inscriptas ait. Quo factum, ut Clariss. Sevinus in Comment. Acad. Inscript. T. XI. p. 171. arbitraretur, *Κρόνου* sive *Saturni* nomen hinc negligentia librariorum emigrasse: quod etsi districte negare nolim, fieri tamen potuit, ut auctor ipse praeterierit, sicuti apud Euseb. res Apollinis et Dianae dignas non censuit, quas eum in locum adderet. WESS.

368. 72. *Διὰ τὴν ὁμων. ἀπὸ τῆς παρακ. τῆ παλ. Σάμου Θράκης*] Diodori hanc esse manum, dubitare noli. Vulgata insulam Samum Samothraciae proxime adiungebant, quo quid absurdius? Samothraciam censebant olim id nominis inpetrasse, quod insula contra Thraciam esset posita, utque ab altera Samo, Epheso obiecta, distingueretur. Virgilius Aen. VII. 208.

*Threiciamque Samum, quae nunc Samothracia fertur.*  
Nos meliorem cognominis eius originationem ex Scythici sermonis reliquiis dedimus L. III. 55. WESS.

369. 79. *Ἐσχήασι δὲ παλαιὰν ἰδίαν διάλεκτον οἱ αὐτόχθονες*] Veterem hanc linguam a Phoenicam sermone nihil discrepasse, S. Bochartus L. I. Phoen. Colon. c. 12. pertendit, quem Tob. Gutberlethus sequitur de Myster. Cabir. c. 8., perperam tamen huc referens ἱερὸν τινα λόγον ex Herodot. II. 51. ut locum insipienti adparebit clarissime. Mihi, quod ingenue fateor, Samothracum vetustissimus sermo ita expeditus nondum videtur, ut eorum in opinione acquiescere secure possim. WESS.

369. 84. *Τοῦ περὶ τὰς Κρανέας στόματος ῥαγέντος*] Non alia fuit Stratonis sententia, arbitrati, τὸν Εὐξείνιον μὴ ἔχειν πρότερον τὸ κατὰ Βυζάντιον στόμα, τοὺς δὲ ποταμοὺς βιάσασθαι καὶ ἀνοῖξαι, τοὺς εἰς αὐτὸν ἐμβάλλοντας. εἴτ' ἐκπεσεῖν τὸ ὕδωρ εἰς τὴν Προποντίδα καὶ τὸν Ἑλλήσποντον. *Pontum Euxinum caruisse olim ostio, quod ad Byzantium est: id flumina, quae in eum effunduntur, vi aperuisse; tum aquam in Propontidem et Hellespontum erupisse,* in Strabon. L. I. p. 85. B. Eam vetus Samothracum traditio haud leviter adfirmat, quaeque, locorum ingenio diligenter examinato, disputavit Clariss. Pitton Tournefort Epist. XIV. p. 64. Tom. II. Itiner. sui. WESS.

369. 89. *Καὶ πολλὴν μὲν τῆς Ἀσίας — ἐπέκλυσεν*] Quae de Rhodo et Delo insulis produntur, eo fortasse tempore contigerunt. Philonis verba huc pertinent e lib. de Mundo non Corrupt. p. 959. E. καὶ μὴν ἢ γε θάλασσα, φασὶν, ἦδη μεμείωται. μύρ-



τρεις δὲ αἱ νῆσων εὐδοκιμώταται, Ῥόδος τε καὶ Δῆλος. αἴται γὰρ τὸ μὲν παλαιὸν ἰφαισμέναι κατὰ τῆς θαλάσσης ἐδεδέξαντο ἐπιβυζόμεναι, χρόνῳ δ' ἔσπερον ἐλαττομένης ἡρῆμα διεγάνησαν, ὡς αἱ περὶ αὐτῶν ἀναγραφεῖσαι μνημόσιν ἱστορίαι. τὴν δὲ Δῆλον καὶ Ἀναγῆν ὀνόμασαν, δι' ἀμφοτέρων ὀνομάτων πιστούμενοι τὸ λεγόμενον etc. Vera enim ea si sint, uti videntur, repetita ex ultima utriusque gentis memoria; caussam inundationis commodiorem vix reperies, quam cum, Bosphoro et Hellesponto perruptis, Pontus ingentem vim aquarum in Aegaeum mare effunderet et obvia quaevis fluctibus demergeret. WESS.

369. 1. *Ἡρὸ τοῦ νῦν κατακλυσμοῦ*] Quid nūn hic agat, non apparet. Excludendum igitur. Rhod.

369. 2. *Σάωνα*] Hoc amplector ob Pausan. L. IX. 40. p. 793. WESS.

369. 3. *Τῶν κατὰ τὴν νῆσον Σάωνα*] *Saus* Σάος est Schol. Apollonii Rhod. I. 917. ex Aristotele: ἡ δὲ Σαμοθράκη ἐκαλεῖτο πρότερον Λευσοσία — ἔσπερον δὲ ἀπὸ Σάου, τοῦ Ἐρμου καὶ Πήρης παιδός, Σάμος προσωνομάσθη κατὰ παρένθεσιν τοῦ μ'. Festo in v. Salios Saon, quem, alium licet atque hunc, sine caussa Salonem esse iubent. Dionysio L. I. R. A. p. 50. *Samon*; nam conflatum insulae vocabulum ex viri locique nomine ostensurus, addit, τὸ μὲν γὰρ χωρίον, τῆς Θράκης ὃ δὲ οἰκιστῆς ΣΑΜΩΝ, υἱὸς Ἐρμου καὶ νύμφης Κυλληίδος, Πήρης ὀνομαζομένης. quo loco, si extrita media litera ΣΑΩΝ legeretur, Dionysio sola ea cum Diodoro lis intercederet, utrum insulae a Saone, an contra Saoni ex insula inditum sit nomen? Insulae quidem certe olim Σάου fuisse titulum, Lycophron v. 78. et veteres Critici in Nicandri Theriac. v. 472. testantur. Venit indidem Σαωκίς ἢ Σαμοθράκη apud Hesychium, et insulae mons *Saoce*, de quo Plinius L. IV. H. N. c. 12. WESS.

369. 9. *Διὸς καὶ μῦς τῶν Ἀτλ. Ἡλέκτρας*] Sic Apollodor. III. 11. 1. Schol. Apollon. Rhod. I. 916. Euripid. Phoenis. v. 7. Solus Eustathius in Homer. p. 1528. *Διὸς καὶ Ἡμέρας*, sed hinc refingendus. WESS.

369. 11. *Δάρδανον μεγαλεπίβολον γενόμενον*] Hoc cur probaverim, ex illis cognosces, quae Lib. I. 19. et II. 7. adscripta reperies. Dardanum vero ratibus, quod navium necdum esset usus, in Asiam ex Samothracia traiecissee Conon Narrat. 21. et Tzetzes in Lycophr. v. 73. Nostro consentiunt. WESS.

369. 16. *Τὸς ὑπὲρ Θράκης Δαρδάνους*] His de Dardanis Livius XL. 57. et Plinius IV. 10. WESS.

370. 20. *Ὡν οὐ θείμς ἀκοῦσαι πλὴν τῶν μεμνημένων*] Vide ad L. III. 62. et Tob. Gutherleth. Myst. Cabir. c. 9. WESS.

370. 25. *Ἰασίονος*] *Ἰασίον* Vat. quomodo Dionys. I. R. A. p. 49. et alii. WESS.

370. 28. Τὸν δὲ γάμον — δαῖσαι θεοῖς] Manifestum huius interpretamentum est *ταῖσαι* nonnullorum Codd.: Homerus *Iliad.* T, 299. *δαῖσαι δὲ γάμον μετὰ Πηνελόπεισσι.* Pindarus extrema Od. I. Nemeon. *καὶ γάμον δαῖσαντα παρ' Ἰὼ Κρονίδα.* Parthen. Erot. c. 13. *πάνν λαμπροὺς γάμονς δαῖσας.* Alia verbi forma Lycophrōn v. 145. *Νημεῖν πεντάγαμβρα δαῖσαι γάμων.* Philostratus *Heroic.* XIX. 16. *καὶ γάμον ἐδαῖσαντο σφῶν Ἰησοειδῶν τε αὐτὸς καὶ Ἀμφικρίτη.* Quae veterum loca si ad verbi usum abunde non putaveris, adi Ios. Barnes. in Euripid. *Iphig. Aulid.* v. 123. et G. Arnald. *Animadv. Hephaest.* c. 21. WESS.

370. 30. Ἀθηνῶν δὲ τὸν διαβεβοημένον ὄρμον καὶ πέπλον] De monili et peplo non convenit veteribus, neque ipsi Diodoro, a Minervae an Venere datum sit Harmoniae? Apollodorus III. 4. 2. Cadmum ait utrumque donum Harmoniae contulisse: alia ibidem Pherecydes. Tu vide, quae disputavi L. IV. 56. WESS.

370. 38. Γεννῆσαι Κορύβαντα] *Palet per se et propter sequentia, ubi idemidem Κορύβας in singulari appellatur, Diodorum scripsisse Κορύβαντα. Unus tantum Corybas dictus ex Iasione et Cybele natus est, a quo omnes οἱ ἐπὶ τοῖς (ut auctor deinceps) Κεβέλης ἱεροῖς ἐνθουσιάζοντες, Corybantes sunt nominati, bene Cl. Io. Iensius Epist. ad L. G. Graevium p. 417., cui Rhodom. sua versione pracluxerat. Scripti Codd. eam scripturam dubio eximunt.* WESS.

370. 41. Ὀλύμπῳ τὸ πρῶτον συνοικήσασαν] Verum hoc arbitratus sum. Cybele primum Olympo enupserat, illique Aleen pepererat: postea Iasioni. Hoc ordo verborum requirit, ut agnoscas. Si tamen Ὀλύμπῳ τῷ πρώτῳ tueri velis, auxilio Plutarchus de *Mus.* p. 1133. D. occurret. WESS.

370. 46. Θήβην τὴν Κίλιζος] Haec addita auguror, ut origo urbis Thebes, de qua Poeta II. A, 366., indicaretur. Eam ab hac Thebe, sicuti a Lyra *Lyrnessum*, qua de II. B, 690. et Strabo XIII. p. 910., cognomen inpetrasse volebant. WESS.

370. 47. Τοὺς ἄλλους εἰς Φρυγίαν] Quis ambigat ab auctore scriptum esse τοὺς ἀλλοῦς? cum de instrumentis Deorum musicis hic diserte agatur. RHOD. *Τοὺς ἀλλοῦς etc.*] Verus hic vates Rhodom. fuit. Sintne vero ex Thracia adiacentibusque insulis in Phrygiam, an contra, Musica haec instrumenta sacraque, in quibus horum usus frequentabatur, illata, disquirat Strabo L. X. p. 721. WESS.

370. 50. Τὸ δ' ἀληθὲς τὸν τοῦ σίτου etc.] Quinqué hic mendae occurrunt. Nam I. post ἀληθὲς distinguendum. II. participium in verbum *δωρηθῆναι* mutandum. III. post *Ἰασίωνος* interpungendum. IV. post καὶ ἀλλά restituendum. Denique *παρὰ δόξαι* scribendum videtur, ut planior fiat sententia. RHOD. *Τὸ δ' ἀληθὲς, τὸν τοῦ σίτου πλοῦτον δωρηθῆναι etc.*] Adsentior viro

doctissimo ex praecipua parte: in ceteris scriptos Codd. sequor. *Πλοῦτος* idem olim, quod frumentum et quidquid divite terra provenit. Cicero II. Nat. Deor. c. 26. *Terrena autem vis omnis atque natura Diti patri dedicata est: qui Dives, ut apud Graecos Πλούτων, quia et recidunt omnia in terras et oriuntur in terris.* Hinc Orpheus de Plutone H. XVII. 4.

*Πλούτων ὃς κατέχεις γαίης κληΐδας ἀπάσης,*

*Πλουτοδοτῶν γενεὴν βροτέην καρποῖς ἐνιαυτῶν.*

Haud absurde ergo fabulam Diodorus, et Eustath., quamquam diversam ingressus viam, in Homer. p. 1528. exponunt. Vide et huius libri c. 77. WESS.

370. 60. *Καὶ γὰρ Ἰάσωνα καὶ Διοσκούρους*] Ita venisse a Diodoro non ambiges, si L. IV. 43. et 49. inspexeris. Vitium peperit aberrans librarii manus, qua Ἰάσων et Ἰασίων saepe locum commutarunt. Exempla dabunt Is. Casaubon. ad Dion. Chrysost. Orat. XXIX. p. 297. Sylburg. in Clement. Alex. Protrept. p. 28. Holsten. ad Stephan. *Δύρδαμος* et Ios. Barnes. *Odyss. E, 125.* Homeri. WESS.

371. 66. *Προσηγορέετο Στρογγύλη*] Id a figura accepisse nomen videtur. Parthen. *Erotic. c. 19.* ὀρμήσαντες ἀπὸ νήσου, τῆς πρότερον μὲν Στρογγύλης, ἕστερον δὲ Νάξου κληθείσης. Et Plinius L. IV. N. H. c. 12. WESS.

371. 76. *Κατασχεῖν τὴν Στρογγύλην νῆσον*] Dilutius visum est interpretis *ad Strongulen appulit: id προσέχειν.* Demosthen. in Dionysodor. p. 700. ὅτι ἀναγκαῖον εἶη τῇ νήῳ προσέχειν εἰς Ῥόδον. Herodot. Vit. Homer. c. 8. ἐκ τῆς Αἰνιάδος προσέσχευ εἰς τὴν Ἰθάκην. Polybius II. 9. μέρος δέ τι προσέσχευ τὸν τῶν Ἐπιδαμνίων λιμένα. Quod auctor habet, occupasse eum insulam indicat, ut superius L. I. 44. *κατασχεῖν τὴν ἀρχὴν, et κατασχεῖν τὰς νήσους* L. IV. 86. WESS.

371. 84. *Ταῖς Διονύσου τροφοῖς*] Docuit Aeschylus fabulam *Διονύσου τροφῶν*, sed eius aliud argumentum. Eas Medea pariter cum maritis coetas aetate iuvenili instruxit, auctore Schol. Euripid. in Argum. I. Medeae, et Hygino F. CLXXXII., ubi sine causa ex *Medea* fecerunt *Tethyn.* WESS.

*Ibid. Περὶ τὸ θαλούμενον Δρίος*] A densa arborum silva, quae *δρίος.* Homerus *Odyss. Ξ, 353.*

— Ὅθι τε δρίος ἦν πολυανθέος ὕλης.

Oppian. *Halieut. IV. 388.*

*Μηρίνθῳ στέψαντες ἑπὰν δρίος.* —

Simili de causa collis, ἢ ὄρομα *Δρίων* in Daunia apud Strabon. VI. p. 435., et cap. seq. in insula Naxo mons *Drios*, uti videbimus. WESS.

371. 95. *Ἰφιμέδειαν*] Sic dicitur etiam Apollodoro I. 7. 4. et Criticis veteribus in Apollon. Rhod. I. 482. At Parthenio *Erot*

c. 19. Ἰφιμέδη, seu verius Ἰφιμέδη, quod idem videri, bene monuit ad Hygin. F. XXVIII. Th. Munckerus. WESS.

371. 2. Σικελὸς καὶ Ἐζήτορος] Aliter haec historia narratur apud Parthenium in Eroticis cap. 19. ubi virgo Παγζράτα, raptores vero Σκέλλης καὶ Κασσάμενος Κήτορος dicuntur, filii Ceteris. PALM. Uter veriora horum nomina servarit, Partheniusne an Diodorus, non temere dixero. Σικελὸς defendi potest, sicuti et Ἀγμισσιμενός, quod bene Graecum quisque animadvertit. In Strabone L. X. p. 723. manu exarati libri Ἐκάτερον praeferunt, nomine haud longe hinc discrepantem, alium tamen. WESS.

372. 12. Μετωνόμασαν δὲ καὶ τὴν νῆσον Δίαν] Callimachus apud Etymolog. v. Δία.

Ἐν Δίῃ, τὸ γὰρ ἔσκε παλαιότερον οὐνομα Νάξου.

Et Noster L. IV. 61. WESS.

372. 14. Καὶ ἀλλήλους ἀνείλον] De eorum morte multimodis apud plerosque scriptum esse, ex Schol. ad H. E, 385. et Eustath. in Homer. p. 1687. constat. Diodoro consentit fere Pindarus:

— — Ἐν Νάξῳ

φαντὶ θανεῖν λιπαρῶ Ἰφιμεδεί-  
ας παῖδας, Ὄτον καὶ σὲ τολ-  
μίας Ἐπιάλτα ἀνάξ.

Od. IV. Pythion. v. 176. WESS.

372. 18. Ἐκ τῆς νῆσου] Hoc praestat, ut cap. 13. WESS.

Ibid. Ἐκ τῆς νῦν Λαμίας] Lege, si mihi credis, Λατμίας ex Strabone L. XIV. p. 943. et Plinio L. V. cap. 29. PALM. Vero adfinis est Palmerii sententia. *Lamiam*, quod quidem sciam, in Caria nusquam reperi, quae *Latmiam*, monti Latmo accubantem regionem, omnino habuit. Scripsi praeterea ex manu exaratis Codd. ὃν βασιλεύσας Νάξος, et ob Stephanum, cui insula ἀπὸ Νάξου τῶν Καρῶν ἡγεμόνος dicta perhibetur: porro οὐ γενόμενος εἰδὸς Σμέρδιος, quod hominis cognomen ex σμέρδειν, unde σμερδνός et σμερδαλέος, originem accepisse opinor. WESS.

372. 27. Εἰ μὴ ἀπολείπει τὴν Ἀριάδνην αὐτῷ] Significantius id et propterea rectius est visum. De Theseo, Ariadnen in insula destituyente, L. IV. 61. et Nonnus Dionys. XLVII. 270. WESS.

372. 29. Τὸ καλούμενον Δρίος] Et hoc vulgato antistat. Literarum non admodum dissimilis figura ex ΔΡΙΟΣ formavit ΑΡΙΟΣ. quod nomen monti ex ea caussa venit, quam praecedenti cap. exposuimus. Ariadnae autem fata Naxii longe longeque aliter, si quae fides Plutarcho in Thes. p. 9. C., memorabant. WESS.

372. 34. Καὶ ὑπὸ τινων Διονυσιάδα καλεῖσθαι] Diceres Plinium ex magna parte hinc sumpsisse, cum de Naxo L. IV. H. N. c. 12. *Naxus a Delo xviii*, inquit, *cum oppido, quam STRONGYLEN, dein DIAN, mox DIONYSIADA a vinea-*

rum fertilitate, alii Siciliam minorem, aut Callipolin adpellarunt. Porro Naxios suae insulae Bacchi natales contribuisse, significavit et L. III. 64. Diodorus. WESS.

372. 41. Καὶ Κλείδη] Assumsi Κλείδι in margine adscriptum. RHOD. Καὶ Κλείδι] Idem et ego revocavi. Cleis non alia videtur ac Cleia, quam inter Bacchi nutrices Hesiodus recensuit eo versu, qui Theonis diligentia servatus legitur in Schol. ad Aratum Phaenom. v. 177.

— — Νύμφαι χαρίτεσσιν ὁμοῖαι

Φαισύλη, ἣδὲ ΚΟΡΩΝΙΣ, ἐστέρανός τε ΚΑΕΕΙΑ.

Nihil opus ergo post haec coniectura Th. Munckeri, arbitrati pro Κλείης ex Hygini F. CLXXXII. reponi posse Cisseis. Iam quod addit Diodorus, Semelen prius fulmine percussam esse, quam pareret, ut Bacchus e duobus immortalibus prognatus censeretur, id quodam modo illustrant haec Artemidori, οὐδεὶς γὰρ ζεφάνρωθεις ἄτιμός ἐστιν, ὅθεν γὰρ καὶ ὡς θεὸς τιμᾶται, de Somm. Explic. L. II. 8. WESS. Meliorum codicum Κλείδη stat caditque cum cognomine baccha apud Nonnum Dionys. XXI. 77. Κλείδη λυσίθερα. Ibi quoque facile Κλείη restituas, vel Κλείτη.

373. 44. Ἐν τῇ τροσῆ τὰς χάριτας ἀπολαβεῖν] Putes neglectas ab interprete voces ἐν τῇ τροσῆ ex scholio huc viciniae commigrasse, Grammaticumque, ut τὰς χάριτας exponeret, addidisse τροσῆα, quae, cum molesta hoc essent loco, deinceps abierint nimia alterius sedulitate in eum, qui nunc est, vocum ordinem. Nemo, credo, si hinc exularent, postliminio ut rediret, elaboraret. Qui tamen legitima arbitrabuntur, de victus abundantia et ficis accipient, quarum usum Naxios Bacchus edocuit, Μεγάλως propterea inter eos nuncupatus. Nam in insula Μεγάλιον καλεῖσθαι τὸν Λιόνισον, διὰ τὴν τοῦ σκίνον καρποῦ παρὰδοσιν, auctores habeo Andriscum, Naxiacorum scriptorem, et Agasthenem in Athen. L. III. 5. WESS.

373. 46. Καὶ ναυτικὰς τε δυνάμεις συστήσασθαι] Naxii olim mari plurimum valuerunt, armatisque navibus, quas Κανθάρος vocabant, plures ad imperata facienda compulerunt: hinc et inter θαλασσοκρατούντας a Cratino numerantur apud Suidam v. Ναξιορρηγίης, et ab Eusebio, quem pulcre explicat Is. Casaub. ad Polyb. I. 20. Quae vero his succedunt de Naxiorum rebus, Persico bello strenue administratis, vereor, ut alibi tam distincte reperias. WESS.

373. 50. Περὶ τὴν τοῦ οἴνου ιδιότητα etc.] Naxii vini tanta olim gratia erat, ut Archilochus, haud insipidi palati poeta, ipsi nectari equipararet, Athenaeo L. I. 24. indice. Haec caussa, ob quam Naxii numis suis Bacchum, cantharum dextra, thyrsum sinistra tenentem inscripserint in Thesauri Brand. T. I. p. 432., ubi Begerus. WESS.

373. 54. *Πρῶτοι κατόκησαν οἱ μετὰ Τροίηος ἀριζόμενοι*] Superius L. IV. 58. τοῦ Τροίηα τοῦ Φόρβαντος, nec aliter huius L. c. 61. Quod hic legitur, suo suffragio munit Theocritus Idyl. XVII. 68. De Syma Mnaseas Glaucum perhibet, ἀρπάσαντα Σύμην τὴν Ἰαλύσου καὶ Λωτίδος θυγατέρα ἀποπλεῦσαι εἰς τὴν Ἀσίαν, καὶ τὴν ἐγγὺς τῆς Καρίας νῆσον ἔρημον κατοικήσαντα ἀπὸ τῆς γυναικὸς Σύμην αὐτὴν προσαγορεύσαι in Athenaei L. VII. p. 296. C., quae Diodori narrationi non usquequaque respondent. WESS.

373. 57. *Νιρεὺς ὁ Χαρόπων*] Hanc lectionem veram esse, Homeri versus Iliad. II. numero 672. confirmat. Detestanda igitur est, nescio utrum ignorantia magis an impudentia Glossatoris, qui tam certa in dubium vocet. RHOD. Non intercedo. Quamquam non erat, cur iram colligeret Rhodomannus. Librarios tuebatur Lucian. Nireum τὸν Ἀγλαΐας καὶ Χάροπος adpellans D. Mort. XXV. 1., et praeter ceteros Tib. Hemsterhusius. WESS.

373. 63. *Τὸ καλούμενον Οὐράνιον*] Hoc cognomine montem aut urbem in Symae vicinia legere non memini. Cypri Uraniam L. XX. 49. examinabimus, neque ea huc pertinet. WESS.

373. 66. *Τῶν μετὰ Ἰππότου*] Vide superius c. 9. De Nauso nihil exploratum habeo. Praestat autem mox τὴν Σύμην κατοίκησε ob ea, quae praecedunt. WESS.

373. 74. *Κάλυδραν καὶ Νίσυρον*] Poetam explicat Iliad. B; 676., de cuius versibus Strabo X. p. 749. WESS.

373. 76. *Ἀντιφός τε καὶ Φίλιππος*] Homerus in Catalogo navium Graecarum, ad Troiam expeditarum, versu 678. Φείδιππον nominat. Hic iterum apparet Scholiasten illum omnis eruditae lectionis expertem fuisse. RHOD. Lege Φείδιππος ex Homero Iliad. B, vers. 678.; Aristotele in Peplo, et aliis. PALM. Φείδιππος R. Co. optime. Simile mendum ex Strabone sustulit Iust. Lipsius ad Velleii L. I. 1. WESS.

373. 81. *Καὶ τοῖς ἐγγωρόις καταμυγέντες*] Synthesis est, utroque in sermone frequens. Pendet participium non ex νεῶν vocabulo, sed ἐπιβατῶν, quod animo scribentis obversabatur. Arrian. Expr. Alex. I. 15. χρόνον μὲν δὴ ἀμφοτέρα στρατεύματα ἐπ' ἄρκρον τοῦ ποταμοῦ ἐφρυστῶτες. Curtius VIII. 9. 31. *Unum agreste et horridum genus est, quos sapientes vocant.* Vide alia in Io. Fr. Gronovii L. II. de Pec. Veter. c. 4., C. A. Duker. ad Thucyd. II. 47. et Cort. Sallust. Iugurth. c. 14. WESS.

374. 85. *Τὴν δὲ Κόρπαθον*] Insulae mentio in memoriam mihi redigit verba Aristidis T. II. p. 354. καὶ νῦν Κόρπαθον μὲν καὶ Κάικασον, καὶ ἄλλας νήσους, οἰκουμένας ἐστὶν ἰδεῖν quibus ex parva insula *Caso* stupenda metamorphosi mons *Caucasus* exstructus, et insularum catalogo insertus est. Tu καὶ Κάσος refinge. Mox Rhodomannus locum F. *Thymoleontis* fecit, caussa non

addita. Mihi et pater et filius non satis cogniti sunt, neque consilium est, a libris scriptis dissidere. WESS.

374. 92. Οἱ προσμαγορευόμενοι Τελχῖνες ] De illis Strabo XIV. p. 966. et S. Bochartus L. I. 7. de Phoenic. Colon. WESS.

374. 96. Καὶ ἄλλα τῶν εἰς τὸν βίον χρησ. etc. ] Doctissimus Rhodomannus hoc in Addend. ex coniectura restituerat, quo de ob Codd. et sermonis usum dubitare nefas. Inferius c. 73. ἔτι δὲ πολλὰ τῶν ἐν ταῖς ἄλλαις ἐπιστήμαις εἰσρηγίσασθαι τοῖς ἀνθρώποις quae quidem verba a me et id impetrarunt, ut τοῖς ἀνθρώποις hoc loco retinerem. Vide et L. I. 45. WESS.

374. 2. Παρὰ δὲ Ἰαλυσίοις Ἴηραν καὶ νέμους Τελχίνιας ] *Minervam Telchinioniam* ab iisdem fabrefactam Nicolaus Damasc. in Florileg. Stobaei Tit. XXXVIII. p. 225. auctor est: Ἀθηναῖος Τελχίνιας ἀγαμία, inquit, πρώτοι ἰδρύναντο, ὅσοι ἐῖ τις λέγοι Ἀθηναῖος βασκάνος. fortasse tamen in tituli explicatione deceptus. Telchines, uti dicitur, habiti fuerunt βασκάνοι καὶ φθορεοί. Pallas *Telchiniae* cognomen nacta est ab auctoribus, qui simulacrum dedicarant, uti Apollo, Iuno, Nymphaeque. WESS.

374. 4. Καὶ παραγεῖν — νέφη τε καὶ ὕμβρους ] Haud scio an velit, Telchines carminibus et arte magica nubes, pluvias, grandinemque avertisse; quam artem venditabant Corinthi ἀνεμοζοῦται, Cleonis γαλαζογόλαζες, in Gallia seriore aeo *tempestarum* apud Agobardum Lib. Contra Vulgi Opin. de grandine p. 145., illi etiam, qui L. 4. c. de Malefic. in agrestibus locis innocenter adhibebant suffragia, ne maturis vindemiis metuerentur imbres, aut venti grandinisque lapidatione quaterentur. Opportune Clemens Alexandrin. Stromat. L. VI. p. 754. ἀπὲρ αὐτὰ κατὰ τοὺς ἐν Κλεωναῖς μάγους ἐνλάττοντας τὰ μετέωρα, γαλαζοβολήσῃν μελλόντων νεφῶν, ΠΑΡ-ΑΓΕΙΝ τε ὄδαῖς καὶ θύμασι τῆς ὀργῆς τὴν ἀπειλήν. Quae optimi viri Seneca L. IV. Q. N. c. 6. explicabit: *Illud incredibile, Cleonis fuisse publice praepositos γαλαζογόλαζας, speculatores futurae grandinis. Hi cum signum dedissent, adesse iam grandinem, quid exspectas? — Imo pro se quisque alius agnum immolabat, alius pullum. Protinus illae nubes alio declinabant, cum aliquid gustassent sanguinis.* Pro interprete stat rudis adhuc antiquitas, arbitrata et attrahi imbres cantibus et repelli. WESS.

374. 6. Ἀλλάττειν ] Ἀλλάττεσθαι R. M. Co. haud male. Vid. supr. c. 35. WESS.

374. 7. Καὶ εἶναι φθορεοὺς ἐν τῇ διδασκαλίᾳ ] Vide Steph. Bergler. in Aleiphron. L. I. Epist. 12. Hesychius, Τελχῖνες, βασκάνοι, γόητες, φθορεοί. Hinc Synes. Dion. p. 57. C. Τελχίν καὶ βασκάνος ὄν, et οἱ πάλαι Τελχῖνες, qui Soerati, Platoni atque Aristoteli olim obtrectaverant, Themistio Orat. XXIII. p. 286. B. et ἱνές Τελχῖνες ποτηροὶ καὶ βασκάνοι δαίμονες in Gregorii Nazianz. Orat. III. p. 96. D. WESS.

374. 11. Ἀφ' ἧς τὴν νῆσον ὀνομασθῆναι] Sic praestat. Non enim Neptunus ex filia insulam cognomine insignem esse iussit, sed ex uxoris nomine Sol, ut cap. proximo docetur, unde ipsa τῆς νύμφης ἐπώνυμος Aristidi T. II. p. 355. De materno vero Rhodi genere veteribus non satis convenit. Pindarus, uti nunc editur, Od. Olymp. VII. 25. παῖδ' Ἀγροδίτις perhibebat: at olim παῖδ' Ἀμυγροτίτις legebatur, Epimenide consentiente, quod utrumque Criticis Graecis credimus; neque absurde admodum, ἐβλαστε μὲν ἔξ ἁλὸς ὑγροῦς ῥῆσος, Poëta eadem Ode canit. Scripsi praeterea ex Reg. καὶ Ζεὺς λέγεται καταπεπολεμηζῶς, ut tractus orationis esset lenior. WESS.

375. 26. Καὶ τιμῆς ἀθανάτου τυχεῖν] Rhodi quotannis agebatur Ἀλίων ἀγῶν, in cuius celebritate an et *Haliae* huius, eiusdem quidem cum Ἀλίων, qui Rhodiis sol, originis, quaedam ratio sit habita, non temere finivero: Soli sacer erat, instituebaturque mensis Gorpiaei die xxiv., ut docent Critici veteres ad Pindari Olympion. Od. VII. extremam, atque ex illis Io. Meursius in Feriat. Graec. WESS.

375. 31. Ἀπόλλωνος Ἀρκίον] Confer inferius c. 78. et Schol. in Aeschyli VII. Adv. Theb. v. 147. WESS.

375. 34. Ἐπιπολασάντων τῶν ὑγρῶν λιμνάσαι etc.] Claudicantem orationem instauravi: τὸ ἐπιπολάζον ἕδωρ, quod brevi succedet, et quae de verbo antea c. 36. observavimus, [dubium, si quod oriatur, eximere apta sunt. Rhodum autem aquarum inundatione olim fuisse demersam, sive ἄλμυροῖς ἐν βένθεσι ῥῆσον κεκρέσθαι, ut Pindarus ait, praeter alios testantur Philo Iud. de Mund. non Corrup. p. 959. E. et Aristides Tom. II. p. 353. WESS.

375. 40. Τῆς νῆσον πηλώδους οὐσης ἔτι] Si quid veri fabulae involucre tectum latet, ut sane videtur, commodius explicaretur ex ea inundatione, qua de cap. 47. dictum fuit. WESS.

375. 48. εἶναι δὲ τοὺς ἐπὶ τὰ νιόδς etc.] Eisdem, nec tamen in omnibus consentanei, recensent Graeci Critici ad Pindari Olymp. Od. VII. extremam, filiam tamen v. 26. prave vocitantes. Ἡλίου καὶ Ῥόδου ἐγένοντο, inquit, παῖδες ἐπὶ τὰ, καὶ θρυγάτις Ἡλεζτροῶν, cuius nomen quomodo refingi oporteat, non est, ut operose dicatur. WESS.

375. 59. Ἐπὶ τοῦ πυρὸς θύσαι] Caerops primus si designetur, uti probabile est, cave victimas animatas intelligas: is enim ὀπόσα ἔχει ψυχὴν, τούτων μὲν ἠξίωσεν οὐδὲν θύσαι, πέμματα δὲ ἐπιχώρια ἐπὶ τοῦ βωμοῦ καθήμισεν, Pausan. L. VIII. 2. WESS.

375. 62. Ἐν οἷς ἐστὶ καὶ Ζήνων] Io. Meursius Rhodi suae L. I. 1. Zenonem incertae patriae scriptorem adfirmat. Imo vero domo Rhodius fuit. Diogen. Laert. VII. 35. Τρίτος (Ζήνων) Ῥόδιος, τὴν ἐντόπιον γεγραμῶς ἱστορίαν ἐναιῖαν. ubi Aegid. Menag. pulere observat, Polybii fuisse aequalem et ab eo meritis laudibus efferri Excerpt. Legat. p. 1407. WESS.



375. 66. Ἐν παιδείᾳ δὴνεργῶν] Idem Pindarus voluit sine Od. VII. Olymp.

Ἐνθα Ῥόδῳ ποτε μυχθεῖς  
τέκεν ἑπτὰ, σοφῶ-  
τατὰ νοήματ' ἐπὶ προτέρων  
ἀνδρῶν παραδειξαμένους  
παῖδας. — —

Potuisset autem praeposito negligi, ni secus auctori visum fuisset. Apollodor. de Oedipo, καὶ διαγέρον τῶν ἡλικῶν ἐν ῥώμῃ, L. III. 5. 7. Plato I. LL. p. 629. ὅτι τοὺς μὲν ἐν πολέμῳ διαγέροντας διαφερόντως ἐγκρατομάκας· quod tamen et diversiore modo sumi quitum est. WESS.

376. 71. Τοῦτων δὲ Πάριος μὲν εἰς Ἀέσβον ἀγίκετο] Vide inferius c. 83., ubi alia omnia de eius genere. WESS.

376. 74. Οἱ δ' Αἰγύπτιοι ἔμαθον παρ' αὐτοῦ τὰ περὶ etc.] Horum neutrum Aegyptii concedent, Heliopolis auctorem et Astrologiae scientiam suae genti adserentes L. I. 50. Res ipsa a vero abludit, a Graecis in medium coniecta, ne Aegyptiis hac parte inferiores viderentur. WESS.

376. 78. Τὰ διὰ τῶν γραμ. ὑπομνήματα συνέβη φθαρῆναι] Fieri id potuit. Literas tamen Pelasgi servarunt, sicuti ad L. III. 66. ostendimus. WESS.

376. 83. Ἐπίσχυσαν ὡς αὐτοὶ etc.] Puto legendum ἐπίσχυ-  
σεν, ut sit perinde ac si dixisset, ἐπίσχυσε τὸ πρότερον αὐτοῖς  
τὴν τῶν ἄστρον εἴρεσιν ποιήσασθαι. Est autem ἐπίσχυσε ad ver-  
bum, *invaluit*. Sic enim nonnunquam apud Latinos usurpatur hoc  
verbum, cum nomine *rumor* et cum nomine *consuetudo*. Sed hic  
ἐπίσχυσαν erit *invaluit rumor*. STEPH. Persona numeri singularis  
tertia est. Consule eruditam H. Stephani hac de re annotationem.  
RHOD. Placet virorum doctissimorum arbitrium. Sic L. XX. 59.  
διὸ δὴ καὶ παρὰ τισιν ἐπίσχυσαν ἐν παρουσίας μέρει λεγόμενον.  
Simile peccatum in Pausania L. VII. 26. p. 592. οὐ μὲν καὶ αὐ-  
τίκα ἐξενίκησαν Αἰγύπτου ἀντὶ Ὑπερησίας καλεῖσθαι. Scripserat  
ἐξενίκησαν, ut optime Sylburgius. Ita adsolet, velati cum L. I. 3.  
ὄψε δὲ ποτε αὐτοῖς καλεῖσθαι Γαλάτας ἐξενίκησε. et L. VIII. 22.  
p. 641. ἐξενίκησαν ὡς καὶ τὰς ἐν τῇ ἐρήμῳ τῇ Ἀράβιον Στυμφα-  
λίδας ἐπὶ ἡμῶν ὀνομάζεσθαι. WESS.

376. 84. Κτίσαντες ἐν Αἰγύπτῳ πόλιν τὴν ὀνομ. Σαῖν] Callisthenis et Phanodemi, paria apud Proclum in Platon. Tim. p. 31. proponendum, opinionem perstrinximus ad L. I. 28. WESS.

376. 92. Τὸ ἀπ' ἐκείνου Τριόπιον κληθέν] Confer c. 61. inferius. WESS.

376. 95. Κτίσαντες πόλιν Ἀχάϊαν] Meminit urbis Ergias Rhodius Athen. VIII. p. 360. cum de Phoenicibus et Phalantho ἐν τῇ Ἰαλύσῳ, inquit, πόλιν ἔχοντες ἰσχυροτάτην τὴν Ἀχάϊαν καλουμένην. i. e. in regione Ialysia, ἐν τῇ Ἰαλυσίᾳ, ut Noster

Scio Io. Meursium L. I. Rhodi suae c. 8. Achaïam hanc in ipsam Ialysum urbem intulisse, eiusque arcem fecisse: sed id commentum Ergiae verba abunde refellunt, quaeque hic Diodorus. Adpellata deinceps *Κέρβη* fuit, ut optime animadvertisse mihi Palmerius videtur: quod nomen abstulisse eam suspicor a Cretensium *Κυρβε*, quae deinde *Ιεραπύτνα*, Stephano teste, cum ea ex insula coloni simul cum Althaemene Rhodum commigrarent: nam Pamphyliae apud eundem Ethnographum *Κέρβη*, quam ab hac Rhodiorum nihil admodum discrepare arbitrabatur Cl. Iac. Gronovius, vereor, ut hic referri possit. WESS.

376. 98. *Τὴν μετὰ ταῦτα Κυρβίαν μετονομασθεῖσαν*] Haec verba sunt loco mota: nam ex inferioribus patet *Κέρβην* (sic legendum) fuisse urbis nomen, et debere referri ad *Ἀχάϊαν*, de qua supra. Ergo totum hunc locum puto sic legi debere: *ζιῶντες πόλιν Ἀχάϊαν τὴν μετὰ ταῦτα Κέρβην μετονομασθεῖσαν, ὃν ὁ πρεσβύτερος Ὀχίμος βασιλείων ἐγγυε μίαν τῶν ἐγγυῶν νυμφῶν Ἡγετορίαν, ἐξ ἧς ἐγέννησε θυγατέρα Κυδίππην, ἣν γήμιας Κέρζακος etc.* Cum condidissent Achaïam urbem, postea dictam *Cyrben*, quorum maior natu *Ochimus* regnum adeptus, duxit *Hegetoriam* eius loci nympham, ex qua genuit *Cydippen*, quam duxit *Cercaphus*. PALM.

376. 2. *Οἱ υἱοὶ τρεῖς, Ἀίνδος, Ἰέλυσος, Κάμειρος*] Critici veteres eosdem *Cercaphi* et *Cydippes* filios memorant in *Pindari Olymp. Od. VII. 32.*, quibus *Plutarch. Q. Graec. p. 297.* iunge. Urbes autem ab his conditas et adpellatas superius auctor L. IV. 58. *Ἰέλυσον καὶ Κάμειρον* vocitabat. Vide et L. XIII. 75. WESS.

377. 8. *Ἰδρῖσατο τῆς Ἀθηνᾶς ἱερὸν*] Celebre admodum id templum est ex *Diogene Laert. I. 89.* et *Aeliano de Animal. IX. 17.*, nec minus *Minervae* signum, rudi materia a *Danao* fabricatum et consecratum, de quo ad *Callimachi* apud *Euseb. L. III. Praep. Evang. c. 8.* epigramma viri longe doctissimi *R. Bentley* *Fragm. Callim. p. 358.* et *Ioach. Kuhnius* in *Pausaniae L. VII. 3. p. 531.* WESS.

377. 10. *Τῶν δὲ τοῦ Δαναοῦ θυγατέρων τρεῖς*] Id vero negant fabulae, quae *Danai* filias quinquaginta salvas *Argos* pervenisse adfirmant in *Apollodori L. II. 1. 4.* WESS.

377. 25. *Φοινιζοῖς γράμμασιν*] III. *Scaliger* adscripserat *Φοινιζοῖς*, quod et in opinionem venit *S. Bocharto* de *Phoenic. Colon. L. I. 7.* Atque ita profecto oportuerat: confunduntur enim *Φοινιζὰ* et *Φοινιζιὰ*, sicuti inferius L. XIV. 65. docebitur: aut certe *Φοινιζίαις*, ut *χαρακτῆρες Φοινιζιοὶ* in *Maximi Tyrii Dissert. XXXVIII. p. 222.*, et *Φοινιζία γράμματα* apud *Hesych.* et *Nostrum L. III. 66.* Porro quae post *κομισθῆναι* sequebantur, *τὰ καλούμενα Φοινιζικὰ*, ea auctoribus libris scriptis delevi; nam manifestum *Grammatici* interpretamentum sapiunt, docere nos in-

gressi, a Phoenicibus nomen priscis Graecorum literis venisse: quod verum quidem, sicuti alias dictum, sed alienum ab hoc loco est. WESS.

377. 37. Ὁ μὲν Φόρβας ἀνείλε τοὺς ὄφεις] Polyzelus Rhodius apud Hygin. Poet. Astron. II. 14. hunc Phorbanta nomine demonstrat, qui Rhodiis auxilio maximo fuisse demonstratur. Nam cum eorum insulam, serpentium multitudine occupatam, cives Ophiussam adpellassent, et in ea multitudine ferarum draco fuisset ingenti magnitudine, qui plurimos eorum interfecisset, et patria denique deserta carere coegisset, dicitur Phorbas Triopae filius ex Hiscilla Myrmidonis filia natus, eo tempestate delatus, omnes feras et draconem interfecisse. Quem si audias, Phorbas hic alius atque hic est, et eius quidem ex filio Triopa nepos, quod et Ioseph. Scaligero verius visum est ad Eusebii Ann. CCCCXL., neque inprobat Dicuchidas, Megaricorum scriptor, in Athen. L. VI. p. 262.; facit enim Phorbantem Triopae, quicum Rhodum invaserat, superstitem. Diodorus L. IV. 58. Triopae Phorbantis F. coloniam, in Rhodum deductam, tribuit. Adeo inter Graecos de antiquissimis suis rebus convenit. WESS.

377. 41. Ἀλθαμένης ὁ Κατρέως υἱὸς] At Conon apud Photium Biblioth. p. 454. Althaemenem hunc facit Heraclidem ex Peloponneso: cum vide cap. 47. Apollodorus vero L. III. 2. cum Diodoro consentit, et eum Catrei filium, Minois nepotem facit. PALM. De Catreo dictum satis est L. IV. 60. Diversus autem Althaemenes hic est ab Heraclida Althaemene, qui μετὰ τὰ Τρωϊκὰ, ut apud Strabonem scriptum reperio L. X. p. 735., sive Nelei Codridae aetate, uti Conon, colonos Argis profectus in Rhodum deduxit. Nostrum Apollodorus Ἀλθαμένην perpetuo vocat, in patris nomine mire depravatus. WESS.

378. 47. Ἐπὶ δ' ὄρους Ἀταβύρου] Omnes alii auctores uno consensu hunc montem Ἀτάβυρον vocant, quorum antiquissimus Pindarus sic ait Olymp. VII. ἀλλ' ὃ πάτερ Ζεῦ νότοισιν Ἀταβυρίον μεδέων, Iupiter pater, qui in dorso Atabyrii dominaris. Ad quae Schol. ἐστὶ δὲ καὶ ἐν Σικελίᾳ ὄρος Ἀταβύριον, ἃς ἀφ' ἧσὶ Τίμαιος. Ex quibus verbis patet apud Pindarum legi Ἀταβύριον. Sic etiam Apollodorus, sic Strabo, sic Stephanus, qui Rhianum citat, et ait a quodam Telchine Ataburio sic montem fuisse appellatum. Ideo censeo hoc loco legendum Ἀταβύρον et Ἀταβυρίον. Haec scripseram, cum prodiit doctissimi Bocharti liber de Phoenicum Coloniais, et gavisus sum maxime, cum vidi eum esse in eadem sententia. Eum vide cap. 7. PALM. Ἐπὶ δ' ὄρους Ἀταβύρου] Ill. Scaliger et Is. Vossius ita margini librorum suorum adscripserant et mox Ἀταβυρίον. Io. Meursio L. I. Rhodi c. 8. idem in mentem venerat. Res est expedita et certa. Ταβυρίον Vat. quo peccato et in Appiani Mithrid. p. 321. Ταβυρίον Αἰὸς ἱερόν. WESS.

378. 57. Ἐπισχυροῦσης] Tam hoc retineri, quam ἐπισχυροῦσης admitti potest. RHOD.

378. 64. Διδούς δὲ αὐτὸν εἰς τὰς ξημίαις] Iosephus XV. A. I. 7. 7. καὶ τέλος εἰς τὰς ξημίαις αὐτὸν διδούς. Polybius V. 14. ἐδύκει γὰρ εἰς τόπους αὐτὸν δεδωκέναι παραβόλους. quae penetrasse in loca deserta et periculosa eos indicant, de quibus sermo est. S. Lucas A. A. XIX. 31. μὴ δοῦναι ἑαυτὸν εἰς τὸ θάλασσαν. ubi Raphael. non oblitus est Polybii. De exitu vero Althacmenis paullo diversiore modo Apollodor. III. 2. 2. WESS.

378. 67. Διὰ τὸν Δικυμνίου θάνατον] Vide L. IV. 58. Ob hanc vero et Althacmenis Argivi coloniam, Aristides T. II. p. 388. Rhodiorum προγόνους, sive maiores, Argivos celebrat. Iunge Strabon. L. XIV. p. 966. WESS.

378. 75. Τὴν ἡγεμονίαν παρέδωκε Βούτῳ] Pausanias verum si tradidit L. III. 19. p. 259. Tlepolemus Rhodi imperium reliquit uxori Polyxo. Ipse ad Troiam occubuit, sociis dein reliquias defuncti in insulam deportantibus, et ἐπιτάμιον ἀγῶνα in viri perpetuam memoriam decernentibus, de quo Critici ad Pindari Olymp. Od. VII. 36. WESS.

378. 79. Κατὰ τὴν ἀντιπέραν Χερσόνησον] Quod in Mutin. est ἀντιπέρα haud raro apud Polybium, qui et L. IV. 58. τὰ μέρη τῆς ἀντιπέρας γῆς. et L. V. 48. πρὸς τὴν ἀντιπέραν κειμένην στρατοπεδείαν. Scriptis tamen libris non adsentientibus, ut Boecler. in Lect. Polyb. p. 80. docuit. WESS.

378. 88. Τούτους ἀπογόνους γεγονέναι τῶν etc.] Vide mox c. 65. WESS.

378. 96. Ἐξαποστεῖλαι Κίρον] De Lyreo non dissimilia narrat Parthen. Erot. c. 1. Ego vero *Cyrrum* hunc, a quo Cariae urbs *Cyrrus* cognomen acceperit, alias reperire haud memini. *Ἠέρος* Cariae nota est Stephani testimonio, quae quum aut proxima Chersoneso, aut in ea sedem habuisse videatur ob Plinium L. V. 28., de mendo nasci fortasse suspicio posset, cui me tamen haud temere permisero. WESS. *Syrrum* reponit R. Rochettus *histoire de l'établiss. des colon. grecq.* vol. I. p. 155. Eaedem enim illi *Ἠέρος* et *Σύρος* ibid. vol. II. p. 402.

379. 8. Τριόπαρ, ἕνα τῶν Ἑλλίων καὶ Ρόδου παίδων] Aliter Callimachus in suo in Cererem Hymno v. 100.; eum enim Neptuno genitum et Canace Aeoli filia asserit. Sed quis in fabulis requirat verum? PALM.

379. 11. Ὑπὸ Μελισσέως τοῦ βασιλέως] Regem Melissea, a cuius filibus Adrastea et Ide altus sit Iupiter, habet Apollodorus L. I. c. 1. 3., sed is aut in Creta regnum obtinuit, aut ad Idam Troiae, ut Noster videtur velle L. XVII. 7. WESS.

379. 14. Καὶ μερίσασθαι τὸ καλούμενον Δώτιον πεδίον] Callimachus H. Cerev. v. 25. de Triopa:

Ὀὕτω τὰν Κνιδίαν, ἔτι Δώτιον ἰρὸν ἔναιον.

Quo loco Scholiastes, *Κριδίας* Thessaliae regionem perhibens, turpiter se dedit, nec vacat Stephanus culpa v. *Λότιον*. Utriusque errorem praeter Cl. Salmas. ad Inscript. Herod. Attic. p. 28. refellit Ezech. Spanhem. Poeta τὰν *Κριδίας* aut ipsam *Cnidum* vocat, cuius conditor *Triopas* fuisse fertur a Pausan. L. X. 11., aut regionem urbi vicinam, uti mox *Diodorus*; qui quod de lupo subnectit, *Callimacho* non probabit, *Triopae* filio *Erysichtoni* id contribuenti, sicuti et fecit *Tzetzes* in *Lycophron*. v. 1393., ubi pater perperam et contra scriptos *Codd. Πριόπα*. WESS.

379. 19. Τὸ καλούμενον ἀπ' αὐτοῦ *Τριόπιον*] *Celebre* illic *Apollinis Τριοπίου* templum et certamen, ad quod convenire *Dorienses* sacrorum et concordiae caussa cum uxoribus et liberis statis solebant temporibus, teste *Dionysio* L. IV. A. Rom. p. 229. et, quem auctorem habuit, *Herodoto* I. 144. Plura *Ez. Spanhem.* ad *Callim.* p. 686. WESS.

379. 24. *Κανάκης τῆς Αἰόλου καὶ Ποσειδῶνος*] Sic *Callimachus* H. Cerer. v. 100., ut supra monuit *Palmer.*, et *Apollodorus* I. 7.4. Aliorum de *Triopa* opiniones exposuit auctor c. 56. et L. IV. 58. Scripsit autem *Ἀπόλλωνος καὶ Στίλβης τῆς Πηγειοῦ*, ut ex L. IV. 69. videbis. Itaque id revocare non sum veritus. WESS.

379. 26. Ἔστι δ' ἐν *Καστάβῳ τῆς Χερσόνησος*] De *Castabo* dicent alii. *Hemitheam Staphyli* filiam *Parthenius* memorat *Erotic.* c. 1. WESS.

379. 32. Καὶ τῇ μὲν *Ροιοῦ τὸν Ἀπόλλωνα μινύεντα*] Quae *Apollinem* et hanc eius amicam illustrabant, copiosius exposita fuisse suspicor in *Deliaca* oratione, quam *Dinarcho* quidam tribuebant, intercedente *Dionysio* T. II. p. 118., ubi prave nunc *Ἀηλιαζὸς*, *Ἀπόλλωνος καὶ Ροιοῦς τῆς Ταφύλου*. WESS.

379. 35. *Ἐξ ἁράνακα συγκλείσαντα, βαλεῖν εἰς τὴν θάλαμ.*] Similem fabulam de *Semele Cadmi* filia *Brasiatae* narrabant apud *Pausan.* III. 24. p. 272., nec multum diversam de *Danae*, cui in aurum versus *Iupiter* vitium obtulerat, *Aerisii F.*, *Lucian.* D. *Marin.* XII. 1. Hanc de *Rhoeo*, arcae inclusa et in mare proiecta, tangit *Tzetzes* in *Lycophr.* v. 570., insuper addens, servatum ex undis nupsisse *Zareci*, *Carysti* filio, proptereaque *Anium Zareci* filium perhiberi, οὐ φέσει, ἀλλὰ θέσει. Hinc lux adfulget *Stephano*, *Μέζονος*, scribenti, μία τῶν *Κυζλάδων*, ἀπὸ *Μυζόνου*, τοῦ *Ἀνείου*, τοῦ *Καριστοῦ* καὶ *Ρροῦς τῆς Ζάρηκος*. Prava enim sunt et perturbata. Dederat ipse ἀπὸ *Μυζόνου*, τοῦ *Ἀνείου*, τοῦ τῆς *Ροιοῦς καὶ Ζάρηκος*, τοῦ *Καρύστου*. Quod praestantissimo *Th. Galaeo* in mentem venisse quum nunc animadvertam, illi in solidum transcribo. Eum ergo vide ad *Parthen.* c. 1. WESS.

380. 50. Τὸ ἀλότομον τοῦ πατρὸς] Conf. L. II. 57. *Ἀποτομία* indicatur. Noster *Excerp. Vales.* p. 345. de *Caesaris* in *Corinthios* *benivolentia*, οὗτος διὰ τῆς ἰδίας ἡμερότητος διορ-

θώσατο τὰς ἐκείνων ἀποτομίας. Philo Iud. Adv. Flacc. p. 978. E. ὅλον τὸ πρῶγμα ἐπιβολὴ τῆς ἀποτομίας Φλάκκων καὶ ὄχλων. S. Paullus Roman. XI. 22. Ἴδε οὖν χρησιμότητα καὶ ἀποτομίαν Θεοῦ. WESS.

380. 55. Ἐν Βουβαστῶ τῆς Χερσονήσου] Legendum ἐν Βυβαστῶ. Nam et Parthen. Erot. c. 1. et Ephorus in Stephani Βύβασσος, quae urbs eadem est, ita scribunt. Herodoto I. 174. ἐκ τῆς Χερσονήσου τῆς Βυβασσίας egregia coniectura restituit Is. Vossius ad Melae L. I. 16. 10. WESS.

380. 57. Διὰ τὴν ἀπὸ τοῦ Θεοῦ γενομένην ἐπιφάνειαν] Mallem ἀπὸ τῆς Θεοῦ. Ipsa Molpadia videtur indicari, quae praesentem opem aegris ferebat, τοῖς κείμενοι κατὰ τοὺς ἔναους ἐγισταμένην φανερώς, ut post pauca scribitur. Posses etiam ἐπὶ refingere, quod tamen districte necessarium non est. Vide Miscellan. Observ. Vol. III. p. 427. WESS.

380. 61. Τὸν δ' ἀψάμενον ἢ φαγόρτα εἰς οὐ νόμιμον etc.] Non adeo ob porcos, credo, qui vini vasa everterant et confregerant, quam quod plerisque in sacris id animalis genus impurum censeretur. Exemplis a S. Bocharto congestis Hieroz. Part. I. L. II. 57. adde ex Strabone Comanenses in Ponto L. XII. p. 861. Mulsu libatio videtur perennasse ex veterum superstitione, qua Θεοφιλῆ θυσίαν, diisque acceptissimam arbitrabantur, in quam addebatur Ξουθῆς μελίσσης κηρόπλαστον ὄργανον, uti Sophocles affirmat in Porphyrio A. Anim. II. 19. WESS.

380. 70. Καὶ πάντα τὰ τῶν Ἑλλήνων ἱερὰ σπλῶντας] Magis auctoribus Xerxes inflammasse templa Graeciae dicitur, quod parietibus includerent Deos, quibus omnia deberent esse patentia, quorumque hic mundus omnis templum esset et domus: quae Ciceronis verba L. II. 10. de Leg. non praeteriit Barn. Brissonus Regu. Pers. L. II. 31., nec Stanleius in Aeschyl. Pers. v. 812., Brissonium in plerisque secutus, Persarum hanc in Graecorum Deos et sacra impietatem proponentes. Alexander commissantesque amici, ulturi eam Persarum atrocitatem, τὴν εἰς τὰ τῶν Ἑλλήνων ἱερὰ παρανομίαν, post dein ignem arcis Persepolitanae subdiderunt L. XVII. 72. Adde L. XI. 29. WESS.

381. 78. Τοῖς ἀπεγνωσμένοις πάθει συνεχόμενος] Participium, quod a Codd. nonnullis negligitur, Diodoro mire placuisse, ὁ συνεχόμενος τῷ πάθει L. III. 29. et c. 33. νόσοις δυνάτοισι συνεχόμενοι, ostendunt. Placuit et S. Lucae Evang. IV. 38. ἦν συνεχόμενῃ πνευτῶ μεγάλῳ. et S. Matth. IV. 24. καὶ προσήνεγκαν — νοσηταῖς νόσοις καὶ βιαίοις συνεχόμενοι. Tamen Rhodom. delendum censuisse videtur, quippe in Indice connectens περιττόντας ἀπεγνωσμένοις πάθει, qui inciderunt, qui affecti sunt morbis. Neque ab eo multum dissentio, non eliminans tamen, quod περιττόντας referri ad aegros possit, qui ad Hemitheae templum forte devenerant. WESS.

381. 89. Τοὺς ὀνομαζομένους Ἐτεοκρητας αὐτόχθονας ] *Genuinos Cretenses*, ut Ἐτεοβοντιάδας Athenienses. Eustath. in Homer. p. 1861. Ἐτεοκρητες δὲ, οἱ ἀληθῶς ἢ ἀληθεῖς Κρητες. Αὐτόχθονες οὖν οἱ Ἐτεοκρητες, Ἰθαγενεῖς, γνήσιοι τῆς χώρας, λεγθέντες Ἐτεοκρητες ὡς πρὸς τοὺς ἐπίλυδας, κατὰ καὶ τοῦ Γεωγράφου δοκεῖ. Strabonis locus, quem designat, L. X. p. 729. A. legitur. Porro Eteocretensium regem fuisse Creta, eumque indigenam, testis Eusebius Chron. An. LVI. est, ubi Scaliger. WESS.

381. 1. Οἱ δὲ δέξα φασὶν ὑπάρχοντας ] Quinque mares, totidemque feminas, quae Sophoclis sententia, opinati πέντε τοὺς πρώτους ἄρσενας γενέσθαι — πέντε δὲ καὶ ἀδελφὰς τούτων. ἀπὸ δὲ τοῦ ἀριθμοῦ Λακτύλου κληθῆναι, apud Strabon. X. p. 725., qui mox verissime, ἄλλοι δ' ἄλλως μινθεύουσι, ἀποροὺς ἄπορα συνάπτοντες. διαφόροις δὲ καὶ τοῖς ὀνόμασι καὶ τοῖς ἀριθμοῖς χρῶνται. quos enim ipse ex certissima Casaub. emendatione *Celmin*, *Damnamenea*, *Herculem* et *Acmonem* adpellat, hi Pausaniae L. V. 7. p. 392. *Hercules*, *Paeonaeus*, *Epimedes*, *Iasius* et *Ida*. Iunge Schol. Apollonii Rh. I. 1129., et magis percipies, veritatem a Strabonis partibus stare. WESS.

381. 4. Κατὰ τὴν Ἰδην τὴν ἐν Φρυγίᾳ ] Hanc sententiam amplectitur auctor ipse L. XVII. 7., et Sophocles, qui propterea Φρύγας *Phryges* eos adpellavit in Fabula *Κωφῶς Σατύροις*, et scriptor Phoronidis, cui γόητες Ἰδαῖοι Φρύγες ἄνδρες ὀρέστεροι in Schol. Apoll. Rh. I. 1126. Peperit confusionem, quod Strabo vere observavit, mons Ida prope Ilium et eiusdem nominis alius insulae Cretae. Id vero vehementer dubites, rectene se habeant, quae succedunt, διαβῆναι δὲ μετὰ Μίνως εἰς τὴν Ἐβρώπην. Primo enim Minos Europaeus ipse fuit, nec ex Asia, si quid veri in fabulis inest, in Cretam venit: quod, cum Minos mari olim fuerit potentissimus, fortasse debile videbitur, nec est tamen. Deinde Minois aetas Idaeis Dactylis recentior est, ipso Iove prioribus. Praeterea scripti libri dissentiunt, Μίνδοςος praeferentes. Quibus equidem ego paene inducor, ut *Minois* parum tempestivum, rectius autem *Mygdonis* nomen opiner. Hoc amplius, Idaei Dactyli ex Phrygia, quod ex Ephoro atque aliis pro certo ponitur, in Europam transierunt: Phrygiae vero pars *Mygdonia* est, ἀπὸ Μίνδοςος, a *Mygdone* nomen sortita, sicuti perhibet Stephanus. Tu si *Minoem* praeferendum censueris, utere marmore Arundeliano Epoch. XI., quod corrigendi inpetum sufflaminat, Idaeos Dactylos, ferri repperiores, in eandem Minois aetatem coniiciens. WESS.

381. 13. Καὶ τὴν τοῦ χαλκοῦ καὶ σιδήρου φέσιν ἔξεργεῖν ] De ferro adsentiuntur plerique omnes. Aeris usus censetur antiquior: necdum enim reperto ferro, hoc arabant, ceteraque administrabant, in quibus ferri usus negligi vix potest. Μηδέπω εὐρεθέντος σιδήρου, χαλκῶ ἐχρῶντο, ὡς καὶ Ἡσίοδος φησι, Χαλκῶ δ' εἰργάζοντο, μέλας δ' οὐκ ἔσκε σίδηρος.

Schol. Apollon. Rh. I. 430. Atque haec caussa, cur plerisque in sacris aeris usus, reperto iam ferro, perennaverit apud Macrobian. Saturn. V. 19. WESS.

381. 14. Τῆς Ἀπτεραίων χώρας περὶ τὸν καλ. Βερέκυνθον] Legebatur τῆς Ἀπτιωαπτεραίων χώρας, quod pravum cum animadverteretur, varie mutatum a viris est eruditis. Jos. Scaliger libri sui margini alleverat τῆς ἀντίας Ἀπτεραίων χώρας, vestigiis vulgatae scripturae inhaerens. Idem Is. Vossio in mentem venit, sic corrigenti ad Scylacis Peripl. p. 41. ed. Gronov. Aliter Io. Meursius L. II. Cretae suae c. 5., legendum censens, ἐν τῇ Ἀπτεραίων χώρα περὶ τὸν etc. Quibus, cum scriptis libris aliud placeat, nihil indigemus. De *Aptera* et *Apteraeorum* regione idem Meurs. L. I. 6. abunde: id addo montem hunc Cretae Βερέκυνθον in Nostri Mss. constanter scribi, *Berecynatum* vero Phrygiae adspiratione carere, auctore Servio in Aeneid. IX. 82. WESS. ἀντίας Ἀπτεραίων ascripserat etiam Reinesius.

381. 16. Μεγάλων ἀγαθῶν ἀρχηγὸς γεγενῆσθαι] De Heraclidis Isocrates Panegy. p. 76. καὶ τῶν παρόντων ἀντοῖς ἀγαθῶν ἀπάντων ἀρχηγοὶ κατέστησαν. Contra Ioseph. XX. A. I. c. 6. 3. ὡς εἶρε τῶν κακῶν ἀρχηγὸς τοὺς Σαμαρεῖς γενομένους. Nimirum ἀρχηγοὶ rei cuiuscunque caussae atque auctores sunt, ut mox c. 65. εἰταξίας ἀρχηγοὶ, et c. 74. τέχνης ἀρχηγός, et XIV. 70. ἐλευθερίας ἀρχηγός, saepeque alias in hoc scriptore. A quo usu non abit S. Lucas A. A. III. 15. ἀρχηγὸν τῆς ζωῆς, nec auctor Epist. Hebr. II. 10. ἀρχηγὸν τῆς σωτηρίας, salutis nobis partae auctorem adpellantes. WESS.

382. 18. Ἐνα μὲν προσαγορευθῆναι Ἡρακλέα] Hunc Olympicorum ludorum auctorem, ut ferebant, describit Pausan. V. 7. 14. Μοχ τὴν τῶν Ὀλ. θεῶν malui, cetera, quae Codd. mutant, aliorum arbitrio permittens. WESS.

382. 24. Καὶ περιόμματα ποιεῖν] Exemplum est in Alexandro Tralliano Therap. L. X. 1., quo Hercules, erectus et leonem elidens, si in annulo gestetur, colicos dolores dissiicere adfirmatur. Gemmam eiusmodi inter Abraxearum vulgavit Io. Chiffletius et illustravit c. 16. Ipsum autem conclusionis hoc genus, quo Hercules Dactylis Idaeis ob amuleta inseritur, debile est. Quis enim iustas stultae superstitionis caussas ubique patefecerit? In Alexandri, quem magum nemo dixerit, simulacris et numis parili modo insaniebant. Dicebantur iuvare in omni actu suo, qui Alexandrum expressum vel auro gestitabant vel argento, apud Trebell. Polliōn. in Quietō c. 14. Quare tandem? an quia Macedonum rex felicissimo rerum successu fuit usus? Id fieri potuit. Recte vero perstrinxit horum stultitiam, quod miror praeteritum ad eum Trebellii locum a viris egregiis, Io. Chrysostomus T. II. p. 243. Ε. τί ἂν τις εἴποι περὶ τῶν ἐπιδαῖς καὶ περιόμτοις κερχρημένων,



καὶ νομίσματα χαλκᾶ Ἀλεξάνδρου τοῦ Μακεδόνοσ ταῖσ κεφαλαῖσ  
καὶ τοῖσ ποσὶ περιδεσμούντων. Sed hoc obiter. WESS.

382. 28. Γενέσθαι Κούρητας ἐννέα ] Hunc Curetum nume-  
rum et Strabo edit L. X. p. 723., qui verissime eiusdem L. p.  
715. de Curetibus, Corybantibus, Idaeis Daetylis et Telchinibus  
haud bene scriptoribus convenire, observavit. Ut mirum non sit,  
de eorum et numero et origine magnam durare discordiam, qua de  
ad Callimach. H. Iov. v. 52. Ezech. Spanhem. et nos supra L. III.  
61. WESS.

382. 38. Τὰ περὶ τὴν τοξικὴν — εἰσηγήσασθαι ] Atqui ar-  
tis huius auctor Apollo, ipsis Cretensibus consentientibus, qui  
ἐύρετὴν καὶ τοῦ τόξου γενόμενον διδάξαι τοὺς ἐγχωρίους τὰ περὶ  
τὴν τοξείαν inferius c. 74. profitentur: quam dissensionem ad  
Luciani Nigrin. c. 37. cum animalvertisset Iac. Palmer., tempe-  
rare non potuit, quin dicam Diodoro impingeret. Meminisset, cum  
in recensendis vetustissimarum gentium rebus alios atque alios au-  
ctores sequi, et reprehensione supersedisset. Ipso hoc loco τὰ περὶ  
τὰς μέλισσοουργίας Curetibus contribuit, cuius mellificii reperto-  
rem disertissime perhibuerat Aristaeum L. IV. 83. Idem in plu-  
ribus aliis, si res dubio laboraret, posset ostendi. WESS.

382. 42. Καὶ τὰς ἐνοπλίους ὀρχήσεις ] Vide Spanhem. in  
Callim. H. Iov. v. 52. Orpheus Hymn. XXX. 1. Σκιρτήται Κου-  
ρηται, ἐνόπλια βήματα θέντες Ποσειδάροισι. Hesiodus apud  
Strabon. X. p. 723. Κορηῆτες τε θεοὶ, γιλοπαύγονες, ὀρχηστῆ-  
ρες. De ἐνοπλίῳ ὀρχήσει similia Strabo p. 716. et Critici veteres  
in extremam Pindari Python. Od. II. WESS.

382. 50. Ὅπουπερ — δείκνυται θεμέλιω Πέας οἰκόπεδα ]  
Novi θεμέλιους λίθους ex Polluce VII. 123., nulla vero θεμέλιω  
οἰκόπεδα. Itaque copulam insertam mallet. Vult credo peren-  
nasse in sua tempora aream domus, quam incoluerat Rhea. Habet  
οἰκόπεδα, quae interpres Latinus non intellexit, Appian. Iber. p.  
459. et οἰκόπεδα ἱερῶν L. IV. B. C. p. 1038. De Titaea, quae  
Titanum habita mater, L. III. 57. WESS.

383. 57. Ἀρσενας μὲν οὖν γενέσθαι τὸν τε Κρόνον etc. ]  
Inspice Hesiodi Theogon. v. 134. et S. Clement. Recognit. L. X.  
17. 31. WESS.

383. 58. Κρόνον omnes. Hesiodus Κρεῖον et Etymolog.  
WESS.

383. 63. Τὸν μὲν οὖν Κρόνον ὄντα πρεσβύτατον ] Negat  
Hesiodus, qui

Τοὺς δὲ μεθ' ὀπλότατος γένετο Κρόνος ἀγκυλομήτης  
Δεινότατος παίδων.

Sed quis in fabulis concordiam expectet? WESS.

383. 70. Ἐδήθεις καὶ ἀνάκους παντελῶς ] Saepe quidem  
ἐδήθεις iidem sunt ac κακοήθεις aut ἀσύνητοι. Hoc loco non  
adeo vitium, quam τοὺς ἐπαινετὸν ἔχοντας τὸ ἦθος designat:

quae potestas etsi rarior, obvia tamen, teste Galeno in Hippocrat. Prognostic. p. 154. Coniunxit, eodem indice, Dinarchus *πρώτην καὶ ἐνέθη*. Demosthen. Leg. eminent. p. 223. *πρώτην καὶ ἐνέθειαν*. et in Timocrat. p. 451. et in Aristogit. I. p. 483. et Plato III. de Rep. p. 400. Scio *Κροῖος, Κροῖκος, Κρόνος* passim ab Aristophane, Luciano atque aliis *stultos et insipidos, μωροὺς καὶ ἀνασθητῶν* adpellari: cuiusmodi ne quid et hic in opinionem cadat, *ἐνέθεις καὶ ἄκακοι* iunctim positi vetant. WESS.

383. 73. *Παρὰ Ῥωμαίοις καὶ Κουρηθονίοις*] Romanorum *Saturnalia* nemo ignorat. Carthaginensium superstitionem, qua Saturno victimis humanis litabant, describit L. XIII. 86. et XX. 14. ubi fortasse nos plura. WESS.

383. 76. *Τόπους ἐπωνύμους αὐτοῦ γενέσθαι*] Vide L. III. 91. WESS.

383. 82. *Ἐν τοῖσδε τοῖς ἔπεσιν*] Qui incipiunt numero III. Lib. I. *τῶν Ἐργῶν*, et in nostris exemplaribus ita leguntur. A quibus etsi in margine annotati (quo etiam ultimus in contextu est remittendus) quodammodo discrepant: concinni tamen sunt et vestustatem eruditam sapiunt. RHOD.

383. 85. *Νόσφιν ἄτερ τε πότων*] Quae Codd. plures hoc in versu mutant, ea in integrum restituissem, nisi liquido mihi patuisset, translata in hunc locum esse ex superioribus Hesiodi: sic v. 90. canit:

*Πρὶν μὲν γὰρ ζώεσκον ἐπὶ γῆσιν φῦλ' ἀνθρώπων  
Νόσφιν ἄτερ τε κακῶν, καὶ ἄτερ γαλεποῖο πόνοιο  
Νούσιων τ' ἀργαλέων, αἳ τ' ἀνδράσι γῆρας ἔδωκαν.*

Habes fontem, unde emanarunt, quem libri Mutin. additamentum clarissime signat. WESS.

383. 90. *Οἱ δ' ἐθελήμοι Ἑσθχοὶ ἔργ' ἐνέμοντο*] Hoc m. Firmat Dicaearchus ita citans in Porphyrii L. IV. A. A. c. 1.; qui nihil aliud quum innovet, excusari non possunt librarii, plura hic pro arbitrio adstruentes. Qui succedit

*Ἄφνειοὶ μῆλοισι, φίλοι μακάρεσσι θεοῖσι,*  
dignus est visus Ccl. Io. Georg. Graevio, qui Hesiodo redderetur, sed post versum

*Τέροντ' ἐν θαλίῃσι, κακῶν ἔχτοσθεν ἀπάντων.*  
cuius consilii causam equidem non perspicio. Hesiodo si non sit indignus, uti videtur, sedem, quam occupavit, facile tuebitur. Id bene, quod Latina Rhodomanni improbaverit. *Ἄφνειοὶς μῆλοισι Rhodom. vertit felices gregibus. Μῆλα hic non sunt greges. Nam quamvis pastoritia vita sit simplicissima, et aliis vitam tolerandi rationibus vetustior, ignorata tamen fuit antiquissimis hominibus, qui sub Saturno dicuntur egisse. Hi enim iis solum se tuebantur, quae terra sponte ad eorum victum ferebat. Tum post pauca: Μῆλα autem hoc loco sunt omnes arbutei fructus,*

qui edules sunt, sicuti apud Latinos poma. Nam et nuces et ficus et uvae τρώξιμοι mala dicuntur. vid. L. 105. de Verb. Signif. Varro cap. 59. L. I. de R. R. proficitur se acturum de pomis condendis, et ibidem tradit, quo modo pira, rapa, nuces iuglandes sint servandae, quia rapa, pira, nuces in pomis numerabantur. Hesychius: Μήλα παντός δένδρου καρπός, ἔξαιρέτως δὲ τῆς μηλέας καὶ πάντα τὰ δένδρα. Haecenus ille Lect. Hesiod. c. 3. WESS.

384. 97. Κατανοήσαντα] Non repudio, etsi cultior videri possit praestantissimorum Codd. scriptura. Demades princ. Orat., quae eius nomine superbit: οὔτε δὲ ἰατρὸς ἐμπείρους δύναιται θεραπεῦσαι τοὺς κάμνοντας, ἂν μὴ τὴν οἰτίαν τοῦ νοσήματος κατανοήσῃ. Philo Iud. L. II. Alleg. p. 79. D. διὰ τῶν ἔργων τὸν τεχνίτην κατανοοῦντες. Auctor Epist. Hebr. III. 1. κατανοήσατε τὸν ἀπόστολον καὶ ἀρχιερέα τῆς ὁμολογίας ἡμῶν. quibus aliisque locis diligentem inspectionem et curam postulat. Porro Hyperionis fata diversiore modo proposuit L. III. 57. WESS.

384. 1. Κοῖον μὲν καὶ Φοίβης Ἀητὸ γενέσθαι] Apollonio propterea Ἀητὸ Κοιογένεια L. II. 712., ubi Graeci interpretes videndi et Etymolog. v. Κοῖος. WESS.

384. 4. Ἐφρετὴν γενόμενον τῶν πυρρείων] Ligna intelligunt Grammatici Graeci, non silicem. Sic enim ad Apollon. Rhod. I. 1184. Πυρήνια, quae eadem ac πυρεῖα, φησὶ τὰ προστριβόμενα ἀλλήλοις πρὸς τὸ πῦρ ἐγγενῶν, ὧν τὸ μὲν ἔστιν ὕπτιον, ὃ καλεῖται ΣΤΟΡΕΥΣ. θάτερον δὲ παραπλήσιον τρυπᾶνω, ὅπερ ἐπιτρίβοντες τῷ στορεῖ στρέφουσιν. Unde et τρίψεως, quum ignis horum ope accensi mentio est, meminisse solent. Terebatur enim lignum ligno, uti Plinius ait L. XVI. 40., ignemque concipiebat attritu, excipiente materia aridi fomitis. Theophrast. de Igne p. 428. καὶ τὰ πυρεῖα τῇ τρίψει τὸ αὐτὸ τοῦτο ποιῆ καὶ τοῖς ξύλοις. Lucian. I. H. Ver. c. 32. τὰ πυρεῖα συντρίψαντες καὶ ἀνακαύσαντες δεῖπνον ἐποιούμεθα. Plura de hoc genere Is. Casaub. Lect. Theocr. c. 20. Cl. Salmas. in Solin. p. 126. et Stanley in Aeschyl. Prometh. v. 109. Id paene praetermiseram, Heraclidem Allegor. Homer. p. 448. ignis, cum hominibus a Prometheo communicati, mysterium multo aliter exponere, et specula aenea, quibus contra solem positos radios colligeret, adhibuisse, tradere: χαλκοῖς τισιν ὄργανοις κατασκευασμένοις ἐξελεχύσασθαι τοὺς ἀπὸ τῶν μετεώρων φερομένους σπινθήρας κατὰ τὰς μεσημβρίας ἐναντία τῷ ἡλίῳ τὰ ὄργανα τιθέντα. quod quidem commentum Nostri explicatione multo difficilior est. WESS.

384. 7. Ἄ τινες τὸν Ἐριμῶν φασιν ἐσηγήσασθαι] Vid. L. I. 6. et de Mnemosyne non dissimilia his Diodori canentem Orpheum Hymn. LXXVI. WESS.

384. 14. Θεσμοσύλακος καὶ Θεσμοθέτας] Veteri aevo θέμις et θεσμός significatione haud multum distabant, sive, ut

Eustath. in Homer. p. 993. scribit, *ἀνστοιχος ἡ Θέμις καὶ ὁ Θεσμός*. Id affirmant *Θέμιστες*, quibus Homerus leges consiliaque, *βουλὰς καὶ τὰ πολιτεύματα*, semper, si non fallit Strabonis observatio L. VII. p. 506., exprimit; *Θεμίζειν*, quod Hesychio auctore in Cretensium dialecto *leges ferre, de iure respondere*, seu *δικάζειν*, ut explicat Eustath. in Hom. p. 1699. ex Pausania; praeterea *Θεμιστεύειν*, *Θεμιστός* et quae plura hinc descendunt. Diodorus, quod *Θεσμός*, ut olim *Θέμις*, legem indicet, *Θεσμογράφου καὶ Θεσμοθέτας*, de quibus Harpocration et Pollux VIII. 86., a Themide, legum et iuris auctore, haud male repetit. WESS.

384. 17. *Θεμιστεύειν λέγομεν*] Ferebant Themidem primam omnium, aut certe post Terram matrem, ut Aeschylus Eumenid. v. 2., oracula Delphis fudisse: perennasse ex ea causa, ut Apollo, cum responsa daret, perhiberetur *Θεμιστεύειν*. Schol. Pindari Od. XI. 15. *Pythion. Θέμιδος ἦν τὸ χρηστήριον, ὅθεν καὶ τὸ Θεμιστεύειν*. Distinctius Orpheus Hymn. LXXXVIII. 3.

*Ἡ πρώτη κατέδειξε βροτοῖς μαντήϊον ἀγνὸν*

*Δελφικῶ ἐν κενθμῶνι, Θεμιστεύουσα Θεοῖσι*

*Πυθίῳ ἐν δαπέδῳ, ὅθι Πυθοῖ ἐμβασιλευεν.*

*Ἡ καὶ Φοῖβον ἄνακτα Θεμιστοσύνας ἐδίδαξεν.*

Ab Apolline, quo plena credebatur, accipiebat Pythia, de qua proin Plutarchus Quaest. Gr. p. 992. F. *πρότερον δὲ ἀπαξ ἐθεμιστεύουσα ἡ Πυθία τοῦ ἐναντιοῦ*, quin et ipsa in oraculo apud Aelian. III. V. H. c. 43. *οὐ σὲ Θεμιστεύσω*, et Etymolog. in *Θεμιστεύω*. Atque haec verbi usum illustrant satis; cuius ego causam arbitror veriore, quod Phoebi ex tripode responsa totidem decreta et leges censerentur tota Graecia: quare *Θέμιδες* Apollinis oracula Pindaro Pythion. Od. IV. 96., et *Θέμιστες* Homero Hymn. Apollin. v. 394., *Θεμιστία* Straboni L. XVII. p. 1168., quod ad eius scriptoris L. VII. p. 506. quoque monuit Is. Casaubon. WESS.

384. 27. *Παρὰ πᾶσι σχεδὸν ἀνθρ. ἐν πάσις οἰκίαις καθιδρυθῆναι*] Et in media quidem earum parte. Orpheus Hymn. LXXXIII.

*Ἐστία εὐδυνάτιο Κρόνον θύγατερ βασιλεία*

*Ἡ μέσον οἶκον ἔχεις πρὸς ἀνάοιο μεγίστον.*

Quem vetustissimi Theologi versum non oblitus est Ill. Spanhem. ad Callim. Hymn. Del. v. 325., ubi Critici, *Ἰστίη, ἐστὶ μὲν κυρία ὁ βωμὸς, ὃ ἐν μέσῳ τῶ δόμῳ ἐστὼς*, nedum in erudita de Vesta et Prytan. Diatribe c. 14. Adde Cl. Gesner. ad Luciani Amor. c. 36. WESS.

384. 30. *Φυομένον μὲν ὡς ἔτυχε*] Gemina his scripsit L. 14. de Aegyptiorum Iside. WESS.

385. 39. *Καὶ τῷ Τριπτολέμῳ δοῦναι τὸν τοῦ σίτου σπόρον*] Nota fabula est, qua Ceres

*— Levem currum Tritonida misit in arcem*

*Triptolemo; partimque rudi data semina iussit*

*Spargere humo, partim post tempora longa recultae,*

apud Ovidium M. V. 645., cui Pausaniam iunge L. VIII. 4. et Aristidem T. I. p. 450. WESS.

385. 44. *Αὐτοῖς*] *Αὐτοῖς* Co. M. R. quod malum haud foret, si *προσαγορεύσαι* sequeretur. WESS.

385. 45. *Μεγίστων γὰρ ἀνθρώποις ἀγαθ. αἰτίαν* etc.] Confer ea, quae huius libri c. 5. disputavit. WESS.

385. 53. *Ἀργῆτιοι μὲν γὰρ λέγουσι*] Horum sententiam proposuit L. I. 14. WESS.

385. 59. *Τὴν εὐρεσιν — γεγεννημένην παρ' αὐτοῖς*] Gloria reperti frumenti patriae illibata ut maneat, vehementer pugnat Isocrates Paneg. p. 68. WESS.

385. 62. *Ἐλευσίνα προσαγορεύειν*] Ab *ελεύθω*, *venio*, quod Ceres, raptam filiam terra marique quaerens, huc devenisset, et ea reperta Mysteria in perpetuum frugum inventarum argumentum instituisset. Sic Aristides T. I. p. 450. *ἐλθοῦσαν δ' εἰς Ἐλευσίνα, τὴν τε ἐπωνυμίαν ποιῆσαι τῷ τόπῳ, καὶ τὴν Κέρην ἐροῦσαν, ποιῆσαι τὰ μυστήρια, καὶ γενέσθαι δὴ τὸν σίτον παρὰ μὲν ταῖν θεῶν τῇ πόλει τῶν Ἀθηναίων*. Ipsi tamen Eleusini ex Heroe Eleusine urbi nomen venisse adfirmant in Pausania L. I. 38. p. 93. Quod hic additur *τὸ σπέσμα τοῦ σίτου κομισθέντος*, id, seriem verborum si spectes, impeditius est. Praestat *τὸν τὸ σπέσμα τοῦ σίτου κομίσαντα*, ut Venetus edit. Vult enim, Cereris quendam administrum Eleusinem, allato secum frumento, venisse aliunde. Id itaque praefero. WESS.

385. 68. *Μηδ' ἐσχάτῃ μεταδοῦναι*] *Illud μηδ' ἐσχάτῃ facit, ut verba intelligenda sint, quasi non modo non prima, sed plane nunquam, et ne ultimo quidem loco, munus frumenti ab Cerere acceperit Sicilia. Contrarium prorsus ac Diodorus, et res ipsa vult. Contentio scilicet erat, quis populorum primus frumenti satione ab Cerere esset beatus. Ut sibi id vindicent Siculi, argumentantur ab absurdo. Ἄτοπον scilicet fuisse, regionem, sedem Cereris ipsam, et natura ad frumenti proventum accommodatissimam, adeoque Deae gratissimam, non primo, sed ultimo, loco donatam fuisse illo Deae munere. Rem videor mihi constituisse, si pro μηδ' ἐσχάτῃ, una literula mutata, legam τῆδ' ἐσχάτῃ*. Haec Io. Iensius Epist. ad Graev. p. 417., quae laudo et probo. Ipse Rhodomannus sua in versione beneficii vero huius tanquam nihil eo pertinentis postremo illam loco participem reddere simile quiddam sectatus est. WESS.

386. 72. *Τὸν ποιητὴν λέγειν*] Vide huius libri c. 2. WESS.

386. 85. *Ἰππειον αὐτὸν ὀνομάσθαι*] Eadem Pausaniae sententia L. VII. 21. Fabulas alii comminiscuntur in Schol. ad Il. Ψ, 346., unde lux lacero et corrupto Grammatici fragmento in Biblioth. Coislin. p. 604. Perinde autem erit sive *Ἰππειον* an *Ἰππιον* elegeris: hoc apud Comicum Nub. v. 83. Aelian. de Animal. XIV. 18. Utrumque in Pausan. VIII. 14. Hesych. *Ἰππιῶς*.

cuius verba optime constituit Ios. Barnesius in Eurip. Rhes. v. 187. Iunge Servium in Georg. I. 12. WESS.

386. 98. *Παράλειπαι*] *Μαρομήσεται* R. Mut. Co. Cl. 2. Satis bene. Vid. Schol. ad Demosth. Philip. II. p. 16. WESS.

386. 3. *Ἐν τῇ προσαγορευομένῃ Δίκτη*] Praeuntibus libris ita refingo. Natus Iupiter in monte ferebatur Dicta, educatus in Ida. Athenaeus L. IX. p. 375. F. *μυθείονοιν ἐν Κρήτῃ γενέσθαι τὴν Διὸς τέκνωσιν ἐπὶ τῆς ΔΙΚΤΗΣ*. Auctor ipse post pauca *πόλιν κτίσαι παρὰ τὴν ΔΙΚΤΑΝ*, ὅπου καὶ τὴν γένεσιν αὐτοῦ γενέσθαι μυθολογοῦσιν. Quae cum tam liquida sint, miror H. Stephanum vulgatum praeoptasse. WESS.

386. 8. *Ὀρομαζομένης Ἀμαλθείας*] Sic melius. Vide L. IV. 35. et de capra Anton. Liberalem c. 36. WESS.

386. 13. *Περὶ τὸν ποταμὸν τὸν καλούμενον Τρίτωνα*] Cretae hunc fluvium ignorasse videntur interpretes Graeci Apollon. Rh. I. 109., *Τρίτωνα*s, inquiringes, *τορεῖς Βοιωτίας, Θεσσαλίας, Αἰβύνης*. ἐν δὲ τῷ κατὰ Αἰβύνην ἐπέχθη ἢ Ἀθηνῶν. Cretenses, etsi scripti Codd. hic dissentiant, eum natalesque Minervae eripi sibi non patientur, ut mox c. 72. animalvertes. De *Omphalo*, Cretae sic dicto loco, ex Schol. Nicandri Alexipharm. v. 7. et Callimacho H. Ion. v. 45. Io. Meurs. L. II. Cret. c. 2. et L. Holsten. ad *Ὀμφάλιον* Stephani abunde. WESS.

*Ibid. Καὶ τὸ χωρίον δὲ τοῦτο*] *Διὰ τοῦτο* praeoptarem. WESS. Aptius est καὶ τὸ χωρίον τε τοῦτο *Ὀμφάλιον* προσαγορευθῆναι καὶ τὸ περιζέμερον πεδῖον ὁμοίως *Ὀμφάλιον*; idem verum esse colligo ex continuo sequenti *τό τε ἄντρον καθιέρωται καὶ οἱ περὶ αὐτὸ λεμιῶνες ὁμοίως ἀνεῖνται*.

386. 18. *Καὶ οἱ περὶ αὐτὸ λεμιῶνες ὁμοίως ἀνεῖνται*] Quod Io. Meursius L. II. Cret. c. 3. sagaci coniectura odoratus erat, id praecipua ex parte manu exarati libri confirmant. *Ἀπὸ* autem necessarium facit praecedens *ἄντρον*, neque id instauratum aegre quisquam feret, cum *αὐτῷ* Vat. manu nos eo paene deducat. WESS.

387. 21. *Τῆς πρὸς αὐτὰς οἰκειότητος*] *Certo certius est, non πρὸς αὐτοὺς, sed πρὸς αὐτὰς scripsisse Diodorum, et de ταῖς μελίτταις esse intelligendum*, Cl. Io. Iensius recte in Epist. ad I. G. Graev. p. 418. Habet autem *ἱερὰς μελίττας, τροφὸς τοῦ Διὸς* Antonin. Liberal. c. 19., quae antrum, in quo Iupiter editus sit, incolant, et *μελιττῶν σμήνος, αἴπερ καλοῦνται ΧΑΛΚΟ-ΕΙΛΕΙΣ* Aelian. de Animal. XVII. 35., de quibus ibidem Antenor memoriae prodidit, in Ida Cretae paucas eius gentis apes durare: *κατὰ τὴν Ἰδὴν τὴν Κρήσσαν ἐκείνου τοῦ γένους τῶν μελιττῶν εἶναι ἰνδάλματα, οὐ πολλὰ μὲν, εἶναι δ' οὖν*. Unde easdem, de quibus hoc loco, designari, non dubium est.

387. 27. *Δυσχεμερωτάτους τόπους γεμομένας*] *Εἰς τοὺς δυσχ.* Co. R. M. quo nihil admodum indigemus. Vid. L. II. 16. et huius L. c. 40. WESS.

387. 30. *Ἀγίοζον ἐπονομασθέντα*] Certant Grammatici de tituli origine, alia atque alia, ut fit in dubiis, adferentes. Tu vide Etymolog. v. *Ἀγίοζος* et Eratosthen. Catasterism. c. 13., quaeque ad Callim. H. Iov. v. 39. Spanhem. WESS.

387. 33. *Ἦς ἐκλειψθείσης ἐν τοῖς ὕστερον χρόνοις*] Inter urbes Cretae Mela II. 7. 84. *Dictynnam*, et Ptolemaeus L. III. c. 17. *Dictamnnum* recensent. Utramque nihil distare et fortasse hanc esse, Io. Meursius L. I. Cret. c. 9. censuit. Mihi aliud videtur. Durabat *Dictynna* Melae et *Dictamnus* Ptolemaei, cum uterque res Creticas describeret. Haec, quae Iove conditore gloriabatur, Diodori aetate plane desolata erat: diversa ergo. WESS.

387. 49. *Κατὰ δὲ τὴν Φρυγίαν τοὺς περὶ Τυφῶνα*] Iovis cum Typhone certamen multifariam pugnatum veteres describunt. Ciliciae contribuit Aeschylus Prometh. v. 351., nec Siciliam tamen praeteriens v. 365., ut nec Apollodorus L. I. 6. 3. Ad Caucasum contigisse canit Apollon. Rhod. II. 1215. Pindarus in Sicilia poenas luisse Typhonem asseverat Od. IV. 12. Olympion., ubi Critici admonent, alios sedem belli Phrygiam constituisse, quod verum esse ea, quae Diodorus et quae Strabo de Catacecaumene scribit L. XII. p. 869., commonstrant. Adde eiusdem L. XIII. p. 931. De Mulino, quem in Creta Iupiter oppresserit, nihil dixerō. Habet nonnulla Io. Meursius L. IV. Cret. c. 14., sed dubia et incerta. WESS.

387. 51. *Ἀγεται τὸν Δία θῦσαι ἡλίῳ καὶ etc.*] Legebatur *θῦσαι βόων ἡλίῳ*. Ego vero mediam vocem induxi. Sequentia non unum bovem, sed plures victimas immolatas clarissime ostendunt. Mallem praeterea *πρωτῶν ἐπισημαίνεσθαι χρ. καὶ ἀπόστασιν* ob ea, quae continuo succedunt. Victimae litabant, seu *ἰερά* erant *εἴσημα*, ut Philostrato VIII. Vit. Apoll. c. 7. p. 345. dicuntur, Iovique victoriam et hostium ad suas partes defectionem portendebant. WESS.

387. 60. *Περὶ τὴν Παλλήνην*] Vide Stephan. v. *Παλλήνη*, et de Phlegraeo Italiae campo supra L. IV. 21. WESS.

388. 68. *Ἐκχέειν*] *Ἐμχέειν* Co. R. Vide L. I. 66. WESS.

388. 72. *Τοῖς ἀρίστοις τῶν θεῶν etc. ἀπονείμω τιμὰς*] Prometheus in cognomine Aeschyli Fabula v. 228. de Iove:

*Ὅπως τάχιστα τὸν πατρόςων ἐς θρόνον  
καθέξει, εὐθὺς δαίμοσιν νέμει γέρα  
Ἄλλοισιν ἄλλα, καὶ διεστοιχίετο  
Ἀρχήν. βροτῶν δὲ τῶν ταλαιπώρων λόγον  
Ὅν ἔρχεν οὐδέν, ἀλλ' αἰστώσας γένος  
Τὸ πᾶν. —*

Sed eriminose, atque ut invidiam illi faceret. Stanleius ibi verba Diodori pulcre recordatus est. WESS.

388. 84. *Προσαγορευθῆναι Ζῆνα*] Vide not. in L. III. 61. WESS.

388. 87. Πατέρα — ἵπατον etc.] Hos pluresque alios Iovis titulos exponit Dio Chrysostom. Orat. I. p. 9. D. et XII. p. 226. A. Εὐβουλεύς adpellabatur potissimum in Cyrene, si Hesychius non fallit. Alioqui Plutoni id cognomen indit Nicander Alexiphar. v. 14., et Baccho Plutarchus T. II. p. 714. atque Orpheus XXIX. 6. WESS.

388. 93. Διὸ καὶ Τριτογένειαν] Aliam nominis eius causam dederat L. I. 12. aliam L. III. 70., quibus adde ex Schol. Aristoph. Nub. v. 985. aliam, non minus probabilem. WESS.

388. 94. Παρὰ τὰς πηγὰς ταύτας] Non alienum videtur περί. In tertia autem linea ἀγίους cum sequente ἱερέων peregrini quiddam prae se fert. RHOD.

388. 98. Πλησίον τοῦ Θήρωνος ποταμοῦ] Io. Meursius L. II. Cret. c. 6. Θήρωνος citat, incertum coniectura, an Rhodomanni versione, quae ad Theronem fluvium habebat, motus. Ego nihil innovo, suspectam tamen censens fluvii scripturam. Inpelior et Codd. discordia, et his Pausaniae L. I. 27. Κρησὶ τὴν τε ἄλλην γῆν καὶ τὴν ἐπὶ ποταμῶν ΤΕΘΡΙΝΙ ταῦρος ἐλυμαίνεται. Loquitur de tauro, qui Gnossiorum agrum infestarat, quemque τὸν ἐν Κνωσσῶ ταῦρον vocat L. V. 10. Idem ergo fluvius videtur; uter autem rectius adpellarit, quaerendum restat. Porro ἱερέων, ex glossa additam ἐγγωρίων explicandorum ergo, vocem eliminavi, quod et τῶ ἀγίους accidisset, si Codd. scripti auxilio occurrissent. WESS.

388. 3. Παρεδόθησαν] Syllaba extrema indubitanter amputanda est. RHOD.

388. 4. Ελλείθυιαν] Ελλήθυιαν Co. Ελλίθυιαν Vat. Conf. Cotel. in Homil. Clement. V. p. 664. WESS.

388. 6. Ἐτι δ' Εἰρήνην] Stipat hic Diodorus liberorum Iovis nomina, dein singulorum inventa atque officia proponit: inter Deas autem praeter has recenset Minervam et Musas, inter mares Bacchum et Herculem, omnes Iove prosemnatos. Quare suspicio non iniusta est, post Εἰρήνην neglectas esse καὶ Ἀθηνᾶν καὶ Ἄρτέμιδα, praeterea post Ἐρμῆν excidisse καὶ Διόνυσον καὶ Ἡρακλέα. Hoc enim ordine deinceps singulos enumerat. Vidit Cl. Io. Iovius hunc defectum et uberiore sermone in eum animadvertit Epist. ad Graev. p. 419. WESS.

Ibid. Ἄρεα] Ἄρην C. M. R. quod si lubet amplectere et v. Luc. Iov. Trag. c. 40. WESS.

389. 16. Προθέουσι — τῶ Διὶ τῶ τελείῳ καὶ Ἡρῶ τελείῳ] Vide Stanleium ad Aeschyli Agamemn. v. 65. et Brodaeum in Antholog. L. III. p. 333. Sacra haec προτέλεια τῶν γάμων apud Philon. Iud. De Congr. Erud. Caussa p. 424. D. προτέλεια θύειν Plat. T. II. p. 772. B. Non male Maximus in Dionysium Areopag. p. 327. ed. Morel. Προτελείας μὲν ἐκάλουν Ἀθηναῖοι τὰς τῶν γάμων μετὰ τῶν θυσιῶν εὐχὰς τὸν γὰρ γάμον τέλος ἐκάλουν, ὡς τελειοῦντα πρὸς τὸν βίον τὸν ἀνθρώπου. WESS.



389. 19. Καὶ τοῦ σχηματίζεν] Scripserat καὶ τὸ σχηματίζεν, quod non latuit Io. Iensio Epist. ad I. G. Graev. p. 420. Gratiarum autem nomina et numerum multimodis in veterum sacris proponi atque explicari, praeter Senecam L. I. Benef. c. 3. et Plutarchum T. II. p. 778. C. accuratissime docet Pausanias IX. 35. cum Cornuto De Nat. Deor. c. 15. WESS.

389. 26. Ἐπικαλεῖσθαι μάλιστα τὴν θεὸν ταύτην] Sic gravidam se simulans femina in Aristoph. Lysistr. v. 743.

᾿Ω πότνι' Εἰλείθυι' ἐπίσχεσ τοῦ τόκου.

Quod vero Gratiis evenisse diximus, itidem de genere et numero, unane an plures Piithyiae essent, discordia intercedebat. Homero II. A, 270. μογοστόχοι Εἰλείθυια Ἥρης θυγατέρες. unde in Hesychio, Εἰλήθυια, αἱ ἐπὶ τῶν τιτιουσιῶν θεαί. Genus illi longe vetustissimum et Saturno prius tribuebat Olen Lycius, in adfecto, sed salutari medicina adiuto a doctissimo Kuhnio, Pausaniae loco L. VIII. 21. WESS.

389. 29. Κοιροτρόφον αὐτὴν ὀνομάζεσθαι] Orpheo Hymn. XXXV. 8. non tantum βροτῶν κοιροτρόφε δαίμον Diana, sed et v. 4.

᾿Ωδίνων ἐπαρωγὲ καὶ ᾠδίνων ἀμύητε.

Nimirum Diana parturientibus auxilio venire ferebatur, λοχεία propterea dicta Aristidi T. I. p. 25. et Εἰλείθυια Horatio Carm. Secul. v. 14. Ienis Piithyia, πολύλλιτος Εἰλείθυια Manetheni. Sic enim legi debet L. VI. 740.

— — ἐν οἷς ὄρη πέλ' ἐκείνη

Τὴν ἀπὸ γαστροῦς ἔφηγε πολύλλιτος Εἰλείθυια.

Non ἔφηγε ἐπολύλλιτος, quod nemo intelligit. Id autem nomen cum Grammatici ab ἐλέθω, venio, derivant, nugae agunt. Phoenicum sermonis est ἔθ, pario, procreo, hinc Graecis Εἰλείθυια partus praeses, et Assyriis apud Herodotum I. 199. Venus Μόλιπτα, eiusdem rei curam administrans, ut pulchre docuit Seldenus Syntagma. de Diis Syr. II. 2. WESS.

389. 30. Τῶν δ' ὄνομα ᾿Ωρῶν ἐκάστη δοθῆναι etc.] Neque in hac parte Theologiae paganicae ulla concordia. Diodoro quidem adsentiuntur Orpheus Hymn. XLII. et Apollodorus L. I. 3. I. atque alii. Verum ex Pausania IX. 35. et Hygino Fab. CLXXXIII. et de numero et de nominibus earum variatum fuisse vehementer, adparet. WESS.

389. 34. Ἀθηνᾶ δὲ προσάπτουσι τὴν τε etc.] In Addend. praestantissimus Rhodom. addit huic loco τὸ τὴν τε τῶν ἑλαιῶν ἴμ. quod et necessarium erit, nisi si καὶ φητείας παραδοῦναι loco καὶ φητείας παράδοσιν positum arbitreris. Oleaeque Minerva Inventrix ex Poeta Georg. I. 18. notissima est: Servius ibi fabulam exsequitur, quam Schol. in Aristoph. Nub. v. 1001. non neglexerunt. WESS.

389. 43. Εὐρεῖν δὲ καὶ τὴν τῶν ἀλλῶν κατασκευὴν etc.] In-

venit tibus, sed et abiecit, cum oris speciem illis inflatis deformari animadverteret, teste Aristotele L. VIII. Polit. c. 6., seu, ut Plutarchus de Ira Cohibend. p. 456. B., admonita super ea oris deformitate a Satyro. Invenit et ἀλχητικὴν, et eum Nomum, quem πολυκέφαλον artis periti nuncupant, quo de Pindarus Pythion. Od. XII. 13. eiusque interpretes, sed quem Plut. de Music. p. 1133. D. Apollini tribuit, fortasse a Minerva edocto. WESS.

389. 46. Ἀφ' ὧν Ἐργάνην ἀντὶν προσυγορεύεσθαι ] Vid. Th. Gataker. Miscel. Postum. c. 9. p. 494. et Steph. Bergler. in Aleiphron. L. III. Ep. 42. Proclus in Timaeum p. 52. Ἐργάνη δὲ, ὡς τῶν δημοιοργικῶν ἔργων προστάτις. Simili ex caussa Ἐργάτις audiebat, Hesychio auctore, quod nollem negasset Gatakerus. WESS.

390. 49. Ὅτι Σύροι μὲν ἐρέται τῶν γραμμάτων εἰσὶ ] Haec credo respici ab Eusebio L. X. Praep. Evang. c. 5. cum ait: εἰσὶ δὲ οἱ Σύρους γράμματα ἐπινοῆσαι λέγουσι πρώτους. Addit continuo, Σύροι δ' ἂν εἴεν καὶ Ἑβραῖοι, τὴν γείτονα Φοινίκης etc. οἰκοῦντες. Quae ego verissima arbitror: Syrorum enim, quibus antiquissimus literarum usus, sine controversia Hebraei sunt. WESS.

390. 54. Φοινίκια προσυγορεύειν ] Confer not. in L. III. 67. WESS.

390. 55. Ἀλλὰ τοὺς τύπους τῶν γραμμάτων μεταθεῖναι μόνον ] Non omnino falsa ea sunt. Usi Graeci ante Cadmi ex Phoenice adventum literis sunt Pelasgiis. Cadmus eis nova nomina, quod L. III. 67. Linus fecisse perhibetur, inposuit, addidit praeterea paucas literas notasque numerales, sive τὰ ἐπίσημα, ut Grammatici vocant. Quo facto, et figura, et nomine, et numero Graecas literas Phoeniciis aequavit. Habet quae haec firmare apta sunt Herodotus V. 58., Tzetzes Chiliad. XII. 61. Sed hanc disputationem, cum longius ea spatium requirat, et diligentissime sit explicata ab Amplissimo Bouhier. Dissert. de Prisc. Graec. et Latin. literis c. 52., nunc non ingredior. WESS.

390. 64. Διόπερ οἱ τε τῶν τεχνῶν etc. ] Genus hoc hominum Vulcani et Minervae sacrum erat. Ἡμίστον καὶ Ἀθηναῖς ἐερόν τὸ τῶν δημοιοργῶν γένος. οἱ τὸν βίον ἡμῖν ξηγκατεσκευάσασσι τέχναις, quae Platonis XI. de L. L. p. 920. D. verba. Nimirum ignis ope artium pleraeque exercentur, hinc et earum praeses Vulcanus. Τέχνας δὲ πάσας καὶ ἀνεῖρε τὸ πῦρ καὶ σώζει. διὸ καὶ τὸν Ἡμιστον ἀρχηγὸν αὐτῶν ποιοῦσι, Plutarch. de Aq. et Ign. Comparat. p. 918. C. Colebatur autem ad focum, ὡς ἔφορος τοῦ πυρός in Schol. ad Aristoph. Av. γ. 436. WESS.

390. 71. Τὴν — ἐναγώνιον ἐνέργειαν εἰσηγήσασθαι ] Agilem efficacemque in certaminibus vim. Sic L. XX. 96. de Helepoli, quae rotis inposita ingenti mille hominum impulsu in muros arietabat, ἐπότρογον δὲ καὶ τὴν ΕΝΑΓΩΝΙΟΝ ΕΝΕΡΓΕΙΑΝ λαμβάνουσαν δι' ἀνδρῶν οὐκ ἐλαττόνων ἢ χιλίων. et ἐναγώνιος κίνησις L. XVIII. 67. ubi vide. WESS.

390. 75. *Αἰ ἤς τὸ παλαιὸν συνέβαινε θεραπ. τυγχάνειν* etc.] Oraculis praecepit, quibus per quietem Apollinis atque aliorum templis incubantes admonebantur, ut in Aristoph. Plut. v. 662. etc. Vide not. ad L. I. 53. WESS.

390. 79. *Καὶ τὸ τόξον Σκυθικὸν ὀνομασθῆναι*] Est in Pausania X. 31. p. 875. *παρθένος τόξον ἔχουσα τοῖς ΣΚΥΘΙΚΟΙΣ ἐμφερές*, quae satis tueretur omnium Codd. scripturam, nisi apertissima ratio eam infringeret. Aiunt Cretenses sua in insula arcum repertum, artemque arcu iaculandi apud populares propterea mirifice exerceri, atque ipsum arcum *Scythicum* appellari: quo conclusionis genere quid absurdius? Dixissent *Creticum* vocari, et res bene procederet. Quare ego non dubito, quin *Κρητικὸν* scripserit Diodorus, debuit quidem certe. *Τόξον Κρητικὸν* Pollux I. 149. laudat, unde et ex arcu Bittidem domo Cretensem cognosci posse Antipater ait, *Τὰν Κρησσαν δέ, τὰ τόξα* in Anthologia Epigramm. L. III. 11. p. 31. Mecum sentit eruditissimus S. Bochartus de Phoen. Colon. I. 15. p. 423. WESS.

390. 85. *Ὅστε ὡς ἀρχηγὸν αὐτῆς καὶ κτίστην τιμᾶσθαι*] Paene eieceram damnatam a Coislin. et Reg. voculam. Potest enim ἀρχηγὸς doctorem magistrumque artis exprimere. Isocrates Panathen. p. 372. ἀρχηγὸς καὶ διδασκάλους coniungit, sicuti et Aeschines in Timarch. p. 24. 28. Plutarcho vero T. II. p. 1135. B. ἀρχηγὸς τῆς Ἑλληνικῆς καὶ καλῆς Μουσικῆς, qui primus eius praecepta Graecos docuit. Verum nihil demuto. Auctor Medicinae Apollo, cuius Aesculapius ob res a se sollerter inventas quasi conditor est censitus. Plura de eo L. IV. 73. WESS.

391. 89. *Καὶ τὸ τούτων σύστημα κηρύκειον*] Describitur a Schol. Thucydidis I. 53. legatorum hoc perpetuum insigne. Philo Iud. Leg. Cai. p. 1006. de Caligula, Mercurii personam induente, *πάλιν κηρύκειον ἀναλαμβάνει, δεῖγμα συμβατηρίων σπονδῶν πόλεμοι γὰρ ἀνοχὰς καὶ διαλύσεις λαμβάνουσι διὰ κηρύκειον εἰρήνην καθισταμένων*. Manibus id autem praeferebat, quod sermonis et dialecticae auctor credebatur. Iamblichus certe quidem de eius artis conditore disserens, Deum fuisse pertendit, quem Mercurium alii perhibebant: *ὡς μὲν λέγουσιν τινες, ὁ λόγιος Ἐρμῆς, ὁ φέρων ἐν ταῖν χεροῖν τὸ σύνθημα αὐτῆς τῶν εἰς ἀλλήλους ἀποβλεπόντων δρακόντων*, apud Io. Stobaeum Florileg. Tit. LXXIX. p. 471. WESS.

391. 92. *Ὅθεν δὴ καὶ Κοινὸν Ἐρμῆν ὀνομάσθαι*] Dici adsueverat *Κοινὸς Ἐρμῆς* cum partem rei repertae sibi vindicarent, atque in communi, quodcunque erat lucri, esse iuberent. Hesychius, *Κοινὸς Ἐρμῆς, παροιμία ἐπὶ τῶν κοινῆ τὶ εὐρισκόντων*. Quod genus cum abunde illustrarint Is. Casaubon. ad Theophrasti Charact. c. 11. et Desid. Heraldus L. II. Adversar. c. I., praetereo. Hoc loco *Κοινὸς Ἐρμῆς* communem omnibus loquelam indicat, puto et in his Plutarchi T. II. p. 777. D. *τοῦ δὲ προφο-*

ρικοῦ τὴν Μοῦσαν ὁ Πίνδαρος οὐ φιλοκερδῆ φησιν, οὐδ' ἐργά-  
τιν εἶναι πρότερον, οἶμαι δὲ μηδὲ νῦν, ἀλλ' ἀμουσία καὶ ἀπει-  
ροκαλία τὸν ΚΟΙΝΟΝ ΕΡΜΗΝ ἐμπολαῖον καὶ ἐμίμῃδιον γε-  
νέσθαι. WESS.

391. 95. Καὶ τὰ ἐκ τῆς ἐμπορίας κέρδη] Propterea Κερ-  
δῶος, LUCRORUM POTENS ET CONSERVATOR, Ἐμπολαῖος.  
Vid. Steph. Bergler. in Alciphron. L. III. Epist. 47. et Ezech.  
Spanhem. ad Aristophan. Plut. v. 1156., deque Mercurii furtis  
Lucian. Prometh. c. 5. WESS.

391. 97. Κήρυξα τῶν θεῶν, ἔτι δ' ἄγγελον ἄριστον] *Κήρυξ μέγιστος τῶν ἀνω τε καὶ κάτω* Aeschylō Choëph. v. 163.  
Homero Hesiodoque διάκτορος Ἀργειφόντης, quo de eruditissime  
Cl. T. Hemsterhus. in Luciani Contempl. c. 1. WESS.

391. 1. Ἀπαγγελίας] Ἐπαγγελίας M. Vid. L. IV. 1. WESS.

391. 3. Εἰσηγητὴν αὐτὸν καὶ παλαιστρας γενέσθαι] Ἐνα-  
γώνιος, sive τῶν ἀγῶνων προστάτης, ut explicant Schol. Pin-  
dari Pythion. Od. II. 18., hac de caussa Pindaro, Aristoph. Plut.  
v. 1162. Greg. Nazianz. Orat. IV. p. 128. A. Ars ipsa ἐναγώνιος  
Ἐρμοῦ τέχνη Heliodoro Aethiop. X. p. 505., a qua multum discrepat  
Ἐρμοῦ παλαιστρα, in quam Procopium penetrasse prodit  
Choricus Orat. in Procop. c. 4. Intelligit palaestram oratoriam,  
cuius etiam studiosos Ἐρμοῦ ἀθλητὰς nuncupat c. 12. WESS.

391. 4. Καὶ τὴν Ἀπόλλωνος ἀπὸ τῆς χελώνης λύραν ἐπι-  
νοῆσαι] Quænam ista Apollinis testudo? Et quid hic Apollo ne-  
gocii habet cum inventione lyrae Mercurialis? RHOD. Καὶ τὴν  
ἀπὸ τῆς χελώνης etc.] Vocabulum, quod errantis librarii manus  
ex sequentibus huc ingesserat, gradu deieci. Fabula id apud Apol-  
lodor. III. 10. 2. et Lucian. D. D. VII. 4. proscribit, neque scri-  
ptis libris alia mens. WESS.

391. 6. Τιμωρίαν ὑπὲρ τὴν ἀξίαν λαβόντα] Conf. L. III.  
59. WESS.

391. 16. Διασπώμενον ὑπὸ τῶν Τιτάνων] Paulo aliter  
L. III. 62. ubi vide not. atque inprimis L. IV. 4., quibus locis co-  
piously, ut mox ipse significat, proposuit, quæ plurium uniusve  
Bacchi in prisca Graecorum Theologia cerimonias spectant. WESS.

391. 22. Διονυσιάδας ἀφ' ἑαυτοῦ προσσηγόρευσεν] Alii  
de his insulis et gemellis sinibus dixerint: mihi res obscura. Quæ  
enim diligentissimus Christoph. Cellarius L. II. Geogr. Ant. 14.  
p. 1278. commentatur: — *Tabula Peutingerana ad orientalem  
partem Cretæ duas insulas habet, quarum alteri adscriptum  
Dionisa, alteri Dionis. Sine dubio scripturae forma breviata.  
Hæc sunt insulae Dionysiades dictæ, de quibus Diodorus Sicu-  
lus., ea speciem habent, dubio non exemtam. Nam Dionisa Ta-  
bulæ eius Mycono proxime iungitur, potestque adeo Donysa esse.  
Altera tamen Dionis, nisi Dia sit Ptolemæi, quod suspicor, haud  
male cum Dionysiadibus conponetur.* WESS.

391. 26. Τοῦ γεννηθέντος περὶ τὴν Ἀργεῖαν ἔξ Ἀλκιμήρης] Facit Codd. quorundam auctoritas τὰ περὶ τὴν Ἀργεῖαν suspecta: quae et abesse sine detrimento possent, modo liqueret, Cretenses Herculis natales, ut Plautus Amphitruon. II. 2. 45., Thebis tribuisse. Auctor ipse L. IV. 10. Tyrinthe procreatum perhibet. WESS.

392. 34. Τὸν δ' ἔξ Ἀλκιμήρης Ἡρακλέα etc.] Confer L. III. 73. Μοχ καὶ χρόνιον ἐγγενομένων, quum iam multum temporis elapsum erat. Sic Aeschines in Ctesiph. p. 85. χρόνων ἐγγεγενημένων ἐν οἷς ὑπ' ἐμοῦ φανερώς ἐξηλέγχου. Plato Phaedon. p. 86. D. ἵνα χρόνου ἐγγενομένου βουλευσώμεθα. Demosthen. adv. Euerg. p. 641. καὶ χρόνος ἐγγένηται. Aelian. de Animal. IV. 35. καὶ διαστήματος ἐγγενομένου. Iunge Hemsterhusii not. in Luciani D. Mort. VII. 1. WESS.

392. 42. Καὶ πόλιν ὑπ' ἐκείνου κτισθεῖσαν] Κτισθῆναι analogiam habet ad διαμένειν. RHOD. Non intercedam, si cui viri doctissimi iudicium probetur. Quod retinui, ab Hercule conditam in Aegypto urbem durare significat. Et durabat profecto Heracleopolis, de cuius vero apud eam gentem nomine haud tralatitia Cl. Paul. Ern. Iablonski Dissert. VII. de Terra Gosen. Aegyptiorum de Hercule sententias Diodorus exposuit L. I. 24. WESS.

Ibid. Βριτόμαρτιν] Κριτόμαρτιν Ven. Cl. 1. inepte. Simile vitium ex Schol. Euripid. Hippol. v. 146. et S. Clement. Recognit. L. X. 21. Viri docti sustulerunt. WESS.

392. 44. Ἐξ Διὸς καὶ Κάρμης τῆς Εὐβούλου] His gemina scribit Pausan. II. 30. Ogygii Phoenicis filia Carme Poetae in Ciri v. 220. Antonino Liberal. c. 40. et S. Clementi Recognit. X. 21. De Caenone, Καινοῖ, Cretae urbe, eiusque situ nihil explorati habeo: nam de Britomarte ut longum faciam, opus non est, illustrata abunde a Cl. Salmasio in Solin. p. 121. Is. Casaub. ad Strabon. X. p. 733. et Ez. Spanhem. ad Callimachi H. Dian. v. 190. WESS.

392. 49. Τὴν αὐτὴν εἶναι Δίκτυννάν τε καὶ Ἀρτεμιν] Δίκτυννα παῖς Ἀρτεμυς καλὰ in Ran. v. 1402. Aristophan., et passim. Solinus Polyhist. c. 11. Cretes Dianam religiosissime venerari prodidit, Britomartin gentiliter nominantes. quod communiter verum non est. Iurant Latii Cretenses et Olontii τὰν Δατῶν κ' Ἀρτεμιν καὶ Ἀρεα καὶ τὰν Ἀφροδίταν καὶ τὰν Ἐλευσινίαν καὶ τὰν Βριτόμαρτιν, manifesto utramque distinguentes in iurisiurandi formula, quam Antiq. Asiat. p. 136. inseruit Edm. Chishull. WESS.

392. 51. Τοῦς δ' ἱστοροῦντας αὐτὴν ὠνομάσθαι etc.] Princeps hos inter Callimach. H. Dian. v. 190., quem et Strabo refellit, sed alia motus caussa, L. X. p. 733. WESS.

392. 58. Παραδεδομένῳ συμφώνως δικαίαν etc. ἐξηλωκέναι] De omnium in Minois laudibus consensu licet dubitare:

non enim inter veteres deficiebant, quibus *τροαννικὸς καὶ βίαιος καὶ δασμολόγος* videbatur in Strabon. X. p. 730. WESS.

392. 61. *Ἐν Τριπόλῳ τῆς Κρήτης*] Sic debuit. Vulgatum *τριπόδῳ*, quod nec Rhodomanno latuit in Addend., scribentis peccato hinc natum est Iasion rei rusticae studebat, unde Ceres in agro, tertia vice diligenter subacto, *καὶ τρεῖς ἐστραμμένῃ καὶ ἄροτρασμένῃ* Schol. II. Σ, 542., illi se miscuit, et Plutum, i. e. frumentum, procreavit. Eustath. in Homer. p. 1528. ὄθεν καὶ ἡ Δημήτηρ κατὰ τὸν μῦθον ἐφίλει αὐτὸν, ὡς καὶ Ἡσιόδῳ δοκεῖ, καὶ μίγνεται, οὐκ ἐν θαλάμῳ, ἀλλ' ἐν καὶ ΤΡΙΠΟΛΩΙ. Sed praestat ipsum audire Hesiodum Theogon. v. 971.

*Δημήτηρ μὲν Πλοῦτον ἐγένετο, δῖα θεῶων,  
Ἰασίῳ ἤρωϊ μιγείῳ ἔρατῇ φιλότῃτι  
Νειῶ ἐν ΤΡΙΠΟΛΩΙ, Κρήτης ἐν πτόνι δῆμῳ,  
Ἐσθλόν. —*

Quo ego fideiussore, etsi nihil iuvent scripti Codd., *Tripodum*, a Io. Meursio Cretensium urbium numero transcriptam, damnavi. WESS.

392. 67. *Καὶ προσαγορ. Πλοῦτον*] Vide supr. c. 49. WESS.

393. 82. *Καὶ τὴν ἐν Σαμοθράκῃ*] Credo viciniam τῆς *Θράκης* effecisse, ut partem horum librarii negligenter. Nam Samothraciae cerimoniae adaeque in occulto tradebantur ac Eleusinae, sicuti docuit huius libri c. 49., neque adeo sat conmode hinc exulant. Ciconum sacra inavit Virgilius Ciris v. 164.

*Et validum penitus concepit in ossa furorem,  
Saeva velut gelidis Ciconum Bistonis in oris.* WESS.

393. 85. *Ἐξ ἀρχαίων*] Nota ellipsis. *Ἀπ' ἀρχαίων χρόνων* L. I. 3. ἐκ παλαιῶν χρόνων V. 8. φίλος ἀπὸ πολλῶν sive ἐτιῶν seu χρόνων, Lucian. Revivisc. c. 35. Quod genus alias firmavimus copiosius. WESS.

393. 1. *Πλέον*] *Πλέον* Co. similis varietas in Basilio M. T. I. p. 103. C. WESS.

393. 3. *Καὶ Κυθήρειαν καὶ Παφίαν ἔτι δὲ καὶ Συρίαν*] Posidippus Epigrammate eleganti, et, quod sciam, necdum edito, haec Veneri dilecta loca coniungit. Addam ergo:

*Ἄ Κέρον, ἃ τε Κύθηρα, καὶ ἃ Μίλητον ἐποιχνεῖς  
Καὶ καλὸν Συρίας ἱπποκρότου δάπεδον  
Ἔλθοις Ἰλαος Καλλιστίω, ἢ τὸν ἐραστὴν  
Οὐδέποτ' οἰκείων ὤσεν ἀπὸ προθύρων.*

Noli vero aut scriptura Vindobon. libri, aut insulae *Κυθήρων* nomine permoveri, ut *Κυθηρίαν* praeferas. Vulgatum tuetur *Κυθήρειος γάμος* Aeschyl. Suppl. v. 1040. et Hesiodus inprimis Theogon. v. 195.

— — *Τὴν δ' Ἀφροδίτην  
Ἀφρογένειάν τε θεῖαν, καὶ ἔϋστέφανον Κυθήρειαν  
Κικλήσκουσι θεοὶ τε καὶ ἀνέρες, οὐνεκ' ἐν ἀφροῖ  
Θρέφθη ἀτὸρ Κυθήρειαν, ὅτι προσέκνυρε Κυθήροις.*

Nimirum insulam olim *Κόθηρα*, dein *Κόθηρα* nuncuparunt: quo factum, ut Venus, insulae tutelare numen *Κυθέρεια*, *Κυθηρηιάς*, *Κυθέρη* et *Κυθήρη* diceretur. Habet hos eius titulos Manetho, in cuius L. III. 154. legendum:

*Καὶ δ' αὐτοὶ προήξεις Κυθέρης ἀγάπησαν ἀδέσμονος.*

nam quod vulgo editur, *Κυθέρης ἀγάπης ἀναδέσμονος*, id festinanti editori condonamus. WESS.

393. 8. *Καὶ Λύκιον*] Cum Apollo Lyciam obiisse dicatur, perperam haec negliguntur. Virgil. Aen. IV. 143.

*Qualis ubi hibernam Lyciam, Xanthique fluentia*

*Deserit, ac Delum maternam invisit Apollo.*

Neglexisse tamen librarii videntur, quod aliam atque aliam Grammatici caussam adferant, cur Apollo *Λύκιος* sit nuncupatus, in Schol. Aeschyl. VII. C. Theb. v. 147. et in Sophocl. Electram v. 6., quos vide, et Pausan. I. 44. II. 19. WESS.

393. 9. *Καὶ Κρησίαν*] Aequiesco in hac scriptura, quam *Κρησία* *q̄v̄λα* Oppiani I. Cynege. v. 299., et quae viri docti ad Stephanum v. *Κρητή* adscripserunt, citra dubium ponunt. WESS.

394. 11. *Τιμᾶται δὲ καὶ παρὰ τοῖς Πέρσαις* etc.] Explicuit Ezech. Spanhem. ad Callim. H. Dian. v. 37., unde pauca excerpere operae erit. *Insignis insuper*, inquit, *Diodori eam in rem locus L. V. p. 344. Ibi enim Diana non Ephesi solum, sed in Ponto (ubi Προσπίνη, iuxta dictum modo Plutarchum in Lucullo p. 499., Diana culta) et Perside familiariter versata dicitur, unde ΠΕΡΣΙΑΣ etiam (forte ΠΕΡΣΙΚΗΣ, ut apud Pausaniam VII. 6. p. 537. ac in dicto modo veteri numo) appellationem fuerit nacta, ac ubi insuper additur: τιμᾶται δὲ καὶ παρὰ τοῖς ΠΕΡΣΑΙΣ ἢ θεὸς διαφερόντως, καὶ μυστήρια ποιοῦσιν οἱ βάρβαροι τὰ παρ' ἑτέροις συντελούμενα μέχρι τῶν νῦν χρόνων ΑΡΤΕΜΙΣΙ ΠΕΡΣΙΑ (seu ΠΕΡΣΙΚΗ), a PERSIS etiam haec Dea plurimum colitur, eademque mysteria, quae alibi ei peraguntur, etiam barbari ad haec usque tempora in DIANAЕ PERSIAЕ (seu PERSICAE) honorem celebrant. Id quod praeterea adstruit Dianae templum in Elymaide ἐν τῇ Περσίδι, in Perside, idque opulentum adeo ac splendidis omnegenis donariis refertum, sicut de eo dicitur I. Maccab. VI. 2. et a Iosepho ὁ Αἰγ. L. XII. 9. 1. Quae ego magnam partem probō, servato tamen ΠΕΡΣΙΑΣ titulo ob Mss. conspirantem concordiam et Plutarch. Lucull. p. 507. E. βόες ἱεραὶ νέμονται ΠΕΡΣΙΑΣ Ἀρτέμιδος, ἣν μάλιστα θεῶν οἱ πέραν Ἐγγράτου βάρβαροι τιμᾶσι. WESS.*

394. 20. *Καὶ Ραδάμανθυν καὶ Σαρπηδόνα*] Postrema addidi ex Vindobon. libro: nam sedem hanc primitus occupasse, ostendunt cap. seq. verba, *τὸν δὲ τρίτον ἀδελφὸν Σαρπηδόνα* *γασί* etc. ostendunt praeterea scriptores ceteri, qui Iove atque Europa prosemīnatos Minœm, Rhadamanthum et Sarpedona perhibent. WESS.

394. 26. Κνωσσὸν μὲν ἐν τοῖς πρὸς τὴν Ἀσίαν etc.] Eustath. in Homer. p. 312. κῆται δὲ (Κνωσσός) ἀντικρὸν Πελοποννήσου πρόσβορρῶς. Quod tametsi ex Geographo L. X. p. 730. exseripserit, districte verum non arbitrator. Magis enim Asiam ea Cretae ora, quae Cnossus sibi vindicat, spectat, quam Peloponnesum. *Phaestus*, de qua sequitur, mari non accubabat, inde stadiis xx dissepta, ut idem Strabo, qui et a Minoë conditam, aliis diversa opinatis, censet p. 734. WESS.

394. 29. Ἐν τοῖς πρὸς ἐσπέραν κεκλιμένοις τόποις] *Κεκλιμένοις* notatur a Steph. et abest R. C. V. unde scholion esse suspicor: quod tamen non deleo, quia alias ita soleat Diodorus. Vid. superius cap. 41. huius libri. WESS.

394. 32. Συνερχόμενον εἰς λόγους αὐτῶ κατὰ τι σπῆλαιον] Plato in Minoë p. 319. ἐφοῖτα οὖν δι' ἐννάτον ἔτος εἰς τὸ τοῦ Διὸς ἄντρον ὃ Μίνως, τὰ μὲν μαθησόμενος, τὰ δὲ ἀποδειξόμενος, ἃ τῇ προτέρῃ ἐνναετηρίδι παρὰ τοῦ Διὸς (ἐμμεμαθήκει.) Quibus disertissimus philosophorum optime omnium explicat summi poetae Odys. T, 178. ἐννέωρον Διὸς μεγάλου βασιτήν. Philosophi vestigia legit, sicuti adsolet, Maxim. Tyrius Dissert. XL. p. 238., aliis omnia alia secutis, ut ex brevibus in eum poetae locum scholiis nemini non apertum est. Vide Is. Casaub. in Strabon. X. p. 730. WESS.

394. 38. Περὶ ἧς τὰ κατὰ μέρος etc.] Superius L. IV. 81. WESS.

394. 47. Ἐρυθροῦ μὲν ἐν τῶν ἑαυτοῦ παίδων] Erythraei maiores suos venisse referunt σὺν Ἐρυθροῦ τῷ Παδαμάνθῳ ἐκ Κρήτης καὶ οἰκιστὴν τῇ πόλει γενέσθαι τὸν Ἐρυθρόν in Pausaniae L. VII. 3. p. 529., haec Diodori adprime firmantes. Mox ὀνομασθεῖσῶν verum est. Adpellant plerique Ἐρυθρὰς hanc Ioniae urbem, φερεσταγύλους Ἐρυθρὰς Arcestratus in Athen. L. III. p. 112. B. WESS.

394. 49. Οἰνοπίωνι δὲ τῷ — Χίον ἐγγειρίσει] Chius ipsa ab hoc conditore ἔναλος πόλις Οἰνοπίωνος Critiae in Epigrammate apud Athen. I. 22. Genus hominis controversum est. Bacchi ex Ariadna F. perhibetur a Theone ad Arati Phaenom. v. 635. et Criticis in Apollon. Rh. III. 996. At patrem illi Theseum dedit Ion Chius, de patria sua canens

Τὴν ποτε Θεσείδης ἔκτισεν Οἰνοπίων.

in Plut. Thes. p. 9. A. Adde Pausan. VII. 4. et Olearium ad Philostrati Heroic. p. 661., sed plura perperam miscentem. WESS.

395. 53. Θόαντι μὲν Ἀῆμον] Et hic Bacchi ex Ariadna F., si vera est fabula. Hypsipyle quidem certe Ovidii Epist. VI. 114. *En ego Minoo nata Thoante feror. Bacchus avus.* — Qui sequuntur Egeus sive Engyeus et Pamphilus mihi parum sunt cogniti: *Euambeis* sive *Euameis* cognomen pravum arbitrator, atque ex *Εὐάνθει* natum, quem eodem Baccho genitum per-



hibent in Schol. ad Apollon. Rh. III. 996., patrem autem Maronis, unde Maroneae urbi nomen, apud Philostr. Heroic. II. 8. p. 680. atque Eustath. in Homer. p. 1623. WESS. Pamphilo sive Pamphylo Staphylum substituit ex Scymno v. 580. Heynius Comment. Gotting. nov. vol. II. p. 74., Egyeo Enyeum ex Homeri II. IX. 668. Muellerus de Orchomeno p. 304.

395. 54. Ἐγγεῖ Κέρον] Ἐγγεῖ lego. At neque *Εὐάμει*, neque *Εὐάμβεῖ*, utrumque ab etymologiis Graecis nimium recedens, probatur. Marginale tamen interim admisi. RHOD.

395. 55. Ἀνίω δὲ Ἰήλον] Anius est, de quo superius c. 62. Conditor autem Andri Stephano v. Ἀνδρός, et Cononi Narr. XLI. Ἀνδρός. Faciunt cum Diodoro Delphi, Andriorum οἰκιστὴν Ἀνδρεία vocantes in Pausan. X. 13. WESS.

395. 59. Διαρρίψαν τοὺς εὐσεβεῖς καὶ τοὺς ποτηροὺς] Sic scripsisse, nemo prudens dubitabit. Minoem apud inferos iudicem describit poeta Od. A, 568. et Plato Georg. p. 524. A. WESS.

395. 63. Τοὺς περὶ Ἀνκίαν τόπους] Conf. Herodot. I. 173. Apollodor. III. I. 2. et Strabon. L. XII. p. 858. WESS.

395. 65. Καὶ γήματα Διὶδάμειαν τὴν Βελλεροφόντου] Homerus II. Z, 197. Διοδάμειαν adpellat, Hippodamiam Auctor Recognit. S. Clement. L. X. 21. Iam quod additur de eius filio Sarpedone, τὸν ἐπὶ Τροίαν μὲν στρατεύσαντα μετ' Ἀγαμέμνονος, qui cum Agamemnone Troianis arma intulit, id vero falsum est. Sarpedon enim auxilio Troianis fuit et in Graecos pugnavit, docente poeta II. E, 644. Quare, nisi error is sit auctoris, mallem τὸν ἐπὶ Τροία μὲν στρατεύσαντα κατ' Ἀγαμέμνονος, qui ad Troiam contra Agamemnonem stetit. WESS.

395. 71. Ἐνεήκοντα] Recte scholion ὀγδοήκοντα restituit ex Homero Iliad. B, 652. RHOD.

395. 74. Ἐπιγραψὴν ἔχοντα τοιάυδε] Hoc unde acceperit, nescio. Distichon quidem certe Aristotelis est, eius ex Peplo sumptum, atque ab H. Stephano Anthologiae libris ex Cod. Mediceo adiunctum. Legitur ibi ὄρῳς τάφου, satis eleganter, tum αὐτὰρ ἐγὼ τοῦ, quod hinc corrigendum. WESS.

395. 84. Οἱ προσαγορευθέντες μὲν Ἐτεοκροῆτες] Superius c. 64. WESS.

395. 90. Ἐκχόνου Δώρου] E p. 183. restitue pro ἐκχόνου, τοῦ Δώρου, distinguendo post Τεττάμον. Si modo non verior est altera lectio, quae et supra recipi se petivit, Τεκτάμον. RHOD. Ἐχονμένου Τεκτάμον τοῦ Δώρου] Sic praestat. Favent scripti Codd., leviter adiuti, et auctor ipse L. IV. 60., Tectamum Dori F. Pelasgis et Aeolensibus, in Cretam pergentibus, ducem inponens. Accedit et Andron apud Steph. v. Δωρίον, cuius verba, male ab interpretibus habita, addenda sunt: Κρητὸς ἐν τῇ νήσῳ βασιλεύοντος, Τεκταμιον τὸν Δώρον τοῦ Ἑλλήνος, ὀρμήσαντα ἐκ τῆς ἐν Θειταλία, τότε μὲν Δωρίδος, νῦν δὲ Ἰστιαιώτιδος

καλονμένης, ἀφικέσθαι εἰς Κρήτην μετὰ Δωριέων τε καὶ Ἀχαιῶν καὶ Πελασγῶν. Ita scripserat. Τέκσαρον, sive Τέκταρον, quod in Coislin. Mss. invenit diligentissimus Montfauconius, manifesto pravum est: nec melius, quod inde extuderunt Pinedo et Berkelius, Κέρσαρον, qui Dori filius non fuit. Id praeterea liquet ex Androne, de colonis, quorum dux Tectamus, deque loco, unde in Cretam solverint, alia atque alia fuisse tradita. Junge Strabonem L. V. p. 338. A. WESS.

396. 99. Ὑπὸ μίαν ἀγαγεῖν συντέλειαν] Frequens ἄγειν εἰς μίαν συντέλειαν et τάττειν ὑπὸ μίαν συντέλειαν huic scriptori, cum plures civitates et gentes in eandem rediguntur societatis communionem. Vid. XI. 87. XV. 38. ubi fortasse plura. Hic autem τὰ κατὰ τὴν etc. malle. WESS.

396. 3. Νήσους ἔκτισαν — πόλεις τινὰς ᾤκισαν] Si quid video, manifestum est, duo verba hic commutata, et alterum in alterius locum perperam esse translata; ἔκτισαν scilicet et ᾤκισαν. Legendum nempe, ut mihi quidem videtur: ἄλλας τέ τινας νήσους ᾤκισαν, καὶ ταύτας τὰς νήσους (Cretam et quae Cretensium erant) κατακτησάμενοι, πόλεις τινὰς ἔκτισαν ἐν αὐταῖς, in alias quasdam insulas deposuerunt colonos, et has insulas nacti, aliquas in iis condiderunt urbes. Scio quid in observationibus suis L. III. 9. olim animadverterit vir Amplissimus, Gisb. Cuperus; scilicet dici etiam κτίζειν νήσους loco τοῦ οἰκίζειν, uti et condere de integris regionibus et populis. Recte; sed putem tamen hunc locum Nostri (qui caeteroquin ei, quod vir Amplissimus ibi observat, admodum foret opportunus) ita restituendum, ut proposui. Sin; pro ᾤκισαν legendum ἔκτισαν. Alterum tamen meo iudicio rectius. Hactenus Io. Iensius Epist. ad Io. G. Graevium p. 420., cui cur adstipuler, nihil caussae reperio. Κτίζειν νήσους optimus quisque de colonis dixit in insulas missis, urbibusque conditis. Herodotus L. VI. 47. οἱ μετὰ Θάσσαν ΚΤΙΣΑΝΤΕΣ τὴν νῆσον ταύτην. Noster superius c. 75. ὅτι περὶ τὴν Κρήτην δύο νήσους ΚΤΙΣΑΣ. et L. XIV. 13. Παρὶ ΕΚΤΙΣΑΝ ἐν αὐτῷ (sinu Adriatico) νῆσον τὴν ὀνομαζομένην Φάρον. Probarunt et Latini. Velleius I. 2. Tyria classis insulam circumfusam Oceano, perexiguo a continente divisam freto, Gades condidit. Alia de hoc genere dedi L. II. Observat. c. 15. WESS.

396. 10. Ἄ μὲν Ἐπιμενίδη τῷ Θεολόγῳ] Tribuuntur illi a Diogene Laërtio I. 112. Κορηίων καὶ Κορυβαίων γένεσις καὶ Θεογονία et περὶ τῆς ἐν Κρήτῃ πολιτείας. Utrumque opus in consilium Diodorus adhibere potuit. Dosiades et Sosicrates scripserunt Κορητιὰ a Plinio, Athenaeo atque aliis, uti Io. G. Vossius et Io. Meursius monuerunt, citata. Laosthenidam, qui fortasse in eodem genere operam posuit, adhuc quaero. WESS.

396. 17. Ξάνθος ὁ Τριόπον τῶν ἐξ Ἀργοῦς Πελασγῶν etc.]

Habet *Xanthum*, urbis in Lycia cognominis conditorem, Stephanus, sed domo Aegyptium aut Cretensem. Pelasgos in Lesbum transiisse, testis Strabo L. XIII. p. 922. C., insulamque *Πελασγίαν* adpellatam Eustath. in Homer. p. 741. et Plinius L. V. 31. WESS.

396. 23. Τὸ προτοῦ καλουμένην Ἴσσαν] Recte Reg. liber.

Erat Issa urbium Lesbi una. Stephan. Ἴσσα, πόλις ἐν Λέσβῳ, κληθεῖσα Ἰμέρα, εἶτα Πελασγία καὶ Ἴσσα, ἀπὸ τῆς Ἴσσης τῆς Μάζαρος. qui cum omnia haec cognomina urbi Issae imponit, notam conmeruit. Insulae erant, non unius urbis. Eustath. I. c. Ἐπι ἰστέον καὶ ὅτι Ἰμερτὴ καὶ Πελασγία ἢ αὐτὴ Λέσβος ἐκλήθη ποτέ. καὶ ἐπι ὡσπερ Λέσβος, οὕτω καὶ Ἴσσα ἢ αὐτὴ νῆσος ἐκ μιᾶς τῶν περὶ αὐτὴν πέντε πόλεων, ὡς καὶ Ἀνδόρων ἐμφαίνει. Fallor itaque, aut scripsit κληθεῖση Ἰμερτῆ, εἶτα Πελασγία καὶ Ἴσση. Debuerat quidem certe, ut Lesbo titulos relinqueret, a Plinio illi non negatos. Lycophronis, quem Thessalonicensis praesul respexit, versus Alexandr. est 220., cui iungendus Strabo L. I. p. 103. B. WESS.

397. 29. Μαζαρεὺς τῶς μὲν Κριάζου τοῦ Διὸς] Genus

*Macarei* sive *Macaris* in controversiam venit. Superius c. 47. Macar, ex Heliadis unus, in Lesbum devenisse perhibetur. Dionysius vero Ant. Rom. L. I. p. 15. Pelasgos in Lesbum insulam transiisse ait, inmixtos τοῖς ἐκ τῆς Ἑλλάδος στέλλουσι τὴν πρώτην ἀποικίαν εἰς αὐτὴν, ἄγοντος Μάζαρος τοῦ Κριασίου. Corrigit viri docti τοῦ Κριασίου, ut Criasi sit filius, Argi nepos, Iovis pronepos, ex Apollodoro II. I. Ego vero, cum colonia Deucalione sit posterior multis annis, si Diodoro fides, mallem τοῦ Κριάζου, praesertim quum hunc patrem Macari quoque dederit Schol. Homeri II. Ω, 554., a Ios. Barnesio nullo iure mutatus. Putem quoque *Κριάζου* nomen reddendum esse Straboni L. VII. p. 495. A. De Macare plura Clemens Alexandrinus Protrept. p. 27. WESS.

397. 31. Ἐν Ὠλένῳ τῆς τότε μὲν Ἰάδος] Pausaniam vide

L. VII. 18. WESS.

397. 39. Λέσβος ὁ Αἰπίθου] Marginis notatio ὁ Αἰόλου,

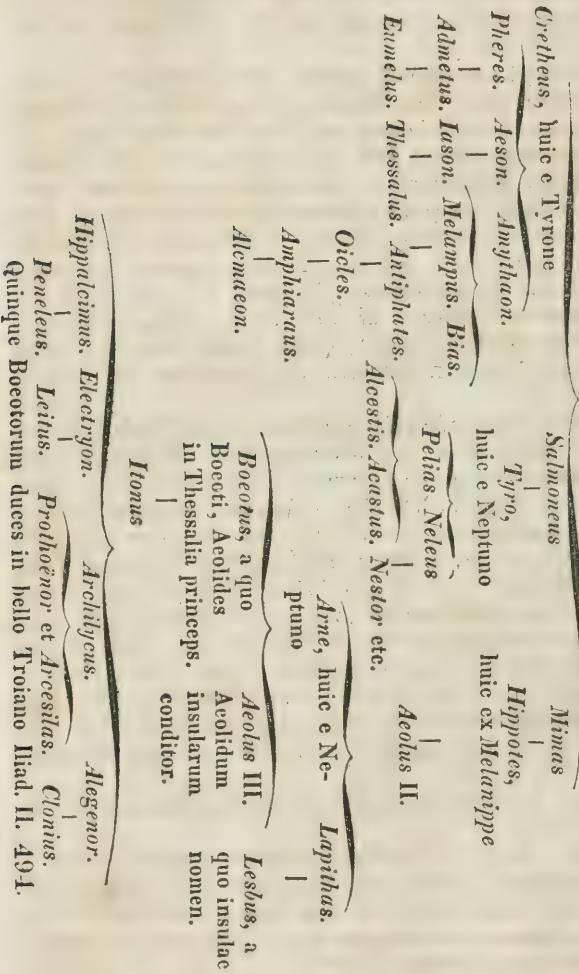
τοῦ Αἰπίθου habet. Ut autem discerni possit, utra lectio γνησία sit, totam Aeolidarum seriem ex ultima origine repetitam, ut quidem a Diodoro libro superiori c. 69. et hoc praesenti loco recensetur, in tabula proponemus.

I A P E T I F. P R O M E T H E U S.

*Dencalion*, cuius tempore diluvium in Thessalia fuit, Ovid. Met. I.

*Hellen*, a quo Phthiotæ primum, deinde Græci universi Ἑλλήτες nuncupati. Quod tamen verisimiliore coniectura quidam ab Elisa Iavanis F., neque Iapheti deducunt: unde etiam *Aeoles* et ipse *Aeolus* nomen habere censetur.

*Aeolus*, a quo *Aeolis* dicta.



Ex hac igitur delineatione perspicuum fit, nullum esse Aeolum o Lapitha procreatum, sed Lapithen Aeolo secundo progenitum. A quo diversus est ille, cuius supra fit mentio L. IV. 71. Apollini ex Stilbe Nympha susceptus et stirps Lapitharum. RHOD.

397. 42. *Τὴν θυγατέρα τοῦ Μαζαρέως Μήθυμναν*] Habet hanc Macarei sive Mearis filiam sicuti et Mytilenen Stephan., sed qui Methymnae maritum dat *Lepethymnum*: sic enim verissime correxit Th. Galaeus ad Parthenii Erot. c. 21. Urbis utriusque nomen et *Μεθύμνην*, uti in Athenaei L. X. p. 466. et *Μυτιλήμνην* subinde scribi dixi superius et ad Hieroclis Synecdem. p. 686. WESS.

398. 53. *Τοῦτην δὲ τὴν Κῶν κατοικήσας*] Verius est *κατοικήσας*, quod et Cl. Io. Insensio in opinionem venit Epist. ad Graev. extrema. Insulam Co, misso in eam Neandro, colonis deductis frequentavit Macareus. Vitium peperit librariorum negligentia, *κατοικήσεν* et *κατοικήειν*, eiusdemque originis alia confundere aduetorum. WESS.

398. 63. *Καὶ λοιμικὴ κατάστασις ἐπέχε τὰς πόλεις*] Sic L. XIII. 12. *λοιμικῆς καταστάσεως εἰς τὸ στρατόπεδον ἐμπεσοῦσης*. et XIV. 41. *Carthaginienses λοιμικῆ καταστάσει περιεσόντας*. Pro quibus paullo diversiore modo L. XII. 45. Athenienses *ἐπέπεσον εἰς λοιμικὴν περίστασιν*. Quae, ut plura alia, debet Polybianae imitationi. Illi enim scriptori *λοιμικὴ κατάστασις* et *λοιμικὴ διάθεσις* de lue, quae ex corrupto aere homines incessit, familiaris. Vide Polyb. I. 19. II. 20. 31. et Casaub. in Strabon. III. p. 214. ex Nostro hanc dictionem illustrantem. WESS.

398. 68. *Αὐὸ καὶ Μαζάρων ὠρομάσθησαν νῆσοι*] De hisdem his insulis, quas quondam dici putavere *Μαζάρων*, sive quod fortunati admodum coeli solique sunt, sive quod eas suo suorumque regno *Macar* occupaverat, scribit Mela II. 7. Fortasse hunc titulum abstulerunt ex Homero II. Ω, 544. ubi olim *Μαζάρων ἔδος* legebatur, ut ex Iuliani Orat. II. p. 73. D. et Dione Chrysost. Orat. XXXIII. p. 399. D. constat. Alibi vero *μαζάρων νήσους* ab aliis collocari notum ex Strabone est L. I. p. 5. et quae ibi vir magnus. WESS.

398. 85. *Τέρρης ἦν εἶδος μὲν Κέζρον*] *Τέρρης* Strabonί L. VIII. p. 584. Plut. Quaest. Graec. p. 297. D. Scholiastae Hom. II. Ω, 544., ex quo *Τέρρον ἔδος* in Stephano v. *Τέρροδος*, quod et Salmasius vidit, restituendum, aliisque. Vide Sylburg. in Pausan. X. 14. et Davisium ad Ciceron. de Nat. D. III. 15. Urbs, cui Cyenus imperavit, *αἱ Κολῶραι* in Strabon. XIII. p. 901. Pausania I. c. et infra L. XIV. 38. WESS. Heraclid. in Polit. Suid. in *Τέρρης*, Apost. c. 18. p. 78. Eras. Chil. I. c. 9. p. 28., Chil. 2. c. 5. p. 90. REINES.

398. 89. *Κατελάβετο νῆσον ἔρημον οὔσαν*] Postremam vocem iussu veterum Codd. addidi. Sic c. 82. *περικυβητὴς εἰς τὴν Λέσβον ἔρημον οὔσαν*, saepeque alias. *Λέζορον* au-

tem primitus dictam Tenedum fuisse consentiunt scriptores. Hesychius *Λένδορος*, ἢ *Τένεδος τὸ πάλαι*. Adde Plinium L. V. 31. et Conon. Narrat. XXIX. WESS.

399. 2. *Τέννην εἰς λάδρακα ἐνθέντα καταποντίσαι*] Fabulam praeter Pausaniam et Cononem proposuerunt Critici ad Iliad. A, 38. WESS.

399. 7. *Ἀλλητοῦ τινὸς ψευδῶς καταμαρτυρήσαντος*] *Μοῖρο* homini nomen erat, qui hoc periurio effecit, ut *Τενέδιος ἀλλητῆς* in proverbium abiret ἐπὶ τῶν τὰ ψευδῆ μαρτυρούντων, docente Stephano in *Τένεδος*. Eundem respicit Lycophron Alexandr. v. 234., sed praeter ceteros Plutarchus Q. Graec. p. 297., ubi in caussas inquirat, cur et tibicini interdictum sit aditu in Tennis templum, nefasque habeatur Achillis ibi nomen memorare, consentiens adprime Diodoro. WESS.

399. 22. *Τῶν δὲ Κνκλ. νήσων τὰς πλείους κατώκισε*] Sic ex vetustis libris refinxī. Voces *ἐρήμων οὐσῶν* nimia solertia ex superioribus huc ingesserant librarii. WESS.

399. 25. *Ἀλλὰ καὶ κατὰ τὴν Ἀσίαν*] Idem ἀλλὰ καὶ hoc quidem loco atque *imo vero*, sicuti L. XIII. 94. Potuisset *διόπερ οὐ μόνον ἐν ταῖς νήσοις, ἀλλὰ καί*. Sed hoc arbitrarium. Suspicio autem ea, quae statim succedunt, non omnia esse Diodori, sed intempestiva aliorum opera mire interpolata: cuius opinionis caussas habeo, tum quod bonae notae Codd. haec desint universa, tum etiam quod Rhadamanthum, Erythrum atque Oenopionem quae spectant, ipse uberius explicuerat non multo ante c. 79. Hoc amplius, ait sese de minoribus insulis, quae inter Cyclades censebantur, dicturum, et vix unam atque alteram enumerat: quae sane parum cohaerent. WESS.

399. 26. *Καὶ Μίνωαι καλούμεναι*] Corrigit in Addend. *Μίνωαι καλοῦνται* Rhodom., quod probari posset, nisi fortasse intelligerentur loca, quibus *Μινώων* fuit cognomen: cuiusmodi plura per Siciliam Graeciamque a Geographis memorantur. WESS.

399. 32. *Εἰς τὰς νήσους — κειμένας*] Idem vir Clariss. malebat *ἐν ταῖς νήσοις — ταῖς κειμέναις*: quo non opus est. Frequens enim haec praepositionis enallage. Sic L. XIII. 12. *ἢ καθημένους εἰς Σικελίαν*. S. Lucas A. A. VIII. 40. *εὐρέθη εἰς Ἄζωτον*. Vide superius L. III. 44. et Sylburg. Praef. in Pausan. p. 932. WESS.

399. 38. *Ἐθαλαττοκράτησαν*] Vetus scriptor apud Suidam v. *Κρήσσιος*, *Τὸς Κῆρας θαλαττοκρατῆσαι λέγεται μετὰ Μίνω τὸν Κρήσσιον*. de quo maris eorum imperio Is. Casaubonus in Polyb. p. 194. ed. Gronov., et Noster superius c. 53. WESS.

400. 43. *Καὶ τοὺς βαρβάρους Κῆρας ἔξ αὐτῶν ἐκπεσεῖν*] Contigisse id circa migrationis Ionicae tempus ex Strabone L. XIV. p. 938. et Pausania L. VII. 2. novimus. WESS.

## A N N O T A T I O N E S

I N

## L I B R U M U N D E C I M U M.

401. 20. *Πρὸς Αἰζολανοῦς*] *Hic Sæcolanōs* habent omnes nostri codices: at in loco, qui est p. 263. *Αἰζολανοῦς*, quam scripturam hic reposui, utpote et aliorum scriptorum testimonio comprobata. STEPH. Dicam L. XI. 40. WESS.

402. 40. *Τὴν ἀπὸ Γέλωνος βασιλείαν*] Cuius Gelo conditor fuerat, sed quam cum maxime administrabat Thrasybulus, L. XI. 68. WESS.

402. 44. *Τῶν Αἰγυπτίων ἀπὸ Περσῶν*] Mendum satis erat crassum *Ἰαπύγων* pro *Αἰγυπτίων*, ut bene Rhodom. Vid. L. XI. 71. WESS.

402. 51. *Κεφαλληνίαν*] *Κεφαληνίαν* R. 2. Vid. L. XI. 83. WESS.

402. 52. *Ἐγεσταλοῖς*] *Αἰγεσταλοῖς* R. 2. Conf. L. IV. 23. WESS.

402. 57. *Περὶ τῶν ἐν Σικελίᾳ Παλιζῶν*] Scribendum esse *Παλιζῶν*, loco *Πεταλικῶν* idem Rhodom. [animadvertit. Res aperta est ex L. XI. 88. WESS.

403. 14. *Σπόριον Κάσσιον καὶ Πρ. Οὐεργήτιον Τριχοστον*] Quos Romanorum Fastos cum Olympiadum annis Diodorus commiserit, non nisi conclusione quadam conficitur. Non respondent Capitolinis, nec Catonianis, nedum Varronianis. Et his quidem sexennio plerumque sunt contractiores: quo spatio cum Fasti Fabiani a Varronianis abierint, haud prorsus a vero abludivit, Fabium Pictorem, antiquissimum Romanarum rerum scriptorem, in his sese Diodoro ducem dedisse. Exemplo res erit apertior. Consules Sp. Cassius Viscellinus III. et Proculus Virginii Tricostus auspicati sunt annum U. C. Varronianum CCLXVIII., qui in Fastis Fabianis CCLXII. Annus ab U. C. Fabianorum Annalium CCLXVIII., iisdem Coss. insignis, respondet Olymp. LXXV. anno I., cui in Fastis Varronianis convenit annus a Palilibus CCLXXIV. Hactenus ergo bene. Verum Diodorus in eo genere non perseveravit constanter.

Ut enim alios in manus sumsit, quos exciperet, eorundem quoque Fastos adscivit: usus etiam Fabianorum excerptis non admodum fidelibus. Hinc illa diversitas, quam suo quamque loco signabimus. Vide interea D. Petavium L. IX. D. T. cap. 55. et H. Dodwellum Diss. X. de Cycl. sect. 73. Dionysius, Catonem secutus, principio L. IX. Ant. Rom. Olymp. LXXV. annum 1., quo Athenis Calliades Archon fuit, componit cum Coss. K. Fabio Vibulano II., et Sp. Furio Fusio, qui anno Varroniano CCLXXIII. nomen deleverunt. WESS.

403. 17. Ἀστύλος Συρακούσιος] Vero nomine Ἀστύλος fuit, domo Crotoniates, inde Ἀστύλος Κροτωνιάτης anno 1. Olymp. LXXIII., Dionysio principio L. VIII. Ant. Rom. Sequentibus duabus, tribus enim victor decessit, Syracusanum se inscripsit, ut Hieronis Syracusani gratiam demereretur, teste Pausania L. VI. 13. Necdum autem ultimam hanc victoriam Astylus reportaverat, cum Xerxes expeditionem in Graecos susceperet. Celebrabatur Olympias sub id tempus, quo Leonidas ceterique Graecorum Thermopylas occupatum perrexerunt, docente Herodoto VII. 206. Quare ea, quae hic traduntur, exeunte anno quarto Olymp. LXXIV. geri coepta sunt, continuataque Olymp. LXXV. 1., quando et ad Thermopylas et ad Salamina pugnatum acerrime. WESS.

403. 26. Τοὺς Ἑλληνας ἀναστάτους ποιῆσαι] Sic c. 29. οὐδέμιν τῶν ἀγωνισαμένων πόλεων ἀνάστατον ποιήσω. et L. XIV. 35. δέομαι μὴ περιθεῖν αὐτὰς ἐπὶ τῶν βαρβάρων γινόμενας ἀναστάτους. Isocrates Panegyri. p. 69. τῆς μὲν τοὺς βαρβάρους ἀναστάτους ποιήσεως. passimque alii. WESS.

404. 40. Ναῦς δὲ διακοσίας] Atqui inferius cap. 20. ναῦς μυριάς πλείους τῶν διαχιλίων hoc bello armasse dicuntur: quo loco cum diligentius exsequatur, quae hanc eorum expeditionem spectant, praestat et hic ναῦς δὲ διαχιλίας naves bis mille legere. Vidit librariorum hoc peccatum Cel. Barbeyracius Histor. Foeder. et Pacto. P. I. p. 88. WESS.

404. 43. Ὅσον καὶ τῷ πλήθει — ἐπεσῆχε] Ὅσον καὶ R. I. quod amplectere, si lubet. Vide tamen Longi Pastor. L. III. p. 118. WESS.

404. 49. Ὁμοίως δὲ τοῖς Καρχηδ. — παρασκευασμένος] Nihil ex vulgato inmutassem, nisi Codd. exemplum mihi praebuissent. Quod sequor, paullo cultius videtur. Verum aliud est, neglectui haud habendum. Lysias continuos decem annos belli adparatu consumptos affirmat: δεκάτω ἔτι παρασκευασμένος inquit Orat. Parent. c. 9. Lysiam sequitur Iulianus Orat. I. p. 42. C. Id vero falsissimum erit, nisi eos Oratores et illorum annorum rat onem habuisse censeas, quos Xerxis pater Darius post pugnam Marathoniam instaurandis copiis contriverat, ut Athenienses Graecosque omnes ulcisceretur. D. Petavium hoc modo Iuliano succur-



rit. Alia alii sunt commenti, quae Ezech. Spanhemius ad eam Orat. p. 278. examinat. WESS.

404. 58. Ἐμεσολαβήθη τελευτήσας ] Frequentius hoc genus uno in Diodoro reperies, quam quidem apud omnes alios. Μεσολαβεῖν usurpant et de rebus, quae intercipiuntur, et quae impediuntur. De epistolis, quae aliorum dolo intervertuntur, τῶν δὲ ἐπιστολιῶν μεσολαβηθεισῶν Chrysermus in Io. Stobaei Florileg. Tit. XXXIX. p. 228. Abrahamum iam iam manus filio admoturum voce sua praepediens Deus O. M. ὁ σωτήρ θεὸς ἐν ἀέρος φωνῇ μεσολαβήσας τὸ ἔργον Philoni Iud. de Abrah. p. 374. D. Imo medici, cum profluvium sanguinis, e venis erumpentis, conpescunt, τῶν γλεβῶν μεσολαβοῦσι τὴν ἔκρυσιν Timagorac apud Stob. Floril. Tit. XCVIII. p. 541. Hinc qui alium interpellat et interfatur, ut μεσολαβήσας ὁ Μάρκος et μεσολαβήσας τὸν Παρμενίωνα apud Polyb. XVI. 19. et XVII. 32. Hinc porro prono cursu ad vitam decurritur, cum, interveniente fatali die, abrumpitur. Sic Noster L. XII. 29. μεσολαβηθεῖς δὲ νόσω τὸν βίον κατέστρεψε. et L. I. 3. μεσολαβηθέντες τὸν βίον ὑπὸ τῆς πεπωμένης, quod recurrit L. XVI. 1. et apud Suidam v. Μεσολαβηθεῖς, ex ipso, ut suspicor, Diodoro. Atque haec sufficiant de verbo, paullo neglectius a Lexicorum conditoribus habito. WESS.

404. 67. Καὶ τοὺς Ἕλληνας αἰτεῖν ὕδωρ καὶ γῆν ] Sollemnem deditionem apud Persas formulam hoc Diodori loco illustrat Barnab. Brisson. de Regn. Pers. L. III. p. 733., cui adde Io. Freinsheim. in Curtii L. III. 10. 8. WESS.

404. 69. Διασκάψαι δὲ τὸν Ἄθω ] Sic scriptorum plerique. Τὸν Ἄθω Herodotus, quem de hac perfossione vide L. VII. 23. et Ioseph. Wasse in Thucyd. L. V. 3. WESS.

405. 78. Ἠγεῖτο δὲ τῶν μὲν Λακεδαιμονίων Συνεῖος ] Rectius marginale Συνετός. RHOD. Ἠγεῖτο δὲ τῶν μὲν Λακεδ. Συνετός ] Id recepi, quoniam propius abest a vero hominis nomine. Adpellabatur Ἐδαινετος, ut ex Herodoto VII. 173. videbis. WESS.

405. 82. Τὰς Ἑλληνίδας πόλεις περιλαβεῖν ταῖς προκυλακαῖς ] Procurbitores intellige, quibus Graeci nominis civitates incingere, ne hostis ingrueret, destinabant. Passim alioqui προκυλακαὶ exubiae, quae pro urbibus aut castris in statione sunt, ut L. XIII. 72. XIV. 75. XV. 43. WESS.

405. 92. Καὶ Μιλήσιοι ] Valde dubito, an sit genuinum. Quid si Μηλιεῖς; Hi enim gentibus hic recitatis sunt vicini, Strabo L. I. p. 50. Forte Μηλήσιοι scripsit, ut et cap. 4. RHOD. in Add. Καὶ Μιλήσιοι ] Hoc pravum, nec melius Rhodom. Μηλήσιοι. Scripserat καὶ Μηλιεῖς, quod vellem retinuis settenacius Rhodom., neque Palmerio latuit. Firmat ipse L. XII. 77. Αἰνιῶνες καὶ Ἰόλοπες καὶ Μηλιεῖς, eodem ordine recensens. Meliosii cum ceteris Ionibus Persarum regi parabant. Melienses eidem aquam et terram dederunt, teste Herodoto VII. 132., tandemque in eius partes transie-

runt aperte. Nimirum saepe librariis fato quodam evenit, ut *Μηλιεῖς* et *Μηλίους* in *Μιλησίους* converterent. *Μιαγόρας* ὁ *Μιλήσιος* est in Plutarcho de Placit. Philosoph. I. 7., qui citra omne dubium fuit *Μιήλιος*. Simili errore apud Pausaniam L. V. 23. ex insulanis, qui cum Graecis ad Plataeas contra Persas steterunt, fuisse perhibentur *Χῖοι καὶ Μιλήσιοι*, quorum Milesii neque insulani neque Graecorum eo bello socii. Dederat ipse καὶ *Μιήλιοι*, quod Herodotus ratum habet L. VIII. 46. Vide mox c. 4. WESS.

405. 95. *Ἀχαιοὶ τε καὶ Φθιώται*] Mallem longissime hinc abessent voces, quae Achaeos et Phthiotas distinguunt. Achaei enim omnes Phthiotae dicebantur. *Ἀχαιοὶ δ' ἐκαλοῦντο οἱ Φθιώται πάντες* Strabo inquit L. IX. p. 662., quare *Φθιώται Ἀχαιοὶ* eiusdem L. p. 657. *Phthiotae Achaei* Livio L. XXXVI. 15. et Nestro L. XV. 80., regioque ipsa *Ἀχαιὰ Φθιώτις* superius L. V. 50. Recurrunt tamen *Ἀχαιοὶ καὶ Φθιώται* L. XVI. 29. et *Ἀχαιῶν οἱ Φθιώται* L. XVIII. 11. WESS.

405. 99. *Δεκατεῦσαι τοῖς θεοῖς*] Herodotus *δεκατεῦσαι τῷ ἐν Δελφοῖσι θεῷ* L. VII. 132. sive *τῷ Πυθίῳ*, ut vetus Auctor apud Suidam v. *Δεκατεῦσαι*. Cum Diodoro conspirat Polybius, in solos tamen id Thebanos constitutum fuisse innuens, *ἐψηφίσαντο δεκατεῦσαι τοῖς θεοῖς, κρατήσαντες τῷ πολέμῳ τῶν βαρβάρων* L. IX. 39. WESS.

405. 4. *Καραδοκοῦντες τὸ τοῦ πολέμου τέλος*] Similis ingenii homines *καρδοκοῦντες τὴν ῥοπὴν τοῦ πολέμου* habebis L. XVII. 80. De Corcyraeis Herodotus L. VII. 168. *καρδοκοῦντες καὶ οὗτοι τὸν πόλεμον, ἧ πεσέεται*. quod imitatur Noster cap. 15. Anxie itaque observabant, quis belli successus esset futurus, ut victori ex usu suo sese adiungerent. WESS.

405. 5. *Ἀργεῖοι δὲ πρόσβεις ἀποστείλαντες*] Herodot. VII. 148. vide. WESS.

406. 31. *Μυριάδες πλείους τῶν ὀγδοήκοντα*] Inferius c. 11. ad Thermopylas *ἐκατὸν μυριάδας* in Graecorum quingentos pugnasse refert. Quo tempore ingenti Thracum, Thessalorum, aliorumque accessione exercitus erat adauctus, ut cap. 5. docebitur. Alioqui cognitissimum est, et declaravit ad Nepotis Themist. c. 2. doctissimus Bosius, magnam esse veterum scriptorum in numero terrestrium copiarum discordiam. WESS.

406. 32. *Πλείους τῶν χιλίων καὶ διακοσίων*] Supra mille ducentae erant et septem, testibus Herodoto VII. 89. et Aeschylo Pers. v. 341., ubi de aliorum hoc in genere dissensu copiose Stantleius. Ipse vero navium, qui succedit et in multis ab Herodoto dissidet, catalogus numerum mille et ducentarum rotundat. Habet etiam, quod inprobes. Dat Graecis naves cccxx. Ad ipsam autem descriptionem ubi deveneris, non ultra cccx consummabis. Quare aut *Ἑλληνίδες τριακόσται καὶ δέκα* fuit olim, aut vitium in earum

navium numero inolevit, quas aut Dores, aut Aeoles Asiani, aut Graecorum alii armarunt. WESS.

406. 34. Τὰ μὲν πλήρώματα τῶν ἀνδρῶν παρεχομένων ] *Remigem atque militem doctissimus* interpres. Ego vero *remigem* praefero, tum quod Graecis in navibus, Herodoto auctore VII. 96., Persae et Medi et Sacae pugnarint, tum vocis usu, quo socii navales exprimi solent. Lysias Orat. XX. 3. παρεσκευασάμην δὲ καὶ τὸ πλήρωμα πρὸς ἐξείνιον καὶ τὴν ἄλλην ἐπιηροσίαν. Demosthen. Midian. p. 362. εἴτα τὰ πλήρώματα ἢ πόλις παρέχει καὶ σκεύη δίδωσιν. Plura si desideres, Io. Scheffer. de Milit. Nav. II. 3. et Jac. Perizon. ad Aelian. II. V. H. 10. cumulate satisfaciunt. WESS.

406. 46. Καὶ Σουρῖον ] Σουρῖον. Sic solent Atticae hoc promontorium plerique omnes vocare, ut nemini latet. WESS.

406. 48. Ἰππαγωγοὶ δὲ ὀκταζόσαιο πεντήκοντα ] *Hippagines naves, quibus equi vehuntur, quas Graeci ἰππαγωγὸς dicunt*, sic Festus. Referuntur inter onerarias, quasque ὀκτάδας adpellabant, a Io. Scheffero I. III. Mil. Nav. c. 1.; cui quidem non negavero, saepenumero illas equiparasse: habet tamen Demosthen. Philip. I. p. 33. ἰππαγωγὸς τριήρεις. Porro Herodotus naves hippagogas ceterasque minores ad tria millia pervenisse refert L. VII. 97. WESS.

406. 52. Προσαπηγγέλθησαν ] Melius προαπηγγέλθησαν legeretur. ΣΤΕΡΗ. et RHOD. Cur melius id foret, non perspicio. Decompositum hoc, uti vocant, parili paene potestate instructum est atque ἀπηγγέλθησαν aut προσηγγέλθησαν, quorum alterutrum si adesset, nemo, puto, mutaret. WESS.

406. 58. Ἐσπευδον τοὺς τὰ τῶν Ἑλλ. προελ. ἐντὸς περιλαβεῖν ] Graecia universa, quae a Thermopylis in Peloponnesum usque porrigebatur, ἢ ἐντὸς Θερμοπυλῶν Ἑλλάς Pausaniae X. 21. Thermopylae ipsae angustum dabant transitum, non latiore, quam sexaginta passus: haec una ibi militaris via, qua traduci exercitus, si non prohibeantur, possint. Prohiberi autem poterant, tum ob angustias, tum praerupta et confragosa, quae imminebant, montium praecipitia, sicuti ex Livio L. XXXVI. 15. et Appiano Syriae. p. 157. constat. Huc ergo potissimum pertinet illud ἐντὸς περιλαβεῖν. WESS.

406. 63. Μέγα φρονῶν ἐπ' ἀνδρεία καὶ στρατηγία ] Monet in Addend. pro ἀνδρεία sic scribi oportere semper, Rhodom., cui, etsi haec permisceantur vocabula, hoc quidem loco obniti nolui. Vid. Schol. Demosth. Orat. de Cherson. p. 63. et Thueydidis VI. 69. Basilium M. T. II. p. 143. C. WESS.

406. 66. Ὡς ὀλίγους παντελῶς ἔχει etc.] Respondisse Leonidam Ephoris interrogantibus tradit Plutarchus, Πολλοὶ, πρὸς ἣν βαδίζομεν προὔξιν. πάλιν δὲ αὐτῶν εἰπόντων, Μήτι ἔτερόν τι διέγνωκας ποιεῖν; Τὰς παρόδους τῶν βαρβάρων κωλύειν, τῶ

λόγῳ, ἔφη, τῷ δ' ἔργῳ, ἀποθανοῦμενος ἐπὲρ τῶν Ἑλλήνων, non magna, uti adparet, differitate, Lacon. Apophthegm. p. 225. A. WESS.

407. 80. Τῶν μὲν οὖν Λακεδαιμονίων ἦσαν χίλιοι καὶ σὺν αὐτοῖς etc.] Lacedaemonis voce et urbs et regio notabatur. Λακεδαιμόνιον ὁμωνύμιος λέγεται καὶ ἡ χώρα καὶ ἡ πόλις, Strabo VIII. p. 564. C. et Pausanias L. III. 11. Sparta nomen urbis tantum. Quare Spartani et Lacedaemonii differunt plerumque, ut pars et totum, notante producto hoc Diodori loco, Is. Casaub. in Strab. VIII. p. 558. Iunge Herodot. VII. 234. WESS.

407. 90. Καὶ Μιλήσιων τοσοῦτοι] Quid hoc est? Milesii, qui cum caeteris Ionibus regis erant subditi, et palam cum caeteris Asiaticis medizabant, et, ut paulo supra dixit, centum navibus regi auxiliabantur, miserunt pedites mille ad Thermopylas cum Leonida? Nugae. Nihil magis a veritate alienum. Lege confidenter pro Μιλήσιων, Μηλιῶν. Nam et supra in eadem voce idem error est cap. 3. et licet ibi Melienses in numero Graecorum, qui cum Melis sentiebant, enumeraverit, tamen ante pugnam ad Thermopylas factam nondum a Graecorum foedere defecerant, ut narrat Herodotus in Urania sect. 66. PALM.

407. 91. Θεβαίων] Ἀθηναίων (excidit in ed. Wessel. libri nota) errore non insolito. Vid. L. IV. 67. WESS.

407. 94. Οἱ μὲν οὖν μετὰ Λεωνίδου συναχθέντες] Si qui liber συναχθέντες praeferret, id confidentissime arripere: commodius quippe in hanc rem. Supra e. 3. καὶ Πάργητες μετὰ βαρβάρων ἐτάχθησαν saepeque alias. Nunc suo loco relinquo. WESS.

407. 99. Πέρι μὲν Ἀζάνθου πόλεως] Ad eam urbem fossae eius, qua mons Athos a continente erat divulsus, principium ordiebatur, Herodot. VII. 22. 121. WESS.

407. 4. Ἐπὶ τὸν Ἠλιαζὸν κόλπον] Rursus hic lege Μηλιαζόν. PALM. Nihil admodum iuvant scripti Codd. Adaeque Κλιαζόν vitiosum ac Ἠλιαζόν. sinus certe quidem *Eliacus* hac in ora nullus. Fuit autem *Maliacus*, qui Graecorum plerisque κόλπος Μηλιεὺς, ut apud Herodot. IV. 33. et Polyb. Exc. Leg. p. 1117., nonnunquam etiam *Λαμιαζὸς* a vicina urbe Lamia, sicuti Pausaniae L. I. 4. X. 1. Quare aut *Λαμιαζόν* recipiendum, aut, si eum sese tueri posse distidas, *Μηλιαζόν* doctissimi Palmerii. WESS.

407. 14. Τοῖς ἀεννάοις ποταμοῖς — ἐπιλιπεῖν] Habet Lucian. in Gall. c. 12. aurum ἀεναόν τε καὶ πολὺ ἐπιφύεον, et interpretes Alexandrini Deuterōn. XXXIII. 15. ἀπὸ χορηφῆς βουνῶν ἀενάων. quo tamen loco, insolentiore, credo, offensi epitheto alii apud Iustin. Mart. Dial. cum Tryph. p. 318. B. ἀπὸ χορηφῆς βουνῶν καὶ ποταμῶν ἀενάων. Sed qui mihi attendisse non videntur ad vers. 17. ἰσχὴν βραχιόνων ἀενάων inde didicissent, ἀέναα Alexandrinis eadem videri ac αἰώνια, αἰε διαρκῆ, ut

Hesychius explicat. Ego hic scriptos libros sequor, et auctoris morem, quo *μῆμιν ἀένας* L. V. 66. et eius generis alia dixit. Porro fluvium ab incredibile hac Persarum multitudine bibendo exsiccatum dabit Herodot. VII. 127. WESS. *Ἀένας* scribendum esse, non *ἀένας*, ostendit Hermannus ad Eurip. Ion. v. 117.

408. 20. *Τοὺς ἅμα μὲν* etc.] Sequi debuerat *ἅμα δὲ*, ut L. III. 62., nisi sibi utroque in sermone scriptores talia indulgerent. Vide *τὸν πᾶν* Io. Frid. Gronov. in Livium L. XXXIII. 12. WESS.

408. 24. *Ἀζινδύρους*] Adscripserat Ursinus *ἀζινδύρους*, quod ut ferri potest, ita editum elegantia non superat. WESS. Adversatur Ursino locus supra p. 98. 42. *αὐτοὺς μὲν ἀζινδύρους ἔξιέναι*, quanquam ibi *ἀζινδύρους* est uno in libro.

408. 26. *Ἐπιγγεῖλατο δάσσειν χώραν τοῖς Ἕλλησι*] Postrema potuerant abesse; sed ea sermonis abundantia Diodoro, ut dictum alias, frequentatur. Persa autem Graecis haud obscure significat, eos sese, modo dicto audientes sint, aliorum tracturum, more per orientem frequentissimo. Darius certe *ἐβουλεύσατο Φοίνικας μὲν ἔξανασιτίσας ἐν τῇ Ἰωνίῃ κατοικίσαι, Ἰωνας δὲ ἐν τῇ Φοινίῃ* apud Herodot. VI. 3., quod et regem suum Iudaeis, si sese dedant, facturum recepit legatus Assyrius 2. Reg. XVIII. 32., expertique et hi et ipsorum populares sunt labentibus annis, uti notum omnibus, maximo gentis malo. WESS.

408. 29. *Ὅτι καὶ συμμαχοῦντες τῷ βασιλεῖ* etc.] Vere et Laconice dictum; quo etiam responso legatos Artaxerxis Graeci exceperunt, qui cum Cyro in interiorem Asiam adscenderant, cum arma dedere postularentur L. XIV. 25. WESS.

408. 37. *Ἐκ τῆς πατρίδος πεγεργότα πρὸς αὐτὸν*] Videndus est Herodotus L. VII. 3. 101. 209. WESS.

408. 52. *Τῆς τῶν προγ. ἡγεμονίας οὐ πάλαι καταπεπονημένης*] *Fracto oppressoque*. Strabo L. VII. p. 501. A. *Μακεδόνες δ' ἕσπερον καὶ Ῥωμαῖοι καὶ ταύτην (Ambraciam) καὶ τὰς ἄλλας καταπένησαν*. Confer infra L. XIV. 103. Exstinxit autem Medorum principatum et Cyrus et Xerxis pater Darius. Herodot. I. 130. WESS.

408. 54. *Καὶ τῶν ἐν Μαραθῶνι τετελετηχότων*] Haec vitium sonant. Tentabam sic emendare: *εἶναι καὶ τῶν ἐν Μαραθῶνι προκεκινδυνευχότων τινας. συννέδειξε δὲ* etc. *esse et quosdam ex iis, qui Marathoniae pugnae interfuerant*. PALM. Hiantem orationem interpretes explevit, voce *σχημαεῖς*, ut videtur, addita: quo modo haud prave ea decurret. Palmerii conatus audacior est, nec plane tamen spernendus, si qui Codd. addicerent. Equidem, ne dolo dicam, animadvertisse mihi videor inpudentis Grammatici vestigia, pro arbitrio suo ea inculcantis, quibus opus nihil erat. Sunt enim manifesto sumpta *καὶ τῶν ἐν Μαραθῶνι τετελετηχότων* ex iis, quae continuo consequuntur. Aufer ergo mecum omnia

haec συνέβη δὲ ἐν τοῖς Μήδοις εἶναι καὶ τῶν ἐν Μαραθῶνι τελευτηκότων, et nihil admodum ad sententiam desiderabis. Neque est, ut nimium hoc censeatur, cum toties totiesque hi libri ineptis aliorum commentis sint foedati. Sin, non intercedam, ut interpretis opinio pro vera habeatur. WESS.

408. 57. Τιμωρήσεσθαι ] Τιμωρήσασθαι ambo Reg. Co. Cl. haud male. Vid. Miscellan. Observ. Vol. IV. p. 286. WESS.

409. 70. Καὶ τῶ μεγέθει τῶν ἀσπίδων ] Addi potuerat καὶ μεγέθει τῶν δοράτων nam brevioribus hastis, quam Graeci, utebantur Persae Medique: καὶ δόρασι βραχυτέροισι χρωόμενοι ἢ περ οἱ Ἕλληνες Herodot. VII. 211. Graecorum vero clypeos totum fere corpus obtexisse et ἀνδρομήκεις fuisse notum est. WESS.

409. 74. Νεοχμοὶ πρὸς διαπεπονημένους ] Rei gestae series, ut intactos et recentes cum fessis commissos putes, paene requirit, quomodo πρὸς ἀκραιφνεῖς πεπονηκότες in Libanii Basil. p. 132. Ceteroqui διαπεπονημένοι plerumque sunt probe exercitati. Sic L. XVI. 17. διὰ τὴν ἄθλησιν τῶν πολεμικῶν ἔργων διαπεπονημένοι, multo rei militaris usu exercitati. Musonius in Stob. Floril. Tit. I. p. 17. τὸ τεθρυμμένον σῶμα καὶ μαλακὸν πολὺ κάκιον τοῦ σκληροῦ τε καὶ ΔΙΑΠΕΠΟΝΗΜΕΝΟΥ ἐστίν. Adde supra III. 53., et mox ὑπέμενον τὸν κίνδυνον de certamine accipe, cuius vim non poterant sustentare, ut brevi ante, θανμαστὸν συνέβαινε γίνεσθαι τὸν κίνδυνον. Polyb. I. 27. τὴν μὲν ἀρχὴν ὁ κίνδυνος ἔλαβε τοιαύτην qua quidem potestate quum is, sicuti et Noster, infinitis locis vocabulum ornarit, plura nunc concludere nolo. WESS.

409. 77. Ἀσπίσι γὰρ καὶ πέλταις μικραῖς οἱ βάρβαροι ] Γέροα dicebantur Herodot. VII. 61., quae σκεπαστήρια πολεμικὰ, οἱ κυκλοτερεῖ δὲ, ὡς αἱ ἀσπίδες, ἀλλὰ τετραγῶνα, ut Etymol. p. 619. explicat. De gerris autem, scuto Persico, luculenter agit Barn. Brisson. de Regn. Persar. III. p. 641. WESS.

409. 85. Τόπον νεκρῶν ἐστρωμένον ] Videtur deesse particiipium ὄρων post ἐστρωμένον. Aliquod certe deest, quodcumque id sit. STEPH. et RHOD. Si locus est integer, nec ὄρων desideratur, quod viri doctissimi haud iniuria suspicantur, nihil reliquum est, quam ut accusativos absolute positos dicamus: quod structurae genus alias explicuimus, atque ex Pausania exemplis firmavit Sylburgius in Praefat. p. 930. WESS. Ursinus post ὁ Ξέρξης censuit omissum esse ὄρων. IDEM in Add.

409. 87. Ὀνομαζομένους ἀθανάτους ] Decem millia erant, ita dicti, quod si quis eorum aut nece aut morbo numerum inminueret, confestim alius sufficeretur, nec unquam plures paucioresve essent, docente Herodoto VII. 83., atque ex eo Barn. Brisson. de Regn. Persar. I. p. 268. Id addo, hinc colorem sumpsisse Dionem Cassium L. LVI. p. 682. E. cum de Augusto στρατιώτας

τε τοσοῦτους ΑΘΑΝΑΤΟΥΣ πρὸς τὸ προπολεμεῖν ἑμῶν τρέφω. WESS.

409. 3. Ἐπὶ τοσοῦτο δὲ προέβησαν ταῖς προθυμίαις] Cave quidquam mutas: bene enim omnia habent. Superius L. IV. 7. de Aesculapio ἐπὶ τοσοῦτο δὲ προβῆναι τῇ δόξῃ. Pausan. L. IV. 3. εὐσεβεία δὲ ἔξ πλέον προέβη. WESS.

409. 8. Πρὸς τὰς τῶν νέων ἀκμὰς ὑπερεβάλλοντο] Credo praepositionem πρὸς ex sequentibus in hanc sedem inmigrasse. Quantum enim recordeo, non ita solent. Strabo L. VIII. p. 543. Α. δυνάμει δ' ὑπερβεβλημένος τοὺς κατ' αὐτόν. Dionysius II. p. 147. μακροῦ δὲ τινι τοὺς ἄλλους ὑπερεβάλετο. Atque ad hunc modum Noster I. 66. ceterique omnes. WESS.

410. 17. Διὰ τινοσ ἀτραποῦ στενῆς καὶ παραχορῆμον] Proprium deinceps tramiti nomen fuit. Appian. Syriae. p. 158. μή τις λάθοι κατὰ τὴν λεγομένην ΑΤΡΑΠΙΟΝ περιελθὼν ἢ δὴ καὶ Λακεδαιμονίοις, τοῖς ἀμφὶ Λεωνίδαν Ξέρξης ἐπέθετο. Verte ex Livio XXXVI. 16. timor deinde incessit, ne quos per imminencia iuga calles inveniret ad transitum Romanus: nam et Lacedaemonios quondam ita Persis circumitos fama erat. Porro Trachinio illi, patriae proditori, nomen fuit Ephialtae, quo de Herodotus VII. 213. et Pausan. I. 4. WESS.

410. 32. Ἔνοι μὲν οὖν ἔφασαν δεῖν παραχορῆμα καταλιπόντας etc.] Herodotum L. VII. 219. consule et Justin. II. 11. WESS.

410. 39. Αὐτούς] Αὐτὸς R. 2. Cl. V. Non sequor, etsi ex Herodoto similia dari possunt. WESS.

410. 46. Θεσπιεῖς γὰρ μόνους παρακατέσχε] Imo et Thebanos, sed invitos, referente eodem Herodoto VII. 222. sed non probante Plutarcho T. II. p. 862. E. Numerus vero eorum, qui cum Leonida steterunt, apud plerosque ccc est, quod Spartani eum explerent, aliis D, aut DC, Thespiensibus et Thebanis additis. Vide viros doctos ad Aelian. III. V. H. 25. WESS.

410. 56. Ὡς ἐν ἄδον δειπνησομένους] Dixit aliquis hic accusativum δειπνησομένους perperam occupare locum dativi δειπνησομένοις, quod praecedat τούτοις: nec immerito meo quidem iudicio. Occurrunt enim transitus orationis a dativo ad accusativum, sed alio modo facti. STEPH. et RHOD. Ego vero non mutō. Permittunt sibi in eiusmodi structura Graeci multa. Quin ipsum hoc Leonidae dictum parili modo expressit Plutarchus Arophtheg. Laconic. p. 225. τοῖς δὲ στρατιώταις παρήγγειλεν ἀριστοποιεῖσθαι, ὡς ἐν ἄδον ΔΕΙΠΝΗΣΟΜΕΝΟΥΣ. Aliter paullo Aristides in eiusdem, si tamen idem sit, Plut. Parallel. p. 306. D. Οὕτως ἀριστᾶτε ὡς ἐν ἄδον δειπνήσοιτες. Hinc sumpsit, sed confusis τῶ ἀριστᾶν et ἀριστέειν verbis, qui Cicero in Tuscul. Disput. I. 42. obtrusit: Pergite animo forti, Lacedaemonii; hodie apud inferos fortasse cenabimus. Adsentior

enim viris egregiis Benteleio et Davisio, ῥῆσιν eam supposititiam arbitratris. WESS.

411. 66. *Νυκτὸς εἰσέπεσον εἰς τὴν τῶν Περσῶν στρατοπεδείαν*] Sequitur Iustinus II. 11. Herodotum vero si audis, praelium non fuit nocturnum, pugnatum quippe non multis ante meridiem horis: *ἐς ἀγορῆς ζων μάκιστα πληθώρην* ait L. VII. 223. i. e. illo tempore, quo forum hominibus frequens esse adsolet: id vero tota Graecia prope medium diem complebatur, sicuti Desid. Heraldus Advers. I. 10. docuit, et opportuniore loco a nobis ostendetur. Porro haec Diodori nominatim citat Io. Tzetzes Chil. I. 969., ipsa hac in historia non unius peccati reus. WESS.

411. 79. *Μήτε συνθήματος ἐρωτίσιν*] Hoc tanquam simbolo commilitones sese et hostem, et noctu inprimis, internoscebant. Quare ad Ulysem, cum se concubia nocte in hostium castra penetrasset, milites satis pro imperio apud Euripid. Rhes. v. 684. *Οὐκ ἐρεῖς σύνθημα, λόγγην πρὶν διὰ στέγων μολεῖν;* et Spartanis per noctem Tegeam invadentibus, *Αεὺς τοῖς ἰδίους ὀπλίταις ἔδωκε σύνθημα, κτείνειν τοὺς τὸ σύνθημα ἐρωσιῶντας* apud Polyæn. de Stratagem. I. 11. Eius itaque diligentiore inquisitione neglecta, ut in summo pavore et consternatione, haud mirum Persas in sese incurrisse mutuo. Adde D. Vossium in Caesar. L. II. Bell. Gall. c. 20. WESS.

411. 83. *Νῦν δ' ὁ μὲν Ἐξέρξης ἦν ἐκπεπηδηκώς etc.*] *Statim regis praetorium petunt, aut cum illo, aut si oppressi essent, in ipsius potissimum sede morituri. Tumultus totis castris oritur. Spartani posteaquam regem non inveniunt, per omnia castra victores vagantur, caedunt, sternuntque omnia, sic ex Trogo, secuto, uti videtur, Diodorum, L. II. 11. Iustinus, quicum non dissentit Plut. T. II. p. 866. A. Longius provehitur verique fidem superiacit Aristides, asseverans Leoniden Xerxi diadema detraxisse in Plut. Parallel. p. 306. D. WESS.*

411. 99. *Τὸν ἑαυτῶν δὲ βίον — ἐπέδωκαν εἰς τὴν etc.*] Hoc Dionysio Rom. Antiq. L. III. p. 152. *ἐπιδοῦναι τὰ σώματα τῇ πατρίδι.* Xiphilino in Vitell. ex Dione *ἑαυτὸν ὑπὲρ τοῦ κοινοῦ ἐπιδοῦναι.* Siracidae XXXIX. 34. *ἐπιδοῦναι τὴν ψυχὴν αὐτοῦ.*, quod posterius tamen paullo diversum. WESS.

412. 12. *Χορὴ γὰρ οὐκ ἐκ τῶν ἀποτελεσμάτων κρίνειν*] Citantur haec a S. Maximo et Antonio cap. de Fortuna Bon., inserto Florileg. Io. Stobaei p. 820. edit. Wechel. Convenit Ovidianum,

— — *Careat successibus, opto,*

*Quisquis ab eventu facta notanda putet.*

Epist. II. 85. WESS.

412. 25. *Τηρεῖν τοὺς τῆς πόλεως νόμους*] Respicit Epigramma, quo se Spartani pugnando occubuisse gloriantur, *τοῖς κείνων πειθόμενοι νομίμοις* infra c. 33. Quod autem succedit,



τηρεῖν τὰς ἰδίας ψυχὰς, Græcorum sermoni egregie asserit frequens illud scriptorum N. T. σῶσαι τὰς ψυχὰς, quo de nuper admodum Cl. Ier. Markland. in Lysiae Orat. VI. p. 546. WESS.

412. 28. Δικαίως δ' ἂν τις — ἡγήσαστο, ἢ τοὺς etc.] Multis, opinor, δικαίως ἢ, pro δικαιοτέρον ἢ, ferendum non videtur. STEPH. Adstipulor Rhodomanno, arbitrato deficere in hac structura μᾶλλον, cuius absentia in eiusmodi verborum ordine non insolita. Iosephus Antiq. Iud. XIX. 2. 4. διὰ τὸ Γάϊον γύσει τῇ αὐτοῦ χροόμενον ἢ συμβουλῇ τῇ ἐκείνης τὰ πάντα πράξαι. Libanius Epist. 113. χαίρει γὰρ οὗτος καλούμενος ἢ ἢπερ ὀνομάζεται. Pausanias IX. 28. p. 761. ὥστε καὶ διαγεύουσι τὰ πολλὰ οἱ δηχθέντες ἢ ἀνδρὶ Ἀιβυρὶ γένους τοῦ Ἑλλῶν, ἢ καὶ ἄλλως προσφύροις, ἢν ἐπιτίχῳσι τοῖς φαρμάχοις. ubi Kuhn. μᾶλλον esse Græcorum more subintelligendum bene monet. WESS. Pausaniae loco aptiorem substitue Plutarchi Pelop. p. 279. τούτους ἂν δικαίως προσαγορεύσειε στρατηγούς ἢ ἐκείνους.

412. 38. Σιμωνίδης ὁ μελοποιὸς] Simonidis numeros expressi in versione: tametsi strophas exacte distinguere non licuit. Post χρόνος vero interpungendum videtur. RHOD. Obvia veterum in scriptis Simonidis ἐγκώμια diligenter recensuerunt Leo Allatius Diatrib. de Simeon. p. 209. et Io. Alb. Fabricius L. II. Bibl. Gr. c. 15. p. 566. Neuter hoc habet. Quid F. Ursinus praestiterit, non dixero. Videre enim mihi, tametsi studiosissime quaerenti, non licuit eius Illust. Lyric. Fragmenta. WESS.

412. 41. Ἐντάφιον δὲ τοιοῦτον οὐτ' ἐρώσ' etc.] Adsentior Rhodomanno, post χρόνος distinguenti. Ἐντάφιον vestis est, qua mortuorum corpora honeste ad sepulturam involuebantur. Hinc variae elegantissimarum translationum traduces, imprimis cum de morte, strenue ac per virtutem obita, meminerunt. Addam culti huius sermonis exempla. Polybius L. XV. 10. οἱ μὲν ἀποθανόντες ἐγγενῶς ἐν τῇ μάχῃ, κάλλιστον ΕΝΤΑΦΙΟΝ ἔξουσι τὸν ὑπὲρ τῆς πατρίδος θάνατον. Paulo aliter de Hasdrubale, cum patria deflagrante pariter morituro, Excerpt. p. 1475. καλὸν γὰρ ΕΝΤΑΦΙΟΝ εἶναι τοῖς ἐηρονοῦσι τὴν πατρίδα, καὶ τὸ ταύτης πῦρ. Non longe a priore abit Synesius II. de Provid. p. 119. B. γνώμην ἐποιῶντο δρωόντες τι καὶ παθεῖν καὶ σχεῖν ΕΝΤΑΦΙΟΝ τὴν ἀρετήν. Neque hoc Basilii M. Homil. in Divit. T. II. p. 61. E. προλαβὼν οὖν, σεαυτὸν ἐνταφίωσον. καλὸν ΕΝΤΑΦΙΟΝ ἢ εὐσεβεία. cui simillimum hoc Libanii T. I. p. 225. C. ρομφίλων δὲ καλὸν τὴν εὐσεβείαν ΕΝΤΑΦΙΟΝ. Desinam, ubi ex Eleazari, Iudaeos ad mortem sponte obeundam cohortantis, oratione apud Ioseph. VII. Bell. I. c. 8. 6. addidero, καλὸν ΕΝΤΑΦΙΟΝ τὴν ἑλευθερίαν φυλάξαντες. Haec enim ad Simonidem illustrandum abunde erunt. Iam πανδαμάτω χρόνος, de tempore edace et omnia consumente, opportunum. Bene Noster Excerpt. Vales. p. 249.

ὁ δὲ χρόνος ὁ πάντα μαραινῶν ἄλλα, ταύτας (τὰς ἀρετὰς) ἀθανάτους φυλάττει. WESS.

412. 54. Τὴν Καδμείαν νίκην νευκικῶς] Dici solere ἐπὶ τῆς ἀλυσιτελοῦς νίκης, quaeque plus detrimenti quam commodi vincenti conciliat, notum est. Auctor ipse explicuerat L. XXII., ut ex Ecloga IV. videbis. Repetitur ab ea victoria, quam magno suo malo Thebani, victis Polynice et Argivis, reportaverant. Pausanias IX. 9. Ἐγένετο δὲ καὶ αὐτοῖς (Thebanis) τὸ ἔργον οὐκ ἄνευ κακῶν μεγάλων· καὶ ἀπ' ἐκείνου τὰ σὺν ὀλέθρῳ τῶν κρατησάντων, ΚΑΛΜΕΙΑΝ ὀνομάζουσι ΝΙΚΗΝ. Alias dicti causas adfert Diogenianus IV. 45., ubi Schottum vide. WESS.

413. 58. Τὸν ἀγροῦμενον τοῦ στόλου Μεγαβάτην] Inter classis praefectos apud Herodotum VII. 97. reperio Μεγαβάζον τὸν Μεγαβάτεω, qui si idem est ac Μεγαβάζης Aeschyli Pers. γ. 22. ut suspicatur Stanleius, unius literae mutatione homini et hic suum nomen reddi poterit. WESS.

413. 64. Πρὸς ἕκταν τὴν ὀνομαζομένην Σηπιάδα] Fabulosam nominis originationem proponunt Critici ad Apollon. Rhod. I. 582., cladem vero Persicam post Herodotum VII. 188. Pausan. VIII. 27. p. 657. et Strabo IX. p. 675. WESS.

413. 69. Εἰς Ἀγέτας τῆς Μαγνησίας] Strabo IX. p. 666. postquam de Pagasis meminisset, πλησίον δὲ καὶ Ἀγέται, ὡς ἂν ἀγετήριον τῶν Ἀργοναυτῶν. Herodotus VIII. 7. ceteris ad Aphe-tas in ancoris consistentibus, ducentas naves missas refert, quae Euboeam circumnavigarent. Hinc mendii suspicio oriri posset, nisi et in aliis ab eo Diodorus discederet. WESS.

413. 74. Διακοσίας καὶ ὀγδοήκοντα] Herodotus VIII. 2. omnium ad Artemisium coactarum, praeter naves quinquaginta remorum, numerum CCLXXI colligit, inque his Atheniensium CXXVII, Noster c. 13. Atticis deinde accessisse triremes quinquaginta affirmat, unde rotundiore numero L. XIII. 21. et L. XV. 78. cc hoc bello armasse Athenienses traduntur: quem quidem catalogum non excedit Nepos Themist. c. 3., neque Demosthen. Or. pro Coron. p. 179. Ut mirer eundem Orat. de Class. p. 108. scripsisse: οἶδε μὲν (Persarum rex) τριακοσίας τριήρεσιν, ὧν ἑκατὸν παρεσχόμεθ' ἡμεῖς, τοὺς προγόνους αὐτοῦ χιλίας ἀπολέσαντας ναῦς. Existimabimus Oratorem de gentis suae gloria detrahere voluisse in eo sermone, quo multitudinis favorem colligere studebat? Equidem non ausim, culpamque in amanuenses refero, qui numeri nota decepti ex ὧν διακοσίας id, quod editur, extruxerunt. WESS.

413. 78. Διὰ σύνεσιν καὶ στρατηγίαν] Idem est ac διὰ σύνεσιν στρατηγικὴν, ut c. 21. et L. XV. 56. Epaminondas διὰ τῆς ἰδίας ἀνδρείας μάλιστα καὶ στρατηγικῆς συνέσεως τοὺς ἀνικητοὺς etc. κατηγωνισμένος· quod genus nostrum amare docet Pet. Faber Semest. II. 25. p. 343. WESS.

413. 95. Διεσπασμένοις τοῖς Πέρσαις συμπλεκόμενοι] Dativum, quem Rhodom. substituendum monuerat, scriptori restitui, etsi Codd. nihil iuvent. Paene etiam διεσπασμένοις ex Reg. scripseram: id enim significantius. Τάξιν διεσπασμένην dixit paullo ante et στρατεύμα διεσπασμένον Thucydid. VII. 78. pluresque in re simili alii. Vid. infr. c. 21. WESS.

413. 99. Ἐκότεροι ἐπροτέρησαν] Usus verbi προτερεῖν in his libris longe frequentissimus est, sed quod demirabere, format προετέρουν, προετέρησα et nonnunquam ἐπροετέρησα contra Grammaticorum decreta veterumque morem, quo Apollodor. III. 1. 2. πολεμῆσας Μίνως ἐπροτέρησεν et Polyb. III. 110. ἐπροτέρουν κατὰ τὴν πρώτην συμπλοκὴν. Nosterque ipse I. XVI. 34. καὶ ἐπροτέρουν κατὰ τὸ πλεῖστον ἐν τοῖς κινδύνοις, paucisque aliis in locis. Nihil ergo reformidavi hanc consuetudinem sequi, initio a προετέρησαν, quod constanter Codd. adprobarent, huius cap. facto. WESS.

414. 17. Τὰ στενὰ τῶν ἐντὸς τῆς Εὐβοίας συμμαχοῦντων] Forte διὰ vel ὑπὸ τῶν ἐντὸς. RHOD. De sociis, qui in Euboea adiutabant, ut fauces obfirmarentur, si certa res esset, non recusarem praesentiam alterutrius vocabuli, quod additum mallet vir doctissimus. At vero non adeo socii in insula, quam Graeci navibus suis Euripum intersepiebant ipsi. De eo enim omne certamen. Πᾶς ὁ ἀγὼν τοῖσι κατὰ Θάλασσαν περὶ τοῦ Εὐρίπου Herodotus ait L. VIII. 15. Vult ergo Graecos angustias sociorum, qui intra Euboeam et continentem patriae auxilio erant, navibus obstruxisse, ne provehi ulterius Persae possent: quam ad sententiam cum commodius sit τοῖς ἐντὸς — συμμαχεῖν, uti visum Cl. Wetstenio, id praefero. WESS. Forsan ἐμφράξαι adscito Rhodom. auxilio praestabilius erit. IDEM in Add.

414. 23. Παρὰ δὲ τοῖς βαρβάροις Σιδωνίους] Dissentit Herodotus, quem si audias, postremo hoc navali praelio Ἀχῆνσιοι τῶν Ξέρξεω στρατιωτέων ἠρίστευσαν, L. VIII. 17. Alios itaque sequitur Diodorus, ut saepe. WESS.

414. 26. Ἡθυμήσαν] Ἡθυμήθησαν Coisl. male. Vide cap. 15. WESS.

414. 33. Καὶ τὴν τῶν Ἰστιαίων πόλιν βία χειρωσάμενος καὶ διαρπ.] Verborum ordinem, iubentibus manu exaratis libris et rei serie, conmutavi. Scripsi praeterea Ἰστιαίων, quod Ionicum, tametsi auctor Ἐστιαίης I. XII. 7. XV. 30. maluerit, ferre potui: promiscue enim Pausanias VII. 4. 7., atque alii effecerunt, monente viro magno ad Athen. I. 16., non Ἰστίων, scribentis peccato natum, sicuti in Cod. Medic. Ἰστιεὺς ex Ἰστιαίεὺς Herodoti VIII. 23. WESS.

414. 38. Μετὰ τῶν Ἑλλήνων ἡρημένοι] Scribe τὰ τῶν Ἑλλήνων. RHOD. Non intercedo. Sic enim I. XVII. 29. οἱ τὰ τῶν Περσῶν αἰρούμενοι, et c. 48. L. eiusdem, τὰ Περσῶν

*αἰρεῖσθαι*. Tamen vulgato patrocinator, nisi et id vitio foedatum sit. καὶ τοὺς μὲν αἰρουμένους μετὰ Καρχηδονίων, στρατεύειν L. XX. 69. WESS.

414. 40. *Πρὸς τὰς δυσχωρίας τὰς ἐν τῷ Παρνασσῷ*] Herodot. VIII. 27. adi, cumque eo, si lubet, contende Polyae- num de Stratag. VI. 18. I. et confestim animadvertes, eius orationi, quo minus integra sit, γρηψώσαντες deficiere: quo addito, si legatur, αὐτοὺς καὶ τὰ ὄπλα πικρὰ παρσέλην γρηψώσαντες, ad sententiam nihil aliud desiderabitur. Viros doctos, cum ex He- rodoto res sit explorata, id fugisse demiror. Sed hoc obiter. WESS.

415. 49. *Μέχρι τοῦ ναοῦ τῆς Προναίας Ἀθηνῶς*] Sic scriptum hoc loco et brevi post fuisse, dudum est, cum Io. Meursius Lect. Attic. II. 17. moneret. Herodotus, quin recte vir dili- gentissimus correxerit, dubitare vetat: ἐπεὶ γὰρ δὴ ἔσαν, inquit L. VIII. 37. de Persis, ἐπιόντες οἱ βάρβαροι κατὰ τὸ ἱερόν τῆς Προναίης Ἀθηνῶν etc. Ortum videtur hoc mendum, quod Mi- nervae Προναίας titulus, quem Athenis atque alibi habuisse novi- mus, videretur aptior, quam quidem Προναίας. Durat hinc in Parthen. Erot. c. 25., ubi de Harmoniae monili, τοῦ τότε κειμέ- νου ἐν τῷ τῆς Προναίας Ἀθηνῶν ἱεροῦ. et Plutarcho Praecept. Reipub. Gerend. p. 825. B. καὶ πάλιν τῶν φίλων τινὰς οἰκείων ἰετείοντας ἐν τῷ ἱεροῦ τῆς Προναίας ἀνεῖλε. Utroque, cum Delphis ea sint acta, verum est Προναίας. Eum enim ibi titulum sortita Minerva fuit, quod eius aedes ante Apollinis collocata esset templum: quam cognominis causam cum post Meursium uberius exposuerint viri eruditissimi Stanleius in Aesch. Eumenid. v. 21. Spánhem. ad Callim. H. Pallad. v. 121. et lae. Gronov. ad Hero- dot. I. 92. verbum non addam. WESS. Conf. Hemsterhus. Anecd. I. p. 259.

415. 53. *Συνέβη διαφθαρεῖν συχνοῦς*] Ex Herodoto VIII. 37., quem simili in prodigio eleganter acmulatur Pausanias X. 23. WESS.

415. 78. *Ὅν δυνάμενοι κάμψαι τὸ περὶ Μαλέαν ἄκρωτ.*] Non sane erat, cur hoc mutarent. *Ἐἰς Μαλέαν ἄκρωτ τῆς Λα- ζωνικῆς* L. XVI. 63., pro quo τὸ Μαλέον ἄκρωτηριον Alci- phron L. I. Epist. 10. Infra L. XIII. 64. οὐ δυνήθεῖς Μαλέαν κάμψαι, et in notissimo dicto,

*Μαλέαν δὲ κάμψας ἐπιλάθου τῶν οἴκαδε* apud Strabon. VIII. p. 580. Porro in animo Diodorus habuit, quae de Corcyraeis Herodot. VII. 168. WESS.

415. 80. *Ὅπως Περσῶν μὲν κρατ. ἐκείνοις δόσωσιν*] Scripserat Diodorus δόσωσιν, ut opinor. STEPH. Credo δόξωσιν, quod consequitur continuo, in eam opinionem H. Stephan. impulisse: neque admodum refragor, verius tamen δῶσιν cum Cl. Wetste- nio arbitratus. Alioqui structura haud prorsus insolita est. *Ὅπως τοὺς ἀναβησομένους ἐτοίμους ἔχειν* habebimus L. XX. 4. WESS.

415. 87. Τοὺς ἐφ' ἡγεμονίας τεταγμένους] Non laudo Reg. 2. Plutarchus in Nicia p. 512. de Metone, ἣν γὰρ ἐφ' ἡγεμονίας τινὸς τεταγμένος. Noster L. XIII. 87. Menes Camarinus ἐφ' ἡγεμονίας τεταγμένος, et alias saepe. Sed vide L. XIII. 14. WESS.

415. 90. Πολλῶν καὶ ποικίλων ἠρθέριων] Quid desit non admodum obscurum est, et auctor explet ipse L. V. 62. πολλοὶ μὲν οὖν καὶ ποικίλοι λόγοι περὶ αὐτῆς παραδέδονται. WESS.

415. 92. Τεταγμένον γὰρ αὐτοῦ καλῶς] Vide Herodotum VIII. 71. WESS.

416. 4. Πελάγιον τὸν ἀγῶνα] In alto mari, ut πελάγιος, qui in altum proventus navigat, L. XVI. 63., et πελάγιοι νῆσοι, quae a continenti longius absunt, mari undique circumfusae. Vid. not. ad L. IV. 77. WESS.

416. 18. Οὐδὲν δ' ἴττον καὶ τὸ πεζικὸν στρατόπ. τῶν Ἑλλ.] Περσικὸν στρατόπεδον, quod hunc locum occuparat, inde deieci. Viderat iniuste eum a Persis insideri Rhodomannus, quem sequor et veterem interp., qui, nec minorem pedestribus copiis tanta vis hostium terrorem incusserat, vertendo, satis suo se in libro πεζικὸν reperisse declarat. Scio Th. Magistrum πεζικὸν, ut cultum minus, proseribere, sed eum Thucydides, Isocrates, Demosthenes, pluresque alii, πεζὸν et πεζικὸν promiscue usurpantes, meliora, si animum intendisset, docere potuerant. WESS.

416. 29. Μέγρι Κεγχρεῶν] Infra L. XV. 68. ἀρξάμενοι δ' ἀπὸ Κεγχρεῶν μέγρι Λεχάιον. nec aliter Strabo VIII. p. 583., Lucian. de Scrib. Histor. c. 29. et S. Paullus Epist. ad Rom. XVI. 1. Alii Κεγχρεαῖος vocant, ut Pausanias, quamquam non constanter, Sylburgio ad L. II. 1. docente. De spatio, quod Lechaeum et Cenchreas disiungebat, satis convenit. Plinius L. IV. 4. quinque M. passuum intervallo Isthmum metitur, quae Nostri, Strabonis et Agathemeri L. I. 5. XI stadia aequant. WESS.

416. 37. Ἐπεισε τινὰ πρὸς τὸν Ξέρξην αὐτομολῆσαι] Sicinum, quem Herodot. VIII. 75. eius domesticum ac liberorum paedagogum, Plut. Themist. p. 118. B. eiusdem quidem liberorum praeceptorem, sed domo Persam, perhibet. WESS.

416. 44. Τὸν μεταξὺ πόρον τῆς τε Σαλαμίνος etc.] Iussit et occupari insulam Psyttaleam, quae Salaminem inter et continentem terram, τὴν νησίδα τὴν Ψυττάλειαν, Herodot. ait VIII. 76., μεταξὺ Σαλαμίνος τε κειμένην καὶ τῆς ἠπείρου. Eadem habet Stephanus in Ψυττάλεια, ubi Th. Pinedo auctorem suum erroris arguens imprudentiam vix excusabit. Adde Plut. Aristid. p. 323. E. WESS.

417. 54. Τὸν διασαφίσοντα περὶ τῶν δεδογμένων] Tenia triremis, cui Panaetius praecerat, transfugit, Graecosque, quid Persa strueret, edocuit, Herodot. VIII. 82. et Plutarch. Themistocl. p. 118. D., cuius Τενεδία τριήρης recte a Palmerio facta est

*Τηρία.* Diodorus alios huius facti auctores habuit. Ionum certe quidem pauci Graecis studebant, a Themistocle, uti notum, allecti. WESS.

417. 63. *Παρά τὴν ἰδίαν προαίρ. ναυμαχεῖν*] *Huc comma sequens post Σαλαμῖνος transferendum*: sic Rhodom., quem haud gravate sequor. WESS.

417. 68. *Καὶ Λακεδαιμόνιοι*] De Lacedaemoniis negat Herodotus, eos cum Ionibus committens L. VIII. 85. WESS.

417. 71. *Αἰγινῆται δέ*] Habebantur Aeginetae *ναυτικώτατοι*, rei nauticae peritissimi, ut dicit, quippe *μεγάλην ἐμπειρίαν ἔχοντες καὶ δόξαν τῶν κατὰ θάλατταν ἀγώνων*, sicuti est c. 78. huius libri. Cui studio totos cum se, quippe insulani, dederent, eo paullatim potentiae pervenerunt, ut navalibus copiis Athenienses paene aequipararent, Pausania teste L. II. 29. WESS.

417. 78. *Μεταξὺ Σαλαμῖνος καὶ Ἡρακλείου*] Hereulis hoc fanum erat in Attica exadversum Salaminem, ἤπερ βραχεῖ πόρω διέρογεται τῆς Ἀττικῆς ἢ νῆσος apud Plut. Themistocel. p. 118. E. Ctesias Excerpt. Persic. c. 26. *ἐπὶ στενώτατον τῆς Ἀττικῆς, ὃ Ἡράκλειον καλεῖται.* WESS.

417. 81. *Εἰς τὸν ἐναντίον τόπον τῆς Σαλαμῖνος*] In Herculis id fanum, de quo diximus, si fides Phanodemo, aut in colles, qui in Megaridis confinio *Κεράτων* nomine, ut ad L. XIII. 65. videbitur, insignes erant: sic Accestodorus in Plut. Themist. p. 118. WESS.

417. 89. *Βυθισθείσης*] *Βαπτισθείσης* Coisl. quod satis elegans. Vide Polybium I. 51. WESS.

417. 92. *Ἀναχωρέοντες δ' ἀνεχώρουν*] Interpr. doctissimus, *navibus inhibitis retroverti ebant*: quod non capio: qui enim navim inhibere et retroverti eodem tempore potuerunt? *Malina velis collectis cesserunt.* Ἀναχωρεῖν γὰρ κρούως λέγεται, ὅταν χειμῶνος ὄντος ἐν τῷ πελάγει, στείλαντες τὰ ἄρμενα, σαλεύσωσιν αὐτόθι, μὴ διαμαχόμενοι τῷ πνεύματι, Schol. in Sophocl. Electr. v. 734. Vela vero quia navim convertentes et cessim cedentes contrahebant, hinc Hesych. *Ἀναχωρήσαντες, ἀναχωρήσαντες.* et *Ἀναχωρή, ἀναχώρησις διὰ τῶν νεῶν.* WESS.

418. 96. *Τῆς δ' εἰρεσίας οὐχ ὑπηρετούσης*] Sic scripsi, sermonis genio iubente. Idem fieri oportere monuerat in Addend. Rhodomannus, qui mox, quum διὸ καὶ πρόμναν μὲν ἀνακρούεσθαι κατέπανσαν verterat: *idcirco dum puppim amplius inhibere nequeunt*, vim locutionis adsecutus non videtur. *Πρόμναν ἀνακρούεσθαι ἔστι τὸ κατ' ὀλίγον ἀναχωρεῖν μὴ σιρόψαντα τὸ πλοῖον. ὃ γὰρ οὕτως ἀναχωρῶν, ἐπὶ τὴν πρόμναν κωπηλατεῖ. τοῦτο δὲ ποιοῦσιν, ἵνα μὴ δόξωσι φανερώς κείγαν.* optime Schol. Thucyd. I. 50. Quare non aliud est, ac in puppim remigare, sive *remis inhibere*: quod quoniam diligenter expositum est a Io. Fr.

Gronovio Observat. IV. 26. et Io. Scheffero de Nav. Milit. L. III. 4., operam non perdam. WESS.

418. 16. Παρ' ἐλπίδας] Sic et L. XVIII. 53. ἀεὶ παρ' ἘΛΠΙΔΑΣ ἀγαθῶν τε καὶ κακῶν μεταλαμβάνων. Excerpt. Valles. p. 318. βάρβαροι παρ' ἐλπίδας κατορθώσαντες. Longus Pastor. III. p. 99. τυχὸν δὲ Δάριος παρ' ἐλπίδας καὶ γιγλήματος etc. et in Luciani Epigram. apud Io. Stob. Serm. XV. p. 152. Ἀντὰρ ἐπεὶ Θήρῳσι παρ' ἐλπίδας ἔλυνθε πλοῦτος. Neque spernit tamen παρ' ἐλπίδα XVII. 48. XVIII. 18. etc. De Phoenicum caede Herodotus VIII. 90. WESS.

418. 25. Τῶν πεζικῶν στρατοπέδων] Vereor ne contra peccatum hic sit ac c. 16., atque ex Περσικῶν voce originem acceperit πεζικῶν hoc vocabulum. Id quidem certe si legeretur, expeditior esset oratio. Porro quem Themistocles ad Xerxem misit, is Herodoto Sicinus, de quo nos c. 17., Plutarcho Themistoc. p. 120. B. Arnaces, ex regiis eunuchis unus, sed bello captus, Polyacno de Stratag. I. 30. 3. Arsaces, ubi Casaubon. vide. WESS.

418. 35. Οὐκ ἐλάττω τῶν τετρακόσια μυριάδων] Plutarch. Aristid. p. 324. C. περὶ τριάκοντα μυριάδας. nec plura millia abs rege ad Graeciam domandam postulat Mardonius apud Herodot. VIII. 100. IX. 31. Et tamen Noster c. 30. exercitum magis exaggerat, 1) M ad Plataeas aequasse perhibens: credo librariorum intempestiva liberalitate, hoc quidem certe loco. Nam si ad superiorem exercitum, quem a rege acceperat, adiunxerit 200 millia, sicuti c. 28. docetur, mansere tantum 300 M, rege discedente. WESS.

419. 46. Στρατηγὸν ἔλλοντο Ἀμύλωνα] Ducis nomen Bongarsio ad Iustin. L. IV. 2. pravam visum est et in Ἀμύλωνα convertendum ex Herodoto VII. 165., cui, si ceteri omnes consentirent, non refragarer. Polyacnus Stratag. I. 27. Ἰμύλωνα constanter adpellat, ubi vir magnus ex Nostro Ἀμύλωνα aut Ἀμύλωνα ex Herodoto mavult. Diodorus alium eiusdem gentis modo Ἰμύλωνα, modo Ἰμύλωνα L. XIII. 85., alium Ἰμύλωνα saepissime L. XIV. 55., iterum alium Ἀμύλωνα et in scriptis Codd. Ἀμύλωνα L. XIX. 106. vocitat. Quae scripturae diversitas, praesertim cum mox Ἀμύλωνα repetitis vicibus eundem nominet, quin magna ex parte amanuensibus accepta sit referenda, fortasse etiam diversis scriptorum excerptis, prorsus credibile fit. Sitne vero Diodorus in his explicandis Ephorum, quem novimus ex Schol. Pindari ad extremam Pythion. Od. I. hoc bellum diligenter pertractasse, secutus, an Timaeum, an alium, adfirmare non ausim. WESS.

419. 52. Καὶ χωρὶς δὲ πολλὰς ναῦς etc.] Sequor Reg. 1. Sic Thucydides II. 13. χωρὶς δὲ, χρυσίου ἀσίμου καὶ ἀργυρίου etc. Iosephus XVII. Ant. Iud. VIII. 1. χωρὶς δὲ, σκευὴ τὰ μὲν χρυσοῦ, τὰ δ' ἀργύρου. Porro ναῦς φορτίδας naves onerarias.

quae alias *γορτηγά πλοῖα*, nuncupat, sicuti et Pausan. VIII. 11. et Julian. Orat. V. p. 159. D. et Aelian. de Animal. XIV. 26. WESS.

419. 56. *Εἰς τὸν ἐν τῷ Πανόρῳ λιμένα*] Is omnium tota Sicilia et commodissimus et pulcherrimus ipsi urbi nomen fecit. Diodorus L. XXII. Ecl. 14. *εὐθὺς ἦγεν ἐπὶ τῶν Πανορμιτιῶν πόλιν, ἔχουσαν λιμένα κάλλιστον τῶν κατὰ τὴν Σικελίαν, ἀφ' οὗ καὶ τὴν πόλιν συμβέβηκε τετευχέναι ταύτης τῆς προσηγορίας.* WESS.

419. 66. *Καὶ τείχει ξυλίῳ περιέλαβε*] Vide infr. c. 30. WESS.

419. 72. *Τὰ δὲ λοιπὰ ἅπαντα ταχ. ἐξαπέστειλε*] Bene scholiasten Reg. I. structuræ insolens advertit, nec *πλοῖα* tamen rescribo. Pendet *λοιπὰ* ex ea voce, quasi fuisset *ἐκ τῶν γορτηγῶν πλοίων ἐξείλετο* in superioribus: qua enallage in utroque sermone nihil tritius esse diximus L. V. 54. WESS.

419. 79. *Παραγυλάτιον τὴν Ἰμέραν*] Eam urbem Theron, eiecto Terillo, sibi adiunxerat, Herodot. VII. 165., praetereaque affinitate Gelonem arctissime sibi conciliarat, sicuti ex Timaeo Critici veteres docent ad Pindari Od. I. Olympion. princip. WESS.

419. 84. *Ὄνκ ἐλάττους τῶν πενταζισμυρίων*] Numerum copiarum haud parum deminuunt iidem interpretes, ex Ephoro adfirmantes, Gelonem cc naves, c10 c10 equites, et peditum decem millia hoc bello armasse, ad Od. I. Pythion. extremam. WESS.

419. 89. *Στρατοπεδείαν οἰκίαν βαλόμενος τῶν περὶ etc.]* Venit diligentissimo Rhodom. in opinionem, post *βαλόμενος* deficere *ἐπὶ*, acsi fuisset *βαλόμενος ἐπὶ τῶν τόπων* quod miror. Solet enim Diodorus in simili structura secundum saepe casum amare. Sic L. XVI. 57. *οἰκίαν τῆς ἀσεβείας ἔσχε τὴν τοῦ βίου κατὰστροφῆν.* et XX. 10. *ὄρωντες τὸν καιρὸν οὐδαμῶς ἀναβολῆς οἰκίον.* et hoc libro c. 15. *διαλεχθεὶς οἰκία τῆς περιστάσεως.* tum c. 30. *συντάξαντες ἑαυτοὺς οἰκίως τῆς περιστάσεως etc.* WESS.

420. 2. *Ἄς διὰ φόβον — ἀνοικοδόμησαν — ταύτας — ἐξοικοδόμησαν*] Verteabantur: quas Theron exstruxerat, ipse — destruxit, credo ob *ἀνοικοδόμησαν*, quod tamen leviter deturpatum. Rei series satis declarat, Theronem hostium adventu consternatam portas obstruxisse, quas Gelon patefecit iterum, aliis insuper exstructis. Nimirum scripserat *ἐνοικοδόμησαν*, quomodo *ἐνοικοδομημένην φάραγγα*, quae a venatoribus obstructa erat, L. III. 37. vidimus, et infr. c. 45. *ἐνοικοδομησα τὴν εἴσοδον.* Novi Apollodor. II. 5. 1. et Lycurgum adv. Leocrat. p. 166. verbum *ἀνοικοδομῆσθαι* obstruendi potestate ornasse, sed utriusque loca mendii merito manifesta habuit vir accuratae diligentiae Duker. in Thucyd. III. 81. Idem censeo de his Epist. 2. personati Themistocles p. 15. *οἱ δὲ ἀνοικοδομήσαντες τὴν εἴσοδον καὶ ἀνε-*



λόντες τὴν ὄροσιν τοῦ οἴκου etc. Agit de Pausania, in Minervae templum, cuius fores obstruxerant, ἐπιφοδόμησαν, Lacedaemonii, profugo. WESS. Retractavit haec Wesselingius ad Herodot. I. 186.

420. 4. *Μὴ ὄν ἢν εἰζορησιὸς τε πρὸς τὰς etc.*] Vitium hic est. Lego interim εἰζορησιὸν λέγει πρὸς, per quas ire commodum erat. RHOD. Locus non est integer, nec satis ad defectum sarcendum Rhodomanni λέγει. Suspicio primam sequentis membri vocem καθόλου causam onissorum esse: fuisse enim πρὸς τὰς κατεπεργ. χρείας κάθοδος εἰς τὴν χώραν καὶ ἐλάνοδος εἰς τὴν πόλιν aut simile quiddam aliud. Amanuensem vero oculos coniecisse, quae neglectorum frequentissima occasio, in τὸ καθόλου, atque omnia media socorditer transiliisse. WESS.

420. 13. *Ἄγοντες πρὸς τὸν Γέλονα βιβλιαγόρον]* Βιβλιογόρον. Sic etiam alibi scribendum. Haec Rhodom. in Addend. Non ita Polybius IV. 22. ἀπέστειλε βιβλιαγόρους πρὸς πάντας τοὺς συμμάχους, nec Diodorus multifariam, neque Grammatici. Vid. not. L. II. 26. WESS.

420. 17. *Πρὸς αὐτὴν ἐκπέμψουσιν]* Lege αὐτόν. RHOD. Non audio. Pertinent ad πρὸς ἢν ἔγραψεν ἡμέραν Ἀμιλκας ἀποστῆλαι, ut quisque videret. WESS. Ἀὐτὸς sic positum supra p. 31. 44.

420. 33. *Προσδραμύοντες τῷ Ἀμιλκᾷ]* Stratagema, quo Gelon oppressit Amilcarem, multo aliter a Polyaeo memoratur L. I. 27. 2. Variatum autem sententiis fuisse de morte ducis, praecipue quod occisi corpus nusquam reperiretur, satis Herodotus L. VII. 167. significat. WESS.

421. 39. *Ἀήρτων τοῖς Σικελώϊς]* Scripsisse arbitror τοῖς Σικελιώταις, uti mox οὐ μόνον παρὰ τοῖς Σικελιώταις. Non enim Σικελῶϊ, proprie sic dicti, hoc bello rem praecipue gesserunt, sed Syracusani ceterique ex Graecis orti, iamixtis tamen Σικελώϊς. Hos autem Σικελιώτας generali nomine designari, docet Ph. Claverius Sicil. Antiq. L. I. p. 39. et superius auctor L. V. 6. WESS.

421. 45. *Τίς μάχης δεῦρο κἀκεῖσε ταλαρτενομέρης]* Marte adhuc dubio et nunc hanc, modo illam in partem vergente. Sic L. XVI. 4. ὁ κίνδυνος δεῦρο κἀκεῖσε τὰς ἑοπὰς ἐλάμβανε, ΤΑΛΑΡΤΕΥΟΜΕΝΟΣ αἰ τὰς τῶν ἀγωνιζομένων ἀρεταῖς. Et XVII. 33. ἐταλαρτέετο γὰρ (ἢ μάχῃ) δεῦρο κἀκεῖσε. Nimirum omnia ea ταλαρτέονται, quae lancem deprimunt, et aliam in partem inclinant. Eleganter Plutarchus de corporis nostri vigore, cum ad summum devenerit, οὐχ ἕσπιζεν, ἀλλὰ πίπτει καὶ ταλαρτέεται πρὸς τοῖνναντίον Sympos. I. V. 7. p. 682. E. Quare de se dubio, et, quid amplectatur, incerto, Gregor. Nazianz. Or. III. p. 70. C. καὶ γὰρ αὐτὸς ταλαρτέομαι τὴν γνώμην, καὶ οὐκ ἔχω ὑποτέρωσε νέσω. WESS.

421. 48. *Καὶ ταῖς φωναῖς καὶ ταῖς ἐλλήσιν]* Aberat ab editis altera copula, quam, etsi scripti Codd. itidem negligenter, obsecutus monenti Rhodomanno, suam in sedem revocavi. WESS.

421. 54. Οὐκ ἐλάττους τῶν πεντεκαίδεκα μυριάδων] *Consentit sibi egregie. Nam L. XIII. 59. Amilcar κατιστρατηγηθεὶς ὑπὸ Γέλωνος ἀνῆρέθη, καὶ μετ' αὐτοῦ πεντεκαίδεκα μυριάδες στρατιωτῶν ἀνῆρέθησαν, ἄλλαι δὲ οὐκ ἐλάττους τούτων ἠχμαλωτίσθησαν. Hinc frequens neque ea iniusta, Syracusanis gloriandi de trecentis Carthaginensium millibus ad Himeram caesis materiâ. Vide L. XIII. 94. XIV. 67. WESS.*

421. 68. Τῇ περὶ Πλαταιᾶς γενομένῃ τοῖς Ἑλλησι] *Instar omnium esse Pindarus potest Od. I. Pythion. prope finem, cum de Gelone:*

Ὅς σφιν ἐν πόντῳ βάλεθ' ἄλικίαν,  
Ἑλλάδ' ἐξέλικον βαρείας  
δοιλείας. Ἐλέομαι  
πὰρ μὲν Σαλαμῖνος, Ἀθηναίων χάριν,  
μισθόν. ἐν Σπάρτῃ δ' ἐρέω  
πρὸ Κιθαιρῶνος μάχαν  
ταῖσι Μῆδειοι κάμον ἀγκυλότοξοι.  
πὰρ δέ γε τὰν εὐδρον ἀκτῶν  
Ἰμέρα, παίδεσσι ὕμνον  
Δειομένεος τέλεισαι.

*Adpellat τὰν πρὸ Κιθαιρῶνος μάχαν, non, quae Eras. Schmidii sententia, nobilem pugnam ad Thermopylas, non longe a Cithaerone, quam Leonidas, Anaxandridae F., dux Lacedaemoniorum, cum Xerxis copiis habuit; sed quae ductu et auspiciis Pausaniae pugnata ad Plataeas est, sitas ὑπὸ τῷ Κιθαιρῶνι Strabone L. IX. p. 631. B. teste. WESS.*

421. 76. Πυθομένους τὴν τοῦ Γέλωνος νίκην] *Hic interpungendum. Postea hiat contextus. Sensum vero interpretatione mea utcumque reddidi. At defectus in contextu Graeco ut explendus sit, nondum video. RHOD.*

421. 77. Καὶ τῶν τὴν ὅλην ἡγεμονίαν παρ' ἀμφοτέροις ἐσχηκότων] *Fuisse arbitror τῶν ὅλων, ut saepe. Hiantem orationem incertum coniectura an Codd. auxilio vetus interpres ita explet: Utriusque praeterea exercitus imperatores, dispari fortuna iactati, haud dubium rei utriusque gestae discrimen praebuisse videntur. Nam Xerxem constat cum multis millibus Graecia fugatum. Quae satis opportuna cum sint, simus hoc Catone, donec aliunde integrior fideique melioris eruatur liber, contenti. WESS. Quem interpunctio in ed. Stephani post ἐσχηκότων posita lusit.*

421. 82. Μηδὲ ἄγγελον εἰς τὴν Καρχηδόνα διασωθῆναι] *Historicis, cum cladem et exercitus quandam internecionem describunt, nihil hoc genere frequentius. Vid. L. XIII. 21. XIV. 67. Iustinum I. 8. WESS.*

422. 84. Πανσανίου καὶ Θεμιστοκλέους] *Videtur fuisse dicendum Πανσανίαν καὶ Θεμιστοκλέα. STEPH. et RHOD. Παν-*

σανίαν καὶ Θεμιστοκλέα] Ausus sum, iubente orationis serie et interprete vetere, qui in suo libro id reperit, ita refingere. WESS.

422. 88. Πρὸς τὸν ἐχθρότατον Ξέρξην] Vide inferius c. 57. WESS.

422. 89. Αἰὲ καὶ μᾶλλον] Rhodomannus αἰὲ δὴ μᾶλλον in Addendis, quod Diodorus amare non solet, αἰὲ μᾶλλον plerumque usurpans. Habet quidem αἰὲ καὶ μᾶλλον L. V. 9., sed et ibi, uti dixi, suspecta copula. Porro quod continuo consequitur ὅστε τρισὶν ἐκ τῆς οἰκίας etc., id de Gelone, duobusque fratribus, Hierone et Thrasybulo, accipi oportere, ex c. 67. non dubitabis. Nam Polyzelus, fratrum Gelonis tertius, gratia quidem apud Syracusanos valuit, sed imperium non administravit c. 48. WESS.

422. 98. Τῇ αὐτῇ ἡμέρᾳ τὸν Ἴλωνα νικῆσαι] Narratum Herodoto fuit, certamen hoc depugnatum esse eo die, quo Graeci cum Persis ad Salaminem de summa re congregarentur, L. VII. 166. Nostri sententia, si victores Siculi ἐποίησαν τοὺς κατὰ τὴν Ἑλλάδα θαυροῦσαι, ut scriptum in superioribus, vero magis est adhinis. Scio virum eruditissimum in Historia Pactor. et Foeder. P. I. p. 90. in alia omnia abire. Sed auctor recte sibi constat. Vide mox c. 26. WESS.

422. 19. Ἡ τε πόλις ἐπένησε κοινῇ] Morem, quem publico in luctu Carthagine observabant, describit L. XIX. 106. WESS.

422. 26. Πρεσβευτὰς αὐτοκράτορας] Vide Celeb. Iac. Gronov. in Arrian. de Alex. Expedit. L. I. 27. Noster XII. 4. de Atheniensibus, legatos cum mandatis liberis ad Persas mittentibus, καὶ πεμψάντων πρέσβεις αὐτοκράτορας. Habet et Iosephus II. B. I. c. 21. 7. Iudaeorum legatos πάντας εἰπεῖν δυνατωτάτους. Philo vero Iud. ἐρημνεῦσαι δυνατωτάτους, βουλευσασθαι δὲ φανλοτάτους de Migr. Abrah. p. 399. B., fortem in dicendo L. V. in Verr. c. 1. Cicero. WESS.

423. 38. Πέδας] Παῖδας Reg. I. frequenti errore. Vid. Cl. Salmas. de Mod. Usur. p. 234. WESS.

423. 44. Συνεβάλετο γὰρ αὐτοῖς τὸ πλήθος] Mallem πρὸς τὸ πλήθος, sic enim solet. Supra c. 21. συνεβάλετο δὲ αὐτῷ — πρὸς τὴν ἐπίνοιαν, passimque alias. Alioquin συνεβάλετο erit exaggerabatur, augebaturque. WESS.

423. 56. Καίπερ διὰ τὴν εὐτέλειαν καταφρονοῦμενον] Fortasse Agrigentinae cloacae non aequarunt Romanas, quas Plinius L. XXXVI. 15. operum omnium dictu maximum adpellat, et e quibus Romanorum imperii amplitudinem, τὸ τῆς ἡγεμονίας μέγιστον, spectari posse Dionysius auctor est L. III. A. R. p. 200., haud tamen inmerito et hae celebrantur. WESS.

423. 64. Ἰχθύς εἰς τροφήν] Restitue τροφήν. Quae autem sequuntur, ita corrige: κύνων δὲ πλήθους εἰς αὐτὸν καταπταμένον. RHOD.

423. 65. *Κύκνων τε πλήθος εἰς αὐτὴν καταπταμένων*] Meilius ita procederet oratio *κύκνων τε πλήθος εἰς αὐτὴν καταπταμένων*. Posset et ita legi (ut esset accusativus absolutus pro genitivo) *κύκνων τε πλήθος εἰς αὐτὴν καταπτάμενον*. Citat autem Athenaeus hunc locum L. XII. c. 11. *ΣΤΕΡΗ. Κύκνων τε πλήθος εἰς αὐτὴν καταπταμένους*] Retineo quartum casum, a scriptis probatum libris, cui numeri generisque enallage, ut in superioribus ostendere memini, nihil nocebit. Defungar cum maxime verbis ex L. XIV. 78. *τοῦ πλήθους συντρέχοντος — καὶ τοὺς μισθοὺς πικρότερον ἀπαιτούντων*. Iam quod Rhodomannus *εἰς τροφήν* praefert, tametsi hae voces saepenumero commutentur et hi pisces *εἰς τὰς δημοσίας ἐστιώσεις* insumti perhibeantur L. XIII. 82., factum nollem. Iunguntur *τροφή καὶ ἀπόλαυσις* haud raro. Sic L. XI. 57. *πρὸς ἀπόλαυσιν καὶ τροφήν ἀρμόζουσαν*. Et L. XIX. 22. *τὰ πρὸς τροφήν καὶ ἀπόλαυσιν*. Nec citat aliter Athenaeus, cuius in his describendis peccata vir magnus animadvertit. WESS.

423. 69. *Τὴν δὲ χώραν ἄπασαν ἀγαθὴν οὖσαν*] Vide L. XIII. 81. WESS.

423. 73. *Διὰ τὸ μέγεθος*] Videtur legendum *καὶ διὰ τὸ, vel διὰ δὲ τὸ*. Sed malim *καὶ* quam *δὲ*, quod praecesserit iam *δὲ*. *ΣΤΕΡΗ. et RHOD.*

424. 89. *Ἐπρόξατο δὲ παρ' αὐτῶν etc.*] Haec fortasse ex Timaeo, qui L. XIV. de pecunia hac memoravit, monentibus ad Pindari Pythion. Od. II. 3. Criticis Graecis, insuperque ex Theophrasto docentibus, inter foederis condiciones fuisse, *μη' ἀνθρώποισιν*, i. e. ne Carthaginienses in posterum Saturno victimis humanis facerent: quod ipsum a Plutarcho semel iterumque proditum memoriae est et Apophthegm. p. 175. A. et de Ser. Num. Vindicta p. 552. A. Sed vide inferius L. XX. 14. WESS.

424. 94. *Τῆ γυναικὶ τοῦ Γέλωνος Λαμαρτέτη*] Theronis, Agrigentinarum tyranni, erat filia, quae deinceps Polyzelo, Gelonis fratri, mandato morituri iamiam mariti enupsit, quemadmodum Timaeus in Schol. Pindari Olymp. Od. II. 1. 29. docet. Diodorus *Λαμαρτέτην* vocat Siculorum dialecto, ceteri *Λημαρτέτην*, quam et *ΦΛΑΙΣΤΙΛΙΑ* reginam in Syracusanorum numis appellari coniicit Cl. Havercampus *Introduct. ad Parutae Reg. Syracus.* p. 1015., motus argumentis, quae ibi leges. WESS.

424. 99. *Τοῦτο δ' εἶχεν Ἀττικὰς δραχμὰς δέκα*] Haec lectio nihil habet absurdi, fateor. Sed mihi multo magis arrideret, si pro *εἶχεν* legeretur *εἶλκεν*, minima mutatione et dictione magis propria. PALM. *Τοῦτο δ' εἶχεν Ἀττικὰς δραχμὰς δέκα*] In hac scriptura si nihil inest absurdi, cur mutemus? Utrumque verbum cum de pondere agitur, probum est. Nam L. II. 9. de statua Iovis, *σταθμὸν δ' εἶχε χιλίων τάλαντων*, et Iunonis, *σταθμὸν ἔχον τάλαντων ὀκτακοσίων*, tum te cratera Iovis *εἶλκε τάλαντα Βαβυλώνια χίλια καὶ διακόσια*. Sed id perleve est. Hoc momenti

maioris. Dicit auctor, numum Damaretium valuisse drachmis Atticis decem et in pondere habuisse, unde et *πεντηχορτάλιτρον* nomen, litras quinquaginta. *Αίτρα* aequabat obolum Aeginaeum, teste Aristotele apud Polluc. IX. 81.; in quo cum obolus Atticus unus et praeterea eius bessis fuerit, seu trientes duo, consequens est, ut in sex obolis Aeginaeis Attici fuerint decem, et in quinquaginta Aeginaeis Attici octoginta tres cum triente, sive Atticae drachmae fere ad quatuordecim: Attica enim drachma sex obolis, uti notum, absolvebatur. Quam difficultatem Scaliger de Re Numaria p. 8. et Barbeyracius Histor. Foeder. P. I. p. 91. animadverterunt optime. Rich. Bentleius Dissert. in Phalarid. Epist. p. 457., numos Siculos et Romanos inter se componens, *πεντηχορτάλιτρον* aequiparasse monet quinque *δεκάλιτρα* sive Romanorum denarios totidem. Sed Siculum *δεκάλιτρον* et stater Corinthius eiusdem erant valoris, eodem Aristotele auctore in Polluc. IX. 81. In stater Corinthio oboli erant Attici sedecim cum besse; unde *δεκάλιτρον* sive Corinthius stater pretio et pondere excedebat duas Atticas drachmas, quae duodecim tantum obolorum: neque adeo hac ratione res expeditur. Quid ergo? Si dubio caret, litram et obolum Aeginaeum, de quo Ioseph. Scaliger addubitavit, eiusdem fuisse ponderis, videtur in decem drachmis Atticis hoc loco aliquid esse vitii: quod tanto probabilius accidet, modo numus aureus Parutae T. XXXIV. II., mole et pondere insignis, quippe unciam cum dimidia et paullo amplius pendens, sit Damareteus, ut non sine caussa suspicatus est Cl. Havercampus Comment. p. 294. Eius enim pondus quinquaginta litras fere exaequat, seu Atticas drachmas quatuordecim. Atque haec mea, non admodum, uti advertis, explorata, hoc de loco sententia sedet. Id certius constat, a Damarete numi hoc genus nomen abstulisse. Testes sunt praeter Diodorum Critici veteres ad Pindari Od. II. Olymp., Eustathius in Homer. p. 1567. Hesychius et Pollux L. IX. 85. qui tamen ambo aliam ac Diodorus eusi numi causam adferunt, sed minus probabilem: neque enim credibile fit, Gelonem in summis rei pecuniariae angustiis tantae molis numum voluisse percutere, cum minutis praecipue opus esset; quod, si Pollux verum doceret, agnoscendum foret. WESS.

424. 7. *Νεικηζέναι τῇ ναυμαχίᾳ*] Blandiri potest Reg. 2. scriptura, quodque *νίκας καλλίστας νικῶν τοὺς βαρβάρους* Plut. Pericl. p. 157. B. et *ἐνθα τὴν μάχην ἐνίκα Μιθριδάτην* Appian. Mithridat. p. 402., *νικήσαι πολέμοις* Ioseph. II. C. Apion. c. 16., *νικήσας τὴν ἐν Ἰλαταιαῖς μάχην* Noster infr. c. 46. cupile usurparint. Sed non est necessarium. Conmutantur haec, ut in Orat. Thessali inter Hippocrat. opera p. 1292. Parum ergo provide doctissimus Xylander haec Strabonis L. V. p. 347. de Hannibale *καὶ ἐξόστησεν ὅμοις νικήσας μάχας μεγάλας Φλαμίνιον* sollicitasse videtur. WESS.

424. 16. Ἐπισχῶν, τὴν προθυμίαν] Hic ante τὴν deesse καὶ crediderim. STEPH. et RHOD.

425. 17. Μάλιστα ὅτι γυμνὸν ἑαυτὸν παραδεδῶζει] Eadem Polyaeus I. 27. et Aelianus Var. Histor. L. VI. 11. ubi optime Kuhnus et Perizonius. Porro augmenti defectus in παραδεδῶζει nemini molestus erit, modo meminerit, Graecus multa sibi in hoc genere indulgere. Addam exempla conplurescula, ut dubio res careat. Infra L. XV. 62. οἱ ἄλλοι Βοιωτάρχοι παρακεχωρήκεισαν ἐκουσίως τῆς στρατηγίας. XIX. 40. οἴοιτο ταῖς ἡλικίαις ἤδη προβεβήκεισαν. Et c. 65. eiusdem libri πολλοὶ συνδεσφαιήκεισαν εἰς τὴν πόλιν. In Eclog. Ursini p. 330. τοὺς δὲ δυσδιαζήτους ἀναπεπόμεσαν ἐπὶ τὴν σύγκλητον. Haec ex Diodoro. Sequuntur ex aliis pauca: S. Lucas A. A. XIV. 7. ὅς οὐδέποτε περιπέπατῆζει. Philo Iud. in Flacc. p. 967. D. κατὰ τὸ παντελὲς ἀναπεπτῶζει. Dio Cassius L. LXXVIII. p. 24. ed. Rom. ἐξ ὧν ἔποδεδείχει σφίσι. Appian. V. Bel. Civil. p. 1164. ὃν ἐπὶ θανάτῳ προγεγράψασαν — καὶ χρήματα τῷ κτείναντι καὶ ἔλευθερίαν ἐπικεκτήσασαν. Sed desino. WESS.

425. 20. Ἀποκαλεῖν εὐεργέτην καὶ σωτήρα καὶ βασιλέα] Sollemnes hi tota Graecia tituli, praecipue priores, bene de patria civibusque meritorum: quare optime in S. Lucae Evangel. XXII. 25. καὶ οἱ ἐξουσιάζοντες αὐτῶν, εὐεργέται καλοῦνται. Polybius IX. 30. εὐεργέτην ἑαυτῶν καὶ σωτήρα τὸν Ἀρτίγονον ἀνεκηρύξατε. Passimque alii, diligenter in unum conducti a Th. Gatakero Advers. c. 3. p. 187. Regis autem titulo Gelonem fuisse conspicuum, ostendunt et Syracusanorum numi in Parutae T. CXLIV. et Dissert. VIII. de Usu et Praest. Num. p. 547. Illustr. Spanhemii. WESS.

425. 23. Χρυσοῦν δὲ τρίποδα ποιήσας ἀπὸ ταλάντων ἑκατάδεκα] Gelonem una cum fratribus tripodes ob partam de barbaris victoriam consecrasse, hoc Epigramma, in Scholiis ad Pindari Pythion. Od. I. servatum, loquitur:

Φημὶ Γέλων', Ἰέρωνα, Πολύζηλον, Θρασύβουλον,  
 Παῖδας Δεινομένευσ τοὺς τρίποδας θέμεναι,  
 Βάροβαρα νικήσαντες ἔθνη, πολλὴν δὲ παρασχέιν  
 Σύμμαχον Ἑλλησιν χεῖρ' ἐς ἔλευθερίην.

Auctor videtur Simonides: ei certe quidem in manu exarata Anthologia, unde excerptum publicavit Leo Allatius Diatrib. De Simeon. p. 214., tribuitur similis argumenti aliud:

Φημὶ Γέλων', Ἰέρωνα, Πολύζηλον, Θρασύβουλον,  
 Παῖδας Δεινομένευσ τὸν τρίποδ' ἀνθέμεναι,  
 Ἐξ ἑκατῶν λιτρῶν καὶ πενήκοντα ταλάντων,  
 Δαρειῖον χρυσοῦ τῆς δεκάτας δεκάταν.

Commode ex utroque unum conflabitur, si prioris bini ultimi versus, uti censuit eruditissimus R. Bentleius Dissert. de Phalarid. Epist. p. 459., huic subiiciantur. Nec spectabit tamen hunc tripod-

dem, Delphis Apollini consecratum a Gelone, qui talentum duntaxat XVI fuit, cum ille pondus talentorum quinquaginta et paullo plus habuerit, nisi si in XVI his talentis vitium suspiceris, cuius ego tamen iustam causam non video: neque enim constat, cum, de quo Simonides, tripodem Apollini Delphico fuisse dedicatum. Quod porro in Epigrammate est *Δαρειτίου χρυσοῦ* et apud Suidam v. *Δαρειτίου*, iure merito vitii manifestum arbitratus est R. Bentleius, *Δαμαρετίου χρυσοῦ* rescribens, ut Paeon locum Daetyli occupet, innuaturque aurum, quod a *Damarete*, Gelonis uxore, nomen abstulit: cui etsi obloqui vehementer nolim, non celabo tamen, verius mihi semper visum et multo minoris moliminis *Δαρειτίου χρυσοῦ*. A Dario enim, Persarum rege, aurum perpurgatissimum *Δαρειτίου* nomen adeptum est, unde *ψήγμα Δαρειτίου χρυσοῦ* apud Auctorem de Fluminibus, quem Plutarchum vulgo censent, de ramentis auri optimi. Sed hoc obiter. Redeo in viam. WESS.

425. 27. *Ἐννηῶς δὲ οὔσης*] Hic legi ac verti, *ἐν νηῶ δ' οὔσης*, cum aliud non occurreret melius et cum litera magis consentiens. RHOD. *Νεῶν Δήμητρος Ἐννηῶς δὲ οὔσης*] Iure notatur punctis hic locus in voce *ἐννηῶς δὲ οὔσης*. Est enim mendum putum purum, et cuius facile est id decernere: at quomodo rependum sit, hoc opus, hic labor est; est enim nodus vindice dignus. In iis vocibus videtur latere quoddam Cereris cognomen: tentabam *Δήμητρος Ἐννησιαίας*. Nam ipse Diodorus infra L. XI. 76. ad annum 4 Olympiadis LXXIX, ubi de bello, quod contra Catanenses gesserunt Syracusani, sic ait de Catanensibus: *οὔτοι μὲν ἐξέπεσον ἐκ τῆς Κατάνης, καὶ τὴν νῦν οὔσαν Αἴτνην ἐκτίσαντο, πρὸ τούτου καλουμένην Ἐννησίαν. Ἢ εἰ Catana pulsi et Aetnam, quae nunc est, possederunt, antea vocatam Ennesiam*: unde forte Gelo, qui templum Cereris in ea urbe construere in animo habebat, vocare volebat illud templum *Δήμητρος Ἐννησιαίας* vel *Ἐννησιάνης*. Cogita super eo, lector erudite, et forte meliora dabis. PALM. *Νεῶν Δήμητρος Ἐννηῶς δὲ οὔσης*] Peccatum in his inesse nemo ambiget. Ex remediis, quae viri docti adhibuerunt, Rhodomannianum firmatur quidem a Clarom. Ego vero scire velim, cur Ionum *ἐν νηῶ* hic admitti debeat, et utrum moris fuerit, necdum absoluta aede, Deorum Dearumve statuas dedicare? Palmerianum *Ἐννησιαίας* egregie sese commendaret, nisi pravum *Ἐννησίας* esset nomen ex *Ἰνῆσσα*, ut opportuniore loco ostendetur, natum. Vel sic tamen a vero haud multum abludit, quod aut *Ἐνναίας*, aut *Ἰνῆσσαίας* fuisse arbitror. Prius *Ennaea* Ceres, per Siciliam celeberrima, stabilire apta est, et vetus interpres, cuius *nova luna τῆ Ἐνῆ* et *νέα* originem videtur debere. Posterius urbs *Inesse*, quae in ipso Aetna monte, atque *Aetnae* etiam nomine insignis fuit, non plane pro reliculo habendum suadet. Quid enim vetabit, si Gelonem Inessae Cereri templum, cui ab urbe titulus foret, excitasse dixeris? Pulcre memini quaestionum Ph.

Cluverii, servata corruptiore scriptura et versione Rhodomanni, subiicientis L. II. Sicil. Antiq. p. 322. *At quis id tandem perfecit? quis unquam eius mentionem fecit auctor, vel saltem suspicionem in scriptis suis reliquit? Sane neminem monstraveris. Nihilque certius, quam heic quoque vocem genuinam Ἐνναν corruptam esse in Αἴτνην.* Sed illis non moveor. Habent enim pro vero, nullum Cereris per Siciliam fuisse templum, nisi *Ennae*, quod nemo illi dederit. Nam quod eius aedis mentio nusquam fit, id ex templo nunquam absoluto contingere potuit. Quid? quam multa sunt in his Diodori libris, quae frustra alibi quaeras? WESS.

425. 29. Πίνδαρος ἦν ἀκριβῶς κατὰ τούτους τοὺς χρόνους] Verissime. Agebat Pindarus, cum Xerxes in Graeciam transmitteret, aetatis annum XL, natus Olymp. LXY, si non fallit Suidas, cuius haec sunt: *γεγονῶς κατὰ τὴν 5ῆ Ὀλυμπιάδα, κατὰ τὴν 5ῆ ἔρξον στρατείαν ὧν ἐτῶν μ'.* Adde Ios. Scaliger. in Chronie. Eusebii Num. MDXXXI. WESS.

425. 32. Ἐπ' ἄρχοντος δ' Ἀθήνησι Ξανθίππου] Plutarchus Archontem, quo Mardonius ad Plataeas victus est, Ξανθίππιδην vocat in Aristid. p. 321. E.; quod homini nihil nocebit. Passim enim observes, patronymicum et primitivum, quod tamen multis fraudi fuit, in eodem homine saepe locum habere. Qui sequuntur Coss. Q. Fabius Vibulanus et Ser. Cornelius Cossus, auspiciati sunt summum magistratum an. U. C. Fabiano CCLXIX, respondente Varroniano CCLXXV. WESS.

425. 33. Κόϊνον Φάβιον Σιλοναὸν] Perperam pro Οὐίβουλανόν, ut et vitiose Τρίκοστον, pro Κόσσοι. Consulium autem nonnullorum deinceps nomina corrupta ex Fastis Consularibus Rom. restitui; non quidem in contextu, ubi mutare aliquid religio mihi fuit: sed in hoc notationum commentariolo. Quod benignus Lector candide, ut spero, accipiet. RHOD. Verum pervidit Rhodomannus, et eo prior Steph. Vinand. Pighius, qui in Diodoro, inquit, *Siculo adduntur etiam cognomina Σιλοναὸς καὶ Τρίκοστος, mendose, pro Οὐίβουλανός καὶ Κόσσος. Cossus enim Ser. Cornelii cognomen est* Fastor. L. II. p. 102. WESS. Σιλοναὸν Vibulanum, Τρίκοστον Maluginensem. Sic Ursinus, in postremo aberrans. IDEM in Add.

425. 35. Μετὰ τὴν ἐν Σαλαμῖνι — ἤττημένος] Scripsit κατὰ τὴν ἐν Σαλ.; neque enim Persica classis alio, quam ad Salaminem, praelio ante hunc annum victa decessit. Mendum peperit perpetua confusio harum vocularum, et quod haud multo post sequeretur μετὰ τὴν ἐν Σαλαμῖνι ναυμαχίαν. Vid. inferius c. 48. WESS.

426. 48. Προτεθείσης] Προστεθείσης R. 1. Co. V. male. Vid. c. 12. WESS.

426. 50. Ἄρδρα δὲ Ἀμεινίαν Ἀθηναίων] Sic scripsi, secutus ex praecipua parte scriptos libros. Ἀμεινίαν, Aeschyli hunc



fratrem, Herodotus VIII. 93., ceterique adpellant, quo de optime Celeb. Iac. Perizonius in Aelian. Var. Histor. V. 19. WESS.

426. 52. *Πρωτος ἔμβολον ἔδωκε τῇ ναυαρχίᾳ*] Haud scio an heic et L. XIII. 99. praestet *ἔμβολην* legere. *Δοῦναι* enim *ἔμβολην*, cum in hostilem navem summo impetu incurritur, obvium saepe. Polyb. I. 51. *ἔμβολάς τε συνεχεῖς ἐδίδοσαν καὶ πολλὰ τῶν σκαφῶν ἐβάπτιζον*. Noster L. XIV. 49. *καὶ τοῖς παρορμηνοῖσι πλοίοις ἔμβολάς διδούς*. Et L. XX. 89. *τοῖς δὲ πλοίοις πολλὰς ἔμβολάς δόντες*. Scio *ἔμβολον ἐνσεῖν*, *ἔμβόλοις τύπτειν* et *θραύειν* in his libris saepe teri, sed ea generis sunt alius. Praeterea *καὶ ταύτην κατέλυσε* vix probo, tametsi *καὶ σχεδὸν ἅπαντα (τὰ πλοῖα) καταλύσας* recurrit L. XIV. 49. Arbitror hoc loco *κατέδυσε*, illo *καταδύσας* fuisse olim, tum quod confundi haec facile queant et conmutata liquidissimo sint L. XX. 53., partim etiam quod utrobique grandior sit sententia, si mersa potius naves, quam quassas intelligas. Adde L. XIV. 55. WESS.

426. 57. *Ἐπίμεισαν αὐτὸν διπλασίοις δωρεαῖς*] Herodotuni si audias L. VIII. 124., et, qui vestigiis eius inhaeret, Plutarch. Themist. p. 120. D. res gesta diversiore fuit modo. Porro quod de Xanthippo continuo succedit, id, modo de navali imperio accipias ex c. 34. bene habebit. Nam ad Plataeas praetor Aristides fuit. WESS.

426. 65. *Ἐφασαν, τὸν στρατηγὸν Μαρδόνιον ἐπαγγ.*] Ob scriptos Codd. hoc malui. Namque Persarum legati non uni praetori Xanthippo, sed populo universo, Mardonii, Persici exercitus praepositi, pollicitationes exposuerunt. Id firmat auctor ipse et Plutarchus Aristid. p. 324. C. WESS.

426. 73. *Ὅς οὔτε γῶρα τοῖς Πέρσαις τοιαύτη etc.*] Ex Herodoto L. VIII. c. 144., ubi multo haec plenius. WESS.

426. 84. *Τῶν ἐν Πελοπονν. πόλεων ἐπειροῦτό τις ἀριστάνειν*] Thebani hoc Mardonio consilium, cui tamen dicto audiens non fuit, suggesserant, si Herodotus IX. 2. non fallit. WESS.

427. 92. *Προσαρούσης*] *Προσαρούσης* R. 1. Vat. sine caussa. Vid. XV. 52. WESS.

427. 1. *Καὶ τὴν πόλιν παντελῶς κατεσεκ., καὶ — παντελῶς ἔλυμ.*] Arbitror prius *παντελῶς* abundare, atque hanc in sedem inmigrasse nimia librarii liberalitate. De re ipsa Herodot. IX. 13. et Thucydides I. 89. WESS.

427. 7. *Ἄγειν κατὰ ταύτην τὴν ἡμέραν τοὺς Ἕλληνας etc.*] Victoriam Graeci ad Plataeas de Persis reportarunt die mensis Boedromionis tertio vel quarto: neque enim sibi constat Plutarchus. Namque in Aristid. p. 330. F. *ταύτην*, inquit, *τὴν μάχην ἐμαχέσαντο τῇ τετραδί τοῦ Βοηδρομιῶνος ἱσταμένου κατ' Ἀθηναίωνς*. At de Glor. Athen. p. 349. F. *τρίτῃ δὲ ἱσταμένου (Βοηδρομιῶνος) τὴν ἐν Πλαταιαῖς μάχην ἐνίκων*. quod ipsum recurrit in Camill. p. 138. B. Quo eodem die in perpetuam assertae liber-

tatis memoriam τὰ Ἐλευθέρια post deinde celebrarunt, Iovique Ἐλευθερίῳ, de quo apud Thucydidem II. 71., sacra fecerunt. Confer Io. Meursium, quem Diodori rationem non habuisse miror, Feriat. Graec. L. III. WESS.

427. 11. Τὸν στέρξοντα μὲν τὴν ὁμόνοιαν ] Quis hic non στέρξοντα legendum iudicet, vicinitatem scripturae et discrepantiam verborum vel obiter considerans? Librariorum in margine assumpta, prorsus inepta, omittimus. RHOD. Pulcre memini στέργειν τὴν τύχην et στέργειν τὰ παρόντα, cum praesentibus acquiescimus, et quid de hac dictione notarit accuratissimus Frid. Sylburg. ad Dionysium Halic. T. II. p. 100., nec adduci tamen possum, ut de hoc loco aliter censeam ac Rhodomannus. Posses alioqui τὸν στερεώσαντα refingere, quod in mentem venisse Dion. Lambino ad Cornel. Nepot. Reg. c. 1. animadverto. WESS.

427. 13. Ὁ δὲ ὄρκος ἦν τοιοῦτος ] Iurisiurandi haec formula controversiae obnoxia est. Theopompus L. XXV. Philipp. ab Atheniensibus fictam adfirmavit. Audi Theonem Progymnasm. c. 2. ex eo Theopompi libro memorantem: ὅτι Ἑλληνικός ὄρκος καταπεύδεται, ὃν Ἀθηναῖοί φασιν ὁμοῦσαι τοῖς Ἑλληνας πρὸ τῆς μάχης τῆς ἐν Πλαταιαῖς πρὸς τοὺς βαρβάρους. Id ipsum colligas ex his Theopompi praeceptoris Isocratis, qui cum Panegy. p. 106. meminisset de inmani Persarum in Graecorum templa et aras atrocitate, subdit confestim: διὸ καὶ τοὺς Ἴωνας ἄξιον ἐπαινεῖν, ὅτι τῶν ἐμπρησθέντων ἱερῶν ἐπηρεάσαντο εἴ τινες οἰκοδομήσαιεν, ἢ πάλιν εἰς τὰ ἀρχαῖα καταστήσαι βουληθεῖεν, οὐκ ἀποροῦντες, ὅθεν ἐπισκευάσωσιν, ἀλλ' ἵνα ὑπόμνημα τοῖς ἐπιγυνομένοις ἢ τῆς τῶν βαρβάρων ἀσεβείας. quorum postrema quin huic formulae sint gemina germana, ne quidem dubitari potest. Et tamen Isocrates diras has non Atheniensibus, neque Graecorum ceteris contribuit, sed unis Ionibus. Cuius rei eequam aliam rationem dixeris, quam paria eum cum Theopompo fecisse? Utcunque fuerit, inseruit hoc iusiurandum Lycurgus Orat. suae in Leocrat. p. 158., sed paullo integrius. Differentiam notabo, quod et ante me fecerunt viri doctissimi Dionysius Lambinus ad Nepot. Reg. c. 1., et Barbeyracius Histor. Foeder. P. I. p. 92. WESS. Conf. Excerpta Vatic. p. ed. Mai. 18. XXI.

427. 17. Καὶ κρατήσας τῷ πολέμῳ τῶν βαρβάρων ] Lycurgus τοὺς βαρβάρους, tum τῶν μὲν μαχεσαμένων ὑπὲρ τῆς Ἑλλάδος πόλεων οὐδεμίαν ἀνάστ. ποιίσω, τὰς δὲ τὰ τοῦ βαρβάρου προελομένας, ἀπάσας δεκατεῦσω. quorum priora momenti non magni, posteriora paene necessaria: quae a Nostro neglecta possunt videri, quod principio huius belli Graeci constituissent, τοὺς ἐθελοντὶ τῶν Ἑλλήνων ἐλομένους τὰ Περσῶν, δεκατεῦσαι τοῖς Θεοῖς, ut supra c. 3. memoriae prodiderat. Mallet tamen addidisset. Rhodomannus suis in Addend. ἀγωνισαμένων praepositione addita auget, συναγωνισαμένων legens. WESS.

427. 19. -Καὶ καταβληθέντων] Addit Lycurgus, ἐπὶ τῶν βαρβάρων, porro οὐδὲν ἀνοικὸδ. παντάπασιν praeterea ἐάσω καταλείπεσθαι, non magno discrimine. Muretus, qui in vertendo hoc iurciurando offenderat, a Lambino erroris admonitus, eundem monitoris nulla mentione facta, correxit L. III. Var. Lect. c. 10. WESS.

428. 31. Καὶ τείχει ξυλίνῳ περιέβαλεν] Scribe περιέλαβεν id enim in more habet atque usu. Supra c. 20. καὶ τάφρῳ βαθείᾳ καὶ τείχει ξυλίνῳ περιέλαβε. Et c. 21. τάφρῳ βαθείᾳ καὶ χαρακώματι περιλαβόν. Tum c. 34. καὶ ξυλίνῳ τείχει καὶ τάφρῳ βαθείᾳ περιέλαβον αὐτάς. Denique c. 89. καὶ περιλαβόν αὐτὴν ἀξιολόγῳ τείχει. Quae, ex uno hoc libro congesta, auctoris consuetudinem uberrime signant. WESS.

428. 32. Ἰσθμὸς τῶν Ἑλλήνων εἰς δέκα μυριάδας] Tametsi saepe antea observatum sit, non uni Diodorum adhaerere Herodoto, haec liquidissimo declarant. Herodotus enim L. IX. 32. de Graecis, sub Mardonii imperio in populares ad Plataeas pugnantibus, τῶν δὲ Ἑλλήνων τῶν Μαρδονίου συμμάχων οἶδε μὲν οὐδείς ἰσθμὸν (οὐ γὰρ ὦν ἰσθμὸς ἦσαν) ὡς δὲ ἀπεικάσαι ἐστὶ, ἐς πέντε μυριάδας συλλεγῆναι εἰκάζω. Unde vero auctor centum haec millia, cum Herodotus, illi tempori proximus, ex coniectura quinquaginta prodiderit millia, acceperit, non divino. WESS. Quod ad hunc locum adscriptum fuit, ἀρόητον ἄμεινον. Spectat Graecos, qui contra Mardonium steterunt. Vide Herodot. IX. 30. quamquam et eius numerus auctor. IDEM in Add.

428. 34. Ἦτονν κατὰ τάχος βοήθειαν] Pro βοήθειαν genuino propius videtur βοηθήσειν, quam βοηθήσαι, in margine appositum. RHOD. Κατὰ τάχος βοηθήσειν] Ope veterum Codd. correxi. Misit autem Megarensibus subsidio Aristides validam suorum manum, a qua, prostrato equitum Persarum praefecto Masistio, fugati barbari. Plutarchus Aristide p. 327. et Herodot. IX. 21. WESS.

428. 60. Οὐ γὰρ ἦν ἐπὶ πολὺ μῆχος παρεκτείνεν etc.] Res gesta est aliter. Auctor dum brevis esse vult, multa negligit, alia miscet, obscuriusque praelium exsequitur. Tu vide Herodotum IX. 58. WESS.

428. 77. Μαρδόσιος ἀγωνιζόμενος ἐκθύμως ἔπεσε] Consentunt plerique omnes. Tamen Iustinus II. 14. Nam victus Mardonius veluti ex naufragio cum paucis profugit. Et Ctesias Persic. c. 25. γέγει τραυματισθεὶς καὶ Μαρδόσιος. WESS.

429. 86. Καὶ σύντομον τὴν ἀναχώρησιν ποιησάμενος] Scio quid defendendae huic scripturae adferri possit: mallet tamen σύντονον τὴν ἀναχώρησιν, ut L. XIX. 26. σύντονον τὴν πορείαν ποιούμενος. Appian. V. Bel. Civil. p. 1185. συντόνω δὲ δρόμῳ περὶ ἐσπέραν καταλαβόντες. Plut. Crass. p. 557. D. ἀλλ' ὀξεία καὶ συντόνω χρώμενος τῇ πορείᾳ. Favet huic suspicioni

Herodotus, Artabazum citato cursu fugisse referens, τὴν ταχίστην ἐτροχάζε φεύγων L. IX. 65. WESS.

429. 96. Ἐτόρθησαν προθύμως] *Strenue oppugnant interpres, idque recte. Προθῆν ipsam saepe oppugnationem continet. Sic L. XII. 34. καὶ προσετάξαν τὴν τε χώραν λεηλατῆσαι, καὶ τὴν πόλιν πορθεῖναι. quibus additur confestim συνεστήσαντο πολιορκίαν τῆς Ποτιδαίας. Themistocles Epist. XIX. Νάξον δὲ Ἀθηναῖοι τότε ἐπόρθηον. ubi male vertunt. WESS.*

429. 7. Τῶν δ' Ἑλλήνων βίαν προσαγόντων τοῖς ξυλίνοις etc.] Sic L. XV. 68. προσῆγε τὴν βίαν τοῖς πολεμίοις. Et XII. 46. καὶ τοὺς στρατηγούς ἀναγκάζειν παρὰ δύναμιν βίαν προσάγειν τῇ πόλει. Nec tamen plane absurda est altera lectio βίαν προσαγόντων, de qua infr. c. 60. Stephanus. WESS.

429. 11. Καὶ βίαν τῶν Ἑλλήνων ἔστειρεν] Polybius III. 53. οὗτοι γὰρ ἔστειραν τὴν ἐπιφορὰν τῶν βαρβάρων. Et XVII. 21. οὐ δυναμένους τοὺς παρ' αὐτοῦ στέγειν τὴν τῆς γάλαγγος ἔφοδον. Rem ipsam, quam auctor exsequitur, vide in Herodoti L. IX. 69. WESS.

429. 12. Οὔτε τὸ κατεσκευασμένον τεῖχος] Hoc praefendum glossemati. Quis enim murum iam probe exstructum, inter propugnandum exstrui putet? RHOD.

429. 28. Ὅντας πλείους τῶν μυρίων] Si Graecos, uti videtur, intelligit, numerus longe longeque excedit Plutarchi MCCCIX, τῶν δ' ἐπὲρ τῆς Ἑλλάδος ἀγωνισαμένων ἔπεσον οἱ πάντες ἐπὶ χιλιούς ἑξήκοντα καὶ τριακόσιοι, in Aristid. p. 330. E. WESS.

429. 30. Καὶ Χαριτίδον κελεύσαντος, ἔκριναν ἀριστ.] Summum ubique de *Charitide*, qui, Sparta inter civitates ut primae deferrentur, effecerit, silentium. Ingeniosum est commentum Rhodomanni, quo in Addend. suis, *Haud scio*, inquit, *an non augurari mihi liceat, legendum esse post ἐποίησαντο, καὶ χάριτι δουλεύσαντες, ἔκριναν. Gratiae inservierunt, ideoque inter etc. Non absimili phrasi etiam supra c. 27. χάριτι κατισχύσαντες ἐποίησαν κοιθεῖναι. Mihi id vero adfinc tantisper videbitur, donec Charitides aliunde producat. WESS. In Rhodomanni verbis καὶ ante ἔκριναν ponit ed. Hanoviensis.*

430. 38. Ἐπιγράψαντες ἐλεγείον τόδε] Dubium est, sitne hoc Epigramma tripodis inscriptum: Pausanias insculpi iusserat:

Ἑλλήνων ἀρχηγός, ἐπεὶ στρατὸν ὤλεσε Μήδων,

Πανσανίας Φοῖβω μνημ' ἀνέθηκε τόδε.

quod Lacedaemonii eraserunt, substitutis earum civitatum nominibus, quae barbaros ad Plataeas prostraverant: καὶ ἐπέγραψαν ὀνομαστὶ τὰς πόλεις, ὅσαι ξηραθελοῦσαι τὸν βάρβαρον ἐστήσαντο ἀνάθημα Thucydides ait L. I. 132., a quo non dissentit Demosthenes, seu quis alius auctor Orat. in Neer. p. 740. Itaque si hoc distichon in tripode fuerit scriptum, oportet earum, quas dixi, civitatum nomina subiecta fuisse arbitraris. WESS.

430. 44. Διακοσίαις ἐμάχοντο] Τριηκοσίαις ἐμάχοντο Herodotus VII. 228., Suidas in *Λεωνίδης* et Anthol. L. III. 5. legunt, fortasse verius. WESS.

430. 47. Ὡς ξέρε ἄγγελον] Ὡς ξείν' ἄγγελον Herodot., Lycurgus in Leocrat. p. 163., Suidas et Antholog., quod praeferrim. Strabo Ὡς ξείν' ἀπ' ἄγγελον L. IX. p. 656. Omnes autem τοῖς κείνων παιθόμενοι τοῖς ξείνοις, excepto Herodoto, qui τοῖς κείνων ὄρμησι παιθόμενοι. WESS. Ὡς ξείν' reponi iubet Rhodom. in Add.

430. 52. Καὶ νόμον ἔθηκε, λέγειν ἐγκόμιον τοῖς δημοσ.] Vide S. Petitem ad Leg. Attic. L. VI. Tit. 8. p. 521. Dionysio dubium atque incertum est, utrum ad Artemisium, an Salaminem, an Plataeas, an in campo Marathonio occumbentibus hic honor habitus publice sit primis. Ὅψε γάρ ποτε Ἀθηναῖοι προσέθεσαν τὸν ἐπιτάκιον ἔπαινον τῷ νόμῳ, εἴτ' ἀπὸ τῶν ἐπ' Ἀρτεμισίῳ καὶ περὶ Σαλαμῖνι καὶ ἐν Πλαταιαῖς ὑπὲρ τῆς πατρίδος ἀποθανόντων ἀρξάμενοι, εἴτ' ἀπὸ τῶν περὶ Μαραθῶνα ἔργων Antiq. Roman. L. V. p. 291. WESS.

430. 59. Ἐκοσίαις ἐπομείναντες τὴν παράδοσιν] Haec plenius Herodotus IX. 87. WESS.

430. 71. Ἦζον ἐκ Σάμου πρόεσβεις] Adeundus idem est L. IX. 89. ubi multo haec distinctius. WESS.

430. 83. Εἰς δέκα μυριάδας] Ἐξ μυριάδας, quibus ad Mycalen castra metatis dux erat Tigranes, Herodotus memorat L. IX. 95. WESS.

431. 92. Νενικηζότες ἐν Πλαταιαῖς] Nihil huius historiarum pater IX. 97. Quin verum si amamus, non sit credibile praeconeum id proclamasse: postero enim die demum fama increbuit, Persas a Graecis ad Plataeas esse caesos, uti ipse prodidit seq. cap. WESS.

431. 4. Κατασκευάμενοι τὰ κατ' αὐτοῖς] Forte verius erit τὰ κατ' αὐτοῖς, rebus eorum Graecorum, qui Persarum imperio parebant, consideratis. Facit autem Diodorus orationem subinde obscuriorem, dum Ἑλλήνων vocabulo modo Graecos, Europae incolas et Persarum inimicos, modo Asiaticos et Persis subditos designat. WESS.

431. 9. Τὰ τε ἄλλα προσφερόμενοι] Praeoptarem προσφερόμενοι, nec alia Rhodom. sententia in Addend. Sic L. V. 29. καὶ τὰς ἐαυτῶν ἀρετὰς προσφέρουσι. Quod additur νίκην παρωδούντες, id hoc quidem usu singulare. WESS.

431 15. Λόπερ ἔδοξαν οἱ περὶ τὸν Λεωτ. — ἐφάνησαν etc.] Male me habet alterius utrius praesentia verbi. Delessem confidenter, ni auxilium scripti libri negassent. Id bene, quod Leotychidae prudentiae celeritatem huius nuntii adscribit, quod et Polyaeus de Stratagem. I. 33., ubi optime Is. Casaubonus, fecisse agnoscitur. WESS.

431. 32. Ὡς προσιόντες εἰς ὄψιν ] Si προσιόντες retinendum videtur, προαγόντων est legendum. Sin προαγόντων magis placet, προιόντες e margine recipiendum. RHOD.

432. 40. Οἱ Πέρσαι διεσκευασμένοι καταπληκτικῶς ] Instructi atque armati. Polyb. I. 33. παρήγγειλαν τῷ μὲν πλίθει διασκευάζεσθαι. Milites ad pugnam se parare iubent. Noster XIV. 22. τῶν ἰππέων οἱ κάλλιστα διεσκευασμένοι χίλιοι. Et XX. 61. μέρος μὲν τῆς στρατιῆς κατέλιπε διεσκευασμένον ἐν τῇ πόλει. WESS.

432. 50. Ἐπικείμενοι τοῖς ἤττωμένοις ] Magis arridet ἤττημένοις. Iam enim fugam arripuisse, ut profligatos atque victos, dixit. RHOD.

432. 53. Καὶ τῶν ἄλλων πολλοὶ τῶν κατὰ τὴν Ἀσίαν ] Herodotus praelium hoc haud paullo aliter describit, et verius, ut quidem arbitror, L. IX. 102. etc. WESS.

432. 60. Οἱ μὲν εἰς τὴν στρατοπεδείαν διέφυγον, οἱ δὲ etc. ] Si qui pro glossa putent διέφυγον, cum illis non admodum pugnabo. Retinui tamen, quod in percussos et trepide fugientes non male quadraret. WESS.

432. 66. Ἐπ' Ἐκβατάνων ποιούμενος τὴν πορείαν ] Ἐς Σοῦσα dicit Herodotus IX. 107. WESS.

432. 71. Ἐπηγγέλλοντο δὲ τὰ τε μηδίσαντα etc. ] Fortasse scripserat Diodorus non τὰ τε sed τὰ τότε. STEPH. et RHOD. Fieri potest, ut vera sit virorum praestantium opinio. Sed quid si importunum illud τε deleamus? Herodotus IX. 105. visum ait Peloponnesiis τῶν μηδισάντων ἐθνέων τῶν Ἑλληνικῶν τὰ ἐμπόρια ἐξανασιήσαντας, δοῦναι τὴν χώραν Ἴωσι ἐνοικῆσαι, pari sententia. WESS.

432. 75. Τοὺς δὲ συμμάχους διαποντίους μὴ δύνασθαι etc. ] Ad eum modum L. XII. 82. ζητεῖν συμμαχίαν διαπόντιον dixit, de auxilio quod ex regionibus ultra mare positis imploratur, et δυνάμεις διαποντίους ac στρατείαν διαπόντιον, eiusque generis alia. Vide L. XVI. 63. WESS.

432. 79. Οἱ δ' Ἀθηναῖοι μετανοήσαντες ] Non admodum fit probabile, Athenienses in id consilium concessisse: Herodotum certe quidem si audias, nunquam assensi sunt: Ἀθηναίοισι δὲ οὐκ ἐδόκει ἀρχὴν, Ἴωσὴν γενέσθαι ἀνάστατον, οὐδὲ Πελοποννησίοισι περὶ τῶν σφετέρων ἀποικιῶν βουλευεῖν L. IX. 105. WESS.

433. 90. Εὐθὺς ἐκ κατὰπλον προσβολὰς τῇ πόλει etc. ] Si accipias, urbem, statim atque appulsa classis est, expugnatam in Xanthippi manus venisse, falsum dixerit. Sederunt ad urbem satis diu, et paene inviti, teste Herodoto IX. 116., quam primo appulsu oppugnari coeptam tandem in suam ditionem redegerunt. Haec mens scriptoris. Adde Thucydidem I. 89. WESS.

433. 94. Ὁ μὲν οὖν Μηδικὸς ὀνομασθεὶς πόλεμος etc. ]

Idem spatium ex Herodoto facile colligas. Conficitur quoque ex Chronologia Eratosthenis apud Clementem Alexandrinum Strom. I. p. 402.; nec dissidet Thucydides I. 23. Vide tamen Th. Lydiatum ad Marm. Chron. Oxon. p. 60. WESS.

433. 96. Ἀρξάμενος πρὸ τῶν Τρωϊκῶν χρόνων] Quatenus id verum sit, nemo, cui cum historiarum patre aliqua intercessit familiaritas, ignorat. Solet autem Diodorus diligenter adscribere auctorum nomina et libros, ubi scribendi initium et finem fecerint, quos ipse in digerenda hac Bibliotheca in consilium misit. WESS.

433. 2. Πρὸς τοὺς Οὐολοῦσκους] Gentis nomen Diodorus et Dionysius, quem hoc de bello vide L. VIII. p. 548., ita scribere adsolent. Aliter alii, ut Ph. Cluverius III. Ital. Ant. c. 7. ostendit. De Sp. Cassio, sive id domesticum, sive publicum iudicium fuit, discrepant enim scriptores, damnato Ser. Cornelio, Q. Fabio consulibus Livius III. 41. WESS.

433. 7. Ἐν ἄρχοντος Ἀθήνησι Τιμοσθένους] In Archontis nomine vitium sibi animadvertisse visus est Io. Meursius Piraei c. 2. Verum enim esse Θεμιστοκλῆς. Cuius opinionis causam habuit, quod Piraeum muniri Themistocle Archonte coeptum prodidit Thucydides I. 93.; munitus autem cum maxime hoc sit anno. Sed errat vir bonus. Timosthenem hinc removeri non patitur Oxoniense marmor. Themistocle quidem praetore Piraei munitio inchoata est, sed summum is magistratum functus fuit paullo ante bellum Medicum. Πρὸ δὲ τῶν Μηδικῶν ἤρξε Θεμιστοκλῆς ξηνατὸν ἔτα, ait Scholiastes Thucydidis. Fuit ergo anno IV. Olymp. LXXIV., a quo tempore inchoatum opus intermissum neglectumque fuit, quod Xerxis expeditio Atheniensium animos alio avocaret. WESS. Conf. Corsin. Fast. A. Diss. VIII. p. 340.

433. 8. Καίρων Φάβιος καὶ Α. Αἰμίλιος Μάμερκος] Dionysius hos Coss. iniisse magistratum ait anno U. C. cclxx., cum Archon Athenis esset Nicodemus, L. VIII. p. 549. Nicodemus autem eo munere functus est Olymp. LXXIV. anno tertio, unde perspicuum, quod iam supra monuimus, eius ab U. C. principium antevertere Nostri aeram paene quadriennio. WESS.

433. 21. Ὑπὸ γὰρ ἀρρώστιας συνεχόμενος] Referunt Graeci interpretes in scholiis ad Pindari Od. I. 103. Pythion. ex Aristotele Γέλωτα τὸν τοῦ Ἰέρωνος ἀδελφὸν ὑδέρῳ νοσήματι τὸν βίον τελευτῆσαι. Cuius aquae intercutis, qua Gelon divexatus occubuit, commemorat Plutarchus de Pyth. Oracul. p. 403. C. WESS.

434. 34. Τὸ μὲν μνῆμα ἀνέιλον Καρχηδόσιοι] Rem narrat uberius L. XIV. 63. WESS.

434. 38. Οὐδὲ εἷς ἠδονήθη τοῦ Γέλωνος ἀφελέσθαι τὴν δόξαν] Gloriam viri praeter alios detrectavit Dionysius, Gelonem subsannando τὸν γέλωτα τῆς Σικελίας, i. e. Siciliae rem ridiculam, adpellans apud Plutarch. de sui Laud. p. 542. D.; cuius ta-

men invidia viri famae ut noceret, tantum aberat, ut maiore Syracusis in honore esset. Nam cum progressu temporis in summa rei pecuniariae penuria essent Syracusani, et ipsas in belli usus statuas venundarent, Gelonis statuam illibatam servarunt, cum etiam post fata celebrantes ob partem ad Himeram de Carthaginiensibus victoriam, teste Athani in Plut. Timol. p. 247. E. WESS.

434. 41. Δίκαιον γὰρ ἅμα καὶ συμμέρονον etc.] Saepere repetit haec, neque iniuria: haec enim inter historiae praecipuas dotes. Vide L. XIV. 1. XV. 1. WESS.

434. 46. Γέλων μὲν οὖν ἐπταετῇ χρόνον ἐβασίλευσεν] Gelon Syracusis tyrannidem obtinuit anno Olymp. LXXII. secundo, cum Athenis archon esset Hybrilides, uti Dionysius Ant. Rom. L. VII. princ. et Pausan. L. VI. 9. prodiderunt. A quo principio ad Olymp. LXXV. annum tertium plus septem annis, quos Diodorus illi tribuit, effluerunt. Hinc passim viri docti contra VII hos annos insurgunt, quisque ex opinione sua eos augentes. Illust. Scaliger in Euseb. Chron. Num. MDXXX. sine dubio legendum ait εἴς, i. e. XVII annos. Simsonius, secutus Capellum, XVIII praefert Chron. A. M. 3529. Ego vero seire vehementer vellem, unde edocti sint viri egregii principium dominationis Gelonis, a quo annos Diodorus metitur. Id, quantum quidem rescire potui, nusquam adparet. Iam vero variatum fuisse sententiis de tyrannidis Gelonis et Hieronis initio certa res est. Marmor Arundelianum Epoch. 54. Archonte Athenis Timosthene, sive Olymp. LXXV. anno tertio tyrannidem occupasse Gelonem ait, successisseque post exactos VII dominationis annos Hieronem, cum Chares apud Athenienses summum magistratum administraret, distatque adeo a Nostri calculis septennii spatio, quamquam errans, sicuti ex Herodoto VII. 155. liquido constat. Longius abit Schol. Pindari ad Pythion. Od. I. princ. Hieronem adfirmans Syracusis principatum obtinuisse μετὰ τὴν τοῦ Γέλωνος τοῦ ἀδελφοῦ τελευταίην τῆ ὀγδοηκοστῆ πέμπτῃ Ὀλυμπιάδι, si tamen sani illi numeri sunt, de quo dubito. Scripseris τῆ ἑβδομηκοστῆ πέμπτῃ, et Nostro consentiet: neque id tamen facere sustineo, quoniam in Schol. ad Od. III. diserte asseveratur, Hieronem Olymp. LXXVI. Syracusis regnum occupasse. In quo sententiarum divortio potuit utique Diodorus alios eligere, quos duces sequeretur. Non esse autem VII annorum, quibus Gelon regnarit, inmutandos numeros Aristoteles, etsi in paucis dissentiens, clarissime docet L. V. Polit. c. 12. ubi de Gelonis et Hieronis imperio: ἔτη δ' οὐδ' αὐτῆ, inquit, πολλὰ διέμεινεν, ἀλλὰ τὰ σήμεπαντα δυοῖν δέοντα εἶκοσι. Γέλων μὲν γὰρ ἐπὶ τυραννίσας, τῷ ὀγδόῳ τὸν βίον ἐτελεύτησε· δέκα δ' Ἴερον. Θρασύβουλος δὲ τῷ ἑνδεκάτῳ μὲν ἐξέπεσεν. Dicit enim ne quidem duodeviginti annos eorum tyrannidem excessisse: nam Gelonem exactis VII tyrannidis annis, octavo decessisse: Hiero-



nem X. annis rerum summam administrasse; Thrasybulum undecimo principatus mense Syracusis eiectum. Quae summi philosophi Diodorum manifesto quum tuentur, ostenduntque perpetram et Gelonis et Hieronis regni annos sollicitari, omitto addere, Nostrum sibi egregie constare, cum LXXII annos a morte Gelonis ad Dionysii tyranni principatum enumerat, sive LX ab expulso Syracusis Thrasybulo, c. 68. huius libri. Tot enim abierunt anno tertio Olymp. LXXV ad Olymp. χσιη annum 3., quo Dionysius Syracusas tyrannide oppressit, docente Dionysio princ. L. VII. et Nostro L. XIII. 95. Alia, si lubet, vide in Thom. Lydiati Disquisit. de temp. Dynast. et Mort. Gelonis, quam notis in Chron. Marmor. praeposuit. WESS.

434. 57. *Πεποιημένους δόξαν μεγάλην*] Erunt fortasse, qui *περιπεποιημένους* malint; quod quidem auctor multifariam usurpat, hoc tamen non adspersus. Nam et Chabriam L. XV. 29. *ἄνδρα δόξαν ἐπ' ἀρετῆς μεγάλην πεποιημένον* vocat, secutus, ut arbitror, Polybium, cui P. Cornelius Africanus Excerpt. p. 1347. *ἐπὶ καλοκἀγαθίᾳ καὶ σωφροσύνῃ δόξαν ὁμιλογομένην πεποιημένος*, et p. 1458. *πάνδημον ποιήσασθαι δόξαν*. Alia de hoc genere collegit Io. Iensius Lect. Lucian. L. II. 15. p. 247. WESS.

434. 60. *Τοὺς λόγῳ μὲν συμβουλεύοντάς etc.*] Non est absimile vero deesse hic aliquid, quum post *λόγῳ μὲν* sequi solet *ἔργῳ δέ*. STEPH. Id fieri solere non dubium est. Exempli si desideres, cumulate dabunt Bergler. ad Alciphron. L. I. Epist. 9. et Duker. in Thucyd. VIII. 92. Nec propterea tamen iusta hic defectus suspicio. Longior verborum structura, ne id adderet, scriptorem impediit: estque revera in vocibus *προσέταπτον ἀγίστασθαι τῶν ἔργων* inclusum. WESS.

434. 73. *Ἐν ἀποσρήτοις δὲ τῇ βονλῇ προσιπῶν etc.*] Vide Thucydidem potius, qui multo haec distinctius L. I. 90. WESS.

435. 80. *Πανδημεὶ ταχιζῶν τὴν πόλιν*] Pro *ταχιζῶν* terpone *ταχιζεῖν*. RHOD. *Πανδημεὶ ταχιζεῖν τὴν πόλιν*] Certa res est. Nec quisquam aegre feret locum ita restitutum. Thucydides, quem auctorem habuit, L. I. 90. *ταχιζεῖν δὲ πάντας πανδημεὶ τοὺς ἐν τῇ πόλει, καὶ αὐτοὺς, καὶ γυναῖκας, καὶ παῖδας*. WESS. *Ταχιζεῖν* correxerat quoque Ursinus. IDEM in Add.

435. 91. *Ἀνακληθεῖς ὑπὸ τῶν ἀρχόντων*] Lego ὑπὸ τῶν *γερόντων*. Nam vox *ἀρχόντων* non convenit Lacedaemoniis, qui nullos habebant *ἀρχοντας*, sed senatum seniorum, *γερόντων*, qui *γερονσία* vocabatur, et cuncta cum regibus et Ephoris administrabat. *Βασιλεῖς, ἔφοροι, γέροντες*, nomina erant magistratuum apud Laconas, *ἀρχοντες* vero Atheniensium erant. PALM. Haec Palmerii iudicia mallem. Lacedaemone non erant, ut Athenis, *Ἀρχοντες*, veto nomine sic dicti. Horum vicemungebantur *Ephori*, qui propterea ab Historicis et Grammaticis nonnumquam *ἀρχοντες magistratus* adpellantur. Scholiastes Thucyd. I. 85.

Ἰστέον ὅτι ἦσαν τινες παρὰ Λακεδαιμονίοις *APXONTEΣ*, τὸν ἀριθμὸν πέντε, οὓς Ἐφόρους ἐκάλουν. Pausanias postquam *Ephorum*, *Nomophylacum* et *Bidiaeorum* meminisset L. III. 11. ἣ μὲν δὴ γεροσύα, inquit, συνέδριον Λακεδαιμονίοις κρηϊώτατον τῆς πολιτείας· οἱ λοιποὶ δὲ εἰσιν *APXONTEΣ*. Quae quidem loca diligentiam Io. Meursii Miscell. Lacon. L. II. 4. non fugerunt, nec largior tamen, quod contendit ille, Spartanis *APXONTΩΝ* sollemne fuisse nomen, nisi eatenus, qua dixi. Bene ergo Diodorus, Ephoros intelligens. Nepos in Themist. c. 7. *A quibus (Legatis) quum audisset, non multum superesse munitionis, ad Ephoros Lacedaemoniorum accessit, penes quos summum imperium erat: atque apud eos contendit, falsa his esse delata.* WESS.

435. 1. Καὶ περὶ ὧν etc.] Καὶ redundat. RHOD. Κατασκευασμένους περὶ ὧν ἦν χρεία πολυπρα.] Induxi auctoribus scriptis libris inportunam copulam. De re ipsa praeter Thucydidem Graecus interpret Aristophanis ad Equit. vs. 811. WESS.

435. 13. Ῥωμαῖοι πρὸς Αἰζολανούς] Putares *Aeculanenses*, quorum oppidum *Αἰζουλιῶνον* Ptolemaeo L. III. Geograph. c. 1., indicari, nisi aliunde constaret, ad Hirpinos Romanorum arma hoc tempore vix pertinuisse. Sint ergo *Aequicoli*. Sed eos hoc nomine vocitare haud solet, *Αἴζους* aut *Αἰζλους*, aut *Αἰτώλους*, scriptura corruptiore, adpellans. Vid. XII. 64. XIII. 6. XIV. 98. XX. 102. Cum Aequis autem circa hoc tempus Romanis bellum intercessisse ex Livio II. 42. cognoscet, qui de *Tuscula* nihil, ut nec Dionysius L. VIII. p. 553. WESS.

436. 21. Μάρκος Φάβιος Σιλβανὸς καὶ Α. Οὐάλ. Πούπλιος] Pro *Σιλβανὸς* leg. *Οὐΐβουλιανὸς*, et pro *Πούπλιος*, *Ποτίτιος* ex Fastis. RHOD. *Σιλβανὸς* quin vere in *Οὐΐβουλιανὸς* commutetur non dubium est, L. Valerii cognomen *Πούπλιος*, sive, ut scripti Codd. edunt, *Πόπλιος* rectius in *Ποπλικόλας* abibit: quae et St. Vin. Pighii sententia Fastor. L. II. p. 103. WESS. Ursinus Cons. *M. Fabium Vibulanum* et *Valer. Potitum* intelligit. Ego cum Pighio facio. IDEM in Add.

436. 25. Μετεωριζόμενος ἐπὶ τῇ δόξῃ] Praepositionem plerumque negligere adsuevit. Addit tamen et L. XIII. 52. Confer Con. Rittershusium ad Oppiani Cyneg. L. IV. 214. WESS.

436. 31. Μικρὰς μὲν προσδέμενον κατασκευῆς] Id verum: nam anno ante Medicum bellum, quo Themistocles Archon fuit, ut supra monuimus, Piraeo candendo Athenienses, et eius quidem persuasione, manus admoverant, teste Thucydeide I. 93. Noster vero rem ita exsequitur, quasi nova plane esset, nec ulli ante in mentem venisset. WESS.

436. 47. Πρὸς δὲ τοὺς ἐν ταῖς ναυσὶν ἀγῶνας ἀφνεσιτάτους] Neque hoc plane vero contrarium. Tamen Graeciae totius principes cum maxime Spartani erant, et mari summum imperium, etiam proximos aliquot in annos, retinuerunt. Ipse Pausanias sub

hoc tempus valida cum classe Cyprum petiit, Persas inde eiecturus, Thucydides I. 94. WESS.

436. 58. Ὁ δῆμος ἔλετο δύο ἄνδρας Ἀριστείδην] Cum Themistocles augendae Atheniensium potentiae rationem animo agitaret, quo sociorum classem, quae ad Pagasas in anchoris erat, incendio corrumpere, et pro concione habere se dixisset rem patriae utilem, sed in vulgus non eliminandam, dedit illi populus Aristidem, quicum eam communicaret, apud Plutarch. Themist. p. 122. A. Hinc sumpta videtur ansa exstruendae huius narrationis, cuius apud alios, quod quidem sciam, mentio nulla. Ex Thucydide certe alia omnia colligas. WESS.

437. 87. Καταστρατηγήσαι τοῖς Λακεδαιμονίοις] Lege τοὺς Λακεδαιμονίους, ut loquitur cum alibi, tum p. 273. (c. 61.) καταστρατηγήσαι τοὺς βαρβάρους. STEPH. et RHOD. Καταστρατηγήσαι τοὺς Λακεδαιμονίους] Sic refinxit, obsecutus iudicio virorum praestantium, et perpetuae Diodori consuetudini. Superius c. 21. ἐδῶς ἔχτει δι' οὗ τρόπον καταστρατηγήσας τοὺς βαρβάρους. Et L. XV. 16. οἱ Καρχηδόνιοι — κατεστρατήγησαν τὸν Διονύσιον. Idem Polybius ratum habet L. I. 71. ἐγένετο πρὸς τὸ καταστρατηγεῖν τοὺς ὑπεραντίους. Et Dionysius Ant. Rom. III. p. 166. καὶ ὃν τρόπον αὐτὸς κατεστρατήγησε τοὺς τε πολέμιους etc. WESS.

437. 99. Παραδόξως κατασκευασθῆναι τὸν λιμένα] Vide Io. Meursii Piraeum c. 2. et 3. et Is. Vossium ad Scylac. p. 47. WESS.

437. 2. Καὶ τοὺς μετοίκους καὶ τοὺς τεχνίτας ἀτελεῖς ποιῆσαι] Athenis μέτοικοι, quos vulgo *inquilinos*, etsi non sat commode, vertunt, quotannis XII drachmas *μετοικίον* nomine pendebant: hoc eos onere sua aetate Themistocles immunes voluit, utque in posterum *ἰσοτελεῖς* essent. *Ἰσοτελής* enim ὁ τὸ *μετοίκιον* μὴ τελῶν, πάντα δὲ ἔχων τὰ ἀντὰ τοῖς πολίταις, πλὴν τοῦ ἔργειν, quibus Ammonii verbis Petitum adde Comment. in Leg. Att. L. II. Tit. 5. Prudenter autem: namque opus Atticae civitati praesentia erat τῶν *μετοίκων* et ob artium variarum studia et rem nauticam. Δεῖται ἡ πόλις *μετοίκων*, διὰ τε τὸ πλῆθος τῶν τεχνῶν καὶ διὰ τὸ ναυτικόν Xenophon de Atheniens. Rep. p. 548. WESS.

437. 11. Πεντήκοντα μὲν τριήρεις ἐκ Πελοποννήσου] Thucydidem consule, qui cum XX navibus ex Peloponneso solvisse auctor est L. I. 94. Id autem diligenter animadvertendum est, Diodorum in hunc annum coniecere atque adeo constipare obsidionem Byzantii, Pausaniae prodicionem, ablatumque Lacedaemoniis eius superbia et crudelitate imperium, atque in Athenienses transcriptum: quae omnia tam brevi tempore administrata non sunt. Constat ex Isocrate Panath. p. 357. Spartanos paene in decennium Graeciae imperium curasse, tumque ad Athenienses

transiisse: cuius principatus auctoritas cum Olymp. LXXV inchoata, amissa autem sit, postquam ad Byzantium Pausanias socios crudelissime tractasset, certissimum videtur, Nostrum obsidionem Byzantii et Pausaniae haud iniustam necem citius atque oportuerat, recensuisse. Decepit eum series rerum apud Thucydidem, qua instauratas Athenas munitumque Piraeum confestim excipit Pausaniae in Cyprum expeditio. Vide H. Dodwell. Ann. Thucyd. p. 61., ubi hanc in rem plura reperies. WESS.

438. 21. Γογγύλω τῷ Ἐρετριεῖ] Ex Thucydide I. 128., quem adi. WESS.

438. 30. Τῷ δέ τιτι τρόπω] Malo τοῖσδε τιτι, ut alii loqui solent, et ipse item loquitur alibi. STEPH. et RHOD.

438. 36. Καταλούντων] Scribe καταλαλούντων. RHOD. Καὶ τοῦ Πανσαν. τῆς βαρέτητος καταλούντων] Manifestum est debere legi καταλαλούντων. Nec opus est fulcire hanc emendationem, quae per se stat satis, et planum exprimit sensum. PALM.

438. 38. Ἀριστιείδης δὲ ὁ Ἀθηναῖος etc.] Fuerunt sane Aristidis haec artes, nec solius tamen: nam qui illi aderat Cimon comitate et blandioribus verbis socios, Pausaniae insolentia offensus, suae civitati adiunxit, ipsumque Pausaniam, cum magis et magis insolesceret, Byzantio expulit Plut. Cimon. p. 482. A. WESS.

438. 49. Ἄ δὴ συλλογισμέμεός τις τῶν βιβλιαφόρων] Domo Argilius et Pausaniae fidelissimus, de quo Thucyd. I. 132. WESS.

438. 55. Ἐπιζητούντων] Hoc malo. Vid. supr. c. 3. WESS.

438. 57. Ἐπὶ τῷ τοῦ Ποσειδῶνος ἱερῷ] In ara Neptuni ἀσφαλείου, de quo viri docti ad Corn. Nepot. Pausan. c. 4.; pro quo ἐφ' ἱερὸν καθίσας in re non dissimili Teles apud Stob. Floril. Tit. V. p. 69. Quae sequuntur διπλὴν σκηρὴν περιεβάλετο formata sunt ex Thucydideis, haud paullo melioribus καὶ σκηρῆσάμενον διπλὴν διασφάγματι καλαβήν' ibique tugurium exstruxit, quod septo interposito disclusum erat. Alios ergo auctores habuit Nepos, cum in ara, ait, consedit. Hanc iuxta locum fecerunt sub terra, ex quo posse audiri, si quis quid loqueretur cum Argilio. WESS.

439. 71. Ἀπορομένων δὲ τῶν Λακεδαιμονίων] Haec accumulatur Tzetzes Chiliad. XII. 477.; Chrysermus autem in Stob. Serm. XXXVIII. p. 228. Pausaniae patrem Hegesilaum, foribus templi obiecto lapide obstructis, Spartanis, ut se sequerentur, exemplum praebuisse asseverat. Adde Lycurgum in Leocrat. p. 166. WESS.

439. 82. Ἐπεμήνιε] Glossema ἐπεσίμηγε repudiato. RHOD. Τὸ δὲ δαιμόνιον τῆς τῶν ἱκετ. σωτ. κατ. ἐπεσίμηγε] Diodorus, aliud arbitratus, suum sibi restitutum haud aegre feret. Sic L. XIX. 103. ταχὺ τὸ δαιμόνιον αὐτοῖς ἐπεσίμηγε. Et Excerpt. Vales. p. 337. ἀνθ' ὧν αὐτῷ ταχὺ τὸ δαιμόνιον ἐπεσίμαινε.

quibus locis ἐπισημαίνεω numinis est, cum irae suae manifesta ostentat argumenta, sicuti et in Plutarch. Demetr. p. 894. B. ΕΠΙΕΣΗΜΑΙΝΕ δὲ τοῖς πλείστοις τὸ θεῖον. Hinc ἐπισημασία ipsa exprimit irati numinis indicia L. XVI. 84. et XX. 102. Confer not. in Libr. V. 3. WESS.

439. 87. Οὐ δυνάμενοι ποιῆσαι τὸ προστατ. ] Ut manes Pausaniae placarent, ex Italia accessiverant ψυργαγωγούς, qui evocatos sedibus quietis redderent, apud Plut. de Ser. Num. Vind. p. 560. F. Tandem duas ex aere statuas in Minervae fano dedicarunt, de quibus et Thucyd. I. 134. WESS.

439. 8. Ἀλλ' αὐτὸς ἐγὼ πείραν εἰληγῶς etc. ] Punctula quatuor hic posui pro erroris manifesti nota: quem, ut opinor, recte emendaverimus reponendo ἔργῳ pro ἐγώ. Frequens enim est et huic aptum loco genus loquendi ἔργῳ πείραν λαμβάνειν. STEPH. Ἀλλ' αὐτὸς ἔργῳ πείραν εἰληγῶς ἐγίνωσκεν] Sic corrigit Rhodomannus, cui et Stephano obtemperans locum reflexi. Cur enim adeo manifesta peccata propagari patiemur? Demosthenes Or. I. in Aristogit. p. 488. ἀλλ' ὡν ἔργῳ πείραν εἰλήγατε, ubi prave in ed. Parisin. ἔργων. Nam et Orat. II. p. 498. ὡν μὲν γὰρ ἔργῳ πείραν εἰλήγατε, τί δ' αὖ τοῖς λόγοις πιστεύειν. WESS.

439. 18. Ἐκ τῆς Σπάρτης πεμπομένοις ἡγεμόσιν etc. ] Vide Thucydidem I. 95. et Plutarch. Aristid. p. 333. B. WESS.

440. 28. Ταλάντων πεντακοσίων καὶ ἐξήκοντα ] Vitium quod his in numeris increvit, non fugit Io. Meursium de Fort. Athen. c. 7. Scripserat ταλ. τετρακοσίων. Plutarchus dicto loco: ὃν μὲν γὰρ Ἀριστείδης ἔταξεν, ἦν εἰς ἐξήκοντα καὶ τετρακοσίων ταλάντων λόγον quam eandem summam probat Thucydid. I. 96. et Corn. Nepos Aristid. c. 3. WESS.

440. 29. Οὕτως ἀκριβῶς ] Οὔτως ὡς ἀκριβῶς R. 2. V. Cl. non male. Vid. Basilii Magni Epist. CCLXIV. WESS.

440. 33. Δίκαιος ἐπινομάσθη ] Excellentissimum id cognomen magis illi acquissima hac pecuniae, a sociis conferendae, descriptione firmatum test, quam inditum. Diu enim ante civium ἄριστος καὶ δικαιοτάτος ob abstinentiam, quo unus post hominum memoriam excellebat egregie, fuerat nuncupatus. Herodotus VIII. 79. et Plutarchus Aristid. p. 322. C. WESS.

440. 40. Ἐπ' ἄρχοντος Ἀθήνησι Φαίδωνος etc. ] Prorsus in hunc modum Dionysius Rom. Antiq. L. IX. p. 576., nisi quod stadio victorem Στάμιανδρον vocitet. Contra utrumque tamen venit doctissimus H. Dodwellus Ann. Thucydid. p. 58. et hunc annum Phaedoni ablatum Aristidi transcribit, cui Phaedonem deinde sufficit. Lacunam hic esse ait: eam liquere, quod inter Adimantum et Phaedonem desit par Coss. Romanorum et gesta Romana illis consulibus respondentia. Inde verisimile fieri etiam Archontem deesse, et Graeca quoque gesta annalia, cum Romanis illis Coss. committenda. Liquere praeterea eum defectum ex Marmore

Oxoniensi, in quo *Chares* Archon a *Timosthene* septimus fuisse significatur, qui in Diodoro et Dionysio a *Timosthene* sextus tantum. Inserendum autem *Aristidem*, quod illi Archonti commodior in Fastis Graecis locus esse nequeat. Haec speciem habent elegantem, sed quam Diodorus et Dionysius, quorum rationes hoc inserto Archonte conturbantur planissime, disiciunt. Nec valida omnia sunt, quibus caussam se tenere vir diligentissimus arbitratur. Desunt, fateor, Coss. *Q. Fabius* et *C. Iulius*, de quibus Livius II. 43., sed hos in Fastis reperisse non videtur Diodorus, omissos fortasse ab ipso Fabio Pictore, qui et alios praeteriit. Quod de Marmore Arundeliano ait, eius dignitatem in rebus Graecorum excellentem agnosco, nec immune tamen id omni labe, ut vel ea, quae de Gelonis annis antea disputavi, patet faciunt. Quid? ne id quidem *Aristidi* Archonti hanc sedem contribuit, quae, si quae fides Demetrio Phalerea apud Plutarch. *Aristid.* p. 318. D., quod ne ipse quidem Dodwellus negarit, ante Medicum bellum quaerenda est. Scio eundem Demetrium alio in opere diversa scripsisse, sed et ea Plutarcho non potuisse probari, ex *Aristidis* vita p. 322. E. constat. Gaudeat ergo quieta loci possessione *Phaedon*, quam vetustissimos annales secuti Dionysius et Diodorus illi assignarunt. WESS, V. Corsin. F. A. II. 1. p. 174.

440. 43. Σπόριος Φούριος Μερέλλαιος] Pro Μερέλλαιος restitue Μεδονίλλινος. RUD. Eadem Pighii Fastor. L. II. p. 105. sententia. Deficiunt autem hoc loco Coss., uti dixi, *Q. Fabius* et *C. Iulius*, quos Fasti ceterorum edunt. WESS.

440. 46. Τὴν δὲ ἀρχὴν διαδεξάμενος Ἀρχέλαος] Lego Ἀρχίδαμος, nam ex ordine et numero annorum regni id evincitur. PALM. Verissima opinio Clarissimi Palmerii. Semper ita in historiarum progressu regem adpellat, nec aliter quisquam. Annos XLII et infra L. XII. 35., etsi prave, eidem tribuit, sicuti dicitur. WESS.

440. 48. Ἀναξίλας ὁ Πηγίων καὶ Ζάγγλης τύραννος] Perinde erit sive hoc an Ἀναξίλαος malis. Idem nomen, unde Strabo modo Ἀναξίλαν, modo Ἀναξίλαον L. VI. p. 394. 395. adpellat. Bellum illi fuit cum Locrensibus, quos et occisione occidisset, nisi tyranni consilia interpellasset Hieron, sicuti docent Critici ad Pindari Pythion. Od. I. et II. WESS.

440. 49. Τὴν δὲ τυραννίδα διεδέξατο Μίχνθος] Servus et quaestor erat Anaxilae, verum optima fide. Unde imperii et liberorum curam decedens illi Anaxilas, donec filii adolescerent, permisit. Herodot. VII. 170. et Pausan., cui Σμίχνθος, L. V. 26. Conf. inferius c. 66. WESS.

440. 52. Μετὰ τὴν τοῦ Γέλιονος τελευτήν] Series orationis hoc postulat. Mortuo Gelone Polyzelus fratris defuncti uxore ducta exercitus imperium administrabat, cumque gratia apud Siculos valeret, nata cum inter et fratrem Hieronem simultas est, ut Scholiastes Pindari in Od. II. 29. Olymption. docet. WESS.

441. 63. *Πρὸς τὴν στρατείαν οὐχ ὑπακούσαντος*] Nisi fallant Critici veteres ad eam Od. II., Timaeus et belli eius curam in se recepisse et rem dextre gessisse Polyzelum memoravit. Mansit tamen inimicitia, quae temerariis Thrasydae consiliis in bellum exisset, nisi Simonides eos simul cum Therone in gratiam redegisset, ut iidem interpretes docent. Atque hinc adparet, cur Himeraci Hieronem in Thrasydaeum, quam rem auctor exsequitur, concitarint. WESS.

441. 73. *Κατηγοροῦντας τοῦ Θρασιδαίου*] Lectionem marginis sequor. Sed parum interest. Nam p. 270. (c. 55.) simile recurrit. RHOD.

441. 87. *Καὶ τὴν μὲν Κατάνην μετωνόμασεν Αἴτην*] Hanc ob caussam Hieronem *Αἴτην* *κτίστορα* Pindarus nuncupavit apud Strabonem L. VI. p. 412. A., seque ipse Hieron *Aetnaeum* in sacris certaminibus proclamari iussit. Schol. Pindari Od. I. Pythion. v. 1. *τὴν δὲ Κατάνην ἀνακτίσας, ὁμωνύμιος τῷ παρακειμένῳ ὄρει Αἴτην προσηγόρευσε, καὶ ΑἴΤΝΑΙΟΝ ἐαυτὸν κατὰ τοὺς ἀγῶνας νεκῶν ἀνεκέρουξεν.* Misit autem in urbem a se instauratam, *νεοκτίσταν Αἴτην* Pindar. Od. IX. 3. Nemeon. dicit, colonos *Γελώους καὶ Μεγαρεῖς καὶ Σκρακουσίους, ὄντας τῶν Δωριέων ἀποίκους*, si vera perscripsit idem schol. in extremam Od. I. Pyth.; Noster enim alios memorat. Errorem festinantis Casauboni levem de tempore conditae Aetnae tetigit vir doctus Miscellan. Observ. Vol. II. p. 3. WESS.

441. 92. *Ἐκ τῆς γενομένης μυριάδρον πόλεως*] Habebis *Τραχίνα μυριάδρον* L. XII. 59. et *Ἐγεσταίων μυριάδρον πόλιν* L. XX. 72. et *μυριάδρον τὴν Ὀλυμπον* Excerpt. Vales. p. 341., de qua eadem urbe Hegesias apud Agatharchidem de Rubr. Mari p. 17. *ἐκ μυριάδρον πόλεως ἐξῆλθον, ἐπιστραφεῖς δ' οὐκ ἔ' εἶδον.* Quod vertitur: *Veni ex urbe MYRIANDRO, reversus non amplius vidi.* Ego vero haud vidi magis. WESS.

441. 99. *Τοὺς βονλομένους ἐπολιτογράφησεν*] Idem esse atque *ἐξ δόγματος κοινοῦ πολιτείας τυχάνειν* Pollux ex Philisto, qui usurparit, docet L. III. 56. Unde paene conficeres in Sicilia praecipui usus fuisse. Noster certe de civibus allectis saepenumero adhibuit, et plerumque quidem in Sicularum rebus, ut infra c. 72. et 85. XIII. 20. XIX. 2. Tamen Iosephus L. II. C. Apion. p. 491. *τοῖς δὲ ῥήτορσι (ἐφηζαν) πολιτογραφεῖν διὰ ψηφισμάτων ξενῶν θεῶν τὸν ἐπιτήδειον.* WESS.

441. 2. *Ἐτε πενήχοντα καὶ ὀκτώ*] Vide L. XIII. 62. WESS.

442. 7. *Γραῖον Μάλλιον*] *Μάνλιον* recte corrigit Rhodemannus, nec aliter vetus interpres. Quae vero ad hunc annum referuntur Spartanorum consilia de asserendo sibi maris imperio, ea serius contigerunt, et tum potissimum, cum Graeci, Pausaniae insolentia offensi, ad Athenienses sese adiunxissent, qua de re antea dicere memini. WESS.

442. 18. Τὴν σπουδὴν μεῖζονα ποιήσεσθαι] Perspicio non desore, quibus sana haec videbuntur. Mihi, ut vere dicam, aliud sedet. Qui enim hic orationis progressus, quis color? τὴν σπουδὴν μεῖζονα ποιήσεσθαι, τοὺς τε τῶν ἰδιωτῶν οἴκους πολλὴν ἐπίδοσιν λήψεσθαι; cui bono adiectivum δυνατωτέρων? Solent pro- fecto in eiusmodi ordine commune reipublicae privatorum com- modis opponere. Libanius, etsi alio in genere, Orat. ad Iulian. p. 182. C. ὁ τοῖς μὲν ἰδίους οἴκους μεγάλους ἐποίησε, τοῖς δὲ κοι- τοῖς περιέχειν ἄμορφιαν. Hoc bonum et elegans; quo nihil tamen inferius Nostri erit, modo τὴν πόλιν μεῖζονα ποιήσεσθαι refinxeris. Tum opportune succedet καὶ δυνατωτέρων et cetera omnia. Nam recuperato maris imperio non poterat, quin civitatis vires et privatorum opes in maius accrescerent. Sic censẽo. Tuum iam erit arbitrium, rectene coniecerim. WESS.

442. 22. Ὅπως μὴ ζωλήν ἔχωσι τὴν ἡγεμονίαν] Oracu- lum, quo et deinceps Agesilaum, altero pede claudum, regno excludere annexi sunt, servarunt Plutarch. Lysand. p. 446. A. Agesil. p. 597. C. et Pausan. III. 8. Porro, quod sequitur statim, εἰς οὐδὲν ἔτερον ἢ τὸ παρὸν λέγειν, cave suspectum habeas, aut in λήγειν, ut factum recorder, commutes. S. Paullus Epist. ad Ephes. V. 32. ἐγὼ δὲ λέγω εἰς Χριστὸν καὶ εἰς τὴν ἐκκλησίαν. Dio Chrysostom. Orat. XXXII. p. 381. A. ὃν (λόγον) εἰς Ὁραφέα καὶ ὑμᾶς ἔλεγεν. WESS.

442. 42. Καὶ χορημάτων πλεῖθος ἐπόριζον] Rhodomannus maluit in Addend. ἐπορίζοντο, quod et ego praeferrem, libri si addicerent. Χορήματα πορίζειν ἐπιπορότατον γυνή, quod repe- riundae pecuniae sit peritissima, Aristoph. Eccles. v. 236., καὶ χορήματα ἐπόριζον τοῖς φιλονεικοῦσι — ἐπὲρ τῶν πρωτείων, de pecuniis collatis, ut principatus retineretur, Noster L. XIII. 36., ubi tamen scripti Codd. ἐπορίζοντο. WESS.

442. 47. Ἀεστοροίδου] Sic praestat. Ἀεστοροεΐδου opera- rum esse peccatum monuit Stephanus, et firmat Ἀεστοροίδης scriptor τῶν κατὰ πόλιν μυθικῶν apud Photium Biblioth. Cod. CLXXXIX. p. 470. et Tzetz. Chil. VII. 649. WESS.

443. 57. Καὶ μεγάλη ναυμαχία νικήσαντες] Praedicat hanc Hieronis partam de Etruscis victoriam Pindarus Pythion. Od. I. 139., cum de Tyrrhenorum populo:

Νασιστόνον ὕβρειν ἰδῶν

Τὴν πρὸ Κύμας.

Οἷα Συρακοσίων ἀρ-

γῶ δαμιασθέντες πάθον

Ὠκυπόρων ἀπὸ ναῶν.

Scholiastae, Carthaginienses socios hoc bello Tyrrhenis adiungen- tis, errorem perstrinxit Cel. Barbeyrac. Histor. Foeder. P. I. p. 95. De Tyrrhenorum autem maris imperio auctor L. V. c. 40. et in- comparabilis Is. Casaubonus ad Polybii I. 20. WESS.



443. 63. Γάϊον Κορνήλιον Λέντουλον] Suffectus fuit in C. Servilii, qui cum L. Aemilio consulatum inierat, locum. Vide Pighium Fastor. L. II. p. 107. WESS.

443. 64. Πόλεμος ἐπέστη Ταραντίοις] Verior haec scriptura non fugit diligentissimum Rhodomannum in suis Addend. Sic c. 53. Ρωμαίοις πρὸς Οὐριεντάνους ἐστάσαντος πολέμου. Et c. 65. Ἀργείοις καὶ Μικηναίοις ἐπέστη πόλεμος. Tarenti vero, multis nobiliorum infelice hoc bello amissis, magna rerum facta commutatio est, populique imperium praevaluit. Δημοκρατία ἐγένετο ἐκ πολιτείας Aristoteles ait Politic. L. V. 3. Namque hoc cum Iapygibus bellum respicere certum est, quippe μικρὸν ἕστερον τῶν Μηδικῶν, uti dicit, gestum. WESS.

443. 75. Καὶ Ρηγίνων συμμάχων ὄντων πολλοὺς προσελ.] Ad tria millia, quos Miccythus, Anaxilae liberorum tutor, opem ferre Tarentinis adegerat, auctore Herodoto, maximam hanc cladem obiter describente L. VII. 170. WESS.

443. 87. Τίτος Μινούχιος καὶ Γάϊος Ὠράτιος Πολύειδος] Pro Μινούχιος redeat nobis e Fastis Coss. Μενήχιος, et pro Πολύειδος, Πολούϊλλος. RHOD. Nihil admodum dissentit St. Vin. Pighius Fastor. L. II. p. 110., et favent ex parte quadam Codd., in quibus Μινούχιος. Porro Archontem hac Olymp. LXXVII. Charetem agnoscit Dionysius Rom. Ant. L. IX. p. 594., sed victorem, qui stadii coronam abstulerat, Datem Argivum nominans. WESS.

443. 91. Θήρων ὁ Ἀζοργ. δυνάστης ἐτελεύτησεν] Oportet Theron exeunte primo huius Olymp. anno diem supremum obierit: principio enim curru victoriam Olympiae reportavit, laudatusque est excellentissima Pindari Od. II. Olympion., ad cuius initium vide veteres Criticos. Porro διεδέξατο recepi, quod auctor ita plerumque solet. WESS.

444. 4. Καὶ τῶν Ἀζοργ. καὶ Ἱμεραίων προσκαταλέξας] Absentia provocabuli τινὰς morabitur neminem, quippe haud invisitata. S. Lucas Evang. XXI. 16. καὶ θανατώσουσιν ἐξ ἡμῶν. Noster L. IV. 21. καὶ Ἀαζόνιον κλέπτοντα τῶν βοῶν ἀεῖλε. WESS.

444. 11. Τῆ μὲν οὖν μάχῃ ἐπροτέρησαν] Cur hoc receperim, causam dixi huius libri c. 12. WESS.

444. 15. Εἰς Μεγαρεῖς τοὺς Μισαίους καλουμένους] Legendum est procul dubio Νισαίους. Nam sic Aristophanes in Pace, Νισαῖοι Μεγαρεῖς, et sic vocabantur ab eorum antiquo rege Niso, a quo etiam Νισαία eorum portus dicebatur, et sic vocabantur ad differentiam aliarum eiusdem nominis urbium, quas recenset Stephanus. PALM. Εἰς Μεγαρεῖς τοὺς Νισαίους καλουμένους] Cum Megarenses Μισαῖοι nusquam occurrant, notissimique Νισαῖοι sint, adduci non potui, ut vitium propagari paterer. Apollon. Rhod. II. 749. Νισαῖοι Μεγαροῖς. Clarius Athenaeus XIV. 22. τὸν Μαισίωνα ἐκ τῶν ἐν Σικελίᾳ γησὶν εἶναι Μεγαρέων, καὶ οὐκ ἐκ τῶν Νισαίων ubi Casaubonus optime: Megarenses veteris et

*antiquae Graeciae distinguuntur ab aliis Megarensibus Siculis cognomine NISAEORUM.* Theocritus, *Νισαῖοι Μεγαρῆες ἀριστέϊοντες ἐρέτιμοις*, Idyl. XII. 27. WESS. *Τοὺς Νισαίους* scribendum esse, non fugit Ursinum, neque Scaligerum. IDEM in Add.

444. 16. *Ἐκεί θανάτων καταγνωσθεῖς ἐτελεύτησεν*] Rhodomannus verterat, *capitali iudicio damnatus sibi ipse mortem conscivit*: quod merito improbat Cl. Barbeyracius Histor. Foeder. P. I. p. 96., ab ipso interprete in Addend. iam olim correctum. Scripsit Pindarus Od. XI. Pythion. *Thrasydæo* Thebano, qui Pythiade XXVII et XXXIII victor abierat; sed alius is est, etsi Thebanus, e quo populo Theron originem suam derivabat, ni fallant Critici ad Od. II. Olympion., et huic pluribus annis superstes. WESS.

444. 21. *Περὶ τὴν ὀνομαζομένην Κοιμέραν*] *Κοιμέραν* rectius alii. Quid autem de hoc bello et CCC et VI Fabii Dionysius Antiq. Rom. L. IX. p. 581. et A. Gellius Noct. Attic. XVII. 21. tradiderint, nemini ignotum est. Tu vide Iac. Perizon. Animadv. Hist. c. 5. WESS.

444. 29. *Γάϊον Σεροῦλλιον*] Verius *Σπόροιον*, ut Livius II. 51., quo modo et corrigunt in Dionysio L. IX. p. 583. viri docti. WESS.

*Ibid.* *Ἐπὶ δὲ τούτων Ἡλεῖοι*] Deest Olympiadis recensio, non, ut puto, ab auctoris negligentia aut oblivione, sed a vitio codicis. Addendum igitur: *Ὀλυμπιάς δὲ ἤχθη ἐβδομηκοστὴ καὶ ἐβδόμη, καθ' ἣν ἐνίκα στάδιον Λάνδης (ἢ Λάτης) Ἀργεῖος*, ex Dionysio Halicarnasseo L. IX. p. 594. PALM. Imo vero tuae haec oblivioni, virorum optime, debentur. Diodorum eiusque amanuenses absolvit c. 53. De Eleis Strabo paria L. VIII. p. 519. A., *ἐκ πολλῶν δέμων* post bellum Persicum in unam urbem coisse referens. Pausanias L. V. 4. p. 382. *ζώμας* iisdem tribuit, e quibus unam in civitatem coaluerint, Oxyli aetate, diuque adeo ante haec tempora. Confer Sylburgium ad Pausan. L. I. 1. WESS.

444. 45. *Ἐδίλωσε τὴν ἰδίαν ἐπιβολὴν Θεμιστοκλεῖ*] Ab hac scriptura non discedo, tametsi scriptorum Codd. *ἐπιβολὴν* fortasse sint, qui non improbent. Nihil notius harum vocum conmutatione, cuius exempla dare in superioribus memini, suntque manifesta in Aeschini Orat. de Legat. Fals. p. 40. et Ioseph. Ant. Iud. XIV. 14. 1. Singulare est in his Irenaei L. I. C. Haeres. c. 2. *ἀγροῶντες αὐτοὺς, διὰ τὴν ἔξωθεν τῆς προβατείου δορῆς ἐπιβολὴν*. Vertit vetus interpres: *eos nimirum ob externum ovillae pellis integumentum haudquaquam agnoscentes*. Legerat *ἐπιβολὴν*, sententia non minus bona, imo, me iudice, meliore. Sed hoc leve est nec magni momenti. Id addo, vero non videri similia, quae hic ab auctore Diodoro prodita memoriae sunt. Crimen enim proditionis Themistoeli in pactum non legitur priusquam Argos, ostracismo civitate pulsus, concesserat. Quid? Pausanias

sua consilia cum Themistocle non communicavit, nisi exule. Diserte Plutarchus Themist. p. 123. C. πρότερον μὲν ἀπεκρύπτειτο (Pausanias) τὸν Θεμιστοκλέα, καίπερ ὄντα γῆλον. ὡς δ' εἶδεν ἐκκεκρωτότα τῆς πολιτείας καὶ ἔθροντα χαλεπῶς, ἐθάροσεν ἐπὶ τὴν ζωονίαν τῶν πραττομένων παρακαλεῖν. Porro coniecit eundem in annum magni viri exilium, fugam ad Admetum, inde in Asiam ad Persarum regem, commigrationem in urbem Magnesiam, mortem denique: quae citra dubium pluribus annis gesta omnia sunt. Hoc tamen bene, quod fugam ad Persarum regem huic anno illigaverit. Eam quippe ingressus est, cum Naxum Athenienses obsiderent, teste Thuecydide I. 137. Naxios in ordinem coactos secutum est praelium ad Eurymedonta, quo Cimon egregiam de Persis victoriam reportavit, eodem auctore I. 100. Quae pugna cum ab anno sequenti longe removeri non possit, liquido tempus, quo Themistocles in Asiam Spartanorum civiumque manibus elapsus evasit, constat. Non me quidem fugit, quid contra Diodorum disputarit H. Dodwellus p. 66. et 75. Annal. Thuecydid., quem in aliam opinionem et insertus Fastis Atticis Archon Aristides, de quo supra contra virum doctissimum contendimus, et Thuecydidis verba L. I. 100. nimium laxè accepta inpulerunt. WESS.

445. 60. Μετὰ τὴν κατάλυσιν τῶν τυράννων τῶν περὶ Πεισιστράτου.] Adstipulatur huic sententiae Androtion apud Harpocrat. voc. Ἱππάρχος, Hipparchum memorans, tyranni Pisistrati cognatum, primum omnium testularum suffragiis urbe pulsum, lege, tum maxime de ostracismo lata, τοῦ περὶ τὸν ὀστρακισμόν νόμον τότε πρῶτον τεθέντος. Nec alia mens Plut. in Nicia p. 531. A. Nota alioqui discordia est de prima eius origine, quam cum accurate exposuerit Ill. Scaliger in Euseb. Chronic. Ann. DCCCLXXXVII., illum, si lubet, adi. WESS.

445. 65. Φεῖγειν ἐξ τ. π. ἐτέτακτο πενταετῆ χρόνον.] Male sit amanuensibus, qui hoc vulnus Diodoro inflixerunt atque δεκαετῆ χρόνον, quo testula collabefacti patria carebant, in πενταετῆ deminuerunt. Quis enim credat in re adeo nota Nostrum errasse? praesertim cum *xv* anni veteris interpretis librariorum peccatum manifesto prodant. Eleganter Andocides Orat. in Alcibiad. princip., cum in periculum civitatis ostracismo amittendae venerat, ὁ μὲν οὖν ἀγῶν ὁ παρῶν, inquit, οὐ στεφανηφόρος, ἀλλ' εἰ χρόν μὴδὲν ἀδιζήσαντα τὴν πόλιν δέκα ἔτη φεῖγειν. Credo vitii occasionem fuisse eam comparationem, qua inferius c. 86. Syracusanorum Petalismum, quo damnatum πενταετῆ χρόνον φεῖγειν oportebat, cum Atheniensium Ostracismo componit. Inde sumtum *quinquennii tempus* hanc in sedem innigravit. Errorem animadvertit Io. Meursius Lect. Attic. L. V. 18. WESS.

445. 79. Ὅπερ εἰώθεισαν συνεδρεῖν ἐν τῇ Σπάρτῃ.] Suspecta mihi reddunt postrema vocabula scripti Codd., quodque

certo non adpareat, id concilium Spartae fuisse celebratum. Retinebo tamen, cum plura hic occurrant, alibi vix obvia. Id probare difficulter possum, *συνεδραεῖν* vi transitiva, ut Grammatici dicunt, instrui, praeterque scriptoris consuetudinem. Malim propterea *ὡπερ εἰώθεισαν συνεδραεῖν, quo colligi consueverant.* Eo ducit *ὡπερ*, quod in vetustis schedis. WESS.

445. 88. *Ὦν ἐποίησατο τὴν κρίσιν περὶ τε τῶν Ἀθην. καὶ τῶν Ἀργείων*] Inest his certissimum peccatum. Cui enim bono *Argivorum* haec mentio, quibus nihil commune cum navali ad Salaminem praelio? Namque hi, ceteris pro salute et Graeciae libertate fortiter in Persas depugnantibus, domi spectatores descenderunt, quod praeter Herodotum VII. 149. Noster commemorare haud praeteriit c. 3. et c. 65. Fuit autem certamen de honoris principatu cum Aeginetis, quibus ut primae deferrentur Spartani operam dederunt. Sic c. 27. *καὶ κρίσεως προτεθείσης περὶ τῶν ἀριστείων, χάριτι κατισχύσαντες* (Lacedaemonii) *ἐποίησαν κρίσειν, πόλιν μὲν ἀριστεῦσαι τῶν Αἰγινήτων.* Itaque verius erit *περὶ τε τῶν Ἀθηναίων καὶ Αἰγινήτων.* Si tamen nimium id videatur, arripi poterit Rhodomanni auxilium, quo in Addend. suis, *καὶ ἀριστείων, ait, haud dubie scriptum fuit: ut sit vertendum: iudicio de Atheniensibus et praerogativa praemiorum ediderant.* Mihi quidem certe alterutro, ut sententia constet, videtur opus. Tua in disquisitione, utrum praepotes, positum est. Nam de *ἐποίησατο* cur multa dicam, causam non video. Id sua se elegantia satis superque commendat. WESS.

446. 4. *Καθάπερ προειρήκαμεν*] Ubi vero? Equidem in superioribus nihil huius invenio: quae nisi pro arbitrio a Criticis inmutata dixeris, non enim commodum lacunae locum animadverto, aut haec inperite hic sunt inculcata, aut sui oblitus auctor est. WESS.

446. 12. *Φάσκοντες προδότην καὶ λυμεῖωνα τῆς ὅλης Ἑλλ.]* Lectionem marginis *ἀποκαλοῦντες* praefero. RHOD. *Ἀποκαλοῦντες προδότην*] Non repugno, quamquam discrimen haud magnum est. Vid. c. 26. De re ipsa Thucydides I. 137. et Plutarch. Themist. p. 124. et Epistolarum, quae Themistoclem auctorem mentiuntur, XIX. p. 100. WESS.

446. 23. *Ἄνο νεανίσκος Αἴγυας τὸ γένος*] Paulo distinctius hanc magni viri fugam iidem scriptores exsequuntur, sed nihil de iuvenibus ex Ligurum regione; quos equidem miror in intimam Epirum vicinamque Macedoniam hac tempestate penetrasse, ut mutandis mercibus lucrum facerent. Si liceret, *Λυγυστάς Lyncestas* scriberem, quorum regio Admeti regno paene adfinis fuit. Favent manu exarati libri, qui *Λιγυστάς* praefereunt. Verum haec divinatio est. WESS.

446. 29. *Ὅρομα μὲν Ἀνσιθείδην*] *Nicogenem*, Aegis Aeoicis longe omnium ditissimum, Plutarchus Themist. p. 124. E.

vocitat. Qui vero Xerxem eiusque copias, antequam in Europam transmitterent, magnificentissimo hospitio exceperit, is Herodoto VII. 27. *Pythius*, Myis F., est. WESS.

446. 37. *Ἀγαγεῖν αὐτὸν πρὸς τὸν Ξέρξην*] Sequitur eos scriptores, Ephorum, Dinonem, Clitarchum, Heraclidem, et complures alios Diodorus, qui Themistoclem Xerxem regem convenisse tradiderunt Plutarcho teste in Themist. p. 125. B. Nec multum diversa est D. Petavii sententia L. X. de Doct. Temp. c. 26. At Thucydides I. 237. et Charon Lampsacenus, illi tempori paene aequales, Xerxe mortuo ad Artaxerxem, tantum quod regni gubernaculis assidentem, adiisse adfirmant: quorum opinio cum vetustis annalibus, quod iam olim prodidit Plutarchus, et summa diligentia commonstravit Celeb. Hieron. van Alphen Part. III. c. 6. Commentar. in Daniel. c. ix., optime congruat, eam praeferendam priori arbitror. Rerum series, ut deinceps videbitur, firmiter eandem egregie. WESS.

447. 48. *Ἀθήνην πολυτελέσι παραπετάσμασι κεκοσμημένην*] Non praeteriit haec Diodori, ut luxum mulierum Persicarum proponeret, Barn. Brissonius Regn. Persar. L. II. p. 514. Ut enim nostra aetate per Orientis regiones impensissime cavent, ne se feminae aliorum in conspectum dent, ita et veteri aevo. Quare peregre si abirent, curribus opertis includebantur, sive, quae Plutarchi verba, *ἐν ταῖς ὁδοιπορίαις ὑπὸ σκηνῶς κέκλιον περιπεφραγμέναις ἐπὶ τῶν ἀρμαμαζῶν*. qui quoque pro re memorabili morem regis Artaxerxis Mnemonis consignavit, quo legitimae uxori auctor fuit, ut, velis, quae currui oppansa erant, subductis, facilem se et conspiciendam omnibus, quibus ea conventa opus erat, praeberet. *γυναικα τὴν γρησίαν ἐκέλευσε τῆς ἀρμαμάζης τὰς ἀλλοδαίας περιελεῖν, ὅπως οἱ θεόμενοι κατὰ τὴν ὁδὸν ἐντριχάνωσι* Apophtheg. p. 173. F. WESS.

447. 73. *Ἐξαιτοῦντος ἐπὶ τιμοσίαν*] Non refert, hoccine retineas, an ἐπὶ τιμοσίᾳ. Res ipsa vix alibi obvia est, quod mirum non est, cum plerique Thucydidem sequantur. Nec abhorret tamen a vero. WESS.

447. 91. *Ἐχοῦσαν θάλατταν ἐΰχθιν*] Negligunt elegans vocabulum Lexicorum plerique conditores. Rhodum tamen, piscoso incinctam mari, *ἐΰχθιν* Lynceus adpellat in Athen. VIII. p. 360. E. Mox τοῦ παρ' Ἑλλήσι φόβου parum probō: timorem notat, qui Graecos incesserat. Malim τοῦ παρ' Ἑλλήνων. De urbibus, quas Persarum rex Themistocli dederit, copiose B. Brisson. de Reg. Pers. I. p. 212. WESS.

448. I. *Καὶ μνημεῖον τοῦ ἔτι νῦν διαμένοντος*] Vid. Thucydidem I. 139. quaeque inibi de *μνημεῖον* vocabulo diligentissime perscripserunt viri celeb. Ioseph. Wasse et C. A. Dukerus. WESS.

448. 3. *Στρατηγεῖν ἐπὶ τοῦ πολέμου*] Non placet hoc mihi loco ἐπὶ, neque admodum *περὶ*, quod in scriptis Codd.; si abesset, non revocarem. Dionysius Rom. Ant. L. III. p. 178. *καὶ νομίσαντες οὐχ ἰκανὸν εἶναι πολέμου στρατηγεῖν*, saepeque alii. Quod statim consequitur, *τὸν δὲ συγχωρήσαντα*, absolute ponitur. Spectat enim Themistoclem. Genus structurae praeter ceteros explicuit Tib. Hemsterhusius in Luciani Halcyon. c. 8. WESS. Quae de absoluta structura monui, alibi erunt commodiora. Pendet verba ex *φρασί*, quod in superioribus. IDEM in Add.

448. 7. *Κύλικα τοῦ αἵματος πληρώσαντα ἐπιεῖν*] Sanguinem taurinum, si bibatur, pestilentem esse, docent Nicander Alexiph. v. 312. et Dioscorides Alexipharm. c. 25., ferunturque eo hausto periisse Tanyoxarces in Ctesiae Persic. c. 10., Aeson, Iasonis pater, superius L. IV. 51. atque alii plures. De Themistocle vulgi is rumor fuit, quem falsi arguit Symmachus in schol. ad Comici Equit. v. 83. WESS.

448. 11. *Ὅτι καλῶς ἐπολιτεύθη τὰ πρὸς τοὺς Ἕλληνας*] Eadem sententia Aristidis, quum de Themistocle, *ἐπειδὴ ἔδει στρατεύειν ἐπὶ τὴν Ἑλλάδα, προὔγκρινε τελευτῶν ἔργω μὲν ἄπισαν λύσας αἰτίαν, δέξας δ' ὀπόσον τιμᾶται τὰς πρότερον πράξεις καὶ πολιτεύματα, καὶ ὅτι οὐδέποτε ἐκὼν εἶναι τοῦ καλοῦ καὶ τοῦ προσήκοντος οὐδὲν πρότερον ποιήσεται, οὐ πλοῦτον, οὐ παιδαίς, οὐ τὴν σωτηρίαν αὐτήν*. Tom. III. p. 362. In quibus cur *πράξεις* maluerim, quam *τάξεις*, fecerunt et res ipsa et scripti libri. Paullo post si qui *ἐπεὶ πάρεσμεν* maluerint, utantur arbitrio suo: mihi ad orationem necessarium non videtur. WESS.

448. 37. *Αὐτὴν διέσωσε*] Vide Aeschinem apud eundem Aristidem T. III. p. 366. WESS.

449. 45. *Χαλεπιωτάτην πρὸς ἐκείνον εὐρίσκομεν*] Scripti manu libri hoc postulant. Quam vero Athenienses maximis reipublicae suae viris fuerint infesti, exempla haud rara docent. Quare Aeschines, quum incommoda et pericula proposuisset, quae Athenis in rerum administratione multis usu veniebant, *ποῦ τέθνηκεν*, inquit Dialog. III. 12., *Μιλτιάδης; ποῦ Θεμιστοκλῆς; ποῦ δ' Ἐφιάλτης; ποῦ δ' οἱ πρόωνν δέκα στρατηγοί;* ingratum animum civibus eleganter exprobrans. Id mireris, in postrema etiam Dialogorum editione placere potuisse, *ποῦ δ' οἱ πρόωνν βασιλεῖς καὶ στρατηγοί;* cum *βασιλεῖς* omittat Cod. Medic., atque id, quod repraesentavi, Io. Stobensis servarit, et Socrates in sequentibus non alios respiciat ac decem eos Atticae classis duces, qui, egregia ad Arginusas de Spartanis parta victoria, auctoribus Theramene et Callixeno capitis fuerant damnati. Vide Observat. mearum L. I. 1., ego ad institutum revertor. WESS.

449. 51. *Πόλιν ἔκτισε Τευξοῦντα*] Lege *Πυξοῦντα*, *Buxentum*, de qua Plinius L. III. c. 5. PALM. *Πόλιν ἔκτισε Πυξοῦντα*] Verum urbis nomen, ut Palmerius, et eo prior Ph. Cluverius Ital.

Ant. L. IV. p. 1261. edixerant, revocavi. Auctorem do Strabonem L. VI. p. 388. μετὰ δὲ Παλίνορον Πυξοῦς, ἄκρα καὶ λιμὴν καὶ ποταμὸς· ἐν γὰρ τῶν τριῶν ὄνομα ᾧκεισε δὲ ΜΙΚΥΘΟΣ ὁ Μισσίου ἄρχων τῆς ἐν Σικελίᾳ. Haud quidem me fugit in Anagraphe Olympiadum Scaligerana Archonte Praxiergo reperiri, Μίνεθος δυνάστης Πηγίων καὶ Ζάγκλης πόλιν ἔκτισε Τευξοῦντα. Sed ea nihil moror, quippe hinc descripta. Confer L. Holstenium ad Stephani Byzantini Πυξοῦς. WESS.

449. 55. Ἀππιον Ροῦρον] Fasti Coss. Ναύτιον habent. RIBOD. Γάιον Ναύτιον Ροῦρον] Ex Vaticani libri vestigiis gentile Cos. nomen instauravi: cognomen pravum est, ex RUTILLO, ut Capitolino in marmore, natum. WESS. Ναύτιον Ρουτίλον correxit Ursinus. IDEM in Add. Correxerit etiam Pighius L. II. p. 112.

449. 61. Καὶ ἐν Βυζαντίῳ καταπλεύσας ἐπὶ πόλιν etc.] Nisi locus hic sit defectus, atque obsidio Byzantii, qua Cimon Pausaniam ea in urbe inclusit, exciderit, legendum erit ἐκ Βυζαντίου. Coactus enim in ordinem Pausania et urbe ea eieceto, Cimon in Thraciam tramisit, ac Eionem, Persis oppressis, sub Atheniensium ditionem redegit, docentibus Thucydide I. 98. et Plut. Cim. p. 482. C. Porro satis constat, Diodorum iterum hoc loco plura coniungere, quae diversis temporibus et ante quidem hunc annum, a Cimone fortiter sunt administrata. WESS.

449. 63. Σκύρον δὲ Πελασγῶν ἐνοικ. καὶ Δολόπων ἐξεπαλ.] Scyrum, quam eo tempore Dolopes incolebant, quod contumacius se gesserat, vacuefecit, sessores veteres urbe insulaque eiecit, agros civibus divisit, sic Nepos Cimon. c. 2. Quo tempore et Thesei ossa collegit, Athenas deportanda apud Plut. Thes. p. 17. B. et Cim. p. 483. WESS.

449. 75. Ταύτας παραχοῆμι συνέπειεν ἀποστήναι] Credo scripsisse Diodorum συνέπειεν ἀποστήναι, persuasit illis, ut descerent. Id requirunt praecedentia, et firmat συνέπειεν ἐθελοντὶ ἀπογοῦσθαι cap. 83. Iam quod est in Mss. ὅσαι δ' ἠπύρονον δίαλωτοι sive δίπλωτοι, id manifesto corruptum ex ἐγλωττοι, quomodo L. XII. 68. αἱ δὲ εἶχον ὄχλον βαρβάρων διγλώττων Βισαλτικῶν. Et L. XVII. 68. ἀνὴρ διγλωττος. In Cariae autem urbibus mixtim Graecos et indigenas, qui Poëtae βαρβαρόφωνοι, incoluisse exploratum satis est. WESS.

449. 77. Βία προσάγων] Hoc loco exemplaria habent βία προσάγων. At in loco qui est p. 310. (L. XII. 46.) βίαν προσάγειν. At vero p. 318. (L. XII. 62.) rursum βία προσάγοντων. Ibidem et βία προσάγειν. De cuius ultimi loci lectione dubitari non potest. STEPH.

449. 79. Πύσας προσελάβετο] Movent huic scripturae controversiam vetustae schedae, quarum πείσας haud sane pro reicculo habendum: frequens enim, cum oratione civitates in partes pelliciuntur. Sic L. V. 60. καὶ τὰ μὲν πείσας, τὰ δ' ἀναγκά-

σας ἐβασίλευσε μέρους τῆς χώρας. Et L. XVII. 91. καὶ τῶν πό-  
λειων ἄς μὲν βία χειρωσάμενος, ἄς δὲ πειθοῖ προσαγόμενος.  
Itaque ab eo probando haud multum deflecto. WESS.

450. 84. Τιθραύστης] Ex Ephoro hoc sumtum, qui  
Τιθραύστην φησὶ τῶν βασιλικῶν νεῶν ἄρχην καὶ τοῦ πεζοῦ  
Φερενδάτην apud Plutarch. Cim. p. 486. B., quem exercitus  
pedestris ducem Φερενδάτην Noster vocat, male fortasse: alterum  
enim apud Persas receptissimum. Vid. Herodot. VII. 67. WESS.

450. 88. Πρὸς τριακοσίας καὶ τετραράκοντα] Ephorus  
apud Plutarchum πεντήκοντα καὶ τριακοσίας. Unde aut hic aut  
illie in minore numero error inest. WESS.

450. 94. Ἀνεχώρησαν] Ἀπεχώρησαν C. R. I. V. sat bene.  
v. c. 61. WESS.

450. 8. Ἐπιβιάσας τοὺς στρατιώτας] Scripserat ἀπο-  
βιάσας, ut pulchre in Addend. advertit Rhodomannus. Sic L.  
IV. 81. ἀποβιάσας δὲ τὴν δύναμιν. Et Plutarchus ipsa hac in  
re, ἀπεβίαζε τοὺς ὀπλίτας ἔτι θερμοῦς τῷ κατὰ τὴν ναυμαχίαν  
ἀγῶνι Cimon. p. 486. D. WESS.

450. 27. Τῆς δὲ νεκτὸς οὔσης ἀσελήνου] Vide L. XII. 56.  
XIII. 72. WESS.

451. 46. Τριήρεις τριακοσίας καὶ τετραράκοντα ναῦς]   
Non satis haec respondent extremo c. 60., nedum Thucydideis  
I. 100. Corn. Nep. Cimon. c. 2. Plut. Cim. p. 486. E.; qui,  
quamquam in omnibus non consentanei, numerum tamen longe  
minorem edunt. Dices ναῦς et τριήρεις hic posse distingui; quod si  
feceris, neque enim necessarium, nondum res expedita erit. WESS.

451. 53. Ἐν ἀνδρία] Lege ἐπ' ἀνδρία. RHOD.

451. 55. Ἀνέθρηκε τῷ θεῷ] Haud scio an τῇ θεῷ ex  
Reg. 2. praestet, ut *Minerva*, Atheniensium tutelare numen,  
intelligatur: ceteroqui Apollo erit. Xenophon Ages. p. 24. ed.  
Oxon. ὥστε — πλέον τῶν ἑκατὸν ταλάντων τῷ θεῷ ἐν Δελφοῖς  
δεκάτην ἀποθῦσαι. ubi Hutchinson. WESS.

451. 58. Ἐξ οὗ γ' Ἐθρώπην etc.] Idem Epigramma Ari-  
stides exscripsit T. III. p. 260., sed in multis hinc discrepans;  
adronam, ut differentia sit manifestior:

Ἐξ οὗ τ' Ἐθρώπην Ἀσίας δίχα πόντος ἔκρινε  
Καὶ πόλιος θρητῶν θοῦρος Ἄρης ἘΦΕΠΕΙ,  
᾿ΟΥΛΕΝΙ ποὺ ΚΑΛΛΙΟΝ ἐπιχθορίων γένει' ἀνδρῶν  
Ἐργον ἐν ἠπείρῳ καὶ κατὰ πόντον ᾿ΟΜΟΥ.  
Οἶδε γὰρ ἐν ΓΑΠΗ ΜΗΛΩΝ πολλοὺς ὀλέσαντες,  
Φοινίκων ἑκατὸν ναῦς ἔλον ἐν πελάγει  
Ἀνδρῶν πλιθοῦσας μέγα δ' ἔστινε Ἀοῖς ἐπ' αὐτῶν  
Πηγηῖδ' ἀμφοτέροις χερσὶ, κράτει πολέμου.

Sic ille. Discrimen ex diversa Epigrammatis editione natum videretur, neque est, cur Nostri partes descrias, si οἶδε γὰρ ἐν γαίῃ etc. exceperis: id enim arbitror opportunius. WESS.



451. 64. *Μέγα δ' ἔστενευ' Ἀσίς ὑπ' αὐτῶν*] In exemplaribus nostris legitur *μέγα δ' ἔς γενεάς ὑπ' αὐτῶν* et sine sensu et cum metri dissolutione. At *μέγα δ' ἔστενευ' Ἀσίς ὑπ' αὐτῶν*, (ut apud alios scriptores legitur hoc idem epigramma citantes) utroque incommodo vacat. Nam *Ἀσίδος αἴης* alibi quoque legimus in fine versus hexametri cum a longo in *Ἀσίδος*, licet in *Ἀσίας* corripī soleat, ut factum est in primo huius epigrammatis versu. STEPH. Vere Stephanus, cuius correctionem stabilit liber Vatic.; namque *ἈΕΣΙ'ΕΝΕΑΣΙΣ* non aliunde originem accepit atque ex *μέγα δ' ἔστενευ' Ἀσίς*. WESS.

451. 66. *Ἐπ' Ἀρχοντος δ' Ἀθήνησι Φαίδωνος*] Lege *Ἀψηφίονος* ex Marmore Arundeliano linea 72., cui concordat Diogenes Laërtius in Socrate (L. II. 41.) PALM. *Ἐπ' Ἀρχοντος δ' Ἀθήνησι Φαίδωνος*] Instauravi Archontis nomen, etsi corruptum. Videri quidem posset Plutarch. Thes. p. 17. B. patrocinari *Φαίδωνι*, cum μετὰ τὰ Μηδικὰ *Φαίδωνος ἄρχοντος* Athenienses oraculo monitos ait, ut reliquias Thesei Athenas reportarent, quas relatas circa hoc tempus, Scyro subacta, diximus, nisi et illic vitio depravatum Archontis esset nomen. Plutarchus enim ipse in *Cimon*. p. 483. E. *Ἀψεφίωνα* adpellat. Scribe ergo *Ἀψεφίονος*, aut *Ἀψηφίονος* ex Marmore Oxoniensi cum Palmerio, quicum consentiunt Stanleius ad vitam Aeschylī p. 706. et Rich. Bentleius Dissert. de Phalarid. Epist. p. 282., aliorum de hoc Archonte peccata uberius persecutus. WESS. Phaedonem ut Apsephioni suffectum inter pseudeponymos archontes retulit Corsinus F. A. p. II. t. I. p. 182. seq. Suffectorum autem nulla ratio est fastis excludendorum.

451. 68. *Μεδιολανός*] Muta *Μεδιολανός* in *Μεδουλλίνος* et *Μάνιος Ουάσων* in *Μάνλιος Ουόλσων*. RHOD. Certa res est ex Fastis, et suffragatur Pighius Fastor. L. II. p. 113. Manlio gentile nomen restitui ex Codd., levi opera adiutis, quod et in cognomine fecissem, scribentium peccato ex *ΟΥΟΑΣΩΝ* progenito, si quid illi opis tulissent. WESS. *Μάνλιος Ουούλσων* Ursin. IDEM in Add.

451. 71. *Ἐν γὰρ τῇ Σπάρτῃ γενομένων σεισμῶν*] Liqueat ex Thucydide I. 101. terrae hunc tremorem posteriorem fuisse defectione Thasiarum, de qua Noster c. 70. Nec aliud quidquam collegeris ex Plut. *Cimon*. p. 488., qui cum addit, terram Spartaem movisse anno regis Archidami quarto, a Nostri rationibus, nisi vitium in quatuor illis annis sit, longissime discedit. Initium enim Archidami posuit anno I. Olymp. LXXVI. huius libri c. 48. Pausanias itidem discordat, Hilotas bellum Spartanis movisse referens κατὰ τὴν ἐνάτην Ὀλυμπιάδα καὶ ἐβδομηκοστήν, sic enim scripsit, ut Io. Meursius L. II. de Archont. c. 15. optime vidit, L. IV. 24., quo tempore cum Thasiarum defectio contigerit, Diodoro tradente c. 70., haud iniuria opineris, belli Messeniaci principium, et terrae motum, qui bello occasionem dedit, ab auctore nostro fuisse anticipatum. WESS.

452. 79. Ὡσπερ δαίμονιον τιτὸς νειμεισάντος] Iniuriis agitati Hilotes, supplices considerant ad aram Neptuni Taenarii, quos contra datam fidem cum occidissent, valuit opinio, Neptunum hanc cladem civitati conciliasse, uti memorat Schol. Aristoph. Acharn. v. 509. et Aelianus L. VI. Var. Hist. c. 7., ubi viros egregios Kuhnum et Perizonium consulit. WESS.

452. 81. Εἰλωτες καὶ Μεσσηνιοὶ] Explicabit Thucydides I. 101. πλείστοι δὲ τῶν Εἰλωτῶν ἐγένοντο οἱ τῶν παλαιῶν Μεσσηνίων τότε δουλωθέντων ἀπόγονοι ἢ καὶ Μεσσηνιοὶ ἐκλήθησαν οἱ πάντες. Erant ergo plerique origine Messenii, sed in servitutem redacti, et Hilotibus, de quorum servili conditione Athen. L. XIV. 21., Strabo VIII. p. 561. et Pausan. III. 20. p. 261., adscripti. WESS.

452. 96. Τοῦτον τὸν τρόπον οἱ περιλειφθέντες] Consentit Polyaeus Stratag. L. I. 41. 3. Tremuit autem terra vehementer adeo, ut ex aedibus Spartanis vix quinque durarent, eodem Polyaeo et Aeliano Hist. Var. L. VI. 7. et Plut. Cim. p. 488. E. testibus. Quare nec mirum accidet, xx Lacedaemoniorum millia labefactarum aedium ruinis fuisse oppressa. WESS.

452. 5. Τῆς Μεσσηνίας χωρίον ὀχρὸν] Ithomen, ut brevi dicet ipse, et Thucyd. I. 102. WESS.

452. 13. Ὡς τῶν Ἀθηναίων μελλόντων ἀποζῆναι] Venerat illis auxilio valida cum manu Cimon apud Plutarch. in eius vita p. 489. quem, quod Atheniensibus, qui Spartam negligendam censuerant, parum fiderent, deinceps quaesitis caussis dimiserunt. Refer huc quae habentur ea in Oratione, cui *Lesbonactis* praescriptum est nomen, p. 178. WESS.

452. 19. Τὴν ἐξοχὴν ἐπίρσεων] Vide L. XII. 49. et Rittershus. in Oppiani Cyneget. III. 144. Hoc loco *προσεύειν* haud aliud est atque iram simultatis quasi flabello ventilare, aut certe, inimicitiam palam prae se ferre, ut *προσεύω σοὶ τὴν σωτηρίαν, ἀντὶ τοῦ ἐξοχαίνω καὶ ἀνόπτω* apud Suidam et *τὶ γὰρ — προῶτοι ἡμῖν (oculi) τὸ κάλλος ἐπροσεύσατε* in Philostrato, de quibus H. Stephanus Thes. T. III. p. 631. WESS.

453. 29. Ἐπὶ δὲ ἔτη δέκα] Thucydides I. 103. et inferius c. 83. Noster. WESS.

453. 32. Ἀρχῶν Θεαγενίδης] Adstipulatur Dionysius Rom. Ant. L. IX. p. 611., sed Θεαγενίδης scribens, et Plutarchus T. II. p. 835. A. cui Θεογενίδης. Coss. L. *Aemilium Mamercum* et *Goriscum Iulium*, sic scribi hic oportuisse vidit Pighius Fastor. L. II. p. 114., Dionysius cum principio superioris Olympiadis, a Nostri rationibus quadriennio, ut solet, discrepans, committit p. 594. WESS.

453. 34. Στόδιος Ἰούλιος] Fasti Romani *Goriscum* nominant. *Οὐόπισκος* igitur scribendum. RHOD. Ἰουλος Reg. I. Eo utere, si lubet. Fuit enim hoc cognomine. WESS.

453. 42. Περὶ τῶν ἱερῶν τῆς Ἡρας] *Heracum* intelligit,

quod Iunonis prope Mycenae templum commune Argivis atque Mycenaeis erat, Strabone auctore L. VIII. p. 571. et Pausan. II. 17. Mox *Νεμεῖον* aut *Νέμεον* ex decreto Ethnicographi scribendum foret; cuius certaminis dispositio Argivis erat propria, quamquam et alii subinde eam sibi vindicarunt. Auctor Argumenti III. ad Pindari Nemeonic. *προέστησαν δὲ τοῦ ἀγῶνος καὶ Ἀργεῖοι καὶ Κορίνθιοι καὶ Κλεωναῖοι*, sic recte: nam *Σεκελεωναῖοι*, qui Argumento V. in horum locum succedunt, nulli fuerunt tota Peloponneso, ex Cleonaeis scribentium errore nati. WESS.

453. 48. *Συνεμάχησαν οἱ Μυκηναῖοι τοῖς Λακεδαιμ.*] Miserunt LXXX bellatores, qui ad Thermopylas cum Leonida rem dextra gesserunt apud Pausan. II. 16. WESS.

453. 57. *Ἐξ τῶν συμμάχιδων πόλεων*] Athenienses, Lacedaemoniis offensi, cum Argivis, Spartanorum inimicis, societatem iniierant, Thucydides I. 102., qui utrum et Argivis in delendis Mycenis auxilio fuerint, non dixero. De Cleonaeis et Tegeatis certa res est ex Strabone L. VIII. p. 579. B. WESS.

453. 72. *Καὶ δέμεινεν ἀόκητος μέγρι τῶν καθ' ἡμᾶς χρόνων*] Adeo deletae fuerunt Mycenae, ὥστε νῦν μηδ' ἴχνος εἰρήσκεισθαι τῆς Μυκηναίων πόλεως, quae tamen Strabonis L. VIII. p. 571. non admodum districte sunt accipienda: durabant enim in Pausaniae usque aetatem rudera urbis varia, sicuti docet L. II. c. 16. p. 146. WESS.

454. 77. *Ἢ Φούριον Φίρριον*] Restitue ex Fastis *Λούζιον Φούριον Φαῖσον*. RHOD. De cognomine non intercedo. Id in editis et scriptis libris flagitiosissime corruptum. Praenomen mutari vetant Livius II. 56. Dionysius IX. Antiq. Rom. p. 597. WESS. *Φοῦσον* iam Pighius L. II. p. 115.

454. 78. *Τοῦς Ἀναξίλα παῖδας*] Horum e numero *Cleophon* fuit, nisi fallant Critici ad Pindari Od. II. Pythion. v. 34. Namque eum pariter cum patre Rhegii imperasse referunt, et Lorensibus arma intentasse. Hi *parvuli* erant, cum pater decederet, apud Iustin. IV. 2. WESS.

454. 87. *Ἀνὴρ ἰὸν ἀγαθὸς*] *Spectatae fidei servus* propterea Iustino. *Tutelam vero sancte gessit, imperiumque tam clementer obtinuit, ut Rhegini a servo regi non dedignantur. Perductis deinde in aetatem pueris et bona et imperium tradidit, ipse parvo viatico sumto profectus est*, sic de Micytho Macrobius Satur. L. I. 11. WESS.

454. 98. *Ἐν Τεγείαις*] Tonum vocis mutavi. Auctor ipse *Τεγέαι* plerumque, ut ceteri, vocat L. XII. 79. XV. 81. Concessisse vero Micythum Tegeam Arcadiae, ibique summa tranquillitate consenuisse, non *Olympiae*, quemadmodum Macrobius, testes sunt locupletes Herodotus VII. 171. et Pausan. V. 26. p. 447. WESS.

454. 1. *Ἐτελεύτησεν ἐν τῇ Κατάνῃ*] Ex calculi dolore, quicum tota vita conflictatus est, referentibus Plutarcho T. II. p.

403. C. et Graecis Interpr. ad princ. Od. III. Pythion. Pindari. Vicerat autem hac Olymp. LXXVIII., cuius honoris fructum exiguum abstulit morte praeventus, ut ad initium Od. I. Olympion. iidem Critici docent, chronologiam Diodori egregie firmantes. WESS.

454. 2. Ὡς ἂν κτίστης γεγονώς] De honoribus, qui urbium conditoribus deferebantur, Ill. Spanhem. Diss. IX. de Usu et Praest. Num. p. 562. et nos inferius L. XX. 103. Schol. Pindari ad princ. Od. I. Nemeon. Ἰέρων γὰρ οἰκιστὴς ἀντὶ τυράννου βουλόμενος εἶναι, Κατάνην ἐξελών, Αἴτην μετωνόμασε τὴν πόλιν, οἰκιστὴν ἑαυτὸν προσαγορεύσας. Vide et c. 49. Tumulum, quem ut urbis conditor ibidem habebat, reversi non multo post in patrias sedes Catanenses disiecerunt, teste Strabone VI. p. 412. A. WESS.

454. 5. *Αυσανίων*] Archontem hunc proscribit, ex errore, ut ait, repetitum a Diodoro ex Olymp. LXXXIV. 3. H. Dodwellus Annal. Thueydid. p. 81., et ea quidem ex caussa, ne inserto *Aristidi*, quem supra repulimus, noceret. Tempora et in Diodoro et Dionysio optime succedunt, nec patiuntur Lysaniam de gradu deici. WESS.

454. 6. *Τίτον Κάτλιον*] Pro *Κάτλιον*, *Κοῦρτιον Καπι. RHOD. Τίτον Κοῦτιον*] Sic scripsi, quod vitiosum hoc nomen levissimo discrimine distet a *Κοῦντιον*, quo nomine *Titus Capitolinus* usus est. WESS. Monuerat etiam Pighius p. 115.

454. 12. *Τοὺς ἄλλους διετέγκας*] Genus hoc loquendi firmavimus abunde L. II 5. De victis ad Himeram a Gelone Carthaginiensibus dixit superius c. 22. WESS.

455. 23. *Καὶ καλοζῆγῆτις τὰδελεγοῦ ἄλλοτρο.*] Etsi abesse posset penultimum vocabulum, malim retinere. Revera enim a fraternis moribus longissime seiunctus erat Hieron, et civibus propterea invisus. Solebat, ut expiscaretur Syracusanorum de se colloquia, Corycaeos et auscultatores submittere, sicubi civium cogona esset. Aristoteles Polit. V. 11. οἷον περὶ Στρακονύσας αἰ ποταγωγίδες καλούμεναι. καὶ τοὺς ὠτακουστὰς ἐξέπεμπεν Ἰέρων ὄπον τις εἶη συνοσία καὶ σύλλογος. Ubi nisi οἱ ποταγωγίδαι καλούμενοι cum Budaeo legeris, multum Plutarch. in Dion. p. 970. a Philosopho abibit: adpellat enim perditissimos eos delatores τοὺς καλουμένους προσαγωγίδας, ἀνθρώπους ἄνοσίους καὶ θεοὺς ἐχθροὺς. Sed quid si ex utroque genere capturam ex delatione quaesiverint plures, et feminas Aristoteles potissimum eo vocabulo designarit, reliquos ὠτακουστὰς vocitans? Id vero non absimile. Vid. eundem Plutarch. T. II, p. 522. F. WESS.

455. 28. *Παραλαβὼν τὴν ἀρχὴν Θρασύβουλος*] Superabat Gelonis filius, quem patruus Thrasybulus blandis verbis sibi conciliabat, inque voluptates et mollitiem incendebat, ut solus imperium obtineret: quod aegrius cum ferrent Gelonis amici et familiares, Thrasybulum a rerum actu semovere ingressi sunt, pariter-

que Syracusanis occasionem praebuerunt, ut omnes huius stirpis civitate et principatus possessione deicerent. Haec Aristoteles Politic. L. V. 10. ἡ μὲν Γέλωνος, Θρασυβόλου τοῦ Ἰέρωνος ἀδελφοῦ, τὸν υἱὸν τοῦ Γέλωνος δημιουργοῦντος καὶ πρὸς ἰδούας ὀρμιῶντος, ἢ αὐτὸς ἄρχη τῶν δ' οἰκείων συστησάντων, ἵνα μὴ τυραννὶς ὅλη καταλυθῆ, ἀλλὰ Θρασύβουλος. οἱ δὲ συστάντες αὐτῶν, ὡς καιρὸν ἔχοντες, ἐξέβαλον ἅπαντας αὐτούς. Quam rem cum negligent ceteri, praetereundam non censui. WESS.

455. 33. Εἰς τὸ βασιλικὸν ἀνελάμβανε ] *In fiscum referebat*, recte interpretes. Excerpt. Vales. p. 334. καὶ τὰς οὐσίας τῶν ἐπιφανεστάτων εἰς τὸ βασιλικὸν ἀναλαμβάνειν. Paulo diversiore modo L. XX. 4. de Agathocle, καὶ τὰς οὐσίας εἰς αὐτὸν ἀνέλαβε. WESS.

455. 50. Τὴν ὀνομαζομένην Ἀγραδινὴν καὶ Νῆσον ] *Partes urbis erant Syracusanae. Cicero L. IV. in Verr. c. 53. Tanta est urbs, ut ex quatuor urbibus maximis constare dicatur: quarum una est ea, quam dixi, INSULA, quae duobus portibus cincta, in utriusque portus ostium adituque proiecta est: in qua domus est, quae regia Hieronis fuit. Et post pauca. Altera autem est urbs Syracusis, cui nomen ACRADINA, in qua forum maximum etc. Noster brevi post: τῆς μὲν Ἀγραδινῆς καὶ τῆς Νήσου κύριος ἦν. Et c. 73. καὶ τῆς πόλεως κατελάβοντο τὴν τε Ἀγραδινὴν καὶ τὴν Νῆσον. WESS.*

455. 55. Τὴν ὀνομαζομένην Ἰτόκην ] *Scribe Τύκην cum Casaubono in Strabon. L. VI. p. 415., aut Τύκην, ut censuit Ph. Cluverius in Sicil. L. I. p. 151. Praeclare Cicero IV. Verr. c. 53. Tertia urbs est. quae, quod in ea parte fortunae fanum antiquum fuit, TYCHA nominata est. WESS. Conf. Schweighaueser. ad Polyb. vol. VI. p. 441.*

455. 67. Ἀγωνίζεσθαι ] *Lege διαγωνίζεσθαι. RHOD. Βουλομένους διαγωνίζεσθαι ] Non repugno: est enim significantius, atque ipsum certamen cum Thrasybulo committendum exprimit, quod nuper admodum Cel. T. Hemsterhusius in aliis hoc genus verbis praeclare ostendit ad Xenophont. Ephesium Miscell. Observ. Vol. V. T. III. p. 53. WESS.*

456. 73. Καὶ λειφθεῖς τῆ νανμαχίᾳ ] *Hoc iustum verumque est. Praetor Rom. post eladem in Etruria acceptam ad cives λειπόμεθα μάχη μεγάλῃ inquit apud Polyb. III. 87. Noster vero c. 65. de Mycenacis, μετὰ δὲ ταῦτα λειπόμενοι τῷ πολέμῳ. Nihil autem obvium magis, quam ληφθεῖς, ut sedem occupet τοῦ λειφθεῖς. Vid. Casaub. Athen. VIII. 2. et inferius c. 76. WESS.*

456. 80. Διεπρεσβένσατο τὰ πρὸς etc.] *Malim διεπρεσβεύσατό τε πρὸς. STEPH. et RHOD. Διεπρεσβεύσατο πρὸς τοὺς Συρ.] Inventum Rhodomanni recipi potuerat, nisi scripti Codd., quos amplector, aliud edixissent. WESS.*

456. 87. *Ἐργίην ἐχοῦσα*] Praecesserat οἱ δὲ Στραζοῖ-  
σιοι. Sed haec Grammaticorum est synthesis, utroque in sermone  
frequentata, ut exempla docent a Io. Fr. Gronovio congesta ad  
Livii IX. 41. WESS.

456. 89. *Ἐτε σχεδὸν ἐξήζοντα*] L. XIII. 96. adi. WESS.

456. 95. *Κατεστάθηνσαν δῆμοσχοι τέτταρες*] Tum pri-  
mum tribulis comitiis creati tribuni sunt: numero etiam addito,  
tres, perinde ac duo antea fuerint, Piso auctor est. Nominat  
quoque tribunos, C. Sicinium, L. Numitorium, M. Duillium,  
Sp. Icilium, L. Maecilium, haec Livius II. 58. Unde liquet,  
quomodo tribunorum nomina sint refingenda. Imo C. Sigonius  
Σπόριον Ἰζλίον ex Diodoro ad eum Livii locum adseribit, credo,  
conjectura motus. Pighius in Annal. ad ann. CCLXXXIII. p. 117.  
non dissentit, haec commentatus: *L. Pisonis sententiam sequitur  
Diodorus nominatque C. Sicinium, qui perperam Cn. Siccus in  
Livii exemplaribus legitur, L. Numitorium, M. Duilius, et Sp.  
Icilius. In hoc tamen discrepat a Pisone, quod L. Maecilius  
omittat et quatuor dumtaxat creatos scribat. Verum haec for-  
tassis errore librariorum contingere, ut uno negligentia in exem-  
plaribus omisso, postea quis numerum quinarium mutaverit in  
quaternarium, quatuor tantum nomina reperiens. Quae viri sol-  
lertissimi vero videntur similia.* WESS.

456. 2. *Τίτος Αἰμίλιος Πάμερχος*] Praestat Τιβέριος,  
quomodo Dionysius Ant. Rom. I. IX. p. 606. et auctor ipse c. 74.  
Vidit et hoc Pighius in Annal. L. II. p. 116. WESS.

456. 7. *Ὅς ἦν κατακομιστὴς τοῦ βασιλείως*] Cubiculi  
praepositus, quae apud Persas olim et Romanos non postrema di-  
gnitas. De Persis praeter haec Diodori testis Plut. Apophtheg. p.  
173. D., non neglectus a B. Brisson. de Reg. Persar. I. p. 291.  
Apud Imp. Caium Caligulam quanta valuerit gratia Helicon Philo  
Iud. docet Leg. ad Cai. p. 1017. *τὴν τοῦ κατακομιστοῦ καὶ κατ'  
οἰκίαν ἀρχισωματογέλασος τεταγμένος τάξιν.* Senior aetas κοι-  
τωνίας adpellavit. Glossae Philoxeni, *Κοιτωνίται, Cubicularii.*  
Egregie Galenus de Praecognit. p. 155. *Χαριλαμποῦς*, inquit,  
*τοῦ Κοιτωνίτου μὲν, ὡς ἅπαντες νῦν Ἕλληνες ὀνομάζουσι, σω-  
ματογέλασος δέ, ὡς οἱ περιέργως ἀπικρίζοντες.* Porro hunc Eu-  
nuchum Σλαμίτην et Λισαμίτην Ctesias Exc. Persic. c. 29.  
vocat. WESS.

456. 11. *Καὶ τὸν Ξέρξην ἀνελὼν*] Aristoteles, cui caedis  
auctor Ἀισαπάνης, metu in hoc seclus impulsus ait, *φοβοῦμε-  
ρον τὴν διαβολὴν τὴν περὶ Λαοσίον, ὅτι ἐκρέμασεν οὐ ζελεύ-  
σαντος Ξέρξου,* Politic. L. V. 10., quae brevius proposita quor-  
sum spectent, non divino. WESS.

457. 27. *Καὶ παραλαβὸν τοὺς ἰδίους νείους*] *Septem*, ut  
Iustin. II. 1., qui ordinem suscepti sceleris accuratius persecutus,

*assumit, inquit, in societatem consilii Bacabasum: prave, ut auguror. Megabyzum oportuerat, ut ex Ctesia Pers. c. 30. videbis. WESS.*

457. 35. *Ἐτη πλείω τῶν εἴκοσι*] Canon Astronomicus dat Xerxi annos XXI, nec aliud auctor voluisse videtur. Id parum opportunum, quod nunc demum Xerxis mortem commemoret, quae ante hos quinque annos, paullo ante Themistocelis in Persidem iter, contigit: cuius rei causa est, quod Xerxis initia repetierit a patris Darii morte, citius inchoanda. Sed haec nunc non ago. Tu vide Cl. Hier. van Alphen Comment. in Daniel. IX. P. III. c. 4. WESS.

457. 38. *Ἀρχεδριμίδου*] Eundem Archontem et Olympiade hac stadio victorem edit Dionys. Ant. Rom. L. IX. p. 618., ut merito Io. Meursius correxerit Pausan. IV. c. 24., in quo *Ἀρχιδριμίδου ἄρχοντος*. Scripsit autem Xenophonti Corinthio Od. XIII. Olymp. Pindarus. WESS.

457. 40. *Τίτον Πινούκιον*] *Νομίκιον* esse debere Rhodomannus et Pighius ad ann. CCLXXXIV. monuerunt. Nata commutatis inter se literis prava haec scriptura est. WESS.

457. 42. *Ἀποστάτες Θάσιοι*] Non concordat cum Thucydide Diodorus de tempore huius Thasiorum defectionis, quam Thucydides (L. I. 100.) ponit, antequam Sparta terrae motibus concuteretur: quem terrae motum posuit Diodorus supra ante annos sex, et ex Thucydidis narratione duravit id bellum cum Thasiis tres tantum annos. Ergo vel non fuit satis exactus Thucydides in ea narratione, vel calculus Diodori falsus est. Viderint Chronologi, quomodo concilientur. PALM. Vide superius c. 63. et Plut. Cimon. p. 187. C. Delevi autem, Mss. obtemperans, vocem *ἔνεκα*, quippe haud necessariam. De metallis, quae bello materiam dederunt, dicam alias. WESS.

457. 45. *Ἀγνίτας ἀποστάτας*] Simultas cum maxime erat, quae in bellum dein abiit. Conf. c. 78. WESS.

457. 60. *Εἰς Ἀμφίπολιν ἐξέπεμψαν οὐκ ἴσθους μισθούς*] *Ἐννέα ὁδοὶ* urbs dicebatur, deinceps *Ἀμφίπολις*, postquam ab Agnone instaurata fuit, nuncupata. Deducta haec colonia fuit, annis XXXII postquam coloni, Aristagora duce eo profecti, exciderant, de quibus Herodotus extremo L. V. Cumque pari calamitate oppressi essent Athenienses, iterum missi coloni sunt post annos XXIX, auspiciis et ductu Agnonis, Thucydide L. IV. 102. Cuius coloniae tempus quia extrema Olymp. LXXXV. incidit, uti Noster docet L. XII. 32., non patitur uterque terminus, priorem hanc coloniam ut ab hoc anno longe removeamus. WESS.

458. 64. *Ἐσπερον δὲ αὐτῶν ἀναβάντων εἰς Θράκην*] Ad Drabescum. Vide Thucydidem I. 100. et Nostrum L. XII. 68. WESS.

458. 69. *Κ. Σερούλιον Στρούζιον*] *Q. Servilium Priscum* collegam dat T. Quintio Capitolino Dionysius Rom. Antiq. L. IX.

p. 613. Noster c. 75., ubi alter Servilii consulatus, cognomen negligit, suspicionemque auget, *Στρούκτου* vocabulum aliunde huc translatum. WESS.

458. 78. *Καὶ σκευῆς*] Non damno, tametsi *παρυσκευῆς* tritius. Infr. L. XIV. 79. *ἔδωρήσατο σκευὴν τοῖς Σπαρτιάταις ἑκατὸν τριήρεσι*. Arrianus Exp. Alex. II. 6. p. 69. *εἶναι γὰρ τὴν εὐρυχωρίαν πρὸς τοῦ πλήθους τε καὶ τῆς σκευῆς τῶν Περσῶν*. Ubi tamen Gronovium vide. WESS.

458. 86. *Τὸν ὀνομαζόμενον Ἰναρόν*] *Ἰναρος* Libanio T. I. p. 420. C. *Ἰνάρος* Thucydidi I. 104. cum Cl. Dukeri nota. WESS.

458. 97. *Ἐψηφίσαντο τριακοσίας τριήρεσι βοηθεῖν*] Iterum L. XIII. 25. in Nicolai oratione de Atheniensi populo, *περὶ τὴν Αἴγυπτον τριακοσίας τριήρεις ἀντάνδρους ἀπολέσας*. Et tamen utrobique error est. Ipse auctor c. 74. Athenienses *μετὰ διακοσίων νεῶν* ad Aegyptum adpulisse refert, quem numerum non excedit Thucydides I. 104.; nam Ctesias Persic. c. 32. quadraginta naves Atticas auxilio Aegyptiis occurrisse prodens vitio foedatus est. Utrumque animadvertit Cl. Barbeyracius Hist. Fœder. P. I. p. 102. Mox si esset, *μετὰ πολλῆς προθυμίας περὶ τὴν τοῦ στόλου παρυσκευὴν ἐγίνοντο*, vulgato longe antistaret, me quidem arbitro. WESS.

459. 21. *Διὸς μὲν Ἐλευθερίον*] Restitui suum Iovi cognomen, quod Syracusanorum numi praeclare firmant, *ΖΕΥΣ ΕΛΕΥΘΕΡΙΟΣ* inscripti in Parutae Tab. LXV. *Βωμὸς Ἐλευθερίου Διὸς*, sed in Graecia, memoratur ab Aristide Panathen. p. 257. Et *θύσας ἐν τῇ Πλαταιέων ἀγορῇ Διὶ Ἐλευθερίῳ ἱερὰ* Thucydidi II. 71. WESS.

459. 37. *Οὔτοι τῆς ἐκ τῶν ἀρχαιρεσιῶν τιμῆς ἀπελάνθονοι*] Fatum hoc nobilissimae urbis fuit, ut tyrannis liberata intestinis seditionibus laboraret. Monet Aristoteles Politic. L. V. 3. Syracusanos, pulsus tyrannis, cum advenis ac mercenariis, civitate donatis, vehementer dissensisse, ita ut in arma ruerent. *Συρακοῦσιοι μετὰ τὰ τυραννικὰ τοὺς ξένους καὶ τοὺς μισθοφόρους πολίτας ποιησάμενοι, ἐστασίασαν, καὶ εἰς μάχην ἦλθον*, haec, credo, respiciens. Pari seditione pressa fuit Agathocle extincto: nam cum in deferendis magistratibus populus in comitiis eorum rationem non haberet, qui nuper erant allecti, nova turbarum nata materies. *Τῶν μισθοφόρων ἀτιμαζομένων ἐν ταῖς ἀρχαιρεσίαις συνέβη στάσεως πληρωθῆναι τὴν πόλιν*, Noster ait L. XXI. Eclog. 13. WESS.

459. 43. *Καὶ τὸ πρὸς τὰς Ἐπιπολὰς τετραμμένον*] Vide Ph. Cluverium Antiq. Sicil. I. I. p. 146. Mox *ἐθῆς* commodius foret. WESS. Ursinus adscripserat *ἴσως τὰς ἐπιτολὰς*, sed aliud agens. *Ἐπιπολὰς* nemo ignorare in Syracusanis potest rebus. IDEM in Add.

459. 47. *Οἱ ξένοι ἐπροτέρον*] Cur hoc maluerim, videbis ad c. 12. WESS.



459. 56. *Κ. Φάβιος Ούβουλανός*] Scribe *Ουΐβουλανός* et pro *Τιβέριος, Τίτος*. RHOD. Prius ex Rhodomanni correctione recipiendum, non alterum. Vide not. in cap. 69. WESS.

459. 59. *Ἀγαμέμνην τὸν Λαρείου μὲν υἱὸν*] Frater erat Artaxerxis, duxitque in Aegyptios cccc peditum millia, si fides Ctesiae Persie. c. 32., cui *Ἀγαμεμνίδης*. Cum Diodoro pulcre conspirat Herodotus III. 12. VII. 7. WESS.

460. 78. *Ἐπὶ τὸ καλούμενον Λευκὸν τεῖχος*] Pars erat urbis Memphis, ob lapides albos, e quibus coagmentata, id cognominis sortita, ni fallit Schol. Thucydidis I. 104. WESS.

460. 88. *Τῶν δὲ Λακεδαιμονίων οὔτε χρίματα δεξιμένων*] Lacedaemonii rerum suarum satagebant, bello Messeniaco implicati, neque adeo opportunum illis erat Atticam incursare, quod Megabazus, a Persa missus, postulabat apud Thucydid. I. 109. WESS.

460. 92. *Καὶ Μεγάβυζον*] Sic et Ctesias. Aliis *Megabazus*, ut Thucydid. ubi Duker. et ad Lucian. Timon. c. 22. T. Hemsterhusius videndi. WESS.

460. 95. *Εὐθίππου*] In Marmore Oxoniensi *Εὐθίππος*, fortasse verius. *Euthippus*, Anaphlystius, Cimonis amicus, memoratur Plut. Cimon. p. 498. E., quem eundem suspicor. WESS.

460. 97. *Ποστούμιον Ἀλβῖνον*] *Ἀλβον* Rhodomannus rescribit, praeunte vetere interp., et consentiente Capitolino Marmore. Dionysius Rom. Antiq. L. IX. p. 619. cum Diodoro facit, adaeque vitiosus, docente Pighio in Ann. ad ann. cclxxxvii. WESS.

460. 5. *Καταρτισθέντων δὲ τριηρῶν*] Ordo verborum requirit *καταρτισθεισῶν*. Memini simile delictum in *ῥηθέντων* superioribus libris animadvertere, quod frustra nunc quidem quaero. WESS. in Add. Est p. 79. 79.

460. 8. *Περὶ τὰς παρασκευὰς ἐγίνοντο*] Sermonis insoles et auctoris consuetudo hoc expostulant. Supra c. 71. *οἱ μὲν οὖν Ἀθηναῖοι — περὶ τὴν τοῦ στόλου παρασκευὴν ἐγίνοντο*. Et L. XII. 55. de Lacedaemoniis, *καὶ περὶ τὴν κατασκευὴν τῶν τριηρῶν γενομένων*. Tum L. XIII. 107. *περὶ δὲ τὴν τῶν τευχῶν κατασκευὴν ἐγίνοντο*. Porro L. IV. 44. Vide H. Stephanum ad L. XIV. 26. WESS.

461. 16. *Τὸν ἐνιαυτὸν*] Fuisse autumo τοῦτον τὸν ἐνιαυτὸν. Novi ex Harpocrate *δι' ἐνιαυτοῦ, ἀντὶ τοῦ, δι' ὅλου τοῦ ἐνιαυτοῦ*, et *διὰ νυκτὸς* pro *δι' ὅλης νυκτὸς* in Aristophane, quo de Athen. L. VII. 1. cum animadversione viri magni. Sed Nostri alia ratio. Vid. c. 26. 37. 47. 53. WESS.

461. 29. *Δομέτιος μὲν ὁ τῶν Σικ. ἡγεμῶν*] *Δομέτιος* verte in *Δουκῆτιος* aut *Δενκῆτιος*. Quomodo saepius deinde recurrit. RHOD. Lego *Δουκῆτιος*, ut infra p. 287. et 289. ed. Steph. PALM. *Δουκῆτιος μὲν ὁ τῶν Σικελῶν ἡγεμῶν*] Sequor virorum doctissi-

morum iudicium. Mentio reguli huius extremo hoc libro et sequentis principio frequens est, nec aliter scriptum reperitur nomen. Putant eius caput inscriptum conspici in numis Menaeniorum Tab. cv. Parutae, mihi non satis liquet. WESS.

461. 33. *Καὶ κατοικισθέντες ὑφ' Ἰέρωνος τοῦ δυν. ἐπολέμουν*] Leve vitium haec verba occupavit, fecitque ut interpres aliorum ea referret, atque oportuerat. Sententia est, Ducetium et Syracusanos, cum Catanensium agros sorte inter se distribuerant, bello eosdem, ab Hierone illie collocatos, fuisse adgressos. Scribe ergo *καὶ κατοικισθέντας ὑφ' Ἰέρωνος* — *ἐπολέμουν*, et, ne verborum structura offendaris, confer not. ad L. IV. 61. WESS.

461. 35. *Καὶ λειψθέντων πλείοσι μάχαις*] Bene Coislin., qui si tacuisset, postulante sermonis indole mutassem. Vid. supr. c. 68. WESS.

461. 37. *Πρὸς τούτων καλουμένην Ἐννησίαν*] Praestat Ἐννησίαν, ut pulcre monuit Ph. Cluverius Sicil. Antiq. L. I. p. 123. cui Ioseph. Wasse iunge in Thueydidis L. VI. 94. Receperunt Catanenses avitam urbem, postquam per XIV annos eius possessione, inde ab Hierone deiecti, deportatique in Leontinorum urbem, ut traditum c. 49., caruerant. Reversi, quo Hieronem ulciscerentur post fata, eiusdem in urbe sua tumulum everterunt apud Strab. L. VI. p. 412., qui haec Diodori illustrat. WESS.

461. 44. *Τούτων δ' ἦσαν Γελῶσι etc.*] Huc pertinent, quae in scholiis ad Pindari Pythion. Od. I. 110. notantur, et quae Herodotus memoravit L. VII. 154. WESS.

461. 48. *Καμαρίναν μὲν Γελῶσι κατοικίσαντες*] Urbem condiderant Syracusani circa Olymp. XLV., ut ex Thueydide L. VI. 5. colligas et diserte tradit Schol. Pindari Od. V. Olymp. vers. 19. Everterunt eandem, cum imperata facere detrectaret, annis XLVI postquam prima eius iacta erant fundamenta, teste Marciano, sive Olymp. LVII., sicuti in Pindari scholiis est. Fracti dein bello Syracusani ab Hippocrate Gelensium tyranno, ut captivos reciperent, Camarinam eidem, quo instaurari posset, concesserunt apud Herodotum VII. 154. Hippocrate sublato Camarina in Gelonis potestatem devenit, qui Camarinaeos, urbe eversa, Syracusas transduxit, et post dein eandem denuo condidit, si non fallunt Thueydidis verba: *καὶ ἀθίς ὑπὸ Ἰέρωνος*, inquit, *ἀνάστατος γενομένη, τὸ τρίτον κατοικίσθη ὑπὸ Ἰέρωνος*. At fallere credibile est. Tertia enim urbis instauratio debetur Gelois, qui multis a Gelonis morte annis in eam urbem commigrarunt. Novi haec Schol. Pindari, *εἶτα ὑπὸ Ἰέρωνος συνφοκίσθη ἢ Καμαρίνα κατὰ τὴν μὲν Ὀλυμπιάδα, ὡς γησι Τιμαῖος, διὸ καὶ νέοισιν ἔδραν εἶπε τὴν πόλιν*. Verum ea nihil iuvant, turpissime corrupta. Qui enim Pindarus Camarinam Olymp. LXXXII., qua victor abiit Psau-mis, quem ea Od. V. celebrat, *νέοισιν ἔδραν* adpellare potuit, si instaurata fuerit Olymp. XLII. ? quo tempore ne condita qui lem erat.

Hinc suspicor in scholiis illis fuisse *εἶτα ὑπὸ Γελώων συνω- κίσθη*, quo modo et Thucydidis refingenda verba non iniuria suspicatus est H. Dodwellus Annal. Thucydid. p. 85. Iam cum tertia vice condita Camarina sit Olymp. LXXIX. anno quarto, necesse est, ut eadem Olympias Timaeo in Scholiis Pindari restituatur, tumque optime addiderit, *διὸ καὶ νέουσαν ἔδραν εἶπε τὴν πόλιν*, Grammaticus. Namque Olymp. LXXXII. qua scripta Ode V. Olympion., revera Camarina recens condita urbs erat. Atque haec de Camarina sufficiant. Alii diversiore modo, et Ph. Cluverius Sicil. Antiq. L. I. p. 193., rem expediunt, sed hinc adiuvandi. Id paene praeterieram, *κατοικίσαντες* mihi verius fuisse visum, neque ambigere, quin et tibi. WESS.

461. 55. *Κατοικεῖν ἕλαρτας ἐν τῇ Μεσσηνίᾳ*] Delevi copulam, quae his praeposita erat, parum huic loco opportunam, quod et advertit Rhodomannus. Videntur hi peregrini fuisse Itali generis ex magna parte, et propterea in agro Messanensi, non *Messanae*, ut vir doctus, collocati, ut brevi traiectu in continentem Italiam, ubi vellent, revertentur. WESS.

462. 58. *Τὰς ἀπαλλοτριῶν πολ.] Vel ἀποβαλοῦσαι, vel ἀπ' ἀλλοτριῶν πολιτείας ἀναλαβοῦσαι.* Nota compositionem novam *ἀπαλλοτριῶν*, nisi mendum est, ut reor. Rhod. *Τὰς ἀπαλλοτριῶν πολιτείας ἀπολαβοῦσαι*] Camusatus adscripserat: *recuperata potestate et imperio quod exteri tenuerant.* Ita Ism. Bullialdus vertit: Rhodomannus quasi *ἀπ' ἀλλοτριῶν*. Discrimen haud magnum est. Puto *ἀπαλλοτριῶν* tantundem dicere ac *ἀπαλλοτριωθεῖσας abalienatas, aliorumque in potestatem redactas*: quo vocabulo augeri possunt Graeci sermonis Thesauri. Nam ut suspicionum Rhodomanni examen instituat, operae non arbitror. Sponte sua corrunt. WESS.

462. 62. *Φρασιζλεῖδου*] Addita canina litera vocem auxi, quod fieri oportere Io. Meursius L. III. 1.1. de Archont. et Simson. Chron. ad an. 3545. monuerant, Plutareho T. II. p. 835. C. *Φρασιζλῆς*, et Dionysio princ. L. X. Antiq. Rom., primitivum loco patronymici, ut saepe, ponentibus. Porro *Τορὺλλας* Dionysio *Τορὺμβας*. WESS. Ita Archontis nomen instaurandum esse, monuit et Cl. Hemsterhusius ad Aristoph. Plut. p. 325. IDEM in Add.

462. 65. *Τ. Κοῖντιον Καπιτωλῖνον*] *Μετα Καπιτωλῖνον ἐν Καπιτωλῖνον.* Tametsi Diodorus forte mollius, Graecorum more inflectendo, sic enunciari voluit. Sic Rhodomannus. Ego Coislin. adstipulor, et *Κοῖντιον* in *Κοῖντιον*, quo gentili nomine T. Capitolinus utebatur, conmutandum edico. Mox in *διαβάντες περὶ τὴν Κιλικίαν* insolentior est praepositio. An voluit, obiisse eos Ciliciae maritimas urbes, ut classis adparatum urgerent? Id verba requirunt. Paulo audacior fortasse *εἰς* aut *ἐπὶ* substitueret, cui nondum accedo. WESS.

462. 78. *Ἐν τῇ Προσωπίδι λεγομένη νήσῳ*] Scribe *Προσωπίτιδι*. Sic enim Herodotus nominat L. II. 41. *Προσωπὶς ἀσ- Vol. I.*

tem Stephano urbs est Aegypti. RHOD. 'Εν τῇ Προσωπίτιδι] Libri manu exarati summo consensu hoc postulant, mirorque Stephanum vulgato primas dedisse, praesertim cum Thucydides I. 9. contra id veniat apertissime, et auctor ipse L. XII. 3. De nomine, quo deinceps fuit insignis, dixi ad Antonini Itiner. p. 156. WESS.

462. 93. Καὶ λογισάμενοι τοῦ πολλὰς etc.] Vix credibile est scripsisse Diodorum λογισάμενοι τοῦ ἀποβαλεῖν. STEPH. Καὶ λογισάμενοι τοῦ πολλ. μυριάδας ἀποβαλεῖν] Rhodomannus corrigit τὸ ἀποβαλεῖν, Barbeyracius Histor. Foed. P. I. p. 105. suspicatur excidisse μνήμην τοῦ πολλ. μυρ. ἀποβαλεῖν. Ego, in partes si sit transeundum, Rhodomanno accessero: namque ita solent Graeci. Vid. L. XIII. 112. WESS.

463. 99. Ἐσώθησαν παραδόξως] At pauci numero, de quibus Thucydides I. 110. Adde Schol. Aristophan. Plut. v. 178. et principium Epigrammatis apud Montfaucon. Palaeogr. Gr. L. II. p. 134. WESS.

463. 2. Ἐφιάλτης ὁ Σιμωνίδου] Aeliano Ἐφιάλτης ὁ Σοφρωνίδου Var. Hist. II. 43. III. 17. XI. 9. Atque ita ex Diodoro citat Io. Meursius Areopag. c. 9., pluribus consilia eius et Periclis in frangenda Areopagiticici senatus auctoritate exsecutus, credo tamen ex coniectura. De morte Ephialtae, eiusque auctore Aristodico Tanagraeo Plut. Pericl. p. 158. A. WESS. Lege Σοφρωνίδου ex Aeliano. REINES.

463. 5. Οὐ μὴν ἀθρόως γε διέφυγε] Interpres ἀθρόως legisse videtur, *haud impune* vertens, neque male ille, nisi ἀθρόως idem esse hoc loco velis ac *confestim*; quam vocabuli potestatem declarat Eustath. in Homer. p. 1386. Ioan. Chrysost. T. III. p. 357. B. προτρέχουσι στρατιῶται, ὥστε μὴ ἀθρόον ἀπαρσκεινάστω δέξασθαι τὸν βασιλέα. Praecurrunt milites, ne statim rex sine ullo apparatu excipiat. Et T. V. p. 52. C. ὅπερ οὐκ ἦν κατ' ἀκολουθίαν ἀνθρωπίνην, τὸν ἀθρόον ἔλθόντα, τοῦτον οὕτω τιμῆσαι. Ego cum viro doctissimo facio. WESS.

463. 9. Ἀρχων Φιλοκλήης] Hoc Archonte edita est Aeschylī Fabula Agamemnon, non εἰκοστῇ ὀγδὸν Ὀλυμπιάδι ἔτει δευτέρῳ, ut est in eius Didascalia, sed ὀγδοηκοστῇ, quemadmodum Petitus ad Leg. Attic. L. I. p. 67. vere correxit. Eodem genitus est Athenis Lysias, ἐπὶ Φιλοκλέους ἀρχοντος τοῦ μετὰ Φρασικλή, κατὰ τὸ δεύτερον ἔτος τῆς ὀγδοηκοστῆς Ὀλυμπιάδος, Plut. T. II. p. 835. C. WESS.

463. 10. Ἐρηγοῦλος] Pro Ἐρηγοῦλος fortean Ἐρηγιλλεύς, et pro Μεδιολανός, Μεδουλλίνος, ut supra. Nisi et hic, Romani nominis non ita gnarus, vocabulum ad sonum concinniorum detorsisset. RHOD. Idem Pighio in Ann. ad ann. CCLXXXIX. in opinionem venit, neque sine causa. Bellum, quod sequitur, Lacedaemoniis signiferis conflatum est. Iustinus III. 6. Sed nec Lacedaemoniis quievere; qui cum Messeniorum bello occupati essent.

*Peloponnenses inmisere, qui bellum Atheniensibus facerent. Parvae tunc temporis, classe in Aegyptum missa, vires Atheniensium erant.* Inchoatum ergo iam superiore anno bellum erat, si quidem, ut ille ait, classis Attica in Aegypto attinebatur; quod ipsum agnoscunt Lysias Orat. Fun. c. 15. et Aristides T. I. p. 270. WESS.

463. 14. Ἐνίκησαν Ἀθηναῖοι μεγάλῳ στόλῳ καταπλεύσαντες] Interpunge post Ἀθηναῖοι, et καὶ ante μεγάλῳ restitue. RUOD. Non sequor. Athenienses enim classe ad Halias provecti vicerunt, si tamen vicerunt: namque negat Thucydides I. 105. Potius arbitrer copulam deficere ante ἀνέβησαν, quae et H. Stephani sententia. Ἀλιεῖς illustrat ad Thucydid. diligenter Io. Wasse. WESS.

*Ibid.* Ἐνίκησαν Ἀθην.] Pugnatum cum Diodoro Thucydides, qui victoriam Corinthiis adiudicat. Eum vide L. I. 105. PALM.

463. 16. Ἀνέβησαν εἰς τὴν Πελοπόνν.] Nihil verear ante ἀνέβησαν addere καὶ. STEPH.

463. 19. Περὶ τὴν ὀνομαζομένην Κερκρηάλιαν] Aristides T. I. p. 269. ἐνίκων μὲν γε ναυμαχίᾳ Πελοποννησίους ἐπὶ Κερκρηάλιᾳ. Rectius Thucydides Κερκρηάλειαν, et Stephanus, cuius errorem, quo Aeginetas victoriam de Atheniensibus ad hoc promontorium reportasse ait, animadverterunt viri docti. Vide Ioseph. Wasse, Aristidis etiam loco usum, in Thucydid. I. 105. Quod autem modo dixit συνέβη μάχῃ fortasse alius in συνέστη converteret ob c. 80. et XII. 5. Verum caussa gravis non est. WESS.

463. 30. Ἀπέβαλον τριήρεις ἑβδομήκοντα] Consentiant Thucydides et Lysias Orat. Parent. c. 15. Victi Aeginetae in Atheniensium ditionem concesserunt his legibus, ut muros demolirentur, naves traderent atque imperata facerent, Thucydid. I. 108. Scio huc referri atrox decretum, quo Aeginetarum unicuique dextrae manus pollicem amputari victores Athenienses iusserunt apud Aelian. Var. Hist. L. II. 9., sed id serius conditum fuit, ut alias ostendetur. WESS.

463. 38. Ὀνομασμένος τὸ γένος] Quenam gens illa fuit? de qua silent omnes, et est illa vox mendosa, si quae alia. Credo reponendum Νοαῖος μὲν τὸ γένος. Nam Stephanus habet: Νόαι, τὸ ἔθνηζόν Νοαῖος, ἐστὶ δὲ πόλις Σικελίας. Νοαε, gentile Νοαεος, est autem urbs Siciliae. Ea urbs Suidae et Favorino memoratur Νόαι. Plinio etiam Νοαeni L. III. cap. 8. in mediterraneis Siciliae recensentur. Infra vero Diodorus ipse p. 288. ed. Steph. de eodem Ducetio haec habet: ἀθροίσας δύναμιν ἀξιόλογον, τὰς μὲν Νέας, ἧτις ἦν αὐτοῦ πατρὶς, μετόπισεν εἰς τὸ πεδίον. cum collegisset copias sufficientes, Neas quidem, quae eius erat patria, in campos deduxit, mutata habitatione. Sed cum nullus alius de urbe Νέαι in Sicilia fecerit mentionem, sine dubio legendum ibi

Νόας, quae fuit Ducetii patria. Nisi hoc sit verum, valde fallor. PALM. Nostra nobis placent, et quae plausibilia accidunt, ab illis difficulter divellimur. Vide in Palmerio, qui cum de Ducetii genere nihil reperisset, vitii haec manifesta habuit. Cur vero tandem? an ὠρομασμέρος τὸ γένος genio sermonis repugnat? Id dixerit nunquam. Sed silent de ea gente. Quid tum postea? Quam enim multi domi nobiles perhibentur, quorum nobis origo est obscura. Mitto, fundamentum, quo nixa coniectura est, labare. Nam vitiosae sunt Νέαι c. 87., longeque aliter instaurandae. WESS.

464. 40. Μέλαιον μὲν πόλιν ἔκτισε] Quia hoc Diodori loco alia exemplaria habent Μέλαιον, dubium est, an non ipse auctor scripserit Μεγαίων πόλιν, id est, Menaeorum urbem, usitatissima apud Graecos loquutione. Sic Ph. Cluverius Sicil. Antiq. L. II. p. 340., cuius dubium dispellit numus Thesauri Brandenburgici T. III. p. 40. ΜΕΝΑΙΝΟΝ praefrens, et ΜΕΝΑΙΝΙΝΩΝ alii in Parutae Tab. cv. WESS.

464. 42. Μοργαντίαν] Aliis Μοργεντία et Μοργαντία. Diodoro placuit derivativum, semel etiam Μοργαντίον L. XIV. 78. Vide L. XIX. 6. XIV. 95. WESS.

464. 44. Ἦοχε Βίωρ] Aufert hunc Archontem, inserendum anno Olymp. LXXXVI. primo, Fastis Atticis H. Dodwellus, motus his Thomae Magistri in Vita Pindari: τέθνηκε δὲ ὁ Πίνδαρος ἔξ καὶ ἐξήκοντα ἐτῶν γεγονώς, ἧ, ὡς τινες, ὀγδοήκοντα, ἐπὶ Ἀβίωνος ἄρχοντος κατὰ τὴν ἔκτην καὶ ὀγδοοκκοστὴν Ὀλυμπιάδα, Annal. Thucydid. p. 87. Quae, si quid in his prospicio, non multum iuvant. Possunt enim postrema ἐπὶ Ἀβίωνος, seu Βίωρος potius, ἄρχοντος, aequae referri ad priora ἔξ καὶ ἐξήκοντα ἐτῶν γεγονώς, et commodius quidem, quam ad ὀγδοήκοντα. Agebat enim Pindarus, si primo Olymp. LXXV. anno fuerit quadragenarius, ut Suidas docet, cum maxime LXVI. aetatis annum. Sic error erit in Olymp. LXXXVI., cui Bionem Archontem Thomas dat. Dices, ultra hunc annum poetam vitam prorogasse. Id agnoscimus. Sed Thomas, ut in aliis, ita et hic labi potuit. Adde insuper, Bioni Archonti sedem Olymp. LXXXVI. anno primo nullam relinquere, quam Lysimachus Archon tuetur egregie. Eo natus est Isocrates, sex annis maior Platone, in lucem edito, cum summum magistratum gereret Aminias seu Epaminon, Diogene auctore L. III. 3., iunior autem annis XXII. Lysia, quod Dionysio credimus T. II. p. 94., nato Olymp. LXXX. anno secundo, Archonte Athenis Philoele apud Plutarchum T. II. p. 835. C., qui termini ex Olymp. LXXXVI. Bionem prorsus eliminant atque extrudunt. WESS.

464. 47. Ἐλβας] Sic forte expressit Latinum *Elvam*. RHOD. Ego librariorum peccatum arbitror, Ἐλβαν in Ἐλβαν convertentium. Servilio autem cognomen *Prisco* est in Capitolino lapide et

Dionysio Ant. Rom. L. IX. p. 623., utrumque in magistratu mortuum tradente. WESS.

464. 50. Καὶ κατ' ὀλίγους συμπλοκὰς etc. ποιούμενοι] Emendat in Addend. suis κατ' ὀλίγον Rhodomannus, quod factum nollem. Auctor hoc amat. Nam L. XIII. 15. πλῆρως ἦν ὁ λιμὸν τῶν κατ' ὀλίγους ναυμαχοῦντων. Et c. 40. eiusdem libri Mindarus κατ' ὀλίγας καὶ κατὰ μίαν ἐκέλευσε συμπλέεσθαι. Tum L. XVII. 83. μέχρι μὲν τινος μάχῃ κατ' ὀλίγους ἐγίνοντο. WESS.

464. 61. Τὸ τελευταῖον ἐπίκρησαν] Mars fuit anceps, sicuti Thucydides I. 105. asseverat: quia tamen Athenienses tropæum posuerunt primi, victoriam iisdem adiudicant Lysias Orat. Funebr. c. 15. et Aristid. T. I. p. 269., qui praeterea adiungit, alterum praelium duodecimo post die, magno Corinthiorum malo, fuisse pugnatum. Quam vero *Cimoliam* Noster adpellat, ea privati hominis erat praedium, Thucydide significante I. 106. WESS.

464. 63. Πάλιν γενομένης ἰσχυρῆς μάχης] Dele quatuor has dictiones. Ex praecedenti enim versu per oscitantiam librarii ociose huc sunt translatae. RHOD. Μετὰ δὲ ὀλίγας ἡμέρας οἱ Φωκεῖς] Induxi ineptissimas voces, huic loco alienas, et manifesto ex superioribus repetitas. Mallem etiam, sublatis μετὰ δὲ ὀλίγας ἡμέρας, scriptum legeretur οἱ δὲ Φωκεῖς. Neque enim paucis post depugnatum in Cimolia praelium in hoc bellum Phocenses descenderunt, quemadmodum ex Thucydide I. 107. videbis. Vetus interpret, retentis, quae delevi, vocabulis, lacunam hoc loco suspicabatur. WESS.

464. 68. Κεντίριον καὶ Ἐρίβρον καὶ Ἐριναῖον] Lege Κεντίριον, Βόιον, Ἐριναῖον. Has enim urbes sic Strabo, vel STRATO, ut a quibusdam existimatur, nominat L. IX. p. 654. A. in descriptione Doridis, et L. X. p. 729. A. in descriptione Cretae. RHOD. Hanc locum in margine sic emendavit H. Stephanus: Κεντίριον καὶ Ἐρίριον καὶ Ἐριναῖον: nescio unde sumserit eas voces, hoc scio longius eas abesse a genuina et vera lectione, quam ea, quae sunt in textu. Vix puto ea esse H. Stephani, sed eo absente ea edita esse. Tu, lector, si nobis fidis, lege Κεντίριον καὶ ἔτι Βόιον καὶ Ἐριναῖον, et repete, quae supra notavi ad p. 187. ed. Steph. PALM. Κεντίριον καὶ ἔτι Βόιον καὶ Ἐριναῖον] Correxī pravās voces, etsi Codd. parum iuvarent, obsecutus Rhodomanno, Palmerie et Is. Casaubono ad Strabon. IX. p. 654.; nec alia mens Cl. Barbeyracio in Histor. Foeder. P. I. p. 106., improbanti praeterea voces ἐπὶ λόγον τὸν ὀνομαζόμενον Παγρᾶσσόν, ut supervacuas parumque adpositas. Ego illis non offendor, plane similibus Cononis Narrat. xxvii. Porro Stephano Κεντίριον μίᾳ τῶν τριῶν τῶν Δωρικῶν, ubi τεττάρων cur L. Holstenius emendaret, caussa praegnans non erat. A quibusdam quatuor, ab aliis tres Doricae hae urbes memorantur, uti Thucydide I. 107. et Nostro cum hic, tum L. IV. 67., cui adscripta vide. WESS.

464. 71. *Νικομήδην τὸν Κλεομένους*] Thucydides I. 107. habet τὸν Κλεομβρότου, et certe melius. PALM.

464. 77. *Νιζήσας δὲ τοὺς Φωκεῖς*] Conditionibus bellum fuit positum, reddideruntque unum ex tribus captum oppidum Doriensibus Phocenses, teste Thucydide, e quo et ductu Nicomedis Cleombroti F., haec gesta fuisse constat, non Cleomenis F., ut prave heic scribitur. WESS.

465. 87. *Τὰς περὶ τὴν Γεράνειαν παρόδους*] Alio loco I. XIX. 54. *Γερανία*, et Pausaniae L. I. 11. Situ praerupto mons erat in finibus Megarensium, dabatque difficilem in Isthmum versus transitum. *Δύσοδος γὰρ ἡ Γεράνεια* Thucyd. I. 107. WESS.

465. 91. *Καὶ τῶν Θετταλῶν μεταβαλομένων*] Paria Thucydides. At Pausanias I. 29. p. 73. nocte ingruente diremtum praelium incertumque fuisse, utri vicissent: postridie Thessalos ad Lacedaemonios transiisse, ac victoriae momentum Spartanis attulisse adfirmat. Quam ob perfidiam pessime deinceps audiverunt Thessali. *Ταῦτα γὰρ*, de Thessalis sermo est, *ἄπιστα μὲν ἦν δήπου φέσει, καὶ αἰεὶ πᾶσιν ἀνθρώποις* Demosthen. Olynth. I. p. 8. WESS.

465. 13. *Τῆς μάχης ἀμφίδοξον λαβούσης τὸ τέλος*] Victoriā sibi quidem et sociis Lacedaemonii asseruerunt, eiusque nomine decimas ad Olympium Iovem misere apud Pausan. L. V. 10., revera tamen Atheniensium potior fuit caussa, quod bene advertit Aristides Panathen. p. 272. WESS.

465. 20. *Μνησιθείδης*] Est hoc nomine Archon in Demosthenis Orat. de Coron. p. 166., sed is Philippo Macedonum regi fuit aequalis. Hunc Schol. Aristophan. Acharn. v. 10. *Μνησιθεον* vocat, primitivo patronymici loco usus. WESS.

465. 21. *Α. Λουκράτιος*] Muta *a* in *η*, et paulo post *Κιχωρηνός* emenda per *Κικυρῖνος*. Sed tamen illud auctoris esse nonnemo suspicetur. RHOD. *Λουκράτιος*] Corruptum hoc sine dubio est ex *Λουκρήτιος*, sicuti *Κιχωρηνός* ex *Κικυρῖνος*, cui non admodum dissimile cum *Κιχωρῖνος* scriptorum sit Codd., id praetuli. WESS. Nomina restituit etiam Pighius p. 123.

466. 32. *Οἱ δὲ Λακεδαιμόνιοι κρίναντες etc.*] *Inde re-  
vocati Lacedaemonii* (ab expeditione suscepta in Doriensium gratiam postque praelium ad Tanagram) *ad Messeniorum bellum, ne medium tempus otiosum Atheniensibus relinquerent, cum Thebanis paciscuntur, ut Boeotiorum imperium his restituerent, quod temporibus Persici belli amiserant, ut illi Atheniensium bella susciperent.* Sic Iustinus III. 6. *Μοx ὥσπερ ἀντίπολιν τιὰ τῶν ἄλλων ἐστὶν, nec alibi, quod sciam, obvium. Erunt fortasse, qui ὥσπερ ἀντίπαλόν τινα, tanquam adversariam quandam, praeroptabunt, ut infra L. XV. 65., quibus etsi vehementer obloqui nolum, necdum adduci possum, ut ἀντίπολιν plane proscribam.* WESS.



466. 46. *Ὀὐκ ἀπὴντησαν*] Hoc retineas, an *κατήντησαν* substituas, non magnum operae pretium. Utitur utroque. *Ἀπαντῶν ἐπὶ τὸν θερσιμόν* L. I. 36. *καταντῶν εἰς τὰς Ἀθήνας* L. IV. 60. atque alias saepe. Vide *Miscell. Observat. Vol. X. p. 209.* WESS.

466. 54. *Κινδύνους ὑποστήσεσθαι*] *Κινδύνους οὐχ ὑποστήσεσθαι* inserta negandi particula scriptum arbitror. RHOD. *Κινδύνους οὐχ ὑποστήσεσθαι*] Quod abesse negandi vocula sine certissimo sententiae detrimento haud posset, revocandam, ut vir doctissimus censuerat, opinatus sum. Genus loquendi habes L. XII. 61. WESS.

466. 56. *Τὴν ἐν τῷ πολέμῳ τάξιν*] *Ordinem in pugna adtributum.* Saepe *πόλεμος* de praelio et caede. Ioseph. III. Bel. Iud. 2. 2. *Ῥωμαῖοι δ' ἐν ταῖς ἐπιπραγίαις, καίπερ ὄντες ὀλίγοι, τῷ πολέμῳ καὶ περισσεύειν σαῶς αὐτοὺς ὑπελάμβανον.* Noster L. XIII. 79. *πολὺς ἐγένετο πόλεμος, ἀπάντων ἀφειδῶς τὰ σώματα τοῖς κινδύνοις παραδῶπτόντων.* Quem vocis usum quia pluribus e Diodoro declaravit Is. Casaubon. in Polyb. I. 12., tantum addam, quod neque ille praeteriit, *bellum* pari significatione Latinis haud esse ignotum. Iustinus II. 4. *ab auxiliis desertae bello ab Atheniensibus vincuntur.* Et cap. 5. *Ionas quoque navali bello superat,* sic enim Franequeranus bonae notae liber, non *praelio*, uti vulgo. Sed vide Stewichium in Veget. L. II. 13. et Cortium ad Sallustii Catil. c. 9. WESS.

466. 60. *Καὶ κατὰ κράτος περιεγένετο*] Usus Myronides variis artibus est, ut hostes militum numero potiores eluderet, de quibus Polyaen. de Stratagem. I. 35. et Frontinus II. 4. 11., IV. 7. 21. WESS.

467. 78. *Ἑλλάδος ἀπάσης ἡγεμόνες*] Vide princ. L. XV. WESS.

467. 85. *Τάναγραν μὲν ἐκπολιορκήσας*] Post pugnam ad Oenophyta Thucydides I. 108. Tanagram muris nudatam refert, prioris pugnae mentione neglecta. Vide Platon. Menezen. p. 242. B. WESS.

467. 93. *Ἐν Οἰνοφύτοις τῆς Βοιωτίας*] In *vinetis Boeotiae* imprudenter Rhodomannus. Loci nomen est. Aristides Panath. p. 272. *ἀλλ' ἤτηθέντες, Βοεοτῆς, ἐν Οἰνοφύτοις ὑπέκνησαν.* Plutarchus T. II. p. 345. D. *καὶ Μυρωνίδην νικῶντα Βοιωτοὺς ἐν Οἰνοφύτοις καὶ Θουκυδίδης σοὶ διαγέγραπται* quibus iunge Schol. in Aristoph. Lysistrat. v. 802. WESS.

467. 1. *Εἰς τὴν Φαρσαλίαν*] Haec vox *Φαρσαλίαν* mihi suspecta est. Nam ex iis, quae sequuntur, patet Myronidem, post devictos tandem Phocenses in Thessaliam penetrasse, ubi est *Pharsalus*, et ipsam Pharsalum urbem obsidione cinxisse. Tum inter Opuntios et Pharsaliam intersunt Epimenidii, Thermopylae, Trachinii et Phthiotae, de quibus hoc loco nihil. Forte scripserat Dio-

dorus *παραλίαν*. Nam Opuntii, de quibus hoc loco agit, licet non longe sint a mari, non sunt tamen in ipso littore, et distant ab eorum navali Cyno sexaginta stadiis. Itaque post subactam Opuntem, Cynum a tergo intactam non debuit relinquere Myronides ex belli ratione, sed eum portum etiam in sua potestate habere, antequam Phocidem aggrederetur. Sed eo, quod postea Phocensibus subactis Pharsaliam venit, et ibi bellum gessit, quidam corrector, imo corruptor, non habita ratione temporis et ordinis, quo res gestae sunt, *παραλίαν* in *Φαρσαλίαν* mutavit. PALM. Dubitari non potest de vitio, quod hunc locum foedavit. Palmerii correctio, quam repetit L. V. Graec. Antiq. c. 7. p. 576., elegans est et levi opera exstructa: in ea tantisper acquiescam, donec fidei melioris libri, unde certius loco auxilium, producantur. WESS.

467. 4. *Καταδέχεσθαι τοὺς φρυγάδας*] Orestem inprimis, Echeeratidae Thessalorum regis filium, qui Atheniensibus persuaserat, ut se in patriam restituerent, Thucyd. I. 111. WESS.

467. 14. *Καλλίων*] Consentit Dionysius Rom. Ant. L. X. p. 652. et Aristoph. Schol. Acharn. v. 10. WESS.

467. 18. *Ὀβολούμιος Ἀμντιῖνος*] Sic Pighius invenit in Graeco manuscripto Fastor. L. II. p. 125., Antonii Cardinalis Granvellani, credo, quem citat ad ann. U. C. cclxvii. Eo vero cognomine cum Volumnii in Capitolino Marmore sit insignis, cur spernemus? WESS.

468. 24. *Χιλίους ὀπλίτας παραλαβῶν*] Vide Aeschin. de Leg. Fals. p. 38. WESS.

468. 33. *Ἐξάγειν εἰς τὴν στρατιάν*] Mallem *στρατείαν*, ut modo. Polyænum, Tolmidæ hoc consilium proponentem L. III. 3. Stratagem., recte hoc ex loco sanarunt viri docti. WESS.

468. 36. *Διὰ τὸν κατάλογον ἀναγκασθῆναι*] Tabula erat *Κατάλογος*, in qua civium, qui militaris erant ætatis, nomina proscribebantur: unde *εἰς τοῦ καταλόγου* Meton apud Aelian. Var. Hist. XII. 12. cum Kuhni nota, qui scriptus erat miles, et *οἱ ἐπὶ τὸν κατάλογον* in Demosth. Orat. περὶ Συναξ. p. 97., quorum emerita stipendia. Relati in catalogum a Praetore aut Taxiarchis militiam, nisi graves et sordidas attulissent causas, recusare non poterant, malo cogendi, si subterfugerent. Vide S. Petitem ad LL. Att. p. 546. 549. et T. Hemsterhusium in Luciani Timon. c. 51. WESS.

468. 43. *Εἰς Μεθώνην*] Haud aliter urbem adpellat L. XII. 43., nec Strabo, Ptolemaeus, Plinius, Stephanus. Pausaniæ *Μεθώνη* L. IV. 3. ubi Sylburg. WESS.

468. 45. *Εἰς τὸ Γύθειον*] Vide eundem Sylburg. in Pausan. I. 27., ubi Tolmidæ præclara hæc expeditio innuitur. Eandem, sed tectius, describit Aristides Panath. p. 271., haud uno obsitus mendo, quod commodiore loco detergam. Mox καὶ ante τὴν χόραν induxi, quippe inutile. WESS.

468. 49. Τῆς Κεφαλληνίας εἰς Ζάκυνθον] *Κεφαλληνίας*, ut in cap. huius argumento, fronti L. XI. praescripto, verius erat, quo modo et citat Iac. Gronovius ad Stephani Ζάκυνθος. Graeci enim veteres semper geminata liquida *Κεφαλληνίαν* et *Κεφαλληῆρας* scribebant, teste Eustathio in Dionysii Perieg. v. 431., cui C. A. Duker. iunge ad Florum II. 9. WESS.

468. 53. Κατόρισεν εἰς ταύτην Μεσσηνίων τοὺς ἐπισήμους] Praedicat hanc popularium suorum erga Messenios humanitatem, sed quae proprio ex conmodo et Spartanorum odio haud parum traxit, Isocrates Panath. p. 369. Naupactum, quorsum Messenii deducti, Loeris Ozolis Athenienses eripuerant. Thucydides I. 103. ἐς Ναύπακτον κατόρισαν, ἣν ἔτυχον ἡρσιότες νεωστὶ, Λοκρῶν τῶν Ὀζολῶν ἐχόντων. WESS.

468. 56. Πεπολεμηχότες ἐπὶ πλείον, τότε κρατήσαντες] Veriorem scripturam, Reg. I. beneficio servatam, amplexus sum. Lacedaemonii Messenios per continuos decem annos oppugnauerant. Saluti victis fuit loci, quo se tuebantur, natura, et quod praemoniti Spartani essent, piaculum grave admissuros, si Iovis Ithomatae supplices violassent, apud Pausan. IV. 24. Hoc vero anno finitum si bellum id sit, et Messenii certis legibus e Peloponneso dimissi, principium eius anticipatum est supra c. 64. WESS.

469. 63. Γ. Κλώδιον Πηγύλλον] Πηγύλλανδον fortasse pro Πηγύλλον. RHOD. Supra c. 78. simile cognomen Rhodomannus in Πηγύλλεὺς convertit, quod a lacu Regillo sumtum, ut hoc ab Regillis, oppido Sabinorum, unde *Regillanus* apud Sueton. Tiber. c. 2.; nisi si tamen *Regillensis* ibi melius sit, quo cognomine Claudii publicis in monumentis et apud Livium VIII. 15. utuntur, monente III. Spanhemio Dissert. X. de Usu et num. Praest. p. 48. Certe Πηγύλλεὺς a vulgato proxime abest. Confer L. XII. 23. WESS.

469. 65. Τῶν ἀγαθῶν ἀνδρῶν] Interpret doctissimus artissime haec iunxit sequentibus: sic ἀγαθοὶ fortes et strenui erunt, ἀγαθοὶ εἰς πόλεμον Xenophonti Exp. Cyri L. I. p. 211. sive ἀγαθοὶ πολέμῳ in eiusdem Oeconom. p. 655., bello meliores apud Sallust. Iugurth. c. 13. Aliter H. Dodwellus: Ἀγαθῶν nomine intelligit, nisi fallor, καλοὺς καγαθοὺς Plut. Cim., δῆμῳ ὀπισθῶν, nempe Ἐπατριδῆος. Sic fuerit Sophocles poeta inter illos agnoscendus, quem Periclis socium agnoscunt Auctor Vit. Sophoclis, Plutarchus in Pericle, et Iustinus, Annal. Thucyd. p. 98. sed parum conmode. Pericles multitudini nimium studebat, nec suis artibus conveniebat, ut optimates praecipue in hoc bellum adscisceret. Adde Sophoclem habuisse collegam, illiusque adeo στρατηγὸν non fuisse. Equidem opportunius fore arbitror, si superioribus haec connectantur, ut Periclem spectent, qui τῶν ἀγαθῶν ἀνδρῶν fuerit, vir quippe egregius, et nobilissimo genere progenitus. WESS.

469. 69. Πλησίον Οϊνιάδων] Urbem oppugnavit, sed frustra. Aristides T. II. p. 48. οἶδα δὲ εἰς Οἰνιάδας Ἀζαράνων διαβάντας, ὡς οὐκ ἦν ἐλεῖν, ἀναχωρήσαντας, Περικλέους οὐ Νικίου στρατηγούτους. quae ex Thucydide sumsit I. 111. De Oeniadis earumque situ Palmer. Graec. Antiq. L. III. 8. Interpres doctissimus male *insulas* fecerat. WESS.

469. 76. Κορυτῖνον] Hoc mendosum esse putat C. Sigonius, V. Cl. et de re literaria optime meritus, cui Fast. Coss. accuratissimam correctionem inter caetera debemus. Is ergo ex fragmento consulis huius Capitolino, per coniecturam tamen, *Cossum* pro illo reponit. RHOD. Κορυτῖνον] Tale in Cornelia gente cognomen frustra quaerimus. *Cossum* fuisse certa res est. Forte additum tribus nomen fraudi Diodoro fuit. Fac enim in Fastis, quibus usus est, perscriptum fuisse *Α. Κορνῆλιον Κορυνία Κόσσο*, et nasci mendosum id potuisse advertes. Nihil tamen decerno. WESS.

469. 77. Πενταετείς ἐγένοντο σπονδαί] Hoc loco rursus pugnat cum Thucydide Diodorus circa tempora: nam post ea, quae superiore anno narravit Diodorus, quae habet Thucydides immediate, sic ait Thucydides (L. I. 112.) ὕστερον διαλιπόντων ἐτιῶν τριῶν σπονδαί ἐγένοντο Πελοποννησίοις καὶ Ἀθηναίοις πενταετείς, *post tres annos foedera quinquennialia inter Peloponnesios et Athenienses facta sunt.* Ad Chronologorum calculum ea relinquo examinanda. PALM. Ex Thucydide auctor has inducias si sumsit, perperam eius verba intellexit. Ipse insecuto anno res Periclis exsecutus, nondum eas tum coaluisse satis indicat. Itaque aut haec ab alia manu sunt, aut sui oblitus est. Vide et H. Dodwellum Annal. Thucydid. p. 96. WESS.

469. 79. Ἐγεσταίους] Vid. supra L. IV. 23. WESS.

*Ibid.* Καὶ Λιλυβαίοις] Haec illis liquido pugnant, quae L. XIII. 54. de Lilybaei origine disputat. Fluvium, quem heic *Μάζαρον*, eodem loco *Μαζάραν*, sicuti et Ptolemaeus, adpellat, verius fortasse. Ph. Cluverii Sicil. Ant. L. I. 18. eadem est sententia. WESS.

469. 82. Καὶ τῆς φιλοτιμίας μὴ λῆξαι] Pro μὴ reficiendum videtur τότε, aut simile. RHOD. Rhodomanno si accedas, verte, ut fecerat, *tum quidem disceptandi fervor aliquantulum restinctus fuit.* Mihi mutandi caussa non videtur gravis: constat enim sententia. WESS.

469. 86. Ἐνόσον αἱ πόλεις] Quae hominibus, cum intestina quadam tabe languent et conficiuntur, eadem civitatibus, seditionum flabello ventilatis, conveniunt. Livius XXIV. 2. *unus velut morbus invaserat omnes Italiae civitates, ut plebes ab optinatibus dissentiret.* De Mileto Herodotus V. 28. ἐπὶ δύο γενεὰς ἀνδρῶν νοσήσασα ἐς ταμάλιστα στάσει. Quare Athenodorus, cum Tarsensem civitatem procax libertas miscuisset, τῆς στάσεως κατηγορῶν ἐν ἐκκλησίᾳ, τὴν νόσον τῆς πόλεως, ἔφη,

καὶ τὴν καχεξίαν πολλαχόθεν σκοπεῖν ἔξεστι apud Strabon. L. XIV. p. 992. C. Praeclare vero Libanius Orat. ad Theodos. p. 390. D. νοσοῦσι καὶ πόλεις, βασιλεῦ. τὰ δὲ νοσήματα τούτων ταραχαὶ, θόρονος, ὀργῆς ἤττηθῆναι, τὰ τῶν ἤττημένων ἀμαρτεῖν, τὰ νόμῳ κεκωλυμένα πράξαι. τοντὶ γὰρ αἱ σιάσεις. WESS.

469. 91. Καὶ σωματοποιῶν τούτους ] Polybianum ἐσωματοποίησε μὲν τοὺς ἵππους, corpora quidem equorum refouebat, ex L. I. 87. et quod apud Diogen. II. 138., satis tueri interpretem potest. Mallem tamen et opes et potentiam, quibus eos instruxit Tyndarides, respexisset. Idem Polyb. II. 45. ἀλλὰ τοῦναντίον, καὶ τὸν Ἄρατον τότε προεστῶτα, καὶ τὸ ἔθνος ἐσωματοποίησαν. Et Excerpt. Legat. p. 1143. ἔξεστιν οὖν καὶ τοὺς φίλους μεγαλομερῶς σωματοποιῆσαι. Mitto eiusdem alia: saepius enim quam quisquam alius orationi id inserit. Noster, Polybium aemulatus, L. XVIII. 10. οἱ μὲν ῥήτορες τὰς τῶν δημοτικῶν ὀρμὰς σωματοποιοῦντες. Et c. 55. dicti lib. Κάσσανδρος μὲν σωματοποιηθεῖς ὑπ' Ἀντιγόνου. In quibus firmandi augendique potestatem induere apertissimum est. WESS.

470. 98. Οἱ χαριέστατοι τῶν πολιτῶν ] Civium intelliguntur honestissimi et prudentissimi, ut c. 87. et 88. et L. XIII. 92. XIX. 6., χαριέντες τῶν πολιτῶν Appiano L. IV. Bel. Civil. p. 1011. et Aristoteli Polit. L. IV. 13. Strabo χαριεστάτους τῶν ἄλλων et χαριεστέρους doctiores et peritiores vocitat L. I. p. 111. et II. p. 167. B. Adde Io. G. Graevium in Lucian. Conscrib. Histor. c. 16. Mox Τυνδαρίων idem ac Τυνδαρίδης, sed alia forma, qua de Ger. Io. Vossius I. II. Analog. c. 28. WESS.

470. 17. Οἱ δὲ Συρακούσιοι πεταλισμὸν ] Meminit Hesychnius, Πεταλισμὸς, ὁ διὰ φύλλον ὀστρακισμὸς γινόμενος. Testularum autem suffragia quam diu Athenis vigerint, docet Plut. in Nicia p. 530. F., atque ex eo Io. Meurs. Lect. Att. L. V. 18. WESS.

470. 35. Ἠλλάττοντο ] Nihil muto. Excerpt. Vales. p. 269. ἀντὶ γὰρ τῆς προῦπαρχούσης αὐτῶ δόξης πολλαπλασίαν τὴν ἀτιμίαν καὶ τὴν αἰσχύνην ἠλλάξατο. Quod enim in Codd. est quibusdam ἤροῦντο, id interpretis esse opinor. WESS.

470. 43. Ρουτίλιος ] Ρούτιλος. Pro Καρουτιανὸς vero Sigonius Ἀγουρῖνος restituit. Nisi forte est Ἀτρατῖνος ex Fastis Siculis, quod propius ad cognomen istud mendosum alludit. RHOD. Verum haud dubie Ρουτίλος est. Καρουτιανὸν, in Fastis paene perpetua Sigonii simia, Panvinius quoque mutat et Ἀγουρῖνον esse iubet ad ann. ccxcvi. Vin. Pighius reiiciendum Minucii cognomen Carutianus, vel Κωρατιανὸς, quod in Graeco exemplari invenerat, decernit Fastor. L. II. p. 128. Ego vero vitiosum agnosco id cognomen, nec satis scio, qui instaurari possit. Ἀγουρῖνος Sigonii sive Augurinus bene Cos. convenit, sed longius a corrupta voce distat. Ἀτρατῖνος Fastorum Graecorum adae-

que pravum est, et nihil iuvat. Viderint ergo peritiores. WESS. Ursinus Καρουτιανὸν esse Ἀγγροῖνον iubet. IDEM in Add.

470. 44. Περιζλής ὁ τῶν Ἀθηναίων στρατηγός] Accuratius adverte, lector, et videbis hanc historiam bis narratam, et esse repetitionem eorum, quae supra Sosistrato Archonte gesta fuisse dixit, et pugnat etiam haec narratio cum foederibus, quae anno superiore facta fuisse narravit. Non me expeditio ex his vepretis. PALM. Iusta est Palmerii animadversio. Sicyoniorum oppugnationem excepit expeditio Periclis in Acarnaniam, quam cum supra descripserit, intempestive repetitur. Coloni in Chersonesum Thraciae deducti, et opera illic fortiter suscepta et perfecta apud Plut. Pericl. p. 163. C., huc pertinent. WESS.

471. 59. Τὴν τῶν Ναξίων γῆν διένειμε] Scriptum fuisse autumo, ταύτην καὶ τὴν τῶν Ναξίων γῆν, Euboeam et Naxiorum terram. Id quae praecedunt, postulant: quid enim opus erat, ut in Euboeam transiret, quo colonos in Naxum deduceret? Requiritur et haec Pausaniae de Tolmide L. I. 27. p. 65. ἐσίγαγε ἐς Εὐβοίαν καὶ Νάξον Ἀθηναίων κληροῦχος. Iuvat praeterea Plutarchus Pericl. p. 158. D., quingentos dumtaxat colonos Naxum missos referens. WESS.

471. 62. Φάυλλον] Hoc malo. Vulgatum viri nomen si praeferas, utere Demosthene patrono, in cuius Orat. in Aristocratem Φάυλος reperitur, et Suida: quamquam Harpocration, unde Suidas sua exscripsit, Φάυλλος ea in oratione invenit. WESS.

471. 71. Κατεχομένην ὑπὸ Τυρρῶνων] Vide supra L. V. 13. WESS.

471. 76. Ὁ τῶν Σικελιωτῶν] Opinor τῶν Σικελῶν, quibus imperavit, non Σικελιώταις. Hinc semper alias τῶν Σικελῶν ἔχων τὴν ἡγεμονίαν. Vide cap. 76. 90. et L. XII. 8. WESS.

471. 80. Τὰς μὲν Νέας, ἣτις ἦν αὐτοῦ πατρίς] Corrigitur viri docti τὰς Μένας ex Ptolemaeo L. III. 4. et Stephano, qui Μένδαι, sive, ut refingendum monent, Μέναι, πόλις Σικελίας, ἐγγὺς Παλίσιων, quibus non refragor. Nullae enim per Siciliam Neae, et μὲν, nisi cum sequenti vocabulo coalescat, inportunum est. Ph. Cluverium vide L. II. Sicil. Antiq. c. 9., pluribus emendationem hanc stabilientem. WESS.

471. 90. Πολλῶν ἐν αὐτῷ παραδόξων γεγενημένων] Commodius hoc vulgato. De crateribus his Callias apud Macrobiū L. V. Saturn. c. 19. ὑφ' ἧ καὶ τοὺς Ἀέλλους καλουμένους εἶναι συμβέβηκε. οὗτοι δὲ κρατῆρες δύο εἰσίν, οὓς ἀδελφοὺς τῶν Παλίσιων οἱ Σικελιώται νομίζουσιν. Iunge S. Bochartum, ex Phoenicum sermone harum vocum originem dexterrime scrutatum, L. I. Canaan. c. 28. WESS.

472. 1. Τὸ μὲν ὕδωρ θείου κατακόρου τὴν ὕσφρησιν ἔχει] Polemon apud eundem Macrobiū: φέρεται ἀπ' αὐτῶν ὁσμὴ βαρεῖα θείου καὶ τοῖς πλησίον ἰσταμένοις καρηβάρησιν ἐμποιοῦσα

δεινὴν τὸ δὲ ὕδωρ ἐστὶ θολερὸν αὐτῶν, καὶ τὴν χροίαν ὁμοιώτατον χαμαὶ ὀπίω λευκῷ. Φέρεται δὲ κολποῦμενόν τε καὶ πασιλάζον, οἷα εἰσὶν αἱ δῖναι τῶν ζεόντων ἀναβολάδην ὑδάτων et reliqua, quae ibi legi possunt, Nostri descriptioni non admodum dissimilia. Ovidio ob sulphuris, quem exhalant, odorem *olentia stagna Palici* L. II. Ep. X. ex Pont. v. 25. et *olentia sulphure stagna Palicorum* Metam. V. 406. Id paene praetermissam imprudens, H. Stephano videri *addendum καὶ ante τὸ nisi quis malit legere, τὸ μὲν οὖν ὕδωρ*. Non id quidem absurde, nec necessario tamen. WESS.

472. 8. *Τινὲς γὰρ τῆς ὀρώσεως στειρηθέντες*] Poenae genus non exprimit Silius Ital. XIV. 219.

*Et, qui praesenti domitant periura, Palici,  
Pectora supplicio.* —

Distincte Solinus Polyhist. c. 4. Nam quisquis sacramento raptum negat, lumina aquis attrectat: ubi periurium non est, cernit clarius: si perfidia abnuat, detegitur facinus coecitate, et captus oculis admissum tenebris fatetur. Id tamen prave, quod has aquas ex Sicilia in Sardiniam transtulerit, cuius imprudentiae poenas dedit Cl. Salmasio Exercit. p. 73. Solinum, ut solet, sequitur Isidorus Origin. L. XIV. 6. WESS.

472. 14. *Καὶ τοῖς ἀνεχοῦσιν οἰκέταις etc. παρέχεται βοήθειαν*] Exemplum habes L. XXXVI. p. 531. Proptereaque et servi, cum sumto pileo dominis per Siciliam bellum fecissent, Palicos praecipuo cultu devenerati sunt p. 534., ubi nunc prave *Ἰταλικῶς Ἡρώσι pro Παλίκοις* scribitur. WESS.

472. 18. *Ἐπὶ διωρισμένοις φιλανθρώποις πείσαντες*] Praestantissimus interpres *per benignos domini arbitros persuasiverat*. Ego *arbitros* non invenio. *Ἐπὶ διωρισμένοις φιλανθρώποις* est *certis, iisque lenibus et humanis conditionibus*. Ut L. XIII. 3. *πάντων ἔνυχον τῶν φιλανθρώπων*. Et *φιλόανθρωπα πρόσσειν* L. XVIII. 67. WESS.

472. 34. *Κατεσθάγη καὶ διέμεινεν ἀοίκητος*] Quando et a quibus solo sit aequata, ignoramus. Auctor illis fortasse in libris, quos perditos dolemus, prodiderat. Durant veteris splendoris vestigia, descripta a Fazello Decad. 1. Lib. III. 2. WESS.

472. 40. *Θετταλὸς συναγαγὼν τοῖς ὑπολοίπους etc.*] Vide Lib. sequentis c. 10., ubi *Θεσσαλοὶ*, unde *Θετταλὸς τις* forte melius erit, deque fluvii, quos inter urbs erat posita, Sybari et Crathi Ph. Cluver. Ant. Ital. L. IV. p. 1267. WESS.

472. 47. *Ἐπ' ἄρχοντος etc.*] Hiatus hic est. Deficit annus primus Olymp. LXXXII., cum Archontis Attici nomine et victore, qui coronatus hac Olympiade fuit. Atque haec quidem suppleri in hunc possunt modum omnia: *Ἐπ' ἄρχοντος δ' Ἀθήνησι Χαιρεφάνους, παρὰ μὲν Ἠλείοις Ὀλυμπιάς ἤχθη δευτέρα πρὸς ταῖς ὀγδοήκοντα, καὶ ἦν ἐνίκα στάδιον Αἰκίος Θεσσαλὸς ἀπὸ Λα-*

ρίσσης ex Dionysio Ant. Rom. L. X. p. 676. Gesta vero huic anno aequalia unde eruemus? Suspicio ea pauca fuisse, et socordem librarium, cum mox iterum sequeretur ἐπ' ἄρχοντος, coniectis in id oculis, cetera omnia transiluisse. WESS.

473. 48. *Α. Ποστούμιον*] Delevi *Ποπλίου* vocabulum Codd. auctoribus. Abit autem Diodorus a ceteris Fastis, qui post C. Nautium Rutilum et L. Minucium Augurinum Coss. edunt C. *Horatium et Q. Minucium Augurinum*. Fortasse eos posuerat anno superiore, quem excidisse vidimus, quamquam ne sic quidem illis conspirat, uti deinceps dicitur. WESS. Substituit Ursinus Coss. C. *Horatium Pulvillum, Q. Minucium Augurinum*. IDEM in Add.

473. 52. *Μόντον φρουρούμενον ὑπὸ τῶν Ἀχραγαντίνων*] In Agrigentinarum id fuisse castellum agro adparet: praeterea nihil; nam qui praeter Diodorum meminerit, nemo est. Videtur tamen ab urbe *Μοτῆα*, de qua L. XIII. 54., nomen sortitum. Haud vero scio, an post pauca fuerit olim τῶν δὲ Ἀχραγαντίνων καὶ Συρακουσίων ἐπιβοηθησάντων. Id videntur requirere quae succedunt, ἐξήλασεν ἀμφοτέρους, tum etiam, quod de Bolcone, Syracusanorum praetore, additur continuo. WESS.

473. 64. *Περὶ τὰς Νομάς*] Et hoc soli Diodoro debetur oppidum. Retulit eo Ph. Cluverius II. Sicil. Antiq. p. 384. ex Silio XIV. 266.

— — *Comitata Nemaëis*

*Venit Amastra viris.* —

*Nomaëis* corrigens. Sed *Menaëis*, quod scriptis in libris invenit N. Heinsius, optime se tuetur, a *Menis*, de quibus c. 87. vidimus, repetitum. WESS.

473. 75. *Τοῖς ὄλοις συντριβείς*] Hoc genus in superioribus illustrare memini. Iunge Is. Casaubonum ad Polyb. I. 12. WESS.

473. 83. *Τῶν βρωμῶν*] Nisi fuit τὸν βρωμόν, ut est 503. 75.

473. 93. *Καὶ τὴν Νέμεσιν τῶν Θεῶν ἐντρέπεσθαι*] *Ultrix* haec facinorum in priorum bonorumque praemiatrix, ut Ammiano dicitur L. XIV. 11., maxime timenda censebatur omnibus, qui prospera fortuna elati, insolentius agerent aut supplicibus essent infesti. Quare cultissime veteri in Hymno de Nemesi:

Ἄ κοῦφα φρονήματα θνατῶν  
Ἐπέχεις ἀδάμαντι χαλινῶ,  
Ἐχθούσα θ' ἕβριν ὀλοῶν βροτῶν,  
Μέλανα φθόνον ἐκτὸς ἐλαύνεις.  
Ἐπὸ σὸν τροχὸν, ἕστατον, ἀστιβῆ  
Χαροπὰ μερόπων στρέφεται τύχη.  
Ἀήθουσα δὲ παρ πόδα βάλνεις.  
Γαυρούμενον ἀχένα κλίνεις etc.

quae legi possunt in Comment. Academi. Inscript. T. VII. p. 289., mireque illustrantur ab Ammiano, quaeque ad eum adscripsit H. Valesius. Habet etiam Io. G. Graevius haud pauca, ex interioribus



literarum penetralibus depromta, quae huc referas, Lect. Hesiod. c. 15. WESS.

474. 99. Ὡσπερ τινὶ μιᾷ φωνῇ ] Sic melius. Infra L. XVI. 80. πάντων δὲ καθάπερ τινὶ μιᾷ φωνῇ βοούντων. Aliter paullo Gregor. Nazianz. Orat. IV. p. 113. C. ἅπαντας ὡσπερ ἐξ ἑνὸς συνδηήματος καὶ μιᾶς φωνῆς τὸν τῶν Χριστιανῶν ἀνακαλεῖσθαι θεόν. Quae exempla et ἅπαντες ἐβόων retinenda suadent: nam δηήμος quod modo praecesserit, id nemini molestiam creabit. Frequens enim ea enallage utroque in sermone. Virg. Aen. VI. 660.

*Hic manus, ob patriam pugnando vulnera passi.*

Noster V. 4. ὁ δηήμος οὗτος περιττότερον τῶν ἄλλων ἐτίμησαν τὴν θεόν ubi plura. WESS.

474. 2. Ἐξέπεμψαν εἰς τὴν Κόρινθον ] Vide inferius L. XII. 8. WESS.

## A N N O T A T I O N E S

IN

## LIBRUM DUODECIMUM.

475. 9. *Θουρίων*] *᾽Οθυρίων* Co. Reg. I. Vat. Non male si *ὁ Θουρίων νομοθ.* scribas. WESS. Qui ad v. 11. aberravit.

475. 22. *Στρατεύσαντες ἐπὶ Πικυροῖς*] *Picenos* interp. doctissimus, in Addend. *Πικυροῖς* refingens. Cogitasset Picenum Syracusis longissime fuisse disparatum, et nihil usquam de hoc bello Diodorum memorasse, et vitio demersam esse vocem animadvertisset. Lib. XII. 29., ubi hoc [de bello, *Τουραζίους* fortasse prave, ut, eo cum devenerimus, quaeremus. WESS.

475. 28. *Πρὸς Κορυθαίους*] *Κορυθαίους* veteres numeri tuentur apud Spanhem. ad Callim. H. Del. v. 156. Vetustae schedae variant, ut Eustath. in Dionys. Perieg. v. 491. docet, multoque uberius Illust. Ang. Maria Quirinus in Primord. Corcyr. c. 2. WESS.

476. 37. *Σπ. Μάλιος*] Antistat vulgato, etsi corruptum: propius enim abest a *Sp. Melio*, de quo L. XII. 37. WESS.

476. 47. *Θυρεὰς κατόκησαν*] Vide L. XII. 44. WESS.

476. 60. *Ἀπὸ Ἀθηναίων*] Prave scripti quidam libri *Θηβαίων*, sed frequenti, ut supra monuimus, errore. In Polyaeo de Stratag. II. 1. legitur, *Ἀγχιλαος ἐν Κορωνείᾳ Ἀθηναίους ἐνίκησεν*, peccato contrario. Scripserat *Θηβαίους*, ut ex Plutarchi Agesil. p. 606. notum, idque firmatur eo Cod., quem usurpavit P. Fermat in Epist. post Diophantum Alexandr. p. 43. WESS.

476. 80. *Ἐκπτώσις Ἀγλίων*] Ita scripsit, quod et conjectura adsecutus erat Rhodomannus. Certa res est ex L. XII. 73. WESS.

477. 89. *Καὶ Καλχηδονίων*] *Χαλκηδόνιοι* L. XII. 82. Hoc, quod restitui, Carthaginensibus expulsis, numerorum veterum librorumque auctoritate satis est munitum. Vide Ill. Spanhemium Orb. Romani p. 460. et Dissert. II. de Usu et Praest. Num. p. 117. WESS.

478. 3. Οὕτε γὰρ τῶν νομιζομένων etc.] Vera animadversio et usu rerum comprobata. Non dissimile Menandri:

᾽Ω Παρμένων, οὐκ ἔστιν ἀγαθὸν τῷ βίῳ

Φυόμενον ὡσπερ δένδρον ἐκ ῥίζης μιᾶς

᾽Αλλ' ἐγγὺς ἀγαθοῦ παραπέφυκε καὶ κακὸν,

᾽Εκ τοῦ κακοῦ τ' ἤνεγκεν ἀγαθὸν ἢ φύσις.

Vertit Illust. Grotius:

*O Parmeno, nullum vita in humana bonum est,*

*Quasi arbor radice una ramos erigens:*

*Sed mala propinqua sunt bonis atque adsita:*

*Natura ex ipsis bona quin progenerat malis.*

Quibus gemina si requiras alia, adi Io. Stobaei Florileg. Tit. cv. WESS.

478. 14. Τῶν ἐν τῇ ᾽Ασίῃ] Propter hiatus concurrentium vocalium, quem ubique religiose vitat Diodorus, praefero lectionem marginis τῶν κατὰ τὴν ᾽Ασίαν. RHOD.

478. 25. Αἱ τε τέχναι διὰ τὴν εὐπορίαν etc.] Nunquam profecto illustrior Gracciae gloria fuit, sive res gestas, seu artes, disciplinas atque opes spectes. Provenerunt eo tempore excellentissima ingenia. Una, neque multorum annorum spatio divisa, aetas, per divini spiritus viros, Aeschylum, Sophoclem, Euripidem, illustravit Tragoedias: una priscam et veterem sub Cratino, Aristophane et Eupolide Comoediam, ac novam Comicam Menandrus, aequalesque eius aetatis magis quam operis, Philemon ac Diphilus, et incenere intra paucissimos annos, neque imitanda reliquere. Philosophorum quoque ingenia, Socratico ore defluentia, omnium, quos paullo ante enumeravimus, quanto post Platonis Aristotelisque mortem florere spatio? Quid ante Isocratem, quid post eius auditores eorumque discipulos clarum in Oratoribus fuit? adeo quidem artati angustiis temporum, ut nemo memoria dignus, alter ab altero videri nequiverint. Sic Velleius Patereulus l. 16. De praeclaris artificibus, qui eodem se tempore ac patriam illustrarunt, Plinius l. XXXIV. Hist. Nat. c. 8. WESS.

479. 30. Ῥήτορες δὲ Περισλήεις] Vide infra c. 40. WESS.

479. 52. Ἐπὶ Κόπρον ποιησάμενοι] Deest τὴν ἀρχὴν ποιησάμενοι, ut modo et princip. l. IV. et l. XV. 1. WESS.

479. 57. Α. Κοῦντιον Κικιννάτωρ] L. Quinctium Cincinnatum, non consulem, sed dictatorem fuisse, produnt Dionysius, Livius et Val. Maximus, Fabium autem Vibulanum in Minucii (quem dictator, ut se magistratu abdicaret, quod castra eius hostes obsederant, coegit) locum suffectum, Livius ostendit. Desiderantur autem sequentis anni Coss. apud Diodorum, Q. Minucius et M. Horatius Pulvillus. RHOD. Longe haec distant a reliquorum Fastis, qui consules L. Quinctium Cincinnatum et M. Fabium Vibulanum ignorant. Nec sufficit, ut L. Quinctium dictatorem consulis

sedem occupasse Diodori imprudentia arbitreris. Functus enim is supremo eo magistratu est superiore anno, quo Minucium ob res ad Algidum male gestas consulatu se abdicare iussit. Missus tum Minucio successor Fabius Quintus in Algidum est apud Livium III. 29. Sed is consul suffectus non fuit. Livius quidem certe, nec quisquam alius, quod sciam, id nusquam tradit. Habuit ergo auctor Fastos alios, a Capitolino marmore, Livio et Dionysio multum, hoc quidem anno, discrepantes. WESS. Conf. Borghesii *Nuovi frammenti dei fasti consolari* p. I. p. 25.

479. 61. Προσωπίτιδι νήσω] Vide not. in L. XI. 77. WESS.

479. 70. Ἐστρατιήγων] Puto deesse hic tria verba, et ita scriptum reliquisse Diodorum, Ἐστρατιήγων Ἀρτάβαζος καὶ Μεγάβυζος. Ἀρτάβαζος μὲν etc. STEPH. et RHOD. Praesentia earum vocum plane necessaria est. Addidi itaque, sed uncis inclusas. Librarii omiserant, coniectis in repetitum Ἀρταβάζον vocabulum oculis, quae huic generi sollemnis errandi occasio. WESS.

479. 76. Κίτιον μὲν καὶ Μαλὸν] Prius oppidum cognitum satis est, non item alterum. Io. Meursius nullum illi patronum reperit L. I. Cyprī suae c. 13., nisi Nostrum, qui et L. XIX. 79. Στασιόικον τὸν τοῦ Μαλιέως in Cypro regulum memorat. Sed debile id patrocinium: nam eundem Στασιόικον τὸν βασιλέα τῶν Μαρτίων paulo ante c. 62. vocarat, voce utrobique corrupta. Μαρτίων verum esse, alias decebo. Hoc loco Μάρσιον oportuerat, quo nomine Cyprī urbem Stephanus, deinceps Ἀρσινόην dictam referens, Seylax atque alii memorarunt. Vide quae dixi ad Hieroclis Synecdem. p. 707. WESS.

480. 86. Συνησαν μάχη] Thucydidem vide L. I. 112., qui rem paulo aliter exsequitur. WESS.

480. 95. Μάρκον Οὐάλλεριον Λαυτοῦζαν] Praenomen Consulī, ut decebat, instauravi. Cognomen illi *Maximo* in fragmentis est Capitolinis, nec spernendum tamen, quod auctor illi indidit, siquidem *Lactucinos in Valeria familia non puduisse appellari* testis est Plinius L. XIX. 4. Monuerunt id ipsum Sigonius, Pannivinius, Pighius in Fastis ad ann. ccxcvii. WESS. V. Borghes. p. 58.

480. 3. Ὑπελάμβανε μάλιστα] Adverbium hic nihil agit. RHOD. Omnium excerpta librorum, quibus utor, quum vocem defendant, non elimino. Potest etiam concinniore quodam usu μάλιστα vim asseverandi, ut saepe, capessere, de qua eius potestate ad Luciani Iudic. Vocal. c. 4. eruditissimus T. Hemsterhusius. WESS.

481. 23. Καλλίας ὁ Ἰππονίκου] Familiam et genus copiosissimi hominis declararunt Iac. Palmer. Exercitat. p. 754., Io. Fr. Gronov. Observat. L. IV. 7. et Iac. Perizon. in Aeliani Var. Hist. L. XIV. 16. Tempus legationis, quam pacis sanciendae causa obiit, hoc anno prius erit, si post praelium ad Eurymedontem pax Persas inter et Athenienses coaluerit, quemadmodum clarissime

significant Lyeurgus in Leocrat. p. 157., Plut. Cimon. p. 487. A., Aristides Panathen. p. 267. et Suidas in *Κίμων*. Qui locupletes quum sint auctores, haud sane mirandum est, viros egregios, H. Dodwellum Annal. Thucyd. p. 67. et 99. et Barbeyracium Histor. Foeder. P. I. p. 99. partes Diodori deserere, atque illis album calculum adponere. Mihi quidem consilium non est, gravissimis scriptoribus obloqui, nec desperata tamen prorsus Diodori causa videtur. Namque Callisthenes diserte negat, mox a praelio ad Eurymedontem foedere sancitum fuisse, ut Persae illis se finibus, de quibus auctor, continerent: metu dumtaxat percultos, claudibusque fractos longius a Graecia sese sciunxisse, potuisseque adeo Periclem et Ephialtem ultra Chelidonias classe proveli, nulla barbarica conspecta navi. Obmovet, fateor, Plutarchus Cimon. p. 487. C. exemplum foederis, quod Psephismatum collectioni inseruerit Craterus, nihil tamen addens, quo potissimum tempore id Athenienses inter et Persas coaluerit. Adde hoc amplius, nihil amicum ante hunc annum Atheniensibus fuisse cum Persis. Cimon enim statim a parta ad Eurymedontem victoria in eos, Thraciae Chersonesum insidentes, duxit. Non multis post annis Aegyptii, Inaro duce desciscunt, Atheniensiumque implorant auxilium, qui, tametsi conditionibus foederis nominatim insertum esset, *μη στρατεύειν Ἀθηναίους εἰς τὴν χώραν, ἧς ὁ βασιλεὺς ἄρχει*, confestim valida cum classe advolant, ipsosque Persas oppugnant. Quin ipso hoc tempore, Thucydide teste L. I. 112. Cimon sexaginta naves auxilio misit Amyrtaeo, qui in paludibus Aegypti, Persarum inimicus, degebat. Quae quidem aut foedus post pugnam ad Eurymedontem non fuisse pactum aut certe ab Atheniensibus perfide neglectum persuadent: fractum vero qui tradiderit, neminem novi. Unde ego suspicari malim, foedus reapse inter Athenienses et Persas ante hunc annum non fuisse, sed hos, quod Callisthenes memoriae prodidit, sponte sua post eladem ad Eurymedontem missas fecisse Graeci nominis in Asia civitates, raroque navigasse inter Chelidonias et Cyaneas, quod mare illud, Graecis longe superioribus, tutum non haberent. Quod autem pacem sociatam Lyeurgus, Plutarchus, et reliqui scriptorum post victoriam ad Eurymedontem referunt, illi rei occasio fuisse videtur ex metu Persarum, intra eos se fines constringentium. Atque hoc si probes, in concordiam utcumque redibunt scriptores, frontibus alioqui adversis pugnantes. WESS. Non mirum diversa tradi ab scriptoribus de foedere quod nunquam inquit est. Id quod optime ostendit Dahlmannus in Quaestionibus historicis vol. I. p. I.

481. 28. *Κατωτέρω τριῶν ἡμερῶν ὄδον*] Multimodis spatium hoc describitur ab illis, qui celeberrimae pacis meminerunt. Demosthenes *περὶ Παράπροσεβ.* p. 258. *ἵππον μὲν δρόμον ἡμέρας πένῃ μὴ καταβαίνειν ἐπὶ τὴν θάλατταν βασιλεία.* Hunc aemulatur Himerius in Photii Biblioth. p. 1110. *ἵππον μὲν δρόμον ἡμέ-*

ρας Θαλάττης ἀφέξειν ἄνω. Aemulatur et Aristides Panath. p. 294. ἀλλ' αὐτῆς, γρησὶ, ἵππου δρόμον ἡμέρας τῆς Θαλάττης ἀποσχίσεις. Itaque male ἡμέρας vocabulum abest ex Himerii Cod. Uffenbachiano, quem Io. Henr. Maius recenset Uffenbach. Biblioth. p. 627., nec recte mutatur in ἡμετέρας ab eruditissimo Kuhnio in verbis Aristidis ad Pausan. I. 8. Abit ab hac formula Isocrates Panath. p. 359. οὐκ ἐξῆν αὐτοῖς οὔτε ἐντὸς Ἄλλου ποταμοῦ πεζῶ καταβαίνειν, quibus gemina in Areopagitica extrema. Id vero Plutarchus Cim. p. 491. C. spatium amplitudine stadiorum trecentorum, Aristides Panathen. p. 267. stadiis quingentis metitur, si tamen numeri utrobique vitio careant, de quo dubito. Potest vir expeditus diurno itinere comode absolvere stadia centum septuaginta: Noster autem trium dierum spatio cum Persas a mari sciungat, opinor in Plutarchi numeris peccatum esse, idque ope Aristidis eluendum. WESS.

481. 29. Ἐντὸς Φάσιδος] Scribe Φασηλίδος, quae urbs est Pamphyliae, teste Stephano. RHOD. Ἐντὸς Φασηλίδος] Scripti Codd. hoc postulant, resque ipsa. Phasis fluvius nihil ad hunc locum, sicuti res ipsa clamat, et Isocrates Panegy. p. 93. et Panathen. p. 360. Natum scribendi compendio vitium videtur, quod et occupavit haec Lycurgi in Leocrat. p. 157. μακροῦ μὲν πλοῖω μὴ πλεῖν ἐντὸς Κυανέων καὶ Φάσιδος. Phaselis Pamphyliae urbs erat prope montem Climacem apud Strabon. I. XIV. p. 982. Illi alto in mari obiacent tres insulae Chelidoneae, mare Pamphylium et Lycium distinguentes, teste Luciano in Navig. c. 8. Unde scriptorum alii, Demosthenes, Aristides, Himerius et Plutarchus pactum fuisse aiunt, ἐντὸς Χελιδονέων καὶ Κυανέων πλοῖω μακροῦ μὴ πλεῖν. quarum Chelidoneae meridiem versus, Cyanaeae ad septentrionem Persis navigandi fines erant, ut bene Aristides Panath. p. 267. WESS.

481. 36. Νόσω τελευτῆσαι] Non deerant, qui ex vulnere, quod cum barbaris confligens acceperat, mortuum referebant apud Plutarch. Cim. p. 491. A. Nostro adstipulatur Schol. Thucydidis I. 112. atque ipse Plutarchus. WESS.

481. 39. Ῥωμίλιον] Vide Harduin. in Plinii L. VII. 28. WESS.

481. 40. Κιζώριον] Forte Κιζυροῖνον scripsit: ad Graecam tamen inflexisse vocem, ut solet, videtur. RHOD.

481. 42. Κρίσιον Ἰμεραῖος] Habet hunc victorem Dionysius Ant. Rom. princ. I. XI. Bellum cum Megarensibus geri coeptum est, cum Pericles in Euboca ageret, ut eam in ordinem cogeret, Thucydide teste L. I. 114. WESS.

481. 53. Ἀστέριον Φοντίνιον] Rectius Ἀστέριον. Φοντίνιος autem posuit pro Φοντινώλιος, ut sit Fontinalis Romanum. RHOD. Mire discrepant auctores in gentili consulis nomine, ut copiose Nigonius, Gebhardus, Dukerus et Drakenborchius ad Livii

L. III. 31. ostendunt. Nostri Ἀστέριος, si lapsum scribentis tollas, *Aterium* requirit, quod et verum. Nota enim gens Romana *Ateria* est, cuius nomen multimodis corrumpi potuit Latinis in libris, in Graecis difficilius. Vide tamen et Pighium in *Annal.* ad ann. cxcix. WESS. *Aternius* cum fastis Capit. Borghes. p. 73.

481. 59. Καθ' ἣν Τελμίδης μὲν μαχόμενος ἀνηγέθη] Thebani ductu et auspiciis Spartonis Tolmidem atque Athenienses fuderunt, teste Plutarcho Agesil. p. 606. A., qui quoque cladis eius meminit in *Pericl.* p. 163. B., sicuti et Pausanias L. I. 27. p. 65. et his prior Thucydid. I. 112. WESS.

482. 67. Σέξιτον Κοίντιον] Κοίντιον muta in Κοϊντίλιον. At Σέξιον pronomem deest, ut in altero Cos. prae-nomen atque nomen simul, nempe Πούπλιον Ὀράτιον. RHOD. In Rhodomanni nota quaedam luxata sunt. Voluit, credo, Sexto Quinctilio cognomen deesse, sicuti prae-nomen et nomen Tergemino: quem Πούπλιον Ὀράτιον adpellans, consentit quidem cum Dionysio L. X. Rom. Antiq. p. 676., at ab it Livio III. 32., cui *Curiatius*, uti in versione. Pro *Horatio* pugnat Pighius *Fastor.* L. II. p. 136., Panvinius pro *Curiatio* ad ann. ccc1.; mihi res dubia est. *Tergeminius* gentis utriusque est cognomen. WESS. V. Borghes. p. 79. s.

482. 69. Περὶ Χαϊρώνειαν ἦταν] Suspicio scriptum olim fuisse περὶ Κορώνειαν. Ad eam enim urbem, quod modo memoravit, infelici praelio victi Athenienses discesserunt. Simili librorum peccato in Isocratis *Orat. de Big.* p. 521. de patre Alcibiadis, ὁ δὲ πατήρ αὐτοῦ μαχόμενος ἐν Χαϊρωνείᾳ τοῖς πολεμίοις ἀπέθανε. Atqui Clinias strenue pugnans ad Coroneam occubuit, sicuti ad Hierocl. *Synecdem.* p. 614. ostendi. Fuit ergo et ibi ἐν Κορωνείᾳ, quemadmodum in Thucydide I. 112. Nam quod Palmerius *Exercit.* p. 46. ἐν Κορωνείᾳτιδι melius Thucydidem fuisse dicturum affirmat, id nullius esse momenti vere monuit Cel. Duker. Quid enim obvium magis hac structura? Ἡ ἐν Φιλίπποις νίκη Straboni L. XIV. p. 991. D., quae ad Philippos parta. Τὸ ἐν Πλαταιαῖς ἔργον in *Epist. personati Themistoelis* II. p. 9. praelium ad Plataeas. Verum hoc de genere alias fortasse uberius. WESS.

482. 73. Τὴν μὲν πόλιν τῶν Ἑσθιαίων ἐλὼν] Videatur Plutarchus in *Pericl.* p. 164. E. Tempus subactae Euboeae firmat egregie Pausan., cum de triginta annorum inter Spartanos et Athenienses induciis L. V. 23. ταύτας ἐποίησαντο, inquit, Ἀθηναῖοι παραστησόμενοι τὸ δεύτερον Ἐββοίαν, ἔτι τρίτῃ τῆς Ὀλυμπιάδος, ἣν Κρίσιον Ἰμεραῖος ἐνίκα στάδιον. Idem enim annus est, modo suppleas Ὀλυμπιάδος τρίτης πρὸς ταῖς ὀγδοήκοντα. quae mihi necessaria videntur, quod alioqui dubia temporis sit notatio. Namque ter Crison et hac lxxxiii. et duabus sequentibus Olympiadibus victor abiit. WESS.

482. 77. Καλλίων καὶ Χάριτος συνθεμένων] Missi decem Lacedaemona legati sunt, quorum princeps Andocides oratoris avus,

ni fallit Aeschines *περὶ Παράφρ.* p. 51. Sed fallit omnino. Nam Andocides *Orat. de Pac.* p. 24., quem Aeschines exscripsit, avum suum e decem illis fuisse, non legationis principem, perhibet. Vidit et hanc Aeschinis inconsiderantiam Cl. Barbeyracius *Hist. Foeder. P. I.* p. 112. Formula induciarum, columnae insculpta, durabat in Pausaniae usque aetatem Olympiae iuxta Iovis signum lib. V. 23. WESS.

482. 84. Ἀπέδειξαν αὐτῷ τὴν τῶν Κορινθίων πόλιν οὐκ-  
τήριοι] *Supra L. XI. 91.* WESS.

482. 87. Κτίσαι τὴν Καλὴν Ἀκτὴν] Siciliae litus, Etruscorum orae obversum, sic adpellabant olim. Ἡ δὲ καλὴ αὐτὴ Ἀκτὴ καλεομένη ἔστι μὲν Σικελῶν, πρὸς δὲ Τυρρηνίην τετραμμένη τῆς Σικελίας, Herodotus VI. 22. Dein urbs, Ducetii auspiciis illic condita, eodem nomine fuit, et contracte Καλακτὴ, unde Latinorum *Calacta*, et oppidani *Καλακτῖνοι* inferius c. 29. WESS.

482. 90. Ἀρχωνίδης ὁ τῶν Ἐρβιταίων δυναστεύων] Cicero et Plinius *Herbitam* et *Herbitenses* adspirant, non item Graeci: nam in Ptolemaeo, cui Ἐρβιτα L. III. 4. scripti Codd. Palatin. et Coislin. ceteris consentiunt. Latinos sequitur Ph. Cluverius *Sicil. Antiq.* L. II. 8. Ceterum Archonides Herbitensium princeps memoratur et in rebus Dionysii L. XIV. 16., qui, si idem atque hic fuerit, vitam in ultimam senectutem prorogavit. WESS.

482. 96. Τῶν Σικελιζῶν πόλεων] Σικελῶν πόλεων scribitur et a Coislin. infra c. 29., quod, etsi οἰμος Σκέθης, Ἑλλην στρατὸς, Θεττάλῃ ἴππος, eiusque generis plura ignota non sint, haud sequor. Vide Io. Meursium in *Lycophron.* v. 496. et Th. Stanleium ad *Aeschyli Prometh.* v. 2. WESS.

482. 1. Ἀλλήλοισ] Ἀλλήλοισ Coisl. non male: enallage tamen generis Nostro frequentatur. WESS.

483. 12. Τοῦ τε Κράθιος καὶ τοῦ Συβάριος] *Conf. L. XI. 89.* WESS.

483. 19. Ἔχειν πολιτῶν τριάκοντα μυριάδας] Similia Strabo, sed distinctius: τοσοῦτον δ' ἐδυνάμει δύνεγκεν ἢ πόλις αὐτὴ τὸ πλέον, ὡς τεττάρων μὲν ἔθνων τῶν ἀλησιῶν ἐπὶ ῥῆξε, πέντε δὲ καὶ εἴκοσι πόλεις ὑπάρχουσ ἔσχε, ΤΡΙΑΚΟΝΤΑ δὲ ΜΥΡΙΑΣΙΝ ἀνδρῶν ἐπὶ Κροτωνιάτας ἐστράτευσεν, L. VI. p. 404. A. Porro quod succedit de Tely, cum Herodotus L. V. 44. Sybaritarum regem, Heraclides Ponticus eorundem tyrannum vocat in *Athenaci* L. XII. 4., id insuper significans, prius dominatione deiectum fuisse quam bellum ipsos inter et Crotoniatas arderet, adversantibus Herodoto et Diodoro. WESS.

483. 21. Φυγαδεῦσαι τοὺς εὐπροσώτατους τῶν πολιτῶν] Sybaris Achaeorum et Troezeniorum erat colonia: Achaeci cum numero evasissent superiores, Troezeniis oriundos civitate eiecerunt. Hinc, cum Crotoniatæ exules prodere nollent, ortum bel-



lum. Aristoteles Polit. L. V. 3. *Θροῖηρίους Ἀχαιοὶ ἀννώρισαν Σύβαριν εἶτα πλείους οἱ Ἀχαιοὶ γενόμενοι, ἔξέβαλον τοὺς Θροῖηρίους. ὅθεν τὸ ἔργον συνέβη τοῖς Συβαρίταις.* Hoc enim ad tempus ea Philosophi pertinere, quae continuo de Thuriis subiungit, liquida declarat. WESS.

483. 26. *Οἷς ἦν προστεταγμένον ἢ τοὺς γεννάδας*] Videtur addi debere infinitivus *εἰπεῖν*, aut alius huiusmodi. Nisi quis eum non nimis dure subaudiri existimet. STEPH. et RHOD. Saepè utroque in sermone elegantiae est, ut subintelligant id verbum, non expriment. Noster L. XIV. 112. *ἄμα κήρυκτος ἀραζολοῦ-δοῦντος, ὅτι τὸν ἄνδρα Λιονόσιος τιμωρεῖται.* ubi, qui diceret, manifesto intelligendum relinquatur. Et in Excerpt. Valesii p. 381. *Ἐξαπέταλκε προσβεντὰς εἰς Ῥώμην, μὴ περιιδεῖν βασιλεῖα φίλον καὶ σύμμαχον κινδυνεύοντα,* i. e. qui dicerent rogarentque, ne regem amicum etc. Plutarchus de Curios. p. 519. A. *εἰς τὸ βῆμα καὶ τὴν ἀγορὰν καὶ τοὺς λιμένας ὠδοῦνται, μὴ τι καιρόν;* videlicet λέγοντες. Similis figura apud Livium L. XXXVIII. 1. *Remissique ab eo nuncii principibus Argitheam, si popularium animos satis perspectos haberet, inpetrato ab Aetolis auxilio, in Athamaniam se venturum.* Et Sallustium Iugurth. c. 109. *Tum rex post diem decimum redire iubet, ac nihil etiam nunc decrevisse, sed illo die responsurum.* Ubi Cortium vide et Io. Fr. Gronov. ad Senec. VII. de Benef. c. 30. et Io. Freinshem. in Curtii L. III. 4. WESS.

483. 29. *Τοὺς Ἰταλιώτας ἐκδοῦναι*] Doctissim. Rhodomannus in Addend. *ἐκέτας* loco *Ἰταλιώτας* rectius legi arbitratur: cui nisi adstipuleris, dicendum erit, *Ἰταλιώτας* hic adpellari exsules, quod Graeci origine Italiae urbem Sybarim incolerent. *Itali enim οἱ ἀρχῆθεν τὴν χώραν οἰκοῦντες.* *Ἰταλιῶται δὲ, ὅπόσοι τῶν Ἑλλήνων ἐκώκησαν μετὰ ταῦτα,* differentiam explicante Ammonio. Hinc et auctori L. XIV. 102. *Thurini Ἰταλιῶται.* Iunge Menagium in Diogen. II. 5. Tamen, ne quid dissimulem, cum Rhodomanno *ἐκέτας* malim; quod egregie opportunum, et saepius deinceps repetitur. WESS.

483. 34. *Ἰνδαγόρον τοῦ φιλοσόφου συμβολεύσατος*] Iamblichus eadem de re, *καὶ δοκιμάζοντος αὐτοῦ, μὴδ' ἱερεῖα τοῖς βωμοῖς προσάγειν ἐκέλευς, καὶ τοὺς ἐκέτας,* sic optime retingunt Stanleius ad Aeschyli Eumen. v. 233. et Kusterus, *ἀπὸ τῶν βωμῶν ἀποσπῆν,* de Vita Pythagor. sect. 177. Hoc autem Diodori loco ad Pythagorae aetatem constituendam diligenter usus est Cel. Rich. Bentleius Dissert. de Phalar. Epist. p. 72. WESS.

483. 41. *Ὁ γὰρ ἀνὴρ οὗτος ἐξέτας Ὀλύμπια νεκροῦς*] Citat haec Tzetzes Chil. II. 460. De victoriis, quas Milon Olympiae reportavit, Pausanias L. VI. p. 486. atque ex eo Schol. Aristophan. Ran. v. 55. WESS.

483. 44. Ὀλυμπιασοῖς] Ὀλυμπιοῖς Co. Vat., sed alterum probat auctor. WESS.

484. 46. Αεοντιῆ καὶ ῥοπάλω] Vide ad L. I. 24. WESS.

484. 53. Θεσσαλοὶ συνόρισαν] Superius L. XI. 89. uni *Thessalo* urbis instaurationem acceptam retulit, minus commode: praeterea ἐξ ἔτη *per sex annos* conditam urbem novos sessoros tenuisse: quod verius censeo. Excidit ibi, sicuti ostendimus, annus primus Olymp. LXXXII.; qui non animadversus defectus, ut annorum numeri minuerentur, effecisse videtur. Deleta ergo a Crotoniatis est Sybaris circiter annum tertium Olymp. LXVII. WESS.

484. 55. Ἐλ' ἄρχοντος δ' Ἀθήνησι Καλλιμάχου] Plutarchus T. II. p. 835. D. duobus abhinc annis principio Olymp. LXXXIV. Archonte Athenis Praxitele urbem Atheniensium ope e ruinis surrexisse, tumque eo Lysiam properasse adfirmat: nec dissentit Dionysius T. II. p. 82., cum Lysiam eodem commigrasse prodit δωδεκάτῳ πρότερον ἔτει τοῦ Πελοποννησιακοῦ πολέμου anno XII. ante bellum Peloponnesiacum. Id enim coepit ardere praetore apud Athenienses Pythodoro, sive anno primo Olymp. LXXXVII. Quare, ut hi cum Diodoro conspirent, fatendum est, aut statim Lysiam iter non fuisse ingressum, sed urbe paene instaurata, aut consilia reficiendae urbis agitari cum maxime fuisse coepta, legatosque Lacedaemonem et Athenas super ea re missos, qui demum Athenienses in operis societatem pellexerint. WESS.

484. 60. Οἱ δέ] Δε supervacaneum est. WESS.

484. 63. Λαζεδαμόριοι μὲν οὖν οὐ προσέσχον αὐτοῖς] Male ergo Eustathius in Dionys. v. 374. ὑπέσθη μέντοι χρόνω οἱ Ἀθηναῖοι καὶ οἱ Λαζεδαμόριοι ἀποικίαν στέλλαντες τὴν πόλιν συνόρισαν καὶ Θούριον μετωνόμισαν. Athenienses, spe Italiae et Siciliae inflammatos, Pericles perpulit, ut colonos ad Sybarim instaurandam ablegarent. Missae ergo decem sunt naves totidemque coloniae duces, quorum princeps Lampon, cuius ea in re opera usus est Pericles, teste Plutarcho de Rep. Administr. p. 812. C., celebrioris tum famae vates. Suidas in *Θοροιομάντις. ἐξέλειψαν δὲ εἰς κτίσιν τὴν αὐτοῦ Ἀθηναῖοι δέκα ἄνδρας, ὧν καὶ ΑΛΜΠΩΝ ἦν ὁ μάντις, ἐξηγητὴς ἐσόμενος τῆς κτίσεως τῆς πόλεως.* quae ille exscripsit ex Schol. ad Aristoph. Nub. v. 331. et Aves v. 521. Aderat praeterea Hieron, qui τῆς ἀποικίας ἡγεμὼν Plutarcho in Nicia p. 526. B. Aderant alii, de quibus Cl. Io. Taylor ad Lysiae vitam p. 33. WESS.

484. 80. Ὠνόμισαν ἀπὸ τῆς γοήνης Θούριον] Strabo alii- que plures *Θοροίους*. Cum Nostro conspirant Ptolemaeus, Mela, Schol. Theocriti et Stephanus. Vide Casaub. in Strabon. L. VI. p. 404. et Ph. Cluver. Ital. Antiq. IV. p. 1264. WESS.

485. 89. Στάσει μεγάλη περιέπεσον] Meminit seditionis Philosophus Polit. L. V. 3. καὶ ἐν Θοροῖσις Συβαρίται τοῖς σπροι- κήσουσιν πλεονεκτεῖν γὰρ ἀξιοῦντες, ὡς σφετέρως τῆς χώρας,

ἐξέπεσον. Nimirum Sybaritae advenas prae se contemnentis, praecipua cum in rerum administratione, tum agrorum descriptione sibi sumebant: hinc rixae. Strabo eiusdem commemorat, sed parum accurate, L. VI. p. 404. WESS.

485. 93. Καὶ τὰς γυναικὰς ἐπιθύνει τοῖς θεοῖς etc.] Interpres generaliore dictione defungitur. Ἐπιθύνει servat veteris significationis, qua θύνει thus adolere, manifesta vestigia. Dici de illis solet, qui thus digitis primoribus correptum in aram invergant. Noster Eumenem cum prodidisset admonuisse duces et conmilitiones ἐπιθύνει ἡμῖν ἡμέραν πάντας Alexandro, quid sit continuo explicat L. XVIII. 6. καὶ κειμένης ἐσχάρου ἐχούσης πῦρ, ἐλέδρον ἐκ κισσίου χορσοῦ πάντες οἱ ἡγεμόνες τὸν τε λιβανωτὸν καὶ τῶν ἄλλων εὐωδῶν τὰ πολυτελέστατα, positoque foculo, igne repleto, ex aurea acerra depromptum thus et reliqua magni pretii aromata duces in eo adolent. Hinc vero liquet nefarium consilium Antiochi, qui patria Iudaeorum deserta religione, τεκμήριον ἐμπαρέχειν οὐόμενος τὸ ΕΠΙΘΥΕΙΝ, ὅσπερ νόμος ἐστὶ τοῖς Ἕλλησιν, ἐκέλευε καὶ τοὺς ἄλλους ταυτὸ ποιεῖν ἀναγκάζειν παρεσθὲς γὰρ γενήσεσθαι τῷ μὴ θέλειν τοὺς ἐπιβεβουλιευκότας apud Ioseph. Bel. Iud. L. VII. 3. 3. Volebat, ut Antiocheni Iudaei, quemadmodum ipse, thus primis digitis ex acerra decerptum arae iniicere adigerentur; idque si recusarent, manifesto ut tenerentur. Immolationis, quam viri docti obtrudunt, nulla illic ratio. Praeclare Porphyrius L. II. A. A. c. 58. καὶ αὐτὸ τὸ θύνει τοῦ θυμῶν εἶχετο, καὶ τοῦ ῥῆν παρ' ἡμῖν λεγομένου ΕΠΙΘΥΕΙΝ. WESS.

485. 1. Καὶ κρείττονες σχεδὸν ὄντες] Nos marginis lectioni subscribimus. (quid enim hic σχεδὸν post κρείττονες agit? RHOD.

485. 15. Ἄλλων γενῶν] Malim ἄλλογενῶν, quam ἄλλων γενῶν. STEPH.

485. 16. Τὸν ἄριστον τὸν ἐν παιδείᾳ θαυμαζόμενον] Non dubito quin legendum sit ἄριστον τῶν ἐν παιδείᾳ θαυμαζόμενων. STEPH. et RHOD. Accedo viris doctissimis. Id Diodoro largiri non possum, Charondam fuisse Thurinum civem, legesque Thuriis scripsisse. Adpellant eum quidem *Thurium*, *Θούριον*, Valer. Max. L. VI. 5. et Themistius Orat. II. p. 31. B., sed cum Nostro errantes. Domo *Catanaeum* Philosophus Polit. L. II. 10., Heraclides de Polit. Iamblichus Vit. Pyth. sect. 33. 104. etc. atque alii perhibent. Addit Iamblichus Pythagorae aequalem et discipulum fuisse, qui cum ante hos sexaginta quatuor annos in Italia floruerit, fieri vix potuit, ut Charondas inter vivos duraret, quum Thuriis instaurarentur. Prodidit hoc amplius Heraclides dicto loco, Rheginos, apud quos optimatum partes valuerint, Charondae legibus fuisse usos: mutasse dein reipublicae formam Anaxilam, civitate tyrannide oppressa. Atqui Anaxilas post octodecim annorum dominationem fati concessit anno primo Olymp. LXXVI., sicuti vidimus L.

XI. 48., prior ergo Charondas est Olymp. LXXI. Dices Sybaritis, quod Iamblichus innuit, leges dictasse: at eius civitatis, Pythagorae aetate, adeo profligati et perditii erant mores, ut leges, cuiusmodi Charondae, ferre non potuisse videatur. Et veri id tamen similis foret, modo ea in re veteres consentirent. Vide vero quid Aristoteles memoret: *Χαρώνδας ὁ Καταναῖος τοῖς αὐτοῦ πολίταις καὶ ταῖς ἄλλαις ταῖς Χαλκιδικαῖς πόλεσι, ταῖς περὶ Ἰταλίαν καὶ Σικελίαν (νομοθέτης ἐγένετο)* L. II. Polit. c. 10. Iam Chalcidicae civitates per Siciliam *Zancle, Naxos, Leontini, Catania, Euboea, Mylae, Himera, Callipolis* erant. In Italia *Rhegium*, teste Scymno Chio. A qua origine et Sybaris et Thurii multum aberant. Ergo ex Philosophi opinione ne Sybaritarum quidem legislator Charondas fuit. Dici potest, quod in opinionem venit eruditissimo Bentleio, Thuriacos, urbe instaurata, Charondae leges, iam olim latas, adscivisse suae reipublicae in usum, quod seriore aetate a Mazacenis in Cappadocia factum fuisse ex Strabone L. XII. p. 813. novimus. Hinc sumtam occasionem Charondam *Thurinum*, etsi perinconmode, appellandi. Vide virum doctissimum, uberius haec declarantem, Dissert. de Phalarid. Epist. p. 364. WESS.

485. 19. *Πολλὰ δὲ καὶ ἴδια παρεπινοησάμενος*] Id vero negat Philosophus L. II. Polit. c. 10. *Χαρώνδου δ' ἴδιον μὲν αὐδὲν ἐστὶ, πλὴν αἱ δίκαι τῶν ψευδομαρτυριῶν. πρῶτος γὰρ ἐποίησε τὴν ἐπίσκηψιν.* Sic recte corrigit Bentleius. Sententia est: Charondam nihil proprium et praecipuum in legibus habere, praeter causas de falsis testimoniis. Primum eum introduxisse τὴν ἐπίσκηψιν sive actionem falsi testimonii. Atqui in legibus, quae continuo consequuntur, multa insuat singularia: unde conficias, longe alio legum Charondae exemplo Philosophum fuisse usum. Ad haec, ait Aristoteles τὴν ἐπίσκηψιν esse Charondae proprium quoddam inventum, quae Athenis Lysiae, qui, quamquam iuvenis admodum, socius fuit instaurandorum Thuriorum, aetate et ante iam nota erat; sequitur proinde Charondam principio Thuriorum esse priorem: quae et conclusio est R. Bentleii Dissert. de Phalar. Epist. p. 369. WESS.

485. 23. *Μητριῶν ἐπαγομένοις*] Vide Maussac. ad Plutarch. de Flumin. c. 3. Sollemnia sunt verba ἐπάγεσθαι, ἐπεισάγειν, ἐπιγαμεῖν de patribus, qui liberis suis novercam imponunt. Mox vetus poeta c. 14.

*Ὁ παισὶν αὐτοῦ μητριῶν ἐπεισάγων.*

Heliodorus Aethiop. I. p. 16. *καὶ τοῖς οἴκοις ἐπεισάγει γύναιον ἀστεῖον.* Euripides Alcest. v. 305.

*Καὶ μὴ πηγίμης τοῖσδε μητριῶν τέκνοις.*

Plut. T. II. p. 480. D. *Πεισιστρατος ἐπιγαμῶν ἐν ἡλικίᾳ οὔσι τοῖς υἱοῖς.* Porro legis Charondae verba ad hunc modum exhibet Io. Stobaeus Serm. XLII. p. 291. *ὁ μητριῶν ἐπιγαμῶν μὴ εὐδοξείτω, ἀλλ' ὄνειδιζέσθω, ὥσπερ αἴτιος ὢν οἰκείας διαστάσεως.* WESS.

486. 32. Ὅπως ἐν πᾶσι τοῖς πολίταις γαίνωνται ] Licetbat propterea hoc hominum genus conviciis incessere et tanquam in comoedia traducere, quod alioqui legibus vetitum erat. Plutarchus de Curiosit. p. 519. Β. *κοιμωδεῖσθαι γὰρ ἐκόλυσε*, Thuriorum legislator, *τοὺς πολίτας, πλήρ' μίχους καὶ πολυπράγμονας*. Nimirum id legumlator praeter cetera civium animis ingenerare adnixus erat, ut singuli amarent τὸ καλὸν καὶ τὸ ἀληθές, odissent autem τὸ ἀσχηρὸν καὶ τὸ ψεῦδος apud Stobens. p. 289. WESS.

486. 45. Καθάπερ λοιμικὴν νόσον, ἐπιπέμεισθαι ] Eadem S. Paulli 2. ad Timoth. II. 17. translatio: καὶ ὁ λόγος ἀντῶν ὡς γάγγραινα νομῆν ἔξει. Et Iudaeorum in A. A. III. 17., Philonisque Iud. de Insid. a Deter. Potiori Struct. p. 175. D. εἴ τις ἐπιπεμομένη κακία μεκύνεται τῆς ἐν σώματι ἐρπινώδους ἀδέλγη νόσου. Egregie vero ad mentem legislatoris huius Aeschylus VII. C. Theb. v. 605.

Ἐν παντὶ πράγει δ' ἔσθ' ὁμιλίης κακῆς

Κάκιον οὐδέν, καρπὸς οὐ κοιμωτέος.

Ἐπιπέμεισθαι θάνατον ἐκακωπίζεται.

Iunge, quae de Philippo L. XVI. 55. prodita leguntur. WESS.

486. 55. Καὶ ἕτερον νόμον ἀπὸ τούτου κρείττονα ] Sive illud ἀπὸ referas ad ἕτερον seu ad κρείττονα, orationis elegantiam turbabit. Equidem ne adesset malle. WESS.

486. 58. Χορηγούσης τῆς πόλεως τοὺς μισθοὺς ] Vide Is. Casaubon. in Strabon. L. IV. p. 273. Charondae hoc institutum labentibus annis Romani aliique sunt imitati, professoribus et magistris publicum salarium constituentibus. WESS.

486. 65. Φήγους ] Suffragia interpretes. Tu, si malis, λογισμοὺς et computandi usum intellige. Mox ante τᾶλλα desiderari copulam pulcre vidit Rhodomannus. WESS.

487. 69. Οἱ δὲ μακρὰν τοῖς τόποις διεστῶτες ] Palamedes in cognomine Euripidis Fab. apud Stob. Serm. LXXIX. p. 469.

Ἐξεῦρον ἀνθρώποισι γράμματ' εἰδέναι,

Ἵσθ' οὐ παρόντα ποντίας ὑπὲρ πλακῶς

Τάκει κατ' οἴκους πάντ' ἐπίστασθαι καλῶς.

A quibus non abit Aeschyli Prometheus, pulcerrimum literarum inventum sibi vindicans v. 459.

Ἐξεῦρον αὐτοῖς γραμμῶν τε συνθέσεις

Μνήμην θ' ἀπάντων μουσομήτορ' ἐργάτιν.

Mitto alia; longum enim facerem, si, quae in laudem literarum congesta saepe sunt, coacerivarem. WESS.

487. 84. Ἀρμοσίῳ μισθῷ τοὺς νοσοῦντας etc.] Confer superius L. I. 82. WESS.

487. 94. — 96. Euripidis ex Phoenice versus notissimi, quos afferunt praeter Demosthenem p. 417. s. R., ab Reinesio indicatum, Aeschines c. Tim. p. 21. St., Hermogenes progymn. in Bibliothek der alten Litt. u. Kunst VIII. 13.

487. 98. Τὸν νομοθέτην φασὶ Χαρώνδαν] Avulsi haec a superioribus, et versus, ut sunt, esse iussi. Tantum ταῦτα in ταῦτι, ne versus modulo noceret, converti, obsecutus Cl. Bentleio, qui primus omnium animadverterat, Diss. de Phal. Epist. p. 375. WESS.

487. 4. Εἴτ' ἐπέτυγες γὰρ φησι γήμας] Illust. Grotius in Excerpt. Trag. etc. p. 919. versum legit,

Εἴτ' ἐπέτυγες γὰρ τὸ πρότερον γήμας φίλε  
fortasse offensus τῷ φησὶ, quod ad Charondam pertinere adparet clarissime. Mox pro πείρας δευτέρας λαβεῖν lege cum eodem Bentleio πείραν δευτέρας, coniugis nimirum, ut L. I. 59. ἤ τις πείραν ἀνδρὸς οὐκ εἴληφεν ἕτερον, et similiem in secundas nuptias criminationum desiderio si teneris, decurre ad Athen. L. XIII. p. 559., ubi eorum larga seges. WESS.

487. 10. Νόμῳ τεθαύμασα] Haec phrasis vitium sonat, et vox νόμῳ habet notam superscriptam. Forte scripserat νῶ μοῦ τεθαύμασα, in mente mea miratus sum. PALM. Retulit Illust. H. Grotius in Excerpt. Tragic. etc. p. 769. hoc Philemonis fragmentum ad Fab., cui Νόμος titulus, distractaque adeo νόμῳ voce a sequentibus, legit: ΝΟΜΩι

— — Τεθαύμαζ' οὐκ ἐπεὶ

Πέπλευκεν, ἀλλ' εἰ δις πέπλευκε —

Io. Clericus, cum Grotius auctorem, unde haec sumserat, signare neglexisset, magni ducis vestigiis inhaerens, praescripto tamen titulo ΕΚ ΤΟΥ ΝΟΜΟΥ, pari modo exhibet Philemon. Fragm. p. 316.: sine dubio ingeniose. Id solum perinconmodum, quod nemo quisquam veterum Fabulae Philemonis, cui ΝΟΜΟΣ inscriptus, meminerit. Diceres etiam nomen eius unde haec deprompta, fuisse ΝΑΥΤΙΛΛΟΜΕΝΟΙ, aut certe ΠΟΛΛΑΚΙΣ ΝΑΥΤΙΛΛΟΜΕΝΟΙ. Hoc enim requirere videntur auctoris verba γράφοντος τοὺς πολλάκις ναυτιλλομένους, cum comoediam scriberet, πολλάκις ναυτιλλομένους dictam. Cuius dramatis, faetor enim, nulla mihi quidem alibi reperta memoria est: neque ea tamen iusta, ut spernatur, caussa habebitur. Quam enim paucae ex illis xc Philemonis Fabulis, quas a Suida scriptas reliquisse perhibetur, in veterum commentariis, memorantur, recensitae post Grotii operam a L. Kustero et Io. Alb. Fabricio? Hoc mihi vero si dederis, et postulat paene Diodorus, suspicabor venisse a Philemone:

— — Οἷ μοι! τεθαύμαζ' οὐκ ἐπεὶ

Πέπλευκεν, ἀλλ' εἰ δις πέπλευκε. —

Sed suspicabor tantum. Qui enim meliora coniecerit, eum ego vatem perhibebo optimum. WESS.

488. 31. Ἐξαιρέται τις ἐπίνοια τοῦ νομοθέτου] Egregia profecto et summi consilii plena. Solon, etsi non seiunxerit bonorum atque educationis curam, simili ex caussa agnatos a tutela

prohibuit, veritus, ne hereditatem, in cuius spe erant, capere quam exspectare mallent. Μηδ' ἐπιτροπεύειν, εἰς ὃν ἡ οὐσία ἔρχεται, τῶν ὀργανῶν τελευτησάντων apud Diogenem I. 56. Romanis placuit ut quo hereditas pervenit, eo et tutela rediret. Vide S. Petitem in L. L. Attic. L. VI. 7. et viros doctos ad Cuii Instit. L. I. Tit. 7. WESS.

488. 45. Οὗτος προσέταξε τοὺς τοιοῦτους ἐν τῇ ἀγορῇ ] Non dissimile Aegyptiorum institutum vidimus L. I. 78. Charondas, ut plerique veterum, censebat: ἀπὸ πατρίδος ἀποθνήσκειν σμεινότερον εἶναι ἢ γλιχόμενον τοῦ ζῆν ἐγκαταλιπεῖν αὐτὴν καὶ τὸ καλόν. Κρεῖττον γὰρ τεθνήναι καλῶς ἢ ζῆν αἰσχρῶς καὶ ἐπονειδίστως apud Stobaeum Floril. Tit. XLII. p. 290. WESS. Plato I. 9. de leg. vocat eiusmodi poenam ἀμόρφους ἔδρας, ἢ στάσεις ἢ περιστάσεις εἰς τὰ ἱερά. REINES.

488. 57. Ἐκ παντὸς τρόπου πείθεσθαι τῷ νόμῳ ] Maximorum scelerum instar erat καὶ ἀρχόντων καὶ νόμων ὀλιγοψία καὶ ἐκούσιος ἀτιμία δικαιοσύνης in eo Stobaei Sermone, quem signavi. Idque meritissimo: οἱ γὰρ νόμοι φοβεροὶ διὰ τοὺς ἀρχοντας ὥστε ὅστις ἀρχοντα ὑβρισεν, οὗτος ἐκ περιοουσίας τοὺς νόμους κατεπάτησεν, Iulianus imperator eleganter ait in Misopog. p. 342. B. Porro si haec auctoris accuratius inspicias et cum praefatione legum Zaleuci apud eundem Stobaeum p. 280. conponas, non dubitabis inde sumta videri. Verba adscribam, ut quaerendi molestiam compendifacias: τῶν δὲ κειμένων νόμων ἐάν τις δοκῇ μὴ καλῶς κείσθαι, μετατίθεμεν ἐπὶ τὸ βέλτιον μερόντων δὲ πάντας πειθαρχεῖν. ἐπ' ἀνθρώπων ἠττάσθαι τοὺς κειμένους νόμους, οὐ καλὸν οὐδὲ συμφέρον. ὑπὸ δὲ νόμου βελτίονος ἠττώμενον κατακρατεῖσθαι, καὶ καλὸν καὶ συμφέρον. WESS.

489. 63. Μάλιστα τοῦ τοιοῦτου τρόπου ] Inse inter μάλιστα et τοῦ τοιοῦτου τρόπου praepositionem διὰ. STEPH. et RHOD.

489. 66. Εὐρησιλογίαις ] Εὐρησιλογίαις Vat. εὐρησιλογίαις Clar. Vide not. in L. I. 37. WESS.

489. 72. Παραδοξότατον νεομοθετηκέναι ] Rhodomannus inserendum τί censet, quod et necessarium erit, si νόμον vocabulum intelligi posse neget. Nec dissidet II. Stephanus, cuius haec sunt: Rectius legeretur παραδοξότατόν τι, ut pag. seq. ἰδιόν τι καὶ παράδοξον, et in hac, statim post, ἰδιόν τι καὶ παντελῶς ἐξηλλαγμένον ἐνομοθέτησε. WESS.

489. 78. Ἐνομοθέτησε ] Non puto Diodorum post ὀρῶντα αὐτὸν (tanquam post ὀρῶν αὐτός) subiunxisse ἐνομοθέτησε. Et quanvis interiecta sint quaedam verba, non video quomodo excusare possimus sermonem hunc, appellando eum ἀνακόλονθον. Quare νομοθετῆσαι legendum censeo, etiamsi videam προσέταξε statim sequi, non προστάξαι. STEPH. et RHOD. Non possum hac quidem in re a viris doctissimis dissentire. Id negligendum haud arbitror, Diodorum Charondae acceptam referre legem de coll

cuius funi inserendo, qui legum litarum aliquam meliorem commutandam suaderet, ceteros vero, Demosthenem Orat. in Timocrat. p. 468. Locrensibus, et Locrensium legum auctori Zaleuco Io. Stobacum Serm. XLII. p. 280., Polybium, parum tamen discrepantem, L. XII. 7. et Hieroclem in Stobaei Tit. XXXVIII. p. 229. contribuere constanter. Videri propterea Charondam aut cum Zaleuco confusum, quod sibi persuasit Cl. Io. Albertus Fabricius Bibl. Graec. L. II. c. 14. 3., aut Diodorum eiusmodi in legum exemplar incidisse, quod Charondam eius constitutionis auctorem perhiberet. Atque hoc mihi quidem vero similis accidit, quandoquidem et alia ex legibus, quae Zaleuco adscribebantur, Charondae largitus est, ut modo vidimus. WESS.

489. 85. Παραχοῖμα θνήσκειν ἐπὶ τοῦ βρόχου] Eadem sententia horum Hieroclis loc. dicto, ὡς ἀκαρῆς οἴχοιτο πνυγίς. Neque enim gravis caussa est, cur ἐκ χειρὸς, statim, confestim, cum Cel. Bentleio legas. Ἀκαρῆς, aut potius ἀκαρῆ, non aliud est. Aleiphron L. III. Ep. 7. Θεὸς ἀπὸ μηχανῆς ἐξόρυσσάτο με ἀκαρῆ μέλλοντα παρὰ τοὺς πλείονας ἵεναι. Synesius Epist. 4. p. 164. D. ἐλάθομεν ἐγγρήψαντες ἀκαρῆ πέτρα προβεβλημένη τῆς γῆς. Atque ad eum modum Basilius, si tamen is auctor Orat. de Structura hominum, T. I. p. 345. B., aliique a Spanhemio ad Plut. v. 244. Aristophan. advocati. WESS.

489. 91. Διὰ τινὰς ἀνγκαίας etc.] Videtur desiderari καὶ ante διὰ. STEPH. et RHOD.

489. 93. Ἐάν τις τινὸς ὀφθαλμὸν ἐκκόπη] Convenit legi divinae Exod. XXI. 24., quam Iosephus sic explicat Antiq. Iud. L. IV. 8. 35. ὁ πηρώσας πωσθέντῳ τὰ ὅμοια, στερόμενος οὐπερ ἄλλον ἐστέρησε, πλὴν εἰ μήτε χροῖματα λαβεῖν ἐθελήσειεν ὁ πεπρωμένος: quo modo vix distabit a lege talionis XII. Tabularum: SI MEMBRUM. RUPIT. NI. CUM. EO. PACIT. TALIO. ESTO., de qua A. Gellius Noct. Attic. L. XX. 1. WESS.

489. 95. Τὸν μὲν ἀντεκκόψαι] Legendum puto ἀντεξέκοψε. STEPH. Hic ἀνανταπόδοτος est syntaxis, nisi malis ἀντεξέκοψε. RHOD. Si in partes virorum praestantissimorum concedas, habebit oratio nescio quid illepidi. Mihi vestigia scriptorum Codd. legenti, scriptum olim fuisse videtur τὸ μὲν ἀντεκκόψαι τὸν δούσαντα, ἔλασσαν ἐπέλαβε πρόστιμον. τυγλώσαντα etc. oculus facinoris auctori vicissim effodere, poenam censuit leviolem. In qua opinione magis inhaereo, quod ex iis, quae consequuntur, satis adpareat, non eruisse τὸν ἐτερόφθαλμον iniuriae et caecitatis auctori unum oculum, quippe arbitratum poenam fore minorem damno, quod sibi dederat. Hinc legem rogavit, ἐάν τις ἕνα ἔχοντος ὀφθαλμὸν ἐκκόπη, ἄμφω ἀντεκκόψαι παρασχεῖν, ἵνα τῇ ἕσῃ συμφορᾷ ἀμφοτέρω χρόνῳ, apud Demosthen. Orat. in Timocrat. p. 468., qui quoque, etsi in paucis a Nostro dissentiens, confirmat, quod de oculo non eruto dixi. WESS.



490. 12. Ἀπολείειν τὸν ἄνδρα] S. Marcus X. 12. καὶ εἰς γυνῆ ἀπολείσει τὸν ἄνδρα αὐτῆς, καὶ γαμηθῆ ἄλλω, μοιχῶται. De maritis, uxores res suas sibi habere iubentibus, frequentius id verbum in N. T. libris. Atticorum more atque usu ἀπολείπει ἢ γυνῆ τὸν ἄνδρα, ἐκβάλλει δὲ ἄνθρω τὴν γυναῖκα. Nec semper tamen, uti ad Luciani Soloecest. p. 757. Io. G. Graevius et ad Aristoph. Plut. v. 1033. L. Kusterus docuerunt. WESS.

490. 21. Τῆς δὲ γυναικὸς βουλευθείσης etc.] Enallage casuum est τῆς δὲ γυναικὸς βουλευθείσης νεωτέρω συνοικῆσαι, πάλιν ἔγχευε, pro ἢ γυνῆ βουλευθείσα. De Epicletris quam legem tulerit Solon Atheniensis in eius vita apud Plutarchum invenies. RHOD. Κωλυθείσης νεωτέρω συνοικῆσαι] Dedi scriptis Codd. et orationis progressui, ut hoc suam in sedem reverteretur. WESS.

490. 24. Ὁ καὶ παρὰ Σόλωνι κείμενος] Vide Plut. Solon. p. 89. B. Isaeum Orat. de Pyrrhi Hered. p. 45. WESS.

490. 27. Ἡ πενταζοσίας ἐκτίσαι δραχμῶς] Inerat id legibus Solonis, quamquam caput hoc non omnes spectat ἐπιζήρους. Erant earum aliae in re lauta, quas genere proximi ambiebant; aliae θῆσσαι, et opibus defectae, quibus, ne negligenterentur, dotem ad quinque minas dare genere proximo iuncti debebant apud Demosthen. Orat. in Macartat. p. 607., cui S. Petitem iunge Comment. L. L. Attic. L. VI. p. 442. WESS.

490. 31. Κατέφραγεν ἐπὶ τὸν δῆμιον] De his quid R. Bentleius opinetur vide in Dissert. de Phalarid. Epist. p. 367. WESS.

490. 42. Ὑπὲρ τῆς τοῦ Χαριώνδου τελευτῆς etc.] Ecce iterum confusio. Eustathius in Homerum p. 83. Zaleuco, Locrensius legislatori, id contigisse adfirmat. Facit tamen cum auctore Valer. Maximus L. VI. 5. extremo. WESS.

491. 51. Μὰ Διῖ, εἰπεῖν, ἀλλὰ etc.] Qui sermonem ἀναλόουθον vitare volet, legat εἶπεν. STERN. et RHOD.

491. 54. Διοκλεῖ, τῷ Συρακουσίῳ νομοθέτῃ] De eo L. XIII. 33. WESS.

491. 61. Ἄνθρω ἐγγενῆς] Plerique recentiorum scriptorum Diodoro adstipulantur, virum illustrem et Pythagorae discipulum Zaleucum perhibentes, Iamblichus Vit. Pythagor. sect. 33. 104. 130. Porphyrius Vit. Pyth. p. 30. Seneca Epist. xc. Diogen. Laert. VIII. 16. Antiquiorum alii, uti Timaeus, Zaleucum istum negant ullum fuisse apud Ciceron. II. de LL. c. 6., alii, etsi hoc nomine Locris fuisse legislatorem concedant, obscurissime tamen natum adfirmant. Quos inter praeter ceteros nomen suum profiteatur Aristoteles, in Schol. Pindari Olymp. Od. I. 17. professus, Zaleucum pastorem fuisse, et monitis Minervae leges suas acceptas retulisse: quod ipsum et de eo memoriae tradidit Plutarchus T. II. p. 543. A. Suidas insuper addit, servum ante fuisse: ἦν δὲ οὗτος πρότερον δοῦλος τε καὶ ποιμὴν in voc. Ζάλευκος. Iam Strabo auctor est, Locrenses inter eos habitos, qui primi scriptis legibus

fuerint usi. *Πρώτοι δὲ νόμοις ἐγγραπτοῖς χρήσασθαι πεπιστευμένοι εἰσὶ.* lib. VI. p. 397. Itaque ante Draconem, qui circiter Olymp. xxxv. Atheniensibus leges scripsit, suas Zaleucus Loerensibus dictavit. Atque hoc confirmatur ab Eusebio, cui Zaleucus aequalis est Olymp. xxix. Unde tandem consequitur liquido, Zaleucum Pythagora esse priorem, neque eius adeo fuisse discipulum. Idem et alia probant, quae summa dexteritate collecta vide in R. Bentleii Dissert. de Phalar. Epist. p. 337. etc. WESS.

491. 69. *Καὶ ταῖς διανοίαις ἐπισκοπεῖν*] Puto scripsisse Diodorum *ἐπισκοποῦντας*, non *ἐπισκοπεῖν*. Posito autem illo participio, sequetur apte infinitivus *χορνεῖν*, sed ita ut ante eum distinguatur, non post. Apud Stobaeum legitur itidem per participium *ἀναβλέποντας*, sed tamen absque infinitivo ullo. Quoniam autem sunt et alia apud eum secus quam hic scripta, proferam huius loci totius scripturam ex ipso. Ita igitur in eius cap. 42. (quod est *de legibus et consuetudinibus*) legitur, *τοὺς κατοικοῦντας τὴν πόλιν καὶ τὴν χώραν πάντας πρώτον πεπεῖσθαι χορὴ καὶ νομίζειν θεοὺς εἶναι, καὶ ἀναβλέποντας ἐς οὐρανὸν καὶ τὸν κόσμον, καὶ τὴν ἐν αὐτοῖς διακόσμησιν καὶ τάξιν. οὐ γὰρ τέχης, οὐδ' ἀνθρώπων εἶναι δημιουργήματα. σέβασθαι δὲ τούτους καὶ τιμᾶν, ὡς αἰτίους ὄντας ἁπάντων ἡμῶν ἀγαθῶν τῶν κατὰ λόγον γυγνομένων. ἕκαστον οὖν ἔχειν καὶ παρασκευάζειν δεῖ τὴν αὐτοῦ ψυχὴν πάντων τῶν κακῶν καθαράν. ὡς οὐ τιμᾶται θεὸς ὑπ' ἀνθρώπου φαῦλον, οὐδὲ θεραπεύεται δαπάναις, οὐδὲ τραγωδίαις τῶν ἀλίσκομένων, καθάπερ μοχθηρὸς ἀνθρώπος, ἀλλ' ἀρετῇ καὶ προαιρέσει τῶν καλῶν ἔργων καὶ δικαίων.* Sed hoc considerandum est, Diodorum satis habuisse sensum citare, non se ubique astringentem eius verbis: at Stobaeum ipsamet verba (sicut et aliorum auctorum solet) citavisse. STEPH. Pro *ἐπισκοπεῖν* citra dubitationem lego *ἐπισκοποῦντας*, quia post *τάξιν*, ubi comma facio, copulativa non habetur. Insignis profecto locus de cognitione Dei physica, eiusque cultu, et honesta vitae conformatione, quae ex internae sanctitatis fonte promanat. Vix *θεολογικώτερον* τι ab ullo Ethnicorum pronuciari dixeris. RHOD.

491. 70. *Οὐδ' ἀνθρώπων*] *Οὐδὲ τέχνης* Reg. I. et vetus interp. Unde nasci suspicio posset, fuisse olim *οὐδὲ τέχνης ἀνθρώπων*, nisi obstarent Zaleuci apud Stobaeum Serm. XLII. p. 279. verba. WESS.

491. 80. *Ἀλλ' οὕτω τὴν ἔχθραν ἀναλαμβάνειν* etc.] Aiax Sophoclis in cognomine Fabula v. 689.

*Ἐγὼ δ' ἐπίσταμαι γὰρ ἀρετίως ὅτι,  
Ὅτ' ἐχθρὸς ἦμην ἐς τοσόνδ' ἐχθραντέος  
Ὡς καὶ φιλήσων αὐθις. —*

Haecenus bene et ad Zaleuci mentem. Quod subnectit non item:

— — *ἐς δὲ τὸν φίλον  
Τοσαῦθ' ὑπουργῶν ὠφελεῖν βοηλίσσομαι  
Ὡς αἰὲν οὐ μενοῦντα. —*

Quonam enim modo quisquam amicus esse poterit, cui se putabit inimicum esse posse? Quare Scipio merito *negabat ullam vocem inimiciorem amicitiae potuisse reperiri, quam eius, qui dixisset, ita amare oportere, ut si aliquando esset osurus, apud Cicero- nem in Laelio c. 16.* WESS. Πολιτικὸν ἀγαιρεῖν τῆς ἔχθρας τὸ αἰδιον Solon apud Plut. Bias apud Laërt. Odi tanquam amaturus. REINES.

491. 85. Μὴ εἶναι ἀνθάδεις] Io. Stobaeus Serm. XIII. p. 280. ex legum Zaleuci Praefatione: ἄρχοντας δὲ μὴ εἶναι ἀνθάδεις, μηδὲ πρὸς ἐπήρειαν κρίνειν, μηδὲ μεινῆσθαι κρίνοντας φιλίας ἢ ἔχθρας, ἀλλὰ τοῦ δικαίου. quorum sententiam auctor brevius expressit. WESS.

491. 86. Νομοθετήσας] Lego νομοθετήμασι. Item σοφῶς pro σοφῶς. STEPH. et RHOD.

492. 92. Μὴ πλείω ἀκολουθεῖν] Vide not. ad L. I. 92. et Ios. Mercer. in Aristacnet. L. I. Epist. 7. Ceterum similia Syracusis in feminas legibus erant statuta, Phylareho apud Athen. I. XII. 4. teste: τὴν ἐλευθερίαν μὴ ἐμπορεύεσθαι ἡλίον δεδυσκότος, ἐὰν μὴ μοιχευθησομένην. ἐκολύετο δὲ καὶ ἡμέρας ἔξιέναι ἄνευ τῶν γυναικονόμων ἀκολουθοῦσης ἀπὲρ μᾶς θεραπευίδος. Credo Dioclem, Syracusanarum legum conditorem, ea omnia a Zaleuco et Loerensium constitutionibus mutua sumpsisse; etsi non ignorent Alb. Rubenium L. I. Rei Vestiar. c. 10. Lacedaemone haec repetita suspicatum ob Clement. Alexandrin. Paedag. III. 11.; nam cetera si consideres, quae mox exscribam, a mea profecto opinione non recedes. WESS. Suidas aliter hanc legem recitat in Ζάλευκος. REINES.

492. 95. Μηδὲ ἐσθῆτα παρρησασμένην] Vertuntur *inter- textas auro vestes*: parum apte. Παρρηγή limbus seu clavus potius est vesti adtextus. Ἐσθῆς παρρησασμένη aut παρρηγῆς tunica est clavis distincta. Alb. Rubenium vide L. I. R. V. c. 2. Porro ex legibus Syracusanorum haec adfert Phylarchus: τὰς γυναικῶν μὴ κοσμεῖσθαι χρυσῶν, μηδ' ἀνθινὰ φορεῖν, μηδ' ἐσθῆτας ἔχειν πορφυρᾶς ἐχούσας παρρηγᾶς, ἐὰν μὴ τις αὐτῶν συγχωρῆ ἑταῖρα εἶναι κοινή. Quae eadem. WESS.

492. 97. Μηδὲ ἱμάτιον ἰσομικῆσιον] Displacet vocabulum R. Bentleio, viro longe eruditissimo, tum quod ἰσομικῆσιον multiplex esse possit, ansamque praebuerit rixis. Disputari enim potuisse, an et quatenus vesti Milesiae conveniret; cuiusmodi contentiones sublatae forent prorsus, si ἱμάτιον Μικῆσιον Zaleucus vetuisset. Tum quoniam credibile non sit, Zaleuci aetate, in tanta commerciorum raritate, lanam et vestes Milesias in Italiam fuisse inportatas. Praesertim cum e vicinia Loerenses lanam Apulam et Tarentinam, quae utraque Milesia mollior habebatur, sumere potuerint. Audiamus Plinium L. VIII. II. N. cap. 48. Lana autem laudatissima Apula, et quae in Italia Graeci pecoris adpella-

*tur: alibi Italica. Tertium locum Milesiae oves obtinent. Ubi Graecum pecus non aliud ac Tarentinum videri diserte Columella L. VII. R. R. c. 4. significat; cuius lana omnium censebatur optima, eodem c. 2. teste. Hinc et Ταραντίνον, sive, ut in scriptis libris, Ταραντίνον vestis mollissimae genus Athenaeo L. XIV. p. 622. B. vocitari. Itaque Zaleucum, dum legibus modum luxui Locrensium ponit, prohibitorum potius ἰμάτιον Ταραντίνον aut ἰσοταραντίνον fuisse, cuius copia haberi ex vicinia poterat, quam ἰσομιλήσιον, viderique adeo ἰσομιλήσιον vocabulum Zaleueo esse posterius, et a sophista quodam excogitatum, qui Diodoro et aliis inposuerit, Dissert. de Phalar. Epist. p. 351. A qua ego opinione non admodum dissentio, verum tamen ratus, huiuscemodi legem Locris valuisse, quae luxum in omni vestium genere praecideret: colligo ex lege Syracusana, τὸν ἄνδρα μὴ κάλλωπιζέσθαι, μηδ' ἐσθῆτι περιέργω χοῦσθαι καὶ διαλλατοσύνη, εἰ μὴ ὁμολογῇ μοιχεύειν ἢ κίχαιδος εἶναι ex Phylarcho apud Athen. L. XII. 4. In ea enim ἐσθῆς περιέργος respondet ἰματίῳ ἰσομιλήσιῳ auctoris nostri, firmaturque magis, quod de Diocele opinatus supra sum. WESS. Vide eundem ad Herod. VI. 21. et Heyn. Opusc. Acad. II. p. 34.*

492. 4. Κατὰ τὸν βίον ἀμφισβητούντων] Scribendum puto ἀμφισβητούμενων. STEPH. et RHOD.

492. 13. Περὶ τὸν Τράεντα ποταμὸν] *Ad Truentum fluvium* doctissimus interpres, perinconmode. Id flumen Piceni erat, hinc ultra cc passuum millia remotum, ut bene Ph. Cluverius Ital. Antiq. L. IV. p. 1313. Traeis, nunc accolis *Triunti*, Sybaris et Crotonis agrum alluebat. Ad quem olim annem fatali praelio Sybaritae a Crotoniatis fuerant caesi. Iamblichus Vit. Pythag. sect. 260. ἀσχρόν εἶναι, Crotoniatarum verba sunt, τοὺς τριακόσια μυριάδων περὶ τὸν Τράεντα ποταμὸν περιγενομένου etc. Sic enim vitiosum Τετράεντα vocabulum plaudente eruditorum cavea refinxit optime Rich. Bentleius Dissert. de Epist. Phalar. p. 72. Loquuntur enim Crotoniatae de nobili victoria, quam centum suorum millia de ccc Sybaritarum millibus, ut Noster c. 9. prodidit, reportaverant. WESS.

492. 14. Ὑπὸ Βρεττίων] *A Bruttiiis?* Id mirum profecto, cum multis demum post annis circa Olymp. cvi. unam in gentem coalescent Bruttii, id nomen, quod a Lucanis, quibus Βρέττιοι iidem atque ἀποστάται, descivissent, sortiti, sicuti inferius L. XVI. 15. videbitur. Ergone voluit, Sybaritas ad Traentem annem usque in Olymp. cvi. quietos consedissee? Id sane opportunum foret, ni verba χρόνον μὲν τινα διέμειναν brevius intervallum, quam LXXXVI annis amplius, requirerent. An itaque in Βρεττίων vocabulo vitium est? An auctor sibi obloquitur ipse? An nomen Βρεττίων Olymp. cvi. prius est? Posterius firmaret Aristophanis apud Stephanum in Βρέττος versus, ni eius eraso

nomine Aristophonta substituerent viri docti. Equidem, si bene hic habet *Βρεστίων* vox, Aristophanem in Stephano loco non deicerem. Sed viderint perspicaciores. WESS. Opportunus est hic locus Mazochio, qui Bruttium nomen Ol. cvi. longe antiquius facit, originemque eius ab Diodoro XVI. 15. aliisque traditam fabulis annumerat, ad tab. Heracl. p. 539. Conf. Niebuhr. Hist. Rom. vol. I. p. 98. ed. sec.

492. 25. *Πόπλιος Κλώδιος Πρηγυλλανός* etc.] Hic corrupta Decemvirum nomina ex Livio, Dionysio et doctissimis Caroli Sigonii commentariis in Fastos consulum restituenda veniunt. Pro *Μινούσιος, Γενούσιος*, pro *Γάϊος Σουλπίσιος, Σέρβιος*, pro *Ρωμύλιος, Τίτος Ρωμίλιος*. Inter *Σπόριος* et *Ποστούμιος* nulla distinctio esse debet. Pro *Καλβίνιος* pone *Αἴλος Μάνλιος*. Caeterisque addatur *Πόπλιος Οράτιος*. RHOD. *Πόπλιος Κλώδιος Πρηγυλλανός*] Praenomen illi *Appio* fuit. Cognomen est apud Sueton. Tiber. c. 2., quod hinc haud futile patrocinium accipit contra suspiciones Ill. Spanhemii, de quibus supra L. XI. 84. In ceteris Decemvirum nominibus corrigendis cum Sigonio fere consentit Pighius Fastor. L. III. p. 145. WESS.

492. 29. *Διαπολεμοῦντες πρὸς Ταραντίους*] Ultima vocis controversiam movent scripti libri, corrupti quidem, sed *Ταραντίους* non agnoscentes. H. Stephanus unde eos acceperit, an ex argumento capitis, fronti huius libri praeposito, an veteri ex Cod., non affirmavero. Sunt tamen satis hic opportuni. Cogitaveram quidem *Οἰεστίνους* ex vestigiis eorum librorum, qui *Οἰεστίνους* praeferebant: ut bellum Thurinis fuerit cum incolis eius urbis, quae Straboni in hac vicinia *Οἰεστίναι* L. VI. p. 390. Nec placet tamen, tum quod oppidi eius scriptura sit dubia, tum etiam quod in mediterraneis sedem habuerit, neque dici possint illius incolae terra marique Thurios oppugnasse et vicissim ab illis infestati; quorum utrumque in Tarentinos optime quadrat. Addo *Ταραντίους* firmari ab Antiocho apud Strabon. L. VI. p. 405., referente Tarentinis et Thuriis eorumque praefecto Cleandridae, sic enim ibi scriptum fuisse egregie perspexit Celeb. Barbeyracius Hist. Foeder. P. I. p. 115., Lacedaemone profugo, ob Siritidem, quam sibi utrique vindicabant, acre bellum fuisse. Idem autem bellum significari, dux Cleandrides indicat, qui paucis abhinc annis pecunia a Pericle corruptus metu gravioris poenae solum verterat, sponte in exilium profectus apud Plutarchum Pericl. p. 164. WESS.

493. 37. *Κόιντον Πόπλιον*] In Decemviris iterum creatis quosdam vitiose nominatos esse, ut *Κόιντον Πόπλιον* pro *Ποιτήλιον*, *Μάνιον Ραβουλλήιον* pro *Μάροζον*, quosdam desiderari, ut *Τίτον Αντώνιον Μεσίρδαν*, *Κόιντον Φάβιον Οδύβουλανόν*, *Γάιον Αἰλλιον καὶ Σπόριον Όππιον*, *Σπόριον* vero *Οἰετοόριον* falso caeteris annumerari, idem Sigonius ex veterum auctoritate confirmat. RHOD. *Poetelii* nomen hic corruptum videri, non fugit

Pighium in Annal. ad ann. ccciii., ubi et reliquorum nomina haud aliter ac Sigonius instauranda docet. WESS.

493. 39. *Εἰς δ' ἕξ αὐτῶν ἐρασθεῖς*] Ap. Claudii impurum id scelus exsequitur Livius III. 44. WESS.

493. 46. *Διακούσαντος τὴν κατηγορίαν*] *Τῆς κατηγορίας* Co. sat bene. Vide S. Lucam A. A. XXIII. 35. Ioseph. Ant. Iud. XX. 6. 2. WESS.

493. 51. *Κρεωπώλιον*] Vid. Polluc. VII. 25. WESS.

493. 55. *Ἐν τῷ Αγαδίῳ*] Mendose pro *Ἀλγίδῳ*, ut Livius L. III. 38. appellat. RHOD. Rhodomannus notae suae praescripserat *Αγαδίῳ*, unde Cl. Iac. Gronovius Respons. ad Cavill. Fabret. p. 19. quia Stephanus clare dicat *ἔθνηκὸν* esse *Ἀλγιδίος*, apparere scribit, nihil in ea voce accidisse, nisi mutationes *A* et *I* literarum et dedisse Diodorum *Ἀλγίδῳ*, scilicet *ῥοει*, particulatim dicto *Υσιλίο* in Livii L. III. 50., uno ex collibus Algiden-sibus. Bene, modo *Αγαδίῳ* in scriptis Diodori esset libris, quibus Rhodomannus nunquam fuisse usum abunde constat. *Ἐν τῷ Ἀλγίδῳ* emendavit quoque Ph. Cluverius Ital. Ant. L. II. 16. p. 777. WESS.

493. 66. *Μεγάλης δὲ πεσοῦσης φιλοτιμίας*] Truncatum est prima sui parte medium vocabulum. *Ἐμπεσοῦσης* fuerat olim, quod nec Rhodomanno latuit. WESS.

494. 70. *Περιβαλεῖν τὴν πατρίδα μεγάλας συμφοραῖς*] Sic L. XIV. 2. *τὴν τε πατρίδα μεγάλοις ἀτυχήμασι περιέβαλον*, saepeque alias. WESS.

494. 72. *Ὅστε δέκα αἰρεῖσθαι δημόρχους*] Id, credo, vult, inter conditiones et hanc fuisse, ut plebi liceret, sicuti ante, x tribunos creare. *Potestatem enim tribunitiam, provocationemque repetebant, quae ante decenviros creatos auxilia plebis fuerant*, apud Livium III. 53. Alioqui longe recedit eodem a Livio, qui Coss. Q. Minucio, C. Horatio Pulvillo ante hos sex annos, *Tricesimo sexto*, inquit, *anno a primis tribunis plebis, decem creati sunt, bini ex singulis classibus. itaque cautum est, ut postea crearentur* L. III. 30. Porro nimia sunt, quae auctor de potestate tribunitia prodit. Magna ea fuit sine controversia, nec tanta tamen amplitudine circumdata. Polybium vide VI. 10. et Dionysium Ant. Rom. VI. p. 410. WESS.

494. 77. *Καὶ τὸν ἕνα πάντως ἀπὸ τοῦ πλήθους καθίστασθαι*] Nihil horum apud Livium, ex cuius annalibus multis demum abhinc annis consulatus cum plebe communicatus est. Refert huc quidem ex oratione Quinctii Cons. apud Livium in Fastis ad ann. ccxiv. Pighius: *Tribunos plebis creare iterum voluistis. Creastis. Consules facere vestrarum partium, etsi patribus videbamus iniquum; patricium quoque magistratum plebi donum fieri vidimus. At bene addit: Sed ipsum de Consulibus huius (anni) vel de tribus x-viris plebeiis ante creatis Quinctium dicisse opinari etiam possumus.* Auctor ergo alios hic duces ad-

libuit, nisi velis ex eius rei mentione inieceta in errorem illum incidisse. Ego prius arbitror. WESS.

494. 86. Ζῶντας κατακαθῆναι] Ex Livio L. III. 55. *M. Duillius tribunus plebis plebem rogavit, plebesque scivit: QUI PLEBEM SINE TRIBUNIS RELIQUISSSET QUIQUE MAGISTRATUM SINE PROVOCATIONE CREASSET, TERGO AC CAPITE PUNITUR.* Tamen ex vetustis annalibus ignis in eos poena fuisse animadversum, qui tribunos non subrogassent, non iniuria colligitur, quod nec Pighium fugit, ex Valer. Maximo L. VI. 3. 2., cum *P. Mucius*, inquit, *tribunus plebis, qui omnes collegas suos, qui duce Sp. Cassio id egerant, ut magistratibus non subrogatis, communis libertas in dubium vocaretur, vivos cremavit: errat is quidem in numero tribunorum, ut viri docti admonuerunt, clare tamen indicans, de supplicio, quod vivicomburium Latini recentiores vocant, se aliquid vetustis in libris reperisse.* Porro τὸ ἀνὰ μέσον κείμενον praeferam, nisi χρόνον vocem subintelligi malaeris. Nam χρόνοι εἶναι κωλύεσθαι tritum satis genus est. Vid. Iac. Gronov. in Polyb. V. 100. WESS.

494. 92. Κάγκρον Ὀράτιον] Pro Κάγκρον lege Μάρκον, et pro Τουρπῖνον, Ποῦττον ex triumpho eius Capitolino. RHOI.

494. 1. Προσήλωσαν τοῖς πρὸ τοῦ βουλ. κειμ. ἐμβόλοις] De rostris res nova: centum enim et amplius annis postea, cum naves Antiatium essent captae, earum rostris suggestum, in foro exstructum, adornari placuit, auctore Livio L. VIII. 14. Nostro tamen adsentitur Pomponius de Orig. Iur. §. 4. *Quas leges in tabulis eboreas perscriptas pro ROSTRIS composuerunt, ut possent apertius percipi.* Ubi vide Rupertum, diligenter lapsum memoriae Scaligeri corrigentem, quo solum Dionysium leges in aes incisas prodidisse suspicabatur Animadv. in Guilandium p. 19. WESS.

494. 2. Ἀπερίττως συγκαμμένη] De hoc publici privatique apud Romanos iuris fonte paullo augustius, nec sine patriae quodam amore, Cicero de Orat. I. 44. *Fremant omnes licet, dicam quod sentio: bibliothecas mehercule omnium philosophorum unus mihi videtur XII tabularum libellus, si qui legum fontes et capita viderit, et auctoritatis pondere, et utilitatis ubertate superare.* Auctoris verba respondent sententiae Sex. Caccillii, qua elegantia atque absoluta brevitate verborum scriptas leges XII tabularum perhibebat in A. Gellii Noct. Attic. L. XX. I. WESS.

494. 7. Τὰς μὲν πρὸς Ἀθηναίους etc.] Hoc de foedere disputavimus supra c. 4. WESS.

494. 9. Πρὸς δὲ τοὺς Λακεδαιμονίους ὕστερον ἐγγραψήσαν] Consideravit haec Nostri scriptoris Cl. Barbeyracius Histor. Foed. P. I. p. 111., opinatus foedus indicari, quod non multis post sociatum cum Atheniensibus annis inter Lacedaemonios et Persas coeluerit, Artaxerxe rege: ego vero foedus, quod Antalcida auctore sancitum fuit, indicari suspicor, quo demum Graeci nominis per

Asiam civitates Persarum imperio sunt permissae. Vid. inferius L. XIV. 110. Auctor tamen audaciore prolepsi defungitur, quum eius pacti, tanquam quum maxime initi, meminit. WESS.

495. 14. Σπορδὰς τριαζονταετείς] Vide L. XII. 7. WESS.

495. 18. Τὴν ἡγεμονίαν — συγκεχωρηκότων] Grammaticorum leges postulabant *συγκεχωρηκνυῖων*, quas auctor, generis enallagen probans, saepe spernit. De foedere Gelonem inter et Carthaginienses L. XI. 26. WESS.

495. 30. Ααρῖνον Ἐρμῖνον] *Αἶνον*, cum Dionysio Hal. L. XI. p. 729. Ἐρμῖνον, Latine *Lartem Herminium*, et *Τίτον Οὐερμῖνον Τρίζοστον*, legendum esse Sigonius docet. RHOD. Eundem Sigonium vide in Livii L. III. 65. et Pighium in Fast. ad ann. cccv. WESS.

495. 32. Περὶ εἰρήνης ἀμφισβητήσαντες] Ita librarius corruptit vocem *Προίρης*. Sic autem urbs Ioniae nominatur ad Maendrum fluvium, inter Miletum et Ephesum, Pittaci, unius ex VII sophis, patria. RHOD. Vitium, quo *εἰρήνης* foedatum est vocabulum, animadvertit et correxit Guil. Canterus Nov. Lect. IV. 9. Thucydides rem dubio eximit L. I. 115. *ἔκτω δὲ ἔτει*, induciarum scilicet tricennialium, *Σαμίους καὶ Μιλησίοις πόλεμος ἐγένετο περὶ Προίρης*. Et Plutarchus Pericl. p. 165. F. WESS.

495. 37. Πλεύσας, ἐπὶ τε τὴν Σάμον παρεισελθὼν, καὶ τῆς etc.] Mutanda distinctio videtur, *πλεύσας ἐπὶ τε τὴν Σάμον, παρεισελθὼν*. Mox ipse *πλεύσαντες εἰς τὴν Σάμον, ἐλαθὼν τε τὴν πόλιν παρεισελθόντες*. WESS.

495. 40. Καὶ τοὺς ἴσους ὁμήρους παῖδας λαβὼν] Aliter Thucydides I. 115. *καὶ ὁμήρους ἐλαβὼν τῶν Σαμίων, πεντήζοντα μὲν παῖδας, ἴσους δὲ ἄνδρας*, quicum si consentire Diodorum necesse fuerit, adde *ἄνδρας πεντήζοντα καὶ τοὺς ἴσους ὁμήρους* etc. et vide Plut. Pericl. p. 166. A. WESS.

495. 56. Τοὺς δ' ὁμήρους ἐκκλέψαντες] In Thucydide τοὺς ὁμήρους κλέψαντες ἐκ Αἰῖνον editur, Mss. plures *ἐκκλέψαντες*. Res etsi eodem recidit, malim tamen compositum. WESS.

496. 72. Καὶ νικήσαντες τῇ ναυμαχίᾳ] Recepti hoc invitis libris, qui *τῆς ναυμαχίας* contra constantem Graecorum morem. Vitium quoque animadverterat Rhodomannus. Posses et *τὴν ναυμαχίαν*, ut in Codd. quibusdam c. 31. Sed alterum tritius. Victoriam hanc navalem, ductu et auspiciis Melissi, philosophiae studii addieti, partam, describit Plut. Pericl. p. 166. D. WESS.

496. 81. Ἀρτέμωνος τοῦ Κλαζομενίου] *Testudines Artemonem Clazomenium* invenisse testis Plinius L. VII. 56. De eodem Servius Aeneid. IX. 505. *Inventor autem testudinis Artemon Clazomenius fertur, idem arietis repertor dicitur*: hac parte Diodoro egregie consentaneus. Sumsit Noster haec ex Ephoro, qui Artemonem operam suam Pericli commodasse prodiderat, sed invito Heraclide Pontico, et Artemonem *Periphoretum*, sic,



quod lectica ob mollitiem circumgestaretur, dictum, Pericle priorum perhibente apud Plut. Pericl. p. 167. A. WESS.

496. 93. *Μυριζίδων*] De huius nominis scriptura v. Seidleri Dissert. de tempore quo primum acta est Antigona, praefixam ed. Hermanni, p. XXII. *Μοριζίδης* scribitur in lapide ab Oderico De didascalia marmorea edito p. 67., ut *Μοριζίδης* eiusdem nominis alius in quibusdam libris Herodoti IX. 4. s.

496. 94. *Μάρον Γεγάτιον*] Repone *Γεγάτιον*. RHOD. *Γεγάτιον*] Sequor monentem Rhodomannum, tum quod scripti Codd. proxime abeant, tum quoniam auctor ita scribat ipse c. 33. Alter Consul C. Iulius Livio III. 65. WESS. Macerini cognomen addunt Geganiis Capitolinae tabulae, et ita reperitur etiam in manuscriptis Diodori codicibus, in vulgatis perperam Macrinus legitur. PIGHIUS Annal. L. III. p. 158. Qui nescio quos aut scriptos aut editos libros dicat.

496. 97. *Τὸ δεύτερον*] Pravum est et in τὸ τρίτον commutandum. Namque Crison hic ter Olympia vicit, hac LXXXV. et duabus superioribus. Vid. c. 5. et 23. WESS.

496. 99. *Τὴν τῶν Καλαπίνων*] Verum est *Καλαπίνων*. Urbs dicebatur *Καλὴ Ἀκτὴ* supra c. 8. Hinc gentile *Καλαπῖνοι*. Lapsus hunc librorum viderunt viri egregii Is. Casaubon. in Athen. L. VI. 21. Ph. Cluverius Sic. Antiq. L. II. p. 291. et Barbeyracius Histor. Foeder. P. I. p. 114. neque obscura res est. WESS.

496. 2. *Μεσολαβηθεὶς δὲ νόσῳ τὸν βίον* etc.] De loquendi genere dixi L. XI. 2. WESS.

496. 4. *Πλὴν τῆς ὀνομαζομένης Τρινακίης*] Non possum satis mirari, quomodo factum sit, ut de hac urbe tam celebri, et quam Diodorus videtur secundam post Syracusas totius Siciliae facere, nullam mentionem fecerint alii omnes, quos habemus auctores. Nam *Trinaciam*, vel potius *Trinaeriam*, omnes, qui de Sicilia scripserunt, volunt fuisse nomen antiquum insulae totius, de urbe vero eius nominis apud Strabonem, Stephanum et alios οὐδὲ γράν. Nec Cluverius, qui tam exacte de Sicilia antiqua volumen integrum exaravit, de ea urbe loquutus est, et hunc Diodori locum dissimulavit, nescio quare. Num id accepit a Timaeo Diodorus? sublestae fidei historico, et qui διὰ τὸ τὰ τεχνόγια ἀναγράψαι, γρασοσυλλεκτηρία dictus est, ut nos docet Suidas in *Τιμαῖος*. Forte ita est, forte non. Nam in iis tenebris scintillam lucis non video. PALM. Verum si foret, Trinaciam post Syracusas secundam totius fuisse Siciliae urbem, mirum omnino accideret, nusquam alias eius memoriam durare. At id Diodorus non profiteatur. Inter Siculas ea urbes eminebat, distinctas ab urbibus Graeci nominis per Siciliam. Distant enim *Σικελοὶ* et *Σικελιώται* plurimum, sicuti auctor patefecit L. V. 6. In Siculis vero his urbibus, insulae mediterranea occupantibus, plures fuerunt obscurae, et quarum notitia uni debetur Diodoro. Porro de Ph. Cluverio quod

notatur, id secus habet. Consideravit ille *Τρινακίην* sive *Trinaciam* Sicil. Antiq. L. II. p. 388., sed dubius, utrum ob Plinii L. III. 8. *TIRACIENSES* *Τιρακίαν* scribat, an ex Stephano *Τυρακίνας* auxilio arcessat, in cuius modestia acquiesco. Plinii Mss. *Triracienses* scribunt, et proxime a *Trinacis* absunt, ut bene Harduinus, cui adde L. Holsten. in Stephani *Τυρακίαι*. WESS.

497. 25. *Τῖτον Κοῖντιον*] Falso pro *Κοῖντιον*. Latini *Quinctium* dicunt. (Vide Livium III. 66.) RHOD.

497. 33. *Ἄμα δὲ τούτοις πραττομένοις*] Videtur hic paulo citius inchoatum belli Corinthiaci principium. Thucydides quidem certe inter res in Samo a Pericle gestas et Corcyraeorum motus plus uno anno interponit. *Ὁὐ πολλοῖς ἔτεσιν ἕστερον* ait L. I. 117. WESS.

497. 37. *Ἄποικοι Κερκυραίων καὶ Κορινθίων*] Corcyraeorum erant coloni, quorum dux fuerat Phalius, Eratoclidæ F., domo Corinthius, Thucydide teste I. 24., cui Strabonem L. VII. p. 486. opportune adiunxeris. WESS.

497. 40. *Καὶ παραλαβόντες ἔπλευσαν τοὺς Ἰλλυριοὺς*] Traiectionem hanc vocabulorum librariis acceptam refero. Haud multum dissimilis est in S. Lucae Evang. XXII. 31. *ἰδοὺ ὁ Σατανᾶς ἐξῆτήσατο ἡμᾶς, τοῦ σιναῖσαι ὡς τὸν σίτον.* quo loco tamen Basilius M. Homil. de Humil. T. II. p. 160. A. *ἐξῆτήσατο, τοῦ σιναῖσαι ἡμᾶς ὡς τὸν σίτον.* quod equidem praeferrem. WESS. Non aptiora comparat Dorvill. ad Charit. III. 7.

497. 51. *Μὴ πέμπειν τὰ κατειθισμένα ἱερεῖα τῇ μητροπόλει*] Diversiore modo Thucydides I. 25. *ἄμα δὲ καὶ μίσει τῶν Κερκυραίων, ὅτι αὐτῶν παρημέλουν ὄντες ἄποικοι. οὔτε γὰρ ἐν πανηγύρεσι ταῖς κοιναῖς διδόντες γέρα τὰ νομιζόμενα, ὅτε Κορινθίῳ ἀνδρὶ προκαταρχόμενοι τῶν ἱερῶν, ὥσπερ αἱ ἄλλαι ἀποικίαι.* ubi Schol. *τὰ γέρα* interpretatur *τὰς προεδρίας*, insuper addens colonos ex maiore patria, seu metropoli, sacrorum praefectum adsciscere fuisse solitos. Et tamen verum est, quod hic Diodorus, ex colonia in matricem sacra sollemni ritu fuisse transisse. Polybius Excerpt. Legat. c. 114. Carthaginiensium *ναῦν ἐργαζομένων* habet, *ἐφ' ἧν εἰς τὴν Τύρον ἐκπέμπουσιν οἱ Καρχηδόνοι τὰς πατρίους ἀπαρχὰς τοῖς θεοῖς.* De iisdem Curtius L. IV. 2. *Carthaginiensium legati ad celebrandum sacrum anniversariam more patrio tunc venerant: quippe Carthaginem Tyrii condiderant, semper parentum loco culti.* Quo utroque loco ad hanc rem illustrandam usus etiam est H. Valesius ad Excerpt. Peires. p. 1394. ed. Gron., pluribus iura, quae originibus a colonis debebantur, exponens, pariter atque Illust. Spanhemius de Usu et Praest. num. Dissert. IX. p. 580. WESS.

498. 59. *Ἐπὶ δὲ τοὺς φρουροὺς Κορινθίους*] Hoc probo, nec multam curo vocem *πρόσβεις*, quam utroque in sermone saepe intelligendam omittunt. Vide Io. G. Graevium in Iustin. L. V. 3.

et Cortium ad Sallust. Catilin. c. 32. Noster Thucydidem I. 26. aemulatur: τοὺς τε γεγόνητας ἐκέλευον (Coreyraei) κατ' ἐπήρειαν δέχεσθαι αὐτοὺς — — τοὺς τε φρουροὺς, οὓς οἱ Κορίνθιοι ἐπεμψαν, καὶ τοὺς οὐκ ἐπιτήρητας ἀποπέμψαν. WESS.

498. 66. Πρὸς Οὐολούμνους] Depravatum ex Οὐολούσους, Latine *Volscos*. RHOD. Livius III. 66. correctionem Rhodomanni, quae et Pighio ad ann. CCCVII. in mentem venerat, egregie adfirmat. WESS.

498. 72. Γενίσιον] Non Γενίσιον sed Γενοῦσιον legatur. RHOD. Γενοῦσιον] A Cod. Coislin. nihil dissentit Dionysius semper Γενίσιον scribens L. X. p. 680. et XI. p. 730. De Curtiæ praenomine et cognomine his est. Γάιος Κούρτιος Dionysio et Zonarae; id Sigonius, Panvinius et Pighius cupide arripiunt, in Livii etiam L. IV. 1. inculcantes. Cognomine *Philo*, si Eusebium in Chronico, Pighium aliosque Fastorum conditores audis, fuit: mihi neutrum satis placet; certe nec *Agrippam*, nedum *Chilonem* sollicitari patior. Auctor enim suos sibi Fastos, quos sequeretur, habuit: in his Agrippae non infrequens olim praenomen reperit: ut mutemus, in dissensu aliorum iusta caussa non est, cum plura sibi propria servet. Iam *Chilonis* cognomen adserunt Charisius L. I. p. 78. *Chilones cum adspiratione ex Graeco a labris improbiis, quae illi χείλη. Unde CHILONES improbiis labrati.* Et Festus: *Chilo dicitur cognomento a magnitudine laborum.* WESS.

498. 74. Τὸ ἔθνος τῶν Καμπανῶν συνέστη] Eusebius haec ad verbum exscripta retulit ad annum Olymp. LXXXV. quartum. Capuae origo, in hanc enim coiere, diversis auctorum opinionibus incerta est. Cato a Tuscis conditam stetit adfirmabat, antequam a Romanis caperetur annis circiter CCLX in Velleii L. I. 7. Sic ante hos XXVI annos initium cepit. Ipse Velleius primordiis Romae urbis antiquiorem perhibet. Contra Livius duobus fere et XX abhinc annis a Samnitibus captam tradit, Capuamque tum demum dictam. Verba ex L. IV. 37. adscribam, sunt enim opportuna: *Peregrina res, sed memoria digna, traditur eo anno facta: Vulturnum Etruscorum urbem, quae nunc Capua est, ab Samnitibus captam, Capuamque ab duce eorum Capye, vel (quod propius vero est) a campestri agro adpellatam.* Qui quidem in nominis origine a Diodoro nihil admodum dissentit, ut nec Varro in Servii ad Aeneid. X. 145. notis. Et bene profecto. Ex κῆπος, κῆπος, nata *Capua* est, unde *Campani*. Vid. Ph. Cluver. Ital. Antiq. IV. 1. WESS.

498. 77. Ὀνομασθέντες δὲ Ἀρχαιανακτίδαι] Qui genus, unde domo Archaeanaetidae fuerint, cum praeter Diodorum nemo quisquam eorum commemoraverit, difficulter constituetur. In Strabone L. XIII. p. 895. reperitur *Archaeana* Mitylencus, qui Sigeum Pittaci et Alcaei aetate munierit. Cuius posteris, postquam Sigei possessione exciderant, potuerunt in Bosporum Cimmerium

tramittere ac novi illic regni fundamenta ponere, quae erudita Cl. De Boze suspicio est in Commentar. Acad. Inscript. T. IX. p. 243. Praeter hunc Schol. Nicandri Theriac. v. 612. citat *Archaeum*, sive is *Alcaeus* seu *Achaeus* fuerit, ἐν τοῖς περὶ Ἀρχαιανακτίδην, datque adeo ipsum regulatorum horum nomen, sed nihil amplius. Neque enim liquet, quis ille scriptor, quive Archaeanaetides, cuius res descripserit? Parum itaque cum haec iuvent, coniecturis supersederem, ni manum ad alia properanti iniiceret Doctissimus P. E. Souciet, atque historiam ac tempora regum Cimmerici Bosphori digerens Dissert. de Numo Pythodor. p. 50. admoneret, Ἀρχαιανακτίδας ex vocis origine non alios videri ac *primos reges*: Strabonem auctorem esse L. VII. p. 476. regni sive tyrannidis inter Bosphoranum principium inchoasse Parisaden et Leuconem: scribere enim ἀρξάμενοι ἀπὸ Παρισάδου καὶ Λεύκωνος. Illa verba tantundem valere ac Ἀρχαιανακτίδαι εἰσὶ Παρισάδης καὶ Λεύκων, i. e. *Archaeanaetidae*, seu *primi regni conditores*, Parisades et Leucon fuere: posse tamen in eorum numerum Sagaurum addi, quem Strabo brevi ante iisdem adiunxerat. Sic ille: quae ut probarem, induci fortasse possem, nisi *Archaeanaetidae* patronymica forma descenderent ab *Archaeanaete*, atque eum suae se gentis auctorem agnoscere, ut Seleucidae et Lagidae Seleucum et Lagum, ostenderent. Sequitur hinc, Parisaden et Leuconem non fuisse primos eius regni conditores, nedum Archaeanaetidas. Nam Strabo aliud regni eius principium exorsus est. Fuere inter hos regulos Leucon et Parisades opibus, auctoritate et illustri nominis fama eminentissimi, uti dicitur alias. Qui eos tempore praeverterunt Archaeanaetidae et eorum successores, non ita inclaruerunt. Hanc caussam arbitror, cur Geographus ab his ambobus regni eius originem auspicetur, neglectis ceteris. WESS.

498. 85. Ἐνίκησαν τῇ ναυμαχίᾳ] Τὴν ναυμαχίαν qui probet, uti poterit exemplis, quae in superioribus adducere memini. Utrumque usu tritum est, neque adeo multum refert, in utro acquiescas. De victoria ipsa Thucydides I. 29. WESS.

499. 97. Τίτος Κοίντιος] Is Livio est T. Κλοίλιος. RHOD. Revocavi veterem scripturam. Κλοίλιος, quem substituerat Rhodomannus, nusquam vetustis in schedis reperitur, nedum in Livio IV. 7. Sigonius, illique adsentiens Pighius, et huic et Diodoro id nomen reddiderunt. WESS.

499. 5. Τὰς δὲ πεπονηκνίας ἐθεράπευον] Sic L. XIII. 41. de Mindaro τὰς τε πεπονηκνίας ναῦς ἐπεσκεύασε. Et de eodem c. 47. τὰς πεπονηκνίας ναῦς κατεσκεύασε. Passimque alii: ut mirer suspecta viro docto haec Aristidis T. II. p. 217. ὥσπερ οἱ τὰς πεπονηκνίας οἰκίας ἀναλαμβάνοντες et in πεπτωκνίας convertenda fuisse visa. WESS.

499. 6. Καὶ] Dicerem legendum hic δὲ καὶ, nisi passim illam animadvertissem in huiusmodi locis copulam negligere. STEPH.

499. 10. *Συνόμισαν Ἀμφίπολιν*] Adfirmant hanc scripturam, quae et Rhodomanno proba in Addend. visa est, et sermonis indoles et haec egregia Schol. inediti ad Orat. Aeschinis de Legat. Ement. τὰς δὲ Ἐννέα Ὀδοὺς Ἄγρων ΣΥΝΟΙΚΙΣΑΣ Ἀθηναῖος Ἀμφίπολιν ἐκάλεσεν ἐπὶ ἄρχοντος Ἀθήρησιν ΕΥΘΥΜΕΝΟΥΣ. Dicta ergo cum maxime Amphipolis est, nomen mutante Agnone, de quo Thucydides L. IV. 102. WESS.

499. 13. *Ναυσιμάχον*] *Νασιμάχος* dicitur in Isocrate Dionysii Halicarnassei p. 94. Plut. T. II. p. 836. E. et Diogene Laertio III. 3., idque verum Archontis nomen pertendit Io. Meursius de Archont. III. 2. Pro *Nausimacho* pugnat Nunnesius ad Aristotelis vitam. Ego a Meursio sto. Confer Menagium ad Diogen. III. 3. WESS.

499. 14. *Κόιντον*] Scribe *Κόιντιον* et pro *Μάκερον*, *Μακερῖνον*. RIIOD. Ex Livii L. IV. 8. emendatio certa est, nec praefererat Pighius in Fastis ad ann. cccx. WESS.

499. 17. *Ἐπὶ δὲ τούτων Κερκυραῖοι*] Serius haec contigerunt. Post praelium navale, de quo superius, Corinthii unum alterumque annum belli apparatu absumserunt. Diserte Thucydides I. 31. τὸν δ' ἐνιαυτὸν πόντα, τὸν μετὰ τὴν ναυμαχίαν καὶ τὸν ἕστερον οἱ Κορίνθιοι ἐναντηγοῦντο. Quae Corcyraei quum cognoscerent, legatos Athenas, sicuti et Corinthii, miserunt, opem rogaturos. Tum demum Atheniensibus, in Corcyraeos pronioribus, bellum summis viribus geri coeptum est. Vidit et hoc H. Dodwelus Ann. Thucyd. p. 113. WESS.

499. 22. *Καὶ ἐψηφίσατο συμμαχεῖν*] Praestare diceres *βοηθεῖν* ex Reg. 1. ob haec Thucydidis I. 44. *Κερκυραῖοις ξυμμαχίαν μὲν μὴ ποιήσασθαι, ὥστε τοὺς αὐτοὺς ἐχθροὺς καὶ φίλους νομίζεν — ἐπιμαχίαν δὲ ἐποιήσαντο.* Si enim Athenienses *συμμαχίαν* cum Corcyraeis non inierunt, ut verba ea praeferunt, melius utique foret *βοηθεῖν*. At ipse auctor intercedit, mox *τὴν δευτέραν συμμαχίαν*, qua xx naves Corcyraeis auxilio Athenienses miserint, memorans, neque obscure significans sese in Thucydide legisse *Κερκυραῖοις ἐπιμαχίαν μὲν μὴ ποιήσασθαι — — ξυμμαχίαν δὲ ἐποιήσαντο*, sicuti scriptum olim fuisse egregie conmonstrat Andr. Dounaeus Praelect. in Demosthen. Orat. de Pace p. 135. WESS. *Δευτέρα συμμαχία* est altera *submitmissio copiarum*. Eodem sensu accipitur vocab. *συμμαχία* p. 452. 14. 550. 87. II. 46. 28. 140. 56. Dionys. H. p. 671. 42. REISK.

500. 34. *Γενομένης δὲ ναυμαχίας*] V. Thuc. I. 49. WESS.

500. 41. *Ἀντιλοχίδου*] *Ἀντιοχίδου* R. I. et Coisl. quod an vulgatum praestet in dubio est. WESS. Quum *Ἀντιοχίδου* confirmetur inscriptione ab Oderico edita, hic, non *Antilochides* in fastis ponendus erat Clintono ad Ol. 86. 2.

500. 42. *Πόστουμιον*] *Πόστουμιον* Livius et Valerius nominant. *Οὐλεζον* corruptum est ex Ἐλβας. Id enim cognominis Li-

vius huic addit. RHOD. Πόστονον] De Postumo non obloquor: id restitui ex vestigiis libri Coislini. Cognomen *Cornicinis* habet in Livio IV. 11., Ἐλουας in Fastis Eusebii, a quo cum propius absit Οὐλέκος, quam a *Cornicine*, nolim cum Rhodomanno et Pighio ad ann. cccxi. hac in parte dissentire. WESS.

500. 48. Οὖσαν ἐκτιῶν ἄποιον] *Coloniam illorum* vertebatur, quasi Atheniensium fuisset, quod a vero recedit. Erant Potidaeatae Κορινθίων ἄποικοι, ut diserte Thucydides I. 56. et Plutarchus Pericl. p. 168. B. prodiderunt. WESS.

500. 52. Εἰς μίαν — Ὀλυνθον] Confer Thucydid. I. 58. et infra XVI. 54. WESS.

500. 62. Τὸν πλησίον τῆς Παλληνίου] Non longe ab urbe Olyntho, quae isthmo acubans LX stadiorum spatio Potidaea dissepata erat. Ellipsis simillima est in his Luciani Icaromenip. c. 11. ἄρτι μὲν τὴν τῶν ἱπποπόλων Θορηκῶν καθοροῦμενος, ἄρτι δὲ τὴν τῶν Μυσῶν. ubi Doctissim. Reitzius. WESS.

500. 63. Οἱ Ποτιδιαῖται] Bene ex Stephani praecepto. Ποτιδίαται Pausaniae L. V. 23. cum nota diligentissimi Sylburgii. WESS.

500. 66. Τὴν ὀνομαζομένην Λέτανον] *Letanum* Atheniensium in Propontide coloniam frustra quaero. Invenient feliciores. WESS.

500. 67. Εἰς Ἄρδεα] Alii εἰς Ἄρδέαν dixissent. Livius senatus consultum factum esse ait L. IV. 11. ut, quoniam civitas *Ardeatium* intestino tumultu redacta ad paucos esset, coloni eo praesidii caussa adversus *Volscos* scriberentur. Hoc palam relatum in tabulas, ut plebem tribunosquo falleret iudicii rescindendi consilium inutum. Consenserant autem, ut, multo maiore parte *Rutulorum* colonorum, quam *Romanorum*, scripta, nec ager ullus divideretur, nisi is, qui interceptus iudicio infami erat; nec ulli prius Romano ibi, quam omnibus *Rutulis* divisus esset, gleba ulla agri adsignaretur. Quae, quia plenius rem exponunt, addenda fuere. WESS.

500. 70. Φόσον] Scribatur Φοῦσον, et pro Κράσον, Κράσσον pronunciatione ac literatura Romana. RHOD. *Pacili* cognomen illi Livius inponit L. IV. 12., quod *Furiorum* sicuti et *Fusi* fuisse constat. *Papirio* praenomen est *Marco* apud eundem, usque utroque *Papirii* sunt: tamen quia librariis perpetuum est ex *Maniis* extruere *Marcos*, et quoniam eadem litera M. utrumque designabatur, ex Nostro Livius videtur adiuvandus, quae et Cel. Drakenborchii coniectura. WESS. De Κόιντος v. Pigh. p. 170.

500. 71. Παρίριον Κράσσον] Vid. Signon. in Livii IV. 12. WESS.

501. 77. Ἐτι δὲ κατὰ τὴν Πελοπόννησον] Fortasse scripsit ita, ἔτι δὲ οἱ κατὰ τὴν Πελοπόννησον, διὰ τὸ πάλεις etc. STERN. et qui οἱ τε RHOD. Si οὐκ ὀλέγονς ex scriptis Codd. receperis, ut equidem faciendum censeo, tantum deerit articulus αἱ κατὰ τὴν etc. Nam ex superioribus et participio ἀποφανόμενοι cetera pen-

dere clarum est. De colonis ex Peloponneso dixit superius c. 11. huius libri. WESS.

501. 86. Ὁ θεὸς ἔχρησεν αὐτὸν δεῖν κτίστην νομιζέσθαι] Passim hic honor Apollini habitus legitur; neque id mirum:

— — Φοῖβος γὰρ αἰεὶ πολίεσσι φίληδ'εῖ

Κτιζομέναις, αὐτὸς δὲ θεμέλια Φοῖβος ὄφραίνει,  
si verum cecinit Callimachus H. Apollin. v. 56. ubi plena manu Ezech. Spanhem. exempla conduxit. WESS.

501. 90. ἀποκατέστη] Quam hic libri quidam exhibent formam ἀπεκατέστη, eandem omnes supra 441. 81. ἀπεκατέστησε, et Excerptorum codices Hoeschelianus p. 500. 73. ἀπεκατεστάθησαν et Peirescianus 554. 5. ἀπεκατέστησε. Quae tamen aliena puto ab Diodoro, non ignarus quamvis reperti in tabula Heracleensi altera v. 22. p. 264. ἀπεκατεστάσαμες.

501. 91. Ἀρχίδαμος — ἐτελείτησεν] Auctor hoc in errore sibi constat, sicuti ex L. XI. 48. videbis; quem non animadvertisse eum miror vehementer. Scribit ipse inferius c. 47. Archidamum magnam suorum manum duxisse in Boeotiam atque ad Plataeas consedissee anno Olymp. LXXVII. 4., et c. 52. in Atticam invasisse Olymp. LXXVIII. 1. Quae si considerasset, reprehensionis immunis fuisset, qua eum H. Valesius ad Harpocrat. in Ἀρχιδάμος Πόλεμος et H. Dodwellus Annal. Thucydid. p. 70. haud sane iniuria taxarunt. WESS.

501. 96. Τίτον Μενήμιον] Lucius Menenius Livio L. IV. 12. Eusebio aliisque Fastorum conditoribus. WESS.

501. 98. Ἄρξας ἔτη δεκαεπτά] Scripserat ἐπτά, ut ante c. 31. Regnavit Spartacus septem fere annos, quod post Is. Casaubonum in Strabon. L. VII. p. 476. non monere neglexit Doctissim. P. E. Souciet. Dissert. de Pythodor. p. 53. Spartaci F. Satyrum, Bospori regem, videbimus L. XIV. 93. WESS.

501. 1. Μέτων ὁ Πανσανίου] Facem ea in re Metoni praeluxit Phainus, de quo Theophrastus de Sign. Pluviar. p. 416. Apseude vero Archonte vulgatam fuisse Enneadecaëteridem Metonis, docetur et in Schol. ad Comici Aves v. 998., a Scaligero et Kustero correctis. WESS.

501. 4. Ἀπὸ μηνὸς ἐν Ἀθ. Σμυροφ. τρισκαδεκάτης] Luccem his adspargunt D. Petavius L. I. Doct. Temp. c. 8. et S. Petitus Eclog. Chronol. L. IV. 12. Mox ante καθάπερ defit καί. WESS.

501. 10. Τὰς ἐπισημασίας ποιῆται] Vide H. Dodwellum Dissert. I. Cycl. sect. 21. et de ἐπισημασιῶν vocabulo supra L. I. 49. Rem declarat egregie Theo in Diosem. v. 20. Arati: οἱ δὲ μετὰ Μέτωνα ἀστρονόμοι καὶ πίνακας ἐν ταῖς πόλεσιν ἔθρησαν περὶ τῶν τοῦ ἡλλίου περιφορῶν τῶν ἐννεαδεκαετηρίδων, ὅτι καθ' ἕκαστον ἐνιαυτὸν τοιοῦσδε ἔσται χειμὼν, καὶ τοιοῦνδε ἔαρ, καὶ τοιοῦνδε θέρος, καὶ τοιοῦνδε φθινόπωρον, καὶ τοιοῦδε ἄνεμοι, καὶ

πολλὰ πρὸς βιωφελεῖς χρείας τοῖς ἀνθρώποις. Cui adde Geminum Isagog. c. 14. WESS.

501. 14. Τοὺς τὴν Σίριον καλουμένην οἰκοῦντας] Bellum Tarentinis et Thuriis de urbe fuerat, quod positum his conditionibus, ut aequo utrimque iure incoleretur, colonia tamen Tarentinorum haberetur, teste Antiocho in Strabon. L. VI. p. 406., id praeterea addente, ὕστερον δ' Ἡράκλειαν κληθῆναι, μεταβαλοῦσαν καὶ τοῖνομα καὶ τὸν τόπον. Plura Ph. Cluverius Ital. Ant. L. IV. p. 1273. WESS. Rhodomanni interpretationem, *Tarentini Siris oppidi incolas alio migrare cogunt, et colonia suorum illuc deducta urbem, cui nunc Heracleae nomen est, condunt*, quae quam falsa sit vel Strabonis verba docent, multis exagitavit Mazochius ad tab. Heracl. p. 65. s.

502. 19. Καὶ Νίττον Μενίμιον] Pro Νίττον haud dubie a Diodoro scriptum fuit Τίτον. Alii tamen Ἀγρίππαν faciunt praenomen. RHOD. Firmat Rhodomanni coniecturam vetus interp., qui si Τίτον suo in libro repererit, idem et ego conprobavero. Fortasse tamen NITTON pars est, sed depravata, praenomine Agrippae, quod illi Livius L. IV. 13. pluresque alii inponunt. Porro Archonte Pythodoro, quem his cum Coss. auctor committit, Euripides Fabulam Medeam docuit. Aristophanes Grammatic. in Argumento II. eius Tragoediae, ἐδιδάχθη, inquit, ἐπὶ Πυθιδώρου ἄρχοντος κατὰ τὴν ὀγδοηκοστὴν ἐβδόμην Ὀλυμπιάδα. Ubi Πυθιδώρου ob Diodorum et Thucyd. II. 2. praestat. WESS.

502. 23. Σπόριος Μάνιος] Pro Μάνιος redeat ceu postliminio Μαίλιος. RHOD. Recte Rhodomannus. Vitium debetur errantibus librariis; nam Μαίλιος hic olim fuisse, Μάλιος indicat, in capitulis huius argumento superstes. Conf. Livium IV. 14. WESS.

502. 27. Προσκαθήμενος τῇ πόλει] De obsidione sic saepe. Vid. infra c. 72. Paulo aliter περὶ Πελοποννησίων προσκαθῆσθαι L. XIX. 35., et Pausan. VII. 15., Ἡράκλειαν δὲ προσεκάθητο, πολιορκοῦντες οὐ βουλομένους etc. Phormionem et obsidionis huius tempus signat Athenaeus L. V. 15. WESS.

502. 35. Ἐτη δύο πρὸς τοῖς εἴκοσι] Eadem Dionysius Halicarnas. T. II. p. 142. et auctor infra L. XIII. 42. Aliter autem olim Thucydidis fuisse divisos libros, abunde cognitum est ex his Marcellini de Vit. Thucyd. prope finem: ἰστέον δὲ ὅτι τὴν πραγματείαν αὐτοῦ οἱ μὲν κατέτεμον εἰς τρεισκαίδεκα ἱστορίας, ἄλλοι δὲ ἄλλως. ὁμοῦς δὲ ἢ πλείστη καὶ ἢ κοινὴ κερράτηκε, τὸ μέγχι τῶν ὀκτὼ διηρῆσθαι τὴν πραγματείαν. Fortasse nata omnis haec est discordia, quod cum Thucydides continua oratione historiam absolvisset, Critici eandem in plures paucioresve libros secuerint: quae opinio est Schol. Cassellani extremo L. IV. Vide Duker. p. 648. et Stephan. p. 662. edit. Amstel. WESS.

502. 38. Μάνιον Αἰμίλιανόν] Tribunos militum sic in ordinem redige ac corrige: Μάν. Αἰμίλιον Μάμερον, Γάιον Ἰού-



λιον, *Αεύκ. Κοίντιον.* RHOD. In Livii correctioribus libris Aemilius *Mamerci* praenomine utitur, sicuti Iulius *Lucii* L. IV. 16. Fuit tamen in Aemilia gente non insolens *Manii* praenomen, de quo alias. Errorem librariorum, in Tribunorum nominibus admissum, animadvertit et Pighius in Fast. ad ann. CCCXV. WESS.

502. 40. *Ἐπὶ δὲ τούτων Ἀθηναίοις* etc.] Sequitur eorum scriptorum institutum, qui Peloponnesiaci belli principium ab Archidami in Atticam ineursione repetunt. Hoc calculo Xerxis in Graeciam expeditio annis L. bellum praecessit apud Ciceronem L. VII. Attic. Epist. II. et Demosthen. in Neaer. p. 740. Verum eodem est, Isocratem, qui Archonte Lysimacho, sive Nausimacho, ut Noster hominem adpellat, primam lucem adspexit, *πέμπτω πρότερον ἔτι τοῦ Πελοποννησιακοῦ πολέμου* esse natum apud Dionysium T. II. p. 94. Id tamen prave, quod hunc in annum auctor ea, quae ad Plataeas sunt administrata, coniecerit: superiore enim contigerunt, sicut ex Thucydide vere docuit H. Dodwellus Annal. Thucyd. p. 118. WESS.

502. 46. *Τάλαντα σχεδὸν ὀκτακισχίλια*] Vereor vehementer, ne quid in his sit peccatum. Auctor quidem certe, ita si scripserit, sibi non constat. Namque c. 40. et L. XIII. 21. *μύρια τάλαντα* e Delo Athenas conportata refert, at c. 54. huius libri *πλείω τῶν μυρίων τάλάντων.* quae non cohaerent. WESS.

502. 54. *Ὁ ἀδελφιδούς*] Suidas in *Ἀλκιβιάδης* sororis Periclis filium perhibet, paene ad mentem Diodori, Valer. vero Maximus Alcibiadis *avunculum* Periclem, L. III. 1. At mater Alcibiadis Dinomache erat Megaclis F., cuius proavi neptem Agaristam Pericles sibi matrimonio iunxerat, teste Plutarcho, qui et Alcibiadi genere coniunctum Periclem *προσέγοντα κατὰ γένος* prudenter adpellat in Alcib. princip. De tutela Alcibiadis et in aedibus Periclis educatione Isocrates de Big. p. 520. WESS.

502. 55. *Παῖς ὢν τήν ἡλικίαν*] Cave credas admodum puerum tum temporis fuisse. Si enim haec Pericli usu venerint paullo ante Peloponnesiacum bellum, Alcibiades aetatem militarem iam attigerat, quippe qui superiore anno Phormionis ductu in Thraciam militatum abierat, uti praeter Isocratem eo, quo dixi, loco Plutarchus testatur in Alcib. p. 194. E. Scio, quae Athenaeus disputarit L. V. 15., sed ea aetati Alcibiadis nihil nocent. Vide tamen Schol. ad Aristophan. Pac. v. 604. WESS.

502. 61. *Ὁ Ἀλκιβιάδης*] *Ὁ δ' Ἀλκ.* praestaret. RHOD. et WESS.

502. 62. *Ἀλλὰ πῶς σκοπεῖν μὴ ἀποδοῖ*] Praestat *ἀλλὰ σκοπεῖν πῶς μὴ* etc., ut bene in Addend. suis Rhodomannus. Paulo aliter Plutarchus rem refert Alcib. p. 194. E., Nostro paene consentit Val. Maximus L. III. 1. WESS. III. Scaliger maluit etiam *σκοπεῖν πῶς.* IDEM in Add.

503. 66. *Τοὺς τῆς πόλεως περισπασμοὺς καὶ φόβους*] Diodoro perfrequens vocis *περισπασμοῦ* de occupationibus, qui-

bus ad alia curanda homines distrahuntur, usus est. Πολιτικούς περισπασμούς L. I. 74. curas rerum civilium, quarum administratione opifices suis a rebus abstrahuntur, L. XVII. 65. περισπασμούς, et L. XVIII. 16. ἀγῶνας καὶ περισπασμούς, quibus Alexander distinebatur, adpellat. Adde πολέμους καὶ περισπασμούς ex L. XVIII. 54. XIX. 68. et ἀναγκαίους περισπασμούς Hieroclis apud Io. Stobaeum Floril. Tit. LXV. p. 415. WESS.

503. 71. Τὸ τῆς Ἀθηναῖς ἄγαλμα Φειδίας] Vid. Aristoph. Pac. v. 604. quaeque ibi ex Philochoro veteres Critici produxerunt. Subornarunt autem Periclis inimici Menonem quendam, cuius opera Phidias uti fuerat solitus, eum furti reum qui deferret, apud Plutarchum Pericl. p. 169. B. WESS.

503. 73. Διεχθέντες ὑπὸ τῶν ἐχθρῶν] Haec scabra videntur. Succurrit III. Scaliger probante Is. Vossio διδαχθέντες ὑπὸ refigens. Idem 85. σπεύδοντες καταβαλεῖν τὴν etc., haud absurde. WESS. in Add.

503. 82. Αἰδιάκαλον ὄντα Περικλέους] Anaxagorae discipulis praeter Archelaum et Euripidem accenset et Eusebius Praep. Evangel. L. X 14. Periclem. De accusatione Philosophi discordia est: nam Plutarchus Pericl. p. 169. E. Anaxagoram Periclis artibus ereptum, ne damnaretur, Diogen. vero Laërt. II. 12. exilio et quinque talentis multatum refert, ubi Aldrobandin. inspice. WESS.

503. 96. Μεγαρέας εἶργεσθαι τῆς τε ἀγορᾶς καὶ τῶν λιμένων] Decreti eius caussam declarat Philochorus in Schol. ad Comici Pac. v. 604. Id vero abolere cum nollent Athenienses, τοῦ μακροῦ πολέμου τοῖς Ἑλλήσι τὸ πινάκιον τὸ κατὰ τῶν Μεγαρέων principium fuit, ut Aelian. de Animal. L. XI. 27. loquitur. WESS.

503. 5. Ἐπεισε τοῖς Ἀθηναίοις] Constructio verbi πείθειν efflagitat τοὺς Ἀθηναίους. RHOD. Ἐπεισε τοὺς Ἀθηναίους] Sic praeferunt libri editi et manu exarati; neque adeo divino, quid ea animadversione Rhodomannus intenderit. WESS.

504. 18. Πρὸς τὴν κατασκευὴν τῶν προπυλαίων] Exstrui coepta sunt ante hos quinque annos Archonte Euthymene, absolutaque quinquennio Mnesiclis architecti diligentia. Impensae, in ea insumtae, aequarunt talentorum duo millia duodecim, testibus Philochoro et Heliodoro in Harpocrat. v. Προπύλαια et Plutarcho Pericl. p. 160. B. WESS.

504. 21. Τάλαντα τετρακόσια ἐξήκοντα] Haec summa tributi, quod Aristides sociis conferendum descriperat, uti L. XI. 47. observatum. Pericles ad sexcenta redegerat talenta, quae et ipse annumerat in Thucyd. II. 13. WESS.

Ibid. Ἡ τε πομπὴ σκευῆ] Series orationis et sermonis incholes τὰ τε πομπῆ σκευῆ efflagitant. Intelliguntur τὰ ἱερά σκευῆ περὶ τε τὰς πομπὰς καὶ τοὺς ἀγῶνας, quemadmodum apud Thucydidem II. 13. Pericles circumscribit. Bene Harpocraton, Πομπ-

πεῖα δὲ λέγεται, τὰ εἰς τὰς πομπὰς κατασκευαζόμενα σκεύη. Atque ita Demosthen. in Timocrat. p. 472., pluresque alii, a Io. Meursio advocati Attic. Lect. II. 15. WESS.

504. 23. Ἐν τε τοῖς ἔργοις] Diceret argenti fodinas indicari, quae ἔργα ἀργύρια Demosthen. περὶ τῶν ἐν Χερῶν. p. 60. et Xenophonti de Reditib. Athen. p. 729. dicuntur, quaeque civitati haud exiguos redditus adferebant, nisi quae mox succedunt, aurum argentumque non signatum, quod operibus publicis insertum conspiciebatur, postulerent. Firmat Thucydides II. 13. WESS.

504. 25. Χρυσίου πενήκοντα τάλαντα] In Thucydide II. 13. τεσσαράκοντα τάλαντα et Plut. T. II. p. 828. Philochorus in fragmento inter Schol. ad Comici Aves v. 604. σταθμὸν τάλαντων μὲν habet. Putem, quod auctor in his Thucydidem Ephorumque ducem sibi adsciverit, τεσσαράκοντα refingendum esse. WESS.

504. 27. Καὶ ταῦτα ἀναγκαῖα, εἰ καταλάβοι χορεία, χορησ.] Sic distinguunt editi libri. Ego vero malleμ καὶ ταῦτα, ἀναγκαῖα εἰ καταλάβοι χορεία etc. cum interprete. Iungit ἀναγκαῖας χορείας et S. Paullus Epist. ad Tit. III. 14. Mox χορησαμένους παρὰ τῶν θεῶν ex Reg. I. non omnino pravum est. Agitur non de una Palladis imagine, sed et donariis reliquorum: quae cuncta a Diis mutuo sumta, si quae necessitas urgeat, pacis tempore restitui reddique posse censebat Pericles. Rhodomannus vertit, quasi παρὰ τῆς θεοῦ legeretur, quod nusquam inveni. WESS.

504. 29. Τοὺς τε τῶν πολιτῶν βίους] Admonet Rhodomannus ita scribi oportere omnino. Pravo errore τοῖς τε τῶν πολιτῶν βίοις huc usque legi. Ego vero non perspicio, quos designet libros. Namque et Stephanus et ipse haud aliter provulgant. Ergone festinanti hoc excidit? WESS.

504. 34. Μερῶν καὶ διαχιλῶν] Thucydides gravis armaturae xiii millia, in praesidiis et propugnaculis xvi millia numerat, L. II. 13. WESS.

504. 42. Ἴν ἢ αἰτίαν ὠρομένη Ὀλίμπιος] Hanc nominis causam praeter alias adfert et Plut. Pericl. p. 156. A. Vide Io. Georg. Graev. ad Imagin. Luciani c. 17. WESS.

504. 45. Ἐν δὲ τοῖς γεγραμμένοις] Non puto scripsisse Diodorum ἐν δὲ τοῖς γεγραμμένοις. STEPH. Dele δὲ post ἐν. pro γεγραμμένοις restitue τετραμέτροις. RHOD. Ἐν τοῖσδε τοῖς γεγραμμένοις] Prius ex libro Coisl. verissimum est. Noster L. V. 66. Ἡρόδοτον ἐπιμαρτυρεῖν ἐν τοῖσδε τοῖς ἔπεσι. Herodotus Vit. Homer. c. 28. ἐν τοῖσδε τοῖς ἔπεσι εἶπε. Pausanias III. 2. ἤνείματο — τῆς νομοθεσίας ἐν τοῖσδε τοῖς ἔπεσι. Recte proin Guil. Canterus Nov. Lection. L. IV. 9. coniectura ductus ita scribendum decrevit. Posterius γεγραμμένοις si cum Cantero et Rhodomanno ex τετραμέτροις natum arbitreris, non intercedam. WESS. Ἐν τοῖσδε placuit et Scaligero. IDEM in Add.

504. 47. Ὡ λιπερνῆτες γεωργοὶ] Semper haec mihi scriptura multis partibus doctior et cultior est visa, quam quae librarium ingenio debeatur. Πένητες, qui legebantur, ex Grammatici Scholio in hanc sedem commigraverant; nam λιπερνῆς ὁ ἐκ πλουσίου πένης Hesychio teste. Haud sane ignoro, in Aristophanis Pac. v. 602., unde haec excerpta, esse,

Ὡ σοφώτατοι γεωργοὶ, τὰμὰ δὴ ξυνίετε  
ῥήματα. —

Verum illis cum similia prodant Critici veteres haec Cratini et Archilochi,

Ὡ λιπερνῆτες πολῖται, τὰμὰ δὴ ξυνίετε  
ῥήματα —

nasci utique suspicio potest, olim et in Comico fuisse Ὡ λιπερνῆτες γεωργοὶ etc. — tantoque magis, quoniam Diodorus ita citat diserte. Quod tamen tuo arbitrio permissum esto. Mihi cum maxime sufficit instaurata Diodoro melior scriptura. WESS.

Ibid. Τὰμὰ τις ξυνίετω] Correxerit Rhodomannus τὰμὰ δὴ ξυνίετε, insuper admonens pro ῥήματα et βούλεσθε, ῥήματ' ac βούλεσθ' scribendum, cui non refragor. WESS.

505. 50. Εἶτα Περικλέης] Hanc eiusdem Rhodomanni coniecturam liber Coislin. adfirmat. Sequuntur apud Poëtam, quae consulto neglexisse Diodorus videtur,

Τὰς φύσεις ὑμῶν δεδοικῶς καὶ τὸν ἀντοδᾶξ τρόπον,  
Πρὶν παθεῖν τι δεινὸν, αὐτὸς ἐξέφλεξε τὴν πόλιν  
Ἐμβαλῶν etc.

Nam excidisse aliorum negligentia, non opinor. WESS.

505. 53. Ἐξεφύσησεν τοσοῦτον] Sic Aristophanes. Editum ἐξεφύσησε τοσοῦτον versus modulum iugulat, sicuti monuit Rhodomannus. WESS.

505. 56. Καὶ πάλιν ἐν ἄλλοις Εὐπολις ὁ ποιητής] Tantamne socordiam in Diodoro fuisse, ut Eupolidi tribuerit, quae Aristophani debentur? Culpaе immunis erit, modo refinxeris: Καὶ πάλιν ἐν ἄλλοις,

— — Περικλέης οὐλύμπιος

Ἥστραπτεν, ἐβρόντα, ξυνεκύνα τὴν Ἑλλάδα.

Εὐπολις δὲ ὁ ποιητής

Πειθῶ τις ἐπεκάθιζεν ἐπὶ τοῖς χεῖλεσιν

Οὕτως ἐκίλει etc.

Nam priora in Comici Acharnens. v. 529. restant, posteriora ibidem Critici ex Eupolidis Δήμοις advocarunt. Atque ita Diodorum explicuit accuratissimus P. Leopardus Emendat. L. V. 14. et L. XVI. 14., quem sequere, si lubet. Mihi necdum omnia expedita. Scripsi Ἥστραπτεν ob Poëtam et Cod. Coisl., quamquam alii Ἥστραπτ', celebratissimum hunc locum citantes, de quibus L. Kuster. ad Acharn. v. 529. WESS. Vt Wesselingius, ita iam Iebbius ad Aristid. vol. II. p. 574., nisi quod hic καὶ Εὐπολις ὁ ποιητής. Sed rectius

error hic Diodoro relinquatur, cui non dissimilem ab Cicerone his iisdem in versibus commissum (v. Ep. ad Atticum XII. 6.) comparavit Elmsleius ad locum Aristophanis et ante eum cum aliis aliorum Reinesius *ιστοροσυμ.* linguae Punicae XIII. 5.

505. 61. *Τὸ κέντρον ἐγκατέλειπε*] Translationem signat Plato in Phaedon. p. 91. C. *ἐδλαβοῦμενος ὅπως μὴ ἐγὼ ὑπὸ προθυμίας ἅμα ξαντόν τε καὶ ἑμῆς ἐξαπατήσας, ὡς περ ΜΕΛΙΤΤΑ ΤΟ ΚΕΝΤΡΟΝ ΕΓΚΑΤΑΛΙΠΩΝ* οὐχίσομαι. Quam frequenter autem huc alludant utriusque linguae scriptores, docent egregii viri Stephan. Bergler. in Alciphron. L. I. Ep. 38. p. 180. et Ti. Hemsterhus. ad Lucian. Nigrin. c. 7. WESS.

505. 73. *Κατὰ γὰρ τὴν Βοιωτίαν ἢ τῶν etc.*] Haec superiore anno administrari coepta, Archontis Pythodori mense decimo, Thucydides, ne dubites, vetat L. II. 2. WESS.

505. 77. *Ἐπαγγελλόμενοι τὴν πόλιν ὑπὸ τῆν τῶν Θηβαίων*] Confer Thucyd. II. 2. Demosthen. in Neaer. p. 740. et Aeneam Poliorcet. c. 3. WESS.

506. 94. *Βαλλόντων τὰς κερμίδας*] *Λίθοις τε καὶ κερμίδων βαλλόντων* Thucydides II. 4. et simili in re Pausanias IV. 21. ac 29. et Philo Iud. Legat. Cai. p. 1010. B. Sed editum nihil eo deterius. Vid. Thucyd. III. 22. WESS.

506. 1. *Πανδημεὶ κατὰ σπονδὴν*] Faciunt Codd. aliqui primam harum vocem suspectam, quam ego non moveo: oportuerat enim Thebanos, cum populares Plataeam invaderent, *ἔτι τῆς νυκτὸς παραγενέσθαι πανστρατιᾶ*, sed praepediti et Asopo flumine et nocturno tempore, nunc demum iter maturant apud Thucyd. II. 5. Porro *παράξον*, quod in Steph. edito, vitio operarum fuit natum, optimeque correctum ab ipso Steph. et Rhodom. WESS.

506. 8. *Τοὺς ἀχμαλώτους ἀπολαβόντες*] Pugnatum iterum Thucydides II. 5. Nam Thebanos captivos iugulatos fuisse ait. PALM. Thucydidi adstipulatur Demosthenes, si tamen is auctor Orat. in Neaer. p. 741. *ὡς οὖν ἀπέτνχον οἱ Θηβαῖοι τῆς πείρας, καὶ οἱ Πλαταιεῖς τοὺς ἄνδρας, οὓς ἔλαβον αὐτῶν ἐν μάχῃ ζώντας, ἀπέκτειναν etc.* Itaque in his error inest. WESS.

506. 22. *Συνεμάχονν δὲ τότε Λακεδαιμονίοις*] Ex Thucydide II. 9., quem vide. WESS.

506. 31. *Οἱ ἐπὶ Θράκη*] In Addend. suis Rhodomannus *ἐπὶ Θράκης* praeoptat, ut in Thucydide II. 9. et infra c. 46. huius libri *εἰς τοὺς ἐπὶ Θράκης*, et L. XV. 31. *καὶ οἱ ἐπὶ Θράκης κατοικοῦντες*. Tamen L. XII. 73. *ἐξέπεμψαν εἰς τοὺς ἐπὶ Θράκην τόπους*, sed melius in Aristoph. Pac. v. 282. *εἰς τὰ πρὸς Θράκης χωρία*. Aristid. T. I. p. 365. *τὰ ἐπὶ Θράκης ἔχειν*. WESS.

506. 33. *Καὶ Κερκυραῖοι*] In recensione Atticorum sociorum ante haec verba *αἱ δ' ἄλλαι πᾶσαι*, deesse arbitror protasin periodi, qua recenseantur illi, qui naves miserint. RHOD. Adsti-

pulor viro doctissimo. Desse videntur haec: *τοῦτων ναυτιζὸν παριέχοντο Χῖοι, Λέσβιοι καὶ Κερκυραῖοι*, quae Thucyd. II. 9. non praeteriit. Omissa sunt a socorde librario, oculos in postremam vocem coniciente et int̄ media omnia transiliente, quae defectuum sollemnis causa. WESS.

507. 39. *Τῆς χώρας πολλὴν ἐδήλωσε*] Scribe τὴν πολλήν. RHOD. Non intercederem, si hoc in genere sibi perpetuo constarent. Thucyd. II. 56. *ἔτεμον τῆς γῆς τὴν πολλήν*, plane ut Rhodomannus edixit. At mox Noster *οὔτοι δὲ πολλήν τῆς παραθαλαστίου χώρας πορθήσαντες*. Et L. II. 48. *καὶ πολλήν τῆς ὁμόρου χώρας κατατρέχοντες λιστεύουσιν*. Et L. V. 32. *καὶ πολλήν μὲν τῆς Εὐρώπης — φροσολογήσαντες*. Sic et Aristophan. Pac. v. 166. *Καπιφορήσεις τῆς γῆς πολλήν*. Conf. L. Kuster. in eius Poëtae Plut. v. 694. WESS.

507. 47. *Καρκῖνον καὶ ἑτέρουσ τιὰς*] Adi Thucyd. II. 23. et Schol. in Aristoph. Ran. v. 1511. WESS.

507. 50. *Κατεπιήζαντο τοὺς Λακεδαιμονίους*] Dicere solet *κατεπλήζαντο*, non *κατεπιήζαντο*. STEPH. et RHOD. Vera Stephani observatio est. *Καταπλήζασθαι* quum de timore, qui incutitur, sermo instituitur, auctori tritum, nusquam *κατεπλήζασθαι*. Sunt quidem οἱ *κατεπιηχότες τὴν τῶν ὄλλων ὀρμὴν καὶ βίαν* in Excerpt. Vales p. 385., sed ab hoc loco plane alieni. WESS.

507. 58. *Μάρκον Γεργόνιον*] V. Wesseling. ad 509. 46.

*Ibid. Καὶ Λούκιον Σέργιον*] Conspirant in Sergii praenomine eum in modum scribendo magno consensu scripti Codd. Alias *Λεύκιον* probat cum Dionysio et Plutarcho, quamquam *Λούκιον* mavult Dio Cassius. Credo *Λούκιον* Diodoro a librariis esse datum. WESS.

507. 64. *Τὴν καλουμένην Ἀκτὴν ἐδήλου*] Huius Peloponnesi orae meminit iterum L. XV. 31. et L. XVIII. 11. Meminit et Stephanus in *Ἀκτῇ* et Scymnus Chius v. 522.

— — *Ἀργεῖοί τε πρὸς ἀκρόντα δὲ*

*Ἠλίον, ὅσαι κατέχουσι τὴν ΑΚΤΗΝ πόλεις.*

Unde recte conficias, *Ἀκτὴν* Peloponnesi tractum fuisse orientalem, Argivis vicinum, ubi Troezenii et Epidaurii incolebant. Scymni locum non neglexit Abr. Berkelius, sed alia admiscens, parum congrua. WESS.

507. 82. *Περιπλεύσαντες τὴν Ἠλείαν*] Lectionem marginis εἰς τὴν Ἠλείαν retinemus. RHOD.

507. 83. *Καὶ Φερίαν χωρίον Ἠλείων*] Hoc loco *Φερίαν*, et mox *Φεράς*, aequaliter mendosa: nulla enim *Pheria*, nullae *Pherae* in Eleorum regione. Lege utrobique *Φεῖαν* et τὰς *Φεῖας*. Fuit enim urbs Eleorum, de qua Thucydides II. 25., Strabo L. VIII. p. 535. et alii, quae modo *Φεῖα*, modo pluraliter *Φεῖαι* dicta est. PALM. Optime Palmerius. Reddit eandem urbem vir doctus Aristidi Panath. p. 272. *οἱ περιέπλευσαν μὲν τὴν*

Πελοπόννησον, οὐχ ὡς ἀπλῶς εἰπεῖν περίλοις ναυτικοῖς, ἀλλ' ὥστε κρατεῖν μὲν τῶν ἐπιταύρων τῆς χώρας, νικῆν δὲ τοὺς ἀντιστάτας ἐν θαλάτῃ, arbitratus pro ἐν θαλάτῃ scribendum ἐν Φαίᾳ Ἠλείων ex Thucydide II. 25. Cui quidem adsentiri non possum. Quae enim eo loco Orator commentatur, ea Peloponnesiaco bello sunt priora, declarantque Tolmidæ expeditionem, qua de Noster L. XI. 83. Itaque si vitio sit foedatum id vocabulum, praeferrem ἐν Γυθίῳ, aut, si nimium istud opineris, uti revera videtur, nihil innovarem, ἐν θαλάτῃ explicans de parvo futilique loco, sicuti apud Thucydidem IV. 115. οἱ δὲ Ἀθηναῖοι ἡμύνοντό τε ἐκ θαλάτῃς τειχίσματος. WESS.

508. 96. Περὶ πόλιν Ἀλόπην ] Ἀλόπη Thucydidi II. 26., ubi de Cleopompi hac expeditione. Nostri scripturam scriptorum plerique prebant, monentibus Hudsono et Wasse, viris clarissimis. WESS.

508. 97. Νῆσον ὀνομαζομένην Ἀταλάντην ] Bene, ut Thucydides II. 32. declarabit. Nam quod eam insulam post paucos annos continente abruptam scribit infra c. 59., id falsum esse videbimus. Atalante deserta erat, sed commodissimo situ ad Loerenses inuestandos: quare ἐπιτείχισμα, sive castellum, e quo illorum agros excursionibus depopulari possent, ea in insula Athenienses excitarunt. Ἐπιτειχίζειν enim et ἐπιτείχισός ἐστι, πόλιν τινὰ ἐτέραν πλησίον ἄλλης τειχίσαι, διὰ τὸ φρουρεῖν καὶ κημιαῖεσθαι τὴν γῆν, sicuti explicat Schol. Thucyd. I. 144. Frequens propterea ἐπιτειχίζειν τῇ πόλει, de eiuscemodi munimento, in urbis alterius perniciem condito. Andocid. de Myster. p. 13. ἤλθε εἰς Λεκάειαν; καὶ ἐπιτείχισας τῇ πατρίδι τῇ σεαυτοῦ; Xenophon. Hellen. L. V. princ. οἱ Ἀθηναῖοι ἐπιτείχισαν Αἰγινήταις καὶ ἐπολιόρχουν αὐτούς. Sic oportuit, non Αἰγινήταις καὶ ἐπολιόρχουν αὐτούς. Hæc vera loci distinctio, quem præstantissimus Olearius aliorum transtulit. Significat Euphratem epibus suis, tanquam munimento, ad alios oppugnandos uti. Hinc ἐπιτείχισμα et ἐπιτειχισμός, at in Synes. Orat. de Reg. p. 24. C., castellum, eo fine exstructum. Eleganter Philo Iud. L. I. Vit. Mos. p. 604. A. ἐπεὶ εὐαυδροῦσα δέναιμις δυσάλωτον καὶ δυσζαθαίρετον ἐπιτείχισμα. Et Iosephus L. I. Bel. Iud. 23. F. de Herode: ἀνακληθεὶς δὲ τῶν διαβολῶν Ἡρώδης, ὥσπερ ἐπιτείχισμα τοῖς τίοις, κατέχευε τὸν ἐκ τῆς Αἰοαίδος Ἀντίπατρον. Instructurus scilicet Antipatrum et armaturas in Mariannes filios. Atque hoc ex usu suspiceris, scribi et heic debuisse ἐπιτείχισμα τῇ Αἰοαίδι. Sed iuvat Demosthenes Philipp. I. p. 31. ἔχονσι τοιαῦτα ἐπιτειχίσματα τῆς αὐτοῦ χώρας. nisi ut illic τῇ αὐτοῦ χώρῃ præstate-

rit, quae opinio viri eruditissimi Ti. Hemsterhusii, hoc de vocabulo diligentissime disputantis in Luciani Nigrin. c. 23. WESS.

508. 2. Ἀνέστησαν αὐτοὺς ἐκ τῆς πόλεως] Forte et hac tempestate atrocissimum id decretum conditum, quo Aeginetarum unicuique dextrae manus pollex, ne hastam vibrare possent, amputabatur apud Aelian. H. V. II. 9. Aetas Philoclis, quem eius consilii auctorem perhibet Plut. Lysandr. p. 438. A., id suadet. Captus enim est extremo bello Peloponnesiaco, neque idem adeo esse poterit atque Archon Philocles, quo Aeginetae ab Atheniensibus in ordinem coacti referuntur L. XI. 78. Namque idem si fuerit, ut multi opinantur, oportet aetatis anno fere LXXX. postremam expeditionem fuerit ingressus, quod mihi quidem ad credendum difficile accidit. WESS.

508. 4. Τὰς καλουμένας Θυραίας] Sitae erant in finibus regionis Spartanae atque Argivae, ἐν τοῖς μεθορίοις τῆς Λακωνικῆς καὶ Ἀργείας inferius c. 65., ubi itidem Θυραίας sicuti et in Strabone L. I. p. 114. Melius Stephanus, Θυρέα, περὶ ἧς Ἀργεῖοι καὶ Λακεδαιμόνιοι ἐπολέμησαν. — λέγεται δὲ καὶ πληθυντικῶς. Et Strabo L. VIII. p. 577., atque in argumento cap. fronti huius libri praescripto. Conf. Is. Casaubon. in Strab. I. p. 114., et Sylburg. ad Pausan. II. 39. p. 178. WESS.

508. 15. Πλὴν τῆς καλουμένης Τετραπόλεως] Idem ex Istro docetur in Schol. Sophoclis Oedip. Colon. v. 689. Λακεδαιμόνιοι τὴν λοιπὴν γῆν δηοῦντες, τῆς μὲν τετραπόλεως ἀπέσχοντο διὰ τοὺς Ἡρακλίδας. Heraclidae Tetrapolim Atticae, tota Graecia extorres, incoluerunt, Eurystheumque invadentem repulerunt occideruntque, sicuti L. IV. 57. proditum fuit. Mox orationis series requirit manifesto δίκαιον γὰρ ἦροῦντο τοὺς ἐδηροετηκάτας τοὺς προγόνοους — ἀπολαμβάνειν. Nam quod in Cod. Veneto reperitur, non satisfacit. Lysias Orat. XIX. 10. πῶς οὖν οὐ χρὴ χάριν παρ' ἡμῶν ἀπολαμβάνειν, εἰ τοιοῦτοι ἐσμέν. WESS.

508. 22. Ἐπέπεσον εἰς λοιμικὴν περίστυσιν] Vide Thucydidem, hanc luem egregie describentem, L. II. 47. et Lucretium VI. 1130. WESS.

509. 37. Ἐξημίωσαν αὐτὸν ὀγδοίχοντα ταλάντοις] Multam non praeteriit Thucyd. II. 65., sed quanti lis aestimata sit non addens. At Plut. Pericl. p. 171. E. qui minimam eius summam referant, xv talentis, qui maximam, quinquaginta talentis finitam tradere, prodit. Unde de mendo suboriri suspicio posset, nisi satis liqueret, Nostri Bibliothecam Plutarchum neglexisse. WESS.

509. 44. Ἐπαμεινώνδου] Nomen notum et celebre pro ignoto posuerunt exscriptores. Sed haec terminatio nominis Thebanis peculiaris, non est Attica. Repone audacter Ἐπαμεινώνος, ut est apud Athen. L. V. 18. Saepè in ea voce erratum est, ut apud Diogenem Laërtium in Platone (Lib. III. 3.) legitur ἐπ' Ἀμεινίου pro Ἐπαμεινώνος. PALM. Magnum certamen est Archontis



hoc nomen viris eruditis: occasionem praebent veteres, quorum Diogenes Platonem ἐπὶ Ἀμεινίων, quo Archonte Pericles occubuerit, natum asseverat, Athenaeus, Περικλῆς δ' ἀποθνήσκει κατὰ τὸ τρίτον ἔτος τοῦ Πελοποννησιακοῦ πολέμου, ἄρχοντας Ἐπαμεινόνος, Auctor Argumenti Euripideae Hippolyti, ἢ σκηνὴ τοῦ δράματος ὑπόκειται ἐν Θήβαις ἐπὶ Ἀμεινόνος ἄρχοντας Ὀλυμπιάδι πζ'. ἔτι δ'. Idem ergo Aminias, Eraminon, Aminon et Eraminondas, nisi intercederetur. Is. enim Casaubon. in Athen. V. 18. verum nomen censet Ἐπαμίωνων, quod idem sonet ac Ἀμυνίας. Io. Meursius de Archont. L. III. 3. Ἐπαμεινίων, Cl. Salmas. in Solin. p. 111. Ἀμεινίων, probante Menagio ad Laert. III. 3., H. vero Dodwellus de Cycl. p. 739. Ἀμεινίας praecoptat. Qua in lite cum necessario mihi in partes sit transcendendum, a Salmasio et Dodwello stare cum maxime non possum. Vetant Diodorus et Athenaeus, quorum in verbis si aut ἐπ' Ἀμεινόνος, aut ἐπ' Ἀμεινίων, reflexeris, nascetur verborum ordo, linguae genio contrarius. Quis enim ἄρχοντας ἐπ' Ἀμεινόνος, aut ἐπ' ἄρχοντας Ἀθήνησι ἐπ' Ἀμεινίων aequo animo ferat? Casauboni correctio recipi posset, nisi paullo propius abesset a veteri nominis scriptura, quae Ἐπαμεινίων, uti Io. Meursius et Iac. Palmerius arbitrati sunt, fuisse videtur. Athenaeus et auctor Argumenti Hippolyti Euripidis ostendunt id clarissime. Ab eo Nostri Ἐπαμινώνδας non differt, nisi patronymica forma: cuiusmodi nomina primitivorum loco usurpari, diximus antea saepe, et firmat opportuno exemplo Hippocrates, eundem hominem Epidem. L. I. p. 951. Ἐπαμινώνα, et Ἐπαμινώνδαν p. 957. adpellitans. Iam quod doctissimus Palmerius terminationem hanc Thebanis esse particularem adseverat, id nunquam patietur Archon Atheniensis. Χαιρώνδας in Demosthen. Orat. de Cor. p. 143. WESS.

509. 46. Κορνήλιον Μακερῖνον] Agnomen hoc vitiosum esse absque dubitatione pronunciat Sigonius. Forte Μαλουγῖνον scripsit, ut Romanum Maluginensis, quod Fasti habent, ita exprimatur. RHOD. Paria cum Sigonio facit Pighius in Fast. ad ann. CCCXVII. Ego vero haud scio, an superioris anni Consuli M. Geganio per iniuriam ablatum sit hoc cognomen et A. Cornelio tributum. WESS. Conf. Borghes. p. 12. s.

509. 65. Πλείω τῶν χιλίων ταλάντων] Duo talentorum millia usque in urbis deditionem, quae paucis post Agnonis discessum mensibus facta fuit, insumserunt, teste Thucydide II. 70. WESS.

510. 70. Βίαν προσάγειν τῇ πόλει] Vid. ad Libr. XI. 60. WESS.

510. 75. Πλείους] Πλείω Co. R. 1. plane ex Diodori consuetudine. Vid. not. in L. I. 92. et supr. c. 21. huius libri. WESS.

Ibid. Πλείους τῶν χιλίων] Ex quatuor mille militibus spatium dierum XI mille et quinquaginta huc exstincti sunt, sicuti Thucydides II. 58. memoriae prodidit. WESS.

510. 79. Ἀσμένως δὲ κἀκείνων προσδεξαμένων] Caussam explicat Thucyd. II. 70. ubi de urbis deditioe. Adde Pausaniam L. V. 23. p. 437. WESS.

510. 93. Λιεκόλυσε ταύτη πλεῖν τοῖς Λακεδαιμονίοις] Corinthios, Spartanorum socios. Haec autem et quae ad Potidaeam gesta fuere, ante Periclis mortem hieme anni superioris administrata fuisse ex Thucyd. II. 69. 70. haud difficulter conficiet. WESS.

510. 97. Καὶ παρακαλούντων τοὺς Πλαταιεῖς] Conf. Thucyd. II. 71. Post pauca ὡς δ' οὐ προσεῖχον praestaret, Rhodomanno monitore. WESS.

510. 9. Μετὰ στρατιωτῶν χιλίων] Ἀθηναῖοι δισχιλίοις ὀπλίταις ἐαυτῶν καὶ ἰππεῦσι διακοσίοις ἐστράτευσαν ἐπὶ Χαλκιδίας τοὺς ἐπὶ Θορέκης Thucydides ait L. II. 79. Scribe ergo δισχιλίων cum Cl. Ios. Wasse, ut Thucydidi, si tamen id necesse, consentaneus sit. WESS.

510. 10. Εἰς Παικτωλὸν τῆς Βοττικῆς] Et rursus hoc loco Paetolum aurifluum exscriptor in mente habuit, et e media Lydia in Macedoniam transfretavit. At tu melius doctus lege Σπαικτωλόν urbs enim fuit Bottica nota. PALM. Sine controversia verum est εἰς Σπαικτωλὸν ex Thucydide II. 79. et Isaeo Or. de Dicaeogen. Hered. p. 55. Vitium etiam animadversum est a doctissimo Wasse in Thucyd. I. 65. WESS.

510. 14. Οἱ τε στρατηγοὶ] Praeter eos, quos auctor modo nominavit, Calliades, de quo Plut. Nicia p. 526. E. WESS.

511. 21. Τῆς ὀνομαζομένης Στρατόν] Vid. L. XIX. 67. WESS.

511. 24. Τοὺς ὀνομαζ. Οἰνιάδας] Idem urbi, quod civibus, nomen erat. Polyb. IV. 65. τοὺς μὲν γὰρ Οἰνιάδας κέεσθαι συμβαίνει παρὰ θάλατταν, ἐπὶ τῷ πέλασι τῆς Ἀχαρναιῆς etc. Adde Pausan. Messen. c. 25. WESS.

511. 29. Τῆν τε στρατηγίδα ναῦν] Verius scripsisset μίαν τῶν στρατηγίδων cum Thucydide II. 84. Plures enim erant, ut illie videbis. WESS.

511. 36. Τρόπαιον στήσαντες] Haec sunt τὰ ναύμαχα πρὸς Ῥίῳ Φορμίονος τρόπαια apud Plutarchum de Athen. Glor. p. 345. C. De navi, quod continuo sequitur περὶ τὸν Ἴσθμὸν Neptuno consecrata, id si de Isthmo Corinthiaco, ubi Ἴσθμὸς Ποσειδῶν celebratur, intellexerit, a vero aberit longissime: mox enim a parta victoria Phormion posito ad Rhium Molyericum tropaeo navim dedicavit, quod ipse auctor et ante eum discrete protulit Thucydides II. 84. Quam difficultatem, exscriptis Nostri verbis, cum animadvertisset Iac. Palmerius Graec. Ant. L. IV. 20. p. 487. sic commentatur: *Hunc locum apponendum iudicavi, non quod nos doceat aliquid, quod Thucydides non dixerit, sed ut vocem Ἴσθμὸν isthmm, qua videtur abuti pro voce πορθμὸν.*

Nam isthmus est terra utrinque in angustias reducta, πορθμὸς vero fretum angustum inter duas terras, quale est illud, de quo agitur inter duo illa promontoria. Itaque si non abusus est ea voce Diodorus, dicendum est, Rhium Aetolicum habuisse quoddam collum terrae inter sinum Crissaeum et mare Ionium, exterius angustum, antequam extremum promontorii sinem protenderet: quod non abhorret a verosimili, et ibi fuisse id Neptuni templum, prospectum habens in sinum et in exterum mare. Haec ille; quorum postrema ut probem adduci non possum. Nam Ἰσθμὸν loco τοῦ πορθμοῦ posuisse Diodorum persuaderi nondum mihi patior. WESS.

511. 54. Πρὸξλον Οὐεργίνιον] Lucii praenomine in Livii L. IV. 21. Eusebii Chronico et aliis insignis est; quod Pighius propterea in Fast. ad ann. CCCXVIII. verius censet. WESS.

511. 57. Σύμμαχος Μεσσηνίος ἀπὸ Σικελίας] Σύμμαχος τῶν ἐπὶ πορθμῷ Μεσσηνίων, quod eodem redit, apud Pausan. VI. 2. Quanquam, ut ibidem additur, Siculi Symmachum istum origine Messenium negabant, Zanclacum perhibentes. WESS.

511. 58. Ἐπὶ δὲ τούτων Κνήμιος etc.] Nondum exierat superioris Archontis annus, quum Cnemus ea moliretur, quemadmodum ex Thucydide II. 93. cognoscitur. WESS.

512. 68. Τὸ καλούμενον Βορδόριον] In Thucydide Φροῦριον Βοῖδορον II. 94. cum nota diligentissimi Wasse. WESS.

512. 72. Ταχέως ἐξεβοήθουν] Obsequor scriptis Codd. et Diodori consuetudini, qua L. XIII. 67. οἱ μὲν κατὰ τὴν πόλιν ὄντες — ἐξεβοήθουν ἐπὶ τοὺς λιμένας. Et tum c. 93. ἐθῆς δ' ἐξεβοήθουν ὄντες ὀλίγοι παντελῶς. Non addo, simplici verbo et grandius et multo id opportunius esse. Vid. L. V. 59. WESS.

512. 75. Ἐπιβολῆς] Ἐπιβουλῆς R. 2. frequentissima confusione. Vid. L. I. 4. ibique adscripta. WESS.

512. 79. Κλείθροις καὶ φυλακαῖς διαλαβόντες] Tum demum Piraei portus κλειστός fecerunt, qui ante patebant, nullis muniti claustris. Bene Hesychius in Ζέα· ἔχει δὲ ὁ Πειραιεὺς λιμένας τρεῖς κλειστούς. Neque Io. Meursius Piraei c. 3. neglexit. Hoc amplius opportunis locis custodias collocarunt: id enim φυλακαῖς διαλαμβάνειν. De Cicerone Appianus L. II. Bel. Civil. p. 711. τὴν τε πόλιν ἐκ διαστημάτων φρουραῖς διελάμβανεν. Herodes διαλαμβάνων φυλακαῖς τὸ πᾶν ἔθνος est apud Ioseph. Antiq. Iud. XV. 8. 5., qui quoque τὴν Ἰδομαίαν διοχιλίους πεζοὺς καὶ τετραζοσίους ἵππεῦσι διελάμβανε L. I. Bel. Iud. 16. 1. Sed vide not. in Nostri L. I. 33. WESS.

512. 81. Περὶ δὲ τοὺς αὐτοὺς χρόνους Σιτάλης] Hoc vero recte. Superioris enim anni exitu Sitalees in id bellum descendit. Confer Thucyd. II. 95. WESS.

512. 96. Πλείον χιλίων ταλάντων] Attigit obiter hunc locum doctissimus Wasse ad Thucyd. II. 97. corrigendumque mo-

nuit, quod Belli Peloponnesiaci scriptor τετρακοσίων duntaxat τάλαντων meminerit, quae Seuthes, qui post Sitalcem regnans tributa multis partibus auxerat, ex regni redditibus perceperat. Ab eo equidem non dissentirem, si mihi certo liqueret, solo Thucydide duce in his describendis auctorem fuisse usum. Id vero necdum adparuit. WESS.

512. 98. Πλείους τῶν δυοκαίδεκα μυριάδων etc.] Thucydides exercitus τὸ πλῆθος οὐκ ἔλασσον πεντεκαίδεκα μυριάδων fuisse adfirmat, atque huius quidem maiorem partem pedestrem, tertiam vero equestrem L. II. 98. Nostro non plane consentiens. WESS.

512. 6. Πρὸς Περδίκκην τὸν βασιλέα] Successerat patri Alexandro superiore anno, si vera sunt, quae vir excellentissimae eruditionis disputavit ad Athen. L. V. 18. Namque alii, etiam auctor L. XII. 34., regnum eius citius ordiuntur, atque ab Olymp. LXXIX. anno tertio, uti Parium Marmor, repetunt. Quam controversiam nunc omitto, in sequentibus fortasse non neglecturus. Vide interea Lydiat. ad Chron. Marm. p. 6. WESS.

512. 9. Ἀμύνταν τὸν Φιλίππου] Philippum Perdiccae fratrem in parte quadam superioris Macedoniae regnasse non iniuria suspicatur Ill. Spanhem. Dissert. VI. de Praest. et Usu Num. p. 374. Cuius possessione cum deiectus a Perdicca esset, filium eius Amyntam Sitalces in regnum restituere adnixus est. Scio in fragmento Diodori, quod Syncellus Chronogr. p. 262. inseruit, Alexandrum perhiberi duos duntaxat reliquisse filios, Perdiccam et Amyntam, horumque posteriorem privatam egisse vitam. At contra venit Thucydides II. 95. disertis verbis Philippum Perdiccae fratrem adpellans: quicum si consentire Noster debet, Philippus et Perdiccae fratres uterini fuerunt, non germani. WESS.

513. 16. Ἐκκομίσαντες δὲ τὸν τε σῖτον] Erunt fortasse, qui εἰσκομίσαντες praeferent: ego non muto; perinde enim est, utrum adhibeatur. Thucyd. II. 78. de Plataeensibus, παῖδας μὲν καὶ γυναικας — πρότερον ἐκκεκομισμένοι ἦσαν εἰς τὰς Ἀθήνας. WESS.

513. 29. Θετταλοὶ καὶ Ἀχαιοὶ καὶ Μάγνητες] Vid. Thucyd. II. 101. WESS.

513. 34. Καὶ κινδυνεύσωσι ταῖς πατρίσι] Non ausus sum, etsi δυναστεύσωσι commodam daret sententiam, scriptis libris relictari. Κινδυνεύειν ταῖς πατρίσι adaeque probum est, et periculum exprimit, quod patriae amittendae adibant, si Thraces tanto cum exercitu ulterius tenderent. Sic L. XIX. 19. πολλοὺς ἀποβαλὼν καὶ τοῖς ἄλλοις κινδυνεύσας, διεσώθη μόγης. Et Polybius V. 76. Σελγῆς μὲν δὴ οὖν διὰ τὴν Λογοβύσιος ἀσέβειαν Τῆ ΠΑΤΡΙΔΙ ΚΙΝΔΥΝΕΥΣΑΝΤΕΣ — τὴν τε πατρίδα διετήρουν etc. WESS.

513. 38. Ἐπιγαμίαν ἐποίησατο ] Non est, cur ab hac scriptura discedatur. Infr. L. XIV. 44. καὶ παρακαλῶν ἐπιγαμίαν ποιήσασθαι. Sauthae autem Sparadoci, qui Sitalcis frater, filio Stratonice, Perdiceae soror, fuit collocata, iisque conditionibus bellum positum apud Thucydid. II. 101. WESS.

513. 50. Ἐὐκλείδου ] Fieri potest, ut levi vitio Archontis huius nomen sit deformatum. Ἐπ' ἀρχοντος Ἀθήνησιν Ἐὐκλέους τοῦ Μόλωνος, τοῦ μετὰ Διότιμον, scribit Aristoteles Meteorol. L. I. 6. stellam crinitam esse visam, sicuti bene correxit Io. Meursius de Archont. III. 4. Philosophum sequuntur interpretes Alexander Aphrodiseus, Olympiodorus et Io. Grammaticus. Accedit Schol. ineditum in Aeschin. περὶ Πισαραπο. et Suidas in Σαμίων ὁ δῆμος. Nam quod ibi nunc editum legitur, τοὺς δὲ Βαβυλωνίους ἐδίδαξε διὰ Καλλιστράτου Ἀριστοφάνης ἔτεσι πρὸ τοῦ Ἐὐκλείδου καὶ ἐπὶ Ἐὐκλέους, id verissime correxit Ampl. Bouhier. ἔτεσι πρὸ τοῦ Ἐὐκλείδου καὶ ἐπὶ Ἐὐκλέους, annis xxv ante Euclidem Archonte Euclie, Dissert. de Prisc. Graec. et Lat. Liter. p. 573. Tot enim anni ab hoc Archonte ad Euclidem, qui anno Olymp. xciv. secundo fuit, abierunt. WESS.

513. 52. Μάρκον Μάνιον etc.] Repone Μάρκιον, et Σουλπίκιον Πρωιτέστατον. Item Σέρβιον Κορηλίον Κόσσον, pro Σερουίλιον Κορν. Κένσον. Sigonius anni superioris Coss. refectos esse annotat. RHOD. Corrigeni Rhodom. adstipulor, quaedam ex Mss. vestigiis refingens. Diodorus eos heic scriptores secutus est, qui tribunos militum hoc anno fuisse tradiderunt, de quibus Tubero et Macer in Livii L. IV. 23. WESS. V. Pighius p. 177.

513. 54. Χαλκιδέων μὲν ὄντες ἄποικοι ] Vide L. XIV. 14. WESS.

514. 65. Ὡστε μισθὸν λαμβάνειν — μινᾶς ἑξατὸν ] Eadem Suidas in Γοργίᾳς, insuper professus Periclis in dicendi arte fuisse praeceptorem: idem Philostratus de Vit. Soph. I. 9. p. 493. censuit. Neutrius tamen sententia veritati respondebit, nisi Gorgiam prius Athenas fuisse profectum agnoveris, quam legationem hanc obiret; quod cur negetur, caussam non video. Dubitat tamen doctissimus Olearius ad Philostrati locum. WESS.

514. 71. Ἀντιθέτοις καὶ ἰσοκάλτοις ] Vide Langbaen. ad Dionys. Longinum de Sublimi Dict. p. 17. et Ludovici Cresollii Theatr. Rhet. III. 24. Cicero explicabit Orat. c. 52. Nam paria paribus adiuncta, et similiter definita, itemque contrariis relata contraria, quae sua sponte, etiamsi id non agas, cadunt plerumque numerose, Gorgias primus invenit, sed his usus est intemperantius. WESS.

514. 75. Καὶ φαίνεται καταγέλαστον πλεονάζεις etc.] Avidius huius fuit generis, saepeque festivitatis illis abusus est insolentius Gorgias. Quare Dionysius Halicarnas. T. II. p. 147. τὰς παριστώσεις, αἰτ, λέγω καὶ παριστομισίας καὶ ἀντιθέσεις, ἐν

αἷς ἐπλεόνασε Γοργίας ὁ Λεοντῖνος. Discipuli, ut fit, plus sibi indulserunt, et quae lumina orationis videri poterant, nimio et intemperanti usu adeo corruerunt, ut veterem dicendi maiestatem paene exstinguerent. Audi Dionysium eundem p. 165. τὰ γὰρ ἀντίθετά τε καὶ πάρισα καὶ τὰ παραπλήσια τούτοις, οὔτε μετριάζοντα οὔτε καιροῦ γινόμενα κατασχέει τὴν μεγαλοπρέπειαν αὐτῆς. Hinc de Isocrate, Lysiae discipulo, qui aetatem in his elegantiss, sic enim censebat, consumpsit, Plut. de Glor. Athen. p. 350. D. satis festive: ἀλλ' ἀντίθετα καὶ πάρισα καὶ ὁμοιόπρωτα κολλῶν καὶ συντιθεῖς, μονοροῦν κολαπτήρσι καὶ ξυστήρσι τὰς περιόδους ἀπολεαίνων καὶ ὀρθμίζων, ἐγρήρασε. Hinc et Dionysio T. II. p. 175. τὰ μειρωκίωδη πάρισα καὶ τὰ ψυχρὰ ἀντίθετα. quae quia Gorgiae debentur omnia, ψυχρὸν τι εἶπεῖν καὶ Γοργιαῖον pro eodem posuit Synesius Epist. LXXXII. p. 229. WESS.

514. 77. Οὗτος μὲν θανμασθεῖς ἐν ταῖς Ἀθήναις] Dies illos, quibus audiendum se populo praebuit, festos, orationes ipsas lampadas vocarunt, si fides Troilo Sophistae in Proleg. Rhetor. Ms. apud Langbaen. ad Longin. p. 17. τὰς ἡμέρας ἐκείνας, ἐν αἷς ἐπεδέξυτο, ἑορτὰς ἐκάλον. τοὺς δὲ λόγους αὐτῶν λαμπάδας. Mihi, etsi varium et mutabile Atticum vulgus fuit, cum eius tempestatis moribus res bene convenire non videtur. WESS.

514. 80. Πάλαι μὲν ἦσαν ἐπιθυμηταὶ τῆς Σικελίας] Id verum videri cognosces ex Thucydidis L. I. 44. et Plut. Alcib. p. 199. D. WESS.

514. 97. Πλείω τῶν μυρίων ταλάντων] Vide supra c. 38. WESS.

514. I. Ἠλιζὸν καταπολεμήσειν] Nihil muto. Credo Vat. et Reg. I. καταπονήσειν aut καταπρονομήσειν voluisse; quorum prius ferri utenque poterat, non alterum: est enim προνομήειν, ἐσπάζειν, κατασφύειν, ἀζημιώτεειν, Hesychio explicante, minusque huic loco accommodatum; taceo de vocis compositione rariore. Vide Spanhem. in Iosephi L. III. Bel. Iud. 9. 4. WESS.

515. 5. Ἀζήτητα καὶ Χαροῖαν] In hoc ultimo nomine erratum est: saepissime id accidit in propriis nominibus locorum, urbium aut virorum. Apud Thucydidem legitur L. III. 86. καὶ Ἀζήτητα τὸν Ἠελανώπον, στρατηγὸν αὐτῶν, καὶ Χαροιάδην, τὸν Ἰεργίλιτον. Ergo legendum hoc loco Ἀζήτητα καὶ Χαροιάδην. Ρ. Μ. Μ. Ἀζήτητα καὶ Χαροιάδην] Instauravi scriptis e libris Charoaeidae nomen, quod diu ante Palmerium castigandum monuerat ad Orosium L. II. 14. Franc. Fabricius. Id adtexo, Thucydidem ducibus his naves duntaxat xx dedisse L. III. 86., praeterea Demetrium in Schol. ad Comici Vesp. v. 240. asseverare, Λαχέτην στρατηγήσαι πρὸ τριῶν ἐτῶν εἰς Σικελίαν περιφθέρτα μετὰ τοῦν. quod falsum erit, nisi εἰς Σικελίαν idem sit atque in Sicilia. Sequenti enim anno, qui tertius ante Amyniam, quo Archonte Aristophanes Vespas suas docuit, exercitus imperium

Laches in Sicilia administravit. Alioqui ἐν Σικελίᾳ cum Palmerio rescribendum. WESS. MS. Coisliniani Χαριάδην, quo etiam Reg. I. Χαριάδην ducit, quum alibi reperitur tum in nobilissima inscriptione Attica, quam postremus edidit Rosius Inscr. p. 145.

515. 7. Καὶ τῶν Χαλκιδέων ἀποίκων] Doctissimus interp. et a Chalcidensibus colonis suis obscurissime: non enim ex illis adparet, quorum coloni Chalcidenses fuerint, Rheginorumne an Atheniensium. Utrum elegeris, a vero recedet. Rhegini Chalcidensium erant coloni, Strabone auctore L. VI. p. 395. et Nostro L. XIV. 40. Quare ad hos si verba referas, inducenda erit copula. Ego vero eam non moveo, tantum Codd. addicentibus vocem ὄντων eliminans. Namque id vult, a Rheginis et ceteris Chalcidensium colonis eas naves Lachetem et Charocadam impetrasse. Consentit Thucydides, qui τὰς Χαλκιδικὰς πόλεις hoc bello a Leontinis et Atheniensibus stetisse tradidit L. II. 86. WESS.

515. 12. Φρούριον ἐπολιόρησαν] Rhodomannus Locrensi-um castellum intellexit, quorum φρούριον a Lachete occupatum testis Thucydides est L. III. 115. Id tamen ut hic intelligas, sequentia vetabunt: docent clare Mylas indicari. Forte itaque olim fuit φρούριόν τι, aut Μυλαίων φρούριον, aut τὰς Μέλας τῶν Μεσσηνίων φρούριον, quae Ph. Cluverii suspicio est Sicil. Antiq. L. II. p. 302. Firmat coniecturam Thucydid. III. 90., id praeterea commonstrans, haec et quae succedunt, insecuto anno fuisse administrata. Mox Σικελοὶ loco Σικελιωτῶν sunt positi, cuiusmodi Messanenses, qui opem obsessis tulerunt. WESS.

515. 19. Ἐκρημάδων καὶ Σοφοκλῆς] Hos antevertit Pythodorus, citius in eas Italiae ac Siciliae oras delatus. Vide Schol. ad Aristoph. Vesp. γ. 240. et Thucydid. III. 115. IV. 2. WESS.

515. 22. Ἐκ τριήρων πεντήκοντα καὶ διακοσίων] Alios ac Thucydidem in his recensendis duces sibi adscivit: ex eo tantum navium numerum difficulter conficies. Vid. eius L. IV. 24. WESS.

515. 26. Μεταδόντες τῆς πολιτείας] Dederunt Syracusani Leontinis ius suae civitatis, sed postquam temporis aliquantum abierat, quo mutuis discordiis sese pessum dederant ipsi. Cognosces, si volupe fuerit, ex Thucydidem L. V. 4. Id ius cum deinceps sprevisset, patriae amore accensi, urbemque instaurassent, iterum a Dionysio in Syracusanae civitatis consortionem compelluntur infra L. XIV. 15. WESS.

515. 31. Ὅτι βοιωτῶν συνοικίσειν πάσας τὰς κατὰ τὴν Λέσβον etc.] Unde unde haec sumpsit, sive ex Thucydidem, sive ex alio, cum veritate non congruunt. Neque enim crimini Atheniensibus Lesbii dabant, quod insulae eius civitates Mitylenen transferre decrevisset. Contra accidit. Mitylenaci Lesbios omnes in ius suae civitatis compellere adnixi sunt. Thucydidem audiamus L. III. 2. καὶ αὐτῶν Μιτυληναίων ἰδίᾳ ἄνδρες κατὰ σιάσιν πρόξενοι Ἀθηναίων μηνυταὶ γίνονται τοῖς Ἀθηναίοις ὅτι ξυνοικί-

ζουσί τε τὴν Λέσβον ἐς τὴν Μιτυλήνην βία etc. Id aegrius cum ferrent Athenienses, legatos misere, qui οὐκ ἔπειθον τοὺς Μιτυληναίους τὴν τε ξυνοίκισιν καὶ τὴν παρασκευὴν διαλύειν, sicuti ibidem adiungitur. Ergone Thueydidis verba, haud profecto obscura, secus atque oportuerat, accepit ipse, aut ante eum alius? Id fieri potuisse, non negavero. Homines fuerunt, et quod omnibus accidit, illis usu venire potuit. Quid si tamen vitium his inhaereat, quo loci sententia sit conturbata? Scribe enim mecum ὅτι βουλομένων — κατὰ Λέσβον πόλεις εἰς τὴν Μιτυληναίων πόλιν, διεκώλυσαν, et turbas has conpositas animadvertes. Namque Lesbii Atheniensibus vitio vertebant, quod, cum ipsi Mitylenas connigrare constituissent, id illi impedire fuissent conati. Atque hoc fortasse bene procedet. Aliud est de tempore inchoati belli, quod ab anno primo Olymp. LXXXVIII. removeri non posse, ex Thueydidis III. 8. liquidissimum evadit. WESS.

516. 43. Κλεινπιπίδην] Κλειππίδην Thueydides adpellat III. 3., uter rectius, non decerno. WESS.

516. 51. Πόχης ὁ Ἐπικλήρου] Ὁ Ἐπικούρου in eiusdem L. III. 18., qui sive Epicuri, seu Epieleri F., a Schol. Comici ad Equit. v. 831. Χόρης, et in Plutarchi Nic. p. 526. D. Λόρης vocatur, melius in Vit. Aristid. p. 335.; sed haec occupavit Cael. Barbeyracius Histor. Foed. P. I. p. 130. WESS.

516. 56. Τριήρεις μὲν τετραρακονταπέντε] XLII Thueyd. III. 26., ubi et de agri Attici populatione. WESS.

516. 64. Βουλευομένων ὡς χορὴ προσεν.] Addit Scaliger ὡς χορὴ προσηνῶς προσεν. quod nimium arbitror. Ego praeferrem, si quid mutandum, πῶς χορῆ. WESS. in Add.

516. 65. Κλέων ὁ δημαγωγός, ὠμὸς ὢν τὸν τρόπον] Hominem ex virtutibus ornavit Aristophanes in Equitib., cuius fabulae v. 770. 831. inspicere, quaeque ibi Critici veteres et ad Luciani Timon. c. 30. adscripserunt. WESS.

516. 67. Μιτυληναίους — ἤβηδὸν ἅπαντας ἀποκτεῖναι etc.] Ipsa plebisciti verba sunt, quae saepe respiciunt scriptores. Defungar uno Libanio T. II. p. 693. B. καὶ πρὸς τοσοῦτον ἦλθεν ὀργῆς ὁ πρῶτατος τῶν Ἀθηναίων δῆμος, ὥστε ψήγισμα ἐνέκρησε τὴν πόλιν ἤβηδὸν ἀνελεῖν, καὶ τοῦτο φέρουσα τριήρης ἐπλεῖ. ἐκκλησία δευτέρα καὶ Διοδώτου λόγος ἐπιεικέστερος, καὶ ψήγισμα ἐλύθη ψηγίσματι. Sic scripsit et distinxit, quod non animadversum fraudi viro docto fuit. Nam Diodotus, cum res iterum ad populum esset relata, persuasit, ut inmane id decretum rescinderetur, apud Thueyd. III. 42. De loquendi genere ἤβηδὸν ἀποκτεῖναι dictum saepe est. Vid. not. in L. III. 54. WESS.

516. 78. Πλὴν τῆς Μηθυμναίων χώρας] Vide Thueyd. III. 55. WESS.

516. 83. Χρονιζούσης τῆς πολιουρκίας] Tracta fuit in alterum annum. Legitur nunc quidem in Demosth. Orat. in Neaer.



p. 741. ἐπολιόρουν αὐτοὺς διπλῶ τείχει περιτειχίσαντες δέκα ἔτη. Sed corruptissime. Scriptum fuisse δύο ἔτη vidit Cl. Ioseph. Wasse in Thucyd. III. 52. et ante eum Palmerius Exercitat. p. 648. WESS.

516. 87. Ἀποβεβλήκεισαν] Huius formae conpluscule conduximus ad L. XI. 26. WESS.

516. 91. Καὶ διεκπεσεῖν εἰς τὰς Ἀθήνας] Sic L. IV. 54. καὶ διεκπεσεῖν εἰς Θήβας. Et L. XVII. 34. οἱ δὲ πλεῖστοι εἰς τὰ πεδία διεκπεσόντες. Plene Pausan. VII. 16. p. 561. τότε τῷ Καλλιστοράτῳ παρέσχε τόλμα διεκπέσαι διὰ τῶν πολεμίων. Rarius hoc Iosephi L. VII. Bel. I. 6. 4. οἱ μὲν οὖν ἀνδρειότατοι τῶν ἐξιόντων ἐφθασαν διεκπέσασθαι, modo id dederit ipse. Dubito enim. Namque et hoc usu, quod recordor, verbum obvium non est, et scripti Codd. διεκπαίεσθαι clare suppeditant. Id autem cur pro reicculo censeretur, caussam non exputo. Iosephus ipse post pauca: ὅπως τοῖς διεκπαίεσθαι τολμῶσι τῶν Ἰουδαίων ἄπορος ἢ φρυγὴ γίνηται. L. Kuster. confer in Aristoph. Plut. v. 805. WESS.

517. 93. Αὐτοὶ δ' ἐτοιμασάμενοι — αὐτοὶ etc.] Posterior sine sententiae intertimento deesse potuerat. Sed placet Diodoro haec dictionis subinde redundantia. Vide not. in L. I. 97. WESS.

517. 97. Ἐπὶ τὸ τεῖχος] Ἐντὸς τοῦ τεύχους scilicet. Sic Scaliger et Is. Vossius. WESS. in Add.

517. 2. Οἱ δὲ Πλαταιεῖς καταπλαγέντες etc.] Diodorus haec nimis arte praecedentibus connectit. Inter elapsos ex obsessa urbe et deditionem reliquorum aliquot intercesserunt menses. Thucydides III. 20. et 52. aperte significat. WESS.

517. 11. Καὶ κατασκήψαντες ἐμίσθωσαν etc.] Videatur Thucyd. III. 68., quaeque illi adscripsit Cel. Duker. de Plataeis iterum instauratis iterumque eversis, atque inferius etiam L. XV. 46. WESS.

517. 16. Στάσις καὶ φιλοτιμία] Concors Codd. scriptorum consensus hoc reposebat; postulabat praeterea mos auctoris, quo φιλοτιμία quaevis est contentio. Sic L. IV. 23. γενομένης δὲ τῆς φιλοτιμίας μετὰ προστίμων, cum rixa, constituta mulcta, esset nata. Et L. XII. 32. μετὰ πολλῆς φιλοτιμίας κατεσκευάζον τριήρεις. Tum post pauca de Coreyraeis, καὶ ταῖς φιλοτιμίαις οὐκ ἀπολιμπανομένων. Quem in modum Iosepho de Iud. Antiq. L. XVI. 8. 4. νεανικαὶ φιλοτιμίαι contentiones, quibus iuvenes in certamen committuntur. Vide mox c. 61. WESS.

517. 22. Διηγνήθησαν ἀπὸ τῶν προξένων] Mallet ἐπὶ τῶν προξ., quod et Rhodomanno placuit, et διηγνήθησαν. Thucyd. III. 70. paullo aliter, ἐπὶ Κορινθίων ἀφεθέντες, τῷ μὲν λόγῳ ὀκτακοσίων ταλάντων τοῖς προξένοις διηγνημένοι, ἔργῳ δὲ, πεπεισμένοι Κορινθίοις Κέρκυραν προσποιῆσαι. Porro τηροῦντες τὴν τῶν ὠμολογημένων πίστιν sine praepositione melius

erit. WESS. Ὑπὸ τῶν προξένων Scaliger et Is. Vossius. IDEM in Add.

517. 31. Οἱ τοὶ δὲ φοβηθέντες τὴν τιμωρίαν etc.] Nimiam in his brevitatem secutus foedum seditionis exitum paene transiit: habet aliqua L. XV. 49. at quantum ea absunt ab ubertate Thucydidea L. III. 72. etc.? WESS.

517. 34. Ἐδθυδήμων] In Didascalia Aristophanis Acharnensium ἐπὶ Ἐδθυμένους ἄρχοντος, prave. Scribi debuerat ἐπὶ Ἐδθυδήμων, quo Archonte eam fabulam poëta docuit, sicuti egregie patefecit S. Petitus Miscell. L. I. 4. WESS.

517. 36. Πάρορον Φαλίσιον] Scribe Φόσιον καὶ Α. Σέρορον. Fostii cognomentum fuit *Flaccinator*. Ideo Φλακκίσιον a Diodoro forte scriptum fuit. RHOD. Errorem librariorum animadvertit Pigh. in Fast. ad ann. cccxx. Vide Livium L. IV. 25. WESS.

518. [41. Ἴππῆς τετρακοσίους etc.] Thucydides dissentit L. III. 87., quem si consulueris, luem haud prorsus cessasse superioribus annis perspicies. De causis recrudescens pestilentiae non male Diodorus, cui Hippocratem adiunge de Acr. Aq. et Loc. p. 287. WESS.

518. 64. Ἐρόπιον ἑαυτοὺς εἰς τὰ γρέατα] Sumtum ex Thucyd. II. 49. e quo et Lucretius:

*In fluvios partim gelidos ardentia morbo  
Membra dabant, nudum iacentes corpus in undas:  
Multi praecipites lymphis putealibus alte  
Inciderunt etc.*

quae elegantissima extremo Poëtae L. VI. legi poterunt. WESS.

518. 69. Τὴν νῆσον Ἀῆλον] Arbitror postremam vocem, cum ab optimis libris negligatur, librarii auctarium esse: Delum intelligi, sequentia ostendunt apertissime. Nec sede tamen deieci, quod eam tueri quodammodo posse videatur. WESS.

518. 73. Ἐς τὴν Πήρειαν] Ita plerumque insulae nomen scribere solent, Thucydides, Dionysius Halicarnassensis, Strabo, Aelianus, advocati ab Holsten. ad Stephan. in v. Adde elegantem Sopatri locum ex Comment. in Hermogenem, exscriptum in Is. Casaub. Animadv. Athen. X. 6. In Plutarchi Nic. p. 525. A. scribitur Πήρεια, sed contra manu exaratorum Codd. iudicium. WESS.

518. 76. Τὴν τῶν Ἀγλίων] Vide Thucyd. III. 104., atque excitatos ibi a viris doctissimis scriptores. Quod vero haec praecedat, ne cui parere, aut mori, aut sepeliri intra Delum liceat, similis superstitio in Aesculapii apud Epidaurios luco vetabat, Pausanias teste L. II. 27. WESS.

519. 88. Ποῦσαι δὲ νῆσον — Ἀταλάντην] Imo vero ante hos terrae tremores Atalante insula fuit, ut supra c. 44. significavit. Cum maxime aquarum illa inundatione fuit superfusa, quod Thucydidi III. 89. docenti, sicuti et Philostrato Heroic. XIX. 15.

p. 744. credimus. Errorem Diodori castigarunt Ill. Scaliger ad Eusebii Chron. n. MDXCI. et Is. Casaub. in Strabon. IX. p. 651. WESS.

519. 91. *Μετωνόμισαν Ἡράκλειαν*] Alias *Ἡράκλειαν τὴν ἐν Τραχινίᾳ* adpellat, ut c. 77. et XV. 57., neque aliter Strabo L. VIII. p. 587. et IX. p. 627. In Thucydide III. 92. *Ἡράκλεια ἢ ἐν Τραχινίαις*, ubi scripti libri *ἐν Τραχινίᾳ*, quod equidem praeferrem. Polemon vocat apud Athen. XI. p. 462. *Ἡράκλειαν τὴν ὑπὸ τὴν Οἶτην καὶ Τραχῖνα*, situm bene circumscribens. Aberat enim a veteri Trachine sex ferme stadiorum intervallo, teste Strabone IX. p. 655. WESS.

519. 97. *Πρόγονον ἑαυτῶν ἐγκατοικηέναι*] Vide L. IV. 57. WESS.

519. 4. *Τὴν Τραχῖνα μυριάνδρον ποιήσαντες*] Dixi libro superiore c. 49. De numero colonorum adsentitur Scymnus Chius,

*Ἦν οἱ Λάκωνες μυρίους οἰκήτορας*

*Πέμψαντες εἰς Τραχῖνα, πρότερον ὤκισαν.*

Quos quidem versus cum Ill. Scaliger produxisset ad Eusebii Chron. num. MDXCVI. IX colonorum millia a Diodoro recenseri admonet, nimium festinans puto. WESS.

519. 7. *Στρατοκλέους*] Memoriam huius Archontis adhibuit Strabo, quae non animadversa viros doctissimos exereuit. Verba Geographi L. VIII. p. 551. de Pylo haec sunt: *προσεκτίσαντο δ' αὐτὴν Ἀθηναῖοι τὸ δεύτερον ἐπὶ Σικελίαν πλέοντες μετ' Εὐρυμέδοντος καὶ Στρατοκλέους, ἐπιτείχισμα τοῖς Λακεδαιμονίοις.* Scribit, et vere quidem, Is. Casaubonus, *στρατηγὸς* fuisse Eury-medonta et Demosthenem, nec Stratoelis ullam esse mentionem. Addit his ex Thucydide tertium Sophoclem Iac. Palmerius, decernitque Strabonem dedisse μετ' Εὐρυμέδοντος καὶ Σοφοκλέους, haud sane contra rei gestae veritatem. Vide vero, sitne multo hoc mollius et lenius μετ' Εὐρυμέδοντος ἐπὶ Στρατοκλέους i. e. *Archonte Stratoele*, ut ἐπὶ *Ἀνσιμάχου* in Diogene III. 3. et ἐπὶ *Χαρίων* apud Pausaniam L. I. 23. p. 55. et ἐπὶ *Στρατοκλέους* de ipso hoc in Schol. Aristoph. Nub. v. 584. Pylum autem sub magistratu Stratoelis, quod Geographus asseverat, esse captam et munitam ab Atheniensibus, ea, quae mox sequentur, adfirmant clarissimum in modum. WESS.

519. 9. *Λεύκιος Φούριος*] Post hunc reliquos Tribunos Militum ita corrigas, *Λεύκιος Πινάριος, Σπόριος Ποστούμιος.* Tot enim Fasti exhibent. RHOD.

*Ibid. Μέτελλος*] Errore amanuensium natum est ex *Μεδονλλῖνος*, quo Furius cognomine fuit. *Σπορίον* praenomen reddendum esse Postumio Rhodomanus recte observavit. Livium adi IV. 25. WESS.

519. 11. *Προχειρισάμενοι στρατηγὸν μετὰ νεῶν etc.*] Hiat oratio. Mallet additum fuisset *ἔστειλαν περὶ Πελοπόννησον*, ut in Thucydide III. 91. WESS.

519. 23. Κατοικούντων ἐν αὐτῇ τότε Μεσσηνίων] Conf. L. XI. 84. WESS.

519. 25. Ἐπὶ τὴν ὀνομαζομένην Μολυκρίαν] In Strabone modo Μολύκρεια, modo Μολυκρία, L. X. p. 705 et 706. Plutarchus T. II. p. 162. D. Μολυκρίαν vocat, et Euphorion apud Stephan. in v. Itaque elige, utrum malis. De situ urbis Jac. Palmerius Graec. Antiq. L. IV. 19. WESS.

519. 29. Τὸν Ναύπαιτον] Τὴν Ναύπαιτον Thucydides II. 91. saepeque alias, Strabo L. IX. p. 653. A. Pausanias IV. 25. et rectius, ut opinor. WESS. Τὴν Ναύπαιτον refingebat Ursinus, haud male. IDEM in Add.

519. 31. Ἀμπρακιώταις] Ἀμβρ. Coisl. fere semper. Vide Ios. Wasse ad Thucyd. III. 105. et Palmer. II. Graec. Ant. c. 7. WESS.

520. 35. Ὁ μὲν οὖν Δημοσθένης ᾤετο etc.] Videndus est Thucydides III. 113. 114. WESS.

520. 45. Ἐν μεγάλῃ συμφορᾷ περιπεπωκότες] Prae-positionem merito delendam iudicat Rhodomannus: nunquam enim in hoc genere adhibetur. Namque et supra c. 56. de Plataeensibus, ἀδίως ταῖς μεγίσταις συμφοραῖς περιέπεσον. Et L. XIII. 21. ἄνδρας πλείους τῶν τετρακισμυρίων οὕτω μεγάλας συμφοραῖς περιπεσεῖσθαι; Tum L. XVII. 29. Δαρεῖος — καίπερ μεγάλη συμφορᾷ περιπεπωκώς. Reddendum est Basilio M. Epist. LI. στόμασι πρὸς ψευδολογίαν ἐκόλοισ περιπεσών. Sic enim oportuit: nam παραπεσών non satis ibi est commodum, atque a scriptis libris improbatur. WESS.

520. 51. Τῆς δὲ Μεσσηνίας ἀπέχον σταδίους τετρακοσίους] De Pylo loquitur, quam sitam ait in Messenia, et ab illa distare stadiis quadringentis. Absurdissima sententia! Hanc historiam habet a Thucydide (L. IV. 3.) qui accurate eam scripsit. Ex eo lege τῆς δὲ Σπάρτης ἀπέχον σταδίους τετρακοσίους. PALM. Error in his absurdus est. Palmerii opinionem firmat et Strabo L. VIII. p. 551. B. WESS. Ursinus malebat τῆς δὲ Μεσσίης, levi mutatione, quae et blandiri propterea posset, modo liqueret, hoc tempore urbem fuisse Messenen: id vero secus habere, notum est ex Strabone, Pausania atque aliis. Vide hunc L. IV. 1. Itaque Palmerii opinio potior est. IDEM in Add.

520. 53. Ἐν εἰσοῖν ἡμέραις ἐτείχισε] Ἐν ἡμέραις ἕξ Thucydides L. IV. 5., quod verius arbitror perpensa Atheniensium summa virium contentione, qua in Pylo munienda usi sunt. WESS.

520. 62. Θρασυνμήδους] Nihil in vocis scriptura discordant Codd. scripti. Tamen a Thucydide Θρασυνμηλίδας adpellatur L. IV. 11. WESS.

520. 65. Ναῦς ἀντιπρώρους ἔστησαν τῷ στόματι τοῦ λιμένος] Sic L. XIII. 78. καὶ (τριήρεις) κατὰ τὸν διέκπλον ἀντιπρώρους κατέστησε. Et libro eodem c. 50. αἱ τριήρεις ἐπέστρεψαν ἀντίπρωροι τοῖς πολέμοις. Atque ita de navibus passim,

quae proris in hostem obversis stant aut procedunt. Polybius L. I. 50. παρ' αὐτὴν τὴν γῆν ταχέως ἐποίουν ἀντιπρόωρον τοῖς πολεμίοις. tum post pauca, ἐπέστησε τὴν ἑαυτοῦ ναῦν ἀντιπρόωρον τοῖς πολεμίοις. Recte proin Cel. Duker. in Thucydide L. IV. 8. ναῦς ἀντιπρόωρος haud adspernatur. WESS.

520. 70. Παρατεταμένην δ' ἐπὶ μίζος] Vide Strabonem L. VIII. p. 551. A. et Thucydidem inprimis L. IV. 8. WESS.

520. 75. Διημερεύοντες δὲ ταῖς τεichoμαχίαις] Addere praepositionem adsuevit, τότε μὲν ἐν τῷ κινδύνῳ διημερεύοντες L. XVI. 46. Nec semper tamen, sicuti ex L. XVIII. 34. perspicies. WESS.

521. 89. Προσαγόντων] De loquendi genere ad L. XI. 60. WESS.

521. 1. Ἡ μὲν τριήρης ἐπώκειεν] Vide not. in L. I. 31. WESS.

521. 2. Ἐπὶ τὴν τῆς νεῶς ἐπιβάθραν] Ἀποβάθραν Thucydides IV. 12. cum nota Duker. Sed haec voces permiscentur saepe, sicuti in Luciani D. Mort. X. 1. Scalas designat, quibus in navim escendebant. Translate Philo Iud. in Flacc. p. 993. A. νεῶσις ὀνόμασιν ἀδυνατῶν ἐπιβάθρα χρῆσθαι πρὸς δῆλωσιν. Et de Leg. Special. p. 805. B. ἐπιβάθρα χρῶμενους ἄπασιν ὧν γέρεσις ἐστι. Alia P. Leopardus Emend. XIV. 10. et Ezech. Spanhem. ad Callim. H. in Dél. v. 22. WESS.

521. 8. Ὁ μὲν βραχίων προέπεσεν ἐκ τῆς νεῶς etc.] Falsa est haec narratio, quam ex Thucydide corrigere debemus, et proculdubio vox βραχίων emendatione eget: nam ex tota Brasidae historia, quam accurate exequitur Thucydides, patet eum non amisisse brachium in ea pugna, de qua hic Diodorus. Forte scripserat βραχύ τι, vel ἐν βραχεῖ, vel quid tale, eo sensu, parum abfuit, quin e nave caderet, et proculdubio hanc historiam a Thucydide accepit Diodorus verbis paululum immutatis. Dixit Thucydides L. IV. 12. ἡ ἀσπίς περιέδότη ἐῖς τὴν θάλασσαν, καὶ ἔξενεχθείσης αὐτῆς ἐῖς τὴν γῆν οἱ Ἀθηναῖοι ἀνελόμενοι, clypeus in mare effluxit, et in terram delatum Athenienses abstulerunt. Diodorus vero sic de eodem negotio: ἡ δὲ ἀσπίς περιέδου-εῖσα καὶ πεσοῦσα ἐῖς τὴν θάλασσαν ἐποχείριστος ἐγένετο τοῖς πολεμίοις, clypeus elapsus cum in mare cecidisset, venit in manus hostium. Nihil similis. Unde colligitur vocem βραχίων mendosam esse. Nam si brachium amisisset Brasidas, id non tacuisset Thucydides. Quae addit Diodorus de numero caesorum a Brasida, bella sunt, non vera: nam quomodo vetitus in terram descendere ob tela ingruentia id praestare potuisset, qui cominus cum hoste non potuit pugnare, in sua navi manens, ubi et λειπομνηχίας cecidit? PALM. Auctor si diceret, Brasidam brachium amisisse, viro doctissimo obloqui nefas putarem. Atqui id ille nusquam. Tantum significat, Brasidam, viribus ob vulnera profluentemque

sanguinem defectum, animo dum linquitur, ita fuisse lapsum, ut brachio e navi pendente clypeus excideret in mare. Id fieri potuisse, res admonet ipsa, locusque, e quo pugnabat, et in quem praeceps corruit. Stabat ἐν τῇ ἐπιβάθρῳ, decidit εἰς τὴν παρεξ-ειρεσίαν. utrumque lateri navis proximum fuisse, ignorat nemo. WESS.

521. 15. Θανάτῳ κολάζεσθαι] Plutarchum in Pelop. p. 278. B. vide. Romanis moribus miles, qui in bello arma amisit, vel alienavit, capite punitur: humane, militiam mutat, teste Modestino L. III. §. 13. D. de Re Milit. Athenis Atticis inurebatur infamia, si non fallit Petitus LL. Attic. L. VIII. Tit. 3. p. 557. Sed virum Illustr. Ezéch. Spanhem. ad Aristophan. Nub. v. 352. adi potius. WESS.

521. 21. Ἀθηναῖοι μὲν γὰρ ἐκ τῆς Λακων. etc.] Aemulatur manifesto Thucydidem L. IV. 13. Mox doctissimus Rhodomannus secutus coniecturam suam vertit, sua exclusi terra, quasi esset οὐκ ἔχοντες. haud ille quidem inconcinne, citra necessitatem tamen. WESS. Rhodom. sic: restituere οὐκ ante ἔχοντες.

522. 32. Οὐ συγκατατιθεμένων δ' αὐτῶν] Confer Thucyd. IV. 21. WESS.

522. 41. Ἐκατὸν εἴκοσι] Consentit Thucydides IV. 38., id addens, octo defuisse quo minus trecentorum numerus rotundaretur. Sed horum rationem non habuit Noster, ut neque Strabo L. VIII. p. 551., nec Schol. Aristoph. Equit. v. 1050. WESS.

522. 43. Ὑπὸ Κλέωνος τοῦ δημαγωγοῦ στρατ.] In Niciae, cum is sese classis imperio abdicasset, locum suffectus apud Plutarchum in Nic. p. 527. D., cui iunge Aristophanem in Equit. v. 391. cum Criticorum veterum scholio. WESS.

522. 56. Ἀρξας ἔτη τεσσαράκοντα] Decessisse hoc tempore Longimanum Artaxerxem ex Thucydide L. IV. 50. constat. In regni eius spatio nec hic neque L. XI. 69. ulla discordia: quod iusto contractius Noster fecit, illos secutus scriptores, quibus Themistoclem ad Xerxem in Asiam contendisse placebat. Hinc illius productius regni intervallum, huius brevius, etiam in Ptolemaei Canone, Eusebio et Syncello, qui si pro xli annis illi xlv totos inputassent, cum rerum gestarum ordine conspirassent melius. Tu si haec uberius conprobata desideres, inspicie accuratissimae diligentiae Comment. Cl. Hier. van Alphen in Daniel. ix. Parte III. c. 6. WESS.

522. 57. Ἐξέρξης ἐβασίλευσεν ἐνιαυτὸν] Vide inferius c. 71. WESS.

522. 58. Αἰχλῶν ἀποστάτων] Restituatur Αἰχῶν vel Αἰκούων. RHOD. Ad huius gentis vocabulum frequentissime in his libris offensum fuisse, dixi antea. Αἰχῶν verum erit aut Αἰκί-κλῶν, si Ph. Cluverium Ital. Ant. II. 16. audias. De bello Livius L. IV. 26. et seq. WESS.

523. 74. *Τὸν υἱὸν ὡς λειοπότη τὴν τάξιν ἀποκτεῖναι*] Diodori haec in parte quodammodo consentaneos esse Valer. Max. II. 7. 6. et A. Gellium N. A. L. XVII. 21. dudum monuit Pighius in Fast. ad ann. CCCXXII. Livius negat L. IV. 29., sed caussa allata, quam nec gravem nec veram evincit Cel. Iac. Perizonius Animadv. Histor. c. 8. p. 350. Modo auctorem τῆς ἀπὸ τοῦ πατρὸς scripsisse videri, non latuit Rhodomanno in not. Auctario. WESS.

523. 77. *Ἰσαρχος*] Iustum hoc Archontis nomen servant Schol. in Aristoph. Nub. v. 552. et Argum. eius Fabulae IV. Habet etiam Athenaeus, qui eo praetore inducias in annum inter Spartanos et Athenienses factas, tacentibus Thucydide et Diodoro, prodit L. V. 18. p. 218. WESS.

523. 78. *Τίτος Κοῖντιος* etc.] His Coss. Dictatorem A. Postumium cum Aequis id bellum gessisse, quod paullo ante Noster descripsit, Livius docet L. IV. 26. Alios ergo ille annales adhibuit. WESS.

523. 83. *Τριήρεις μὲν ἐξήκοντα, ὁπλίτας δὲ τρισχιλίους*] Thucydides IV. 42. *ἐς τὴν Κορινθίαν ἐστράτευσαν ναυσὶν ὀγδοήκοντα καὶ δισχιλίους ὁπλίτας* de Atheniensibus et Nicias duce ait: quam expeditionem cum Nicias, uti mox sequetur, hoc ipso tempore sit ingressus, aperta inter Diodorum et Thucydidem discordia est. Sed Noster, ut ex aucto navium numero videbis, sibi constat. Id prave, quod varias Niciae expeditiones in unum annum coniecit. Namque in insulam Melum suscepta est Olymp. LXXXVIII. anno tertio, et navibus quidem sexaginta, sicuti ex Thucydide III. 91. conficias, et clarissime omnium ex Athenaeo, ut mox dicam. In Corinthios duxit, Methonemque muniit, sequente eiusdem Olymp. LXXXVIII. anno apud Thucydid. IV. 42. et Plut. Nic. p. 527. A. Tetigit hanc Nostri inconsiderantiam Clariss. Duker. in Thucyd. L. V. 116. WESS.

523. 87. *Αὐτὴ γὰρ μόνη τῶν Κυκλάδων νήσων* etc.] Vide superius c. 42. Quatenus autem Melus Spartanorum fuerit colonia, declaratur a Conone Narrat. xxxvi., obsito quidem macula, sed levi, quamque eluit L. Holsten. ad Stephani *Μήλος*. WESS.

523. 94. *Ἦς ἐστρατήγηε Ἰππώνικος ὁ Καλλίου*] Tempus expeditionis huius signatur ab Athen. L. V. 18. *ὁ δ' Ἰππώνικος ἐπὶ μὲν Εὐθυδέμου ἄρχοντος στρατηγῶν παρατίεταται μετὰ Νικίου πρὸς Ταναγραίους καὶ τοὺς παραβοηθοῦντας Βοιωτῶν καὶ τῆς μάχης νενίκηκε*. Suscepta ergo fuit, quod modo diximus. ante hos duos annos, Olymp. LXXXVIII. 3. Hipponicus non multo post ad Delium pugnans occubuit, teste Andocide in Alcib. p. 30. Itaque generalius est, quod superioribus adstruit Athenaeus: *τέθνηκε δὲ πρὸ τῆς ἐπ' Ἀλκαίου διδασκαλίας τῶν Εὐπόλιδος Κολάκων*. Non enim id praelium ab hoc Olymp. LXXXIX. anno primo removeri potest. Falsum autem, quod de Hipponici huius vidua, quam Pericles duxerit, commentatur Palmer. ad Aristoph. Av. v.

284. Namque Pericles eam si uxorem sibi adsciverit, rediit haud dubie ex inferis. WESS.

523. 11. Τῶν δὲ Κορινθίων πλείους τῶν τριακοσίων] Hoc malui cum scriptis libris. Thucydides e Corinthiis ducentos ac duodecim, ex Atheniensibus paullo minus quinquaginta cecidisse memorat L. IV. 44. De Κομμυῶνος scriptura dictum ad L. IV. 59. WESS.

523. 15. Ἐν τῇ Μεθώρῃ] Strabonis L. VIII. p. 575. Μέθαρα, sicuti et Pausaniae II. 34. eadem est. Nostro praevit Thucydides IV. 47., in cuius exemplaribus Strabo haud aliter repererat. Vide not. ad Hieroclis Synecdem. p. 646. WESS.

523. 18. Ἐπὶ Κύθηρα ναῦς ἀπέστειλαν ἐξήκοντα] Male illi libri, qui ab hac scriptura discedunt. Res ex Thucydide L. IV. 53. aperta est. Insulae nomen attigimus antea L. V. 77. WESS.

524. 24. Καὶ Θουρίας] Confer L. XII. 44. et quae viri eruditi ad Thucydid. IV. 57. commentantur. WESS.

524. 32. Οἱ Μεγαρεῖς θλιβόμενοι] Aut deest verbum aliquod, fortasse etiam plura, inter Μεγαρεῖς et θλιβόμενοι, aut scripsit Diodorus ἐθλίβοντο. STEPH. Οἱ Μεγαρεῖς ἐθλίβοντο τῷ πολέμῳ] Sequor Cod. Venetum, cuius scriptura ne quid de defectu temere suspicemur, impedit. Accedit Thucydides IV. 66. WESS.

524. 45. Τοὺς βουλομένους τίθεσθαι τὰ ὅπλα μετὰ Ἄθ.] Simile eius commentum, qui Selybria occupata proclamavit, Σηλυβριανὸς Ἀθηναίοις ἐναντία ὅπλα μὴ τίθεσθαι in Plutarchi Alcib. p. 208. B. et Thebanorum, intercepta paene Plataea, denuntiantium τίθεσθαι παρ' αὐτοὺς τὰ ὅπλα, apud Thucyd. II. 2. Genus dicendi, quo hoc quidem loco armorum coniunctio exprimitur, variis adhibetur modis. Λέγεται καὶ ἐπὶ τοῦ ἀποτίθεσθαι τὰ ὅπλα καὶ ἐπὶ τοῦ παρατίθεσθαι καὶ ἐνδύεσθαι non vulgatus Schol. ait in Aeschinis Timarch. p. 5. Exempla conduxerunt viri eruditione praestantes P. Leopard. Em. XI. 20. et H. Valesius ad Harpocrat. p. 37. Addo ex Libanio T. II. p. 43. B. μᾶλλον μὲν οὖν ἢ καὶ πρόσθεν ἠγάπησεν ὑπὲρ πατρίδος ὥσπερ ὅπλα θέμενον τοὺς λόγους, qui orationibus pro patria tanquam armis depugnarat. Interpres, ut alias, et hic offendit. Infra L. XX. 31. θέσθαι τὰ ὅπλα est ἀποτίθεσθαι, deponere, de quo usu ad Thucydid. II. 2. dubitasse virum diligentissimum, est cur demirer. WESS.

524. 49. Τὰ μακρὰ τεῖχη καταλιπεῖν] Ab urbe ad Nisaeam pertinebant, exstructa olim ab Atheniensibus in Megarensium commodum. Καὶ τὰ μακρὰ τεῖχη ὠκοδόμησαν (Ἀθηναῖοι) Μεγαρεῦσι τὰ ἀπὸ τῆς πόλεως ἐς Νισαίαν Thucydid. II. 103. et Strabo L. IX. p. 600. Diogenes cum labentibus annis Megarenses videret hos muros instaurantes et altius educentes τὰ μακρὰ τεῖχη ἰσπάντας, acute pariter atque eleganter, ὃ μοχθηροί, εἶπε, μὴ τοῦ μεγέθους προνοεῖτε τῶν τειχῶν, ἀλλὰ τῶν ἐπ' αὐτῶν στησομένων apud Io. Stobensem Florileg. Tit. VII. p. 89. WESS.



524. 61. *Τούτους μὲν ἐξέβαλεν ἐκ τῆς Νισαίας*] Errat. Nisaeae possessione Athenienses deieci non sunt. Docet Thucydides IV. 73. et ipse infra L. XIII. 65. Novi doctissimum Palmerium suppetias Diodoro hac via venisse. *Ut fides historiae constet, et consentiat haec narratio cum Thucydide, legendum est ἐξέβαλεν εἰς τὴν Νισαίαν*, in Nisaeam recedere compulsi. *Nam ex Thucydide Brasidas pepulit Athenienses urbe Megaris et Nisaeam aufugere coëgit, quam pluribus annis tenuerunt contra Megarenses.* Sed excedit medicina modum. Tu utere, si lubet, et simile dictionis exemplum quaere. Namque ἐς δυσχωρίας ἐμβάλλει τοῖς Μακεδόνας Polyaei VII. 25. dissimile est, nec vim complectitur illam. Sed id coniecturam unice haud premit. WESS.

524. 65. *Σίον τῆς Μακεδοῦσας*] Vide L. XVII. 16. et Ioseph. Wasse in Thucyd. IV. 78. WESS.

525. 71. *Κοιτωνεῖν μετὰ τῆς τῶν Αὐκ. συμμοχίας*] Mallem τῆς μετὰ τῶν Αὐκεδαιμονίων scriptum esset. Neque enim solet, quantum quidem recorder, verbo κοιτωνεῖν eam praepositionem ita connectere. Consentit Rhodomannus in Addend., quae vocant, sed μετὰ delendum arbitratus. WESS.

525. 78. *Χιλίους*] Thucydides ἑπτακοσίους L. IV. 80., verum Noster sibi constat infra c. 76. WESS.

525. 84. *Προσέταξαν τοῖς κοπιόστοις ἀποκτεῖναι*] Quo teste id edoctus sit, non divino. Plutarchus quidem certe in Lyeurg. p. 57. A. neminem aut tum temporis aut postea rescivisse ait, quo illi modo perierint, μήτε παραζοῆμα μήτε ὕστερον ἔχειν τινα λέγειν, τῷ πρόπῳ διεφθάρησαν. Et ante eum Thucyd. IV. 80. WESS.

525. 97. *Ἐτεσι δυὸ πρὸς τοῖς τριάζοντα*] Conf. L. XI. 70. WESS.

525. 1. *Διαλιπόντες ἔτη δύο — Ἀπίωνος ἡγουμένου*] In his error est. Nam neque Apion coloniae deducendae princeps fuit, neque biennio post acceptam ad Drabescum cladem coloni pulsi fuerunt. Thucydidem, quem ferme in his sequitur, audi L. IV. 102. καὶ αὐθις ἐνὸς δέοντος τριακοστῆ ἔτει ἐλθόντες οἱ Ἀθηναῖοι ΑΓΝΩΝΟΣ τοῦ Νικίου οἰκιστοῦ ἐκπεμφθέντος Ἠδῶνας ἐξελάσαντες, ἔκτισαν τὸ χωρίον τοῦτο, ὅπερ πρότερον Ἐννεία ὀδοὶ ἐκαλεῖτο. Dux ergo coloniae Agnon, quem idem scriptor L. V. 11., Polyaei de Stratag. VI. 53. et Scholiastes Ms. in Aeschin. περὶ Παραπρ. praedicant. Ipsa colonia deducta est annis xxxix post priorem, signaturque tempus a Nostro L. XII. 32. Quare, nisi in pravum Belli Peloponnesiaci Codicem incidit, scribere defuerat, *διαλιπόντες ἔτη εἴκοσι καὶ ἑννεία — ἡγουμένου ΑΓΝΩΝΟΣ.* Posterius quidem certe levi peccato in ΑΙΗΩΝΟΣ vocabulum abire potuit. WESS.

525. 2. *Περικομητήτων δ' αὐτῆς πολλάκις γεγενημένης*] Tanto Amphipolis studio ab Atheniensibus atque aliis fuit petita,

ut mutuis de ea certaminibus saepe sit pugnatum. Id enim περιμάχητος. Unde Gorgo, quam multi proci ambiebant, διὰ πλοῦτον περιμάχητος καὶ πολυμνήστευτος in Plutarchi Amator. p. 766. D., βίος περιμάχητος, cui certatim multi student, Phil. Iud. apud Euseb. L. VIII. Praep. Evang. c. 11., et ἀπεριμάχητον δόγμα καὶ ἀνωφελές in eiusdem L. de Opif. Mund. p. 2. E., αἰοίδιμον ὄνομα καὶ περιμάχητον de divitiis in Luciani Contempl. c. 11., cum nota T. Hemsterhusii, τόπος περιμάχητος supra L. III. 10. Talem vero Amphipolim fuisse clades indicant, quibus ad eam Athenienses olim adflicti sunt, recensitae a Schol. Aeschin. περὶ Παράφρ., et ex parte quadam a me ad Itinerar. Hierosolym. p. 604., quod, si videtur, inspicie. WESS.

525. 4. Πλησίον τῆς γεφύρας] Vid. Thucydidem L. IV. 103. WESS.

525. 11. Σύμη καὶ Γαληψός] Lege Οἰσύμη καὶ Γαληψός. Nulla ibi Syme: at Oesyeme satis celebris et auctoribus saepe memorata. PALM. Vitium ex Thucydide L. IV. 107. manifestum est, neque fugit id diligentiam H. Valesii in Maussaci not. ad Harpocrat. p. 106. Fuit id urbis fatum, ut multimodis eius nomen corrumpere. Exempla dabit Maussacus in Harpocrat. Γαληψός et Οἰσύμη. WESS.

526. 12. Καὶ Μύρκινον Ἡδωνικὸν πολισιμάτιον] Plerisque scriptorum Μύρκινος hoc oppidum, Quaerit proinde Iac. Gronovius ad Stephan. in Voc. utrum Μύρκινος auctor scripserit? an vero quartus sit casus et referri debeat ad verbum προσηγάγετο? Posterius malim cum viro eruditissimo, nisi forte aliud genus huic vocabulo inposuerit Diodorus, quod paene putem. WESS.

526. 21. Εἰς τὴν καλουμένην Ἀκτὴν] Haec regio erat ad montem Atho, ἢ περὶ τὸν Ἄθω Ἀκτὴ, cuius meminit Demetrius in Stephani Ἀκτὴ, et omnium clarissime Thucydides L. IV. 109. WESS.

526. 23. Ἦσαν Ἀνδρίων ἄποικοι] De una Sane Thucydides L. IV. 109. id adfirmat: ceteras quinque, sex enim habet, sicuti et Herodotus L. VII. 22., a promiscuis barbarorum linguarum gentibus habitari. Mox ταῦτα pendet ex vocabulo, quod scribentis animo obversabatur. Nam πόλεις, quarum meminerat, aliud genus requirunt. WESS.

526. 34. Ἀσπαρσοτούμενοι τῇ τότε πολιτείᾳ] Uberius omnia haec Thucyd. IV. 76. exsequitur. WESS.

526. 44. Πανδημεῖ] Notam defectus addidit Steph. sed abesse non debet. Vid. Thucyd. IV. 90. WESS.

526. 47. Πλησίον τῆς Ὠρωπίας καὶ τῶν ὄρων τῆς Βοιωτίας] Legebatur τῶν ὄρων. At qui montes illi Boeotiae? quis Delium illis adstruxit? Habent in hac quidem vicinia collem, sed nullum montium tractum. Quare ab aliis neglectos hic aequo animo ferre non potui montes. Delium collocant omnes in Tanagraeorum

agro ipsisque adeo Boeotiae finibus Thucydid. IV. 76. Strabo L. IX. p. 618. A. Pausan. L. IX. 20. Praeclare Livius XXXV. 51. *Templum est Apollinis Delium, imminens mari: quinque millia passuum a Tanagra abest.* Alia viri docti ad Aelian. Var. Hist. L. III. 17. WESS.

526. 48. Παντόδας δὲ ὁ τῶν Βοιωτῶν ἔχων etc.] Viri nomen ex scriptis Codd., etsi non omnino verum, revocavi. ΠΑΝΤΟΔΑΣ propius abest a ΠΑΓΩΝΔΑΣ, quo hic Boeotarcha adpellabatur. Atque ita instaurandum id nominis esse, monuerunt Io. Meursius Lect. Attic. III. 23. et Ioseph. Wasse in Thucydid. IV. 91. viri doctissimi. WESS.

526. 55. Ἀγρω γὰρ καὶ συντόμως] Praeferrem συντόμως quas voces permisceri diximus alias. Σύντομος ὁδὸς est viae compendium, ut L. II. 13. et Io. Stobaei Serm. CXVI. p. 597. Quo si Athenienses properasse opinaris, acquiesce in vulgato. Mihi alterum, cui non dissimile Appiani συντόμως βαδίζειν in Mithrid. p. 410., blanditur. De Boeotorum copiis et Atheniensium turba Thucydides IV. 93. WESS.

527. 63. Ἡνίοχοι καὶ παραβάται καλούμενοι] Videtur libri Clarom. scriptor ea fuisse opinione, a qua non alienum se profitetur Eustath. in Homer. 557., ἡνίοχον et παραβάτην saepe nihil discrepasse. Sequor Porphyrium Quaest. Homer. princ. ὅπερ δὲ παρὰ τῷ Ποιητῇ τῶν μὲν ἐπὶ τοῖς ἄρμασιν, οἱ μαχόμενοι ΠΑΡΑΒΑΤΑΙ, οἱ δὲ τὰς ἡνίας ἔχοντες ΗΝΙΟΧΟΙ etc. Pugnat ergo παραβάτης, currum regebat ἡνίοχος. Id firmat Noster L. V. 29. cum de Gallis ex essedis dimicantibus, χρῶνται σπρωσίω, inquit, ἔχοντος τοῦ ἄρματος ἡνίοχον καὶ παραβάτην. Et L. XX. 42. ubi Ophellas ducit ἄρματα ἑκατὸν, ἡνίοχος δὲ καὶ παραβάτης πλείους τῶν τριακοσίων. Strabo L. XV. p. 1035. δύο δ' εἰσὶν ἐπὶ τῷ ἄρματι παραβάται, πρὸς τῷ ἡνίοχῳ. Sic enim lego ex scriptis libris. Ceterum παραβῆται, quod in editis conspiciebatur, mutavi: poëtarum est, et cum altero permiscetur, sicuti L. XX. 42. atque apud Apollon. Rhod. I. 754. WESS.

527. 79. Πρὸς τὴν θάλατταν διέτειναν] Dixi ad L. IV. 57. WESS.

527. 82. Οὐ πλείους τῶν πεντακοσίων] Cur hoc restituerim, Thucydides indicabit L. IV. 101. ἀπέθανον δὲ Βοιωτῶν μὲν ἐν τῇ μάχῃ ὀλίγω ἐλάσσους πεντακοσίων, Ἀθηναίων δὲ, ὀλίγω ἐλάσσους χιλίων. Atque haec est celebris ἐπὶ Ἀηλίῳ μάχῃ, qua Socratem strenue pugnasse et Xenophontem servasse, Platonem secuti plures prodidere, negante Athenaeo L. V. 15., cui recte tamen rescripsere viri doctissimi Is. Casaubon. Animadv. V. 15. et Leo Allatius ad Epist. I. Socratis. WESS.

527. 92. Τὴν τῶν Ἀηλίων πανήγυρον] Haud aliam, nisi quod a Bocotis celebraretur, hanc panegyrim fuisse censet Illustr. Spanhem. ad Callim. II. Del. v. 1. p. 318. atque illam, quam

Athenienses, Delo insula purgata, instaurasse Noster c. 58. antea tradiderat. Spanhemio adstipulatur Vir doctissimus, qui Exercit. de Inscript. Deliac. inseruit Tom. I. Volum. VII. Miscellan., insuper arbitratus p. 21. insulam Delum Atheniensium imperio cum maxime fuisse exemptam. Invitus ab utroque dissentio. Delus hoc tempore Atheniensibus parebat, quam rem, si dubites, docebit Thucydides L. V. 1. et Noster inferius c. 77.; neque adeo videntur Boeoti in insulam, etsi sacram, hostibus tamen parentem, misisse, qui choros ducerent atque hanc festivitatem obirent. Hoc amplius, a *Delia*, Apollinis templo, suae in regionis finibus posito, et defenso et reciperato, *Deliorum* eam sollemnitatem exorsi sunt. Itaque non in Delo insula, sed ad Delium haec panegyris concelebrata, diversaque et loco et origine *Δήλια* Atheniensium et Boeotorum sunt. WESS.

527. 3. [Ὡς δ' ἔτιοι γράφουσι, μῆνας δύο] Ctesias dat illi dies XLV Excerpt. Persic. c. 44., menses duos Euseb. in Chronic. WESS.

527. 5. [Σογδιανὸς ἤρξε μῆνας ἑπτὰ] Literam, quam praecedens vocabulum regis nomini abstulerat, addidi. Peius habitum eiusdem nomen in Pausan. L. VI. 5. p. 464. ubi de Dario Notho, ὃς ὀμοῦ τῷ Περσῶν ΔΗΜΩΙ ΙΣΟΓΑΙΟΝ καταπαύσας παῖδα Ἀρταξέρξου γνήσιον pro ὀμοῦ τῷ Περσῶν ΔΗΜΩΙ ΣΟΓΔΑΙΟΝ etc. At id librorum peccatum iam adverterat eruditissimum Palmer. Exercit. p. 401. *Sogdiano* regi, sive *Secyndiano*, Ctesias Excerpt. c. 47. menses VI, dies XX, Eusebius menses regni VII contribuit, ut Noster. WESS.

528. 7. [Ἀντίοχος ὁ Συρακούσιος] Xenophanis F., et scriptor πάντων ἀρχαῖος Dionysio Halic. Antiq. Rom. L. I. p. 10. Reliquit ingenii sui monumenta et Σικελιώτιδα συγγραφήν, qua de hic et apud Pausan. L. X. 11., et τὸ περὶ τῆς Ἰταλίας σύγγραμμα in Strabon. L. VI. p. 391. A., cuius principium et fragmenta quaedam servavit Dionysius. Vide Ger. Io. Vossium de Graec. Histor. L. IV., qui haec occupavit omnia. WESS.

528. 11. [Ἐπ' ἄρχοντος δ' Ἀθήνησιν Ἀμεινίου] Postulare hoc manu exarati Codd. videbantur, et Athenaeus L. V. 18. cum auctore Argum. IV Nubium Aristophanis et Schol. in Lucian. Tim. c. 30. Namque Ἀμεινίου titulus, qui se aliis adprobavit, ab hoc Archonte removetur in Schol. ad Comici Nebul. v. 31. WESS.

528. 12. [Γάϊον Παπίριον καὶ Λέξιον Ἰούλιον] Consuli *Iulio* suum nomen ut restituerem, inpelli a vet. interprete potui, qui suo in libro repererat: non item, ut Papirii praenomen innovarem: nam Reg. I. consulum nomina nullo consilio sed errore manifesto perverse collocavit. Livius Coss. L. *Papirium* et L. *Iulium* dabit L. IV. 30. WESS. Conf. Pighius p. 181.

528. 13. [Σικνώτιοι] Mendose pro Σκιωναῖοι, cives Scionis vel Sciones, urbis Thraciae. RHOD. Pro Σικνώτιοι lege meo periculo Σκιωναῖοι, ut fides historiae constet. Vide Thucy-

didem, qui haec fuse persequitur L. IV. 120. PALM. Σκιωνάοι] Veritati doctissimisque viris refragari nolui, praesertim cum vetustis in schedis sit discordia, et Σκιωνή saepe Σκιώνην de gradu deiecerit, ut mox in Coislin. et olim apud Polyacnum, cui tamen succurrit Is. Casaub., L. I. de Stratagem. c. 38. 4. WESS.

528. 25. Ἀριστείδην καὶ Σίμμιαρον] Thucydides alterum hunc praectorem Ἀρμόδορον vocitat L. IV. 75. nec aliter hic legi oportere contendit Cl. Joseph. Wasse. Mihi, ne dicam dolo, mutatio nimia videtur, et potnit Noster alios, quos sequeretur, duces habere. Uterè tamen, id si consultius putes. WESS.

528. 32. Εἰς Ἡράκλειον] Flumen non ipsam Heracleam alluebat, quae ad *Lycum* accubabat, Plinio L. V. c. ult. teste, seu potius ad *Acherontem* sive *Soonauteu*, de quo Apollon. Rhod. II. 748. et veteres Critici. Fuit ergo in agro Heracleensi, quod èt Memnon indicat. WESS.

528. 33. Κάχητα] Ortelius hunc locum attigit (Thes. Geogr. v. *Cachetus*), et vult legi Κάχητον: male. Thucydides L. IV. 75. cum Κάχητα vocat. Arrianus in Periplo Κάχητα. Sed Memnon, cui magis credendum, utpote Heracleotae et Bithyniae vicino, Κάλλητα nominat (Excerptor. c. 23.) per duplex λλ. Igitur nomen eius fluvii sit Κάλλης, et nunc *Chelit* dicitur Belonio in suis Observationibus. Sed haec omnia iam supra dicta sunt, nisi me fallit memoria. (Vid. Exercit. p. 51.) PALM.

528. 38. Σπονδάς ἐνιαυσίους ἐποιήσαντο] Vide Thucyd. IV. 117. 118. WESS.

528. 40. Τότε] Lego ποτε. STEPH.

528. 42. Φιλοτιμίας] Φιλοτιμίας V. Co. R. 1. non male. Vid. c. 57. WESS.

528. 47. Περὶ δὲ τῆς Σκιώνης ἡμφοισθήτουν] Quaestio erat, utrum ante inducias, an factis illis in Brasidae potestatem venisset. Hoc Athenienses, illud Brasidas adfirmabat, Thucydides L. IV. 122. WESS.

529. 58. Ἡβηδὸν ἀποσφάζειν] Sic malui. De Scionaeorum inhumana caede inferius c. 76. WESS.

529. 68. Στάσιν ὑπερδέξιον ἔχοντες] Μάχη ὑπερδέξιος quae ex superiore fit loco apud Pausan. L. IV. 29. p. 352., et paullo ante καὶ οἱ φρουροῦντες τὴν ἀγορόπολιν ἐπέκειντο εἰς ὑπερδέξιον, i. e. locis celsioribus. Unde ὑπερδέξιοι τῶν κατειλημμένων τὴν πέτραν βαρβάρων, qui barbaris ignaris in excellentem petrae partem escenderant Nostro L. XVII. 85. WESS.

529. 72. Ὁ Πήγυτερος] Legendum Ὁπίτερος. RHOD. Ὁπίτερος] Cupide hoc praenomen restitui. Scio *Hostum* Livio L. IV. 30. atque in Fragm. Capitolini Marmoris adpellari; idque Lucretio praenomen fuisse a Pighio in Fast. ad ann. cccxxiv contendi. Quin tamen id, quod revocavimus, in Fastis Diodorus invenerit, scripti Codd. ne addubitemus, efficiunt. Porro collegam Lucretii

*Fidenatem* alii omnes vocitant; et venit a *Φιδήγη* gentile *Φιδηνάτης* etiam apud Stephanum: illud itaque praestiterit. WESS.

529. 74. [Ὅτι λάθρα πρὸς Λακεδαιμονίους etc.] Rem habet Thucydides L. V. 1., sed eius caussam adferens, quod Delii polluti essent et sacrae insulae possessione indigni. Utraque vera fortasse fuit. WESS.

529. 78. [Ἀτραμύτιον] In Addend. Ἀδραμύτιον Rhodomannus, cui favet liber Coislin., sed digitum non verterim, utrum probes. Varia enim nominis olim fuit scriptura, quod praeter Stephan. eiusque interpretes ostenderunt viri docti ad Thucydid. V. 1. VIII. 108. WESS.

529. 80. [Ἐἰς τοὺς ἐπὶ Θοράκην] Conf. huius L. XII. 42. WESS.

529. 96. [Ἀπὸ τῆς Ἀμφιπόλεως σταδίοις ὡς τριάκοντα] Distabat stadiis ab urbe ea xxv, Thucydide L. IV. 102. indice. Recte proin Ἡϊὼν ἢ πρὸς Ἀμφιπόλει Demostheni Orat. in Aristocr. p. 435. WESS.

530. 6. [Πολλοὺς τῶν ἀξιολόγων ἀνδρῶν etc.] Haec non usque quaque conveniunt Thucydideis L. V. 11. quae vide. WESS.

530. 11. [Κλέωνος ἐν τῇ μάχῃ πεσόντος] Periisse Cleonem hoc anno rerum series apud Thucydidem et Schol. Ms. in Aeschin. περὶ Παραπορ. declarant liquidissime. Tamen Grammatici veteres dissenserunt vehementer. Namque Schol. Luciani Tim. c. 30. ἐτελεύτα (Κλέων) νικηθεὶς ὑπὸ Βρασίδου ἐπὶ ἄρχοντος Ἀμεινίου. Ad Aristoph. vero Nub. v. 549. 552. Critici Archonte *Isarcho* cecidisse adseverant ob Eupolidis Maricam, in qua, illo Archonte edita, poëta mortuo Cleoni insultarit. At his recte ibidem obviam venit Androtion, Archonte *Alcaeo* caesum Cleonem memorans. Neque docuit, quod illi sibi persuadebant, Eupolis *Μαρικᾶν* sub *Isarchi* praectura, sed serius et post primas quidem Aristophanis *Νεφέλας*, ut bene Eratosthenes et Callimachus. Vide H. Dodwelli Annal. Thucydid. p. 161. WESS.

530. 18. [Ἡ μήτηρ τοῦ Βρασίδου] *Argileonis*, cuius egregium et Spartaee honestum hoc dictum non praeteriit Plutarchus in Lacon. Apophthegm. p. 219. D. WESS.

530. 31. [Τὰς δὲ πόλεις ἀπολυθῆναι] Foederis formulam pete ex Thucydide L. V. 18. Ego vero vehementem in modum dubito de vera loci huius scriptura, autumoque fuisse olim *ΑΠΟΔΟΘΗΝΑΙ*, quod negligentia amanuensium abierit in *ΑΠΟΛΥΘΗΝΑΙ*, tantoque facilius, quoniam modo id fuerat usurpatum. Verbum hac in re tritum est Thucydidi in conditionibus foederis huius describendis, nec spernit Noster, sicuti brevi post videbis. WESS.

530. 33. [Ἐτη δέκα] *Ἀντοδεκαετῶν διεληθόντων καὶ ἡμερῶν ὀλίγων παρενεγκουσῶν* Thucydides V. 20., cui adiunge H. Dodwell. Annal. Thucydid. p. 164. WESS.

530. 35. Ἀριστῶνος] In Athenaeo L. V. 18. ἐπ' Ἀριστῶνος, et verius, Meursio iudice de Archont. L. III. 7. WESS.

530. 36. Τῆτον Κοῖγκτιον] Haec scriptura arguit etiam alibi pro Κοῖντος et Κοῖντιος, Κοῖγκτιος et Κοῖγκτιος a Diodoro positum fuisse: ut ita veram nos scriptionem seu genuinam orthographiam Romanae in hac voce literaturae vel ipse nos doceat; cum vulgo ubique fere scribatur pro *Quinctus*, *Quinctius* et similibus, *Quintus*, *Quintius*, contra naturam primitivi sui *Quinq̄ue*. Κηοδ. Τ. Κοῖντιον] Rhodomanni observatio specie sua blanditur, neque ego in Latinis temere refragabor. De Graecis dubito. Polybius quidem certe Κοῖντον et Κοῖντιον probat, nec secuti aliud sunt Dionysius, Iosephus, Plutarchus, vetustique lapides in Gruteri Thes.: Dio Cassius Κῦντον et Κῦντιον maluit, quod et in Marmore Thes. eiusdem p. cccxxx. Eusebius Κύντον et Κύντιον. Noster autem Κοῖντον et Κοῖντιον cum semper alias scribat, παραδιόρθωσιν exscriptorum nihil moror. WESS.

530. 42. Συνέθετο συμμαχίαν] Nicias, ut haec societas coiret, princeps auctor Athenis fuit, Plutarcho teste Nic. p. 529. C. Tabulas firmatae amicitiae dabit Thucydides L. V. 23. WESS.

531. 60. Πολλῶν δὲ πόλεων ὑπακουουσῶν πρὸς τ. κ. ἐλευθερίαν] De militibus, qui vocati respondent et nomina dant L. XVI. 29. πολλῶν ὑπακούοντων πρὸς τὴν στρατείαν, deque provocatis, quando in arenam descendunt, ὅταν δὲ τις ὑπακούσῃ πρὸς τὴν μάχην L. V. 29. Vide vero tractum hunc orationis, πολλῶν δὲ πόλεων — πολλαὶ πόλεις συνίσταντο etc. et agnosce scriptoris consuetudinem, eiusmodi ubertate et quadam quasi redundantia delectati. Iterum c. 77. ὁ δῆμος τῶν Ἀργείων ἔπεισε τοὺς Ἀθηναίους φιλίαν συνθέσθαι πρὸς τοὺς Ἀργείους, et alias saepe. WESS.

531. 68. Πρὸ γὰρ τῆς Ἡρακλειδῶν καταλύσεως] Interpres de Heraclidarum in Peloponnesum reditu accepit, neque male, rem si spectes. Namque illi priusquam revertenter, revera illustrissimi Graeciae imperatores Argivi fuere plerique. At enim ἡ τῶν Ἡρακλειδῶν κατάλυσις estne eorum reditus? Equidem probe memini κατάλυσιν τοῦ δήμου ex Andocide de Myster. p. 6. de populari reipublicae statu everso et disiecto, et κατάλυσις et κατάλυσιν ποιῆσθαι de diversoriis, in quae manendi ergo concedimus, ex Nostri L. I. 51. XVI. 41., non item alterum. Fortassis belle res haberet, modo κατελεύσεως legeretur, idque probae esset notae vocabulum. Auctor ipse de Heraclidis L. IV. 58. ὡς ὁ πεντηκονταετής χρόνος διῆλθε, κατῆλθον εἰς Πελοπόννησον. Iam voci testem si requiras, en tibi Hesychium, Κατήλυσις, κατέλυσις. quem si recusas, acquiesce in vulgata, atque aut simile dictionis exemplum aliunde erue, aut verte cum Rhodomanno, vineta sua caedente, ante Heraclidarum abdicationem. WESS.

531. 71. Πολὸν χρόνον εἰρήνην ἔχουσα] Usi fuerant pro-

funda pace, ceteris Græcorum in bella civilia coniectis. Foedus quoque, quod tamen in exitu erat, cum Spartanis habebant, quo quies hæc stabiliebatur apud Thucydid. V. 28. et Andocid. Orat. de Pac. p. 26., ubi πατριαν εἰρήνην eam adpellasse docetur. WESS.

531. 74. Ἐπέλεξαν τῶν πολιτῶν χιλίους] Commeminit eorum Pausanias L. II. 20. Adde inferius c. 80; WESS.

531. 80. Τῶν πολεμικῶν ἔργων ἀθληταὶ] Conf. not. in L. I. 53. WESS.

531. 90. Ἀπέλυσαν τῆς ἀτιμίας] Genus ignominiae explicatur a Thucydid. V. 34., addente tempore demum labente solutos ea fuisse. Erant eorum enim plerique ἐξ οἰκῶν τε πρώτων τῆς Σπάρτης καὶ φίλους καὶ συγγενεῖς τοὺς δυνατωτάτους ἔχοντες Plutarch. Nic. p. 530. A.; ut mirum non sit, pristinos in civitate honores reciperasse. Porro quod modo legitur, ἀτιμία προσβεβληκότες, id iustum non est. Περιβεβληκότες dicere solent. Auctor ipse L. XV. 11. καὶ ταῖς ἐσχάταις ἀτιμίαις (τὸν Ὅροντην) περιέβαλε. Et L. XVII. 14. ἀπαραιτήτοις τιμωρίαις δεῖν περιβαλεῖν αὐτούς. Proinde optime H. Stephanus: *Lego περιβεβληκότες. Nam ἀτιμία περιβάλλειν sacpe me legere memini, ἀτιμία προσβάλλειν nunquam. Sed nec hoc pati potest natura huius verbi.* WESS.

532. 95. Τοὺς ἀλλοτριοῦντας αὐτῶν ἐθεράπευον] Ἀλλοτριωθέντας in Addend. suis Rhodomannus, quod accipi potuerat, si vetustis e libris foret. Nunc satis erit, si pronomen subintelligas, atque ex Thucydide III. 65., etsi huic generi non plane par, καὶ τῶν σωματίων τὴν πόλιν οὐκ ἀλλοτριοῦντας contendas. WESS.

532. 1. Πάντας ἤβηδὸν κατασφάζαντες] Inmanem hanc Atheniensium crudelitatem haud inmerito notat Gylippus Orat. ad Syracusanos L. XIII. 30., excusare conatur, sed frigide, Aristides Panathen. p. 304., secutus ea in re Isoerat. Paneg. p. 89. Porro quod sequitur, τὴν δὲ νῆσον οἰκεῖν παρέδοσαν, id ex Thucydidis aemulatione natum, qui Scionen νῆσον et incolas νησιώτας adpellat L. IV. 120. 121. cum nota Cl. Dukeri. Alioqui urbs posita erat in peninsula Pallene, quam tamen et alii insulam dixerunt. Vide quae adscripsi Antonini Itiner. p. 525. WESS.

532. 4. Περὶ δὲ τοὺς αὐτοὺς χρόνους κατὰ τὴν Ἰταλίαν etc.] Livius, sicuti in gentis Campanae initiis a Diodoro abit, ita *Cumapas* quoque occupatas aliquot demum post annos refert L. IV. 44. Quam barbare vero et nequiter Cumanos oppresserint Campani docetur a Strabone L. V. p. 373. A. WESS.

532. 12. Ἀριστοφύλου] Arundelianum Marmor Ἀστούφιλον et Athen. L. V. 18. vocant, e quibus Diodorum adiuvandum censeo cum Palmerio, qui, *Lege Ἀστυφίλον, ut legitur in Marmore Arundeliano, et apud Athenæum et alios.* WESS. Ἀστυφίλον correxerat et Is. Vossius, secutus Scaligerum. IDEM in Add.

532. 13. Λεύκιον Κοῖντιον καὶ Ἄλλον Σεμπρώνιον] Hos



Coss. Onuph. Panvin. Fast. L. I. ad ann. cccxxvi. depravate scribi autumat pro *T. Quinctio Penno* et *A. Cornelio Cosso*, inmemor eorum, quae Diodorus c. 75. memoraverat: sequitur errantem Rhodomannus, ut mox videbis. Ceterorum Fasti Coss. praetereunt *L. Quinctium* et *A. Sempronium*, neque incommode pro Livianis, quas turbant, rationibus. Habent quoque adversarium H. Dodwellum, quem vide in not. ad Chronol., quae subiungitur Dionys. Halic. p. 96. WESS.

532. 18. Ἀτραμύτιον] Ἀδραμ. Co. Vid. ad c. 73. WESS.

532. 19. Ὅζκ ἀποδιδόντων — τὴν Ἡύλον] Conf. Thucyd. V. 35. WESS.

532. 22. Ἐπεισε τοῖς Ἀθηναίους φιλίαν συνθέσθαι] Quibus artibus ad conciliandum hoc foedus sit Alcibiades usus, ostenditur a Plut. Alcib. p. 197. D., cui Thucyd. adiunge, foederis eius formulam describentem L. V. 47. WESS.

532. 28. Ἀνειῶνες] Hoc malui ob Stephani Byzantini decretum et quia inferius L. XVIII. 11. recurrit. Ceteroqui in scriptis Codd. Ἀνειῶνες et Ἀνειῶνες frequentissime permutari ostendit Hutchinsonius ad Xenophont. Agesil. p. 44. Quin Strabo L. I. p. 105. XI. p. 775. Ἀνειῶνας et Heliodor. Aethiop. II. p. 122. saepius adpellat. Caussam belli, quod Heraeleensibus cum maxime illatum est, exponit Thucyd. V. 51. WESS.

532. 38. Ἐπὶ πόλιν Μηκίβεραν] Leve vitium, quod L. XVI. 54. recurrit, ex prava pronuntiatione voci ingeneratum, sustuli: Μηκίβεραν omnes vocitant, urbem xx stadiis Olyntho, si non fallit Harpöcraton, remotam. WESS.

533. 43. Παπύριον Μουτιλανόν] Ex Μουτιλανόν fac Μουγυλανόν. Prioris anni consulum alter per mendum vocatur Σεμπρόνιος, cum debeat esse *A. Κορηήλιος Κόσσος*. RHOD. Παπύριον Μουγυλανόν] Cum ex vicinia literarum *T.* et *G.* vitium sit progenitum, cur non mutarem? Collega Papirii Livio L. IV. 30. *C. Servilius Ahala* est, sed qui praeter id cognomen et *Structi* gessisse videtur, monente Pighio in Fast. ad ann. cccxxvi. WESS. De Structo Serviliae gentis cognomine v. et Borghes. II. p. 48.

533. 45. Ἐγκαλέσαντες τοῖς Λακεδαιμονίοις] Lege τοῖς Ἐπιδαυροίοις ex Thucyd. L. V. 53., ubi haec historia fuse narratur. PALM. Fecisset Diodorus rectius, si τοῖς Ἐπιδαυροίοις, cum quibus id bellum Argivis fuit, scripsisset. Solet tamen Λακεδαιμονίων voce eorundem socios complecti, cuius usus exempla in hac belli Peloponnesiaci historia complura sunt. Materia et color bello fuit, περὶ τοῦ θύμιτος τοῦ Ἀπόλλωνος τοῦ Πυθῆος, ὃ δέον ἀπαγαγεῖν, ὅζκ ἐπεμπον ὑπὲρ βοταμίων Ἐπιδαυροιοι. Sic Thucydides L. V. 53. Noster Apollinem inde extudit *Pythium*, haud profecto prudenter. Templum enim eius Apollinis in Argivorum erat finibus et potestate, dicebaturque Πυθαῆος, teste Pausan. II. 35. et 36., qui et ab Argivis id nomen illi venisse

addit. Quare in Thucydide, si res mei esset arbitrii, idem refingerem. At quid tandem ὑπὲρ βοταμίων erit? Vertunt *pascuorum nomine*, quamquam nullius auctoritate; nam *Λειμήρας* titulus, quem nuper vir consultissimus advocavit, ut pascuis auxilio esset, non huic Epidaurio, sed alteri, in Laconicae finibus, fuit proprius. Equidem in partes si sit eundum, praeferrem ex scriptis Thucydidis libris ὑπὲρ παραποταμίων, intelligeremque accolae fluvii in Epidauriorum vicinia, cuiusmodi sumi poterit flumen ex Statio L. IV. Theb. v. 710. etc. WESS.

533. 62. Προῆγον ἐκ τῆς πόλεως τὸ στρατόπεδον] Rem alio ordine gestam copiosius exsequitur Thucydides V. 59. WESS.

533. 74. Διὰ τῶν καλῶν ἔργων] Alia esse scriptorum N. T. καλὰ ἔργα, non est, ut admoncam. Τὰ πολεμικὰ intelliguntur inprimis. De re ipsa Thucyd. V. 63. WESS.

533. 80. Εἰς αὐτοὺς — ἱππεῖς δὲ διακοσίους] Maluissem εἰς Ἀργείους scripsisset: fecisset certe orationem haud paullo planiorem. Dein ἱππεῖς δὲ τριακοσίους verius erit, modo ne fallant numeri in Thucydide V. 61., e quo praeterea cognoscimus, haec magnam partem insequenti anno administrata fuisse. WESS.

534. 89. Ἐπ' Ὀρχομενὸν τῆς Ἀρκ.] Conf. L. XIX. 63. WESS.

534. 9. Λοχαγῶν] Reddimus auctori λογάδων. RHOD. Τῶν λογάδων] Adeo mihi certa viri doctissimi coniectura est visa, ut Diodoro vocem suam reddere nihil sim reveritus. Λοχαγοὶ quidem certe nihil ad hunc locum, cui unice conveniunt λογάδες. Namque eo vocabulo lectos illos mille Argivos saepe describunt. Thucydides V. 67. Ἀργείων οἱ χίλιοι λογάδες. et c. 72. καὶ τῶν Ἀργείων οἱ χίλιοι λογάδες. tum c. 73. τῶν δὲ Ἀργείων λογάδων τὸ πολὺ ἐσώθη. Pausanias II. 20. ἔδοξεν Ἀργείοις λογάδας τρέφειν χιλίους. Quae Thucydidis et Pausaniae loca temeritatem, si cui forte videatur, facile excusabunt. Porro paullo ante οὗς καὶ — κυκλώσαντες rei series requirit. WESS.

534. 18. Τοῖς Ἀρκάσι δοῦναι δίοδον] Huc refero Agidis dictum: συμβουλεύοντος δὲ τινος, ὅτι δεῖ τοῖς φεύγουσι τῶν πολεμίων δίδοναι δίοδον καὶ πῶς, ἔφη, τοῖς διὰ δειλίαν φεύγουσι μὴ μαχόμενοι, τοῖς δὲ ἀνδρείαν μένουσι μαχησόμεθα, in Plutarchi Arophthegm. Lacon. p. 215. F. WESS.

535. 32. Εἰρήνην ἐποιήσαντο] Vid. Thucyd. V. 79. et de Mantinensibus c. 81., et cognosces τὸ ὑποταγῆναι non admodum districte hic esse accipiendum. WESS.

535. 37. Συνεφρόνησαν] Doctissimus De la Barre, cui excerpta Codd. Reg. debeo, συνεφρόνησαν corrigebat, motus, credo, verbi usu et τῷ συμφρονησαι κατὰ τῶν ἡγουμένων ex L. I. 89. et c. 77. huius libri. Atque id quidem recipi potuerat, si manu exarati libri addixissent: quibus ego invitis nihil pugnabo. Συμφρωεῖν enim consensum ad alios opprimendos recte declarat. Philosphus Politic. L. IV. 12. μὴ ποτε συμφρονησωσιν οἱ πλούσιοι

τοῖς πένησιν ἐπὶ τούτους. Consenserunt autem hi mille ad statum reipublicae commutandum, tum quoniam ad Mantineam rem praeter ceteros egregie gesserant, tum Bryantis, praefecti sui, flagitiis in hoc facinus accensi. Hoc docebit Pausanias II. 20., illud Aristoteles Politic. L. V. 4., ubi οἱ ἐν Ἀργεὶ γινώσκουσι non alii atque hi mille, quippe ex praecipua nobilitate lecti, quos γινώσκουσι vocitare solet. Vid. L. V. 3. et c. 5. ac c. 8. WESS.

535. 43. Κατέλυσαν τοὺς νόμους] Idem est ac καταλέειν τὴν δημοκρατίαν, sive, ut Diogenes Laert. I. 66., τὸν δῆμον καταλέειν. Dissolutas enim leges excipit plerumque mutatio reipublicae. Eleganter, sumta hinc translatione, Synesius Orat. De Regn. p. 10. B. ὃν (νοῦν) ἀξιῶ βασιλεύειν ἐν τῇ τοῦ βασιλέως ψυχῇ, τὴν ὀλιγοκρατίαν τε καὶ δημοκρατίαν τῶν παιδῶν καταλύσαντα. Dictionem ipsam copioso exemplorum acervo illustrarunt viri docti, qui nostra memoria laudabili consilio Novi Foederis scripta cum Graecorum libris contenderunt, ad Matth. c. V. 17. WESS.

535. 46. Διὸ καὶ τούτων ἀναγεθέντων] Conf. Pausan. II. 20., sed cave audias praestantissimum Kuhnium, de σκευαλισμῶν haud pauca adspargentem: namque is multis demum post annis Argis contigit, ut L. XV. 57. docetur. Melius Is. Casaubon. ad Aeneam p. 1733. ed. Gronov. WESS.

535. 49. Παρατάξει ἐκρίθησαν] Praelio inter se decertarunt. Homerus II. Σ, 209. Οἱ τε πανημέριοι στενεροῦ κρίονται Ἀργεῖ. Iosephus, seu potius Nicolaus Damascenus, Ant. Iud. L. VII. 5. 2. πόλεμον δὲ ἐξενέγκας πρὸς Δαυὶδην — καὶ πολλαῖς μάχαις κριθεῖς. Ad quem modum κρίεσθαι περὶ τῶν ὄλων et διακρίεσθαι haud infrequens, ut L. XIII. 10. Aliud est κρίνειν τὸν πόλεμον, veluti L. XI. 17. προστάξας ἐξάπτεσθαι τῶν πολεμίων καὶ ναυμαχίᾳ κρίνειν τὸν ἀγῶνα. Et L. XII. 74. τῶν ἡγεμόνων φιλοτιμουμένων δι' ἑαυτῶν κρῖναι τὴν μάχην. utrobique enim finem, quem pugnae imponere conabantur, indicat. Idem confirmatur his L. XVI. 21. βουλόμενοι ναυμαχίᾳ κρῖναι τὸν πόλεμον. Namque id studebant Chii Rhodiique et eorum socii, ut navali hoc certamine tandem aliquando finem bello Sociali facerent. Accedunt Appiani verba L. III. B. Civil. p. 925. ἤλιπον ἐν τῷδε τῷ ἔργῳ μόνῳ τὸν πόλεμον κρίνειν. Et Hannib. p. 559. καὶ αὐτοὺς παραπέμποντες ἐξιόντας, ἐδέοντο κρῖναι τὸν πόλεμον μάχῃ. tum post pauca: μνημονεύειν ὃν ὁ δῆμος ἐξιοῦσιν ἐνετέλλετο, καὶ κρῖναι τὴν μάχην ὀξέως. Ubi vir doctissimus, minus, inquit, proprie κρῖναι τὴν μάχην dicit, quo modo enim quis dicitur κρῖναι τὴν μάχην, quae nondum incepta est? Quae equidem non scripta maluissem. Rectius multo instituit Andreas Dounaeus Prael. ad Demosthen. Orat. de Pace p. 164. Porro, unde auctor hoc bellum Phocenses inter et Locenses depromserit, non recorder. WESS.

535. 52. *Νικίου στρατηγοῦντος εἶλον δύο πόλεις*] Errat, repetitque imprudenter, quae iam olim gesta descripsit L. XII. 65. Melum Niciae ductu crudelissime fuisse adlictam ex Thucydide L. V. 84. non conficitur, neque auctoris verba eum huic rei ducem fuisse necessario postulant. Scholiastes tamen ad Comici Aves v. 186. ita perhibet, male fortassis, atque errore ex prima Atheniensium in Melios ductu Niciae expeditione progenito. Neque id recte, quod anno ante Aves ab Aristophane in scenam productas Melum oppressam prodit: redacta enim in victoris populi potestatem est anno Olymp. xc. quarto. Id rerum gestarum ordo, a Thucydide diligentissime digestus, evincit: quare neque hac in re absolvi auctor potest. Conf. viros doctissimos ad Thucydid. V. 116. WESS.

535. 56. *Φειδιγάται*] Correxī pravam scripturam, ipso ab auctore damnatam L. XII. 73. Belli causam longe diversam adfert Livius IV. 31.; nam quae hic de legatis, contra gentium ius occisis, ea citius contigerunt, si eidem Livio L. IV. 17. fides. WESS.

535. 61. *Ἄνιον Αἰμίλιον*] Reliquisse videtur *Μόνιον*. Livius adpellat *Mamercum*, atque ex eo Nostrum castigandum dudum censuit Pighius in Fast. ad ann. cccxxviii. Exitus belli, ne id neglexisse videar, longe longaeque alius fuit, si Livium audis. WESS.

535. 70. *Λεύκιος Κορίντιος*] *Κορίντιος* vitiatum ex *Κοῦρτιος*. Hic quartus omittitur *Λεύκιος Ὀρότιος*. RHOD. *Α. Κοῦρτιος*] Ex vestigiis manu exarati libri, quem a Cardinale Granvellano utendum acceperat Pighius, et auctoris consuetudine, Quinctio suum nomen instauravi. Livius tribus his Tribunis militum consulari potestate addit *L. Horatium Barbatum*, quem hic deesse idem Pighius animadvertit. WESS.

535. 72. *Ἐπιγὰς χωρίον εἶλον*] Lege *Ἐπιγὰς χωρίον*, ut Thucydides L. V. 83. Strabo L. VIII. p. 578. et IX. p. 620. Pausanias passim et alii. PALM. *Ἐπιγὰς χωρίον εἶλον*] Manum medicam et huic admovi, tum auctoritate vetustissimorum scriptorum, quos Palmerius optime adpellavit, tum Cold. veterimorum, quorum *Ἐπιγὰς* hac ope indigebant. Vidit et hoc errantis librarii peccatum Cel. T. Hemsterhusius in Luciani D. Mar. VI. 1. Porro vicem Spartani Argivis, a quibus ad *Hysias* gravi adfecti fuerant eade Olymp. xxvii. anno quarto, reddiderunt. Vide Pausan. II. 24. WESS.

536. 75. *Μέχρι τῆς θαλάττης*] Intercapedo erat stadiorum xl. nam, ut Pausanias L. II. p. 197. ait, *ἀπέχει δὲ Ἄργεῖον τῆς πόλεως τεσσαράκοντα καὶ οὐ πλείω στάδια ἢ κατὰ Λέοντα Θάλασσαν*. Quod intervallum muris ut continuarent, praecipue ursit Alcibiades, missis patria ex urbe Argos fabris et lapidibus apud Thucydid. V. 82. et Plut. Alcib. p. 198. D. WESS.

536. 90. *Καὶ πολλὴν τῆς γῶρας δρώσαντες*] In Thucyd. VI. 7. *τῆς τε γῆς ἔτεμον οὐ πολλήν* quo loco tamen Valla negandi vocem haud legit. At discrepat belli Peloponnesiaci scriptor etiam in aliis a Nostro, veluti in navium, quas xxx missas Athenis ait, numero: praeterea 1000 gravis armaturae milites venisse Argivis auxilio, et Orneatas plerosque omnes aufugisse addit. De Orneis Strabo VIII. p. 578. et Pausan. L. II. p. 168. plura. WESS.

536. 2. *Κατὰ τὸ πεντεκαίδεκατον ἔτος τοῦ Πελ.*] Ex Thucydidis rationibus L. V. 83. ea, quae modo perscripta sunt, in annum Peloponnesiaci belli xvi incidunt. Noster alias secutus est, belli eius principium ab Archonte *Euthydemo* exorsus, a quo xv. *Euphemus* est, qui in Atticis Fastis huic anno nomen dedit. Vide L. XII. 38. WESS.

536. 4. *Ἀριστόμηστος*] *Ἀρίμνηστος* in Isaci Orat. de Philoctemon. Hered. p. 57., et Argumento III. *Ἐορίθων* Aristoph., quo utroque loco Io. Meursius L. III. Archont. c. 9. et Attic. Lect. L. IV. 31. *Ἀριστόμηστον* rescripsit; ego vero contra mallem, quoniam non illi tantum, sed et Hesy chius in v. *Ἐρμοσοπίδαι* Atticae hunc urbis praetorem *Ἀρίμνηστον* vocat, nec quidquam eo in nomine sit, cur spernatur. WESS.

536. 6. *Λούκιος Σέντιος*] *Σέργιος* est in Fastis. Rhod. *Σέργιον* esse scribendum Sigonius ad Livii L. IV. 35. et Pigh. Fastor. p. 188. viderunt. Praeterea *Λεύκιον* praetuli, quo modo Sigonius citat, quoniam Diodorus ita adsuevit. Ad haec *Claudio* praenomen fuit *Appii*. WESS.

536. 9. *Ἐξαινετος Ἀκρωγαυτῆρος*] Ex hoc loco corrigendus est Aelianus V. H. L. II. 8. ubi sic legitur, *κατὰ τὴν πρώτην καὶ ἕκτην Ὀλυμπιάδα, καθ' ἣν ἐνία Ἐξαινετος Ἀκρωγαυτῆρος στάδιον*. ibi igitur ex hoc loco legendum *κατὰ τὴν πρώτην καὶ ἔννεμνησοστήν*. Error proculdubio manavit ex similitudine notarum numeralium ζ', β'. Scriptum fuit apud Aelianum *κατὰ τὴν α' καὶ β'*, exscriptor male legit *α καὶ ζ'*, quod est absurdum. Nam scribendum fuisset *πρὸς τὴν ζ'*, quando unum et sex valet septem. PALM. Non recordatus mihi Palmerius videtur, quae de Aeliani loco disputarat Io. Meursius Attic. Lect. L. III. 28. Uterque verum pervidit, sicuti ex vetustis schedis ostendit Cel. Iac. Perizonius. WESS.

536. 19. *Ποταμοῦ τὴν γῶραν τῶν etc. ὀρίζοντος*] Quem fluviorum intelligat, Scamandrum, Simoenta, an alium, non temere finivero. Mox mallem *τὴν παραποταμίαν*, uti post pauca *αὐτοῖ τὴν γῶραν κατέσχον*. et sic L. I. 44. III. 55. IV. 86. V. 50. WESS. De *κατέχειν* cum genitivo v. Schweigh. ad Appian. vol. III. p. 120., hunc etiam locum recte tutatus.

537. 39. *Διαπόντιον συμμαχίαν*] Dixi L. XI. 37. WESS.

537. 41. *Ἐξ τῆς πόλεως μετωπισμένων*] Vide huius libri c. 54. WESS.

537. 51. *Λεοντίων τὴν συγγένειαν προσφερο.*] Origine Chalcidenses erant, qui Atheniensium cognati. Vid. Thucydid. VI. 6. et 50., et Scymnum Chium Perieges. v. 275. WESS.

537. 59. *Παρὰ τῶν ἀστειροτέρων χορησάμενοι*] Segestatorum hanc fraudem exponunt Thucydid. VI. 46. et Polyæn. de Stratagem. L. VI. 21. Porro *φαντασίας ἔδειξεν* opum ostentationem exprimit, qua Atheniensium legatis sese venditabant. Non dissimile *μετὰ πολλῆς φαντασίας* in S. Lucae A. A. c. XXV. 23., cui tamen *ἢ τῆς ἀρχῆς φαντασία* in Sopatri fragmento apud Io. Stobaeum Floril. Tit. XLIV. p. 313. Vide Th. Gatak. in Imp. Antonini L. I. 7. WESS.

537. 68. *Καὶ τῶν Ἑλλήνων etc.*] Animavi hunc et sequentem orationis ambitum, ut vehementior esset, interrogandi nota: nam quid in utroque ad sententiam subintelligatur, quisque videt. Niciae autem orationem integram si velis, adi ad Thucydidem L. VI. 9. WESS.

537. 74. *Δοξάζητον*] Ita L. III. 55. IV. 33. Alias *δοξάζητον*, ut L. XVIII. 39. XIX. 85. XX. 77. Quae eadem varietas et in aliis obvia est. Vide Lycophron. v. 933. 1116. Polyb. XVII. p. 1072. Appian. L. I. Bel. Civil. p. 604. et 615. Pausan. III. 3. WESS.

538. 79. *Ἦν γὰρ ὁ ἀνὴρ οὗτος etc.*] Conf. L. XIII. 68. WESS.

538. 83. *Τριάκοντα μὲν τριήρεις etc.*] Non longe, neque in triremium neque militum numero, a Thucydide L. VI. 43. abit hoc quidem loco. Longius L. XIII. 2. WESS.

## A N N O T A T I O N E S

I N

## LIBRUM DECIMUM TERTIUM.

539. 16. Καὶ Συρακοσίων] Deficit vocabulum νίκη, quod Rhodomannus iure postliminii revocavit. WESS.

539. 27. Ὁ Πελοποννησιακὸς λεγόμενος] Verius Δεκελεικὸς ex L. XIII. 9. WESS.

540. 50. Ἐπέτρεψαν] Praestaret ἐπέτρεψε. Simile tamen πληθὺς ἐπεπόλασε — καὶ ἀπεπέτρεπον L. V. 36. WESS.

540. 77. Ἐν Σικελίᾳ] Distinctionem nisi conmutaveris, positum erit loco εἰς Σικελίαν. Conf. not. doctissimi Reitzii ad Luciani Asin. c. 1. et mox L. XIII. 7. WESS.

540. 90. Τριάκοντα μυριάσι] Vide L. XIII. 80. WESS.

540. 92. Μηροῖσι στρατιώταις ἐβόηθον] Minus haec accurate excerpta videbis ex L. XIII. 86. WESS.

541. 3. Τοὺς στρατηγούς ἀδίκως ἐθανάτωσαν] Conf. L. XIII. 101. WESS.

542. 1. Εἰ μὲν ὅμοια τοῖς ἄλλοις ἱστορίαν ἐπραγμα.] Sic melius. Idem est atque ὁμοίως τοῖς ἄλλοις. Agatharchides de Cynamolgis κόνας δὲ τρέφουσι πολλοὺς καὶ μεγάλους ὁμοίως Ἰρζάνοις de Mar. Rubr. p. 44., et manu exarati libri in Nostri III. 19. οὐκ ἴσασιν δὲ τὰ ἔθνη οὐκ ὁμοίως τοῖς Ἰχθυοφάγοις χοῦται, haud profecto male. Potuisset uterque ὅμοια τοῖς etc., ut Thucydides I. I. 25. Κορυραὶ χορημάτων δυνάμει ὄντες κατ' ἐξείνον τὸν χρόνον ὅμοια τοῖς Ἑλλήνων πλουσιωτάτοις. Plura Cl. T. Hemsterhusius in Luciani Somn. c. 2. WESS.

542. 10. Ὀλίγον γὰρ χρόνον ἀπολαβόντες τῇ γραφῇ] Nisi erro, hoc vult: Sibi, si aliorum in morem exigui temporis intervallum scriptione complecteretur, otium fore ad fructum ex prooemiis auferendum: nunc quando paucis libris ingens temporis spatium comprehendere consilium sit, praefationes missas esse faciendas. Ἀπολαβεῖν τῇ γραφῇ non aliud opinor ac περιλαβεῖν τῇ γραφῇ L. I. 2., quamquam diversa Rhodomanni [exiguam scriptioni tempus subtrahendo reddentis] sententia. WESS.

542. 19. Ἐτη ἑπτακόσια ἐξήχοντα] Desunt octo anni. Namque a bello Troiano annos ad Olymp. primam numerat ccccviii L. I. 5. Accedant solidae xc Olympiades, et rotundabuntur anni DCCLXVIII. Melius infra L. XIV. 2. WESS.

542. 26. Λεύκιον Σέργιον] Tribunos a Diodoro memoratos quinto demum anno post, qui cccxxxv. Urbis conditae illic est, Fasti edunt. Transeundit igitur quinque annorum magistratus, et C. Servilium omittit. RHOD. Fasti quibus auctor usus fuit, quinque annorum magistratibus defecti fuerunt. Desunt proinde et res Romanae, illis annis administratae: quem quidem defectum post Sigonium et Pighium bene Rhodomannus animadvertit, quamquam quod de Servilio addidit, non satis perspicio. Voluit, credo, Servilium non M., sed Caii praenomine usum: debuit certe. Vid. Livium L. IV. 45. WESS. De *Caiio* monuerat etiam Pighius p. 194.

543. 28. Ἐπὶ δὲ τούτων Ἀθηναῖοι ψηφισάμενοι etc.] Conpelluntur haud pauca in hunc annum, quae superioris decursu acciderunt. Illo enim Mercurii statuae sunt mutilatae, Hesychio in Ἐρμοκοπίδαι teste. Eodem ingressos Athenienses Siciliensem fuisse expeditionem praeter Thucydidem L. VI. 30. docet Isaeus Orat. de Philoctemon. Heredit. p. 57. Hoc vero Archonte Chabria quaestio de Hermocopidis, sive, Mercurialium statuarum mutilatoribus haberi coepta est, statutaque mortis poena publicae talentum proscriptorum aliquem contrucidanti decretum fuit, Philochoro in Schol. ad Comici Aves v. 767. commemorante. WESS.

543. 40. Ἐκουσίως προσιόντες τοῖς στρατηγοῖς, διεκελεύοντο etc.] Exemplum illustre est in Thessalo, quem pater Hippocrates profecturis comitem addit τοῖς ἰδίοις δαπανήμασι κατεσκευασμένον, καὶ ἄτερο μισθῶν ἀτιθήσις, ἕως ἂν ὁ στόλος ἀποδημῇ in Thessali ad Athen. Orat. p. 1295. Mox mallet forte alius κατακληρουχίσειν ἡλιπζον, cui, Codd. si faverent, assentirem: namque et infra c. 9. βοηθήσειν τοῖς φεύγουσιν ἡλιπζον. tamen L. XII. 60. οἱ δ' Ἀχαρνῆες — οὐκ ἐφρασαν ἀκολουθεῖν. Et c. 61. ἡλιπζον γὰρ — πάντα τὸν πόλεμον περιωγαγεῖν εἰς τὴν Πελοπόννησον. Alia vir celeberrimus ad Xenophontis Ephesii L. II. Miscell. Observ. Vol. IV. p. 286. WESS.

543. 47. Ἀλλ' ἀπὸ τῶν προεχόντων] Praecessit οὐχ ὑπὸ τῶν τεχόντων, quod quidem tritius. S. Lucas Evang. IX. 7. ἤχονσε δὲ Ἰησοῦς — τὰ γινόμενα ὑπ' αὐτοῦ πάντα. Nec desunt tamen quae vulgatum stabiliant, congesta in Miscell. Observ. Vol. III. p. 427. WESS.

543. 49. Μεγάλας δωρεὰς προθεῖς τῷ μνημόσαντι] Erant τὰ μνημόσρα centum minae apud Andocidem de Myst. p. 6. WESS.

543. 52. Ἐωραξέναι τῇ νομηνίᾳ] Ἐνης καὶ νέας οὐσης Plut. Alcib. p. 201., quod eodem redit. Ridiculus autem hic index fueritne Dioclidēs, non temere dixero: quamquam ille ad senatum detulit πανσέληνον fuisse, quum Hermae mutilarentur in Andocid.



Orat. de Myster. p. 6. Ceterum his Diodori parum dextre usus Ios. Scaliger Isag. III. p. 225. poenas dedit Dion. Petavio L. 1. Doct. Temp. c. 8. WESS.

543. 62. Καὶ τῶν συμμάχων πλείους τῶν ἑπτακισχιλίων ] Diceret sociorum numerum VII millia superasse: id enim prae se verba videntur ferre. Falsum tamen dixerit, hoc si voluit. Univerſa gravis levisque armaturae, tum civium tum sociorum, multitudo VII millibus paullo fuit amplior. Thucydidem L. VI. 43. si inspexeris, nam Plut. Alcib. p. 201. B. minus accuratus est, non dubitabis. Itaque deest hic pronomen aut articulus, unde συμμάχων vocabulum pendet. WESS.

543. 75. Τοῖς ἐπὶ ταῖς πρόρῳαις ἐπιστήμασι ] Interp. erectos pluteos intelligit. Dion. Camusatus adscripserat, conferendos esse ex Herodoto III. 37. Pataicos, τοὺς οἱ Φοίνιζες ἐν τῆσι πρόρῳαισι τῶν τριήρων περιάγουσι, forte aliquid opinatus de Deorum simulacris. Id vero mihi nondum liquet. Esse arbitror τὰ σημεῖα, quibus Thucydides VI. 31. has Atheniensium naves ornavit, tametsi eius Schol. τὰς ἔξωθεν καταγραφὰς τῶν τριήρων sive trimemium picturas, exponat. Namque ἐπιστήματα vocis, quam funebri in re de columellis interpretatur Suidas, melius respondebit, si quae ornamenta, ex prora prominentia, intelligantur, cuiusmodi ἀκροστόλιον, de quo Schol. Apollon. Rhod. I. 1089., aut παράσημον, aut eius generis alia, de quibus Schefferus Milit. Nav. L. II. 6. WESS.

544. 79. Κατατυχεῖν τῆς στρατείας ] Idem est ac ἐπιτυχεῖν, quod eo in genere magis frequentatur. Vide L. I. 37. V. 1., et de re ipsa Thucydid. L. VI. 32., quem manifesto aemulatur. WESS.

544. 93. Τὴν Διοσκουριάδα καλ. ἄκραν ] Unum fuit ex tribus Iapygum promontoriis, a Strabone L. VI. p. 401. memoratis, dictum ita ab adiacente Dioseuron insula apud Plinium L. III. 10. Conf. Ph. Cluver. Ital. Ant. L. IV. p. 1307. WESS.

544. 94. Τὸ καλούμενόν τε Σκυλλήτιον ] Mirum est tolerare Rhodomannum potuisse Τεσκυλλήτιον Tescyletium, quo nihil absurdius. Is. Vossius libri margini adscripserat τὸ Σκυλλήτιον. Is. Casaubonus ad Strabon. VI. p. 391. τὸ καλούμενόν τε Σκυλλήτιζόν. Uterque erudite. Quod dedimus e scriptis est libris atque a Strabone, Σκυλλήτιον navifragum hoc Scyllaceum appellante, firmatur. WESS.

544. 96. Ἐπεισαν τοὺς Πηγήνους ] Thucydid. VI. 46. ἤρξαντο πείθειν. Nimirum haud raro verba absolute ponuntur, quae conatum propositumque tantummodo indicant. Herodotus I. 68. ἐμισθασῆτο παρ' οὗκ ἐκδιδόντος τὴν ἀλλήν, i. e. conducere voluit. Et L. III. 139. Darius ἐπεθύμησε τῆς χλανίδος, καὶ ἀπὸ τὴν προσελθῶν ὠρέετο, qui id amiculum mercari cupiebat. Suc-

tonius Caesar. c. 29. *Cum adversariis autem pepigit, ut dimissis octo legionibus etc.* ubi Casaubon. WESS.

544. 2. Σιζαρὸν] Sic inf. c. 11. et 13., et recte. Habet ex Thueydide VI. 73., sed serius rebus gerendis eum cum collegis admovente. WESS.

544. 9. Εἰρήνην ἄξειν] Nihil muto. Utrunque ἄξειν et ἔξειν commodum est. Vide L. XI. 63. XII. 56. Quare et scriptis in libris frequenter commutantur, ut in Xenophont. de Exp. Cyr. III. p. 232. et VII. p. 308. De Camarinacorum consiliis diligentius Thueydid. VI. 88. WESS.

545. 26. Αἰλόντες πύλιδα] Conf. Polyæn. de Stratag. L. 40. 4., quemque ille aemulatur, Thueydid. VI. 51. WESS.

545. 35. Οἱ γὰρ ἰδιόξενοι συνθέμενοι etc.] Obscurius interpretres quidam privata hospitum necessitudine potentes. Intelliguntur privato hospitii iure Alcibiadi coniuncti. Οἱ τε ξένοι τοῦ Ἀλκιβιάδου οἱ ἐν Ἀργεῖ Thueydid. VI. 61. Atque ita in Nostri L. XI. 56. XX. 20. et Plut. T. II. p. 576. A. Vide Ammonium in Ἠρόξενος, et Schol. Demosth. Midian. p. 374. WESS.

545. 47. Φοβηθεῖς τὸ μέγεθος τοῦ κινδύνου] Ea fugae praecipua caussa fuit. Vide Plut. Alcib. p. 202. D. et Aelian. V. H. L. XIII. 38. WESS.

545. 55. Δίχην ἐρήμην κατεδίκασαν θανάτου] *Deserto vadimonio capitis damnarunt.* Sic Thueydid. VI. 61. οἱ δ' Ἀθηναῖοι ἐρήμην δίχην θάνατον κατέγνωσαν αὐτοῦ. Antiphon de Herod. Caed. p. 131. ἴσον ἦν μοι καὶ προκληθέντι μὴ ἐλθεῖν, ἀλλ' ἐρήμην ὄφλειν τὴν δίχην. Plut. T. II. p. 698. E. οὕτως ἐψησόμεθα τοῦ Πλάτωνος ἐρήμην ὀφλισιάνοιτος. Lucianus de Gymnas. c. 40. μὴ ἐρήμην, ὃ γενναῖε, μηδὲ τῶν ἀνδρῶν ἀπόντων, μόνος αὐτὸς λέγων, οἷον κρατεῖν. atque ita ille saepe. Vid. Iac. Gronovium ad Reviviscent. c. 33. WESS.

545. 60. Ὑκαρα μὲν Σικελικὸν πολισιμάτιον] Conf. Ph. Cluverium Sicil. Antiq. L. II. p. 272., qui sine gravi admodum caussa eiusdem libri p. 264. auctorem modo εἰς Ἀγέσταλαν sive Ἐγεσταλαν delisse autumat. Consentiet enim cum Thueydide, si παραπλεύσαντες εἰς Ἐγέστην Segestam versus navigantes vertentis. Ita Hyccara in potestatem redigere, et dein Segestam appellere potuere, quod eos belli Peloponnesiaci scriptor factitate prodidit. Occupatum autem id fuisse oppidum Chabria Archonte significat Schol. ad Plut. v. 179. Aristophanis. WESS. Recipienda erat autem Ὑκαρα forma, quam boni libri aut exhibent aut demonstrant. Ὑκαρς enim piscis, unde nomen oppido inditum narrabat Timaeus apud Athenaeum VII. p. 327. b, ita scribitur tum Athenaei in libris p. 284. c, 327. a b c, etiam urbis per simplex x scriptae vestigia servantibus p. 327. b, 589. a cum Thueydideis nonnullis VI. 62., Plutarchi uno et altero Alcib. c. 39., et Vratislaviensi Stephani B. sub Ἐνκαρπία et Ὑκαρα, tum Hesychio v. ὕκος vel ὕκαρς.

545. 70. Ἀλλ' ἰζομέους ἀπὸ τῶν ὀπλῶν] Procul a castris, ubi eorum arma ex Thucydide VI. 64. ἔλεγε δέ (nuncius a Nicia submissus) τοὺς Ἀθηναίους ἀλλ' ἔσεσθαι ἀπὸ τῶν ὀπλῶν ἐν τῇ πόλει, ubi Portus. Explicat Plut. Nic. p. 533. D. WESS.

546. 82. Τοῦ τε Ὀλυμπίου νόμοι κατέστησαν] Thucydidi Ὀλυμπίειον, variantibus tamen libris, L. VI. 65., quae eadem discordia infr. L. XVI. 69. Plutarcho, Polyaeo, Dioni Chrystomo, Philostrato, hoc Syracusanum et aliud Atheniensium Iovis templum Ὀλύμπιον. Apud Pausaniam nunc Ὀλύμπιον modo Ὀλυμπίειον, monente Sylburgio in L. II. p. 171. Atque hoc scriptorum dissensu cum eo in templo tum aliis motum arbitror Grammaticum Eugenium, ut libro περὶ τῶν τεμενιῶν inquireret, utrum praestaret? Testis Suidas in Εὐγένιος. Porro de occupato Olympio non plane adsentit Thucydid. VI. 71. WESS.

546. 88. Καθ' ἣν οἱ Ἀθηναῖοι etc.] Vide Plut. Nic. p. 533. E. et Thucydid. VI. 72. WESS.

546. 95. Πολυχορόνιον γὰρ ἔσεσθαι τὴν πολιορχίαν] Delevi ἐπελάμβανον ex glossa natum. Recte subintelligetur id aut similis generis aliud, ut saepe. Vid. Gronovium in Herodoti L. I. 75. et Niciae epistolam apud Thucydid. VII. 11. WESS.

546. 2. Τῷ ἀνελόντι Διαγόραν — ἐπεκίρυσαν] Additum decreto erat, τῷ δ' ἀγαρόντι δύο, ut Schol. docent in Aristoph. Aves v. 1072., quamquam poeta, qui cum maxime fabulam illam docuit, praeteriit. Elegans autem ἐπιεκίρυσεν τινὶ ἀργύριον, cum pecunia publicae per praeconem praemii loco illis constituitur, qui proscriptum obtruncant. Noster L. XIV. 8. ἐπεκίρυσαν δὲ καὶ χρημάτων πλῆθος τοῖς ἀνελούσι τὸν τύραννον. Appianus L. V. Bell. Civil. p. 1164. καὶ χρήματα τῷ κτείναντι καὶ ἐλευθερίαν ἐπιεκίρυσαν. Plenius Lysias in Andocid. c. 6. ἐπιεκίρυσαντες τάλαντον ἀργυρίον δόσαν τῷ ἀπάγοντι ἢ ἀποκτείναντι. De Diagora porro, iurene an iniuria illis sit transcriptus, qui Deum ac providentiam de rerum natura tollunt, dubitasse veterum Christianorum plures, nota res est. Vide eum Mureto Var. Lect. L. X. 17. Io. Alb. Fabricium Bibl. Graec. L. II. 23. 16. WESS.

546. 4. Λαβίνους ἔξεπολιόρυσαν] Forte Λαβίνους, Lavicos. Rhod. Λαβίνους] Certissima Rhodomanni correctio ex Livio L. IV. 47., quamquam gloria instaurati loci debetur Pighio in Fast. ad ann. cccxxxv. Placuit eadem, et qui potuit aliter? Ph. Cluverio Ital. Antiq. L. III. p. 948. Ego vero triumviris his contra veteres libros adstipulor. WESS.

546. 8. Γάϊον Σερούλιον] Livius L. Serrilium Structum et mox Sp. Rutilium Crassum L. IV. 47., ubi Rutilium in Veterium haud iniuria ex Nostro convertunt Sigonius et Pighius in Annal. ad ann. cccxxxvi. WESS.

546. 16. Μετὰ Γυλίππον Πύθην] A recto Πέθης, quod

c. 13. reperies. Thucydidi semper ὁ Πυθῆν L. VI. 104. VII. 1. WESS.

546. 17. Προαπέστειλαν εἰς Σικελίαν] Ita refinxerat in Addend. notarum suarum Rhodomannus, cui, quoniam scriptus Codex favet, non pugno. Nota alioqui praepositionum enallage est, qua Thucyd. VII. 17. ἀποστελοῦντες ὁλίτας ἐν τῇ Σικελίᾳ. Et Pausan. extremo L. III. ὅτε ἐν Σπάρτῃ ἐπὶ τὸν Ἐρμιόνης ἀπίει γάμον. Vid. diligentissimi Sylburgii Praefat. p. 932. WESS.

547. 27. Ἐξ Ἐγέστης] Optime schedae veteres: namque Aeginae inportuna hic mentio. Vide modo Thucydidem L. VI. 98., qui numerum equitum ἰσκι ampliolem fuisse negat. Quare Noster aut Philistum aut Timaeum aut alium sibi ducem in his legit. WESS.

547. 37. Καὶ τὴν καλουμένην Πολίχνην] Erat propter Olympium parva haec urbs. Ἡ ἐν τῷ Ὀλυμπίῳ πολίχνη in Thucyd. VII. 5. Diodorus L. XIV. 72. φρούριον τὴν καλουμένην πολίχνην vocat. Conf. Ph. Cluverium Sicil. Antiq. L. I. p. 179. WESS.

547. 53. Λάμαχος ὁ τῶν Ἀθηναίων — ἐτελεύτησε] Stat a Nostri partibus Iustinus L. IV. 4., non item Thucydides, Lamachum L. VI. 101. occubuisse referens ante Gylippi in Syracusanam urbem adventum, a quo nihil dissentit Plut. Nic. p. 534. F. Sed hoc iam animadvertit doctissimus Wassius. WESS.

547. 62. Καὶ δι' ὅλης τῆς Ἐπιπολῆς etc.] Ita c. 11. παρεισπεσόντες ἐντὸς τοῦ τειχίσματος τῆς Ἐπιπολῆς. Alias τὰς Ἐπιπολὰς cum Thucydide, Livio, Plutarcho atque aliis adpellare adsuevit. Situm designat Thucyd. VI. 96. WESS.

547. 73. Πυθόμενοι δὲ οἱ Ἀθηναῖοι τὴν παρουσίαν αὐτῶν] Facit scriptorum Codd. discordia, ut dubitem, utrum hanc sedem tueri Athenienses possint. Siculi, οἱ Σικελοὶ, patronos habent optimae fidei libros, quibus album calculum si adponas, dicendum erit, interiora Siciliae incolentes Siculos, Atheniensium partibus studentes, in collectam hanc a Gylippo manum irruisse. Et constat Siculorum plures in has partes transiisse ex Thucydide L. VI. 103., qui quidem de Gylippi per Siciliam, ut socios conquireret, itinere L. VII. 7. et c. 21., sed nihil de clade. Firmat tamen suspicionem Siculorum illis insidiis, quas alio tempore, a Nicia illectos, Syracusanorum sociis struxisse prodidit L. VII. 32. WESS.

548. 79. Τὰς δ' ἀναπήρους ἐποιοῦντο] In omnibus nostris exemplaribus legitur, τὰς δ' ἀναπήρους ἐποιοῦντο. in omnibus ergo mendosum hunc locum esse dico; at castigatum iri legendo ita, τὰς ἀναπήρας ἐποιοῦντο. Quoniam autem non passim obvia est vox ἀνάπειρα, ideoque paucis intellecta, utpote in vulgatis Lexicis nequaquam ut par est exposita: locos proferam ex qui-

bus eius usus aperte cognosci possit. Polybius apud Suidam, τῶν δὲ ναυτικῶν δυνάμεων κατὰ θάλατταν ταῖς ἀναπείραις καὶ ταῖς εἰρησεύαις ἐγύμναζον. Citat vero idem Suidas et hunc locum, sed eius authorem non nominans, κατασπᾶν τὰς ναῦς, τὰς ἐπιρησεύαις ἐμβιβάζειν, καὶ τῆς εἰρησεύαις ἀνάπειραν λαμβάνειν, παρόλκοντα τὸν χρόνον ἐπίτηδες, ἕως τὰ παρὰ Ῥωμαίων αὐτῷ γένηται γαυροῦ. Sed cur non ipsemet potius Diodorus exempla quae habet nobis suppeditet? Ita enim ille p. 350. (c. 38. huius libri) circa principium, οἱ τὸν στόλον εἰς Σάμον ἀθροίσαντες ἐγύμναζον τοὺς στρατιώτας εἰς ναυμαχίαν, καθ' ἡμέραν ἀναπείρας ποιοῦμενοι. In eadem non procul a fine: Ἀκεδαιμόνιοι δὲ θεωροῦντες τοὺς πολεμίους τὰ πρὸς τὴν μάχην ἐτοιμαζομένους, καὶ αὐτοὶ πένθ' ἡμέρας ἀνάπειραν ποιοῦμενοι, καὶ γυμνάσαντες τοὺς ἑρέτας, ἐξετάζαν τὸν στόλον εἰς ναυμαχίαν. Hinc vero et verbum ἀναπειρᾶσθαι pro ἀνάπειραν seu ἀναπείρας ποιῆσθαι. Thucyd. L. VII. c. 7. οἱ τε Συρακούσιοι ναυτικὸν ἐπλήρουν, καὶ ἀναπειρῶντο. ubi scholiastes debuerat de hac peculiari huius verbi significatione nos admonere, nec contentus his expositionibus esse, ἀναπειρῶντο, ἐμελέτων. Quibus ex locis nemo non perspicere queat quam apta (idque cum exigua mutatione) futura sit lectio haec, τὰς ἀναπείρας ἐποιοῦντο. Scio tamen doctissimos quosdam viros, quum diu multumque in restituendo hoc loco se torsissent, tandem in ea sententia fuisse ut putarent nulla sinceræ lectionis hic superesse vestigia. At enim qui poterant magis servari quam ex ἀναπείρας faciendo ἀναπήρους. Quidam autem (alioqui eruditissimus et ipse) locum hunc interpretans, ἀναπήρους depravatam esse aut dissimulavit, aut certe non animadvertit. Atqui, ut liceret ita loqui ἀναπήρους ναῦς ποιῆσθαι, quorsum id pertineret? STEPH. Τὰς ἀναπείρας cum H. Stephano legendum. Vera tamen lectio fuerit, si pro ἐποιοῦντο reposueris ἐναυπηγοῦντο, mutilatas resarciabant. RHOD. Τὰς ἀναπείρας ἐποιοῦντο] Sagaci coniectura verum H. Stephanus, quicum nollem dissensisset in re certa Rhodomannus, assecutus est. Loquendi genus, etsi dubium post Stephani hanc curam esse non possit, stabiliam Polybio auctore, qui de Romanorum Consule Lutatio L. I. 59. ἀλλ' ἀν' ἐκάστην ἡμέραν ΑΝΑΠΕΙΡΑΣ καὶ μελέτας ΠΟΙΩΝ τοῖς πληρώμασιν οἰκείως τῆς ἐπιβολῆς. Et L. IV. 2. de Philippo, καὶ συνεχεῖς ΠΟΙΟΥΜΕΝΟΣ ΑΝΑΠΕΙΡΑΣ, ἐγύμναζε τοὺς φελαγγίτας καὶ συνεδίθεε ταῖς εἰρησεύαις. Noster, cui Polybianam dictionem imitari in more positum, paullo diversiore modo L. XV. 3. καὶ συνεχεῖς διαπείρας καὶ γυμνασίας ποιοῦμενος ἠτοιμάζετο etc. Hinc ἡ τῶν πλοίων ἀνάπειρα cum naves in mare deducuntur, ut et earum et remigum periculum fiat, et ἀναπειρᾶσθαι τοῖς σκάφει in Polybii Excerpt. Leg. LX. Demosthenes Orat. de Steph. Trierarch. p. 676. ἐπεπλήρωτό μοι, καὶ πάντες ἐωρᾷθ' ἑμεῖς ἀναπειρωμένην τὴν ναῦν. Quae quidem veterum loca, si calamo

exaratorum librorum auctoritas defuisset, facile a me inpetrassent, ut id, quod amplexus sum, tenerem. WESS.

548. 90. Τάλαντα ἑκατὸν τεσσαράκοντα ] Thucyd. VII. 16. εἴκοσι τάλαντα ἀργυρίου· praeterea περὶ ἡλίου τροπᾶς τὰς χειμερινὰς Eurymedontem esse missum in Siciliam versus: quod posterius heic quoque olim significatum fuisse arbitror. Nam quae succedunt περὶ δὲ τὴν χειμερινὴν ὥραν hibernum expostulant manifesto tempus. Itaque huic loco contra ac L. V. 41. evenit, ubi τοῦ θερμοῦ sedem violentissime invaserat ὁ χειμερινός. WESS.

548. 98. Ἐτη δυοκαίδεκα ] Congruunt concorditer scripti Codd., nec movent quicquam. Bellum hoc est *Decelicum*, quod si in XII annos fuerit tractum, prorogatum ultra anarchiam est Olymp. XCIV. 1., quo Peloponnesiacum desiisse bellum constat inter omnes. Praeterea decem continuos annos Spartani, δέκα ἔτη συνεχῶς, postquam arma iterum induerant, Athenienses infestant, Isocrate in Except. adversus Callimach. p. 561. teste. Aut ergo hī numeri librorum flagitio auctiores iusto sunt, aut aliud auctor belli eius principium commentus est. Mecum sentit H. Dodwellus Ann. Thucyd. p. 197. WESS.

548. 2. Κοίντός τε Φάβιος ] Deest Livio L. IV. 47., sed hinc atque ex Capitolinis fragmentis, ut Sigon. et Pighius docuerunt, revocandus. WESS.

548. 8. Δεκελικὸν προσαγορευθῆναι ] Πόλεμος Δεκελικὸς in Orat. Isocrat. de Pac. p. 244. et Plataic. p. 444., atque apud Demosthen. Androt. p. 386. Πόλεμος Δεκελικὸς Strabon. L. IX. p. 607., quo modo Δεκελικὸν ὄξος atque alia, de quibus L. Holsten. ad Stephan. WESS.

548. 11. Ὀγδοῦκοντα μὲν τριήρεις ] Thucyd. VII. 20. ἑξήκοντα, καὶ πέντε Χίαις, quem vide de militum quoque numero. WESS.

549. 21. Ἐπὶ τὰ τῶν Ἀθην. ὀχυρόματα ] In Plemmyria posita describuntur a Thucydide, praelii huius ordinem haud paullo aliter exsequente L. VII. 22. seq. WESS.

549. 47. Εἰσπλέοντες ταῖς τῶν Ἀθην. ναυσὶν ] Praeferrem ἐπιπλέοντες, ut paullo ante ἐπέπλεον τοῖς πολεμίοις, et alias saepe. Contra ea in Thucydide L. VIII. 99. πρότερον δὲ ἐν τῷ αὐτῷ θέρει τῷδε ἑκκαίδεκα ἐς αὐτὸν νῆες ἐπέπλευσαν, malletm cum Cod. Gr. ἐπέπλευσαν. id enim usitatissimum de navibus, quae in pontum Hellespontumve pergunt. Ipse Thucydides L. IV. 75. καὶ οὐ πολὺ ὕστερον ἐς τὸν Πόντον ἐσπλεύσας. Et L. VIII. 100. ἐς τὸν Ἑλλήσποντον ἐσπλεύσας. Isocrates Trapez. p. 530. ἐπιστέλλει δὲ τοῖς ἐνθάδ' ἐπιδημοῦσιν ἐκ τοῦ Πόντου — καὶ αὐτὸν εἰσπλεῖν κελεύειν. et pluribus ea in Oratione locis. WESS.

549. 49. Ἀρίστωνος τοῦ Κορινθίου ] Illustrata Aristonis hoc bello virtus enituit egregie, quamquam huius consilii auctorem

non perhibuit Thucydides L. VII. 36. Vide eius libri c. 39. et Polyaen. de Stratagem. L. V. 13. WESS.

549. 54. *Ἰὼ συνέβαιεν — ἐμβολὰς τιτρώσκειν*] *Rostra* interp., ut apud Xenoph. L. IV. Hellen. p. 404. *αὐτὸν δὲ συμμιζῶντα τοῖς πολεμίοις ἐμβολὰς ἐχούση τῇ τριήρει*, II. Steph. Thes. T. I. 679. *monitore. Retine ergo, si animo allubescat, tametsi necessarium quidem non est, ut nec in his Aeschyli Pers. v. 415.*

*Αὐτοὶ δ' ὑφ' αὐτῶν ἐμβολαῖς χαλκοστόμοις  
Παίοντο. —*

Utrobique impressionem, *σὺγκρουσιν καὶ προσάραξιν τῶν νεῶν*, quo modo Critici Graeci, exprimere poterit. Vide ad L. XI. 27. WESS.

550. 64. *Ἐπειδὴ δὲ τινες*] Videtur *ἔπειτα* magis huic loco convenire quam *ἐπειδή*. nam cum *ἐπειδή* suspensa relinquitur sententia. STEPH.

550. 67. *Καὶ συνέστη* etc.] Vacat copula. Trierarchi, qui hoc in praelium Niciam invitum coniecerunt, Menander et Euthydemus erant in Plut. Nic. p. 536: E. WESS.

550. 88. *Πλείους τῶν τριακοσίων δέκα*] Optime omittitur postremum vocabulum a Reg. I. et Vat. qui si priorem quoque numerum minuissent, solidam abstulissent laudem: neque enim dubium est, quin turpiter sit foedatus. Namque toto hoc bello Athenis non ultra cc triremes in Siciliam properarunt, Nicolao in Oratione sua teste infr. c. 21. Praeterea Demosthenes et Eurymedon *ἐπὶ νεῶν ἐβδομήκοντα καὶ τριῶν* copias auxiliares adduxerunt apud Plut. Nic. p. 537. A. ex Thucyd. VII. 42. Fieri quidem potest, ut Diodorus, alios secutus, naves plus lxxiii Demosthenis atque Eurymedontis imperio subiecerit, nec trecentas tamen. Maneat ergo sua in sede corruptior scriptura, donec aliunde uberior lux adfulgeat. WESS. Quod Strothius reponendum vidit *ὀγδοήκοντα* (*π'* pro *τί*) etsi Thucydidis Plutarchique numeris non satis respondet, plane tamen convenit Diodoro ab ipsis Atheniensibus octoginta naves decretas scribenti cap. 9. Reliquae igitur ab sociis additae sunt.

550. 2. *Ἐντὸς τοῦ τεγίσματος τῆς Ἐπιπολιῆς*] Vide supr. c. 8. et Thucydidem VIII. 44., nocturnum hoc certamen diligentissime declarantem. WESS.

550. 11. *Μετὰ δώδεκα τριήρων*] Imo xv, si non fallunt Thucydidis verba L. VII. 46. WESS.

551. 17. *Λοιμικῆς καταστάσεως*] Dixi L. V. 82. Loci ingenium, quem castris occupaverant ad Syracusas Athenienses, describitur cum cura L. XIV. 70. WESS.

551. 22. *Καθημένους εἰς Σικελίαν*] *Ἐν Σικελίᾳ* in notarum auctario Rhodomannus, quo nihil hoc quidem loco indigemus. Permutantur haec praepositiones, altera in alterius locum suc-

cedente. Infra c. 89. ἔσπερον εἰς Λεοντίονος κατήχησαν. Et L. XIV. 117. ἐν ᾧ καὶ τὸ χρυσίον ἦν, ὃ εὐλίφεισαν εἰς Ῥώμην. S. Lucas A. A. VIII. 40. Φίλιππος δὲ εὐρέθη εἰς Ἄζωτον. Philostratus Vit. Apollon. L. V. 42. προσελθὼν δὲ τῷ Ἀπολλωνίῳ, καθήμενῳ εἰς τὸ ἱερόν. Ex Pausania huius generis haud pauca conguessit laboriosissimus Sylburg. Praefat. p. 932. Add. superius L. III. 44. WESS.

551. 30. Οἱ μὲν τῷ Δημοσθένει etc.] Videndus Thucyd. VII. 47. et seq. WESS.

551. 46. Ὅταν σημήνη] Plenius Thucydides ὅταν τις σημήνη L. VII. 50. et Auctor de Mundo c. 6., sed aliter defectum explens, ἐπειδὴν ἡ σάλπιγξ σημήνη τῷ στρατοπέδῳ, quod est, cum tuba bellicum cecinit, ex versione philosophi Madaurenensis. WESS.

551. 53. Τὰς εἰθισμένας τρεῖς ἡμέρας] Superstitione quadam inter Graecos valuerat, ut proximos a solis et lunae laboribus dies tres pro atris et infaustis putarent. Docuit Autoclides in Ἐξηγητικοῖς, seu Commentariis, quibus prodigia explicuit, apud Plut. Nic. p. 539. At Nicias, ut erat mire religiosus, ab imperitis interpretibus expugnatus, τρεῖς ἐννέα ἡμέρας dies xxvii cavendos censuit, ni fallat Thucydides L. VII. 50. Qua suspicione etsi eum liberasse videatur Plutarchus, ἄλλην σελήνης περίοδον Niciam exspectandam opinatum memorans, non desunt tamen causae, quae Thucydidis libros iam Plutarchi aetate depravatos fuisse significant. Et primo quidem disertum nostri auctoris testimonium, tum Autoclidis sententia, denique rei gestae eventus. Sed vide H. Dodwelli Annal. Thucyd. operosius in his versatos, p. 207. WESS.

551. 59. Ἐβδομήκοντα καὶ τέσσαρας] Duas addit Thucyd. VII. 52. WESS.

551. 65. Ἀγάθορχος] Hunc et Sicanum et Pythenem sequenti praelio Thucydides L. VII. 70. classi Syracusanae praeficit: neque inpedit tamen, quo minus et hoc eius curam gesserint. WESS.

552. 76. Τὸν Δάσκιον μὲν καλούμενον] Vicinum sibi eiusdem nominis habebat vicum seu castellum, quo de L. XIV. 72., unde et sinui, ut arbitror, nomen. Locus fuisse olim videtur arboribus egregie vestitus, sive σύνδενδρος, qualem δασχὸν, et δάσκιον vocabant. Nam δασχὸν, Hesychio auctore, est δασύ, uti δάσκιον, σύνδενδρον καὶ δασύ. Aliter S. Bochartus, Arabes et Phoenices auxilium arcessens, de Phoen. Colon. L. I. 28. WESS.

552. 79. Καιρίε πληγῆ] Καιρίῳ R. 1. Co. Vide not. in L. IV. 16. WESS.

552. 92. Κληματίδων καὶ δάδιων etc. πληρώσας] Ex Thucydide VII. 53. Noster L. XIII. 84. καὶ τοῖς ἐπὶ τῶν ἐργαστηρίων σχίδακας καὶ κληματίδας (ἴδωκε). Preces trium iuve-



num, Danielis vaticiniis addi a Graecis solitae, vers. 22. *καίων-  
τες τὴν κάμνονον νάφθαν καὶ πίσσαν καὶ στυππῖον καὶ κλημια-  
τίδα*. Appian. Bell. Civil. L. I. p. 643. *ξύλινα ὄντι τῷ τεύχει κλη-  
ματίδας περιτιθεῖς, μετὰ τὴν ὥραν ὑφῆπτεν*. Prave ibi κλημια-  
τίδας edunt. Cremia sarmentorumque fascies sunt. WESS.

552. 4. *Ὁὐκ ἐλάττους τῶν διαχιλίων*] Generalius defun-  
guntur Thucydides L. VII. 53. et Plut. Nic. p. 539. C., multos  
periisse tradentes. WESS.

552. 13. *Ἐν ἡμέραις τρισὶ τοῖς ἔργοις etc.*] His errore  
inesse suspicatur H. Dodwellus, auctoris negligentia admissum:  
scriptorem, quem excerpserit, memorasse, portum tertio a lunae  
deliquio die fuisse obstructum; id nostrum aliter atque oportuerat  
accepisse. Praeterea Thucydidem L. VII. 56. et 59. docuisse,  
Syracusanos mox a praelio, quo Eurymedon cecidit, portum oc-  
clusisse, *ἔκλειον οὖν τὸν λιμένα ΕΥΘΥΣ τὸν μέγαν*, Annal. Thu-  
cyd. p. 208. At non persuadet. Nam Thucydideum ΕΥΘΥΣ ma-  
turatum quidem opus indicat, non uno die absolutum. Consideras-  
set portus illud ostium octo ferme fuisse stadiorum, quod Thucy-  
didi L. VII. 59. ac credimus, et vidisset in summa etiam festina-  
tione plus uno die ad eius obstructionem fuisse opus. WESS.

553. 19. *Τοὺς ἐπὶ ταῖς ἡγεμονίαις τεταγμένους*] Alias pa-  
trium casum in hoc genere amplectitur. Infra c. 97. de Thrasy-  
bulo, *ὅς ἦν ἐπὶ τῆς ἡγεμονίας ἐκείνην τὴν ἡμέραν*. Et c. 84. *οἱ  
ἐπὶ τῶν ἐργαστηρίων*. Sic ὁ ἐπὶ τοῦ Πειραιῶς Diogenes II. 127.  
Add. superius L. XI. 15. Latine Petronius Satir. c. 30. *unus  
ex pueris, qui super hoc officium erat positus*. Vide N. Hein-  
sium ad Curtii L. VI. 11. WESS.

553. 20. *Ἐμβιβάσαντες*] *Ἐμβιβάσαντες*. RHOD. *Ἐμβι-  
βάσαντες*] Rhodomannus recte. Vitium recurrit saepenumero,  
ut vel hoc libro c. 77. *Μοx τριήρεις πέντε λειπούσας τῶν ἐκατὸν  
εἴκοσι* sicuti L. I. 5. *ἔτη δυοὶ λείποντα τῶν χιλίων etc.* atque  
in Polybio III. 22. *τριάκοντα ἔτεσι λείπουσι δυοῖν*. Porro trire-  
mes centum duntaxat et decem instructas fuisse Thucydides L.  
VII. 60. et Plut. Nic. p. 539., aut etiam paullo minus, adfirmant.  
Vide mox c. 17. WESS.

553. 26. *Τὰς ὑπηρετικὰς ἔχοντες ναῦς παῖδες ἔλ.*] Minora  
sunt navigia, ad varia in praeliis ministeria apta. *Τὰ ὑπηρετικὰ  
L. XIV. 60. XX. 50., et ὑπηρετικαὶ L. XX. 82.,* quemadmodum  
et Arrianus atque Appianus in Scheffer. de Nav. Milit. II. 2. Hoc  
autem, quod de pueris, Athenienses lacessentibus, commemoratur,  
superiore certamine usu venit, ni fallat Plut. Nic. p. 539 quod  
opinor. WESS.

553. 32. *Τοῦ παντὸς πολέμου τὴν κρίσιν λαμβάνοντες*] *Ἡ  
κρίσις τοῦ πολέμου* ultimum exprimit belli discrimen, quod  
aut victoria, aut certa pernicie terminatur. Dionysius Ant. Rom.  
L. IX. p. 592. *ἰσόρροπός τε καὶ μέγχι πολλοῦ ταλαντευομένη*

τῆδε καὶ τῆδε ἢ κρίσις τοῦ πολέμου. Itaque λαμβάνοντες non aliud hoc quidem loco est, ac ὑπολαμβάνοντες. Vide ad L. XVII. 82. WESS.

553. 40. Ἐκαστον δὲ τῶν τριηράρχων ἐξ ὀνόματος etc.] Niciae orationem, ab hoc eius argumento in haud paucis diversam, pete ex Thucyd. L. VII. 61. et seq. WESS.

553. 42. ἐδεῖτο πάντων εἶναι πρότερον ἢ τὸ νῦν ἀντιλαβέσθαι τῆς μόνης καταλειμμένης ἐλπίδος] Quod mihi scripsisse Diodorus videtur εἰ καὶ πρότερον ποτε, νῦν, cum eo comparanda tum Niciae verba apud Thucyd. VII. 64. κατῆροῦσατε, εἴπερ ποτέ ἰψίουςque Thucyd. VII. 70. περὶ τῆς ἐς τὴν πατρίδα σωτηρίας νῦν, εἴ ποτε καὶ αὐτίς, προθύμως ἀντιλαβέσθαι, tum Diodori Exc. Vatic. p. 99. παρακαλέσας τοὺς στρατιώτας, εἰ καὶ ποτε, νῦν ἀνδραγαθήσαι satis similia Aristophaneis Thesmoph. v. 1157. εἰ καὶ πρότερόν ποτ' ἐπικύω ἦλθετον, νῦν ἀγίζεσθον.

553. 49. Ἀξίους φανῆναι τῶν στεφάνων] Praemia sunt atque ornamenta, quae publice ob rem bene gestam inpetraverant. Cultissime Euripides Troas. v. 400.

Φεύγειν μὲν οὖν χορὴν πόλεμον, ὅστις εὔφρονεῖ.  
 Εἰ δ' εἰς τόδ' ἔλθοι, στέφανος οὐκ ἀσχορὸς πόλει,  
 Καλῶς ὀλέσθαι. —

Frequens inde στεφανοῦν ἀντὶ τοῦ τιμῆν, ut alias videbitur. Confer Harpocrat. in Στεφανῶν. WESS.

553. 55. Παιανίσαντες ἔπλεον] De duplici paeane, altero ante pugnam in Martis honorem, altero parta victoria Apollini cantato Schol. Thucyd. I. 50. et IV. 42. Prior intelligitur in Euripid. Phoeniss. v. 1109.

Παιὰν δὲ καὶ σάλπιγγες ἐκελάδουν ὁμοῦ  
 Ἐκεῖθεν, ἐκ τε τειχέων ἡμῶν πάρα. WESS.

554. 65. Ἐνθα δὲ παραβόλως ἀμφοτέρων etc.] Vide Thucyd. VII. 70. WESS.

554. 76. Σιδηρᾶς χεῖρας ἐπιβάλλοντες] Usi potissimum his sunt Athenienses, Thucydide indicante VII. 65. quarum saepe Noster navalibus in praeliis meminit. Vid. infra c. 50. 67. 99. XVII. 44. et Olearium in Philostrati L. I. Icon. p. 792., quamquam is pleraque debet Io. Scheffer. Milit. Nav. II. 7. WESS.

554. 87. Ἀντάνδρος ἐπὶ τῆς θαλάττης κατεπίνετο] Cum hominibus, ut Caesar L. I. Bel. Civil. c. 58. Auctor frequentissime usurpat. Loca conduxit Lazar. Bayfius de Re Naval. p. 625. ed. Gron. WESS.

554. 98. Ἄμα δὲ καὶ τῆς χρονγῆς τῶν ναυμαχούντων etc.] Commodius videtur τῆ χρονγῆ, si artissime coniungatur τῷ συμλοτιμοιμένον. Alioqui hiulca erit oratio. WESS.

554. 5. Ἐπαιάνισον] Perinde est hoc retineas an ἐπαιάνισον ex Coisl. adsciscas. Probum enim utrumque; quo fit, ut librarii permutent saepissime. Vide Strabon. L. III. p. 251. Plut.

Thes. p. 10. A. et de Musica in fine, Appian. l. V. Bell. Civil. p. 1134. Alia Cl. Duker. in Thucyd. l. I. 50. WESS.

555. 18. *Εἰ διὰ τῆς γῆς — νομίζουσιν*] Confer not. Cl. T. Hemsterhusii in Luciani Timon. c. 33., et de re ipsa Thucyd. l. VII. 70. WESS.

555. 33. *Κινδυνεύόντων Ἀθηναίων*] Quam hic omittunt Ἀθηναίων vocem calamo exarati Codd., maluissem hoc quidem loco servassent, neglexissent autem cum addito articulo post pauca: ibi enim sine ullo sententiae intertrimento deerit. WESS.

555. 42. *Ὡς ἂν Ἀττικῶν μὲν νεῶν — ἐξήκοντα*] Athenienses triremibus cxv, sive, ut Thucydides, cx, pugnam hanc ingressi sunt; qua finita cum l, aut prope lx, quemadmodum Thucydides ait, victis superarint, convenit utique numerus. Syracusanis sub praelii initium naves erant lxxiv, teste Nostro c. 14. Restabant parta victoria ad l, apud Thucyd. VII. 72. Porro *παρὰ — τοῖς Συρακουσίοις* scribere alias solet. WESS.

555. 52. *Κατὰ τάχος πληροῦν τὰς τριήρεις*] Salubri huic consilio nautas, quorum animi superiore clade infracti erant, obstitisse Thucydides l. VII. 72. docet. WESS.

555. 64. *Πάντας δ' ἐπὶ τῆς μάχης κατακόπους*] Accedebat festus Heracles dies, ob quem et victoriam Syracusanorum plerique ἐν θυσίαις καὶ πότοις, sicuti apud Plut. Nic. p. 540. recte viri docti legunt, erant occupati. WESS.

555. 71. *Τῶν Λεοντίνων τινὰς εἶναι*] Aliter Polyæn., ab Is. Casaubono optime castigatus, de Stratag. l. I. 43. 2., et Thucyd. VII. 73. Mox ἀπεσταλκότας ex Reg. I. nec pravam nec necessarium est. WESS.

555. 73. *Ὅπερ εἰ μὴ παρεκρούσθησαν*] Videtur ὅπου aptius esse huic loco quam ὅπερ. STERH. Neutrum mihi satis aptum videtur. Praeferrem ὅπερ εἰ μὴ etc. *qua quidem re nisi decerpti fuissent.* WESS. Ὅπερ tuitus est Wakefieldus ad Lucret. l. 222.: atque ὅπερ ἐὰν εἴ γρονῶν τεγγάνης, γρόμην λάβε sic dixit Phalaris p. 8. similiterque Appianus vol. I. p. 530. 81. ed. Schw. ὅπερ ἔστι πολλοὺς ἰδεῖν ἀλογώτερος γυρομένους ἑαυτῶν, ab Valesio in ὄσπερ mutatum. Diodorus nusquam ita nisi in Exc. Photii p. 543. 6. ὅπερ οἱ ἐγγενεῖς ἐπέλαβον κρίσιν οὐκ ἔσεσθαι τῶν κακῶν.

556. 75. *Τῆς ἡμέρας ὑποψωσοῦσης*] Sic huius l. c. 111. ἤδη τῆς ἡμέρας ὑποψωσοῦσης, ubi tamen itidem scriptae schedae ἐπιψωσοῦσης. quo modo praeter S. Matth. XXVIII. 1. τῇ ἐπιψωσοῦσιν εἰς μίαν συμβάτων. et S. Lucas Evang. XXIII. 54. καὶ σάββατον ἐπέψωσε. In Aristotelis Probl. sect. XXV. 5. διὰ τί ὑποψωσοῦσις ἔω editur, nec constanter tamen. Ὑποψωσοῦσης in aliis est, Sylburgio monente, et διὰ τί ὑπεπιψωσοῦσιν Problem. sect. VIII. 17. WESS.

556. 81. *Προήεσαν ἐπὶ Κατάνης*] Non muto. Thucyd. VII. 80. ἦν δὲ ξίμπισσι ὁδὸς αὐτῆ οὐκ ἐπὶ Κατάνης. Pausanias II. 3. αὐδὲς δ' ἰοῦσιν ἐπὶ Λεχάϊον τὴν εὐθείαν etc. passimque alii. WESS.

556. 83. *Τὰς καταληφθείσας ναῦς*] Doctissimus Interp. *καταλειφθείσας* sua versione expressit, nec male profecto. Quid enim tritius harum commutatione vocum? Vulgatum tamen si probaveris, interceptas atque occupatas Atheniensium triremes L intellige, quas Syracusani, victis in summa rerum desperatione non prohibentibus, funibus religatas abstraxerunt apud Thucyd. VII. 74. et Justin. L. IV. 5., sed qui navium numerum inmane quantum auget. WESS.

556. 91. *Διὰ τοῦ Ἐλωρίου πεδίου*] Ἐλώριος ἄγων Hesych., Ἐλωρινὴ ὁδὸς Thucyd. VII. 80. ubi doctissim. Wasse. *Tempe Heloria* in Fast. Ovidii IV. 477. cum nota Neapolis. Variant enim in urbis flaviique orthographia veteres, quamquam Ph. Cluver. Sicil. Antiq. L. I. p. 184. plerisque adspirationem addidit. Ceterum extremam hanc Atheniensium calamitatem, quoque modo Demosthenes, et quo Nicias in hostium potestatem devenerint, luculentissime exsequitur Thucyd. L. VII. 82. et seq. WESS.

556. 93. *Ἀπέκτειναν μὲν μυρίους ὀκτακισχίλους* etc.] De captorum numero Nostro ferme consentit Thucydides, οὐκ ἐλάσσους ἑπτακισχίλων L. VII. 87. memorans. At amplior caesorum fuit multitudo, si numerum XL millium aequarint, qui Nicia et Demosthene ducibus post infelix navale praelium iter sunt ingressi, quemadmodum eiusdem libri c. 75. proditum memoriae est. Sint sane plures fuga elapsi: de XV tamen millibus, cum Syracusani obseptis itineribus fugientes urgerent undique, haud iniuria dubites. Quare aut ab ita praestantissimo belli Peloponnesiaci scriptore Diodorus, aut, qui hic desunt ad explenda XL illa millia, surrepti ac suppressi a privatis sunt hominibus. Vide eius L. VII. 85. WESS.

556. 99. *Στήσαντες δύο τρόπαια* etc.] Ab his diversa, de quibus Plut. Nic. p. 541. D. τὰ μὲν κάλλιστα καὶ μέγιστα δένδρα τῶν περὶ τὸν ποταμὸν (Asinarum) ἀνέδησαν αἰχμαλώτοις πανοπλίαις. Haec enim imperatorum Atticorum armis, illa reliquorum videntur ornata ex more, de quo Euripidis Heraclid. v. 787. WESS.

556. 8. *Εἰς τὰς λατομίας*] Vid. Ph. Cluver. Sic. Antiq. L. I. p. 149. et Aelian. V. H. L. XII. 44. cum nota Perizon. WESS.

556. 11. *Λαμβάνειν ἀλφίτων δύο χοίτικας*] Haud quidem illud inhumane Diocles, siquidem homini χοίτιξ ἡμερήσιος τροφή seu in victum diurnum sufficiat apud Diogen. Laert. L. VIII. 18., ἡμεροτροφίς propterea dicta Alexarcho, Cassandri regis fratri, teste Athenaeo L. III. 20. Vereor tamen, quom Diocles victis fuerit acerbissimus, ne quid hic sit commissum. Praesertim quoniam

Thucydides L. VII. 87. et Plut. Nic. p. 542. in Iatomias depressis εἰς ἡμέραν ἐλάχιστην δύο χοτύλας χρυθῶν sive σίτου expensas referunt: quarum singulae cum tertiam choenicis partem aequarint, videtur parcior haec mensura atroci Dioclis sententiae congruere et choenices Diodori suspicione quadam maculae adspergere. Ceterum asperrimae sententiae auctor Plutarcho *Ἐύρωκλῆς*, prave, ut arbitror, dicitur. WESS.

556. 14. *Ὡς ἀλλοίαν ἐστὶ τοῦ νικῆν*] Paulo aliter in Plutarchi Nic. p. 540., eadem tamen sententia, *ὅτι τοῦ νικῆν χρυθῶν ἐστὶ τὸ καλῶς χρῆσθαι τῇ νίκῃ*. Namque is demum recte victoria utitur, qui eam ἀνθρωπίνως ἐνεργεῖν didicit. Vid. not. in L. I. 60. WESS.

557. 31. *Ἠγοῦμενος εἶναι δυστυχέστατος*] Conf. Cel. Iac. Gronovium ad Polyb. L. V. 100. WESS.

557. 44. *Εἰζότης ἄν — πικρῶς ἄν αὐτοῖς etc.*] Nemini molesta sit particula ἄν eadem in periodo repetita. Fit enim saepe. Vide Jos. Barnes. ad Euripidis Helen. v. 954. et L. Kuster. in Aristophan. Nub. v. 838. WESS.

557. 56. *Καὶ τὴν αὐτὴν ὑπεροχὴν*] Lego τὴν αὐτῶν ὑπεροχὴν etc. STEPH.

557. 58. *Μύρια μὲν εἰληγότας ἐκ Αἴγλου etc.*] Vid. L. XII. 38. WESS.

557. 63. *Ὅτ' ἀνὴρ οὐθεὶς ἐπανήλθεν*] Damnant Phrynichus Magisterque Thomas vocem οὐθεὶς, longaeque ab Atticorum elegantissimis relegant: id pati possum. Noster, qui eas in leges non iuravit, usurpat saepius. Mox *μηδὲν ἐπὲρ ἄνθρωπον etc.* et *οὐθεὶς γὰρ ἐστίν*. Plura collegit praestantissimus I. Fr. Reitz. in Lucian. Parasit. c. 3. Iam *μηδὲ τὸν ἀγγελοῦντα περιλειψθῆναι* sollemne scriptoribus est de magna clade. Exempla locutionis alias dare memini, quae ex Diodoro et aliis in cumulum congesta si requiras, confer viros eruditissimos Gebhardum et Drakenborchium in Livii L. IV. 10. WESS.

557. 68. *Μηδὲν ἐπὲρ ἄνθρωπον πράξετε*] Amat hoc genus auctor in rebus truculentis atque inhumanis. *Τυμοῖαι ἐπὲρ ἄνθρωπον roenae immanes* in Excerpt. Vales. p. 274. *Μηδὲν περὶ αὐτῶν ἐπὲρ ἄνθρωπον βουλευσασθαι* L. XIV. 106. Et cap. 111. eiusdem lib. *ἐπὲρ ἄνθρωπον πάσχειν, ea pati, quae conditionem humanam excedunt*. Tum Ecl. I. libri XXV. *μηδὲν ἐπὲρ ἄνθρωπον ἐπιτηδεύειν*, quod ex Polybio sumtum suo more mutavit: is enim L. I. 88. *μηδὲν ἀνήμεστον ἐπιτηδεύειν ἐκονστὸς pari sententia*. Diversum est Sophoclis Aiac. v. 774. *μὴ κατ' ἄνθρωπον ἡροικῆν*. Id ultra hominem spirare, quemadmodum de Iuliano Ammianus dixit. WESS.

558. 69. *Φορεῖσαι τὸν ἑποπεπωκότα*] *Supplicem*. Iterum Nicolaus c. 23. *τῶν πρότερον ἑποπεπωκότων ἀσθενέστεροι γίνονται*. Et post pauca *πάντες δὲ — εἴκουσι τοῖς ἑποπεπωκόσι*.

Plutarchus de Solert. Anim. p. 970. F. οὐκέτι γὰρ προσμύχονται τοῖς ὑποπεσοῦσι. Plenius Iosephus Antiq. Iud. L. XVI. 4. 4. ἐκείνων δὲ βουλομένων ὑποπεσεῖν ἐπὶ δεήσει, προαναλαβὼν et reliqua. WESS.

558. 88. Ἐπ' ἐλπίδι σωτηρίας] Non sequor Coisl.; recte adest praepositio. S. Paullus Epist. ad Tit. I. 2. ἐπ' ἐλπίδι ζωῆς αἰωνίου. Et I. ad Corinth. IX. 10. ὅτι ἐπ' ἐλπίδι ὀφείλει ὁ ἀροτριῶν ἀροτριῶν. Adde A. A. c. XXVI. 6. WESS.

558. 91. Ἀγνώμονες ἂν κληθεῖεν] Ita κύριοι ἀγνώμονες L. XI. 89. et τύχη ἀγνώμων infra c. 29. de inclementibus heris et fortuna. Contra εὐγνώμων καὶ φιλόμηνος in Excerpt. Vales. p. 238. et εὐγνωμοσύνη, εὐγνωμονεῖν hac ipsa in oratione. Aliam ἀγνώμονος potestatem declarat Schol. ad Demost. Olynth. II. p. 17. WESS.

558. 97. Καιροτηρήσαντες] Recurrit neglectum in Lexicis vocabulum L. XIX. 16., ubi καιροτηροῦντες τὰς μεταβολάς. Magis obvia καιροσφλακτεῖν et καιροσφλακτεῖν. Vid. Ioseph. XVI. Ant. Iud. c. 3. 3. et Liban. T. I. p. 355. A. Καιροσκολεῖν habet Palladius in Vit. Io. Chrysostomi p. 38. ed. Benedict. WESS.

558. 3. Ἐξ ἰδιώτου] Ctesiam, ut solet, sequitur: tamen ἐξ ἰδιώτου non ita districte accipiendum, ut post pauca de Gelone. Cyrus enim, etsi necdum deiecto Astyage privatus esset, βασιλικῶς a parentibus fuit eductus, regio etiam genere ortus. Vide Nostrum in Excerpt. Vales. p. 238. WESS.

558. 13. Τῆς Σικελίας ὅλης ἡγεμὼν ἐγένετο] Supr. L. XI. 26. WESS.

559. 19. Μὴ καταθρόνισμεν τὸν ὑπὲρ τῶν προγ. ἔπαινον] Nicias oratione ad Athenienses c. 15. huius libri, ἡξίον μὴ καταθρόνισμι τῆς πατρίδος τὴν περιβόητον δόξαν. Atque id bene: hic insolentior ὁ ὑπὲρ τῶν προγόνων ἔπαινος, cui tamen similis ἢ ὑπὲρ αὐτῶν μνήμη cap. 20. Utrobique sine damno, me quidem iudice, praepositio deficeret. Porro si qui γνώμην προσλαβοῦσα in praecedentibus malint, fruantur arbitrio suo. WESS.

559. 27. Τὰ μὲν οὖν ἐν τοῖς ὅπλοις πλεονεκτήματα etc.] Praeclare Cicero de bellicis C. Caesaris laudibus Orat. pro Marcello c. 3. Sed tamen eiusmodi res, nescio quomodo, etiam cum leguntur, obstrepi clamore militum videntur et tubarum sono. At vero cum aliquid clementer, mansuete, iuste, moderate, sapienter factum, in iracundia praesertim, quae est inimica consilio, et in victoria, quae natura insolens et superba est, aut audimus, aut legimus: quo studio incendimur, non modo in gestis rebus, sed etiam in fictis, ut eos saepe, quos nunquam vidimus, diligamus. Et cap. 2. Nihil sibi ex ista laude centurio, nihil praefectus, nihil cohors, nihil turma decerpit. quin etiam illa ipsa rerum humanarum domina, Fortuna, in istius se societatem gloriae non offert, tibi cedit, tuam se esse totam et pro-

*priam fatetur.* Quibus disertissimi Oratoris nulla parte inferiora sunt, quae Noster de Alexandro L. XVII. 38. WESS.

559. 33. *Τῶν ἄλλων ὑπερέχειν etc.*] Planius erit οἱ τῶν ἄλλων ὑπερέχειν — σεμννόμενοι, ut mox καὶ οἱ πρῶτοι etc. Animadvertit defectum Rhodomanus. WESS.

559. 35. *Καὶ οἱ πρῶτοι βωμὸν ἔλεον καθιδουάμενοι*] Haec solida Atheniensium gloria:

*Urbe fuit media nulli concessa potentum  
Arā deūm, mitis posuit Clementia sedem,  
Et miseri fecere sacrām. Sine supplice nunquam  
Illa novo: nulla damnavit vota repulsa.  
Auditi quicumque rogant, noctesque diesque  
Ire datum, et solis numen placare querelis.*

inquit Pap. Statius Theb. XII. 481. Prave in Philone editur de Exsecrat. p. 935. οἱ δ' ἔλον τοῦτον παρακαλυψάμενοι τὸν νόμον, τοὺς ἄλας, τὰς σπονδὰς, τὸν ΕΛΛΗΘΥ ΖΩΜΙΟΝ, τὴν ζουτὴν ἐστίαν, ἔξ ὧν γιλία καὶ θυβροια ἠρμόζετο. Melius interpretres misericordiae aram: nam ἔλεον βωμὸν scriptorem Iudaeum reliquisse res ipsa codexque August. adfirmant. Plura III. H. Grotius L. II. de Iur. Bel. et Pac. c. 21. 5. WESS.

559. 51. *Τὴν πρὸς τοὺς ἐναντίους ἔχθραν θνητῆν*] Prudenter Euripides in Philoctete apud Stob. Serm. XX. p. 172.

*Ὅσπερ δὲ θνητὸν καὶ τὸ σῶμ' ἡμῶν ἔφν,  
Ὅτιω προσήκει, μηδὲ τὴν ὀργὴν ἔχειν  
Ἀθάνατον. —*

respicens haud dubie vetus dictum, de quo Q. Caecilius Metellus in Livii L. XL. 46. *Vulgatum illud, quia verum erat, in proverbium venit: AMICITIAS IMMORTALES, INIMICITIAS MORTALES ESSE DEBERE.* Cui etsi nemo iure obloqui ausit, rari tamen, qui de se sine fraude profiteri velint, quod Cicero pro Rab. Post. c. 12. *Neque me vero poenitet mortales inimicitias, sempiternas amicitias habere.* WESS.

559. 57. *Οἱ δοκοῦντες ὑπερέχειν, ἐν ῥοπῇ καιροῦ etc.*] Philo Iud. de Ioseph. p. 545. B. ἀρχαὶ βασιλείων αἱ μέγιστα καθιρόθεισαν βραχεία καιροῦ ῥοπῆ. Et ante eum Euripides apud Stob. Floril. Tit. ciii:

*Ὅσῃς τυράννους, διὰ μακρῶν ἡσχημένους,  
Ὅς μικρὰ τὰ σφάλλοντα, καὶ μί' ἡμέρα  
Τὸν μὲν καθεῖλεν ὑπόθεν. —*

Cuius generis alia, quae inter manus sunt, omittam prudens, hoc Nicolai ubi ex cap. 24. interposuero, εἰς γὰρ καιρὸς καὶ βραχεία ῥοπή, τίχης ταπεινοὶ πολλάκις τοὺς ὑπερηφάνους. WESS.

560. 70. *Ὁὐ γὰρ δυνατὸν, τοὺς ἄλλοις ἀν. χορησαμένους*] Sic bene Coislin. Mox scripsisse Diodorus videtur, ἄλλους τε πράξαντας δεινὰ, παθεῖν etc. WESS.

560. 73. Ἀλλὰ πράξαντας δεινὰ ] Locus hic videtur posse restitui, si post *γίλανθροπίας* legamus, *μηδὲ τοὺς ἄλλους πράξαντας δεινὰ* etc. Sensus saltem loco aptus ex hac lectione elicitur. STEPH. Lege οὐδὲ *πράξαντας*. RHOD.

560. 74. Παρὰ τοὺς τῶν Ἑλλήνων ἐθισμοὺς ] Vid. L. XIX. 63. WESS.

560. 82. Πάντες δὲ ἀνατείνονται etc.] Dicam infra L. XIV. 3. Refer huc Ovidianum:

*Quo quis enim maior, magis est placabilis irae;*

*Et faciles motus mens generosa capit.*

*Corpora magnanimo satis est prostrasse leoni;*

*Pugna suum finem, cum iacet hostis, habet.*

Trist. L. III. 5. 31. WESS.

560. 92. Πολλοὺς τῶν Λακεδαιμονίων κατακλείσαντες ] Vide L. XII. 63. atque artes oratoris animadvertete. WESS.

560. 6. Ἴδε τὴν τέχνην ἀπάντων οὖσαν κυρίαν ] *Sed profecto Fortuna in omni re dominatur. ea res cunctas ex libidine magis, quam ex vero celebrat obscuratque*, ait Sallust. Catil. c. 8. Libanius T. II. p. 644. D. καὶ ἐπαινοῦσι δὴ τὸν εἰπόντα, *Τέχνην τὰ θνητῶν πράγματα*. qui quidem nobilem senarium in animo atque oculis habuit,

*Τέχνη τὰ θνητῶν πράγματ', οὐκ εὐβουλία.*

nobilem, inquam. Vexabatur enim *Theophrastus et libris et scholis omnium philosophorum, quod in Callisthene suo laudavit illam sententiam,*

*Vitam regit Fortuna, non sapientia.*

Cicero Tuscul. Disput. V. 9. Vid. Plut. T. II. p. 97. Eustath. de Ismen. Amor. L. VIII. p. 317. et Demosth. Olynth. II. p. 16. WESS.

560. 9. Διὰ δὲ τῶν τυχόντων ἕβλων ἰστάναι τὰ τροπαια ] Veteribus Graeciae moribus id quidem valuit. Statuebantur enim in finibus, victoriae modo in praesentia declarandae causa, non ut in perpetuum belli memoria maneret: tamen tropaea et ex aere et lapide erecta memorat Pausan. II. 21. p. 159. V. 27. p. 450. VIII. 10. p. 619. et Plut. Alcib. p. 207. D. Quamquam primi ea ex materia qui posuerunt, male tota Graecia audiverunt. οὐδὲ γὰρ παρ' Ἑλλήσιν οἱ πρῶτοι λίθινον καὶ χαλκοῦν στήσαντες τροπαιον εὐδοκμοῦσιν Plutarch. Quaest. Rom. p. 273. D. Quin cum Thebani, Laeadaemoniis bello superatis, aeneum statuissent tropaeum, accusati apud Amphictyonas sunt, Cicerone de Invent. L. II. 23. auctore. Adde Casaubon., cui haec non latuerunt, ad Strabon. L. IV. p. 283. WESS.

561. 26. Τριακοσίας τριήρεις ἀνάνδρους ἀπολέσας ] Numerus triremium iusto auctior est: ducentas miserant in Aegyptum. Vid. L. XI. 71. Neque id vero consentit, naves eas ἀνάνδρους *ipsis cum hominibus* periisse. Redierunt Athenas ex clas-



siariis aliqui, sed exiguo numero. Thucydid. I. 110. καὶ ὀλίγοι ἀπὸ πολλῶν πορευόμενοι διὰ τῆς Αἰβύρας ἐς Κερσίριν διεσώθησαν, οἱ δὲ πλείστοι ἀπόλοντο. Et Noster L. XI. 77. Itaque aut oratorie Nicolaus eladem eam auget, aut delenda cum Reg. I. αὐτάνδρων vox est. WESS.

561. 28. Καὶ πάλιν ὑπὸ Ξέρξου etc.] Putes Interp. πάλαι voluisse, quo quidem hic nihil opus erit. Πάλιν enim saepe coniungit res, quae ad eandem sententiam confirmandam pertinent. Auctor Epist. ad Hebr. II. 12. λέγων ἀπαγγεῖλῶ τὸ ὄνομά σου — καὶ πάλιν ἐγὼ ἔσομαι πεποιθὼς — καὶ πάλιν, ἰδοὺ ἐγὼ καὶ τὰ παιδιά etc. Polybius IX. 28. πάλιν Ἀλεξάνδρου διότι μὲν ἀδικεῖσθαι etc. iam Alexandro illud quidem cum amarulentia obieci. Plura diligentissimus Georg. Raphelius ex Polybio ad Matth. XIII. 44. WESS.

561. 39. Καὶ] Rhodomannus, βεβρωτικὸν, qua vi nonnunquam non carere Apollonius Syntax. L. III. 21. et Eustath. in Homer. p. 92. docuerunt, arbitratus, a sequenti distraxit. Dubito an male. Infra quidem certe adfirmantis non est, sed argumentum, quod obmoveri poterat, occupantis. Sic enim Gylippus c. 31. ναί· ἀλλ' οὐκ αἰτιον τὸ πλῆθος τῶν Ἀθηναίων etc. Pro quo cap. seq. καὶ Αἴα, ἀλλὰ Νικίας ὑπερ Στραζουσίων ἐπολιτεύσατο. Et καὶ Αἴα, ἀλλὰ καλὸν μὴ ποιεῖν τὴν ἔχθραν αἰώνιον. Quo ordine cum et hoc loco ponatur, consultus fuerit, at enim nonnulli etc. vertere. WESS.

561. 54. Οἷτοι γὰρ εἰσιν οἱ πρῶτοι τροφῆς ἡμέρων etc.] Haecceine ab homine Siculo exspectasses? cuius insulae indigenae reperti frumenti gloriam suis maioribus asserebant. Vid. L. V. 4. et cap. 69. Verum multa Nicolaus occasione et tempore dat, ut saepe oratores, fabulis in commodum abusus. Apposite Cicero pro Flacco c. 26. *Adsunt Athenienses, unde humanitas, doctrina, religio, fruges, iura, leges ortae, atque in omnes terras distributae putantur.* WESS.

562. 67. Τοῖς τὴν πατ. κοινὸν παιδευτήριον παρεχομένοις] Cultissime hoc quidem, nec minus eleganter illae omnium doctrinarum inventrices Athenae in Cicer. I. de Orat. c. 4. *Ipsae illae bonarum artium magistrae et inventrices Athenae* apud Mamertinum Paneg. Iuliani c. 9. *Ἑλλάδος Μουσείων, ἐστία καὶ πρωτανεῖον τῶν Ἑλλήνων*, quaeque alia doctarum Athenarum elogia Eustath. in Homer. p. 284. collegit. Libro opus foret, omnia in unum conducenda si essent. Vide Is. Casaub. in Athen. L. V. 3. et Io. Meurs. Fort. Athenar. c. 8. WESS.

562. 70. Οἱ μὲν ἤδη μετεσχιζότες τῶν γίλανθροπιῶν] Quid haec sibi velint, Cicero commonstrabit, *Nihil melius, inquit, illis mysteriis, quibus ex agresti inmanique vita exculti ad humanitatem et mitigati sumus: initiaque, ut adpellantur, ita revera principia vitae cognovimus: neque solum cum laeti-*

*tia vivendi rationem accepimus, sed etiam cum spe meliore moriendi* L. II. de LL. c. 14. WESS.

562. 82. *Ἐἰ τοῖς ἔξ ἐπιβουλήs ἀδικήσαντας etc.*] Correxī ex vetustis schedis. Vitium peperit librariorum inconsiderantia, has voces confundentium, ut in Thucydid. VII. 65. Aelian. V. H. XI. 4. saepissimeque in his Diodori libris. Ἐξ ἐπιβουλήs insidias, deliberato consilio structas, exponit, veluti apud Thucydid. VIII. 92. Iam levius peccare invites et maiore venia dignos videri, quam qui consulto et parati delinquant, recte Nicolaus admonet. *Etiam leges veniam concedunt ex involuntate et necessitate delinquenti*, ait Tertullianus Apologet. c. 45., sive, ut Cleon apud Thucydid. III. 40., *ἔγγνωμον δ' ἐστὶ τὸ ἀζούσιον*. WESS.

562. 88. *Καὶ πρόξενος ὧν διατετέλεκεν*] Forsan ἐθελό-  
πρόξενος τῶν Συρακουσίων fuit, sponteque sua, nullo civitatis iussu, Syracusanos, Athenas delatos, hospitio excepit atque adiuvit, ut Pithias Coreyraeus Athenienses apud Thucydidem L. III. 70. Si tamen πρόξενος, ut Nicolaus velle videtur, atque ὑπὸ τῆs πόλεως χειροτονοῦμενος ἐπὶ τῶ τούς πρεσβεύοντας Συρακουσίοις ἐποδέχεσθαι, sic enim πρόξενον munus Ulpianus ad Demosthen. Midian. p. 374. explicat, utique misericordiam tribuere veteri civitatis amico, et in id bellum praeter animi sui voluntatem coniecto, aequissimum pariter atque humanissimum erat. WESS.

562. 3. *Καὶ περίβλεπτος κατὰ πᾶσαν πόλιν*] Ita Dionysius περίβλεπτος ἦν παρὰ τοῖς Συρακουσίοις inf. c. 92., quorum omnium oculos, quoties publico se dabat, in se convertebat. Verum, quod in Euripidis Phoeniss. v. 555. Eteocles,

*Περίβλεπέσθαι τίμιον; κερὸν μὲν οὖν.*

id malo suo edoctus Nicias est. Aelianum, Euripideum illud citantem, L. II. 12. Var. Hist., quaeque viri docti inibi notarunt, vide. WESS. *Πᾶσαν πόλιν* hic non magis tangendum erat quam *πᾶσα πόλις* Exe. Vatic. p. 56.

*Ibid. Νυνὶ δ' ἐξηγκλισμένους ἐν ἀσχήμοις etc.*] Frequens in miseris est, quorum cubiti, manibus post terga revinctis, distorquentur. Noster Ecl. 2. L. XXXIV. p. 527. 65. *αὐτόν τε καὶ τὴν γυναῖκα δεδεμένους ἐξαγκλισάντες*. Io. Chrysostomus de S. Babyla T. II. p. 565. *ἐξαγκλισάντες αὐτόν, καὶ πολλὰς ἐπιθέτες πληγὰς*. Plenius distinctiusque Philo Iud. Leg. ad Cai. p. 1025. C. *τὰς χεῖρας ἀμφοτέρως εἰς τοῦπίσω περιεγαγόντες τρόπον ἐξηγκλισμένων προήσαν*. Minus obvium *περιεγκλισέσθαι*, quo simili in re Dio Chrysostom. Orat. XXXII. p. 390. B. usus est, et *ἐξηγκλισμένους τὸν λογισμὸν*, cuius animus meretricum illecebris quasi constrictus distrahitur, in Philon. Iud. L. I. de Vit. Mos. p. 648. C. Porro labem, quae auctoris verba occupavit, optime Rhodomannus eluit. WESS.

562. 4. *Καὶ τινι προσόψει τῆς τῶν etc.]* Aut aliquid hic deest, aut καὶ delendum erit. Et statim τῶν praeponatur articulo foeminino τῆς. RHOD.

563. 21. *Τί χροῖ τῶν ἡμῶς διατείνεσθαι]* Rationem non video, cur suspectum hoc fuerit viro erudito, cui excerpta Reg. Codd. debeo. Iosepho teste defungar, qui L. I. Bel. Iud. c. 27. 3. *καταστὰς δὲ ὁ βασιλεὺς, ὡς πρὸς παρόντας διατείνεται.* Et L. IV. 10. 4. *πολλὰ δὲ πρὸς αὐτοὺς διατεινόμενος.* Utrobique vehementem quandam contentionem in orando designat. WESS.

563. 37. *Καὶ πολλῶ πλείους ἐπεσημήρατο]* Indignationem signis et murmure testabantur, sicuti apud Appian. L. V. Bel. Civil. p. 1081., cum miles in quatuordecim ordines spectandi causa transiisset, ὁ μὲν δῆμος ἐπεσημήρατο. Alioqui in meliorem partem ad plausum indicandum adhibetur, ut L. IV. 8. notare memini. Adde Th. Gataker. in Imp. Antonini L. VI. 20. p. 182. WESS.

563. 41. *Καὶ τοσοῦτο μισεῖν — ὅσον etc.]* Supra L. I. 1. ἧς τοσοῦτον ὑπερέχειν — ὅσον. Aelian. V. H. L. III. 9. καὶ τοσοῦτον ἀνδρείος, ὅσον etc. Verum hoc leve est et paene arbitrarium. Conf. tamen Ios. Barnes. in Euripid. Troad. v. 972. WESS.

563. 48. *Τοὺς ἰδίους περὶ πλείους ἀναλώσ.]* Turbant sententiam bina illa περὶ πλείους, quae merito eliminanda censuit Rhodom. quippe ex sequentibus huc ingesta. Ego uncinis circumdedi. WESS.

564. 54. *Καταλιπεῖν ἔμφυχα τρόπαια τῶν μετῆλλαχότων]* Satis hoc quidem sophisticum, et paene simile Gorgiano γύπες, ἔμφυχοι τάφοι, quod risum ob frigidissimum colorem prudentioribus movisse Dion. Longinus de Subl. Dict. c. 3. p. 18. et Hermogenes de Form. Orat. L. I. 6. p. 285. monuerunt. WESS.

564. 65. *Τῆς ἡμετέρας πόλεως]* Pro ἡμετέρας scribe ἡμετέρας. Spartanus enim verba facit, non Syracusanus. RHOD.

564. 69. *Παραιτέσθαι τὴν τιμωρίαν]* Novi inperandi potestatem adsciscere posse infinitivos, sed alia huius loci ratio. Scriptum fuisse arbitror *παραιτέσθων* Atticorum more, quem quidem hac oratione amplectitur, *ὑπομενόντων, ἐχόντων, ἀγαναζτούντων* usurpans, rarius alibi. Est sane hoc ab illis diversum, receptum tamen. Namque et *χρήσθων* Aristoph. Nub. v. 438. *εἰρισκέσθων* Aristidis T. II. p. 196. *ἀπελλιάσθων* Synesius Orat. de Regn. p. 23. B. et quae alia hoc de genere collegit Mich. Maittaire de Dialect. p. 167. Potuisse vero ex *παραιτέσθων* nasci vulgatum, cuius in aperto est. WESS.

564. 73. *Τοῦτο γὰρ πᾶς ἀνθρώποις φυλάττεται etc.]* Auferendum ex hoc loco videri *παρὰ*, tanquam ex illo γὰρ, quod praecedit, inconmode repetitum, animadvertit P. Faber Semestr. L. II. p. 342. Non enim apud homines, sed ipsis hominibus, qui vitam inculpatam cum degerent, calamitatum fluctibus immersi fuerint, nomen portumque supplicationis ostendi ac patere signifi-

catur. Addit vir eruditissimus: *Sane si quis παρ' ἀνθρώποις ideo retinere malit, quoniam et in oratione Nicolai apud ipsum Dio lorum paullo ante (cap. 26.) hoc legitur, τοὺς περὶ τῶν ἰκετῶν νόμους παρὰ πᾶσιν ἀνθρώποις ἰσχύσαι παρεσκευασαν, haud multum ei refragabor, si modo τοῖς articulum, qui sequitur, ab illo ἀνθρώποις omnino secreverit: quod vix fieri, nisi eruditis ac teretibus auribus perinuitis, potest. Quae cur inprobem nihil est. WESS.*

564. 76. *Τῶν ἀτυχημάτων]* Pro ἀτυχημάτων restitue ἀδικημάτων. Rhod. Egregie Rhodomannus, cuius coniecturam occupavit Pet. Faber Semestrium II. p. 341. *Ἀτυχήματα* a Gylippi oratione, hoc praesertim loco, alienissima sunt: negat parcendum esse Atheniensibus, quod non coacti, non provocati, sed ultro iniustum Syracusanis bellum inferentes in has ipsi se angustias coniecissent, quodque plurimis sceleribus maculata vita nullum sibi ad misericordiam per fugium reliquissent. Iam ἀτυχήματα eorum dicuntur, qui casu deliquerunt, ἁμαρτήματα eorum, qui inpetu, ἀδικήματα eorum denique, qui proposito: quae eodem loco ponenda eademve poena vindicanda merito infitiatu Philosophus Rhetor. L. I. 13. p. 51. Recte proin Gylippus, etsi paullo eriminosius, ἀπάντων ἀδικημάτων πλήρη τὸν βίον ἔχει Athenienses affirmaverit, non item ἀτυχημάτων. WESS. Defendi tamen potest ἀτυχημάτων. V. Schweighaeuser. ad Polyb. vol. VI. p. 235.

564. 84. *Τὴν εὐτυχίαν, ὥσπερ τὴ βαρὴ φορτίον, οὐ φέρουσι]* Amat gravem hanc sententiam. Nam et L. XVII. 38. *τοὺς πλείστοις, αἱ, ὁρῶν ἔστι τὴν εὐτυχίαν, ὥσπερ τὴ βαρὴ φορτίον, φέρειν ἀδυνατοῦντας.* Et L. XV. 5. inque Excerpt. Valles. p. 267. ipsam repetit. Neque ea displicere ob elegantiam Synesio potuit Orat. de Regn. p. 15. D. *ἔοικε γὰρ εὐτυχία φορτίον εἶναι μολίβδον περιβριθέστερον.* Nedum Themistio Orat. I. p. 17. *οἱ γὰρ τοι πολλοὶ τὴν εὐτυχίαν οὐ δύναται φέρειν δι' ἀσθένειαν, ὥσπερ φορτίον.* Nimirum, quae verissima Aristotelis sententia Polit. L. V. 8., *καὶ φέρειν οὐ παντὸς ἀνδρὸς εὐτυχίαν.* Alia Muretus Lect. Var. L. V. 15., Th. Gataker. ad Antonin. Imp. L. X. 19. et Christ. Aug. Heuman. in Curtii L. III. 12. 20. WESS. Encliticam, quam hic unus addit Reg. 1., neque XV. 5. neque in Exc. Val. loco habes: atque eandem XVII. 38. omittit florilegium Vaticanum, unde verba αἱ τῶν πάλαιον — ἀδυνατοῦντας inter inedita quae putabat fragmenta protulit Maius post Diodori Excerpta Vaticana p. 569.

564. 91. *Ἐπερήφανον]* Ἐπερηφάνων ora Steph. non male. Vid. cap. 52. WESS.

564. 94. *Στρακουσίους μὲν καὶ Σελιωνντίους etc.]* Vid. supra c. 2. WESS.

565. 3. *Ὠμόν τε καὶ βάρβαρον τὸ πεπραγμένον]* Id nemo diffitetur. Sed invidiose Gylippus silentio involvit alterum plebi-

scitum, quo inhumanum illud cupide antiquarunt Athenienses. De eo L. XII. 55. WESS.

565. 7. Δικαιότερον γὰρ ἐστίν, ὄν καθ' ἑτέρων etc.] Pro δικαιότερον. quod enim quis in alium statuerit, aequissimum est, ut patiaturs ipse. Sic σπουδαιότερον in S. Paulli altera ad Timoth. I. 17., ubi tamen σπουδαίως scripti quidam Codd. et Origenes περὶ Ἀποκ. L. III. p. 133., forsā ea enallage offensi. Vid. Th. Bezzani in I. ad Timoth. III. 14. deque Meliis et Scionacis supra L. XII. 76. et 80. WESS. Δίκαιον positum ubi repetitur haec sententia Excerpt. Vatic. p. 66., δίκαιον γὰρ ἐστίν ὄν καθ' ἑτέρων τις νόμον ἐθῆκε τούτω κερήσθαι. Vnde apparet etiam recte habere χρῶμενον, quod χρῶμένων scribebat Reiskius.

565. 13. Ἐπταικώτας οὐδὲν οὐδὲ τοὺς κηδεύσοντας ἔχειν] Remove οὐδέν. RHOD.

565. 24. Ποῦ γὰρ ἄξιον τούτοις καταγεγεῖν; πρὸς θεούς:] Prave interrogandi notae his et sequentibus decrant, quas, Rhodomanni consilium secutus, addidi. WESS.

565. 27. Δήμητρον] Δήμητρα Vat. Coisl. Vid. not. in L. I. 13. WESS.

565. 28. Τὴν ἱερὰν αὐτῶν νῆσον πεπορθηκότας] Vid. L. V. 2. WESS.

565. 35. Ἄλλ' ὁ δῆμος ἐθίξει τὸν ῥήτορα etc.] Saepissime Atheniensibus id usu venit, notatis propterea ab Isocrate princip. Orat. de Pace his verbis: καὶ γὰρ αὐτοὶ πεποιήκατε τοὺς ῥήτορας μελετᾶν καὶ φιλοσοφεῖν, οὐ τὰ μέλλοντα τῇ πόλει σκνοῖσιν, ἀλλ' ὅπως ἀρέσκοντις ὑμῖν λόγους ἐροῦσιν. quo quidem ingenio cum Atticum esset vulgus, non potuit aliter, quin sua mobilitate praeceps rueret. Οὐ γὰρ ψεῦδος ἐστίν, ἀλλὰ καὶ λίαν ἀληθές, τὸ τοὺς ἡγεμόνας αἰτίους ἀπάντων γίνεσθαι καὶ τῶν ἀγαθῶν καὶ τῶν ἐναντίων τοῖς πολίταις optime Dinarchus in Demosthen. p. 99. ait. WESS.

566. 55. Ἄξιον τιμορίας] Deest εἰσὶ, quod haud raro omititur. Vid. Eustath. in Homer. p. 714., Schol. in Aeschyli Choëphor. v. 643. et Hier. Wolfium ad Argum. Olynth. I. Demosth. WESS.

566. 58. Τὴν Ἀθηναίων ἀγροίαν Συρακ. γέρειν ἀπόλειαν] Mallet fortasse alius ἀλοίαν ut cap. 21.; neque enim Atheniensium ignorantia, sed temeritas et dementia, hoc excidii periculum Syracusanis conflaverat. At solet auctor quodvis delictum eo vocabulo subinde describere. Ita L. XIII. 103. οἱ μὲν γὰρ ἔξαπατηθέντες ἐπίχερα τῆς ἀγροίας ἔλαβον. Et L. XIV. 1. περίοπος ὢν — ἀδυνατεῖ κρόπτεν τὴν ἰδίαν ἀγροίαν. Tum L. XX. 14. διορθώσασθαι δὲ τὰς ἀγροίας σπείδοντες. quibus locis, hic si adfectus sit, eadem utique adhibenda medicina erit. Admove tamen, si lubet: prona enim et facilis ad harum vocum confusionem via est, cuius in Appiani Mithridat. p. 397. clarissimum durat exemplum:

καὶ ὁ βασιλεὺς μὲν οὖν ἐπέθρετο, inquit, εἴθ' ὑπὸ δέους, εἴθ' ὑπὸ ἀνοίας, ἢ πᾶσιν ἐγγίνεται πλησιαζόντων τῶν κακῶν. Nam tum demum vera erit sententia, ubi εἴθ' ὑπὸ ἀγνοίας reflexeris. Quippe ita se res habet, ut plerumque fortunam mutaturus Deus consilia corrumpat, quemadmodum Velleius L. II. 118. scribit. WESS.

566. 68. Ὑμῶν τὴν πόλιν] Sic Diodorum et mox πρός ἡμᾶς reliquisse, series orationis dubitare prohibet. WESS.

566. 73. Τὴν δ' ἀπαγγελίαν τῆς πείρας] Praestabit ἐπαγγελίαν. quae vocabula libroriorum socordia permutari diximus L. I. et IV. 83. WESS.

566. 83. Ἐν γὰρ, ὅτι τοῦτο πράξαντες etc.] Quod ad sententiam desiderabatur, Interp. addidit unum hoc insuper addo: quae quidem ellipsis, si cui durior, sicuti est, videbitur, is levi opera εἴω γὰρ, mitto enim, legere poterit. Mox τὸν πόλεμον ἐπαρηρημένους recepi, quomodo L. XII. 84. Alcibiades ἐπέισε τὸν δῆμον ἐπιανελεσθαι τὸν πόλεμον. Et L. XIV. 21. οἱ δὲ Λακεδαιμόνιοι φανερόν εἶπω τὸν πόλεμον ἐπαρηροῦντο, atque alias dixit. WESS.

567. 1. Ταῦτα διαλεχθέντος τοῦ Λάκωνος etc.] Innuunt haec, Gylippo impulsore Niciam et Demosthenem interfectos esse: qua in re Diodorus abit a Thucydide L. VII. 86., quem Plutarchus sequitur in Nic. p. 541. F. Uterque enim, Lacone invito, Atheniensium duces a Syracusanis contrucidatos fuisse asseverat. WESS.

567. 9. Ὑπὸ τῶν νεωτέρων ἐξαπαγέροντες] Tenebantur hi elegantia eruditionis Atticae et carminum Euripidis, quae Atheniensium multis saluti fuisse, Plutarchus docet in Nic. p. 542. Quia vero e captivis plures victum sibi et alia docendis literis parabant, vulgo Athenis de civibus, ex Siciliensi clade nondum reversis, dicebatur,

Ἦτοι τέθνηζεν, ἢ διδάσκει γράμματα.

quem senarium proverbii inseruit Apostolius Cent. X. 4. WESS.

567. 26. Ἀλλὰ νερίους ποιήσω] Vide L. XII. 19. Mallem autem Dioclis et legum Syracusis latarum historiam continua serie explicuisset, nec bis eandem rem, ut facit c. 34. et seq., adgressus fuisset auctor. WESS.

567. 31. Ἠρόπλιον Κορηλίον] Sequentes ex Livio et Fastis ita restitue: Γάϊον Οὐαλέριον Ποσῆτον, Κοῦρῆτιον Κιζιννάτον, Φάβιον Οὐῖβουλαρόν. RHOD.

Ibid. Γάϊον Φάβιον] In tabulis Capitolinis N. Fabius: quare et Numerii praenomen Fabio reddunt in Livii L. IV. 49., cuius ante Moguntinam editiones Gn. vel Cn. praeferebant, Diodoro consentientes. Ceterum, qui hic deerant tribuni, recte restituti a Rhodomanno sunt. WESS.

567. 36. Χῆοι καὶ Σάμιοι καὶ Βυζάντιοι] Chii et Samii, cognita Atheniensium clade, statim deficere ad Spartanos insti-

tuerunt. Serius Byzantii, nec nisi hoc elapso anno. Res erit aperta, si Thucydides L. VIII. 5. et 80. conferatur. WESS.

567. 37. Ἀπέστειλαν] Verte in ἀπέστεισαν. RHOD.

567. 39. Ἐλόμμενος δὲ ἀνδρῶν τετρακοσίων] Ad Quadringentes hoc anno, cui Callias in Fastis Atticis nomen dedit, rem publicam Athenis receclisse, verum ex Plutarcho T. II. p. 835. E. atque ex Thucydide est. Sed auctor multa negligit, neque occasionem commutatae rei publicae formae, uti oportuerat, exsequitur. Diligentius omnia Thucydides exponit, et quae ante cccc. constitutos contingere, et qua illi de caussa creati sunt L. VIII. 8. — 50., cui iunge Clariss. Io. Taylor in Lysiae vita p. 37. Quod autem Harpoeratiem et Photius auctores sunt. Quadringentes eos πρὸ ἑπτὰ ἐτῶν, septem annis, ante xxx tyrannos civitati impositos esse, id vero consentire, Archontum Atticorum subsequens ordo declarabit. WESS.

568. 42. Ἀπέστειλαν τεσσαράκοντα καὶ στρατηγούς] Adde δύο. Tot enim classi praepositos ait cap. 36., ubi eandem rem commemorat, quamquam non ea cura, qua Thucydides L. VIII. 95. WESS.

568. 52. Τριάκοντα καὶ πέντε τριήρεις] Iterum a Thucydide L. VIII. 26. dissentit, sibi tamen constans. Vid. cap. 63. WESS.

568. 65. Τοσοῦτω — διήνεγκε, ὥστε etc.] Si τοσοῦτον cum Reg. I. malueris, succurret Diodorus ipse L. I. 24. ubi τοσοῦτον ἀπέχουσι τοῦ λέγειν, ὥστε etc. et infra cap. 57. Et Aelianus Var. Hist. L. III. 13. φιλοκινώτατον ἔθνος τοσοῦτον, ὥστε ἔην et reliqua. Sed haud magni momenti est, et arbitrium ferme. WESS.

568. 71. Κατὰ τὴν τειχοποιίαν] De ea L. XIV. 18. WESS.

568. 75. Τῆς Ῥωμαίων πολιτείας ἱξούθησαν] Impetraverant a Iulio Caesare Latii ius Siculi, quo coniaratorum manibus confosso, M. Antonius tanquam eius ex testamento toti insulae civitatem Romanam condonavit. Hinc Ciceronis ad Atticum suum querelae L. XIV. 12. Scis quam diligam Siculos, et quam illam clientelam honestam iudicem. Multa illis Caesar, neque me invito: etsi *LATINITAS* erat non ferenda: verum tamen. Ecce autem Antonius, accepta grandi pecunia, fixit legem, a dictatore comitiis latam, qua *SICULI CIVES ROMANI*: cuius rei, vivo illo, nulla mentio. Nec peremisse tamen omnibus id civitatis ius videtur. Augustus certe Syracusas et paucas alias insulae civitates coloniarum iuribus et commolis instruxit apud Dionem Cassium L. LIV. p. 601., et Plinius auctor est L. III. 8. Messanam, civium fuisse Romanorum, colonias, Syracusas, Tauromenium, Thermas, Tyndaridem, ceteras plerasque Latinae conditionis. WESS.

568. 78. Κεφάλου] De eodem L. XVI. §3. Lex Hieronica

est in Cic. L. II. in Verr. c. 13., qua inter aratores et decumanos iudicia fiebant. WESS.

568. 79. Οὐδέτερον αὐτῶν ἰσχυροτάτην νομοθέτην, ἀλλ' ἢ ἔξηγητήν τοῦ νομοθέτου] Ἄλλ' ἔξηγ. Venet. Conf. Suidam in Ἄλλ' ἦ. WESS. Demosth. p. 45. 13. μή μοι — ξένους μηδὲ τὰς ἐπιτολιμαίους ταύτας δυνάμεις, ἀλλ' ἢ τῆς πόλεως ἔσται. Agathias p. 23. D. οὐ τὰ ἀληθῆ διασκοποῦντες, ἀλλ' ἢ τὰ φαινόμενα.

568. 80. Ἐξηγητὴν τοῦ νομοθέτου] Opportune admodum. Saepe enim ἔξηγηταὶ sunt iuris consulti, qui leges exponunt et de iure respondent. Etymologus, Ἐξηγηταί, οἱ τοὺς νόμους τοῖς ἀγροῦσι διδάσκοντες, καὶ ὑποδεικνύοντες περὶ τοῦ ἀδικήματος, οὗ ἕκαστος γράφεται. Vide T. Hemsterhusium in Polluc. VIII. 124. WESS.

568. 82. Μεγάλῃ δὲ οὔσῃ etc.] Exscripsit haec Suidas in Ἀναθεώρησις, sed φαίνεται ὁ ἀνὴρ legens, quod tamen de suo addidisse videtur. Grammatici interpretes, quod fontem, unde ea hausta erant, non nosset, leviter aberravit. WESS. in Add.

569. 83. Διὰ τὸ πάντων τῶν νομοθετῶν πικρότατα etc.] Ergone et Dracone? cuius legibus μία ὀλίγον δεῖν ἅπασιν ὄριστο τοῖς ἀμαρτάνουσι ζημία, θάνατος in Plut. Solon. p. 87. E. Non credo. WESS.

569. 95. Ὀλίγω πρότερον] Scribendum esse ὀλίγα, apertum est, neque Rhodomanno latuit. WESS.

569. 2. Καὶ χορήματα ἐπορίζοντο] Iterum Rhodomannus. Vide not. in L. XI. 50. WESS.

569. 14. Καὶ τέλος ἐπλεέσαντες εἰς Ὀρωπὸν] Serius contigit, remque aliter memorat ac gesta fuit. Tu vide Thueydid. VIII. 95. WESS.

569. 24. Φαρνάβαζος ὁ τῶν ἐπὶ Θαλάττης τόπων ἔχων etc.] Id quidem verum erat. Confunduntur tamen hic Tissaphernes et Pharnabazus: ad priorem enim referenda sunt, quae de classe Phoenicum, deque stipendio, Spartanis praebito, sequuntur. Diserte Thueydid. VIII. 45. et seq. Diceres praeterea in navium numero aliquid labis inesse, quem belli Peloponnesiaci scriptor CXLVII non excessisse eodem L. cap. 87. prodit: Plutarchus quidem paucis additis auget, CI numerans in Alcibiad. p. 204. E.; contra ea vehementer minuit, XC duntaxat ex Phoenice Aspendum adpulisse asseverans, Isocrates de Big. p. 516. Qua scriptorum in discordia cum auctor sibi constet, ut mox videbis, fieri potest, ut alios sibi duces adsciverit, sicuti saepius alias. WESS.

569. 41. Ἐν δ' εὐγενείᾳ καὶ πλούτῳ πρώτος] Cylon τῆ οὐσίᾳ καὶ δόξῃ πρώτος τῶν πολιτῶν sine addita praepositione in Exc. Vales. p. 246. De nobili vero Alcibiadis genere, de versatili ingenio, et quare Agidi regi ceterisque Spartanorum fuerit suspectus dicere nihil attinet. Nota omnia sunt ex Plut. in eius Vit. p. 204. atque aliis scriptoribus. WESS.



570. 48. Ἐδίδασθε γὰρ ὡς οὐ συμφέροι etc.] Similia Thucydides habet L. VIII. 46., sed Tissapherni ab Alcibiade suggesta, non Pharnabazo, quem iterum cum priore errans permiscet Diodorus. WESS.

570. 67. Καὶ Κένσωνα] Pro Κένσωνα, Καίσωνα. At Livius Πόπλιον Ποστούμιον, Γνάιον Κορηήλιον, Κόιντον Φάβιον et Λεύκιον Ουαλέριον edit. Rhod. Καὶ Καίσωνα] Hoc recte. In ceteris Rhodomannus solens Sigonium sequitur. Nam apud Livium L. IV. 49. Postumius *Marci* praenomen habet, male fortasse. Vide Pighium ann. cccxxxix., ubi hanc praenominum diversitatem recte Fastorum veterum discordiae tribuit. WESS.

570. 68. Τὴν ἐκ τῶν τετρακοσίων ὀλιγαρχίαν κατέλυσαν] Egrege Plut. T. II. p. 833. D. καὶ εἶλεν αὐτῶν — ἐπὶ ΘΕΟΜΗΘΙΟΥ ἄρχοντος, ἐφ' οὗ οἱ ΤΕΤΡΑΚΟΣΙΟΙ κατελύθησαν. Nimirum urbi per quatuor menses, sic planissime Harpocration in *Τετρακόσιοι*, postquam summa cum auctoritate praefuisent, Theramene impulsore gradu deiecti sunt, libertasque rediit ad populum. Ipse Theramenes, qui dux et signifer quadringentorum constituendorum et praecipua inter eos auctoritate fuerat, ob versatile ingenium atque inconstantiam et mobilitatem *COTHURNUS* deinceps dictus est. Audi Critiam apud Xenophontem *Rer. Graec. L. II. p. 363.* Theramenes προπετέστατος ἐγένετο τὴν δημοκρατίαν μεταστῆσαι ἐς τοὺς ΤΕΤΡΑΚΟΣΙΟΥΣ, καὶ ἐπρώτευσεν ἐν ἐκείνοις. ἐπεὶ δ' ἤσθετο ἀντίπαλόν τι τῇ ὀλιγαρχίᾳ ξενιστάμενον, πρῶτος αὐτῆς ἡγεμῶν τῷ δήμῳ ἐπ' ἐκείνους ἐγένετο. Ὅθεν δὴ πον γὰρ καὶ ΚΟΘΟΡΝΟΣ ἐπικαλεῖται. Paria invenies in Lysiae *Orat. in Eratosthen. c. 16.* WESS.

570. 72. Οὗτος μόνος συνεβούλευσε κατὰγειν] Eadem repetit c. 42. docetque Athenis populum suasu Theramenis Alcibiadem ex exilio revocasse. Alioqui Thrasybulus militibus, qui apud Samum haerebant, ut Alcibiades in gratiam patriamque reciperetur, auctor fuit, Thucydide teste L. VIII. 81. WESS.

570. 82. Παρὰ Φαρναβάζου βοήθειαν] Constat sibi in errore. Tissaphernem dicere debuerat. Vide Thucydid. L. VIII. 85. et 87. WESS.

570. 90. Δωριέα μὲν μετὰ τριῶν καὶ δέκα etc.] Domo Rhodius erat Doricus, navibus, quas Thurini Spartanis auxilio miserant, praepositus, Thucydid. VIII. 35. et Noster c. 45. Rhodus ipsa superiore anno ad Lacedaemonios desciverat, nec ita tamen eas in partes transierat, quin superessent, qui Atheniensibus studerent. Vid. Thucydid. VIII. 44. WESS.

571. 96. Οὔσας ὀγδοήκοντα καὶ τρεῖς] Decem huic numero detrahuntur in Thucydid. VIII. 99. WESS.

571. 8. Εἰς Σύριον] Σύριον verum hic et post pauca esse monuit Rhodomannus. Sic infr. c. 45. et XX. 108. WESS.

571. 14. *Ἐἰς Ἐλεοῦντα*] Eodem plane modo cap. 49., Demosthen. in Aristocrat. p. 428., Xenophon Hellen. II. p. 355., Pausan. I. 34., Galenus L. I. de Antidot. p. 426., Philostrat. Heroic. Prooem. p. 666. Alii *Ἐλαιοῦντα*, ut Thucydid. VIII. 103. et qui ad testimonium illic excitati sunt a Cl. Wasse. WESS.

571. 19. *Ὅντα νεῶν δυοῶν ἐλάττω*] Reddidi Diodoro verriorem scripturam. In navium catalogo multum dissidet Thucydidēs, Atheniensibus LXXXVI, Peloponnesiis LXVIII tribuens L. VIII. 104., quo tamen loco numerorum commutationem fuisse factam, iustissima est Cl. Hudsoni suspicio. Namque ex re gesta et Nostro apertissime constat, Athenienses navium multitudine pares hostibus non fuisse. WESS.

571. 27. *Ἐπὶ τὸ μὲν δεξιὸν ἐτάχθη Θράσυλλος*] Thucydidēs L. VIII. 104. Thrasybulo dextram aciem, sinistram Thrasylo curandam dat. Quare aut hic, aut in belli Peloponnesiaci scriptore confusa Thrasybuli et Thrasylli, quod et alias accidisse videbimus, sunt nomina. Praeterea de Hermocrate quod ait, Syracusanorum eum navibus in dextro cornu imperasse, id Thucydidēs ratum non habet, diserte adfirmans, illum a classis praefectura remotum ante hanc pugnam Lacedaemonem abiisse L. VIII. 85. Vide tamen et Xenophont. Rer. Graec. L. I. p. 336. WESS.

571. 41. *Ὅποτε γὰρ οἱ Πελοποννήσιοι etc.*] Navalis huius praelii ordinem si apud Thucyd. VIII. 105. relegas, facile differentiam animadvertes. Hoc autem esse videtur, de quo Mela L. II. 2. 62. *Est et portus Coelos, Atheniensibus et Lacedaemoniis navali acie decertantibus, Laconicae classis signatus excidio.* Vix enim aliud reperias, Spartanorum hoc in tractu excidio nobile. Portus *Coelos* Sesto, ad quam haec pugna, non longe aberat, proximus quoque promontorio, quod *Cynossema* vocabant, ubi tropaeum victores statuerunt: ut adeo haud male cuncta congruant. WESS.

572. 50. *Πλαγίαις ἐνέσειον*] Clarius L. XIV. 72. *αἱ πολέμιαὶ ναῦς ταῖς εἰρεσίαις ἐλαυνόμεναι πλαγίαις ἐνέσειον.* Inpeditum indicat, quo in hostium naves atque aciem incurrimus. Plut. Alex. p. 668. F. *καὶ λέγεται πρῶτος ἐνσεῖσαι τῷ ἱερῷ λόγῳ τῶν Θηβαίων.* Paulo diversum est Luciani de Merc. Cond. c. 30. *εἰς οἷον βάρβαρον γέρον ἐμαυτὸν ἐνσεῖσεια.* et Plut. de Cupid. Divit. p. 524. A. *ἐνσεῖσειασιν εἰς βάρβαρα συμβολαίων καὶ τόκων.* Aliud quoque, sed ex eodem fonte manans, in eiusdem Plut. de Socrat. Gen. p. 588. B. *καὶ τὸν Ἀρχίαν εὐθὺς ἐνσεῖσιον εἰς τὸν πότον.* Et in Phocion. p. 751. F. *ὡς δὲ γέρον ἐνέσεισεν ὁ Λεωσθένης τὴν πόλιν εἰς τὸν Ἑλληνικὸν πόλεμον.* Sed desino: haec verbi, paene a Lexicorum conditoribus neglecti, usum abunde illustrant. WESS.

572. 64. *Συραζουσίων δὲ καὶ Παλληναίων*] Omittit duas Boeotorum et Spartanorum unam, itidem ab Atheniensibus captas

apud Thucyd. VIII. 106., ubi *Πελληναίων*, verius fortasse. Nam Pellenenses, ut eiusdem libri c. 3. perscripserat, iuxta cum Sicyoniis hoc bello naves armarunt. Novi Stephano ab hac urbe non nisi *Πελληνεὺς* et *Πελλήνιος* gentilia inflecti, sed eius decretum ab omnibus, ne quidem ab eius auctore, haud observari notavit L. Holstenius. Porro, si non fallit belli Peloponnesiaci scriptor, Athenienses hoc certamine naves xv amiserunt. WESS.

572. 67. *Ὁδὲ τὸ τῆς Ἐκάβης ἐστὶ μνημεῖον*] *Cynossema* vocant. *Est Cynossema, tumulus Hecubae, sive ex figura canis, in quam conversa traditur, sive ex fortuna, in quam deciderat, humili nomine accepto*, ait Mela II. 2. Adde Euripid. Hecub. v. 1273. WESS.

572. 72. *Τὸν Ἀαρείου στρατηγὸν*] *Σατρούπην* ex Reg. I. firmat auctor c. 37. De eo et Clearcho Thucyd. VIII. 80., deque Cyzico recuperata Atheniensium armis c. 107. WESS.

572. 86. *Ἐν τῷ περὶ Κορωνεῖαν νεῶν*] Forte in Minervae Itoniae fano, quod prope Coroneam positum Pausan. describit L. IX. 34., etsi nihil ille de hoc donario. WESS.

573. 93. *Ἀλκιβιάδης ἔχων τρισκαίδεκα τριήρεις* etc.] Hoc bene: sed quae subiiciuntur ex Alcibiadis oratione ad milites de miseratione fortunae suae, deque decreto eius reditu, ea praelio navali inter Sestum et Abydum priora sunt. Vid. Thucyd. L. VIII. 81. et 97. WESS.

573. 11. *Ἀφηγούμενος τότε Θηραμένης*] Mediam harum vocem, quae exulabat, postliminio in integrum restitui. Vide supr. c. 38. WESS.

573. 17. *Ἐισεπρόξατο*] *Ἐπρόξατο* R. 2. Cl. ut cap. 40.; sed inter se commutantur. Vid. Thucyd. VIII. 107. 108. WESS.

573. 18. *Τὴν Μεροπίδα πορθήσας*] *Μεροπίδα* scripsit auctor. RHOD. Lege *Μεροπίδα*, id est, Co insulam. PALM. *Τὴν Μεροπίδα*] Vitium, quod insulae titulum foedarat, correxit quoque Is. Casaubon. in Strabon. L. XV. p. 1006. et Scaliger ad sui libri marginem. Itaque id propagari non patior. Quis enim ignorat, insulam Co *Meropidem*, priscosque eius incolae *Meropas* adpellatos fuisse? unde *Μερόπων πόλις* non Homero tantum Hym. Apollin. v. 42., sed et Meleagro in Epigrammate, necdum, quod sciam, vulgato:

*Ὀλβίστη Μερόπων ἱερὰ πόλις, ἃ θεόπαιδα  
Καινὸν ἔρωτα νέων θρέψεν ὑφαγέμονα.*

Alia viri doctissimi L. Holstenius ad Stephan. v. *Κῶς*, Ezech. Spanhem. in Callimachi Hym. Del. v. 160. et Ioseph. Wasse ad Thucyd. VIII. 41. WESS.

573. 27. *Ἐγκαλοῦντες τῷ Φαρναβάξῳ*] Tissaphernem si scripsisset, ab errore immunis fuisset. Vid. Thucyd. VIII. 108. WESS.

573. 30. *Περιλαβὼν χρόνον ἑτῶν εἴκοσι καὶ δυοῖν*] Sic supra L. XII. 37. et Dionysius T. II. p. 129. Ipse tamen Thucydid. L. VIII. 109. ne quidem XXI se absolvisse monuit. Quod Noster nescire cum non posset, cumque Xenophontem annis XLVIII Thucydidis historiam auxisse addat: nempe ab hoc Olymp. XCII. anno secundo ad annum Olymp. CIV. itidem secundum; suspicio nata est eruditissimo H. Dodwello princip. Annal. Xenophont. de vitiatas hoc loco et L. XII. 37. numeris: non enim plures XXI belli Peloponnesiaci annos Thucydidi Diodorum accensuisse. Quae, etsi speciosa, assensum non inpetrant. Namque et meliores Codd. pro XXII annis stant, et Dionysius non uno loco: praeterea Thucydides cum Pythodoro Archonte belli principium orditur, a quo XXII. cum sit Theopompus, in quo desinit, *ἐν πλάτει* verum est, annos XXII scripture sua fuisse complexum. WESS.

573. 37. *Ἐν βίβλοις δυοκαίδεκα*] Repetuntur haec L. XIV. 84. Tamen Suidas XI tantum Graecae Historiae libros numerat, non sine errore addens, *ἔπονται δὲ ταῖς Θουκυρίδου καὶ Ξενοφῶντος*. de Xenophonte enim falsum est, cuius Hellenica ultra navale praelium ad Cnidum procedunt. Photius XII. Rer. Graec. Theopompi librum legit, quem Menophanes intercidisse dixerat. Ego vero haud scio an Photius libri titulo sit deceptus. Theopompus XII. Graec. Historiae librum absolvit navali pugna ad Cnidum, quae ex Nostri calculis anno secundo Olymp. XCVI. commissa est. Quae vero illo L. XII., quem Patriarcha excerpsit Cod. CLXXXVI., continebantur, omnia Olympiadem eam exceperunt, veluti res Aeoridis in Aegypto gestae, Evagorae illatum ab Artaxerxe bellum, pax Antalcidae, et motus pacis eius causa per Graeciam orti, et reliqua. Haec Callisthenes libris Rer. Graecarum, ut auctor extremo L. XIV. significat, complexus erat, non Theopompus. Ut ut est, ea, quae hic Diodorus, inserta cuncta sunt Anagraphae Olympiadum Illust. Scaligeri. WESS. V. Clinton. Fast. p. 374. s. ed. sec.

574. 41. *Πόλιν Βόλασον*] Forte *Βόλας* est. RHOD. *Πόλιν Βόλας*] Correxī ex corrupta Cod. Coisl. scriptura. Rhodomannus a vero urbis nomine haud longe aberat, quod *Βόλας* auctor L. XIV. 117. et *Βόλαν*, uti Stephanus, Lib. XX. 91. effert. Conf. Ph. Cluverium L. II. Ital. Antiq. p. 782. WESS.

574. 48. *Καταλυθέντος τοῦ πολέμου*] Edebatur *σύμμαχοι* — *κατὰ Συρακονσίων. καταλυθέντος δὲ τοῦ πολέμου*, per-versa sententia. Ego scriptos libros secutus, sublata inopportuna voce δὲ, quam et Rhodom. inducendam censuerat, mutavi. WESS.

574. 49. *Ἥλιπον γὰρ etc. τιμωρίαν δώσειν*] Frequens est in re atroci, quamque metuimus. Herodot. VIII. 12. *ἐλπίζοντες πάγχυ ἀπολέσθαι*. Euripid. Ion. v. 348. *Θῆρῶς σε τὸν δίστηγον ἐλπίζει κτανεῖν*. Heliodorus L. V. Aethiop. p. 206. *ὥρμηθ φάνατον ἐλπισθέντα διαδεδραξέναι*. Placuit et Latinis, quorum Claudianus de Nilo V. 2.

*Nubila non sperat tenebris condentia coelum.*

Iuvenalis Sat. IV. 57.

— *Iam quartanam sperantibus aegris.*

Alia viri doctissimi Jos. Barnes. ad Eurip. Supplic. v. 790. Iosephi. Wasse in Thucyd. VII. 61. et Duker. ad Flor. III. 1. WESS.

574. 52. *Περὶ τῆς ἀμφισβητησίμου χώρου*] Vid. L. XII. 72. Mox caussam non esse, cur αὐτοὺς mutetur, antea ostendi ad L. IV. 61. WESS.

574. 66. *Τοῦ παρ' αὐτοῖς πρωτ. παραλαβεῖν τὴν πόλιν*] Deest εἰρηγησαμένον, aut συμβουλεύοντος, aut eiusdem significationis aliud vocabulum. Defectum in Addend. notarum animadvertit doctissimus Rhodomannus. WESS.

574. 70. *Κατὰ νόμους τότε βασιλεύοντα*] Poenis *Suffetes* summus erat magistratus, habebantque velut consulare imperium apud eos Livio auctore L. XXVIII. 37. et XXX. 7. Hos inter princeps, ὁ πρωτεύων, ut paullo ante Noster, videri posset βασιλεὺς κατὰ νόμους, quod legitimum haberet imperium, Graecis adpellatus, nisi si summum belli ducem plerumque hoc titulo describerent, ut *Imilconem*, in Siciliam rei gerendae caussa amandatum L. XIV. 54. et *Magonem* L. XV. 15. et *Amilcarem* L. XX. 33. Praeterea *Bomilcarem* in Polyb. L. III. 42. et Iustin. XXII. 7. cum not. Borgarsii. Habebunt tamen, si qui prius maluerint, suae opinionis patronum Zonaram, disertis adfirmantem verbis, magistratum singulis sibi annis Poenos praeposuisse regio nomine insignem: τὸν γὰρ βασιλέα ἐαυτοῖς κληῖσιν ἐτιήσιον ἀρχῆς, ἀλλ' οὐκ ἐπὶ χρονίῳ δυναστείᾳ, προεβάλλοντο Annal. I. VIII. p. 381. edit. Paris. WESS.

574. 72. *Καὶ πρὸς Ἰμέρα τελευτήσαντος*] Supra L. XI. 21. WESS.

574. 80. *Ἐπιτρέπων αὐτοῖς τὴν κρίσιν τούτων etc.*] Sequor Clar. et Reg. 2., quorum scriptura et distinctio concinnior videtur. In edd. *ἐπιτρέπων — κρίσιν τούτο τῷ μὲν etc.* Iosephus Ant. Iud. L. XIX. 1. 15. ἃ ἐπρώσσειτο, λόγῳ μὲν ἐπὶ θεραπείᾳ τῆς πλήθους, τὸ δὲ ἀληθές etc. Noster L. XIII. 4. τοὺς γὰρ Ἀθηναίους, τῷ μὲν λόγῳ πρὸς Στρακασίους ἐνίστασθαι τὸν πόλεμον, τῇ δὲ ἀληθείᾳ, et reliqua. Eodem modo optimus quisque. Vid. Duker. in Thucyd. VIII. 92. WESS.

575. 92. *Καὶ τῶν Καμπανῶν ὀκταζοσίους*] Mercenaria horum opera pro Siculis et contra eos per insulam frequentissima fuit. Vid. c. 62. et 80. XIV. 15. XVI. 83. etc. WESS.

575. 12. *Ὁ μὲν Καρχηδονιακὸς πόλεμος*] Legendam videri *Καρχηδονιακὸς* in not. auctario Rhodomannus monuit: nec tamen necessarium erit, ut id probes. *Πόλεμον Καρχηδονιακὸν* dabunt argumenta L. XIV., quae si Grammatici, ut sunt, esse dixeris, succurrent *Καρχηδονιακῶν* libri, a Claudio Imp. scripti apud Sueton. in Claud. c. 42. et *Καρχηδονιακῆ* Appiani, quae

quamquam in Praefatione ita sit nuncupata, tamen in ipsa libri fronte *Καρχηδονική*. WESS.

575. 25. *Ἐπειδὴ κατέστησε τὴν ἐν Ῥόδῳ παραχρῆν*] Vide ad c. 38. Attigit haec Diodori L. I. Rhod. c. 22. Io. Meursius, harum turbarum occasione in exsilium, de quo Pausan. L. VI. 7., Dorieum ire compulsus arbitratus: qua in re error est. Iam olim solum vertere coactus Thurios concesserat; unde eius civitatis navibus cum maxime praeerat. Rediisse in patriam, Lacedaemoniis addictam, hoc tempore videtur: turbas certe, quae inter cives diversarum partium intercedebant, composuit; quod efficere haud sane potuerat, nisi civitatis suae gratiam reciperasset. Sed Meursium mitto, plura illic stipantem, quae consistere vix possunt. WESS.

575. 32. *Οὔσαις ἐβδομήκοντα καὶ τέσσαρα*] Xenoph. princ. L. I. Hellenic. Athenienses xx navibus in Dorieum primo in vectos esse ait, praelii huius descriptione leviter defungens. WESS.

576. 45. *Πρὸς τὸ Δαρδάνιον*] Noli de mendo suspicari, quia praecessit *κατέφυγεν εἰς Δάρδανον*. *Dardanium*, *Δαρδάνειον*, promontorium erat prope urbem Dardanum. *Δαρδάνειον*, *ἄκρα πλησίον Δαρδάνου* apud Strabon. L. XIII. p. 879., et *Δαρδανίς ἄκρα* p. 889. WESS.

576. 56. *Ἀυτῶν ἐξηρτυμένων*] Optimi hoc coloris esse ostendent not. in L. III. 36. WESS.

576. 57. *Ἀφ' ἐνὸς παραγγέλματος*] Simile ἀφ' ἐνὸς παρακελεύσματος L. XV. 32., et Iuliani Misopog. p. 361. *τοὺς τάφους δὲ τῶν ἀθῶν ἀνέτρεψαν πάντας ὑπὸ τοῦ συνθήματος*. Aliter Aelianus de Animal. Histor. L. V. 11. *αἱ μέλιται δὲ ὑπὸ συνθήματι εἰς ὕπνον τρέπονται*. Et Pallad. Vit. Io. Chrysost. p. 40. D. *ὡς τοὺς πολλοὺς νομίσαι ἀπὸ συνθήματος αὐτοὺς παραγενέσθαι*. ad quem modum forte Iuliani verba conformanda sunt. WESS.

576. 79. *Κατὰ τὰς προαγωγὰς*] Lege *προσαγωγὰς*. RHOD. Probo doctissimi viri coniecturam. *Προαγωγαὶ* aliud indicant, deque possessione, amanuensium tamen culpa, cum altero saepe certant. Vide ad L. XVIII. 48. WESS.

576. 87. *Μετὰ νεῶν εἴκοσι*] Imo xviii, si Xenophon princ. L. I. Rer. Graecar. et Plut. Alcib. p. 206. C. non fallunt. WESS.

577. 94. *Ἐπίσημον φοινικῶν*] Tunicam fortasse aut vexillum, eo colore fulgens. Polyaeus *φοινικίδα* adpellat, cum de Conone, cum Callicratida pugnaturus, *ἐπῆρε τὴν φοινικίδα ἣν δὲ ἔρα μάχης σύνθημα τοῖς κυβερνήταις* de Stratag. I. 48. 2. qui quidem locus Lipsii diligentiam non fugit, uti hic Nostri, de Milit. Rom. IV. 12. ubi plura. WESS.

577. 98. *Καὶ δέκα μὲν νεῶν ἐδῆ ἐννόησαν*] Triginta, sed vacuas, hostium naves interceptisse Athenienses, auctor Xenophon est L. I. Hellen. princip. et Plut. Alcib. p. 206. D. WESS.

577. 11. Ὑπὲρ ὧν ἐνεκάλουν] Suffice hic ἀπολογεῖσθαι. RHOD. Ὑπὲρ ὧν ἐνεκάλουν ἀπολογεῖσθαι] Divinum fuisse Rhodomannum Cod. Venetus ostendit. Noster in sequentibus antiquum obtinet, cum naves in Phoenicem a Pharnabazo remissas ait. Factum id Tissaphernis imperio, ut supra diximus. WESS.

577. 20. Καὶ πρὸς τῷ προτέρῳ τροπαίῳ] Vide c. 40. Mox, si qui liber ἐπεσκεύαζε ederet, id praeferrem. Sic cap. 41. τὰς τε πεπονηχίας ναῦς ἐπεσκεύασε, et XIV. 42. XX. 88. WESS. Sic supra p. 543. 29. ἐπεσκεύασαν cum κατασκεύασαν permutatum est. Nulla tamen expellendi κατασκευάζειν necessitas aut hic aut XX. 97. p. 476. 4. κατασκεύασε τὰ πεπονηχία τῶν ἔργων, quum omnis ἐπισκευή sit etiam κατασκευή.

577. 28. Ἀρμιστηγῶτες ἦσαν Ἀθηναίων] Transierant in Spartanorum partes mox a Siciliensi Atheniensium clade, Thucyd. VIII. 4. WESS.

577. 42. Ὁ μεταξὺν τόπος ἦν στενότατος] Non damno vulgatum, quo tamen nihil deterius ὁ μεταξὺν πόρος ἦν, quod auctor habet L. XIV. 49., atque ego in Coisl. et Vatic. fuisse suspicor: utriusque enim προσῆν hinc suos natales accepit. De reciproco Euripi aestu abunde dictum ab Is. Casaubono ad Strabon. L. I. p. 95., Tanaq. Fabro L. I. Ep. 14. et Georg. Whelero Itiner. L. III. p. 565. WESS.

578. 49. Καὶ ξυλίας τοῖς διάδροις ἐπέστησαν γέφυρας] Pons erat δίπλαθρος, Ephoro in Strabon. L. IX. p. 615. teste, nec continuus tamen, sed canali, ut navibus transitus esset, interstinctus. Id verba Diodori superiora et Strabon. p. 618. indicant, docetque luculentius Is. Vossius in Melae L. II. 7. Adde salebrosum Strabon. locum L. X. p. 686., de quo fortasse alias. WESS.

578. 55. Τοὺς τε πολ. καὶ συμμάχους ἀναπ. τῶν εἰσφορῶν] Meminit obiter huius expeditionis Xenophon Rer. Graec. L. I. 334. WESS.

578. 67. Ἐν οὐδεμιᾷ γὰρ τότε πόλει] Malim ποιεῖ. In nulla profecto Graeci nominis urbe ante ea tempora tanta civium caedes fuit patrata, quam in Coreyra insula. Thucydides priorem discordiam copiose descripsit L. III. 70. et seq. WESS.

578. 79. Διαφερούσας τὰς σπονδὰς εἶχον] Vulgatum σπονδὰς ad hunc modum Rhodom. optime refinxerat. Simile vitium ex Polybio L. V. 76. eluit Cl. Iac. Gronov., quo et infra παραιοσπονδεῖσθαι in παραιοσπονδεῖσθαι conversum videbimus L. XVI. 49. WESS.

578. 81. Λακεδαιμόνιοι γὰρ τοὺς πρωτεύοντας] Semper Spartani optimatum partibus studuerunt, passim eos rebus agendis admoventes, repudiato populari statu. Hinc et nata Λακεδαιμονία, de qua Harpocration, et superior inter Coreyraeos seditio. Contra Athenienses multitudini atque eius imperio favebant, de-

mocratiam ubique introducentes. Vide modo, quae de Paro brevi ante dicta sunt. WESS.

578. 91. Πρὸς τῷ τῆς Ἡρας τεμένει] Prope mare Ἡραῖον, sive Iunonis illud fanum fuisse, Thucydides L. III. 75. et 81. indicat. WESS.

578. 93. Ἐξαίφνης ἀγορᾷς πληθούσης] Doctissimus Interp. occupato repente foro verterat, rectius infra c. 104. Tempus indicatur, quod meridiem antecedit, non ipsum medium diem: namque ἀμφὶ ἀγορὰν πλήθουσιν et μέσον ἡμέρας clarissime distinguit Xenoph. Exp. Cyr. L. I. p. 207., et περὶ πλήθουσιν ἀγορὰν et μεσημέριος Dio Chrysostom. Orat. LXVI. p. 614., sicuti Is. Casaub. ad Suet. Calig. c. 15. et Desid. Herald. L. I. Advers. c. 10. docuerunt. Male ergo πληθούσης sive πληθούσης ἀγορᾷς in Liban. T. II. p. 131. medio die aliorumque in locis interpretantur, de quibus Duker. in Thucydid. VIII. 92. Vid. et infra L. XVII. 50. WESS.

579. 7. Ἀρχέλαος ὁ τῶν Μακεδόνων βασιλεὺς] Vide ad L. XIV. 37. WESS.

579. 14. Μετόπισεν αὐτὴν — ὡς εἴκοσι σταδίους] Videtur urbs labentibus annis mari iterum admota. Strabo quidem certe ἐν τῇ παραλίῳ locat L. VII. p. 509. et clarissime Noster L. XIX. 49., cui Livium adiunge L. XLIV. 6. WESS.

579. 41. Εἰς Προικόννησον] Rhodomannus in not. Ad dend. Προικόννησον, quam scripturam Graecorum Latinorumque plures ratam habent, et inprimis Schol. Apollon. Rhod. II. 279., προζῶν νῆσον a cervarum multitudine dictam tradens. Tamen Nostro in scribendo insulae nomine adsentiantur Xenophon L. I. Hellen. p. 334. Ptolemaeus Geograph. III. 11. Zosimus L. II. 30. et Etymologus, qui Προικόννησος, ἐκ τοῦ προῖξ προικὸς καὶ τοῦ νῆσος. et προῖξ ἐστὶ ζῶων ὁμοίων ἐλάφω, ὁ λεγόμενος νεβρός. Cetera, quae ibidem adstruuntur, ex scholiis Apollonii Rhodii d. I. sunt decerpta, atque indidem corrigenda. Vid. ad Hierocl. p. 662. WESS.

579. 44. Χαιρέα] Χάριτα adpellat eundem cap. 50. et 51. quod eiusdem quidem originis, sed diversum nomen est. WESS.

580. 56. Καὶ ναυσὶν ὀρθοίχοντα etc.] Xenophon Res. Graec. L. I. p. 335. sexaginta naves Mindari e portu exercendi causa progressas et alia, multum a Diodori narratione discrepantia, refert. Cum Nostro facit Polyaeus Stratag. I. 40. 9. WESS.

580. 66. Καὶ τὸν ἐπίπλοον τῶν Αὐκεδ. ἐπετέμωτο] Scriptum olim fuit τὸν ἀπόπλοον. Ne dubites, auctor ipse explicat τὴν εἰς τὴν πόλιν ἐφοδον. Geminum huic et paene germanum est L. XX. 61. ὑποτιμωμένον γὰρ τῶν Καρχηδονίων τὴν εἰς τὴν στρατοπεδείων ἀποχώρησιν τῶν πολεμίων. WESS.

580. 73. Πρὸς τοῖς καλουμένοις Κλήροις] Polyaeus Strat. I. 40. 9. ὁ δὲ, Mindarus, ἐπὶ τοὺς Κλήρους καλουμένους



τῆς Κριτικῶν γῆς ἀποχωρεῖν ἐπειροῦτο, quae Nostri verbis ita respondent, sicuti et cetera, modo paucos illius errores excipias, ut eodem ex fonte hausta opineris. Loci itaque nomen Κλιῶσι, non *populi*, quo modo in Ortelii Thesauro, nisi si tamen *scopuli* scripserit ille. WESS.

580. 83. Πολὺ τοῖς πλήθει ἐπερχόντων] Nihil in his absurdi. Facit tamen spectata Coislin. libri fides, ut postremum pro glossa putem. Ipsi Diodoro ἐπερχόντων ἀριθμὸς numerus in-  
ns L. XIII. 90. οἱ ταῖς ἀνδραγαθίας ἐπερχόντες, qui fortitudine excellunt L. XVII. 26., ubi eadem in schedis vetustioribus discordia. Ioseph. Antiq. Iud. XV. 3. 3. καὶ μέγθει πλέον ἢ πρὸς τὴν ἡλικίαν ἐπερχόντων. Tua iam optio est, utrum malis. WESS.

580. 95. Ὑπερ τῶν ἀγελχομένων] Explet orationem in pot. auctario Rhodomannus addita *ρεῶν* voce, cui non admodum obnitor. Potest tamen ob ea, quae praecesserunt, non incommode subintelligi. WESS.

581. 4. Καὶ τῶ πλήθει πανταχόθεν περιεχομένων] Legebatur περιεχομένῳ, quod tueri auctor videbatur his ex L. XVI. 81. καὶ τῶν Φοινίκων τῶ πλήθει ΠΕΡΙΕΧΟΜΕΝΩΝ τοὺς Ἑλλήνας. Et L. XVIII. 30. τῶν πολεμίων ἐπαρθέτων, καὶ τῶ πλήθει πανταχόθεν ΠΕΡΙΕΧΟΜΕΝΩΝ. Tum eiusdem libri c. 45. καὶ τῶν ἰππέων διὰ τὸ πλήθος πανταχῆ ΠΕΡΙΕΧΟΜΕΝΩΝ. Sunt enim omnia eiusdem generis. Contra ea tamen venit sermonis indoles, qua περιέχοντες et περιεχόμενοι eatenus differunt, ut circuli alios incingentes ab illis diversi sunt, qui circumdantur, quo modo Hierocles apud Io. Stobaeum Sermōn. LXXXII, p. 481. Bene ergo librariis sit, qui veriora hic nos docuerunt. Si tacuissent, περιεχομένων levi unius literae transpositione scripsissem. Id de hostibus corona alios complexis et circumfusus tritum. Appian. Parth. p. 274. ὡς ἕωρα τοὺς Πάρθους κέκλιον περιεχομένους. Solet etiam in tanta utriusque vocabuli vicinia cum altero permisceri. Vide haec Aeliani Histor. Animal. I. XVI. 18. τὴν γὰρ τοι θάλατταν τὴν περιεχομένην τὸν τῆς νήσου κέκλιον nec dubites, dedisse eum θάλατταν τὴν περιεχομένην. Verum hoc obiter, alia suo loco. WESS.

581. 20. Τοῖς μὲν ἡμίσεσιν ἀπὴντα τοῖς ἐπιούσι etc.] Salebrosa in speciem oratio, ἀπὴντα, αὐτὸς ἔχων et ἀντιέχθισαν. Posteriori mederi voluit Venetus Cod. ἀντέταξεν edens, non male quidem, etsi citra necessitatem. Solet Diodorus saepenumero a singulari ad pluralem transire, ut optimus quisque. Defungar cum maxime Sophoclis ex Aiac. v. 738.

— Κοῦτις ἔσθ' ὅς οὐ

Τὸν τοῦ μανέντος κἀπιβουλευτοῦ στρατοῦ

Ἕνναιμον ἀποκαλοῦντες. —

Nihil ergo aliud vult, ac Mindarum, posteaquam Spartanos suos obtestatus erat, iuxta cum illis sese Alcibiadi obiecisse. Prius eo

colore tutum est, quo facere aliquid illi perhibentur, quorum id imperio administratur. WESS.

581. 33. Κατὰ σπουδὴν ἐπιγινόμενον] A mendii hoc suspicione liberabit Thucydides L. III. 30. ἢ ἐκείνοι τε ἀνέλπιστοι ἐπιγενέσθαι ἂν τινα σφίσι πολέμιον, quia quidem ex parte nullum sibi hostem superventurum sperabant. WESS.

581. 36. Ἐν τῇ νῆσῳ τῇ Πολυδώρου καλουμένῃ] Stephan. Byzant. Πολυδώρα, νῆσος πρὸς τῇ Κυζίκῳ. et ante eum Plinius L. V. 32. WESS.

581. 40. Ἐφευγον ὑπὸ τὸ τοῦ Φαρναβάζου στρατόπεδον] Rhodomannus ἐπὶ τὸ τοῦ Φαρναβ. in not. suarum Addend. ob frequentem harum vocum in vetustis schedis confusionem, de qua Syllburgius ad Pausan. L. I. 13. et L. VI. 13. Ego non muto: sive enim sub castra sive ad ea fugisse velis, ratio sermonis constabit. Notum est Homericum

Νηρέος, ὃς κάλλιστος ἀνὴρ ὑπὸ Ἴλιον ἦλθε. WESS.

582. 52. Τριάκοντα τριήρεις] Xenophon Thrasyllo quinquaginta triremes decretas ait Rer. Graec. L. I. p. 337., in ceteris Nostro consentiens, Hellespontum versus atque ad Alcibiadem deducendas. WESS.

582. 57. Ὡν ἦν ἀρχιπροσβευτῆς Ἐνδιος] Idem esse videtur, atque is, de quo Thucydides V. 44. et VIII. 6. Sed tempus, quo legationem obiit, controversum est. Audi Schol. in Euripidis Orest. v. 371. πρὸ γὰρ Διοκλέους, ἐφ' οὗ τὸν Ὀρέστιν ἐδίδαξε, Λακεδαιμονίων προσβευσαμένον περὶ εἰρήνης, ἀπιστήσαντες Ἀθηναῖοι, οὐ προσήκοντο, ἐπὶ ἄρχοντος Θεοπόμπου, ὃς ἦν πρὸ Διοκλέους, ὡς ἱστορεῖ Φιλόχορος: quae repetit ad v. 770., cum de Cleophonte, πρὸ ἐτῶν γὰρ δύο τῆς διδασκαλίας τοῦ Ὀρέστον, αὐτὸς ἐστὶν ὃ κωλύσας σπουδὰς γενέσθαι Ἀθηναίους πρὸς Λακεδαιμονίους, ὡς Φιλόχορος ἱστορεῖ. Itaque dubium non est, modo Critici illi Philochorus probe excerpterint, Annalium hunc Atticorum scriptorem legationis tempus eum in annum coniecisse, quo Theopompus Fastis Atticis nomen dedit. Nimirum hoc Archonte Spartani gravi clade ad Sestum a Thrasyllo et Thrasybulo, Atheniensium ducibus, erant adfecti. Philochorus propterea censuisse videtur, fractos tum Lacedaemonios pacem petiisse: namque eandem indicari, Cleophontis, qui impediit, ne ea coalesceret, mentio confirmat. Verior tamen Diodori mihi opinio est: tum quoniam ad Sestum res Spartanae, etsi Atheniensium victoria foret insignis, nondum ita conciderant, ut pace opus esset. Id ea docent, quae Noster ex Ephoro cap. 41. exseripsit. Tum etiam, quia hoc ad Cyzicum praelio tanta eo in tractu rerum facta fuerat conversio, ut nisi pace sociata instaurari haud commode posse viderentur. Docent literae Λακωνικῶς scriptae atque ex Hellesponto Spartam missae: Ἐξῆι τὰ καλά. Μίνδαρος ἀπέσονται πεινῶντι τῶνδρες. ἀπορέομες τί χορῆ δρῶν; apud Xenophont. Rer. Graec.

L. I. p. 335. et Plut. Alcibiad. p. 207. C. et Eustath. in Hom. p. 63., ubi rectius *Μίνδαρος ἀπέσσονα*. WESS.

582. 67. *Παραπέμψαντες δὲ τὸν ἐμὸν λόγον*] Sic L. IV. 34. *παραπέμψας τὴν οἰκειότητα*. Et huius Lib. c. 1. et XVII. 79. WESS.

582. 80. *Σκάσει πολιτικοῖς μᾶλλον κινδυνεύομεν*] *Interpres, navigiorum magis, quam civium discrimen subimus: quasi legisset σκάσει μᾶλλον ἢ πολιτικοῖς, quod et ego praeferrem: quae enim mox de Atheniensibus subiungit, id requirere videntur; ne dicam de Spartanorum consuetudine, qua suorum paucissimos, sociorum plures mari committebant. Πολιτικοὶ de civibus saepe in his libris, veluti πολιτικάι δυνάμεις, πολιτικοὶ στρατιῶται, et πολιτικοὶ ἰππεῖς apud Polyb. I. 73. WESS.*

582. 86. *Ὑμεῖς δὲ τῆς θαλάττης, οὐχ ὑπὲρ etc.*] Nisi his succurrat ellipsis praepositionis ἐκ aut διὰ, sublata distinctione inductaque περὶ τοῦ τοῦ voce, scribere forte satius erit. Revera enim Athenienses cum maxime, non de maris imperio, sed ne in periculum evertendae urbis suae venirent, pugnabant. Sed hoc quoniam violentum, prius amplector. WESS.

583. 8. *Κλεοφῶν*] Cleophontem haec pacis sancienda saluberrima consilia disiecissee ex Philochocho docent, uti diximus, Critici ad Eurip. Orest. v. 770. et 900., quem si per figuras Poeta designarit postremo eo loco, ut volunt,

— — — *Κἀπὶ τῶδ' ἀνίσταται,  
Ἄνῆρ τις ἀθροόγλωσσος, ἰσχύων θράσει  
Ἀργεῖος, οὐκ Ἀργεῖος, ἠνάγκασμένος,  
Θορόβω τε πίσυρος, κάμαθεῖ παρόρησία,  
Πιθανὸς ἔν' αὐτοὺς περιβαλεῖν κακῶ τινι.*

oportet hominem ingeniose nequam fuisse, quod et fatetur, eundem ex virtutibus ornans, Aristophan. Ran. v. 1580. Nam haud alium esse, Critici agnoscunt: ceteroqui eo nomine plures Athenis fuere, de quibus ad illum Aristoph. versum Palmerius. WESS.

583. 13. *Βραβεύειν τὰ κατὰ πόλεμον προτερήματα*] In re non dissimili, sed magis ex vero, Ioseph. Antiq. Iud. L. XIV. 9. 5. *λογίζεσθαι δὲ, ὡς, εἰ καὶ πολέμον ῥοπὰς βραβεύει τὸ θεῖον, πλέον ἐστὶ τῆς στρατείας τὸ ἕδηλον. Considerandum esse, quod si belli momenta Deus moderetur, eo magis expeditionis eventum in dubio fore.* Conf. ad L. XIV. 65. WESS.

583. 28. *Τοὺς τ' ἐξ Ἰβηρίας ξενολογηθέντας etc.*] Vide cap. 44. WESS.

583. 46. *Μετὰ δὲ ταῦτα πολλοῖς ἔτεσι πρὸς αὐτῷ κτισθείσης etc.*] Condita a Carthaginensibus urbs est, postquam Motyam Dionysius everterat, Nostro teste Eclog. XIV. lib. XXII.; quam cum tyrannus oppresserit anno quarto Olymp. xcv., uti docetur L. XIV. 50., non longe ab eo tempore oppidi origo abesse potest. Et tamen Lilybaetanos Diodorus cum Segestanis in certamen con-

misit Olymp. LXXXI. 3. L. XI. 86., magna inconstantia dicam an imprudentia. Novi patrocinium Nostri professum fuisse praeclarae eruditionis virum S. Bochartum de Phoen. Colon. L. I. 27. atque haec contraria sibi videri negasse: namque urbem saepe condi perhiberi, cum augetur et reparatur: exstitisse igitur Lilybaeum etiam ante captam Motyen: sed tum demum evasisse celebrem novis colonis additis. Quae non sine veri quadam specie scripta haud dubie vir praestantissimus induxisset omnia, huius si loci recordatus fuisset. WESS.

584. 51. Ὁ δὲ Τίμαιος γησιν] Rectius ὡς δὲ Τίμαιος, ut praecessit ὡς μὲν Ἐγχορος. Sic p. 363. (c. 60.) STEPH. Non deerunt, credo, quibus se vulgatum adprobet. Ego Stephano adstipulor. Auctor iterum cap. 80. ὡς μὲν Τίμαιος — ὡς δ' Ἐγχορος. Timaeo autem de exercitus numero controversiam non movet Xenophon Hellen. L. I. p. 337. WESS.

584. 52. Περὶ Μοτύην] Situm urbis designat L. V. 25., sed longe longeque aberrans, Pausanias. Accuratus Noster L. XIV. 48. WESS.

584. 60. Τὸ μὲν παρ' αὐτὸν ἐμπόριον etc.] Eodem, quo flumen, nomine, aut leviter certe mutato, fuisse credible est. Stephanus Byzantinus, Μάζαρη, γροῖριον Σελινοντιῶν. Auctor L. XXIII. Eclog. IX., τὸ γροῖριον Μάζαρη, forte pro Μάζαρη, quo modo fluvium heic scriptus Vatic., et L. XI. 86. plerique omnes nuncupant. Vide quae adscripta sunt Anton. Itiner. p. 89. WESS.

584. 66. Τοὺς ἰδίους δὲ χροίους] Haud dubie ἴους. RHOD. Accedo sententiae viri doctissimi. Arietum in oppugnationibus usus Poenis fuit frequentissimus, qui, si machinae primi auctores non fuerint, ea enim res controversitur, rudem illam magis ac magis perfecerunt, et muris quassandis habiliorem reddiderunt, teste Athenaeo de Machin. p. 3. WESS.

584. 70. Ἐκ πολλῶν] Fortasse legendum ἐκ πολλοῦ, ut subaudiatur χρόνον. STEPH. Ἐκ πολλῶν] Hoc si mutes, salvum esse non potest οἷς ἔξ ἀρχαίων ἐπιβουλεύουσι L. XIV. 45. Quid desit, auctor declarat L. XVIII. 22. ὡς ἂν πόλεως γεγενημένης εὐδαίμονος ἐκ πολλῶν χρόνων. WESS.

584. 72. Μόνοι τῶν Σικελιωτῶν] Vide L. XI. 21. WESS.

584. 89. Τοσαύτη κατάπληξις εἰστέχει] Fuit cum εἰσῆει hoc scriptum loco fuisse opinarer, quemadmodum αἰδῶς εἰσῆει τοὺς ἐπάτους apud Dionysium Ant. Roman. L. XI. p. 729., quod nunc quidem repudio. Significantius enim aliquid vulgatum praefert; valuisse videlicet apud omnes eam formidinem et quasi intra eorum praecordia stetisse: atque hac ferme ratione, nisi Nornius fallat, Varro dixit: *Atque si addam quanta misericordia mea heredibus meis stet, quod miseros sublevaverim*, i. e., eo interprete, valeat, constet ac fixa sit. WESS.

585. 2. Ῥαδίως καταπεποῦντο] *Opprimebantur*. Sic cap. 51. τούτων δὲ καταπεπονημένων. Et L. XV. 85. καταπονούμενοι δ' ἐπὶ τῶν ἀνθεστηζότων ἡμαρτες ἐτάπησαν. Strabo L. VIII. p. 584. καὶ τὸν Ἡρακλῆα τὸν καταπονούμενον τῷ τῆς Ἀθηνῶν χιῶνι, i. e. *excrciatum et paene confectum*. S. Lucas A. A. VII. 27. καὶ ἐποίησεν ἐκδίξιον τῷ καταπονούμένῳ, *ei qui iniuriam sustinebat* Latinus, nimis generaliter. WESS.

585. 21. Ἡρὸς μὲν Χαλκιδεῖς πόλειον ἔχορτες] *Intelligit Chalcidicae originis per Siciliam et Italiam civitates, de quibus supra diximus ad L. XII. 11.* WESS.

585. 24. Ἄλλ' οὐκ ἀραρασθήσεσθαι] *Sedibus evulsum iri*. Quomodo violentiam et celeritatem in urbe evertenda adhibitam describunt. Elegantissime Dinarchus in Demosthen. p. 93. de Thebis: πόλις ἀστργειόνων καὶ συμμάχων ἐκ μέσης τῆς Ἑλλάδος ἀνήρασται, ἀροῦται καὶ σπεύρεται τὸ Θηβαίων ἄστυ, τῶν ζωνωνησάντων ἡμῖν τοῦ πρὸς Φίλιππον πολέμου. Forte exemplo Aeschinis, qui Orat. in Ctesiphont. p. 72. Θῆβαι δὲ πόλις ἀστργεῖτον μεθ' ἡμέραν μίαν ΕΚ ΜΕΣΗΣ ΤΗΣ ΕΛΛΑΔΟΣ ΑΝΗΡΑΣΤΑΙ. Forte, inquam: namque Agatharchides de Rubr. Mar. p. 20. ex Aeschine, tanquam cultae dictionis specimen, laudat, πόλις ἀστργεῖτον ἐκ μέσης τῆς Ἑλλάδος ἠφάνισται, addens *celeritatem excidii, τῆς μὲν ἀπωλείας τὸ τάχος*, ea metaphora oratorem explicuisse. Quae cum utroque verbo adaeque declaretur, dubium esse potest, utrum Aeschines adhibuerit, quamquam prius multo mihi grandius videtur. Ut ut illud est, celer non possum suspicionem, quae haec meditant in mentem venit. Citat Agatharchides ex Stratocle, Ἀροῦται καὶ σπεύρεται τὸ Θηβαίων ἄστυ, τῶν συναγωνισαμένων ἡμῖν τὸν πρὸς Φίλιππον πόλειον. Ea vero ita respondent Dinarchi verbis, ut eodem ex fonte hausta putes. Ergone et haec ex Stratocle depromsit Dinarchus, an vero ea Dinarchi oratio Stratoclis est? Nam fuisse, qui illam in Demosthenem orationem Dinarcho auferrent atque abiudicaret, ex Dionysio T. II. p. 112. constat omnibus. Facit tamen leve in verbis discrimen, ne quid certi pronuntiem. Redeo proinde ad institutum. Polybius de Cretensium urbe Lycto, sive Lytto, L. IV. 54. οὕτως ἄροδην καὶ παραλόγως ἀνηρασθή. Synesius L. II. de Provid. p. 120. A. ἀραρασθῆναι γὰρ ὄλην ὥσπερ ροσττίαν τὴν πόλιν. Amat et Io. Chrysostomus figuratum hoc dicendi genus. Sic Homil. II. ad Antioch. p. 23. A. T. II. πόλις οὕτω μεγάλη — ἐκ μέσης ἀραρασθῆναι κινδυνεύει τῆς οἰκουμένης. Et Homil. de S. Babyla p. 532. C. Melius itaque legetur Homil. III. ad Antioch. p. 46. D. πόλιν τοσαύτην ἀραρασθῆναι, ut in membranis, quam ἀραρασθῆναι, quod nuperrime probatum animadverto. WESS.

585. 28. Κατέλαβε ταῖς μηχαναῖς] *Diceres κατέβαλε ταῖς μηχαναῖς* legitimum esse, quod haec confundere verba amanuen-

sibus sollemne sit, ut L. XV. 85. Sed obstat orationis series, quae vulgatum defendit, nec ullum alteri locum relinquit. WESS.

586. 38. Κακοπαθεῖν] Mallem disiunctim κατὰ παθεῖν, ut alibi. ΣΤΕΡΗ. Non intercederem, si scriptae schedae addicerent; nam παθαίνειν, sic enim voluisse Reg. 2. et Clar. arbitror, aliud est, nec quidquam iuvat. Supra quidem c. 51. καὶ πολλὰ δρώσαντες καὶ παθόντες ἐξεύσθησαν dixerat, sed id paullo diversum. Similius est Appiani L. II. Bellor. Civil. p. 759. τοιαῦτα δὲ ἐκατέρωθεν κακοπαθούτων. Adde eiusdem p. 768. et Nostri L. XV. 69. WESS.

586. 43. Τὰς μὲν ὁδοὺς διοικοδομεῖν ἐνεχείρησαν] Adscripsit Melae suo Is. Vossius L. II. 7. 55. διοικοδομεῖν proprie esse aedificationem separare et dividere, locumque intermedium vacuum relinquere: quod verum fortasse alibi est, non hoc loco, quo vicos obstructos fuisse innuit, sicuti et L. XVI. 77. διοικοδομεῖν τοὺς στενωπούς. Neque obest, quod L. XIV. 7. de Dionysio dicit, ταύτην διοικοδόμησεν ἀπὸ τῆς ἄλλης πόλεως τεῖγε πολυτελεῖ. Namque id significatur, Insulam, pars erat Syracusarum, muro firmissimo ab urbe reliqua fuisse seiunctam, aditumque adeo in eam fuisse obseptum. WESS.

586. 45. Τὰ πλήθη τῶν γυναικῶν καὶ παιδῶν ἔφευγον etc.] Saepe in repentino periculo inbelle hoc genus illis armis pugnavit. Sallustius Iugurth. c. 67. Ad hoc mulieres puerisque pro tectis aedificiorum saxa et alia, quae locus praebibat, certatim mittere, cum not. Cortii. WESS.

586. 48. Οἱ Καρχηδόνοι κακῶς ἀπήλλαττον] Dixi ad L. III. 21. WESS.

586. 76. Καὶ τινὲς μὲν χεῖρας ἀθρόας περιέμερον etc.] Similem Gallorum morem descripsit L. V. 29. Conf. Gebhardum ad Nepot. Alcib. c. 10. WESS.

586. 77. Ἐπὶ τῶν γαισῶν καὶ τῶν σαννίων] De sauniis, telo barbarico, vide not. in L. I. 86. Gaesum, alii telum Gallicum, alii Hispanicum esse volunt, quibus etsi in praecipuo usu fuerit, nihil impedit, si et Poenis tribuatur. Pollux certe Afrorum fuisse indicat L. VII. 157. Δορύξους δόρυ ὀλοσίδηρον. καλεῖται δὲ γαισός, καὶ ἔστι Αἰβνζόν, quamquam paullo generalius. Vera enim Gallis atque Hispanis magis convenit, quam Afris: possunt etiam haec nostri auctoris ad Hispanos, qui plures Hannibalis imperio suberant, haud inconmode referri. Vide tamen Cl. Drakenborchium in Silii L. II. 444. Forma teli et figura non admodum Grammaticis fuit explorata. Scholiastes ad Iosuae c. VIII. 18., vulgatus a Clar. Montfauconio in Hexapl. ὁ δὲ λεξογράφος Αἰογεμινός, ἐμβόλιον εἶναι ὀλοσίδηρον, ἄλλοι δὲ ἀκόντιον, οἱ δὲ Ῥωμαῖοι ἕσσόν. Nec multum ab eo dissentit Hesychius et Etymologus. Melius tamen Suidas, ἔστι δὲ ὄπλον μακρόθεν κεντοῦν, ἢ

χορτός. Id enim firmant veterum loca a Lipsio Poliorcet. IV. 4. atque aliis producta. WESS.

587. 87. [Ἐνεκα τοῦ μηδὲν ἀσεβεῖν] Gracciae moribus id valuisse nemo ignorat. Quin et lex Athenis erat, τὸν ἐν τῷ ἱερῷ κατακλύοντα μὴ ἀποθνήσκειν, modo ne fallat Anonymus Problem. Rhetor. c. 15. Persarum, quorum atrocitatem heic Poeni acmulantur, alia consuetudo, sed ab Alexandro, cum vicem reddere illis posset, ultro repudiata. Vide Polybium L. V. 10. WESS.

587. 94. [Καὶ χωρὶς ἀχμάλωτα συνήχθη πλείω τῶν etc.] Sequor Coisl. Vulgatum enim ambiguum erat. Ἀχμάλωτα, sive ἀχμάλωτα σώματα, ut saepe, captivi sunt, et καὶ χωρὶς insuper, praeterea, quemadmodum L. XI. 20. notatum. WESS.

587. 8. [Τούτους δ' ὀρῶσαι ἀσύνητον μὲν τὴν φωνὴν etc.] Sic c. 57. παρὰ μὲν τοῖς Ἑλλησιν ἦν ὀδυρμούςς καὶ δάκρυα θεωρεῖν. Aeschylus Prometh. v. 21.

Ἴν' οὔτε φωνὴν, οὔτε του μορφὴν βροτῶν

Ἵψει — —

Atque ita verba, visum indicantia, ad alios sensus frequentissime transeunt. Exempla Barthius ad Statii Theb. II. 101. et Fr. Oudendorp in Lucani L. I. 254. dederunt. WESS.

587. 11. [Οἰονεὶ νηγμοῖς εἰς τὴν ψυχὴν λαμβάνουσαι] Simile est, sed maiore verborum granditate, in S. Lucae Evang. c. II. 35. καὶ σοῦ δὲ αὐτῆς τὴν ψυχὴν διελεύσεται ῥομφαία. Animi enim utrobique dolores indicantur, sed posteriori loco atrociores. Quod subiicitur, τοὺς δὲ πατέρας — ἐμακάριζον, natum est ex ea plerorumque opinione, qua suam calamitatem, defunctorum miseriis graviolem, miserari solent. Ulysses Odyss. E, 306.

Τρὶς μάκαρες Δαναοὶ, καὶ τετράκις, οἳ τότ' ὄλοντο

Τροίη ἐν εὐρείῃ. — —

Pro quibus Virgilius Aen. I. 94.

— — O terque quaterque beati

Quis ante ora patrum Troiae sub moenibus altis

Contigit oppetere! — —

Adde virum egregium L. Bos Exercit. Philolog. in Apocalyps. c. XIV. 13. WESS.

587. 31. [Τοὺς δὲ θεοὺς ἐκτὸς Σελινοῦντος οἴχεσθαι] Vide Muret. Var. Lect. L. V. 18. et Turnebum Adversar. L. XIV. 15. Putabant Deos ex urbibus, quibus praesens excidium imminebat, ultro excedere, templis desertis. Aeschylus VII. C. Theb. v. 223.

— — — Ἀλλ' οὖν θεοὺς

Τοὺς τῆς ἀλούσης πόλεος ἐκλείπειν λόγος.

Ubi Stanleius. Quare Tyrii, veriti ne Apollo aufugeret, cum urbem Alexander obsideret, aureis eum catenis constrinxerunt infra L. XVII. 41. WESS.

588. 34. [Τούτων μὲν ὁ Ἀννίβας etc.] Fuit τότε olim.

sicuti omnia, quae succedunt, adstruunt. Vitium animadvertit et correxit Rhodomannus. WESS.

588. 42. Χρόνον ἐτῶν διακοσίων τεσσαράκοντα δύο] Conditā ergo fuit anno secundo Olymp. xxxi. At Thucydides L. VI. 4. Selinuntis initia centum annis posteriora prodit origine Megarorum, quibus antea Hyblae nomen: quae quidem exstructa cum sint circa Olymp. xi., coniecit Ph. Cluverius Sicil. Antiq. L. I. p. 227. scripsisse Diodorum διακοσ. τεράκοντα δύο, Selinuntemque adeo anno primo Olymp. xxxv. hand fuisse priorem: cuius opinionioni obloqui non auderem, si annus, in quem Megarorum primordia sunt conferenda, citra dubium certus esset, quod necdum mihi adparuit. Adde Pausan. L. VI. 19. p. 499. WESS.

588. 49. Καὶ μετ' αὐτοῦ πεντεκαίδεκα μυριάδες] Vide ad L. XI. 22. WESS.

588. 57. Διαγωνιζόμενος ἐκ διαδοχῆς] Frequens loquendi genus cum intacti et integri fessos excepiunt praeliumque continent. Superius cap. 56. καὶ τοῖς κρατίστοις ἐκ διαδοχῆς ἀγωνιζόμενος. Et L. XIV. 26. XVI. 75. XX. 46. Freinshemium, qui ad id offenderat, in viam reduxit Balth. Stolbergius Exercit. de Angaris. e. III. 8. p. 172. WESS.

588. 60. Ὑπώρτυτε δὲ καὶ τὰ τεῖχη] De murorum in urbium in obsidionibus suffossione multa Barthius ad Statii Theb. II. 418. Dicam fortasse ad L. XVIII. 70., quae huc pertinebunt. WESS.

588. 66. Τῆς περιμαχίτου πᾶσι πατρίδος] Confer not. in L. III. 10. et L. XII. 68. Ἀγῶνα θεσθαί dictum ad Poetae exemplum, qui μάχην δομιεῖαν ἔθεντο, de acri commisso certamine. Plutarchus de Athen. Glor. p. 346. E. ὑπὸ τὰς πύλας αὐτὰς καὶ τὸ τεῖχος ἔθεντο χαρτερὰν ἵππομαχίαν. Tritius est θεῖναι τὸν ἀγῶνα de certamine in honorem alicuius edito, et ab Andrea Dounaeo ad Demosthen. Orat. de Pace p. 168. illustratum. WESS.

588. 81. Ἦζειν τοὺς συμμάχους] Rectius, meo quidem iudicio, ἦζειν αὐτοὺς συμμάχους. STEPH.

588. 83. Καὶ ταῖς ἐχειρίαις] Multi sunt loci ex quibus hic legendum esse non ἐχειρίαις, sed ἐχειρίαις, probari facile potest. STEPH. Καὶ ταῖς ἐχειρίαις] Quod Stephanus coniecit, id adeo verum est, ut ex Cod. Coislin. vestigiis corrigendum censuerim. Auctorem do Diodorum, qui L. XIV. 24. μετ' ὀλίγον δὲ ταῖς τόλμαις καὶ ταῖς ἐχειρίαις νικῶμενοι πρὸς φηγὴν ὤρμησαν. Et L. XV. 70. διόπερ δόξαντες ἐχειρίαι καὶ ἀνδρεία διαμέρειν, ubi Coislin. iterum ἐχειρίαι. Recurret idem vitium L. XIV. 23. WESS.

589. 2. Ὡς δ' Ἐφορός φησι, διςμυρίων] Nimum hoc quidem. A decem millibus viginti hostium millia fuisse caesa, hodie non credo. Sed Ephorus, non religiosissimae fidei, saepe decipitur, saepe decipit, ut Seneca ait. WESS.



589. 7. *Πρὸς γὰρ ἄρρησεν*] Si plures membranæ ὄρησαν probarent, recipi posset. Vid. ad L. V. 4. WESS.

589. 11. *Πέντε πρὸς ταῖς εἴκοσι*] Scripserat πρὸς ταῖς τριάκοντα. Nam xxxv triremes a Syracusanis auxilio Spartanis contra Athenienses fuisse missas diserte tradidit c. 34., repetitque c. 63. Habet quidem Xenophon L. I. Hellen. p. 338., quæ xxv his triremibus patrocinari videntur, sed is cum Thucydide L. VIII. 26. a Nostro apertissime dissentit. WESS.

589. 16. *Πορεύονται τοῖς Ἱμεραίοις βοηθήσασιν*] Sic malo ex Reg. 2. etsi non ignorem praesens futuri potestatem haud raro adsciscere. Exempla dabit Cel. Duker. in Thucyd. II. 44. WESS.

589. 27. *Τοῖς δ' ἡμίσεισι τηρεῖν*] Nisi quid deest inter ἡμίσεισι et τηρεῖν, legendum videtur τοῖς δ' ἡμίσεισι. STEPH. Verborum ordo τοῖς δ' ἡμίσεισι expostulat, quem intempestive immutasse videntur ob σιμψέρον, quod praecessit: nam aliquid deesse, non dixerim. WESS.

589. 33. *Ἐπὶ τούτων ἀποπλεόντων*] Valere hic diceres, quod de permutata praesentis in futurum significatione tantum quod adscripsi, nisi ad rei gestae celeritatem hoc videretur opportunius: cui si καὶ pondus addere posse putes, id ex Clarom. adstrue. WESS.

590. 35. *Τὸς πεσόντας ἐν τῇ μάχῃ καταλιπὼν*] Vide inferius cap. 75. WESS.

590. 55. *Ἐν δαιμονία διεγορεύτο*] Sic L. XVI. 19. καὶ πολλὰ μὲν χοήματα διεγορεύτο i. e. diripiiebantur. Et XVII. 70. πολλὰ μὲν ἄγρηρος διεγορεύτο. Diversum hoc Pausaniae, sed vim verbi declarans, L. II. 34. p. 192. ἀλλὰ περιορῶσθαι τὸν νεκρὸν φασὶ διαγορηθέντι ὑπὸ τῶν ἐκ θαλάσσης ἀρνείων. Et L. IX. 2. p. 714. de canibus Actaeonis διαγορήσειν ξυμείλλον πάντα τινὰ ὅτω περιτρέχον. Vide vero hoc eisdem Pausaniae L. VII. 17. ἐς ἅπαν δὲ ἀσθενείας τότε μάλιστα κατήλθεν ἡ Ἑλλάς λευκανθεῖσα κατὰ μέρη καὶ ΔΙΑΦΟΡΗΘΕΙΣΑ — ὑπὸ τοῦ δαίμονος, et iustumne id sit perpende. Mihi, ne dicam dolo, ΔΙΑΦΟΡΗΘΕΙΣΑ fuisse ibi videtur, quemadmodum in Dione Chrysost. Orat. XXXVI. p. 446. D. πόλις ὑπὸ τυράννων τε καὶ δήμων καὶ δεκαρχῶν δὴ καὶ ὀλιγαρχῶν, καὶ τινῶν ἄλλων ἀρῶσθημάτων διαγορομένη. Nihil certius. WESS.

590. 59. *Ἐτη διακόσια τεσσαράκοντα*] Itaque Himeræe initia in annum Olymp. xxxii. quartum incidunt, quo eodem ferme tempore Selinuntem conditam fuisse supra dixit. Oppidi excidium attigit Cicero L. II. Verr. c. 35. WESS.

590. 64. *Καὶ πάντας ἀκισόμενος κατέσφαξε*] Avi manibus horum sanguine fortasse parentaturus, ut Spartacus interfecto Crixo apud Appian. L. I. Bel. Civil. p. 703. Nota alioqui inopia Poenorum religio est et caede hominum infamis, qua de infra c. 86. WESS.

590. 67. *Μεθ' ὧν καὶ Καμπανοὶ συνηκολούθησαν*] *Damnatum a Phrynicho Eclog. p. 64. ἀκολουθεῖν μετὰ τινός, egregie tuiti sunt Nunnesius et Lamb. Bos ad S. Lucae Evang. c. IX. 49. WESS.*

590. 85. *Ἐν Πελοποννήσῳ*] *Imo ad Hellespontum, si Xenophon est audiendus L. I. Rer. Graec. p. 336. WESS.*

591. 95. *Καὶ τῆς πόλεως μέρος εἰτείχισε*] *Haec urbis instauratae initia, quae magis atque magis aucta, ut paucis post annis recidivum floreret oppidum, fecerunt. Conf. L. XV. 73. WESS.*

591. 9. *Τῶν Συρακουσίων οἱ πλείστοι etc.*] *Redierant cum maxime Syracusas triremium praefecti, quorum opera Hermodrates contra Athenienses usus fuerat: hi vero abeunti receperant, iuris iurandi interposita religione, eum sese in patriam restitutos apud Xenophontem Hellen. L. I. p. 336. Quare mirum haud est, Syracusanorum plerosque, mutata sententia, de Hermodrate in civitatem restituendo agitasse. WESS.*

591. 16. *Τὴν αὐτοῦ* bene correxerat Ursinus. WESS. in Add.

591. 19. *Θρασύβουλος πεμφθεὶς παρ' Ἀθηναίων*] *Si fides Xenophonti, et cur non ei fides? Hellen. I. p. 337. Thrasyllus fuit, non Thrasybulus, et pluries eum nominat et totam historiam persequitur. Igitur in hac eadem pag. pluries ea correctione utere. PALM. Verissima est viri eruditi observatio, quam praeter Xenophontem firmant Plato Theag. p. 129. D., et Plut. Alcib. p. 207. E. res ad Ephesum gestas Thrasylo tributentes. Mendam peperit confusio utriusque nominis, in schedis obvia c. 98. huius libri. WESS.*

591. 31. *Δεκάτην πρῶτισθαι τοὺς ἐκ τοῦ Πόντου πλεοντας*] *Xenophon Rer. Graec. I. p. 335. ἐντεῦθεν δ' ἀμφιόμενοι τῆς Χαλκηδονίας ἐς Χρυσόπολιν, εἰτείχισαν αὐτήν, καὶ δεκατητήριον κατεσκεύασαν ἐν αὐτῇ, καὶ τὴν δεκάτην ἐξελέγοντο τῶν ἐκ τοῦ Πόντου πλοίων. Meminit et decimarum, quas Athenienses hic exigebant, Demosthen. in Leptin. p. 290. et Polybius L. IV. 44. Quin erant, qui ab auro ex urbibus mercibusque Ponticis exacto, oppido nomen venisse arbitrabantur, teste Stephano Byzantino. WESS.*

591. 37. *Μετὰ τῶν τριάκοντα νεῶν ἀπολίσας*] *Quid est ἀπολίσας? quasi Thrasyllum a se dimisisset Alcibiades: imo eum secum recepit. Igitur ut fides historiae constet, lege ἀπολήψας, cum recepisset Thrasyllum cum XXX navibus. PALM. Diceres Alcibiadem Thrasyllum a se dimisisse, quod sui milites ob rem ad Ephesum male administratam eum, et qui sub eo militabant, prae se contemnerent, recusarentque adeo τοῖς μετὰ Θρασύλλου συνιάττεισθαι, ut Xenophon ait L. I. Hellen. p. 338. Itaque secreto imperio utrumque in Pharnabazi ditionem irrupisse, eumque*

in modum communi excursionem eam vastasse, sicuti Plut. Alcib. p. 207. E. indicat. Id si inprobes, admittendum erit auxilium, quod vir eruditissimus Diodoro tulit. WESS.

592. 47. Ἐξ τῶν πολιτῶν πεπληρωμένοι] Arbitror scriptum a Diodoro fuisse ἕξ δὲ ἐξ τῶν etc. Ut navium quinque fuerint Siculae, sex reliquae Spartano milite instructae. Series orationis suspicioni favet. WESS.

592. 53. Οὐ δυνήθεῖς τὸν Μαλέαν κάμψαι] Molesta haec olim fuerunt praeclarissimae eruditionis viro Io. Fr. Gronovio, qui Epist. XLVIII. ad N. Heinsium, amicam suam, Syllog. Burman. T. III. p. 55. *Nisi forte in acceptum referas locum Diodori Siculi, in quem nuper plane aliud agens incidi et correxisse visus sum, quamvis non erat res magni negotii. Nimirum L. XIII. p. 188. in editione Rhodomanni, οὗτος μὲν οὖν ἐκπλεύσας etc. Haec verba stigmatē insigniverunt, sed uterque in notis praeteriit, Stephanus et Rhodomannus. Atqui notum est, Graecis cursum illum non vocari Μαλέαν, sed ὑπὲρ Μαλέας, ut apud Plutarchum: ἀνήχθη μὲν οὖν ἀπὸ Μεθώνης ὑπὲρ Μαλέας, ὡς τῆ δὲ διὰ τοῦ πόρου δρόμῳ χρησόμενος etc. De tota re accurate P. Victorius ad L. IV. Epist. Ciceron. Famil. p. 40., si eandem editionem habes, quam ego muneri tui possideo. Quem si legeris, non dubitabis reliquisse Diodorum, οὐ δυνήθεῖς τὸν ὑπὲρ Μαλέας κάμψαι, scilicet πόρον, vel δρόμον. Ego vero legi diligenter egregiam illam Victorii ad Epist. 14. L. IV. animadversionem, nec adduci possum, ut aut viro egregio concedam, aut τὸν Μαλαῖον, quae mera librariorum παραδιόρθωσις est, cum Camusato, ex Coisl. ita corrigente, recipiam. Nam Plutarchi in Arato p. 1032. B., ibi enim ea leguntur, verba huic loco nec prosunt, nec obsunt. Prosunt autem haec Strabonis L. V. p. 373. κάμψαντι δὲ τὸ Μισηρὸν, λίμνη εἰθὺς ὑπὸ τῆ ἄκρα. Et Polybii L. I. 54. κάμψας τὸν Πάχυνον, ἐποίητο τὸν πλοῦν ὡς ἐπὶ τὸ Αἰλίβαιον. pro quo post pauca καὶ κάμψαι τὴν ἄκραν τοῦ Παχύνου. Succurrit praeterea Cicero ad Attic. L. V. 9. Actio maluimus iter facere pedibus, qui incommodissime navigassemus: et Leucatum FLECTERE molestum videbatur, et, quod litem omnem dirimit, vetus proverbium:*

Μαλέαν δὲ κάμψας ἐπιλάθου τῶν οἴκαδε.

apud Strabon. L. VIII. p. 580. Namque ut addam Μαλέαν utroque genere dixisse veteres, in re nota necessarium non videtur. WESS.

592. 58. Καὶ πρῶτος Ἀθηναίων etc. διοροδοκῆσαι] Eadem de Anyto, Anthemionis F., Plut. Coriol. p. 200. B., et Aristoteles apud Harpocrat. voc. Ἀεζάζων. Aliter Etymologus, cuius inprudenciam castigavit Cl. Duker. in Miscell. Observat. Vol. V. p. 187. WESS.

592. 62. Τῶν δὲ ἰδίων οἱ μὲν etc.] Non deerunt fortasse,

quibus τῶν δὲ ἔνδον οἱ μὲν ἐκ τῶν etc. qui intra Pylum erant, melius videbitur ob τοὺς δὲ ἔνδον cap. 66. Mihi vulgatum placet, ipsa orationis serie satis superque tutum. WESS.

592. 65. Πεντεκαίδεκα ἔτη — κατεσχιγῶτων] Rectius scripsisset xvi, ἑξκαιδεκα. Munita enim a Demosthene Pylus est anno Olymp. LXXXVIII. quarto, uti ipse memoriae prodidit L. XII. 63. WESS.

592. 68. Νισαίαν ὑπὲρ Ἀθηναίων οὖσαν εἶλον] Vide L. XII. 67. WESS.

592. 73. Πρὸς τοῖς λόφοις τοῖς Κέρασι καλουμένοις] Duo scopuli erant in Atticae et Megaridis finibus contra Salaminem. Situm Strabo signat L. IX. p. 604. ἐν δὲ τῇ παραλίᾳ τῇ κατὰ Σαλαμίνα, κείσθαι συμβαίνει τὰ ὄρια τῆς Μεγαρικῆς καὶ τῆς Ἀτθίδος ὄρη δύο, ἃ καλοῦσι Κέρατα. Paria ex Aecestodoro in Themist. p. 118. E. Plutarchus. WESS.

592. 78. Βαρῆως φέροντες ἐπὶ τῷ etc.] Vid. not. in L. III. 59. WESS.

593. 89. Καὶ τῆς ἐκπτώσεως εἰς ἑξακοσίους] Post ἐκπτώσεως deesse puto duo haec verba, aut similia, αἰτίων γενομένων. STEPH. Dele καὶ et post ἐκπτώσεως supple αἰτίων. RHOD. Hiāt manifeste oratio, cui, si ex Vaticano αἰτίους ὄντας addideris, medeberis quidem pro parte aliqua, nec sanam praestabis, nisi si in priore membro τι νὰς reticere, uti L. XI. 53., arbitreris. Sequere ergo id, si lubet. Ego viris doctissimis accedo, mendam in Vaticano agnoscens. WESS. Ursinus τῆς ἐκπτ. αἰτίους ὄντας forsan ex Vaticano libro. IDEM in Add. Qui addidit αἰτίων ὄντων.

593. 91. Χωρίον Ἀταγέα] De eo ad L. XVI. 53. WESS.

593. 94. Τοῖς τὸ Ἰσχύον ἔχουσι] Pro Ἰσχύον lege Ἰσχίον. At in Addend. forte τοῖς τὴν Χίον ἔχουσι. RHOD. H. Stephanus in margine correxit et iubet legi Ἰσχίον. Nescio unde habuerit eam vocem, quae numquam mihi pro nomine loci lecta est. Ego simplicius lego τὴν Χίον, urbem Chium: quod consonat praecedentibus. PALM. Τοῖς τὸ Ἰσχίον etc.] Sic malui, quod propius hoc absit a vero. Nam scopum tetigisse viros doctissimos mihi persuadeo, quanquam Palmerius solens errat, dum corruptas veterum Codd. lectiones, quas margini suae editionis Stephanus adscripserat, ipsi viro erudito inputat. WESS.

593. 96. Λάβδακον τεχίσαντες] Iterum hoc loco lege Θράσυλλος, et pro Λάβδακον, quod est Syracusanorum castellum in Sicilia, de qua non agitur, lege Λάμψακον. et sic legendum esse patet ex Diodoro infra p. 388. eodem libro (cap. 104.) ubi ait Lysandrum recepisse Lampsacum et Atheniensium praesidium ex conditione foederis dimisisse liberum. PALM. Et Θράσυλλος et Λάμψακον auctoritate Xenophontis Hellen. I. p. 338. muniuntur. Bene proin coniectoris officio vir praestantissimus designatur. WESS.

593. 4. *“Ον οἱ Λάκωνες ἀρμοστὴν ἐκάλουν]* Vide L. XIV. 3. et cap. 10. Mittebant Spartani in provincias urbesque suae ditionis magistratum, quem a rebus ordinandis et componendis ἀρμοστὴν nuncupabant. Appianus Bell. Civil. L. IV. p. 957. de triumviratu, ἦν ἂν τις Ἑλλήνων ἀρμοστιάς ὀνομάσειεν, ὃ καὶ Λακεδαιμόνιοι τοῖς καθισταμένοις τὰ ἐπίκουρα εἶδεντο ὄνομα. Nimirum triumviri reipublicae constituendae dicebantur, atque ita quadamtenus Spartanorum ἀρμοστιαῖς conveniebant, alioqui ampliore potestate instructi. Eleganter Aristides T. I. p. 368. mutatum totius Graeciae habitum post Cononis in patriam reditum describens, ἐπίμπλατο δὲ ἡ θάλαττα, inquit, τῶν ἀρμοστίων ἐκπιπτόντων, ἕτε ἀναριθμήσιων, καὶ οὐ κατὰ τὸ ὄνομα ἐγκρατασταθέντων καὶ ἐχόντων τὰς πόλεις. Atque hi quidem in provincias abibant, a Plutarcho etiam in Lyncurgo p. 58. E., ubi in nupera editione sine causis quaedam mutantur, memorati. Alius generis est, de quo Dionysius Rom. Antiq. L. V. p. 337., paene infinito imperio ad rem publicam, si qua labasset, instaurandam praeditus, ut bene Nic. Cragius de Rep. Lacedaem. L. II. 13. Neque huc pertinet ex Demostrato apud Aelian. Hist. Animal. L. XIII. 21. τῶν δὲ τις τῶν ἐκ βουλῆς ἀρμοζόντων κλίρω τὴν Ἑλλάδα. Graeciae enim, sive Aethiopiae proconsul est, sicuti apud Lucian. Toxar. c. 17. ἀρμοστής, ὃς ἤρμοξε τὴν Ἀσίαν τότε, qui proconsulari imperio provinciae Asiae praecerat. Nam, qui de Persarum satrapa ea Luciani accipiunt, seriem rerum perscriptarum non observant: et solent saepe Graeci, prorsus uti Latini, nomina magistratum suae gentis ad alius populi praefectos describendos transferre. WESS.

593. 7. *Ἐθρομένως ἀγωνισαμένων]* Obsequor scriptis membranarum, etsi vulgatum λαμπρῶς Diodoro frequentius placuerit. De re ipsa Xenophon Hellen. L. I. p. 339. WESS.

594. 20. *Πρωτον μὲν Σηλυβρίαν etc.]* A Selye et voce βριάς, urbem Thracibus notante, cum vocabulum sit conflatum, teste Strabone, Σηλυβρίαν itidem scribente, L. VII. p. 491. C., sic praestat, neque aliter aut Xenophon Hellen. I. p. 335. et p. 329. aut Plut. Alcib. p. 208. A. In Demosthene Orat. de Corona p. 148. nunc Σηλυμβριαροί, in vetustis vero schedis Σηλυβριαροί. Pessimè apud Themistium Orat. XXIII. p. 290. Σηλυμβριαρός. WESS.

594. 26. *Πόλις βάρως ἐχούσα]* Vide ad L. IV. 61. WESS.

594. 35. *Προῦδωκαν τὴν πόλιν]* Nominat proditionis auctores Xenophon Rer. Graec. L. I. p. 340., quorum principem Polytaenus non praeterierat olim, librariorum negligentia nunc adeo obscuratum, ut agnosci vix potuerit. Restituamus ergo hominem suum in locum. Verba L. I. 47. 2. haec sunt: *Θράσιλλος καὶ οἱ περὶ αὐτὸν στρατηγοὶ Βυζαντίοις ἐπέκειντο περὶ ραζίαν. οἱ στρατηγοὶ Βυζαντίων δείσαντες μὴ κατὰ κράτος ἢ πόλις ἀλώ, συνέθεντο χρόνον, ἐν ᾧ παραδώσουσι τὸ Βυζάντιον etc.* Quisque videt, τὰ περὶ ραζίαν nihili esse, neglecta quoque ab interprete, ea

non intelligente. Notant e Mss. *Βυζαντίους ἐτέκειντο. οἱ περὶ ἀναξίαν οἱ στρατ.*, quae quidem prava sunt, sed, parum si adiuventur, pristinam florem Polyaeo restituent. Scripserat, *Θράσυλλος — Βυζαντίους ἐπέκειντο. οἱ περὶ Ἀναξίαν στρατηγὸς Βυζαντίων* etc. Namque inter tradendae Thrasyllō atque Alcibiadi urbis auctores praecipuo loco *Anaxilas* sive *Anaxilaus* fuit, uti praeter Xenophontem docebit Plutarchus Alcib. p. 208. D. Hoc itaque rectum. WESS.

594. 48. *Τὰ μὲν συντριβόμενα ταῖς ἀποστολαῖς*] Plane aliena ab hoc loco est vox *ἀποστολαῖς*. ei autem conveniret fortasse *ἐμβολαῖς*. Sed videtur subesse et alia depravatio. et alibi dicit *ταῖς ἐμβόλοις συντρίψαντες*, non *ταῖς ἐμβολαῖς*. STEPH. *Ταῖς ἀποστολαῖς*] Male pro *ἐπιβολαῖς*. RHOD. *Ἀποστολαὶ* nihil ad hunc locum; si addubites, adi Thucydidem L. VIII. 8., et quae ibi Dukeris. At gravius subest vulnus, luxaque oratio est et forte defecta. Cogitaveram quidem *τῶν πλοίων τὰ μὲν συντριβόντων τοῖς ἐμβόλοις, τὰ δ' ἀποσπώντων ταῖς σιδηραῖς χερσίν'* et, quoniam id nimium, etsi a scriptoris consuetudine non alienum videri potest, *τῶν μὲν συντριβομένων τοῖς ἐμβόλοις, τῶν δ' ἀπὸ τῶν* etc. Sed neutrum ita animo blanditur, ut pro vero putare velim. Aliunde ergo exspectandum est auxilium. WESS.

594. 61. *Πολὺν χρόνον ἀντιστάτες*] Veneto libro debetur loci huius salus, quam *Πελοποννήσιοι*, et quae sequuntur, sibi dudum expetiverant. WESS.

595. 69. *Εἰς πεντακοσίους*] *Καὶ τῶν πολέμιων τοὺς περιγενομένους ὅσον τριακοσίους ζῶντας ἔλαβε* Plut. Alcib. p. 208. F., ut aut hic aut illic in captivorum numero vitium sit. WESS.

595. 73. *Ὁμολογίας ἔθεντο*] Rectius *ὁμολογίαν* numero unitatis. STEPH. Obversatum, credo, memoriae Stephani fuit *ὁμολογίαν ἐποίησαντο* ex cap. 66. At reminisci debuerat *εἰ δὲ συνθροῖντο ὁμολογίας* L. II. 33. Et *ὁμολογίας θέμενος τοιαύτας* L. IV. 58. eiusdemque generis alia. WESS.

595. 79. *Σπόριον Νατίον*] *Γάϊον Νατίον Ρούτιλον* edunt Fasti. RHOD. Vid. Livium L. IV. 52., et quae ibi viri docti. WESS.

595. 81. *Ἐβρατος Κυρηναῖος*] In Pausaniae L. VI. 8. *Ἐβρώτας Κυρηναῖος*. Apud Xenophontem Hellen. I. p. 337. *Ἐβρότας*, et in margine *Ἐβράτας καὶ Ἐβρώτας*. In qua discrepante scriptura et *Ἐβρατος* et *Ἐβρότας* patronos habere poterit. Elige ergo. Id vero mihi praetereundum neutiquam est, omnia ea, quae de Chalcedone, Selymbria et Byzantio, Thrasyllique ad Ephesum clade memorata ante sunt, serius contigisse, si temporis apud Xenophontem notatio dubio careat. WESS.

595. 93. *Οἷκ ἐλάττους διακοσίων*] Tacet Xenophon. Verum Cornelius Nepos Alcib. c. 5. ducentas naves triremes superioribus praeliis Spartanos amisisse, quae captae in hostium venerint

potestatem; Plutarchus vero ducentas naves qua hostibus ereptas qua Atticas cum Alcibiade in Piraceum fuisse invectas, plerasque ornatas clypeis spoliisque hostilibus in Alcib. p. 209. B. refert. Sed vide quae Athenaeus habet L. XII. p. 535. C. Durim, Nostro consentientem, secutus. WESS.

595. 5. *Οἱ δ' ἄποροι ἐπελήρησαν*] Videndus Plutarchus in Alcib. p. 210. B. et Isocrates de Big. p. 521. Quod vero statim consequitur de summa Alcibiadis in dicendo vi, id Comici poëtae aegrius ferrent. Eupois certe praeter loquentiam illi nihil reliquit noto versu:

*Λαλεῖν ἄριστος, ἀδυνατότατος λέγειν.*

Sed is et inimicus erat, et *τραυλισμὸν* Alcibiadis potissimum respicit, ab ingenii non dissimilis poëta lepidissime notatum,

*Ὀλῆς Θέωλος τὴν κεφαλὴν κόλακος ἔχει,*

in Vesp. v. 45. WESS.

595. 10. *Καθ' ὑπερβολὴν εὐπροπέλις*] Formae pulchritudinem, cui mirifice studebat ipse, Alcibiadi plures tribuunt, *ζαλὸν* appellantes, ut Satyrus apud Athen. XII. p. 534., ubi plura. WESS.

595. 11. *Καὶ μεγαλεπήβολος*] Interp. versione sua *μεγαλεπήβολον* expressit, quo ingenio Alcibiadem fuisse constat: qui quidem cum saepe exstiterit *μεγάλων ἐπιτυχῆς* ac prosperos in maximis rebus successus habuerit, a vulgato non recedo. Confer not. in L. I. 19. WESS.

596. 21. *Τὸν ἄνδρα πάντες ἐδέξιοῦντο*] Adi Xenophontem Hellen. L. I. p. 342. et Plut. Alcib. p. 209. D. WESS.

596. 27. *Λόπερ αὐτῷ τὴν τε οὐσίαν ἀπέδωκαν*] *Restituta ergo huic sunt publice bona: iidemque illi Eamolpidae sacerdotes rursus resacrare sunt coacti, qui eum devoverant: pilaeque illae, in quibus devotio fuerat scripta, in mare praecipitatae.* Sic Corn. Nepos in Alcib. c. 6., in eo cum Nostro dissentiens, ut iam olim Lambinus monuit, quod ipse pilas, quibus devotio fuerat inscripta, Diodorus *δίνας sententias*, quibus erat condemnatus, in mare demersas tradiderit: quamquam, si rem recte putes, *τἄλλα τὰ κατ' ἐκείνου κρωθέντα* et pilas, quarum et Isocrates de Big. p. 513. commemorat, complecti possunt. Iunge Plutarchum Alcib. p. 210. A. et P. Leopard. Emend. L. VI. 4. In integrum autem restitutus amplissimaque cum potestate dux creatus Alcibiades legem rogasse fertur, *μηδένα στρατηγὸν ἐκ τοῦ στρατοπέδου ἀνακαλεῖσθαι, ne qui dux ab exercitu revocaretur.* Memor enim eorum, quae sibi Siciliensi expeditione evenerant, similem calamitatem a se amoliri hac lege constituit, modo revera perlata sit. Meminit eius Scholiastes Aphthonii, atque ex eo Io. Meursius Themid. Att. L. I. 11. Sed solent saepe Rhetores leges ipsi ferre, ut declamandi utramque in partem uberior sit occasio. Fac tamen latam esse; neque enim a vero dissidet, Alcibia-

dem sibi ita cavere voluisse: primus ipse expertus est, quam debile contra iratam multitudinem tali in lege patrocinium fuerit. WESS.

596. 36. Ἀδείμαντον καὶ Θρασύβουλον] Pro *Thrasymbulo* Aristocratem Xenophon Hellen. I. p. 343. illi adiungit, non item Nepos Cornelius Alcib. c. 7. WESS.

596. 38. Κάττιον φροῖριον] Xenoph. Hellen. I. p. 343. Γαύριον appellat. RHOD. Xenophon. L. I. non Κάττιον, sed Γαύριον habet; quod praefero et hoc loco scribi debere puto. Nam T. Livius L. XXXI. 45. *Gaureleon* vocat. Linea sequente pro ἀρδρῶν lege Ἀρδρῶν. PALM. Idem a Xenophonte castellum indicari atque adeo aut eius in verbis aut Nostri vitium esse, dubio caret. Γαυρίω tamen cum patrocinetur, ut pulcre admonuit Palmerius, Andriorum portus, quem *Gaureleon* adpellabant, id quoque hoc loco malim. Quin ipso in Livio ob veterum Codd. discordiam idem fortasse praestiterit. Mox Ἀρδρῶν Rhodomannus sua versione expressit, me non invito. WESS.

596. 45. Ἐν μὲν τῷ περρ. τεῖχει] Vide not. in Hieroclis Synecdem. p. 681. Saepe τεῖχος *arcem*, munimentumque notat. Demosthenes in Midian. p. 358. τεῖχος ἐστὶ πρὸς τὸ μηδὲν ἂν αὐτὸν ἐξ ἐπιδρομῆς παθεῖν. Ioseph. Antiq. Iud. XVII. 1. 1. ἀλλ' οὐδὲν — ἦν ἡ ἐπιγαμία τεῖχος. Et L. XVIII. 6. 9. ἄλλως τε γινώσκεις ὡς τεῖχος σοὶ καὶ τῆς ἀρχῆς ὁμοῦ καὶ τῆς σωτηρίας περιῶν γένοιτο ἂν Τιβέριος. Tum cap. sect. 2. τεῖχος αὐτῆ τὸν ἀδελφὸν ἔλεγεν. Quibus locis tutamen praesidiumque, ob quod reges Ὀλύμπια τεῖχεα γαίης Oppiano Halieut. L. V. 45. cum nota Rittershusii, explanate designat. WESS.

596. 51. Τὴν τε ναυτικὴν δύναμιν καὶ τὴν ἀρχὴν etc.] Diceres in his peregrini aliquid esse: omittunt καὶ τὴν praestantis fidei libri, videnturque adeo ἀρχὴν addidisse, ut prius clarius exponerent. Posses alioqui, quod in mentem venit doctissimo De la Barre, ex ἀρχὴν levi opera ἄρδην excudere, ut innuat, *funditus* eversum maritimum Spartanorum imperium. Sed hae suspiciones sunt, sine quibus vulgata scriptura salva esse potest. WESS.

596. 60. Ἐκείθεν ταῦς ὄσας εἶχον] Adde καὶ ὄσας εἶχον. RHOD. Ego vero nihil addo, auferens potius importunum vocabulum παραλαβὼν, quod vicinum sibi non patitur praecedens προς-λαβόμενος. Sermo est de insula Rhodo, cuius tres civitates nondum in unam Rhodum coaluerant, cum Lysander ad insulam adpelleret. Testis ipse Diodorus c. 75. et Aristides in Rhodiaca p. 365. WESS.

597. 63. Ἐξήρτηεν ἐξ Ἐφέσου] Verius et rectius erit ἐν Ἐφέσῳ, ut mox cap. 71. πνθόμενος ἐν Ἐφέσῳ τὸν Ἀύσανδρον etc. In navium numero dissentit Xenophon Hellen. I. p. 344. WESS.

597. 68. Μυρσίους μὲν Δαρεικοὺς] Conf. Plut. Lysand. p. 435. WESS.



597. 72. Ὅπως ὅσα ἂν — χορηγήσαι αὐτοῖς] Fuit cum χορηγήσαι praeferrem, quod auctor infinitam nonnunquam orationem post ὅπως admittat, ut L. XX. 4. Nunc nihil innovo. Geminum est c. 75. ὅπως ὁ μὲν Διοκλῆς προσκόψαι τοῖς πλήθει. WESS.

597. 85. Περὶ τὸ Νότιον] Harpocration χωρίον fuisse ait προκείμενον τῆς Κολοφωνίων πόλεως. At Herodotus L. I. 149. inter Aelicas civitates discrete numerat. Vid. L. Holsten. ad Νότιον Stephani. WESS.

597. 93. Δέξα δὲ ναῦς ἀρίστας etc.] *Duabus* Antiochus *triremibus* in Ephesiorum portum injectus Lysandro insultavit, si fides Plut. Lysand. p. 435. C. et Alcib. p. 211. C., et, cui is sua debet, Xenoph. Rer. Graec. L. I. p. 344. A. sed Noster sibi constat. WESS.

597. 98. Τὴν ἔφοδον] Sensus postulat τὴν ἄφοδον. RHOD.

597. 8. Δὺν πρὸς ταῖς εἴκοσι] Ἀπολέσαντες πεντεκαίδεκα τριήρεις Xenophon Hellen. I. p. 344., et Plutarchus Lysand. p. 435. WESS.

598. 13. Οὐ τολμῶντος δ' ἀναχθῆναι] Scripti Codd. si addicerent, ἀνταναχθῆναι praeoptarem: opportunius enim. Xenophon Hellen. I. p. 344. ἐπεὶ δὲ Ἀλέξανδρος οὐκ ἀντανήγαγε. Auctor ipse in superioribus, πάσαις ταῖς ναυσὶν ἀνταναχθεῖς. At hi tacent; quare coniectura esto. WESS.

598. 19. Ἠνάγκασε τοὺς γεννάδας, τοὺς τὰ τῶν Ἀθηναίων etc.] Ad illustrationem huius loci et pleniorē historiae cognitionem addendum ex Demosthene: Ἐσχάρτου ξυμπρόκτωντος, καὶ τὴν Λακεδαιμονίων φρουρὰν μεθ' ὀπλῶν ἐκβάλλοντος, *Ephanto adiuvante et Lacedaemoniorum praesidium armis expellente*. PALM. Vide Demosthen. in Leptin. p. 341., qui Thasum ante hunc annum a Thrasybulo Atheniensium ditioni additam significat. WESS.

598. 22. Πλεύσας εἰς Ἀβδηρα] Sic veterum plerique, Marmor inter Donian. Clas. I. 98. ΗΘΑΙΝ ΤΕ ΑΒΔΗΡΑ ΕΠΙ ΘΡΑΚΗΣ ΗΡΑΚΛΗΣ ΩΙΚΙΣΕ ΤΟΥ ΘΡΟΝΙΚΟΥ ΥΙΟΥ ΕΠΩΝΥΜΟΝ ΑΒΔΗΡΟΥ. ubi id quidem singulare, *Abderam*, *Herculis delicias*, *Thronici* F. adpellari, qui ceteris *Erimo* patre dicitur natus. Sed in huiusmodi fabulis veri constantia desideratur ubique. Urbis originem, opes et fata executi sunt Cl. Salmasius in Solin. p. 114. et Ioseph. Wasse ad Thucyd. in not. Addend. p. 669. Agri vero, quem occupabat, fertilem ubertatem auctor indicat L. XV. 36. et Is. Vossius ad Melae L. II. 2. 82. WESS.

598. 35. Ὡς δ' ἐγγὺς ἐγενήθη τῆς πόλεως] Haec alibi vix reperies. Xenophon quidem certe tacet, hanc Athenarum oppugnationem dignam non arbitratus, cui locum daret. Habet aliam L. I. Rer. Gr. p. 336., sed hac priorem. WESS.

598. 46. Τὸ μὲν βάθος εἰς τέτταρας ἄνδρους] Confer Aeliani Taet. c. 6. et quae viri docti adscripserunt Thucyd. VII. 78. et Lucian. Zeux. c. 8. WESS.

598. 49. Ὑπὸ τῶν πολεμίων περιειλημμένα] Interp. *ab hoste teneri* verterat, Spartanis hac versione nimium studens. Phalanx ad quinque stadiorum intervallum ab urbe aberat, uti continuo sequitur; quo ergo modo duas muri partes tenere potuit? WESS.

598. 56. Καθ' αὐτοὺς προνεικηρότες ἐπὶ Ἀγγλῶ] Soli, seorsum nec aliis coniuncti. Aelian. Hist. Animal. L. XV. 3. καὶ οἱ μὲν αὐτῶν κατὰ τοὺς σὺς εἰσι μονίαι καὶ καθ' ἑαυτοὺς νήχονται. Demosthen. in Leochar. p. 614. ὅζει καθ' αὐτὸν ἐν τῇ Σαλαμῖνι. Et Noster L. XIV. 110. καθ' αὐτοὺς δὲ οὐκ ὄντες ἀξιόμαχοι. Alia viri Cl. Iac. Gronov. ad Argrian. de Alex. Exped. L. III. 21. et Lamb. Bos Animadv. p. 19. De pugna ad Delium superiore libro c. 70. actum fuit. WESS.

599. 66. Ἐν Ἀκαδημίᾳ καταστρατοπέδευσε] De Pausania Xenophon L. II. Reg. Graec. p. 357. πρὸς τὴν πόλιν ἐστρατοπέδευσεν ἐν τῇ Ἀκαδημίᾳ τῷ καλουμένῳ γυμνασίῳ. Atqui Plut. Thes. p. 15. D. Spartanos auctor est, quoties in agrum Atticum excurrerent, Academia studiosissime abstinuisse. Sed ea non pugnant neque sibi contraria sunt. Pepercerunt luco sacrisque oleis, cum cetera, urbi vicina, urerent et vastarent pleraque: id docet Plutarchus et Schol. in Sophoclis Oedip. Colon. v. 689. WESS.

599. 78. Ψευδεὺς αἰτίας ἐπέθορυγε τοῖς Κυμαίοις] Tangit hanc foederatae Cymaeorum civitatis susceptam ab Alcibiade oppugnationem Corn. Nepos Alcib. c. 7., sed qui cum Nostro consentire non poterit, nisi arcano Atheniensium iussu urbem tentatam censueris, quae Cl. Bosii opinio parum probabilis. In Diodoro certe nihil est, quod illi patrocinetur. WESS.

599. 93. Κυμαίων δὲ πεμφάντων εἰς Ἀθήνας etc.] Nisi distinctione mutata inductoque δὲ scripseris post pauca πόλιν — ἐπόρθησεν, ἐγίνοντο καὶ ἄλλαι etc., ordo verborum erit salebrosior, longeque posterior illo, quem schedae Venetae praefereunt. Vide ergo utrum malis: ego veteri libro paene adstipulor. WESS.

599. 2. Καταδυναστεύσειν τῶν πολιτῶν] S. Iacobus Epist. c. II. 6. οὐχ οἱ πλούσιοι καταδυναστεύουσι ἡμῶν, i. e. *per vim opprimunt vos*. Eadem enim sunt τὸ καταδυναστεῦον ἢ καταβιάζομενον, artissime etiam iuncta a Plut. in Osirid. p. 367. D. Unde καταδυναστεύομενοι, qui potentiorum vi opprimuntur, in Excerpt. Vales. p. 397. et Act. A. S. Lucae c. X. 38. Eleganter Philo Iud. de Ling. Conf. p. 335. E. ὀγκλοκρατία, ἣ θαναμάζει τὸ ἄριστον, ἐν ἧ ἀδικία καὶ ἀνομία καταδυναστεύουσι. WESS.

599. 8. Ἀνσαρίαν — — Θρασύβουλον] In primo nomine variat Xenophon, qui uno loco Λέοντα, altero Ἀνσίαν vocat. Sed verum nomen est Ἀνσίας. Nam et ipse Diodorus infra p. 386.

sic cum appellat. Pro *Θρασύβουλον* vero iterum repono *Θράσυλον*, ut est infra dictus p. 386. et apud Aristophanis Scholiast. ad *Ranas*. ΠΑΙΜ. Probo doctissimi viri coniecturas. Vide Xenophontem *Hellen*. I. p. 344. et 349. WESS.

600. 10. *Ἀριστογένην* Clar. et Xenoph. L. I. *Hellen*. p. 244. Vulgo *Ἀριστογένη*. Vide Demetrium de *Elocut*. cap. 177. WESS.

600. 15. *Εἰς Πακτίην τῆς Θράκης*] *Id ut ille* (Alcibiades) *audivit, domum reverti noluit, et se Pactyen contulit*: sic enim post Abrah. Ortelium verba haec Nepotis Cornelii in *Alcib.* c. 7. optime constituit Bosius, quem vide. WESS.

600. 18. *Θεωροῦντες αὐτὸν κακῶς φερόμενον*] Non damno Latina Rhodomanni: namque et *εὖ φερόμενοι ἐν τοῖς πράγμασι*, quibus res bene cedunt apud Plut. T. II. p. 68. D. Poteris tamen, si libeat, famam intelligere, qua pessime audiebat Alcibiades, ut in his Iosephi de *Iud. Antiq.* L. XVI. 7. 6. *Σαλώμη δὲ καὶ χεῖρον ἢ πάλαι φερομένη παρὰ τὰδελεῖται*. Alioqui omnia, quae pessime administrantur, *κακῶς φέρονται*. Strabo L. XIV. p. 991. C. *κατέλυσε τὴν καθεστῶσαν πολιτείαν, κακῶς φερομένην ὑπὸ τε ἄλλων καὶ Βοήθου*. Xenophon *Vit. Ages.* p. 24. ed. Oxon. Tisaphernem *αἴτιον εἶναι τοῦ κακῶς φέρεσθαι τὰ ἑαυτοῦ*. WESS.

600. 20. *Ἰππων τετιμημένων ταλάντων ὀκτώ*] In dubio animus fuit, utrum *πεντήκοντα* ex scriptis libris adscisceret, an in vulgato acquiesceret. Magna quidem apud me membranarum est auctoritas, nec leve Rhodomanni, illis adsensi, iudicium, sed summa pecuniae, etsi non ignota sit veterum in *ἵπποτροφίαις* insania, fidem excedit. Adde Diomedem, cuius hi equi, in re medioeri fuisse: *κεκτημένος*, inquit Andocides *Orat. in Alcib.* p. 32. *οὐσίαν μετρίαν*. Maneat ergo sua in sede vulgatum, a Vat. et Venet. haud improbatum, et mediocris fortunae homini convenientius. Crimen ipsum non praeteriit Plut. *Alcib.* p. 196. D. in multis tamen a Diodoro discrepans: nam currum Argivorum fuisse et Diomedis pecunia redemptum, dein ab Alcibiade interversum significat. Propius abest Andocides, etsi nec is usquequaque consentiat. Ceterum non videtur Plutarchus loci eius in Andocidis *Oratione* recordatus, alioqui huc non traxisset Isocratis orationem *περὶ Ζεύους*, qua Alcibiadis F. Tisiam repellit, criminantem, sibi ab Alcibiade bigas fuisse ereptas, quas patrem ab Argivorum civitate redemisse filius ait. Diversum enim crimen. WESS. Non ita librorum aliquot scriptura *πεντήκοντα* commoveri se passus esset Wesselingius, si per frequentem librariis animadvertisset utriusque numeri (ἡ et ν') permutationem: de qua v. annot. crit. ad 523. II. Quinquaginta talentorum pretium pro illis temporibus nimis insanum esse non opus est demonstrari.

600. 23. *Κατὰ τὴν ἐπογραφὴν* etc.] Mos erat, ut prius pugnaturi profiterentur ac subscriberent, suos esse equos, quam in certamen committerentur. Plut. *Alcib.* p. 196. D. *πριήμενος δὲ*

ὁ Ἀλκιβιάδης, ἴδιον ἀπεγράψατο, τὸν δὲ Διομήδη χαίρειν εἶπαι. Quam consuetudinem ex Nostri verbis observare haud neglexit P. Faber Agonist. L. I. 3. WESS.

600. 25. Ὑπεγράψατο. καὶ νικήσαντας τὸ τέθριππον etc.] Non video quo referri possit accusativus νικήσαντας. Melius procederet oratio cum νικήσας. Sed nec τὸ τέθριππον suspitione prorsus vacat. STEPH. Germana lectio est νικήσαντος, intellige τοῦ Διομήδους. Paulo ante recepi in contextum πεντήκοντα, in margine assignatum. RHOD. Τοὺς νικήσαντας τὸ τέθριππον, ἰδίους ὑπεγράψατο] Molesta viris doctissimis verba ex Veneti Cod. h̄de suam in sedem revocavi, commodam profecto. Nam τὸ τέθριππον quod suspitione gravet H. Stephanus, nihil est. Sexcenties νικῶν στάδιον auctor dixit hunc ad modum. Ipse Stephanus citavit Thes. T. II. p. 1057. ex Florilegii cap. I. L. I. Διοφῶν ὁ Φίλωνος ἐνίκασ' Ἄλμα, ποδωκείην, δίσκαν, ἄκοντα, πάλην. Quia ἄρμα νικῶν Pindarum scripsisse admonet Ill. Spanhemius Dissert. VIII. de Praest. et Num. Usu p. 549. WESS.

600. 29. Αὐτὸς αὐτοῦ κατέγνω γυγῆν] Videtur legendum διὸ καὶ αὐτὸς αὐτοῦ, vel αὐτὸς οὖν αὐτοῦ. STEPH.

600. 31. Προσετέθη καὶ συνωρίς κατὰ τὴν etc.] Olympiade XCIII. Pausanias confirmat atque explicat L. V. 8. δρόμος δὲ δύο ἵππων τελείων, συνωρίς κληθεῖσα, τρίτη μὲν Ὀλυμπιάδι ἐτέθη πρὸς ταῖς ἐνετήκοντα. Εὐαγόρας δὲ ἐνίκησε Ἰπλείος. WESS.

600. 33. Ἄρξας ἔτη πεντήκοντα] In haec interpretemque Rhodomannum ita insurrexit H. Dodwellus: *Plistoanactem illo anno defunctum annis L. regnasse dicit interpres. Nescio qua fretus Mss. Codicum fide. In Graecis illa verba tantummodo legimus, ἄρξας ἔτη ὀκτώ. Certum est, desse numerum maiorem. In margine legimus, γράφεται πεντήκοντα. Inde fortassis interpres loco octo legit quinquaginta. Nempe, ut videtur, antepaullo antea in margine repererat γράφεται πεντήκοντα. Vocem in textu ὀκτώ. Sed plane nulla ratio est, cur non veri illi invicem confunderentur. Si itaque hunc numerum marginalem in Codicum Mss. margine repererint, de quo tamen nihil monent editores, e margine supplendum textum potius quam emendandum fuisse crediderim. Sic numerus annorum integer erit LVIII, quibus regnavit ille Plistoanax. Hi deducti ex Olymp. XCIII. I. reliquam facient Olymp. LXXXVIII. 3., quo Plistarcho mortuo successerit Plistoanax. Sed vero hoc anno desinente Olymp. LXXVII. 3. occisus est Pausanias. Ita quadriennium reliquum erit a caede Pausaniae, quo adoleverit, regnumque adultus ipse administraverit, Plistarchus. Annal. Thucyd. p. 73. Quae quidem ego maximam partem non scripta mallet. Nullo enim iure Rhodomannus notatur, qui e margine πεντήκοντα, quam Codd. veterum esse lectionem post haec nemo ambiget, adsciscendum censuit. Falsa est vulgata citra controversiam scriptura. Plistoa-*

nax quippe, etsi admodum puer, iam rex erat anno Olymp. LXXX. tertio. Quod cum ex L. XI. 79. Interpreti haud lateret, cur non admitteret verisimiliores annorum numeros? Sed annos regnavit LVIII Plistoanax. Id vero quibus argumentis, quo teste probavit? Fatetur vir sagacissimus, difficillimum esse ad statuendum, quamdiu Plistarchus Pausaniae fuerit superstes: neque expedit sese nisi coniecturis ex coniectura aptis et connexis. Et tamen quo brevissimum Plistarcho sit regnandi spatium, regnum Plistoanaectis iubetur esse productius annis quinquaginta. Mihi I. Plistoanaectis anni tamdiu placebunt, donec validioribus tormentis de sede deiciantur. WESS.

600. 35. *Καὶ Ἰηλυσὸν*] *Ἰηλυσὸν*, seu *Ἰηλυσσὸν*, legatur, ut Homerus nominat II. B, 656. RHOD. *Καὶ Ἰηλυσὸν*] Vide Ioseph. Wasse in Thucydid. L. VIII. 44. et supra not. in L. V. 57. Tres autem insulae civitates, Ialysum, Cairum et Lindum, in unam urbem Rhodum coaluisse constat omnibus. Strabo L. XIV. p. 966. Rhodum conditam refert *κατὰ Πελοποννησιακὰ*, admodum generali temporis notatione defunctus. Distinctius Aristides Rhodiace. p. 365. *ἐπὶ τῶν πρὸ Λυσάνδρου χρόνων τοῦ Λακεδαιμονίων ναύαρχον* Rhodum nondum exstructam fuisse, in confesso esse ait. Lysander hoc ipso tempore Lacedaemoniorum navibus cum sit praepositus, adpuleritque ad insulam necdum coalitis in unam civitatibus, sicuti dictum antea fuit, bene utique Aristidi cum Diodoro convenit. Adde et Io. Meursium Rhod. L. I. 10. WESS. *Ἰαλυσὸν* Rhodomannus in Add.

600. 46. *Ἐπὶ τῶν ὄρων κατέμεινε*] Ita correxi, quodammodo adiutus a Reg. 1. Mallem praeterea *εἰσιέναι* legeretur. Lege enim exsulibus apud Syracusanos interdictum erat regionis fines ingredi, prorsus ut Athenis, Demosthene teste Orat. in Polyclem p. 673. WESS.

601. 51. *Αἴτιος εἶναι τοῦ περιεωρακέναι* etc.] Vide superius c. 61. Quam vero studiose Graeci caesorum in praeliis corpora sepeliverint, notum satis est, docuitque conductis in unum exemplis Io. Kirchmannus Append. de Funer. c. 3. WESS.

601. 70. *Μετ' ὀλίγων*] Vitium, quod invaserat harum vocum ultimam, non latuit Rhodomanno. Ego ope membranarum refinxī. WESS.

601. 80. *Ὡς τετελ. ὑπὸ τῶν συγγενῶν παρεδόθησαν*] Venit doctissimo Rhodomanno in opinionem scriptum olim hic fuisse *παρεσώθησαν* quod equidem, si opem veteres schedae ferrent, pro reiiculo non haberem. At hae auxilium recusant, potestque *παρεδόθησαν* innuere, pro mortuis traditos sandapilariis in rogam inferendos, reapse occultandos: cuiusmodi artibus proscriptionis tempore servatos complures memorat Appianus de Civil. Bel. L. IV. p. 985. etc. Itaque in vulgato tantisper acquiescam, donec scripti Codd. aliud edixerint. WESS.

601. 86. Γάϊον Μάνιον Αιμίλιον] Tolle Γάϊον, ut adulterinum. RHOD. Alterutrum praenomen citra dubium auferendum est, natum ex C. Valerii, quae sequuntur, nominibus. In Livio Lib. IV. 53. M. Aemilius aut Martius Aemilius olim edebatur, quod vitiosum esse viderunt Sigonius, Pighius, et praeter ceteros Drakenborchius, huius loci non oblitus. Id vero praetermittere non debeo, Xenophontem Hellen. I. p. 345. Cononis et Callicratidae res gestas in annum sequentem, cui Callias Atticis in Fastis nomen fecit, conferre: nec eam tamen temporis notationem Diodoro nocere posse, cum plura isti anno contribuantur, quae hoc vertente contigerunt, fatente H. Dodwello. Contra instituit Schellastes Comici Ran. v. 33., pugnam ad Arginusas ἐπὶ Ἀρτίνοῦ, seu Ἀρτιγένους, sic enim scribere debuit, pugnatam memorans. Ea Callia, qui post Antigenem fuit, Archonte commissa fuit. Sed hoc occupavit S. Petitus Miscell. L. I. 14. WESS.

602. 95. Ἀκαζος δὲ καὶ τὴν ψυχὴν ἀπλοῦς] De M. Antonio Appianus L. V. Bell. Civil. p. 1183. ὢν καὶ τὰ ἄλλα αἰεὶ τὸ φρόνημα ἀπλοῦς καὶ μέγας καὶ ἄκαζος. Sed illi non is animi habitus perpetuus fuit; de Callicratida nostro adsentitur Plut. in Ly-sandro p. 435. F. etc. WESS.

602. 3. Παρέλαβε τὰς ναῦς etc.] Non est verisimile Diodorum παρέλαβεν bis scripsisse, ut hic legitur, nullis interpositis verbis. STEPH. Neque mihi verisimile fit. Credo fuisse καταπλεύσας εἰς Ἐγεσον, καὶ τὰς ναῦς μεταπεμψάμενος, τὰς πάσας etc. quod et rei gestae bene convenire Xenophon Rer. Graec. L. I. p. 345. declarat. WESS.

602. 5. Δελφίον καταχόντων] Loci natura et situs describuntur a Thucydide, munitum ab Atheniensibus Olymp. xcii. anno primo docente L. VIII. 38.; reciperarunt Lacedaemonii priusquam ad classem Callicratidas accessit, si ordinem rerum administratarum Xenophon Rer. Graec. L. I. p. 344. accurate observavit. WESS.

602. 9. Ἐξέλιπον τὸ χωρίον ὑπόσπονδον] Non improbarem, si qui liber addiceret, ὑπόσπονδοι. Sic Thucydid. VI. 59. ἐχώρει ὑπόσπονδος ἔς τε Σίγειον. Et Noster c. 64. ὑπόσπονδοι τὸν τόπον ἐξέλιπον. Vide ad L. III. 70. superius. WESS.

602. 18. Τῶν δ' ἀνδρῶν φεισάμενος] Methymnaeis pepercit: nam servos et qui ex Atheniensibus in praesidio fuerant, eos omnes sub corona vendidit, Xenophon Hellen. I. p. 346. WESS.

602. 28. Ἐπὶ τὴν βοήθειαν τῆς Μηθύμνης] Iusserat Cononi Callicratidas renuntiari ὅτι πάσει ἀπὸν μοιχῶντα τὴν θάλατταν, i. e. se eum maris imperium clam atque adulteri more sibi vindicantem in ordinem redacturum, apud Xenoph. Hellen. I. p. 346. Plutarchus enim, qui dictum id Callicratidas citat, Tom. II. p. 1100. B. ἀσχοῶς καὶ κρύφα πειρῶν καὶ παραβιάζεσθαι simile esse indicat, neque hinc abludit Synesii Epist. V. p. 167.

πυνθάνομαι Κορυθαίων ὄνομα — — μοιχᾶσθαι πάλιν τὴν ἐκ-  
κλήσιαν καὶ ψευδοδιδασκάλους τιὰς ἐμιστάναι. Namque et ille  
ex Eunomii sectatoribus Christianorum coetus clandestinis artibus  
adgrediebatur atque invadebat. Ut ut fuit, satis liquet, Callierati-  
dam Cononis fraudes perspectas habuisse, idque omni studio egisse,  
ut eum conpesceret: quamquam successum consilia non ubi-  
que prosperum nacta fuerunt. WESS.

602. 29. *Πρὸς τιμὴν τῶν Ἐκατὸν καλομένων*] Insulae prope Samum erant xx, sive, ut Timosthenes, xi, dictae ab Apolline *Ἐκάτω*. Sic Strabo L. XIII. p. 919., et, qui eum exscripsit, Stephanus. Deberet ergo, haec si omnibus sententia sederet, τῶν Ἐκατὸν καλομένων hoc loco legi. Necessarium tamen non est: namque et Herodotus, cuius ad Strabonem verba magnus Casaubonus haud neglexit, L. I. 151. ἐν Τενέδω δὲ μία οἰκέεται πόλις, καὶ ἐν τῆσι Ἐκατὸν νήσοισι καλομένῃσι ἄλλη μία. WESS.

602. 31. *Τότε μὲν αὐτοὺς διαναυμαχεῖν ἔχρηνεν ἐπισφαλές εἶναι*] Paene expunxeram αὐτοὺς, quod ante διαναυμαχεῖν locum occupavit, auctoribus schedis Venetis: est enim inutile, et, ut opinor, pravum. Scripserat τότε μὲν αὐτοῦ διαναυμαχεῖν etc. *tum quidem ibi certamine navali depugnare periculosum censuit.* WESS.

603. 38. *Ἐμβιβᾶσας οὖν τοὺς στρατιώτας*] Legendum esse ἐμβιβᾶσας pulere monuit Rhodomannus. Vid. superius cap. 14. WESS.

603. 47. *Ἦρην ἀπὸ τῆς ἰδίας νεὸς φοινικίδα*] Conf. huius libri c. 46. et Polyaen. Strat. I. 48. 2. ubi eadem. WESS.

603. 54. *Ἀντιπράττειν τὰς ναῦς*] *Ἀντιπράττειν* corrigit Rhodomannus, non ille quidem male. Vide tamen utrum ex *ἀντιπαραπράττειν* vulgatum suos natales habuerit. Nota ceteroqu岸 sollemnis est confusio verborum *πράττειν* et *πράττειν*, de qua ad L. I. 2. III. 53. atque alias. WESS.

603. 62. *Ἀλλὰ πρῆμναν ἀνακροόμεναι*] Vide not. in L. XI. 18. WESS.

603. 78. *Τριάκοντα νεῶν κερειύσας*] Paria Xenophon Hellen. L. I. p. 346., in ceteris parum discrepans. WESS.

604. 85. *Ὀλκιάδας καθώρμιζεν οὔσας λιθοφόρους*] Sic praestat. *Ὀλκιάδας λιθοφόρους* obscurius Interp. expressit. Onerariae naves erant, ex quarum malis sive arboribus trabes longae, ad similitudinem antennae pendebant, quarum ope enormes in adversarios eorumque naves lapides devolvebantur. Mox auctor *ἐπέβησαν ταῖς τῶν πολεμίων ναυσὶ τοὺς ἀπὸ τῶν κεραιῶν λίθους*. Et πλεῖστοι δ' ἐπὶ τῶν λιθοφόρων κεραιῶν ἔπιπτον. Itaque onerariae hae λιθοφόροι sunt dictae, quoniam κεραιαῖς λιθοφόροις erant armatae, ut *δελφινισφόροι*, in quibus κεραιῶν δελφινισφόροι apud Thucydidem VII. 41. eiusque scholiasten.

A re navali *κεραῖαι* traductae ad urbium defensiones fuerunt, ut earum auxilio libramenta plumbi aut saxorum in arietes incutebantur. Polybius in fragmento inter *Mathemat. Veter.* p. 325. *τοῖς μὲν κροῖς διὰ κεραιῶν ἐπιέντες σηκώματα μολύβδινα καὶ λίθους καὶ στυπή δρούνα.* i. e. Livio interprete L. XXXVIII. 5. *in arietes tollentibus libramenta plumbi aut saxorum stipitesve robustos incutiebant.* Adde eundem Polyb. L. VIII. 6. et, quae Is. Casaubonus in *Aeneam Tacticum* p. 1796. notavit: sunt enim illis multis partibus pleniora, quae Io. Schefferus de *Milit. Nav.* L. II. 7. conduxit. WESS.

604. 98. Ἐπὶ τὰ μεγάλα πλοῖα ] *Onerarias sive ὀγκύδας* intelligit, quas *μεγάλα πλοῖα* videtur adpellare, quod *πλοῖα* plerumque minores naves, maxime si *ραῦς* adiciantur, exprimere adsuerunt. Vide *Iac. Gronov.* ad *Herodot.* VII. 1. et *C. A. Duker.* in *Thucyd.* IV. 116. *Opportune Ulpianus ad Demosthen. Timocrat.* p. 443. *διαφέρει δὲ ἡ τριήρης τοῦ πλοίου, τῇ τὴν μὲν πολεμικὴν εἶναι, τὸ δὲ φορτικὸν καὶ ἐμπορικόν.* WESS.

604. 99. Ἐπὶ τὰς χηλὰς τοῦ λιμένος ] *Moles sunt lapidum in mare demersae, ut portum a ventis et fluctibus tutum praestent, testibus Criticis ad Thucyd.* L. I. 63. Vide not. ad L. III. 44. WESS.

604. 12. Βιάζόμενοι μὲν γὰρ ἅμα ] *Postremam vocem, si hinc ea exularet, ego revocandam non censerem. Videtur quidem certe ex praecedentibus hunc in locum ingesta.* WESS.

604. 19. Πολὺς ἐγένετο πόλεμος ] *Vide Is. Casaub.* in *Polybii* L. I. 12. haec citantem usumque vocis explanantem. WESS.

605. 36. Εἰς τὸν ἐν τῇ πόλει λιμένα ] *Exciderat ex Rhodomanni editione praepositio ἐν, quam revocavi. Eius absentia fraudi fuit Cl. Iac. Gronov.* ad *Steph.* voce Ἄβραι et *Herodot.* I. 96. WESS.

605. 38. Ὑπὲρ οὗ διεγωνίζοντο ] *Sic malo ex Reg. I. Pugna enim utrisque erat, hoc irrumpere, illo prohibere conante. De urbe et portibus Mitylenaeorum Strabo L. XIII. p. 917. ἔχει δ' ἡ Μιτυλήνη λιμένας δύο. ὧν ὁ νότιος κλειστός τριήρεσι, καὶ ἐν ναυσὶ πενήκοντα. ὁ δὲ βόρειος μέγας καὶ βαθὺς, χώματι σκεπαζόμενος. πρόκειται δ' ἀμφοῖν νησίον, μέρος τῆς πόλεως ἔχον αὐτόθι συνουζούμενον.* satis quidem opportune ad hunc *Nostri* locum. Sed quid est καὶ ἐν ναυσὶ πενήκοντα; *Interpres, quorum austrinus conclusus est triremibus et navibus xc,* quasi ἐννεήκοντα in suo Ms. reperisset: quod etsi probum fuisse largiaris, necdum constabit oratio. Auferenda insuper praepositio est, aut certe mutanda. Hoc si placeat, *Strabo ipse viam monstrabit, cum de Cnido L. XIV. p. 969. δύο λιμένας ἔχουσα, ὧν τὸν ἕτερον κλειστόν τριηρικόν, καὶ ναύσταθμον ναυσὶν εἴκοσι.* Et de *Chio* p. 955. πόλιν δ' ἔχει εὐλίμενον καὶ ναύσταθμον ναυσὶν ἑξήκοντα. *Legeris enim καὶ ναύσταθμον ναυσὶ πενήκοντα.*



sententia erit, praeter triremes tutam quinquaginta navibus stationem praebere. De angusto freto, sive Euripo, quo vetus urbs ab insula dissepta erat, Xenophon Hellen. I. p. 347. WESS.

605. 56. Πρὸς αὐτοῖς τοῖς Θερμοῖς ἔδρασι πόλιν, ὄνομα Θέρμα ] Θερμὰ Ἰμερῖα, de quibus ad L. IV. 23. Nam his calidis aquis Thermanum oppidum fuit adstructum, commigrantibus in illud praeter Poenos atque Afros, quorum auctor meminit, Himercensibus. Cicero L. II. Verrin. c. 35. *Himera deleta, quos cives belli calamitas reliquos fecerat, ii se Thermis collocarant, in eiusdem agri finibus, neque longe ab oppido antiquo.* WESS.

605. 61. Γραῖος Πομπηῖος ] In Fastis est Κορνήλιος. Ideo in contextum interpretationis recepi. Facile autem hic errare potuit librarius. RHOD. Errorem vidit Pighius ad ann. cccxli., estque manifestus: necdum enim plebei, quales Pompeios fuisse constat, ad consulatum admittebantur. Vide Livium L. IV. 54. WESS.

605. 70. Ἰμίλων τὸν Ἄρρωτος ] Inferius modo Ἰμίλων, modo Ἰμίλων, et scriptis in Codd. Ἄμιλων, amanuensium, credo, peccato. Mallem Ἄμιλων elegissent ubique, quod quoties Ἰμίλων occurret, libris praecuntibus, refingam. Vide not. in L. XI. 20. WESS.

605. 74. Εἰς τὰς Βαλλιαρίδας νήσους ] Sic voluit Coislin. amanuensis: quam scripturam cur praestare censuerim videbis ex L. V. 17. WESS.

606. 84. Λιὰ τὸ προσκεκόσθαι τοὺς Καρχηδονίους ] Habebis ipsam Diodori manum, si προσκεκόσθαι τοῖς Καρχηδονίοις reflexeris. Prius optimae fidei membranae offerunt, alterum perpetua paene scriptoris consuetudo. Namque et L. XIV. 10. ταῖς γὰρ δημοκρατίας προσκόποντες οἱ Λακεδαιμόνιοι. Et L. XV. 6. ὁ μὲν τύραννος προσκόψας τοῖς ἠθηαῖσι. Tum L. XVII. 30. ἐποίησεν ἐπὶ πλείων προσκόψαι τὸν βασιλέα τοῖς λόγοις. Porro L. XIX. 70. εὖρον Ἀσρότατον — προσκεκόσθαι πολλοῖς τῶν νέων. Et cap. 71. de eodem προσέκοψε τοῖς πλείοις. Firmat et Polyb. L. V. 7. καὶ προσκόπτων ἤδη τοῖς περὶ τὸν Λέοντιον quem vide eiusdem L. cap. 50. et L. VI. 4. adscriptaque superius L. I. 71. Offensus autem Campanos fuisse Carthaginensibus et propterea in Siculorum partes inclinasse dixit antea cap. 62. WESS.

606. 89. Τῶν δώδεκα μυριάδων ] Timaeo adsentitur Xenophon. Hellen. L. I. p. 345., sed expeditionem urbisque Agrigenti expugnationem in superiorem annum conferens: forte quod huic se bello tum Poeni paraverant. WESS.

606. 5. Λιανοθήρας δὲ τῆς Ἄννιβα βοηθείας ] Interpres obscurius. Copias auxiliares auctor innuit, quibus Hannibal, Poenis ut succurreret, Carthagine properaverat. Dicam inferius L. XIV. 48. WESS.

606. 12. Ἐπέστελλον δὲ καὶ πρὸς τὰς etc. ] Pro ἐπέστελλον repone ἀπέστελλον. Et post πόλεις reiice πρὸς. RHOD. Ver

similis est viri doctissimi suspicio: namque et oratio sic optime constat, et saepe haec verba confunduntur, uti in Aeliani L. II. 5. et L. XII. 1. Histor. Var. Forte tamen non deerunt, qui addita copula maluerint καὶ πρὸς τοὺς παρορμήσοντας. quod Interpreti non omnino displicuisse conieceres. Sic Aelian. L. XIV. 1. de Aristotele, per literas Antipatrum adeunte, ἐπιστέλλων πρὸς Ἀντίπατρον. Mihi prius placet. WESS.

606. 27. Οὐπω γὰρ κατ' ἐκείνους τοὺς χρόνους τῆς Αἰβ. περὶντεμμένης] Pugnans his, quae ex veterum fabulis de Hercule supra prodidit L. IV. 17. Adde Herodot. L. IV. 198. WESS.

606. 29. Τὸν ἐκ τῆς Αἰβήνης ἀντιφορτιζόμενοι πλοῦτον] Explicet vim verbi Demosthenes Except. adv. Lacrit. p. 549. ἐπειδὴν ἀπόδονται ἐν τῷ Πόντῳ, ἃ ἦγον, ἀνταγοράζειν πάλιν χρήματα καὶ ἀντιφορτιῆσθαι, καὶ ἀπάγειν Ἀθήνας τὰ ἀντιφορτισθέντα. Tum post pauca: οὔτε γὰρ ἠγόρασαν οὐδὲν ἐν τῷ Πόντῳ, οὔτε ἀντεφορτίσαντο. Eorum ergo est, qui naves vicissim illis rebus onerant, quas suis divenditis aut permutatis receperant. Strabo L. II. p. 156. Α. πλεῖσαντα δὲ μετὰ δόρων ἐπανελθεῖν ἀντιφορτισάμενον ἀρώματα καὶ λίθους πολυτελεῖς de Eudoxo. WESS.

607. 37. Τὸ δ' οἶν Ὀλύμπιον μέλλον etc.] Vide L. XXIII. Ecl. 12. De Iovis hoc templo Polybius L. IX. 21. καὶ ὁ τοῦ Διὸς τοῦ Ὀλυμπίου νεὼς ΠΟΛΥΤΕΛΕΙΑΝ μὲν οὐκ εἴληφε. κατὰ δὲ τὴν ἐπιβολὴν καὶ τὸ μέγεθος οὐδ' ὁποῖον οἶν τῶν κατὰ τὴν Ἑλλάδα δοκεῖ λείπεσθαι, satis Nostro scriptori consentiens, modo πολυτελείαν removeas. Negarine poterit magnificentia templo, quod universa sua structura tantum splendorem ostentabat? quo, si qua alia re, Agrigentinarum priscae opes praecipue spectantur? Scribe συντέλειαν μὲν οὐκ εἴληφε, absolutum quidem non est, et bene precedent omnia. Vidit et correxit mendam Ph. Cluverius Sicil. Ant. L. I. p. 203., cui lubens adstipulor. WESS.

607. 49. Ἡ κύνκλωσις τοὺς οἴκους περιλαμβανόντων] Pro ἡ κύνκλωσις τοὺς οἴκους περιλαμβανόντων, quibus verbis manifesta subest depravatio, legendum suspicor, ἢ κίσις τοὺς τοίχους περιλαμβανόντων. STEPH. Lege cum Stephano ἢ κίσις τοὺς οἴκους. RHOD. Ἡ κύνκλωσις τοὺς οἴκους περιλαμβανόντων] Sani nihil in vulgata erat scriptura: quae eius in locum successit, melior quidem, nec citra labem tamen. Credo κίωνων vocem deesse, scriptumque fuisse aut κύνκλω κίσις, aut κύνκλωσις κίωνων τοὺς οἴκους περιλαμβανόντων. Alterutrum sententiae satisfacit. Ph. Cluverius Sicil. Ant. L. I. p. 205. H. Stephani coniecturam pro certissima putavit. WESS.

607. 54. Καθ' ἣν εἰς τὰ διαζύσματα δύναται etc.] Vertit Interp. tanta strigum amplitudine, secutus eorum opinionem, qui columnarum canaliculos a Vitruvio voce strigum descriptos

putarunt. Sed eo in scriptore manu exarati libri, interque eos Francqueranus, semper *strigiles* praeferunt, quod verum esse Budaeus, Baldus atque alii dudum argumentis vicerunt. WESS.

607. 61. Ἐν ἧ τῶν ἡρώων ἕκαστον ἰδεῖν ἐστὶν etc.] Putares hinc sumpsisse divinum poëtam, cum de Aenea:

*Namque, sub ingenti lustrat dum singula templo  
Reginam opperiens, dum quae fortuna sit urbi,  
Artificumque manus inter se operumque laborem  
Miratur, videt Iliacas ex ordine pugnas,  
Bellaque iam fama totum vulgata per orbem,  
Atridas, Priamumque et saevum ambobus Achillem.*

Aeneid. I. 457. etc., nisi et aliis in templis ea exhiberi et poëta ingenii sui viribus fingere potuisset. WESS.

607. 64. Ἐχουσα τὴν περιμετρον σταδίων ἑπτὰ] Vide supra L. XI. 25. WESS.

607. 71. Ἄτινα μὲν] Lego ὧν τινα μὲν. STEPH.

607. 73. Ἐν οἴκῳ τρεφόμενοις] Mallem in cavea, quam Attici quidem οἰκίσσον, teste Harpocrate et Aeliano de Animal. L. VIII. 24. vocabant: sed πλεκτὸν οἶκον in Epigrammate quodam Agathias Antholog. L. III. 24. p. 380. WESS.

607. 75. Κατὰ τὴν προτέραν δὲ ταύτης Ὀλυμπιάδα] Vicit Olymp. xci. et xcii. Confer L. XII. 82. et L. XIII. 34. WESS.

608. 84. Ἐτι δὲ στεγίσι] Legatur στελγίσι vel σκληγίσι, *strigilibus*. RHOD.

608. 90. Καλεῖν ἐπὶ ξενίᾳ] Nemo est, quin hoc intelligat. Scriptura tamen controversa. Ἐπὶ ξενίᾳ videlicet τραπέζῃ, probant viri praestanti eruditione Iac. Perizon. ad Aeliani Var. Histor. L. III. 37. et Lamb. Bos Myster. Ellipsis. p. 171. At ἐπὶ ξένια nimirum δῶρα, praeoptant, non minore doctrina conspicui H. Stephanus Thes. T. II. p. 1126. et Iac. Gronovius in Herodot. Lib. IV. 154. Editi scriptique libri variant: ἐπὶ ξενίᾳ ἐκάλουν habes in Luciani Hist. Ver. L. I. 29. ἐπὶ τε ξένια ἐκάλειον apud Herodot. IX. 88. Quae a librariis mutari levi opera potuerunt, et commutata persaepe sunt: minus commode hoc Aeschinis περὶ τῆς Παραπρο. p. 49. ἐκλήθην μὲν γὰρ ἐπὶ τὰ ξένια μετὰ τῶν συμπροσβέων. Itaque illas in partes pronus vergo, quibus posterius genus prae altero placuit. Est tamen, cum τραπέζα subintelligi debet, cuius exemplum defectus dant Iosephi verba Antiq. Iud. L. V. 2. 8. καὶ μηδενὸς ἐπὶ ξενίαν τῶν κατὰ τὴν ἀγορὰν αὐτῶν παρακαλοῦντος. Diodori Eclog. I. Ursini, τοῖς μὲν γίλοις παρήγγειλε — παρακαλεῖν ἐπὶ ξενίαν. Sed ea rariora paullo sunt. De γιλοξενία Gelliae Des. Herald. in Martial. I. 71. WESS.

608. 95. Καὶ δὴ ποτε πεντακοσίων ἑπτάων παραγενομένων] Gelliae, quem tamen Gilliam vocat, liberalitatem et singulare in hospites studium merito praedicat Valer. Maximus L. IV. 8., non praeteritis Gelensium quingentis his equitibus. Me-

morat quoque Athenaeus L. I. 3. et eius verbis Suidas in Ἀθηναίων, quibus Τελλίας est, amanuensium peccato. Tu vide rarae eruditionis virum P. Leopardum Emendat. Lib. XII. 15., ubi Valerii et Athenaei loca cum Diodoro contenduntur. WESS.

608. 99. Καὶ Πολύκληιτος] *Polycletus* Larissaeus Historias, quarum L. VIII. citat Athenaeus L. XII. p. 539., a se conditas reliquit: incertae aetatis, si G. Io. Vossium L. III. de Hist. Graec. p. 405. audis, scriptor, si Th. Reinesium, Alexandri in expeditione Indica comes. Ego vero a Vossio contra Reinesium sto: nam quae adferuntur Epist. XXVII. p. 316. ad Rupert., tantum probare apta sunt, Polycletum de rebus Alexandri et Indicis quaedam esse commentatum. Quod autem ibidem adstruitur: *Polycletum, quem allegat Diodorus Siculus Lib. XIII. in rebus Gelliae Agrigentini, longe ante fuisse: militasse enim in Sicilia circa Olymp. xcii, et vidisse cellam vinariam istius Gelliae dotiaque in ea amphorarum centum*, id mihi conclusione quadam ex cella vinaria et Agrigentinae urbis excidio, etsi non admodum persuasibili, confecisse vir doctissimus videtur. Potuit enim Polycletus multis post Agrigentum a Poenis eversum annis in Sicilia militare et cellam eam videre. Namque urbs ita desolata non fuit, quin multa veteris magnificentiae argumenta durarent: ad hoc cella illa ex saxo erat excisa, neque adeo, nisi magno opere, corrumpi potuit; praeterea ex ruinis Agrigentum paullatim recidivum succrevit, nomenque aliquod inter Siculas civitates nactum fuit. Quae quidem a me inpetrant, ut et hac in parte ab eruditissimo Reinesio dissentiam, Polycletumque Larissaeum eum esse opiner, de quo Diodorus. WESS.

608. 13. Ἐρ ἔθει γὰρ εἶναι τοῖς Ἀκραγαγίνοις etc.] Hoc quidem peracute Gellias: qui cum alio tempore hominem durum, et depareum, et vix tantum temporis servis, ut noctu interquiescerent, condonantem, hospitio exceperisset, convocatis post prandium famulorum suorum pueris nuces et ficus distribuere coepit; illo vero rogante, *λόθεν παιδία τσαῦτα; ταῦτα, ἔφη, οἱ ἐμοὶ οἰκέται ἐν νυκτὶ ποιοῦσι*, non minus festive ex Serini Memorabil. in Io. Stobensis Floril. Tit. LX. p. 385. WESS.

609. 30. Καὶ τοῖς ἐπὶ τῶν ἐργαστηρίων ἔδωκε] Ex Veneto defectum explevi. *Οἱ ἐπὶ τῶν ἐργαστηρίων* sunt officinarum praepositi, quibus assulas et sarmenta dedit, ut, ubi flammam ex arce promicantem viderent, ignem per omnes aras accenderent. Interpres aliud spectavit. WESS.

609. 40. Πλείους τῶν δισμυρίων] His ingentem mendam inesse monuit Ph. Cluverius Sicil. Antiq. L. I. p. 205., medicina neglecta. S. Bochartus Phal. L. IV. 20. p. 253. et de Phoenic. Col. L. I. 29. p. 553. et mendam animadvertit et corrigit, *δεκαζισμυρίων*, i. e. *decem myriadibus*, scribens: cui quidem favere res videtur ipsa: nam verosimile paucis erit, servos et peregrinos

tot partibus civium numerum excessisse, quot vulgata requirit. Favere etiam quodam modo *ὀρθόζορτα μυριάδες* videbuntur, quas Potamilla Agrigento, dum fata Deusque sinebant, florenti contribuit apud Diogen. Laert. L. VIII. 63.: praesertim si notae numerales π et ζ, ut Bochartus coniecit, sint confusae eo loci. Id tamen perinconmodum accidit, quod scripti Codd. nihil prorsus iuvent, proferrique in medium talia possint, quae receptae lectioni laud parum patrocinantur. Athenis duntaxat utar, quas Agrigento ampliores fuisse nemo prudens dubitabit. Et tamen cum Demetrii Phalerei tempore incolarum omnium census iniretur, reperti Atheniensium sunt *δισμύριοι πρὸς τοῖς χιλίοις, μέτοιζοι μύριοι, οἰκετῶν μυριάδες τεσσαράζορτα*, auctore Ctesicle apud Athen. L. VI. 20. Qua quidem in civitate cum uno eodemque tempore XXI civium millia, peregrinorum x millia, servorumque cccc millia numerarentur, absurdum utique haberi non potest, si Agrigentinos cives advenae et servi numero longe longeque superarint. WESS.

609. 45. *Μέγχοι μὲν τινος ἐπέπληττε*] Non satis cohaerent *μασὶ δὲ τὸν Ἀντιθένην — ἐπέπληττε — γῆσαι*. Medium si *ἐπιπλήξαι* scripsisset, sine salebris oratio decurreret. WESS.

609. 52. *Τοσαύτην συνέβαινε τρογιῖν εἶναι etc.*] Huc pertinet acutum Empedoclis dictum, *Ἀζρογαρτῖνοι τρογιῶσι μὲν ὡς αὔριοι ἀποθανοῦμενοι, οἰκίαις δὲ κατασκευάζονται ὡς πάντα τὸν χρόνον βιωσόμενοι*, Agrigentini ita se luxui tradunt, quasi postridie morituri: domos vero aedificant, ac si perpetuo essent victuri, apud Diogen. Laert. L. VIII. 63. WESS.

609. 65. *Ἐπὶ τινων λόγων, ἐφ' ὧν τοὺς τε Ἰβήρας*] Hiantem sententiam libri Veneti ope explevi. WESS.

610. 68. *Τάφρον βαθεῖα καὶ χάρακι περιέβαλον*] Scripsit *περιέλαβον*, ut solet. Vide not. in L. XI. 30. WESS.

610. 84. *Ἀμα δὲ τούτοις ἐμισθώσαν*] Non dubito quin scribendum sit *ἐμισθώθησαν*. STEPH. et RHOD. Gratia debetur Cod. Veneto, certissimam Stephani emendationem stabilienti. Sed aliud est, quod hunc locum inquinavit. Falsum enim est, quod continuo subicitur *οἱ πρότερον Ἀμύλα συμμαχήσαντες*. Secuti erant superiore expeditione Hannibalis signa Campani illi, ut ex c. 44. et 62. constat. Itaque *Ἀννίβα* oportuerat, quem *Hamilcar*, libroriorum fortasse negligentia, sede evertit. WESS.

610. 87. *Λόφον, τὸν Ἀθηναῖον μὲν ὀνομαζόμενον*] Polybius urbi arcem imminere ait, in cuius summo vertice *Ἀθηναῖς ἱερὸν καὶ Διὸς Ἀταβυρίου* sit conditum, L. IX. 21. Ab eo templo, quippe potiore, collem hunc *Ἀθηναῖον* adpellari Ph. Cluverius censet Sicil. Antiq. L. I. p. 208. Non credo. Arx enim, qua agrum spectabat, profunda atque inaccessa voragine erat circumdata, Polybio teste: praeterea templum Minervae intra urbem erat. Hic vero collis extra eius muros: ut adeo ab arce diversus sit. De templo loquemur deinceps. WESS.

610. 3. Τὸν γὰρ τοῦ Θήρωνος τάφον etc.] Vide L. XI. 53. WESS.

610. 5. Τῶν τε μάντειόν τινες] Hic quoque puto esse τε pro τότε, et legendum τῶν τότε μάντειόν τινες. STEPH.

610. 15. Τῷ μὲν Κρόνῳ παῖδα σφαγιάσας] Conf. L. XX. 14. Neptuno Pœnos quoque sacra fecisse, significavit superius L. XI. 21. Vide vero Interpretem, qui hic *turbam sacerdotum in mare demergit* vertens, suo exemplo patefacit, quam prona sit in errorem via, ubi animus in diversa distractus debitam notissimis etiam rebus curam negat. WESS.

610. 17. Τὸν παρὰ τὴν πόλιν ποταμὸν] Urbem in austrum versam alluebat fluvius, unde et illi nomen, *Acragas*; alteram partem, quae occidentem solem spectabat, *Hypsus* radebat, Polybio L. IX. 21. auctore. Alteruter intelligitur hoc loco, et posterior fortasse. WESS.

611. 27. Καμαρίνου] Praestat *Καμαριναίους*, ut optime H. Stephanus observavit. Sic enim perpetuo Diodorus eius urbis incolas adpellare consuevit. Vid. cap. seq. et L. XIV. 47. XVI. 83. WESS.

611. 38. Ἐνίκησαν οἱ Συρακούσιοι] Daphnaeus strenui imperatoris et militis munia hoc praelio obiit, egregiaque arte suos incendit, ut hostem urgerent. Strategema exponit Polyæn. L. V. 7. WESS.

611. 44. Ἀναλάβη τὴν ἦτταν] Sic L. XVI. 19. ἀναμαχέσασθαι καὶ ἀναλαβεῖν βουλόμενος τὴν ἦτταν. pro quo Appianus simili in re Bell. Hisp. p. 491. καὶ τὸ πταῖσμα ἀναλαβεῖν ἐπειγόμενος. Neque tantum de clade, quam sarcire altera pugna belli duces conantur, sollemne est, sed et de quovis delicto, quod meliore exemplo corrigitur. Euripid. Ion. v. 425. Λοξίας δ' ἂν θέλη Νῆν ἀλλὰ τὰς πρὶν ἀναλαβεῖν ἀμαρτίας. Plut. Dion. p. 975. D. οἱ δ' ἄρχοντες τῶν Συρακουσίων — τὴν ἀισχύνην ἀναλαβεῖν ζητοῦντες. Quorum quidem si recordatus esset vir doctissimus, profecto non sollicitasset haec Appiani de Bell. Hispan. p. 508. μεθ' ὧν ὁ Πομπηῖος — ἐπειγόμενος τὴν ἀισχύνην ἀναλαβεῖν neque adscripsisset, si Appianus hoc loquendi genere usus est, illi excidisse est verisimile: non enim aliquis vult recuperare τὴν ἀισχύνην, sed contra τὴν δόξαν sive τὴν εὐζλειαν — An potius dicemus, ἀναλαβεῖν novum quendam usum habere? et reliqua, quae ibi legi malim; sunt enim mira. WESS.

611. 73. Τέσσαρας αὐτῶν καταλεῦσαι] Noster in Excerpt. Ursini p. 327. τοὺς δὲ πρῆσβευτὰς ἐπεβάλλοντο τοῖς λίθοις καταλέγειν. Genus supplicii in tumultu, ubi furor arma ministrat, etiam apud Graecos frequens. Exempla, quae, si necesse foret, facile cumulari possent, dederunt viri doctissimi Io. Meursius in Lycophron. v. 331. et Iac. Perizon. ad Aelian. Hist. Var. L. V. 19. WESS.

612. 82. Πολυτελῶς δ' αὐτὴν ὀρῶντες ὠχρομένην] Quidquid opere ac sumptu egregie elaboratum, id πολυτελῆς huic scriptori. De regiis, quas ambas Semiramis munierat, ἀμύθητα δὲ πολυτελῶς κατεσκεύαστο supra L. II. 8. Inde τείχος πολυτελῆς L. XIV. 7. et τείχιον πολυτελῶς ὀροδομημένον ibid. c. 51. Quin et λόγος πολυτελῶς γεγραμμένος L. XIV. 13. WESS.

612. 86. Καὶ τῶν σιτοπομπῶν ἀποκλείοντες] In Eclog. 12. L. XXI. εἴργειν τῶν σιτοπομπῶν. At τῆς σιτοπομπείας ἐπιλιπούσης Lib. XIV. 35. Ergone et hic τῶν σιτοπομπῶν rectius erit? Equidem non reiicerem, modo Codd. praecirent. Σιτοπομπίαν habet Demetrius, disputans utrum grandius hoc an σίτου κομιδὴ aut σίτου πομπή de Elocut. c. 92. WESS.

612. 87. Οἱ δὲ Καρχηδόνιοι παρατάττεσθαι μὲν οὐ τολμῶντες] Oportet tamen haud segniter ab Hamilcare rem fuisse administratam ad Agrigentum, si verum sit stratagema, quo eius urbis cives in fraudem illexit, apud Polyaeu. L. V. 10. 4. WESS.

612. 5. Ὡς οὐκέτι τολμησόντων] Auxi orationem priore vocabulo, Venetum secutus Cod., quo defectam eam dudum animadverterat H. Stephanus. WESS.

612. 19. Ἀεὶ προσδοκῶντες ταχέως λυθῆσεσθαι etc.] Quod ante edebatur προσδοκῶντων, tametsi schedae veteres tacebant, mutare sustinui. Flagitat enim orationis nexus, qui mihi potior ineptiis amanuensium, ob praecedens Καρχηδονίων vocabulum turpiter aberrantium. WESS.

612. 20. Αἱ τῶν βαρβ. ἑλπίδες ἀνέκλιψαν] Alibi L. XIV. 9. ὥστε αὐτὸν ἀνακίψαι ταῖς ἑλπίσιν. Satis utrumque venuste. Ἀνακίπτειν est emergere et caput, metu depressum, erigere. Ioseph. Belli Iud. L. VI. 8. 5. αὐθις δ' ὄλιγον ἀνακίψαντες ἐκ τοῦ δέους. Rarius hoc eiusdem L. I. Belli I. 31. 1. τούτους, ἐπανακίπτοντας αὐτοῦ ταῖς ἑλπίσιν, ἀποσκευάσασθαι σπεύδων Ἀντίπατρος. Fratres sunt Archelaus et Philippus, contra conceptam Antipatri de regno spem caput erigentes. WESS.

613. 31. Συνελθόντες οἱ στρατηγοὶ μετὰ τῶν etc.] Syracusanarum copiarum praepositi. Vide mox cap. 91. WESS.

613. 62. Εἰς Λεοντίου κατώκησαν] De hac enallage dictum est supra c. 12. WESS.

613. 65. Ὁ δ' Ἀμίλκας ἄμα τῷ φόβῳ δύναιεν etc.] Dant haec sententiam non prorsus damnabilem. Antistaret tamen ἄμα τῷ φόβῳ, cum diluculo, quod Tan. Fabro in opinionem venit ad Anaereontem p. 143., modo membranarum auctoritate stabiliretur. Plerique enim Agrigentinarum superiore nocte exceesserant urbe: summo dein mane Hamilcar copias in eam paene vacuum inmittit. Haec cohaerent egregie: constat etiam sermonis ratio. Ipse auctor ἄμ' ἡλίῳ ἀνίσχουσι L. XV. 18. et ἄμ' ἡμέρῃ L. XIV. 72. ἄμα ἡλίῳ Liban. Antioch. p. 339. ἄμα τῷ ἡλίῳ ἀνίσχουσι Pausan. L. X. 23. p. 854. ἄμ' ἡμέρῃ διαφωσκούσῃ Herodot.

III. 86. et VIII. 23. Ἐπὶ ἡλίῳ σκιδναμένῳ. *Cum primo luci, pariter cum ortu solis in simili re Latini*, Plautus Cistell. II. I. 49. et Stich. II. 2. 40. Sequatur ergo Fabrum, cui volupe fuerit. WESS. Ἄμα τῷ φωτὶ, *statim ut illuxit*. est dietio Polybio perfrequens. v. p. 15. 30. 44. 18. item Nostri II. 199. 62. REISK. Φῶς ita cum φῶρος permutatum Xenoph. Anab. III. I. 12.

613. 72. Εἰς τὸ τῆς Ἀθηναῦς ἱερὸν] Critici ad Pindari Olymp. Od. II. 16. ἱερὸν δ' εἶπεν οἴκημα τὴν Ἀκροάγαντα διὰ τὸ τῆς Ἀθηναῦς αὐτόθι νεῶν εἶναι περιπτῶς ἀγιστευόμενον, aberrantes quidem a poetae, aliud spectantis, sententia, sed templi apud Agrigentinos Minervae religionem declarantes. Fuit in arce, ut ex Polybio IX. 21. supra diximus. WESS.

613. 76. Διλάμβανεν ἀγελέσθαι θεῶν ἀσέβειαν πολεμίῳν] Planior fuisset verborum ordo, si τὴν εἰς θεοῦ ἀσέβειαν dedisset: hoc enim vult. Ἐνσέβεια tamen θεοῦ est pietatis cultus, quem Deo debemus, in Clementis Alex. Strom. I. p. 417. Itaque εὐσεβίης θεοῦ, qui hoc studio pro virili defungitur. Contra in Pausan. L. IV. 8. καὶ θεῶν ἀσεβεῖς ὅσοι Δωριεῦσι πατρῶιοι, τῶν τε ἄλλων καὶ μάλιστα Ἡρακλέους, et aliorum, qui Doribus patrii erant dii, tum praecipue Herculis numina impie laedentes. WESS.

614. 78. Μέγιστον, ἑαυτοῦ τὴν etc.] Scripsisse puto Diodorum καὶ τὸ μέγιστον, ut alibi. STEPH.

614. 90. Ἐν οἷς καὶ τὸν Φαλάριδος συνέβη κομισθῆναι ταῦρον] Haec Diodori et eiusdem alia de Phalaridis tauro respicit Tzetzes Chil. I. 667. ubi si Λουκιανὸς ὁ Σέρως scripseris, et versus lacuna liber erit, et oratio constabit. Taurum autem eum Timaeus nullum fuisse asseverabat, propterea etiam reprehensus a Polybio in Excerpt. Legat. p. 1400. Quamquam, si fides veteribus Pindari interpretibus, non omnia Timaeus, quae de tauro prodebantur, in fabulis deputabat: taurum enim Phalaridis Agrigentinos in mare demersisse; illum vero, quem in urbe olim ostentabant, non Phalaridis fuisse, sed simulacrum fluvii Gelonis sive Gelae potius. Verba ad extremam Od. I. Pythionic. sunt: τὸν δὲ τοῦ Φαλάριδος ταῦρον οἱ Ἀκροάγαντινοὶ κατεπόντωσαν, ὡς φησι Τίμαιος. τὸν γὰρ ἐν τῇ πόλει δεικνύμενον μὴ εἶναι τοῦ Φαλάριδος, καθάπερ ἢ πολλῇ κατέχει δόξα, ἀλλ' εἰκὼν ἐστὶ Γέλωνος τοῦ ποταμοῦ. Hinc discimus, quid contra illos Timaeus obmoverit, qui Agrigentinum sibi taurum opponebant: et cur Polybius ex ipsa tauri, quem Agrigentinis Scipio restituit, structura argumenta in Timaeum expromat, ut cum errasse, et taurum illi supplicio, cui destinatus ferebatur, habilem fuisse vinceret. WESS.

614. 95. Σκιπίων γὰρ ὕστερον — σχεδὸν ἐξήκοντα καὶ διακοσίους etc.] Conveniunt numeri. Eversa Carthago est Olymp. CLVIII. anno tertio, quo tempore P. Scipio illa, quae quondam Agrigento a Carthaginensibus fuerant sublata, Agrigentinis reddidit: in quibus etiam ille nobilis taurus, quem crudelissimus



*omnium tyrannorum Phalaris habuisse dicitur, quo vivos supplicii causa demittere homines, et subiicere flammam solebat. Quem taurum Scipio cum redderet Agrigentinis, dixisse dicitur: aequum esse illos cogitare, utrum esset Siculis utilius, suisne servire, an populo Romano obtemperare, cum idem monumentum et domesticae crudelitatis, et nostrae mansuetudinis haberent, inquit Cicero L. IV. Verr. c. 33., cui Noster consentit in Excerpt. Vales. p. 345., ubi et Σκιπίων, quod ex veteri libro restitui. WESS.*

614. 2. Ὁ τῶν πρό γε αὐτοῦ συγγρ. πικρ. κατηγορήσας ] Vid. L. V. 1. WESS.

614. 5. Δεῖ γὰρ, οἶμαι, τοὺς συγγραφεῖς ἐν μὲν τοῖς ἀγνοήμασι etc.] Vere Polybius, cum de Timaei dicto quodam disseruisset, subiicit L. XII. 5. δύο μὴν τρόπους φημὲν εἶναι ψεύδους: ἓνα μὲν τὸν κατ' ἀγνοίαν, ἕτερον δὲ τὸν κατὰ προαίρεσιν. καὶ τούτων δεῖν τοῖς μὲν κατ' ἀγνοίαν παραπαίονσι τῆς ἀληθείας διδόναι συγγνώμην τοῖς δὲ κατὰ προαίρεσιν ἀκαταλλάκτως ἔχειν. quibus non dissimilia reperiuntur in Excerpt. p. 1408. et 1415. Noster, qui Polybii fuit studiosissimus, quin haec aemulatus sit, mihi quidem dubium non est. WESS.

614. 14. Ὅστω μῆνας πολιορκήσας ] Xenophon Hellen. I. I. p. 345. septem menses urbem a Carthaginiensibus obsessam ait, non magno discrimine. WESS.

615. 21. Καὶ τὴν ἄλλην κτῆσιν ἀποσκευάζεσθαι ] Satis bene vir doctus expressit *transportarent*. Frequens est de sarcinis ceterisque rebus, quae aut in urbem conportantur, aut alium in locum, ubi tutae sint, amandantur. Iosephus Ant. Iud. L. XIV. 16. 2. τὰ τε ἐκτὸς τῆς πόλεως ἀπεσκευάσαντο, quae extra urbem erant, in eam collecta intulerant. Et Polybius L. IV. 81. Lacedaemoniῖ δέισαντες τὴν Φιλίππου παρουσίαν, τὰ ἀπὸ τῆς χώρας ἀπεσκευάζοντο. qui quidem verbi usus paullo rarior est. Non item alter, quo Dionysius Rom. Ant. L. IX. p. 582. οὐδὲ γὰρ ἀποσκευάσασθαι δύναμιν ἔσχον οἱ φεύγοντες. Hinc variae venustarum locutionum traduces, ἀποσκευάσασθαι *τυραννίδα* in Dionis Chrysostomi Or. XXXVII. p. 456. B., μῖσος ἀποσκευάσασθαι et ἐγκλήματα Ioseph. Bel. I. L. I. 29. 1. et cap. 31. 5., pluresque aliae, quas nunc quidem nihil moror. WESS.

615. 24. Διὰ τὴν ἐκείνων παρουσίαν ] Emenda per *προδοσίαν*. RHOD. Plausibilis est viri docti coniectura. Pro vulgata pugnat gestae rei eventus: nam Syracusanorum praesentia, dum Agrigentini desident, atque annonam inertes absumunt, urbs ita adflicta fuit, ut hosti in praedam cederet, ut modo c. 88. vidimus. Nec intercedam tamen, si cui ea potior videbitur. WESS.

615. 29. Οὐ μὴν συναχθείσης ἐκκλησίας ] Scribendum diceret οὐ μὴν ἀλλὰ, ut millies in hoc scriptore, aut certe καὶ μὴν, sicuti in Veneto legitur, nisi οὐ μὴν simili modo posuisset in Exc.

Vales. p. 306. Poterit etiam, hoc quidem loco, arte connecti cum sequenti οὐθαῖς ἐτόλμα. WESS.

615. 36. Μὴ περιμεῖναι τὸν κατὰ τοὺς νόμους κλήρον] Interp. καιρὸν verius censuisse videtur: ego nihil muto. Ὁ κατὰ τοὺς νόμους κλήρος sortitionem iudicium, quae ex legibus instituebatur, indicare potest. Hanc Dionysius exspectandam negat, utpote dubiam, et cupiditati imperii, qua ardebat, contrariam. Praeter ceteros autem Daphnaeum cum maxime reum egit, docente Philosopho Polit. V. 5. WESS.

615. 39. Ὁ τὰς ἱστορίας ὕστερον συγγράψας] Vide infr. c. 103. Hinc vero satis adparet, Philistum domo Syracusanum fuisse, non Naucratiten ex Aegypto, quod ex aliis Suidas prodidit. Qui enim peregrinus in tantis opibus tantaque gratia vulgi esse potuisset Syracusis, et praecipue adolescens? nam adolescentulum, cum haec administrarentur, fuisse, mors, quae hominem Olymp. cvi. anno primo oppressit, argumento est. Putem Aegyptiam hanc originem illi inpositam fuisse propter Ἀγυπτιακῶν et περὶ Ναυκρατίως libros, de quibus Suidas, modo tamen eiusdem Philisti sint foetus, de quo non iniuria dubitare posse videor. WESS.

615. 42. Ὅτι — ἐκτίσειν τὰργύριον] Sic L. V. 55. ὅτι — ζωογονῆσαι. et L. XII. 39. ὅτι — δείξειν. Sed conf. not. in L. IV. 26. WESS.

615. 44. Ἀνέσειε τὰ πλήθη] Verum hoc est, cuius ἀνέπαισε Coisl. scholion et interpretamentum. S. Marcus Evang. c. XV. 11. οἱ δὲ ἀρχιερεῖς ἀνέσεισαν τὸν ὄχλον. et S. Lucas Ev. c. XXIII. 5. λέγοντες, ὅτι ἀνασεῖε τὸν λαόν. quorum priore loco ex Mss. similis glossa ostentatur. Noster L. XIV. 10. de Aristo, τοὺς τε Συρακουσίους ἀνασεῖων. Et L. XVII. 62. Μέμωνων — ἀνέσεισε μὲν τοὺς βαρβάρους. Et in Excerpt. Ursini p. 333. οἱ περὶ τὸν Λαοθένην — ἀνέσειον τὰ πλήθη. quae Suidas exscripsit in v. Ἀνέσειον, ut pulcre H. Valesius perspexit. WESS.

615. 49. Οἰκεῖους ὄντας ὀλιγαρχίας] Hoc praefero, etsi vulgatum patrociniō non careat. De Damophilo Athenaeus ex Posidonio L. XII. 11. p. 530. B. ὅτι τυραννῆς ἦν οἰκεῖος. S. Paullus Epist. ad Galat. c. V. 10. ἐργαζόμεθα τὸ ἀγαθὸν πρὸς πάντας, μάλιστα δὲ πρὸς τοὺς οἰκεῖους τῆς πίστεως. ubi qui domesticos fidei interpretantur, vereor ut vim locutionis plane perceperint. Fidei, puriorisque religionis studiosi describuntur, ut οἰκεῖοι τυραννίδος, qui tyrannidi student, L. XIX. 70. WESS.

615. 60. Λιὰ τὸ δοκεῖν προϊστασθαι τοῦ πολέμου] Haec una voce defecta sunt. Addideris κακῶς προϊστασθαι, sine praecipitio decurret oratio. Mecum sentit Rhodomannus. WESS.

616. 70. Ὡς διαπεμπομένον αὐτῶν] Et haec hiulca esse, additoque ἀγγέλους, aut βιβλιοφόρους, explenda idem vir doctissimus in not. Addend. arbitratur. Nec persuadet tamen. Saepe in utroque sermone ea vocabula reticentur. Herodot. I. 75. Croesus

ἔς τε τὰ χρηστήρια ἔπειπε, εἰ στρατεύηται ἐπὶ Πέρσας. ubi et alia ellipsis, de qua Cl. Iac. Gronov. Et Cicero XI. Fam. 16. *Mitte ad Lupum nostrum, ut is nobis eas centurias conficiat.* Conf. doctissimum Cortium in Sallustii Catil. c. 32. WESS.

616. 76. Ἀγνοῶν τὴν ἐπιβολὴν] Scripsit τὴν ἐπιβολὴν. Praecessit, fateor, πάντα δὲ πρὸς τὴν ἰδίαν ἐπιβολὴν διμνηρορήσας. Id iustum quidem, non hoc, errantis librarii manu, ut sexcenties in his libris, progenitum. WESS.

616. 93. Οἰκεῖα τοῖς πράγμασι] Conf. L. XVIII. 46. et XX. 10. WESS.

616. 13. Κατασταθεῖς ὑπὸ Σαρακουσίων] De eo supra c. 85. ex Timaeo. WESS.

617. 27. Δεσποτείαν ἐαντῶν ἀπεκάλουν] Est, qui ex Reg. I. αὐτῶν mavult, quod δεσποτεία Ῥωμαίων sit imperium, quod Romani in alios inhihent, et δεσποτεία τοῦ μεγάλου βασιλέως, quo Persarum rex sibi subiectis imperat. Sed nihil opus eo est. Ordo verborum vulgatum tuetur; neque insolitum utroque in sermone est, ut eadem vox et agente et patiente vi instructa sit. Alias id exemplis firmabitur. Interea loci adi Celeb. Iac. Perizon. ad Aelian. II. 35. Var. Hist. et Pet. Burman. in Phaedri L. II. 8. 2. WESS.

617. 42. Τὴν ὥραν — παρῆν] Praeponit his Rhodoman. in not. auctario κατὰ, quam vocem si subaudiendam dixisset, me adstipulatore usus fuisset. Cornelius in Act. A. c. X. 30. καὶ τὴν ἐννάτην ὥραν προσερχόμενος ἐν τῷ οἴκῳ μου. Mox ἀγνοεῖν αὐτοὺς ἔφη διότι τῶν ἔξωθεν et reliqua rectius Latine verteris, ignorare eos respondit, hostibus, qui extra moenia sint, longe ipsos infestiores experiri rerum in urbe curatores ac praefectos. WESS.

617. 48. Διαγοροῦντες τὰ δημόσια] Non muto. Proprium paene Nostro est in opibus, quae dilaniantur atque intervertuntur. Vid. L. XIV. 46. XIX. 9. quaeque adscripta sunt huius libri c. 62. Διαδόγοροῦντες debetur errantibus librariis, quos contra peccasse diceres in veteri Epigrammate Anthol. L. II. p. 196.

Τετράκις ἀμφορέως περὶ χεῖλεσι χεῖλα θεῖσα

Σεληνὶς πάσας ἔξεγορήσε τρήγας.

nisi in vulgato quaedam gratia et Venus inesset: nam quod Obsopeus ἀμφορέως distichi principio refingit, id illi totum remitti debet. WESS.

617. 57. Πλείω τῶν συναρχόντων] Novo quodam usurpatum modo videbitur nomen πλείω hoc loco. Sed alibi passim similis est eius usus apud hunc scriptorem, etiam tanquam adverbialiter positi, ut supra pagina 58. δικαστῶν πλείω τῶν τετραρχόντων. STEPH. Interpres Stephanum deseruit, verba haec ad Dionysium referenda arbitratus. Mihi commentum haud placet. Neque enim videtur Dionysius prae se tulisse, etsi vera res erat, plus ceteris praefectis se valere, plusque auctoritatis sibi parasse. Id ab

hominis consilio alienum erat. Hoc vero significat, Hamilcarem in literis innuisse, plures praefectos sese partibus suis conciliasse, neque adeo debere curiosius, si particeps esse nolit, in ea quae gerantur inquirere. Usum hunc vocis *πλείω* abunde declaravimus ad L. I. 92., quare et πολλοὺς Veneti nunc quidem repudiamus. WESS. Περιποιησόμενον ad sententiam, quam indicavi, videtur commodius. IDEM in Add. Nihil opus nec Veneto correctore nec soloeco isto *πλείω* hic si usquam pessime adhibito. Nam apertum est *πλείω* dici *χρόματα πλείω*, quibus acceptis quiesceret Dionysius.

617. 61. Οὐ γὰρ ἀνεκτέον εἶναι ] Rectius ἀνεκτὸν εἶναι. STERH.

618. 72. Ἄχρῖς ἂν οἱ πολέμιοι τοῖς τεύχεσιν ἐπισείωσι ] Κριοὺς aut πόλεμον. Ioseph. L. II. B. I. 17. 2. καὶ τηλικούτον ἐπισείειν τῇ πατρίδι πόλεμον. WESS.

618. 77. Τὰς τριάκοντα μυριάδας ] Vid. L. XI. 22. WESS.

618. 89. Ὡσπερ οὐκ αὐτοὶ ταῦτα κεκρωκότες ] Hoc praetuli vulgato, ut paullo cultius, propter meliorum auctoritatem membranarum. Quod statim consequitur, τοῖς λογιμοῖς εἰς ἑαυτοὺς ἐρχόμενοι, lucem adfundit verbis S. Lucae Evang. c. XV. 17. εἰς ἑαυτὸν δὲ ἔλθὼν εἶπε, saepe consideratis a Th. Gatakerō Miscell. c. 29. p. 737. et in Antonini L. V. p. 174. Opportune Arrian. Diss. Epict. L. III. 1. σὺ δ' αὐτὸ ἐρεῖς τόθ', ὅταν εἰς σαυτὸν ἔλθῃς. WESS.

618. 98. Ἔως ἐτῶν τεσσαράκοντα ] Convenit id moribus Atticis, quos omnes μέχρι τετταράκοντα ἐτῶν stipendia facere oportebat, si non fallit Demosthenis Scholiastes in Olynth. III. p. 21, quod opinor. Nam sexagenariis alii militiae demum vacationem, et rectius, largiuntur. At id nunc non agimus. Vide tamen quae in Scholiastem eum erudite disputavit elegantissimi vir ingenii Io. Taylor ad Lysiae Orat. in Andocid. p. 127. WESS.

618. 4. Οὐδ' ἤξιεν εἰς Λεοντίνοῦς ] *Leontium* verterat Rhodemannus, ea propter reprehensus a Ph. Cluverio Sic. Antiq. L. I. p. 127. *Leontinos* enim urbem simul atque incolas perpetuo Latinos adpellare: quod verum. WESS.

618. 9. Πυρὰ καίτων ] Sic infra c. 111. πυρὰ καίειν δι' ὄλης τῆς νυκτός. Et XV. 84. XIX. 37. Appianus L. V. Belli Civ. p. 1100. πυρὰ πολλὰ ἤγειραν σύμβολα τῷ Λενκίῳ. WESS.

618. 15. Ὑπομιμούμενον Πεισίστρατον τὸν Ἀθηναῖον ] Narrant Herodot. L. I. 59. Plut. Solon. p. 95. E. Polyæn. Strat. I. 21. 3. WESS.

619. 37. Κατεσκήρωσεν ἐν τῷ ναυστάθμῳ ] Apud Plinium L. III. 8. *Syracusae* — *Portus Naustathmus, flumen Elorum*. qui quidem *Naustathmus* si ad flumen Elorum fuerit, uti Ph. Cluverius et Harduinus opinantur, longe alius atque hic est, quippe qui intra urbem Syracusanam aut propter illam sedem habuerit. Forte navale est, de quo L. XIV. 6. WESS.

619. 43. Ἐγήμε τὴν Ἑρμοκράτους θυγατέρα τοῦ καταπολ. Ἀθην.] Sic omnes magno consensu memorant; ut excusari non possit doctissimi Maasvici lapsus, qua Dionysium Hermocratis, cuius egregia contra Athenienses enituit virtus, filium censuit ad Polyaeu. V. 2. 2. Cogitasset Hermocratis eum filiam sibi matrimonio iunxisse, quod deinceps ex Nostri verbis recte admonet, et duos eiusdem nominis viros, nobilissimum alterum, alterum infimae sortis, non confundisset. Polyxeni uxor, Dionysii soror, *Thestes* nomine utebatur, Plut. in Dion. p. 966. F. teste. WESS.

619. 50. Ἐξ γραμματέως καὶ τοῦ τυχόντος ἰδιώτου] Eadem Demosthenes de Dionysio Or. in Leptin. p. 313., ubi enim de Syracusanorum potentia partisque de Carthaginensibus et Atheniensibus victoriis dixisset, subdit: ἕφ' ἐνὸς γραμματέως, ὃς ἐπιρρέτης ἦν, ὡς φασι, τυραννηθήσεσθαι. Quae cum exscripsisset Ill. Ez. Spanhemius Diss. IX. de Praest. Num. p. 705., compositis Nostri verbis, conclusione haud iniusta conficit, scribarum apud Syracusanos munus satis vile fuisse. Addi potuisset ex oratione Theodori Syracusani, quam L. XIV. 66. habebimus, καὶ ταῦτ' ἐπράξεν, ὃ Ζεῦ καὶ θεοὶ πάντες, ἐπιρρέτης ἀρχαίων, ἀπεργασμένος ἄνθρωπος. Firmant enim ea, de Dionysio ibidem dicta, tali in munere Syracusis nihil fuisse amplum aut magnificum. Dissentit equidem Ulpianus in eam Demosthenis orationem, sed ita ut in dubio haereat: neque illius, etsi constantissima foret, asseveratio aequiparare Diodori auctoritatem et monumenta, quae secutus Sicula Siculus ipse est, poterit unquam. At ἰδιώτης non notat infimae sortis hominem, sed privatum, eoque nomine insigniuntur viri summi. Esto. Dionysius non ἰδιώτης, sed ὁ τυχὼν ἰδιώτης heic audit, quo titulo equis summorum virorum conspicuus usquam legitur? Sed quid multa de nobili Dionysii genere et loco? Pater fuit ex eorum numero, qui asinos et mulos fricare solebant. Ὀνηλάτου μὲν υἱὸς Διονύσιος ἦν, ὁ τῆς Σικελίας ἄρχας ἔτη τεσσαράκοντα, δνοῖν ἀποδέοντα Helladius ait in Photii Biblioth. p. 1580. Qua quidem origine qui superbit, is non ἰδιώτης tantum, sed ὁ τυχὼν ἰδιώτης i. e. vilissimae conditionis homo erit atque habitur semper. Adde Polyaeu. Strat. V. 2. 2. ubi Διονύσιος Ἑρμοκράτους Συρακουσίοις ἐπηρητῶν καὶ γραμματέων τοῖς στρατηγοῖς ex scriptis libris optime Maasvici instauravit. WESS.

620. 67. Ἐποίησαντο πολίτας τοὺς μετοίκους] Μετοίκοι qui Athenis dicebantur, et terra et mari stipendia facere poterant, ut praeter Xenophontem de Rep. Athen. p. 548. Ammonius voc. Ἰσοτελής testatur. Quare civitate illos donasse videntur, ut hoc vinculo reipublicae artius obstringerentur. Accessere fortasse beneficia, quibus difficillimis his temporibus de communi Atheniensium optime erant meriti. Namque eam in donanda civitate legitimam caussam iuris Attici consulti requirunt, sicuti ex Demosthene

Or. in Neacr. p. 739. observavit S. Petitus L. L. Attic. p. 131. WESS.

620. 74. Ὀγδοήζοντα τριήρεις] Πλείους ἢ τριάζοντα Xenophon Rer. Graec. L. I. p. 347. Praeterea Athenis classem ex triremium Samum versus missam, quae x additis Samiis et xxx e ceteris sociis numerum CL aut acquarit deinceps, aut parum excesserit, prodens. Ad haec Callicratidae centum duntaxat et viginti triremes committit, vero similia, ut arbitrator, sectatus. Nam navium multitudine hoc praelio longe superiores fuisse Athenienses etiam testis Plut. est in Apophtheg. Lacon. p. 222. WESS.

620. 85. Κείμενοι μετὰξὺ Μιτυλήνης etc.] Rhodoman. in not. Addend. corrigebat, κείμενοι δὲ — ἀπέχονσι. Non male quidem ille, eitra necessitatem tamen. Neque enim insolitum plane, ut plura participia sine connectente copula stipentur. Exemplum dabit doctissimus I. Fr. Reitzius ad Luciani Toxar. c. 2. Ego vero maluissem copulam quoque inductam videre ante τῶν Ἀργινοῦσῶν, ubi sedes eius inconmoda admodum est. WESS.

620. 87. Καὶ τῆς ἄκρας τῆς Κατάνδος] Quenam fuit ea *Catanis acra*, de qua alii silent, tam historici, quam geographi? Nulla credo fuit: est enim ea vox mendosa, ut puto, sed in ea emendanda nihil iuvat Xenophon, qui in eo loco, ubi de hac pugna mentionem facit, in nomine loci corruptus est, male ibi repetita *Maleae* mentione, ut supra (Exercit. p. 62.) ad eum auctorem notavimus. Id promontorium apud Ptolemaeum dicitur *Καινὴ ἄκρα*, ubi credo legendum *Κάνη*, quod et Bertius interpretatur *Cane* oppidum. Pomponius Mela L. I. 18. id oppidum *Canna* vocat. Sed credo legendum *Cana* aut *Canae*. Stephanus in voce *Κάναι* hoc habet: *Κάναι πολίχμιον Ἐββοϊκὸν ἢ Ἀοκρὸν, κατὰ τὰ ἄκρα τῆς Λέσβου. ἔστι καὶ ὄρος Κάνη καὶ πόλις καὶ λίμνη. quae etiam emendanda sunt et legendum: Κάναι πολίχμιον Ἐββοϊκὸν ἢ Ἀοκρῶν. κατὰ δὲ ἄκρα τῆς Λέσβου ἔστι καὶ ὄρος Κάνη καὶ πόλις καὶ λίμνη.* Et in voce *Αἶγα* idem Stephanus habet: *Αἶγα τῆς Αἰολίδος ἄκρα, ὡς Στράβων, ἢ νῦν Κάνη καὶ Κάναι λέγεται.* Ex omnibus his locis simul collatis mihi persuadeo legendum esse in hoc Diodori loco, καὶ τῆς ἄκρας τῆς Κατάνδος, nisi quis malit *Κάνης*. Potest tamen Diodorus a nomine urbis *Canae* formasse nomen promontorii *Καινίς* analogia Graecis solita. Sic ab urbe *Ἀβυδος* factum *Ἀβυδονίς ἄκρα*, a *Γίγωνος Γίγωνις*, a *Δέσφρα Δέσφρις*, a *Δάρδαρος Δάρδαρις*, a *Τέλμισσος Τελμίσις*, a *Φάσιλος Φάσιλις* et alia. PALM. Amplector haec Palmerii, cui Is. Casaubonus praeivit in Strabon. L. XIII. p. 917. *Κατάνδος* itidem hic scriptum a Diodoro fuisse suspicatus. Stephani Byzantini verba in *Κάναι*, quibus medicinam facere vir doctissimus allaboravit, ope Strabonis et scriptorum librorum melius constituta ab Holstenio et Berkelio sunt. WESS.

620. 92. Τὰ πρὸς τὴν personam Reg. I. vid. supr. c. 45.

WESS.

620. 93. Καὶ παρ' ἀμφοτέροις ἀπαγορευόντων τῶν μάν-  
τεων ] Fallor, aut scriptum fuit καὶ περ' ἀμφ. ἀπαγορευόντων τῶν  
μάντεων, quantumvis utriusque vates dissuaderent. Scio haud  
multum dissimilia reperiri L. XV. §5. ubi οἱ μὲν μάντιες σα-  
μασιάζεσθαι παρ' ἀμφοτέροις ἀπεφάσκοντο τὴν νίκην ἐπὶ τῶν  
θεῶν προσαινομένην. Sed alio ordine ponuntur, nec ea tueri,  
quae sub manu sunt, possunt valide. Id, quod fuisse heic autumō,  
multo quidem commodissimum videtur, mihiq; in memoriam re-  
dedit Io. Chrysostomi locum, in quo diversiore modo peccatum fuit.  
Editae nuperrime sunt T. XII. Oper. viri disertissimi Homiliae  
XI, nunquam ante publicatae: quarum prima trigesimo circiter die  
post Eutropium deiectum et auctoritate exutum ab Oratore dicta  
Constantinopoli est. Censet, fateor, egregius earum editor, citius  
habitam, et post terrae quidem tremorem anni cccxcviii. Cui opi-  
nioni obest oratio univērsa, in qua Eutropius ἄοικος, ἄπολις, πρὸς  
τὴν ἐπεροσίαν φηγὰς γέγονεν καὶ τῆς ἀναγκαίης ἀπορεῖ τροφῆς.  
atque ubi bona, quae malis ille artibus ante corraserat, veluti  
nafragii tabulas, huc atque illuc dispersa ac disiecta traduntur,  
tota civitate ad id spectaculum commota: namque is est σεισμὸς,  
cuius meminit, non terrae motus. Sed hoc obiter. Ea vero in Ho-  
mil. p. 324. A. legitur: καὶ ὅπου πέραν ἀπέλθης, ὡσπερ πλοῖον  
μεγάλον καταπορτισθέντος, ὃ μὲν τὴν σαρίδα, ὃ δὲ τὴν κόπην  
etc. ἔχουσιν καὶ περιφέρουσιν. Vertunt: et quocunque etiam pro-  
cul abieris et reliq., non animadvertentes, scripsisse Chrysostomum  
καὶ ὅπου περ' ἂν ἀπέλθης, i. e. et quocunque abieris, quod res  
ipsa profecto expostulat. WESS.

620. 99. Ὅτι τελευταίως κατὰ τὴν μάχην etc.] Plutarchus  
Pelop. p. 278. Callieratidam vati respondisse scribit μὴ παρ'  
ἑνα εἶναι τὰν Σπάρτην, non verti in unius vita Spartaē salu-  
tem. Pro quo in Apophtheg. Lacon. p. 222. F. οὐ παρ' ἑνα τῶ  
Σπάρτη, haud paullo peius. Aliter Xenophon *Res. Graec.* I. p. 348.  
WESS.

620. 1. οὐδὲν ἄδοξότερον ποιήσει τὴν Σπάρτην ] Hoc etsi  
habet quo defendatur, minime tamen credibile ab Diodoro scri-  
ptum esse. Quod Reiskius reponit ἄδοξότεραν confirmat ipse su-  
pra 531. 89. τὴν Σπάρτην ἄδοξότεραν πεποικηκότες. Conf. annot.  
ad Exc. Vat. p. 38. 2.

*Ibid.* Τῶν δ' Ἀθηναίων ὁ στρατηγὸς Θρασύβουλος ] Prae-  
stare arbitrator Θράσυλλος, tum quod somnium, de quo sequitur, in  
Thrasybulum non conveniat: absolutus enim est, ceteris collega-  
rum damnatis: tum quod Theramenī ac Thrasybulo a ceteris in-  
posita fuerit cura colligendorum mortuorum, ut cap. 101. vide-  
bitur; quod mihi argumento videtur, non fuisse apud Thrasybu-  
lum eius diei imperium. WESS.

621. 7. *Καθμείαν νίκην*] Confer not. in L. XI. 12. WESS.

621. 12. *Ἐπέλεον ἐτίμους ἀπαγγέλλειν*] Scribi *ἐταίροις* oportuisse Rhodomannus monuit: quo peccato nihil esse frequentius nemo ignorat. Vide Clariss. Io. Alberti Observ. Philol. in Iacobi c. 5. 12. et Gloss. Graec. in N. T. p. 113. Hic tamen moveri non placet, sed *ἐκώλιον* cum Cl. Wetstonio refingere. Id enim peropportunum. WESS.

621. 16. *Καὶ παραθαλάσσιας ταῖς οἰκείαις λέγοις*] Verum erit *παραθαλάσσιας*, quod Rhodomanno non latuit, ut L. XIV. 115. *παραθαλάσσιοιτες τὰ πλήθη*. Appian. Parth. p. 277. *ἐξέλιπεν αὐτὸς αἰσχίην καὶ καταγείει τὸ παραθαλάσσιον τὸ πλήθος*. Quod idem vero vir doctissimus post pauca orationem explet in not. Addend. *ὅτι* vel *ὡς εἰς τὸν ὑπὲρ τῆς* etc., id haud scio an supervacaneum futurum sit, modo legeris *οἷτος ἐμὶ πρόθυμος*. Ita enim sermo Callieratidae recte decurret. WESS.

621. 21. *Μετὰ τὸν τῶν ἡγ. θάνατον καὶ ἐν θορήβῳ* etc.] Inter *θάνατον* et *καὶ* desiderari aliquot verba constat. Fieri potest ut scripserit Diodorus *ἐν ταρχῆ καὶ ἐν θορήβῳ*, aut *ἐν στάσει καὶ ἐν θορήβῳ*. STEPH. Non mihi defecta, sed iusto redundantior visa oratio est. Delevi proin molestam copulam, praecunte Veneto. *Ἄν ἐγὼ τι πάθω*, quod sequitur, ut inauspicatam mortis mentionem vitarent, frequens erat. Isaeus mire eo delectatur, ut vel Oratio de Apollodori Hered. p. 63. et seq. testabitur. Porro Clearchum sibi Callieratidam, si quid humanitus contingeret, substituisse ex Plut. Apophtheg. Lacon. p. 222., quamquam ibi *Κλέαρδος* nuncupatur, exploratum satis est. WESS.

621. 31. *Τοῦ μὲν οὖν δ. κ. Θράσυλλος ἡγεῖτο*] *Thrasylum* recepi partim ob ea, quae tantum quod disputavi: tum quod scripti Codd. eum prae Thrasybulo probarent. Hoc amplius, liquet ex Xenophonte, tametsi aciem paullo is aliter instruat, in parte dextra curasse Thrasyllum L. I. Hellen. p. 348., in cornu vero sinistro Perielem, unde *καὶ τοῦ ἐώνιμον Περικλήης* et hic praestaret, modo ambo scriptores in omnibus congruerent et consentirent. Neque id male, quod Interp. Periclis huius patrem ob singularem dicendi vim *Ὀλυμπίου* titulum inpetrasse versione significavit. Sic enim auctor L. XII. 40., ubi notata vide, et Plutarchum Consolat. ad Apollon. p. 118. D. WESS.

622. 50. *Ὁὐ πολλὰς ἐλάττω τῶν τριακοσίων*] De hoc *ἐλάττω* pro *ἐλαττόνων*, sicut *πλείω* pro *πλείωνω*, dixi antea in quadam in p. 58. annotatione. STEPH. Destituit virum doctissimum memoria: nihil inibi notavit de vocabuli hoc usu. Nec a vero tamen abludit, quod animadvertit. *Πλείω* adverbii potestate his in libris saepe instrui, dictum est ad L. I. 92., rarius *ἐλάττω*. Dant scriptae membranae L. XX. 58. *πεῦρα μὲν οὐ πολὺ ἐλάττω διαμερίων*. At L. XVI. 86. *ἵππεις οὐκ ἐλάττω τῶν διαχιλίων*, quod crebrius usurpari alias videbimus. WESS.



622. 61. *Διὰ τοὺς κρατίστους τὸν ὑπὲρ τῶν etc.*] For-  
tasse scribendum *διὰ τὸ τοὺς κρατίστους εἰς τὸν etc.* STEPH.  
*Διὰ τοὺς κρατίστους εἰς τὸν ὑπὲρ etc.*] Non mihi quidem dubium  
est, quin verus hic vates Stephanus fuerit. Favent coniecturae et  
sermonis genius et Venetus liber, e quo praepositionem restitui  
suam in sedem. WESS.

622. 68. *Ἐπὶ τὴν Ναυσίου τοῦ στρατηγοῦ ναῦν*] Lego  
*Ναυσίου τοῦ στρατηγοῦ*. Nam *Nausias* inter illos decem duces  
classis nec a Xenophonte nec a Diodoro ipso nominatur. PALM.  
Vid. supra c. 74. *Lysias* hic, etsi navis, qua vehabatur, rimis fa-  
tiscens fundum peteret, mortis tum quidem periculum evasit, do-  
cente nos Euryptolemo in oratione apud Xenophont. Hellen. I. p.  
352. WESS.

622. 83. *Καταπονηθῆναι*] Melius ex Xenophonte legitur  
*καταπονησιθῆναι*. Nam sic de Callicratida ait, *ἀποπεσὼν εἰς τὴν*  
*θάλασσαν ἤφθασεν*, quod est proprie *καταπονησιθῆναι*. PALM.  
Haud scio an deserenda haec viri doctissimi sit coniectura. *Κα-*  
*ταπονηθῆναι* certe quidem Diodoro frequentissimum de illis est,  
qui infractis viribus succumbunt et conficiuntur. Exempla obvia  
sunt, et alias a me conducta. Mitto dicere, *καταπονησιθῆναι* eo-  
rum esse potissimum, qui in mare deiiciuntur, quod in Callicra-  
tida verum non fuit. WESS.

623. 97. *Διόξαντες ἐφ' ἱκανὸν*] Sic L. XI. 40. *οἱ μὲν*  
*Ἀθηναῖοι τὸ τεῖχος ἔφθασαν ἐφ' ἱκανὸν κατεσκευασότες*. Alias  
*ἐφ' ἱκανὸν τόπον* aut *ἱκανὸν διάστημα* scribere solet, ut L. XII.  
70. et L. XIV. 114. Adde P. Leopardum Emendat. L. V. 13.  
WESS.

623. 2. *Χαλεπῶς διατίθεισθαι — ἐπὶ τοῖς ἀτάκτοις etc.*] Lex  
erat Athenis, ut, si in non sepultum incidissent, ei terram  
iniicerent, apud Aelian. Var. Hist. V. 14. Erat et alia, quae in  
praelio mortuis publicae sepulturae honorem decernebat, de qua  
L. XI. 33. Utraque faciebat, ut illis molestia crearetur, qui bello  
pereuntes, ne sepeliri possent, negligerent. Hoc amplius, ex ne-  
glecta mortuorum cura superstitionibus nasci poterat militiae taedium,  
veritis, ne sibi cadentibus idem confingeret; quod ducem suum,  
ne unquam posthabeat, diligenter admonet Onosander Strateg.  
c. 35. Quid autem parta victoria classis Atticae praepositi moliti  
sint, ut in mare deiecti tolli ad sepulturam possent, docet Xeno-  
phon Hellen. I. p. 348. WESS.

623. 17. *Καὶ Φωκαίων*] Instauravi vocem ex Reg. I. in-  
dicio. Peccatum frequens. In Aristide Sacr. Sermon. II. p. 516.  
leges: *ὡς δ' ἐγενόμεθα ἐν Κλαζομέναις, ἐδόξει χορῆναι περαιώ-*  
*σασθαι εὐθὺν Φωκείας*. Imo vero *εὐθὺν Φωκαίας*. Recurrit error p.  
519. *ἔστι δὲ χορῆον Γενναῖς, ἀπέχον τῆς Φωκείας οὐ πολὺ*. Atque  
haec quidem expedita. Vellem succurri ita posset Appiano Syr. p.  
162. *ἔς τε Φωκίδα, ὑπήκουον μὲν Ἀντιόχον, ὑπὸ δ' ἐκπλήξισος*

αὐτοὺς δεχομένην, κατήγοντο. Sed is Phocidem et Phocaeam confundit, ut Livium L. XXXVI. 43. contententi perspicuum erit. Conf. supra ad L. V. 13. WESS.

623. 21. *Εἰς τὴν Τύρρῳαίων πόλιν*] Reponendum sine dubio *Ἡνέροαίων*. Nam *Ἡνέροα* urbs celebris in Lesbo insula: at nulla in ea insula *Τύρρῳα* aut *Τύρρῳος*. PALM. Loci vitium animadvertit Abr. Ortelius, *Ἐρωθροαίων* corrigens Thesauri voc. *Tyr-rhaeorum*. Sequor Palmerium. Hausta quidem *Pyrrha* fuit mari, sed suburbio vetus nomen, ut ex Plinio L. V. 31. notum, mansit. Paulo aliter Xenophon, opinionem tamen Ortelii iugulans, Hellen. L. I. 349. WESS.

623. 30. *Καὶ τὰς νήσους τὰς συμμ. Λακεδαιμόνιοι*] Suspicio *Λακεδαιμονίοις*. Nam qui in Aeolide, Ioniaeque et insulis Lacedaemoniorum foederatis, agebant Graeci, legatis Spartam missis, ducem sibi Lysandrum optarunt Diserte Xenophon Hellen. II. p. 354. et Plutarchus Lys. p. 436. E. WESS.

623. 36. *Δίς τὸν αὐτὸν μὴ πέμπειν*] Aut addi debet ex Veneto *ἐπὶ ναυαρχίᾳ*, aut profecto subintelligi. Lex enim vetabat *δίς τὸν αὐτὸν ναυαρχεῖν*, ut Plut. in Lysand. p. 436. E. scribit. Porro in *Arati* nomine admissum aliquid a librariis est. Dicebatur *Ἄρακος* apud Xenoph. L. II. Rer. Gr. p. 354. et Plutarchum eo loco, quem modo signavi. WESS.

624. 50. *Πρὸς τὰ πλήθη τῶν τελετησάντων*] Ita si scripsit, *ἀκρολογίας* difficulter absolvetur. Mallem equidem *πρὸς τοὺς συγγενεῖς τῶν τελετησάντων*, quemadmodum post pauca, aut certe *πρὸς τὰ πλήθη*, omissis *τῶν τελετησάντων*, reliquisset: neque enim ea, etsi fortasse de praepositionis defectu suspicio nascetur, salva esse poterunt. Palmerio aliud in mentem venit, scribenti: *imperfecta oratio, ubi procul dubio deest aliquid. Tentadam supplere τοὺς διαβαλόντας αὐτοὺς πρὸς τὰ πλήθη, ὡς ἀμελήσαντας τῶν τετελετηκότων*, calumnia eos onerantes ad populum, ut qui nullam mortuorum curam habuissent. Quod si cui potius erit, praecoptet. WESS.

624. 58. *Ἔσχον ἀντιδίκους*] Adi Xenophontem Hellen. I. p. 350. WESS.

624. 68. *Καὶ Καλλιάδης*] Suspicio aliquid labis huic nomini ingenitum esse. Nusquam *Calliades*, neque c. 74., neque apud Xenophontem his ducibus annumeratur. Uterque *Erasinidem* memorat, qui una cum ceteris ducibus de iratae multitudinis sententia quum fuerit damnatus, *Calliadae* locum occupare poterit. Defit praeterea *Diomedon*, eiusdem criminis, si tamen crimen dicendum, et damnationis socius. WESS.

624. 83. *Καταδικασθῆναι τοὺς στρατηγοὺς*] Damnati VIII sunt, et VI, qui aderant, capitali poena adfecti. Tamen quoniam X duces praelium administrarant, *τοὺς δέκα στρατηγοὺς, τοὺς οὐκ ἀνελομένους τοὺς ἐκ τῆς ναυμαχίας* condemnatos alii,

Platonis Apolog. p. 32. exemplum secuti, perhibuerunt, de quibus dicere recorder Observat. L. I. 1. WESS.

624. 85. Ὑπὸ τῶν δημοσίων ἐπὶ τὸν θάνατον ἀγεσθαι] *Δημίων* Veneti si malis, non admodum pugnabo. *Δήμιος* enim ὁ ἀπώγιον τὴν ἐπὶ θανάτῳ Herodianus inquit, quem in modum infra L. XIV. 107. Neque deest omne tamen patrociniū τοῖς δημοσίοις, quippe quaestionibus et suppliciis adesse consuetis. Id Comicus Lysistr. v. 436. et Dio Chrysost. Rhod. p. 348. testantur: praecipue posterior, qui Rhodi legibus nefas fuisse ait τὸν δημόσιον τὴν πόλιν εἰσελθεῖν, prorsus ut Romae intra urbem carnifici domicilium negabatur apud Ciceron. Or. pro Rabir. c. 5., quod de δημοζόνῳ etiam Pollux L. IX. 10. prodidit. Adde δημίους et δημοσίους permisceri. Nam qui δήμιος in Aeschin. περὶ Παράτρ. p. 44. nunc dicitur, is Thomae Magistri aetate δημόσιος erat, ut ex eius Δημόζουρος constat. WESS.

624. 86. Ἐπὶ τὸν θάνατον] Alii articulum omisissent. Vid. L. XVIII. 67. WESS.

625. 93. Καλῶς ἔχον ἑμῆς φρονήσῃ] Absolute, uti passim ἔξδον, παρὸν, δόξαν. Sic δοξῆσαν Eurip. Heracl. v. 187.; ἀρέσαν Pausan. II. p. 185. et μεταδόξαν L. V. 9., ἐπαῖξαν Aristid. T. III. p. 558. Alia Sylburg. ad Dionys. I. Ant. Rom. p. 47. WESS. Cl. Ti. Hemsterh. malebat καλῶς ἔχοι ἑμῆς φρονησῃ. quod quin vero proximum sit, postremum certe, dabitandum non opinor. Vide eum ad Aristoph. Plut. p. 461. IDEM in Add.

625. 94. Καὶ ταῖς σεμναῖς θεαῖς] Erinnyas ἐπ' ἐδρημισμῶ Athenis hoc titulo describi ex Hesychio et Harpoeratione nemo ignorat. Vide Io. Meurs. Lect. Attic. L. IV. 1. WESS.

625. 6. Ἐνδεκα ἄρχοντες] Saepius οἱ Ἐνδεκα Demosthen. adv. Lacriti Except. p. 553. Dinarch. in Aristogit. p. 106. Antiphont. p. 137. Praeclare Etymologus, Ἐνδεκα, κληρωτοὶ ἄρχοντες ἦσαν οὗτοι, προσετιχότες τοῦ δεσποτηρίου, καὶ τοὺς ἀπαγομένους κακοτόρους ἐπὶ θάνατον παραλαμβάνοντες ἐδημίουν et reliq. Adde Schol. in Luciani Ion. Confut. c. 16. WESS.

625. 12. Ὑπὸ τῶν δημογωγῶν] Lego ὑπὸ τῶν δημογωγῶν. STEPH. Ὑπὸ τῶν correxerat quoque III. Scaliger. WESS. in Add.

625. 17. Ἐπίχειρα τῆς ἀγορᾶς Ἰαβρον] Philo Iud. Leg. Cai. p. 1021. E. ἀλλ' οἱ μὲν καλῶν πράξεων καλοὶ σύμβουλοι μισθὸν ὕστερον τὰ ἐπίχειρα εἶδον τῆς ἀσεβείας. Et ibid. p. 1029. A. μέλλον τὰ ἐπίχειρα καρποῦσθαι, γνωσκέτω πρότως ἐξ ὧν ἂν πάθῃ. Sic saepe de poena, quae ex merito venit. Haud paullo aliter Aratus, quem amicum Philippus veneno petierat, ταῦτα τὰ ἐπίχειρα τῆς φιλίας, ᾧ Κεφάλων, κεκομισμένα τῆς πρὸς Φίλιππον, in Polybii L. VIII. 9. Sed vide Cel. T. Hensterhasium in Luciani Timon. c. 4., hoc etiam loco ἀγορᾶς probabili coniectura rescribentem, et quae dicta sunt ad huius Lib. c. 31. WESS.

625. 27. Δακτυλοδεικτουμένην ἔχῃ τὴν πορησίαν] *Digito*

*monstrari et dicier hic est, δακτύλω δείκνυσθαι* plerumque εἰδοξίας τεκμήριον, docente Des. Heraldo in Martial. L. IX. 119. Nec aliud origine δακτυλοδεικτεῖν. Παιδία δακτυλοδεικτοῦντι τὴν ἐν τοῖς ἱματίοις γραφὴν, pueri, qui aequalibus pictas in ditiorum vestibus imagines digito monstrant, Asterio Homil. I. p. 4. Valuit usu, ut in flagitiosis et ob delicta notabilibus propriam quasi sedem haberet. Demosthen. in Aristogit. I. p. 491. ἀλλ' ὅτι δακτυλοδεικτεῖτε ἐπὶ τῷ πονηρότατον τῶν ὄντων ἀπάντων δεικνύναι; Quare et illi, qui Iuliano Imp. sacra lucri studio mutaverant, στιγματῖαι περινοστοῦσι κατὰ τὰς πόλεις, μισοῦμενοι, δακτυλοδεικτούμενοι in Asterii Homil. III. p. 43. et Flaccus per Italiae urbes raptatus, ut in exilium pergeret, ὁ δὲ δακτυλοδεικτούμενος τῆς ἀθρόας μεταβολῆς πιέζεται βαρύτεραις ἀνίαις apud Philon. in Flacc. p. 987. B. Mitto Io. Chrysostom. T. III. p. 319., Palladium Vit. Chrysost. p. 24. F., alios; longum enim facerem. WESS.

625. 32. Ἐν βιβλοῖς ἐπὶ] Suidas Philistum res Siculas L. XI. et Dionysii Historiam libris VI. esse complexum ait, a Nostro dissentiens. Congruit Dionysius T. II. p. 131., numerum tamen librorum non finiens. Utrumque opus respicit Cicero L. II. ad Q. Fratr. Epist. 13. *Siculus ille, Philistus, capitalis, creber, acutus, brevis, paene pusillus Thucydides, sed utros eius habueris libros, duo enim sunt corpora, an utrosque, nescio. Me magis de Dionysio delectat: ipse est enim veterator magnus, et perfamiliaris Philisto.* Nam de Dionysio alterum corpus, in quo de gestis Dionysii egerat, ut bene P. Victorius, indicant. Vossium de Hist. Graec. L. I. 6., Ciceronem pulchre explicantem, consule. WESS.

625. 36. Σοφοκλῆς Θεοφίλου] Lege ὁ Σοφίλου, ut ab aliis deducitur. PALM. Σοφίλου correxerat diu ante Palmerium in Vita Sophoclis Io. Meursius. Vulgati patrociniū quoddam professus est Io. Albert. Fabricius Bibl. Graec. L. II. 17., *Theophilum, Diphilum*, eo enim nomine patrem quoque adpellari, et *Sophilum* idem sonare asseverans. De *Diphilo* dubito. Laërtius L. II. 120., quorsum vir multo doctissimus nos ablegat eiusdem Bibl. L. I. 29. 8., non Sophoclis patrem, sed alium ex Comico numero excitat, de quo Menagius. Accesserim etiam, si in partes sit eundem, Palmerio Meursioque: nam Σόφιλον et Θεόφιλον idem esse nomen haud videtur, et qui *Theophilum* Sophoclis patrem, si Diodorum seponas, adpellaverit, nemo alius est. De poëtae aetate, partis victoriis, dissensuque in utraque re scriptorum veterum, nihil addo. Dixerunt abunde viri docti. WESS. Σοφοκλῆς Σοφίλου Scaliger. IDEM in Add.

626. 39. Τὴν ἐσχάτην etc. χαρῆ περιπεσεῖν — καὶ τελευτῆσαι] *Sophocles ultimae iam senectutis, cum in certamine traegodiam docuisset, ancipiti sententiarum eventu diu sollicitus, aliquando tamen una sententia victor, caussam mortis gaudium habuit*, sic Valer. Maxim. L. IX. 12., prorsus ex Diodori sententia

Lucianus tamen aliud mortis genus in Macrob. c. 23. optimo poetæ adscribit, cumque Luciano junior Simonides Florileg. Epigramm. L. III. p. 396. Ceterum drama, quod auctori fatale fuisse perhibent, non aliud atque *Antigone* erat, si scriptor Vitæ Sophoclis a vero non aberravit: nam Argumentum eius Fabulæ qui composuit, longe alia. WESS.

626. 43. Κατὰ τὸν αὐτὸν ἐνιαυτὸν τελευτῆσαι] Parium Marmor Euripidis mortem Archonte Antigene, i. e. anno superiore, Sophoclis vero, sub Calliæ magistratu contigisse significat: ita vertentis anni decursu rebus humanis eripi potuerunt. Utrumque certe Callia Archonte, quum *Ranae* docerentur Aristophanis, inter vivos non egisse, indicat Fabulæ eius v. 76., adfirmatque Apollodorus opinionem egregie. Eusebium, utriusque poetæ mortem προχορισμῶ anticpantem, castigavit Ill. Scaliger ad Chron. ann. MDCIX. Contra peccant nec temere excusari possunt, qui Lysandro Athenas obsidente, fato concessisse Sophoclem tradunt, e quibus Plinius L. VII. 29. nam obsidio illa serior. Prudentius Pausanias L. I. 21. excursionis Spartanorum in Atticum agrum meminit, sed nihil de ducis nomine. At Plutarcho quid faciemus? Memoraverat Euripidem eo natum fuisse die, quo Graeci ad Salaminem cum Persa conflixerunt. Addit continuo, ἀποθανόντος δὲ καθ' ἣν ἐγενήθη Διονύσιος ὁ πρεσβύτερος τῶν ἐν Σικελίᾳ τυράννων, ἅμα τῆς τέχης (ὡς Τίμαιος ἔφη) τὸν μιμητὴν ἐξαγορεύσας τῶν τραγικῶν παθῶν, καὶ τὸν ἀγωνιστὴν ἐπεισαγούσας L. VIII. Sympos. p. 717. C. Hicciue ἡμέρα, καθ' ἣν ἐγενήθη dies erit, quo quondam prima vitæ usura Dionysius frui occoepit? Dici id potest. Quorsum vero tum Timæi illud epiphonema? Id, ut nunc verba iacent, requirere videtur, eo die ad plures abiisse Euripidem, quo primum Dionysius lucem adspexit. Dices, illud esse falsissimum: fateor. Neque scribere potuisse, certe non debuisse Timæum, fateor id quoque. Sed fac reliquisse eum, Euripidem ἡμέρα, καθ' ἣν ἐγένετο, sive ἐγενήθη, Διονύσιος ὁ πρεσβύτερος τῆς Σικελίας τύραννος, quo senior Dionysius Siciliae tyrannus est factus, diem obiisse supremum, et bene profecto sequetur: fortunam simul subduxisse egregium tragicarum calamitatum imitatore, et earum auctorem atque actorem in scenam introduxisse. Quo enim die Dionysius tyrannidem occupavit, occupavit autem citra controversiam hoc anno, quo Euripides fato functus est, utique statim ἀγωνιστὴς fuit τραγικῶν παθῶν. Atque hoc mihi si dederis, expedita res erit: culpa recidet in Plutarchum, quem tu si quo alio modo absolvi posse putes, una ego illi litura satisfaciam. WESS.

626. 45. Κυσὶ περιπεσεῖν καὶ διασπασθῆναι] Quae huc pertinent, conduxit in unum Ios. Barnesius Vit. Euripidis p. XXXI. Poetae sepulcrum, et diversae de eo sententiae, ut constitui possint, vide in not. ad Itiner. Hierosol. p. 605. WESS.

626. 53. 'Επὶ τὴν ἡγεμονίαν ἔταξαν Φιλοκλέα] *Adimantum* illi collegam addit Xenophon. Hellen. I. p. 349. WESS.

626. 64. Μεταπεινώμενος δὲ καὶ τὸν ἐκ Χίου στόλον ἐξήρτηεν] Hoc placuit ex Clarom.; poterit, si cui libitum fuerit, et καὶ ἐξήρτηεν recipi, quo modo Venetus: alterutrum quidem certe necessarium est. WESS.

626. 69. Τῶν ὑπ' αὐτὸν πόλεων τὴν ἐπίστασιν παρέδωκε] Sic fere L. XIV. 41. Caussam itineris, quod Cyrus ingressus fuit, exponit Xenophon Rer. Graec. II. p. 354., sed in superiorem id annum conferens. WESS.

626. 73. 'Εν τῇ Μιλήτῳ τινὲς ὀλιγαρχίας ὀρεγόμενοι] Pessimas Lysandri artes, quibus Milesios, popularis status studiosiores, circumvenit et oppressit, distinctius exsequuntur Plut. Lysand. p. 437. B. et Polyæn. Strat. I. 45. WESS.

627. 78. Μετὰ δὲ, τῆς ἀγορᾶς etc.] Post τὸ μὲν πρῶτον solet subiici μετὰ δὲ ταῦτα, vel ἔπειτα δέ. STEPH. Quod Stephanus adscripsit, verum plerumque est: non usus perpetui. Pausanias I. IV. 7. p. 296. Euphaes servis imperavit, πρῶτον μὲν τὰ κατὰ πῶτον τοῦ στρατοπέδου φράξασθαι τοῖς σταυροῖς, μετὰ δὲ, τὰ πλεονὰ ἀμφότερα. Et c. 9., quem locum indicavit diligentissimus Sylburgius, μετὰ δὲ, ἀνέτεμε. Idem et Herodoto probatum, si schedis Mediccis certissima fides fuerit, L. VI. 38. μετὰ δὲ, τελευτῆ ἕπαις. Nam alibi spernere hoc genus haud consuevit. WESS.

627. 84. Κατόκησεν εἰς Κλαῦδα etc.] Neque de hoc castello alius auctor, quod sciam, mentionem fecit, nec de illa *Claudia* regione: ideo ex sola coniectura licet emendare hunc locum sine dubio mendosum: et in proclivi quidem foret reponere *Λυδίας*. Sed non fuit Lydia sub Pharnabazi praefectura: nam Tissapherni, et post eum Tithrausti, parebant Caria, Ionia, Lydia. Pharnabazo vero Aeolis, Hellespontus, Bithynia. Ergo censeo reponendum pro *Κλαυδίας Αἰολίδος*: nam ex vestigiis unius et litteris fugientibus potuit ab imperito exscriptore altera supponi, sic *αιολίδος* (*evanidas litteras typographum imitari iussit Palmerius*), qui dubius quomodo scriberet, putavit, ut ex *Σικύων* fit *Σικωνία*, sic ex *Κλαῦδα* debere fieri *Κλαυδία*. PALM. Credo fuisse εἰς *Βλαῦδα*, sive *Βλαῦδον*, φρούριόν τι τῆς *Λυδίας*. Nec obstat, quod Pharnabazo Lydia haud paruerit. Erat enim *Βλαῦδος* seu *Βλαῦδα* in ipsis Lydiae et Phrygiae finibus; quare Phrygiae a Stephano, Lydiae a Strabone contribuitur L. XII. p. 851. Phrygiam autem Pharnabazi ditioni subiectam fuisse, satis constat. Erat et his in oris, modo tamen diversum sit, oppidum *Βλαῦνδον*, unde *ΒΛΑΥΝΓΕΩΝ* numi in Thes. Britann. T. II. p. 100. De eo ad Hieroclis Synecdem. p. 662. WESS.

627. 86. 'Επὶ Θάσον τῆς Καρίας] Nulla *Thasus* fuit in Caria. Lege meo periculo *Ίασον*, ut infra Diodorus L. XIX. p.

712. De ea Ἰάσω mentionem fecerunt Thucydides, Polybius, Arrianus, Heraclides, Diogenes Laërtius, Appianus, multi alii. PALM. Plausibilis Palmerii coniectura est, quamquam Xenophon eandem rem referens Hist. Graec. L. II. p. 355. *Cedreas*, Cariae urbem, Atheniensium sociam, a Lysandro direptam prodidit. Forte exscriptoris animo obversata fuit Lysandri in Thasios expeditio apud Polyacn. I. 45. 4., vitioque originem dedit. De Cariae Iaso vid. ad L. XIX. 75. WESS.

627. 90. Μετὰ ταῦτ' ἐπὶ τὴν Ἀττικὴν etc.] Neglexit, quod nihil memorabile tum fuerit administratum, Atticae hanc incursionem Xenophon. Non item Plut. Lysand. p. 437. E. WESS.

627. 4. Ἐν Αἰγὸς ποταμοῖς] Ita perpetuo Graeci, Latini plerumque *Aegos flumen*. Vide Clarissim. Fr. Oudendorpium in Frontin. II. 1. 18. Mox, si liceret, praeferrem οὐ δυνάμενοι τὸν πλείον χρόνον ἐκεῖ διατρέφειν τὰς δυνάμεις. Conmeatus enim revera illie fuit angustior, ut mox docebit ipse, et habet vulgatum quid insolentius. WESS.

627. 9. Ὅτι Μήδοκος καὶ Σείθης] Tota haec narratio de Alcibiadis colloquiis cum ducibus classis et de pugna ipsa multum differt ab iis, quae habemus apud Xenophontem. Forte haec habet ex Theopompo Diodorus: nam de eo bello scripserat, et Thucydidem continuaverat. Sed mihi potior est fides Xenophon-tis, cuius scripta exstant. PALM. Medocus Odrysarum rex erat, cum Seuthes Thraciae oram maritimam imperio teneret. Iunguntur iterum L. XIV. 94. et a Xenophonte Hist. Gr. L. IV. p. 422., ubi prior Ἀμύδοκος, quem Μήδοκον tamen L. VII. Exped. Cyr. p. 315. atque alibi adpellat. Similis discrepantia in Isocrate Or. ad Philipp. p. 121. et Harpocrate voc. Ἀμύδοκος animadversa a Maussaco, et, qui eius in not. crisi exercuit, H. Valesio fuit p. 87. Videntur Thraeces Μήδοκον et Ἀμύδοκον dixisse. Certe Ἀμύδοκον, antiquissimum Thracem, memorat Pausan. L. I. p. 11. Sed eruditissimum Valesium adi. Porro quod Palmerius ex Theopompo haec Diodorum excerptis opinatur, id a vero non abludit. Nec erat tamen, cur eius fidem sperneret: nam et quae Xenophon et quae Diodorus afferunt, ab Alcibiade quidni dicta censeamus? Non enim pugnant. Cornel. Nepos in Alcib. c. 8. similia ex eodem Theopompo memoravit. WESS.

628. 21. Τὰ δ' ἐπιτεύγματα προσάγειν ἅπαντα Ἀλκιβιάδῃ] Scripsisse ἅπαντας videtur. Cornelius Nep. de uno Philocle, si quid secundi evenisset, nullam in ea re suam partem fore: contra ea, si quid adversi accidisset, se unum eius delicti futurum reum. An quoniam summum apud eum per illum diem classis esset imperiam? Xenophon et Plutarchus Alcibiadis non sine verborum contumelia repulsi culpam in Tydeum et Menandrum praecipue conferunt. Utrumque, si animum intenderis, cum veritate facile congruet. WESS.

628. 32. Καὶ τὸν Φιλοκλέα τρεψάμενος] Haec et quae consequuntur multum distant a Xenophonte Hellen. II. p. 356. et Plut. Lysand. p. 438. Id demiror, nullam hic proditionis mentionem iniici, qua Tydeus et Adimantus classem Lysandri in potestatem tradidisse perhibentur. Vide Pausaniam L. X. 9. p. 820. WESS.

628. 45. Μήτε πεζῇ διαγωνίζεσθαι δυνάμενοι] Sic solet: paulo ante μετὰ τῶν εὐθότων πεζῇ μάχεσθαι. Et L. XI. 19. φοβούμενων τῶν Ἑλλήνων πεζῇ διαγωνίζεσθαι. tum eiusdem libri c. 76. καὶ ΝΑΥΜΑΧΙΑΙ μὲν ἐνίκησαν τοὺς ἀποστάντας, ΠΕΖΗ δ' οὐκ ἴσχυον ἐκβαλεῖν τῆς πόλεως. WESS.

628. 49. Τῶν μὲν οὖν τριήριον δέκα μόνον διεξέπεσον] Octo triremes praeter publicam, cui Παράλω nomen, victorum manus, ne caperentur, evitasse Xenophon Rer. Graec. II. p. 356. et Plutarchus Lysand. p. 439. testificantur. Cum Diodoro, ne de labe cogites, paria faciunt Lysias Ἀπολογ. Ἀωροδοκ. c. 4. et Pausan. L. III. 11. p. 232. WESS.

628. 56. Καὶ Φιλοκλέα ζωγρήσας — ἀπέσφαξε] Non eum tantum, sed et Atheniensium captivorum ad tria sive quatuor milia: dissident enim in numero Pausan. L. IX. 32. et Plut. Lysand. p. 440. WESS.

629. 69. Ὅντων δὲ τῶν χρημάτων ἐν σακκίοις] Sequor Venetum, ab auctoris assuetudine non recedentem: nec damno tamen districte vulgatum. Nam et Athenaeus Gylippum describit νοσησιόμενον ἐκ τοῦ Ἀυσανδρίου χρήματος. ubi Casaubonus usum hunc insolentioris vocis χρήματος miratur quidem, nec mutat, quod in eo tuendo constantissime scripti omnes consentirent. Et S. Lucas A. A. c. IV. 37. de Barnaba, ὑπάρχοντος αὐτῷ ἀγροῦ, πωλήσας ἤνεγκε τὸ χρῆμα. Quibus locis τὸ χρῆμα clarissime pecuniam notat, quae ceteris plerumque semper τὰ χρήματα, exceptis tamen Ionibus: namque hi χρῆμα pro divitiis et pecunia non adspernabantur, uti Pollux L. IX. 87. atque ad eum Iungermannus docuerunt. WESS. Dixerat ipse Diodorus, si ipsius verbis utitur auctor Excerptorum Vatie. p. ed. Mai. 69. οἱ μὲν γὰρ ὀλίγον χρήματος ἀθροίζουσι τοὺς ὑπὲρ αὐτῶν κινδυνεύοντας. Itaque hic etiam Veneti codicis scriptura correctori, quem is liber non modestissimum passus est, relinquenda videtur.

629. 72. Τὰ μὲν σακκία παρέλυσεν] Plutarchus de Educ. Liber. p. 10. B. Γύλιππος ὁ Λακεδαιμόνιος τὰ σακκία τῶν χρημάτων ΠΑΡΑΛΥΣΑΣ φηγὰς ἀπηλάθῃ τῆς Σπάρτης. Fraus verbo inest, qua sacci furtim aperiuntur. Τὰς φαγὰς τῶν ἀγγείων κάτωθεν ἀναλύσας explicat ipse in Lysand. p. 442. B., ubi plura. Furto autem Gylippus ex sacculis subduxit non ccc, sed xxx talenta, nisi error sit apud eundem in Nic. p. 542. A. Mihi quidem ccc talenta paene nimia videntur: sublata enim furtum statim, sacculis diminutis, manifestatura erant. Nihil tamen decerno. WESS.



629. 75. *Καὶ κατεδικάσθη θανάτῳ*] Ab Ephoris damnatum ἀποθανεῖν ἀποκατερέψαντα sive inedia vitam finivisse Athen. loco modo citato, L. VI. 5., Plutarchus Lacedaemone quosque pulsum significat, quorum utrumque verum esse potuit. WESS.

629. 76. *Πατέρα τοῦ Γυλίππου Κλέανδρον*] Pater Gylippi Thucydidi dicitur *Κλεανδρίδας*, quod magis placet, ut supra (Exercit. p. 55.) notavi ad Thucydidem. PALM. Recte Palmerius. Thucydides *Κλεανδρίδαν* Gylippi patrem vocat L. VI. 93., vocat et Timaeus apud Plut. Nic. p. 542., *πατρῶον ἀρρώστημα* sive sordes has, quas a patre Cleandrida hereditarias habuit, attingens. Adde not. Celeb. Dukeri in Thucyd. d. 1. Thurios autem in Italiam exsulatum abiisse Cleandridam, significat, etsi obscurius, Thucyd. L. VI. 104. WESS.

629. 86. *Καὶ τοὺς λιμένας ἐπεχρώννον* etc.] Paucis in re memorabili auctor defungitur. Multo uberius de urbe obsessa, legationibusque ad pacem inpetrandam ad regem Agim Spartamque missis Xenoph. *Rer. Graec. II. p. 357.* et Lysias *Or. in Eratosth. c. 16.* et Agoratum *c. 2. seq.*, quos adiisse operae fuerit pretium. WESS.

629. 5. *Τὰ μακρὰ σκέλη καὶ τὰ τεῖχη τοῦ Πειραιῶς*] Vid. Io. Meursii *Lect. Attic. L. III. 4.* et *Piraceum c. 2.* et de *Πειραιῶς* Thomam Magistrum, qui id Atticum esse decernit, non *Πειραιέως*, quo tamen usi sunt Thucydides, Lysias, Demosthenes, Isocrates, atque alii. Ad longa vero haec *ἄbrachia* sepultus fuit Euphorion, de quo Theodoridae Epigramma:

*Ἐυφορίων ὁ περισσὸν ἐπιστάμενός τι ποιῆσαι*

*Πειραιχοῖς κέῖται τοῖσδε παρὰ σκέλεσιν.*

Vir enim eruditus, qui *Bibl. Uffenbachian. Part. II. p. 582.* id publicavit, *σκελετοῖς* corrigens et *Piraiici cadavera* intelligens, nimis est. Mox mallem *μὴ πλεῖον ἔχειν δώδεκα.* Nam in conditionibus nominatim fuit, ut XII naves longae Atheniensibus relinquerebantur; sic certe magna concordia Xenophon *Hellen. II. p. 359.* Andocides *Or. de Pac. p. 25.* et Plutarch. *Lysand. p. 441.* WESS.

630. 15. *Καὶ ἤρξεν ἔτη τρία πρὸς τοῖς τεσσαράκοντα*] Eodem temporis spatio regnum eius circumscribitur L. XV. 93. At magna hic apud alios discordia. Eusebius annos illi XL, Canon Astronomicus XLVI, Plutarchus *Artax. p. 1027.* LXII inputat. Hinc in partes distrahuntur, qui regni Persici annos digerunt, modo hunc, modo illum, aut etiam tertium secuti: quam litem meam nunc non facio. Vide Petavium *Doct. Temp. L. X. 31.* et Hier. van Alphen in *Daniel. e. IX. P. III. c. 9. p. 217.* WESS.

630. 16. *Ἀντίμαχον τὸν ποιητὴν — ἠνθημέναι*] Apollodorum de Antimachi aetate vera tradidisse, firmat Plut. *Lysand. p. 443. D.* et Proclus in *Timaeum Plat. p. 28.* Plato Antimachum Choerilo longe praeferendum censebat; quo spectat inpurissimum Cratetis Epigramma, quod alioisum deflexit Cl. Salmasius ad Spar-

tiani Hadrian. c. 16. Vide eum et Casaubonum et Is. Vossium in Catull. p. 323. de Colophonio hoc poeta veterumque de illo iudiciis disserentes. WESS.

630. 21. *Μὴ καλῶς*] Corrige *μὴ παντελῶς*. RHOD.

630. 25. *Καὶ τὴν Καμαρίναν*] Fuit opinor, *καὶ τὴν Καμαρινάταν*, ut L. XVI. 83. *εἰς δὲ τὴν Καμαρινάταν οἰκίτορας προσθεῖς* etc. WESS.

630. 30. *Συλῆσαντες αὐτὸν ἀπέστειλαν εἰς τὴν Τύρον*] Non addo ex Veneto quidquam. Quisque Carthaginienses intelligi per se animadvertit. Nec moveor singulari numero, qui praecessit: sollemnis enia is auctori nostro ab eo numero ad multitudinem transitus. Curtius cum Tyrios aurea catena devinxisse Apollinis simulacrum memorasset, subiicit L. IV. 3. 12. *Syraculis id simulacrum devexerant Poeni, et in maiore locaverant patria: multisque aliis urbium, a semet captarum, non Carthaginem magis, quam Tyrum ornaverant: non sine errore; neque enim Syracusas Carthaginienses diripuerunt, quod doctissimum Freinshemium haud praeteriit. Vid. infra L. XVII. 41.* WESS.

630. 36. *Κατὰ τὴν ἑβδομήμιον ἡμέραν*] Adscripserat Camusatus, *Ergo hebdomadae dies propriis nominibus distinguebantur?* quod, puto, re in accuratius examen missa, repudiasset. Serioris enim aetatis inventum esse ex Dione Cassio L. XXXVII. p. 42. constat. Melius Is. Casaubonus ad Strabon. I. p. 111. *ἑβδομήμιον* *μυρὸς* diem *ἑβδομήμιον* intelligit, ut *καιρὸν ἑβδομήμιον* Strabonis. Quem quidem diem vestigando sic forte eruemus. Capta Tyrus est mense Hecatombaeone, teste Arriano Exp. Alex. L. II. 24., dieque mensis Macedonici trigesima apud Plut. Alexand. p. 679. Annus erat primus, cum urbs caperetur, Olymp. cxii. Notat autem Usse-rius de Anno Solari Macedon. c. 5. annum illum fuisse sextum Cycli Metonici, quo Neomenia Hecatombaeonis in diem xx Iulii anni Iuliani proleptici incidebat, qui dies erat trigesimus Loi Macedonici. Sic *ἑβδομήμιος ἡμέρα* erit Neomenia Hecatombaeonis, qua et Carthaginienses sacrilegio se polluerunt ad urbem Gelam, et multis post annis Alexander Tyrios ultus est, capta urbe, ob Apollinis simulacrum iniuriosius habitum, et in libertate defendenda pertinaciam. WESS.

631. 66. *Καὶ πόλιν ἀνόχρον ἔχοντες*] Vide Ph. Cluverium Sicil. Antiq. L. I. p. 199. WESS.

631. 80. *Τῶς τόποις ὡς ἔγγυσε τῆς πόλεως*] Paene mihi schedae Reg. I. persuadent, ut duo priora inducam, ex Grammatici interpretamento in hunc locum inculcata. Solet quidem certe auctor frequenter alterum amplecti, ut cap. 77. *ὡς ἔδη τῆς Μιτυλήνης ἔγγυον*, atque alias. WESS.

631. 85. *Καὶ τὴν χώραν οὐκ εἶα προνομιεῦσθαι*] Sic L. XIX. 12. *ἡμεγαλῆστο δὲ τὸν ποταμὸν διαβαίνειν, διὰ τὸ τὴν μὲν κατόπιν χώραν προνομιεῦσθαι.* Iosephus L. III. Bell. Iud. 9. 4.

ἵνα οὕτοι μὲν κατὰ χώραν μένοντες — οἱ δὲ ἱππεῖς προνομεύωσι τὴν πέριξ. ubi Ezech. Spanhemius. WESS.

631. 94. Δέξιᾷ τὴν πόλιν ἔχοντας ἐπέγεσθαι] Alii praepositionem addunt. Lucian. L. H. Ver. Hist. c. 33. εἰσιόντων δ' εἰς τὴν πόλιν ἐν δεξιᾷ μὲν ἐστὶ τὸ Νυκτῶον — ἐν ἀριστερᾷ δέ, τὰ τοῦ ἄνρου βασιλεία. Sed hoc in genere mire variatur. Vide Epistol. T. Hemsterhusii, insertam Praefat. Thucyd. a Cl. Dukero. WESS.

631. 1. Καὶ τὸ πεδῖον καθιππάζεσθαι] Τὰς ὁδοὺς ἱππαζόμενοι ex c. 88. ostendunt additamento Veneti carere nos posse. Aeschylus Eumen. v. 156. Νέος δὲ γράϊας δαίμονας καθιππάζω et v. 734. Ἐπεὶ καθιππάζῃ με προεβύτιν νέος. quibus poetae locis insultandi quaedam potestate instrui apertum est. WESS.

632. 21. Εἰς τὸ τοῦ χάρακος ἀπωξιμμένον ἐνέπιπτον] Haud scio, an intelligatur ea castrorum pars, ubi valli acuti erant depacti, quorum γιλοπόνως ἀπωξιμμένον κρημῶν meminit Polybius in valli Graeci Romaniq̄ue differentia signanda L. XVII. 15. WESS.

632. 43. Διονύσιος δὲ μόγυς διελθὼν τὴν πόλιν] Sustuli inutilem vocem, loci sententiam conturbantem. Transierat enim, etsi lento agmine, urbem Dionysius. Rhodomanno eadem sederat opinio, ut not. Addend. docemur. WESS.

632. 54. Ἦνρό καίεν δι' ὅλης τῆς νυκτὸς καὶ θορυβοποιεῖν] Nihil hoc strategemate tritius. Vid. Frontin. I. 1. 7. et 5. 24. etc. WESS.

632. 57. Τῆς ἡμέρας ἐπορωσοῦσης] Adi ad c. 18. huius libri. WESS.

633. 65. Οὐδεμίαν ἐπιστροφὴν χορημάτων ποιούμενοι] Ἐπιμέλειαν bene explicat Venetus. Ἐπιστροφὴν πρὸς τὰ πράγματα ποιῆσθαι eorum est, qui ad res agendas sese convertunt, uti in Synesii Encom. Calvit. p. 46. Id cura excipit. Sext. Empir. Hypotyp. I. p. 39. ὁ δὲ Ἐπίκουρος λέγει μὴ ἐπιστρέφεσθαι ἡμῶν τὸ θεῶν, i. e. nullam nostri curam gerere. Iosephus de Iud. Antiq. L. XIII. 3. 4. τοῦ δ' ἐν Γαριζεῖν (ιεροῦ) ὡς οὐδὲ ὄντος, οὐδέις λόγον οὐδ' ἐπιστροφὴν ἐποιήσατο. Aliud ἐπιστροφῆς τεύξασθαι et ἐπιστροφὴν τῶν γεγονότων ἀδικημάτων ποιήσασθαι in Polyb. L. IV. 4. de animadversione et castigatione, sed eodem ex fonte emanans. WESS.

633. 74. Οὓς μὲν ἀρεσταίρου] Genus hoc poenae apud Carthaginienses, qui et illustres viros cruci suffigebant, perfrequens. Vide Polyb. I. 24. Val. Maxim. II. 7. Iustin. XVIII. 7. et XXII. 7. WESS.

633. 76. Ἐκ δεῦν πόλεων ἐξοριζόμενων etc.] Quo planior orationis esset tenor, addita eum ex Veneto voce auctiorem esse iussi; scio, praesentiam illius prorsus necessariam non esse: ut huic tamen loco adsit, praestat. WESS.

633. 2. Ὁμοθυμαδὸν ἀρίππευσαν] In not. suarum Ad-  
dend. corrigit Rhodomannus ἀριππεύουσιν, nescio quid secutus:  
verbo enim nihil inest, cur displicere debeat. Habebis τέλος δὲ  
Σκύθαι — ἀρίππευσαν πρὸς τοὺς περὶ τὸν Μαζαίων L. XVII.  
59. WESS.

633. 7. Οὕτω διέθεσαν κακῶς] Adeo barbare et crudeliter  
mulieri insultarunt, ut voluntaria dein morte perierit. Λεινὰς καὶ  
παρὰ νόμους ὕβρεις εἰς τὸ σῶμα καθύβρισαν, ἐφ' αἷς προήκατο  
τὸν βίον ἐκουσίως Plutarchus inquit in Dion. p. 959. A. Mox  
dubites utrum νομιζόντα an νομιζόντες praecoptandum sit: si  
posterius, ut scripti libri videntur iubere, sententia erit, cen-  
suisse equites, uxoris tyranni divexationem et supplicium fidei  
artissimum inter se futurum ad consilia perpetranda vinculum.  
WESS.

634. 16. Εἰ μὴ πειθοῖ] Legendum arbitror κεύθοι, nisi  
alicui σπέροχοι placeat. RHOD. Κεύθοι Rhodomannus versione sua  
expressit. Ἐγὼ σπεύσοι fuisse opinor, quod et a pravo vocabulo  
propius abest, et rei gestae respondet: in eius enim gerendae ce-  
leritate spes omnis erat tyranno. WESS.

634. 29. Ὡς χοῦσθαι νομιζουσιν] In usu illis et more est.  
Euripides Hellen. v. 1071. Ἄλλ' οὐ νομιζέειν φήσομεν καθ'  
Ἑλλάδα Χέρσω καλύπτειν τοὺς θανάοντας ἐναλίους, i. e. nega-  
bitus eam esse in Graecia consuetudinem etc. Atque ita alii sae-  
pius. Mox κορίας σύνθεσιν Rhodomannus in not. Auctario legit,  
nulla iusta causa. Non videtur vir doctus eorum recordatus, quae  
Vitruvius L. VII. 3. commentatus est de Graeca et palustri arun-  
dine, eiusque in tectoriis ducendis et colligandis usu sollemni.  
Verte ergo, quibus ad tectorii operis alligationes Syracusani uti  
consueverant. WESS.

634. 40. Καὶ τῶν ἀλλοτριῶς τῇ πόλει διακειμένων] Inter  
ἀλλοτριῶς et τῇ πόλει infarci praepositionem ἐν. RHOD. Rhodo-  
manno assentior, tametsi non ignorem, quae Iac. Gronov. ad Ste-  
phanum in voce Ἄβαι atque in Herodot. L. I. 96. de absentia  
huius voculae observavit: exempla huic loco minime sunt oppor-  
tuna; ut enim nunc habet, eos innuet, qui male in civitatem ani-  
mati erant: quae sententia a mente scriptoris recedit. WESS.

634. 44. Τὴν νῦν καλουμένην Ἀχραιδίην] Deliquerunt  
in ultima voce graviter amanuensens. Scripserat auctor Αἴτην.  
Testis ipse seq. libri c. 7. μετεπέμποντο, inquit, τοὺς ἐκ τῆς  
ΑἴΤΝΗΣ ἰππεῖς. οὗτοι γὰρ ἐν ἀρχῇ τῆς τυραννίδος ἐκπεπω-  
κότες ᾤκουν τοῦτο τὸ χωρίον. Adde c. 58., e quo vero verius  
esse id, quod censui, videbis. WESS.

634. 48. Εἰς Λεοντίους ἀπηλλάγησαν] Ipsi Leontini  
brevis post, secessionem a Syracusanis facta, iisdem sese iunxere,  
foederis credo occasione, quod Dionysium inter et Carthaginienses

coaluerat. Haec Xenophon, sed anno insecuto adscribens, L. II. Hellen. p. 360. significat. WESS.

635. 70. Πρὸς Διονύσιον πρῶτον συστάντος] Res ipsa et scriptae membranae sic iubent refingi: finis enim hic primi, quod Dionysio Poeni fecerant, belli. Mox τὰς ἐξῆς πρόξεις εἰς τὴν ἐχομένην κ. τ. λ. dicere potuisset, ni variare orationem potius censuisset. Aetolorum Decretum in Antiq. Asiat. Edm. Chishull. p. 106. Ὅπως δὲ καὶ εἰς τοὺς νόμους καταχωρισθῆ ἡ ἀνιέρωσις καὶ ἡ ἀσυλία, τοὺς κατασταθέντας νομογράφους καταχωρίζαι, ἐπεὶ καὶ αἱ νομογραφίαι γίνονται, εἰς τοὺς νόμους. Vide adscripta L. I. 31. WESS.

## A N N O T A T I O N E S

IN

## LIBRUM DECIMUM QUARTUM.

636. 17. *Κτίσις Ἀλαίσης*] Sic et Strabo adpellat. Vid. L. XIV. 16. WESS.

637. 38. *Στρατεία ἐπὶ τὸν πόλεμον*] Nihili hoc quidem est. Lege *ἐπὶ τὸν πορθμόν*. Intelligitur expeditio, qua fretum Siculum suae potestatis facere Carthaginenses adnisi sunt L. XIV. 36. WESS.

637. 57. *Στόλος τῶν Καρχηδονίων νυκτὸς*] Dubites utrum *στόλος* an *δόλος* Grammaticus dederit: *στόλος* si malis, iter erit et fuga Carthaginensium, sin *δόλος*, fraudem indicabit. Vid. L. XIV. 75. WESS.

637. 67. *Ἀγρὴν τε τὸν Ἀγρηναῖον καὶ Νιζόδημον*] Diodorus *Ἀγρὴν τὸν Ἀγρηναῖον τύραννον*, et *Δάμωνα* (non *Νιζόδημον*) τὸν *δυναστεύοντα Κεντοριπίνων* appellat p. 438. STEPH. *Ἀγρηναῖον* aut *Ἀγρηναίων* et *Δάμωνα* praestat. Confer L. XIV. 78. WESS.

637. 83. *Περὶ πόλιν Βάκαιναν*] Adde literam ut plenum sit vocabulum *Ἀβάκαιναν*, et vide L. XIV. 90. WESS.

637. 87. *Ὡς Θίβρος*] Posses levi opera ex Reg. I. *Θίμβρος* cum Rhodomanno, nisi voluisse *Θίβρων* videretur, de quo L. XIV. 99. WESS.

638. 95. *Καὶ μετοίκησις*] Imo vero *μετοίκισις* ex L. XIV. 107. WESS.

639. 1. *Προσάντως ἀκούειν*] Sic L. XVII. 15. *ὁ δὲ δῆμος* — *προσάντως ἀκούων τοὺς λόγους*, i. e. *aegre atque animo infesto*. Et L. XIV. 21. *προσάντως δὲ δεξαμέντων τὸν λόγον τῶν στρατιωτῶν*. Iosephus Ant. Iud. L. XIX. 7. 1. *διὸ προσάντως ὁ βασιλεὺς ἐδέχετο τὴν ἀταμίετον παθήσῃαν τάνδρός*. Paulo lenius hoc Isocratis Or. de Pac. p. 238. *ἐγὼ δ' οἶδα μὲν, ὅτι πρόσαντίς ἐστιν ἐναρτιοῦσθαι ταῖς ὑμετέραις διανοαῖσις*. Vide Io. G. Graevium in Luciani Histor. Conscrib. c. 10. WESS.

639. 11. *Πελοπτος ὢν διὰ τὴν ἐπιφάνειαν ἐν πᾶσιν*] Dele praepositionem, si ita placet: ego non moveo. Praeclare Caesar, qui magno imperio praediti in excelso aetatem agunt, eorum facta cuncti mortales novere apud Sallustium Catil. c. 51. et Seneca ad Neronem, tibi non magis, quam soli, latere contingit: multa contra te lux est, omnium in istam conversi oculi sunt L. I. de Clement. c. 8. Habet enim in summo honoris fastigio collocatus *σύνπαντας ἀνθρώπους θεατὰς καὶ μάστιγους τῆς αὐτοῦ ψυχῆς* ὥστε μίτε πράξαντι οἷόν τε λαθεῖν, οὐ μᾶλλον ἢ τῷ ἡλίῳ πορεύεσθαι διὰ σκότους Dio Chrysostom. Or. III. de Regn. p. 38. B. WESS.

639. 16. *Ἵστερον ἤξειν ἐπ' αὐτὸν προσδέχεσθω τὴν ἀλήθειαν*] Haec et superiora exscripsit Antonius Serm. de Reg. bono p. 518., sed *προσδέχεσθαι* legens. Prudenter autem et vere Noster: namque nullis magis curandum est, qualem famam habeant, quam qui qualemcumque meruerint, magnam habituri sunt, ut cum Seneca dicam. WESS.

639. 22. *Καθάπερ ἔνιοι τῶν φιλοσόφων θρηλλοῦσιν*] *In luctu atque miseriis mortem aerumnarum requiem, non cruciatum, esse; eam cuncta mortalium mala dissolvere: ultra neque curae, neque gaudio locum esse, ex horum sententia Caesar apud Sallust. Catil. c. 51., quam quidem merito improbant alii, sed probabilia tantum coniectura secuti, cum ultra, quo progredenterent, quam ut verosimilia dicerent, non haberent. Vide Th. Gataker. in Antonini Imp. L. IV. p. 108. WESS.*

640. 34. *Ὅτε πράξεις ἀδίκους — ἐπιτελεῖν ἐπιχειρήσων*] Eadem Demosthenes Philipp. III. p. 68., cuius verba, sunt enim complusecula exscribere non vacat. Verissimum autem id semper fuit et manebit, donec homines erunt, neque unis Spartanis atque Atheniensibus usu venit, sed in plerisque omnibus regnorum conversionibus. *Errat longe, mea quidem sententia, qui imperium credat gravius esse, aut stabilius, Vi quod fit, quam illud, quod amicitia adiungitur* in Adelp. I. 1 41. Terentius. WESS.

640. 41. *Διὰ τὸν φόβον ἠναγκάζετο φέρειν etc.*] Forte ἐπὶ τὸν χιτῶνα. Vide L. XX. 64. WESS. Ἰπὸ τὸν libro suo Scaliger, Is. Vossio adplaudente, adscripserat, conmode profecto. IDEM in Add.

640. 59. *Ἔτος μὲν ἦν ὀγδοηκοστὸν πρὸς τοῖς ἑπτακοσίοις*] Numeri accurate respondent calculis Eratosthenis apud Clement. Alexand. Strom. L. I. p. 402., congruuntque auctoris sententiae de qua L. XIII. 1. non Eusebii, quem errantem castigavit Illust. Scaliger ad ann. Chron. MDCXI. Annus Archontem hic vidit *Pythodorum*, quem Fasti Attici praetereunt, quod republica paucorum dominatione oppressa constitutus esset, ἀναρχίαν substituentes. *Ὁν Ἀθηναῖοι, ὅτι ἐν ὀλιγαρχίᾳ ἤρθε, οὐκ ὀνομάζουσιν*

ἀλλ' *ANAPXIAN* τὸν ἐναντὸν καλοῦσιν Xenophon Hellen. II. p. 359. Haec est ἀναρχία πρὸς Εὐκλείδου, quam Suidas ἐπὶ τῆς ἐννενηκοστῆς τρίτης Ὀλυμπιάδος fuisse cum scribit in voce Θεοπομπος, peccat προχρονισμῶ. WESS.

640. 62. Γάιος Φλοῦῖος] Auctoris scriptura est Φοῖριος, et pro Νουμένιος, Νουμέριος. RHOD. Iustam Rhodomanni esse observationem, Livius L. IV. 57. manifestat, Furio praeterea Lucii praenomen inponens. Νουμέριος membranarum fide atque auctoritate sedem suam recepit. WESS.

640. 65. Καθ' ἣν ἐνίκη στάδιον Κορκίνας] Addidi ex Reg. I. σταδίου vocem. Victoris nomen leviter deturpatum esse, monuit Io. Meursius Lect. Attic. L. IV. 29. Adpellabatur Κορκίνας. WESS. Κορκίνας adscripserat Scaliger. IDEM in Add.

640. 72. Τὴν παλαιὰν κατάστασιν ἔφρασαν διανείμασθαι] Demosthenis διανείμασθαι τὰ πατρίω et Herodiani νείμασθαι τὴν ἀρχὴν non longe hinc recedunt. Volebant, reipublicae administrationem ex antiquissima forma inter paucos esse describendam, revocandamque Aristocratiam, quae Athenis ante Solonem viguerat: hic enim Oligarchiam sustulit, populari statu constituto. Quare Solonem Aristoteles Polit. II. 10. ὀλιγαρχίαν καταλύσαι ait, λίαν ἄκρατον οὔσαν, καὶ δουλείοντα τὸν δῆμον παῦσαι, καὶ δημοκρατίαν καταστήσαι τὴν πάτριον, μίξαντα καλῶς τὴν πολιτείαν. Contra ea alii τὴν πατέρων πολιτείαν, i. e. eam, quae ad Solonis leges erat conformata et prorsus Democratica, praecipiebant. Pertinet huc egregia Iac. Perizonii disputatio ad Aelian. Var. Hist. L. V. 13. WESS.

641. 81. Καὶ ὀλιγαρχία ἐν ταῖς πλείσταις καθίσταντο] Acquiesco in tanto scriptorum Codd. consensu. Decem illi intelliguntur, in unaquaque civitate delecti, quibus summum imperium potestatemque omnium rerum Lysander committeret. Σεκαδαρχίας sive δεκαρχίας τὰς κατασταθείσας ὑπὸ τοῦ Ἀνσάνδρου ἐν ταῖς πόλεσιν Xenophon adpellat Hellen. III. p. 387. Mox supervacaneam esse negandi vocem, bene Rhodomannus admonet. WESS.

641. 82. Οὐχ, ὅπερ ἦν εἰκὸς] Dele οὐχ. RHOD. Οὐχ deletur a Scaligero. WESS. in Add.

641. 90. Συνεβούλευσε τοῖς Ἀθηναίοις ἐλέσθαι etc.] Vid. Casaubonum ad Strabon. L. IX. p. 609. De Lysandro eiusque oratione, qua xxx viros Atheniensibus obrusit, consentit Lysias Or. in Eratosthen. c. 18., de Theramene in diversa abit, eumque praecipuum auctorem fuisse illorum xxx constituendorum profiteatur palam: qui quidem si odii causas procul habuerit, quid fiet Diodoro? cuius narrationi et obita mors, quam factionis eius crudelitate oppetiit, et Plutarchi in Nic. p. 524. testimonium, quo optimis civium, τοῖς βελτίστοις τῶν πολιτῶν, accensetur, haud leve pondus adiiciunt. WESS.

641. 98. Ἀνετίνατο — — τὰς μεγίστας ἀπειλὰς] Suc-



consentium est, cum manus et baculum intentant, ἀνατείνασθαι, unde in conminationibus eius et ἐπανατείνασθαι opportuna sedes. Ioseph. Belli L. I. 10. 9. παρακαλοῦντες αὐτὸν ἀπειλῆ καὶ ἀνατάσει μόνῃ μετροῦσαι τὴν ἄμνην. Philo Iud. de Ioseph. p. 558. Ε. μηδεὶς ἡμῶν τολμῶντος ἐπὶ σιτιωνίαν ἤκειν δίχα τοῦ νεωτάτου διὰ τὰς σὰς ἐπανατάσεις· i. e. propter minas tuas. Et eo libro, quo Deum mutari non posse docet, p. 302. Ε. de servis asperi heri imperia metuentibus, τὰς γὰρ ἐπανατάσεις καὶ ἀπειλὰς αὐτοῦ δεδιώτες. ubi prave nunc editur ἐπαναστάσεις, sicuti et L. I. de Vit. Mos. p. 617. A. Quo modo et alibi in Philone peccatum fuisse ad Athen. L. IV. 14. magnus Animadversor ostendit, verborum usum egregie illustrans. WESS.

641. 3. Τριάκοντα ἄνδρες] Omnium eorum nomina si desideres, accipere ex Xenophonte poteris *Res. Graec. L. II. p. 359.* WESS.

641. 16. Παραδιδόντες κρίσει τοὺς πον. τῶν ἐν τῇ πόλει] Fictam tyrannorum moderationem in civium perditissimis opprimendis non praeterierunt Lysias adv. Eratosth. c. 2., et, quem accumulari his in rebus Diodorus videtur, Xenophon *Hellen. II. p. 360.* Inter primos autem quem carnifici iugulandum tradiderint, *Plut. T. II. p. 998. B.* docet. WESS.

642. 28. Τῶν δὲ πλουσίων ἐπιλέγοντες τοὺς ἐπιτηδείους] Lysiam, cuius mihi verba *Ier. Cl. Marklandus* optime constituisse videtur, *Or. in Eratosth. c. 2.* et quae Theramenes apud Xenophontem perorat *Hellen. II. p. 364.* consule. WESS.

642. 43. Ἡρὸς τὴν Βουλαιάν Ἔστιαν] Vestae imaginem et aram in curia collocatam, τὴν ἐν τῇ βουλῇ ἰδρυμένην, ut Harporation explicat, per quam senatoriam Vestam sollemne in iudiciis iusiurandum fuisse, monuerunt viri clarissimi Maussaeus et Ezech. Spanhemius *Diatrib. de Vest. et Prytan. cap. 6.* De Theramene *Plutarchus in Isocrat. p. 836. E.* οὐ συλλαμβανομένου ὑπὸ τῶν τριάκοντα καὶ γηγόντος ἐπὶ τὴν βουλαιάν Ἔστιαν. Adde *Suidam in Δεξιός.* WESS.

642. 53. Καὶ δύο τῶν οὐζέων] Hos inter Isocrates, Theramenis discipulus, vel praecipuus fuit. Μόνος ἀνέστη βοηθήσων, *Plutarchus* dicto loco ait, quasi quae Noster de Socrate in unum Isocratem congruerent. Vid. *Hier. Wolfium* ad *Isocrat. p. 750.* WESS.

642. 59. Τῶν ὑπερχόντων ἀνάστασιν ὀρῶντες] Ἐπανάστασιν dixisset alius, aut certe ἀνάστασιν, quo de paullo ante. Fortasse simplex vicem hoc loco compositi obtinet. De Theramenis autem elato animo et in obeunda morte admirabili constantia praeclare *Cicero Tuscul. Quaest. L. I. 40.* et *Xenoph. de Reb. Graec. II. p. 367.* WESS.

642. 68. Οὐδενὶ λόγῳ παραναλωθήσεσθαι διελήμασι] *Iosephus Bell. Iud. L. IV. 2. 5.* ἀδιόρθωτον δὲ τὴν ἐπὶ τοῖς πα-

ραναλωθεῖσι τιμωρίαν εἶναι. Hinc venuste παρανάλωμα de eo, qui caesis aliis tanquam res vilis in cumulum, atque obiter quidem, additur. Demades Orat., quae nomen eius praefert, principio: ἐγὼ δ' ἀποθανῶν μὲν, ἢ ζῶν, οὐδὲν εἶμι· τί γὰρ Ἀθηναίους ἢ ΠΑΡΑΝΑΛΩΜΑ Δημάδης; Philo Iud. in Flaec. p. 967. A. de Tiberio imp. nepoti suo, ne a Caio occideretur, metuente, ἐδεῖε γὰρ μὴ ΠΑΡΑΝΑΛΩΜΑ γένηται τελευτήσαντος αὐτοῦ. Et semet ipso ac sociis legationis in ea ad Cai. p. 1043. B. ἀλλ' εἰδότες ἐπ' οὐδενὶ λυσitelῆ ΠΑΡΑΝΑΛΩΜΑ γενησόμενοι μετὰ πολλῆς δυσκλείας. Placuit etiam hoc genus Eustathio, nisi Eumathius fuerit, L. VIII. de Ism. et Ismen. Amorib. p. 282., turgido alioqui scriptori, qui cum senes inbelles a barbaris temere, et tanquam nulli amplius rei, occisos tradidisset, ξίφους γεγόνασι, inquit, παρανάλωμα. Quae quidem exempla conducere placuit, ut vocis usus, neglectus saepe, eluceret manifestior et in his Iosephi Belli L. IV. 5. 2. καὶ τὸ μὲν ἄλλο πλῆθος αὐτοῖς ἐδόκει ΠΑΡΑΝΑΛΩΜΑ, τοὺς δ' ἀρχιερεῖς ἀνεξήτουν. et Aeliani de Animal. L. IV. 13. perdices pugnaces sunt, arbitranturque, ὅτι μὴ εἰσὶν ἄξιοι ΠΑΡΑΝΑΛΩΜΑ γενέσθαι τεθρημαμένοι. Aliud enim ibi spectari solet. WESS.

642. 73. Ἀρεῖλον δὲ καὶ Νικήρατον τὸν Νικίων] Sed ante Theramenem, quod huius oratio apud Xenophontem Hellen. II. p. 364. testatur. Fuisse Niceratum et opibus et humanitate Athenis principem, vide in Lysiae Or. XVIII. c. 3. WESS.

643. 80. Λαμβανούσης τῆς ἀποροίας] Deest accusativus aliquis, qui cum λαμβανούσης iungatur, cuiusmodi fuerit ἀΐξιον vel ἐπίδοσιν. STEPH. Ἐν ἅπασι λαμβ.] Horum loco restituendum puto ἐπίδοσιν vel ἀΐξιον λαμβανούσης. RHOD.

643. 83. Οἱ τοῖς βίοις ἐπιορούμενοι σχεδὸν ἅπαντες etc.] Erat Athenis ea tempestate criminosius in re lauta quam flagitio versari. Δεινότερον ἢ πλοτεῖν ἢ ἀδικεῖν Isocrates inquit Orat. in Euthyn. p. 593. Itaque dites indicta caussa capitis damnabantur: quod periculum ut vitarent, solum alii verterunt, atque aut in Piraeum, aut alio concesserunt. Perierunt plures MD, et ad quinque Atheniensium millia in Piraeum se receperunt. Sic Isocrates Areopag. p. 224. et Aeschines de Legat. perp. gesta p. 87. WESS.

643. 84. Καὶ Ἀντόλυκον] Athleta erat, sed faceti ingenii, notissimus ex Xenophontis Symposio. Vide Plutarchum Lys. p. 442. A. WESS.

643. 89. Τὴν πόλιν τῶν Ἀθηναίων ὀρῶντες] Hiat oratio, participio quodam defecta. Interpres sententiam non male explesse videtur *quanquam civitatem ita exhaustam et afflictam viderent.* WESS.

643. 93. Ἀγωγίμους τοῖς τριάζοντα εἶναι] Conf. Des. Heraldum L. IV. Animadv. ad ius Attic. et Rom. c. 5. Decreverant Spartani, exsules Athenienses undique duci posse, proque ini-

amicis fore, qui ducentibus obsisterent. Τοὺς φεύγοντας ἐξ Ἀθη-  
νῶν ἀγωγίμους εἶναι πανταχόθεν, ἐκσπόνδους δὲ τοὺς ἐπιστα-  
μένους τοῖς ἄγονσι Plut. Lys. p. 448. F. Cui decreto Graecorum  
plerique paruerunt: quare de Atheniensibus καὶ εἰς πολλὰς πόλεις  
πλανηθέντες, καὶ πανταχόθεν ἐκκηρυττόμενοι, ἐνδεεῖς ὄντες τῶν  
ἐπιτηδείων Lysias Or. in Eratosth. c. 23. WESS.

643. 97. Ἀργεῖοι δὲ πρῶτοι, μισοῦντες μὲν τὴν Αἰα.  
ἰδιότητα etc.] Fuit Argivis summum cum Atheniensibus amicitiae  
pignus, quo spectant Aeschyli versus in Eumenid. 769. et seq.  
Cuius quidem coniunctionis adflicto hoc Atticae reipublicae tem-  
pore testatissimam dederunt fidem, profugos non tantum recipien-  
tes, sed et Spartanorum legatos, qui Athenienses clarigatum ad-  
venerant, ni ante solis occasum abirent, hostium in numero ha-  
bendos, decernentes. Ἐὰν μὴ πρὸ ἡλίου δέροντος ἀπαλλάττων-  
ται, πολεμίους κρίνειν, Demosthenes Orat. Rhod. p. 116. WESS.

643. 1. Καὶ Θηβαῖοι δὲ ἐψηφίσαντο ὑπάρχειν πρόστιμον  
etc.] Distinctius de hoc Thebanorum, hostium alioqui, decreto  
Plut. Lysand. p. 448. F. οἰκίαν μὲν ἀνεῶχθαι πῦσαν καὶ πόλιν  
ἐν Βοιωτίᾳ τοῖς δεομένοις Ἀθηναίων, τὸν δὲ τῷ ἀγομένῳ φηγά-  
δι μὴ βοηθήσαντα, ζημίαν ὀφείλειν τέλειαν. ἂν δέ τις Ἀθή-  
νας διὰ τῆς Βοιωτίας ἐπὶ τοὺς τυράννους ὄπλα κομιζῆ, μήτε  
ὄρῳν τινα Θηβαίων, μήτε ἀκούειν. Qua humanitatis plenissima  
constitutione luculentissime maculam Thebani obliterarunt, quam  
sibi adperserant ipsimet, cum urbem evertendam Atticam ac μη-  
λόβοτον relinquendam in sociorum concilio pro sententia dixe-  
rant. Conf. inferius L. XV. 63. WESS.

643. 4. Λιονόσιος ὁ τῶν Σικελῶν τύραννος] Σικελιωτῶν  
scribere debuerat, ut c. 18., etsi et ibi Σικελῶν τύραννος in Clar.  
et Reg. 1. Sed Grammaticorum legem, qua Σικελὸς et Σικελιώ-  
τας distinguunt, alioqui a Nostro probatam L. V. 7., saepe optimi  
scriptores negligunt. Vide T. Hemsterhusium in Luciani D. Mort.  
XII. 7. WESS.

643. 13. Καὶ πρὸ ἀντῆς χρηματιστήρια] Tabernae Inter-  
pres. Forte conclavia fuerunt, ἐν οἷς ἐχρημάτισε, sive ubi legatis  
responsa reddebat. Vid. L. I. 1. WESS.

644. 17. Πρὸς τῷ μικρῷ λιμένι, τῷ Ἀσζζίῳ καλουμένῳ]  
Ph. Cluverium Sic. Ant. L. I. p. 168. adi. S. Bochartus de Phoe-  
nic. Colon. L. I. 28. p. 541. Ἀσζζιον dici auctor est a figura τοῦ  
λάκκου sive cisternae. Mihi non liquet. WESS.

644. 25. Οὓς ἐξέλει νεοπολίτας] Plato eodem vocabulo  
nuper in civitatis ius adscitos descripsit, teste Polluce III. 56.  
IX. 26. ubi νεοπολίται. Sed vide Iungermannum. WESS.

644. 33. Ἐπὶ τὴν τῶν Ἑρβησινῶν πόλιν στρατεύσας] Ita  
praestat. Praestiterat quoque Ἑρβησινῶν, quo titulo urbis Her-  
bessi cives, Ἑρβησσηνοὶ L. XIV. 78. sed prave, indicari, ex Ste-  
phano notum. Vide Ph. Cluverium Sicil. Antiq. L. II. p. 361. WESS.

614. 43. Τὸν δὲ πολίτας βοῶντες ἐπὶ τὴν ἑλευθερίαν] Conf. Io. Fr. Reitzium ad Luciani Toxar. c. 40. Urbem Aetnam Syracusanos equites occupasse sub tyrannidis principium dictum L. XIII. 113. fuit. WESS.

614. 48. Τὴν δ' εἰς τὰς Σοφ. ἠπέλεγτο] Paullo insolentior hoc loco ea ellipsis. Addidissent alii πορείαν aut ὁδοπορίαν. WESS.

614. 61. Ἐπεζήρξαν δὲ καὶ χορημάτων πλῆθος etc.] Dixi ad L. XIII. 6., quibus adde Hen. Valesii not. in Harpocrat. p. 59. et L. Casp. Valkenaer Animadv. in Ammon. L. I. 20. WESS.

615. 75. Ὁ ποιητὴς πατήρ] *Pater poeta* Interpres: qui titulus quam vim hic habeat, iuxta cum ignarissimis intelligo. Lege ὁ ποιητὸς πατήρ, *pater adoptivus*, et proba erunt omnia. Notum est contra se poni τοὺς γένοι γενήσαντας et τοὺς ποιητοὺς τῶν πατέρων, quemadmodum in Lyeurgi Or. adv. Leocrat. p. 153. Lysias in Agorat. c. 23. τὸν τε ποιητὸν πατέρα ἀγέειτο ἂ ἢ ἐλάσσοιτα ἐξείρω. Et tamen ad hoc genus offenditur. In veteri Inscriptione, quam Edm. Chishull Antiq. Asiat. p. 91. debemus, perscriptum est, προφητεύοντος δὲ Ἀντιπάτρου τοῦ Μενιστράτου, ΚΑΤΑ ΠΟΙΗΣΙΝ δὲ Μενάνδρου τοῦ Μαυῶνος, vertiturque, *Propheta vero Antipatro F. Menistrati, Poeta Menandro F. Maconis*. Haud quidem recte. Propheta unus describitur Antipater Menistrati F., sed qui adoptione filius erat Menandri. Υἱὸν ποιῆσθαι offeret hoc usu Herodotus Vit. Hom. c. 4. Sed haec mitto. Heloridis, quem Ellopiden Aelianus adpellat Var. Hist. L. IV. 8., illud dictum illustre est, saepeque memoratum ab Isoerate in Archidamo p. 183. Plutarcho T. II. p. 783. C. atque aliis. Vide viros Clariss. Iac. Tollium in Longin. p. 64. et Olearium ad Philostrat. L. I. Vit. Sophist. 16. 3. quaeque adscripsi L. XI. 11. WESS.

615. 77. Πολύξενος δὲ ὁ ζηδεστής] *Socerum* verterat Rhodomannus hoc loco et saepe alias, sed contra verum. Fuit enim Polyxenus Dionysii affinis, uti proditum L. XIII. 96., non socer. Patiebatur alioqui vocis usus, late patens, quippe *socerum, generem et affinem* suis locis indicans. Pro affine exemplum dabit Lysias Contr. Agorat. c. 1. et c. 9. WESS.

615. 83. Προσίζειν ἔφη σοι δεῖν] Nemo non videt mendosum esse hunc locum προσίζειν ἔφη σοι δεῖν. At minima cum mutatione poterit, ut opinor, ita emendatus reddi, προσίζειν ἔφη σε δεῖν. STEPH. Pro σοι redde καὶ, et pro θεόροτος, θεόντος. RHOD. Alterutra, aut Stephani, aut Rhodomanni, emendatio recipienda videtur, nisi forte cum Scaligero deletas malas voces, quae ἔφη excipiunt. Θεόροτος quidem certe genuinum est: nam μὴ δεῖν ἐκ τυραννίδος γένειν ἑλωρ ταχεῖ γρόμενον, ἀλλὰ τοῦ σκέλους ἐλκόμενον dixerat Philistus auctore Timaeo in Plut. Dion. p. 97. B. Ceterum L. XX. 79. eadem res narratur, proditurque Mega-

cles, Dionysii κριθεστίης dixisse, ὅτι δεῖ τὸν ἐκ τῆς τυραννίδος ἐκπίπτοντα τοῦ σκέλους ἐκκόμμενον ἀπιέναι, καὶ μὴ κατὰ προαίρεσιν ἀπαλλάττεσθαι. Quid dices, oblitumne sui auctorem, an alios ibi scriptores secutum? Quod mihi non videtur a vero alienum ob ea, quae Plut. ex Philisto prodit loco dicto. Ut ut constitueris, elegans est ἔλκειν et κατασπᾶν τοῦ σκέλους, vel τοῦ ποδός, illustratumque ab Hemsterhusio, viro clarissimo, ad Luciani D. Mort. XXI. 1. Wess. Comparati ab me Demosth. p. 1399. ἄξια τούτων ὄντο δεῖν προσήκειν ποιούντες ὁμῶς, quae interpretatio ab Schaefero adhibita est mihi non probatur.

645. 92. *Ἐἰς τὴν πολιορκίαν*] Conmode Interpres deficientem supplevit sententiam *quantum flagitent pecuniae ad obsidionem hanc solvendam*. Mox si ὁμῶς, plerisque cum Codd. malueris, succurret ipsemet auctor L. XVIII. 9. Wess.

645. 6. *Ἐισεβιάσαντο πρὸς τὸν Λιονύσιον*] Pro εἰσεβιβάσαντο lego εἰσεβιάσαντο. Sic autem saepe usurpatur εἰσεβιάσθαι. Praeterea ἄγχι, paullo ante legendum puto. ΣΤΕΡΗ. Placet utrumque, quippe ingenio sermonis munitum. Infra c. 86. πολιορκήσαντες τὸ χωρίον, τὸ ἐντὸς τοῦ διατειχίσματος, εἰσεβιάζοντο. Aliter III. Scaliger, cui πρὸς τὸν inducenda videbantur. Wess. Deletur πρὸς a Scaligero: at id probum videtur, non item uti dictum est εἰσεβιβάσαντο. IDEM in Add.

646. 15. *Περὶ τὴν Νέαν πόλιν καλουμένην*] Syracusanæ urbis pars, quae quia postrema aedificata erat, NEAPOLIS nominabatur in Ciceronis L. IV. Verr. c. 53. et Nostri L. XVI. 70. Wess.

646. 28. *Ἄξιον εἶναι τιχεῖν τῆς ὁμοίας χάριτος*] Acute profecto ac fortiter, atque ut pro libertate ac patria decet! Simile Iudaeorum illud, quo regi Alexandro Iannaëo, roganti, quid facto opus esset, ut cum ipsis in gratiam rediret, succlamarunt, nihil aliud, nisi ut moreretur. *Ἰενθαινομένου δ' αὐτοῦ τὸ ὁμῶς γένεσθαι, πάντες ἐβόησαν ἀποθανεῖν ἀντὶν* Ioseph. Iud. Antiq. L. XIII. 13. 5. Wess.

646. 38. *Οἱ πορευθέντες εἰς Ἐντελλαν*] De Campanorum hoc scelere Ephorum L. XVI. uberius commemorasse, liquet ex Stephano in Ἐντελλα. Iunge Ph. Cluverium Sicil. Antiq. L. II. p. 379. Wess.

646. 45. *Καὶ τὴν κατὰ γῆν καὶ τὴν κατὰ θάλατταν*] Egregia atque admirabili eruditionis adparatu distincta de Spartanorum hoc Graeciae imperio commentatur Is. Casaubon. in Polyb. I. 2. Wess.

646. 52. *Ὅδ' χρῶμενοι νομίσματι*] Vide viros doctos ad Aelian. Var. Hist. L. XIV. 29. Spartani ante hoc tempus numos aureos et argenteos non admittebant, ferreis usi, sed βαρυστάθμοις καὶ δεσπαραχομίστοις apud Plut. Lysand. p. 442. D. Wess.

647. 80. *Χαρίσασθαι βονλόμενος Λακεδαιμονίοις*] Rem Plut. Alcib. p. 213. et Corn. Nepos Alcib. c. 10. referunt: hic

quoque, ut ad regem mitteretur, a Pharnabazo petiisse, addit. Utraque ergo caedis causa vera esse poterit. WESS.

647. 91. Βούλευσαι γὰρ ἐμφανίσαι πρῶτον etc.] Hoc malo. Vitium est amauensium, βούλευσαι et βουλευέσθαι permiscere adsuetudine quadam instituentium. Conf. c. 82. inferius. WESS.

647. 2. Ἐν τινι κόμῃ τῆς Φρυγίας] Vici nomen Athen. servavit L. XIII. p. 574. E. καὶ ἀποθανὼν ἐκιδέσθαι (Alcibiades) ἐν Μελίτση κόμῃ τῆς Φρυγίας, ἐπιβουλεύειν ὑπὸ Φαρναβάζου. qui quidem *Melissa* vicus inter Synnada et Metropolin, Phrygiae urbes, interpositus erat, uti ibidem indicatur. WESS.

647. 7. Βιώσας ἔτη ἐννενήκοντα] Aevum Democriti longius extendunt scriptorum alii, annis illud aut cix. aut civ. circumscribentes. Dissensum indicarunt Io. Meursius de Archont. L. III. 13. et Aegid. Menag. ad Laert. IX. 43., in vitii suspicionem hos quoque xc annos vocantes. Dubito an iniuria: nam cum de anno Democriti natali et de vitae spatio tanta inter veteres intercedat discordia, cur uni prae ceteris praerogativam dandam iudicabimus? Id mihi tamen satis adparet, natum esse non posse Democritum aut Olymp. LXXX., quae Apollodori sententia, aut, uti opinabatur Thrasyllus, anno tertio Olymp. LXXVII. Ipse enim professus erat, se μυροδὸν suum *Μιάροσιον* composuisse anno ab eversa Troia dccxxx. apud Diogenem IX. 43., sive circa Olymp. LXXX. exeuntem. Rectius propterea Noster, cuius ex sententia primam lucem Democritus Olymp. LXXI. ad finem vergente adspexit. Vide et Scaligerum ad Euseb. Chron. n. MDCXI. WESS.

647. 8. Αυσθέρην τε τὸν Θεσσαίων etc.] Ex sequentibus patet eum cursorem fuisse. Sed quando supra dicit Crocinam Thessalum Larissaeum vicisse stadium in hac Olympiade, restat, ut dicamus δόλιχον vel δίαυλον vicisse hunc Lasthenem. Sed dolichum magis convenit ei, cui tantum spiritus suppetebat, ut a Corona Thebas usque indesinenter currens equum exercitatum athleticum vinceret. Fuit autem dolichus viginti stadiorum, ut docet Sophoclis Scholiastes ad *Electram* (v. 687.) PALM.

647. 12. Ἐρρουναν πόλιν Οἰόλοσων] Bene interpres, Livium secutus, cui semper *FERRUGO*. Vid. L. IV. 58. et Ph. Cluverium Ital. Antiq. L. III. p. 1031. WESS.

648. 17. Ἀρχὸν Εὐκλείδης] Nobilissimus huius Euclidae magistratus est, quod tum exsules in urbem redierint, dominatione xxx virorum exstincta. Itaque huc pertinent omnia, quae Thrasybulum oppressosque tyrannos illustrant, sed a Nostro non sine gravi errore in serius tempus relata, uti commodiore loco dicetur. Vide nunc Lucian. Hermot. c. 76. et quae ibi veteres Critici. WESS.

648. 20. Καὶ Τερέντιος Μάξιμος] Tribunum hunc militarem unde acceperit, nescire me fateor. Livius Numerio Fabio et L. Valerio Potito collegas adiungit P. et Cn. *Cornelios Cossos*

L. IV. 58. Itaque non de nihilo videtur, quod nulla *Terentii Maximi* in schedis Coislin. sit mentio: quem quidem si hinc amandaveris, addiderisque *Γραῖος καὶ Πόπλιος Κορνήλιος*, cum Livii Fastis congruent egregie. Atque hoc cupide sequerer, si mihi liqueret, unde *Terentius Maximus* in hanc sedem immigrarit: nam librarios in crimen vocare, proclive quidem, at minime tutum. Ampliandum ergo. WESS.

648. 27. *Πιστευθεὶς περὶ τῶν ὄλων*] Huic generi explicando commodior post dein locus erit. Clearchi fraudem, qua Byzantinos oppressit, refert Polyænus Strateg. l. II. 2. 7. WESS.

648. 32. *Τοὺς ὀνομαζομένους Βυζαντίους*] Correctione locum indigere, verborumque ordinem esse *τριάζοντα μὲν Βυζαντίους, τοὺς ὀνομαζομένους*, in not. Addend. monuit Rhodomannus. Mihi corruptum videtur *Βυζαντίων* vocabulum, cuius in locum quid suffici debeat frustra quaesivi. Dant meliores Mss. *Βοιωτοὺς*, quos si qui probet, dicendum erit, Byzantii collegium xxx virorum fuisse, qui *Boeotii* adpellarentur, idque tituli retinuisse, quod inter urbis conditores et *Boeoti* fuerint, si fides Imp. Constantino Them. I. l. II. Advocabuntur fortasse et numi veteres, cuiusmodi Plotinae Augustae apud Vaillantium inscriptus *ΕΙΗ ΤΡΑΙΑΝΟΥ Β. ΒΥΖΑΝΤΙΝΩΝ*, ut Traianus eorum ex numero fuisse censeatur. Quae quidem in medium adferri possunt, nullo modo firmari, assensum ut inpetrent. Numus enim Vaillantii vetustate detritus fuit: integriores *ΕΙΗ ΤΡΑΙΑΝΟΥ ΤΟ Β.* praeferunt, indicantes altera vice Traianum istum Archontis munere Byzantii esse perfunctum. De *Boeotorum* autem xxx virorum concilio apud Byzantinos nemo, quod rescire potui, quidquam. Atque haec contra *Boeotos*. Cogitaveram, ut sit in ambiguis obscurisque rebus, an *Βοιωτῶν* id vocabulum converti posset in *Βωλετῶς*, ut, servata Byzantinorum dialecto, xxx *Senatores* innuantur. Quod etsi non plane spernam, tale tamen non est, ut in eo tuto acquiescam. WESS.

648. 39. *Τῆς κατὰ τὸν τέρανρον ἀμότητος*] Auctoris est idiotismus, pro *τῆς τοῦ τέρανρον*. Sic ἡ κατὰ αἶμα γλώμη, et ἡ κατὰ ψυχὴν ἀγγίχου, ἡ κατὰ τὴν ἀγγίχην ἀπόθεσις, eiusque generis alia. Vid. l. I. 65. et IV. 13. WESS.

648. 45. *Εἰς Σιλεβρίων*] Conf. l. XIII. 66. Prave *Σιλεβρία* in Chionis Epist. IV. p. 26. WESS.

648. 52. *Περὶ τὸν καλούμενον Πόρον*] De hoc nomine *Πόρος* eo loci silent alii. Fuit certe locus ita dictus in Thraciae littore inter mare et lacum non longe a Maronea, de quo Cantacusenus p. 287. et Belonius, qui in eo loco urbeculam suam sit nomine *Bouron*, a *Πόρος* (ut credo) deducto, quae lacui dedit nomen, quem volunt quidam Bistonium fuisse. Sed de eo loco nunc non est sermo: nam ex tota narratione patet cum *Poron* debere intelligi inter Selybriam et Byzantium. Ex natura loci id nomen acce-

pit ille πόρος, id est, *meatus*; est enim inter Selybriam et Constantinopolin lacus, qui exiguum spatium terrae relinquit in maris litore, de quo prolixè satis Procopius L. IV. 41., eum vide: prolixior enim est ille locus, quam ut debeat hic ascribi. Is locus ob angustias πορθμὸς et μύρμηξ dicitur a Procopio. PALM. Procopii πορθμὸς, cui nomen Μύρμηξ, Rhegium inter et Anthyram erat, uti docetur L. IV. de Aedif. Iustin. c. 8., paulloque remotior a Selybrianorum oppido. Propius aberat flumen *Athyras*, de quo ad Itiner. Hierosol. p. 570., quod tamen indicari in his veteris Geographiae, imprimis per Thraciam, tenebris asseverare nolim. WESS.

648. 59. Ἐκεί δ' εἰς συνήθειαν ἐλθὼν Κύρω] Vide Xenophontem L. II. Exped. Cyr. p. 228., sed tyrannica Clearchi consilia dissimulantem. WESS.

649. 61. Ἀρχῶν ἀποδεδ. τῶν ἐπὶ θαλάττης σατραπῶν] Repono σατραπειῶν. Sic p. 493. τὰς ἄνω σατραπείας, et alibi. STEPH. A Stephano nihil dissentio. Auctor ipse praecit c. 19. Κύρος, ὁ τῶν ἐπὶ θαλάττης σατραπειῶν ἡγούμενος. Et c. 26. ὧν Κύρος ἐπὶ θαλάττης ἤρχε σατραπειῶν. WESS.

649. 70. Ἐν αἷς μὲν δεκαδαρχίας] Decemviralem hanc Lysandri potestatem scripti Codd. Δεκαρχίαν, sicuti et Xenophon Hell. III. p. 387., vocant: ad quem modum τετραρχία Harporationi, quam a Philippo III. p. 68. τετραδαρχίαν nominat. Suidas opportune in Δεκαρχίαι. τὰς ὑπὸ Λακεδαιμονίων κατασταθείσας ἐν ταῖς πόλεσι δεκαρχίας συνεχῶς ὀνομαζόντων οἱ ἱστορικοί. WESS.

649. 76. Καὶ κοινὴν ἐκ πάντων Σπαρ. ποιῆσαι etc.] Ad didi praepositionem ex schedis vetustis, quam necessariam ostendunt postrema huius cap. πείθων ἐξ ἀπάντων τῶν πολιτῶν αἰρετοὺς γίνεσθαι βασιλεῖς. Molitus est hanc Spartanæ reipublicæ mutationem Lysander aliquot abhinc annis, quum Agesilao variis ex causis esset offensus, ut ex Plut. Lysand. p. 447. notum omnibus. De Heraclidarum vero Lacedaemone regibus familiaque Proclidarum et Eurysthenidarum, siue Eurypontidarum atque Agidarum, nominibus tantum enim discrepant, abunde Cragius de Lacedaem. Rep. L. II. 2. WESS.

649. 80. Μάλιστα τοῖς μαντείοις προσέχοντας] Cicero L. I. Divin. c. 43. de Lacedaemoniis, iidemque de rebus maioribus semper aut Delphis oraculum, aut ab Hamnone, aut a Dodona petebant. Cuius Spartanæ religionis plena sunt vetustiorum scriptorum monumenta. Corn. Nepot. Lys. c. 3. compone. WESS.

649. 81. Τὴν ἐν Δελφοῖς προσήτιν] Vid. L. XVI. 26. WESS.

649. 87. Ταῖς ἐν Δ. περὶ τὸ μαντ. οὔσαις ἱερείαις] Tres Δωδωναίων προμάντιες intelliguntur, de quibus ex Herodot. II. 55. praeclare lac. Triglandius Coniectau. de Dodon. c. 4. Admi-



nister, cuius opera ad corrumpendas antistites uti Lysander voluit, Plutarcho *Φερεκλήης* audit in *Lys.* p. 447. F. Mihi uter, rectius hominem adpellet, in obscuro est. WESS.

649. 95. *Τοὺς περὶ τὸ ἱερὸν διατρέβοντας*] *Τοὺς πολίτας* ex Ephoro apud Plutarchum: nimirum Hammonios eives, qui interius nemus prope oraculi sedem incolebant, et praeter ceteros *τὸν Ἀμμωνίων προφήτην*, de quo plenius L. XVII. 51. WESS.

649. 98. *Αἰβένν*] *Libys*, Lysandri frater, hoc anno, quo Euclides Archon, classis Spartanæ praefectus, seu navarchus erat, Xenophon *Rer. Graec.* L. II. p. 371. WESS.

650. 9. *Καί τινων χρηματισμῶν ζητουμένων*] Instrumenta actaque publica, quo fere modo *χρηματισμοὶ* L. I. 78., quibus ad finiendas sociorum controversias opus erat, docente Ephoro in *Plut. Lys.* p. 450. E. Mox *λόγος γεγραμμένος πολυτελῶς* insolens quiddam praeferre videtur, nec placere aut Lambino potuit ad *Corn. Nepot. Lys.* c. 3., legenti *πολιτικῶς*, quia Plutarchus orationem eam *περὶ πολιτείας* scriptam ait, aut T. Hemsterhusio, praecoptanti *πολυτέχνως*. Solet quidem Noster *πολυτελῶς* et *πολυτελής* de re egregia et magna cura impensisque perfecta usurpare, uti docere memini ad L. XIII. 83., blanditur tamen Cl. Hemsterhusii coniectura mirum in modum, quandoquidem ea Lysandri oratio *πιθανῶς καὶ πανούργως*, quod Plutarcho credimus, fuit composita. Hoc ergo, si quid mutandum, amplectar. WESS. *Πολυτελῶς* bene habet, significatque *operose, studiose*, multa cum arte aut animi contentione. Sic passim Noster, et insigni loco Themistius in *Sophista* p. 295. 2. *οὐδὲ γὰρ οὕτω πολυτελῶς καὶ ἀνδρείως ξεντεθέντα εὐτὰ ἡλισιάμην*, loquitur de suis Commentariis in Aristotelem. Vertit Petavius: *neque enim adeo exquisite atque viriditer ea conscripta esse noram. malletm exquisite atque egregie.* Idem p. 300. penult. *πολυτελεῖς ἐπιδείκνυντο καὶ γέμοντας ἡδονῆς λόγους.* cf. p. 301. A. 2. idem p. 323. c. II. *φωνὴ πολυτελεστέρα, vox exquisitior* recte vertit Petavius, vel *articulatiores, distinctiores, artificiosior.* REISK.

650. 17. *Ἄνται δ' ἦσαν, Νάξος, Κατάνη, Αεοντίνοι*] Vide not. in L. XII. 11. Quod sequitur *συνορίζειν ἀπὸς τῆς Σφραζούσης*, id quidem paullo est rarius, nec inuisitatum tamen. Nam singulari numero *τὴν Σφράζουσαν* dixit L. XIII. 75. et *Eclog.* 4. L. XXI. tum *Eclog.* II. et 14. L. XXII. Praeterea *πίσαι τὴν Σφράζουσαν* Stephanus in voc. *Σφραζούσας*, ubi mutare solent, et pauci alii, de quibus Ph. Cluver. *Sicil. Antiq.* L. I. 12. WESS.

650. 21. *Ἐπὶ τὴν Αἴτην στρατεύσας*] Praepositionem, cuius defectum animadvertent H. Steph. et L. Rhodom., tacentibus Codd., ne luxa esset oratio, addidi. WESS.

650. 25. *Παρὰ τὸν Τηρόαν ποταμὸν*] Sic flumen, Leon-  
tinos paene alluens, Thucydides, Scylax, Plinius, et Hesychius

adpellant. Vid. Phil. Cluverium Sicil. Ant. L. I. p. 125., amanuensium peccatum bene corrigentem. WESS.

650. 28. Νομιζων τῶν ῥόβω καταπλήξαι] Usitatioe loquendi forma diceretur καταπλήξαι. Sed hic scriptor νομιζω, ἐλπίζω, et alia huiusmodi, saepe cum aoristo iungit, ut hic. STEPH. Prudenter hoc quidem loco H. Stephanus, alias ad haec mutanda proclivior, proptereaque haud iniuria notatus a viro celeberrimo ad Xenophontem Ephes. in Miscellan. Observ. Vol. IV. p. 286. WESS.

650. 46. Διά τινος ἐρήμου τόπου ἐλθόν, παρεσέπεσεν etc.] Sine damno abesse hinc poterit, damnatum a Clar. et Reg. I., ἐλθόν. Dele proinde si libuerit. Ego scriptoris morem secutus non movero. WESS.

651. 63. Παρέδωκε τὴν πατρίδα] Fraudes, quibus Naxios Dionysius circumscripsit, exponit Polyaeus Strat. V. 2. 5. WESS.

651. 76. Οὐδεμίαν ἐξεν προσδοκῶντες] Ἐξεν fortasse quis maluerit; neque repudiarem, si scriptorum Codd. consensu munitum foret; quo destituti, cur mutaremus? WESS.

651. 82. Ἀρχωνίδης δὲ ὁ τῆς Ἐρβίτης ἐπιστάτης] Alius hic Archonides atque ille, de quo L. XII. 8. Aetas, quod ibi monebam, obstat. Quin ex Thucydide L. VII. 1. adparet, cum Archonidem circa Olymp. xci. fatis concessisse. Fuerit ergo, quandoquidem uterque Herbitensium princeps, prioris filius, aut eadem saltem ex familia. WESS.

651. 90. Ἐν ᾧ πόλιν ἐκτίσεν Ἀλεσαν] Ἀλαισα, quomodo Strabo L. VI. p. 408. et Ptolem. L. III. 4., vero nomine fuit, dicta a flumine Ἀλαίσω, saepe memorato in Lapide Gruteriano Thes. P. cxxii. Firmat scripturam vetus ara, cui inscriptum vidit ΤΟΝ ΔΑΜΟΝ ΤΩΝ ΑΛΑΙΣΙΝΩΝ Georg. Gualtherus Tab. Sicil. p. 123. Alesam et Halesinos ab aliis vocari, copiose Ph. Cluver. Sic. Antiq. L. II. p. 289. declaravit. WESS.

651. 94. Διά τε τὰς ἀπὸ τῆς θαλ. ἐργασίας] Τὰς κατὰ θάλατταν ἐργασίας studium rei nauticae L. V. 69. adpellavit, sicuti τὰς ἐκ θαλάττης ἐργασίας quaestum, quem ex mari Byzantini percipiebant, Polybius L. IV. 50. Hinc θάλατταν ἐργάζεσθαι et θαλαττουργός de piscatore in Exe. Vales. p. 350. Non ergo solam, quae mari exercetur, mercaturam complectitur. Vid. Observat. mearum L. I. 15. WESS.

651. 96. Τὸν τῶν Ἐρβιτῶν] Imo Ἐρβιταίων, ut saepe antea. Porro τὸ Ἀπολλώνιον non aliud est, ac vetusti Marmoris apud Gruter. Thes. p. cxxiii. ΤΟ ΑΠΟΛΛΩΝΟΣ ΙΕΡΟΝ. WESS.

651. 3. Καθ' ὃν καιρὸν Ἀμίλκας] Ἰμίλκων dicitur infra admonente Rhodomanno. Quod quidem verum: sed ea discordia non auctori, at eius librariis accepta est ferenda. Vero nomine Ἀμίλκας erat. WESS.

651. 5. Πρὸς Βοιοὺς πόλεμος συνέστη] Si malis ἐνέστη ex Coisl., non intercedam. Veientes Βοιοὺς plerumque vocitat, cum

*Βητόν* deberet, monitore Phil. Cluverio Ital. Ant. L. II. p. 534. Quae sequuntur defecta sunt caussis belli Veientini, quas Livius dabit L. IV. 58. WESS.

652. 5. *Διὰ τοιαύτας αἰτίας*] Hic aliquid desideratur. Explicatio videlicet causerum belli. Pro *Τούσκλην* vero *Ουόλσκων* ex Livio. RHOD.

652. 5. *Τότε πρώτοις — καθ' ἕκαστον ἐνιαυτὸν* etc.] Puto fuisse *πρωτον*. Id vero egregie, quod *καθ' ἕκαστον ἐνιαυτὸν* stipendia militi decreta prodit. Fuit enim stipendium, quod initio militibus apud Romanos est constitutum, non diurnum nec menstruum, sed annuum, quemadmodum hinc et aliorum exemplis conmonstrat diligentissime Nob. Radbod. Schelius Dissert. de Stip. Milit. p. 202. WESS.

652. 9. *Νῦν δ' ὄνομ. Ταραζίνη*] Ut conmode subintelligi *ὀνομάζεται* potest, ita sine flagitio adesse. Maneat ergo. In urbis nomine plerique caninam geminant. Adposite Livius IV. 59. *Anxur fuit, quae nunc Terracinae sunt*; ubi Cel. Drakenborchius plura. WESS.

652. 11. *Μίχιων*] *Μίχιων* vocatur in argumento Soph. Oedip. Col. Laurentiano, quam veram esse scripturam ex marmore Arundeliano constat.

652. 12. *Τῆτος Κοῦντιος* etc.] Nomina Trib. Milit. sic emenda et supple: *T. Κοῦγκτιος* etc. *A. Μάνλιος, καὶ Κοῦγκτος Κοῦγκτιος Κικινῆτος, καὶ Αεύνκιος Φούριος Μεδουλλῆτιος, καὶ Μάνιος Αιμίλιος Μάμερκος*. Ita enim Livius eos recenset. RHOD. Desunt e sex Tribunis militum amanuensium errore tres, quod Pighio in Fastis ad ann. CCCXLVIII. non latuit. Tito Quinctio sum nomen reddidi, quod et *A. Manlio* fecissem, si schedae veteres propius abissent. Vide Livium IV. 61. WESS.

652. 13. *Καὶ Ἀνλος*] Desunt reliquorum trium nomina. Sic vero et alibi ex sex numeratis tres tantum nominati reperiuntur in nostris exemplaribus, ut p. 420. STEPH.

652. 21. *Μετόπισαν ἀπὸ τῆς Θαλάττης* etc.] Situm eius ad mare Thucydid. L. VIII. 95. signat. Pausan. Attic. c. 34. sua aetate *ἐπὶ Θαλάσσης* fuisse dicit, quod stricte non esse accipiendum, hinc liquet, atque ex Sponio, qui urbis rudera, 11 M. P. a mari disiuncta, lustravit Itin. T. II. p. 243. Usi autem occasione adflictae urbis Atticae Thebani videntur in occupanda et Boeotorum communi adscribenda Oropo, controversa alioqui. Vid. infr. L. XV. 76. WESS.

652. 26. *Ὅτι Πανσανίαν τὸν βασιλέα αὐτῶν διεκόλυσαν*] Abit hic longe Diodorus a Xenophonte, qui Agim, ne sacris operaretur, ab Eleis prohibitum, eundemque in Eleorum agrum vindicandae iniuriae inmissum publice refert Rer. Gr. L. III. p. 383. Eadem Pausanias L. III. 8. Itaque alium sibi ducem, forte Theopompum, in his recensendis legit. Caussae tamen belli apud utros-

que fere eadem. Notavit eandem discordiam Iac. Palmer. Exercit. p. 68. WESS.

652. 33. Καὶ κατὰ τὸ ἐπιβάλλον αὐτοῖς μέρος] Copula redundat, ex sequenti praepositione nata, ut saepe. Eius praesentia offendit etiam doctissimum Rhodomannum. WESS.

652. 40. Καὶ παρὰ τῶν συμμάχων σχεδὸν ἀπόντων] Eleorum ager longa pace, et quod ex praecipua parte sacer censebatur, omni rerum ubertate florebat. Spes praedae, ne de foedere dicam, Spartanorum socios in hanc expeditionem accendit, futuram ὥσπερ ἐπισιτισμὸν τῇ Πελοποννήσῳ, ut pulcre Xenophon. Adde Polyb. IV. 73. WESS.

652. 45. Λασιῶνα μὲν φρουρίον] Auctori L. XV. 77. τῆς ὀνομαζομένης Τριφυλίας χωρίον ὄχυρον, ὃ προσηγορεῖται Λασιῶνα, duplici sibilis; sed prave. Λασιῶνα τὸν ἐπὶ Ἀρκάδιον λεγόμενον Xenoph. Hellen. III. p. 384., Λασιῶνα τὸν Ἠλείων Polyb. L. IV. 73., qui de oppido Eleis et Arcadibus contentionem fuisse addit. Mox διὰ τῆς ἀκρωρείας doctus Interpres per montium iuga vertit. Praestabit per Acrorium agrum. Nam Ἀκρωρείοι πόλις Τριφυλίας apud Stephan., quam urbem Iasioni adiungit Xenoph. l. d., insuper τὰς τῶν Ἀκρωρείων πόλεις memorans L. VII. p. 497. WESS.

652. 47. Θραιστὸν, Ἄλιον, Εὐπάριον, Ὀποῦντα] Prius, Acroriorum oppidum, Θραιστὸν Xenophon Lib. VII. Reg. Gr. p. 497. vocat. Ἄλιον nusquam invenio. Abr. Ortelius cum eo composuit Ἄλλον, sive Ἄλον potius, Herodoti L. VII. 173., sed errans: namque id Achaiae extra Peloponnesum. In Strabone L. VIII. p. 525. reperitur Ἀλείσιον, Stephano Ἀλήσιον, quod quidem in hac vicinia, haud tamen scio an idem. De Euragio nihil dixerō, nisi si Ἐπιτάλιον sit, Triphyliae urbibus insertum et a Xenophonte L. III. p. 384. et a Polybio L. IV. 80. et Strabone L. VIII. p. 537. unde Ἐπιταλεῖς, qui Πεταλιεῖς in quibusdam Xenophontis editis perverse admodum. Sed id quoddam quasi eius regionis fatum fuit, ut urbium nomina mendo sint foedata. Exempli caussa Herodoto L. IV. 148. Θριζαί, quae Polybio et Xenophonti Φριζα constantissime. Eidem Ἐπιον, pro quo Xenophon Ἠπιον, Polyb. IV. 77. Ἀπνὸν, et c. 80. Ἐπειὸν, Stephanus Ἠπιον. quorum Ἠπειον, unde gentile Ἠπειεὺς, solum verum videtur Holstenio, neque inmerito. Ὀποῦντα, ut ad eam veniam, inter Elidis urbes agnoscit Stephanus et ante eum Strabo L. IX. p. 651. WESS.

653. 50. Σταδίους ὡς ἑβδομήχοντα] Pylus media paene inter Elidem et mare erat, ab eo dissepta spatio circiter xxx stadiorum. Atque haec Πύλος est Τριφυλιακός, de qua, utrum Nestoris fuerit patria, magnum olim inter Grammaticos et Geographos certamen. Strabonem, controversiam examinantem, vide L. VIII. p. 538. et seq. WESS.

653. 55. Ἐδεδόκεισαν] *Αεδώζ.* Co. Clar. non omnino prave. Negligitur haud raro enim augmentum. Vid. ad L. II. 8. WESS.

653. 63. Ὅρῶν ἐργώδη τὴν ἄλωσιν οὖσαν] Iterum a Xenophonte discrepat: qui cum Agim suburbia et gymnasia oppidi vastasse dixisset, τὴν δὲ πόλιν, inquit, ἀτείχιστος γὰρ ἦν, ἐνόμισαν αὐτὸν μὴ βούλεσθαι μᾶλλον ἢ μὴ δύνασθαι ἐλεῖν, urbem, male enim munita erat, censebant eum magis non voluisse, quam non potuisse capere. Sic vertenda ea putem. Ἀτείχιστος male muris cinctam indicat: nam muris destitutam haud fuisse, quae subnectuntur ibidem ostendunt, et in Pausaniae L. III. 8. Neque hoc verum, si Xenophontem audis, regem concessisse Dymen in hiberna: Epitalii enim prope Alpheum flumen praesidiarios, qui Eleis infesti forent, reliquit, domum ipse reversus. Id bene, quod Eleorum agrum χώραν ἱερὰν nuncupat. Olim enim consensu quodam totius paene Graeciae convenerat, τὴν Ἡλείαν ἱερὰν εἶναι τοῦ Λιός, τὸν δ' ἐπιόντα ἐπὶ τὴν χώραν ταύτην μεθ' ὀπλων, ἐναγῆ εἶναι. ὡς δ' αὐτίως ἐναγῆ τὸν μὴ ἐπαμύνοντα κατὰ δόναμιν, Strabo L. VIII. p. 548. Quam consecrationem cum Spartani ratam habuissent, tanto haec irruptio videri debebat atrocior, nisi si Elei bello occasionem prae buissent. Conf. Excerpt. Vales. p. 225. WESS.

653. 77. Ἐκ θαλάττης εἰς θάλατταν ἀποτετεχισμένην] Vide L. XIII. 7. WESS.

653. 83. Πρὸς τοῖς Ἐξαπόλοις etc.] Ἐξάπυλα, *Hexapylum*, maior et munitior urbis erat porta, quae in Tycham aditum dabat. De ea Ph. Cluver. Sicil. Antiq. L. I. p. 149. WESS.

653. 89. Εὐθέτους ἄνδρας ἐλευθέρους] Defectus copulae, et quod postremam vocem omittant Clar. Reg. 2., eandem suspectam faciunt. Numerus ad opus selectorum, etsi paene nimius, non male conveniet. Si enim plethrum sexta sit stadii pars, ut volunt, et in plethrum ducenti sint adhibiti, omnes acquabunt xxxvi milia. Adde eos, qui lapides, calcem, ceteraque, struentibus ministrabant, ut opus esset expeditius, et augebitur haud parum. Id miror, in tanta multitudine sibi invicem non incommodasse: cui tamen rei remedium Dionysii et praefectorum videtur fuisse praesentia. WESS.

654. 4. Προσῆδρευσε] Rectius προσῆδρευε leges, ut paullo post habes ἀπεδείκνυε. STEPH.

654. 6. Καὶ τοῖς κακοπαθοῦσιν ἀεὶ προσλαμβάνων] *Adiutans*. Ita Strabo L. XI. p. 758. C. προσλαμβάνουσι δ' ἐσθ' ὅτε καὶ οἱ τὸν Βόσπορον ἔχοντες, ἐφόρμους χορηγοῦντες. Et p. 766. A. ταῖς μὲν τῆς γῆς ἀρεταῖς προσλαμβάνουσι (οἱ ποταμοί,) τὴν δὲ θάλατταν ἀλλοτριοῦσιν. WESS.

654. 15. Ὡστε τῷ τοίχῳ τῆς etc.] Fuisse cum Rhodomanno opinor τῷ τείχῳ, quod a vulgato sede sua eversum. Ἐως τῶν τοιχῶν editur in Polybio II. 64. pro τευχῶν. In Strabone

L. XII. p. 686. B. τοὺς τείχους πιστοὺς leges, cum τοίχους oporteret. Sed hoc occupavit doctissimus Vanni Critic. auctor p. 619., quem vide. WESS.

654. 21. Ἐξαιρέτος] Ξεναίρετος Lysiae Or. XVI. 1. et Diog. Laert. II. 55., qui peropportune hoc Archonte Xenophontem una cum Cyro in Persidem contra Artaxerxem properasse prodit. Forte verum id homini nomen. Vide Io. Meursium Lect. Attic. L. V. 27. WESS.

654. 24. Καὶ Ἰούριος Λούκουλλος] Pro Ἰούριος Λούκουλλος revocetur ex Fastis Γράϊος Κορνήλιος. RHOD. Suspicio antiquissimis in schedis haec vitiosa aut detrita fuisse, indeque ansam Coisl. et Reg. I. praebitam ea transiliendi. Haud proinde iniusta eorum opinio, qui mendo obsita atque ex Livio L. IV. 61. emendanda arbitrantur. Consule Pighium in Fastis ad ann. CCCXLIX. WESS.

655. 40. Σάμιον ὀνομαζόμενον] Mallem Σάμιον, quemadmodum apud Xenophontem principio L. II. Rer. Graec. Quae tamen hic atque illic Samio tribuuntur, ea Pythagorae navarcho adiudicantur in Xenophontis, si tamen is libri auctor, de Exp. Cyr. L. I. p. 199. WESS. „Male dubitat Wesseling.“ VALCKENAR. Ms. ad Xenoph. Anab.

655. 48. Πολυτελῶς ἐξηρησιμένως] Fallor aut ἐξηρησιμένως scripsit, quorsum nos ducit Cod. Reg. I. scriptura et perpetua scriptoris nostri consuetudo. Vitium peperit vocabulorum similitudo, quae quoque effecit, ut ἐξηρησιμένως et ἐξηρητιμένως permiscerentur in altera S. Paulli ad Timoth. c. III. 17. WESS.

655. 55. Ταμῶ] Vid. infra c. 35. Idem est, ac classis praefectus, quo de modo: nam et is domo Aegyptius, et apud Cyrum gratiosus, teste Xenophonte Ἀναβ. L. I. p. 199. De tono nominis Cl. Duker. in Thucydid. L. VIII. 87. WESS.

655. 67. Τὰς μὲν κατὰ λεπτὸν ἡγεμονίας] Notari iubet, haud scio an de menda quidpiam opinatus, in Addend. notar. Rhodomannus rarum dicendi genus. Puto τὰς κατὰ λεπτὸν ἡγεμονίας easdem esse ac praefecturas catervarum, sive partium exercitus exiguarum. Nam λεπτισμοῦς, cuius in acie contrahenda apud Aelianum Tactic. c. 49. usus est, huc non pertinet. Graecorum autem duces memorat et Xenoph. Exp. Cyr. L. I. p. 192. seq. WESS.

655. 78. Πρὸς ταῖς Κιλικίαις πύλαις] Describuntur a Xenophonte Exp. Cyr. L. I. p. 195. Herodiano L. III. 3. aliis. WESS.

655. 85. Εἰς τερέβιον] Quidam videntur hic legisse εἰς τι πεδίον, nostris diversa nacti exemplaria, aut certe coniectura usi. STEPH. Pro τερέβιον non dubito quin legendum sit πεδίον. RHOD. Notatur asterisco haec ultima vox τερέβιον iure profecto. Lege, si nobis credis, erudite lector, εἰς τὸ πεδίον. Post montium scilicet

angustias superatas, tandem in plana et campestria descendit: quae praecedunt et quae sequuntur, inducunt nos, ut ita legamus. PALM. Vix cohibeor, quin εἰς τι πεδίον rescribam: certa enim res. Audi Xenophontem Ἀναβ. L. I. p. 195. ἐντεῦθεν δὲ, superatis Pylis, κατέβαινον εἰς πεδίον μέγα καὶ εὐχόρτονον καὶ δένδρων παντοδαπῶν ἑμπλεῶν καὶ ἀμπέλων etc. Relinquo tamen vitiosum illud, in quod tanto consensu conspirarunt scriptae membranae. WESS.

655. 88. Σύνεσις δὲ ὁ τῆς Κιλικίας δευραστῆρων] Non iniusta suspicio est Stanleii, nomen illud paene proprium fuisse Ciliciae regulis. Habet certe Herodotus *Syennesim*, Ciliciae regem, Cyaxari aequalem, L. I. 74., aliam Darii Persarum regis aetate L. V. 118. et Xerxes tempore L. VII. 98. Aeschylus Pers. v. 326. ubi vir doctissimus. WESS.

656. 97. Ἀρτισίμενος] Malim ἀρτυσίμενος, ab ἀρτύομαι. STEPH. Corrighenti Stephano non obloquerer, si veterum ea librorum scriptura foret. Ἀρτίσασθαι Hesychio interprete est παρασκευάσασθαι, quae eadem vis huic est loco: paratus enim atque instructus in incertos fortunae casus Syennesis erat. Quid? Suidas in voc. Ἀρτιζόμενοι haec Diodori citat, usumque verbi adfirmat, quod L. Kusterum fugisse animadvertes. WESS.

656. 2. Συστρατεύσεσθαι] Rectius legetur συστρατεύσεται. STEPH. Συστρατεύσεσθαι] Ita profecto oportuit, nisi si μετέχειν in praecedentibus fuerit. Nam διότι et ὅτι infinitam orationem posse admittere, saepe monitum antea est. Habet aliud verborum series, auribus parum gratum: quis enim temere τῆ δ' εὐνοίᾳ πρὸς ἐκείνον — καταλιπὼν ἐκείνον, τῷ βασιλεῖ etc. artissime iunxisset? Sed haec optimis etiam excidunt. WESS.

656. 11. Πλείω τῶν τετραράκοντα μυριάδων] Vid. not. in L. I. 92. WESS.

656. 13. Ἐνεχέρισαν ἀναιρεῖν] Haec copiosius Xenoph. Ἀναβ. I. p. 196. WESS.

656. 26. Πεζοὺς ὑπταχοσίονος] Ἐπταχοσίονος ἔχων ὀπίστας de Chirisocho Xenophon L. I. Exp. Cyr. p. 199. Verum auctor eo in numero sibi constat, sicuti c. 19. indicio est. WESS.

656. 35. Ἐπὶ τὰς πύλας καλομένηας] Στροφῆς πύλας sive Ἀμαρῖδας intelligi ordo itineris innuit. De illis Cellar. Geogr. Vet. L. III. 6. p. 246. diligentissime. Itaque actum non agam. WESS.

657. 41. Τὸ μὲν τραχὺ καὶ χορμητὸς ἔχον etc.] Videntur et haec aspera, nec satis expedita. Puto ἔτερον ὄρος, (μία δ' ἐστὶ τῶν περὶ τοὺς τόπους ἐκείνους,) καὶ καλεῖται μὲν Λίβανος et reliq. fuisse primitus. Sic certe melius cohaerescunt omnia. Peccatur tamen haud leviter, cum Libano tribuitur, quod Amano convenit monti. Is παρὰ τὴν Φουλίην παρεχτείνει, ortus ab ipsis Pylis. Nam Libani initium haud longe Tripoli est, ab auctore satis accurate signatum L. XIX. 58., et Strabone L. XVI. p. 1095.

Errorem notaverat his verbis doctissimus Iac. Palmerius: *Mire se prodit ἀγεωγραφητὸν Diodorus, nec video quomodo possim eum tueri.* WESS. Quanto magis considero hanc montis descriptionem, eamque contendo cum illis, quae Diodorus L. XIX. 58. de Libano in literas retulit, in eam opinionem compellor, ut in vocem *ΛΙΒΑΝΟΣ* vitium penitus sese insinuasse suspicer. Potuit quidem certe ex *ΑΜΛΑΝΟΣ*, prave scripto vocabulo, a somnolento librario *ΛΙΒΑΝΟΣ* procedi. IDEM in Add.

657. 45. Ὑπάρχων] Aut ὑπάρχει legendum est, aut aliquid addendum. STEPH.

658. 51. Ἡμέρας εἴκοσι] Imo castris XIII, sive σταθμοῖς, Thapsacum Cyrus, a Pylius progressus, devenit. Sic Xenophon Ὑπάρχων. I. p. 199. et seq. Ipsam Thapsacum, πόλιν μεγάλην καὶ εὐδαίμονα, praeter celebrem Euphratis traiectionem nobilitabat antiquissima origo. Eadem enim ac תּבֶשֶׁת *Thipsach* I. Reg. V. 24., ut pulcre adverterunt viri praestantissimi Fr. Iunius et H. Grotius. A Macedonibus *Amphipolim*, mutato nomine, dictam fuisse ex Plinio L. V. 24. et Stephano cognitissimum. WESS.

658. 60. Κατ' ἄνδρα ἕκαστον δώσει etc.] Vid. Xenoph. Ὑπάρχων. I. p. 200. WESS.

658. 71. Ἐπεὶ δὲ ἔτι παρ' Ἰνδῶν etc.] Scriptum fuisse puto ab autore ἐπεὶ δὲ αἱ τε etc. STEPH. Malim cum Rhodomanno οἱ τε παρ' Ἰνδῶν. Forte et mox scripserat ἀγεστίαναι τοῖς τόποις, quemadmodum L. XIII. 22., ut ad Indos ceterosque parentes pertineat, longo terrarum spatio a Media dissitos. WESS.

658. 71. Μηδίας] Μηδείας Coisl. Clar. satis bene. Vid. Hutchins. in Xenoph. Ὑπάρχων. I. p. 71. WESS.

658. 76. Οὐκ ἐλάτους τετραράχοια μυριάδων] Eundem regii exercitus numerum edidit Ctesias in Plut. Artoxerx. p. 1017. D., longe vero ampliore Dinon et Xenophon, quem vide Exp. Cyr. L. I. p. 206. WESS.

658. 82. Τὸ μὲν πλάτος ποδῶν ἐξήχοια etc.] In fossae latitudine et altitudine haud levis est discordia. Xenophon l. c. τὸ μὲν εἶρος ὀργυαὶ πέντε, τὸ δὲ βάθος ὀργυαὶ τρεῖς. hoc erit, si cum Herone ὀργυιῶν aequaveris sex pedibus, latitudine xxx, altitudine xviii pedum. Plutarchus aliter Artoxerx. p. 1014. καὶ γὰρ τάφρον εἶρος ὀργυιῶν δέκα, καὶ βάθος ἴσον, ἐπὶ σταδίων — τετραχοσίους ἐνέβαλε, in latitudine quidem a Nostro nihil discrepans, in profunditate plurimum, fortasse etiam a vero: vix enim sibi quis persuaserit, tam alte eam fuisse depressam. Iam longitudinem considera, quam Xenophon in Parasangas xii extendit, sive stadia cccix, Plutarchus stad. cccc, non magno, et ex controversa parasangarum amplitudine nato, discrimine. Quorsum vero haec? ut teneam non omnia heic loci esse sana. Omissa mihi videtur fossae longitudo, eiusque indicium durare in μῆκος. Fuerit ergo τὸ δὲ βάθος ποδῶν δέκα καὶ τὸ μῆκος σταδίων τετρα-



χοσίων, aut simile quiddam. Palmerius, quod paene fueram oblitus, stat a me, haec animadvertens: *Si sana est haec lectio, notanda est: alibi enim non invenias talem vocis μῆζος significationem, nempe pro βιάδος. Hunc Diodori locum mallet notare, quam imitari. Sed credo deesse aliquid, et suspicor post vocem μῆζος scriptum fuisse numerum longitudinis eius fossae, et deinde τὸ δὲ βιάδος τοδῶν δέκα, profunditas autem pedum decem.* WESS.

658. 93. Ὡν ἀπάντων Κλέαρχος — ἀφῆγγετο] In hac aciei descriptione egregie suorum securitati, non saluti Cyri, Clearchus consuluit. Vide Plut. Artoxerx. p. 1015. B. WESS.

658. 98. Ἀριδαῖος] In Xenophonte semper Ἀριδαῖος, quod et Plut. Artox. p. 1016. B. agnoscit. WESS.

658. 5. Τὸν ἀριθμὸν οὐκ ὀλίγα] Centum erant et quinquaginta, teste Xenophonte L. I. p. 206. WESS.

658. 18. Ὑπερπετεῖς ἐδόκει ποιήσεν] Suidas in Ὑπερπετεῖς haec exscripsit, sed ita, ut verba et sententiam Diodori mutilaverit, quod L. Kusteri diligentiam haud fugit. Ὑπερπετεῖς interpretatur ἐπὲρ λίαν σοφισμένους, inepte, si tamen ita scripserit. Sunt ὑπερπετεῖς, qui supra nos transvolant. De lacu Averno Strabo L. V. p. 374. B. προσεμύθενον δ' οἱ ἐπιχώριοι καὶ τοὺς ὄρουαι, τοὺς ΥΠΕΡΠΕΤΕΙΣ γενομένους, καταπίπτειν εἰς τὸ ἔδωρον. Polybius de telis, quae catapultis emissa, supra Romanos avolabant, ὅτε δὲ ταῦθ' ΥΠΕΡΠΕΤΗ γήγροτο L. VIII. 6. Paulo aliter montis vertex, ultra aërem nostrum in altum evectus, ὑπερπετῆς ἄκρα τῆς τῶν ἀνέμων προῆς, inf. L. XVII. 7., et ὑπερπετεῖς ἀνεμοί, qui sublimibus e montibus spirant in Strabon. L. XV. p. 1063. C. Quae quidem loca copiosissimum alioqui Graeci sermonis Thesaurum, cui vocabulum id defuit, locupletare poterunt. WESS.

658. 27. Καὶ ταῖς ἐνχειρίαις] Lego ἐνχειρίαις, ut pagina seq. ταῖς τόλμαις καὶ ταῖς ἐνχειρίαις νεκόμενοι, et itidem alibi non semel. STEPH.

658. 29. Καὶ τὰ π. τῶν ταγμ. ἔχοντες ψιλικά] Sic scripsit. Τὰ ψιλικά τῶν ταγματίων recurrunt L. XV. 32. XVII. 88. Intelliguntur ἀκοντισταί, τοξόται et σφενδονῆται, quemadmodum ipse docet L. XIX. 92. Modo ὄπλα μικρὰ ea sunt, quibus corpus tegebant, scuta inprimis. Infra L. XVII. 18. Alexander τὸ μὲν ἴδιον ὄπλον ἀνέθηκε τῇ θεῷ, τῶν δ' ἐν τῷ νεῷ ζευμένων ὄπλων τὸ κράτιστον ἀναλαβὼν etc. ubi scutum esse, ex c. 21. adparebit clarissime. Euripides Hecub. v. 14. — οὐτε γὰρ ἔχειν ὄπλα Οὐτ' ἔγχος οἷός τ' ἴγ. In quae haec Critici: ὄπλα, τὰ γυλακτίρια, οἷον θώραξ, κράνος, neglecto clypeo, quem recte addidissent. Arma Latinorum consuetudine loco simili poni, monuerunt viri eruditi Cl. Salmasius ad Vopisci Aurel. c. 7. Duker. in Thucyd. VII. 45. WESS.

659. 43. Τῆς περὶ τὸν Ἐτεοκλέα ] Vid. L. IV. 67. WESS.

659. 45. Ἐσφηλεν αὐτὸν ἐπὶ τὴν γῆν ] Non dissimile hoc Longi Pastor. L. IV. p. 155. ὁ δὲ μεθύοντα ἄνθρωπον καὶ ἐστῶτα μόλις παρῳσάμενος ἔσφηλεν εἰς τὴν γῆν. Pugnam fratrum describunt Xenophon Exp. Cyr. L. I. p. 209. et ex Dinone et Ctesia in Artox. p. 1016. Plutarchus. WESS.

659. 50. Ἀναμαχόμενος τὸ — ἐλάττωμα ] Obvium est de iterato praelio, quo cladem acceptam resarciebant. Polyb. L. I. 55. σπουδάζων ἀναμαχέσασθαι τὴν γεγενημένην περιπέτειαν. Nicol. Damascenus Excerpt. Vales. p. 482. Pompeius διειροεῖτο — τὴν ἐκείνου ἦτταν ἀναμαχέσασθαι. Libanius Basil. p. 133. D. ἀναμαχεῖσθαι δὲ τὴν πληγὴν, οὐδὲ ὄναρ ἐπιζῶσιν. Quibus gemina e Nostro si iungere velis, copia L. XVI. 19. XVIII. 72. XIX. 93. dabitur. WESS.

659. 58. Ὑπὸ τινος τῶν τυχόντων Περσῶν πληγεῖς ] Sequi Ctesiae opinionem videtur: nam alii auctorem necis aut Artaxerxem ipsum, aut Carem quendam edebant, de quibus Plut. Artox. p. 1016. WESS.

659. 68. Πρὸς τινὰ τῶν ἰδίων σταθμῶν ] Castra sunt, in quibus non multo ante praelium tetenderat. Vid. Xenoph. Ἀναβ. I. p. 212. WESS.

659. 87. Πλείους τῶν μυρίων πεντακισχιλίων ] Ctesias caesos ad IX millia regi victori relatos, sibi vero non minus XX millia visos refert in Plut. Artox. p. 1017.; quo numero si utrinque interemtus fuerit complexus, a Nostri opinione non longe declinaverit. WESS.

660. 97. Ἀνηρημένου Κύρου ] Interpone γάρ. RHOD.

660. 5. Ὄνομα μὲν Φαλίνας ] Hoc praefero ob Xenophontem, eodem modo, etsi et eius Codd. in scriptura variant, vocitantem, L. II. Exp. Cyr. p. 215. Flagitiosius in Plut. Artox. p. 1017. Φάυλλος Ζακύνθιος editur: melius scriptae schedae μετὰ Φαλλήνου τοῦ Ζακυνθίου, e quo Φαλίνον, sive potius Φαλίνον, ut ego quidem malim, instaurarunt viri clarissimi Bryannus et M. Solanus. WESS.

660. 9. Καὶ πρὸς τὰς θύρας αὐτοῦ βαδίσαντες ] Egregie Is. Casaubonus in Diogen. Laert. II. 69. Frequens est de illis, quibus regis gratia atque ope opus erat. Callieratidas apud Xenophont. Rer. Graec. L. I. p. 346. ἐγὼ δὲ ἐπὶ τὰς ἐκείνου θύρας φοιτᾶν οὐκ ἠδυνάμην ἐμὰντὸν πείσαι. Et Apollonius ad Domitianum οὔτε ἐπὶ θύρας βασιλείου ἐφοίτησα apud Philostrat. L. VIII. 7. p. 344. Vit. Apollon. WESS.

660. 16. Καὶ γὰρ τότε Λεωνίδης εἶπεν ] Superius L. XI. 5. narravit. WESS.

660. 21. Παραπλησίως δὲ καὶ τοῦ Κλειόρχου ] Alios responsos suppeditat Xenophon Cyr. Exp. L. II. 215., in plerisque a Nostro dissentiens. WESS.

660. 26. Χρησίμην ἡμῶν ἔσεσθαι καὶ ἀρετὴν] Τὴν ἀρετὴν, reiecto καὶ, et mox ἕως ἂν περὶ ἡμῶν etc. in not. Auctario corrigit Rhodomannus; cui equidem de copula assentio, sed ἕς ἂν non muto. Habet enim nonnunquam eandem vim, ac *quamdiu*, docentibus Devario et H. Stephano Thes. T. IV. p. 817. WESS.

660. 31. Σώφιλον τὸν ἐφ' ἡγεμονίας τεταγμένον] Hunc inter praefectos, qui cum Cyro expeditionem sint ingressi, nusquam invenio. Sophraenetus Stymphalius a Xenophonte saepe memoratur, nec eundem tamen esse dixero. WESS.

661. 52. Περὶ τῆς ἐπὶ θάλατταν καταβάσεως] Regiones, quae in mare vergunt, *inferiores*, τὰς κάτω, quae longissime a mari in mediterranea porriguntur, *superiores*, τὰς ἄνω, inde ἀνάβασιν de itinere, quod in interiora provinciae, κατὰβασιν cum versus mare properatur, adhiberi tralaticium est. Vid. c. 22., Arrian. Exp. Alex. L. I. 12. et quae viri doctissimi Is. Vossius ad Melam I. 3. C. A. Dukerus in Thuecydid. L. I. 120. et Hutchinson ad L. I. Exp. Cyr. princ. Xenophontis observaverunt. WESS.

661. 55. Ἦνπερ ἦλθον] Nihil hinc demuto. Xenoph. Ἰσραβ. II. p. 218. πότερον ἄπιμεν, ἢνπερ ἦλθομεν, ἢ ἄλλην τιὰ ἐννενοητέναι δοκεῖς ὁδὸν χρεῖται; posset alioqui levi opera ex vitiosiore Codd. scriptura ἦνπερ ἦλθον formari. WESS.

661. 70. Ἐν δὲ ταύταις συνεφώνησεν etc.] Conf. Xenophont. L. II. p. 221. WESS.

661. 76. Ἐπὶ τὰς ὁδοιπορίας ἐγίνοντο] Lego περὶ τὰς ὁδοιπορίας. Sic saepe dicit γίνεσθαι περὶ τι. ut p. 385. περὶ δὲ τὴν τῶν τοιγῶν κατασκευὴν ἐγίνοντο. et p. 423. περὶ τὸν τῶν δυνάμεων ἀθροισμὸν καὶ τὴν ἄλλην ἐγίνετο παρασκευὴν. STEPH. Accedo viro doctissimo. Scriptori enim nostro nihil hoc genere familiarius. Vid. ad L. XI. 75. WESS.

661. 81. Ἐδωκε τὴν ἑαυτοῦ θυγατέρα] Id alibi vix reperias. Scio a viro consultissimo huc referri ex Xenophonte Ἰσραβ. L. II. p. 222. ἐν δὲ τοῦτω Τισσαφέρνης ἦκε, ἔχων τὴν ἑαυτοῦ δύναμιν, ὡς εἰς οἶκον ἀπίων, καὶ Ὀρόντας τὴν ἑαυτοῦ δύναμιν. ἦγε δὲ καὶ τὴν θυγατέρα τοῦ βασιλέως ἐπὶ γάμω. verba enim ἦγε δὲ καὶ etc. ad Tissaphernem pertinere, non Orontam: hunc cum videri, quem Xenophon semel iterumque coniugis regiae fratrem adpellarit. Mihi secus, pace eius dictum sit, videtur. Verba Xenophontis Orontam, cui artissime cohaerent, spectant. Tum quod Noster L. XV. 2. hominem hunc κηδεστὴν τοῦ βασιλέως nuncupat: tum quia Xenophon id clarissime docet L. III. p. 243. Τισσαφέρνης ἐπεφάνη, inquiens, οὗς τε αὐτὸς ἦλθεν ἐπιπέως ἔχων, καὶ τὴν Ὀρόντου δύναμιν, τοῦ τὴν βασιλέως θυγατέρα ἔχοντος. Bene ergo Rhodomannus κηδεστὴν τοῦ βασιλέως generum regis vertit. Vide tamen Celeb. Barbeyrac. Histor. Foed. P. I. p. 267. WESS.

661. 92. Ἄλλοις γε ἡγεμόσιν ἐλθεῖν ] Ingentis hiatus indicium heic est in Clarom.; cuius quidem defectum versione sua utcumque explevit Rhodomannus, sed plura deesse videntur: nempe reconciliata Ariaei sive Aridaei et Tissaphernis gratia, Graecorum progressus positaeque illis insidiae, Tissaphernis et Clearchi congressus, et alia, quae ex Xenophonte L. II. Exp. Cyr. p. 222. — 226. peti debent. WESS.

662. 95. Ὡς εἰκόσ ] Quam vim ὡς εἰκόσ habeat, non temere quisquam adfirmarit. Cur enim par erat, ut una cum Clearcho et ceteris fere ducibus omnibus ductores ordinum ad Tissaphernem irent? Scribe ὡς εἴκοσι et bene omnia se habebunt. Ad viginti enim cohortium praefecti pariter cum ducibus et Clearcho ad Tissaphernem sese contulerunt. Πέντε μὲν στρατηγούς, εἴκοσι δὲ λοχαγούς Xenophon ait L. II. Exp. Cyr. p. 227., omne de hac correctione dubium eximens, uti et Polyaeu. VII. 18. WESS.

662. 4. Ἐξ ὧν εἰς φρυγῶν etc.] Nicarchus Arcas, gravi vulnere adfectus, τετραμῆνος εἰς τὴν γαστέρα, καὶ τὰ ἔντερα ἐν ταῖς χερσὶν ἔχων apud Xenophontem dicto loco. WESS.

662. 11. Χειρισόφω τῷ Λακεδαιμονίῳ ] Principatum totius Graeciae hac tempestate Spartani obtinebant: Chrisophus domo Lacedaemenius erat; hinc ceteris, ut exercitum duceret, ex Xenophontis sententia praelatus est. Χειρισόφος μὲν ἦγοίτο, ἐπειδὴ καὶ Λακεδαιμόνιος ἐστὶ L. III. Exp. Cyr. p. 239. WESS.

662. 16. Μένωνα δὲ μόνον ἀγῆκε ] Sed in breve tempus. Luit enim dein homo impurus gravissimas poenas, diu atrocissime excarnificatus, si Xenoph. extremo L. II. Ἀναβ. non fallit. WESS.

662. 28. Τὰ τῶν Καρδούχων ὕρη ] Καρδούχια ὕρη Xenophonti, qui quidem montes a Gordyaeis, in quibus arca Noachica conquivit, non discrepant. Nam quibus olim Καρδούχων nomen, illi deinceps Γορδυαῖοι. Plinius L. VI. 15. *Adiabenis connectuntur Carduchi quondam dicti, non Cordueni, prae-fluente Tigri.* Aliter Strabo, si tamen ea scripserit, quae L. XVI. p. 1083. ita leguntur: πρὸς δὲ τῷ Τήρει τὰ τῶν Παρθναίων χωρία, οὓς οἱ πάλαι Καρδούχους ἔλεγον qua de re vehementer dubito. Nam quis Parthos et Καρδούχους eodem dixit? a quo alio Parthi Tigri fluvio sunt ita admoti, ut hoc Strabonis loco? Auctor ipse Tigrim Gordyaeam radere, sive ut Plinius, *lustrare montes Gordyaeorum*, paullo ante prodiderat. Refinge ergo τὰ τῶν Γορδυαίων χωρία, ut secum et aliis cum Geographis consentiat. Menda nata videtur, quod proximo versu τοῦ τῶν Παρθναίων στρατηγῶ facta mentio esset. WESS.

662. 33. Καὶ τοξέμασιν ὑπερμεγέθει χρῆσθαι ] Xenophon, quem Diodorus aemulatur, L. IV. p. 253. de Carduchis: ἄριστοι δὲ τόξοι ἦσαν. εἶχον δὲ τόξα ἐγγὺς τριπύχη, τὰ δὲ τοξέματα πλέον ἢ διπύχη. εἶλκον δὲ τὰς νερούς, ὅποτε τοξέοιεν, πρὸς τὸ κάτω τοῦ τόξου τῷ ἀριστερῷ ποδὶ προσβαίνοντες. τα

δὲ τοξεύματα ἐχόρη διὰ τῶν ἀσπίδων καὶ διὰ τῶν θωράκων.  
quae, quia Nostrum illustrare possunt, exseribere placuit. WESS.

663. 41. *Τούτοις σαρνίοις χρῶμι.*] Videtur deesse ὡς ante  
σαρνίοις. STEPH. et RHOD. Ego subintelligi posse puto, ut in his  
Xenophontis, ἐχρῶντο δὲ αὐτοῖς οἱ Ἕλληνες ἐπιλαβόμενοι ἀνον-  
τίοις ἐναγκλιῶντες. ubi Hutchinsonius, non oblitus horum Dio-  
dori, de ἐναγκλιῶν, ἐναγκλιεῖν, pro quo ἐναγκυλοῦν rariore forma  
Aelian. Hist. Animal. L. V. 3. Vide etiam H. Valesium ad Evagrii Ec-  
cl. Hist. L. III. 25. WESS. Ὡς σαρνίοις. Ursinus legebat. IDEM in Add.

663. 43. *Ἐπιπόρωσ, παρεγενήθησαν* etc.] Non multum  
refert, sive ante ἐπιπόρωσ seu post illud, distinguas. Sententia  
fere eadem manet. Centrites fluvius Armeniam a Carduchorum  
agro separabat, Xenophonte auctore. WESS.

663. 60. *Τοῦ δὲ χειμῶνος ἐπίτασιν λαμβάνοντος*] Arme-  
niae aer frigidissimus est: regio perpetuis paene nivibus obruta  
nec ver, neque autumnum novit, planeque δυσχέμερος apud Greg-  
gor. Nysseum Or. in XL Martyr. p. 107. Cuius quidem hiemis  
inconmoda nivisque, quae ea in regione perpepsi fuerunt Graeci,  
eleganti verborum ambitu Xenophon et Noster exsequuntur; simi-  
lem vero calamitatem, quacum in Armeniam properans conflictata  
perhibetur Ogia, Abgari soror, Moses Chorenensis Histor. Ar-  
men. L. II. 33. Refer et huc egregiam *τησβάλων* horum locorum  
descriptionem ex Strabonis L. XI. p. 800. B. WESS.

663. 71. *Διὰ τὸν ἀπὸ τῆς αἰθρίας πάγων*] Ex Reg. 2.  
leviter mutavi, ut congrueret his de Gallia, κατὰ δὲ τὰς αἰθρίας  
χρυστάλλω καὶ πάγοις ἐξαισίοις πληθύνει Lib. V. 25. Sed exiguum  
discrimen, quodque ἐν τῇ αἰθρᾷ Pausaniae L. VIII. p. 883., id  
apud Herodotum ἐν τῇ αἰθρῇ est. WESS.

663. 82. *Ἐνιοὶ δὲ καὶ τοὺς ὄφθαλμοὺς ἐτυγλώθησαν*]   
Vide sis Xenophontem Exp. Cyr. L. IV. p. 259. WESS.

663. 88. *Ταῖς οἰκίαις ἐγκαταβαίνουσι*] Non omnia hic sana.  
Rhodomannus inducto postremo vocabulo in not. Addend. legebat  
ἐν δὲ ταῖς οἰκίαις εἶχον τέ τε βοσκ. bene quidem ad sententiam  
loci, nimie tamen. Mihi participium ἐγκαταβαίνουσι, etsi supe-  
rioribus arte neci posse videatur, quia optimis Codd. displicet,  
haud placet: quo sublato si legeris ἐν δὲ ταῖς οἰκίαις τέ τε βοσκή-  
ματα etc., poterunt ea commode pendere ex εἶχον, quod proxime  
praecessit. Xenophon: αἱ δὲ εἴσοδοι τοῖς μὲν ὑποζυγίοις ὄρουνται,  
οἱ δὲ ἄνθρωποι κατὰ κλιμάκων κατέβαινον. ἐν δὲ ταῖς οἰκίαις  
ῆσαν αἴγες, δῖες et reliq., quae L. IV. p. 260. legi possunt. WESS.

664. 93. *Εἰς τὸν Φάσιν ποταμὸν*] Rhodomannus ὡς τὸν  
citra gravem caussam: si quid innovandum, πρὸς τὸν ex Reg. 1.  
adscisci poterit. Verum ea res levis et arbitraria. Maioris est mo-  
menti Phasin hunc nosse, quem Xenoph. εὐρος ὡς πλεθραϊῶν  
fuisse refert, quemque alium viri doctissimi Deslile et Hutchin-  
son opinantur ac nobilem Colchidis fluvium, in Euxinum sese Pon-

tum demergentem. Quorum opinio veri quadam specie non caret. Nam et longius Colchorum finibus aberant Graeci, cum ad id flumen pervenirent: et tametsi ex Armenia sive *Armenio* monte, ut Dionysius Perieg. v. 694., Colchidis Phasis descenderet, necdum tamen prope ipsos fontes ea amplitudine ruebat. Substituunt *Araxem*, qui Ἐραξ ποταμὸς, ἦτοι ὁ Φάσις Imp. Constantino Porphyrogenito de Administr. Imp. c. 45., sicuti illi adseverant. Ego vero addubito. *Φασιανή* enim, qua de Imperator, a Phaside Colchidis videtur appellata: et ratio dari potest opportuna, cur Phasis sit Ἐραξ dictus, nulla vero, cur Araxes Phasidis nomen abstulerit. *Erras* sive *Aras* Persarum sermone *fluvium* indicat: quo titulo cum quodvis maius flumen designarent, hinc tot diversis Asiae in locis amnes Araxae, ut belle docuit Clarissimus H. Reilandus Dissert. de Paradiso c. 17. Quaerendum itaque huic Phasidi aliud patrocinium, quod donec reperiatur, ampliabo. WESS.

664. 94. Τὴν Χάων καὶ Φασιανῶν] Prioris populi nomen vitiosum est. Xenophonti Τάοχοι sunt et dicuntur. Alii Τάοος vocabant, Sophraeneto apud Stephan. in voc. Τάοχοι teste. Scribendum ergo τὴν Τάοχων, aut certe, quod a vulgato recedit propius, τὴν Τάων cum clarissimo Hutchinsonio ad Ἄναβ. L. IV. p. 321. ed. Oxon. Videor etiam posse suspicari, Diodorum in illis, ubi a Xenophonte dissentit, Sophraenetum istum ducem sibi legisse. Scripserat Κύρον Ἀνάβασιν, diserte a Stephano in voc. Καρδοῦχοι citatam, fueratque expeditionis pars non postrema. Neque enim diversus est a Sophraeneto Stymphalio, de quo saepe Xenophon: quod quidem Thomae de Pinedo diligentiam fugisse mirarer, nisi plura alia eum praeteriissent. Porro τὴν Φασιανῶν χώρον Nostri in animo Eustathius habuit, cum commentaretur in Dionysii v. 689. WESS.

664. 96. Τοῦτους μὲν ἐν τῇ μάχῃ νικήσαντες] Eradit praepositionem Rhodomannus, quae ut frequentissime abest, ita reperire poterit, cuius auxilio defendatur, praesertim cum in ea retinenda Codd. conspirent. Abundat enim haud infrequenter utroque in sermone. Exempla collegerunt Burdelotius in Heliod. p. 26. et N. Heinsius ad Valer. Flacc. L. V. 349. WESS.

664. 1. Τὴν Χαλκιδέων καὶ χώρον] Apud Xenoph. Χαλύβων, quod aut recipiendum, aut Χαλδαίων. Distinguit, fateor, Xenophon extremo L. VII. Ἄναβ. Χάλυβας et Χαλδαίους, vicinos tamen ait. Strabo vero L. XII. p. 826. οἱ δὲ τῶν Χαλδαῖοι, Χάλυβες τὸ παλαιὸν ὀνομάζοντο. Adde Steph. in Χαλδαῖοι et Ἀλύβη, ubi Berkelius, etsi illi quodammodo faveat, quod tamen non animadverterat, Eustath. in Dionys. v. 767., modum excedit. WESS.

664. 2. Πρὸς τὸν Ἀρπαγον ὄνομ. ποταμὸν] Ἀρπασος in Xenophonte Exp. Cyr. L. IV. p. 265. Alterutrum vitiosum est: imo utrumque, si verum pervidit Theoph. Sig. Bayerus. Censet

enim in Memor. Scyth. T. III. Comment. Acad. Petropolit. p. 373, idem hoc esse flumen, quod Plinius *Absarum*, Ptolemaeus *Apsorum*, Arrianus *Apsarum* vocitarunt. Ad id a Plinio Macrones adduxerunt accolas, et plus fidei mereri Arrianum, Cappadociae praesidem, Alanorumque victorem, quam Xenophontis libros. Sed, me quidem iudice, satis confidenter. Sint enim Macrones Apsaro vicini, quid id ad Xenophontis et Diodori flumen? Necdum enim Graeci, cum Harpasum traicerent, ad Macrones erant delati, a quibus plurium dierum itinere aberant, sicuti quae statim in Xenophonte atque hic succedunt, declarant. Malim proinde de flumine, eiusque vera scriptura nihil decernere, tantoque minus, quod intima illius tractus, quem Graeci pererrarunt, densioribus tenebris sint obscurata. WESS.

664. 3. *Αὐτὰ τὰ Σζουτίνων πορευόμενοι*] Sic bene Reg. 2., modo *χορμία* subintelligas. Alioqui *διὰ τὴν Σζουτ.* refingendum erat, quod Th. de Pinedo in opinionem venit ad Steph. voc. *Σζουθινοί*, sic enim is gentem hanc nuncupat, *Xenophon Σζουθινοῦς*. WESS.

664. 7. *Πόλιν μεγάλην Γυμνασίαν*] *Xenophon πρὸς πόλιν μεγάλην καὶ εὐδαίμονα οἰκουμένην. ἐκαλεῖτο δὲ ΓΥΜΝΙΑΣ*. WESS.

664. 11. *Ἐπὶ τὸ Χήριον ὄρος*] *Ὄνομα δ' ἦν τῷ ὄρει Θήρης*, sic nunc in Xenoph., aliis *Ἡζης* legentibus, quorum quid praestet veriusque sit, non temere affirmavero. Quanta vero cum laetitia hinc mare prospectaverint, arbitrato facile est. Libanius eam ob oculos habuit Or. X. p. 280. A. *τοῖς μὲν δὴ μισοῖς στρατιώταις θάλασσα φανῆσα τὸ πρῶτον, μετὸ τὸ πλεῖθος τῶν ὄρων τε καὶ πόνων, χροαγίην τε ἐκίνησε καὶ δάκρυα σὺν χαρῇ καὶ περιέβαλλον ἀλλήλους οἱ κοινωνοὶ τῶν κινδύνων ἐκείνων*. Sic lege. Nam *καίλαρο ἔβαλλον* absurdum est, et errantem Morellium in fraudem induit, a qua prudenter sibi cavit in recentata orationis eius editione doctissimus Olearius. Vellem quoque *Κηρείους στρατιώτας* posthabuisset *τοῖς μισοῖς*, et persanatus fuisset locus. *Κηρεῖοι* enim milites sunt, quos Cyrus e barbaris sibi legerat, certe apud Xenophontem. *Μίσοι* rotundiore numero Graeci, qui post tot casus et rerum discrimina mare tandem adspiciunt. Ceterum quinto, postquam Gymnasia sive Gymnade discesserant, die ad montem cum perveniunt in Xenophonte. WESS.

664. 25. *Εἰς τὴν τῶν Μαζρόνων*] Idem qui Sanni deinceps. *Σάννοι, οὓς πρότερον ἐκάλουν Μάκρωνας* Strabo L. XII. p. 825. Postea *Τζάννοι* sive *Τζάνροι*, ut ex Agathia princ. L. V. colligas, atque imprimis ex Procopio L. I. Bel. Pers. c. 15., ubi *τὸ Τζανικὸν ἔθνος, οὐδενὸς κατήχοι, ἤζητο, Σάνροι ἐν τοῖς ἄνω χερσὶν καλούμενοι*. Adde L. IV. Bel. Goth. c. 1., et lege *Σάννος*, non *Σοανούς*. Quod vero Critici veteres ad Apollon. Rhod. I. 1023. et II. 396. Macrones hos ex Euboea

insula derivant, quae olim *Μάκρης* dicebatur, id lepidum Grammaticorum commentum esse opinor. Mihi Scylacis et Melae *Macrocephali* eiusdem videntur originis. WESS.

665. 38. *Παράλογον περιέλιπτον συμπτόματι*] Conf. Xenophon. extremo L. IV. Intelligitur genus illud mellis, quod in Ponto, gente *Sannorum*, ab *insania*, quam *gignit*, *maenomenon* vocant, sicuti Plinius N. H. Lib. XXI. 13. scribit. Cuius *μαυρομένου* μέλιτος praeter Dioscoridem L. II. 103. meminerunt Strabo L. XII. p. 826. A. et Aelian. de Animal. L. V. 42. et Procop. Bell. Goth. L. IV. 2. Vide quae Iungermannus adscripsit Longi Pastor. L. I. p. 201. WESS.

665. 52. *Κεμένην δὲ ἐν τῇ Κόλχων χώρα*] His utitur Eustathius in Dionys. Perieg. v. 772., sed πρὸς τῇ τῶν Κόλχων legens, motus fortasse eadem ratione, qua Procopius L. IV. Bell. Goth. c. 2. Trapezuntem Colchis vicinam negabat, sed cui satis est factum ad Itiner. Antonini p. 216. Cum Diodoro sentit Xenophon. WESS.

665. 55. *Ἡρακλεῖ καὶ Αἰὲ Σωτηρίῳ*] *Τῷ Αἰὲ τῷ σωτήρι καὶ Ἡρακλεῖ ἡγεμόνευα*, inquit Xenophon, sive victimam ob praestitum in itinere, quo et duces exstiterant, auxilium. Herculem ἡγεμόνα dabit idem L. VI. p. 294. WESS.

665. 60. *Ἀραξιζίῳ τῷ Βυζαντίων ναύαρχῳ*] Classis Spartanæ praefectus erat, tum temporis Byzantii agens, quod Xenophon distincte significat L. VII. p. 311. Mox τῶν ἐπιζώπων δύο πλοῖα duaе erant naves, quarum una quinquaginta, altera triginta remis impellebatur, uti ex eodem constat. WESS.

665. 67. *Ἔς Κερασσοῦντα*] Vide Epist. Clarissimi Tournefort, ex itinere Asiatico scriptam, XVII. p. 98. WESS.

666. 73. *Ἐπιτόρους ἔχοντες ξυλίνους πύργους*] Interpretēs ἐπιτόρους correxit, *turres*, quae a septenis promoveri poterant, vertens. Factum nollem. *Πύργοι ἐπιτόρογοι* sive ἐπιτόρογοι turres sunt ad septimam usque contignationem eductae, ut οὐκίαι τετράρογοι καὶ πεντάρογοι L. I. 45. et πύργοι ἑξήρογοι infra hoc libro c. 51. Nimirum in turribus ligneis habitabant Mossynoeci, indidem et nomen sortiti. *Διὸ καὶ Μοσσυνοῖκος ἐνάλων* οἱ παλαιοὶ, τῶν πύργων ΜΟΣΣΥΝΩΝ λεγομένων, Strabo L. XII. p. 825. B. et ante eum Apollon. II. 381.

*Δουραπέως πύργοισιν ἐν οὐκίαι τετραγύαντες  
Κάλλινα, καὶ πύργους εὐπηγίας, οὓς καλέουσι  
ΜΟΣΣΥΝΑΣ.* —

Adde v. 1018. WESS.

666. 78. *Κακέθεν διαδοῦναι τοῖς ὄχλοις τὰ προστάγματα*] De Mossynis turres ligneas subeuntibus Mela I. 19. *Reges suffragio deligunt, vinculisque et artissima custodia tenent: atque ubi culpam prave quid imperando meruere, inedia totius diei*



*afficiunt.* Qua in re abit ab Apollonio II. 1028., inedia regem statim ob ius male datum enecari tradente:

Αὐτὸς ἐν ὑψίστῳ βασιλεὺς μόσσην θαύσων

Ἰθαίης πολέεσσι δίκας λαοῖσι δικάζει

Στέλιος ἦν γάρ ποινὴν τὴν θεμιστεύων ἀλίτηται,

Λιμῶ μιν κεῖν ἤμιαρ ἐνικλείσαντες ἔχουσιν.

Scio Is. Vossium studiose Melae suo contra Pintianum adfuisse, sed Nicolaus Damascenus verba Apollonii in aliam sententiam interpretatur. Ἐὰν δέ τις δόξῃ κακῶς ποτε βεβουλεῦσθαι, τῷ λιμῶ αὐτὸν ἀποκτείνουσι in Excerpt. Valesii p. 517. WESS.

666. 79. Βαρβαρότατον δ' ἔμασαν οἱ στρατιῶται etc.] Xenophon eadem omnia L. V. p. 277., cui adde Apollon. Rhod. II. 1020. WESS.

666. 86. Ἦν ἐκάλουν Τιβαρηνήν.] Sic regionis nomen ex scriptorum librorum vestigiis refinxi. Xenophon Τιβαρηνῶν χώραν, Apollonius Rh. II. 1012. Τιβαρηνίδα γαῖαν adpellat. WESS.

666. 88. Πεντήκονθ' ἡμέρας διέτριψαν] Xenophon τετραράκοντα καὶ πέντε, qui et urbem Κοτύωρα vocat Ἀναβ. L. V. p. 278. Ceteri plerumque τὸ Κύτωρον aut τὸν Κύτωρον, ut Strabo L. XII. p. 829. Apollon. Rhod. II. 9-14. atque alii. Distinguit, fateor, Κοτύωρα et Κύτωρον Stephanus, sed iniuria, ut viri docti dudum monuerunt. WESS.

666. 95. Μέγιστον εἶχεν ἀξίωμα τῶν περὶ τοὺς τόπους] Eastathius his usus est ad Dionysii v. 772. Fuisse Sinopen Mithridatis regiam et propterea a L. Lucullo expugnatam notum ex Strabone L. XII. p. 821. et Plut. in Lucullo p. 506. satis est. WESS.

666. 1. Μεγαρέων ὑποικον] Megarensium coloniam fuisse consentiunt veteres plerique. S. abo tamen L. XII. p. 816. Μελισίων κλίσμα perhibet, notatus et a Casaubono et Palmerio. Non longe ab urbe erat Ἀχαιοῦσι Χερσόνησος, sicuti Xenophonti dicitur L. VI. p. 292. et Schol. Apollon. II. 730., ubi Herculem ab inferis Cerberum extraxisse etiam Dionysius canit Perieg. v. 790., et numi ΗΡΑΚΛΕΙΑΣ ΕΝ ΠΟΝΤῳ apud Vaillantium et Spanhemium ostendunt. Porro et haec Diodori exseripsit Eustathius ad Dionysii v. 791. WESS.

666. 6. Μόλις] Μόλις Reg. 1., quae passim permutari docet Hemsterhus. ad Luciani lud. Vocal. c. 4. WESS.

666. 8. Τρισχίλιοι ὀκτακόσιοι] In his numeris menda est. Rhodomannus adseripserat, in Xenophonte V. Ἀναβ. p. 273. ὀκτακισχίλιους καὶ ἑξακόσιους numerari, sive octo millia et sexcentos; quod verum, tametsi numerus is initus ibi dicaur Cerasunte: eundem enim facile consummabis ex illis, quae L. VI. p. 294. prolata leguntur. Quid? auctor ipse c. 37. περιακισχίλιους eorum refert ducem sibi Xenophontem legisse. Constat ergo de mendo. Qui vero numeri substitui debeant, an Xenophontis, an

alli, meliores docebunt libri. Nam ἑπτακισχίλιοι, quos in not. Auctario subiecit Rhodomannus, incertae coniecturae debentur. WESS.

666. 11. Θραζῶν πόλιν] Malletm χόραν scripsisset: nam editum nimis quidem vagum est. Quod autem uno anno absolvitur Graecorum haec expeditio, id pro more auctoris factum, ne quae inter sese apta sunt, dispescerentur. Alioqui unius ea anni et trium fuit mensium, docente extremo L. VII. Xenophonte. WESS.

667. 18. Θρασύβουλος ὁ Τρυαιεύς] Meursius emendat Στειριεύς, optime. Sed fuit et alter Thrasybulus Κολυττειεύς, quem etiam fuisse ex numero eorum, qui Phylam occupaverunt, ait Demosthenes Orat. contra Timocratem. Forte ille Alcibiadis inimicus, Thrasonis filius, de quo Plut. in Alcibiade. PALM. Certissimam Meursii de Pop. Attic. in ΣΤΕΙΡΙΑ correctionem occupavit ad Nepotis Alcibiad. c. 7. Schottus. In Xenophonte Rer. Graec. L. IV. p. 422. reperies Θρασύβουλον τὸν Στυρέα male; nulla enim in Attica Στύρα, docente ad Strabon. L. X. p. 685. viro magno. Rectius Aeschin. in Ctesiphont. p. 82. Θρασύβουλον τὸν Στειριέα vocat. Phylam autem Thrasybulus parva manu occupavit: in qua tamen finienda insignis inter veteres discordia est. Xenophon illi socios circiter LXX adiungit, et eum secutus Plut. de Glor. Athen. p. 345. D., at Pausanias L. I. 29. tantum LX, Aristoteles Rhet. ad Alexandr. c. 9. p. 180. μετὰ πενήκοντα ἀνδρῶν Phylam occupasse, Corn. Nepos Thrasyb. c. 2. non plus habuit secum, quam triginta de suis. Hoccine discrimen inde repetendum, quod exsulum numerus paullatim magis atque magis sit adauctus? WESS. Στειριεύς post Meursium merito potius censuit Ti. Hemsterhusius, insuper opinatus orationis structuram haud paullo planiorem futuram fuisse, si Diodorus dedisset Θρασύβουλος ὁ Ἀθηναῖος ἀπὸ τοῦ δήμου Στειριεύς ὀνομαζόμενος: quod citra dubium eum vero congruit. Vide eum ad Aristophan. Plut. p. 166. IDEM in Add.

667. 35. Τῆς τῶν τρισχιλίων πολιτείας] Tria illa civium millia intelliguntur, quos tyranni sibi legerant, ut administrandae reipublicae participes forent. Καταλέγουσι ΤΡΙΣΧΙΛΙΟΥΣ τοὺς μεθ' ἑξόντας δὴ τῶν πραγμάτων, de tyrannis Xenophon Hellen. II. p. 361. Mox μετόπισαν αὐτοὺς ex Reg. I. recepi, re ita postulante. Non enim ipsi tyranni in Piraeum migrarunt, sed in eum cives, quibus rerum status videbatur displicere, compulerunt. Docet his verbis Isocrates Areopag. p. 224. εἰς δὲ τὸν Πειραιᾶ φεύγειν πλείονας ἢ πεντακισχιλίους ἠνώχασαν et Iustinus L. V. 9. Deinde cum omnes Athenienses proditionis suspectos haberent, demigrare eos ex urbe iubent, et in brachiis muri, quae diruta fuerant, habitare, extraneis militibus imperium tuentes. De Eleusiniorum inmani caede Xenophon Hellen. II. p. 268. et Lysias Or. in Eratosth. c. 14. WESS.

667. 41. Πρὸς τοὺς περὶ Θρασύβουλον, γανερῶς μὲν περὶ τῶν etc.] Hic tale quippiam desideratur, πρὸς ὃν καὶ παρὰ τῶν τριάκοντά τινες ἀπεισάλησαν. Et paulo post pro συμβουλευέειν, συμβουλεύουσιν. Rhod. Defectus vocum quarundam manifestus est. Franc. Fabricius deesse putabat ad Orosium L. II. 17. ἤλθον δὲ καὶ ἀπὸ τῶν τριάκοντά τινες, aut his similia. At Palmerius ita: *Inter Θρασύβουλον et γανερῶς desunt procul dubio multa: verborum, quae desunt, sententia fuit, quosdam et e XXX tyrannis etiam adisse Thrasybulum.* Statim autem συμβουλεύουσιν orationem requirere, non fugit H. Stephanum. WESS.

668. 59. Χιλίους καὶ διακοσίους] Ducentos omittit Xenophon, quem adi Hellen. II. p. 368. et Corn. Nepotem Thrasybul. c. 2. WESS.

668. 70. Κριτίου πεσόντος] Cecidit una cum Hippomacho, tyrannidis collega, teste Xenophonte. In Critia fuerat philosophiae studium et dicendi haud medioeris facultas, sed quae bona ambitione nimia et animi atrocitate corrumpit. De morte eius haec Philostratus L. I. Vit. Sophistar. c. 16. 3. ἀπέθανε μὲν οὖν ὑπὸ τῶν ἀμφὶ Θρασύβουλον, οἱ κατῆγον ἀπὸ γνηγῆς τὸν δῆμιον. δοκεῖ δ' ἐνίοις ἀνὴρ ἀγαθὸς γενέσθαι παρὰ τὴν τελευταίην, ἐπειδὴ ἐνταῦθα τῇ τυραννίδι ἐχρήσατο. ἐμοὶ δὲ ἀποπεγάνθω, μηδένα ἀνθρώπων καλῶς ἀποθανεῖν ὑπὲρ ὧν οὐκ ὀρθῶς εἴλετο. Satis quidem ille venuste. Nisi tamen fallor, leve mendum haec eius verba occupavit, cum antea scriptum fuisset ἀπὸ Φυλῆς. Ita enim solent ea in re. Aeschines in Ctesiphont. p. 81. epigramma, ὃ ἐπιγράφεται τοῖς ἀπὸ Φυλῆς τὸν δῆμιον καταγαγοῦσι. Clemens Alexandr. Stromat. L. I. p. 418. ἀλλὰ καὶ Θρασυβούλω τοῦς ἐκπεσόντας ἀπὸ Φυλῆς καταγαγόντι etc. et passim alii. WESS.

668. 85. Ἐκ τῆς πόλεως ἐξέπεμψαν, δέκα δ' ἀνδρας κατέστησαν] XXX tyrannos emigrare Eleusina iubent, substitutis decem, qui rempublicam regerent; qui nihil exemplo prioris dominationis territi eandem viam crudelitatis adgressi sunt: sic fere Iustinus L. V. 10. In quibus quidem x viris lecti sunt ex collegio xxx virali Phido et Eratosthenes, praeterea Hippocles et Epichares, quod eos exilibus impense studere putarent, ea tamen opinione falsi, ut Lysias Or. adv. Eratosthen. c. 14. ostendit. Fuit ex iisdem etiam Rhinon, de quo Isocrates Except. adv. Callimachum. Vide Maussac. ad Harpocrat. in Πίνων et H. Vales. Emendat. L. I. 33. WESS.

668. 89. Ἀπὸ Λακεδαιμόνος τετραράκοντα ταῦς etc.] Phidon ipse Laedaemonem profectus est, mutuaque sumpsit centum talenta ad militem ea pecunia colligendum apud Lysiam Orat. in Eratosth. c. 15. Atque illa sunt centum talenta, quae concordia sociata Athenienses acre collato, rarissimo moderationis exemplo, Spartanis restituerunt, auctoribus Demosthene in Leptin. p. 276. et Isocrate Areop. p. 225. Fallor etiam, aut Φίλων ὃ ἐκ

*Κοίλης*, quem Isocratis *Except. adv. Callim.* p. 553. legationis pessime gestae, instaurata civitatis concordia, delatum refert, idem atque hic *Φείδων* est, ex *Lysia* proin et *Xenophonte* corrigendus. WESS.

668. 94. *Παραγεννηθεὶς εἰς Ἀθήνας*] Copiosius rem gestam exsequuntur *Xenophon* *Res. Gr. L. II.* p. 373. *Corn. Nepos* *Thrasymb. c. 3.* et *Iustin. L. V. 10.* WESS.

668. 96. *Διόπερ Ἀθηναῖοι μὲν ἐχομίσατο τὴν πατρίδα*] Ita quidem perfunctae hae civili discordia et calamitate fuerunt Athenae; quam auctor in quartum usque annum cum prorogat, se et plures alios in errorem induit. Namque hoc fonte hauserunt *Eusebius*, *Syncellus*, et *Chronographorum* plerique, finem tyrannidi quarto anno *Olymp. xciv.* inponentes. Prave profecto. Solus *Euclides*, qui summum magistratum anno secundo *Olymp. xciv.* administravit, ab ea opinione *Diodorum* ceterosque abstrahere debuerat. Ante eum fuerat *ἀναρχία*, quod, oppressa a tyrannis republica, *Pythodorus* in *Archontum ἐπωνύμων* numerum non aggregaretur, sicuti dictum in superioribus. Eo vero constituto, et libertas civitati rediit, et decretum est *τοῖς νόμοις χοῦσθαι ἀπὸ Ἐὐκλείδου ἄρχοντος* apud *Andocid. Or. de Myster.* p. 12. Cum enim *Thrasylulus* una cum exulibus redisset, legem rogaverat, ut utrimque iniuriarum illatae oblivioni mandarentur. Quam ubi populus scivisset, lecti sunt viginti viri, qui reipublicae praesent, donec leges perscriberentur. Ut vero examinatae sunt scriptaeque leges, *Andocidem* in his sequor, decretum id est, quod dixi. *Dubium* ergo nullum est, quin *Archonte Euclide* pristinum libertatis ius Athenae reciperarint, tyrannidique ante eum finis sit facta. Quod ipsum et aliunde colligas. Occupatae enim sunt Athenae murique urbis deieci a *Lysandro* *Olymp. xciii.* anno ultimo, mense *Munychione*, teste *Plut.* in *Lysandro* p. 441. brevique post xxx viri urbi inpositi. Insequente hieme *Thrasylulus* *Phylen* occupat, accurrentibusque tyrannis multa nix cadit, *ἐπεγενήθη πολλὸς νεφέως*, *Noster* ait c. 32. et *Xenophon* *Hellen. II.* p. 367. Quam hiemem proxime excepisse confirmatam tyrannorum dominationem, *Cleocritus* apud eundem *Xenophont.* p. 370. indicat, octo a lectis xxx viris menses, cum praelio *Critias* et *Hippomachus* caderent, numerans. Quare hieme anni primi *Olymp. xciv.* *Thrasylulus* ad *Phylen* et *Munychiam* rem gessit. Post mortem *Critiae* tyrannis cecidit animus, communique civium arbitrio illis imperium auferitur, substitutis decemviris. Quibus potestate turpiter abutentibus, advenerunt *Spartani* *Lysandri* et *Pausaniae* ductu, tractaeque discordiae in paucos adhuc menses sunt, donec ad extremum *Pausaniae* prudentia et in exules benevolentia civitati libertas et concordia postliminio restituerentur. Haec *Xenophon* accurate. Rediit *Thrasylulus* in urbem mense *Boëdromione* eius anni, qui *Archontem* habuit *Euclidem*, quod *Plutarcho* de *Athen. Glor.* p. 349. E.

facile accredimus. Atque haec paullo uberius, ne cui deinceps errandi occasionem Diodorus praerberet. Viam eandem ingressi sunt viri clarissimi H. Dodwellus Annal. Xenophont. p. 241. et Io. Taylor ad Lysiae sui Vit. p. 50., finem principiumque tyrannidis egregie circumscribentes. WESS.

669. 2. *Κατέλευσαν τὸν πρὸς αὐτοὺς πόλεμον*] Videndus est Xenophon, qui in his diligentior, et bellum in tertium annum, non dissentiente Pausania Lacon. c. 8., extendit Rer. Graec. III. p. 384. WESS.

669. 8. *Δόντων Ἀθηναίων*] Conf. L. XI. 83. WESS.

669. 16. *Εἰς Κερίνην ἐπέλευσαν*] Non neglexit de his sic uti et in Siciliam profectis admonere Pausan. L. IV. 26. Prudenter autem Noster addit, haec Cyrenaica expeditione prope omnes cecidisse: superstites enim aliqui fuere, qui, Epaminonda undique Messenios colligente, in patriam redire, Pausania eodem docente. WESS.

669. 30. *Εἰς τὰς ὀνομαζομένας Οὐέντρας*] Fortasse *Οὐελίτρας*. RHOD. *Οὐέντρας* vox est nihili. Puto legendum *Οὐελίτρας*. PALM. *Οὐελίτρας* etiam III. Scaliger et Is. Vossius margini libri sui adscripserant, recte, me quidem iudice. Livius de colonis Velitras hoc anno deductis tacet, quod non mirandum: alios Noster annales, ut saepe, adhibuit, qui et Veliternos desciscentes c. 102. memorat. Vid. Ph. Cluver. Ital. Antiq. L. III. 8. WESS.

669. 34. *Μάνιος Κλώδιος* etc.] Hi Tribuni militum ex Livio sic emendantur: *Μάνιος Αἰμίλιος, Ἰππιος Κλώδιος, Μάρκος Κοῦγκιλίος, Μάρκος Ποστούμιος, Αἰέσιος Τούλιος* etc. excluso *M. Furio*, quem censorem fuisse hoc anno colligit Sigonius. RUON. *Μάνιος Κλαύδιος* etc.] De *Manio Aemilio* et *Appio Claudio* nihil dissentio. Videtur librarius prioris nomen et alterius praenomen negligentissime praeteriisse; quae et Clarissimi Drakenborchii coniectura. Recipiendus praeterea *Κοῦγκιλίος* sive *Κοῖντίλιος* est: minime vero *Μάρκος Ποστούμιος*, quem Livius L. V. I. tribunum militum hoc fuisse anno prodidit, sed contra Fastos eorum numerum augens. *M.* enim *Furium Fusum* Marmoris Capitolini fragmenta servant, sex trib. milit. quot et Diodorus praefertentia. Vide Pighium in Fast. ad ann. ccccl. WESS. V. Borghes. II. p. 34.

669. 38. *Μίνως*] *Μέρον* recte appellatur ab Eusebio, ubi *Minon* interpretatio Armenia p. 150.

670. 40. *Παράληφόμενον πάσας τὰς ἐπὶ θαλ. σατραπείας*] Xenophontem ad principio L. III. Rer. Graec., et de Tissapherne id scribi oportuisse videbis. Quae statim subnectit auctor, eundem requirunt: postulant etiam, quae supra c. 27. tradiderat. Hoc amplius, Pharnabazo Bithynia, Aeolis et Phrygiae pars parebant, Tissapherni ceterae, ad mare accubantes praefecturae, quae Cyri antea fuerant. Itaque haud longe ab ea suspicione recedo, qua aut scriptor ipsemet, aut eius amanuenses erroris adlines fiunt. WESS.

670. 47. Ταμῶς] Ταμῶν Clar. sed vide Duker. in Thucyd. VIII. 87. WESS.

670. 50. Τοῦ καλουμένου Γάων] Γλοῦς ὁ Ταμῶ dicitur in Xenophont. Ἀραβ. L. II. circa initium: de qua scripturae differentia quaeremus ad L. XV. 3. diligentius. WESS.

670. 51. Πρὸς Ψαμμίτιζον] Nihil variant scripti libri, quorum tamen potiores Ψαμμίτιζον cum Aegypti regem, unde hic genus suum derivabat, L. I. 67. adpellabant. Hunc atrocem atque ingratum regem, qui praeter Diodorum memoraverit, recorder neminem. WESS.

670. 78. Θίμβρονα καταστήσαντες ἡγεμόνα] Non deerunt fortasse, qui Coisl. Θίμβρονα errantis librarii calamo tribuent, a quorum iudicio dissentio. Θίμβρος prisco sermone ἰὸν ἔμπροσθ, τριγερὸν, ἀπαλὸν notabat, Hesychio interprete, qui testem dat Nicandrum, respiciens Θιμβρὸν ζῆρα eius poetae Theriac. v. 35., sed quae Θιβρὸν tum erat, sicuti manserunt ὠεὶ Θιβρὸν χελώνης Alexipharm. v. 555., veteri scriptura salva. Addita dein litera Θιμβρὸν nata est, quo modo Callimachus, ut ad priorem Nicandri locum Critici veteres docuerunt, Θιμβρῶς Κεραίδος Ἰριμονίην, et Euphorion Θιμβρὸν τε Σειθαμιν dixerunt. Hinc Θίμβρον et Θίμβρον natales acceperunt, quorum prius durat in Polyaeo Strat. II. 19., ubi de hoc ipso Thimbrone. Θίμβρον ὁ Ταυτάλου est in fragmento quodam Sopatri apud Athen. L. VI. p. 230. E. Θίμβρονα, qui de republica quiddam sit commentatus, memorat Philosophus Polit. L. VII. 11., Lacedaemonium Θίμβρονα, cuius fraudibus Harpalus perierit, Arrianus apud Photium Biblioth. Cod. XCII. p. 218., et Noster L. XVII. 108. Ceterum in copiarum, quas in Asiam Thimbro duxerit, numero nulla fere Diodorum inter et Xenophontem discordia L. III. Rer. Graec. p. 374.; iunge tamen Isocratem Paneg. p. 101. WESS.

671. 89. Ἐπὶ Τράλλεις τῆς Ἰωνίας] Lydiae a plerisque aliis contribuitur, sed erat fere Ioniae in finibus. Τράλλεις τῆς Φοργίας Xenoph. Hell. III. p. 382. Vide adscripta Hieroclis Synecdemo p. 659. WESS.

671. 95. Ὁ καλοῦσι Θάουρα] Κεῖται δ' ἐν πεδίῳ πρὸς ὄρει καλουμένῳ Θάουρα de Magnesia hac Strabo L. XIV. p. 958., ubi de primis eius auctoribus paullo aliter atque in Scholiis ad Apollon. Rhod. I. 584. WESS.

671. 6. Οὗτος δ' ἐστὶ μὲν ἐπ' ἀριστερῇ τοῦ Πόντου] Consentiant Geographi. At Aeschylus in Ponti dextro latere, ubi Amazones, Salmydessum locat, egregie expingens in Prometh. v. 725.

Τραχεῖα Πόντου Σαλμυδησσία γνάθος

Ἐχθρόξενος ναύτησι, μητρονὰ νεῶν.

Nec minus Xenophon Exp. Cyr. L. VII. p. 321. τέναγος γὰρ

ἔστιν ἐπὶ πολὺ τῆς θαλάττης, καὶ οἱ Θοῤῃες, οἱ κατὰ ταῦτα οἰκοῦντες, στήλας ὀρυσάμεναι, τὰ κατ' αἰτίους ἔαστοι ἐκπίπτοντα ληΐζονται. Et Strabo L. VII. p. 492. cum viri magni nota. WESS.

671. 18. Ἀπό τιος ἑπιφανοῦς ἱεροῦ] Fanum erat Dei *Adrani*, quem tota Sicilia miro cultu prosequabantur, Adranitae inprimis. Urbem enim Plut. Timol. p. 241. esse ait μαζοῶν μὲν, ἱερῶν δ' Ἀδρανοῦ, θεοῦ τιος τιμωμένου διαφερόντως ἐν ὅλῃ Σικελίᾳ. Templum urbi erat inpositum. Ἐν Σικελίᾳ Ἀδρανοῦς ἔστι πόλις, ὡς λέγει Νυμφόδοτος, καὶ ἐν τῇ πόλει τῆς Ἀδρανοῦ νεὸς ἐπιχωρίων δαίμονος, Aelian. de Animal. L. XI. 20. Quod quidem cur Adranitis praecipuo in honore fuerit, nulla disquisitione, in tanta veterum superstitione, indiget. Ceteri per Siciliam venerati videntur, quoniam Adriano patre Dii Palici, quos omnes studiose colebant Siculi, progeniti essent. Hesychius Παλιζοί. Ἀδρανοῦ δύο γεννηθῆναι τοῖς Παλιζοί. Novi, Grammatici verba multimodis tentari, quod de Palicorum origine Macrobius Sat. L. V. 19. et Stephan. in Παλιζῇ in alia omnia eunt. Verum non ea est novandi iusta causa, pulchre admonente Cl. Sig. Havercampo ad Parutae Numism. p. 206. Ubi enim maior discordia apud veteres, quam in Deorum Dearumque parentibus? Ceterum Ἀδρανοῦν et Ἀδρανίτας perpetuo Diodorus, aliis vocabulum adspiratione asperantibus, de quibus Ph. Cluver. Sicil. Antiq. L. II. p. 332. WESS.

671. 21. Ὑπὸ Κρατεροῦ] Hunc Craterum Plutarchus in Erotico Crateam vel Crateam vocat. Sed de septennio regni Archelai manifesto calculus errat. Nam supra Glaucippo Archonte regnantem Archelaum facit: at a Glaucippo ad Lachetem intersunt anni decem. Forte scripserat ἐπὶ καὶ δέκα. Sed Dexippus, ut ait Petavius, XIV tantum annos regnasse Archelaum dixit. Ex litteris numeralibus error manavit, ut amat fieri. PALM. Κραταίων Aristoteles Polit. L. V. 10., Κραταίων Plutarchus Erot. p. 768. F., Aelianus Var. Hist. L. VIII. 9. Κραταίαν adpellat: posterius viri Clarissimi T. Faber et Iac. Perizonius verum delicati pueri nomen, et Diodoro restituendum censent. Mihi doctissimi Ioach. Kuhnii sententia perplacet, idem esse nomen Κραταίαν et Κρατερός, nisi quod Κρατερός Ἑλληνιστώτερον sit, Κραταίαν autem magis sapiat Macedonismum. Suidas quoque in voc. Ἐριπίδης Diodoro suppetias venit, Κρατερόν τὸν ἐρώμενον Ἀρχελάου nominans. Hoc primum. Dicit auctor, Craterum invitum sauciassse regem Archelaum; at Aristoteles, coniurasse in amatoris caput una cum Hellenocrate et Decamnicho, causas adscribens, quae haec consilia adfirmant. Taceo Platenam, quem Aelianus excerpit, paria in literas retulisse Alcib. II. p. 141. Porro ἔτη ἐπὶ, quae Archelaus regnasse perhibetur, retineri posse, Is. Casaubonus censuisse videtur ad Athen. L. V. 18., sed quae recordatus non fuit, ante hos decem annos eum Macedonibus ian-

imperasse. Vid. supra L. XIII. 49. Rectius ergo mutantur: qua tamen in re inmodicus est Th. Lydiatus, *ἔξοσι viginti* refingens ad Marm. Oxon. p. 8., deceptus haud dubie a Pario Marmore, quod Archelai regis initia illi anno illigat, quo Astyphilus Athenis Archon fuit, verum errante. Nam Perdiccae adhuc regnantis et superstitis meminit Thucydides quinto ab Astyphilo anno, sive Olymp. xci. principio, L. VI. 7. Propius itaque a vero recedunt Humfr. Prideaux ad Oxon. Marm. p. 222. et H. Dodwellus Annal. Thucyd. p. 32. *τέσσαρες καὶ δέξα* sive *xiv annos* Archelao contribuentes. Tot enim Syncellus Chronograph. p. 262. cum regno praefuisse ait, totque patiuntur omnia, quae de Perdicca et Archelao consignata literis reperimus. Denique fuit Archelaus in viros eruditionis et ingenii cultu nobiles comis et benignus, quos et magnis praemiis invitatos Athenis in Macedoniam pelliciebat, ut horum praedicatione, puto, scelera obtegeret, quibus atrocissime in patrum et fratrem grassatus fuerat apud Platonem in Gorg. p. 471. Adde viros doctos in Aeliani Var. Hist. II. 21. VIII. 9. XIV. 17. WESS.

671. 23. *Ὁρέστῃς παῖς ὄν* etc.] Sublato Archelao paucos in dies regnavit Craterus sive Crateuas, ipse mox ab aliis interfectus, Platone in Alcib. II. p. 141. auctore. Tum successit Orestes, cui Syncellus ex Diodoro Chronograph. p. 262. annos dat quatuor; ut adeo quarto tutelae anno Aeropus eum contrucidarit, regno in duos annos, nam et sex annos eidem auctor tribuit c. 84., adhuc retento. Atque huc refert doctissimus Lydiatus verba Aristidis, sed leviter mutata, ex T. III. p. 93. *τί οὖν εἶ Ἀρχέλαον τὸν αὐτοῦ δεσπότην καὶ θεῖον ἀποκτείνας κατέσχε τὴν ἀρχήν, ἢ τὸν ἐπταετῆ ἐκείνου παῖδα εἰς τὸ γράειν ἐμβαλόν.* Ut Aeropus subintelligatur, qui Archelai filium Orestem, septem annorum puerum, in puteum demerserit, ipsumque Archelaum interfecerit. Sed imprudens, neque inspecto, quod ad manus haud adesset Aristides, libro. Vidisset alioqui, non agi de Aeropo, sed Archelao, ex Platonis Gorg. p. 471., qui patrum patruisque filium interfecerat, et fratrem in puteum depresserat, nec mutari posse *τί οὖν εἶ Ἀρχέλαος* etc. Fecit tamen patratum in septennem fratrem Archelai id scelus, ut et Orestes et eius tutor Aeropus ex Macedoniae regum catalogo excluderentur ab H. Dodwello Ann. Thucyd. p. 94. Non alium esse Aeropum quam Archelaum ait, Orestem vero illum ipsum, quem in puteum detruserat. Satis utique pro imperio Quis enim ei rei auctor idoneus? Puerum septennem nomine *Ἀλκίταν ἢ Μέροπον*, sive *Ἀέροπον* potius fuisse, Scholiastes Aristidis significat; Orestem, quod sciam, nemo. Quid? eo si nomine adpellatus occurreret, tolline propterea Orestes et Aeropus e regum numero deberent? Equidem non arbitror. Habent regum Macedoniae successiones difficultates et salebras: sed eiusmodi violentior medicina adurit sana et patrocinio Theopompi, Orestem



et Aeropum agnoscentis, munita apud Syncellum p. 262. Chronographiae. WESS.

672. 27. Καὶ πῶν ζώνειον ἐτελεύτησεν] De cicuta Aeg. Menagius ad Diogenem II. 42. et Comici Ran. v. 125. Spanhemius. Aetionis formulam, qua impietatis et corruptae iuventutis Socratem postularunt, dabit Diog. Laert. in Socrate segm. 40. WESS.

672. 31. Καὶ τέλος ἀκρίτους ἀπέκτεινε] Melitum mortis damnarunt: alios urbe eiecerant, quorum Anytum Heraeclotae lapidibus cooperuerunt, Diogene et Themistio testibus. Plutarchus de his calumniatoribus T. II. p. 538. A. τοὺς γοῶν Σωκράτη συζοῦσιν ἀντίσταντας, ὡς εἰς ἕσχατον κακίας ἑλληζότητος, οὕτως ἐμισήσαν οἱ πολῖται καὶ ἀπεισιθώγησαν, ὡς μήτε πῦρ αἶψαν, μήτε ἀποζήνισθαι πνυθανομένοις, μὴ λοιομένοις ζωνωρεῖν ἕδατος, ἀλλ' ἀναγκάζειν ἐκείνους τοὺς παραζήτας ὡς μεμιασμένους. ἕως ἀπήγγεστο μὴ γέροντες τὸ μῦθος, eos quidem, quorum calumnia Socrates fuit oppressus, ut extreme malos, ita oderunt atque ita aversati sunt cives, ut neque ignem iis accenderent, neque interrogantibus responderent, neque in balneo aqua uterentur eadem, sed qua illi lavissent, eam tanquam pollutam iuberent a ministris effundi: donec illi, odium id non ferentes, se ipsi suspenderent. Sic ille, odii argumenta egregie declarans. Solebant Athenis eos, quos suo merito pessime odissent, ita excipere ut nec tecti, nec ignis, neque colloqui aut aquae communionem concederent. Quod genus ignominiae tangunt Dinarchus in Aristogit. p. 106., Aeschines Leg. Fals. p. 43. et Demosthen. in Aristogit. I. p. 490. De Socratis vero, quem Lachete Archonte cicutam bibisse Diodoro assentiuntur Diogen. II. 44. et Aristides T. III. p. 474., delatoribus praeter Aeg. Menagium plura Spencerus ad Origen. I. I. Cels. p. 322. ed. novissimae. Ceterum paene praeterieram, Eunnapium in Aedesii Vit. p. 37. perhibere, Socratis morte violenta civitatis Atticae vires et gloriam, resque Graeciae universas in peius ruere coepisse. Σωκράτους ἀπέλθόντος βιαίως οὐδὲν ἔτι λαμπρὸν Ἀθηναίως ἐπαύθη. ἀλλ' ἢ τε πόλις ἐπέδωκε, καὶ διὰ τῆν πόλιν, τὰ τῆς Ἑλλάδος ἅπαντα συνεπαύθη. Nimis utique pro Socrate gloriose, neque satis ex vero. Fractae enim iam antea Athenarum erant opes, et, ubi sese collegerant, haud pauca patrarunt, quae merito praedicantur. WESS.

672. 36. Ἄλλος Ματίλιος] Pro Ματίλιος scribe Μάνλιος, et pro reliquis supposititiis Κόιντος Σεροτίλιος καὶ Μάνιος Σέροζος. RHOD. Haec nomina sic ex T. Livio corrigenda, Ἄλλος Μάνλιος, Κόιντος Σεροτίλιος, καὶ Μάνιος Σέροζος. Graeculi exscriptores qui linguae latinae nullam aut paucam notitiam habebant, saepissime in nominibus propriis Romanis exprimendis peccabant. PALM. Occupavit correctionem horum nominum Pighius in Fast. ad ann. ccccl., cuius opinioni Capitolini marmoris fragmenta et Li-

vius L. V. 8. auctoritatem conciliant. In Palmerii verbis male legitur *Μάρκος Σέργιος* et *Μάλλιος*. WESS.

672. 42. *Ἀνάξιτον*] Palam est legi debere *Ἀμάξιτον*. PALM. *Ἀμάξιτον*] Reddidi, probante Rhodomanno, suum urbi nomen, invitis etiam libris vetustis. Apparet errantis librarii calamus ex Xenoph. L. III. Hellen. p. 376. Plinio V. 30. et aliis. Quam vero *Κεβριγίαν* Noster vocat, ea *Κέβρη* Xenophonti, τὰ *Κεβρίγια* Herodoto Vit. Hom. c. 20. Videndus est Stephanus, quaeque illi adstruxerunt viri eruditi. WESS.

672. 54. *Καὶ περιστήσας ἐν τοῖς ὅπλοις*] Explicat Polyaeus *περιστήσας τοῖς ὀπλίταις* Strat. L. II. 21., ubi distinctius enarrat artem, qua Trachinios suam in potestatem Erippidas, sive Herippidas, sic enim Xenophon hominem vocare solet Rer. Graec. L. IV. p. 401., redegerit. WESS.

672. 60. *κατίγθισαν εἰς Βοιωτίαν*] Scribendum esse *ἐπὶ Βοιωτῶν* iam olim me docuit comparatio eorum quae sunt p. 706. 33. — 37. Deprehenderat rem apertam etiam Schneiderus ad Xen. Hist. Gr. III. 5. 25.

673. 68. *Ἀπὸ θαλάττης ἀρξάμενος μέχρι θαλ. διτείχισε*] Confer Xenophont. Rer. Gr. L. III. p. 380. Atque hoc *Macron Tichos* dictum, qua a Propontide ad Melanem sinum inter duo maria porrectus murus procurrentem exclusit Chersonesum, apud Plinium L. IV. 11. WESS.

673. 77. *Καὶ μάλιστα τῶν πολεμίων*] An voluit Cononem praecipue ex omnibus regis hostibus, tales enim Athenienses, peritum certaminum bellicorum esse? Id fortasse in opinionem legentium venire posset: sed officit verborum ordo ex *ἀγάνων* voce suspensus. Mallem *τῶν ναυτικῶν*, aut *τῶν κατὰ πέλαιος*, scriptum legeretur. Namque id vult, Cononem egregium usum praeliorum habuisse et navalium inprimis. De eo Isocrates plura Or. ad Philipp. p. 137. et Plut. in Artox. p. 1021. F. WESS.

673. 85. *Μεγάλας ὑποφαίνων — ἐλπίδας*] Sic Zosimus L. IV. 52. *καὶ τὸν βασιλέα πείσας ὑποφῆναι καὶ αὐτῷ καὶ τῷ παιδὶ μεγίστας ἐλπίδας*. Tacitus Histor. L. V. 24. *Batavis pacem, Civili veniam ostentans*. Et Curtius L. VII. 6. *Qui clementiam ipsius in deditos, simulque inexorabilem animum in devictos ostenderent*. WESS.

673. 2. *Σπονδὰς ἐποίσαντο*] De induciis his diligentius Xenophon Rer. Gr. L. III. p. 382. WESS.

673. 8. *Ναζίους μὲν καὶ Καταναίους — ἐξηδραποδίσατο*] Dixit superius c. 15. WESS.

674. 14. *Κατὰ τάχος, παρὰ τῶν Πηγίων*] Hic unius et alterius verbi accessione sensus, alioquin hians, expleri potest hoc sane modo: *Προσέθεντο δ' αὐτοῖς, παρὰ τῶν Πηγίων λοβόντες πρὸς τὸν πόλεμον οὐκ ἐλάχιστα καὶ οἱ φυγαδευθέντες, con-*

*inixerunt se vero cum ipsis, cum a Rheginis non minimis instructi fuissent adiumentis, etiam exsules. RHOD.*

674. 16. *ὄν ἐλάχιστα. καὶ οἱ φηγάδεδότες etc.]* Quae desint verba inter ἐλάχιστα et καὶ οἱ φηγάδεδότες facile non est. Sed sensum eorum quae desiderantur verborum non puto difficile esse coniectura assequi. Videlicet eos qui in exilium pulsati a Dionysio erant Syracusanos, Rheginis se adiunxisse arma in Dionysium ferentibus. STEPH. Hoc de loco, pace virorum doctissimorum, sic censeo, et eum luxatum et corruptum videri. Scriptum fuerat: στρατεύειν — κατὰ τάχος. καὶ οἱ φηγάδεδότες τῶν Συρακούσιων ἐπὶ Διονυσίῳ παρὰ τῶν Ρηγίνων λαβόντες — ὄν ἐλάχιστα (τότε γὰρ — διετέλουν) καὶ περὶ τούτων διαλεγόμενοι ἐδίδασκον, ὅτι συνεπιθήσονται τῷ καιρῷ πάντες οἱ Συρακούσιοι, *eiecti etiam a Dionysio in exilium Syracusani, acceptis in bellum id a Rheginis non exiguis adiumentis, (tam enim plurimi eorum Rhegii commorabantur) his de rebus collocuti docebant, omnes Syracusanos occasione ad invadendum tyrannum usuros.* Sic constat oratio et rei series, quam Interpres, nihil mali de verbo συνεπιθήσασθαι suspicatus, alioisum deflexit. WESS.

674. 36. *Τὸν πόλεμον ὄν ἐπιπεκνηροκότος τοῦ δήμου]* Novi ἀκήροκτον πόλεμον ex Platone L. I. LL. p. 626. A., ἄσπονδον καὶ ἀκήροκτον πόλεμον apud Aeschinem in Ctesiph. p. 38. et Philon. Iud. de Somn. p. 581. B., nec placere tamen potest vulgatum, quippe alia in re adhiberi adsuetum. Opinor fuisse ὄν ἐπιπεκνηροκότος τοῦ δήμου, quod populus hoc bellum scito suo haud probasset. Susceperant enim id bellum ἄνεν τῆς τοῦ δήμου γνώμης Messeniorum duces. Atque hoc usu habebis L. XVII. 9. τοῦ δὲ πλήθους ἐπικυρώσαντος τὴν γνώμην. WESS.

674. 47. *Κρίτων περὶ εἰρήνης συμμεζρον εἶναι]* Locus hic multum mihi exhibuit negotii κρίτων περὶ εἰρήνης etc. quumque ex eo sensum elicere non possem, tandem animadverti planam fore eius sententiam, mutata dumtaxat sede participii κρίτων, ut videlicet ita legatur, διαφρεσβευσμένων δὲ τῶν Ρηγίνων καὶ τῶν Μεσσηνίων περὶ εἰρήνης, κρίτων etc. STEPH. Κρίτων] Haec participio pristinum assigna locum post συμμεζρον εἶναι. RHOD.

675. 62. *Τῶν κατὰ τὴν Εὐρώπην etc.]* Commoda interpretatione haec vir doctissimus adiuvit qui quidem in Europa ditionis aliquid haberent: alioquin ad Europam nihil Carthaginien-ses. Praeferrem etiam post pauca ἐκ μὲν τῶν ἐγ' ἀπὸν κατασκευμένων, quod modo ex scriptis schedis revocavi. WESS.

675. 69. *Ναῦς τε τετρήρεις καὶ πετρήρεις]* Omnino verum est ναῦς τετρήρεις. Ratio quae seq. cap. additur, constituisse Dionysium κατὰ τὴν ἀπαισιόδειον ἐπὶ τῶν Κορινθίων πόλιν ἀξιῶσαι τὸ μέγεθος τῆς τῶν νεῶν κατασκευῆς, id requirit. *Triremem Corinthii invenerant. Ipse Syraeusis, quae Corinthiorum colonia, amplitudinem navium, exstructis quadriremibus et quinque-*

*remibus*, augere instituit. Similem mendam sustulimus L. II. 5. Dubites tamen, an vero pugnet, quod *περὶ τοῦ πεντηρικοῦ σκά-  
γοῦς* subiungit. Herodotus certe quidem Atticam *πεντήρη* memo-  
rat L. VI. 87. WESS.

675. 73. *Προσθεῖς δωρεὰς μεγάλας*] Lego *προθεῖς*. Est enim *προτιθέναι δωρεὰς* munera proponere seu praemia. STEPH. *Προθεῖς δωρεὰς*] Pulchre Coislin. atque ad H. Stephani men-  
tem. Supra L. IV. 64. *προτιθειμένου δὲ ἐπάθλον γιλανθρώπου  
τῷ λύσαντι*. WESS.

675. 74. *Καὶ τῶν ὀπλῶν τὸ γένος ἐκάστων τύπον*] Voluit credo *τοῦ γένους ἐκάστων τύπον*. Ceterum in his omnibus acmulari Diodorus videtur Philistum, qui L. VIII. de Reb. Dionysii venuste et diligenter exsecutus erat *τὰ περὶ τὴν παρασκευὴν, τὴν ἐπὶ Καρχηδονίους Διονυσίου τοῦ τυράννου, καὶ τῶν ὀπλῶν καὶ τῶν νεῶν, καὶ τῶν ὀργάνων τὴν ποιήσιν*, Theone Progymnasm. c. 2. p. 19. indice. WESS.

675. 78. *Διλαμβάνετο*] Rectius *διελάμβανε*. Solet enim *διαλαμβάνειν* pro *ἐπολαμβάνειν*, id est *τομιζεῖν*, semper activa voce usurpare, aliorum scriptorum more. STEPH.

675. 84. *Ὁὐ μόνον ἐν τοῖς προναίσις etc.*] Interpres in *vestibulis templorum*, non probante Cl. Jac. Gronovio, et ex Glossis *antetemplo* praeferente ad Herodoti L. I. 51. Sane quidem *vestibulum*, etsi iisdem id sit in Glossis, non satis exprimit *πρό-  
ναον*. Pars est templi antica, ut apud Pausan. L. VIII. 32. *Antetemplum* tamen cum usus in sermonem Latinum necdum inportaverat, *pronaum* retinere Vitruvius L. III. 1. potius censuit. WESS.

675. 90. *Καὶ γὰρ τὸ καταπελτικὸν εἰρέθη etc.*] Alibi *καταπελτικὸν βέλος* vocat. Unde hic quoque aut *desse* aut *relictum* esse subaudiendum dico nomen illud *βέλος*. Potius tamen *κατυπέλην* dicit quam *βέλος* omittit, ut in fine huius paginae *κατεσκευάσθησαν δὲ καὶ καταπέλται παντοῖοι etc.* STEPH. Iustam esse Stephani animadversionem, ex L. XVII. 43. 45. 88. exploratissimum evadit. Catapultam vero, qua machina tela graviora et iacula emittabant, in Sicilia inventam fuisse, agnoscit Aelian. Var. Hist. VI. 12. et Plut. in Apophthegm. Lacon. p. 219. *Syris* tamen primam eius originem adscribere Plinius videtur L. VII. 56., quod qui defendi possit, bellissime docet ad Aelianum suum Cel. Jac. Perizonius. Adde praeter Lipsium Polioret. L. III. 2. not. Casauboni in Aeneam p. 1799. ed. Gron., atque inprimis Athenaeum de Machin. p. 4., qui hoc genus machinarum Dionysii tempore magis atque magis excultum et in Sicilia fabrefactum tradit. WESS.

675. 2. *Ἡρξαστο δὲ ναπηγ. τε τριήρεις καὶ πεντηρικὰ σκάφη*] Sic ex membranarum fide rescripsi: instaurassem etiam *τετρήρεις*, si quid praesidii in manu exaratis fuisset Codd.: neque addubito tamen, quin auctor id reliquerit. *Πεντηρικὸν σκάφος* cap.

superioris admissam scripturam stabilit firmissime, ne nunc addam *πεντήρεις καὶ σκάγη* hoc quidem loco, ob ea, quae succedunt continuo, ineptum esse prorsus. Porro Corinthios primam olim triremem construxisse, ex Thucydide L. I. 13. nemo est, qui nesciat. WESS.

676. 11. *Παρεσχεύαστο*] Praestat *παρεσχεύασε*, uti Rhodomannus edicebat, aut, quod propius a vulgato distat, *παρεσχεύασατο*. WESS.

676. 19. *Τοῦ γὰρ καλομένου λιμένος*] Haud scio, an desit *μεγάλον*. Habebant Syracusae duos portus apud Thucydid. VII. 22., *parvum*, cui Laecio nomen, et *magnum*, a Livio L. XXV. 26. non praeteritum. Magnum innui, *τὸν μείζονα* in Strabone L. VI. p. 417., propterea suspicor, quod *minor* navalia haberet, sexaginta duntaxat triremium intra suum ambitum admittentia, ut superius c. 7. proditum fuit. Hinc vero adparet, omni ex parte vero non consentire, quod Laz. Bayfius pertendebat, *νεωσπίκουσ* capaces singulos triremis unius, uniusque biremis et fabricorum navaliū, qui eas aut exstruerent aut reficerent, fuisse in Thes. Gronovii T. XI. p. 624. Melius Suidas: *Νεώσπικοι, οὐζήματα παρὰ τῇ θαλάσῃ οἰκοδομούμενα εἰς ἔποδοχὴν νεῶν, ὅτε μὴ θαλαττεύοιεν*. Diodori verba non neglexit Scheffer. Milit. Nav. L. III. 3.

676. 32. *Κατεσκευάσθησαν ἀσπίδων* etc.] Lucem hinc accipiunt, quae de Dionysii iunioris armamentario Aelian. Var. Hist. VI. 12. WESS.

676. 43. *Κυβερνήτας καὶ προρεῖς*] Utriusque imperio parebant nautae, sed huius in prora, illius in puppi. Eleganter Xenophon Ἀναβ. L. V. prope finem: *ὅταν δὲ χειμῶν ᾖ — οὐχ ὁρᾷτε ὅτι καὶ νεύματος μόνου ἔνευα χαλεπαίνει μὲν ΠΡΩΡΕΥΣ τοῖς ἐν πρώρῃ, χαλεπαίνει δὲ ΚΥΒΕΡΝΗΤΗΣ τοῖς ἐν πρύμνῃ*. Idem facile colligas ex Philone Iud. de Princ. Creat. p. 728. A. et Plutarcho in Praecept. Reip. Administr. p. 807. B. Sed vide Scheffer. Mil. Nav. L. IV. 6., horum tamen loca praetereuntem. WESS.

676. 49. *Ἀστυδάμας*] Morsimi Tragici filius est, Isocratis auditor, de quo Suidas in voce et *Σαντιὸν ἔλαινεῖς*. Marmor Parium Astydamanta habet Archonte Athenis Asteo, qui hiccine an filius sit, non constat. Aetas patris, ut idem censeatur, non inpedit. WESS.

676. 52. *Πολιορκοῦντες τοὺς Βοιούς*] Iterum pro *Βηῖους*. De clade Livius L. V. 8. WESS.

677. 58. *Αἰμίλιος Μάρκος*] Ex *Αἰμίλιος Μάρκος* facito *Μάνιος Αἰμίλιος Μάμερκος*, et ex *Παῦλος Σέξτος*, *Λεύκιος Οὐαλέριος*. Nam hunc Livius una cum superioribus nominat. RHOD. A vero non abludit ex *Μάμερκος* aut *Μαμερκοῖνος* natum esse, quod libri praefereunt, *Μάρκος*. Tum rectius esse *Γραῖος*

Κορνήλιος. At Παῦλος Σεξστός unde sedem hanc occupavit, non dixero. Livius L. Valerium Potitum ceteris collegam addit L. V. 10. probantibus Fastorum collectoribus. Vide Pighium ad ann. CCCLII. WESS.

677. 65. Ὑπ' αὐτὸν] Mallem ἐφ' αὐτὸν. WESS.

677. 67. Οἷτοι γὰρ αὐτῶ συναύξοντες τὴν ἀρχὴν] Consule superius c. 10. dicta. WESS.

677. 83. Πρὸς δὲ Πηγίονος ἀπέστειλε πρεσβευτὰς etc.] De hac legatione, quidque illi publice responsum fuerit, L. XIV. 107. WESS.

677. 89. Θυγατρὸς δ' Ἐρμοκράτους κατὰ τὴν ἀπόστασιν etc.] Miserabilem feminae casum et natam inde mortem significavit L. XIII. 112. WESS.

677. 98. Ἀνοῖδα τε τὴν Ξενέτου] Aperte vacat particula τε. Sic vero et alibi. Videtur tamen alicubi eius pleonasmus ferri utcumque posse, in hoc autem loco et illi similibus, nullo modo. STEPH. Ego itidem inportunam particulam delendam arbitror. Ξένετον habet Suidas, nescio utrum hoc ex loco. Ex hac vero adfinitate Locrensium civitati exitii originem fuisse subnatam Philosophus Polit. L. V. 7. indicat. WESS.

677. 5. Τὴν ἐπισημοτάτην Ἀριστομάχην] Hipparini F., Dionis sororem, loco summo progenitam, infr. L. XVI. 6. Duxit utramque eodem die domum, teste etiam Aeliano Var. H. L. XIII. 10., sed Ἀρισταινέτην non sine errore adpellante. Quanta vero cum sollicitudine ad eas noctu ventitavit, utque omnia ante speculari et perscrutari fuerit solitus, Cicero docebit Disp. Tuscul. L. V. 20., et eum aemulatus Val. Maximus L. IX. 13. extr. WESS.

678. 20. Ὅν τοὺς πλείστους — διεφθαρμέναι] Inspice L. XIII. 114. WESS.

678. 22. Ἐξ ἀρχαίων] Χρόνων subintelligendum relinqui non est, ut repetam. Ἐξ ἀρχαίων χρόνων reperies L. I. 3. WESS.

678. 25. Ἀμα δὲ συνίστα] Sic L. XIII. 91. συγκατηγόρησε δὲ καὶ τῶν ἄλλων τῶν ἐπισημοτάτων πολιῶν, συνιστὰς οἰκείους ὄντας ὀλιγαρχίας. Vide And. Dounaeum Praelect. in Demosthen. Orat. Pac. p. 14. WESS.

678. 46. Ὅν ἅπαντα διεφόρησαν οἱ Συρακούσιοι] Satis id quidem odiose et inique. Non quidem assolent principes, cum bellum subito exarsit, hostium suorum civibus denuntiare, ut res suas avehant. At bellum nondum flagrabat, neque foederi obnuntiarat Dionysius, missurus, direptis Poenorum bonis, eum in finem legatos. Confer disputata ab Amplissimo Corn. van Bynkershoek Quaest. Iur. Publ. L. I. 2. WESS.

679. 58. Πνημονεύοντες ὧν αὐτοὶ — ἔπαθον] Carthaginiensium in Siculos captivos inmanem crudelitatem perstrinxit L. XIII. 111. WESS.

679. 60. *Προέβησαν*] *Προσέβ.* Co. Cl. uterque Reg. male. vid. supr. L. IV. 71. WESS.

679. 62. *Εἰς τοὺς ἑποπεσόντας*] *Supplices* intelligit. Vide not. in L. XIII. 21. WESS.

679. 74. *Εἰς τοῦτον τὸν ἐνιαυτὸν κατέστρεφεν*] *Idem* confici potest et ex iis, quae Plut. in Artox. p. 102 I. F., et quae Photius commentatur Biblioth. Cod. LXXII. p. 133. WESS.

679. 76. *Φιλόξενος Κνθῆριος*] Sic melius. *Κνθῆρα* dat gentile *Κνθῆριον*, non *Κνθῆρειον*. Hinc *Φιλόξενος Κνθῆριος* apud Athenaeum L. VIII. p. 341. De quo scurra et ligurritore plura L. XV. 6. WESS.

679. 77. *Τυμόθεος Μιλήσιος*] Scribi ita oportere monuerunt viri clarissimi Io. Meursius de Archont. L. III. 16., Gerard. Io. Vossius de Poët. Graec. p. 46. et Iac. Uptonus ad Dionysium de Struct. Orat. p. 157. aliique. Res certissima est ex Stephano voc. *Μιλήτιος*, et nobili in hunc citharoedum Spartanorum decreto. Ecceur ergo paterer turpissimam mendam propagari? WESS.

*Ibid.* *Τελέστις Σελινόωντιος*] *Selinuntium* hunc *Telesten* Marmor Oxoniense Archonte Athenis Micione floruisse significat, a Diodori rationibus nihil admodum discrepans. *Suidas* Comicum poetam facit, quod ab Athen. L. XIV. 2. fabulae eius *Argo* et *Aesculapius* memorentur: quae mihi, ut alius censeatur, gravis non videtur caussa; versus enim, qui adferuntur, nihil comicum praeferunt, turgidi plane et dithyrambos spirantes: nec distinguit *Athenaeus*, eundem post pauca iterum iterumque ad partes vocans. Confer tamen Io. Alb. Fabricium Biblioth. Gr. L. II. 15. 59. et *Prideaux* ad *Marm. Oxon.* p. 226. WESS.

679. 78. *Πολύειδος*] *Neglectus* est in accuratissimo artificum et pictorum indice a Franc. Junio. Habet *Polyidum*, *Machinationum* scriptorem, ex *Vitruvio* Prooem. L. VII., quem eundem esse opinatur ac *Polydum* illum *Thessalum*, qui *Philippo*, *Amyntae* F., *Byzantium* oppugnanti, arietis machinationem pluribus et facilioribus generibus explicarit apud eundem *Vitruvium* L. X. 19. Quod verum esse, vetustiores editi, *Polyidum* repraesentantes, et *Athenaeus* de *Machin.* p. 4., unde *Romanus* *Architectus* ea excerpserit, adfirmant. Serior ergo ille *Polyidus* est, atque aliud vitae genus amplexus. *Diodori* *Polyidus* diversus fortasse non est a *Polyide* *Πολυίδῃ*, quem tragicis poëtis aggregat *Aristoteles* de Poët. c. 16. et 17. WESS.

679. 81. *Λυσιάδης*] Sic et ceteri vocant. Solus *Lysias* Or. *ἑπὲρ τοῦ Σηζ.* c. 3. *Σουσιάδην*, sed quem hinc corrigendum Io. Meursius de Archont. L. III. 16. et Iac. Palmerius condocefecerunt. WESS. Vitiosam *Diodori* scripturam esse constat ex marmore apud *Boeckhium* *Inscr.* I. p. 232., ubi est *Σουσιάδης*, a *Chandlero* *Σουσιάδης* lectum.

679. 82. *Πόπλιος Μάλλιος* etc.] *Tribunorum* nomina sic

corrige: Πόπλιος Μαίλιος, Σπόριος Μαίνιος, Αεύκιος Φούριος. Maenio tamen non Sp. sed P. praenomen tribuit Livius, qui et caeteros tres edit, P. Licinium, P. Titinium, L. Publium Volscum. Rhen. Sigonius ad Livium L. V. 12. citat ex Diodoro Πόπλιος Μαίλιος, Σπόριος Μαίνιος, Φούριος Αεύκιος, forsans coniectura luce refingenda ea nomina arbitratus: nostri certe quidem libri nihil mutant. Advocat praeterea ex c. 90. Πόπλιον Μαίλιον et Κόιντον Μαίνιον, qui multo ibi aliter scribuntur. Et tamen Diodori auctoritate Livii Tribunis militum nomina praenominaque reddit confidenter: quod equidem non laudarem, nisi fragmenta Capitolini Marmoris emendanti quodam modo faverent, tametsi Sigonium sequantur Pighius, Ouphr. Panvinius, aliique plures. Opinor etiam, reliquorum nomina ab auctore fuisse ceteris adiecta; sed cum flagitio amanuensium foedata essent turpiter, tribus deletis substitutos deinceps esse καὶ ἐτέρους τρεῖς. Schedae Coislin., unde voces exulant, a me id impetrant. WESS. Vid. Borghes. II p. 98. *Spurium* praenomen *Furia*, *Lucium* autem *Publio*, qui excidit, vindicantem.

679. 92. Τὴν ἐπιστολὴν ἐπέδωκε] Vir doctus ἀπέδωκε ex Reg. I. potius fore iudicabat. Non audio. S. Lucas A. A. XV. 30. καὶ συναγαγόντες τὸ πλῆθος ἐπέδωκαν τὴν ἐπιστολὴν. Herodianus L. VII. 6. ἐπιδόντες δὲ τὰ γράμματα etc. WESS.

679. 99. Ἀπέστειλαν etc. {τοὺς ξενολογήσοντας ἀπὸ τῆς Εὐρώπης] Ξενολόγους, sive *conquisitores*, qui mercenarios conquirerent et conducerent. Πρὸς τὴν ξενολογίαν Noster L. XIX. 61., ut *conquisitionem militum haberent* apud Livium L. XXIII. 32. Supra L. XIII. 44. Hannibal πολλοὺς μὲν ἐξ Ἰβηρίας ἐξενολόγησεν. Conf. Des. Heraldum Advers. L. I. 5. et H. Valesium in Maussaci ad Harpocrat. notas p. 128. Nam ut iterem, Carthaginienses mercenario milite frequentissima fuisse usos, necesse non arbitror. WESS.

680. 5. Ἡ μάλιστα ἐχρῶντο κατὰ τῆς Σικελίας ὀρηγήριον] Vide eruditissimum Is. Casaubonum in Polyb. I. 17. Vocant Graeci ὀρηγήριον, quod Latini *arceem*, aut *sedem belli*, unde in hostes commodissima sit irruendi facultas. Polybius L. II. 51. καὶ λαβεῖν ΟΡΜΗΤΗΡΙΟΝ πρὸς τὸν ἐνεστῶτα πόλεμον, τὴν τῶν Κορινθίων πόλιν. Appian. de Bell. Hispan. p. 443. ὡς ΟΡΜΗΤΗΡΙΟΝ ἀσφαλὲς ἐκ γῆς καὶ θαλάττης ἔξω ἐπὶ ὅλην τὴν Ἰβηρίαν de Carthagine, quam Scipio *sedem bello* quaerebat. Paulo aliter Demosthenes περὶ Παραπορ. p. 247. καὶ τὰ ἐν Εὐβοίᾳ κατασκευασθησόμενα ΟΡΜΗΤΗΡΙΑ ἐφ' ἡμᾶς. Et Pausanias L. VII. 13. p. 555. ἐσθήγαγε δὲ ἐς αὐτὰ καὶ φρουράς ΟΡΜΗΤΗΡΙΑ ἐπὶ τὴν Σπάρτην Ἀχαιοῖς εἶναι. Quae quidem loca abunde Plutarchum illustrant, cum adulatorem ὀρηγήριον ἐφ' ἡμᾶς ἐφνῆς ἔχειν τὴν φιλαυτίαν scribit T. II. p. 48. F. et μέγα ἢ περιαντολογία τὴν φιλαυτίαν ὀρηγήριον ἔχουσα de Laude sui p. 546. B. WESS.



680. 15. Σελιουντίους τε παρόδω προσαγοόμενος] *Lego ἐν παρόδω. ut p. 426. αὐτὸς δ' ἐν παρόδῳ διὰ προδοσίας ἐλθὼν* Ἐρικκῆ. ΣΤΕΡΗ.

680. 27. Τὴν ἐκ Καρχηδονίων δύναμιν, οὐ κατεπ. etc.] *Hic δύναμιν in eum locum traiecit curiositas vel incuria librarii, qui βοήθειαν a se removeri non patitur. Βοήθειαν igitur quantumlibet, utut potens δύναμις, hoc quidem loco subsequatur. Rhod. Saepe quidem βοήθεια de exercitu et copiis usurpatur, docente ad Thucyd. L. IV. 8. Clarissimo Dukero. Polybius distincte L. V. 95. τὴν τε χώραν κατέστρεψε, καὶ τὴν βοήθειαν αὐτῶν συνέτριψε δίς. Et Xenophon Agesil. p. 20. ed. Oxon. οἱ δ' αὖ Πέρσαι ὡς εἶδον τὴν βοήθειαν etc. In quibus tamen aliisque veterum locis cum copiae auxiliares designentur, non dissentio a Rhodomanno, vocum ordinem commutatam arbitrato. Favet auctor c. 51. de Motyensibus οὐ κατεπλάγγισαν, inquires, τὴν τοῦ Λιονυσίου δύναμιν. WESS.*

680. 31. Προῶτον] Προῶτοι Reg. I. Co. Praestaret πρώτην, ut Rhodam, voluit. WESS.

680. 38. Ἦν οἱ Μοτ. τότε διέσκαψαν] *Sic malo, secutus optimarum membranarum fidem. Supra L. II. 13. διέσκαψε τὸ προειρημένον ὄρος κατὰ τὴν ὄψιν. Mox ὡς μὴ προσόδους ἔχοντες erunt fortasse, qui praeeptabunt. Ego nihil demuto. Utrumque enim haud mali commatis, sicuti Cl. Ti. Hemsterhusius ad Luciani Prometh. c. 6. docebit. WESS.*

680. 45. Λεπτίτην τὸν ναύαρχον] *Tyranni frater Leptines erat, ut diserte c. 102. et in Plut. Dion. p. 961. E. proditur, cuius fidei ac curae et classem et Syracusas saepe permisisse memorat Dio Chrysostom. Orat. LXXIII. p. 632. E. WESS.*

681. 47. Σικανοὶ μὲν πάντες] *Aut Σικανοὶ μὲν ὅν πάντες, aut καὶ Σικανοὶ μὲν πάντες dicerem legendum esse, nisi aliis in locis huius scriptoris eodem modo μὲν positum reperirem. ΣΤΕΡΗ.*

681. 51. Ἀγκύραι, Σολοῦς] *Hoc verum urbis posterioris nomen, ex Σολοεῖς contractum, uti Σολεντιῖνοι, vel potius Σολουντιῖνοι cives indicant. Auctor ipse Σολοῦντα adpellat c. 78. et L. XX. 70. De priore, cui haec nomen Ἀγκύραι, cuius incolae Ἀγκυραῖοι post pauca memorantur, summum apud alios silentium est. Ph. quidem Cluverius Sicil. Antiq. L. II. p. 373. Siciliae urbibus, Nostri auctoritate motus, Ancyras transcripsit: sed contra venit Iac. Gronovius, ad Stephanum voc. Ἀλικυαί, haec Ἀλικυαί, et statim Ἀλικυαίων scriptum primitus fuisse, decernens. Causam vir praestanti eruditione, qua expugnatus in hanc opinionem descenderit, addere noluit; hanc tamen suspicor. Auctor quinque duntaxat Sicavorum urbes in Carthaginiensium fide perseverasse, ceteris ad Dionysium sese adiungentibus, adfirmat. Et tamen c. 54. Ἀλικυαίων Carthaginiensium socios, cum eorum agrum vastaret tyrannus, ad illum transiisse demum subdit. Necdum*

ergo Ἰλιζία hoc tempore Dionysio parebant. Adde iam, Ἀγκύρας Siciliae nusquam praeterea recenseri, inque propriis nominibus frequentia librariorum esse delicta, et plausibilis videbitur viri Clarissimi coniectura. WESS.

681. 54. Ἐλεγγάτισε καὶ ἐδεδροστόμησε] Marginalem hic animadversionem λευγατίσας ἐδεδρ, propter concinnitatem facile admiseric. Quae proxime sequuntur in τὴν δὲ reformentur. RHOD.

681. 55. Καὶ Ἐντελλάνων] Ab urbe Ἐντέλλη formatur Ἐντελλίνος *Entellinus*, utroque sermone, nunquam *Entellanus*. Ipsemet auctor τῶν Ἐντελλίνων πόλιν dixit L. XVI. 68. Citra dubium ergo καὶ Ἐντελλίνων et hic olim fuit, Ph. Cluverio admo-  
nente Sicil. Antiq. L. II. p. 376. WESS.

681. 59. Ἰμύλων] Non muto ducis id nomen, quantumvis Reg. 2. et Clar. Ἀμύλων expostulent. Idem esse videtur ac Ἰμύλων c. 57., quem Polyæn. Strat. L. V. 10. 2. Frontinus Strat. L. I. 1. 2. et Iustinus L. XIX. 2. Ἰμύλωνα et *Himilconem* vocitant. WESS.

681. 65. Νομίῳν ἀντιπερισπασμόν τινα ποιῆσειν] Ἀντιπερισπῆν inimicum est a suscepto consilio ad sua defendenda retrahere. Auctor L. XVIII. 38. de Aetolis, in Thessaliam incurrentibus, ut Antipatrum ex Asia retraherent, ἀντιπερισπῆσαι βουλόμενοι τὸν Ἀντίπατρον. Paullo aliter Polyb. II. 45. πραγματικῶς ἀντιπερισπῆσαντος ἐκείνου (Ἀράτου) καὶ λυμνημένου τὰς ἐπιβολὰς αὐτῶν. Notat enim, ut bene Casaubonus, consilia eorum in contrarium vertente et inpediente. Hinc ἀντιπερισπῆσμα ποιῆν, sive ἀντιπερισπασμόν, uti hic; alterum dabit Polybius III. 106., ubi Romani L. Postumium in Galliam valida cum manu mittunt, ut Gallos, Hannibali militantes, in patriam avocarent: βουλόμενοι, inquit, ποιῆν ἀντιπερισπῆσμα τοῖς Κελτοῖς, τοῖς μετ' Ἀντίβου στρατειομένοις. Idem et ἀντίσπῆσμα, quo de alias. WESS.

681. 72. Καὶ σχεδὸν ἅπαντα καταλύσας] Natum est ex καταλύσας, quod de navibus, cum quassae et hiscentes merguntur, tritissimum. Infra L. XX. 53. καὶ τῶν νεῶν ὅς μὲν κατέδυσεν ubi in scriptis quibusdam et Basileensi edito κατέλυσεν. Similem mendam et alias eluimus. WESS.

681. 89. Ἐπὶ τὸν τῶν Συρακουσίων πόλεμον] Scripserat ἐπὶ τὴν τῶν Συρακ. πόλιν, quod scribendi compendium mutasse videtur, sicuti apud Plutarchum Alcib. p. 196. ἢ τῶν πολεμίων φιλοτιμία progenita est ex τῶν πόλεων φιλοτιμία. WESS.

682. 5. Ραδίως διεκλύσας τὰ σκάφη] Commeminit huius rei Polyænus Strat. L. V. 2. 6., sed paullo distinctius: ἐπὶ τῆς περιχοίσης ἄκρας τὸν λιμένα τόπος ἦν ὀμαλὸς καὶ πηλώδης, εὖρος εἴκοσι στάδια, ταῦτον οἱ στρατιῶται ἕνλοις φαραγγώσαντες ἐπερήνευκαν ὄγδοήκοντα τριήρεις ἡμέρᾳ μιᾷ. Quo loco φαλαγγώσαντες scriptum fuisse opinor, et novo usu adhibitum de

palangis ligneis, quas navibus subiiciebant, ut ex uno in alium pertraherentur locum. *Φάλαγγες* et *γαλάγγια* αἱ ἐπιειθέμεναι *δοκοὶ τοῖς νεωλοκοιμένοις σκάφεισι* apud Eustathium in Hom. p. 285. Nasci hinc potuit *γαλαγγῶσαι*, *palangis naves transferre*: quod et in Graecorum literis fuisse *γαλάγγωμα* et *γαλάγγωσις*, etsi significatione discrepent, testantur evidentissime. Nec pugnabo tantum, si magni viri coniecturam huic praeposueris. Id certe Polytaeno debetur, quod eius diligentia et loci ingenium, et triremii numerus, et suscepti operis magnitudo clarius elucescant.

WESS.

682. 13. *Αὐὰ τὸ πρότως εὐρεθῆναι*] Vide sis c. 43. WESS.

682. 22. *Τοὺς ὑπὸ τῶν τροχῶν πύργους*] Putes ἐπὶ τῶν *τροχῶν* scribi debuisse: sed bene habet. Intelliguntur *πύργοι ὑπὸ-τροχοί*, i. e. turres, quae subieceris rotis ad muros admovebantur. *Ὑπότροχον σχεδῖαν, ὑπότροχον σκέπασμα* et *ὑπότροχον κοῖον* non tibi Athenaeus de Machin. p. 4., si desideres, negabit. Ipse auctor Demetrii Helepolin *ὑπότροχον βάρος* L. XX. 92. adpellans suum illustrat. Optime vero Rhodomannus eam coniecturam proscripsit, qua *ἑξαφόρους ὕψους* quae a senis promoverentur correxerat olim: colore enim omni defecta erat. Adi Lipsium Poliorc. L. II. 4. WESS.

682. 30. *Ἐβάσταζον ἄνδρας ἐν θωρακίοις*] Vertitur *militēs loricatedos*. Credo tabulati fuisse genus, quod ex antennis suspensum milites, qui hostium machinas succenderent, contineret. *Pluteum* vocat Vitruvius L. X. 21. Quae enim apud Athenaeum de Machin. p. 6. ἐπὶ δὲ τοῦ ἐπιχειρήλου καὶ τῆς κρησθόχης πηγγεται *ΘΩΡΑΚΙΟΝ*, ὥστε ἐν αὐτῷ ἀσφαλέστατα δύνασθαι ἐστάναι τοὺς ἐποπτεύοντας, ea Latine expressit: *supra caput eorum, quae continebant arietem, collocatum erat PLUTEUM, turriculae similitudine ornatum, uti sine periculo duo milites tuto stantes prospicere possent*. Simile quiddam spectavit auctor L. XVII. 44. de Tyriis, qui corvis ferreisque manibus *ἀνήραζον τοὺς τοῖς ΘΩΡΑΚΙΟΙΣ ἐγεσθῶτας*, i. e. in plateis aut propugnaculis stantes. Aliud Aelianus de Animal. L. XIII. 9., elephantem ἐπὶ τοῦ καλουμένου *θωρακίου* tres bellatores ferre posse prodens. Intelligit turriculae id genus, e quo, belluae tergo inposito, dextra sinistraque milites tela spargebant. WESS.

682. 42. *Πρὸ ὄφθαλμῶν λαμβάνοντες*] Confer L. XV. 10. WESS.

683. 55. *Ἐπιβάθρας κατεσχεύασαν*] *Μοχ σανίδας* adpellat. Ponticuli erant, *γέφυραι* propterea Appiano Myr. p. 10. ed. Hoeschel, quos e turribus in muros obsessae urbis demittebant, ut pugnaturis transitorisque accessum darent. Noster L. XVII. 43. τῶν γὰρ *Μακεδόνων προσαγαγόντων πύργους ὑψηλοὺς — καὶ διὰ τούτων τὰς ἐπιβάθρας ἐπιβαλλόντων*. Vitruvius L. X. 19. *adscendentem machinam vertit, et in fine cap., de accessu, qui*

ἐπίβαθρα Graece dicitur. utrumque dubio et laxo admodum sermone. Vide Iust. Lipsium Poliore. L. II. 4. WESS.

683. 56. Ἐκ χειρὸς συνέβαινεν εἶναι τὴν μάχην] Frequenter ad eum modum Diodorus supr. c. 24. XVII. 45. 84. Non minus venuste ὡς ἐν χειρὸν ἢ μάχη ἐγένετο, et brevi post καὶ ἐν χειρὸν τὴν μάχην ποιήσας Arrianus Exp. Alex. L. II. 10. καὶ ποιήσασθαι τὴν μάχην ἐν χειρὸν Libanius Basil. p. 133. C., pro quo Sallustius Iugurth. c. 57. cupere praelium manibus facere. Ἐπὶ πόλεμος ἤδη πον ἐν χειρὸν γέγονεν Procopius Bell. Goth. L. III. 34., καὶ ἐν χειρὸν τῆς μάχης αὐτοῖς ὠδομένης Heliodor. Aeth. L. V. p. 258. WESS.

683. 65. Ἐπηγείροντο ταῖς ψυχαῖς] Id ἐγείρεσθαι τοῖς θυμοῖς c. 69. De leone, caudae verbere iram accendente, Aelianus de Animal. L. VI. 1. τῇ ἀλκαίᾳ ἐαυτὸν ἐπεγείρει μαστίλιον. Libanius Proshonet. ad Iulian. p. 182. A. φόβος δὲ καὶ τιμῆς ἔλπις, ἢ μὲν ἐπεγείρει πρὸς ἀρετὴν etc. haec quidem ad virtutem erigit, ex Sallustio Iug. c. 23. Diversum hoc Iosephi est de Bello Iud. L. I. 28. 1. Ἀντιπάτρω δὲ — μῖσος ἀφόρητον ἐκ τοῦ ἔθνους ἐπεγείρεται. WESS.

683. 72. Τὰ ὡμῶς κερρημένους τοῖς τῶν Ἑλλήνων etc.] Salebrosam orationem planiorem reddidisset, aut ὅτι ὡμῶς κερρημένοι — ἡλωκόσι, ταὐτὸ προσεδόξων πείσεσθαι, aut τὸ ὡμῶς — ἡλωκόσι, ταὐτὸ προσδοκᾶν etc. scribendo. WESS.

683. 78. Κακῶς ἀπήλλατον] Consule not. in L. III. 21. WESS.

684. 4. Ὁμότητα σπεύδοντες ἀμύνεσθαι] Hic ante ὁμότητα pone τὴν, aut scribe ὡς ὁμότητα quam crudelissime. RHOD. De articulo non intercedo. Praestiterit tamen, si quid mutandum, ex Clarom. ὁμότητι adsciscere: id enim haud incongruens in victoribus crudelitatis vicem, ut hic Siculi, superatis reddere studentibus. WESS.

684. 22. Ἐκατὸν μυαῖς ἐστεφανώσαε] Harpocraton e Lycurgi quadam oratione servavit καὶ Καλλισθένην ἑκατὸν μυαῖς ἐστεφανώσατε, idque non aliud esse ac ἐτιμήσατε recte subiungit. Plut. Timol. p. 244. B. τὸν μὲν οὖν ἄνθρωπον ἐστεφανώσαν οἱ Κορίνθιοι δέκα μυαῖς. Athenaeus L. XII. p. 538. B. Γοργὸς ὁ ὀπλοφύλαξ Ἀλέξανδρον Ἀμμωνος υἱὸν στεφανοῖ χροσοῖς τρισχιλίας. Neque Noster hinc abit L. XI. 26. et in Excerpt. Vales. p. 334. Minus obvium στεφανωθῆναι τεμένεσιν ἐν Λαοδώνῃ, de quo Is. Casaubon. ad Athen. V. 8., et δόξῃ καὶ τιμῇ στεφανωθῆναι in Epist. ad Hebr. II. 9. etsi proxime absit Manethonis L. V. 258.

Ἀρχῇ καὶ πίστει καὶ τιμαῖς ἐστεφανώσεν. WESS.

684. 36. Σοφοκλῆς ὁ Σοφοκλέους] Huic Suidas inter Sophoclis filios locum negat, nepotem eius ex Aristone filio, et septem duntaxat victoriis illustrem prodens. Diodoro quodam

modo favet poetae aetas, filio, quam nepoti, paullo convenientior. Senior enim Sophocles exeunte Olymp. xciii. fato concessit, iunior, ὁ νεώτερος Clementi Alex. Protrept. p. 26., Olymp. xciv. ad finem vergente illustrari coeptus est: distabit ergo a parentis morte annis perpaucis. Pro Suida tamen obmoveri potest provecta Sophoclis aetas, qua nepotes adules et in similem laudis gloriam exsurgentes commode potuit videre. Nihil itaque decerno. WESS. Suidae consentit argumentum Soph. Oed. Col. ex cod. Laurentiano editum, τὸν ἐπὶ Κολωνῶν Οιδίποδα ἐπὶ τελευτηζῶντι τῷ πάππῳ Σοφοκλῆς ὁ υἱοῦς ἐδίδαξεν τὸς ὡν Ἀριστοτοῦς. Vnde Σοφοκλέους υἱωνὸς vel υἱοῦς Diodoro restituant Thierschius Act. phil. Mon. I. 3. p. 323. et Clintonus Fastis Ol. 96. I., errorem librarii imputantes qui in scriptorem conferendus erat: id quod Clintonius ipsum ipsam advertisse video ad simile Diodori XX. 29. peccatum p. 215.

684. 42. Γάιος Λίνμος] Pro Λίνμος refice Δουῖλιος. Deinde Μύρκος Οὔετοῦριος καὶ Οὐολέριον Ποβλίλιος scribe. RHOD. Occupavit Rhodomanni correctionem C. Sigonius ad Livii L. V. 13., nec longe inde desleat Pighius Fast. ad ann. cccliv. WESS. • Conf. Borghes. II. p. 105, s.

685. 44. Εὐπολις Ἡλεῖος] Εὐπόλιμος vero nomine fuit, ni fallit Pausanias L. VIII. 45., qui praeterea L. VI. 3. Leonem Ambraciotam victoriae id decus inpetrasse, sed interversum ab Eupolemo, corruptis duobus Hellanodicis, fuisse addit. In Eupolemi nomine Pausaniae adsentitur Africanus. WESS.

685. 48. Ἀλικυαῖοι] In Thucydide L. VII. 32. Ἀλικυαῖοι, quod hinc atque ex Ligorii numo ΑΛΙΚΥΑΙΩΝ viri docti emendant. Sita eorum urbs Entellam inter et Lilybaeum erat, teste Stephano in voc. Ἀλικύαι. WESS.

685. 51. Καὶ πῶρ ἐνέντες] Pausanias, si cui dubium hoc videbitur, defendet L. IX. 10. πῶρ ἐτόλμησεν ἐς τὸ τέμενος ἐρεῖναι τοῦ Ἀπόλλωνος. Et L. X. I. p. 800. καὶ ἐνέντας πῶρ, οὕτως ἤδη διαφασθῆναι. Adde inferius c. 73. huius libri. WESS.

685. 63. Βασιλέα κατὰ νόμον] Dixi de hoc Carthaginien-sium magistratu L. XIII. 43. WESS.

685. 67. Ὑπὲρ τὰς τριάκοντα μυριάδας] Copiarum numerus, quantumvis Polyaeo L. V. 2. 9. et auctori c. 76. non improbat, fidem paene excedit. Sed Ephoro perpetua fere in hoc genere cum Timaeo discordia est. WESS.

685. 79. Τοῦτο δ' ἐμνησανήσατο πρὸς τὸ μηδένα etc.] Non oblitī strategematis sunt Frontinus Strat. L. I. 1. 2. et Polyaeus L. V. 10. 2., in quo si scripseris et interpunxeris καὶ σημηγνάμενος εἰς γραμματεῖα τοῖς κυβερνήταις ἔδωκε, συνθέμενος, ἐὰν ἀποσπασθῶσιν ἐν τῷ πελάγει, ποιήσῃ συνάπτειν, ἵνα μὴ ὑπὸ τῶν ἀντιομόλων ἐξαγγελθῆ· λαμπιῆρά τε τὸ πρόσθεν μέρος πεφραγμένον, ὅπως μὴ etc. constabit oratio, nec alia medicina opus erit: suspendit enim ἔδωκε vocem λαμπιῆρα ex sese. WESS.

685. 86. Φεροῦ δὲ πνεύματος ὕψους] Sic L. XX. 97. φεροῦ δὲ πνεύματος αὐτοῖς ἐπιγινόμενον etc. Idem recipi apud Strabonem L. VI. p. 431. ex margine debuerat. Ἐϋφορον πνεῦμα in Xenophontis *Rer. Gr.* L. VI. p. 459. Venuste et ex vero Plutarchus T. II. p. 821. D. καὶ ὅλως ὅταν ἀλήθεια καὶ ἄρετι, προσζήνηται ΦΟΡΟΝ ἐστι πνεῦμα καὶ βέβαιον ἐπὶ τὴν πολιτείαν. WESS.

685. 94. Αἱ δὲ λοιπαὶ, πλήρεις οὔσαι] Mendi sibi suspectam hanc dictionem profitetur Rhodomannus, neque iniuria. Quam enim orationi vim addit hoc πλήρεις vocabulum? Dicemusne propterea naves eas periculum haud difficulter evitasse, quod tumidis velis pergerent cursum et plenae? Id vero usus redarguit: citius avolant, si vento propellantur secundo, minus plenae. Ad hoc, celerius aufugerunt, quod longius alto in mari ab illis abessent, quas Leptines depressit. Ergone οὐ πλήρεις, an οὐ πλησίον οὔσαι, an κοπήρεις οὔσαι, aut his quiddam simile dederat? Mihi sine Codd. auxilio certum quid constituere non placet. WESS.

686. 5. Διακρὸν τῶν συμμαχίδων πόλεων ἀπεωσμένος] Infra L. XVIII. 66. τὸ γὰρ πλῆθος τῶν δημοτικῶν ἀπωσμένον τῆς πολιτείας. Sed ibi violentiam complectitur, quae necessaria hic quidem non est. WESS.

686. 17. Ἀπέστησαν δὲ παραπλησίως etc.] Interpres de suo quaedam est admensus; neque absurde ille. namque τῶ παραπλησίως indicatur, plures ex Sicanis, desertis Dionysii partibus, ad Carthaginienses transiisse, idque exemplum Halicyenses sectatos esse. WESS.

686. 27. Οὔσας πλείω etc.] Ita solere auctorem voce πλείω abuti, saepe monitum est. De Messana eiusque opportuno situ Ph. Cluverius S. A. L. I. p. 81. WESS.

686. 32. Κεφαλοίδιον] Vera ea urbis scriptura, cuius antiquissima haec mentio. Κεφαλοίδιον Coisl. debetur recentiori oppidi titulo, quo *nova moenia Cephaludi* apud Hug. Falcandum. Vid. ad Antonini *Itin.* p. 92. WESS.

686. 38. Ἐπὶ τῆς Πελωρίδος] Πελωριάδος, discordibus tamen scriptis membranarum, in L. IV. 85. Discrimen pusillum est, his Πελωρίδα, illis Πελωριάδα probantibus. Conf. Ph. Cluverium Sic. Ant. L. I. p. 80. WESS.

687. 53. Ἐξεδέχοντο κατὰ τὴν γήμην] Ut haec sint omnia ipsius Diodori, valde metuo: mallet quidem certe inducta praepositione ἐξεδέχοντο τὴν γήμην legi. Saepe γήμη Dei *responsum*, aut etiam *omen* est. Dio Chrysostomus Or. XXXII. p. 364. D. ἵστε δὴ πού τις τοῦ Ἄπιδος γήμας ἐνθάδε ἐν Μέμφει, πλησίον ἑμῶν. Vertunt: *scitis haud dubie Apidis famam hic in Memphi prope vos.* Satis quidem absurde. Apidis oraacula intelligit, de quibus Aelian. de *Animal.* L. XI. 10. p. 649. Idem Dio Or. I. p. 12. B. καὶ τὰ πάντα σοφίσματα οὐδενὸς ἄξια πρὸς τὴν παρὰ θεῶν

ἐπίπνουν καὶ γήμην. ubi eadem chorda aberrat Interpres. Melius Serranus in his Platonis Phaedon. p. 111. B. ἐν οἷς τῶ ὄντι οἰκιστὰς θεοὺς εἶναι, καὶ γήμιας καὶ μαρτίαις καὶ αἰσθήσεις θεῶν, quorum dii revera sint incolae, et responsa ac vaticinationes et sensus deorum etc. Nec latuit Xylandrum in his Plutarchi Sympos. L. II. p. 631. A. ὁ δὲ εὐσεβῆς καὶ φιλοθύτης διαγρηματιζὸς ὀνειρώων καὶ ὅσα χορησάμενος, ἢ γήμιας, ἢ ἱεροῖς, ἢ θεῶν εὐμειρία κατώρθωσεν. Quae quidem exempla ad vocis usum abunde erunt. Itaque ἐξεδέχοντο τὴν γήμην non aliud erit, atque omen sive illud responsum e re sua interpretabantur: quod opportunum hic prorsus esse adparet satis. WESS.

687. 56. Πολλοὺς τῶν ἄλλων προεθνμοποιῶντο] Quod substituitur in Coisl. aliisque scriptis Codd. προεθνμοῶντο, placere non potest: aliam enim vim habere adsuevit. Credo insolentia verbi προεθνμοποιῶσθαι, quod alibi lectum non recordor, offensos illud alterum maluisse, etsi improvide. Namque haud pauca hoc in scriptore offendes, quae alibi vix reperias. WESS.

687. 81. Ἐλπίζοντες διανίξασθαι τὸν μετὰξὺν πόρον] Siculum fretum, quod XIII circiter stadiorum latitudine Hercules olim nando tramiserat, sed adprehenso tauri cornu, supr. L. IV. 22. WESS.

687. 86. Τὰ κατὰ τὴν πόλιν φρούρια] Interpres castella, quae per urbem erant. Non ex vero. Himilco ex urbe ad castella oppugnanda excessit, reque infecta in eam, ut subditur, rediit. Sunt τὰ κατὰ χώραν φρούρια, in quae paullo ante diversos abiisse Messenios tradiderat. Itaque aut κατὰ τὴν πόλιν notare debet ad urbem, aut, si id incommodius, scribendum τὰ περὶ τὴν πόλιν φρούρια. WESS.

687. 94. Πλὴν Ἀσσωρίων] Sic ipse auctor c. 78. omnesque alii. Ab Ἀσσωρός est Ἀσσωρίνος apud Steph. et Assorinus ager in Cicer. L. III. Verr. c. 18. Vitium non fugit Ph. Cluverium S. A. L. III. p. 325. WESS.

688. 2. Τοὺς τὴν Κατάνην οἰκοῦντας Καμπανοὺς] Videntur hi Campani ex praesidiariis illis fuisse, quos Cataniae, a se occupatae, Dionysius inposuisse dicitur L. XIV. 16. Adde infr. c. 68., et testatam eam rem videbis. WESS.

688. 7. Περὶ τὸν Ταῦρον καλούμενον] Taurus hic ad stadia CLX Syracensis fuit disseptus, alius ergo ac collis Taurus, in quo Tauromenium post pauca dicitur exstructum. Aberat enim Tauromenium Syracensis spatio LXXVI M. P., si non fallit, non multum certe aberrat, Antonini Itinerarium p. 90. Erit proin Ταῦρος ἄζρον sive promontorium Taurus, de quo Ptolemaeus L. III. 4. et Ph. Cluver. S. A. L. I. p. 136. WESS.

688. 10. Τούτων δ' ὀλίγα μὲν ἦσαν τριήρεις] Aut μὲν hic expungendum, aut aliquot verba deesse dicendum est: veluti

si ita legas, *τούτων δ' ὀλίγοι μὲν ἦσαν τριήρεις, αἱ δὲ πλείους* etc. vel *αἱ δὲ πλείοιςται*. STEPH.

688. 17. *Ὅτε πού πρότερον etc. συνέβαινεν*] Fuit, cum ὅτε πού satis incommo- dum hoc mihi loco videbatur. Noveram Hesiodi Theogon. v. 416. *καὶ γὰρ νῦν ὅτε πού τις ἐπιχθονίων ἀνθρώπων Ἐρδῶν etc. ἰλάσκηται*. Sed et id paullo hinc esse diversum et ibi satis tempestivum. Accedebat eodem, exulare ex optimaē notae schedis molestam vocem *ποῦ*, adeoque suspectam quodammodo posse videri. A qua quidem opinione necdum recedam, modo pro ὅτε refigere ὅτι licitum fuerit. Tum sententia erit, cognosei vix potuisse, urbem incolis olim frequentatam fuisse. WESS.

688. 29. *Ἡγεμόνα δὲ οὐκ ἔχοντες*] Nihil in his quod offendant: in scriptura librorum Coisl. et Reg. I. multum, nisi forte barbarum Siculi ducis nomen dare voluerint, de quo nihil decerno. Dionysium Naxiorum urbem Siculis contribuisse supra prodidit c. 16. WESS.

688. 36. *Ταυρομένιον ὠνόμασαν*] Tauromenium hoc tempore conditam fuisse, indicatur c. 87. et 96. A qua tamen opinione recedere videtur L. XVI. 7., ubi de Andromacho, Timaci patre, *οἰκίστας δὲ τὸν ὑπὲρ τῆς Νάξου λόφον, τὸν ὀνομαζόμενον Ταῦρον, καὶ μέγας κατ' αὐτὸν πλείω χρόνον, ἀπὸ τῆς ἐπὶ τοῦ Ταύρου μονῆς ὠνόμασε Ταυρομένιον*. Si enim Timoleontis aetate Andromachus in Taurum collem conduxerit Naxios, et a mora in eo Tauro Tauromenium appellarit, nondum utique eo nomine urbs Dionysii senioris tempore insignita fuit. Ph. certe Cluverio S. Antiq. L. I. p. 95. ita sibi pugnare illa sunt visa, ut Diodorum sui oblitum fuisse perscripserit. Equidem auctori, quod omnibus aliis, usu potuisse venire non negavero, excusavero tamen hac in re. Agit posteriore loco de Naxiis, quos patriis sedibus a Dionysio deturbatos collegerit Andromachus, et Tauro in monte collocarit: Andromachum ipsum vocat *Ταυρομενίτην*, clare innuens, Tauromenium iam fuisse, antequam Naxii id oppidum occuparent. Quod vero subdit de nomine, ea re confirmatum urbi titulum ab Andromacho et Naxiis declarat. Quare hoc loco Tauromenii, a Siculis Dionysii aetate conditi, meminit: illo altero eiusdem Tauromenii, a Naxiis exsulibus, Andromachi opera, in- sessi, quoque modo ἀπὸ τῆς ἐπὶ τοῦ Ταύρου μονῆς vetus urbi nomen perseveraverit. Stat a me pro Diodoro Clarissim. Sig. Havercampus Comment. ad Parutae Numism. p. 907. WESS.

688. 44. *Ὑπὸ τοῦ καλουμένου ῥύακος*] Vid. not. in L. V. 6. *Ῥύακος* vocant fluentia liquefactorum saxorum atque ignis, ex Aetnae crateribus magno inpetu prorumpentia et vicina quaevis adurentia. Plato Phaedon. p. 111. E. *ὥσπερ ἐν Σικελίᾳ οἱ πρὸ τοῦ ῥύακος πηλοῦ ῥέοντες ποταμοὶ καὶ αὐτὸς ὁ ῥύαξ*. cuius verba illustrat Strabo L. VI. p. 412. B. *περὶ τῶν ῥύακων* et col-



liquatis lapidibus plura commentatus. Adde Tollium ad Longinum, verbis Platonis contra Fabrum dextre usum, sect. XXXV. p. 196. Post vero pauca forte melius erit ὅπερ καὶ συνετέλεσαν. WESS.

689. 69. Τῶν νεῶν πλήρη] Ex antecedentibus et consequentibus sensus exigit, ut legamus τῶν πεζῶν πλήρη, *pedatum repleta*. P. M. M. Nisi νεῶν dederit, eaque voce milites indicarit, quod tamen mihi nondum plene persuadeo, transeundum erit in viri doctissimi sententiam. Habent praeterea minus commodam sedem voces παραχοῦμα μὲν, quae si alio conmigrarent, legereturque παραχοῦμα μὲν οὐ μετρίως ἠγωνίασαν, orationem non conturbarent. Porro ἐπιγερομένης Reg. I. libri, etsi huic loco convenientius videatur, quia sola eius auctoritate stabilitur, in contextum, quem vocant, non admisi. WESS.

689. 78. Ταῖς πρώταις τῶν Καρχηδονίων, τὸ μὲν πρώτου etc.] Claudicat oratio, quae tum demum recto talo perget, ubi ταῖς πρ. τῶν Καρ. προσμίξας adiunxeris. Sic c. 55. καὶ ταῖς πρώταις προσμίξας, εὐθέως τινὰς αὐτάνδρους κατέδυσε. WESS.

689. 81. Ταῖς μὲν ἀρεταῖς ὑπερεῖχον etc.] Interpres vocabulis transpositis legisse videtur ὑπερεῖχον οἱ περὶ τὸν Αἰπτιήνην, τοῖς δὲ πλ. οἱ Καρχηδόνοι. Atque ea sine dubio auctori sententia sedit, quae tamen minore molimine eadem erit, modo ταῖς μὲν ἀρεταῖς ὑπερεῖχοντο Καρχηδόνοι, *virtute quidem Carthaginienses superabantur* etc. reflexeris cum Iac. Palmerio. WESS.

689. 84. Ἐκ παραβολῆς τὸν ἀγῶνα συνισταμένων] Dices ἐκ παραβολῆς idem esse, ac παραβόλως, *audacter et maximo cum periculo*, nisi sequentia commissas arte inter se naves expostularent. Polybius ad eundem modum L. XV. 2. p. 963. ἐκ παραβολῆς δὲ καὶ πέριξ προσμαχόμενοι, κατετίρωσζον τοὺς ἐπιβάτας etc. WESS.

690. 95. Καὶ γὰρ τὸ παρὰ τὸν ναύαρχον ἐλάττωμα etc.] Lege περὶ τὸν ναύαρχον. Vitium peperit fatalis quaedam vocum harum confusio. Vid. Is. Casaub. ad Athen. L. I. 7. et Mos. Solanum ac T. Hemsterhus. in Lucian. Haleyon. c. 2. WESS.

690. 17. Συγκλεισθήσεσθαι] Pro συγκλεισθήσεσθαι restituendum arbitror συνετελεσθήσεσθαι, atque sic verti. RHOD. Huic verbo vitium inolevisse non opinor: ipsemet auctor suum agnoscit; nam et L. XII. 55. οἱ μὲν Μιτυληναῖοι λειψθέντες συνεκλείσθησαν εἰς πολιορκίαν. Succurrendum ergo hianti sermone alia via, qui plenus erit, si οἱ δὲ Σικελιωταὶ κατὰ τὴν πορείαν etc. probaveris. Rati enim Siculi, dum Syracusas properant, sese ea in urbe difficili obsidione pressum iri, ut cum Poenis in certamen descenderet, Dionysio auctores erant. WESS.

690. 18. Διὰ τὴν γεγενημένην νίκην] Praeteriit Interpres. Credo vocabulo quodam defecta esse. Addideris ῥαθυμοτέροις aut μετεωρισθείσι, sententia erit, Himilconem parta victoria so-

*cordiorem sive elatiorem esse factum, et propterea oppugnationi opportunum. WESS.*

690. 34. *Εἰς τὰ ἐγγύς τῶν φρουρίων*] Stephanus ita correxerat. Ego vero suam in sedem revocavi, iubenti sermonis ingenio obsecutus. WESS.

690. 42. *Τοὺς τὴν Ἐντελλαν κατοικοῦντας etc.*] De illis superius c. 9. WESS.

691. 45. *Τὸ τῶν Ἑλλήνων ἀπεδ. πολέμιον etc.*] Puto deesse nomen ἔθνος vel γένος post Ἑλλήνων. STERH.

691. 55. *Πολύξενον τὸν κηδεστὴν*] *Socerum* suo sibi more Rhodomannus verterat. Affinem fuisse Dionysii docuit L. XIII. 96. auctor. WESS.

691. 68. *Εἰσθεόμεναι μὲν ὑπὲρ τρισχιλίας*] Expunge *τοῖς*, et post *φέρουσαι δὲ* interpone *στρατιώτας*. RHOD. Vereor, ut persanatus ea medicina locus sit. Quid enim *εἰσθεόμεναι* et quam tandem vim obtinet? A *θέω* si venit, quis ea forma usurpavit? Cur porro, si supra mille fuerint naves onerariae, continuo additur, in universum prope duo millia fuisse? Mihi haec intricatissima. Diceres scriptorem Reg. I. Cod. suo *εἰσθεόμεναι* aliud spectasse, idque nobis innuisse, naves onerarias, dum in portum plenis pergerent velis, Syracusanis esse visas numerum trium millium excedere: quae quidem sententia ab hoc loco aliena non foret, si sermonis indoles pateretur. At quis *εἰσθεῖσθαι* adhibuit alius et ea significatione? Nemo profecto, quantum quidem rescire potui. Itaque nihil iuvat, haeretque altissime menda: quae ut elueretur meditati multa se sponte subiecerunt, veluti *εἰς θέαν μὲν ὑπὲρ τρισχιλίας, quae speciem trium et amplius millium prae se ferebant: aut εἰσδεχόμεναι ὑπὲρ τρισχιλίας, φέρουσαι etc. quae quidem capaces erant trium et ultra millium, ferebant autem*, et reliq. Sed placere non potuerunt. Desino ergo, et palmam aliis relinquo. WESS.

691. 76. *Νεῶν δὲ μαζοῶν διακοσίων*] 'Quid haec ad pedestrem exercitum? Ni dicas, longas has naves litora legisse, dum exercitus Syracusas pergeret, ut festinanti praesidio esset, nihil omnino. Imo id si pertenderis, necdum opportuna eorum mentio erit. Concesserat Dionysius in urbem, portus a victoribus erat obstructus, classis, quae incommodaret, nulla. Ne dicam dolo, videntur ex superioribus huc commigrasse. WESS.

691. 80. *Ἀπέχον τῆς πόλεως σταδίου δώδεκα*] Prope Olympium, Iovis id templum erat, mille et quingentis passibus ab urbe, uti Livius L. XXIV. 33. docet, distans: quod interval- lum belle satis XII his stadiis congruit. WESS.

691. 95. *Καὶ τοὺς νεῶς τῆς τε Δήμητρος καὶ Κόρης ἐσύ- λησεν*] Erant in ea Syracusanæ urbis parte, cui Neapolis cognomen, duo templa egregia, Cereris unum, alterum Liberæ, Ciccone L. IV. Verr. c. 53. auctore. Haec intelligi videntur, ut adeo

Achradinae quoddam quasi suburbium Neapolis sit censita. Sic certe Ph. Cluverius S. A. L. I. p. 153. WESS.

692. 4. *Ἐπὶ ἧς μυχὸν ὑστερον* etc.] Conf. c. 71. WESS.

692. 8. *Δημαγέτης*] Sic dedisse auctorem, probe vidit Rhodomannus. Non enim aliter adsolet. Vide L. XI. 26. et c. 38. WESS.

692. 10. *Ἐπὶ τοῦ Πιλλυμυρόν*] *Pillemarium undosum* summi poëtae promuntorium erat contra Syracusas, in magnum portum procurrens, et eius fauces coartans, opportunum castello exstruendo. Nicias id optime perspexerat, ut ex Thucydide L. VII. 4. et Cluverio Antiq. Sic. L. I. p. 180. cognoscere. WESS.

692. 21. *Λυρέσιος μὲν καὶ Λεπιόντης*] Mendosus esse hic locus videtur, aut in eo positus esse nominativus absolutus pro genitivo absoluto, ut et alibi. STEPH. Nihil mutantium: haec absolutae structurae forma, qua nominativus genitivi sedem occupat, Graecis oppido familiaris est. Exempla collegerunt viri clarissimi Is. Casaubonus ad Polyæn. I. 18. et T. Hemsterhusius in Lucian. Contemplant. c. 2., pluresque alii, a nobis alio loco excitati. De Pharaeida, qui Lacedaemone Dionysio suppetias advenit, Polyænus Strat. II. 11. WESS.

692. 33. *Τὰς ἀγχιμάλωτους ναῦς ἀναψάμενοι*] Solet ἀναψάμενοι hoc usu terere. Supra L. XIII. 19. *οἱ δὲ Συρακοῖσιαι — τὰς ναῦς ἀναψάμενοι κατήγαγον.* et hoc libro c. 60. *ἀνήσαντο τὰς ἀγχιμάλωτους ναῦς.* Atque ita de navibus, quae captae et fanibus ex aliis aptae trahuntur. Alia potestas est in his Philonis Iud. de Leg. ad Cai. p. 1012. C. Tiberius *τοῖα πρὸς τοῖς ἀγοσι ἔτη γῆς καὶ θαλάττης ἀναψάμενος τὸ κράτος.* et de Rer. Div. Hered. p. 482. C. *ἐπὶ τοῦ παντὸς ἀρθρώπων γένους ἐβασίλευσε, τὸ τῆς γῆς ἡμῶν καὶ θαλάττης ἀναψάμενος ἀγορατὶ κράτος.* Imperium indicatur, quo rerum summa ex aliquo pendet. Unde *ἀνημμένος τὴν ἀρχὴν* et *ἀνημμένος τὴν ἡγεμονίαν*, cui summa imperii mandata est, apud eundem saepissime. Vide Librum de Ioseph. p. 530. E. Leg. Cai. p. 1019. D. et in Euseb. Praep. Evang. L. VIII. 14. p. 386. C. WESS.

692. 41. *Ἦσαν ἀγχιμάλωτοι*] Conf. superius c. 10. WESS.

693. 58. *Ληφθέντας γὰρ* etc.] Omnino necesse est scribere *ληφθέντας* per ει, id est *νικηθέντας*, victos. Sic autem saepe usurpat *λείπεσθαι* et eius participium *ληφθεῖς*, ut p. 61. *παρταζόμενος ἀξιολόγω δυνάμει καὶ ληφθεῖς, τῶν τε στρατιωτῶν τοὺς πλείστους ἀπέβαλε, καὶ αὐτὸς μετὰ τέκνων ἑπτὰ καὶ γυναικὸς ἀγχιμάλωτος ληφθεῖς ἀρεσταρῶσθη.* Non semel autem *ληφθεῖς* pro *ληφθεῖς* mendose in exemplaribus nostris scriptum fuit. STEPH. et RHOD. *Ληφθέντας γὰρ Καρχηδονίων* etc.] Rescripsi ad hunc modum: posterius ex Codd. praeis, prius ex certa virorum praestantium coniectura. Quid enim frequentius scriptis in schedis horum vocabulorum permutatione? Vid. not. L. XI. 68.

Diogenes Laert. I. 115. καὶ δὴ καὶ ἐλήφθησαν πρὸς Ὀρχομενῷ. Imo ἐλείφθησαν victi sunt. WESS.

693. 71. Τοῦ Φοινικοῦ πολέμου] Lege Φοινικιστοῦ, qui error saepe obvius. De Herculis Gaditani templo Appian. Bell. Hispan. p. 425. καὶ θρησκέεται νῦν ἔτι Φοινικῶς, ubi Φοινικῶς oportuisse recte animadvertit S. Bochartus de Phoen. Colon. L. I. 34. p. 610., sicuti τὰ Φοινικὰ συγγεγραφοῖτες conmode in τὰ Φοινικὰ convertit Is. Casaub. ad Athen. III. 36. WESS.

693. 76. Οὐκ ἐπίσης βραβεύων τὸ δίκαιον] Superiora si ad mercenarios milites, ut videntur, pertinent omnia, haec locum, quem insident, tuebuntur difficulter. Aptius certe sequerentur aut post δεσποτῶν δουλείας, aut mox post ἐδωρήσατο. Cultum vero admodum est τὸ δίκαιον βραβεύειν in principe et iudice, eum ex aequo et bono ius dicit. Philo Iud. de Creat. Princip. p. 726. A. ὅτε μόνος αὐτὸς ἐβράβευε τὰ περὶ δίκας Μωϋσῆς. et de Iudic. p. 718. D. ἄτοπον γὰρ ἁμαρτήμασιν ἐνόχους εἶναι, τοὺς τοῖς ἄλλοις τὰ δίκαια βραβεύειν ἀξιοῦντας. Hinc Corinthus, ubi proconsulis Achaiae sedes, βραβεύει τὰ δίκαια τοῖς Ἑλλησι in Aristid. T. I. p. 43. et iudex, a quo, pecunia corrupto, male verum examinatur, ὃ ἐπὶ δώροις βραβευτῆς τοῦ δικαίου apud Philon. de Iudic. p. 720. A., qui quidem Iudaeus cum L. I. Allegor. p. 56. D. scribit, ὡσπερ οὖν ὁ δικαστὴς οὔτε κικῆσαι τινὰς προήρηται — γνώμην δ' ἀποφηνάμενος βαρύνει τὸ δίκαιον, mendo inquinatus est. Dederat ipsemet βραβεύει, quod et verborum ordo instaurari sibi postulat et liber Augustanus, quem Canterus inspexit, clare praefert. WESS.

693. 86. Οὐδὲ λόγῳ παρῶρησιαν ἐπάγειν τολμῶμεν] Simplex ἄγειν hoc in genere magis amplectuntur. Mox auctor c. 66. φονεύων μὲν τοὺς παρῶρησιαν ἄγοντας ὑπὲρ τῶν νόμων, eos occidens, qui pro legibus loquuntur libere. Et L. XII. 63. διόπερ οἱ πρέσβεις παρῶρησιαν ἤγαγον ἐν ταῖς Ἀθήναις. Dio Chrysostomus Orat. XXXVII. p. 464. A. παρῶρησιαν δὲ ἄγω διπλῆν. Philo Iud. de Rer. Div. Hered. p. 482. B. πότε οὖν ἄγει παρῶρησιαν οἰκέτης πρὸς δεσπότην; Iosephus Ant. Iud. L. XIX. 7. 1. παρῶρησιαν δὲ διὰ πάσης ὁμιλίας ἤγει. WESS.

694. 6. Ἀλλὰ καὶ τῶν Σικελιωτῶν ἐξουσίως παρέλαβε etc.] Vera et testata res. Vide modo L. XI. 26. In ipsa tamen verborum serie offendit ἐξουσίως, quod ex ἐξουσίων natum opinor. WESS.

694. 18. Ἐπικαίρους πόλεις] Aut redundat hic vocabulum πόλεις, quae Rhodomanni opinio, aut καὶ ἐπικαίρους πόλεις scribendum erit. WESS.

694. 25. Οἰκέταις καὶ μυγᾶσιν ἀνθρώποις] Πλήθος ἀνθρώπων πανταχόθεν μυγᾶδων L. XVI. 15., πόλις συγκλύδων καὶ μυγᾶδων ἀνθρώπων Plut. T. II. p. 661. et Phil. Iud. de Temul. p. 245. C., qui hoc genus saepe coniungit, uti L. II. Allegor. p. 95. E. et L. I. Vit. Mos. p. 625. E. Sintne vero σύγκλυδες

tota Graccia exterminandi atque in *συνήλυδες*, uti apud Strabonem certe videntur L. IV. p. 290., commutandi, quaeram opportuniore loco. WESS.

694. 28. Ὑπηρέτης ἀρχαίων] Conf. adscripta superioris libri c. 96. WESS.

694. 31. Ὡν ταῦτ' ἐφ' ἡμέρα τριάκοντα etc.] Vera lectio est ὧν τὰς ἐφ' ἡμέρα — Καρχηδονίων παρήμι, καὶ τὴν τῶν etc. RHOD. Ὡν ταῦτ' ἐφ' ἡμέρα etc.] Citra omne dubium ἐφ' ἡμέρα iustum est. Vid. L. XI. 22. At ὧν τὰς, sequente Καρχηδονίων, obscurius et inpeditiis. Praeferrem εἰς τὰς ἐφ' ἡμέρα etc. mitto trecenta Carthaginiensium ad Himeram caesa millia. tum recte subsequetur, παρήμι τὴν et reliq. Porro κατὰ Γέλωνα, pro quibus a Gelone Interpres haud bene, non laudo. Fuisse videtur μετὰ Γέλωνα. Syracusani enim Gelonis successoribus aut inviati paruerunt, aut obedientiam negarunt, Thrasybulo possessione tyrannidis deicecto. Verte proinde: praetermitto deletos post Gelonem tyrannos, et contende L. XI. 67. WESS.

694. 36. Οἱ πατέρες ὑμῶν] Lege ἑμῶν. Ita enim Theodorus perpetuo hac oratione. Interpres certe quidem caussam non habebat, cur ab hoc genere discederet. Οὐδὲ τὸν ἀπαγγελοῦντα ἀπέλιπον, quod succedit, Historicis perfrequens esse, dictum alias. Philo Iud. paullo aliter L. I. V. Mos. p. 630. C. ὡς μηδὲ πρὸς ὄρον ἀπολεῖσθαι τὸν ἀπαγγελοῦντα τοῖς ἐν Αἰγύπτῳ τὰς ἀφριδιόους συμφορὰς. Sed eadem sententia. Utuntur et Herodotus L. VIII. 6. Gregor. Nazianzenus Or. IV. p. 118. A. simili dictione, cuius originem pete ex Schol. in Euripidis Phoeniss. v. 1386. WESS.

694. 45. Παρωπλισμένοι συμμαχῶν ὄντες] Mallet fortasse alius καὶ ἄνευ συμμαχῶν ὄντες, tum ob ea, quae subiiciuntur, tum quod παρωπλίσσθαι in illis opportunum sit, quibus arma detracta, ut apud Polyb. II. 7. et supr. L. IV. 10. Cui quidem sine Codd. praesidio non adstipulor. Si tamen liceret, scriberem mox πλήθει τηρούμενοι multitudinem asservati id enim haud paullo concinnius videri poterit. WESS.

695. 70. Ἐν ταῖς συνθήκαις ἐκδότους — συνέθετο] Vid. extremo L. XIII. De Lacedaemoniis, qui plerasque Graeci nominis in Asia civitates Persarum regi foederis conditionibus reliquerant, L. XV. 9. ἐν τῇ πρὸς τὸν βασιλέα συνθέσει τοῖς κατὰ τὴν Ἀσίαν Ἕλληνας ἐκδότους πεποιημένοι. Aeschin. in Ctesiphont. p. 73. ἐκδοτον μὲν τὴν Βοιωτίαν ἕπασαν ἐποίησε Θιβαίοις. WESS.

695. 82. Ἐπηγουπνηκῶς τῇ τούτων ἀπολείᾳ] Sic Excerpt. Vales. p. 409. ἐπαγουπνῶν τοῖς τῆς στρατηγίας ἐντεύγμασιν. WESS.

695. 92. Παρεῖς πρὸς τῇ πόλει etc.] Vir doctus Latine verterat: iuxta urbem pugnam conseri permittens, haud anima-

vertens, vitio hanc rem verti Dionysio. Debuerat, *negligens ad hanc urbem pugnare, ubi victis in notos sibi portus refugium erat.* Modo vero ἐν τῷ Κατ. ἀγιαλῶ est ad Catinensium litus: navalem enim pugnam innuit Theodorus, qua de supr. c. 60. Ad eum modum ἡ ἐν Ἰσοῦ μάχη L. XVII. 36., στρατοπεδείσας ἐν Τύρω L. XIX. 59., ἐν Θίβραισι Pindar. Olymp. Od. VI. 25. Φίλιππος ἐν Χαίρωνεία παρατασσόμενος Ἀθηναίοις Polyæn. L. IV. 2. 2. Vid. Celeb. Jac. Perizon. in Aelianu H. V. L. II. 25. et Jac. Gronov. ad Herodot. L. V. 116. WESS.

695. 1. Τὰς ναῦς ἐξέβραττε] Conf. Clariss. Io. Alberti in Miscell. Critic. ad Gos. Nom. p. 264., conductisque ab eo veterum locis adde e Nostro L. XIV. 100. XX. 77. 113. et Dion. Chrysost. Orat. LXXIX. p. 664. D. Plut. T. II. p. 456. C. Defungar Libanio, ut eum mendo liberem, T. II. p. 452. B. ὥσπερ οἱ πολλὰ ἑωρακότες ναύαγια τῶν παραπλεόντων, τῶν εἰς τὰς ἡϊόνας ἐκβεβρασιμένων. Sic scripsit. Legebatur εἰς τὰς μονάς, nulla sententia. WESS.

696. 16. Ὅπως μὴ — Θεομαχῶμεν] S. Lucas A. A. c. V. 39. μήποτε καὶ Θεομάχοι εἶρεθῆτε. Et c. XXIII. 9. μὴ Θεομαχῶμεν. Plutarchus de Superstitione p. 168. C. μὴ δόξῃ Θεομαχεῖν. WESS.

696. 32. Ἡ τοῖς κατὰ τὴν μητρόπολιν etc.] Conf. H. Valesium ad Excerpt. seq. Polyb. p. 1394. ed. Gronov. Solebant coloniae, si usus ita ferret, ducem ex maiore patria arcessere, illique summam imperii tradere: cuius moris exemplum dederunt ipsimet Syracusani, Timoleonte ex metropoli Corintho ad civitatem suam constituendam evocato, L. XVI. 66. WESS.

696. 33. Τοῖς ἀγηγνομένοις τῆς Ἑλλάδος] Vid. ad c. 27. WESS.

696. 39. Ἀρχηγὸν ἕσεσθαι τῆς ἐλευθερίας] *Suasorem fore* Interpres: quod dilutius. Optabant Syracusani, ut Pharaeidas sese ducem et libertatis auctorem prosteretur; ἀρχηγὸν καὶ αἴτιον, ut Polyb. L. II. 38. Dinarchus Or. in Philocl. p. 109. οὐκ ἀποκτενεῖτε — τὸν ἀρχηγὸν γενόμενον τοῦ διαδεχομένου χουσίον; Polybius L. II. 22. de Flamini lege Agraria, ἵν γε Ῥωμαῖοις φατέον ἀρχηγὸν μὲν γενέσθαι τῆς ἐπὶ τὸ χεῖρον τοῦ δήμου διαστροφῆς. quo de genere alias copiosius dicere memini. WESS.

696. 48. Ἀρέτης ὁ Λακεδαιμόνιος] Idem esse videtur, atque *Aristus* ille Spartanus, qui publice missus, ut Syracusanos in libertatem assereret, eodem tyranno prodidit, ut supr. c. 10. traditum legitur. Vitium ergo aut Ἀρίστον aut Ἀρέτον nomini sese penitissime insinuavit, quod elui qua possit ratione, non admodum proclive est. Rectum tamen prius erit, si Ἀρέτας nomen Laconicum non fuerit, ex III. Scaligeri decreto L. III. Canon. Isagog. p. 332. Sed vide infr. L. XX. 29. WESS.

697. 56. Μετὰ τὴν κατάλησιν τοῦ προαστείου ] De Ceres et Proserpinae fanis expilatis agitur c. 63., ubi nihil de suburbio everso : occupasse vero id Carthaginienses traditur. Scribe ergo μετὰ τὴν κατάληψιν τοῦ προαστείου. quod verissimum. WESS.

697. 63. Καὶ γὰρ Ἀθηναῖοι πρότερον etc. ] Conf. L. XIII. c. 10. WESS.

697. 79. Προῶτον μὲν ἤρχετο τῆς νόσον etc. ] Ex eiusmodi loci ingenio, cuiusmodi castris ad Syracusas Carthaginienses occupaverant, morborum id genus plerumque nasci, docet Hippocrates de Aër. Aq. et Loc. p. 283. WESS.

697. 82. Καὶ τῶν σκελῶν βαρύνητες ] Crurumque gravidines vir doctus, gravem fortasse dolorem intelligens, ut *gravidinem vulnerati pulmonis* dixit C. Aurelianus Chronic. L. II. 14. Ego vero crurum gravitates aut tumores malle, secutus eruditos interpretes, qui σπληνὸς βαρεῖα in Hippocrat. de Vict. Rat. in morb. Acut. p. 396. de lienis tumore accipiunt. WESS.

697. 88. Συνέβη — βοήθειαν ἀπρακτικὸν εἶναι ] Sic seq. cap. ἐαντῶν σποδὸν εἶχον ἀπρακτικόν. Onosander Strateg. c. 17. ἀπρακτικὸν ἔξουσι τὴν ἰδίαν ἐμπειρίαν. Vid. infr. L. XV. 27. WESS.

697. 1. Τὴν περὶ Κροχ. συμφορὰν ἴκοιεν ] Ne muta. Scriptoris idiotismus est. Ἡ περὶ τὸ ἄροτρον ἔργεις L. III. 63. pro τοῦ ἄρότρον. atque ita frequenter. WESS.

697. 6. Ἐὰν τὸ τῆς Κράνης ἰσθμὸν ] Fuisse videtur id fanum ad fontem cognominem, de quo L. V. 4. WESS.

698. 16. Οὗτοι μὲν ἅπαντες κατεκόπησαν ] Non dissimile mercenariorum militum, a Dionysio circumventorum, exemplum offert Polyæn. Strateg. L. V. 2. 1. WESS.

698. 21. Τὴν καλομένην Πολίχραν ] Vid. Ph. Cluver. Sic. Ant. L. I. p. 180. ubi etiam de *Dascone*, et quae nos ad L. XIII. 7. 13. WESS.

698. 31. Καταταχόμενοι δ' ἐπὶ τῆς ὀξείτης τοῦ καιροῦ ] Καταταχῆσαι et καταταχῆσθαι ex Polybiana imitatione saepe Diodorus, ubi celeritate alius antevertitur. Αἱ ὧν καταταχῆσας τὸν Ἐραμινώνδαν, quorum Cretensium, de illis enim sermo fuerat institutus, cursu antevertit *Eraminondam* Agis L. XV. 82. Καταταχόμενοι δ' ἐπὶ τῆς πολυχειρίας — συνηραγκάσθησαν etc. L. XVII. 41. Et L. XVIII. 73. καταταχόμενος ἐπὶ τῶν καιρῶν. Polybii loca, additis e Nostro aliis, dabit Budaeus Comment. Gr. Ling. p. 1080. Paullo ante ἐπαλαλάζοντος Rhodomannus in Notarum Addendis, sine gravi caussa. WESS.

698. 36. Ἐρέσειον μόγης ] Adverbium hoc loco ociosum est, nec divinare possum, quodnam aliud loco extruserit: nisi forte τοὺς ἐμβόλους aut τὰς ἐμβολὰς reponas. Rhod. Etymologus μόγης idem esse ait ac μετὰ πόνον, Thom. Mag. μετὰ βίας. utriusque explicatio huic loco satis apta foret, si usus Grammaticorum decreto responderet perpetuo, de quo dubito: nec melius tamen quid-

quam cum maxime succurrit. Nam Rhodomanni medicina modum excedit. WESS.

698. 41. Ἀναδρόηττόμεναι λακίδες] De vestibus laceris λακίδες in usu sunt frequentiore apud Aeschyl. Choeph. v. 26. Supplic. v. 126. 910., sicuti et λακίσματα in Eurip. Troad. v. 497. Apud Hesychium quidem Λακίδες, τὰ λεπτὰ τῶν ἀρμενων σχίσματα. Sed is lacerati veli partes intelligit ex nobili Alcaei fragmento apud Heraclidem p. 413.

Λαῖφος δὲ πᾶν ἄδηλον ἤδη  
Καὶ λακίδες μεγάλαι κατ' αὐτό.

Vid. D. Heinsium in Sil. Ital. L. V. 325. WESS.

698. 48. Οὐ μὴν οὐδ' οἱ πεζῆ — προσβάλλοντες] Sequor Coisl. et Reg. 1., quorum scriptura hic accommodatior. Supra c. 68. τότε συνεπιθεμένων ἡμῶν πεζῆ πάντων. Saepereque alias cum de navali ad terrestrem expeditionem transitus est. WESS.

699. 58. Ἐπιγενομένου] Arte poneretur particula δὲ post ἐπιγενομένου. Sed aliis in locis plano similibus eam particulam omissam ab hoc autore comperio. STEPH.

699. 61. Διὰ τὸν ἀπὸ τῆς πληγῆς φόβον] Mallem γλογός. eius enim metu in mare se praecipites dabant, ut nando evaderent. Si tamen πληγῆς reliquerit, ictum intellexit ex ruina armamentorum et navium mutuo in sese incursu. Id rarius, quod ἀγκύρια de rudentibus usurpavit. Ancorae sunt in Plutarchi T. II. p. 604. D. et Luciani Catapl. c. 1. Facit tamen cum Diodoro inter Mathematicos haud ignobilis Philo, qui ne ancorarum retinacula praecidantur, catenis utendum admonens, πρὸς δὲ τὰς ἀποτιμήσεις τῶν ἀγκυρίων, inquit, ἐὰν βραχὺς ὁ τόπος, ἀλύσεις de Telor. Construct. p. 100. Porro non placet in sequentibus πλεῖστον δ' ὑπὸ τοῦ πυρός. Sive enim ἐπὶ seu κατὰ subintelligas, paullo durius manebit. Plana fuisset oratio, si πλεῖσται δ' ὑπὸ τοῦ etc. Iegeretur. WESS.

699. 78. Ἐκλέγοντες τῶν χρησίμων τὰς δυναμένας etc.] Verum est τὰ δυνάμενα. Diripiebant corruptas ab igne naves, inde seligentes res eas, quae usui esse poterant et resarciri. De navibus sequetur deinceps. WESS.

699. 82. Ἡ φιλοτιμία — κατῆρχε τὴν ἡλικίαν] Constat sententia, non male ab Interprete expressa contentio aetatem superaret. Ut tamen sanum sit κατῆρχε, dubito vehementer. Solent certe et incipiendi et dominandi usu aliter construere. WESS.

699. 91. Ἐφαίνετο — Θεομαχία παραπλήσιος ἢ θεία] Sic L. XVII. 100. οἰονεῖ τις Θεομαχία μέλλονσα γίνεσθαι προσεδοκήθη. Adde Platonem L. II. de Repub. p. 378. D. WESS.

699. 3. Ἠξιόων δὲ αὐτὸν ἀφιέναι τοὺς περιλειπομένους etc.] Imilco in flebili oratione ad cives, deferre se, inquit, civibus suis non modica solatia, quod malis eorum hostes gaudere, non gloriari possent. Quippe cum neque eos, qui mortui sunt, a se



*occisos; neque eos, qui reversi sunt, a se fugatos possint dicere. Praedam, quam relictis a se castris abstulerint, non esse talem, quam velut spoliū victi hostis ostendent; sed quam possessione vacua, fortuitis dominorum mortibus, sicuti caduca occuparint. Quod ad hostes pertinet, victores se recessisse; quod ad pestem, victos; apud Iustinum L. XIX. 2. Satis utique gloriose, neque ex vero. WESS.*

700. 22. Ἐπλήρωσε — τριήρεις τῶν πολιτικῶν] Scriptorum Codd. concordia hoc requirebat. Τοὺς Καρχηδονίους πολιτικοὺς dixit modo, alibi πολιτικὰς δυνάμεις, πολιτικοὺς στρατιώτας, πολιτικὸς κυβερνήτας etc. Mox si τὸ λοιπὸν ἅπαν στρατ. malueris, non intercedam. WESS.

700. 42. Ἐν ταῖς ὁδοῖς καὶ ταῖς — ἐμπίπτοντες] Supervacanea est copula, atque ab inperito librario adiecta. Tollenda ergo. WESS.

700. 46. Ἐπεκηρυνέοντο περὶ συμμαχίας] Monent Grammatici ἐπικηρυνέσασθαι civitates perhiberi, cum publice ζήριζας et legatos mittunt ad societatem aut amicitiam sociandam. Id communi Iberorum, qui sub Carthaginensibus stipendia fecerant, congruit bene. Imo si privatos eos censueris, recte dicentur ἐπικηρυνέσασθαι. Vid. Cl. Duker. in Thucydid. L. VII. 48. et haec Demosthenis Excerpt. adv. Zenothem. p. 532. ὡς γὰρ — οὐδὲν εἰώρθον δίκαιον αὐτοῖς ἐνδόν, ἐπικηρυνέονται τῇ Πρώτῃ καὶ πείθουσι τὸν ἄνθρωπον. Internuntios enim, quorum opera Proto persuadere litigantes volebant, clarissime designat. Corruptum est in Aristide T. III. p. 355., melius scripti libri Μακρόνιος μὲν ὑπὲρ βασιλείως ἐπεκηρυνέετο τοῖς Ἀθηναίοις. WESS.

700. 53. Ταχέως ἐξελέγχουσι τὴν ἰδίαν ἀσθένειαν] Hoc sane venustum. De dictione videbimus ad L. XX. 80. WESS.

701. 72. Περιβόητον ἔχη τὸν βίον] Si Thomae Magistri decretum valeret, male περιβόητον posuisset Diodorus: περιβόητος ὁ ἐπὶ ἀρετῇ ἐγνωσμένος, διαβόητος ὁ ἐπὶ κακίᾳ. Sic ille, quem tamen usus redarguit. Περιβόητος de famoso semel iterumque Lysias Or. II. 9. et Plut. in Caton. Uticens. p. 761. C., ut alios omittam. WESS.

701. 78. Ἀπεκαρτέρησε] Paullus Orosius L. IV. 6. ac deinde (Imilco) obseratis ianuis, exclusisque etiam filiis, gladio dolorem vitamque finivit. Haec Darii temporibus gesta sunt. Male utrumque. Gesta sunt rege apud Persas Artaxerxes: mortem vero inedia sibi maturavit. Iustinum suum dum deserit Orosius, in errorem praeceps abiit. Vide istum L. XIX. 2. WESS.

701. 87. Ὑπὸ τῆς ὀργῆς προσαχθέντας] Postremum vocabulum una litera auctius est: fuit olim προαχθέντας, uti θυμοῖς προαχθέντες L. XVII. 10. et εἰς ὀργὴν ὑπερβάλλονσαν προαχθεῖς L. XX. 33., eiusdemque generis alia. WESS.

701. 90. Ἐν ἐπαύθῳ κατεστρατοπέδευσαν] Haec con-

nectenda sunt, quemadmodum c. 32. Phrasim egregie illustravit vir longe eruditissimus ad Polyb. L. I. 12. WESS.

701. 94. *Ὁδὸν μακρὰν τῆς Καρχηδόρους ζειμένην*] Aberat Carthagine ad cxx stadia, sive millibus passuum ferme xv., testibus Polybio L. XIV. 10. et Livio L. XXX. 9. WESS.

701. 3. *Τοὺς ἀσεβηθέντας θεοῦς*] Paulo hoc videri posset insolentius, nisi *ἀσεβεῖν θεοῦς* de violato deorum cultu dixisset auctor ipsemet et ante cum Aeschylus. Vid. not. in L. I. 77. WESS.

701. 7. *Τὰς θεὰς ἰδρυσάμενοι*] Cereris et Proserpinae signa θεὰς vocat eorum more, qui τὰ χαλκᾶ καὶ τὰ χρυστὰ, καὶ τὰ λίθινα, non ἀγάλματα, ἀλλὰ θεοῦς adpellare adsueverant apud Plutarch. de Isid. et Osir. p. 379. C., quorumque stultitiam ridet Lucianus de Sacrif. c. 11. Id vero notabile, Poenos inter numina non censuisse Cererem et Proserpinam ante hoc tempus. Colebant τὴν Ὀργανίαν, quam suo sermone *Astarten* nuncupabant, coelestium reginam, *ܩܝܘܢ ܩܠܒܘܢ*, a luna non multum diversam, apud Herodianum L. V. 6. Luna quidem in Graecorum et Latinorum Theologia eadem habita fuit ac Proserpina; sed serius id commentum, a philosophis, Deorum Dearumque multitudini offensis, excogitatum est. Perro adoptant Cereris et Proserpinae, quas in Sicilia violaverant, cultum eadem superstitione, qua paullatim Roma

*Facta est terrigenae domus unica maiestatis,*

*Et tot templa Deum Romae, quot in orbe sepulcra*

*Heroum numerare licet. — —*

Gentium enim deos adsciscere, et quorum urbes solo aequaverat, eosdem placare instituit. Vid. Elmenhorst. ad Minutii Fel. Octav. c. 25. WESS.

701. 73. *Εἰς τοσοῦτο*] *Εἰς τοσοῦτον* Reg. ambo, Coisl. Vid. I. Fr. Reitz. in Luciani Rhetor. Praecept. c. 7. WESS.

702. 27. *Τοῦ πλήθους συντρέχοντος — καὶ — ἀπαιτούντων*] Conf. ad L. II. 19. et L. V. 4. WESS.

702. 39. *Καὶ τὰς ἰδίας κοιζόμενοι πατρίδας*] Defectam orationem Rhodomannus arbitratus in not. Addend. καὶ εἰς τὰς ἰδίας κοιζόμενοι πατρίδας, in suam quisque patriam proferti, legebat. Satis ille quidem opportune, nec contra sermonis ingenium, quo Aeschylus Suppl. v. 956. *κοιζόν δ' ὡς τάχιστ' ἔξ ὀμιμάτων.* et Euripid. Phoeniss. 596. *καὶ σὺ τῶνδ' ἔξω κοιζόν τεύχεων.* Obstat tamen mos scriptoris, qui *κοιμισασθαι* hoc usu, quantum recorder, nunquam, per vero frequenter *κοιμισασθαι μισθόν*, et *κοιμισασθαι πατρίδα καὶ ἐλευθερίαν* cum utraque recipitur. Vid. L. XX. 46. et huius libri c. 33. ubi *διόπερ Ἀθηναῖοι μὲν ἐκοιμίσαντο τὴν πατρίδα.* WESS.

702. 42. *Τετρακισχίλους δὲ Μεδιμναίους*] Qui fuerint illi Medimnaei, non succurrit, et facile foret reponere *Μηθύμναιους*. Sed numerus 4000 nimius pro tali urbe videtur. At pro *Πηλοποιόν*, qui nulli fuerunt in Peloponneso, reponere *Μεσσηνίων*.

PALM. Habet auctor inter Siculos L. XVI. 9. *Μαδιναίους*, qui recipi hic possent, nisi et illi vitii forent suspecti. Propius absunt ex Italia Medmae, sive Medamae, ut apud Strabon. L. VI. p. 394., cives. Dat enim *Μέδωι*, Stephano auctore, *Μεδμαίους*, qui Lorensibus, unde originem acceperant, iunguntur aptissime. Dubito tamen de IV millium numero, utique maiore pro urbe non admodum ampla: nec muto propterea. Secus est in *Μιλισίωι* voce, quam etsi Codd. vetent, corrigere sustinui. Cui enim bono vitium manifestum et praestantium virorum telis confixum prepagari paterer? Vid. supra c. 34. De Medmaeis mecum facit Ph. Cluverius Sic. A. L. II. p. 338. WESS.

702. 43. *Μιλισίωι*] Ineptissime pro *Μεσσηρίωι*. RHOD.

702. 48. *Τῆς Ἀβαζιρῆς χώρας ἀπειτέμετο*] Scripserat *Ἀβαζανίρης χώρας*, Ph. Cluverio S. A. L. II. p. 386. indice. Urbs Siciliae *Ἀβαζαῖνον* erat, hinc *Ἀβαζανῖνοι*, apud Stephanum. Sed quid ego Stephanum adpello? Auctor ipsemet *Ἀβαζαῖνον* c. 90. et *Ἀβαζανίρους* L. XIX. 110. et Eclog. xv. L. XXII. dabit. Visum praeterea opportunius *προσώρισεν*, quippe in finium regundorum iudicio probatum. De Tyndaride Itin. Antonini, quod vocant, p. 90. WESS.

702. 52. *Μετὰ δὲ ταῦτα εἰς τὴν τῶν Σικελῶν χώραν* etc.] In his citra omne dubium commissa sunt plura. Equis enim crediderit, Tyndaritanos mox ab oppido condito tantas sibi vires parasse, ut Siciliam longe lateque perecurrere, urbes occupare, tyrannosque sibi foedere adiungere potuerint? praesertim superstite Dionysio, qui solus Siciliae et earum urbium imperio inhiabat. Nemo profecto, nisi horum temporum et Siciliae plane rudis. Pertinent omnia ad Dionysium, quod Ph. Cluverium S. A. L. II. p. 299. non latuit. Fuit ergo olim *πλεονάκης στρατεύσας — εἶπεν — συνθήκας ἐποιήσατο. παρέλαβε — εἰρήνην ἐποιήσατο*. Amanuenses, de Tyndaritanis agi arbitrati, mutarunt: quod necdum factum erat, cum argumenta capitum, huic libro praescripta, componerentur, quorum auctor Dionysio in solidum omnia haec transcripsit. WESS.

702. 54. *Σμειεὸν μὲν καὶ Μοργαντίων*] Notata in margine potiora iudicavi. RHOD. Admitti *Μοργάντιον* ex Strabone potuerat, nisi *Μοργαντίων* Diodorus, uti dictum alias, probasset. De altera urbe haud levis difficultas, utpote nusquam reperta. Cluverius verum germanumque nomen fuisse coniecit *Σεργέντιον*, *Sergentium*, L. II. S. A. p. 338., quod paterer, si *Πέρανον* a vulgato distaret longius. Id auctor L. XI. 78. Morgantio connectit, et hic olim fuisse innuit. Porro *Ἀγροναίων* ex Reg. 1. restitui, ut infra c. 95. WESS.

703. 59. *Πρὸς Ἐρβησίους*] Sic oportet. *Ἐρβησοῦ τὸ ἐδρυζὸν Ἐρβησῖνος* apud Stephanum, nec multo aliter Diodorus in superioribus. Conf. Sic. Ant. L. II. p. 361. Cluverii. WESS.

703. 65. *Οὗτος δ' ἐξακισχιλίουσ στρατιώτας ἐπιλέξας*]

Brevi haec sermone Diodorus, uberiore Xenophon *Rer. Graec.* I. III. p. 387. et Vit. Agesil. p. 515., e quo praeterea adparet, plura in hunc annum fuisse conducta, quae in plures fuerant dispescenda. WESS.

703. 73. *Τὸ Καῦστριον πεδίων*] Post pauca τὸ Καῦστρου πεδίων. Strabonis *Καῦστριανὸν πεδίων*, id describentis L. XIII. p. 929., Eustathii *Καῦστριον πεδίων* et *Καῦστρηγὸν* in Dionysii *Perieg.* v. 857. WESS.

703. 79. *Πρὸς Νεφερέα*] Hoc praetuli. *Νεφερίτης* dicitur in Eusebii *Chronico* p. 45. Iustinus ita L. VI. 3. *His cognitis, Lacedaemonii et ipsi a rege Aegypti HERCYNIONE auxilia navalis belli per legatos petunt: a quo centum triremes et sexcenta millia modiorum frumenti missa: corruptus in regis nomine, sicuti discordantes veterum Codd. scripturae declarant, inque ceteris a Diodoro discedens. Legisse videtur in scriptore, quem expressit, ἑξήκοντα σίτον μυριάδας*, pro quibus ipse *sexcenta modiorum millia*. Solent tamen Graeci ea in formula frequentius *μεδίμνος* intelligere, ut Demosthen. *Or. in Leptin.* p. 283. WESS.

703. 83. *Φάραξ δὲ — ναύαρχος*] Est apud Xenophont. *Hellen.* III. p. 381. et Athen. XII. p. 536. C., hominis luxum et voluptates ex Theopompo notantem. De *Sasandis* Cariae nihil novi. WESS.

703. 94. *Ῥόδιοι δὲ ἐκβαλόντες τὸν τῶν Πελοποννησίων etc.*] Conon Rhodiis persuasit, ut ad magni regis et Atheniensium se societatem aggregarent. Docet Pausanias L. VI. 7. p. 470. WESS.

703. 99. *Τεθαρόηκότες προσέπλεον*] Alias *τεθαρόηκότης* praeoptare solet, veluti cum L. XVII. 19. *τεθαρόηκότης ἐδέχοντο τὴν ἐπιφορὰν τῶν καθ' αὐτοὺς τεταγμένων.* et c. 76. *τεθαρόηκότης τὴν — ἐφοδὸν ὑπέμενον.* Verum hoc in genera sibi indulgent, atque, ut lubet, orationem variant Graeci. Vid. ad L. V. 21. WESS.

704. 13. *Τῆς παρὰ τὸν Σίτυλον παρωρίας*] Praestat *παρωρίας*. In re gesta forte Theopompum secutus est: nam Xenophon paullo aliter *Rer. Graec.* L. III. p. 390. WESS.

704. 16. *Ἐφθειρε τοὺς τε κήπους*] Commisso praelio, de quo mox, partaque victoria Agesilaus *εὐθὺς ἤγεν ἐπὶ Σάρδεις. καὶ κεῖ ἅμα μὲν ἔκαιε καὶ ἐπόρθει τὰ περὶ τὸ ἄστυ, ἅμα δὲ καὶ κήρυγμα τι ἐδίηλον etc.* apud Xenoph. Agesil. p. 519. WESS.

704. 20. *Καὶ Θυβαρνῶν*] Vox corrupta. Lege *Θυμβράρων* ex Stephano et Xenophonte L. VII. *Cyropaed.* (L. VI. p. 126.) PALM. Citat Stephanus *Θύμβραρα* ex Xenophonte, quae apud eum nusquam. Habet τὰ *Θύβαρῶα* non longe a Pactolo amne, variante tamen scriptura. Oppidum non aliud videtur atque hoc ipsum, idque dudum in Thesauro suo Ortelius commonefecit. Qua-

re cum Nostri lectio proxime absit a Xenophonteo urbis titulo, impelli non possum, ut districte damnari patiar. Meminit et oppidi *Θυμβρόων* Xenoph. *Ἀναβάσ.* I., quod longius hinc seiunctum in Pisidia sedem habuit, uti ad Hierocl. Syneedem. p. 673. disputavi. WESS.

704. 26. *Τοῖς ἐπὶ τῆς οὐραγίας ἐξήπτοτο* ] Hoc placuit. *Οὐραγὸν, οὐραγεῖν, οὐραγίαν* de extremo agmine saepe Noster, alterum, quod quidem recorder, nunquam. Mallem praeterea τῶν ἐπὶ τῆς — ἐξήπτοτο. uti c. 72. ἢ *παρηγγελκῶς* (Dionysius) ὅταν ἐξάπτονται τῶν πολεμίων, saepeque aliis in libris. WESS.

704. 39. *Εἰς τὰς ἄνω σατραπείας* ] Deest infinitivus post *σατραπείας*, si *ἐπεχείρησε* mendo caret, quod puto. Is autem infinitivus fuerit vel *στρατεύειν*, vel alius eiusdem significationis. STEPH. Simile huic *ἔόν τις ἐγγειοῦ ποι* de expeditione suscipienda restitutum a me Xenophanti *Anab.* V. 1. 8. ex melioribus libris, ubi deteriores *ἐγγειοῦ τι ποιεῖν*.

704. 44. *Τοῦτον γὰρ αἴτιον τοῦ πολέμου γεγονέναι etc.* ] Inter *γεγονέναι* et *ὑπὸ* verba desiderari aliquot animadverto, sed quae ea sint divinare non possum. Certe si haec tria duntaxat inserueris, aut his tribus synonyma, *ἐνόμιζεν. ἔτι δέ,* locum hunc integrum habebis: ut videlicet ita legatur, *τοῦτον γὰρ αἴτιον τοῦ πολέμου γεγονέναι ἐνόμιζεν. ἔτι δέ ὑπὸ τῆς μητρὸς etc.* STEPH. Adstipulor viro doctissimo. Hi at aperte oratio, nisi eiusmodi verba adstruantur. Consentit Xenoph. *Hellen.* L. III. p. 391. WESS.

705. 53. *Εἰς Κολοσσὰς τῆς Φρυγίας* ] Dixi de urbe ad Hieroclis Syneed. p. 666. Mox vehementer blanditur coniectura Palmerii ob Polyaeum, qui repetitis vicibus *Ἀριαίων* nuncupat. Sed quid si Ariaeus hic praefuerit urbi Larissae, quam Thimbron frustra tentat apud Xenoph. *Hellen.* L. III. p. 375., et ex ea causa *Λαρισσαῖος σατραπῆς* dicatur? WESS.

705. 55. *Λαρισσαῖον σατράπον* ] Polyaeus nos docet, quomodo hic locus emendari debet, L. VII. 16. Lege igitur, ut ille habet *Ἀριαῖον σατράπον*. PALM.

705. 69. *Τότε μὲν καὶ αὐτοὺς ὄρωμεσαν etc.* ] Gloriam Lysandri interfecti sibi vindicant Athenienses apud Aristidem T. II. p. 105., Nostro et Plutareho in *Lysand.* p. 449. dissentientibus. Sed salva res. Non quidem aderant omnes Atheniensium copiae auxiliares, haud pauci tamen ex ea civitate intra Haliartum sese penetraverant, eruptioneque una cum Thebanis facta Lysandrum peremerant. Hanc concordiae viam ingressus est Palmerius *Exercit.* p. 200., quam ratam haberi a Pausania L. III. 5. et L. IX. 32. addere potuisset. WESS.

705. 74. *Ὡς διακόσιοι* ] Xenophon extr. L. III. *Rer. Gr.* *πλείους ἢ διακόσιοι*. Plutarchus *ἀπέθανον δὲ τῶν Θεβαίων τριακόσιοι*, forte librariorum peccato. WESS.

705. 76. Ὁ μὲν οὖν πόλεμος — Βοιωτικὸς] Nihil hinc demuto: est quoque in argumento huius capituli, libri principio praescripto. De Pausania rege et induciis Xenoph. Plutarch. et Pausan. dictis locis. Mox ἀπήγαγεν εἰς Πελοπόννησον Rhodomannus in not. Auctario corrigit, quod certe in frequentiore usu: nec absolum tamen plane vulgatum esse, Homeri ἀπέβη πρὸς μακρὸν Ὀλυμπον Odys. O, 43. conmonstrare potest. WESS.

705. 81. Κατέστησεν Ἰερώνυμον καὶ Νικόδημον] Neuter in scriptorum celebritate versatur: prior tamen, ni fallit Palmerii suspicio, ab eo diversus non est, quem Aristophanes Ecclesiaz. v. 201. tangit. Ceterum auctor ordinem rei gestae negligit. Namque iter illud Cononis ad regem prius est Tissaphernis nece, motibusque in Graecia excitatis et morte Lysandri. Quae ex Nepote Corn. Conon. c. 3. et Pausan. L. III. 9. p. 227. omnibus aperta atque explorata sunt. WESS. Hieronymum illum fuisse puto, quem ex Lysia et Ephoro στρατηγὸν fuisse, annotavit Harpocratio. Nicodemum Diodori eundem esse cum Nicophemo, Cononis familiarissimo et fidelissimo bellorum socio, puto, de quo multa Lysias super Aristophanis bonis p. 621. 636. SCHNEIDER. ad Xenoph. Hist. Gr. IV. 8. 8.

705. 85. Ἐκεί δ' ἐντυχὼν τῷ βασιλεῖ] Per literas atque internuntios. Vid. Nepot. Conon. c. 3., viri prudentiam egregie signantem, et Iustin. L. VI. 3. WESS.

705. 93. Κόνων μὲν οὖν Φαρνάβαζον ἐλόμενος etc.] Rex permiserat Cononi, quem vellet eligere ad dispensandam pecuniam: id ille *arbitrium negavit sui esse consilii, sed ipsius, qui optime suos nosse deberet: sed se suadere, Pharnabazo id negotii daret.* Sic Corn. Nepos Con. c. 4. WESS.

705. 98. Διόφαντος] Diophantum τῷ ὑστέρῳ ἔτι τῆς ἔκτης καὶ ἐννηχοστῆς Ὀλυμπιάδος Athenis praetura perfunctum scribit Pausanias L. VIII. 45. p. 693.; quem quidem Diophantum cum eundem viri doctissimi arbitrantur, sub cuius magistratu τὸ Φεωρικὸν Hesychius, Zenobius et Suidas drachma absolutum memorant, non mihi attendisse videntur ad civitatis afflictissimam conditionem. Urbs erat in re tenui, ἀσθενὴς καὶ οὐδεμίαν καὶν κεκτημένη, ut Demosthenes Or. in Leptin. p. 291. ait. Et credemus tantum pecuniae in ludos insumere voluisse? Arbitror istum Diophantum alium, atque hoc multis annis priorem fuisse. Sed id nunc non agimus. WESS.

706. 1. Μάρκος Φρούριος — Κλαύδιος Οὔγων καὶ Μάριος Ἀππιος] Ex Livio lege Μάρκος Φούριος — Μ. Ουαλέριος Μάξιμος καὶ Α. Φούριος Μεδουλλίνος. In nominibus propriis Romanis praefero T. Livium Romanum. PALM.

706. 2. Κλαύδιος Οὔγων etc.] Pro his duobus, vitio adscriptis, revocentur ex Livio Μάρκος Ουαλέριος καὶ Λεύκιος Φούριος, quos etiam Fasti Consulares edunt. RHOD. Non alia

est Pighii sententia in Fast. ad ann. ccclv. Adde Livium L. V. 14. WESS. *Λούκιος Φούριος καὶ Μ. Ουαλέριος* Borghes. II. p. 121.

706. 10. *Τοὺς βουλευομένους ἐπιμπον*] Verum est *βουλευομένους*, aut *βουλευσομέιους*. Vitium, quod Rhodomanni diligentiam non fugit, persequens esse, in superioribus ostendimus. WESS. *Τοὺς βουλευομένους* correxit et Ursinus. IDEM in Add.

706. 19. *Κατὰ τὰ πλευρὰ κειμένη*] *Latera praecingens* Interpres. Ego praeferrem, *in vicinia atque ad latus adposita*. Appianus in hoc genere exprimendo *ἐν πλευραῖς* adhibere consuevit L. III. Belli Civil. p. 859. 894. et p. 943. Sallustius eleganter, *hostes ab latere, vos amici procul* Iugurth. c. 14. WESS.

706. 22. *Τὸν Φεῤῥῶν τέρανρον*] *Lego Φεῤῥῶν*, ut alibi, *Ἀλέξανδρος Φεῤῥῶν τέρανρος*. Sed duplicatione literae *ρ* mirum in modum gaudebant antiqui librarii, unde et *Σέγγαζούσιοι* vel *Συγγαζούσιοι* passim apud illos, pro *Συραζούσιοι*. Itidem et *Ἀθήαβία* pro *Ἀραβία*. ΣΤΕΡΗ. *Πρὸς Ἀνκόρορα τὸν Φεῤῥῶν τέρανρον*] Thessaliae universae imperium adfectabat, saepe propterea bello Larissaeos lacessens. Vid. Xenophontem Rer. Graec. L. II. p. 360. WESS.

706. 33. *Τοὺς Τραχινίους — μεταπεμπόμενοι*] Conf. superius c. 38. WESS.

706. 40. *Ἀθαμανεῖς*] *Ἀθαμᾶνας* oportuerat. vid. L. XVI. 29. WESS.

706. 44. *Εἰς Ἄρνακας τῆς Λοκρίδος*] Nemo est, qui praeter Nostrum urbis meminerit, solumque adeo eum Ortelius et Palmerius Graec. Ant. L. V. 6. testem prodixerunt. Atque id quidem ferri posset, nisi alia omnia doceret Stephanus, *Νάρηξ*, inquam, *πόλις Λοκρίδος, θηλυκῶς λεγομένη — ἐξ ἧς Αἴας*. — *λέγεται καὶ Ναρκίη*. ac ea ab urbe *Narycius Heros* adpellaretur *Ajax* in Ovidii Metamorph. XIV. 468. et *Ναρύκειον ἄστυ* inter eas Locridis urbes *Lycophron* v. 1148. numeraret, quae ob admissum ab Aiante in Cassandram probrum poenas lucent. Quare cum *Naryce* ortus fuerit *Ajax*, verius hoc erit loco *εἰς Νάρηκα τῆς Λοκρίδος*, uti corrigendum docuit eruditissimus Cl. Salmasius ad Solin. p. 48., aut certe *εἰς Νάρηκαν*, quomodo commodissime scribetur infra L. XVI. 38. WESS.

707. 52. *Λιαλύσαντες τὸ συνέδριον*] *Ridicule pro στρατόπεδον*. RHOD.

707. 54. *Οἱ δ' εἰς Κόρινθον τὸ συνέδριον ἀγαγόντες etc.*] Interpungendum est post *Κόρινθον*, tum scribendum *καὶ τὸ συνέδριον ἀγαγόντες* vel *συναγαγόντες*, ut oratio constet. Defectum sermonis vidit et correxit Rhodomannus. WESS.

707. 62. *Αὐτοὶ δὲ ἐν τοσοῦτῳ*] Sic L. IV. 55. *ἐν τοσοῦτῳ δὲ τὸν μὲν Ἰάσονα στερηθῆντα τέκνων etc.* Numerum copiarum, quas Spartani in unum conduxerunt, diligentius exsequitur

Xenophon L. IV. p. 402., in paucis etiam cum Nostro dissentiens. WESS.

707. 66. Παρὰ τὸν Νεμέαν ποταμὸν] *Annis est Corinthium et Sicyonium interfluens agrum*, ait Livius L. XXXIII. 15., non discordante Strabone L. VIII. p. 587. B. Ceterum victoria, qua Spartani sunt potiti, insignis fuit; suorum enim paucos amiserunt, hostium magno numero caeso. Vid. Xenoph. L. IV. p. 403. Atque haec ἡ μεγάλη μάχη πρὸς Λακεδαιμονίους ἐν Κορίνθῳ, cuius obiter meminit Demosthenes Or. in Leptin. p. 288. quamque copiosius descripsisse Hyperidem, Ephorum et Androtionem scholiastes admonuit. Pugnata ea est ante Archontem Eubuliden. Τῆς δ' ἐν Κορίνθῳ μάχης καὶ τῆς ἐν Λεχαίῳ μέσος ἄροχων Εὐβουλίδης Aristides ait T. III. p. 474. Nimirum Eubulide Praetore ad Lechaeum certatum est proelio. Inter illud ergo certamen, et hoc in agro Corinthio, id enim apud Oratorem ἐν Κορίνθῳ, medius intercessit. Adde Andocidem Or. de Pace p. 25. WESS.

707. 72. Θρακῶν τινῶν ἀπαντησάντων] *Tralles* erant, qui prave *Τρωαδεῖς* in Plut. Apophthegm. Lacon. p. 211., melius in eiusdem Agesil. p. 604. De illis L. XVII. 65. WESS.

707. 82. Περὶ Λώρυμα τῆς Χερρόνήσου] Scripserat *Λώρυμα*, qui portus Rhodiorum in opposita Chersoneso. Stephanus *Λώρυμα πόλις Καρίας* — ἔστι καὶ λιμὴν Ῥόδου, ὃς *Λώρυμα* λέγεται. Sed is, quod Holstenius vidit, portum *Loryma* perperam ab urbe distinguit. Conf. infra L. XX. 83. Amanuensium error non latuit Abr. Ortelio Thes. voc. *Loryma*. WESS. *Λώρυμα* Scalliger quoque et Is. Vossius. IDEM in Add.

707. 85. Περίαρχος δ' ὁ τῶν Λακεδαιμονίων] Menda duceis nomen foedavit. Πείσανδρος aliis omnibus dicitur, quomodo et hic scribendum dudum viri docti admonuerunt, Dion. Lambinus ad Corn. Nepot. Con. c. 4. Fabricius in Oros. L. III. 1. Bongarsius ad Iustin. L. VI. 3. pluresque alii. WESS.

707. 88. Πρὸς Φύσκον τῆς Χερρόνήσου] Straboni *Φύσκος πολίχνη, λιμένα ἔχουσα*, nec longe *Lorymis* dissita L. XIV. p. 964. A., qui et τῆς Ῥοδίων περιείας esse ait p. 978. Stephanus iterum duas facit, portumque ab urbe distinguit. WESS.

707. 91. Τῶν δὲ Περσικῶν etc.] Aut deest substantivum nomen, quod cum adiectivo *Περσικῶν* iungatur, aut legendum *Περσῶν*, quod malim. STEPH.

708. 97. Ἀνηρέθη μαχόμενος] Vide Xenophont. L. IV. Hellen. p. 404. Periit autem Pisandrus sequente anno, cum Athenis summo magistratu fungeretur Ebulides, sicuti scriptor aequalis Lysias Orat. de Aristoph. Bon. c. 8. testatur: quae quidem clades, quod sub initium eius praeturae acciderit, propterea in hunc annum ab auctore, ne eiusdem generis res discernerentur, videtur relata. WESS.



708. 10. *Αὐὸ καὶ τῇ μάχῃ Λακεδαιμόνιοι διαλαβόντες*] Deficit verbum, quod vel *νικήσαι* fuit, ut coniecit Rhodomannus, aut *νεκικηζέναι*, quo modo margo Cod. Reg. 1. Aciei ordinem totiusque pugnae describit egregie Xenophon Agesil. p. 521. WESS.

708. 20. *Εἶτα Νισυρίους καὶ Τήϊους*] Lege confidenter *Νισυροίους καὶ Τήϊους*. Nisyros fuit insula vicina Co insulae Teius vero peninsula in itinere a Co insula Chium versus. PALM. *Εἶτα Νισυροίους καὶ Τήϊους*] Utrumque, ut vir doctus edixerat, restitui. Prius postulabant membranae, quae *Νισυρίους* edunt, posterius res ipsa et itineris progressus. De insula Nisyro dixit L. V. 54. WESS. Praestat *Νισυροίους* scribi, quam formam agnoscunt Herod. VII. 99., Stephanus, Eustathius ad Hom. II. B v. 676., Dionys. v. 525.

708. 27. *Καὶ Λακεδαιμόνιοι μὲν ἀπὸ τοῦτου τοῦ χρόνου* etc.] De Conone Demosthenes Or. in Leptin. p. 291. *κατενωμάχησε Λακεδαιμονίους, καὶ τοὺς πρότερον τοῖς ἄλλοις ἐπιτάτοντας εἶδισεν ἀκούειν ἑμῶν, καὶ τοὺς ἀρμοστὰς ἐξήλασεν ἐκ τῶν νήσων*. Satis ex vero: Harmostis enim ex insulis deiectis, et classe deleta Spartani maris et Graeciae imperio exciderunt. Clarius Isocrates in Evagora p. 293. de consilio, quod Conon Persis ad opprimendum Lacedaemonios dedit, loquens, *πεισθέντων γὰρ ταῦτα τῶν στρατηγῶν καὶ ναυτικοῦ συλλεγέντος, Λακεδαιμόνιοι μὲν κατεναυμαχήθησαν, καὶ τῆς ἀρχῆς ἀπεστερήθησαν, οἱ δὲ Ἕλληνες ἐλευθερώθησαν*. Sed vide Is. Casaubonum ad Polyb. L. I. 2. WESS.

708. 32. *Κατέλευσαν ἐπὶ Κύθηρα*] Gesta sequenti anno sunt, et sub exitum quidem magistratus Eubulidae: nam post hiemem eius anni, quo Pisandrum profligaverat, Conon una cum Pharnabazo maritima Spartanorum loca diripere, ac dein Cythera occupare coepit. Distincte Xenophon Rer. Graec. L. IV. p. 419. WESS.

709. 40. *Ἀέροπος ὁ τῶν Μακεδόνων βασιλεὺς*] Non retractabo, quae pro Aereo Macedonum hoc rege disputavi ad c. 37. Addam duntaxat, Macedonibus eum imperasse, cum Agesilaus ex Asia per Macedoniam in Graeciam properaret, etiam ex Polytaeno liquere Strat. L. II. 1. 17. et L. IV. 4. 4., neque adeo ex regum catalogo, unde H. Dodwellus eum expulerat, nisi vi et iniuria eradi: praesertim, cum Amyntas, qui, Pausania Aereo F. obtruncato, regnum invasit, Aereo fuerit *ὑπηρέτης καὶ δοῦλος*, teste Aeliano H. Var. L. XII. 43. Pausanias autem iste ob brevissimum regni tempus a plerisque negligitur: fortasse non alius ac is Pausanias, quem Syncellus Chronograph. p. 262. unius anni regem facit, sed post Amyntam deiectum. Facile enim in tot nominibus ordo potuit commutari. WESS.

708. 44. *Εἰς τοῦτον τὸν ἐνιαυτὸν καὶ εἰς τὴν — ναυμαχίαν*] De navali ad Cnidum praelio res dubio caret: at id pugnatum sequenti demum anno est; eodem ergo Theopompus *τὴν τῶν Ἑλληνικῶν σύνταξιν* desiit. Vide ad L. XIII. 42. WESS.

708. 51. *Ἐββολίδης*] Ita quoque Aristidi dicitur T. III. p. 474., septimum esse a Lachete, sub cuius magistratu Socrates vitae usura privatus est, perhibenti, praeterea eo Archonte pugnam ad Lechaeum esse pugnatum. Vere utrumque. Lysiae tamen Or. de Aristophan. Bon. c. 8. *Ἐββολος*, sed invito Io. Meursio. Cogitasset primitivum et patronymicum nomen eodem in homine saepe locum obtinere, et ea opera abstinuisset. Exempla obvia sunt, et in superioribus a me conducta. Vid. Clarissim. T. Hemsterhusium ad Luciani Timon. c. 44. WESS.

708. 54. *Σέξτος Κένσιος* etc.] Relegantor *Σέξτος Κένσιος* et *Ἀρίτιος Κάμυλλος*, in quibus foedissime erratum est. Reducuntur autem quasi ab exilio *Αένσιος Ἰούλιος*, *Αένσιος Φούριος* καὶ *Ἄυλος Μάνλιος*. RHOD. Vitiosissima haec sunt nomina et cognomina. Rhodomannus uti reliquit, ita Livius L. V. 16. Auctor tamen ipse idemne reliquerit, asseverare nolim. WESS.

709. 59. *Τὰ τέλγη καὶ τὰ μαζοῦ σέλη* etc.] Conf. L. XIII. 107. *Muros dirutos a Lysandro, utrosque et Piraei et Athenarum, reficiendos curavit*, de Conone Nepos ait Cornelius c. 4. WESS.

709. 71. *Προαγόμενος δ' αὐτὸν* etc.] Vide Xenophont. L. IV. R. Gr. p. 420. et Nepot. Corn. Con. c. 5. hac in re non admodum consentaneos. Necem Cononis, quae hoc tamen anno posterior, indicat L. XV. 43. auctor ipse. WESS.

709. 74. *Τῶν ἐπιθυμῶν κρατούντων*] Hic mendam esse suspicor: at quo emendetur, in mentem iam nihil venit. RHOD. Opinor plura hic deesse. Liqueat certe quidem ex Xenophonte *Rer. Graec. L. IV. p. 406.* optimum quemque Corinthiorum belli, in Spartanos suscepti, fuisse pertaesum, quod civitatis ager vastaretur et ab amicis et ab hostibus, foederatique interea pace fruerentur, atque agros suos sine ullo incommodo ararent: desiderasse propterea pacem. *Οἱ πλεῖστοι καὶ βέλτιστοι αὐτῶν εἰρήνης ἐπεθύμησαν* Xenophon ait. Ceteris, in quos imber aureus ex Perside depluerat, quique belli auctores fuerant, visum e re fuisse, omnes eos aut tollere e medio, aut urbe eiicere. Hinc posses, paucis mutatis et additis, levi opera scribere *ἐν δὲ τῇ Κορίνθῳ τινὲς ἐπὶ τοὺς ἐπιθυμῶν εἰρήνης κρατουμένους συστραγέντες — φόνον ἐποίησαν.* Sed plura deesse autumo. WESS.

710. 91. *Τὸ χωρίον τὸ ἐντὸς τοῦ διατ. εἰσεβιάζοντο*] Recte animadvertit Rhodomannus, fuisse heic olim *εἰς τὸ ἐντὸς — εἰσεβιάζοντο.* Xenophon id declarat aperte L. IV. Hellen. p. 408., rem gestam uberiore sermone exsecutus. Meminit eiusdem Andocides Or. de Pac. p. 25. WESS..

710. 99. *Ἐποίησαν θεῖναι τὸν ἀγῶνα*] Ad eum modum *θεῖναι τὰ Πύθια* Demosthenes Or. de Pac. p. 42., ubi vide And. Dounaeum Praelect. p. 168. Isthmiorum ludicri praesides erant Corinthii, quod ex Strabone L. VIII. p. 580., Pausania L. II. 2.

p. 114. et Imp. Iuliano Ep. xxxv. cognitissimum. Exsules, cum civitas Argivorum iuris paucorum culpa videretur facta, ne Corinthus ludicri eius possessione excideret, a Spartanis adiuti certamini praesederunt. *Τὸν ἀγῶνα ἐδίκησαν τῶν Ἰσθμίων οἱ ἐπὶ Λαζωνισμῶν γέγοντες*, inquit ea de re Pausanias L. III. 10. Ceterum Isthmia ea fuerunt secunda sive hiberna, hoc si anno, quod Xenophon videtur negare, sint celebrata: nam prima, eaque aestiva, in Olympiadis cuiusque principium incurrebant. H. Dodwellum consule Dissert. VI. Cycl. sect. 2. WESS.

710. 2. *Ὁ πόλεμος οὗτος ἐκλήθη Κορινθιακός*] Non aliter Corn. Nepos Ages. c. 5. *Post hoc praelium (ad Coroncam) collatum est omne bellum circa Corinthum, ideoque Corinthium est appellatum.* Meminerunt eiusdem Pusan. L. III. 5. Polyacn. Strateg. L. I. 48. 3. et Aristides T. II. p. 188., qui pace Antalcidae tandem terminatum fuisse significat. WESS.

710. 4. *Ὅτι Μεσσήνην ταχιζῶν etc.*] Vide superius c. 79. WESS.

710. 9. *Καὶ στρατηγὸν Ἐλωριν*] Domo erat Syracusanus, sed exsul et Dionysio propterea inimicissimus. Vid. infr. c. 103. WESS.

710. 19. *Ἄλλοι κατ' ἄλλους τόπους κατοίκησαν*] Collegit Naxiorum exsules labentibus annis Andromachus, nobilissimi scriptoris Timaci pater, et Tauromenii collocavit, quod ab auctore proditum invenies L. XVI. 7. WESS.

710. 27. *Διὰ τὸ μὴ πάλαι κατοικημένοι*] Ante hos duos annos Tauromenium condi a Siculis coeptum fuerat. Confer ea, quae huius libri c. 59. adscripta sunt. WESS.

711. 32. *Ἐπισην μὲν Νάξον*] Non errabant ea in re Siculi. Chalcidenses enim duce Theucle in hanc insulae oram delati, deiectis possessione Siculis, prima Naxi fundamenta posuerunt. *Φησὶ δὲ ταύτας (Νάξον καὶ Μέγαρα) Ἐφορος πρῶτος πισθῆναι πόλεις Ἑλληνίδας ἐν Σικελίᾳ* Strabo scribit L. VI. p. 410., et hoc atque Ephoro prior Thucydides L. VI. 3. Tempus conditae Naxi signat Eusebius et ad illius Chron. III. Scaliger ann. MCLXXXI. WESS.

711. 38. *Ἐπισην μὲν ὄσσαι τροπαὶ χειμερινὰ*] His, et sequentibus ὠρηθεῖ νεκτὸς ἀσελήρου, utitur H. Dodwellus Diss. I. Cycl. Segm. 17. ut teneat, ipsi mensis, et quidem lunaris, initio assignatum fuisse solstitium brumale; quin ipsum hic indicari novilunium: haud equidem seio an nimis confidenter. WESS.

711. 42. *Παρθμοῦντας περὶ τὴν — φυλακὴν ἐρώων*] Alibi παρθμοῦντας τὰ περὶ τὴν φυλακὴν L. II. 18. et III. 55. WESS.

711. 62. *Πανσυνίας δὲ ὁ τῶν Λακεδαιμονίων etc. ἔγνω*] Citius Pausanias Tegeam exsulatum abiit: ut enim domum rediit post cladem ad Haliartum acceptam, accusatus fuit, quod Lysandro opem, uti convenerat, non tulisset, quodque nulla con-

missa pugna, sed factis induciis, interfectorum corpora sustulisset. Sic Xenophon extremo L. III. Rer. Graec. et Pausanias L. III. 5. Successit patri Agesipolis, quo necdum pubere Aristodemus, genere proximus, rerum curam in breve tempus administravit. WESS.

711. 68. Ἡρξεν ἔτη εἰκοσιτέσσαρα] Conveniunt numeri. Vid. L. XV. 60. Continentur tamen ambitu horum annorum et illi, quibus principatu deiectus alibi egit Amyntas. Multo contractius regni spatium, nisi in numeris error, eidem datur apud Syncellum Chronograph. p. 262. WESS.

711. 71. Παρέλαβε τὴν ἀρχὴν Δημόστρατος] A Dion. Petavio D. T. L. XIII. p. 323. huius anni Archon ex Diodoro constituitur *Arches*, quem si penitius cognoscere velis atque unde natales acceperit, Rhodomanni Latina inspice. Similem errorem si aut Scaliger aut Salmasius errassent, vac capiti illorum! Nos inconsiderantiam hanc viro doctissimo, ex inspecta obiter Rhodomanni versione invisitatum Archontem exstruenti, condonamus. Non multo diversum hinc est peccatum, quod veterem corruptit Inscriptionem in repetita Thes. Gruteriani editione p. CCXLVII. 6. Id ego, ne et aliis molestiam creet, nam me quidem diu sollicitum habuit, eluam eum maxime. Verba sunt:

IMP. CAESARI. DIVI. NERVAE. F. NERVAE  
 TRAIANO. OPTIMO. AVG. GERMANIC. DACICO  
 ET. CYRIACO. PONT. MAX. TR. POT. XVIII.  
 IMP. VIII.

CONS. VI. P. P. PROVIDENTISSIMO etc.

Quaerebam anxie, unde tandem Traiano novus *CYRIACI* titulus venisset, de quo nusquam quidquam scriptum lectumve recordabar. Ex Schotti eum Itinerario vir doctissimus se reposuisse adscripsit. Id multo magis quam demirabar, commodum mecum excerpta ex Isaaci Vossii Adversariis communicabat doctissimus iuvenis L. C. Valkenaer, complexa ipsum hoc descriptum ex Cyriaci scholiis in Strabonem epigramma, sed verbis *ET CYRIACO* defectum. Deprehendi statim erroris cubilia. Annotatum fuerat, sumtum esse marmor, ut plura alia, *EX CYRIACO* Anconitano, intimo Gemisti Plethonis amico: e margine in ipsam inscriptionem immigrarunt verba, leviter tamen corrupta, nobisque obtruserunt Traianum non *GERMANICUM* tantum et *DACICUM*, verum et *CYRIACUM*. Atque haec a Diodoro alieniora Archon *Arches* excusabit. Redeamus ad institutum. WESS.

711. 73. Πόπλιος Μελαῖος] Pro *Μελαῖος* reponere *Μαῖλιος*, et pro *Μάλλιος*, *Μαῖνιος*. Sic enim Livius habet. RHOD. Facem Rhodomanno praeluxit C. Sigonius in Livii L. V. 12. et 18. Adde Pighium in Fast. ad ann. CCCLVII. p. 217. WESS.

712. 85. Ἡρὸς Ἀβακαίνῳ] Ptolemaeo Ἀβάκαινα h. ec. urbs L. III. 4., unde Ἀβακαίνῃ ex Clar. et Reg. 2. praestare p. -

tares. Sed res secus habet. Auctor ipse Ἀβάκαινον probat L. XIX. 65., adsentientibus Stephano et Suida. De oppidi situ Ph. Cluverius Sic. Ant. L. II. p. 386. WESS.

712. 10. Συμμαχίαν πρὸς ἀλλήλους ἐποίησαντο] Vide mox c. 101. WESS.

712. 11. Ἠλπίζον — ἀμνηῖσθαι — καὶ — ἀντιτάξασθαι] Verbum ἐλπίζω, sicut et νομίζω, et alia eiusdem farinae iungit saepe hic author aoristo infinitivi, ut antea docui: quia tamen praecessit ἀμνηῖσθαι, reposuerim lubenter ἀντιτάξασθαι. STERH. Non repugnarem, si qui scriptus liber viam monstraret. Vid. supr. c. 14. WESS.

712. 14. Οἱ δὲ τὸ Λέχαιον τῆς Κορίνθου κατέχοντες] Retineri hoc potest, etsi non absurdum Λέχαιον τῆς Κορινθίας. Lechaeum vocabant τὸν λιμένα τὸν Κορινθιακὸν, uti infra L. XXII. Eclog. 12. Coniunctum erat urbi muris, ab utroque viae latere in altum eductis et quandam quasi partem Corinthi constituebat. Vid. Strabon. L. VIII. p. 583. WESS.

712. 21. Τοὺς πλείστους ἀνείλον] Conf. Xenophont. L. IV. Hellen. p. 413. Hoc factum gloriae Iphieratis accessionem haud exiguam fecit. Passim ab oratoribus celebratur διὰ τὸ κατακεκόρθαι ὑπ' αὐτοῦ τὴν μύραν Demosth. in Aristocrat. p. 435., Aeschin. adv. Ctesiphont. p. 88. et Dinarcho contr. Demosth. p. 99., praeterea Harpocrat. in Ξενικὸν ἐν Κορίνθῳ ex Androtione et Philochoro. Caussam vide a Plut. expositam in Agesil. p. 607. F. WESS.

713. 23. Ἐπὶ Φλιάς στρατεύσας] Phliunta intelligit, ut ex Xenophonte, sed expeditionem in anterieus tempus conferente, Rer. Gr. L. IV. p. 409. videbis: quam quidem urbem Φλιάς qui dixerit alius, non recorder. Cogitaveram ἐπὶ Φλιασίους, aut ἐπὶ Φλιασίαν, quomodo Strabo L. VIII. p. 586. et Eustath. in II. B. p. 291., probaveramque, ni intercessissent membranae veteres. WESS.

713. 30. Τὴν τε Κόρινθον, τὴν τ' ἀκρόπ. κατέλάβοντο] Haec placere non possunt. Opinor amanuensium imprudentiam tres priores voces nobis proeudisse, ex praecedentibus negligenter repetitas. Alioqui cum Rhodomanno scribendum fuerit τὴν τε Κορινθίων ἀκρόπολιν κατέλάβοντο. WESS.

713. 32. Χώραν Ἀργίαν ἐποίησαν] Xenophon οἱ Ἀργεῖοι τὴν Κόρινθον Ἀργος ἐπεποίητο extr. L. IV. Rer. Graec. Nempe utriusque civitatis limites revulserant, edixerantque, ut una eademque censeretur, Corinthiique in ius Argivae reipublicae concederent, eodem p. 407. indice. Mox καταλαβέσθαι τὴν χώραν non damno. Videtur Iphierates agrum Corinthium, ipsamque in eo urbem, Athenis suis voluisse asserere, opportunum prorsus ad Graeciae occupandum imperium: quae fortasse etiam causa, ob quam Argivi illum et mercenarios domum dimiserint, οὐ-

δὲν αὐτῶν δεῖσθαι praetextentes, sicuti Xenophon memoriae prodidit. WESS.

713. 34. Καταλαβέσθαι τὴν γῶραν] Quid est hoc loco καταλαβέσθαι τὴν γῶραν; non affulget lux ex historicis huic loco. Forte non male quis leget τὴν ἄκραν, id est, Corinthiorum Ἀκρόπολιν, quae Acrocorinthus dicebatur. Forte quis meliora docebit. PALM.

713. 40. Ἐξέπιπτεν ἐκ τῆς πόλεως] Qua ex urbe? Fuere enim plures per Macedoniam. Mallet ἐκ τῆς βασιλείας scripsisset. Amyntam altero regni anno dominatione excidisse, docetur et in Syncelli Chronograph. p. 262. Μεθ' ὃν (Aeropum) Ἀμύντας ἔτος ἐν βασιλείᾳς ὑπὸ Μακεδόνων ἐξεβλήθη. Cuius exsilio culpa confertur ibi in Macedonas, nec additur, quis illi suffectus fuerit. Eusebius in Chron. et Hieronymus Amyntae post exactos VI regni annos successorem dant Argeum, illique post biennium remoto substituunt Amyntam hunc ipsum, non usquequaque Diodori consentanei. Liqueet tamen satis, de Argeo illos in Africano suo aliquid reperisse. Habet Noster L. XVI. 3. Ἀργαῖον, ab Atheniensibus in Macedoniam restitutum, qui quidem non multo diversus ab hoc fuisse videtur. Verius tamen Ἀργέος aut Ἀργαῖος adpellabitur, si boni commatis sit numus Goltzii, titulis ΒΑΣΙΛΕΩΣ ΑΡΓΕΙΟΥ inscriptus, quo de Scaliger ad Eusebii Chron. num. MDCXXIV. Ceterum mox post Ἀμύντων aut deest genitivus, qui iungatur voci τῆς, aut scribendum est τοῦ, quod verius censeo: nec alia H. Stephani opinio. WESS.

713. 49. Σάτυρος ὁ Σπαρτάκου μὲν υἱός] Vid. L. XII. 36. Meminit huius Satyri Lysias Or. pro Mantith. cap. 2. Habet et Σατύρον μνημα ἀνδρός τῶν ἐπιφανῶς δυναστεύοντων ἐν Βοσπόρῳ Strabo L. XI. p. 756., quod an huius sit, an Satyri illius, de quo L. XX. 22., non temere affirmavero. Alius certe videtur Satyrus ὁ Βοσπόρου τύραννος, cuius res gestas et mortem signat Polyæn. Strat. L. VIII. 55., illi enim successit filius Gorgippus. Gorgippum autem Demostheni aequalem perhibet Dinarchus Orat. in Demosth. p. 95., viderique adeo posset Satyri eius filius, qui Berisadi successit, ni ea obstarent, quae auctor de Satyro eo memoriae tradidit. Opinor in parte aliqua Ponti regnasse et Berisadi aequaevum fuisse. Conf. Isocrat. Trapezit. p. 529. Praeteriit Gorgippum in Historia Reg. Ponti doctissimus P. E. Souciet. Conmode praeterea articulus ante Σπαρτάκου vocem, ut Rhodom. monuit, abesse poterit. WESS.

713. 52. Υἱὸς Λεύκων] Celebratur huius nomen vetustis Graecorum monumentis. Vid. Aeneam Taet. cap. 5. Athen. L. VI. p. 257. D. Polyæn. L. V. 44. et L. VI. 9. Athenienses eum liberosque civitate donarunt, Demosthene teste in Leptin. p. 282. Sed haec occupasse video Cel. Iac. Perizon. ad Aelian. V. Hist. L. VI. 13., quem adi. WESS.

713. 53. Πολιορκῶντες ἐνδέκατον ἴτος Βουῶς] Non desciscit a more suo. Βῆτορας adpellant alii: de qua urbe, decem aestates hiemesque continuas circumsessa, ut Camilli dictatoris auspiciis et ductu sit occupata, copiose Livius L. V. 19 seq. Wess.

713. 54. Πάροχον Φορέριον] Hoc nomen ubicunque sic exaratum inveneris, muta in Φορέριον, quod verum et Latinum est: et haud dubie a librariis depravatam, non a Diodoro, ut I. Bodinus in maligna huius auctoris vituperatione calumniatur. RHOD.

714. 69. Εἰς τὸν τῶν Μασσαλιητῶν Θησαυρὸν] Appianus in Excerpt. Vales. p. 465., χρονίη τε ἀπὸ τῶνδε τῶν χρονιῶν ἐν Λελοφοῖς ἐκάτιο χρόνῳ ἐπὶ χαλκῆς βάσεως ἐν τῷ Ρωμαίων καὶ Μασσαλιητῶν Θησαυρῷ, μέχρι τὸν μὲν χρονὸν Ὀρόμαρτος ἐν τῷ Φωκιῷ πολέμῳ καταχρῶντο, καὶ ταὶ δὲ ἡ βάσις, paullo plenius crateris historiam exsecutus. Habebant rebus Graeciae florentibus, quod commodum ibi notavit Valesius, pleraeque civitates ad Apollinis Delphici templum suum sibi thesaurum, sive sacrarium, in quo sua et amicorum donaria dedicarent. Inter Massilienses autem et Romanos dudum coaluerat amicitia, ut mirum non sit, eorum in thesauro craterem collocatum fuisse. WESS.

714. 72. Δημόσιον δοῦς κατὰ νόμον] Hospitium cum eo senatusconsulto est factum, donaque publice sunt data, inquit Livius L. V. 23. Vult, credo, locum, laetitia Timasitheo esse praebita, uti moris erat, si qui in sociorum formulam referrentur. Vide eum L. XLIV. 16. Iam quod subiicitur de posteris Timasitheo post annum cxxxvii decursum immunitate donatis, id contigisse videtur, modo sani sint iuneri, sub principium belli Punici primi, cum consul Atilius Liparam in ditionem Romanorum redegit, referente Orosio L. IV. 8. WESS.

714. 73. Μετὰ ταῦτ' ἔτεσιν ἑκατὸν] Μετ' ἔτη ἑκατὸν III. Scaliger emendabat, cui non adstipulor. WESS. in Add.

714. 79. Πόπλιος Σέξτος etc.] Duos priores sic corrige ex Fastis et Livio, Πόπλιος Κορνήλιος Σκιπίων, Πόπλιος Κορνήλιος Κόσσος. RHOD. Vid. Livium L. V. 21. et Pigh. Fast. ad ann. cccviii. Porro Terires, qui hae Olympiade in stadii curriculo victor renuntiatus est, Eusebio Τερειῶος Ἰλλεῖος audit, unde Io. Meursius de Archont. L. III. 18. hoc loco Τερειῶος corrigit, non dissentiente Simson. Chron. ann. 3613. WESS.

714. 88. Αἰδοζον καὶ Σάθηρ] Xenophon Ἀράδοκον τε τὸν Ὀδρυσῶν βασιλέα καὶ Σάθηρ τὸν ἐπὶ Θαλάττῃ ἄρχοντα etc. γέλοιος ἐποίησε. Sed confer not. in L. XIII. 105. WESS.

714. 97. Ἐπισπνήψε μύχην τοῖς ἐκ τῆς πόλεως] Brevis haec Diodorus, uberiore sermone Xenophon Hellen. L. IV. p. 123. WESS.

714. 3. Τὴν δ' Ἐρεσσον etc.] Scribi urbis nomen modo una, modo duplici sibilante, haud quidem mihi latet: malui ta-

men posterius, ut auctor sibi constaret. Confer Berkelium ad Stephanum. WESS.

714. 4. Ἐπλευσεν ἐπὶ Ῥόδον] Atque hoc postremum operum eius mortalium fuit: cum enim ad Aspendum appulisset, neque satis diligenter in castris eius agerentur vigiliae, a barbaris, ex oppido noctu eruptione facta, in tabernaculo interfectus est. Sic Nepos Cornelius in Thrasymb. c. ult. et Xenophon Rer. Grace. L. IV. p. 423. Vide infra c. 99. WESS.

714. 11. Πάντας δ' ἐπιμελῶς καθολήσαντες] Explevi ad hunc modum orationem, pravo alioquin talo suffultam. WESS.

715. 18. Παρὰ τὸν Χρύσαν ποταμὸν] Chrysas fluebat per Agyrinæorum et Assorinorum agros, apud quos et Deus habebatur et maxima religione colebatur. Fanum eius propter ipsam viam, qua Assoro ibatur Hennam, et simulacrum praeclare factum memoravit Cicero quarta Verrina c. 44. Numi Assorinorum, in quibus CRYSAS, Oratoris dicta confirmant, uti Fulv. Ursinus et Paruta commonefecerunt. Plura de amne Philipp. Cluverius Sic. Ant. L. II. p. 325. et N. Heinsius ad Sil. Italic. L. XIV. 229. WESS.

715. 30. Τῶν τότε γὰρ περικειμένων ἐρμύτων etc.] Praevideo non defuturos, qui voci τότε molestiam creandam negent: indicari enim castella ea auctoris aetate non superasse. Ego secus arbitror, eamque ex superioribus in hanc sedem inmigrasse suspicor. Tolle ergo, si placet. WESS.

715. 35. Συνηθροισμένων] Scribe συνηθροισμένον, et post pauca μέτ' ὀλίγων. RHOD.

715. 45. Καὶ κοινῇ τοῖς Καρχηδονίοις διεπολέμει] In ambiguo sum utrum eligam, vulgatam an praestantiorum Codd. lectionem? Infra L. XX. 19. Antigonus Φίλιππον ἐξέπειμιε — διαπολεμήσοντα Φοίνικα καὶ τοῖς ἀφροιστηκόσι. At hoc libro c. 99. μετὰ τούτων διεπολέμονν πρὸς τοὺς κατὰ τὴν πόλιν. Probum ergo utrumque et profecto arbitrarium. Paulo ante ὅσα ἦν χρεία Rhodom. in not. Addend. ὅσων ἦν χρεία corrigit, alterum tamen locum habere posse adiungens: quod verum; sed tritius posterius tamen. WESS.

715. 62. Παραπλήσια ταῖς πρότερον] Vid. L. XIII. c. ult. Id additum huic foederi, ut Siculi Dionysio parent, qui superiore ἀυτόνομοι et sui iuris fuerant relictī. WESS.

716. 70. Ἐκ τοῦ Φαλαικῶν ἔθρους] Interpres Φάλισσον et Φάλισκων legit, quod et Ph. Cluverius amplectitur Ital. Ant. L. II. p. 537. In alia abit Cl. Salmasius in Solin. p. 44., ἐκ τοῦ Αἰκῶν ἔθρους substituens. Ego prioribus adstipulor, tum quod minore molimine gentis vocabulum instauretur, tum quoniam Φαλίσκων auctor eos vocitare atque ab Aequis distinguere adsuevit. Vide mox c. 98. et L. XVI. 31. et de re ipsa Livium L. V. 26. WESS.



716. 74. Καὶ Κάλλος Βῆρος] Mendose. In huius ergo locum unus ex reliquis surrogetur, ut *Λεύκιος Ουάλεμος*. His alios tres adiungit Livius cum Fastis, qui sunt *Λεύκιος Φοίσιος*, *Μεδουλλῆρος*, *Σπύριος Πιστοῦμος*, *Πόπλιος Κορηῆλιος*. Non tantum enim hic defectus est, sed etiam mendum in numerali *τρεῖς*: quod sciolus forte aliquis, defectui mederi volens, pro *ἑξ* substituit. RHOD. Citra dubium foede haec sunt corrupta, viditque dudum Pighius in Fast. ad ann. CCCLIX. Quid suffici debeat, quis certo dixerit? De numero tribunorum militum quae vir doctissimus disputat, absona non sunt, nec tuta tamen. Quid si enim auctor alios hic Fastos sit secutus et tres duntaxat tribunos repererit? Notavit *Φρονόσιον* nomen et emendavit Ph. Cluver. I. A. L. III. p. 1030. WESS.

716. 86. *Ἐνδόξιμον, Φιλόδοξον καὶ Λιγίαν*] Xenophon octo naves Rhodiis submissas, ducesque *Ἐκδοξον* et *Λιγίδα* a Spartanis memorat Hellen. L. IV. p. 419, unde *Λιγίαν* corrigendum suspicor. Scripsi etiam ex Clar. *Φιλόδοξον*, quippe homini magis congruum. WESS. Diphridam Spartanum sub illa tempora commemorat etiam Plutarchus Agesil. c. 17., quae reputantur in Apophth. p. 212. A.

716. 96. *Ἀργιόλαος δ' ὁ τῶν Λακεδαιμονίων βασιλεὺς* etc.] Agesilai in Argivum agrum excursionem, sed citius susceptam, non praeteriit Xenophon *Rer. Graec. L. IV. p. 410*. Hoc tempore Agesipolis, Agesilai in regno collega, eundem in agrum copias duxit. Idem L. IV. p. 416. Fortasse ergo *Ἀργιόλαος* hic suspectus est in locum *τοῦ Ἀργιόπολις*, uti supra c. 89. in libro Claromontano. WESS.

716. 99. *Ἰλὴν μῦς μοίρας*] Vid. ad L. XV. 32. WESS.

716. 4. *Τῶν γὰρ πρισάντων τὴν πόλιν ἦν ἀπόγονος*] A Teucro, Salaminis conditore, genus Evagoras ducebat. Pausanias L. II. 29. p. 178. *οἱ δὲ Τευκρίδαι βασιλεῖς δέμειναν Κυπρίων ἄρχοντες ἐς Ἐδαγόραν*. Consentit Isocrates in Evagor. p. 281. Evagoram privata in fortuna natum eo tempore perhibens, cum, remoto ultimo ex Teucridis rege, tyrannidem Salamine occupasset ex Phoenice exsul quidam. WESS.

716. 7. *Μετ' ὀλίγων*] Scribe *ὀλίγων. τὸν Τύριον*. fortasse *Τύριον*. RHOD.

716. 8. *Τὸν Τύριον*] Palam est legi debere *τὸν Τύριον*. PALM. *Μετ' ὀλίγων τὸν μὲν δυναστεύοντα — τὸν Τύριον*] Adsentior viris doctissimis. Iustum est *μετ' ὀλίγων*. Evagoras enim *περὶ πενήκοντα*, ad *quinquaginta*, sic Isocrates, socios sibi legit, quorum auxilio tyrannum oppressit. Iustissimum *τὸν Τύριον*. Quod et Ill. Scaliger margini libri sui alleverat. Nam Orator ex Phoenice, in qua Tyrus, hominem fuisse clare indicat. In eo ab Isocrate Noster abit, quod unius duntaxat tyranni meminerit, quem Evagoras pessum dederit. Ille vero, venisse *ἐκ Φοινίκης ἄνδρα* qu-

*γάδα*, receptumque in regis amicitiam, eundem regno evertisse: vicissim tyrannum ab administrorum uno sublatum poenas morte dedisse, imperium occupante necis auctore: eius Evagoram insidias fuga vitasse, ultimumque deinceps iniurias intercepta Salamine et obtruncato hoste. Sic Isocrates Evag. p. 283., non declarans uter horum fuerit Abdemon. Series tamen rerum posteriorem eum designat, quem ab Evagora superatum et oppressum Orator, Diodorus, et ex Theopompo Biblioth. Cod. CLXXVI Photius agnoscunt. Scio *Ἀβδύμονα*, sive *Ἀβδήμονα* potius, τὸν *Κιτιέα* in Photii Biblioth. vocari: quod fieri potuit, quoniam in Cypri oppido *Κιτιο*, alioqui ex Phoenice ortus, sedem antea habuerat. Isocrates certe non priorem tantum tyrannum, sed et alterum Phoenicem facit, cum Salaminem *ἐκβεβαρβαρωμένην καὶ διὰ τὴν Φοινίκων ἀρχὴν οὔτε τοὺς Ἕλληνας προσδεχομένην, οὔτε τέχνας ἐπισταμένην* prodit. Atque hoc si mecum probes, discordia, quae Isocratem inter et Diodorum videbatur intercedere, sublata erit. Confer Celeb. Barbeyracium Histor. Foed. P. I. p. 171. WESS.

717. 12. *Χρημάτων πλήθος — εὐπορήσας*] *Ἀν πλήθους*; Vid. not. in L. II. 31. WESS.

717. 17. *Καὶ Σόλιοι καὶ Κιτιεῖς*] Stephanus in *Ῥτιεῖς* ex Ephori L. XIX. citat, *Ἀμαθούσιοι δὲ καὶ Σόλιοι καὶ Ῥτιεῖς ἀντέχοντες ἔτι τῷ πολέμῳ*: quae quoniam scriptoris nostri verbis simillima videntur, placuit Io. Meursio L. I. Cypri c. 10. pro *Κιτιεῖς* refingere *Ῥτιεῖς* hoc quoque loco. Nollem factum. Unde enim edocebor de eadem re Ephorum egisse illis verbis? WESS.

717. 26. *Ἢ δυνήσεται προπολεμῆν* etc.] Non deerunt, quibus ἢ opportunius videbitur, quod neque mihi pro reiiculo foret, si e libris depromeretur. Sed potest et vulgatum suum sibi locum tueri. De studio regis Persarum in id bellum plura Isocrates Evag. p. 293. WESS.

717. 32. *Ἐκατόμνω δὲ τῷ Καρίας δυνάστη προστάξεν*] Vide Photium Bibl. Cod. CLXXVI. ex Theopompo. Hecatomnum illum Isocrates τῆς Καρίας ἐπίσταθμον vocat Panegy. p. 107., id est, regis Persarum nomine Cariae praepositum: quomodo ἐπιστάθμους ἐν ταῖς πόλεσι ab eodem rege constitui paullo superius dixerat, et ἐπίσταθμοι symposii reges in Plut. L. I. Symp. c. 1. Quam vero fidam is Persae operam navarit, docetur L. XV. 2. WESS.

717. 37. *Πρὸς δὲ Αἰτωλοὺς* etc.] Lege *Αἰζοὺς*. RHOD., Aut *Αἰζοὺς* eum Rhodom., aut *Αἰκισλοὺς* ex Ph. Claverii sententia refingendum. Nam quod Ill. Scaliger ad libri sui oram adscripserat *Ὀρόλοζους*, longius abit. Atque hoc quidem certum satis. Aliud est, quod molestiam creat. Primo τὸ τέτατον· constat enim plus quater vicibus bellum in Aequos fuisse decretum a Romanis. Dein καὶ Σούττιον μὲν ὄρησαν nec bene superioribus cohaeret, nec commodam dat sententiam. Emendabat, fateor,

Rhodomannus *Σούττιον μὲν ἐπέθηκεν*, quod et versione expressit: sed nimium id videtur. Et quid Sacrium, media in Faruria positum, ad bellum cum gente Aequicolana administratum? Ph. Cluverius Ital. Ant. L. II. p. 774. *εἰς Τοῦσζλον* corrigebat. Favet reflingenti quadam ex parte Livius L. V. 28. *sed clamor Ferruginem*, inquit, *perlatus, cum castra Romana crederent oppugnari, tantum iniecit pavoris, ut, nequidquam retinente atque obsecrante Aemilio, trescentia palati fugerent.* At id si sequaris, ne quid dicam de differentia descriptionis *Τοῦσζλον* inter et *Σούττιον*, ordo rei gestae prorsus hic erit commutatus. Quid? ipse Cluverius coniecturae non fedit, alibi substituens *εἰς Σάτινον*. Vid. L. III. It. Ant. p. 1030. Ferri id posset, si de *Satrio* aliunde nobis liqueret, quamquam ad *Σάτινον* non sit offensum infr. c. 102. Et dicam, quod sentio, videntur huic loco quaedam deesse, quae sine meliorum librorum ope tentantur frustra. Scribendum tamen *Ὀρέθουρινος*, quo modo Livius solet, etsi antea *Ἐρέθουριναν* Volscorum eam urbem auctor vocarit. WESS.

717. 43. *Καὶ Σερούλιος Κόσσων*] Ita corrige *Σερούλιος Σουλπίκιος*. Dele autem *Κόσσων*. *Κυψί* enim agnomen habet et *Prætextati*. RHOD. Pati possum, ut *Κόσσων*, damnatum a Coisl. et Reg. I. cognomen, in exilium abeat. Forte fuerat *Σερούλιος Καμερίνος*, quo cognomine Sulpicius hic utitur, apud Livium. WESS.

717. 45. *Καταπέμψας, ἔπεμψε*] Offensus hac *ταυτολογία* Rhodomannus priori vocabulo dicam iniegit: ego iugulare non ausim districte. Si enim Luciano licuit *ἰδῶν εἶδον* impune usurpare D. Mar. IV. 3., *ἐχθόμενος ἠΐξαστο* Polybio, si *σκοπούμενοι σκοπούμεν* Platoni, et aliis eiusdem generis alia, a Raphelio et Ch. Sigismundo Georgii collecta, cur Diodoro hanc veniam negabimus? Ceterum Struthas paullo citius missus in Asiae inferiorem oram a rege videtur. Conf. Xenoph. Hist. Graec. L. IV. p. 421. WESS.

717. 48. *Θίβρονα*] *Θίβρονα* Coisl. Reg. 2. et Clar. semper. Vide supr. c. 37. WESS.

718. 49. *Ἰόνδα καὶ Κόρησον*] *Ἰόνδα* hac in vicinia reperiri non memini. *Ἰσιῶνα* habet Strabo L. XIV. p. 940. et *Κορησσῶν*, cui robur ac praesidium ex Athenaeo suo vir magnus conciliat. Sed verius esse *Κόρησον* aut *Κόρησσον* ad Stephanum viri eruditi docuerunt. Prave extrema Orat. II. Sacrarum Aristides, *καὶ ἐλονσάμην ἐν τῷ γυμνασίῳ, τῷ πρὸς Κορησσῶ.* WESS.

718. 58. *Καὶ πολλὴν περιβαλομένον λείαν*] Xenoph. *Κυρῶσπ.* L. III. p. 64. *περιβάλλοντο πολλὴν καὶ παντοίαν λείαν.* Polybius L. IV. 82. *φθείρας δὲ ταύτην καὶ πολλὴν περιβαλλόμενος λείαν.* Mox *ἐλελθῶν* et *μαχόμενον* iure probavit Rhodomannus: posterius, quia scriptae membranæ viam praesibant, suam in sedem revocavi. Vide Xenoph. *Rer. Graec.* L. IV. p. 421. WESS.

718. 61. *Εἰς τὸ Κνωδίνιον φρούριον*] Haud longe Epheso a fuisse videtur, cetera ignotum, mihi quidem certe. WESS.

718. 69. *Καὶ τὸν τε Θρασύβουλον etc.*] Conf. Xenoph. Hellen. IV. p. 423. WESS.

718. 76. *Ἀγύριον στρατηγὸν ἐξέπεμψαν*] Frequentius Ἀγύριος dicitur, apud Xenoph. tamen Ἀογύριος, sed prave. Vid. Io. Meursium Lect. Att. L. VI. 4. H. Valesium ad Harpocrat. in Ἀγύριος et L. Kuster. in Aristoph. Plut. v. 176. WESS.

718. 80. *Σπείδων τὴν κατὰ τὴν νῆσον δυναστείαν etc. προσλαβέσθαι*] Opineris deesse his praepositionem, dedissetque auctorem *σπείδων πρὸς τὴν κατὰ τὴν νῆσον δυναστείαν* et reliq. Voluisse videlicet Dionysium dominationi, qua insulae paene toti imperabat, Graecos, Italiae incolas, adicere: quae quidem sententia uti prava non est, ita neminem necessitas adigit, ut alteram damnet. WESS.

718. 82. *Τὴν μὲν κατ' ἐκείνους etc.*] Aut ἐπ' ἐκείνους, aut κατ' ἐκείνων legendum censeo. STERN.

718. 84. *Διὰ τὸ προπολεμητήριον αὐτὴν εἶναι τῆς Ἰταλίας*] Bene monuit Casaubonus, non praeterito hoc loco, *προτειχίσματα* et *προπολεμητήρια* loca ea dici, quae tutam regionem a repentinis hostium incursionibus praestant ad Polyb. I. 17. Rhegium tali situ erat, ut invasuris Italiam ex Sicilia maxime adversum esset, poterantque adeo Rhagini *προπολεμεῖν τῆς Ἰταλίας* ut Cypria classis, ἢ *δυνήσεται προπολεμεῖν τῆς Ἀσίας* supr. c. 98., et Athenienses *προπολεμοῦντες τῶν συμμάχων καὶ τοὺς βαρβάρους ἀνείργοιτες* in Plut. Pericle p. 158. F. WESS.

719. 4. *Διονύσιος δ' ἰσχυρῶς μαχεσθεῖς*] Quae praecedunt, postulant *χειμασθεῖς*. tempestate enim vehementi iactatus naves eas amisit, non praelio. Porro non videntur suam sedem occupare voces *ἐπὶ τὴν Ῥηγίνην*, collocandae hoc ordine: *τούτων δ' ἅμα ταῖς ναυσὶν ἐκβρασθέντων ἐπὶ τὴν Ῥηγίνην, οἱ Ῥηγῖνοι etc.* Decurret certe leniore tramite oratio. *Χειμασθεῖς* esse corrigendum, animadvertit quoque praestantissimus Kuhniius ad Ael. V. II. XII. 61. WESS.

719. 10. *Καὶ πολλάκις παρ' ὀλίγον ἐλθὼν ὑποβρέχιος*] Solent hoc in genere plerumque verbum addere. Pausanias L. I. 10. *παρ' ὀλίγον μὲν ἦλθεν ἐκπεσεῖν Θοράκης*. Et c. 13. *ὀλίγον μὲν ἦλθεν ἐλεῖν αὐτοβοεῖ τὴν πόλιν*. Philo Iud. Leg. Cai. p. 998. A. *εἰδὼς οὖν ὅτι παρὰ μικρὸν ἐλθόντα μισθίακις αὐτὸν ἀπολέσθαι διέσωσεν*. Euripides Heraclid. v. 296. *καὶ παρὰ μικρὸν ψυχὴν ἦλθεν διακναῖσαι*. Polyb. I. 45. *οἱ δὲ Ῥωμαῖοι παρ' οὐδὲν ἐλθόντες τοῦ πάσας ἀποβαλεῖν τὰς παρασκευάς*. Ad quem modum saepe alii. Noster *εἶναι* aut *ἀπολέσθαι* subintelligendum videtur reliquisse. WESS.

719. 16. *Λευκανῶν τὴν Θουρίων καταδραμόντων*] Iu- canii perpetui fuerunt Thuriorum hostes, quos et tandem subactos

ctos suam in ditionem redegerunt. Vid. Strabon. L. VI. p. 404. et Polyacn. Strateg. L. II. 10. WESS.

719. 25. Πρὸς τὴν τῶν πολεμίων παρουσίαν] Id est περί, ut apud Plutarch. Sympos. L. IV. 5. πῶς δοκεῖ ἡμῖν λελέχθαι τὸ πρὸς τοὺς Ἰουδαίους: et Auctorem Ep. ad Hebr. I. 7. καὶ πρὸς μὲν τοὺς ἄγγέλους λέγει, ubi Illustr. Grotius. WESS.

719. 40. Λόγοις ἑψηλοῖς etc.] Nihil muto. Posse λόγους ψυλοῖς dici, qui nullis sint arboribus vestiti, certissimum est: sed nihil illi ad hunc locum. Μοχ διέκλεισαν αὐτοὺς τῆς ἐπὶ τὰς πατριῶδας ἑλπίδος dictum eleganter est loco τῆς ἐπανόδου, quo alias delectatur. WESS.

720. 63. Ὡς ἐπὶ τὴν γῆν ἀπεβίβασε καὶ ἔπεισε] Copula auctiorem orationem esse iussi: hiabat enim. Ὡς ἐπὶ τὴν γῆν positum est, uti ποιούμενος τὴν ῥύσιν ὡς ἐπὶ μεσημβρίαν apud Polyb. II. 16., cui id perfrequens, monente Iac. Gronov. ad L. I. 36. WESS.

720. 74. Δυσχερῶς ἂν παραγενέσθαι] Corrige περιγενέσθαι, cum doctissimo Rhodomanno. Id enim hac in re probatur. Supra L. I. 52. ὥστε — δυσχερῶς περιγενέσθαι τῶν ἔργων. Μοχ c. 104. ῥαδίως τῶν πολεμίων περιεγίνοντο. WESS. Περιγενέσθαι placuit et Ursino, pulere. IDEM in Add.

720. 75. Διόπερ τοῦτον μὲν ἀπήλλαξε τῆς ναυαρχίας] Artes, quibus hominem minime malum tyrannus circumscripsit, exponit Aeneas Poliorcet. c. 10. Abiit dein in exsilium Thurios, cuius urbis incolae sibi conciliarat. Id volunt συμφερόντως αὐτῶν, quae modo auctor, ubi de pace Lucanos inter et Italos, adhibuit. Vid. L. XV. 7. et de Thearida, Dionysii altero fratre, Plut. Dion. p. 960. C. WESS.

720. 77. Τὴν τῶν Οὐεξιῶν χιόραν] Forte Οὐειεντίων. RHOD. Adsuevit auctor *Veientes* Βοιοῦδος adpellare, alii Βηῖονες aut Οὐηῖονες. An ergo Οὐηῖον voluit? Vid. Ph. Cluverium Ital. Ant. L. II. p. 534. De agri descriptione inter cives senatusconsultum fuisse factum Livius L. V. 30. tradit, ut agri *Veientuni septena iugera plebi dividerentur: nec patribus familiae tantum, sed ut omnium in domo liberorum capitum haberetur ratio: multum a Nostro discrepans.* WESS.

720. 79. Καὶ πρὸς μὲν Αἰκούσους etc.] Non dubito quin pro *Αἰκούσους* scribi debeat *Αἰζούς*. Urbem autem *Αἰζίλον* dicit, ut opinor, quam p. 451. *Αιζοίκουαν*, vel *Αιζοίκουαν*, ut in aliis legitur exemplaribus. STEPH. *Αζοὺς* esse scribendum, pulcre cum Stephano vidit Rhodomannus, non dissentiente Ph. Cluverio I. A. L. II. p. 782. Quodnam vero oppidum sit *Liflum*, sive *Lifoea*, uti c. 106. nuncupari videtur, dici non potest. In gente Aequicolana, quantum quidem rescire potui, nullum eo nomine memoratur. WESS.

720. 81. Οὐελιτροῖνων δ' ἀποστάντων] Latine *Veliternos*

vocari, adscripserat Rhodomannus: quod semper verum non est, namque et *Velitinos* habet in August. c. 94. Suetonius, dissentientibus tamen scriptis membranis. Conf. Claver. L. III. I. A. p. 1015. WESS.

720. 83. Καὶ εἰς Κίρκιους ἀποικίαν ἀπέστειλαν] Quem Italiae populum, si vera est scriptura, intelligat, nondum assequor. RHOD. Commodissimum Κίρκιους, *Circeios*, foret, si hoc demum anno colonis Romanorum frequentatam urbem fuisse, liqueret aliunde. Tarquinius *Circeios* colonos deduxerat apud Dionysium Halicarnass. L. IV. p. 260. et Livium L. I. 56.: fueruntque adeo *Circeienses* diu ante hoc tempus Romanorum coloni. Tamen cum nihil melius occurrat, neque aliud extundere poterit Ph. Claverius, indicari *Circeios* opinabor. Potuit enim usu venire, ut colonia supplemento indigeret, vicinorum incursione aliisque calamitatibus ad paucos redacta. WESS.

720. 87. Καὶ Ἄνλος Μάλλιος] Ex Livii L. V. vi. Μάρονον Μάνλιον legit Rhodom., cui de praenomine, etsi Dionysius L. I. p. 61. *Titum* vocet, non refragabor. Μάλλιος non muto: solent Graeci saepissime *Manlios* Μαλλίους nuncupare, atque auctor ipse c. 16. WESS.

720. 90. Ἐπὶ τὴν Ἰταλίαν στρατευσόμενος] Fortasse scripsit Diodorus στρατευσόμενον atque ita legendo expungenda esset post ἀναδείξας interpunctio. STEPH.

720. 91. Ὁρμησεν ἐπὶ Συρακοῦσῶν] Lege ἀπό vel ἐκ. RHOD. Lege ἀπό PALM. Ἀπὸ Συρακοῦσῶν rescripsi, secutus virorum doctorum Rhodomanni et Jac. Palmerii, ita corrigentium, iudicium, locique sententiam. Vitium progenit amaniensium secordia, qua et Eclog. 1. L. XXXII. p. 521. 92. ex ἀπὸ τῆς γύσεως natum esse ἐπὶ τῆς γύσεως videbimus. WESS. Ἄπο placuit et Ursino, pulere. IDEM in Add.

720. 95. Περπταῖος δὲ καταλύσας εἰς τὴν Μεσσηνίην] Puto pro καταλύσας reponendum κατανόσας. pro quo tamen saepius usurpat διανύσας. STEPH. Περπταῖος δὲ κατανόσας εἰς etc.] Firmant Stephani suspicionem scripti libri. Supr. c. 62. Ἰμῆλκων δὲ δυνὸν ἡμέραις κατανόσας εἰς τὸν τῶν Καταναίων αἰγιαλόν. Habebimus καταλύειν εἰς πανδοχεῖον et καταλύειν πρὸς Λεύκιον Ταρχύνιον suis locis, sed diversiore sententia. WESS.

721. 1. Καὶ καταλαβὸν — δεκαναίαν] Auctoritatem rarius vocabulum desiderare videtur. Addamus ergo. Polybius Excerpt. Leg. p. 1180. καὶ δεκαναίαν μακρῶν πλοίων ἐπαγγελόμενος δώσειν. et p. 1214. ἐπαγγελόμενος δεκαναίαν δώσειν ἐν τελεῇ πεντηκοντηρικῶν πλοίων. Paulo aliter Strabo, cum de Caesare Augusto ἐν οἷς ἀνέθρηκε τὴν δεκαναίαν ἀκροδίνιον L. VII. p. 500., ubi Casaubonus Nostri oblitus non est. In Polyaeo Strat. III. 4. 2. Phormio τὴν ἑαυτοῦ πεντεναίαν ἐρέβαλε ταῖς γενομέναις πλησίον αὐτοῦ τριήρεσι. Sic lege, prave editur πενταναίαν,

vertiturque *pentanaeam*. Intelligit quinque eas naves, quas Phormio sibi sumpserat, cum classem ἀνὰ πέντε in hostem dirigeret. *Ἡεπτεκαίδεκαρῶν* si velis, Demosthenes περὶ Συμμοῦ. p. 106. dabit: nam in Lexicis ipsoque sermonis Graeci Thesaurο omnia haec frustra quaeres. WESS.

721. 6. *Εἰς Καλωρίαν*] Non longe ab amne Sagra Cautionia, sive, ut prius appellabatur, Aulonia erat: condita ab Achaëis, si Straboni credis L. VI. p. 401. et Pausaniae L. VI. 3. p. 459. Nam Servius in Aeneid. III. 553. Locris eius originem adscribit, Crotoniatis vero Etymologus, *Ἀλλωρία, πόλις ἐπὶ Κροτοματιῶν χτισθεῖσα καὶ ἀπὸ τῶν προκειμένων ἀλλόων ἐχοῦσα τὸ ὄνομα*: ἔσπερον δὲ τῷ χρόνῳ *Καλωρία* ἐκλήθη. Adde Stephan. in *Καλωρία*, et quae apud Polyaeum L. VI. 11. WESS.

721. 23. *Ἄμα δὲ καταπεπολεμημένους — διαγωνισθῆναι*] Levi mendo haec esse obsita, non fugit Rhodemannum. Scriptum fuit *καταπεπονημένους* i. e. *fractos, debilitatos*, ut *καταπεπονημένη ἡγεμονία* L. XI. 6. et καὶ τῶν *Ἀθηναίων καταπονημένων καὶ πρὸς γενῆν ὀμησάντων* L. XV. 85., et passim in his libris. WESS.

721. 29. *Πρὸς τὸν Ἐλωρον ποταμὸν*] Dux Graecorum Helioris librariis ansam praebuit, ut fluvii nomen corrumperent. Verum erat *Ἐλωρον* sive *Ἐλωρον*, quo titulo notissimus in Sicilia amnis erat, unde et huic cognomen venisse videtur. Polybius tamen *Ἐλλέπορον* L. I. 6., Polyaeus V. 3. 2. *Ἐλέπορον* vocitant, eumpse indicantes. Vid. Casaubon. ad Polybii eum locum, et Io. H. Boecleri Lect. Polyb. p. 7. WESS.

721. 33. *Ἐστρατοπεδικῶς τῶν ἐναντιῶν*] Constat sententia. Verba defectu praepositionis laborant, quam ex praecedentibus si arcessiveris, oratio bene habebit. WESS. P. 301. 97. et vol. II. p. 118. 8. contulit Reiskius.

722. 53. *Ἐπίμεινον τὸν κίνδυνον*] Praelium intelligi, manifestum est: quo vocabuli usu nihil tritius apud Polybium nostrumque, et ceteros Historicos. *ὑπομένειν ἀγῶνα*, sed in re forensi, dixit et Andocides princip. Orat. de Myster. WESS.

722. 60. *Ἐπὶ τινα λόγον ἐστειμένον, ὅντια πρὸς τῆ πολιορχία*] Sic edebatur. Ego scribendum censui, *ἐπὶ τινα λόγον, ἐστειμένον ὅντια πρὸς τὴν πολιορχίαν*. Cuius consilii rationem et in re ipsa et scripto Clarom. inveni. WESS.

722. 69. *Ὁὐ μετρίως ἐν τοῖς ἐήμερήμασι γενόμενος*] Fortassis ὁδε vel τότε μετρίως. Sic Rhodom. in notis, in earum vero Auctario, τότε μέτριοις, quod et vertendo expressit. Placet μέτριοις, ab Is. quoque Vossio libri margini allitum: cetera proba sunt. Dionysius enim fortunae non temperabat, cum tot millibus ediceret, ut, positis armis, suae se potestati et arbitrio permitterent. Porro *σκληροῦ δὲ τοῦ πράγματος ὄντος*, quod subsequitur, etsi damnare nolim, videri originem accepisse poterit ex

σκληροῦ δὲ προστάγματος ὄντος, cuiusmodi profecto tyranni id mandatum erat. Nam πράγματα et προστάγματα scribendi quodam compendio a librariis permisceri, nimis notum est, ut repetatur. Conf. tamen L. XVI. 41. WESS.

722. 84. Καὶ σχεδὸν τοῦτ' ἔδοξε πρώττειν ἐν τῷ ζῆν κάλλιστον] Probavit et Agathocles illustre Dionysii hoc factum, sed in speciem, ut Leontinos in fraudem indueret, docente Polyaeo V. 3. 2. WESS.

723. 93. Καὶ παρακαλέσαι μηδὲν — ὑπὲρ ἄνθρωπον βουλεύσασθαι] Vid. not. in L. XIII. 21. WESS.

723. 99. Ἐν Συρακούσαις μετόπισεν] Seq. cap. μετόπισεν εἰς τὰς Συρακούσας, quod multo frequentius. WESS.

723. 2. Καλωνιατῶν] Καλωσίων Vat. male. Vulgatum iustum esse Steph. in Καλωνία docet. WESS.

723. 3. Αἰφίκοιαν πόλιν] Αἰφίλον superius c. 102., ubi vide. Livius Consules L. Valerium Potitum et M. Manlium, cui Capitolino postea cognomen fuit, magnos ludos fecisse, quos M. Furius Dictator bello Veienti voverat, refert L. V. 31. nihil eorum, quae Diodorus. WESS.

723. 7. Πυρρίων] In Dionysio Πυργίων Rom. Ant. I. p. 60. Victor vero in stadii curriculo Sosippus apud Eusebium domo Delphus perhibetur fuisse, nescio quo auctore. WESS.

723. 10. Γάιος Ροῦφος] Muta in Φούριος. Livius duos addit. RHOD. Sex tribunos militum consulari potestate Livius L. V. 32. edit, L. Lucretium, Servium Sulpicium, C. Aemilium, L. Furium, Agrippam Furium, M. Aemilium: Rufum nullum, forsitan aliis ex annalibus. WESS.

723. 16. Τὴν δὲ πόλιν κατασκάψας (τοῖς Λοκροῖς) προσέμερισε etc.] Addidi bina ea vocabula, a socordibus librariis praeterita. Res est ex sequentibus apertissima, et quoque a Rhodmano animadversa. WESS.

723. 24. Ὡς μόνην αὐτῷ συγχωρῆσαι — τοῦ δήμου θυματέρα] Vid. Paullum Leopard. Emend. L. XIII. 4. Rhegium a Dionysio solo aequatum Strabo ait, ὅτι αἰτησαμένῳ κόρην πρὸς γάμον, τὴν τοῦ ΔΗΜΙΟΥ θυγατέρα προὔτειναν L. VI. p. 397. Qua quidem in re consultius Rhegini fecissent, si citra verborum contumeliam Dionysio sponsam negassent, nam de affinitate culpari non possunt. Insidiosa erat, sicuti Locenses experti sunt, docente Philosopho Politic. L. V. 7. Ceterum in verborum ordine ὡς συγχωρῆσαι vicem τοῦ ὥστε occupat, inque πολιτικῶν παραθέτων γαμῆσαι desideratur τινὰ, ut in S. Lucae Ev. XXI. 16. καὶ θανατώσουσιν ἐξ ὑμῶν, et saepe alias. WESS.

723. 38. Ἐπαγγελλόμενος — ἀποστέλλειν] Expectasses ἀποστελεῖν, quod tamen plane necessarium non est. Simile fere L. XIV. 78. τὸν μὲν Ἀριστοτέλην ἐφησεν ἀποστέλλειν εἰς Λακε-



*δαίμονα. et Virg. Aen. II. 637. Abnegat exacta, vitam producere Troia Exsiliūque pati. tum XII. 149. Nunc iuvenem imparibus video concurrere satis. Fraudem autem, qua Dionysius Rheginos pessum dedit, Frontinus Strat. III. 4. 3. tangit.*  
WESS.

723. 41. *Δόντων δὲ, νομιζέειν etc.]* Lego νομιζέων pro νομιζέειν. Potest etiam legi ἐνόμιζέειν. STEPH.

724. 48. *Ῥυποροίσαντες αὐτοῦ τὴν ἐπιβολὴν]* Non spernerem τὴν ἐπιβολὴν, si e scriptis repetita esset membranis: quae cum nihil demutant, in vulgato, *propositum et institutum* tyranni indicante, acquiescam. WESS.

724. 54. *Ῥπιστον τοῖς μεγέθεσι]* Poteris et ἀπίστων τοῖς μεγέθεσι, si aptius id putaveris, amplecti: *ζήτεσι πολλοῖς καὶ ἀπίστοις τὸ μέγεθος σνγκεκυρηκέναι* habebis L. XVII. 106. WESS.

724. 56. *Φύτωνα]* Eadem scripturae varietas apud Philostratum L. I. Vit. Apoll. c. 35. et L. VII. 2., membranis modo *Φοίτωνα*, quod et apud Suidam in *Δισχίνης*, modo *Φύτωνα* appellantis, sicuti Clariss. Nearius ostendit. Utrumque Graecum est, manetque in dubio, utrum verum sit. *Φύτιον* Rheginum, Pythagorae sectatorem, memorat Iamblichus Vit. Pyth. sect. 267., quem eundem non dixerō. WESS.

724. 76. *Ῥεπειψε δὲ καὶ Ῥαυφοδὸς τοὺς χρονίστους]* Haeserat olim *Ῥαυφοδῶν* titulus illis inprimis, qui versibus Homericis cantandis quaestum faciebant, transiit inde ad aliorum poetarum carminum recitatores. Nota ea res est ex Athenaeo L. XIV. 3. et Schmidio ad Pindari Nemcon. Od. 2. Auctor ipse *εὐφωνοτάτους τῶν ὑποκριτῶν* nuncupat L. XV. 7. WESS.

724. 86. *Ῥαναθεωροῦντες τὴν κακίαν τῶν ποιημάτων]* Vid. L. XV. 6. WESS.

724. 89. *Καὶ γὰρ Ῥυσίας ὁ Ῥήτωρ etc.]* Opportune Dionysius T. II. p. 92. *Ῥῆστι δὴ τις αὐτῶ (Ῥυσία) πανηγυρικὸς λόγος, ἐν ᾧ πείθει τοὺς Ῥλληνας, Ῥγομένης Ῥλυμπιασί τῆς πανηγύρεως, ἐκβάλλειν Διονύσιον τὸν τύραννον τῆς Ῥρχῆς, καὶ Σικελίαν ἐλευθεροῦσαι, Ῥρξασθαί τε τῆς Ῥχθρας αὐτίκα μάλα, διαρπάσαντας τὴν τοῦ τυράννου σκηνὴν, χρονσῶ τε καὶ πορσῆρα καὶ Ῥλλῶ πλούτῳ πολλῶ κεκοσμημένην. Ῥεπειψε γὰρ θεωροῦς εἰς τὴν πανηγυριν ὁ Διονύσιος, Ῥγοντας θυσίαν τῶ θεῶ etc.,* quae ibi legi possunt: sunt enim ad hunc locum accommodatissima. Meminit et Plut., sed obiter, T. II. p. 836. D. WESS.

725. 2. *Ῥλλὰ σὺν τούτοις τέθριππα καὶ Ῥ ναῦς ἐξέπεσον]* Mala profecto carmina, quae una cum quadrigis navem in brevia impellunt! Sed haec ioco Syracusani. *Ῥξέεσον* non muto: pendet ex prioribus. WESS.

725. 3. *Ῥυθόμενος τὸν τῶν ποιημάτων διασυριττῶν]* Hoc retineo. *Ῥεσυριττειν, κατασυριττειν, διασυριττειν* et κλωσι-

σφρίττειν extrema Leg. ad Cai. Philon. Iud. de sibilis, quibus malos poetas in theatri excipiant, frequentantur, eodemque pertinet διασυρημιός. Neque pravum tamen alterum. In Glossis διασυρημιός, cavillatio, detractio, obtrectatio: atque ita διασύρειν L. XX. 33. et Lucian. de Calumn. etc. c. 14. Quam vero aegerrime hunc carminum suorum contemptum Dionysius tulerit, docetur L. XV. 7. WESS.

725. 8. Οὐλασανίτας] Forte Οὐλοσανιότας. RHOD. Οὐλασανίτας] Huic locum dedi, propius remoto a veriore nomine Οὐλοσανίτας, quod et Ph. Cluverio Ital. Ant. L. II. p. 557. se probavit. Γουράσιον sive urbem seu castellum agri Volsiniensis nemo novit. Τρόσιλλον refingit Cluverius, coniectura dubia. Praelium ibi pugnatum describit Livius L. V. 32. WESS.

725. 12. Χιλιάρχοι (ἔξ etc.)] Horum nomina foede mutilata et corrupta ex Fastis ita ad integritatem suam reducito, Κοίντιος, Κάστων, Γάιος, Φάβιοι. Κόιντος Σουλπίκιος, Κόιντος Σερούλιος, Σερούσιος Κορηήλιος. RHOD. Probabile est, Fabiorum praenomina hic fuisse olim posita: huc ducit Coisl. liber. Livius M. Fabii Ambusti tres filios facit: at auctor Fabiorum patrem Tribunis milit. manifesto aggregat c. 113. Reliquorum nominibus error sine dubio inest. Sigonius in Livii L. V. 36. hinc citat Q. Sulpicium Longum et Σερούσιον Κορηήλιον Μαλούγωνα. Unde integriore eum codice usum fuisse, haud iniusta suspicio est. WESS.

725. 16. Κακοπαθοῦντες τῷ πολέμῳ etc.] Vide Xenophon. L. V. p. 429. Ignominiosam autem toti Graeciae et Spartanis imprimis Antalcidae pacem Archonte Theodoto fuisse societatis testis etiam Aristides T. III. p. 474. et Polyb. I. 6. WESS.

725. 20. Περί ὧν ἦν ἀπεσταλμένος ἐνδεχομένως] Interpunctionem, qua ἀπεσταλμένος et ἐνδεχομένως dispescabantur, mutavi: erat enim absurda, monueratque Rhodomannus. Mox potius erit ποιήσεσθαι τὴν εἰρήνην. WESS.

725. 23. Τοὺς δ' ἄλλους Ἕλληνας — αὐτονόμους εἶναι] Praeter insulas tamen Lemnum, Imbrum et Scyrum, quae Atheniensibus, quorum sub imperio fuerant, relictas sunt. Docet Xenophon L. V. p. 430., ipsas foederis et pacis leges repraesentans. WESS.

725. 34. Ἐκκεκλημένος] Lege ἐκκεκτημένος. PALM. Voluit, credo, doctissimus Palmerius ἐκτημένος, ut apud Herodot. IX. 93., aut κεκτημένος. Quorum alterutrum et ego praeoptavero. Evagoras, rege alibi occupato, eo rem redegerat, ut omnem praene Cyprum sibi subditam videret: ὥστε μικροῦ μὲν ἐδέησε Ἀπρον ἄπασαν κατασχεῖν Isocrates ait in Evag. p. 294. WESS.

726. 45. Δέματα καθεψῶντες ἐσαιοῦντο] Idem usu venit Atheniensibus, a Cornelio Sulla obsessis: absumptis enim animalibus, δέματί τε καὶ βόσας ἐψοντας καὶ λιχωμένους τὸ

γινόμενον ἐξ αὐτῶν vitam eos produxisse Appian. Mithrid. p. 331. refert. Nec melior Numaaniorum, a Scipione operibus circumdatorum, eibus. πρώτα μὲν, ὥσπερ τινὲς ἐν πολέμῳ ἀνάγκαις, δέγματα ὑποτίτες ἐλιχμῶντο, idem inquit de Bell. Hisp. p. 530. De his vero, qui C. silini in praesidio fuerant, Livius L. XXIII. 19. *Postremo ad id ventum inopiae est, ut lora, detractasque scutis pelles, ubi ferrida aqua mollissent, mandere conarentur.* Nota et alia dirae famis exempla sunt, quae prudens praetereo. WESS.

726. 51. Τοὺς ἐπὶ ἀνθρώπων πάσχειν] Fortasse scripserat Diodorus τοὺς γὰρ ἐπὶ ἀνθρώπων πάσχειν etc. ut p. 451. dixit μηδὲν περὶ αὐτῶν ἐπὶ ἀνθρώπων βουλευσασθαι. STERH.

726. 56. Τὴν πᾶσαν κατ' αὐτῶν ἐπιτρέψαντες ἔξουσίαν] Arbitror interpretamentum esse grammatici, quod ex Reg. I. adscriptum est. Non multum abit δοῦναι τὴν ἐπιτροπὴν περὶ αὐτῶν, quod a Polybio explicitum vide Excerpt. Legat. p. 1349. WESS.

726. 62. Ἐκέλευσε τοὺς δόντας ἀργυρίου μᾶν ἀποικιοῦσθαι] Aristoteles Oeconom. L. II. p. 689. occupato Rhegio Dionysium refert, oppressis dixisse, ὅτι δικαίως μὲν ἂν ἐξανδαλοποιήσαιεν ἐπ' αὐτοῦ. τῶν μὲντοι τὰ εἰς τὸν πόλεμον ἀνηλωμένα χρήματα κομισάμενος, καὶ ἐπὶ ἐκάστου σόμματος τρεῖς μνᾶς, ἀφῆκεν αὐτοῖς. Rheginos quidquid pecuniae occultarant, dedisse, aliam insuper mutuum sumpsisse, ut sese redimerent: tyrannum vero omni ea interversa, fidem fregisse, et omnes sub corona vendidisse: multum a Nostro discrepans. WESS.

726. 66. Αὐτὸν δὲ τὸ μὲν πρώτον ἔδρασε πρὸς τὰς ἐπιλοπάτας etc.] Eadem fere Philostratus, nisi quod Rhegio nondum occupato factum velis. Verba sunt L. VII. Vit. Apollon. c. 2. καὶ ὁ μὲν τύραννος, ἐπὶ τῶν μηχανημάτων ἀνάγκαις αὐτὸν ξῶντα, προσήγαγε τοῖς τέχναις, ὡς μὴ βάλλοιεν οἱ Πηγῖνοι τὸ μηχανήμα, φειδοῖ τοῦ Φύτωνος. ὁ δὲ ἐβόα βάλλειν, σκοπὸς γὰρ αὐτοῖς εἶναι τῆς ἐλευθερίας. Sed illi in miserabili Phytonis hoc casu cum Diodoro non bene convenit. Adfirmat hominem, Rhegio expulsum, ad Dionysium confugisse: floruisse tyranni gratia, expiscatumque eius de Rhegio opprimendo consilia, civibus per epistolam prodidisse: deprehensum vero machinarum uni adstrictum, atque ita moenibus, dum urbs circumvallaretur, fuisse admotum. Conf. eiusdem L. I. 35. et P. Leopardum Emendat. L. XI. 22. WESS.

726. 74. Ἀμα κήρυκος συναζολοῦσθους, ὅτι τὸν ἄνδρα etc.] Interpres proclamante interim praecone, loci sententia, non verborum, expressa. Delectantur utroque in sermone tali ellipsi. Noster in Excerpt. Vales. p. 381. ἐξαπέστειλε προσηβεντὰς εἰς Ῥώμην, μὴ περιδεῖν βασιλεῖα φέρον — ἡ δὲ αὐτοκράτορος ἐπεμψε πρέσβεις, λύσειν τὴν πολιορκίαν. utrobique delitit λέγον-

τας aut eiusdem generis aliud vocabulum. Longus Pastor. I. p. 5. τῆς δὲ ἐκπλαγείσης, εἰ παῖδια τίκτουσιν ἀγες. Scriptor de Bell. Hispan. c. 19. legati *Caesarem adierunt, si sibi vitam concederet, sese insequenti die oppidum esse dedituros.* Mitto plura: genus enim hoc a viris egregiis A. Schotto Obser. Hum. L. III. 13. Iac. Gronov. in Herodoti L. I. 75. P. Burman. ad Petron. c. 33. Drakenborch. in Livii L. IV. 20. et Cortio ad Sallust. Jug. c. 109. atque aliis illustratum saepissime fuit. WESS.

727. 88. Κατεπόντωσε τὸν ἀτυχή] Scripti id libri postulabant, estque aptum satis. Antiphon Or. de Caed. Herod. p. 131. *ὅτι ἤδη τεθνεῶτα ἀντὸν ὑπ' ἐμοῦ ἐνθείς εἰς τὸ πλοῖον καταποντώσειε.* Rarius hoc Nic. Damasceni Excerpt. Vales. p. 445. τοὺς δὲ ἀνθρώπους — οἷα ἀθέους ἐπόντωσεν. WESS.

727. 92. Τοὺς θρηγῆσαντας] Rectius θρηγῆσαντας, ut ἀλγήσαντας. STERN.

727. 94. Καθ' ὃν δὲ καιρὸν μάλιστα Πύριον etc.] Auctor Polybium L. I. 6. sequitur, Antalcidae pacem, obsessum Rhegium et Romam a Gallis occupatam in eundem annum coniciientem. Diodorum et Polyb. amplectitur Iustinus L. VI. 6. *Κεῖνος ἄνθρωπος, in-quiens, non eo tantum insignis fuit, quod repente pax tota Graecia facta est: sed etiam eo, quod eodem tempore urbs Roma a Gallis capta est.* At Dionysius in superiore annum, quo Athenis Pyrrhon sive Pyrgion Archon fuit, his verbis, ἡ Κέλτων ἡγοδος, καθ' ἣν ἡ Ῥωμαίων πόλις ἐάλω, συμπεπονῆται σχεδὸν ὑπὸ πάντων ἄρχοντος Ἀθήνησι Πυργίονος γενέσθαι, κατὰ τὸ πρῶτον ἔτος τῆς ὀγδόης καὶ ἐννεηκοστῆς Ὀλυμπιάδος Ant. Rom. L. I. p. 60. Citius vero Romanorum annales, quos non sine gravi caussa D. Petavius atque alii duces eligunt. Vid. illum Doct. Temp. L. X. 31. et H. Dodwell. Ann. Xenoph. p. 263. WESS.

727. 99. Ἀπὸ τῶν ἐν Τυρρήνιᾳ δώδεκα πόλεων] Livius explicabit L. V. 30. *Ii (Tusci) in utrumque mare vergentes incolere urbibus XII terras, prius cis Apenninum, ad inferum mare; postea trans Apenninum, totidem, quot capita originis erant, coloniis missis.* Urbes ipsas recenset Ph. Cluverius Ital. Antiq. L. II. p. 434. et Iust. Fontaninus de Antiquit. Hortae L. I. 1. Porro quod de Pelasgis sequitur, qui ante Troiani belli tempora ex Thessalia huc commigrarint, cognitum exploratumque est ex Dionysio R. A. L. I. p. 14., atque expositum diligenter a Th. Rykio Diss. de Prim. Ital. Colon. c. 3., haec Nostri scriptoris non praetereunte. WESS.

727. 4. Οἱ καλούμενοι Σένωνες] Sic praestat. Mox τὸν πορρόσάτω κείμενον λόγον τῶν ὄρων Ph. Cluver. Ital. suae L. II. p. 311. inprobat: neque enim unum *collem* totam Senonum gentem capere potuisse: scripsisse auctorem τὸν πορρὸν κείμενον τόπον τῶν ὄρων i. e. *locum in montibus ad mare longissime situm.*

Cui si Codd. addicerent, non refr. rarer. Vulgacium, quod schœdæ tuentur omnes, indicare potest, Senones collem e montano tractu insedissee, et gentis quamdam metropolim constituisse, atque ita retineri. WESS.

727. 10. Τὴν τῶν Καυλωνίων χώραν ἐπόρθουν] Scripserat Κλοσίων, cuius vocabuli vestigia in Clar. et Reg. 2. durant. Interpres, id non animadvertens, *Cauloniorum* verterat. Ex Livio L. V. 35. res est aperta, neque a Ph. Cluverio I. A. L. II. p. 566. sine nota transmissa. Mox Κλοσίων et Κλοσίους multo rectiora fuerint. WESS.

727. 27. Προεκαλέσατο τὴν δίκην ἐπὶ τὸν δῆμον] *Ad populum provocavit*: quo in genere προεκαλεῖσθαι tritium. Dionysius R. A. L. VII. p. 448. ἐξεῖναι τοῖς καινοχουμένοις — προεκαλεῖσθαι τὰς κρίσεις ἐπὶ τὸν δῆμον. Polyb. Excerpt. Legat. p. 1218. διότι προεκαλοῦντο περὶ τῶν ἀρμοδιουμένων ἐπὶ Ῥωμαίων. Atque ita cum de rebus Romanis sermo est: Athenis aliud indicabat, ut ex Lycurgo in *Leocrat.* p. 151. Demesthene Or. I. adv. Stephan. p. 623. et Harpocrat. in *Ἠρόκλησις* notissimum. Ceterum Livius paullo aliter L. V. 36. WESS.

728. 31. Τότε πρῶτον ἤρξατο διαλύειν τὸ κράθην etc.] Errat. Iudicium populi rescindi ab senatu non poterat. Id nullo nec exemplo nec iure fieri legatis, qui ab Ardea venerant, senatus respondit apud Livium L. IV. 7. Regum, Senatusque decreta saepe antea populus antiquavit. Vide eundem L. I. 26. et Senecam Epist. 108. WESS.

728. 41. Διαβάντες τὸν Τίβεριον] Neque haec vero consentanea. Non enim Etrusco in solo trans Tiberim pugna commissa. Cis flumen id praelium pugnatum esse, consentiant omnes. Porro στάδιοι ὀχτώδηχοντα aequant millia ferme passuum x, si unis millibus octo stadia et paullo amplius tribuas: sin septem, ut saepe, millia fere passuum xi. Atque ita Livio accedet propius, ad undecimum lapidem hosti occursum fuisse L. V. 37. memoranti. Plutarchus in Camill. p. 137. E. προσελθόντες ἀπὸ τῆς πόλεως σταδίους ἑννεήχοντα, sed Livium secutus. Conf. Ph. Cluverium Ital. Ant. L. II. p. 709. WESS.

728. 46. Τοὺς ἀσθενεσιότους ἔστησαν] Vide tamen Livium L. V. 38. WESS.

728. 58. Οὐχ ἐπιγρότων αἱ Κελτοὶ] Cogitaveram οὐχ ἐπιγρότων, ut Hector Homericus ἀσβεστον ἔχων μένος, οὐχ ἐπιγρόται Iliad. X, 96. Rhedomannus forte inquit οὐχ ἐπιγρότων. Neutrum serio omnia perpendenti placeat. Admitterem *κασιφὴ ἐπιγρότων* ex Cl. Wetstenii coniectura, si libri addicerent. WESS.

728. 62. Τὴν πανοπλίαν ἐν ἴσῳ καὶ τὴν ψυχὴν προτιμῶντες] Vid. Lipsium Milit. Rom. L. V. 18. Romæ, uti olim apud Germanos et Graecos, sentum reliquisse praeceipuum flagitium, quod nonnunquam ipso capite luebant. *Προτιμῶν* idem

fere ac τιμῶν, aut ἐντρέπεσθαι· ut προτιμῶν τὸ δικαιοπραγεῖν apud Nostrum, et οὐδὲν προτιμῶν in Aristophane, quo de H. Steph. Thes. T. III. p. 1564. WESS.

728. 82. Προσφάτως ὑφ' ἑαυτῶν κατεσκευασμένη] Rhodomannum si sequeris, scribendum erit κατεσκευασμένην. Ita enim correxit in not. Addendis et vertit. At contra verum id est. Veii non erant eversi. Quare Gallis urbe Roma deiectis, plebem tribuni assiduis concionibus agitabant, ut, relictis ruinis, in urbem paratam Veios transmigrarent, teste Livio L. V. 50. sive, ut Camillus ait c. 53. ad integra omnia Veios migrarent, et Plutarchus Camill. p. 144. E. πρὸς τοὺς Βηῖτους — πόλιν ἕπασιν κατεσκευασμένην καὶ διαμένουσαν, urbem omnibus rebus instructam et permanentem. Neque hoc tamen ad viri doctissimi coniecturam convellendam satis validum est telum: abit enim auctor in his recensendis a Livio saepissime; quid si et hae in re? Quod eo firmari posse videtur, quoniam locum a Romanis pro virili communitum fuisse, statim subnectit. Vide tamen, an πόλις κατεσκευασμένη dici et ea possit, quae in potestatem redacta est. Demosthenes Or. περὶ τῶν ἐν Χερσόβοι. p. 60. id suadere videtur. Sic enim de Philippo, Ἀρογγύλον καὶ Καβύλλην, καὶ Μάστειραν, καὶ ἃ νῦν ἔξαιρεῖ καὶ κατασκευάζεται. Ubi κατασκευάζεται, modo sanum fuerit, simili profecto potestate instruendum erit. Mox scriptis e libris malui τὸν τε τόπον. WESS.

729. 92. Πολλοὶ μὲν οὖν τῶν ἰδιωτῶν πανοίκιοι — ἔργον] Non damno πανοικί, quo S. Lucas A. A. XVI. 34. Ioseph. Ant. Iud. L. IV. 4. 4. atque alii sunt usi. Sed id, quod amplexus sum, mavult Diodorus. Vid. L. XVII. 11. XVIII. 25. Excerpt. Vales. p. 370. et not. in L. V. 20. WESS.

729. 5. Κατὰ τι πάτριον ἔθος] Solebant τὰς κεφαλὰς τῶν πολεμίων ἔξάπτειν ἐκ τῶν ἀγέων τῶν ἵππων, κομίσαντες δὲ προσπατιαλέειν τὴν θῆαν τοῖς προπυλαίοις apud Strabon. L. IV. p. 302. Conf. Nostri L. V. 29. WESS.

729. 11. Τὰς τε πύλας ἔξέκοιραν] Vero hoc similis. Livius L. V. 39. et Plut. Camill. p. 139. Romanos in summa ea consternatione ne portas quidem hosti oclusisse memorant. WESS.

729. 24. Οἱ δ' εἰς τοὺς Βοιοῦς τῶν Ῥωμαίων πεπενηγότες] Videndus est Livius L. V. 45. Solere vero Diodorum τοὺς Βοιοῦς loco Βηῖτους ponere, dictum antea est. WESS.

730. 34. Κομίνιος τις Πόντιος] Scribe Πόντιός τις Κομίνιος. RHOD. Commutatione eorum nominum γίγνεται opus est. Mutant saepe Latini, nomini que praenomen subiciunt. Exemplis abstinco, copiose congestis a N. Heinsio ad Vell. Patere. L. I. 14. et ad eiusdem L. II. 27. a Schekio; Adde Drakenborch. in Livii L. III. 1., et de Pontio Cominio Duker. ad Livii L. V. 46. WESS.

730. 36. Ἐλαθε προσελθῶν τινα πέτρων] Nisi verbo in-

nexa praepositio omnia haec dirigat, legendum erit προσελ. ἐπί τινα πέτραν, quae H. Stephani opinio. WESS.

730. 53. Ἐκβολήσας ἐπὶ τὸν τόπον] Vereor ne ἐκβολήσας perperam positum sit pro ἐκβολήσας. STLRPH. Legi etiam posse ἐκβολήσας, Rhodomannus in not. Auctario professus est: quod minime puto. Verum est ἐκβολήσας, optime H. Stephano animadvertente. Sic supra L. XIII. 67. καὶ πάντες οἱ τὴν ἀλιάνην ἀγροῶντες ἐξεβολήθουν ἐπὶ τοὺς λιμένας. Vitium natum esse ex scribendi compendio, alias monuimus, estque illi geminum germanum in Thucydide L. I. 107., ubi vide Steph. et Duker. WESS.

730. 61. Χίλις λαβόντες λίτρας χρυσίου] Eandem pecuniae summam invenies in Plat. Camill. p. 143. C. et Livio L. V. 48. cum nota clariss. Drakenborchii. WESS.

730. 66. Καὶ δημοσίως κροαμίδας ἐχορήγουν] *Promiscue urbs aedificari coepta. Tegula publice praebita.* Sic Livius extr. Lib. V. Angustiae flexuraeque vicorum, quibus urbs quodam modo deformabatur, ex Sueton. Ner. c. 38. et Tacito Ann. XV. 43. omnibus sunt cognitissimae. WESS.

730. 74. Ὅσα ἔξουσίαν ἔχει ἐφ' ἀουμάτων ὀχεῖσθαι] Citius is honor matronis delatus, si Livio L. V. 25. fides. Hoc tempore matronis gratiae actae, honosque additus, ut earum, sicut virorum, post mortem sollemnis laudatio esset: Idem c. 50., ubi Gebhardus a Diodoro corripiendo rectius abstinuisset: non enim carpenta matronis tum demum concessa ipsemet asseverat, sed esse, qui id prodiderint memoriae. WESS.

731. 80. Ἐν τῷ καλουμένῳ Μαρζίῳ] *Interpres in Marcio, ut appellatur, campo.* At in not. Addend. ἐν πεδίῳ, τῷ καλ. Ἀδμυλίῳ refugit ex Livio: insuper addens, de campo Martio non posse intelligi, quippe Romae pomœriis incluso. Considerasset haec Ph. Cluverius, nullam profecto erroris notam viro doctissimo inposuisset. In Livio L. VI. 2. edebatur: nec procul ab Lanuvio, admetium is locus dicitur, castra oppugnare est adortus. Mutavit Sigonius, substituens ad Maecium: et quia Plutarch. Camill. p. 145. περὶ τὸ Μάκτιον ὄρος castra metatos ait, eundem in partes trahit, περὶ τὸ Μάλτιον et hoc loco ἐν τῷ καλ. Μαυζίῳ corrigens. Mihi quidem immodicum hoc semper visum est. Livii membranae, ut sit, in proprio nomine dissentiunt: concordēs sunt in Μαρζίῳ probando Diodori et Plutarchi scripti Codd. Et primas tamen ille auferet? Melius Cluverius, quem vide Ital. Ant. L. II. p. 1026. Porro maluissem, scriptum hic a Diodoro fuisset, ὄντος — καθοπλίσας — ἐξῆλθε — καταλαβὼν — ἐπιφανὲς — ἐτρέπατο. Omnia enim ad Dictatorem Camillum pertinent, quem Livius atque Eutropius L. II. 1. eo anno, qui captam a Gallis urbem proxime exceperit, haec et quae sequuntur, felicissime administrasse tradiderunt. WESS. De campi Martii situ Pompeon. Lact. de antiquitatibus Romae citaverat Rhodom.

731. 85. *Μόροζον Φούριον*] Adleverat libri sui margini Ursinus *λείπει τι*. Quod verissimum erit, nisi si remedio utaris, de quo ad h. locum memoravi. WESS. in Add.

731. 95. *Ὑπὸ Αἰγλίων*] Rectum est *Αἰγῶν*. Conf. Livium L. VI. 2. et Ph. Cluver. Ital. Ant. II. p. 774. WESS.

731. 97. *Εἰς Σουτριανήν*] Infra L. XX. 35. *πόλιν Σούτριον*, ἄποικον *Ῥωμαίων* vocat: quod et hic praestare, sicuti mox *Σουτρίοις*, Ph. Cluver. Ital. Antiq. L. II. p. 555. bene monuit. WESS.

731. 2. *Οὐδέσκιον τὴν πόλιν*] Quaecnam ea sit urbs, ad affirmandum difficile est. Cogitaveram de *Veis*, quod nunc plane displicet. Cluverius I. A. L. III. p. 958. *Γαβίους* corrigit, quoniam Galli postero die, quam urbe expulsi erant, ad *Γαβίους* a Camillo sint caesi, auctore Livio L. V. 49. et L. VI. 28. Atque hoc ferri utenque posset. Quod vero orationem mutat, *τῶν δὲ Γαλατῶν ἀπεληλυθόντων ἀπὸ Ῥώμης καὶ Γαβίους τὴν πόλιν* etc. scribens, id sine iusta causa fieri, apertum est. Dubites etiam de coniecturae veritate, tum quia longissime a vulgato distet, tum etiam, quod ante ea omnia contigerit id praelium, quae a Camillo Dictatore hic gesta memorantur. Ego certe ampliato. WESS.

731. 4. *Ὁ εἰλήφισαν εἰς Ῥώμην*] Tritius quidem ἐν *Ῥώμην*, quod Rhodomannus in notar. Addend. hic iterum inculcat: at frequens harum praepositionum enallage. Vid. ad L. XIII. 12. Liquet autem hinc manifeste, in annalibus, quibus usus est Diodorus, nihil admodum fuisse de altercatione Romanos inter et Gallos, cuius occasione Dictator Camillus auferri aurum de medio et Gallos submoveri iusserit apud Livium L. V. 48., nimis ea quidem in re Romanorum gloriae studiosum. Confer Iac. Palmerium Exercitat. p. 188. et seqq. WESS.

731. 7. *Ἐκωλόθη θρίαμβον ἀγαγεῖν*] Omnia alia Livius L. VI. 4., a quo et illi plurimum dissident, qui de Tusceis Camillum albis quadrigis triumphasse, et propterea a populo ingenti pecunia multatum fuisse referebant. Vide eum L. V. 23. et c. 33. WESS.

731. 10. *Περὶ οὗ κατὰ τοὺς οἰκείους χρόνους ἐπιμνησθησόμεθα*] Non est cur hoc concedere scripturae lib. Clar. et Reg. 2. debeat. Rem ipsam altero abhinc anno frustra quaeres. WESS.

731. 13. *Ὑπὸ Κερίων*] *Καιρίων*, ut *Caerites* sint, Ortelius et Simson Chron. ad An. M. 3615. probasse videntur. Favet Strabo L. V. p. 337. cum de Caeretanis, *καὶ γὰρ τοὺς ἐλόνητας τὴν Ῥώμην Γαλάτας κατεπολέμησαν, ἐπιστῶσι ἐπιθήμενοι κατὰ Σαβίνους*. qui si de eadem re loquatur, campus etiam *Trausisus* in Sabinis erit quaerendus. Mihi nondum ad liquidum haec deducta videntur. WESS.



731. 15. Τὴν τῶν Ἑλλήνων σύνταξιν] Fortasse Ἑλλη-  
 ριζῶν σύνταξιν scripsit Diodorus. Mox suspicor deesse quidpiam  
 inter βασιλέα et τὴν ἰστορίαν. Nam alioqui ex his duobus accu-  
 sativis σύνταξιν et ἰστορίαν vacaret alter. STEPH. Scripserat  
 Ἑλληριζῶν σύνταξιν, ut bene H. Stephanus. Reliquit enim Cal-  
 listhenes Ἑλληριζὰ, a Stephano in Τέγγρα et pluribus aliis citata.  
 Auctor ipse Ἑλληριζῶν πραγμάτων ἰστορίαν id opus adpellat L.  
 XVI. 15. Simili errore Xenophonti τὴν Ἑλλήνων σύνταξιν ob-  
 truserunt amanuenses L. XV. 89. Statim restitui sacrilego huic  
 suum nomen, quod et III. Scaliger et Rhodomannus fieri oportere,  
 dudum admonuerant. Citra dubium res erit, si contenderis L.  
 XVI. 15. WESS. Vid. Stephani annot. ad vol. II. p. 78. 91.

---

## Addenda et Corrigenda.

P. 23. 9. loco V. 43. substitute illum qui est Exc. Vat. p. 81. 28.  
 26. add. 19. 13. ἀρθρωπύρον Cl. 2. Fl. ex glossa. Vid. infra V. 67. WESS., cuius minutas annotationes quasdam inter varietatem scripturae delitescentes quia suis locis non posuimus, hic ponimus 27. 2. sursum l. paullo  
 29. 8. l. *inpingat* 34. add. 24. 9. ἀνευρεῖν Co. al. uti inf. III. 6. WESS.  
 35. add. 25. 18. καθιερ. M. Vat. quomodo infr. c. 90. ubi eadem, WESS. 39. add. 28. 10. ἐγγενέσθαι Euseb. uti V. 72. WESS.  
 45. add. 32. 57. εὐλαστον Vat. sollempni librariorum peccato, de quo Casaub. in Athen. XII. 11. WESS. 60. 6. add. 41. 8. ἐπιδελουσμένας, quod, qui defendi possit, docet Casaub. in Athen. II. 15. WESS. 90. add. 64. 18. μικρά Co. aliique vitiose, et contra Herodot. II. 102. WESS.  
 112. 9. l. 135. pro 130. 139. 39. de loco p. 372. 6. nunc aliter mihi visum est 152. 11. 1. 40. Ὁρειωνὸν λέγειν 154. add. 110. 11. Melius oratio decurreret, si γίνεσθαι post παρηγγέσει legeretur. WESS.  
 156. 1. l. I. p. 162. 10. surs. l. ἐντυχόντι 183. 9. surs. l. habuerunt Eusebius et 187. 16. 198. 8. surs. 213. 22. surs. add. in Add.  
 194. add. 143. 85. vulgo ροιζόμενον librariorum peccato, quo de supra l. 23. WESS. 201. 30. add. 149. 3. γέμει R. M. V. haud sane absurde. V. XIII. 3. XVII. 10. WESS. 202. add. 149. 17. ἡμετέροις Cl. 2. quae eadem varietas in Arriani Indic. c. 7. WESS. 206. add. 154. 30. εἰς τὸ πολεμίους R. V. εἰς τοὺς πολεμίους C. M. quibus nihil indigemus. Vid. l. 18. III. 31. WESS. 207. add. 154. 46. στρ. ὄρτα γεωργεῖν. Vide Arriani Indic. c. 12. WESS. 208. add. 155. 94. τὴν δύναμιν C. M. male, vid. supr. l. 4. WESS. 211. 21. καταστρέφειν] volebam μεταλλάττειν p. 375. 51. 237. add. 179. 22. διὰ περὶ οὗ R. nulla gravi caussa. Vid. Eustath. Hom. p. 1256. WESS. 179. 47. τετυχέναι Co. τετυχημένα M. Vide supra l. 13. WESS. 245. add. 186. 51. δύσπνουσ] Vid. Agatharch. p. 30. WESS. 247. add. 188. 42. ἀπλατος M. Vid. supr. II. 48. WESS. 252. add. 193. 82. ἀνάπαντιν Cl. forte ἀναπαύλην voluit. WESS. 253. add. 194. 7. τέτυχε] Vid. ad L. I. 13. WESS. 255. add. 195. 65. ἀκλήρ.] Vid. supr. c. 12. WESS. 16. surs. l. pertendit 256. 18. l. 333. pro 383. 270. 19. dele 289. add. 224. 93. τελευτήν Co. Mut., de quo peccato ad L. I. 23. WESS. 292. 19. l. mater 318. 21. surs. l. Ἠλεκτρούνα pro Ἠλεκτρονόνα, et mox c. 58. 335. 1. adde: Eggestam Stephanus quidem et Plinius scribunt. At Strabo Aegestam vocat. Rhod. in Add. 338. 12. l. XXVII. 340. 1. surs. l. a 345. add. 279. 32. Ἀγκαδίας Co. M. Pogg. sed male. Vid. Pausan. II. 38. WESS. 366. 13. l. ὄον 374. 21. l. signatas 378. 11. l. 66. pro 68. 432. 1. surs. l. Κυρτίας 459. 7. surs. add. 362. 1. λεγομένην mallem abesset. WESS. 442. 14. surs. l. 182. pro 18. 452. 27. scholiasten] transcriptorem seu librarium Rhod. in Add. 453. 2. l. χαλαζοφ. 464. add. 383. 70. παντελῶς non legitur in V. Cl. sine gravi caussa Vid. supr. c. 31. 34. WESS. 47. De Σιτρούζιος v. Borghes. libri ad p. 479. 57. indicati II. p. 48. 468. 4. surs. add. WESS. 489. 13. post Σουρῶν add. Rhod. 522. 19. l. Pausaniae offensos 558. annot. ad 473. 83. dele 586. 2. surs. l. illum 587. 13. Ἀσσιώχος confirmat lapis ab Oderico editus 589. 12. post hic add. et 451. 81., tum post 554. 5. add. 570. 84. 611. 87. 605. 4. Et Χαριάδης et Χαροιάδης nominum in inscriptionibus exempla sunt. Atheniensem hunc Chariadem vocant libri Iustini IV. 4. 6., nec pauci Orosii II. 14. p. 125. ed. Haverc. 674. 5. l. ἐκκαδέκα 699. summa l. 94. pro 74. 739. 9. l. σαρῖος omissio puncto 755. 22. adde WESS. 762. 24. l. ἀπὸ ἑλλαντιν 768. 17. l. III mille 780. 17. l. ἐνενηκοστή; 783. 12. Nisyri incolas Nisyrios se, non Nisyraeos, dixisse praeter Strabonem etiam numus docere potuit apud Eckhel. vol. II. p. 601.





PA Diodorus Siculus  
3965 Bibliotheca historica  
D3  
1828  
v.4

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---

